

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第450集

島田Ⅱ遺跡第2～4次発掘調査報告書

—宮古短大地区宅地造成事業に係る発掘調査—

第一分冊（本文・遺構編）

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第450集
 島田Ⅱ遺跡第2～4次発掘調査報告書 正誤表

*第1分冊(本文・遺構編)

頁	行(位置)	誤	正
35	34	SI64竪穴住居跡跡	SI64竪穴住居跡
37	7	SI125竪穴住居跡跡	SI125竪穴住居跡
102	1	約280×100cm 前後	約280×100cm前後
104	32	底部約105cm×80cmを測る	底部約150×80cmを測る
111	34	煙だしピットは	煙出しピットは
112	2	煙だしピットは	煙出しピットは
118	30	煙だしピットは	煙出しピットは
119	6、20、23、24	煙だしピットは	煙出しピットは
120	SI58B・Cの左のSI58Aの柱穴	SI58A P2	SI58A P5
121	SI58AのAB断面	P2	P5
125	12、14	煙だしピットは	煙出しピットは
158	21	VII B-15tに位置し	VII B-15tグリッドに位置し
160	2	VII B-15tに位置し	VII B-15tグリッドに位置し
	11	VII C-15aに位置する	VII C-15aグリッドに位置する
	20	VII C-14aに位置し	VII C-14aグリッドに位置し
193	22	東側に向かい低くなっていく	東側に向かうにつれて低くなっていく
200	23	VIII C-4n・4° グリッドに	VIII C-4n・40グリッドに
243	20	153cm残存している	1. 53m残存している
254	23	底部径97×61cmを測る	底部径67×61cmを測る
261	9	VIII B-3qグリッドに位置し	VIII B-3qグリッドに位置し
473	5	SI169竪穴住居跡跡	SI169竪穴住居跡
476	13	SI173竪穴住居跡跡	SI173竪穴住居跡

島田Ⅱ遺跡第2～4次発掘調査報告書

—宮古短大地区宅地造成事業に係る発掘調査—

第一分冊（本文・遺構編）

序

本県には、旧石器時代から近世の遺跡まで多くの埋蔵文化財包蔵地があり、平成14年、現在で10,000カ所以上の遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた重大な責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実もまた重要な一施策であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発の調和も今日的課題であり、当文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行ない、記録保存とする措置をとってまいりました。

本報告書は、「宮古短大地区宅地造成事業」に関連して、平成12年度から14年度の3年間にわたって実施した島田Ⅱ遺跡の第2～4次調査の結果をまとめたものであります。この調査は、平成9年度に、岩手県教育委員会が実施した試掘調査結果及び平成10年度に当埋蔵文化財センターが実施した詳細分布調査結果を受けて、平成11年度の第1次調査に引き続き、当センターが実施したものであります。

今回の調査でも、本調査初年度と同様に古代の竪穴住居跡群と工房跡群及び鉄生産関連遺構として製鉄炉跡・鍛冶炉跡・炭窯等が多数検出され、岩手県沿岸地区の過去の鉄生産に関する集落の様相が明らかとなりました。本書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する関心と理解をいっそう深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、これまでの試掘調査及び本報告書作成に御援助・御協力を賜りました岩手県住宅供給公社・宮古市都市計画課・宮古市教育委員会をはじめ、関係各位に衷心より謝意を表します。

平成16年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 合 田 武

例 言

1. 本書は、宮古短大地区宅地造成事業に係る宮古市大字八木沢第4地割に所在する島田Ⅱ遺跡の第2～4次の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡北東部の尾根先端部は、昭和60年度に島田・中谷地遺跡として宮古市教育委員会が県立宮古短大建設に係る発掘調査を実施し、また平成10年度には市道岸ノ前ラント沢線に係る調査（未報告）も行われている。従って実際には、平成10年度に当センターが行った詳細分布調査が第3次調査、平成11年度調査が第4次、本報告は第5～7次調査となる。以上の報告実績は以下のとおりである。
 - ①昭和61年 中谷地、島田遺跡報告書 宮古市教育委員会
 - ②平成11年11月 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第337集 島田Ⅱ遺跡試掘調査報告書－宮古短大地区宅地造成事業関連詳細分布調査－（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
 - ③平成13年3月 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第368集 島田Ⅱ遺跡発掘調査報告書－宮古短大地区宅地造成事業に係る発掘調査－（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
3. 今回の発掘調査による成果は、平成12～14年度の岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第370・397・423集の「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報」及び、現地説明会（平成12年9月30日・平成13年11月18日・平成14年7月27日）にて公表してきたが、本書を正式な報告とする。
4. 岩手県遺跡登録台帳に記載された遺跡番号はL G 43-0338、遺跡略号はS M D Ⅱ-00・01・02である。
5. 発掘調査期間・調査面積・調査担当者は以下のとおりである。

調 査 期 間	調 査 面 積	調 査 担 当 者
平成12年4月19日 ～11月30日	23,942㎡	文化財専門員 小山内透 文化財調査員 赤石 登・東海林敦美・本多準一郎 期限付調査員 小林弘卓・川又 晋・菊池 賢・藤原賢徳
平成13年4月18日 ～12月7日	15,967㎡	文化財専門員 小山内透 文化財調査員 島原弘征・中田 迪 期限付調査員 小林弘卓・江藤 淳・井上信介
平成14年4月10日 ～8月22日	5,900㎡	文化財専門員 小山内透 文化財調査員 亀大二郎 期限付調査員 小林弘卓

6. 各年度の整理計画・進行と全体の編集構成は主として小山内が担当し、第一分冊(本文・遺構編)、第二分冊(遺物・まとめ・自然科学的分析編)、第三分冊(写真図版編)の3分冊構成とした。原稿執筆は第一分冊第1～3章は小山内・小林、第4章は地区担当調査員各自、第二分冊第5・第6章は小山内・島原とそれぞれ分担して執筆し、いずれも文末に氏名を記した。なお、第二分冊第5章中の鉄製品については西澤正晴の協力を得た。
7. 分析・鑑定・委託業務は次の方々に依頼した。(順不同・敬称略)

熱残留磁気測定 西谷忠師(秋田大学工学資源学部)	火山灰分析 パリノ・サーヴェイ株式会社
鉄滓成分分析 川崎鉄鋼テクノリサーチ株式会社	樹種同定 木工舎「ゆい」
貝類同定 熊谷 賢(陸前高田市立博物館)	石質鑑定 花崗岩研究会
炭化材同定 早坂松次郎(岩手県木炭協会)	地形測量 株式会社ハイマーテック
8. 本書挿図中表記の土色注記は、農林省農林水産技術会議事務局、財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」2000年版を使用した。地図は建設省国土地理院発行の50,000分の1(宮古)を使用した。

9. 発掘調査及び遺物整理にあたっては下記の方々からご指導・ご助言を賜った。記して感謝の意を表する次第である。(アイウエオ順、敬称・所属略)

浅田智晴・穴澤義功・磯村亨・和泉昭一・利部修・鎌田裕二・工藤雅樹・設楽政健・菅原修・高橋憲太郎・高橋忠彦・高橋学・竹下将男・能登谷宣康・安原誠・吉川耕太郎

10. 発掘調査による出土品及び記録資料は岩手県埋蔵文化財センターに保管している。

凡 例

1. 本報告書に記載した遺構実測図に付した方位は、国家座標第X系（日本測地系）による座標北を示す。
2. 遺構・遺物の種別を表す略号は以下のとおりである。
SB……掘立柱建物跡 SI……竪穴住居跡 SXI……工房跡 SKI……竪穴状遺構
SXW……鉄生産関連炉跡 SXH……廃滓(土)場 SN……炉跡・焼土遺構 SW……炭窯
SK……土坑 SD……溝・道路状遺構 SKT……陥し穴 SX……その他
RP……土器類 RM……鉄関連遺物 RC……炭化物 S……礫
3. 土層注記は基本層位にローマ数字、遺構埋土にはアラビア数字を用い、攪乱（根木等）はKと示した。
4. 表中の法量の推定値は（ ）、残存値は< >で表示した。
5. 挿図中に使用したスクリーン・トーンは以下のとおりである。



貼床



焼土・酸化部範囲



炭化物・煤範囲



還元部範囲



鍛造剥片範囲



黄褐色・白色粘土範囲



小鉄滓範囲



灰範囲



グライ化範囲



砂鉄範囲



自然遺物範囲



羽口・炉壁溶着滓



磨部



敲部



黒色処理

総目次

第一分冊

- 第1章 発掘調査に至る経過
- 第2章 位置と環境
- 第3章 調査の概要と整理方法
- 第4章 検出遺構

第二分冊

- 第5章 出土遺物
- 第6章 まとめ
- 付編 (自然科学的分析)

第三分冊

写真図版

〔本文目次〕 第一分冊

序

例言

凡例

第1章 発掘調査に至る経過	3	第4章 検出遺構	32
第2章 位置と環境		第1節 縄文時代の遺構	35
第1節 位置と立地	5	第2節 古代の遺構	40
第2節 遺跡の概観	5	1) D区の遺構	40
第3節 遺跡の基本層序	11	①. 赤15・16区	40
第4節 周辺の遺跡	13	②. 赤17・緑11・12区	64
第3章 調査の概要と整理方法		③. 赤18~22区	77
第1節 調査と整理の経過	19	2) E区の遺構	106
第2節 調査方法	27	①. 緑7・8区	106
A グリッドの設定	27	②. 緑9・10区	170
B 粗掘と精査	28	3) F区の遺構	183
C 遺構の記録	28	①. 赤23・24区	183
第3節 整理方法	28	②. 赤25区	280
A 遺構図面	31	4) G区の遺構(赤26区・緑14区)	361
B 遺物	31	5) H区の遺構(赤27区・緑13・17区)	369
C 写真	31	6) I区の遺構	445
		①. 赤28区	446
		②. 緑15・16区	507

[挿図目次]

第1図	用地範囲図	1	第42図	SI 31竪穴住居跡 (1)	86
第2図	岩手県全図	4	第43図	SI 31竪穴住居跡 (2)	87
第3図	遺跡位置図	6	第44図	SI 32竪穴住居跡・SKI 21竪穴状遺構	89
第4図	地形分類図	7	第45図	SI 36竪穴住居跡	90
第5図	地質分類図	8	第46図	SI 37竪穴住居跡	92
第6図	周辺地形と調査範囲図	9	第47図	SI 38竪穴住居跡・SW 56炭窯	93
第7図	基本土層柱状図	12	第48図	SI 39竪穴住居跡	95
第8図	周辺遺跡分布図	14	第49図	SI 44竪穴住居跡・SW 66炭窯	96
第9図	グリッド設定図	25	第50図	SI 45A・B竪穴住居跡	98
第10図	トレンチ配置図	29	第51図	SKI 27竪穴状遺構	99
第11図	縄文時代の遺構配置図	36	第52図	SXW22鉄生産関連炉跡 SW43・46・50・51炭窯	101
第12図	SI 55・SI 64竪穴住居跡	38	第53図	SK 111・114・115・118土坑	103
第13図	SI 125竪穴住居跡・SN 18焼土遺構 SKT01・02陥し穴	39	第54図	SN 10・12・14焼土遺構 SN27・28・30炉跡	105
第14図	SI 28A・B竪穴住居跡・ SXW 17鉄生産関連炉跡 (1)	42	第55図	SI 27A・B竪穴住居跡 SXI 01・02工房跡	109
第15図	SI 28A・B竪穴住居跡・ SXW 17鉄生産関連炉跡 (2)	43	第56図	SI 43A・B竪穴住居跡 (1)	112
第16図	SI 29竪穴住居跡	45	第57図	SI 43A・B竪穴住居跡 (2)	113
第17図	SI 33竪穴住居跡	47	第58図	SI 46竪穴住居跡・SXI 06工房跡 (1)	115
第18図	SI 34竪穴住居跡 (1)	48	第59図	SI 46竪穴住居跡・SXI 06工房跡 (2)	116
第19図	SI 34竪穴住居跡 (2)	49	第60図	SI 56竪穴住居跡	117
第20図	SI 35A・B竪穴住居跡 (1)	51	第61図	SI 58A～C竪穴住居跡・ SXW27鉄生産関連炉跡 (1)	120
第21図	SI 35A・B竪穴住居跡 (2)	52	第62図	SI 58A～C竪穴住居跡・ SXW27鉄生産関連炉跡 (2)	121
第22図	SI 41竪穴住居跡	54	第63図	SI 58A～C竪穴住居跡・ SXW27鉄生産関連炉跡 (3)	122
第23図	SKI 20竪穴状遺構	55	第64図	SI 59竪穴住居跡・ SXW28鉄生産関連炉跡	124
第24図	SI 57竪穴住居跡 SKI 19・23竪穴状遺構	57	第65図	SI 60竪穴住居跡	126
第25図	SW 48A・B・49炭窯	59	第66図	SI 61竪穴住居跡	127
第26図	SW 52・62・65炭窯	61	第67図	SI 62竪穴住居跡・SXI 07工房跡・ SXW24・26鉄生産関連炉跡 (1)	129
第27図	SK97・98・99・107・112・116土坑	63	第68図	SI 62竪穴住居跡・SXI 07工房跡・ SXW24・26鉄生産関連炉跡 (2)	130
第28図	SK 117・122・127・161・162土坑	65	第69図	SI 63竪穴住居跡	132
第29図	SK 159・160土坑・SN 13焼土遺構	66	第70図	SI 91竪穴住居跡 (1)	134
第30図	SI 42竪穴住居跡 (1)	68	第71図	SI 91竪穴住居跡 (2)・SI92竪穴住居跡	135
第31図	SI 42竪穴住居跡 (2)	69	第72図	SXI 09工房跡 (1) SI 126竪穴住居跡 (2)	137
第32図	SI 53竪穴住居跡	71	第73図	SXI 09工房跡 (2)・ SXW23・42鉄生産関連炉跡	140
第33図	SI 54竪穴住居跡 (1)	73	第74図	SXI09工房跡 (3) SI 126竪穴住居跡 (2)	142
第34図	SI 54竪穴住居跡 (2)	74			
第35図	SW67・71・72・73炭窯	75			
第36図	SN 16・17・19焼土遺構・SN20炉跡	76			
第37図	SI 25竪穴住居跡 (1)・SW 45A～D炭窯	80			
第38図	SI 25竪穴住居跡 (2)	81			
第39図	SI 26竪穴住居跡・SW 44炭窯	82			
第40図	SI 30A・B竪穴住居跡 (1)	84			
第41図	SI 30A・B竪穴住居跡 (2)	85			

第75図	SXI 09工房跡 (4) SI 126竪穴住居跡 (3) ……………143	第105図	SI 72竪穴住居跡 (1) ……………197
第76図	SI 127竪穴住居跡 ……………145	第106図	SI 72竪穴住居跡 (2) ……………198
第77図	SI 128竪穴住居跡 SXI 27A・C工房跡 (1) ……………146	第107図	SI 73竪穴住居跡 ……………199
第78図	SI 128竪穴住居跡 SXI 27A・C工房跡 (2) ……………147	第108図	SI 74竪穴住居跡 ……………201
第79図	SXI 04A～C工房跡 ……………149	第109図	SI 75・131竪穴住居跡 (1) SKI 33A・B竪穴状遺構 ……………203
第80図	SXI 05・10工房跡・ SXW25鉄生産関連炉跡 ……………151	第110図	SI 75・131竪穴住居跡 (2) ……………205
第81図	SXI 18工房跡・SKI 25竪穴状遺構 ……152	第111図	SI 76竪穴住居跡 ……………207
第82図	SXW34・64・65・66鉄生産関連炉跡 SW47・59炭窯・SK 166土坑 ……………154	第112図	SI 77C竪穴住居跡 SXI 68A・B工房跡 (1)・SW 81炭窯 ……209
第83図	SW63・69・74・85・86・87炭窯 SK 155土坑 ……………157	第113図	SI 77C竪穴住居跡 SXI 68A・B工房跡 (2) ……………210
第84図	SK 100・109・119土坑 ……………159	第114図	SI 78竪穴住居跡 ……………212
第85図	SK 131・135・136・137・138土坑 ……161	第115図	SI 86C・D竪穴住居跡 ……………213
第86図	SK 142・146・148・149・151土坑 ……163	第116図	SXI 70工房跡・SKI 34竪穴状遺構 SXH 10排土場 ……………214
第87図	SK 152・153・163・164・165・167土坑 …165	第117図	SI 93B竪穴住居跡 SXI 30・71・73A・B工房跡 SKI 36竪穴状遺構 (1) ……………217
第88図	SK 199・200・202・209・274土坑 SD21溝跡 ……………167	第118図	SI 93B竪穴住居跡 SXI 30・71・73A・B工房跡 SKI 36竪穴状遺構 (2) ……………219
第89図	SN06・07・08・09・25・40焼土遺構 SN31A・B・32・53炉跡 ……………169	第119図	SXI 73A工房跡・SKI 36竪穴状遺構 (3) SXH 11排土場 ……………220
第90図	SI 129竪穴住居跡・ SXW30・67鉄生産関連炉跡 (1) ……172	第120図	SI 94A・B竪穴住居跡 (1) ……………223
第91図	SI 129竪穴住居跡・ SXW30・67鉄生産関連炉跡 (2) SXW33鉄生産関連炉跡 ……………174	第121図	SI 94A・B竪穴住居跡 (2) ……………224
第92図	SXI 14A・B工房跡・ SXW32鉄生産関連炉跡 (1) ……………176	第122図	SI 95竪穴住居跡 ……………226
第93図	SXI 14A・B工房跡・ SXW32鉄生産関連炉跡 (2) ……………177	第123図	SI 100竪穴住居跡 ……………227
第94図	SXI 16・17工房跡・ SXW 18・29鉄生産関連炉跡 ……180	第124図	SI 101竪穴住居跡 ……………228
第95図	SW75・77・103炭窯 SN21・22・23焼土遺構・SN26炉跡 SXH07・08排土場 ……………182	第125図	SI 106竪穴住居跡・SXI 34工房跡 ……230
第96図	SI 48竪穴住居跡 ……………185	第126図	SI 115竪穴住居跡 ……………231
第97図	SI 49A・B竪穴住居跡 (1) ……………186	第127図	SI 130竪穴住居跡 ……………233
第98図	SI 49A・B竪穴住居跡 (2) ……………187	第128図	SI 132竪穴住居跡 ……………234
第99図	SI 50竪穴住居跡 (1) ……………188	第129図	SI 133竪穴住居跡 ……………235
第100図	SI 50竪穴住居跡 (2) ……………189	第130図	SI 134・135竪穴住居跡・SXI 44B工房跡 …237
第101図	SI 69竪穴住居跡・SN86炉跡 (1) ……191	第131図	SXI 33工房跡・SXW39鉄生産関連炉跡 …239
第102図	SI 69竪穴住居跡・SN86炉跡 (2) SXH09排土場 ……………192	第132図	SXI 69・72工房跡・SKI 32竪穴状遺構 …240
第103図	SI 70B竪穴住居跡・SXI 67工房跡 ……194	第133図	SXI 74・75工房跡 ……………242
第104図	SI 71竪穴住居跡 ……………195	第134図	SKI 28・29竪穴状遺構・SX44 ……244
		第135図	SKI 31A～C竪穴状遺構 ……………246
		第136図	SKI 35・37竪穴状遺構 ……………247
		第137図	SKI 38・43・50竪穴状遺構 ……………249
		第138図	SW79・80・104～106炭窯 ……………251
		第139図	SK 129・168・178～180・184土坑 ……253
		第140図	SK 185～190土坑 ……………255
		第141図	SK 191・192・195・196土坑 ……257
		第142図	SK203・210・211・213土坑 ……258

第143図	SK215・223～225土坑	260	第179図	赤25A区洞部遺構配置図	
第144図	SK226～231土坑	262		SXH16廃滓場	321
第145図	SK232・234・235・240土坑	264	第180図	SI 181竪穴住居跡(1)・SXI 81A工房跡	324
第146図	SK239土坑	265	第181図	SI 181竪穴住居跡(2)・SXI 80工房跡・	
第147図	SK242・244・276・277土坑	267		SXW71鉄生産関連炉跡	325
第148図	SK278～280・282・283土坑	268	第182図	SI 187竪穴住居跡・SKI 44竪穴状遺構	327
第149図	SN 15・33・35・37炉跡		第183図	SXI 40工房跡・SXH14廃滓場	330
	SN34・36・45・54焼土遺構	270	第184図	SXI 46工房跡・	
第150図	SN55・56・57炉跡	272		SXW47B・D鉄生産関連炉跡	332
第151図	SD19・20・22溝跡	274	第185図	SXI 58・60工房跡	334
第152図	SD23・24・25溝跡	275	第186図	SXI 63工房跡	335
第153図	SB07・08掘立柱建物跡	276	第187図	SXI 64工房跡	336
第154図	赤24B区柱穴状土坑群	278	第188図	SXI 77・90工房跡・	
第155図	SI 119竪穴住居跡	281		SXW59鉄生産関連炉跡	337
第156図	SXI 54工房跡	282	第189図	SKI 30・40竪穴状遺構	339
第157図	SI 120B竪穴住居跡・		第190図	SKI 41・42竪穴状遺構	341
	SXW58鉄生産関連炉跡		第191図	SXW52・53・70・73鉄生産関連炉跡	342
	SXI 78工房跡(1)	284	第192図	SW96・97・99A・B・100・107・	
第158図	SI 120B竪穴住居跡・			108炭窯	344
	SXW58鉄生産関連炉跡		第193図	SK233・236・245～247土坑	346
	SXI 78工房跡(2)	285	第194図	SK249A・B・253・254土坑	348
第159図	SI 122竪穴住居跡		第195図	SK256・258・259・262・263土坑	349
	SXI 79工房跡(1)	287	第196図	SK264・266・269・270土坑	351
第160図	SI 122竪穴住居跡		第197図	SK272・285・287～289土坑	353
	SXI 79工房跡(2)	288	第198図	SK290～293土坑	355
第161図	SI 123竪穴住居跡	290	第199図	SK294・295・297・298・301土坑	357
第162図	SI 124竪穴住居跡・SXH 13廃滓場	292	第200図	SK300土坑・SN47・48炉跡	358
第163図	SI 140竪穴住居跡	293	第201図	SN52・61～66炉跡・SD27溝跡	360
第164図	SI 141・142竪穴住居跡・SXI 47工房跡(1)・		第202図	SI 177竪穴住居跡	362
	SXW55鉄生産関連炉跡	295	第203図	SI 182竪穴住居跡・SKI 45竪穴状遺構	363
第165図	SI 141・142竪穴住居跡(2)	298	第204図	SI 186竪穴住居跡	365
第166図	SI 142B竪穴住居跡(3)	300	第205図	SXI 85工房跡・SKI 49竪穴状遺構	
第167図	SXI 47A工房跡(2)・			SK329・330・335土坑	367
	SXW50・51鉄生産関連炉跡	301	第206図	SK325・326土坑・SN76焼土遺構	368
第168図	SI 142C・D竪穴住居跡(4)	303	第207図	SI 65竪穴住居跡・	
第169図	SI 142C・D竪穴住居跡(5)	304		SXW68鉄生産関連炉跡(1)	371
第170図	SI 143竪穴住居跡	305	第208図	SI 65竪穴住居跡・	
第171図	SI 144竪穴住居跡	307		SXW68鉄生産関連炉跡(2)	372
第172図	SI 145・146竪穴住居跡	308	第209図	SI 66竪穴住居跡	374
第173図	SI 147竪穴住居跡	310	第210図	SI 67竪穴住居跡・	
第174図	SI 148竪穴住居跡	311		SXW37鉄生産関連炉跡	375
第175図	SI 149竪穴住居跡	312	第211図	SI 68竪穴住居跡	377
第176図	SI 150AB竪穴住居跡・		第212図	SI 79竪穴住居跡	378
	SXW69鉄生産関連炉跡(1)	314	第213図	SI 80竪穴住居跡	380
第177図	SI 150AB竪穴住居跡・		第214図	SI 81竪穴住居跡	381
	SXW69鉄生産関連炉跡(2)	315	第215図	SI 82竪穴住居跡	382
第178図	SI 180A～C竪穴住居跡		第216図	SI 87A・B竪穴住居跡	384
	SXI 55A工房跡・SK299土坑	319	第217図	SI 88竪穴住居跡	386

第218圖	SI 89豎穴住居跡	387	第253圖	SI 151豎穴住居跡	447
第219圖	SI 90A・B豎穴住居跡 (1) SXI26工房跡	390	第254圖	SI 153豎穴住居跡	449
第220圖	SI 90A・B豎穴住居跡 (2) SI 96豎穴住居跡	391	第255圖	SI 154豎穴住居跡	450
第221圖	SI 97A・B豎穴住居跡	393	第256圖	SI 155豎穴住居跡	451
第222圖	SI 98豎穴住居跡・ SXW43鉄生産関連炉跡 (1)	395	第257圖	SI 156豎穴住居跡	453
第223圖	SI 98豎穴住居跡・ SXW43鉄生産関連炉跡 (2)	396	第258圖	SI 157豎穴住居跡	455
第224圖	SI 99豎穴住居跡	397	第259圖	SI 158豎穴住居跡	456
第225圖	SI 102豎穴住居跡	399	第260圖	SI 159豎穴住居跡	457
第226圖	SI 103豎穴住居跡	401	第261圖	SI 160豎穴住居跡	459
第227圖	SI 104豎穴住居跡 (1)	403	第262圖	SI 161豎穴住居跡	460
第228圖	SI 104豎穴住居跡 (2) SXH12排土場	404	第263圖	SI 162豎穴住居跡	461
第229圖	SI 105豎穴住居跡	406	第264圖	SI 163A・B豎穴住居跡	463
第230圖	SI 107豎穴住居跡 (1)	407	第265圖	SI 164・165豎穴住居跡	466
第231圖	SI 107豎穴住居跡 (2) SI 108豎穴住居跡	409	第266圖	SI 166豎穴住居跡	468
第232圖	SI 113豎穴住居跡	410	第267圖	SI 167豎穴住居跡	469
第233圖	SI 114豎穴住居跡	412	第268圖	SI 168A・B豎穴住居跡 SXI 93工房跡 (1)	471
第234圖	SI 118豎穴住居跡	413	第269圖	SI 168A・B豎穴住居跡 SXI 93工房跡 (2)	472
第235圖	SI 136豎穴住居跡・ SXW35鉄生産関連炉跡 (1)	414	第270圖	SI 169豎穴住居跡	474
第236圖	SI 136豎穴住居跡・ SXW35鉄生産関連炉跡 (2)	415	第271圖	SI 171豎穴住居跡	475
第237圖	SI 137豎穴住居跡	416	第272圖	SI 172・173豎穴住居跡	477
第238圖	SI 138豎穴住居跡	418	第273圖	SI 174A豎穴住居跡・SXI 94工房跡	479
第239圖	SI 139豎穴住居跡 (1) SKI 39豎穴状遺構	419	第274圖	SI 174B豎穴住居跡・ SXW75・76鉄生産関連炉跡 (1)	480
第240圖	SI 139豎穴住居跡 (2)	420	第275圖	SI 174B豎穴住居跡・ SXW75・76鉄生産関連炉跡 (2)	481
第241圖	SI 178D豎穴住居跡・SXI 91工房跡 SKI 46A・B豎穴状遺構	423	第276圖	SI 175豎穴住居跡 (1)	483
第242圖	SI 179A・B・SI 183豎穴住居跡 (1) SXI 88A工房跡・SKI 47豎穴状遺構	427	第277圖	SI 175豎穴住居跡 (2)	484
第243圖	SI 179A豎穴住居跡 (2)	429	第278圖	SI 176豎穴住居跡	486
第244圖	SI 179B・SI 183豎穴住居跡 (2)	430	第279圖	SI 185豎穴住居跡	487
第245圖	SI 184豎穴住居跡	432	第280圖	SXI 92工房跡・SKI 48豎穴状遺構	489
第246圖	SXI 28・37工房跡	434	第281圖	SW 111・112炭窯	490
第247圖	SXI 76工房跡・SW89・91・126炭窯	435	第282圖	SW 114・115・119炭窯	492
第248圖	SW94・101炭窯	437	第283圖	SW 117・118炭窯	493
第249圖	SK 193・194・205A・B・207土坑	439	第284圖	SW 120・121A・B炭窯	494
第250圖	SK212・214・222・267土坑	441	第285圖	SW 122・123・125炭窯	496
第251圖	SK268・284・339・342土坑	442	第286圖	SK303・304・306・308・309・312土坑	498
第252圖	SN44・46・59・79炉跡 SN43・60焼土遺構・ SB09掘立柱建物跡	444	第287圖	SK314・315・318A・B・C土坑	499
			第288圖	SK322・333・336・337土坑	501
			第289圖	SK338・340・344~346土坑	503
			第290圖	SN69・73~75・77・80炉跡	505
			第291圖	SN81~85炉跡	506
			第292圖	SXI 82工房跡・SXW72鉄生産関連炉跡 SXH 15廢滓場・SW 124炭窯	509
			第293圖	SK331・343土坑・SN70・71・72炉跡	512



第1図 用地範囲図

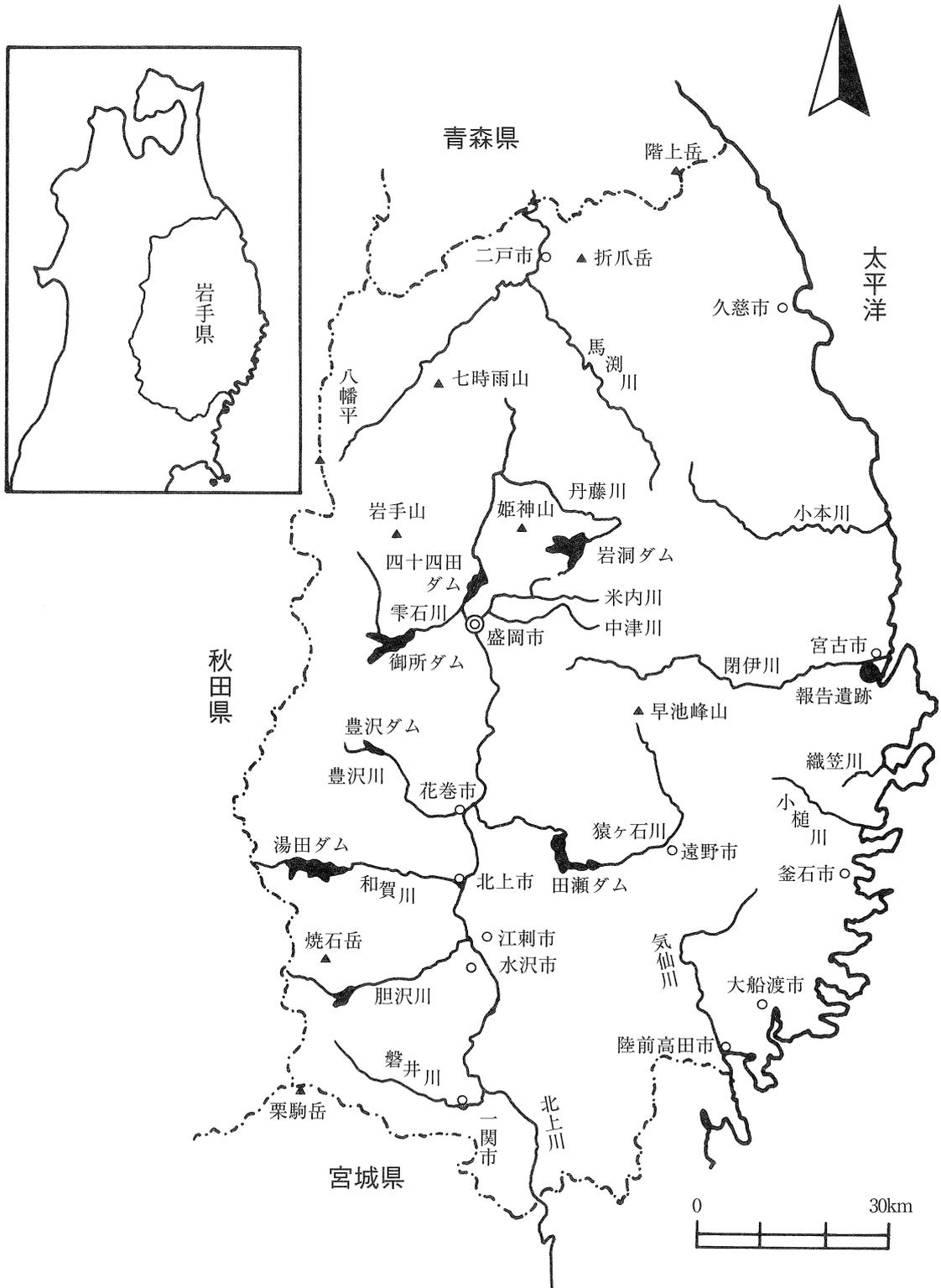
第1章 発掘調査に至る経過

宮古市は三陸沿岸の中核都市として成長する傍ら、近く地方拠点都市の指定を受ける等、今後も発展を続けることが予想され、これに伴う住環境の整備が住宅施策の急務とされている。このことから、宮古市が岩手県住宅供給公社に対して団地開発の事業要請を行ない、これを受けて公社により宅地造成事業が実施される事となったものである。この「宮古短大地区宅地造成事業」の実施に伴って、事業区域内に島田Ⅱ遺跡が位置することから発掘調査することとなったものである。

当事業の施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、住宅供給公社が平成8年5月9日付8岩住第104号で「埋蔵文化財の分布調査について(依頼)」の文書によって、岩手県教育委員会に対して分布調査の依頼をしたのが最初である。これを受け、岩手県教育委員会は平成8年5月28日に分布調査を実施し、その結果、工事施行範囲内に埋蔵文化財が所在することを確認、埋蔵文化財が包蔵されている可能性のある範囲については再度調査が必要である旨を、平成8年6月11日付教文第214号「宮古短大地区宅地造成事業に係る埋蔵文化財の分布調査について(回答)」の文書で回答した。回答を受けた住宅供給公社では、平成9年2月26日付8岩住第587号「埋蔵文化財の調査範囲について(依頼)」の文書で、岩手県教育委員会に試掘調査範囲の設定を依頼、これを受け教育委員会では平成9年3月6日付教文第1011号「短大地区宅地造成事業に係る埋蔵文化財の分布調査について(回答)」で試掘調査範囲を決定、回答を行なった。このことにより住宅供給公社では、平成9年4月4日付けで文化庁長官及び岩手県教育委員会教育長に対し、文化財保護法第57条の3第1項に基づく通知を行なった。

また、平成9年4月10日付9岩住第13～1号で埋蔵文化財試掘調査の依頼も行われ、これを受けて岩手県教育委員会は平成9年4月21～23日及び5月12～14日に試掘調査を実施、この結果は平成9年4月28日付教文85号及び平成9年5月20日付教文199号により示され、相当数の埋蔵文化財が確認されたことにより、今後の進め方について住宅供給公社と教育委員会が協議を重ねた結果、住宅公社としては、調査期間・費用等がどの程度か判断できないため、試掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとなった。これにより、岩手県教育委員会は平成10年度埋蔵文化財調査事業について平成10年3月9日付教文第988号で財団法人岩手県文化振興事業団へ通知した。これを受け、当センターは平成10年5月8日付で委託契約を取り結んで島田Ⅱ遺跡の試掘調査に着手することとなり、平成10年5月25日～8月31日にかけて詳細分布調査が行なわれた。用地約180,000㎡中4500㎡を試掘調査した結果、竪穴住居跡や製鉄・鍛冶関連遺構等多数の遺構が検出され、76,130㎡の調査が必要と判断された。この結果を基に岩手県住宅供給公社と岩手県教育委員会事務局文化課が協議した結果、発掘調査を実施することとなり、岩手県教育委員会へ調査を依頼した結果、相当量の埋蔵文化財を包蔵する広大な調査対象面積であることから、本調査は三カ年計画で実施する旨の回答が示された。

これにより平成11年3月2日、岩手県教育委員会は平成11年度埋蔵文化財調査事業について教文1251号で当事業団に通知した。これを受け当センターは同年4月1日付で岩手県住宅供給公社と委託契約を結び、平成11年度は西側の30,319㎡の本調査に着手、平成12年度は中央部の23,942㎡の調査を終了したが、平成13年度は東側の21,869㎡について予想以上の文化財が確認されたため、当初予定の三カ年計画での完了は困難となり、岩手県住宅供給公社と埋蔵文化財センターの協議の結果、平成14年度に5,900㎡の調査が繰り越すこととなった。



第2図 岩手県全図

第2章 位置と環境

第1節 位置と立地

島田Ⅱ遺跡は、岩手県宮古市大字八木沢第4地割ほかに所在し、JR東日本山田線宮古駅の南方約2.5km付近に位置し、遺跡の北西部には県立宮古短期大学が接している。遺跡の中央部は北緯39度36分48秒、東経141度57分47秒付近にある。

宮古市は、岩手県沿岸部のほぼ中央に位置し、北側に田老町・岩泉町、西側に新里村、南側に山田町が隣接する。また東側には太平洋を臨み、西側には早池峰山を最高峰とする山々が連なる、北上山地中部の東側縁辺部の一端を成す。宮古市周辺の海岸には、浄土ヶ浜をはじめとする三陸海岸の景勝地が数多く存在するが、その海岸線は宮古市付近を境に南部と北部とで様相を異にする。釜石市を中心とした南部は湾と岬が入り組んだりアス式海岸であるのに対し、北部は海岸段丘の発達した比較的出入りの少ない隆起性の海岸線となる。所々には、高さ100mを越える海蝕崖が続いている箇所もみられる。

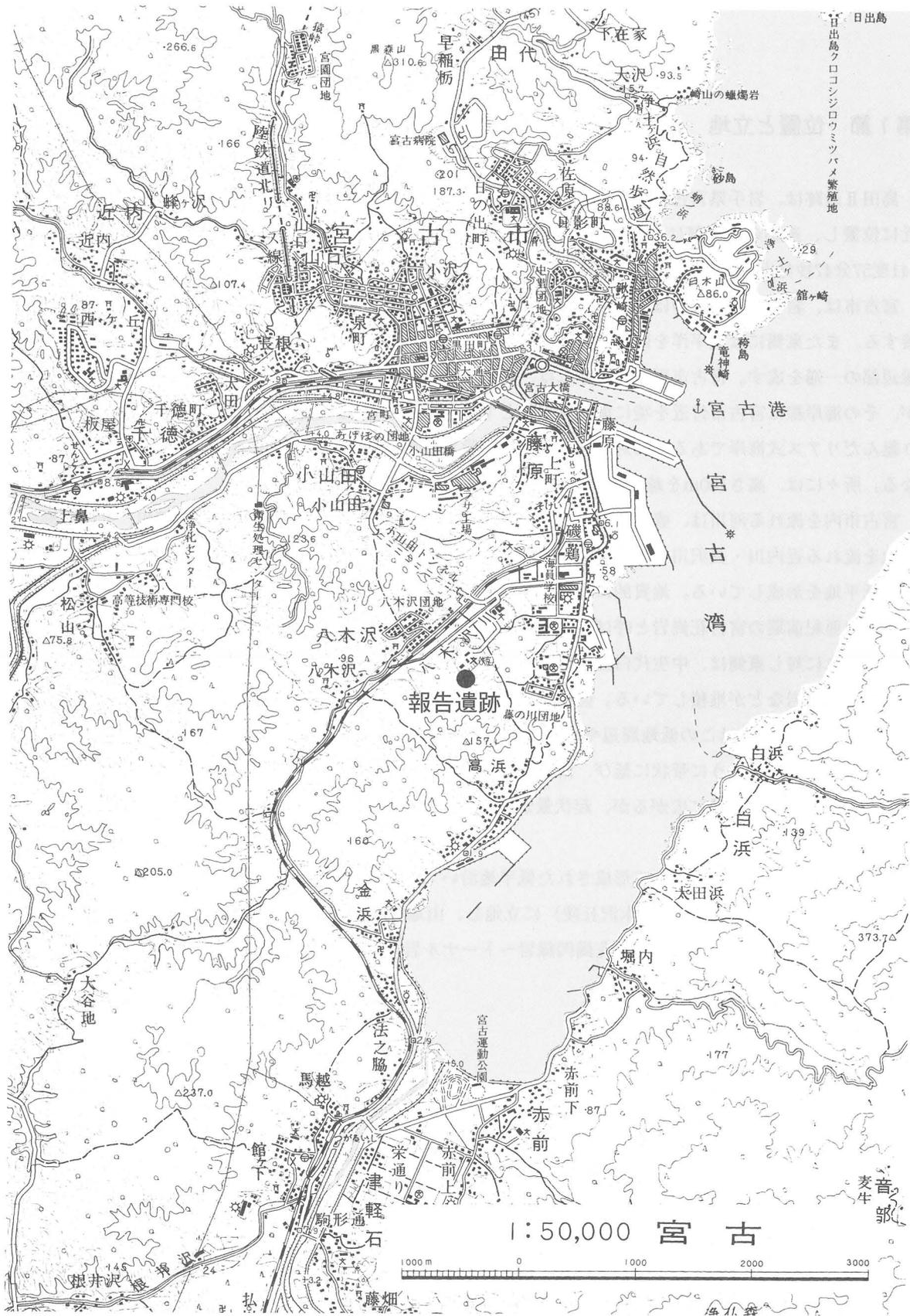
宮古市内を流れる河川は、盛岡市と川井村の境界に当たる区界峠付近に源を発する閉伊川、その支流の市街地を流れる近内川・長沢川・山口川、宮古湾に注ぐ津軽石川、本遺跡の北西部を流れる八木沢川がそれぞれの低平地を形成している。地質的には東西を二分する津軽石川を境に様相が異なっており、西側は大半が中生代白亜紀前期の宮古花崗岩と呼ばれる角閃石黒雲母花崗閃緑岩～トータル岩で占められ、磁鉄鉱が含まれる。それに対し東側は、中生代白亜紀前期の大浦花崗岩と呼ばれる角閃石黒雲母アダメロ岩やデイサイト質火砕岩、泥岩などが堆積している。低地は、河川流域沿いの狭小な範囲に限定される傾向がみられる。標高100m以下の丘陵地はこの低地周辺や海岸に沿ってみられ、閉伊川の北側においては板屋付近から東に山地と低地に囲まれるように帯状に延び、南側では長沢川との合流地点や磯鶏西側の低地と山地の間に分布する。山地は丘陵地の背後に広がるが、起伏量が比較的少ない標高300m以下の中起伏山地あるいは標高200m以下の小起伏山地である。

本遺跡は八木沢川流域によって形成された低平地沿いで、地殻変動による隆起作用で花崗岩が露出してできた標高100m以下の丘陵地（八木沢丘陵）に立地し、山地から北側方向に樹枝状に延びる尾根群とその谷間からなる。これらは角閃石黒雲母花崗閃緑岩～トータル岩の隆起と小溪流の浸食により形成されている。

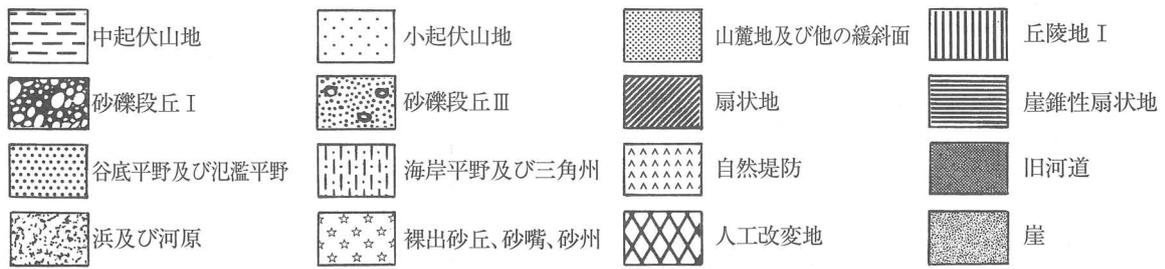
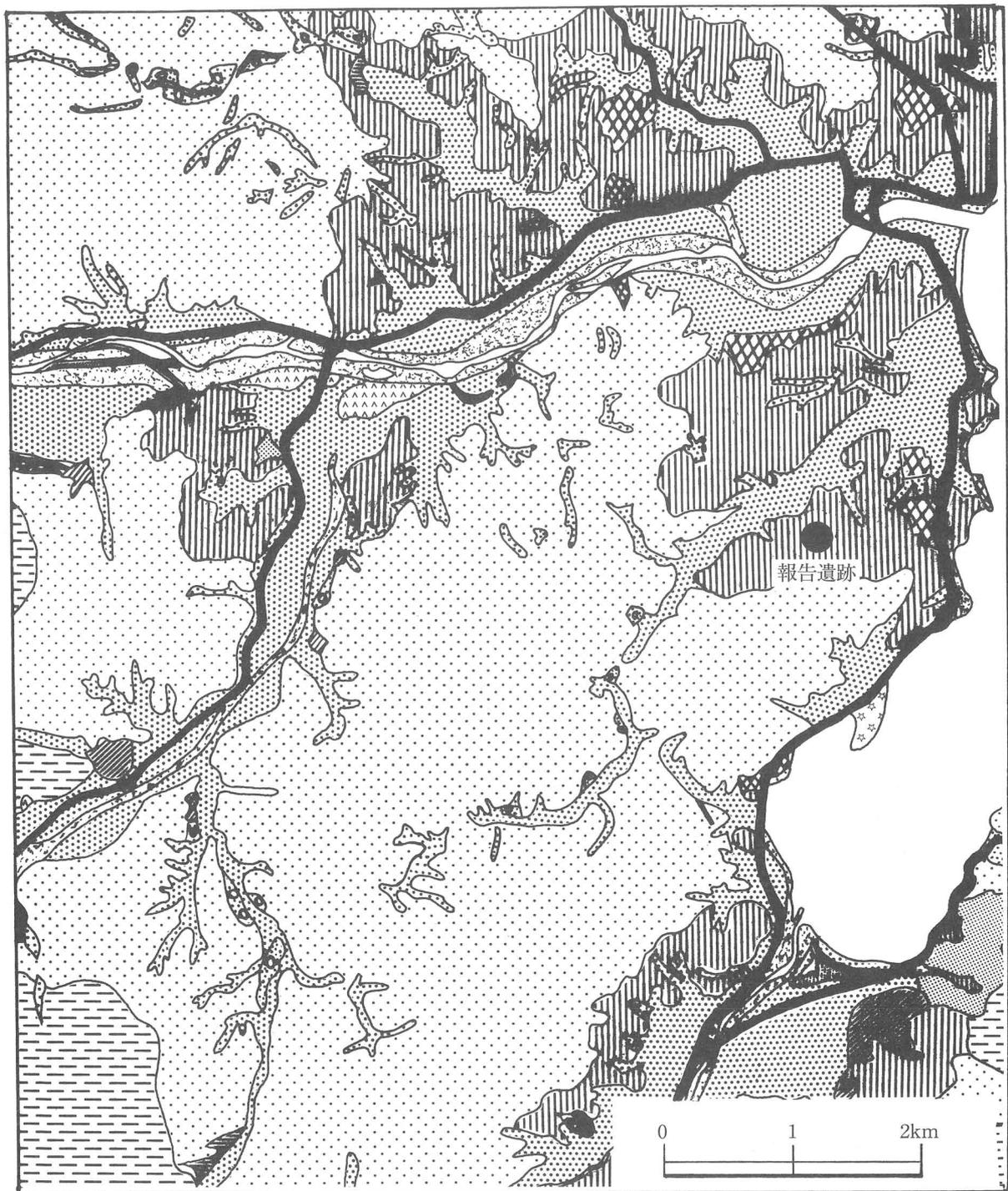
第2節 遺跡の概観

島田Ⅱ遺跡の立地する八木沢丘陵は北上山地の東縁となるもので、東側は宮古湾に面し、北側は東流して宮古湾に注ぐ閉伊川に開析された谷（谷底平野）に区切られる。南西側には北東に長い標高200m以下の小起伏山地である花輪山地が後背地として続く。またこの丘陵は南西から北東に流れて宮古湾に注ぐ八木沢川に解析された谷によっておよそ南北に二分され、遺跡はこの南側丘陵の北西部分にある。

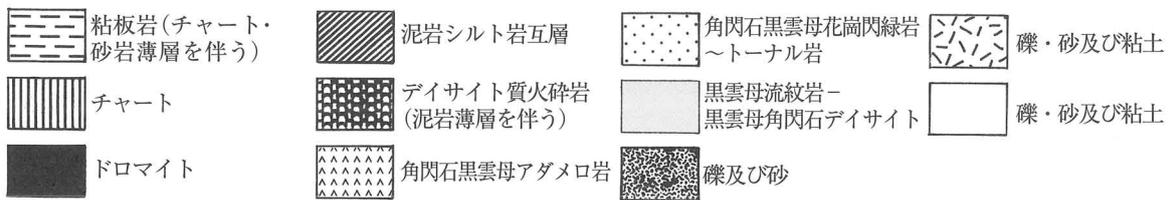
遺跡の全体範囲は不明であるが、今回の本調査に先立ち、平成10年度には本事業に係る用地について詳細分布調査を実施しており、その結果18万㎡におよぶ用地のうち、生活痕跡として確認される遺構等の分布から必要とされる調査対象面積は約76,000㎡となったが、遺構の分布状況と地形からは南側と東側にさらに広がるものと推測される。また地形と過去の調査成果から島田遺跡と中谷地遺跡も本来的には一連の遺跡と考



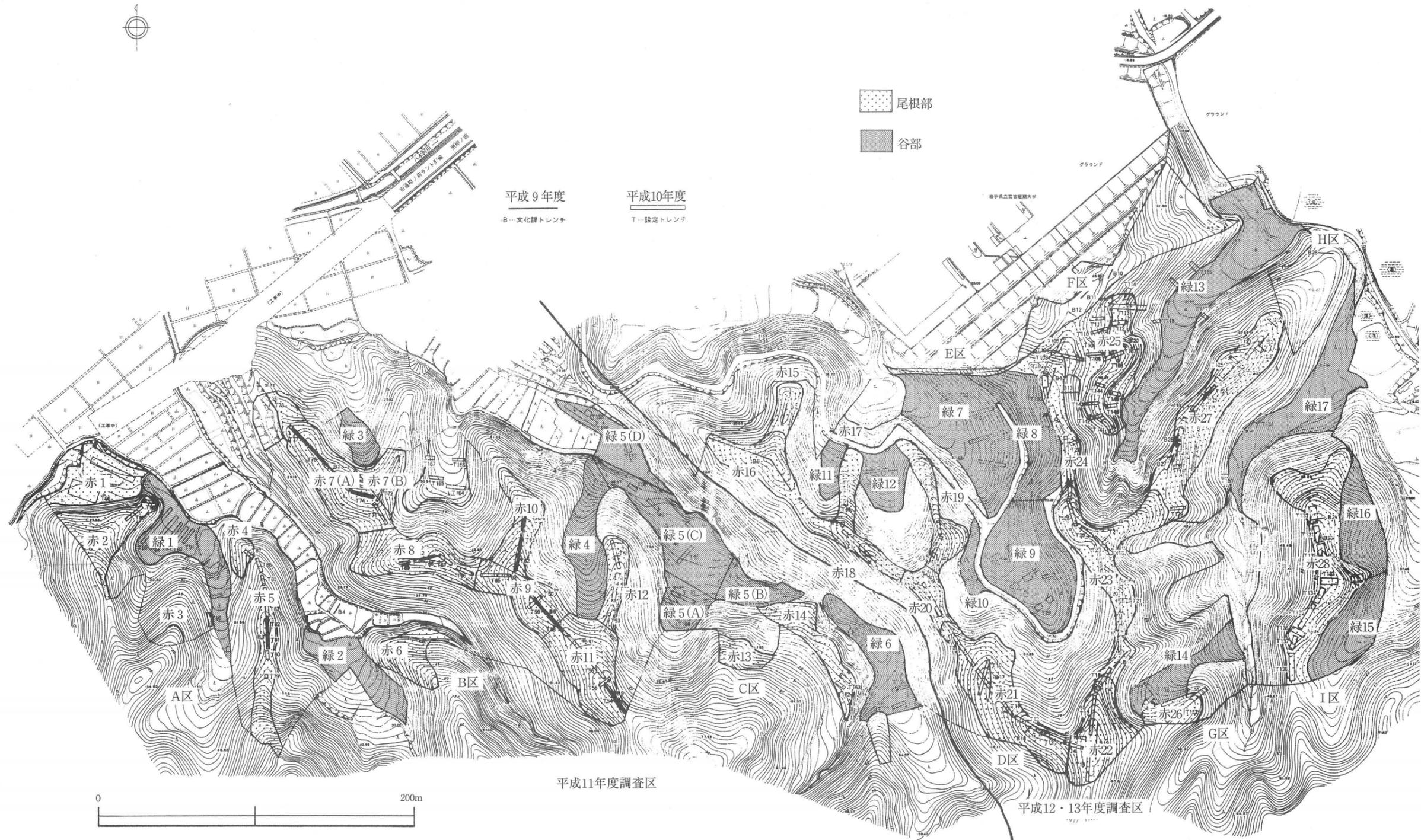
第3図 遺跡位置図



第4図 地形分類図



第5図 地質分類図



第6図 周辺地形と調査範囲図

えられ、全体の中での時期差による各個の集落範囲は別としてではあるが、古代集落遺跡としては、遺構のない斜面部（日常用的な山道はあるのだろうが）も含めて総面積は20万㎡を超えるものと思われる。

遺跡の立地する地形は、南東側の後背部山地から北側方向に階段状に段差を持って順次高度を下げる複数の尾根と谷間からなり、北西側は八木沢川に開析された大きな谷で区切られる。用地内を平面的にみると北側に開く比較的大きな谷6本に区切られる形で、5本の中心的な幹となる尾根がある。さらに水成の侵食や崩落で刻まれた谷（洞）が複雑な入り組み模様となって、幹尾根から枝分かれする多数の枝尾根があり、谷（沢）と尾根がネガ・ポジ的に樹枝状を呈している。東西両方向には同様の地形が続いており、北東側には磯鶏館山遺跡、南西側には八木沢古館が隣接している。尾根は頂部の幅が1～8m以下のやせ尾根で、北側方向に馬の背状に連続する段差をもって高度を下げる。両側は急勾配の斜面となって谷底に至り、谷部はおよそ幅の狭い小枝谷や洞状となっている。遺跡の標高は16～90m以上、調査区での標高は16～86mで、遺跡最高位部から東側には宮古湾が眺望できる景観である。調査区最高位部の尾根と現道路面との比高は約70m、尾根部と谷部の平均的な比高は20～30mほどである。調査前の現況は、尾根部分は山林、深い谷の一部は休耕田、斜面には一部伐採木を搬出するための道路がある。

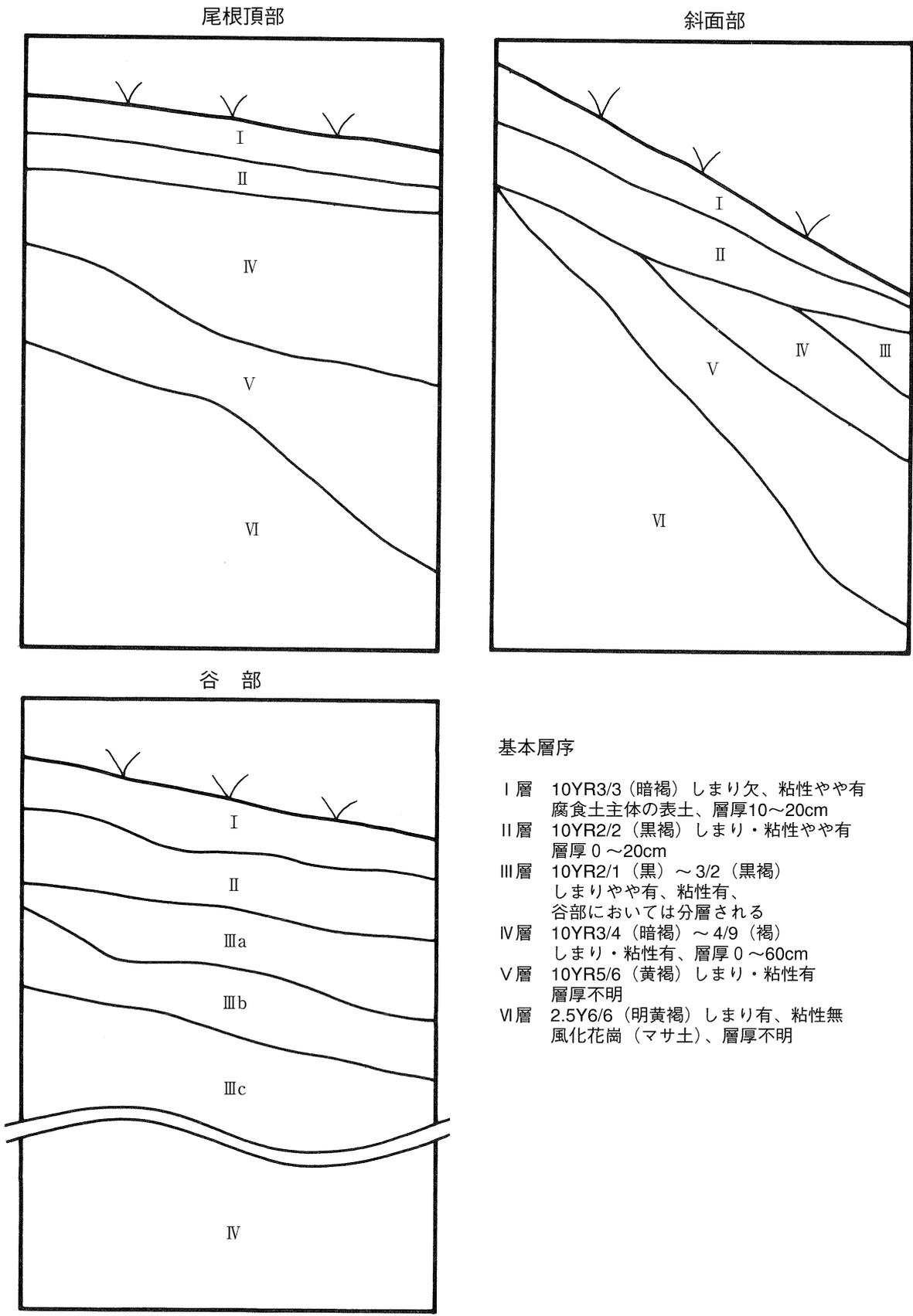
遺構は尾根頂部と斜面上部および谷部にもあり、平成11年度は西側の幹尾根1本とその両側の大きな谷及び西端の枝尾根群、平成12年度は中央部の幹尾根2本とその間の大きな谷及び翌年度調査区を区切る谷、平成13年度は前年度未了となった幹尾根の一部と東側の幹尾根1本と翌年度調査区を区切る谷、平成14年度は東端の幹尾根と谷及び飛地の枝尾根と洞状の谷の調査を行った。なお、平成11年度調査区西端部で用地外から延びる複数の枝尾根の先端部とその間の谷部は、隣接する八木沢古館と複合する部分でもある。

第3節 遺跡の基本層序

遺跡の基本層序は全体的に後世の人的攪拌が少ない良好な状態を呈し、基盤層より上層の堆積状況は地形によって異なっているが、およそ表土から基盤層まででⅥ層に大別される。Ⅰ層表土は、森林腐葉土で草根を多く含み、尾根部に薄く、谷底に向かい厚く堆積する。Ⅱ層黒褐色土は、尾根頂部では薄いか、存在せず、やはり谷底に向かい厚く、谷部では分層される部分もある。Ⅲ層黒色土～黒褐色土は谷部に限られる層位で、崩落と水成の繰り返しによる堆積で、大きい谷ほど沢が埋没して層序が多くなる。Ⅳ層暗褐色土～褐色土も尾根頂部には存在せず、Ⅴ層の存在する一部谷頭から谷底に向かって厚くなり、地区によって色調が異なるが、堅く締まっており、斜面低位では下位はⅤ層の漸移的な様相を呈する。Ⅴ層黄褐色土は、隆起した基盤層であるⅥ層風化花崗岩の上に部分的に存在する粘質土で、Ⅵ層の直上では白味を帯びている。

遺構の検出面は地形によって層位面が異なり、尾根頂部から斜面中腹まではⅣ層からⅥ層、斜面裾から谷底にかけてはⅢ層で古代の遺構が検出された。ただし、上記のとおり谷部Ⅲ層の堆積状況は一様ではなく、細分したⅢ層は地形状況によって相違があり、全域での対応は適わず、実際的には各区毎に検出面は異なるため、具体的には第4章において地区毎の地形概況と合わせて述べることにする。なお、緑7区では斜面部のⅣ層と谷底ではⅢc層で縄文時代の遺構が検出されたが、Ⅲc層上面には分析結果から白頭山苦小牧火山灰が部分的に認められ、土砂の堆積による水位や沢筋の変動などによる2次堆積と考えられる。遺物包含層はⅡ層が古代となるが、谷底部分では堆積状況のためかⅢ層上位に縄文土器と古代の遺物が混在する。Ⅲ層下位以下は基本的には無遺物層で、大きな谷部でのⅣ層及びⅤ層と基盤層のⅥ層の層厚は不明である。

(小山内)



第7図 基本土層柱状図

第4節 周辺の遺跡

宮古市には岩手県教育委員会の報告によると、平成11年4月現在456ヶ所の遺跡が確認されている。第8図の図副中には、岩手県教育委員会と宮古市教育委員会の刊行物より主な193遺跡を抽出したが、島田Ⅱ遺跡においては、縄文時代・古代から中世の遺構と遺物が確認されており、ここでは同時期の遺跡を中心に記述する。

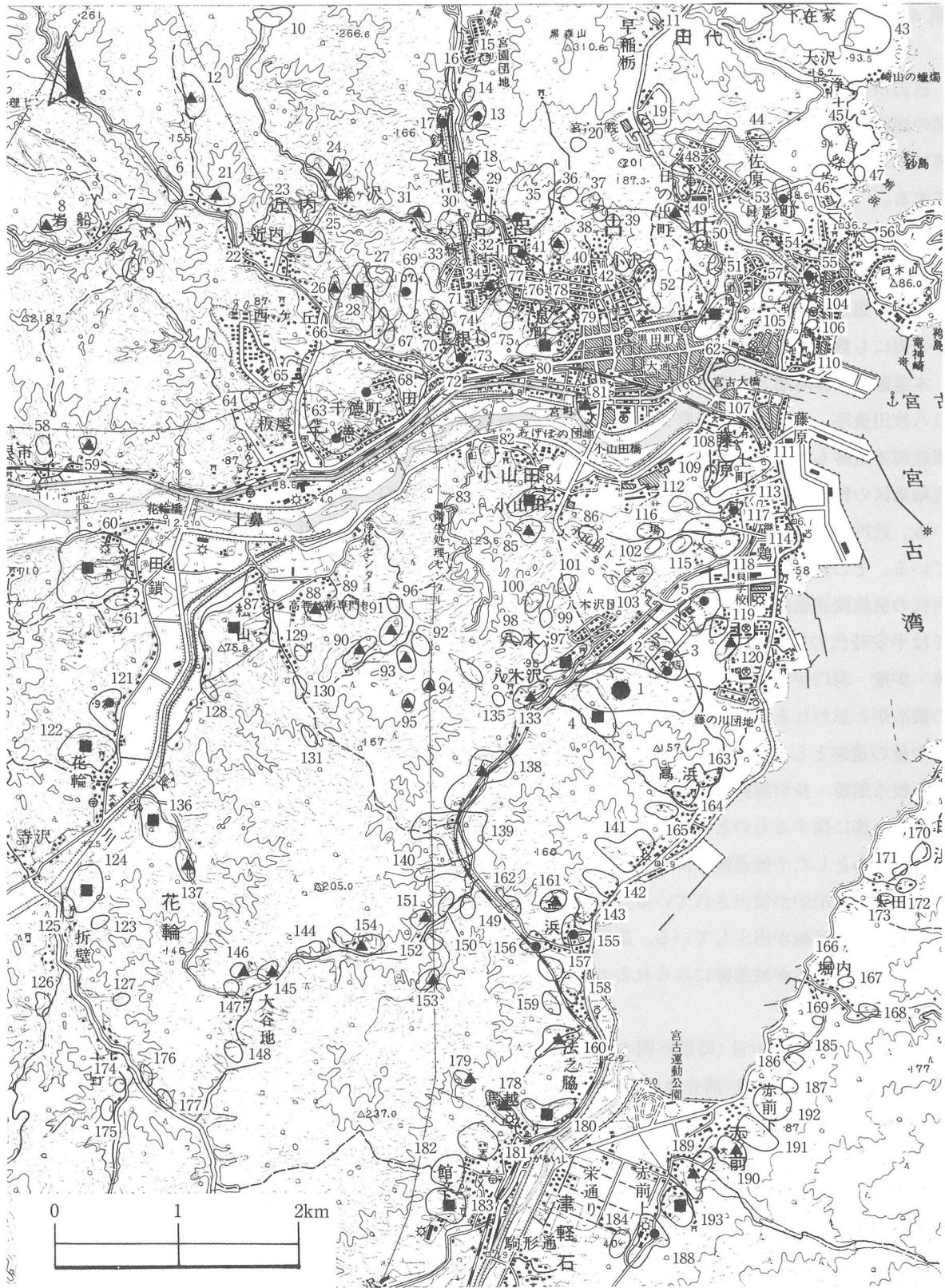
宮古市の縄文時代の主な調査遺跡としては、市内北部太平洋側には前期から後期に営まれた集落跡で大規模な土木工事の跡が窺える国指定史跡の崎山貝塚、本州最東部の重茂半島には前期初頭の集落跡が確認されている千鷲遺跡、内陸部には中期後半・後期後半から晩期の墓墳が多数発見された近内中村遺跡などがあり、その他にも数多くの遺跡が存在する。

本遺跡の主体時期となる古代の遺跡としては、藤原地区の藤原上町Ⅱ遺跡、赤前地区の赤前Ⅲ遺跡・赤前Ⅵ八枚田遺跡、山口地区の泉町狐崎Ⅱ遺跡などの集落跡がある。また古代の集落跡に伴って確認されている製鉄関連遺跡もある。田代地区の細越Ⅰ遺跡では平安時代の住居跡に伴い鍛冶炉が検出されている。同様に花輪地区の鯉沢遺跡では急斜面を削平した平場から、赤前地区の小堀内Ⅲ遺跡では住居跡と共に確認されている。近内地区の青猿Ⅰ遺跡では平安時代の製錬炉と思われる炉跡が斜面上で作業場を伴った形で確認されている。その他に八木沢地区の隠里遺跡群では鉄滓や羽口と共に土師器・須恵器も出土していることから、古代の製鉄関連遺跡である可能性が高いと思われる。また本遺跡の近隣に目をやると、磯鷲館山遺跡においては平安時代の竪穴住居跡が多数検出されている。その中でも9世紀の遺構が集中している西集落では鉄滓・炉壁・羽口が大量に出土している。同じく近隣の仏沢Ⅱ遺跡においても集落に伴い下部構造をもつ古代の鍛冶炉と思われる炉跡が検出されている。

中世の遺跡としては、市内に広く点在する城館跡が最も多い。第8図中に掲載した他、根城跡・老木館跡・根市館跡・長沢館跡・折壁館跡・弘川館跡・重茂館跡などがある。これら市内の城館跡のほとんどは閉伊氏の一族に関するものと考えられている。また、中世城館跡からも製鉄関連遺構は確認されており、千徳城跡を中心とした千徳遺跡群からは、中世の製鉄炉と思われるものが、先述の磯鷲館山遺跡や小山田館跡では堀跡より鍛冶炉が検出されている。城館跡以外の中世の遺跡としては熊野町遺跡があり、15～16世紀代の青磁碗や天目茶碗が出土している。遺構に関しては竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されており、城館跡の様相を呈しているが城館跡にみられるような遺構が全くないことから、番所の様な性格を有する遺跡と考えられている。

この他、古代から中世(時期不明の遺跡を含む)で鉄滓・炉壁・羽口などが見つかっている遺跡が第8図中に掲げた中でも35遺跡(調査地点の分かるものを除く)を数え、市内に多数の製鉄関連遺跡の存在が窺える。

ところで、『中谷地・島田遺跡』として報告されている島田遺跡と磯鷲中谷地遺跡は本遺跡に隣接するもので、本遺跡と同時期と思われる平安時代の竪穴住居跡や土師器の坏・甕類や鉄製品などが出土している。この両遺跡は登録上は区分された遺跡となっているが、字名により便宜上2つに区切られているもので、位置・遺構・遺物の性格からも本遺跡と関連があるものと思われる。また、本遺跡北側の市道岸ノ前ラント沢線開通工事の際、宮古市教育委員会によって本遺跡赤7区北側と本遺跡西側と接する八木沢古館跡の一部が未報告ではあるが調査されている。本遺跡赤1・2区は検出遺構・遺物から八木沢古館跡の一部である可能性が考えられる。(小林)



● 調査地点

▲ 鉄関連遺跡

■ 城館跡

第8図 周辺遺跡分布図

周辺の遺跡一覧表

NO.	遺跡名	種別	時代	主な遺構・遺物	参考資料
1	島田Ⅱ	集落跡・生産遺跡	本文	本文	1・2・19・31
2	島田	集落跡	平安	土師器・須恵器	3・16・19・31
3	磯鷄中谷地	集落跡	縄文・古代	土師器・須恵器・陥し穴	3・16・19・31
4	八木沢古館	城館跡	中世	主郭・二の郭・副郭・砦	16・19・31
5	磯鷄館山	集落跡・城館跡 生産遺跡	縄文～近世	竪穴住居跡・製鉄関連遺構・ 貝層・建物跡・羽口	4・16・19・31
6	棚館Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(早・中期)・竪穴住居	16・19・31
7	与茂子Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	19・21・25・31
8	岩船	散布地	縄文	縄文土器(前・中期)・鉄滓・羽口	19・31
9	桜木	散布地	縄文・古代	縄文土器(中・後期)・土師器	19・31
10	黒石沢	散布地	縄文・古代	縄文土器(前・中・後期)・須恵器	19・31
11	早稲栃Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器(中・後期)	19・31
12	アサナイ沢	散布地	縄文・古代	縄文土器(前・中期)・羽口・ 遮光器土偶・土師器・須恵器	16・19・31
13	小平Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(中期)・石器	15・19・22・26・31
14	小平Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	15・19・31
15	小平Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	15・19・31
16	半沢	散布地	縄文	縄文土器(中・後期)	19・31
17	高根	土壇墓群	縄文	縄文土器(中期)・墓壇・土壇	12・15・19・31
18	赤畑東(赤畑を分割)	散布地	縄文・近世	縄文土器・鉄滓	19・31
19	寒風	集落跡	縄文	竪穴住居跡・土壇	19・31
20	黒森マギ沢	散布地	縄文	縄文土器(早期)	19・31
21	菅ノ沢	集落跡	縄文・古代	縄文土器(早・中期)・ 土師器・鉄滓・羽口	16・19・31
22	横川	散布地	縄文・古代	縄文土器(中期)・土師器	16・19・31
23	近内中村	集落跡	縄文・弥生・古代	縄文土器(前・中期)・ 土師器・須恵器	16・19・31
24	蜂ヶ沢Ⅰ	集落跡	縄文・古代	縄文土器(前・後期)・鉄滓・羽口	19・31
25	近内館	城館跡	中世	縄文土器(前・後期)・ 土師器・須恵器	16・19・30・31
26	近内白石Ⅰ	製鉄跡		鉄滓・羽口	16・19・31
27	近内白石Ⅱ	散布地	縄文・古代	縄文土器(後期)・土師器・ 須恵器	16・19・31
28	近内大館	城館跡	中世	主郭・腰郭・物見台	16・19・31
29	赤畑	集落跡	縄文・近世	縄文土器(中期)	15・19・20・24・31
30	山口駒込Ⅰ	集落跡	縄文・奈良	縄文土器(早～後期)・ 土師器・須恵器	15・19・31
31	山口駒込Ⅱ	集落跡		鉄滓	19・31
32	天神山	散布地	縄文・古代	縄文土器・土師器・須恵器	19・31
33	延所	散布地	縄文	縄文土器	19・31
34	狐崎	集落跡	縄文・奈良・平安	縄文土器・土師器・鉄鏃	19・31
35	山口館(館山)	城館跡・集落跡	縄文・古代・中世	主郭・副郭・二の郭・三の郭・空堀	15・19・22・27・31
36	拝殿峠	集落跡	縄文	縄文土器(後期)	15・19・31
37	神籠石	散布地・祭祀跡	縄文・古代	縄文土器(晩期)・土師器・土偶	15・19・31
38	人形鼻	散布地	縄文・古代	縄文土器(後期)・ 土師器・須恵器	15・19・31
39	石倉平	散布地	縄文	縄文土器(中・後期)	15・19・31
40	拝殿ヶ沢	散布地	縄文・古代	縄文土器・土師器・須恵器・鉄滓	15・19・31
41	黒森町	屋敷跡・鉄鋳物製作跡	近世	陶磁器・鋳型片	12・29・31
42	小沢貝塚	貝塚	縄文	縄文土器(早期)・貝層	19・31
43	長磯	散布地	縄文	縄文土器(前・中期)	19・31
44	佐原	集落跡	縄文	縄文土器	16・19・31
45	平松Ⅰ	集落跡	縄文	縄文土器(前・中期)	16・19・31
46	平松Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器(前・中期)	16・19・31
47	平松Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器(前・中期)	16・19・31
48	日出町Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(前期)	16・19・31
49	日出町Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器(中期)・羽口	16・19・31
50	日出町Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	16・19・31
51	沢田Ⅰ	散布地	古代	土師器	16・19・31
52	小沢Ⅱ大上	散布地	縄文	縄文土器	15・19・31
53	熊野町	番屋跡?	中世	竪穴住居跡・青磁・茶臼	8・31
54	日影町Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(晩期)	19・31
55	鍛ヶ崎館山貝塚	集落跡・貝塚・城館跡	縄文～中世	縄文土器(早～後期)・製塩土器・ 土壇・貝層・腰郭・空堀	7・15・19・31

56	井戸ヶ洞	集落跡	縄文	縄文土器	19・31
57	小山根	散布地	縄文・弥生・古代	縄文土器・弥生土器・土師器	19・31
58	板の沢	散布地	縄文	縄文土器(中期)	31
59	下根市	散布地	縄文	縄文土器(中期)・鉄滓	31
60	田鎖館(山合並館)	城館跡	中世	主郭・二の郭・空堀・物見台	19・30・31
61	田鎖	散布地	縄文・古代	縄文土器(中・後期)・土師器・須恵器	19・31
62	黒田館	城館跡	中世	主郭・二の郭・三の郭・物見台	17・19・30・31
63	堀合館(古館)	城館跡	中世	主郭・腰郭・砦・空堀	6・17・31
64	室井沢Ⅰ	散布地	縄文・古代	縄文土器(中・後期)・土師器	19・31
65	神田沢	散布地	縄文・古代	縄文土器(中期)・土師器	19・31
66	近内寺本Ⅰ	散布地	縄文・古代	縄文土器・土師器・須恵器	19・31
67	近内寺本Ⅱ	散布地	古代	土師器	19・31
68	千徳城	城館跡・製鉄跡	奈良・平安・中世	主郭・二の郭・三の郭・砦・空堀・製鉄炉・鍛冶炉群	6・9・17・19・28・29・30・31
69	青猿Ⅰ	集落跡・製鉄跡	縄文・平安	Tピット・製鉄炉・竪穴住居跡	6・9・19・28・29・31
70	青猿Ⅱ	集落跡	弥生・平安	弥生土器・土師器・竪穴住居跡	19・31
71	青猿Ⅲ	散布地	縄文・古代	縄文土器(中期)・土師器	19・31
72	長根Ⅰ	群集墳	弥生～中世	古墳・蕨手刀・直刀・和同開珎・玉類	19・21・25・31
73	長根Ⅱ	散布地	古代	土師器	19・31
74	長根Ⅲ	散布地	古代	土師器	19・31
75	長根寺Ⅱ	散布地	縄文・古代	縄文土器・土師器	19・31
76	泉町狐崎Ⅰ	散布地	古代	土師器	19・31
77	泉町狐崎Ⅱ	集落跡	縄文・奈良・平安	縄文土器・土師器・竪穴住居跡	19・31
78	鴨崎Ⅰ	集落跡	古代	土師器	19・31
79	鴨崎Ⅱ	散布地	古代	土師器・須恵器	19・31
80	笠間館	城館跡	中世	郭・腰郭・砦	19・31
81	横山	集落跡・貝塚	古代	土師器・須恵器・鉄滓	19・31
82	岩ヶ沢	散布地	縄文・古代	縄文土器(前期)・土師器・須恵器	16・19・31
83	木戸井内	散布地	縄文	縄文土器・竪穴住居跡	19・31
84	小山田館	城館跡・製鉄関連遺構	中世	郭・主郭・二重空堀・鍛冶炉跡	15・19・28・31
85	小山田Ⅰ	散布地	古代	土師器・鉄滓	15・19・31
86	小山田Ⅱ	散布地	古代	土師器	15・19・31
87	松山館	城館跡	古代・中世	蕨手刀・須恵器・主郭・二の郭・三の郭・砦・腰郭・空堀	18・19・31
88	松山下谷地	散布地	縄文・古代	縄文土器・土師器・須恵器・鉄滓	18・19・31
89	大地田沢	集落跡	古代	土師器・竪穴住居跡	18・19・31
90	隠里Ⅰ	集落跡	縄文・古代	縄文土器(中期)・須恵器・鉄滓	18・19・31
91	隠里Ⅱ	集落跡	縄文・古代	縄文土器(中期・後期)・土師器・鉄滓	18・19・31
92	隠里Ⅲ	集落跡	縄文・古代	縄文土器(中期)・土師器・須恵器	18・19・31
93	隠里Ⅳ	散布地	縄文・古代	縄文土器(中・後期)・土師器・須恵器・鉄滓・羽口	18・19・31
94	隠里Ⅴ	散布地	古代	土師器・鉄滓	18・19・31
95	隠里Ⅵ	散布地	古代	土師器・鉄滓・羽口	18・19・31
96	隠里Ⅶ	散布地	縄文	縄文土器	31
97	守ノ越Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	16・19・31
98	守ノ越Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	16・19・31
99	守ノ越Ⅲ	散布地	縄文・古代	縄文土器・土師器	16・19・31
100	守ノ越Ⅳ	散布地	縄文・古代	縄文土器・土師器	16・19・31
101	猿楽峠	散布地	古代	土師器	16・19・31
102	磯鶏竹洞Ⅰ	集落跡	平安・古代	縄文土器(中期)・土師器	19・31
103	磯鶏竹洞Ⅱ	集落跡	縄文・古代	縄文土器・土師器	16・19・31
104	鎌ヶ崎仲町	散布地	縄文	縄文土器	19・31
105	夏保	散布地	縄文	縄文土器	19・31
106	鎌ヶ崎上町	散布地	縄文	縄文土器	19・31
107	藤原上町Ⅰ	散布地	縄文・古代	縄文土器(前期)・須恵器	19・31
108	藤原上町Ⅱ	集落跡	奈良	竪穴住居跡	19・31
109	藤原上町Ⅲ	散布地	縄文・古代	縄文土器・土師器	19・31
110	光岸地	集落跡・貝塚	縄文	縄文土器(晩期)	19・31
111	磯鶏石崎	散布地	縄文・古代	縄文土器・土師器	19・31
112	小沢田貝塚	貝塚	縄文・古代	縄文土器・土師器・須恵器・貝層	19・31
113	早坂	貝塚	縄文・弥生・古代	縄文土器・土師器・須恵器・貝層	19・31
114	上村Ⅱ	散布地	縄文・古代	縄文土器(中期)・土師器	19・31

115	上村Ⅲ	散布地	縄文・古代	縄文土器(中期)・土師器	19・31
116	上村Ⅳ	散布地	縄文・古代	縄文土器(中期)・土師器	19・31
117	上村貝塚	集落跡・貝塚	縄文～平安	縄文土器(中期)・貝層・住居跡	15・19・20・23・31
118	磯鶏蝦夷森貝塚	貝塚	縄文・古代	縄文土器(中期)・土師器・須恵器・人骨・骨角器	15・19・31
119	仏沢Ⅰ	散布地	古代	土師器	15・19・31
120	仏沢Ⅱ	集落跡	縄文・平安	縄文土器・土師器・鉄滓	15・19・31
121	鱧沢	集落跡	平安	土師器・鍛冶炉・竪穴住居跡	13・31
122	花輪館(エゾ館)	城館跡	中世	主郭・二の郭・腰郭・砦・空堀	19・31
123	下折壁Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	19・31
124	下折壁Ⅱ	城館跡	中世	郭	19・31
125	ミヤナリ沢	散布地	縄文	縄文土器	19・31
126	中折壁Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(前～後期)	19・31
127	下大野Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	19・31
128	真木田	散布地	縄文	縄文土器	31
129	七所沢Ⅰ	散布地	古代	土師器	18・19・31
130	七所沢Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	18・19・31
131	七所沢Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	31
132	八木沢Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	16・19・31
133	八木沢Ⅲ	生産遺跡		鉄滓	31
134	八木沢新館	城館跡	中世・近世	主郭・二の郭・三の郭・腰郭・砦・空堀	16・19・30・31
135	白山下	散布地	縄文	縄文土器(中期)	16・19・31
136	鱒沢館	城館跡	中世	主郭・腰郭・水堀	19・31
137	鱒沢Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器(前～後期)・鉄滓	19・31
138	八木沢駒込Ⅰ	集落跡	縄文・古代	縄文繊維土器・土師器・鉄滓	16・19・31
139	八木沢駒込Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器(前期)・須恵器	16・19・31
140	八木沢Ⅲ野来	集落跡	縄文	縄文土器(早・前期)	16・19・31
141	高浜Ⅳ横須賀	散布地	縄文	縄文土器(中・後期)	16・19・31
142	高浜Ⅴ下地神	散布地	縄文	縄文土器(早～中期)	16・19・31
143	高浜Ⅵ地神	散布地	縄文	縄文土器(中期)	16・19・31
144	大谷地Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	18・19・31
145	大谷地Ⅱ	集落跡	縄文	縄文土器(早～中期)・鉄滓	18・19・31
146	大谷地Ⅲ	散布地		縄文土器・鉄滓・羽口	18・19・31
147	大谷地Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	18・19・31
148	大谷地Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器	18・19・31
149	下大谷地Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(前・中期)	18・19・31
150	下大谷地Ⅱ	集落跡	縄文	縄文土器(前・中期)	18・19・31
151	下大谷地Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器・鉄滓	18・19・31
152	下大谷地Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	18・19・31
153	下大谷地Ⅴ	散布地		鉄滓	18・19・31
154	下大谷地Ⅵ	散布地	縄文	縄文土器(前～後期)・鉄滓	18・19・31
155	金浜館	城館跡	中世	主郭・帯郭・空堀	5・16・19・31
156	金浜Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(前～後期)	10・19・31
157	金浜Ⅱ	集落跡	古代	土師器	19・31
158	金浜Ⅲ	散布地	縄文・古代	縄文土器・土師器	19・31
159	金浜Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	19・31
160	金浜Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器(中期)・鉄滓	19・31
161	金浜堤ヶ沢	製鉄跡		鉄滓	19・31
162	賽の神	散布地	縄文	縄文土器(前～後期)	18・19・31
163	坂ノ下	散布地	縄文	縄文土器	16・19・31
164	今ヶ洞	散布地	縄文	縄文土器(前～後期)	16・19・31
165	熊野	散布地	縄文	縄文土器	16・19・31
166	堀内Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	18・19・31
167	堀内Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	18・19・31
168	堀内Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器(前・中期)	18・19・31
169	堀内Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	18・19・31
170	(白浜)太田浜Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(中・後期)	19・31
171	白浜太田浜Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器(中期)	19・31
172	白浜太田浜Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	19・31
173	白浜太田浜Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器	19・31
174	上大野Ⅰ	集落跡	縄文	縄文土器(前期)	19・31
175	上大野Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器(前・中期)	19・31
176	長沢街道Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(中期)	19・31
177	長沢街道Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	19・31
178	馬越Ⅰ	散布地	縄文・古代	縄文土器(後期)・土師器・鉄滓	19・31

179	馬越Ⅱ	集落跡	古代	土師器・鉄滓	19・31
180	山崎館	城館跡	中世	主郭・腰郭・砦	19・31
181	津軽石大森	散布地	縄文	縄文土器(中・後期)	19・31
182	沼里	集落跡	縄文・奈良	縄文土器(後期)・土師器	19・31
183	沼里館	城館跡	中世	主郭・腰郭・堀	19・31
184	久保田	散布地	縄文・古代	縄文土器・土師器	19・31
185	小堀内Ⅰ	集落跡	縄文・弥生・奈良	縄文土器(前～後期)・弥生土器・土師器・石皿	18・19・31
186	小堀内Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	18・19・31
187	小堀内Ⅲ	散布地	縄文・古代	縄文土器・竪穴住居跡・鍛冶炉	18・19・31
188	赤前Ⅰ牛子沢	散布地	縄文	縄文土器(前～後期)・陶磁器(中世)	14・19・31
189	赤前Ⅲ	集落跡	縄文・平安	縄文土器(早・中期)・鉄滓・羽口	15・19・31
190	赤前Ⅳ八枚田	集落跡	縄文・平安	縄文土器(早・中期)・鉄滓・羽口	15・19・31
191	赤前Ⅴ柳沢	散布地	縄文・古代	縄文土器・土師器	10・19・31
192	赤前Ⅵ釜屋ヶ沢	散布地	縄文	縄文土器	19・31
193	赤前館	城館跡	中世	主郭・二の郭・腰郭・砦	19・31

参考資料

- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999 「島田Ⅱ遺跡」
『岩手県文化振興事業団発掘調査略報 平成10年度』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第311集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999 『島田Ⅱ遺跡試掘調査報告書』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第337集
- 宮古市教育委員会 1986 『中谷地・島田遺跡』
- 宮古市教育委員会 1995 『磯鶏館山遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書43
- 宮古市教育委員会 1985 『金浜館発掘調査報告書』宮古市埋蔵文化財調査報告書7
- 宮古市教育委員会 1988 『青猿Ⅰ遺跡・下在家Ⅱ遺跡・千徳城遺跡群(堀合館)』
宮古市埋蔵文化財調査報告書14
- 宮古市教育委員会 1990 『鉄ヶ崎館山貝塚 平成元年度発掘調査報告書』宮古市埋蔵文化財調査報告書25
- 宮古市教育委員会 1990 『熊野町遺跡 昭和63年度発掘調査報告書』宮古市埋蔵文化財調査報告書28
- 宮古市教育委員会 1991 『青猿Ⅰ遺跡・千徳城遺跡群 平成元年・2年度発掘調査報告書』
宮古市埋蔵文化財調査報告書27
- 宮古市教育委員会 1992 『金浜Ⅰ遺跡 昭和58年度発掘調査報告書・大付遺跡 平成2年度発掘調査報告書』
宮古市埋蔵文化財調査報告書30
- 宮古市教育委員会 1992 『高根遺跡 平成3年度発掘調査報告書』宮古市埋蔵文化財調査報告書33
- 宮古市教育委員会 1992 『黒森町Ⅰ遺跡 平成3年度発掘調査報告書』宮古市埋蔵文化財調査報告書32
- 宮古市教育委員会 1992 『鯉沢遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書34
- 宮古市教育委員会 1995 『赤前Ⅰ牛子沢遺跡 平成4年度発掘調査報告書』宮古市埋蔵文化財調査報告書42
- 宮古市教育委員会 1983 『宮古市遺跡分布調査報告書1』宮古市埋蔵文化財調査報告書3
- 宮古市教育委員会 1984 『宮古市遺跡分布調査報告書2』宮古市埋蔵文化財調査報告書4
- 宮古市教育委員会 1985 『宮古市遺跡分布調査報告書3』宮古市埋蔵文化財調査報告書6
- 宮古市教育委員会 1986 『宮古市遺跡分布調査報告書4』宮古市埋蔵文化財調査報告書8
- 宮古市教育委員会 1986 『宮古市遺跡分布図』宮古市埋蔵文化財調査報告書9
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1988 「赤畑遺跡」「上村貝塚」
『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報 昭和62年度』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第126集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1989 「長根Ⅰ遺跡」
『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報 昭和63年度』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第135集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1998 「小平Ⅰ遺跡」「山口館跡」
『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報 平成9年度』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第282集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1991 『上村貝塚発掘調査報告書』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第158集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1989 『赤畑遺跡発掘調査報告書』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第142集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1990 『長根Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第146集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999 『小平Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第299集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999 『山口館跡発掘調査報告書』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第310集
- 佐々木清文 1990 「岩手県の製鉄遺跡(1)」『岩手県立博物館研究報告第8号』
- 佐々木清文 1994 「岩手県の製鉄遺跡(2)」『(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要XⅣ』
- 岩手県教育委員会 1986 『岩手県中世城館跡 分布調査報告書』岩手県文化財調査報告書第82集
- 岩手県教育委員会 1999 『遺跡台帳 平成11年度』

第3章 調査の概要と整理方法

第1節 調査経過と整理経過

《平成12年度》

平成12年度の発掘調査は、平成12年4月19日から11月30日まで行った。

4月19日午後、発掘機材を搬入し、プレハブ事務所・休憩所・道具置き場設置等の準備作業を行う。

24日から5月9日までは、樹木が残っているなどの理由で、平成10年度の詳細分布調査で一部試掘が行えなかった谷部(緑7～10区)にトレンチやテストピット等の試掘と、平成10年度の試掘トレンチの一部をクリーニングして状況確認を行い、前年度と調査担当者が大幅に入れ替わったこともあって、調査当初に層序等について調査員の共通認識の理解を図った。

5月8日には降雨のため現場作業を中止し、今年度分も含め、これまでに行われた試掘調査や発掘調査の成果を踏まえて推測される作業量を考え、発掘調査の長期的な進行計画の策定と調査員2名毎の3班体制の分担割についてミーティングを行った。具体的には試掘結果から現在でも水流のある緑7区の谷底と、急勾配の傾斜地である緑8区南部及び緑9区の中腹より上位には遺構が確認されず、遺物もほとんど出土しないことから、この部分(約3,000㎡)では面的な調査は不要と判断し、遺構の多い尾根部(赤15～24・緑11・12区)約13,000㎡に2班、比較的少ないと思われた谷部(緑7～10区)約6,000㎡に1班の体制とし、調査面積及び推測される遺構数と精査の難易度から、主に経験年数と資質により、全体及び尾根部の主担当は小山内・副担当赤石、谷部主担当は本多と分担割を行い、9日から本格的に調査に着手することとなった。

9日からは粗掘作業開始。これまでの試掘結果から前年度同様に表土およびⅡ層は重機による除去が可能と判断し、前年度の稼動状況から今年度は当初から重機2台で尾根部と谷部で平行して作業を行い、尾根部は6月8日、谷部は7月4日で終了した。また、尾根部の粗掘が予定よりも早く進んだため、6月12日から予算の許す限り、次年度予定調査区の一部(緑13区約4,000㎡)について重機でトレンチ掘りを行った。しかしこの谷部では遺構は確認されず、遺物は尾根からの流れ込みと思われるものがわずかなことと、傾斜のきつい比較的大きな谷のため、湧水で掘削が困難な状況ということから面的な調査は不要と判断された。

ところで、調査にあたっては調査面積が約2万2千㎡と広大で起伏に富み、地形的に独立した部分的なブロックとなる範囲が多いことから、前年度同様に便宜的に調査区西側から大きくD～F区と3分割し、さらにD・F区の尾根では枝尾根を分割し、幹尾根が階段状を呈することから、段毎に、谷部は沢筋毎に区分し、尾根部は赤区、谷部を緑区と細分割した。具体的には地形によってV字形に開く幹尾根の西側がD区(赤15～22区、緑11・12区)、東側がF区(赤23・24区)、これらの間の谷をE区(緑7～10区)とした。

5月10日から粗掘の終了した調査区について順次遺構検出作業を開始。6月下旬にはほぼ検出が終了したと思われたが、緑地帯残存部と思われた尾根部のF区赤24区と谷部緑8区の北端は実は未伐採であり、調査範囲が広がることが判明し、人力による粗掘で拡張を行う。赤23・24区では遺構の重複が複雑で、個々のプランの把握が難しく、緑7区でも重複遺構と思われる等高線に平行する横長のプランが数ヶ所確認され、各個のプランの把握にはかなり困難で、さらに谷底のⅢ層以下の層序は識別が難しく、検出面(掘り込み面)の把握に手間取る状況であった。また緑7区北側斜面上位で緑8区との境界付近に炉跡と思われる焼土遺構が確認され、一部拡張する必要が生じたが、進行上、検出作業は一旦7月14日で終了とした。

5月23日には委託した基準杭の1回目(D区北側とE区分)の打設が行われる。

6月2日からは、本格的な遺構精査に取り掛かる前に、遺構の状況や傾向的な感触を得るためと新人職員の研修を兼ねて、谷部(緑7区)では本多、尾根部(赤20区)では主に赤石両調査員が作業員数名と共に遺構精査開始。谷部では急勾配の斜面のため山側の壁崩落が著しく、重複すると思われる横に長い不鮮明なプランが5ヶ所確認されており、今後の土捨て移動などの安全と作業効率を考え、また検出面がVI(マサ土)層と比較的プランの把握が楽なこともあって斜面上位に位置するものから着手した。これを当初S X I 01～03と考えて精査を進めていたが、8月上旬には結果的にS X I 01・02・S I 27・43の4棟と土坑数基が上下にも重複していることが判明し、これ以降、状況の類似する4ヶ所のベルト設定と掘り下げに苦慮することが多くなった。また尾根部では、前年度同様に廃棄した堅穴住居の窪みを利用して炭窯が構築される状況にあることが判明し、やはり掘り下げに注意が必要と感じる。

6月20日には委託した基準杭の2回目(D区南側とF区分)の打設が行われる。

6月末で藤原期限付職員退職、7月中旬菊池期限付職員が配置される。

7月14日には一応の遺構検出作業を終える。この段階で検出された主な遺構は、尾根上では掘立柱建物跡・堅穴住居跡等約50棟、土坑類約60基、谷部では堅穴住居跡・工房跡等約15棟、土坑類約30基、鉄生産関連炉と思われるもの10基、貝塚1基などがあり、平成10年度の試掘から推定していた遺構数を上回ることが判明し、予定調査期間での調査終了を考えると、作業をより効率化する必要が感じられた。

7月17日からは地区分担割による3班体制で、赤15区(小山内・菊池)・21区(赤石・小林)・緑7区(本多・川又)から本格的な遺構精査を開始する。ただし川又期限付職員については当初新人研修として赤15区に配置した。8月9日から川又調査員が谷部に移動して精査遺構数が増加し、緑7区北側上位斜面の拡張も開始する。8月中旬には菊池調査員が転出し、東海林調査員が転入。

8月中旬までの各区の進行状況は、谷部の重複が先のとおりであり、尾根部でも昨年同様に狭い地形なため限られた場所で遺構の重複が多く、焼失住居などもあり、さらに今年も暑い夏が続き、作業員の健康管理もあって休憩時間を多く取る必要があり、また調査員の実力不足ということも重なりやや遅れ気味となっていた。特に谷部ではここまで調査員一人体制ということもあったが、当初に着手した重複遺構群に難渋し、このほか土坑類数基が終了と遅々として調査が進まない状況が続いた。

8月下旬には緑7区拡張部(実質は緑8区)の粗掘と遺構検出も一応のめどがついたが、工房跡と思われる上下の重複が数棟と南側横にもまだ重複して広がる様相を呈する。

9月も前月に引き続いた作業を行う。26日には尾根部ではD区がほぼ終了し、F区赤23区の調査に着手。やや遅れ気味ではあるが、調査員個々のレベル向上と共に作業効率がアップしてきた。しかし谷部では精査着手遺構数は増えたものの、横に重複するのみならず、古い堅穴住居を利用して貼床を繰り返す工房やその逆の利用などの上下に重複するものもあり、遺構数は平面的に確認できた以上に増加し、こうした重複関係が難しいこともあって地区主担当が判断と決断を下せず、9月中も目に見えて調査が進行しない状況が続き、予定期間での調査終了は困難な状況となった。

27日、委託者である岩手県住宅供給公社と宮古市都市計画課の視察。この時点で精査未着手区域は赤17・23区北側・24区・緑9～12区と緑7区拡張部(緑8区北部)、未了遺構数としては、精査中のものも含め、堅穴住居・工房等約40棟、土坑類約30基、鉄生産関連炉約10基などがあり、当センター調査第一課長を通して現状から予定範囲の期間内での終了は難しいとの説明を行う。今後の調査計画の変更については10月末の状況を見て協議することとなった。

30日、現地説明会開催。参加者83名。

10月からは地区割分担の担当配置替えにより現状打開を図ることとした。これにより赤石・東海林の2名を赤23区南部の精査に残し、小山内が緑7区、小林が赤17・緑11・12区にと、かなり遅れの見られる谷部に作業の重点を置く体制とした。

10月3・4日には鉄生産関連炉・焼土遺構・竪穴住居カマド燃焼部焼土の数基で熱残留磁気測定を行う。

10月4日、緑11区の竪穴住居に廃棄された貝塚の精査に着手。2×1mの広がり最終的には深さ30cmの14層に細分される堆積状況であり、およそ精査に1月を費やした。

10月上旬、緑7区抜頂部で確認し、精査を行っていた工房跡はやはり南側に重複して広がる模様で、再度粗掘を行い拡張したが、実は上方の赤24区との続きの未伐採の緑地化残存部と思われた部分でもあり、斜面下方の精査状況から土捨てが難しく、この部分は今年度中には無理と判断され、作業を中断する。

10月下旬、貝塚のあった竪穴住居を除き、赤17・緑11・12区の調査終了。緑7区では鍛造剥片が多量に視認できる鍛冶炉(SXW26A・B・28)や鉄砧石が残る鍛冶炉(SXW27)が工房から検出され、形態的な類似性が認められた。また斜面裾部では複式炉をもつ竪穴住居跡が1棟確認され、この位置する等高線上では焼土遺構数基が検出されていたが、縄文土器が少量ながら出土し、検出面がⅢc層上面であることから、この部分の遺構は縄文時代に帰属する可能性が考えられた。この段階での調査の進捗状況は、赤23区北側・24・緑9・10区の精査は未着手、緑8区北側は続行不可能で、調査期間を延長しても谷部緑9・10区の終了までが精一杯と考えられた。

11月、調査が延長されることとなったが、室内整理作業も始まることから、野外作業と平行して行うために、先行して本多調査員が室内整理にあたることとした。

11月上旬、赤23区南側・緑11区の調査終了。緑9・10区の精査に着手。

同15日、県文化課・委託者立会いのもと調査終了確認を行った。現状から赤23区北側・24・緑8区北側は次年度に廻し、緑9・10区については予算と時間の許す限り終了を目指すことで協議がなされた。精査が繰り返すこととなった主な遺構数は、掘立柱建物跡・竪穴住居・工房等が約30棟、鉄生産関連炉が4基、土坑類約30基、溝3条などである。また次年度予定範囲であった緑13区は今年度の終了として確認を得た。

17日、緑7区調査終了。残すは緑9・10区となった。調査面積と残り遺構数から作業員を半数に減ずる。

22日、発掘機材の第1回搬出。

29日、緑10区終了。緑9区では、当初2棟と思われた工房がやはり上下に重複するものであり、天候的にもこれ以上は精査続行は困難ということから、床面施設の精査は次年度に残すこととし、午後から越年のための作業を行う。

30日、前日に引き続き越年のための作業を行い、残りの発掘機材を搬出し、野外調査を終了した。

室内整理作業は11月1日から平成13年3月31日まで行った。

11月中は、貝類と鉄滓類の仕分け及び鍛造剥片の抽出、鉄製品の保存処理と鉄滓の成分分析準備、石器類の選別と羽口の接合及び登録作業、野外調査の写真整理などを行った。

12月からは調査員全員が野外調査から帰還し、整理の体制が整い、持ちかえった土器類の注記・接合・復元と遺構第2原図・遺物登録の台帳作成などを行う。

1月からは遺物の実測・遺構トレースを開始。2月下旬からは遺物実測図のトレースも合わせて行う。

3月上旬、保存処理委託していた鉄製品が納品される。中旬には遺物写真撮影を行う。鉄製品を除く、遺構・遺物のトレースまでを終えて、31日をもって平成12年度分の整理作業を終了した。

《平成13年度》

平成13年度の発掘調査は、平成13年4月18日から12月7日まで行った。なお、調査に先駆けて4月6・9日には重機を使用して侵入路の整備を行った。

4月18日午後、発掘機材を搬入し、プレハブ事務所・休憩所・道具置き場設置等の準備作業を行う。

23日から5月14日までは、平成10年度の詳細分布調査で一部試掘が行えなかった範囲にトレンチやテストピット等の試掘と、平成10年度の試掘トレンチの一部をクリーニングして状況確認を行い、調査担当者が大幅に入れ替わったため、基本層序等の共通認識の理解を図った。ところで、調査にあたっては調査面積が約2万2千㎡と広大で起伏に富むことから、これまで同様に便宜的に調査区西側から大きくG～I区と3分割し、谷部は沢筋毎に区分し、尾根部は赤区、谷部を緑区と細分割した。具体的には南部飛地がG区(赤26、緑14区)、中央部がH区(赤27、緑13・17区)、東部がI区(赤28、緑15・16区)、それと前年度未了となった西部F区(赤23北側・24・25区)とE区(緑8・9区)である。

5月1日からは、これまでと同様に表土およびII層は重機による除去が可能と判断されたため、重機を稼働させ、調査区東端の谷部(緑15区)から粗掘開始。14日からは2台体制とし、比較的大きな谷部の緑17区の試掘も行う。試掘の結果、緑14区下方・16・17区では遺構が確認されず、遺物もほとんど出土しないことから、この約5,000㎡では面的な調査は不要と判断し、今年度の調査は尾根部が主体と考えられた。重機の進入が不可能な部分の人力による粗掘及び重機の粗掘も6月19日で終了。

5月14日からは粗掘と平行して、東部の粗掘終了調査区(緑15区)から順次遺構検出作業を開始。また、前年度未了となった緑9区の竪穴住居1棟と工房2棟の床面施設の精査に着手。竪穴住居では鉄砧石が残る鍛冶炉、工房では周堤状に炉壁が認められた鍛冶炉が検出される。

5月28日には委託した基準杭の1回目(G・H区)、6月22日には2回目(F・I区)の打設を行った。

6月26日、検出作業終了。この段階では、主な遺構として竪穴住居・工房等約150棟、炭窯・土坑類約130基、鉄生産関連炉約10基などがあり、前年度未了分も含めて100棟は超えないと見こんでいた遺構数が大幅に上回ることが判明した。

6月25日からは本格的に遺構精査開始。調査開始前の計画では東部(G・I区)・中央部(H区)・西部(F区)の3地区分担割の3班体制で行う予定としていたが、当初は新規配置調査員が遺構の状況や感触を得るためと新人職員の研修を兼ね、前年度からの継続調査員とのペアでF区とH区の2地区から精査に着手した。

7月3日、検出した遺構の数量からみて、これまでの実績からすると現状の体制と期間では物理的に終了は困難と判断され、委託者(岩手県住宅供給公社)に対して状況説明を行うための現地協議を行う。

7月中は、現地協議での回答待ちということもあって、2地区の精査を継続する。工房跡からは流動滓の出土も少なく、前年度同様に鍛造剥片が視認される鍛冶炉が主体と見られ、竪穴住居でも鍛冶炉が検出される状況である。

8月下旬、今年度も竪穴住居や工房の上下の重複が認められ、170棟まで増加。

9月初旬、委託者から回答があり、予算の許す限り今年度調査を行い、残部については次年度に継続して調査を行うこととなった。これを受けて、11月末まで調査期間が延長となり、調査方針としては虫食い状態の終了とせず、現在精査を行っているF・H区17,567㎡の終了を目指すこととし、前年度未了を含めて多くの工房群が見こまれるF区を2班体制として進めることとした。この時点での2地区で確認されている主な遺構は竪穴住居・工房等は約140棟、炭窯・土坑類約100基、鉄生産関連炉約20基などである。

9・10月中は各区で遺構精査を進めるも、やはり竪穴住居や工房の上下の重複が認められ、着実に遺構数

が増加し、また赤25区では床面で鍛冶炉が多数検出され始める。終了目標の達成がかなり困難な状況となり、しかも、8月下旬から10月上旬は天候不順で思うように調査が進行せず、2地区の終了も危惧される状況となった。

11月は天候が回復し、赤25区を除き、ほぼ他地区の精査は目処が立つ状況となった。調査の進捗状況は好転するも、季節的に作業効率はあまり思わしくない。中旬からの残り期間は赤25区に全勢力を投入。

5日、秋田大学西谷教授に依頼した熱残留地磁気測定を実施。

18日、現地説明会実施。参加者約200名。

30日、県文化課・委託者立会いのもと調査終了確認を行った。現状から赤25区斜面部(約1,600㎡)・27区東側斜面の一部(約200㎡)は次年度に繰り越すことで協議となり、来年度の調査面積は7月の協議段階よりもやや増えて5,900㎡となった。

12月の第1週は赤25区で精査中の遺構の終了に徹し、さらに重複が確認された遺構を含め越年のための対策と重機による土砂流出防止のための土留め作業を行った。未精査となった主な遺構はさらに微増し、竪穴住居・工房等が約60棟、鉄生産関連炉が8基、炭窯・土坑類約50基、廃滓場4ヶ所などである。

7日、発掘機材を搬出し、平成13年度の野外調査を終了した。

室内整理作業は11月1日から平成13年3月31日まで行った。

11月中は、土器類羽口の注記・接合・復元、鉄製品のサビ除去、野外調査の写真整理などを行った。

12月からは調査員全員が野外調査から帰還し、整理の体制が整う。前月に引き続く作業と各種遺物の選別をして、遺構・遺物の台帳登録を行う。保存処理委託するため鉄製品の実測を開始。

1月からは各種遺物の実測と遺構第2原図作成を行う。また鉄滓類と貝類の仕分け選別を開始。中旬から遺構トレースも開始。2月下旬からは遺物実測図のトレースも合わせて行う。

3月、中旬には遺物写真撮影を行う。遺構・遺物のトレースまでを終えて、31日をもって平成13年度分の整理作業を終了した。

《平成14年度》

平成14年度の発掘調査は、平成14年4月10日から8月22日まで行った。

4月10日午後、発掘機材を搬入し、プレハブ事務所・休憩所・道具置き場設置等の準備作業を行う。

今年度の調査区は、西部F区(赤25区)と中央部H区(赤27E区)の一部前年度未了区があったため、南部飛地のG区(赤26・緑14区)と東部I区(赤28・緑15区)と併せて4箇所に分散していたが、表土除去と一応の検出は前年度に終えており、およその遺構数(過去の実績から重複による遺構数の増加は見込まれたが)を把握していたことから、2班体制として調査員の分担地区を決め、翌日から早速、前年度精査途中となっていた赤25区の検出クリーニングから開始。

15日からは遺構精査に着手。赤25A・B区では重複が著しく、またA区ではⅢ層黒色土が検出面で、なおかつ廃滓(土)場中で重複する遺構が多いため、見極めが難しい状況であった。精査を進めるとやはり、前年度と同様の状況を呈し、鍛練鍛冶炉の存在を窺わせる鍛造剥片が竪穴状の遺構で何ヶ所か視認される。

5月連休明けには赤25区の精査に目途がたち、小山内・亀班の大半が先発して赤28区のクリーニングに着手。赤28区尾根では北側先端から南側に向かい遺構数が多く、重複も著しくなり、住居状の遺構は人為的な埋土のプランが確認される場合が目につく状況であった。また鍛冶主体の前年度調査区では見られなかった楕円形基調の大型の炭窯が南部に集中する様相を呈していた。

14日からは赤28区の精査開始。重複の少ない北部から着手。下旬には赤25B・D区の精査を終えて合流し、

緑15区のクリーニングを行う。この谷部では前年度表土除去時に製鉄滓を主体とする廃滓場が確認されていたが、その斜面上方に長方形のテラス状のプランと卵形のプランで一部還元部が見える製鉄炉とおぼしき炉跡を検出する。遺構数はあまり多くない。

6月初旬には遺構数量と調査期間を考慮し、また調査区が狭いこともあって作業が混雑したため小山内・亀班を分離し、赤28区南部の精査にも着手することとした。また赤25A区も終了し、小林班が赤26・緑14区のクリーニングと精査開始。比較的遺構密度が希薄で重複も少なかったため順調に進行し、7月初旬には最後の赤27区の精査にも着手。

6月中は各区で遺構精査を精力的に行ったが、雨天が多く進行状況はやや遅れ気味となる。G区を除いて各調査区とも前年度までと同様、特に住居状の遺構の重複が多く、赤28区南部では竪穴住居埋土中に土坑、また炭窯や土坑の埋土中に炉跡が確認されるなど精査に手間取る状況である。

7月も先月に引き続く状況で遺構精査を継続した。

11日、台風6号接近。前日と翌日は事前対策と事後処理を行った。心配したほどの被害はなく、ほとんど調査に影響は及ばなかった。

15日、台風7号接近。前日は事前対策を行ったが、6号よりもさらに軽微な被害状況であった。

16日からは現地説明会を視野に入れ、緑15区の製鉄炉の精査にも着手。

26日、委託者説明会。当初の調査予定期間は7月末であったが、台風などの天候上の理由により8月上旬終了を目途に終了確認の日程等を調整する。

27日、現地説明会を開催。(参加者約60名)

29・30日、秋田大学西谷教授に依頼した熱残留地磁気測定を実施。

7月末、赤27区終了、赤28区中央部と緑15区を残すのみとなる。

8月上旬、緑15区の製鉄炉は確認状況から良好な遺存状態を期待していたが、上部構造が消失し、軸座と炉底部および前庭部のみで、地下構造を持たないものであることが判明。廃滓場の遺物も期待したほどの量はなく、99年度調査の製鉄炉の廃滓場に比べかなり少ないものであった。

8月5日、県文化課・委託者立会いのもと調査終了確認を行った。作業残量から予定よりももう一週間ほど延長が必要と考えられたが、お盆休みを挿むため8月下旬終了という運びとなった。

22日、セスナによる全景写真撮影を行い、発掘機材を搬出し、平成14年度の野外調査を終了した。

室内整理作業は7月1日から平成14年3月31日まで行った。

7月から8月下旬までは、野外調査と室内整理が平行して進行したため、毎週月曜日に調査員がセンターに出勤して作業の指示・点検を行った。

作業は土器類と羽口の注記・接合・復元、鉄製品のサビ除去、遺物写真撮影、野外調査の写真整理から始め、7月中旬からは仕分けと登録を終えた石器類と鉄製品の実測を開始。

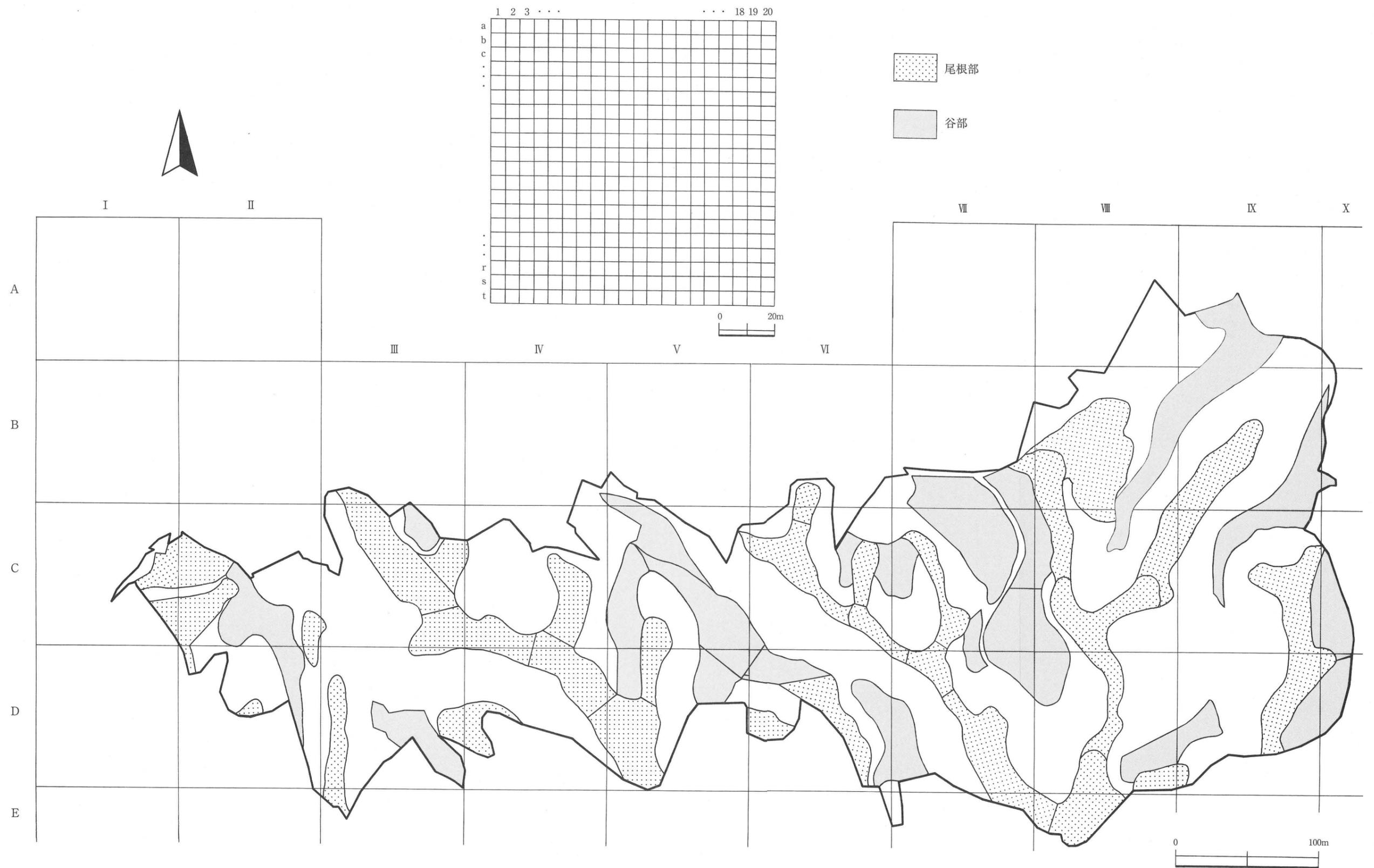
下旬には鉄製品の実測を終え、土製品の実測に移り、土器類の接合・復元とともに9月上旬で終了。

9月中旬からは鉄製品と土製品のトレースを行い、石器類の実測とともに10月初旬で終了。また9月下旬からは2回目の遺物写真撮影も開始。

10月は主に土器実測、石器類トレース、鉄滓類の仕分けと計測を行う。また遺物写真撮影を継続した。

11月上旬には土器実測を終え、遺物トレースと先月から引き続き鉄滓類の仕分けと計測を行い、下旬には貝類の仕分け・選別も行う。

12月からは遺構第2原図作成と遺構トレース及び、鍛造剥片の抽出開始。



第9図 グリッド設定図

1月下旬には遺構トレースを終え、2月からは遺構・遺物図版作成を開始。

3月には写真図版作成を開始し、下旬には遺構図版類と遺物を収納してすべての作業を終了したが、原稿は一部未了となり、印刷入札までに校了とした。(小山内)

第2節 調査方法

A. グリッドの設定

平成11年度の第1次調査において島田Ⅱ遺跡全体、つまり今回調査が行われた区域全体をカバーできるよう、国家座標第X系に合わせて行った座標設定及びグリッドの設定を引き続き使用した。区割りは調査区外の北西隅を原点とし、100m間隔で西から東に向かいⅠ,Ⅱ,Ⅲ・・・とローマ数字を、北から南にA,B,C・・・とアルファベット大文字を当てて大グリッドを設定し、更に各グリッドを5m間隔で20等分して同様に西から東に1～20とアラビア数字を、北から南にa～tとアルファベット小文字を当てて、それらの組み合わせで小グリッドを表すこととした。実際に作業を行なう上では、便宜上北西隅の杭にグリッド名を記載し、ⅠA-2bというように呼称した。

なお、遺跡全体をカバーするように区割を行なったため、原点は調査区外に位置している。原点とした日本測地系による国家座標第X系における座標値は以下の通りである。

$$X = -42000.000 \quad Y = 95600.000 \quad (\text{世界測地系 } X = -41692.566 \quad Y = 95299.625)$$

また実際のグリッドの設定を行なう上では、発掘調査面積が広大で起伏に富んだ地形になっていることから、基準点は委託打設することとした。平成10年度の詳細分布調査時には基準点6点と補点20点、平成11年度調査時には補点22点、更に今回の調査にあたって、平成12年度には補点23点、平成13年度には補点22点を新規に打設している。今回の調査においては以上の基準点を使用し、調査の進行に従い、必要に応じて実際的な杭の打設をして区割・グリッド設定を行なった。これら各区域で基準として使用した座標値は以下の通りである。なお、緑10区・緑11区・緑14区・緑15区は隣接する区域よりその値を求め、杭の打設を行った。

(小林)

区域	杭名	X座標	Y座標	区域	杭名	X座標	Y座標
赤15	補60	-42190.000	96140.000	赤25	補90	-42165.000	96340.000
赤16	補9	-42225.000	96125.000	赤26	補96	-42390.000	96380.000
赤17	補69	-42250.000	96175.000	赤27	基6	-42200.000	96400.000
赤18	補63	-42270.000	96175.000	赤28	補101	-42305.000	96485.000
赤20	補12	-42300.000	96200.000	緑7	補65	-42210.000	96275.000
赤21	補70	-42350.000	96260.000	緑8	補84	-42190.000	96295.000
赤22	補82	-42405.000	96330.000	緑9	補67	-42305.000	96295.000
赤23	補77	-42280.000	96330.000	緑12	補11	-42250.000	96200.000
赤24	補85	-42200.000	96310.000	緑15	補105	-42360.000	96475.000

※上記表の座標値は日本測地系による

B. 粗掘と精査

粗掘は、各年度とも平成10年度の試掘結果をもとに各区のトレンチの土層断面を確認し、また樹木が残っているなどの理由で試掘が行われなかった範囲では新たにトレンチやテストピットをいれて状況を確認した後、遺物がほとんど認められない調査区全体のⅠ層表土とⅡ層は重機を使用して除去することとし、平成11年度の稼動実績をみて平成12・13年度とも当初から重機2台を稼動させた。

具体的には平成12年度は、試掘結果から現在でも水流のある緑7区の谷底と、急勾配の傾斜地である緑8区の南部及び緑9区の中腹より上位には遺構が確認されず、遺物も皆無に等しかった部分(約3,000㎡)があり、それと重機による試掘を行った緑13区(約4,000㎡)についても遺構は確認されず、遺物は尾根からの流れ込みと思われるものがわずかなことと、傾斜のきつい比較的大きな谷のため、湧水で掘削が困難な状況ということから面的な調査は不要と判断した。さらに平成13年度調査でも、試掘結果から緑16区と緑14区下方と緑17区が同様の状況であったため、これらの地区(約5,000㎡)でも面的な調査は不要と判断した。従って実際には平成12・13年度で約34,000㎡の粗掘を行い、調査対象範囲についての検出は一応、すべて終了した。なお、赤23・24区については平成12年度に、赤26・28・緑14・15区については平成13年度に検出作業まで行っている。

精査は、基本的には竪穴住居と工房及び竪穴状遺構は4分法、炭窯・土坑類は2分法による覆土の観察を行ったが、重複すると思われた横長プランの竪穴住居や工房は適宜複数のベルトを設定し、楕円形の炭窯については4分法によって観察を行った。鉄生産に関する炉跡については基本的には十字にベルトを設定したが、関連施設との関係把握が必要な場合には適宜ベルトを設定し、覆土の観察と炉底面や掘り方の構造確認を行った。溝跡や道路状遺構については適宜間隔をもってベルトを設定して横断面で覆土の観察を行った。

遺物の取り上げは、遺構外出土については地区毎に層位を記入し、遺構内では遺構名と埋土層位を記入し、それぞれ出土地点を計測した遺物については遺構内外とも取り上げ番号も記入した。

C. 遺構の記録

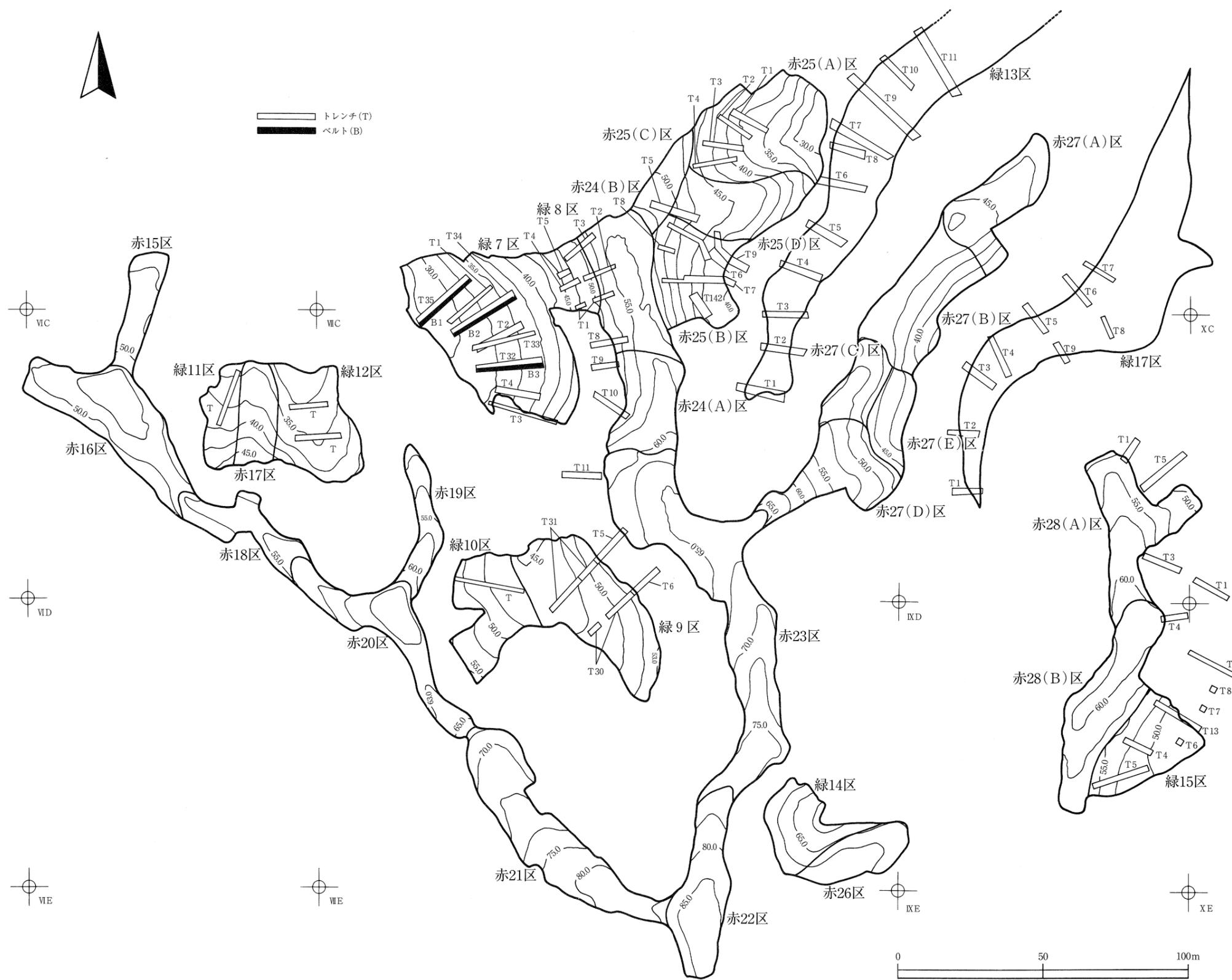
遺構の記録は主に実測図と写真撮影により、作図に表現できない場合はフィールドカードに記録している。

図面は、遺構の平面形や焼土・炭化物範囲、遺物出土状況等を記録した平面図、及び遺構の断面形、覆土の堆積状態を記録した断面図を作成し、適宜エレベーション図も作成した。作図は簡易遣り方測量を準用し、精査途中で必要に応じて作図記録している。その縮尺は原則的には1/20とし、カマド・各種炉跡・焼土などの微細図が必要なものは1/10、貝層については1/5で作図した場合もある。地形的に遣り方測量の困難であった溝跡や道路状遺構と廃滓(土)場の平面図については光波トラを利用した平板測量により1/50で作図した。また、立地状況を図化するために地形測量を航空写真測量により行っている。

写真は、遺構検出時の確認状況、埋土堆積状態、遺物出土状況、完掘状態というように精査の段階毎に必要なに応じて撮影を行っている。フィルムは35mmのモノクロとリバーサル、さらにモノクロについては6×7判のものも使用した。また、遺跡遠景と年度毎の調査終了全景は航空写真撮影を行った。

第3節 整理方法

図面の点検・遺物の洗浄・土洗い(鍛造剥片抽出)・鉄滓類の仕分け・写真整理は、原則的に現場で野外調査と平行して行うこととしたが、期間の後半は煩雑な調査に追われ、一部は野外調査終了後に行った。



第10図 トレンチ配置図

A. 遺構図面

遺構図面は、点検後必要に応じて第2原図を作成した。挿図中の縮尺は、竪穴住居跡・工房跡・竪穴状遺構は1/60、掘立柱建物跡は1/80、カマド・鉄生産関連炉・焼土遺構は1/30、性格不明の炉跡・炭窯・土坑類は1/40、溝跡・柱穴群の平面図は1/100、竪穴住居等の床面施設（貯蔵穴等の土坑・柱穴）・溝跡・掘立柱建物跡の各柱穴などの断面は1/40を原則とし、任意の縮尺についてはスケールを付している。なお、使用したスクリーン・トーンの種類は凡例のとおりである。

B. 遺物

遺物は洗浄後、全出土遺物を点検し、遺構内外の種別毎に仕分けを行い、注記・接合・復元と作業を進め、実測や採拓の必要なものを選択した後に登録した。報告書に掲載した遺物は、登録した中からさらに選択して実測・トレース・写真撮影・図版作成と作業を進めた。作業は、調査員が仕事の計画と指示・点検、作業員が実際の仕事というように分担している。

報告書に掲載した遺物の選択基準は、土器は完形品と接合復元したもので器形がおおよそ把握できるものとしたが、遺構内出土のうち土器の少ない遺構では口縁部と底部破片を選択し、できるだけ床面出土のものを、遺構外出土では、主に地文や文様の比較的明瞭な縄文土器の口縁部と網代痕のある底部破片を抽出した。

鉄生産関連の遺物に関しては、金属製品（鉄製品・銅製品）は出土したすべてを登録し、釘類・刀子・釣針は形状の把握できるものを選択して掲載し、併せて平成10年度試掘調査で出土したものについても掲載している。なお、掲載した金属製品は一部を除き保存処理を外部委託した。

各種鉄滓と鍛造剥片及び炉壁は出土状況と分類に応じて選択して観察表と写真の掲載とした。鉄滓については外表面的な性質及びメタルチェッカー反応と磁着の有無により分類し、遺構・出土地点毎に重量測定を行ってすべて計測表として示している。また鉄塊系遺物については磁石による磁着の度合いで細分類をした。鍛造剥片・粒状滓は現地で採集した土を水洗い・乾燥後、磁石とフルイにかけて、最終的には手作業で選別した。これらの実際的な作業工程は穴澤義功氏の助言をえて、『製鉄遺跡調査の視点と方法』平成12年度奈良国立文化財研究所・発掘技術者専門研修「生産遺跡調査過程」資料を参考として、フローチャートのとおりに進めた。炉壁については胎土のみでなく、炉壁の形態復元を念頭に置き観察を行うこととしたが、ほとんどが脆く崩壊して旧状を留めていないため観察表と写真のみの掲載とした。

羽口は出土地点と残存形態に応じて選択して掲載したが、性格上内径の規模が重要と考え、出土したもののうち主として内径が確実に計測できる径1/2以上、また装着角度の割り出しが可能なある程度の長さのある先端部を選び、凡例に示したように先端の熱変色範囲をもとに測定している。

石器・石製品類では、剥片石器は登録した全点、磨石・敲石は1/2以上残存するもの、砥石や鉄砧石と要石は自然面を含め2面以上残存するある程度以上の大きさのものを掲載した。

挿図中の縮尺は土器と土製品（羽口・支脚）、および礫石器・石製品は1/3、鉄製品は1/2、剥片石器は2/3を原則としたが、任意の縮尺についてはスケールを付している。

C. 写真

野外調査中に撮影した写真は、撮影順に対応するようにフィルムの規格毎にモノクロはネカアルバムに、リバーサルはスライドファイルに整理をして台帳に記載した。

遺物は登録したものを年度毎に金属製品、石器・石製品、土器類、鉄生産関連遺物（鉄滓類・羽口・炉壁）の順に35mmフィルムで撮影し、同様に整理を行った。なお、遺物の写真撮影は当センターの写真技師が行った。

(小山内)

第4章 検出遺構

平成12～14年度の発掘調査では縄文時代と古代(平安時代)の遺構と遺物、及び中・近世の遺物を検出した。ただし、出土した遺物から時期の明確な遺構、遺物は出土していないが形態やプランの確認状況などから時期が判断された遺構、時期の明確な遺構との重複関係から時期の判断されたものであり、必ずしも統一された明確な根拠に基づくものではない。

各時期の遺構の種類と数量は以下のとおりである。なお、住居跡等の建替えや拡張に関しては新たな遺構番号はふらず、A・B・C・・・としたが、新旧のプランが分離特定できないものについてはカマドの造り替えを含めて1棟と数えている。

[縄文時代]

竪穴住居跡 3棟 (S I 55、64、125) 焼土遺構1基 (S N18) 陥し穴2基 (S K T01、02)

[古代(平安時代)]

掘立柱建物跡 3棟 (S B07、08、09)

竪穴住居跡 166棟 (S I 25～27A・B、28A・B～30A・B～35A・B～39、41～43A・B、44
45A・B、46、48、49A・B、50、53、54、56～58A・B・C～63
65～69、70B～76、77C～82、86C・D、87A・B～90A・B
91A・B、92、93B、94A・B～97A・B～108、113～115、118、119
120B、122～124、126A・B・C～141A・B・C、142A・B・C・D
143～150A・B、151、153～163A・B～168A・B、169、171～174A・B
175～177、178D、179A・B、180A・BC～187)

工房跡 62棟 (S X I 01、02、04A・B・C～07、09A・B・C・E～10、14A・B、16～18、26
27A・C、28、30、33、34、37、40、44B、46、47A・B、54、55A、58
60、63、64、67、68A・B、69～73A・B～81A、82、85、88A、90～94)

竪穴状遺構 33棟 (S K I 19～21、23、25、27～31A・B・C～33A・B～46A・B～50)

鉄生産関連炉跡 41基 (S X W17、18、22～30、32～35、37、39、42、43、47B・D、50～53
55A・B、58、59、64～73、75、76)

炭窯 62基 (S W43～45A・B・C・D～48A・B～52、56、59、62、63、65～67、69
71～75、77、79～81、85～87、89、91、94、96、97、99A・B～101
103～108、111、112、114、115、117～121AB～126)

土坑 161基 (S K 97～100、107、109、111、112、114～119、122、127、129、131
135～138、142、146、148、149、151～153、155、159～168、178～180
184～196、199、200、202、203、205A・B、207、209～215、222～236
239、240、242、244～247、249A・B、253、254、256、258、259、262～264
266～270、272、274、276～280、282～285、287～295、297～301
303、304、306、308、309、312、314、315、318A・B・C、322、326、327
329～331、333、335～340、342～346)

炉跡 36基 (S N15、26~28、30、31A・B~33、35~37、44、47、52、53、55~57
 66、69~75、77、79~86)
 焼土遺構 31基 (S N06~10、12~14、16、17、19~23、25、34、40、43、45、46
 48、54、59~65、76)
 溝跡 7条 (S D19~25、27) 柱穴群 (赤24B区)
 廃滓(土)場 10ヶ所 (S X H07~16) その他 1基 (S X44)

なお、遺構名は種別毎の検出順に連番としたが、精査過程あるいは整理段階において欠番になったものや
 略号・番号の変更になったものがあり、本文中では以下の変更した遺構名で記述している。

竪穴住居跡51棟

旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名
S X I 03	S I 43	S X I 32	S I 139	S X I 56B	S I 187
S X I 22	S I 57	S X I 59	S I 140	工房跡22棟	
S X I 08	S I 58A~C	S X I 51C	S I 141A	旧遺構名	新遺構名
S X I 11	S I 59	S X I 51A	S I 141B	S I 47	S X I 18
S X I 12	S I 60	S X I 50・51B	S I 141C	S I 70A	S X I 67
S X I 13	S I 61	S X I 47C	S I 142A	S I 77A	S X I 68A
S K128	S I 62	S X I 47D	S I 142B	S I 77B	S X I 68B
S K145	S I 63	S X I 47E	S I 142C	S I 85A	S X I 69
S N18B	S I 64	S X I 47F	S I 142D	S I 86B	S X I 70
S X I 09 I	S I 125	S X I 53A	S I 143	S I 93A	S X I 71
S X I 09D	S I 126A	S X I 62B	S I 144	S I 111	S X I 72
S X I 09F	S I 126B	S X I 65	S I 145	S I 116B	S X I 73A
S X I 09G	S I 126C	S K273	S I 146	S I 116C	S X I 73B
S K I 26B	S I 127	S X I 36	S I 147	S I 117	S X I 74
S X I 27B	S I 128	S X I 48	S I 148	SW95	S X I 75
S X I 15	S I 129	S X I 52	S I 149	S I 109	S X I 76
S X I 24	S I 130	S X I 49 : SW109	S I 150A B	S X50	S X I 77
S X I 25A	S I 131	S X I 55B	S I 180A	S I 120A	S X I 78
S X I 35	S I 132	S X I 55C・D	S I 180B C	S I 121	S X I 79
S X I 39	S I 133	S X I 81B	S I 181	S K261	S X I 90
S X I 43	S I 134	S X I 84A	S I 182	S I 178B	S X I 91
S X I 44A	S I 135	S X I 88C	S I 183	S I 152B	S X I 92
S X I 20	S I 136	S X I 89	S I 184	S I 170	S X I 93
S X I 23	S I 137	S K302	S I 185	S I 174	S X I 94
S X I 31	S I 138	S X I 86	S I 186		

豎穴状遺構25棟

旧遺構名	新遺構名
S X 40	S K I 27
S I 83A	S K I 31A
S I 83B	S K I 31B
S I 83C	S K I 31C
S I 84	S K I 32
S X I 25B	S K I 33A
S X I 25C	S K I 33B
S I 86A	S K I 34
S I 110	S K I 35
S I 116A	S K I 36
S W 92	S K I 37
S W 93A	S K I 38
S X I 32	S K I 39
S X I 41	S K I 40
S X I 45	S K I 41
S X I 62A	S K I 42
S W 82	S K I 43
S X I 56C	S K I 44
S X I 84B	S K I 45
S I 178A	S K I 46A
S I 178C	S K I 46B
S X I 88B	S K I 47
S I 152A	S K I 48
S X I 83	S K I 49
S K 243	S K I 50

炉跡・焼土遺構23基

旧遺構名	新遺構名
S W 54	S N 27
S W 64	S N 28
S K 126	S N 30
S X I 04D	S N 31A
S K 154	S N 31B
S K 103	S N 32
S K 140	S N 53
S X I 42焼土A	S N 54
S K 217	S N 55
S K 220	S N 56
S K 237	S N 57
S X W 36	S N 60
S K 265	S N 61
S X W 54	S N 62
S X W 56	S N 63
S X W 62	S N 64
S X W 63	S N 65
S X I 46SNC	S N 66
S K 314中	S N 82
S K 318B上	S N 83
S W 116	S N 84
S W 121A上	S N 85
S I 69カマド上	S N 86

土坑28基

旧遺構名	新遺構名
S K I 16	S K 159
S K I 17	S K 160
S N 11	S K 161
S K I 18	S K 162
S W 55	S K 163
S W 57	S K 164
S W 58	S K 165
S W 60	S K 166
S W 61	S K 167
S K I 24A	S K 274
S I 85B	S K 276
S X I 24K 1	S K 277
S X I 24K 2	S K 278
S X I 25K 1	S K 279
S N 39	S K 280
S X I 42	S K 282
S W 93B	S K 283
S N 49	S K 284
S X I 40K 1	S K 285
S X I 47B K 1	S K 287
S I 121K 1	S K 288
S I 121K 2	S K 289
S I 122K 1	S K 290
S X I 53B	S K 291
S X I 36K 1	S K 292
S I 168A K 1	S K 344
S I 170K 1	S K 345
S N 78	S K 346

廃滓(土)場9ヶ所

旧遺構名	新遺構名
緑9区黄褐色土範囲A	S X H 07
緑9区黄褐色土範囲B	S X H 08
S X 43	S X H 09
S X 46	S X H 10
S I 112	S X H 11
S X 45	S X H 12
S X 49	S X H 13
S X 48	S X H 14
S X 51	S X H 16

鉄生産関連炉跡6基

旧遺構名	新遺構名
S K 157	S X W 33
S N 41	S X W 64
S N 42	S X W 65
S X W 34C	S X W 66
S X I 15P 12	S X W 67
S I 65炉	S X W 68

炭窯6基

旧遺構名	新遺構名
S X I 14B K 1	S W 103
S N 38	S W 104
S K 218	S W 105
S K 219	S W 106
S X I 51B K 2	S W 107
S K 169	S W 126

以下、検出した遺構について記述するが、前述のとおり、調査範囲が広かつ地形的に独立した部分的なブロックとなる所が多いことから、作業の進行上、便宜的に地形形状によって区割りを行っており、記載は主体時期となる古代については分割したブロック毎に行うこととする。この区割りは平成11年度調査区に引き続き、調査区西側から東側にD区からI区と6大ブロックに区分し、さらに尾根部では枝尾根を分割したほか、幹尾根も階段状を呈することから、段毎に、谷部は沢筋毎に区分し、尾根部は赤区、谷部を緑区と細区画した。具体的には遺跡中央部のV字形に開く幹尾根の西側をD区(赤15～22区、緑11・12区)、東側をF区(赤23～25区)、この間の谷をE区(緑7～10区)とし、D区赤22区から北東に張り出す部分をG区(赤26区、緑14区)、F区赤23区の中央から北東に延びる尾根と両側の谷部をH区(赤27区、緑13・17区)、調査区東端の幹尾根とその東側の谷をI区(赤28区、緑15・16区)と分割している。このうち平成12年度には、調査予定範囲をD～F区としていたが、実際にはE区のうち緑8・9区、F区のうち赤23区北側と赤24区が未了となり翌年度に、ただしH区のうち緑13区を終了している。平成13年度には前年度未了分を含め、残りの全域を予定していたが、実際にはG区とI区及びF区のうち赤25区とH区のうち赤27区の一部が未了となり、この部分の調査を平成14年度に行った。

なお、ここでは遺物については出土状況についてのみ記載し、個々の詳細は遺構内外出土の区別なく第二分冊第5章にて一括して報告することとした。(小山内)

第1節 縄文時代の遺構 (第11図)

縄文時代の遺構は、緑7・8区の谷部東斜面で竪穴住居跡が3棟と焼土遺構1基、赤23区と赤27区の尾根頂部で陥し穴が各1基検出されたのみで、出土遺物とともに極めて少ない。

S I 55竪穴住居跡 (第12図、遺物図版1・2、写真図版8・211・212)

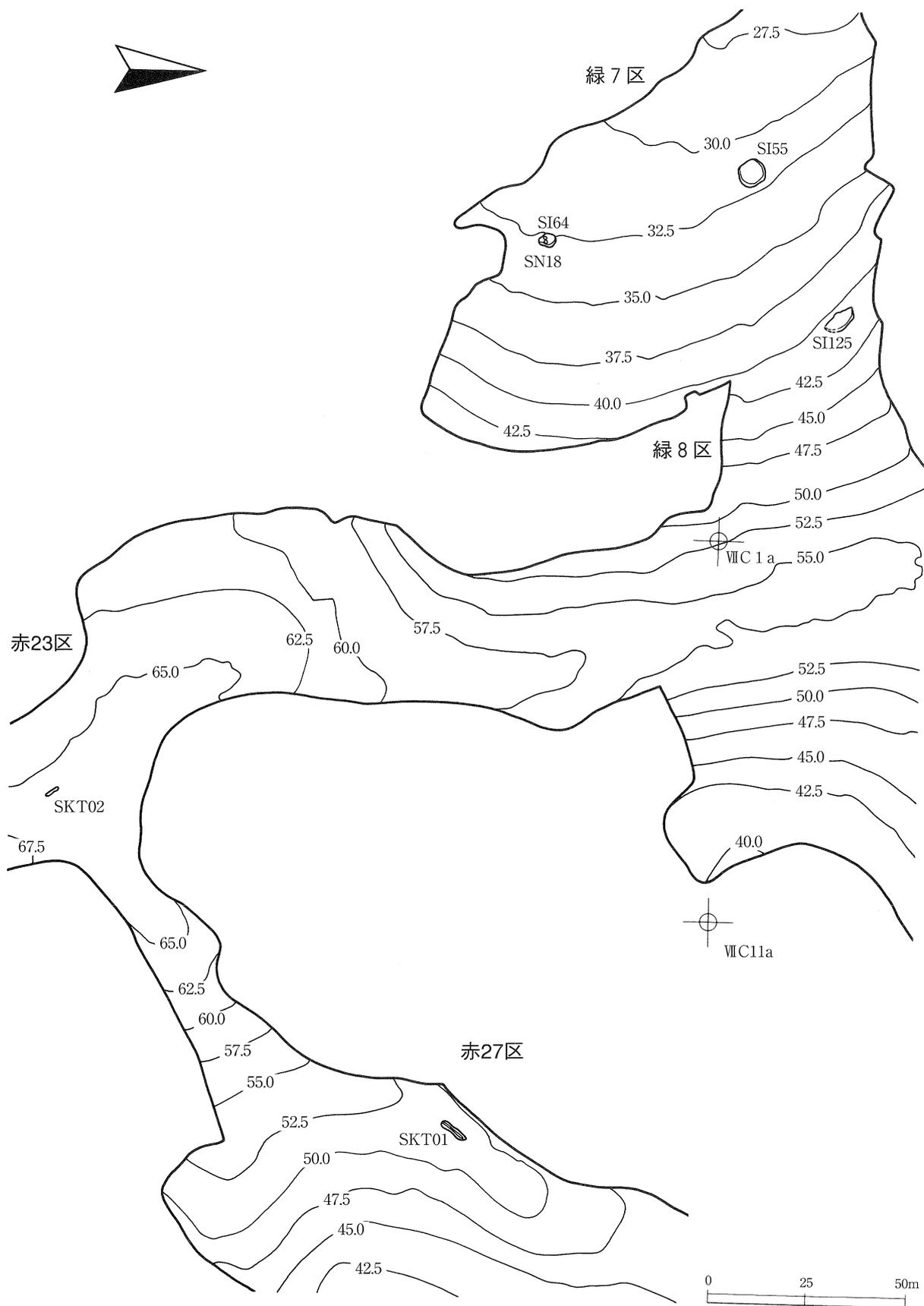
E区緑7区の北部東斜面、VII B-11 t グリッドに位置し、Ⅲ層及びⅣ層面で検出した。平面形・規模は西斜面側が崩落によりやや不明瞭ながら、直径約3.3mの略円形を呈し、床面積は約6.7㎡を測る。壁は消失した西壁を除いて外傾して立ち上がり、壁高は山側東部で最大約90cmから、西側に向かい低くなる。埋土は黒ボク系の10層に細分されるレンズ状の自然堆積だが、中央下位には廃棄焼土の広がり認められた。床面は概ね平坦で堅締、柱穴は炉の対極を頂点とする三角形に配置された3本を検出した。

炉は南西壁に接し、石囲部と石組の前庭部からなる所謂石囲複式炉の形態を呈し、主軸方位はS-30°-Eである。組石は15～30cmの垂角礫が使用され、石囲部は約50×30cm、前庭部は約50×60cmの長方形に配置され、いずれも床面より約10cmほど掘り窪められていた。掘り込みの底面では火熱の痕跡は認められなかったが、前庭部の埋土上位には廃棄焼土の広がり2ヶ所確認された。

遺物は埋土上位から地文のみの深鉢破片が少量と埋土下位から磨石2点と炉組石の石皿1点が出土した。時期は炉の形態と出土遺物から中期後葉と思われる。

S I 64竪穴住居跡 (第12図、遺物図版1、写真図版9・211)

E区緑7区の南部谷底、VII C-13 e グリッドに位置し、検出面はⅢ層で、検出時にはS N 18焼土遺構を確認しており本遺構が古い。平面形・規模は西斜面側が崩落により消失しており、全容は不明だが、遺存する部分から直径約2mほどの略円形を呈すると推定される。残存する床面積は約1.9㎡を測る。遺存する壁は外傾して立ち上がり、壁高は山側東部で最大約20cmから、西側に向かい低くなる。埋土は黒色土の単層であ



第11図 縄文時代の遺構配置図

る。床面は概ね平坦で堅締、柱穴は検出されなかった。

炉は本来的には床中央と思われる位置に土器埋設炉を検出した。埋設土器は底部付近が遺存するのみで詳細は不明である。焼土は西側は消失しているが、およそ土器を囲むように幅約5～15cmの不整な広がり、火熱により厚さ約3cmほどに赤色変化している。

遺物は炉埋設土器のほか床面から深鉢と思われる底部が2点出土した。時期は形態及び出土遺物から後期中葉と思われる。

S I 125 堅穴住居跡 (第13図、遺物図版2、写真図版9・212)

E区緑8区東斜面の調査区北端、ⅦB-15q・rグリッドに位置する。本遺構はS I 126及びS X I 09の重複する7棟の精査過程において最下位で確認したもので、検出面はV及びVI層である。平面形・規模は西斜面側の大半が崩落により消失し、また南側がS I 126に破壊され全容は不明だが、遺存する部分から直径約4mほどの略円形を呈すると推定される。残存する床面積は約3.1㎡を測る。遺存する壁は鋭角的に外傾して立ち上がり、壁高は山側東部で最大約70cmから、西側に向かい低くなる。埋土は基本的には黒色系土の単層で、壁際に崩落の黄褐色土が堆積した。床面はマサ土で概ね平坦で堅締、柱穴は不規則配置の5本を消失した西側斜面で検出した。

炉は本来的には床中央と思われる位置で石囲炉を検出した。組石は15～20cmの自然礫が径約50cmの略円形に配置され、炉内は床面より約10cmほど掘り窪められていた。掘り込みの底面は火熱により厚さ約7cmほどに赤色変化している。

遺物は炉組石の石皿1点が出土したのみである。時期は土器が出土していないため不確かではあるが、形態からは中期後葉から後期中葉と思われる。

S N 18 焼土遺構 (第13図、写真図版10)

E区緑7区の南部谷底、ⅦC-13eグリッドに位置し、S I 64の検出面で確認した。径10cm前後と20cm前後の2つの略円形の広がり、被熱により厚さ約3cmほどに赤色変化していた。

遺物は出土しなかったが、検出状況からS I 64とほぼ同時期と判断された。(小山内)

S K T 01 陥し穴 (第13図、写真図版10)

H区赤27(C)区南部の尾根頂部、ⅧC-16gグリッドに位置し、検出面はVI層面である。平面形は溝状を呈し、規模は開口部で長さ約3.4m、幅約50～60cm、底部では長さ約3.1m、幅約5～10cmを測る。長軸方向は北東-南西にあり、等高線と平行する。深さは90cm前後を測り、南西壁においては膨らみをもって立ち上がる。埋土は5層に細分され、いずれもVI層マサ土起源の流入土と思われる。底面は北東端に向かって下り勾配で、杭痕は認められない。

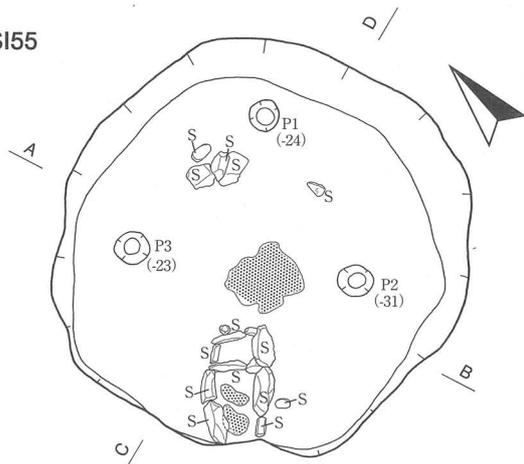
遺物は出土しなかった。(小林)

S K T 02 陥し穴 (第13図、写真図版10)

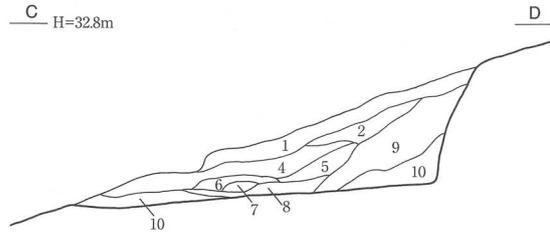
F区赤23区北半部、ⅧC7q・8rグリッドに位置する。本遺構はS I 72とS I 69精査中に両遺構の壁面で溝状の断面プランを見つけたもので、新旧関係は(新)S I 69・72→S X 44→(旧)S K T 02である。平面形は溝状を呈し、規模は残存部分で総長2.03m、幅は開口部で約31cm、底部で12cm、深さ57cmを測る。長軸方向は北-南にあり、等高線と平行する。埋土は褐色土系を主体とした自然堆積である。底面は概ね平坦でしまっており、逆茂木痕は確認されなかった。

遺物は出土しなかった。(島原)

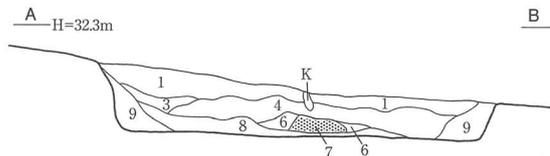
SI55



C H=32.8m



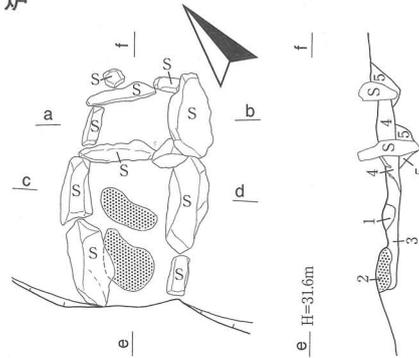
A H=32.3m



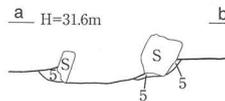
SI55

1. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性やや有、やや砂質
2. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性無、褐色土ブロック少量
3. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性無、褐色土ブロック少量
4. 10YR3/2 (黒褐) しまり有、粘性やや有、焼土粒・炭化物粒微量
5. 10YR3/2 (黒褐) しまり有、粘性無、炭化物・焼土粒微量
6. 7.5YR2/3 (極暗褐) しまり有、粘性無、焼土ブロック少量
7. 5YR3/6 (暗赤褐) しまり有、粘性無、廃棄焼土か?
8. 10YR2/3 (黒褐) しまり有、粘性無
9. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性無、褐色土ブロック多量
10. 10YR3/4 (暗褐) しまり極めて有、粘性無

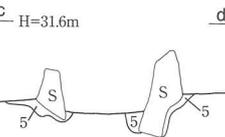
SI55 炉



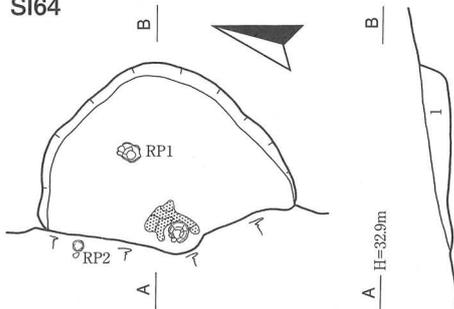
a H=31.6m



c H=31.6m



SI64

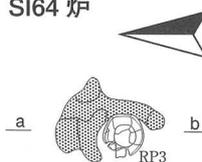


SI64

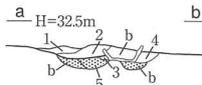
1. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有、炭少量混入



SI64 炉



a H=32.5m



SI55 炉

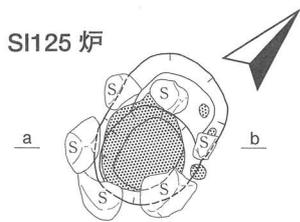
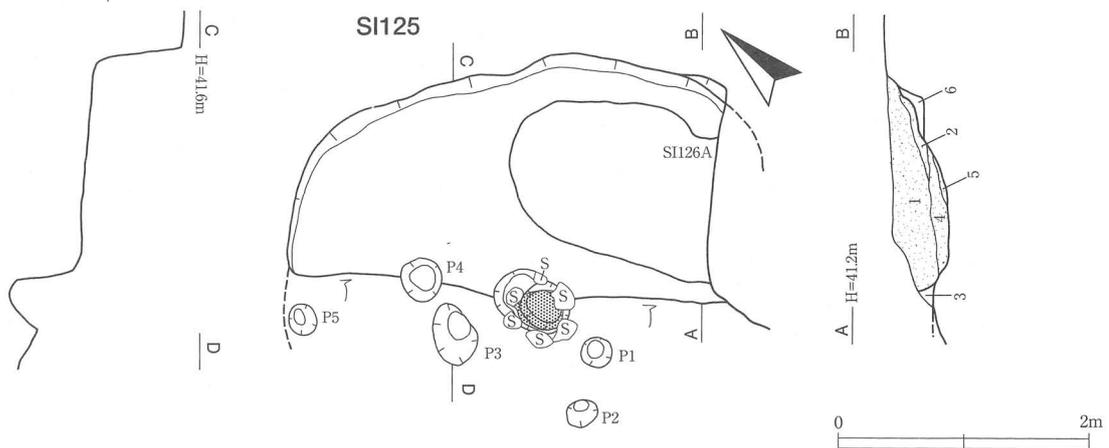
1. 7.5YR6/8 (橙) しまり強、粘性無、焼土
2. 7.5YR5/8 (明褐) しまり強、粘性無、焼土
3. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有
4. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有
5. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有、石の裏込め土

SI64 炉

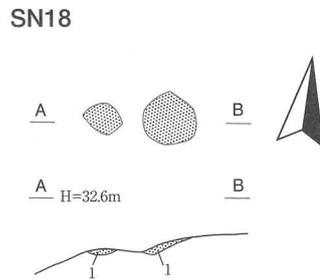
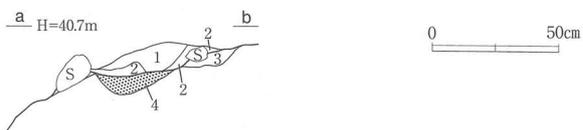
1. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性有
2. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有
焼土薄く混じる
3. 10YR3/1 (黒褐) しまりやや有、粘性有
4. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有
5. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有、炭少量
6. 5YR5/8 (明赤褐) しまりやや有、粘性弱



第12図 SI55・SI64竪穴住居跡

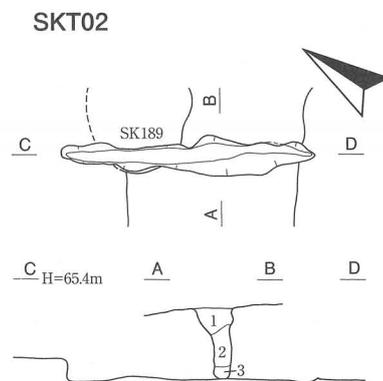
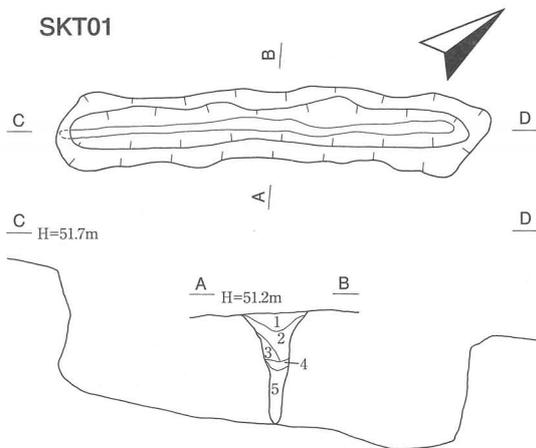


- SI125
1. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまり極有、粘性無
 2. 10YR4/6 (褐) しまり極有、粘性有
 3. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、砂質
 4. 10YR5/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、炭化物微量含む
 5. 10YR4/4 (褐) しまり極有、粘性有
 6. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり極有、粘性無
- } SI126A貼床



- SI125 炉
1. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性有、炭化物少量含む
 2. 10YR2/2 (黒褐) しまり有、粘性有、大きめの炭化物多量含む
 3. 10YR4/4 (褐) しまり極有、粘性無、炭化物少量含む
 4. 5YR4/6 (赤褐) 焼土

- SI18
1. 5YR4/8 (赤褐) しまり有、粘性やや有、焼土



- SKT01
1. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性欠、砂質土
 2. 2.5Y5/4 (黄褐) しまりやや有、粘性欠、砂質土
 3. 2.5Y7/4 (浅黄) しまりやや有、粘性無
 4. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり有、粘性無、マサ質土
 5. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性無、マサ質土

- SKT02
1. 10YR5/6 (黄褐) しまり非常に有、粘性少し有、黄褐土ブロックを少量
 2. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有
 3. 10YR5/8 (黄褐) しまり有、粘性やや有、炭・焼土を少量

第13図 SI125竪穴住居跡・SN18焼土遺構・SKT01・02陥し穴

第2節 古代の遺構 (付図)

古代の遺構は、H区の緑13・17区の谷部とD区の赤19区を除く全域で検出されている。竪穴住居跡等や土坑の多くは全域の尾根頂部から谷頭に分布し、工房跡の多くはE区の緑7～10区と赤25・27区の谷斜面部に比較的集中し、鉄生産関連炉跡は鍛練鍛冶炉の一部が尾根部や谷部の竪穴住居跡に伴うものもあるが、大半が工房跡に伴い、その周辺斜面部や遺構に廃滓場が形成されている。炭窯は鉄生産関連炉、特に製鉄炉や精錬鍛冶炉と考えられるものの周囲に比較的まとまって分布し、尾根上では廃棄された竪穴住居跡等を利用したものも多い。炉跡や焼土遺構についても工房跡や鉄生産関連炉跡の分布状況とおよそ一致する。

以下、各区ブロック毎に概況と検出した遺構について記述する。

1) D区の遺構

D区は、遺跡のほぼ中央、平成11年度調査区の西側C区谷部から東側に登った尾根を中心とする区域で、南東高位部から北西方向突端部に延びる最も大きな幹尾根と、この北東斜面側で北側方向に低くなる3本の枝尾根、及びこの間の洞状の谷部2ヶ所を含む範囲である。地形概況としては、幹尾根は北西方向の尾根先端部に向かい階段状に段差を持ち、緩急の傾斜を繰り返しながら順次高度を下げ、尾根筋の両側は急勾配の斜面となって谷底に至る。標高は調査区南端の最高位部(赤22区)から先端の平坦部(赤16区)までのおよそ300mの距離で約86mから50m前後と標高差が36mほどあり、尾根先端の平坦部から急傾斜で八木沢川に至る。また尾根部と谷部の平均的な比高は20～30mほどである。尾根筋の緩斜面部分は山側の馬の背状の狭い部分とやや平坦で広い部分が交互に連続し、この各区とした複数の段(赤16・20～22区)を繋ぐ部分は急傾斜となっており、平面的には尾根頂部は串団子状を呈する。尾根頂部の幅は、比較的平坦で広さをもつ部分でも8m以下、馬の背状の串部分では1m前後である。枝尾根はいずれも幹尾根から急勾配で一段下がって取り付いており、西側の枝尾根(赤15区)頂部はやや広いが明瞭な平坦面はなく、中央の枝尾根(赤17区)は北側に下る緩斜面となっている。東側の枝尾根(赤19区)は幅も狭く比較的急傾斜で北側に下り、遺構は存在しない。中央枝尾根の両側の洞状谷部は、西側(緑11区)は赤17区とあまり高低差のない緩斜面となっているが、東側(緑12区)ではやや勾配がきつく高低差もある。

検出された主な遺構は、竪穴住居跡25棟、竪穴状遺構4棟、鉄生産関連炉跡2基、炭窯21基、土坑17基、炉跡3基、焼土遺構8基などがある。分布の状況は、尾根頂部と斜面上部及び谷部にもあるが、多くは尾根頂部各区の平坦部や緩斜面部を中心に集中的である。幹尾根の急斜面にも一部立地しているが、ほとんどが西向きの斜面にある。枝尾根では急斜面には認められない。

①赤15・16区

赤15・16区は、D区尾根部の北西端部にあたる。赤15区は幹尾根の赤16区平坦部から一段約4mほど下がって北側に張り出した枝尾根である。明瞭な平坦面はないが、幅2～4mほどのやや広い馬の背状を呈し、中央肩部分が標高約48.5mと最も高く広い。赤16区は赤15区と二股になる北西側は八木沢川に至る急斜面、中央部は南北長約25m、東西幅約3～8m、標高約53mほどの平坦部を形成し、南側は馬の背状となって赤18区に急勾配の登りで続く。

遺構は、竪穴住居跡、竪穴状遺構、鉄生産関連炉跡、炭窯、土坑、焼土遺構などがある。分布状況としては、赤15区には竪穴住居跡3棟、炭窯1基、土坑6基、鉄生産関連炉跡1基、赤16区には竪穴住居跡6棟、竪穴状遺構2棟、炭窯5基、土坑7基、焼土遺構1基が位置し、赤15区では大半が南側の尾根基部に重複し

て集中し、尾根突端の谷頭には土坑3基のみが存在した。赤16区では中央平坦部とこの西側斜面に大半が位置し、平坦部の南東斜面には炭窯と土坑が各2基のみ存在する。(小山内)

S I 28A・B 竪穴住居跡、S X W17 鉄生産関連炉跡

(第14・15図、遺物図版4・77、写真図版11・12・213・268・311)

D区赤15区の南側、尾根上緩斜面部のVIC-8a グリッドに位置し、検出面はV及びVI層上面である。検出時には北壁から東壁にかけて膨らみをもち、この北東部分が炭化物を多く含む黒ボク系、南壁から西壁側がV層起源と思われる黄褐色系の方形基調のプランを確認し、人為堆積後に自然流入した1棟と考えて精査を開始したが、精査過程において北壁の膨らみはS W49炭窯、北東部分の黒色土の範囲がS I 28A、全体的な下位の部分がS I 28B、S X W17はS I 28Bに伴うものと判明し、さらにS I 28Bの精査中にS K107・116土坑を、また平行して精査を進めていたS I 29の床面でS I 28Bのカマド煙出しピットを確認したことから、新旧関係は(新)S W49→S I 28A→S I 29・S K107・116→S I 28B・S X W17(古)と考えられる。

S I 28Aは、南壁と西壁を当初の判断から掘り過ぎたため消失してしまったが、ベルト断面の観察から平面形・規模は一辺約3.3mの隅丸略方形と推定され、主軸方位はS-70°-E、床面積は推定約9㎡である。壁は下位が鋭角的に、上位が開き気味に外傾して立ち上がり、壁高は約50cmを測る。埋土は13層に細分されるが、ほとんどがS W49の操業による炭化物と褐色土ブロックの多い黒色系土で、壁際の壁崩落の褐色土と大別される。床面は平坦で堅締、東壁側を除くS I 28Bと重複する部分は貼床が施されていた。柱穴等の床面施設は認められなかった。

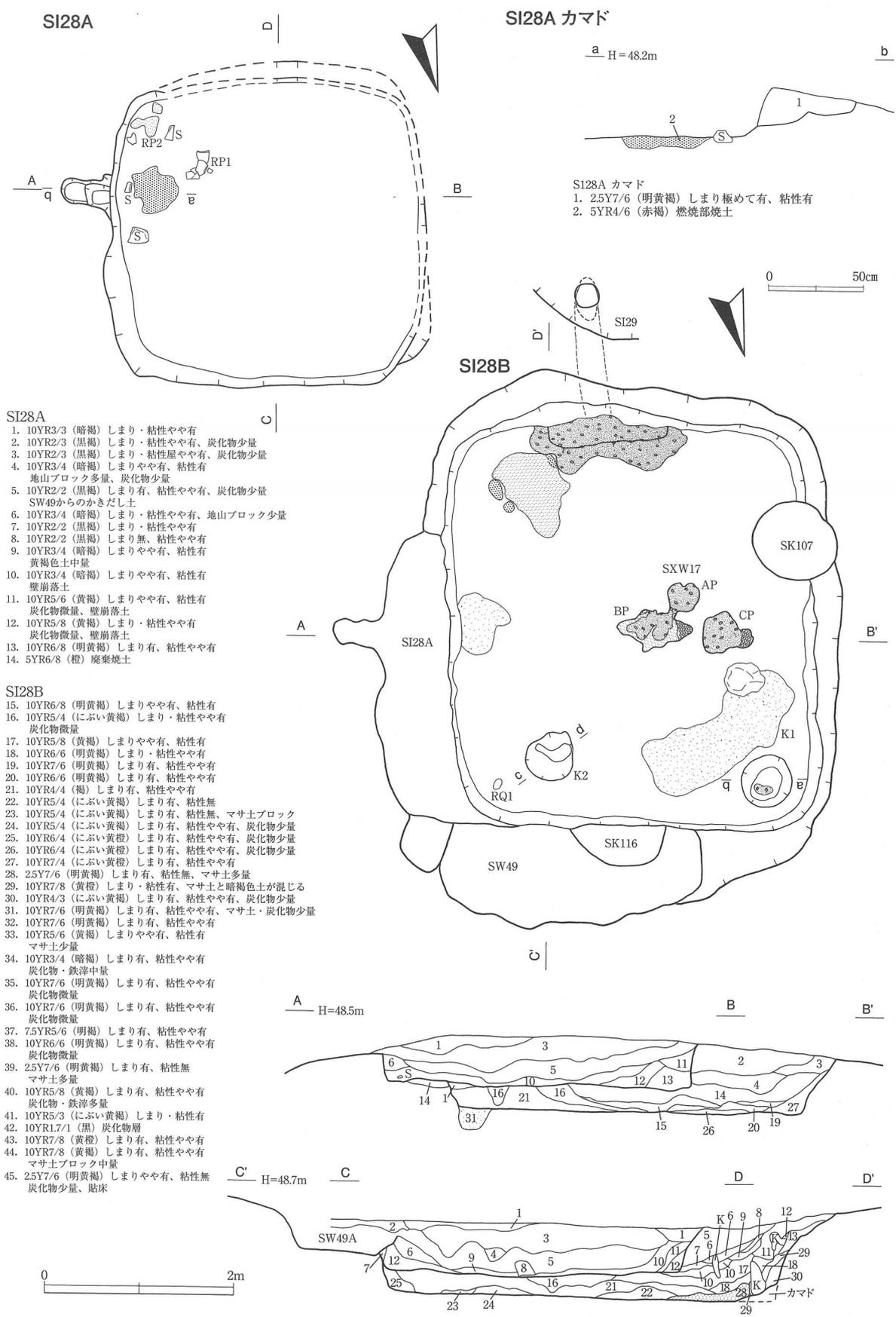
カマドは東壁の中央やや南寄りに付設されていたが、全体的に遺存状況は悪く、本体部では燃焼部に50cmほどの不整な広がり、火熱により厚さ7cmほどに赤色変化した焼土が確認されたにとどまり、煙道は奥行き約50cm、幅約25cmの掘り込み式と思われる外側に緩く上る勾配の溝状を呈し、煙だしピットは不明瞭であった。

遺物はカマド周辺の床面から土師器の甕形土器の破片が少量と出土量は極めて少ない。

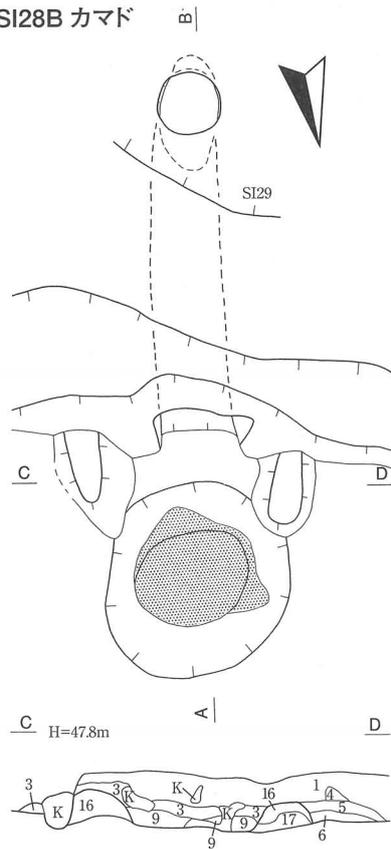
S I 28Bは、北壁と東壁の上位がS W49とS I 28Aによって破壊されているが、遺存状態は良好で、平面形は長軸が南北方向の隅丸長方形を呈し、規模は長辺約4.7m、短辺約4.2mを測る。主軸方位はS-15°-W、床面積は約15.1㎡である。壁は外傾して立ち上がり、上位がより開き、壁高は60~80cmを測る。埋土はおよそ30層に細分されるが、全体的にマサ土ブロックが含まれる黄褐色系土で、周辺遺構との関連状況からS I 29構築時の掘削排土による人為堆積と考えられる。床面は平坦で堅締、北西隅付近と東壁際の一部にのみ貼床が施されていた。床面施設としては北東及び北西隅に各1基の土坑(K1・2)と中央西よりにS X W17(BP)とこれに付属すると考えられる小土坑(A・C P)が検出された。K1の平面形・規模は開口部径約50cmの円形で、深さ約25cmの平底鍋形を呈し、埋土は黄褐色系の人為的堆積である。K2の平面形・規模は開口部径約50cmの略円形で、深さ約20cmの歪な丸底鍋形を呈し、埋土は黄褐色系の人為的堆積である。S X W17については後述する。

カマドは南壁の中央やや東寄りに付設され、本体部は部分的に袖が残るのみで、袖部は架構・芯材としての石や土器などは認められず、黄褐色土で構築されていた。燃焼部は径約70cm、深さ約10cmほどの略円形に掘り窪められており、底部では火熱により50cmほどの不整な広がり、厚さ5cmほどに赤色変化した焼土が確認された。煙道は奥行き約150cm、径約25cmの削り貫き式で、外側に向かって緩い下り勾配である。煙出しピットは径約25cmの略円形で残存する深さは約70cmを測る。

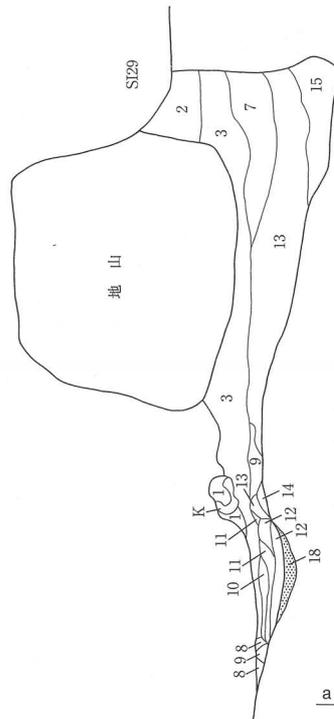
S X W17は、当初、S I 28Bの掘り下げ中に中央付近の床面近くで白色系粘土の小マウンドと1cm大以



SI28B カマド



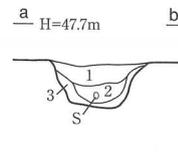
B



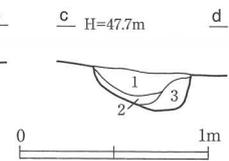
SI28 カマド

1. 10YR6/8 (明黄褐) しまり極めて有
粘性無、砂質、人為的堆積
2. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性やや有
3. 10YR7/6 (明黄褐) しまり・粘性やや有
4. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
5. 10YR5/8 (黄褐) しまりやや有、粘性有
焼土ブロック混入
6. 10YR6/6 (明黄褐) しまり無、粘性有
焼土ブロック混入
7. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有
地山土混入
8. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性有
炭化物微量
9. 7.5YR5/8 (明褐) しまり極めて有
粘性有
10. 10YR6/8 (明黄褐) しまり極めて有
粘性有
11. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性有
炭化物微量
12. 5YR5/8 (明赤褐) しまり・粘性有
13. 5YR5/6 (明赤褐) しまり・粘性有
14. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり・粘性有
15. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり弱
粘性やや有、マサ土多量
16. 10YR5/8 (黄褐)
しまり極めて有、粘性有
17. 10YR8/4 (浅黄橙) しまり有、粘性弱
18. 5YR6/8 (橙) 燃焼部焼土

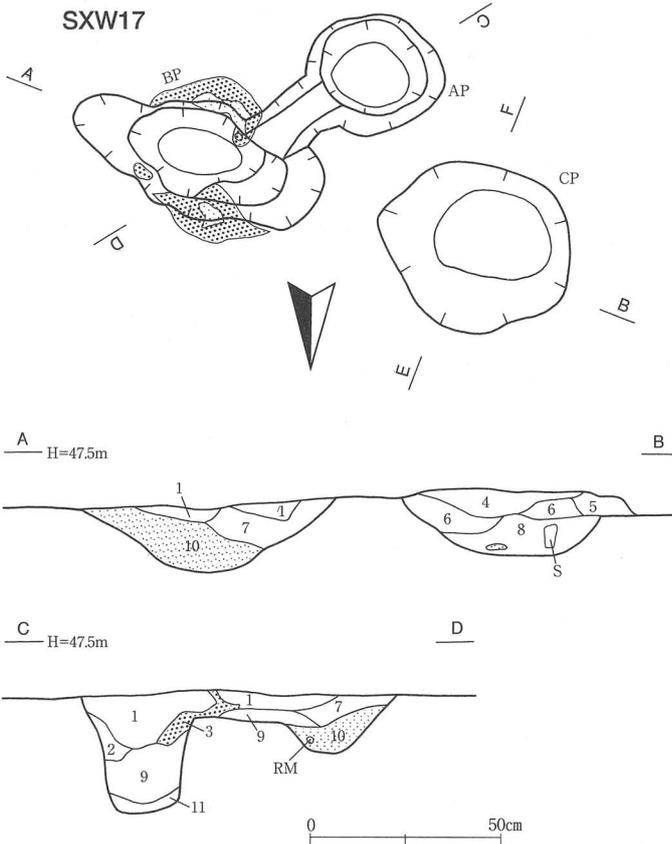
SI28B K1



SI28B K2



SXW17



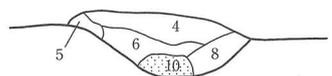
SI28B K1

1. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性有、炭化物微量
2. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性やや有
炭化物微量
3. 10YR7/6 (明黄褐) しまり・粘性やや有
炭化物微量

SI28B K2

1. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性やや有
炭化物・焼土粒微量
2. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり・粘性やや有
3. 10YR8/4 (浅黄橙) しまり・粘性やや有
マサ土混入

E H=47.5m



SXW17

1. 10YR6/8 (明黄褐) しまり極めて有、粘性有
焼土ブロック少量、人為的堆積
2. 10YR5/8 (黄褐) しまりやや有、粘性有、炭化物微量
3. 5YR5/8 (明赤褐) 焼土ブロック多量
4. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、炭化物微量
5. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有、鉄滓多量・炭化物少量
6. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性有、炭化物・焼土粒多量
7. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性やや有、炭化物・焼土多量
8. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、炭化物・焼土粒多量
9. 10YR1.7/1 (黒) 炭化物層
10. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性有
炭化物・焼土ブロック多量
11. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、マサ土

第15図 SI28A・B竪穴住居跡・SXW17鉄生産関連炉跡(2)

下の粒状の鉄滓を多量に確認したもので、床面まで掘り下げたところ S I 28B と同様の黄褐色系土の人為堆積と思われる A P、A P と連結してプラン縁辺部には炭化物を多量に含む B P、小マウンド下に粒状鉄滓を多量に含む C P の 3 基の不整なプランを検出したものである。状況から鉄生産等に関連する遺構と考えられ、精査は埋土を回収しながら行うこととした。精査の結果、サンプル土から鍛造剥片が採集されたこともあり、B P が鍛練鍛冶炉跡で、A・C P は付属する小土坑と判断された。

B P 炉跡の平面形・規模は東西長軸で開口部は約 70×30cm、底部は約 20×10cm の楕円形を呈し、南西部には A P と連結する長さ約 35cm、幅約 15cm、深さ約 7cm の B P に向かって緩い下り勾配の溝跡が取り付く。断面形は中央部が深さ約 15cm と最も深い葉研状を呈し、埋土は上位が人為的堆積の黄褐色系、下位が炭化物を多量に含む黒色土に大別できる。南北両側壁の中央縁辺上位は火熱により赤色変化しており、溝跡と繋がる部分では弱く還元していた。

A P 小土坑は B P 炉跡の南東側に溝跡で連結するもので、平面形・規模は径約 35cm の略円形、断面形は深さ 30cm のバケツ状を呈し、埋土は B P と同様である。

C P 小土坑は B P 炉跡の西側に隣接し、平面形・規模は径約 50cm の略円形、断面形は丸底鍋形を呈し、埋土は白色粘土下の西側に粒状鉄滓を多く含む黄褐色土、中位は褐色、下位が黒ボクで中・下位とも炭化物と焼土粒を多量に含む。さて、鍛練鍛冶炉 B P はともかくとして、A・C P 小土坑であるが、E 区緑 9 区において検出した鉄砧石の遺存する最良のセット関係の S X W 30 との対比から、A・B P の連結溝跡が羽口の装着痕跡、A P は鞆に関連するもの、C P は鉄砧石の設置穴と推定される。

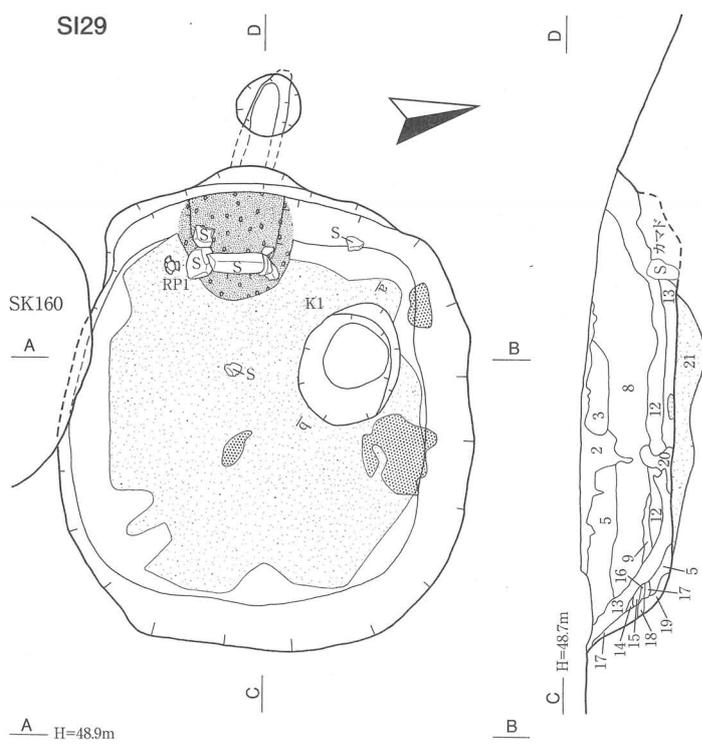
遺物は床面から土師器の坏形土器 1 点 (3)、磨石 1 点 (1) とほとんど埋土中出土の甕形土器片が少量、羽口片が 13 点、S X W 17 付近及び A～C P の埋土から鍛冶滓と鍛造剥片が少量である。

S I 29 竪穴住居跡 (第 16 図、遺物図版 4・117、写真図版 13・213・300)

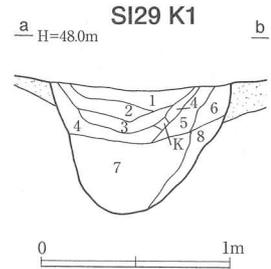
D 区赤 15 区の南側、尾根上緩斜面部の V C - 7・8 b グリッドに位置し、検出面は V 層上面である。S I 28B 及び S K 160 と重複し、断面の観察と検出状況から新旧関係は (新) S K 160→S I 29→S I 28B となる。平面形・規模は南壁の西側が S K 160 に破壊されているが、一辺約 3.5m の隅丸略方形を呈すると推定され、主軸方位は N - 80° - W、床面積は約 7.3m² を測る。壁はかなり外傾して立ち上がり、壁高は約 70cm を測る。埋土はおおよそ 20 層に細分されるが、全体的にマサ土が混じる黄褐色系土で、下位には比較的大きめな自然木を含む炭化物と焼土が廃棄されていた。状況から S K 160 の掘削排土と高位の赤 16 区の遺構に関連した人為堆積と考えられる。床面は全体的に貼床とされ、平坦で堅締であった。床面施設としては北西隅付近に平面形・規模が径約 80×100cm の略円形で、深さ約 70cm のバケツ形の土坑 1 基 (K 1) を検出した。埋土はやはり全体的に黄褐色土系の人為堆積と思われる。

カマドは西壁のほぼ中央に付設され、本体天井部が半壊して崩落しているものの遺存状態は良好である。本体部は、袖部には芯材として長さ 20cm ほどの 4 個と、天井部の架構には長さ 45cm ほどの垂角礫 1 個を組み、黄褐色粘土で構築されていた。煙道は奥行き約 130cm、径約 30cm の削り貫き式で、外側に向かって緩い下り勾配である。煙だしピットは径約 50cm の略円形で深さ約 50cm を測る。燃焼部はおおよそ平坦で火熱により 20cm ほどの略円形で、厚さ 2cm ほどに赤色変化した焼土が確認された。煙道は奥行き約 130cm、径約 30cm の削り貫き式で、外側に向かい緩い下り勾配である。煙出しピットは径約 50cm の略円形で深さ約 50cm を測る。

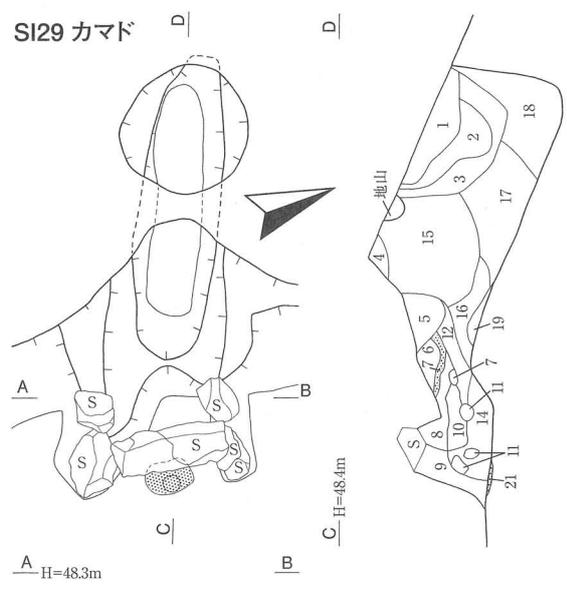
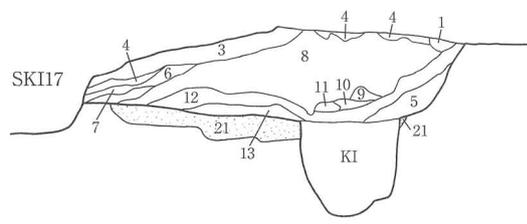
遺物は、土師器片がカマド内と周辺及び K 1 からほぼ 1 個体分が出土し、これらと S I 34 埋土出土が接合して復元できた甕形土器 1 点 (4) と、埋土中から羽口片 5 点、鉄製品は両端の欠損した刀子 1 点 (1) と釘



- SI29
- 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性やや有
 - 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性やや有
褐色土ブロック多量、炭化物少量
 - 10YR7/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有
 - 10YR7/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有
マサ土微量混入
 - 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有
炭化物微量、廃棄物焼土混入
 - 10YR7/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有
マサ土少量
 - 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有
 - 10YR7/6 (明黄褐) しまり有、粘性無
マサ土多量
 - 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
 - 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無
 - 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
 - 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性やや有
廃棄炭化物多量
 - 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有
部分的に大きな炭化材
 - 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有
明黄褐色土少量
 - 10YR7/6 (明黄褐) 砂質、しまり有、粘性無
 - 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性やや有
 - 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有
 - 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有、
マサ土・黄褐色土混入、壁の崩落土
 - 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有
 - 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性無
 - 10YR6/8 (明黄褐) 砂質、しまり極めて有
粘性無、貼床



- SI29 K1
- 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性有
炭化物ブロック中量
 - 10YR6/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性無、炭化物少量
 - 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性やや有
黄褐色土ブロック・炭化物・焼土粒微量
 - 10YR6/8 (明黄褐) しまり有、粘性無
 - 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性やや有、炭化物少量
 - 10YR7/6 (明黄褐) しまり有、粘性無、マサ土ブロック
 - 10YR5/8 (黄褐) しまり無、粘性やや有、人為的堆積
 - 10YR7/6 (明黄褐) しまり有、粘性無、マサ土全体に



- SI29 カマド
- 10YR3/4 (暗褐) しまり極めて有、粘性有
明黄褐色土が全体に多量、人為的堆積
 - 10YR3/4 (暗褐) しまり極めて有、粘性やや有
明黄褐色土が全体に中量、人為的堆積
 - 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性やや有
 - 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性やや有
 - 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
 - 10YR7/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性やや有
 - 7.5YR5/6 (明褐) しまり・粘性有、焼土少量
 - 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有、焼土粒若干
 - 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有、
炭化物・焼土少量
 - 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性やや有
 - 5YR5/8 (明赤褐) しまり有、粘性やや有
 - 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有
 - 10YR7/8 (黄橙) しまり極めて有、粘性有、
 - 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性やや有
 - 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性やや有
 - 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有
 - 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有
 - 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有
 - 7.5YR4/4 (褐) しまり・粘性有、炭化物・焼土ブロック
 - 10YR7/6 (明黄褐) しまり有、粘性無、袖の構築土
 - 7.5YR4/6 (褐) しまり有、粘性やや有、燃焼部焼土
- カマド
構築土
崩落

第16図 SI29竪穴住居跡

や刀子類と思われる破損品3点、そして少量の鍛冶滓が出土した。

S I 33 竪穴住居跡（第17図、遺物図版4・77・117、写真図版14・213・268・300）

D区赤16区中央、尾根上平坦部のVIC-8iグリッドに位置し、検出面はV・VI層上面である。S I 35A・Bと重複し、当初煙出しピットと思われたものが精査過程でS I 35の柱穴と判明したため、本遺構が古い。平面形は長軸が北西-南東方向の隅丸長方形を呈し、規模は長辺約4.4m、短辺約3.5mを測る。主軸方位はN-40°-W、床面積は約13.6㎡である。壁は外傾して立ち上がり、壁高は掘り込みが浅く約10~20cmを測る。埋土は基本的には人為的堆積と思われる黄褐色系土の単層である。床面は平坦で堅締で、カマドのある北西壁側を除く3辺に沿って幅約1mのコの字状に貼床とされていた。床面施設としては柱穴6基が検出され、配置・規模からP1~4が主柱穴、P5・6が副柱穴と思われる。また中央南東よりでは弱い焼土化が認められたが、鍛造剥片等も検出されず、状況からは炉跡との判断は難しい。

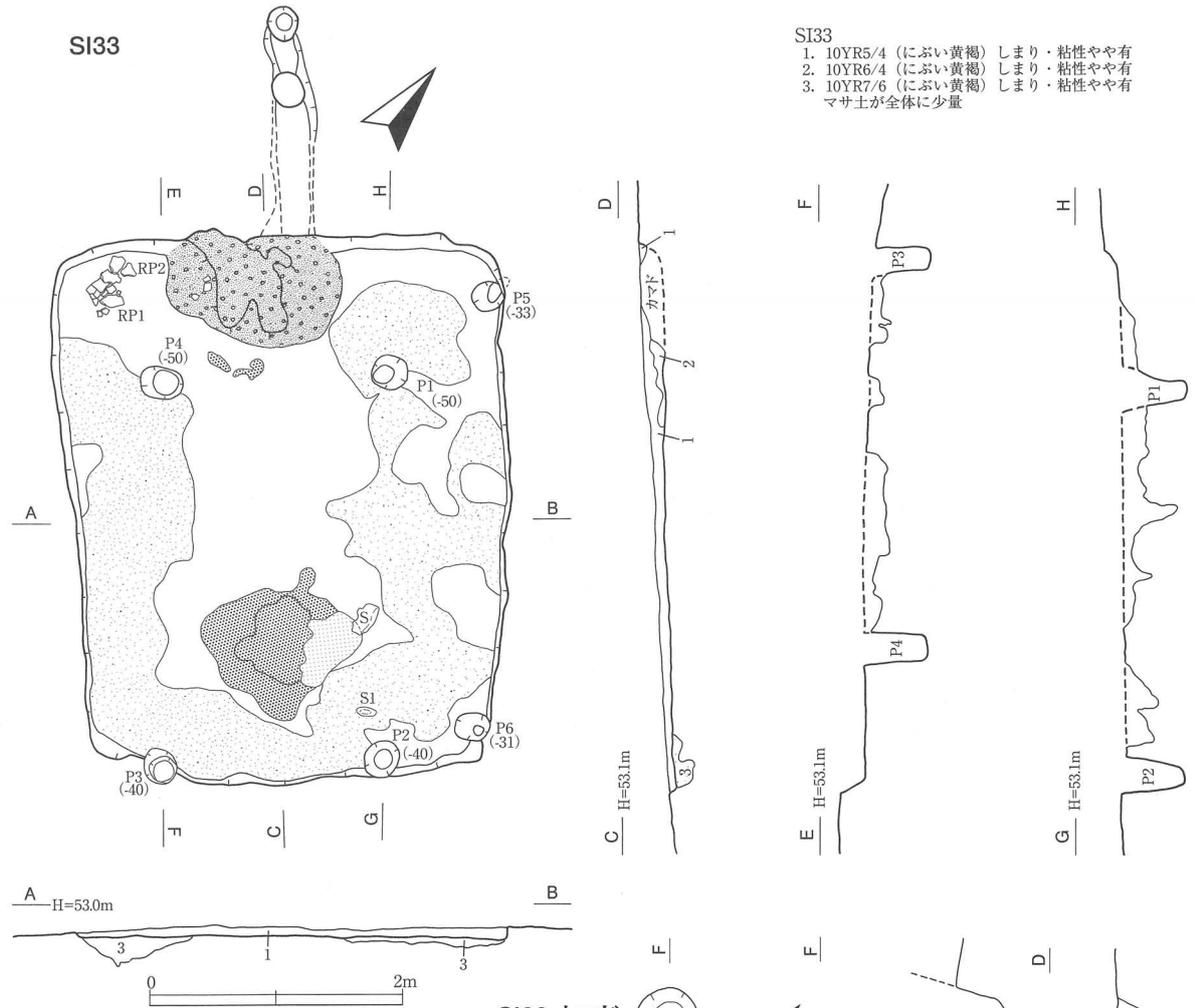
カマドは北西壁のほぼ中央に付設され、本体天井部は消失していたが、袖部の遺存状態は比較的良好で、架構・芯材として石や土器などは認められず、黄褐色土で構築されていた。燃焼部はおよそ平坦だが、煙道側が幾分高い階段状を呈し、低い側に火熱により40cmほどの略円形で、厚さ5cmほどに赤色変化した焼土が確認された。煙道は奥行き約180cm、径約35cmの刳り貫き式で、外側に向かい下り勾配である。S I 35に破壊された煙出しピットは、残存部分では径約25cmの略円形で深さは約20cmを測る。

遺物は、床面で土師器片が西隅からおよそ1個体分が出土し、復元できた甕形土器1点(5)と、磨石1点、埋土中から角棒状の鉄製品が1点(2)と鍛冶滓が少量出土した。

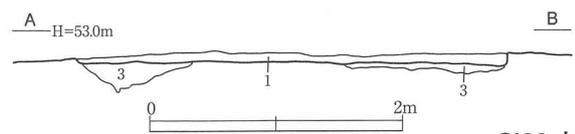
S I 34 竪穴住居跡（第18・19図、遺物図版4・5・60・77~79・117、写真図版15・16・213・249・268~270・300）

D区赤16区中央、尾根上平坦部のVIC-6・7fグリッドに位置し、検出面はV・VI層上面である。SW52・SK117・SN13と重複するが、当初はSW52はカマド煙道と考え、1棟の住居跡として精査を行っていたが、精査過程で炭窯と判明し、また埋土中でSK117・SN13を確認したもので、断面の観察と検出状況から新旧関係は(新)SW52→SK117・SN13→S I 34(古)と考えられる。平面形・規模は一辺約4.7mの隅丸方形を呈する。主軸方位はN-30°-W、床面積は17.8㎡である。壁は鋭角的に外傾して立ち上がり、壁高は約40~30cmを測る。埋土はおよそ20層に細分されるが、上位黄褐色系の人為的堆積、中位のSW52の作業によると考えられる炭化物を比較的多く含む褐色土系の人為堆積、下位には完形土器や多量の人頭大の礫が残り、建築材であったと思われる炭化材を含む炭化物層と大別される。炭化材は分析の結果、クリが多く一部ナラも混じると判明した。床面は平坦で堅締、カマド部分を除く壁際は幅1mぐらいで貼床とされていた。床面中央は焼土の広がりや認められるなど状況から焼失住居と思われる。床面施設としては土坑9基(K1~9)と地床炉1基、柱穴6基とカマドのある北西壁際で壁溝が検出されたが、K6~9は貼床を除去後に土坑と判断したもので、また規模・形態からK2~7・9は柱穴の可能性も考えられるが、配置状況を見ると判断は付きかねる。K1は開口部90×60cmの略楕円形で、深さ約30cmのおよそ鍋形、K2・3・5は開口部径約50cm、K4は径約35cmの円形で、深さはK2~4は約30cm、K5は約50cmの平鍋形を呈し、埋土はいずれもマサ土を多く含む黄褐色系土が堆積する。K6は開口部径約70cmの略円形で深さ約30cmを測るが、南側には径・深さとも約40cmの柱穴が伴う。K7・9は開口部60×30cmの楕円形で、深さは約35cm、K8は径約60cmの略円形で、深さ約25cmの平鍋形を呈する。地床炉はカマドの南西横に位置し、50cmほどの広がりや厚さ約2cmほどが火熱により赤色変化していたものである。壁溝は幅・深さとも約10cmほどを測る。

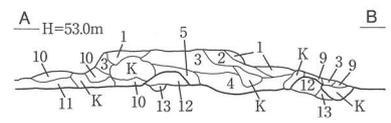
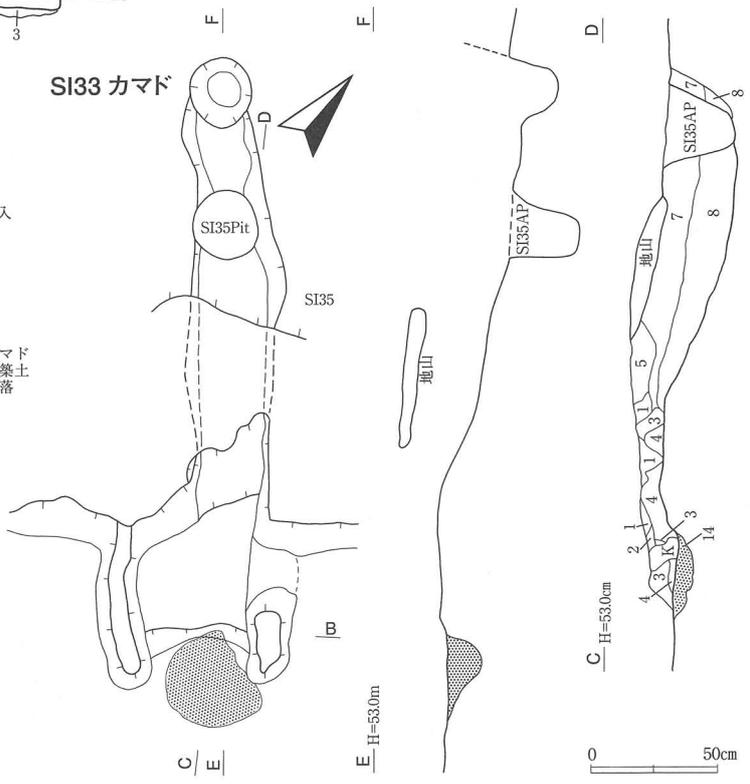
カマドは北西壁のやや北寄りに付設され、全体的に上位がSW52に破壊されているが、本体部は天井が崩



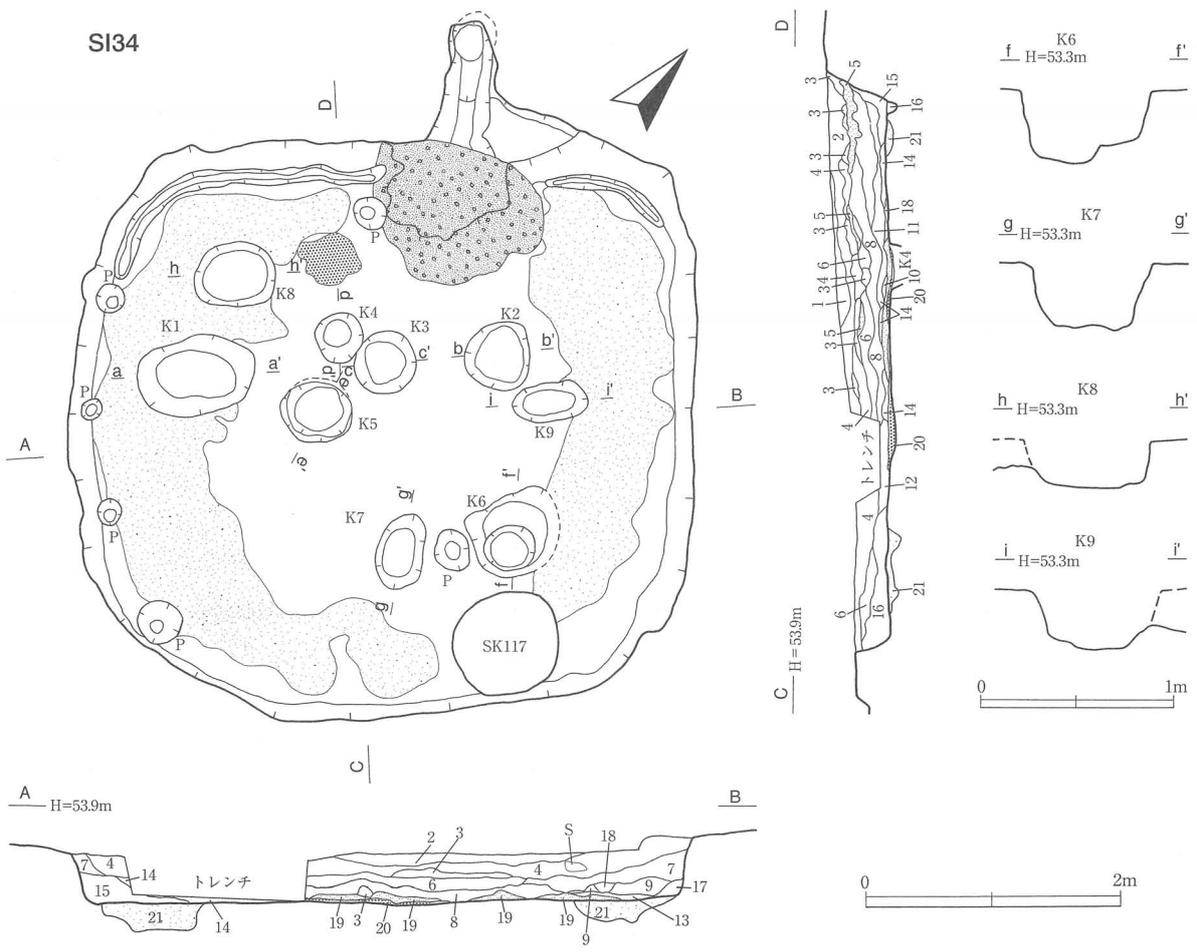
- SI33
- 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
 - 10YR6/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
 - 10YR7/6 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
- マサ土が全体に少量



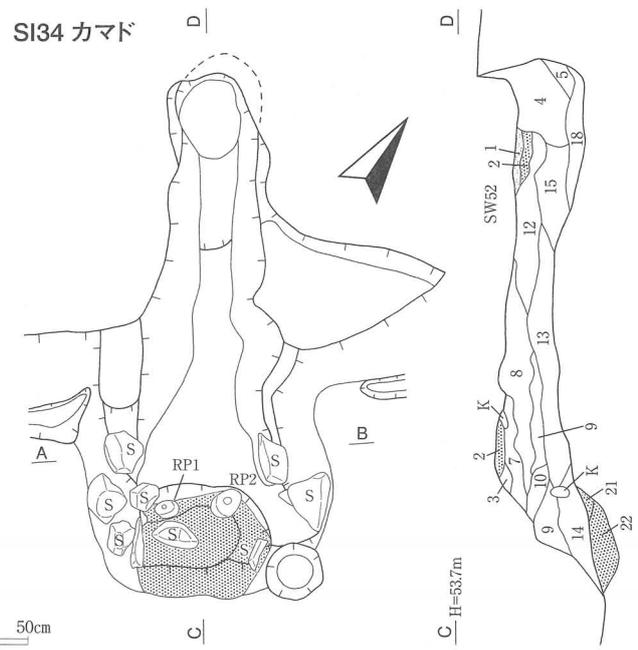
- SI33 カマド
- 2.5Y7/6 (明黄褐) しまり有、粘性無、砂質
 - 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性無、砂質
 - 2.5Y7/4 (浅黄) しまり極めて有、粘性無、砂質
 - 7.5YR5/6 (明黄) しまり有、粘性やや有、焼土混入
 - 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性やや有
 - 7.5YR5/4 (にぶい褐) しまりやや有、粘性無、炭化物少量
 - 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無、砂質、炭化物微量
 - 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有
 - 7.5YR6/8 (橙) しまり・粘性やや有、焼土微量
 - 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性有
 - 7.5YR5/8 (明褐) しまり極めて有、粘性有、炭化物微量
 - 7.5YR5/8 (明褐) しまり極めて有、粘性有、カマド構築土
 - 10YR7/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性有、マサ土
 - 5YR4/8 (赤褐) 燃焼部焼土



第17図 SI33竪穴住居跡



- SI34
1. 10YR5/8 (黄褐) しまりやや有、粘性無、砂質
炭化物微量
 2. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性有
 3. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり極めて有、粘性やや有
 4. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性やや有
 5. 10YR3/2 (黒褐) しまり極めて有、粘性やや有
炭化物中量
 6. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性有
 7. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまりやや欠、粘性有、砂質
炭化物微量
 8. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性有、炭化物少量
 9. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまりやや欠、粘性有、砂質
炭化物微量
 10. 2.5Y4/6 (オリーブ褐) しまり・粘性有、炭化物少量
 11. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性やや有
炭化物微量
 12. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有、炭化物少量
 13. 7.5YR4/6 (褐) 廃棄焼土
 14. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性有、炭化物少量
 15. 2.5Y7/4 (浅黄) しまりやや有、粘性有、砂質
 16. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり極めて有、粘性有
砂質、炭化物微量
 17. 2.5Y7/6 (明黄褐) しまり・粘性無
 18. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有、炭化物少量
 19. 10YR1/1 (黒) 炭化物層
 20. 7.5YR4/6 (褐) しまり有、粘性無
 21. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり極めて有、粘性無
マサ土多量、貼床

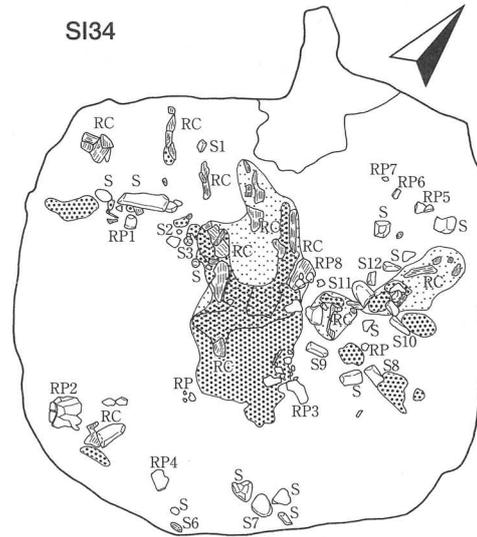


第18図 SI34竪穴住居跡(1)

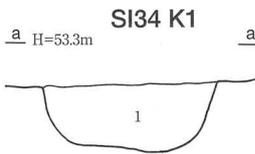
SI34 カマド

1. 10YR17/1 (黒) 炭化物層
2. 5YR5/8 (明赤褐) SW52の底面焼土
3. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有、炭化物少量
4. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、黄褐色土ブロック少量
5. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有
6. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性有、明黄褐色ブロック混入
7. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・極めて有、粘性無
炭化物微量・焼土ブロック多量・マサ土少量
8. 2.5Y7/3 (浅黄) しまり極めて有、粘性無
9. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無、炭化物微量
10. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有
11. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有、炭化物微量
12. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
煙道天井部 (V層) の崩落
13. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性有・炭化物微量
14. 7.5YR4/4 (褐) しまり・粘性有
15. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有、炭化物少量
焼土ブロック微量
16. 7.5YR5/8 (明褐) しまり有、粘性無、焼土
17. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有、炭化物ブロック
18. 2.5Y8/4 (淡黄) しまり極めて有、粘性無
19. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性有
20. 2.5Y7/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性有、袖石の裏込め土
21. 5YR5/8 (明赤褐) 燃焼部焼土
22. 5YR6/4 (にぶい赤褐) 燃焼部焼土

SI34

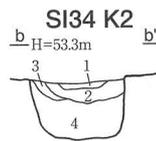


0 2m



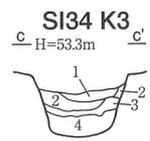
SI34 K1

1. 10YR5/8 (黄褐) しまりやや欠、粘性無
砂質、炭化物上位に少量・全体に微量



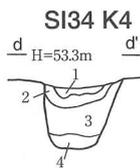
SI34 K2

1. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
砂質炭化物微量
2. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無、砂質
炭化物少量
3. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無、砂質
4. 7.5YR5/8 (明褐) しまり・粘性有、廃棄焼土



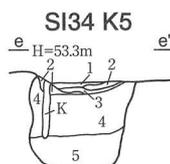
SI34 K3

1. 7.5YR3/2 (黒褐) しまりやや欠、粘性やや有
炭化物少量、焼土霜降り状に広がる
2. 2.5Y7/3 (浅黄) しまり有、粘性無、砂質
マサ土
3. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性無、砂質
4. 2.5Y8/4 (淡黄) しまり有、粘性無、砂質
マサ土



SI34 K4

1. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
マサ土・炭化物微量
2. 7.5YR4/6 (褐) しまり有、粘性無
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質
4. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、砂質



SI34 K5

1. 10YR4/4 (褐) しまり無、粘性有、炭化物多量
2. 7.5YR4/6 (褐) しまり有、粘性無
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質
4. 2.5Y7/3 (浅黄) しまり有、粘性無、マサ土
5. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、砂質

0 1m

第19図 SI34竪穴住居跡(2)

落しているものの遺存状態は良好である。袖部には芯材として20～30cm大の石が設置され、黄褐色粘土で構築されていた。燃烧部は床面よりも一段高く、煙道側がさらに高い階段状を呈し、低い側の段に火熱により50×40cmほどの広がり、厚さ10cmほどに赤色変化した焼土が確認された。焼土の煙道側端には羽口を転用した支脚が並列で2個遺存した。煙道は残存状況から、奥行き約140cm、幅約35cmの掘り込み式と推定され、およそ水平ではあるが、先端部が外側に向かい緩い下り勾配となっている。煙出しピットは残存部分では径約30cm、深さは約40cmを測る。

遺物は埋土下層及び床面から、土師器の甕形土器がおおよそ7個体分と坏形土器1点(13)、須恵器の壺形土器片3点が出土し、出土状況としては完形個体のR P1(8)以外はまとまりを示すが、すべて破砕した状態での出土で、形状をおおよそ把握できた復元個体は土師器の甕形土器4点(7・9・10・11)である。また埋土中からは羽口片7点、砥石8点、磨石13点、要石1点(3)、K2から羽口1点(3)、カマドから支脚転用の羽口3点(1・2・4)、鉄製品が刀子1点(3)、鉄鐸1点(4)と本遺跡の遺構としては比較的多く出土した。この他鍛冶滓がカマドと埋土上位からわずかに出土している。

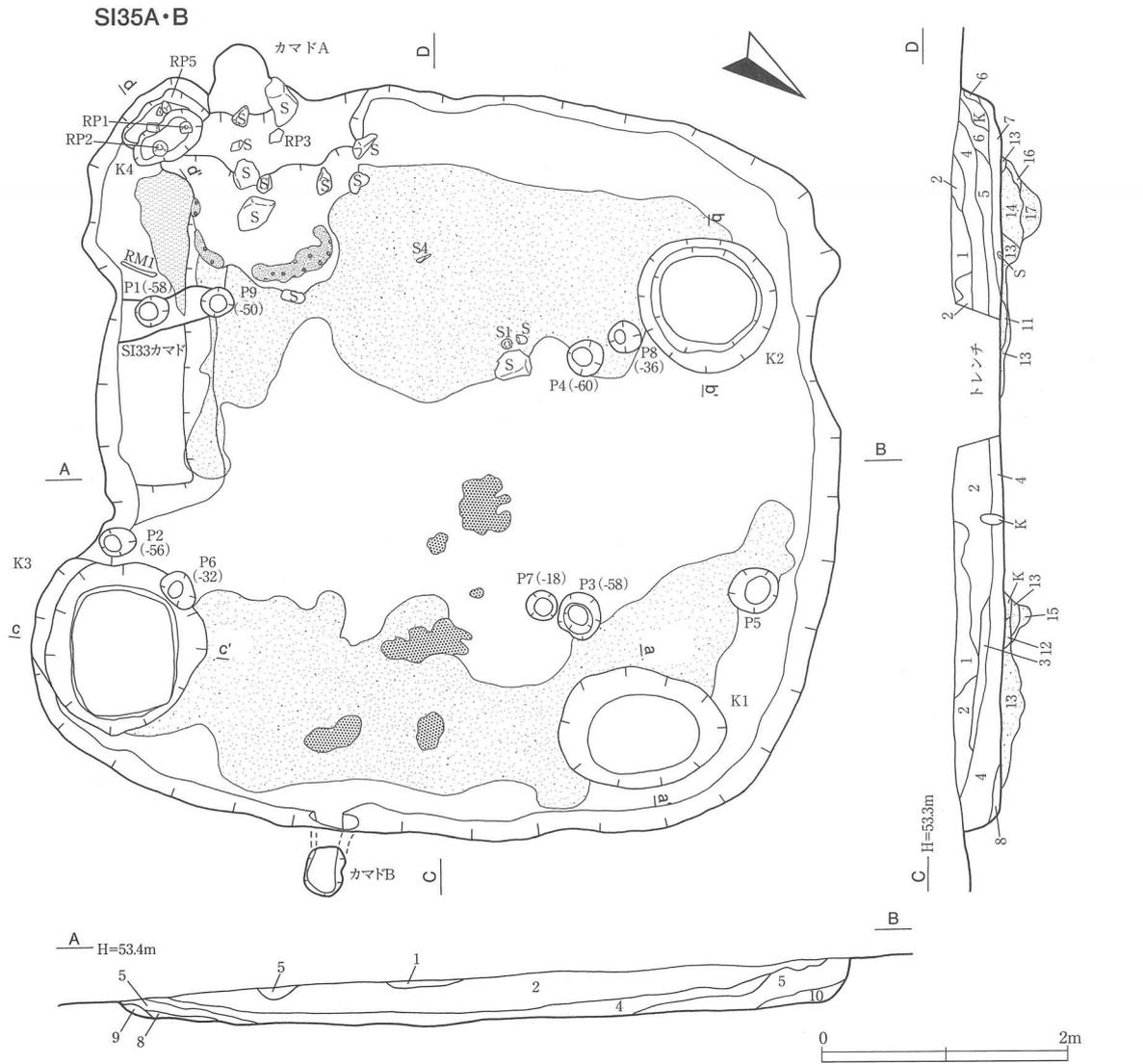
S I 35 A・B 竪穴住居跡 (第20・21図、遺物図版5・79・117、写真図版17・214・270・300)

D区赤16区中央、尾根上平坦部のVIC-8hグリッド杭を中心に位置し、検出面はV・VI層上面である。本遺構は平成9年度の生涯学習文化課の試掘トレンチによって北西-南東に中央部が貫かれ、壁と床面が一部破壊されていた。埋土がV層起源と思われる黄褐色土のため当初プランが不明瞭であったことと、トレンチ断面の観察からも1棟の住居跡として精査を開始したが、精査過程でカマドを2基確認し、床面の微妙な高低差と8本の柱穴の配置関係、カマドの遺存状況などからBからAとの拡張建替えの2棟と判断した。

S I 35 Aは、南隅と東隅が張り出しているが、およそ平面形・規模は一辺約6mの隅丸略方形を呈し、主軸方位はS-55°-W、床面積は約32㎡である。壁は外傾して立ち上がり、壁高は約30cmを測る。埋土はおよそ10層に細分されるが、全体的にマサ土ブロックが含まれる黄褐色系土で、周辺遺構との関連状況からS I 34構築時の掘削排土による人為堆積と考えられる。床面は全体的に堅締だが、中央部分が幾分低く、南東と南西壁側はやや明瞭な段差が認められ、北東壁側と南西壁側には貼床が施されていた。またあまりに不整形で弱い赤色変化のため地床炉との判断がつけ難い焼土が数ヶ所認められた。床面施設としては各コーナーに土坑4基(K1～4)と柱穴9基が検出された。K1は開口部140×100cmの略楕円形で、深さ約80cm、K2は開口部径約110cmの円形で、深さ約75cmのバケツ形を呈し、K3は上位の壁が崩落したものと見られ、開口部は径約150cmの不整形円形となっているが、中位以下は長軸110cm、短軸85cmの隅丸長方形で、深さ約80cmの箱形を呈する。埋土はいずれも人為的なマサ土を多く含む黄褐色系土が堆積し、K3の最下層は廃棄焼土と炭化物が堆積していた。K4は開口部の長軸約60cm、短軸約20cmと30cmの2つの楕円形プランが連結したもので、短軸の短い方が深さ約5cm、長い方が深さ約12cmと底面には高低差がある。柱穴は主に配置からP1・2・4・7が主柱穴、P5が副柱穴と判断した。

カマドは南西壁の南端近くに付設され、本体天井部は消失しているが、遺存状況は比較的良好で、袖部芯材として40cm大の石4個と抜き取り穴1基が検出された。燃烧部は径約80cm、深さ約10cmほどの略円形に掘り窪められており、全体的に火熱による厚さ10cmほどの赤色変化した焼土が確認され、焼土の煙道側端には支脚と考えられる石1個が検出された。煙道は煙だしピットと一体的で奥行き約60cm、幅約45cmの掘り込み式と思われる外側に緩く上る勾配の溝状を呈する。

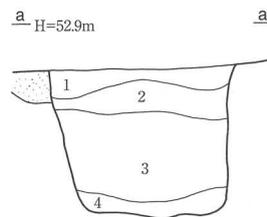
S I 35 Bは、上記のとおり判断したもので、壁及び床は遺存しないが、柱穴と床面の状況から平面形・規模は一辺4m前後の方形基調と推定され、主軸方位はN-60°-E、床面積は推定16㎡である。柱穴は配置



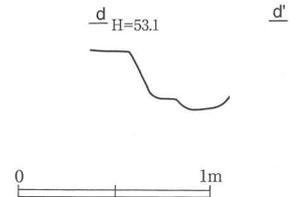
SI35A・B

1. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有、根多量
 2. 10YR7/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有、人為的堆積
 3. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有、人為的堆積
 4. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、人為的堆積
 5. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性有、人為的堆積
 6. 10YR6/8 (明黄褐) しまり・粘性有、炭化物少量
 7. 10YR7/6 (明黄褐) しまり・粘性有、壁崩落土
 8. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性やや有
 9. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性やや有、炭化物多量
 10. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有
 11. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、マサ土混入
 12. 5YR4/6 (赤褐) 焼土
 13. 10YR5/8 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
炭化物・焼土ブロック微量
 14. 10YR7/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性有
マサ土多量・焼土ブロック少量
 15. 10YR7/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性有
マサ土・焼土多量
 16. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性有
 17. 10YR7/8 (黄橙) しまり極めて有、粘性有
人為的堆積
- 貼床

SI35A・B K1



SI35A・B K4

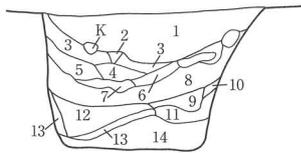


SI35A・B K1

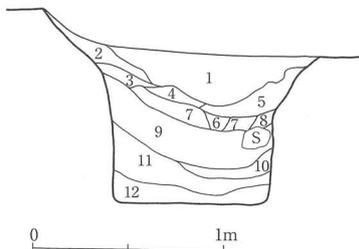
1. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、炭化物微量
2. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、砂質、マサ土ブロック少量
3. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり有、粘性無、砂質、マサ土ブロック・炭化物微量
4. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有・粘性無、炭化物微量

第20図 SI35A・B 竪穴住居跡(1)

b H=52.9m SI35A・B K2 b'



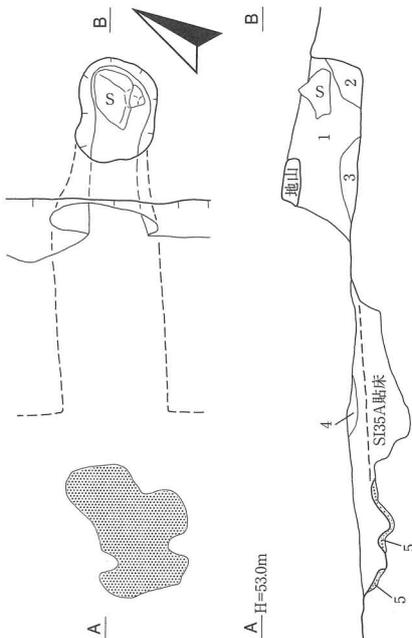
c H=53.0m SI35A・B K3 c'



SI35A・B K3

1. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性弱、砂質
地山ブロック・マサ土ブロック多量
2. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、砂質
3. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性弱、砂質
地山ブロック・マサ土ブロック多量
4. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有
炭・焼土全体的に薄く広がる
5. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
6. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
7. 2.5Y8/4 (淡黄) しまり有、粘性無
8. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性無、マサ土多量
9. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまりやや有、粘性無
10. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
11. 廃棄された炭と焼土

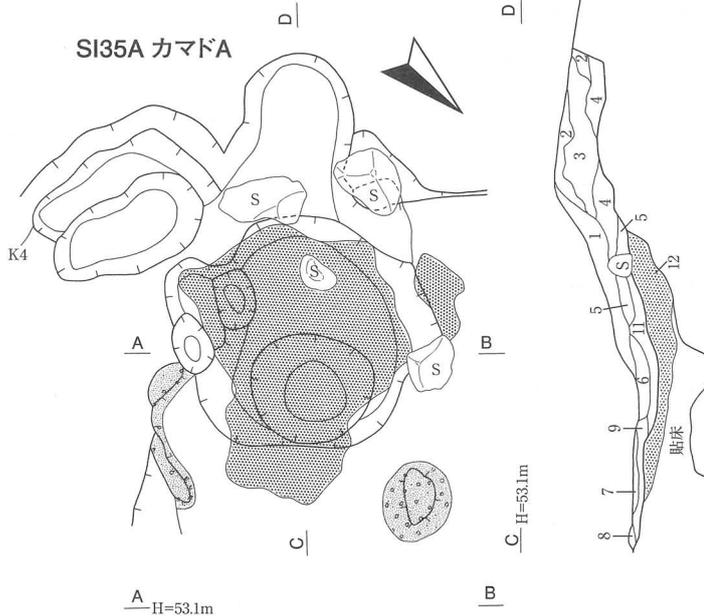
SI35B カマドB



SI35A・B K2

1. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性有、炭化物ブロック
2. 10YR7/8 (黄橙) しまり有、粘性やや有
3. 10YR6/8 (明黄褐) しまり・粘性有
4. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性有、炭化物ブロック
5. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性やや有、炭化物少量
6. 10YR5/8 (黄褐) しまりやや有、粘性有、炭化物ブロック全体に多量
7. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性有、褐色土・炭化物少量
8. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有、炭化物微量、やや砂質
9. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有、炭と焼土
10. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性やや有、炭が薄く広がる
11. 7.5YR5/8 (明褐) しまりやや有、粘性有、焼土
12. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有、炭が薄く広がる
13. 10YR1.7/1 (黒) しまり有、粘性やや有、炭が薄く広がる
14. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性無

SI35A カマドA



SI35A カマドA

1. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性有、焼土ブロック混入
2. 7.5YR4/6 (褐) しまり・粘性有、弱い焼土化
3. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性有
4. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性有、焼土粒微量・黒色土
5. 7.5YR4/6 (褐) しまり・粘性有、焼土粒・炭化物微量
6. 7.5YR5/8 (明褐) しまり・粘性有、カマド内壁焼土崩落土
7. 10YR5/8 (黄褐) しまり無、粘性有、炭化物少量・黄褐色土
8. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性有
9. 10YR2/1 (黒) しまり無、粘性有、炭化物少量
10. 7.5YR5/6 (明褐) しまり・粘性有、炭化物少量・焼土
11. 5YR5/8 (明赤褐) しまり有、粘性無、カマド内壁焼土崩落土
12. 5YR6/8 (橙) 燃焼部焼土
13. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性有、袖石の裏込め土

SI35B カマドB

1. 10YR5/8 (黄褐) しまり有、粘性やや有、炭化物小粒
2. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性やや有、やや砂質
3. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質、マサ土微量
4. 5YR6/6 (橙) しまり有、粘性無
5. 5YR5/8 (明赤褐) 燃焼部焼土

第21図 SI35A・B竪穴住居跡(2)

からP3・6・8・9が主柱穴と思われる。

カマドは北東壁のほぼ中央に付設されていたと推定されるが、煙道先端と煙出しピット及びS I 35 Aの貼床下で位置的に燃焼部焼土と思われる痕跡が残存するのみである。位置関係から煙道は奥行き約130cm、径約40cmの削り貫き式と思われ、煙だしピットは径約30cm、深さ約25cmを測る。

遺物はすべてS I 35 Aに伴うもので、K 4 とカマド内や付近の床面では完形に近いものが多く、埋土中からは破片が少量出土した。土器は、土師器の甕形土器はおよそ5個体分が出土したが形状の復元可能な個体はなく、坏形土器は5個体分が出土し、K 4 底面で完形2点(21・23)と埋土中からある程度復元できた2点(19・20)、須恵器は甕形土器片が1点(24)のみ出土した。鉄製品は4点出土し、カマドの南側床面からはほぼ完形の小刀1点(5)、カマド内から紡錘車1点(7)、埋土中からは鉄鍬1点(6)、また埋土及びK 3 埋土から砥石と磨石がそれぞれ各1点(15・17)、この他埋土から羽口片13点と鍛冶滓がわずかと本遺跡の遺構としては比較的多く出土した。

S I 41 竪穴住居跡、S K I 20 竪穴状遺構 (第22・23図、遺物図版6・80、写真図版18・214・270)

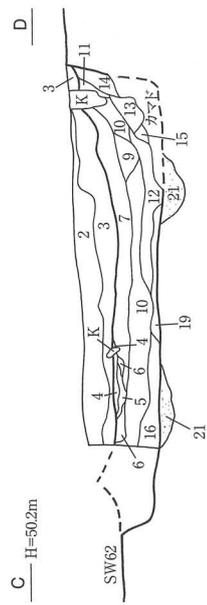
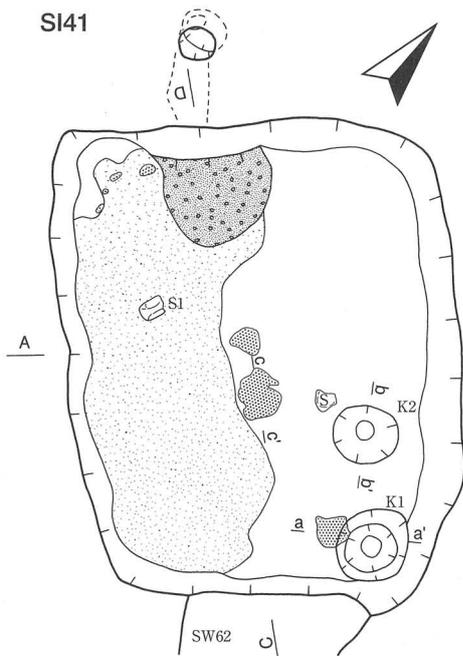
D区赤16区中央、西側斜面部のVIC-6i グリッド杭を中心に位置し、検出面はIV・V層上面である。検出当初は、埋土がV層起源と思われる黄褐色系のため、斜面谷側のS I 41を把握できず、斜面山側のS K I 20とした不整な長方形プランと谷側の南端に炭化物の混じる不整な円形プランのS W62として精査を開始したものの、S W62の精査過程においてS I 41、S K I 20の精査過程ではS K I 22を確認したものであり、新旧関係は(新)S W62→S I 41・S K I 20→S K I 22(古)と考えられるが、S K I 20の掘り込みが浅く、断面観察ではS I 41との新旧は不明であり、また状況からみて必ずしも個別の遺構とは限らず、両遺構は一連のものである可能性も考えられる。

S I 41は、等高線に平行する長軸方向で、平面形・規模は長軸約3.8m、短軸約3mの隅丸長方形を呈し、主軸方位はN-45°-W、床面積は約8.9㎡である。壁は外傾して立ち上がり、上位は崩落のためかやや開く。壁高は山側北東壁の最大90cmから谷側に向かい高度を下げ、南西壁では約20cmを測る。埋土はおよそ20層に細分されるが、上位の黄褐色系の人為堆積と下位の人為的堆積と思われる褐色系に大別され、上位はS K I 20の掘削排土の可能性も考えられる。また南東側S W62に近い中位には炭化物を含む黒色土と焼土があり、掘削時にはS W62の操業に伴うものと考え精査を進めたものだが、断面観察では焼土は現地性と思受けられ、S W62と同時期の炉跡の可能性が考えられる。床面は概ね平坦で堅締、南西谷側の半分が貼床とされていた。床面施設としては南東隅に土坑2基(K1・2)と中央に地床炉1基が検出された。K1・2とも開口部径約55cmの円形で、深さ約45cmの円錐状を呈する。地床炉は約30cmと約20cmの不整な広がり隣接し、火熱により厚さ約10cmほどに赤色変化していた。

カマドは北西壁の南寄りに付設されていたが、本体部は遺存状態が悪く、袖位置に小ピット4基と燃焼部焼土を検出したのみで、袖芯材には石を使用したものと考えられる。焼土は径約40cmの略円形で厚さ5cmほどが火熱により赤色変化していた。煙道は奥行き約110cm、径約30cmの削り貫き式でほぼ水平、煙だしピットは径約25cmの円形で煙道よりも深く掘り込まれ、深さ約90cmを測る。

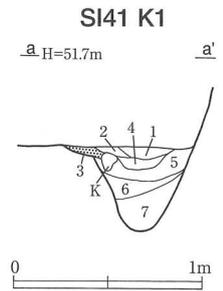
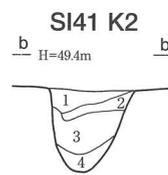
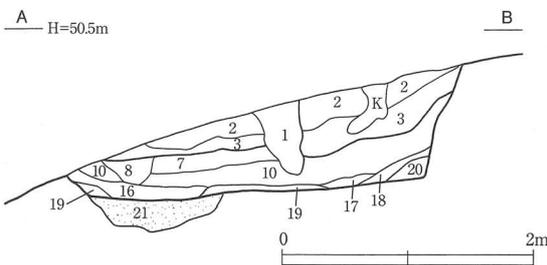
遺物は、埋土中から土師器の甕形土器片が少量と須恵器の甕形土器片数点、砥石1点(18)、刀子片1点、鍛冶滓約1kgが出土した。

S K I 20は、形態・規模から竪穴状遺構としたが、上記のとおりS I 41に伴う棚状のテラスの可能性もある。平面形は谷側の南西部がS I 41により不明だが、等高線に平行する長軸方向で、南東端が張り出す不整な長方形を呈し、規模は長軸約9m、短軸は北側で約3.7mを測り、南側では約2mが残存する。床面積は



SI41

1. 10YR5/8 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
炭化物微量
2. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
炭化物微量
3. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性有、炭化物微量
4. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、炭化物微量
焼土ブロック少量
5. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有、炭化物少量
焼土ブロック中量
6. 5YR3/6 (暗赤褐) しまり・粘性有、焼土
7. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有、炭化物微量
8. 10YR5/8 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
炭化物微量
9. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性有、炭化物微量
10. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性有、焼土粒微量
11. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有
12. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有
炭化物微量
13. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有、炭化物微量
14. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有、壁の崩落土
15. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性有、壁の崩落土
16. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有
炭化物微量
17. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性有、炭化物・
黄褐色土粒微量
18. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性有、炭化物微量
19. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有、炭化物微量
20. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性有、壁の崩落土
21. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
黒色土の混じり、貼床



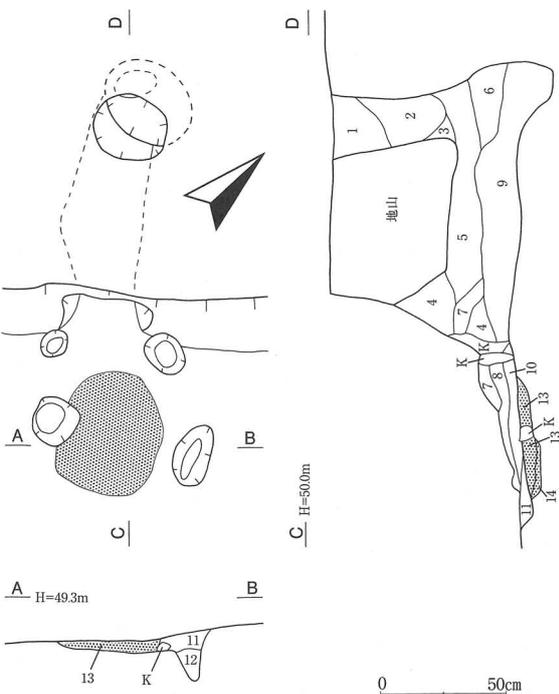
SI41 K2

1. 10YR5/8 (黄褐)
しまり・粘性有
2. 10YR6/8 (明黄褐)
しまり無、粘性有
3. 10YR4/4 (褐) しまり無
粘性有、炭化物微量
4. 2.5YR7/6 (明黄褐)
しまり無、粘性有

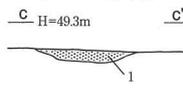
SI41 K1

1. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性有
2. 10YR4/6 (褐) しまり無、粘性有
炭化物微量
3. 5YR4/8 (赤褐) しまり極めて有
粘性無、焼土(現地性)
4. 10YR3/2 (黒褐) しまり無、粘性有
炭化物少量
5. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有
炭化物微量
6. 10YR4/6 (褐) しまり無、粘性有
炭化物微量
7. 10YR5/6 (黄褐) しまり無、粘性有

SI41 カマド



SI41 地床炉



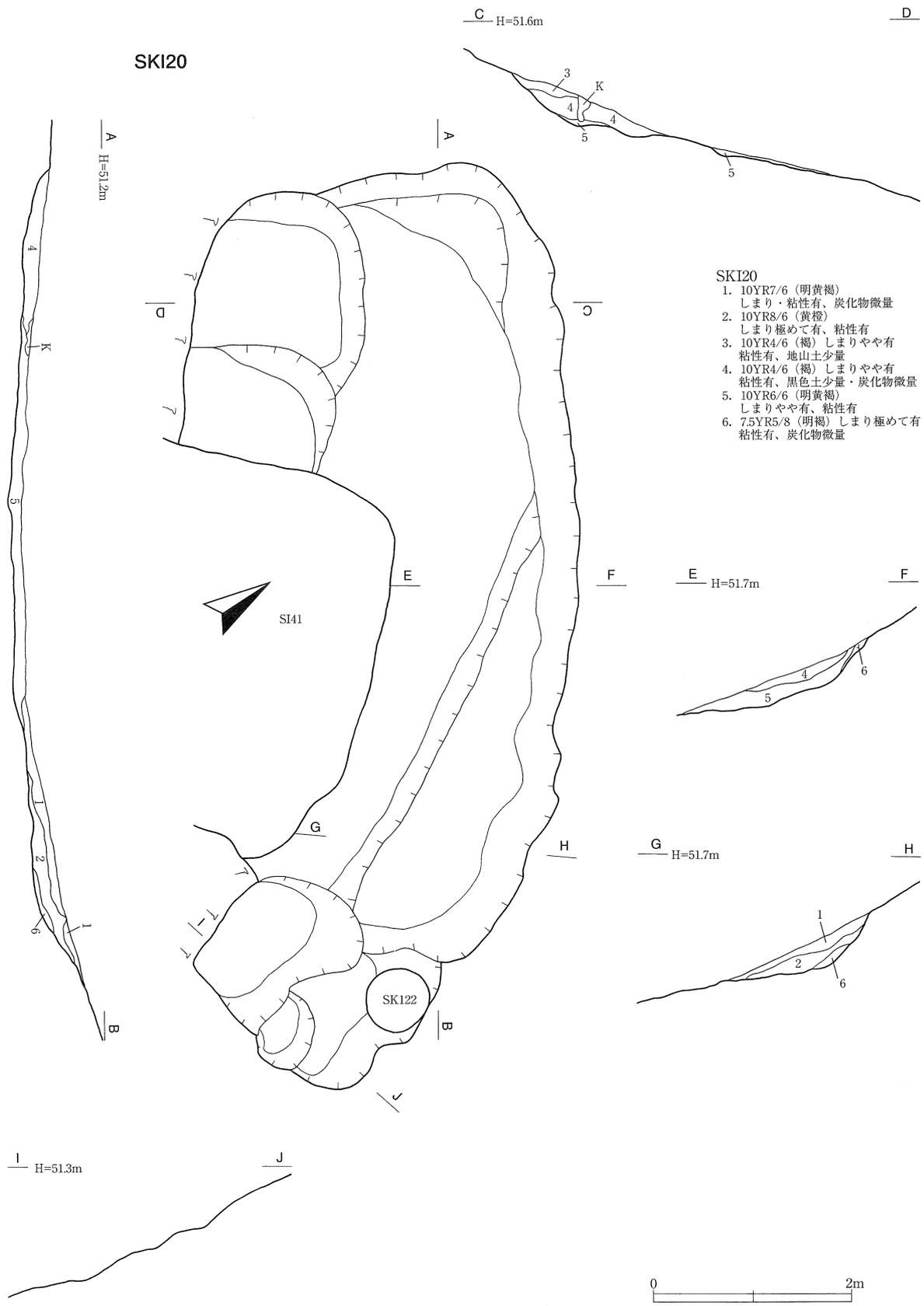
SI41 地床炉

1. 5YR5/8 (明赤褐) 焼土

SI41 カマド

1. 10YR4/6 (褐) しまり無、粘性有
2. 10YR4/4 (褐) しまり無、粘性有
3. 10YR3/4 (暗褐) しまり無、粘性有
4. 10YR5/8 (黄褐) しまり無、粘性有
5. 10YR5/6 (黄褐) しまり無、粘性有
6. 10YR4/6 (褐) しまり無、粘性有
7. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性有
地山ブロック多量
8. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性有
9. 10YR4/4 (褐) しまり無、粘性有
10. 7.5YR5/6 (明褐) しまり極めて有、粘性有
11. 7.5YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性有
12. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有
13. 5YR5/8 (明赤褐) 燃焼部焼土
14. 5YR4/8 (赤褐) 燃焼部焼土

第22図 SI41 竪穴住居跡



第23図 SKI20豎穴状遺構

残存部で約22㎡ほどである。壁は南西谷側は消失しており、山側では崩落によるものか、かなり緩やかに外傾して立ち上がり、壁高は山側北東壁の最大約50cmから南西谷側に向かい低くなる。埋土は6層に細分されるが、北側が褐色系、南側が明黄褐色系に大別され、周囲検出面のⅣ・Ⅴ層に対応した流入土の自然堆積と思われる。底面はやや凹凸があり、全体的に谷側に緩く傾斜し、西側と南東部では不明瞭な階段状となっている以外、柱穴等の床面施設は認められなかった。

遺物は、埋土中から砥石1点(19)、鉄塊系遺物1点が出土したのみである。

S I 57 竪穴住居跡 (第24図、写真図版18)

D区赤16区中央、西側斜面部のⅥC-9jグリッドに位置し、検出面はⅤ・Ⅵ層上面である。当初、北隅の土坑と重複する規模からみて竪穴状遺構もしくは土坑と考えて精査を開始したが、精査過程で煙道部、隣接するSK I 23床面で煙出しピットを検出したことから竪穴住居跡と判明したものであり、新旧関係は状況からSK I 23・SW65が本遺構より新しい。平面形・規模は南部谷側が崩落により消失しており、全容は不明であるが、残存部から一辺約2mの歪な方形基調と思われる。主軸方位はN-50°-W、残存する床面積は約3.1㎡を測る。壁は南部谷側は消失しているが、外傾して立ち上がり、壁高は山側北壁の最大約30cmから南部谷側に向かい低くなる。埋土は6層に細分されるが、基本的にはⅥ層起源のマサ土の単層だが、北隅下位にはSW65の操業による炭化物の混じる黒色土がある。床面はやや凹凸があるが、概ね平坦で堅締、柱穴等の施設は検出されなかった。

カマドは北西隅に付設され、本体部は遺存状態が極めて悪く、燃焼部が径約80cm、深さ約5cmに掘り窪められているほかは焼土等も確認されなかった。煙道は奥行き約120cm、径50~20cmの削り貫き式でほぼ水平に煙だしピットに続き、煙出しピットは残存部で径約25cm、深さ約50cmを測る。

遺物は、埋土中から土師器の甕形土器片が1点のみ出土した。

SK I 19 竪穴状遺構 (第24図、写真図版19)

D区赤16区中央、尾根上平坦部のⅥC-7f・gグリッドに位置し、検出面はⅤ層上面である。平面形は平成9年度の生涯学習文化課の試掘トレンチによって南西端が一部消失し、掘り込みが浅いため緩傾斜となる南東側は壁が遺存しないが、長軸方向が等高線と直行する北東-南西方向の略楕円形を呈すると思われ、規模は長軸約3.2m、短軸約2.5m、床面積は6.3㎡を測る。壁は緩やかに外傾し、壁高は北側の約10cmから南側に向かい低くなる。埋土は黄褐色土の単層である。床面は平坦で堅締、柱穴等の施設は検出されず、遺物も出土しなかった。

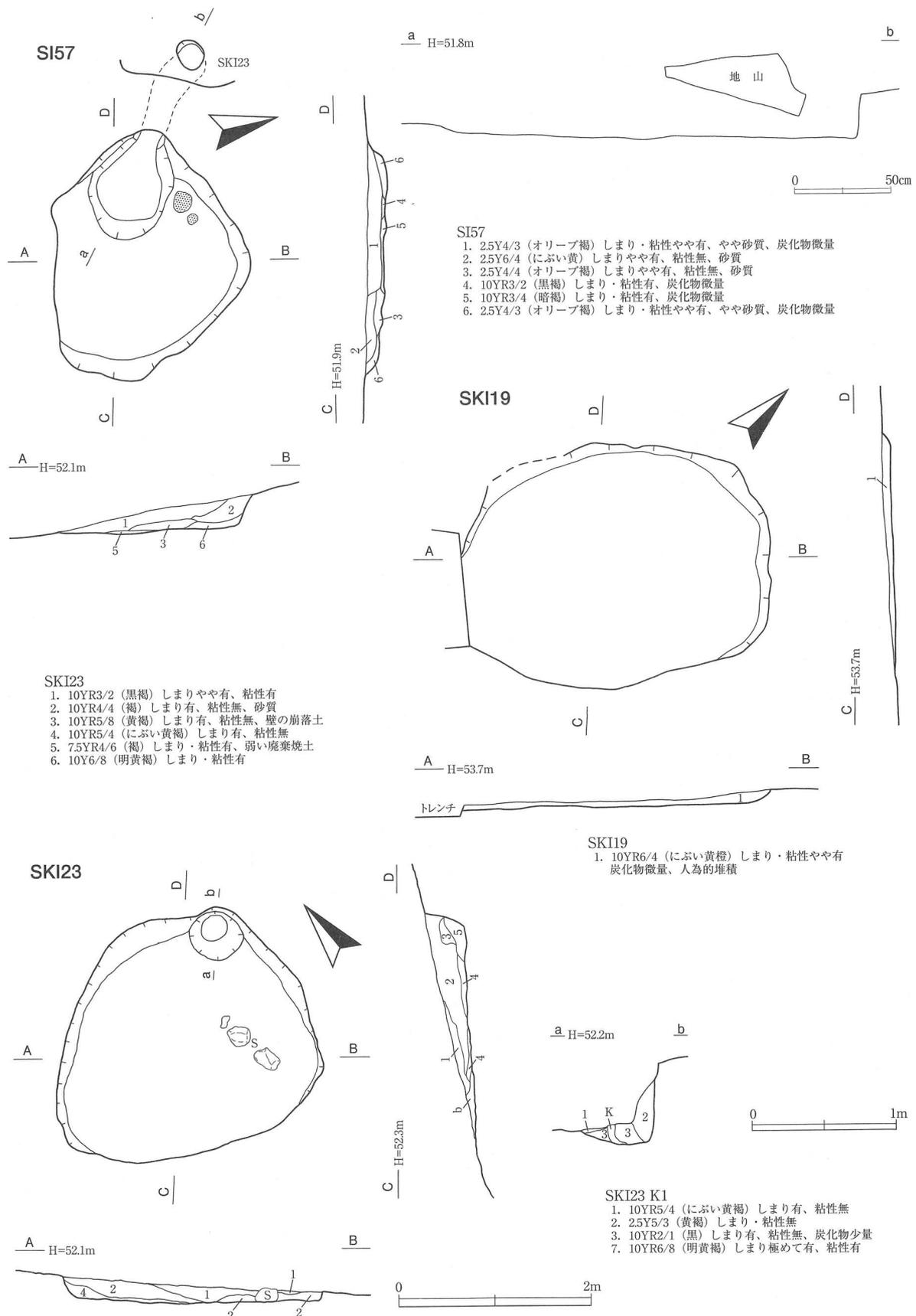
SK I 23 竪穴状遺構 (第24図、遺物図版6、写真図版19・214)

D区赤16区中央、西側斜面部のⅥC-8jグリッドに位置し、検出面はⅤ・Ⅵ層上面である。S I 57と重複し、前記のとおり本遺構が新しい。平面形・規模は南部谷側が崩落により消失しており、全容は不明であるが、残存部では径約2.6mの歪な円形を呈し、床面積は約4.8㎡を測る。壁は南部谷側は消失しているが、外傾して立ち上がり、壁高は山側北壁の最大約40cmから南部谷側に向かい低くなる。埋土は6層に細分されるが、上位黒色土、中位褐色土、下位黄褐色土に大別され、北東部にあるK1上には弱い廃棄焼土が認められた。床面は南西谷側に緩く傾斜するが概ね平坦で堅締である。床面施設としては径約55cmの円形で、深さ約10cmの鍋形のK1土坑1基が検出された。

遺物は埋土中から土師器の甕形土器片が10数点のみ出土した。 (小山内)

SW48A 炭窯 (第25図、写真図版20)

D区赤16区の平坦部の南東、東向き斜面のⅥC-10jグリッドに位置する。検出面はⅥ層上面である。検



第24図 SI57竪穴住居跡・SKI19・23竪穴状遺構

出時には土坑もしくは炭窯と思われる遺構が東西方向に少なくとも2遺構連続するプランを呈していた。精査をすすめるなかで底面や断面の観察から東端に土坑(S K97)、西に連続する形で炭窯(S W48A・S W48B)、土坑(S K98)と4遺構の重複が判明した。その際S W48AはS W48Bとの混同で誤って掘り進めた結果本遺構の壁とS W48Bの床面の一部が不明となった。本遺構はS W48B東側部分およそ半分とでS K97の西側にあたる一部を切っておりS W48BとS K97より新しい。平面形・規模は卵状の楕円形を呈すると考えられ、開口部約95×60cm、底部約80×35cmと推定される。壁は外傾して立ち上がり、壁高は西南西の壁で約60cm、東北東の壁で約10cmである。長軸方向は北北西-南南東で等高線と平行する。埋土は褐色土主体の6層で全体的に炭化物粒を含む自然堆積である。最下層では炭化物層が確認される。底面は平坦で北側部分と壁の一部に厚さ2～3mmの火熱で赤色変化した焼土がみられる。以上の観察から本遺構を炭窯と判断した。出土遺物はなく、炭化物は分析によりクリと判明した。

S W48B炭窯 (第25図、写真図版20)

D区赤16区の平坦部の南東、東向き斜面のVIC-10jグリッドに位置する。検出面はVI層上面である。本遺構は当初S K97の西側に連続するひとつのプランの形状を呈していたが精査を進めるうちに、S W48・S K98の2遺構が確認され、S W48もさらに二つにわかれる別遺構であることが判明したものである。新旧関係は西側をS K98に、東側をS W48Aに切られており、両遺構より古い。平面形は斜面上において遺構の東西が欠けた形となっており、全容が不明であるが、残存部から略方形ないし略円形を呈すると思われる。規模は開口部は約100×90cm前後、底部は約80×70cm前後と推定される。壁は残存部分の西尾根側がやや外傾して立ち上がり約20cmを測る。埋土は砂混じりの褐色土が主体の5層で、最下層には炭化物の層が確認される自然堆積である。底面は東にやや傾斜しており、底面の北側部分には重複により全容は不明であるが、平面形が30×20cm程度で深さ4～5cmのやや窪んだ部分がみられる。窪みの部分にはわずかに火熱で赤色変化した厚さ1～2mmの焼土がみられる。以上の観察から本遺構を炭窯と判断した。

出土遺物はなく、炭化物は分析の結果クリと判明した。

(赤石)

S W49炭窯 (第25図、写真図版20)

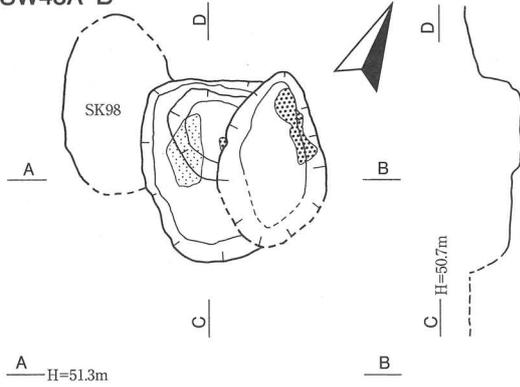
D区赤15区の南側、尾根上緩斜面部のVIC-8aグリッドに位置し、検出面はV層上面である。当初、S I28の北東部で炭化物の多い部分として認識してはいたが、北壁の崩落部と判断して精査を行ったところ、精査途中で炭窯と判明したものである。断面観察から本遺構が新しい。状況からみてS I28Aの埋まりきらない窪みを利用したものと思われる。平面形はおおよそ長方形を呈し、東端には煙出しと思われるピットが取り付く。長軸方向は等高線と直行する東-西にある。規模は長軸約270cm、短軸約110cmの箱形を呈し、東端のピットは径約50cm、深さ約20cmの丸底鍋形で、さらに径約20cm、深さ約35cmの小ピットがある。壁は外傾して立ち上がり、壁高は山側北壁の最大約35cmから南側S I28A内で約20cmと低くなる。埋土の大半はS I28A内に続く、木炭取り出し作業によって生じたと思われる炭化物混じりの黒色土で、北側の壁際には壁崩落の褐色土、底面には残材の炭化物層が堆積する。底面はおおむね平坦で、火熱により厚さ1cm以下に赤色変化した焼土が部分的に認められた。

遺物は埋土中から鍛冶滓が少量出土したのみである。また炭化物は分析によりクリと判明した。

S W52炭窯 (第26図、写真図版20)

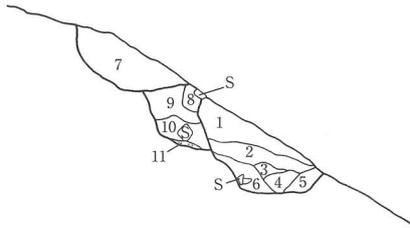
D区赤16区中央、尾根上平坦部のVIC-6fグリッドに位置し、検出面はV層上面である。当初はS I34のカマド煙道として精査を開始したが、精査過程で炭窯と判明したもので、状況からみてS I34の埋まりきらない窪みを利用したものと思われ、本遺構が新しい。平面形は、南東半が木炭取り出し作業の際に消失し

SW48A・B



SW48A・B

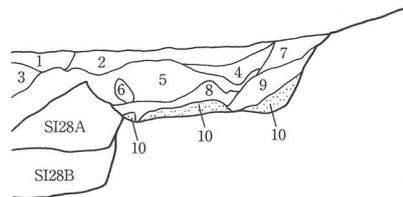
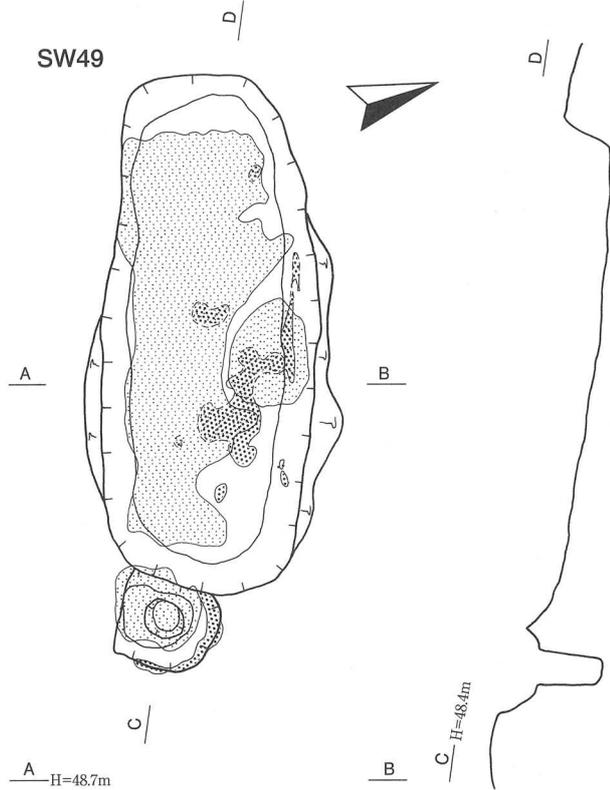
1. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
炭化物少量
 2. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
炭化物少量
 3. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無
 4. 10YR3/1 (黒褐) 炭化物多く含む
 5. 10YR4/2 (灰黄褐) しまりやや有、粘性無、炭化物少量
 6. 10YR5/2 (灰黄褐) しまりやや有、粘性無、炭化物少量
 7. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無 (SK98)
 8. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無
 9. 7.5YR8/3 (浅黄橙) マサ土底面に焼けが見られる
 10. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無
 11. 10YR3/1 (黒褐) 炭化物層
- } A埋土
} B埋土



SW49

1. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性やや有
2. 10YR2/3 (黒褐) 炭化物少量
3. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性やや有
炭化物少量
4. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性やや有
炭化物少量
5. 10YR2/2 (黒褐) しまり有、粘性やや有
炭化物微量
6. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有
7. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有
炭化物少量
8. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有
炭化物多量
9. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性有、炭化物少量
10. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有
炭化物層

SW49



第25図 SW48A・B・49炭窯

たものと思われるが、残存部からはおよそ長方形と推測され、長軸方向は等高線と平行する北西－南東にある。規模は残存する部分で長軸約180cm、短軸約100cm、深さ約15cmの箱形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土の大半はS I 34内に続く、木炭取り出し作業によって生じたと思われる炭化物を比較的多く含む褐色土系で、底面には残材の炭化物層が部分的にある。底面はおおむね平坦で、火熱により厚さ1cm以下に赤色変化した焼土が部分的に認められた。

遺物は出土しなかったが、炭化物は分析によりクリと判明した。

SW62炭窯（第26図、写真図版20）

D区赤16区中央、西側斜面部のVIC-6iグリッドに位置し、検出面はV層上面である。本遺構の精査過程においてS I 41を確認し、状況からみてS I 41の埋まりきらない窪みを利用したものと思われ、本遺構が新しい。平面形は、北西側でS I 41の埋土と連続していたためプランを確定できず、掘り過ぎたため消失したが、残存部からはおよそ楕円形と推測され、長軸方向は等高線と平行する北西－南東にある。規模は残存する部分で長軸約130cm、短軸約120cmを測り、壁は外傾して立ち上がり、壁高は山側北壁の最大約40cmから南側で約2cmと低くなる。埋土の大半はS I 41内に続く、木炭取り出し作業によって生じたと思われる炭化物を含む黄褐色土系で、底面には残材の炭化物層が部分的にある。底面はやや凹凸があり、中央は火熱により厚さ約7cmに赤色変化した焼土が認められた。形態的には炉跡に類似するが、主にS I 41との埋土等の関連状況から炭窯と判断したものである。

遺物は出土しなかったが、炭化物は分析によりクリと判明した。

SW65炭窯（第26図、写真図版20）

D区赤16区中央、西側斜面部のVIC-9jグリッドに位置し、検出面はVI層上面である。S I 57と重複するが、状況からみてS I 41の埋まりきらない窪みを利用したものと思われ、本遺構が新しい。平面形は、掘り込みが浅く、立地から谷の南側が消失して全容は不明であるが、残存部からはおよそ楕円形と推測され、長軸方向は等高線と平行する北西－南東にある。規模は残存する部分で長軸約120cm、短軸約100cmを測り、壁は外傾して立ち上がり、壁高は山側北壁の最大約20cmから南側に向かい低くなる。埋土は木炭取り出し作業によって生じたと思われる炭化物を含む黒色土で、底面には残材の炭化物層がある。底面は北側で径約90cmの円形に浅く掘り窪められていた。焼土は確認されなかったが、主にS I 57との埋土等の関連状況から炭窯と判断したものである。

遺物は出土しなかったが、炭化物は分析によりクリと判明した。

（小山内）

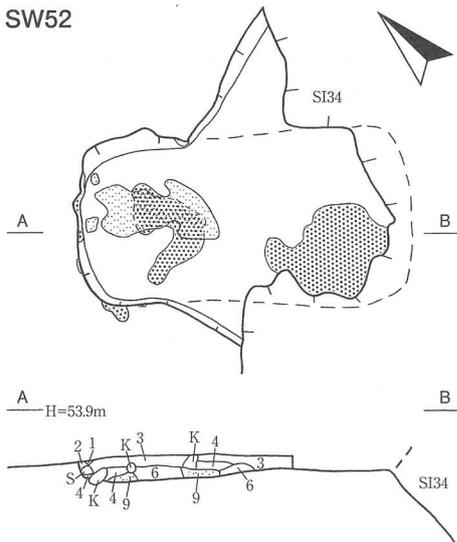
SK97土坑（第27図、写真図版20）

D区赤16区の平坦部の南東、東向き斜面のVIC-10jグリッドに位置し、検出面はVI層上面である。本遺構は土坑もしくは炭窯と思われる遺構が東西方向に少なくとも2遺構連続するプランを呈していた。その西側プランにあたる。新旧関係はSW48Aに切られておりSW48Aより古い。SW48Bとの関係はSW48Aが両遺構を切っており直接的な切り合いがみられないため不明である。平面形は西側の一部がSW48Aに切られていることと、斜面下部の東側が崩落しているため全容は不明であるが残存部分から方形と推定される。規模は開口部180×140cm前後、底部約170×140cmを測る。残存部分で壁はほぼ垂直に立ち上がる。西壁高は60cm前後であり、斜面に沿って減ずる。埋土は6層で褐色土主体であり、底部に近い層で炭化物粒がみられる自然堆積である。底面はマサ土があらわれ平坦で堅い。遺物は出土しなかった。

SK98土坑（第27図）

D区赤16区の平坦部の南東、東向き斜面のVIC-10jグリッドに位置し、検出面はVI層上面である。当初

SW52



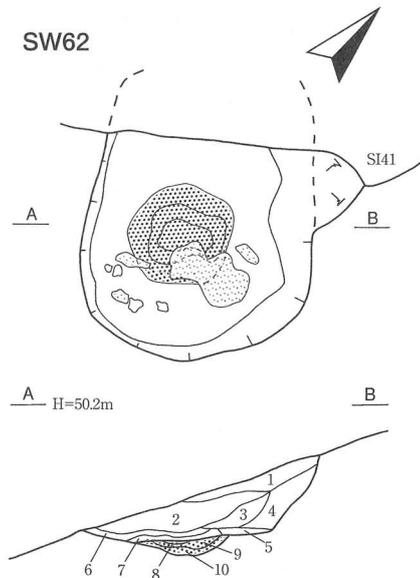
SW52

1. 10YR6/8 (明黄褐) しまり・粘性有、焼土粒微量
2. 7.5YR4/6 (褐) しまり・粘性有、焼土粒・炭化物微量
3. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有
4. 10YR5/8 (黄褐) しまり無、粘性有、炭化物少量
5. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり無、粘性有、炭化物少量
6. 10YR3/4 (暗褐) しまり無、粘性有、炭化物少量
7. 10YR1.7/1 (黒) しまり・粘性有、炭化物層

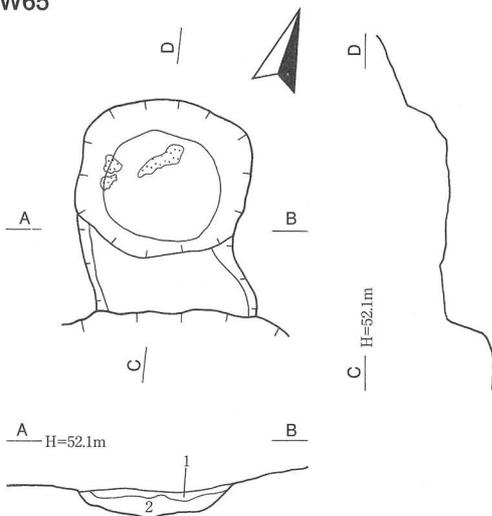
SW62

1. 10YR6/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性有、炭化物微量
2. 10YR5/8 (黄褐) しまりやや欠、粘性有、炭化物微量
3. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性有、炭化物微量
4. 10YR4/6 (褐) しまりやや欠、粘性有、炭化物少量
5. 10YR4/4 (褐) しまりやや欠、粘性有、炭化物少量
6. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや欠、粘性有、炭化物少量
7. 7.5YR5/6 (明褐) しまり有、粘性無、焼土
8. 5YR6/8 (橙)
9. 5YR5/8 (明赤褐) } 焼土
10. 5YR4/8 (赤褐)

SW62



SW65



SW65

1. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性無、砂質
2. 10YR2/1 (黒) しまりやや有、粘性無、炭化物多量

0 1m

第26図 SW52・62・65炭窯

SW48A及びBの一部と思われたが埋土の状態から土坑と判断した。SW48Bの西側上部を切っておりSW48Bより新しい。SW48の検出時に壁の一部を掘り広げてしまったため全体の形状は不明だが、平面形は卵状の楕円形を呈すると思われる。開口部は約95×60cm前後と推定され、底部は約50×40cmを測る。埋土は褐色土が主体で4層に細分される自然堆積であるが、木根による攪乱が著しい。断面形は逆台形を呈し、底面はやや斜面に添った傾斜をみせる。遺物は出土しなかった。(赤石)

SK99土坑 (第27図、写真図版20)

D区赤15区の北側、尾根上東谷頭のVIC-9sグリッドに位置し、検出面はIV層上面である。平面形・規模は不整な略楕円形を呈し、開口部約120×90cm前後、底部約100×70cm前後を測る。壁は外傾して立ち上がり、壁高は西の山側で最大約25cmから東側の約5cmと谷側に向かい低くなる。埋土は黒色土と褐色土のレンズ状の自然堆積である。底面は概ね平坦で、遺物は出土しなかった。

SK107土坑 (第27図、写真図版21)

D区赤15区の南側、尾根上緩斜面部のVIC-8aグリッドに位置するが、SI28Bの精査中に検出したものであり、状況から本遺構が新しい。平面形・規模は、開口部径約90cm、底部径約60cmの略円形、深さ約60cmの鍋形を呈する。埋土は人為的な黄褐色土の単層で、状況からSI28Aよりは古いと考えられる。底面は概ね平坦で、遺物は出土しなかった。

SK112土坑 (第27図、写真図版21)

D区赤16区中央、尾根上北東谷頭のVIC-9iグリッドに位置し、検出面はVI層上面である。平面形・規模は、山側上位壁が崩落しているため不整な略円形を呈し、開口部は約160×140cm前後、底部約125×110cm前後を測る。壁は外傾して立ち上がり、南側は崩落によりさらに外反する。壁高は西の山側で最大約80cmから東側の約30cmと谷側に向かい低くなる。埋土は基本的には人為的なマサ土の単層である。底面は概ね平坦で、遺物は出土しなかった。

SK116土坑 (第27図、写真図版21)

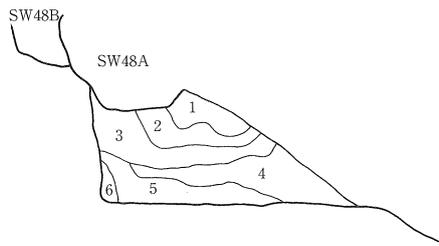
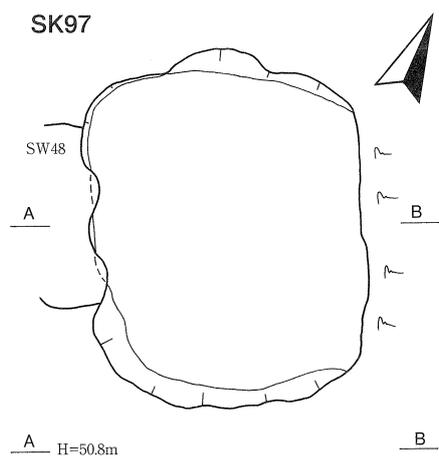
D区赤15区の南側、尾根上緩斜面部のVIC-8aグリッドに位置するが、前記のとおりSI28Bの精査中に検出したものであり、新旧関係は状況からSI28Bより新しく、SI28A・SW49よりは古いと考えられる。平面形・規模は、埋土がSI28Bと類似していたためプランを確定できず、南側を掘り過ぎたため消失したが、残存部からは開口部径約100cm、底部径約80cmの略円形、深さは約13cmの平鍋形と推測される。埋土は人為的な黄褐色土の単層で、底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SK117土坑 (第28図、遺物図版60、写真図版21・249)

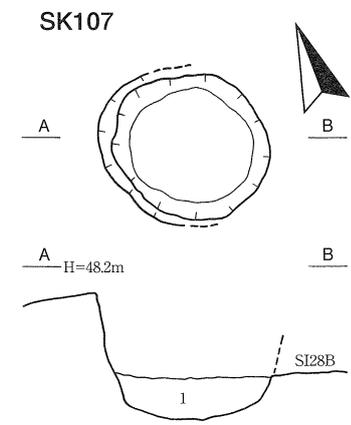
D区赤16区中央、尾根上平坦部のVIC-7fグリッドに位置するが、前記のとおりSI34の精査中に検出したものであり、断面観察から本遺構が新しい。平面形・規模は、上位をSI34として掘削したため消失したが、ベルト残存部からは開口部径約110cm、底部径約40cmの略円形で、深さは約95cmのバケツ形と推定される。埋土はおおよそ20層に細分される黒色系土と黄褐色系土がレンズ状の自然堆積である。底面はおおむね平坦で、遺物は埋土中から羽口1点(5)と鍛冶滓が微量出土した。

SK122土坑 (第28図、写真図版21)

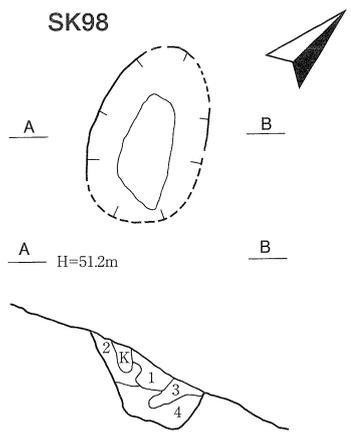
D区赤16区中央、西側斜面部のVIC-6iグリッドに位置するが、前記のとおりSKI20の精査中に確認したものであり、状況から本遺構が新しいと判断した。平面形・規模は、上位をSKI20として掘削したため消失したが、残存部では開口部径約60cm、底部径約35cmの略円形で、深さ約45cmの丸底鍋形を呈する。埋土は褐色土系3層のレンズ状の自然堆積である。遺物は出土しなかった。



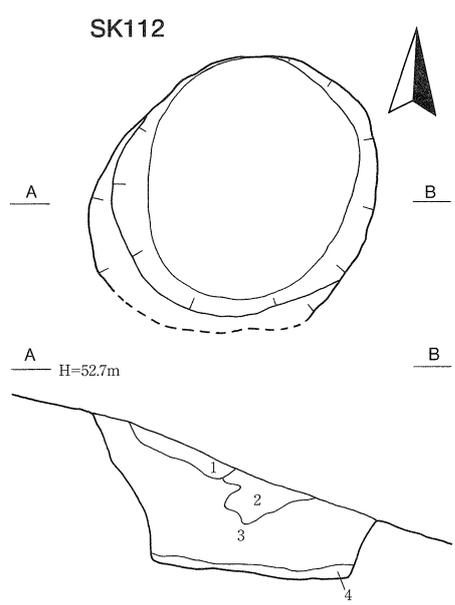
- SW97**
1. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有 粘性無、マサ土ブロック少量
 2. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有 粘性無
 3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有 粘性無
 4. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有 粘性無、炭化物少量
 5. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性無 炭化物少量
 6. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有 粘性無、マサ土多量



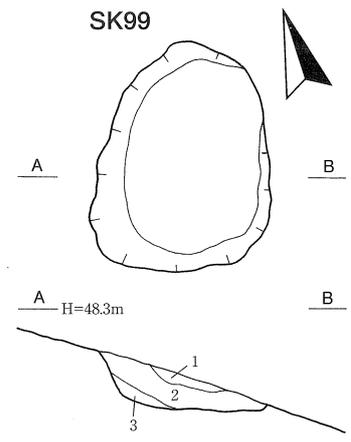
- SK107**
1. 10YR5/8 (黄褐) しまり極めて有 粘性有、人為的堆積



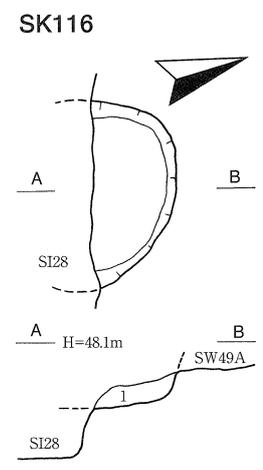
- SW98**
1. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
 2. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
 3. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性無、木根多量
 4. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無



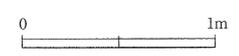
- SK112**
1. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり・粘性やや有 人為的堆積
 2. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性やや有 マサ土少量、人為的堆積
 3. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり・粘性やや有 マサ土少量、人為的堆積
 4. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性やや有



- SW99**
1. 10YR3/3 (暗褐) しまり無、粘性有 炭化物少量
 2. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有 炭化物少量
 3. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性有



- SK116**
1. 10YR6/3 (明黄褐) しまり・粘性やや有、炭化物微量



第27図 SK97・98・99・107・112・116土坑

S K 127土坑 (第28図、写真図版21)

D区赤16区中央、西側斜面部のVIC-6iグリッドに位置し、検出面はV層上面である。平面形・規模は、開口部径約85cm前後、底部約60cmの円形、深さ約20cmの皿形を呈する。埋土は褐色土系のレンズ状の自然堆積である。底面は概ね平坦で、遺物は出土しなかった。

S K 159土坑 (第29図、写真図版21)

D区赤15区の北側、尾根突端西側谷頭のVIB-8rグリッドに位置し、検出面はIV層上面である。平面形・規模は開口部径約350cm、底部径約220cmの略円形を呈し、壁はほぼ垂直な下位から上位では外反して立ち上がり、深さは約140~120cmを測る。埋土はおよそ30層に細分される流入土の黒色土系から壁崩落土の黄褐色土系が互層となるレンズ状の自然堆積であるが、最下層には廃棄焼土や炭化物が比較的多く認められた。底面は概ね平坦で、遺物は出土しなかった。

S K 160土坑 (第29図、写真図版21)

D区赤15区の南側、尾根上緩斜面部のVIC-8cグリッド杭を中心に位置し、検出面はV層上面である。S I 29と重複し、断面の観察から本遺構が新しく、北側重複する部分ではテラス状の段があったと思われるが、平面的には把握できず掘削したことで消失し全容は不明である。確認した部分での平面形・規模は、開口部径約250cm、底部径約210cmの略円形を呈し、壁は下位でやや袋状を呈し、上位は外反して立ち上がり、壁高は南山側で最大約130cmから北側残存部で約40cmと低くなる。埋土はおよそ40層に細分されるが、上位に流入土の黒色土が厚く、それ以下は黒ボク系の流入土から壁崩落土の黄褐色土系が互層となるレンズ状の自然堆積である。底面は概ね平坦で、遺物は出土しなかった。

S K 161土坑 (第28図、写真図版22)

D区赤15区の北側、尾根突端谷頭のVIB-8qグリッドに位置し、検出面はIV層上面である。当初は埋土がIV層起源のものであったため、焼土遺構と考えて精査を行ったものだが、断ち割りを行ったところ土坑と判明したものである。平面形は底面に高低差のある略楕円形が連結した不整なだるま形で、規模は開口部が100×60~50cm、底部が高低差約10cmで、2段とも径約50cm前後の略楕円形を呈し、壁は鋭角的に外傾して立ち上がり、深さは約30cmほどを測る。埋土は基本的には褐色土の単層である。底面は段差はあるものの概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S K 162土坑 (第28図、写真図版22)

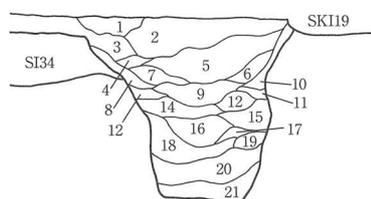
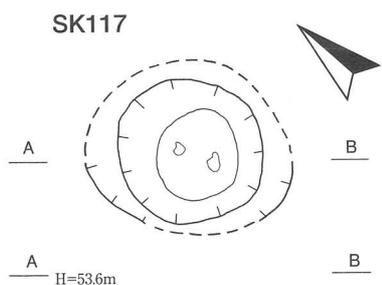
D区赤16区中央、尾根上平坦部のVIC-9hグリッドに位置し、検出面はVI層上面である。平面形・規模は、開口部径約180cm、底部径約165cmの略円形を呈し、断面形は筒形、深さ約135cmを測る。埋土はおよそ30層に細分されるが、全体的にマサ土を多く含む基本的には黄褐色系土の人為的堆積である。底面は概ね平坦で、遺物は出土しなかった。

S N13焼土遺構 (第29図、写真図版22)

D区赤16区中央、尾根上平坦部のVIC-6fグリッドに位置し、S I 34の精査中に確認した。検出時の状況から本遺構が新しく、S W52と同時期と考えられる。60×30cmの不整形の広がり、被熱により厚さ約10cmほどが赤色変化しており、中央部の焼土化が著しい。遺物は出土しなかった。(小山内)

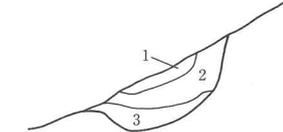
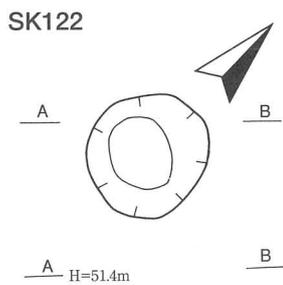
②赤17・緑11・緑12区

赤17区、緑11・12区はD区幹尾根北西部からE区谷底に至る東側斜面の中腹部分で、幹尾根からの比較的大きな2本の枝尾根(赤15・19区)に囲まれた区域である。いずれの3区域とも幹尾根から繋がる南側部分は急勾配、中央から北側部分にかけては緩斜面が続き、その後再び急勾配で緑7区谷底へと至る。赤17区は



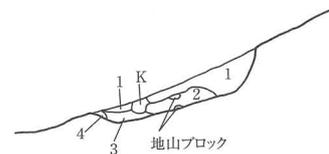
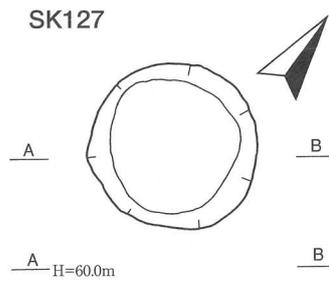
SK117

1. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有、炭化物微量
2. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
4. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有、砂質
5. 2.5Y5/3 (黄褐) しまり・粘性やや有
6. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有
7. 10YR4/4 (褐) しまり無、粘性やや有
8. 10YR3/3 (暗褐) しまり弱、粘性有、炭化物多量
9. 2.5Y5/3 (黄褐) しまり・粘性無、炭化物微量
10. 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまり無、粘性やや有、砂質
11. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり・粘性無、マサ土微量
12. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有、炭化物微量
13. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性やや有、炭化物微量
14. 10YR3/3 (暗褐) しまり弱、粘性有、炭化物多量
15. 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまり・粘性有、砂質
16. 10YR4/4 (褐) しまり弱、粘性有
17. 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまり・粘性有、褐色土多量
18. 10YR3/3 (暗褐) しまり弱、粘性やや有、炭化物少量
19. 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまり・粘性有、褐色土多量
20. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性有
21. 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまり・粘性有、砂質



SK122

1. 10YR7/6 (明黄褐) しまり・粘性有、炭化物微量
2. 10YR8/6 (黄橙) しまり極めて有、粘性有
3. 10YR5/8 (黄褐) しまり極めて有、粘性有

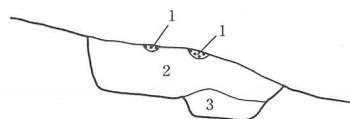
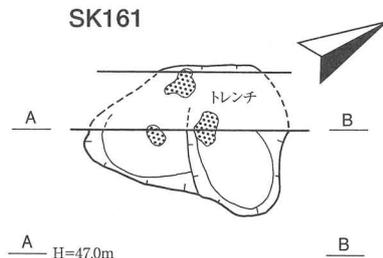


SK127

1. 10YR4/6 (褐) しまり無・粘性有、炭化物微量
2. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、焼土ブロック少量
3. 10YR4/4 (褐) しまり無、粘性有
4. 5YR4/8 (赤褐) 焼土ブロック

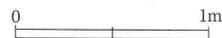
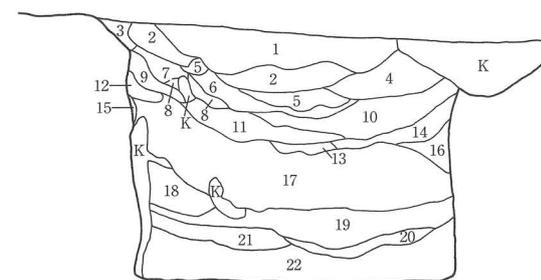
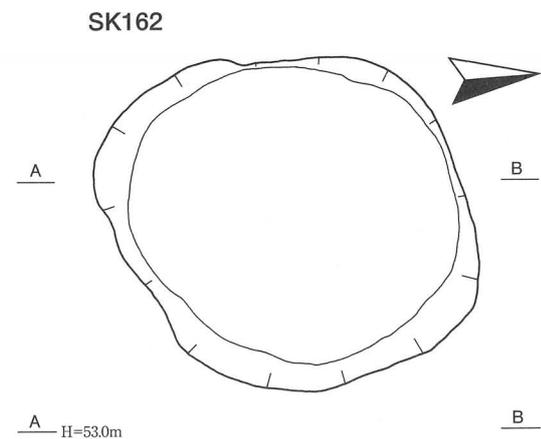
SK161

1. 7.5YR5/6 (明褐) 廃棄焼土、炭化物微量
2. 10YR4/4 (褐) しまり無、粘性有
3. 10YR4/6 (褐) しまり無、粘性有



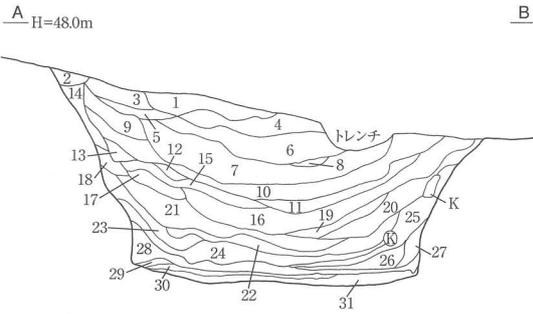
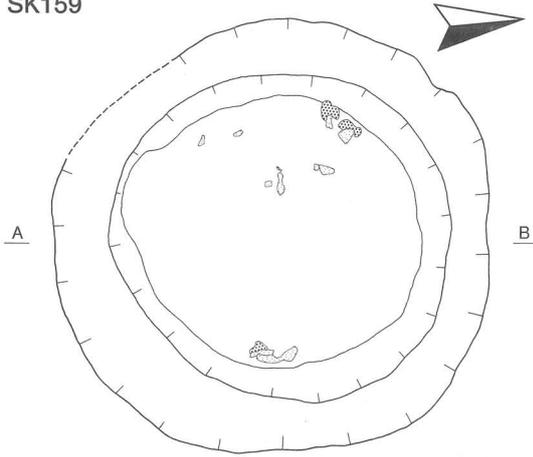
SK162

1. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性やや有
2. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
3. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性やや有
4. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
5. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
6. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり・粘性やや有
7. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり・粘性やや有
8. 10YR7/6 (明黄褐) しまり・粘性やや有
9. 10YR7/6 (明黄褐) しまり・粘性やや有
10. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり・粘性やや有
11. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり・粘性やや有、マサ土多量
12. 10YR7/6 (明黄褐) しまり・粘性無
13. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
14. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり・粘性やや有、マサ土少量
15. 10YR7/6 (明黄褐) しまり・粘性やや有
16. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性やや有、褐色土中量
17. 10YR7/6 (明黄褐) しまり・粘性やや有、マサ土多量
18. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり・粘性やや有、マサ土少量
19. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり・粘性やや有、マサ土中量
20. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有、マサ土微量
21. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
- 地山土中量、マサ土少量
22. 10YR7/6 (明黄褐) しまり・粘性やや有、マサ土ブロック少量



第28図 SK117・122・127・161・162土坑

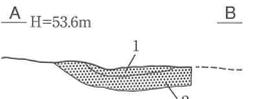
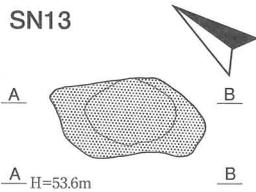
SK159



SK159

1. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性やや有、地山少量
2. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性やや有
3. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性やや有
4. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性やや有、褐色土中量
5. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性やや有
6. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性やや有
7. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性やや有、黒ボク土中量
8. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性やや有、地山ブロック少量
9. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性やや有
10. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性やや有、褐色土多量、炭化物微量
11. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性やや有、褐色土多量、炭化物微量
12. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性やや有
13. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性やや有
14. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性やや有
15. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性やや有、黒ボク土少量
16. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性やや有、炭化物微量
17. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性やや有
18. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性やや有
19. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性やや有、地山ブロック少量
20. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性やや有、炭化物微量
21. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性やや有、褐色土中量、炭化物微量
22. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性やや有、炭化物微量
23. 10YR6/8 (明黄褐) しまり・粘性やや有、炭化物微量
24. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性やや有、炭化物微量
25. 10YR5/8 (黄褐) しまりやや有、粘性有
26. 10YR6/8 (明黄褐) しまりやや有、粘性有、炭化物微量
27. 10YR5/8 (黄褐) しまりやや有、粘性有、マサ土ブロック微量
28. 10YR7/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性有、炭化物・焼土粒微量
29. 10YR6/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性有
30. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有、焼土ブロック少量
31. 2.5Y7/6 (明黄褐) マサ土 しまりやや有、粘性有

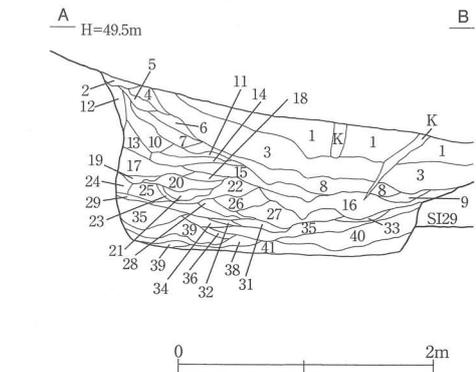
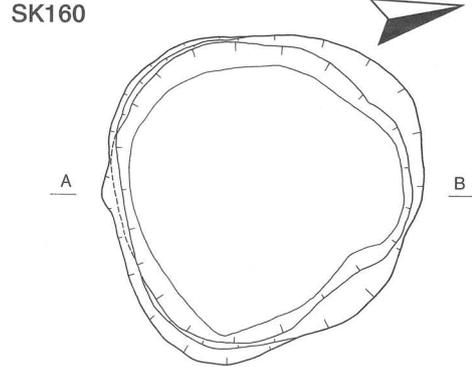
SN13



SN13

1. 7.5YR6/8 (橙) しまり極めて有、焼土
2. 5YR5/8 (明赤褐) しまり極めて有、焼土

SK160



SK160

1. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性やや有
2. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有、地山ブロック少量
3. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性やや有、地山ブロック中量、炭化物少量
4. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性やや有
5. 10YR6/8 (明黄褐) しまり有、粘性やや有
6. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性有、地山ブロック微量
7. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性有、炭化物少量
8. 10YR2/2 (黒褐) しまり有、粘性やや有、炭化物少量
9. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有、炭化物微量
10. 10YR6/8 (明黄褐) しまり有、粘性やや有
11. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性有
12. 10YR8/2 (灰白) マサ土 しまり有粘性無
13. 10YR7/4 (にぶい黄橙) 砂質、しまりやや有、粘性無、マサ土
14. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性やや有、マサ土少量
15. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性やや有
16. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、炭化物微量
17. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、マサ土、黒ボク土の混合
18. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性やや有、マサ土・暗褐色土微量
19. 10YR8/2 (灰白) マサ土 しまり有、粘性無
20. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性有
21. 10YR5/8 (黄褐) しまり有、粘性やや有
22. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有
23. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性有
24. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、マサ土微量
25. 10YR6/8 (明黄褐) しまり有、粘性やや有、砂質
26. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有、褐色土ブロック・炭化物微量
27. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有
28. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有
29. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性有、マサ土微量
30. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有
31. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有、褐色土・炭化物微量
32. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性有
33. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
34. 10YR7/6 (明黄褐) しまり有、粘性有
35. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有
36. 10YR5/8 (黄褐) しまり有、粘性やや有
37. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有
38. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性有
39. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
40. 10YR6/8 (明黄褐) しまり有、粘性やや有、暗褐色土少量
41. 10YR6/8 (明黄褐) しまり有、粘性やや有、マサ土少量

第29図 SK159・160土坑・SN13焼土遺構

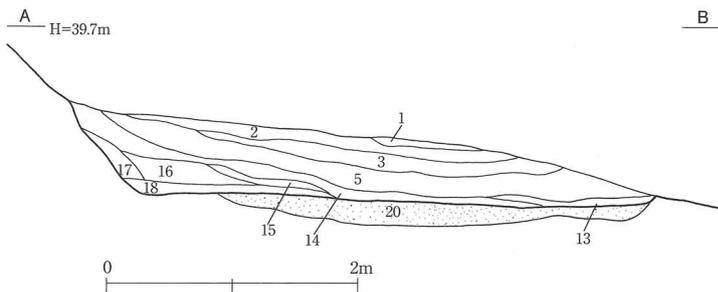
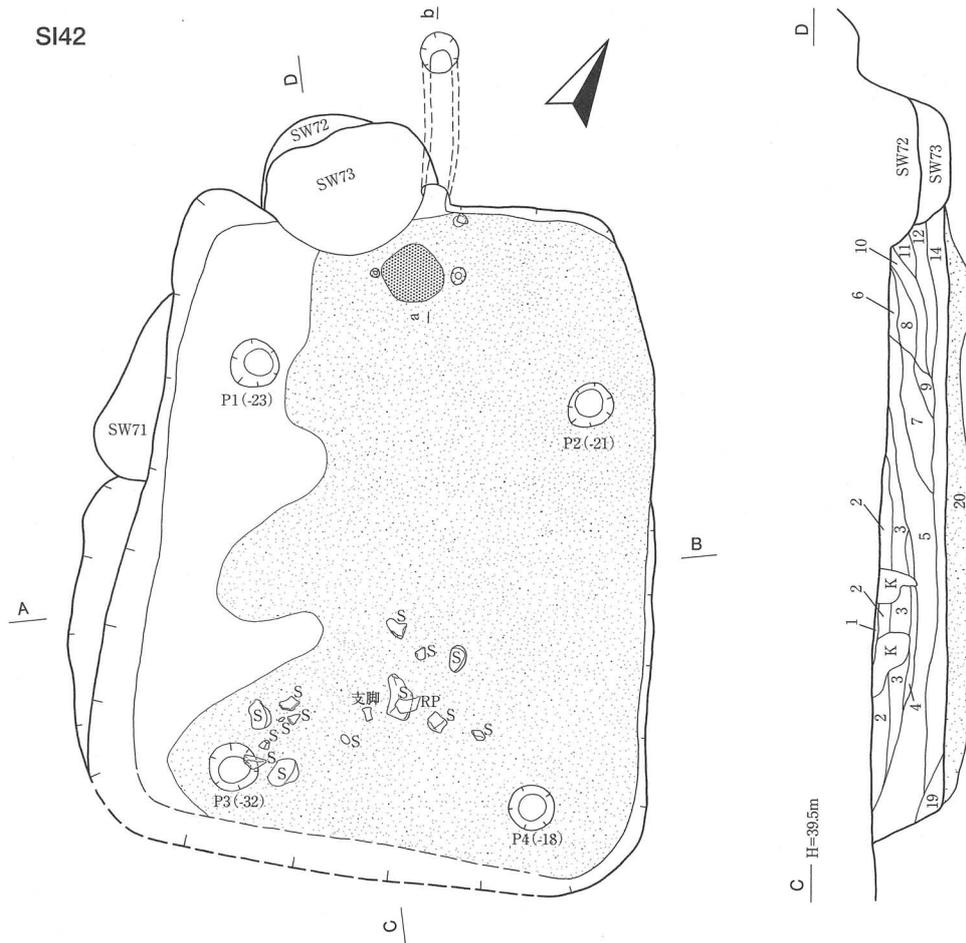
この中央部分であり、赤18区から派生する枝尾根部にあたる。赤17区は明瞭な平坦部は無く、赤18区尾根頂部と赤17区緩傾斜部では、標高約54mから45mと9mの高低差がある。赤17区尾根筋の両側には、2つの枝尾根に挟まれた洞状を呈する谷部が存在する。赤17区西側に繋がるのが緑11区、東側に繋がるのが緑12区である。緑11区は赤17区とあまり比高差の無い緩斜面が続き、谷底は南北長約50m、東西幅約5～8mと狭小である。緑12区は赤17区とは高低差約8mとややきつい勾配となっており、谷底は南北長約70m、東西幅約7～15mとなっている。また両区とも、西側の斜面である赤15区及び赤19区側からは急斜面になっている。検出面は赤17区の尾根頂部から両側の斜面ではⅣ層及びⅥ層となり、緑11・12区の谷底部分ではⅢ層が検出面となる。

検出された遺構は竪穴住居跡3棟、炭窯4基、炉跡1基、焼土遺構3基である。分布状況は、赤17区の中央から北側の尾根頂部緩斜面に竪穴住居跡及び焼土遺構がそれぞれ2基と炉跡が1基、緑11区谷底の中央に竪穴住居跡1棟と炭窯3基、緑11区谷底の緩斜面最奥部に焼土遺構1基があり、緑12区からは谷底の緩斜面最奥部の炭窯1基のみであった。遺構の大半は比較的傾斜の緩い尾根頂部や谷底に立地しており、急斜面部では遺構は検出されなかった。(小林)

S I 42竪穴住居跡 (第30・31図、遺物図版6・7・58・81・117、写真図版22・23・215・247・271・300・325)

D区緑11区谷底の中央部、VIC-13gグリッドを中心に12g・13h・14gグリッドに位置する。検出面はⅢ・Ⅳ層である。検出時の状況は、東・南壁の二辺の一部と南東隅に広がる貝層を確認できたもので、その他は不整な褐色土が広がっており、プランを特定することはできなかった。本遺構は精査過程において、SW71・72・73と重複していることが判明した。SW71は平面プランの状況、またSW72・73は埋土断面の状況が本遺構をそれぞれ切っていることから、本遺構より新しいものと考えられる。平面形は立地する地形により自然崩落しているため、斜面下方である東側の一部は消失しているが、隅丸略長方形を呈する。規模はそれぞれ西壁長約5.2m、南壁長約4.5m、北壁長約3.5m、東壁長約3.1mが残存し、残存部及び貼床範囲等から推定される規模は長辺約5.5m×短辺約4.5mである。主軸方位はN-26°-Wで、床面積は19.2㎡である。壁は西壁では崩落により外傾して立ち上がるが、その他の壁は鋭角的に立ち上がる。壁高は西壁で約65cm、南壁で約60cm、SW72・73が重複する北壁と斜面下方の東壁の残存部では、壁高約5cmを測る。埋土はおおよそレンズ状の自然堆積で19層に細分されるが、大別すると南半部上位には砂質土を含む黄褐色土系、全体中位には黒褐色土、全体下位には暗褐色土の3層に分けられる。遺構北側にはマサ土を含む黄～明黄褐色土の層位があり、断面の観察から埋土を縦に切るラインが見受けられ、SW73構築時に掘削した盛土と考えられる。また、遺構南東部には貝層が形成されている。規模は1.3㎡、層厚は約20cmを測る。貝層は認識できる範囲を廃棄単位ごとに捉え、結果全22単位・21層に細分された。これらは検出時の平面状況から、北側の小範囲と南側の比較的大きな範囲の2つの廃棄ブロックに大別できる。いずれも主にイガイ科の一種で構成されており、1・2・11・19・20層は比較的残存状態の良好な貝と破砕片が多く含まれる混土貝層、3～10・12～18層は残存状態が良好な貝で構成される純貝層、21層は破砕した貝片が多く見られる混貝土層、15層は無遺物層となっており、一次的な廃棄の後、一定期間をおいてその後、再び廃棄が行われたものと思われる。また北側と南側の2つのブロックについて、別々の層位を成すことから、分別して廃棄したものと考えられるが、出土遺存体に大きな差異はないため、これが意図的なものなのか、または時間的なものなのかは不明である。廃棄開始時期については、柱穴P4埋土中にも微小の貝片が混入していることから、住居廃絶後の下層暗褐色土の堆積時及び、埋土断面の観察からSW73構築時とほぼ同時期に廃棄され始めたものと思われる。貝層の形成状況から、廃棄は南東方向から行われており、隣接するS I 53・54に関係する可能性が考え

SI42

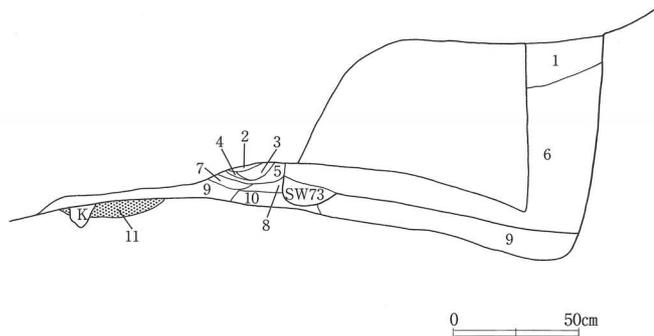


SI42

1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
2. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性極めて有、炭化物中量
3. 2.5Y6/6 (にぶい黄) しまり欠、粘性無
中央に炭化物混入
4. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり欠、粘性極めて有
5. 10YR3/2 (黒褐) しまり有、粘性やや有
6. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有
7. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無
8. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり有、粘性無
9. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無
10. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性無
11. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
12. 10YR3/2 (黒褐) しまり有、粘性やや有
13. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性有
14. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有
15. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性無
16. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有
17. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有
18. 10YR4/2 (灰黄褐) しまり・粘性有
19. 10YR2/1 (黒) しまり・粘性有
20. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性やや有、貼床

SI42 カマド

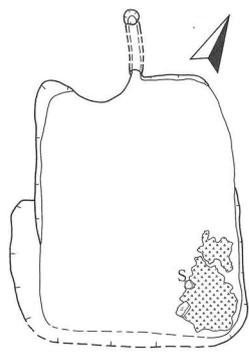
a H=39.2m



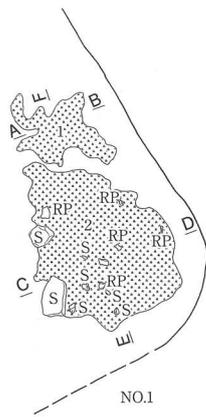
SI42 カマド

1. 10YR2/2 (黒褐) しまり有、粘性欠
2. 10YR7/8 (明黄褐) しまり・粘性極めて有
3. 10YR4/8 (明褐) しまり極めて有、粘性やや有、崩落焼土
4. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有
5. 7.5YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性有、崩落焼土塊
6. 10YR3/3 (暗褐) しまり欠・粘性有
7. 10YR7/6 (明黄褐) しまり・粘性有
8. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有
9. 10YR5/8 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
10. 10YR3/2 (黒褐) しまり有、粘性欠
11. 5YR5/8 (赤褐) 燃焼部焼土

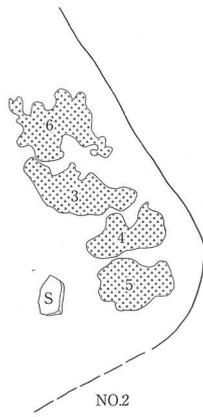
第30図 SI42竪穴住居跡(1)



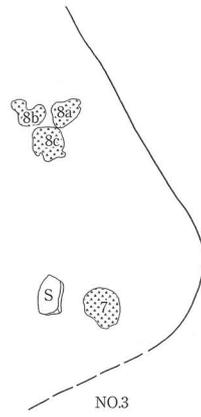
SI42貝層検出状況



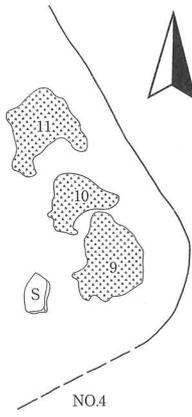
NO.1



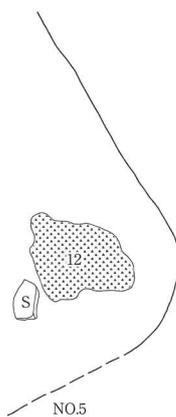
NO.2



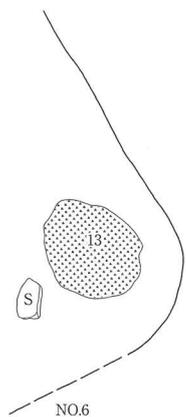
NO.3



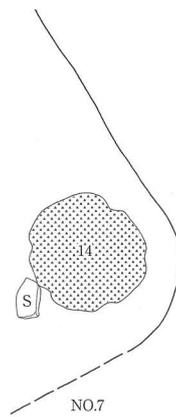
NO.4



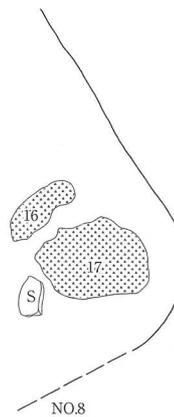
NO.5



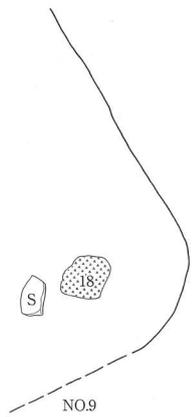
NO.6



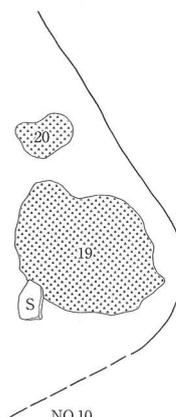
NO.7



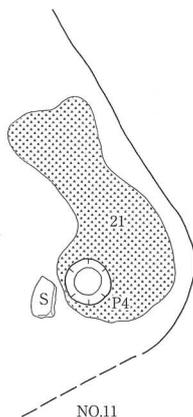
NO.8



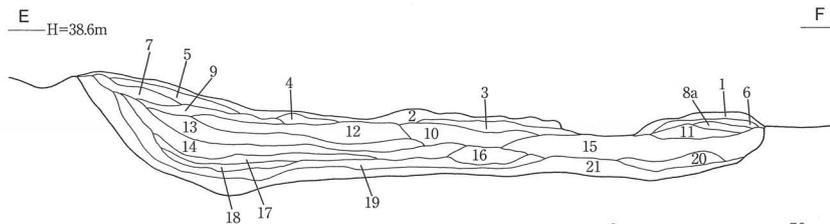
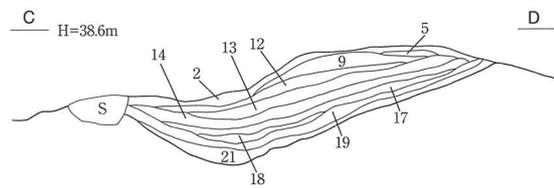
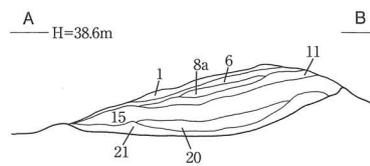
NO.9



NO.10



NO.11



- SI42貝層
- | | |
|------------|-------------------|
| 1. 混土貝層 | 12. 純貝層 |
| 2. 混土貝層 | 13. 混土貝層 |
| 3. 純貝層 | 14. 純貝層 |
| 4. 純貝層 | 15. 10YR3/4 (暗褐色) |
| 5. 純貝層 | 16. 無遺物層 |
| 6. 純貝層 | 17. 純貝層 |
| 7. 純貝層 | 18. 純貝層 |
| 8a~8c. 純貝層 | 19. 混土貝層 |
| 9. 純貝層 | 20. 混土貝層 |
| 10. 純貝層 | 21. 混土貝層 |
| 11. 混土貝層 | |

第31図 SI42竪穴住居跡(2)

られる。床面は平坦で堅くしまり、西壁沿い以外の部分で貼床が認められる。遺構の四隅には柱穴P 1～4の4基が確認でき、その配置状況・規模から主柱穴と思われる。

カマドは遺構北壁のほぼ中央に位置する。本体部はS W72・73と住居廃絶時の人為的な破却により大半は損壊しており、燃焼部と袖部の痕跡のみが確認できる。燃焼部は平坦で窪みは無く、厚さ6cm、径約45cmの円形状の赤褐色焼土が広がる。燃焼部の両脇には円形の掘り込みが認められ、袖部の芯材として用いた石の抜き取り痕と思われる。壁際に残存する自然石1個も同様に袖部の芯材と考えられる。煙道は削り貫き式で奥行約120cm、径約20cmを測り、先端に向かって下り勾配である。煙出は径25～30cm、深さ約90cmを測り、垂直に掘り込まれている。

遺物は、土器が大2袋程出土し、その大半は土師器の甕形土器・坏形土器片で、埋土中や床面から出土し、その他、床面から須恵器の甕形土器片数点、鉄製品1点、支脚1点(1)と鉄滓が出土している。

S I 53 竪穴住居跡 (第32図、遺物図版6・117、写真図版23・214・300)

D区赤17区北側の尾根頂部緩斜面、VIC-16g・16h・17gグリッドに位置し、検出面はIV層及びVI層上面である。本遺構の斜面下方である北側のほとんどは自然崩落しており、遺存状態は不良である。遺存する平面形は大略隅丸長方形を呈し、規模は南壁約4.5m、西壁約1.8m、東壁約1mが遺存するが、貼床範囲から短軸は3.5m以上と推定される。主軸方位はW-4°-Nにあり、床面積は推定11.9㎡である。壁は遺存する箇所では鋭角的に立ち上がるが、前述の通り斜面下方の北壁は遺存しない。壁高は南壁で約60cm、西壁で約25cm、東壁で約5cmが遺存する。埋土は5層に細分されるが、基本的には褐色土系の自然堆積である。1層面にはSN16焼土遺構が本遺構と重複しているが、直接的な関連性は認められず、本遺構埋没後のものと思われる。床面は平坦で締まりがあり、斜面下方の北側には貼床が施されている。柱穴はP1～4の4基を検出したが、P4はカマド燃焼部から約30cmの近距離にあることから疑問が残る。また遺構中央には、明赤褐色の地床炉とその南側には55×45×20cmの石が存在する。両者の位置関係から鍛練鍛冶の炉跡の可能性を考慮し、周辺の土のサンプリングを行ったが、鍛造剥片は抽出されなかった。また断面観察により、周辺床面は度重なるクリーニング作業のために掘り下がっており、石と床面の間には床面とは異なる土が1層存在することから、石下には浅い掘り込みがあったものと思われる。

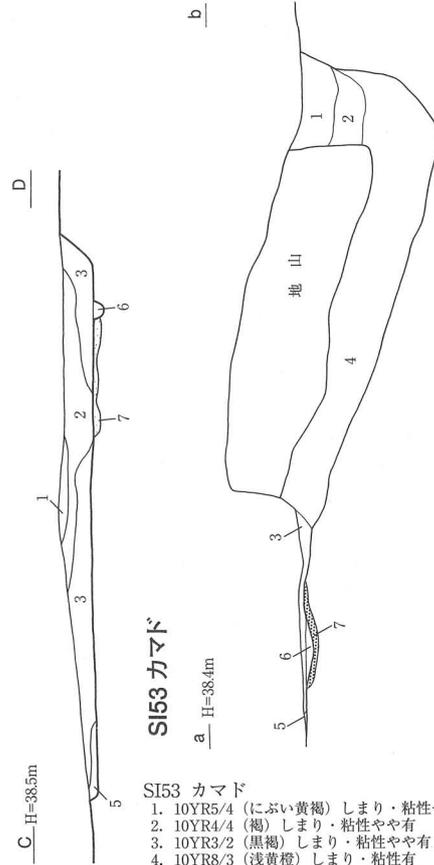
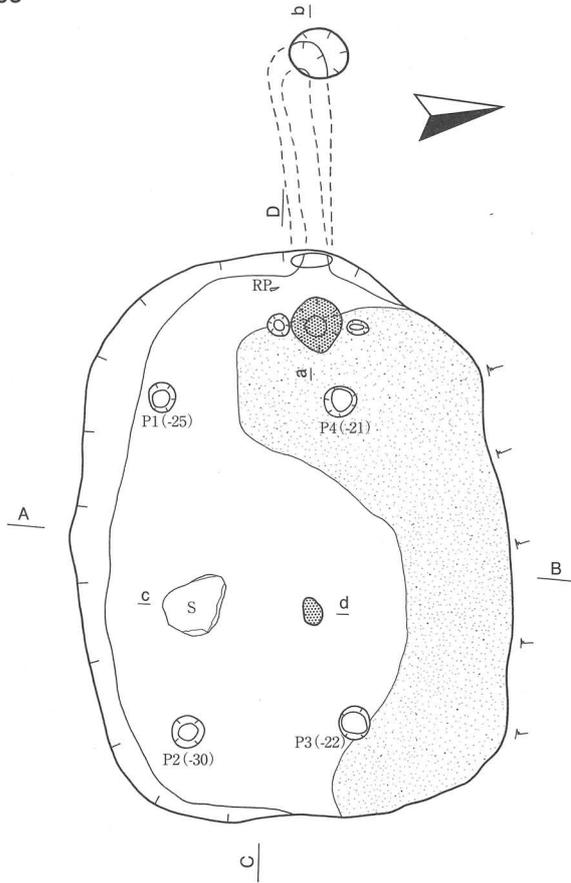
カマドは遺構西壁のほぼ中央に位置している。カマド本体は崩落により遺存せず、燃焼部のみ確認できる。燃焼部は径約40cmの略方形で、厚さ3cm程度の橙色焼土が広がる。その両側には円形と楕円形の窪みがあり、袖の芯材の抜き取り痕と思われる。煙道は奥行約180cm、径約20cmの削り貫き式で、先端に向かって下り勾配である。煙出は径約45cmの略円形を呈し、深さ約55cmで垂直に掘り込まれている。

遺物は、埋土中より土師器の甕形土器片が約10点と須恵器の甕形土器の体部片が7点、また鉄製品として床面より刀子と平成10年度試掘調査時に検出面より鉄鏃(9)が出土している。

S I 54 竪穴住居跡 (第33・34図、遺物図版6・60・80、写真図版24・215・249・270・271・311)

D区赤17区北側の尾根頂部緩斜面、VIC-16e・16f・17e・17fグリッドに位置し、検出面はIV層及びVI層である。本遺構はS I 53同様、斜面下方である北側は自然崩落しているため遺存状態は悪い。遺存する平面形は大略隅丸長方形を呈し、規模は南壁で約5.1m、東・西両壁遺存部で約3mを測るが、貼床範囲から短軸は4.4m以上と推定される。本遺構にはカマドが2基存在する。遺存状況から、新しい方をカマドA、旧い方をカマドBとした。主軸方位はW-14°-N(カマドA)、W-15°-N(カマドB)で、床面積は推定19.4㎡である。壁は遺存部では外傾して鋭角的に立ち上がり、壁高は南壁で約50cm、東・西壁で10cm前後を測る。埋土は斜面上方から流入した自然堆積と思われ、4層に細分される。遺構南西部の床面には廃棄され

SI53

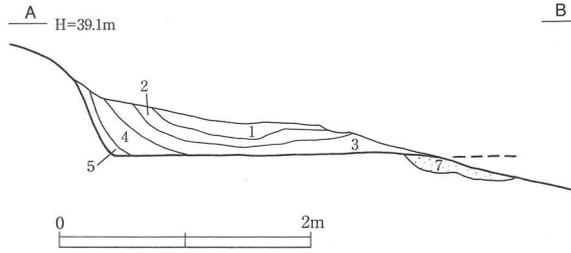


SI53 カマド

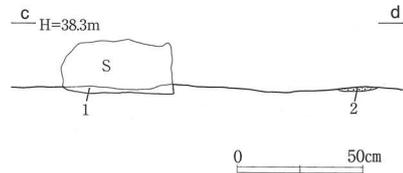
a H=38.4m

SI53 カマド

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
2. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性やや有
3. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性やや有
4. 10YR8/3 (浅黄褐) しまり・粘性有
5. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性やや有
6. 7.5YR5/6 (明褐) しまり極めて有、粘性有、天井部崩落焼土
7. 5YR6/8 (橙) 燃焼部焼土



SI53 地床炉



SI53

1. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無、マサ土混入
2. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性無、明黄褐色土混入
3. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有
4. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性無
5. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性無、黄褐色土混入
6. 10YR5/6 (黄褐) 芯材の抜き取り痕
7. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有、貼床

SI53 地床炉

1. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性無
2. 5YR5/8 (明赤褐) 焼土

第32図 SI53竪穴住居跡

たと思われる炭化物が堆積していた。また埋土1層にはS N17が重複しており、その様相は本遺構斜面上方に位置するS N16と類似する。床面は平坦で堅く締まり、遺構北側と西側にはL字型に貼床が施されている。床面施設として遺構北西部には土坑K 1が掘り込まれている。平面形は略円形を呈し、規模は開口部径約155~180cm、底部径約130cmを測る。断面形は平底鍋形を呈し、深さは約60cmを測る。埋土はレンズ状の自然堆積で7層に細分される。また埋土1層中には30cm大の自然石が数個含まれている。底面は平坦である。カマドに近いK 1南側には張り出し部分があり、昇降の施設であった可能性が考えられ、カマドとの位置関係から貯蔵穴であったと思われる。

カマドは2基並行して西壁に付設されている。両カマドとも自然流土により削平されており、煙道・煙出部の残存状態は不良である。カマドAは西壁の中央からやや南側に位置する。本体天井部は崩落しているが、天井部の架構に使用したと思われる15~25cm大の自然石2個と、袖部芯材に用いたと思われる10cm大の自然石1個がカマド中央に点在している。袖部には芯材として石が使用され、明黄褐色土で構築されている。燃烧部は約25×15cmの略楕円形を呈し、皿状に窪み、厚さ4cm程の橙色焼土が広がる。煙道は奥行約150cm、径約25cmの削り貫き式で、先端へほぼ真直ぐ向かう。残存する煙出は径約30cmの略円形で、深さは約20cmである。カマドBは遺構西壁のほぼ中央に位置する。カマドAへの造り替えのためほとんど遺存しないが、貼床を剥がしている際に床面下約5cm程で燃烧部の遺存部分を検出した。不整な橙色焼土の広がり、厚さは1cm程が遺存している。煙道は前述の通り削平されているため詳細は不明だが、奥行約130cm、径約30cmが残存し、断面の状態から削り貫き式と思われる。煙出は特定できず不明である。以上のことから考察すると、カマドA・Bの高低差は5cm以下であり、カマドBの遺存する燃烧部焼土下にも住居本来の貼床が施されていることから、カマドA構築時にカマドBを壊し、カマド周辺にのみ新たな貼床を施して、カマドAを構築した造り替えと考えられる。

遺物は、土器は中袋で1袋程出土し、そのほとんどが土師器の甕形土器片である。主なものとして、甕形土器3点(30・31・32)と、床面RP1の台付坏形土器1点(33)がある。また、須恵器の口縁部片が4片出土している。その他、磨石5点(20~25)と羽口1点(6)が埋土中より、不明鉄製品が床面より1点、鉄塊系遺物が床面より2点、鉄滓が埋土中より少量出土している。(小林)

S W67炭窯 (第35図、写真図版25)

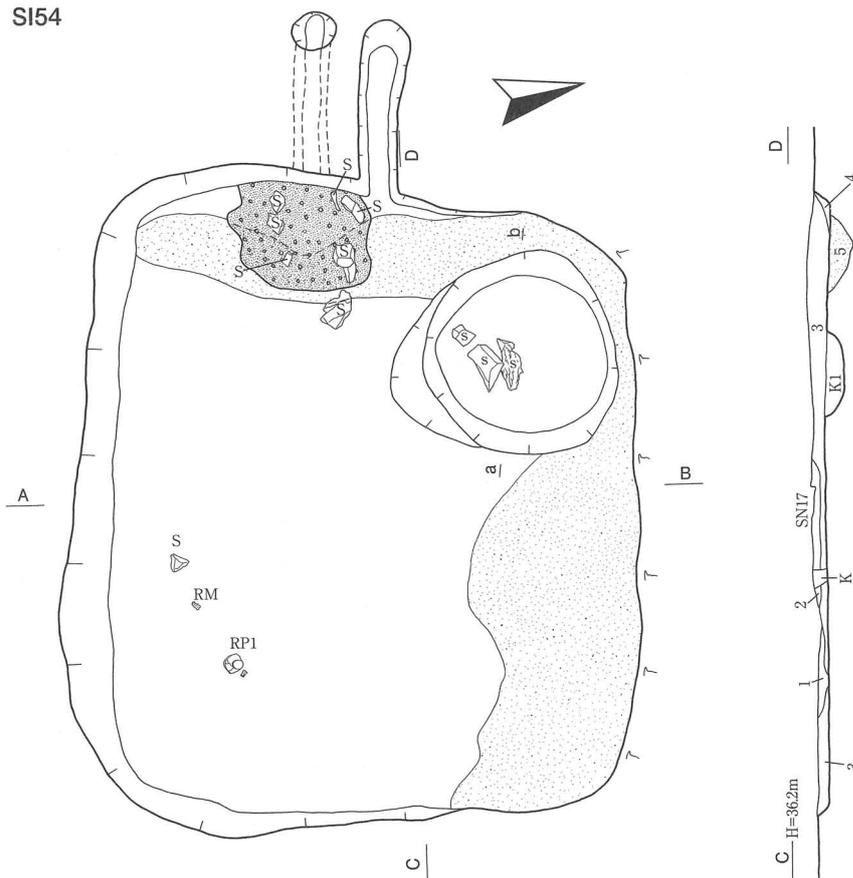
D区緑12区の南部斜面、VIC-2kグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。遺構の北側半分がトレンチにより上部が削平を受けていることと、壁の一部を誤って掘り抜けてしまい不明となった部分がある。平面形・規模は長方形を呈し、開口部約480×140cm、底部約460×120cm前後と推測される。長軸方向は北北東-南南西にあり、等高線と平行する。残存する壁はほぼ直角に立ち上がり南東山側で約60cm、北西谷側はトレンチによる削平を受けており明確ではない。埋土は黒色土系の2層で斜面上方より流れ込んだ自然堆積であり、最下層には炭化物層がある。底面はほぼ平坦であるが、火熱を受け焼土化した部分は確認できなかった。底面に焼土化した部分はみられないが、平面形及び炭化物層の形状から炭窯と判断した。

遺物は出土せず、炭化物は分析の結果クリと判明した。(赤石)

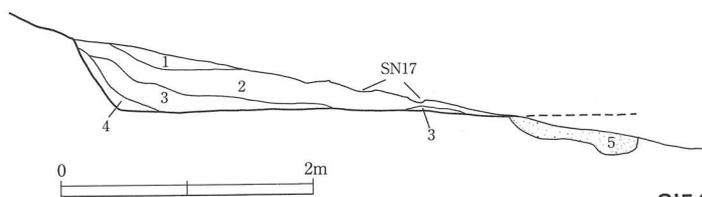
S W71炭窯 (第35図、遺物図版7、写真図版25・215)

D区緑11区谷底の中央部、VIC-13gグリッドに位置する。本遺構はS I 42精査途中で炭化物の広がりを検出したことにより確認できたため、残存部は遺構下半部のみである。重複関係は本遺構がS I 42を切っている。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部約175×85cm、底部約135×50cmを測り、長軸方向は北-南にある。残存する壁は外傾して緩やかに立ち上がり、壁高は約10cmを測る。埋土は単層で、細かい炭化物を

SI54



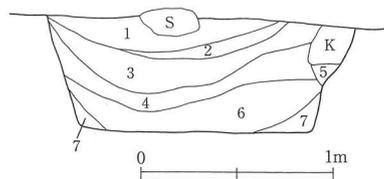
A H=37.0m



B

SI54 K1

a H=36.1m



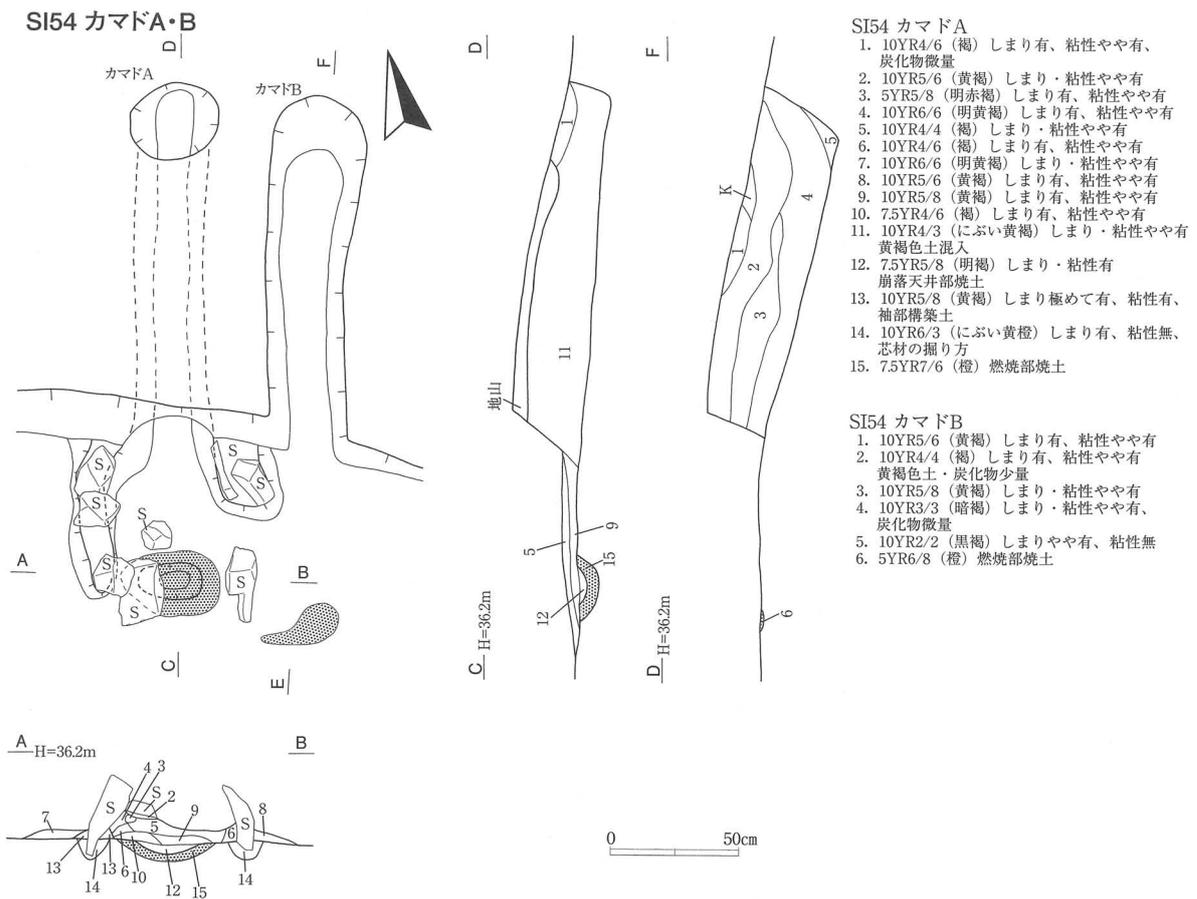
SI54

1. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性やや有
2. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性やや無、炭化物微量
3. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有、
にぶい黄橙色ブロック少量
4. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり・粘性無
5. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり欠、粘性無、貼床

SI54 K1

1. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性無
2. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり・粘性無
3. 10YR4/2 (灰黄褐) しまりやや有、粘性無
4. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
5. 10YR8/3 (浅黄橙) しまりやや有、粘性無
6. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性無、炭化物微量
7. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり・粘性やや有、壁崩落土

第33図 SI54竪穴住居跡(1)



第34図 SI54竪穴住居跡(2)

多量に含んでいる。底面は平坦で極めて堅く締まり、底面から壁面にかけて厚さ1cm以下の赤褐色焼土が広がる。

遺物は、土師器の甕形土器片数点と須恵器の甕形土器片1点(49)が出土している。

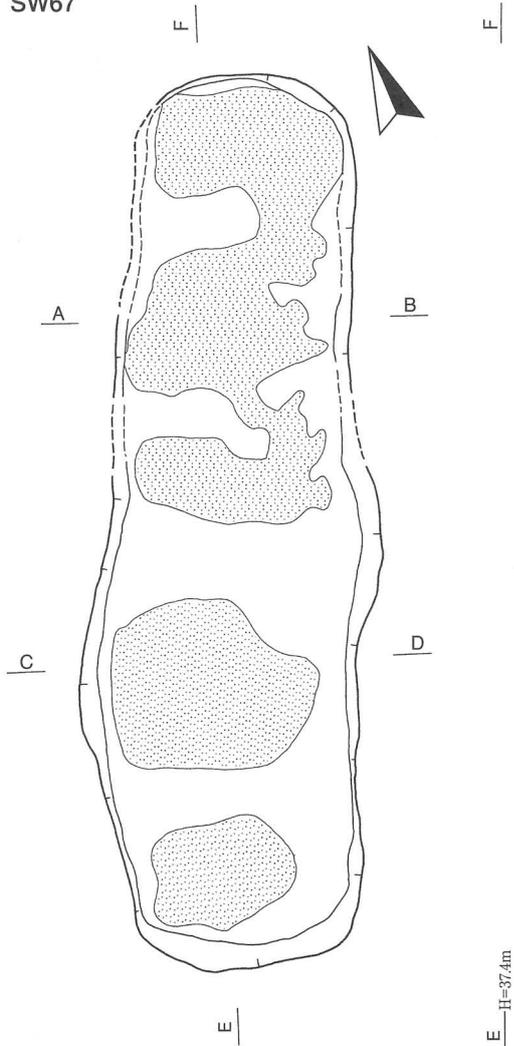
S W72炭窯 (第35図、写真図版25)

D区緑11区谷底の中央部、VIC-13gグリッドに位置する。本遺構はS I 42北側の精査途中に検出したもので、S I 42、S W73を切っている。埋土断面の観察から、埋没過程のS W73の窪地を利用したものと考えられる。平面形は略円形を呈し、規模は開口部径約140cm、底部径約100cmを測る。壁は外傾して緩やかに立ち上がり、断面形は鍋形を呈する。壁高は北西側で約50cm、S I 42と重複する壁で約20cmを測る。埋土は2層に分かれ、それぞれに炭化物を含む。底面はほぼ平坦で、遺構南西には厚さ1cm程度の赤褐色焼土が壁面まで広がる。以上により、本遺構は炭窯であると判断した。遺物は出土しなかった。

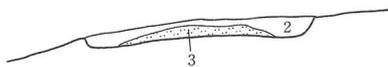
S W73炭窯 (第35図、写真図版25)

D区緑11区谷底の中央部、VIC-13gグリッドに位置する。本遺構はS I 42北側の精査過程で検出したもので、S I 42、S W72と重複する。その新旧関係は埋土断面の状況から、S I 42より新しくS W72より古い。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部約140×110cm、底部約110×80cmで、長軸方向は北東-南西にある。断面形は鍋形を呈し、壁高は約25cmを測る。壁の一部には土を貼ったと思われる部分があり、厚さ2～4

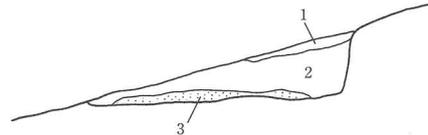
SW67



A H=37.3m



C H=37.6m

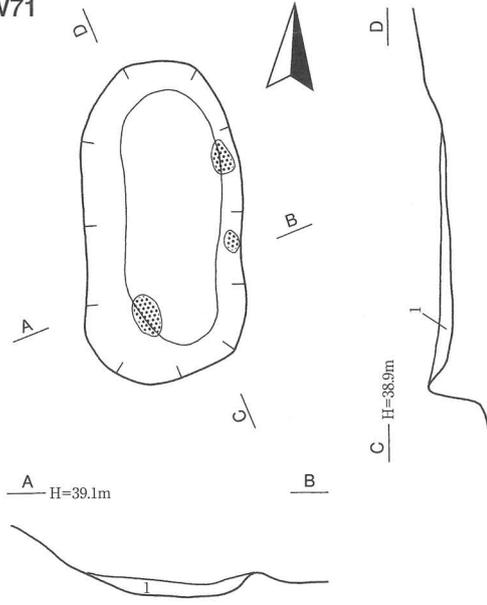


SW67

1. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性無
2. 10YR2/1 (黒) しまりやや有、粘性無
炭化物少量
3. 10YR1.7/1 (黒) 炭化物層



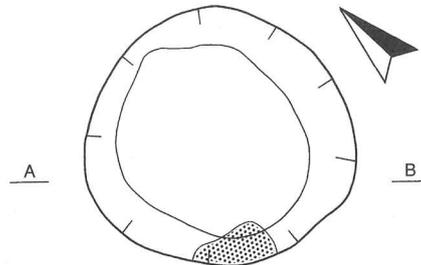
SW71



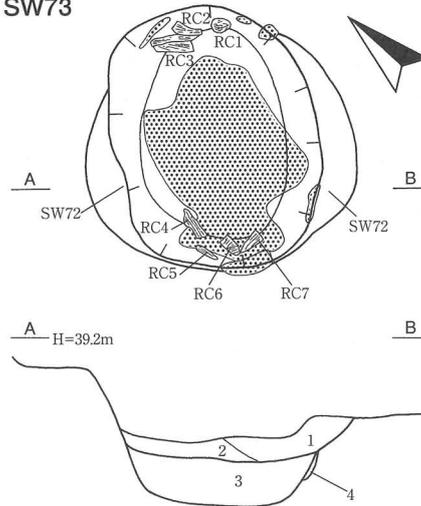
SW71

1. 10YR3/1 (黒褐) しまり欠、粘性有、炭化物層

SW72



SW73



SW72

1. 10YR2/2 (黒褐) しまり有、粘性無、炭化物中量
2. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無、炭化物少量

SW73

3. 10YR1.7/1 (黒) しまり・粘性やや有、炭化物・材含む
4. 5YR6/8 (橙) 焼土

第35図 SW67・71・72・73炭窯

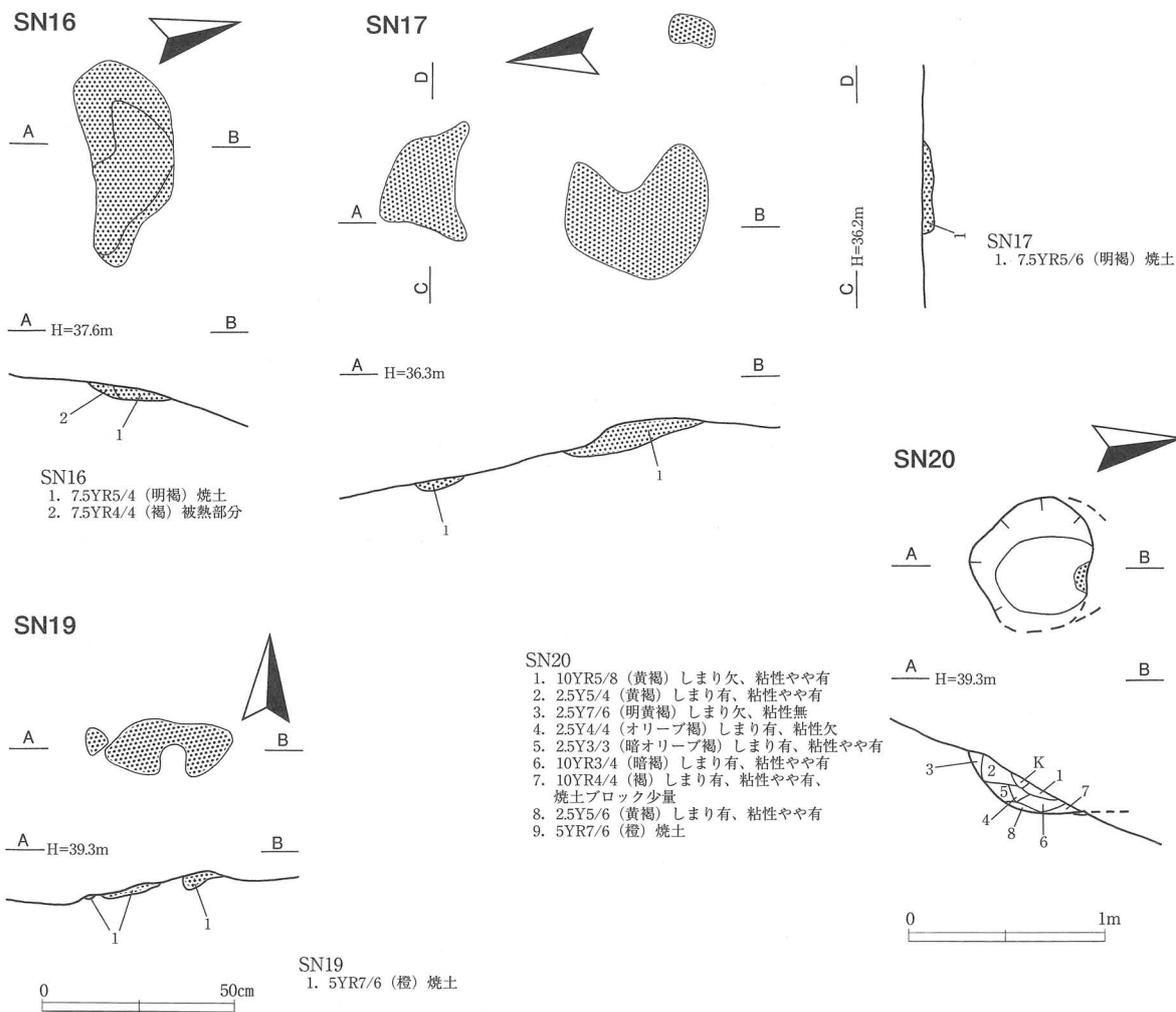
cmで橙色を帯びている。埋土は黒色土の単層で全体に炭化物を含み、下位及び底面には炭化材（RC1～7）が残存している。またSI42埋土断面の観察から、本遺構は埋没過程にあるSI42北側を掘削し、その土を盛って南壁を構築したものと推測される。底面は平坦で極めて堅く締まり、底面中央から南側壁面にかけて、厚さ1cm以下の赤褐色焼土が不整に広がっている。以上により、本遺構は炭窯であると判断した。遺物は炭化材のみで、RC7を鑑定した結果、クリであることが判った。

SN16焼土遺構（第36図）

D区赤17区北側の尾根頂部緩斜面、VIC-16gグリッドに位置する。本遺構はSI53検出時に同時に検出したもので、SI53埋没後に行った行為による被熱痕跡と思われる。不整な明褐色焼土の広がりで、規模は約40×15cmを測る。厚さは約3cmで堅く締まる。明褐色焼土の周囲は褐色に変色しており、被熱が及んだものと考えられる。遺物は出土しなかった。

SN17焼土遺構（第36図）

D区赤17区北側の尾根頂部緩斜面、VIC-16fグリッドに位置する。本遺構はSI54検出時に同時に検出したもので、SI53埋没後の被熱痕跡であると思われる。本遺構の状況は斜面上方に位置するSN16と類似



第36図 SN16・17・19焼土遺構・SN20炉跡

しており、何らかの関連性が考えられる。不整な明褐色焼土の広がり方が3ヶ所に点在しており、規模はそれぞれ、約35×25cm、約25×20cm、約12×7cmである。厚さは3～7cm程で極めて堅く締まる。遺物は出土しなかった。

S N19焼土遺構（第36図）

D区緑11区谷底の緩斜面最奥部、VIC-15hグリッドに位置し、検出面はIV層である。不整な橙色焼土の広がり方で、規模は約35×10cm、厚さは約2～4cmで堅く締まる。遺物は出土しなかった。

S N20炉跡（第36図、写真図版25）

D区赤17区北側の尾根頂部緩斜面、VIC-16hグリッドに位置し、検出面はVI層上面である。検出時、斜面下方の北側に焼土を確認したため焼土遺構と考えたが、精査の結果、掘り込みをもつことから炉跡と判断した。また傾斜により自然削平されているため、斜面下方の北側は遺存しない。平面形は崩落により歪な円形であるが、底部は楕円形を呈する。規模は開口部径約65cm、底部は約50×40cmが遺存する。壁は遺存する斜面上方の南側では外傾して緩やかに立ち上がり、深さは約35cmを測る。埋土は8層に細分される。底面はほぼ平坦で、遺構北側には厚さ1cm程度の三日月形をした橙色焼土がある。遺存する焼土の形状からも、自然崩落によりその大半を消失したことが推測される。遺物は出土しなかった。（小林）

③赤18～22区

赤18区は尾根先端部の赤15・16区の南側に続く部分で、標高50～56m地点であり、平坦部のない尾根筋で構成され、上りながら赤20区に続く。赤18区の中央部には一段下がった部分から北側に延びる枝尾根がある（赤17区）。赤20区は赤18区から南に急傾斜を上る地点から始まる。上りきった標高60mほどの小さい尾根の頂部周辺と、続く南に緩やかに下る狭い尾根からなる。尾根頂部から南におよそ7mにわたって尾根幅5～6mの平坦部があり遺構が集中する。尾根頂部からは北方向に一段下ったところから弓状に延びる枝尾根をもつ。この枝尾根部分が赤19区であるが今回の調査で遺構は検出されず、本文記載からは一応除外する。赤21区は赤20区の南下する尾根部分と連続し、急勾配の上りに転じる地点から始まる。急勾配を上りきった部分から緩やかに南方に10mほど上る尾根幅およそ7～8m、標高約70～75mの北側平坦部が広がる。さらに幅を狭めながらおよそ10mほど緩斜面が続く（中央緩斜面）、再び南方に10～12m尾根幅およそ6～7m、標高約80m前後の南側平坦部を形成する。平坦部はここで終わり、南西側にやや広い斜面をもち尾根は再び幅を狭め南に上りつめた所で赤22区となる。赤21区は平面的には大きく北側平坦部・中央緩斜面・南側平坦部・南西斜面の4区分することができる。赤22区は前述のV字の尾根の要の部分にあたる。本年度調査区的最南端にあたり、標高も86m前後を測り一番高い地区である。尾根頂部は尾根幅およそ6～7m、南北方向に8～10mの平坦面となっており、続く北方向にはV字形のもう一方の尾根が延びる（F区）。

遺構は竪穴住居跡・竪穴状遺構・炭窯・土坑・鉄生産関連炉跡・焼土・溝跡などがあり、平坦部を中心に遺構が集中している。赤18区は平坦部が無いいためか遺構は少なく、赤20区に近い南側東斜面上の炭窯1基のみの検出である。赤20区は平坦部分に遺構が集中し竪穴住居跡2棟、それに重複する炭窯5基、独立した炭窯1基、焼土遺構が1基検出された。赤21区は前述の北側、南側の両平坦部を中心に遺構が集中する。北側平坦部には竪穴住居跡3棟、炉跡1基、土坑1基、南側平坦部には竪穴住居跡2棟、炭窯1基、炉跡1基、土坑1基、中央緩斜面部には竪穴住居跡1棟、竪穴状遺構2棟、炭窯1基、炉跡1基、土坑1基、焼土遺構2基、南側平坦部に続く南西斜面には竪穴住居跡2棟、炭窯1基、炉跡1基、土坑1基が検出された。赤22区は頂部の平坦地と続く斜面部分の東側に竪穴住居跡がそれぞれ1棟検出されているが、平坦部の竪穴住居跡からは、住居を切る形で炭窯と鉄生産関連炉跡が検出された。各区にみられる平坦部には必ず竪穴住居が

建てられており、居住空間として尾根部の条件の良い平坦部から住居を建てていったものと考えられる。炭窯も平坦部に立地するものは規模が大きく堅穴住居の埋まりきる前の窪み等を利用して何度も造り替えられた形跡がある。焼土は住居から遠くない緩やかな斜面にみられ、掘り込みを持つ炉跡も同様にみられる。なんらかの屋外作業を想像させる配置である。 (赤石)

S I 25堅穴住居跡、S W45A～D炭窯 (第37・38図、遺物図版7・81・117、写真図版26・215・271・300)

D区赤20区中央の尾根頂部、ⅦD-6b・6cグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。検出時の状況から、当初は堅穴住居跡とその北側の崩落部分と思われたが、精査を進めるうちに住居の北側壁部分から重複する4基の炭窯(S W45A～D)が連続して検出された。これらの新旧関係は、S I 25がいずれの炭窯よりも旧く、また4基の炭窯については、平面形及び断面観察の結果から、(旧) S I 25→S W45C・S W45D→S W45B→S W45A(新)であることが判った。これらの炭窯は一度遺棄された堅穴住居跡の窪みを幾度か再利用した一つの典型であるといえる。以下、新しい遺構の順に追って詳細を説明する。

S W45Aの平面形はS I 25の精査を進める中で壁の一部を掘り抜けてしまい不明になった部分があるため、西半分が長方形、東半分が楕円形を表わすやや変則的な形状となってしまった。規模は開口部約400×120cm前後と推測され、底部約370×90cmを測る。長軸方向は北東-南西にあり、S I 25の北壁とほぼ平行する。壁は外傾して立ち上がり、壁高は北壁で約40cm、南壁で約15cmである。埋土は褐色土が主体の5層で全体的に炭化物粒を含み、最下層には炭化物層がみられる自然堆積である。炭化物の一部は南側に流出している。底面はやや凹凸がみられ、中央からやや東よりの部分に火熱により赤色変化した厚さ3～5mm程度の焼土が認められた。遺物は出土せず、炭化物は分析の結果クリと共にナラも確認された。

S W45Bは、当初はS W45Aの一部との認識で精査を行ったが、底面及び断面の状況から別遺構と判断した。平面形は南側部分を中心にかなりの部分がS W45Aに切られているため全容は不明ではあるが、残存部分から長方形を呈すると推測される。規模は開口部約350×110cm前後、底部で約320×100cm前後と推定され、長軸方向は北東-南西にあり、S I 25の北壁とほぼ平行する。北側の壁はほぼ垂直に立ち上がり壁高は約30cmを測る。残存部分の東壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は約20cmを測る。埋土は砂混じりの褐色土が主体の8層で、最下層には炭化物が点在する自然堆積である。底面はほぼ平坦で堅く締まり、数度のクリーニングで消える程度の極めて弱く火熱変化した焼土が部分的に確認された。遺物は出土せず、炭化物は分析の結果クリと判明した。

S W45Cは、S W45A及びBの精査終了後にこれらの直下で検出された。調査員の指示不足により、西壁の一部を誤って掘り下げてしまい不明となった部分があるが、平面形は長楕円形を呈し、規模は開口部約310×140cm前後、底部約280×120cm前後と推測される。長軸方向は北東-南西でS I 25の北壁とほぼ平行する。残存する壁はやや外傾して立ち上がり、北壁で約30cm、南壁で40cm、東壁で約20cmを測る。埋土は褐色土系で12層に細分される自然堆積で、全層に炭化物粒が含まれており、最下層は炭化物層である。底面はS I 25側に幾分傾斜しており、明確な焼土は認められなかった。出土遺物はなく、炭化物は分析の結果クリと判明した。

S W45Dは、S W45B検出時ではこの壁の崩落部分と思われたが、掘り上がりの形状及び床面の状況から別遺構と判断した。平面形・規模及び埋土については北山側の壁と底面の一部がわずかに残っているだけであり大半が不明である。北壁は外傾して立ち上がり、約30cmを測る。床面は平坦で上面にわずかに炭化物が見られたが焼土は認められなかった。以上の状況からだけでは本遺構を炭窯と断定しにくい、この地点は繰り返し炭窯の形成・廃棄が行われており、立地面からも炭窯とするのが妥当と思われる。出土遺物

はなかった。

S I 25は、北壁が前述の通り重複する炭窯群に切られているため大半が消失しているが、遺存する部分での平面形はおよそ隅丸方形を呈し、規模は北側壁長で約4.1m、南側壁長で約3.8m、東側壁長で約3.9m、西側壁長で約3.8mを測る。主軸方位はN-33°-Wで、床面積は12.8㎡である。壁はやや外傾して立ち上がり東壁上位は崩落のため更に開く。壁高は東壁が約70cm、西壁が約50cm、南壁が約50cm、北壁は残存する部分で約10cmを測る。埋土は14層に細分され、埋土上位の黒褐色土系と下位の褐色土系、壁際のマサ土の崩落土に大別できる。北側中位の黄褐色土には炭化物粒が混じり、重複する炭窯の木炭を掻き出したものと考えられる。北側の数度にわたる炭窯の構築に関わる部分は人為的に堆積していると思われるが、その他の部分は自然堆積である。床面は平坦で堅く、貼床は南側と西側の壁際沿いにU字状に施されている。床面施設としては柱穴ピット4基が検出され、そのうち3基は配置・規模から支柱穴と思われる。またカマド西側に隣接する形で土坑1基(K1)が検出された。土坑の規模は開口部約85×70cm、底部約50×40cm、深さ約10cmを測り皿状である。この土坑はS I 25の北壁の一部を切っており、位置的にS I 25に伴う施設とは限定しがたい点は残る。

カマドは北壁の中央からやや西に寄った位置に付設されているが、カマド本体上部がSW45Cにより削平を受けており遺存状態は良くない。遺存部分の西側袖では芯材として使用されたとと思われる土器片が確認され、東側袖では芯材の抜き取り痕が確認された。燃焼部には直径50cmほどの不整な円形で、厚さ3～4cmの橙色焼土が広がる。焼土の中央部には支脚に使用されたとと思われる長さ20cmほどの細長い角石が食い込むように埋まっていた。煙道と煙出も同様に削平を受けて共に上部が消失している。煙道は削り貫き式であり、長さ約120cmである。勾配はほとんどない。煙出部は残存部分で径約30cm、深さは約100cmでほぼ垂直に掘り込まれていた。

遺物は須恵器の体部片が埋土上層から1点(51)、土師器の甕形土器はカマド芯材としていたRP1が接合して1点(50)と破片が小袋で1袋、坏形土器片2点、筒状鉄製品が埋土下層から1点(11)、鉄滓が埋土中から少量出土している。

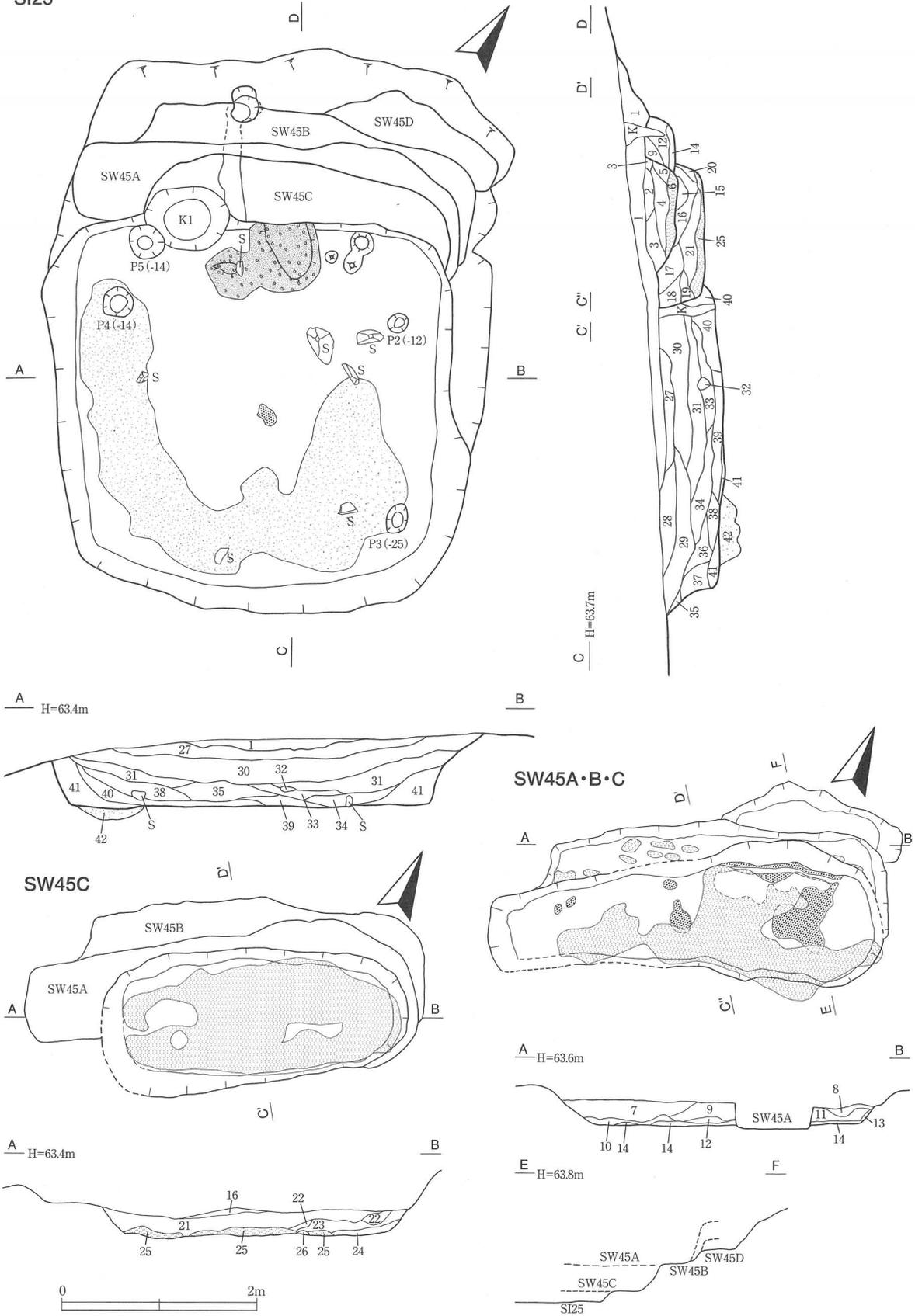
S I 26 竪穴住居跡、SW44 炭窯 (第39図、遺物図版7・117、写真図版27・2167・300)

D区赤20区中央の尾根頂部、ⅦD-7c・7dグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。検出時において、竪穴住居跡と思われるプランと、その北側に重複する土坑もしくは炭窯との推測のもとに精査を進めた。結果、多量の炭化物が出土する状況から、S I 26が埋まりきる前の窪みを利用して作られた炭窯であることが判った。よって新旧関係は、(旧)S I 26→SW44(新)となる。

S I 26の平面形は隅丸方形を呈し、規模は北壁長が約3.2m、東・西・南の壁長が2.8m前後である。主軸方位はN-22°-Wで、床面積は7.3㎡である。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は東壁及び南壁が約40cm、西壁が約50cm、残存する北壁は約25cmを測る。埋土は14層に細分され、上位中央部を中心とした黒褐色土系と下位の褐色土系及び壁際のマサ土の崩落土に大別できる。褐色土層には炭化物粒が混じり、重複するSW44の木炭を掻き出したものと考えられる。炭窯に関わる層には人為堆積とみるべき部分もあるが全体としては自然堆積といえる。床面は平坦で堅く、貼床は南側部分に施されている。中央部の東壁寄り部分には楕円状で径40～50cm程度のグライ化した部分があり、長期にわたり重量のあるものが置かれていた可能性がある。床面施設としては柱穴が南側の隅に2基、北側は壁の外側に2基検出され、配置・規模から支柱穴と思われる。

カマドは北壁の中央部からやや東に付設されている。本体部の遺存状態は良くなく、構築土は主に東側に

SI25



第37図 SI25竪穴住居跡(1)・SW45A~D炭窯

SW45A

1. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無、炭化物微量
2. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性無
3. 10YR4/2 (灰黄褐) しまりやや有、粘性無
4. 10YR4/1 (褐灰) しまりやや有、粘性無、炭化物中量
5. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性無、炭化物少量
6. 10YR2/1 (黒) 炭化物層

SW45B

7. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無、にぶい黄橙色土ブロック混入
8. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、壁の崩落土
9. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、炭化物少量
10. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、炭化物ブロック混入
11. 2.5Y7/3 (浅黄) しまり欠、粘性無、壁の崩落土
12. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、炭化物中量
13. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無
14. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭化物多量

SW45C

15. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性無、炭化物少量
16. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、炭化物少量
17. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性無、炭化物少量
18. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性無
19. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性無、炭化物少量
20. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性無、炭化物少量、灰白色土混入
21. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、炭化物少量
22. 10YR5/2 (灰黄褐) しまり有、粘性無、炭化物少量
23. 10YR6/2 (灰黄褐) しまり有、粘性無、炭化物少量
24. 10YR2/1 (黒) しまり有、粘性無、炭化物多量
25. 10YR1.7/1 (黒) 炭化物層
26. 2.5Y8/2 (灰白) しまり有、粘性無、マサ土

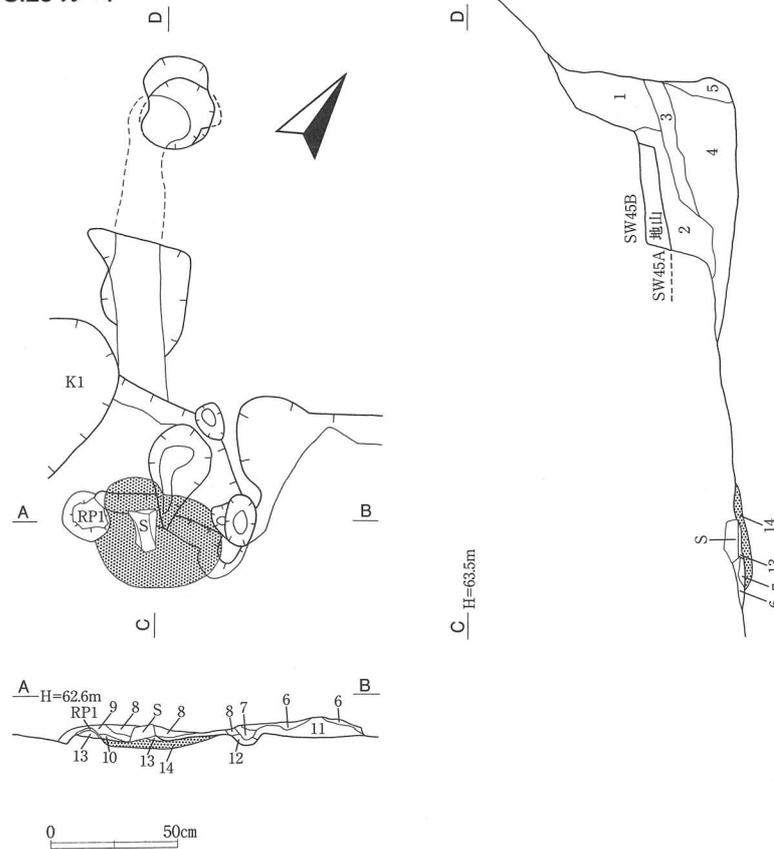
SI25

27. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性無、炭化物少量、灰白色土混入
28. 10YR6/1 (褐灰) しまり有、粘性無、炭化物少量
29. 10YR7/1 (灰白) しまりやや有、粘性無、炭化物・マサ土少量
30. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性無
31. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
32. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、炭化物少量
33. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無
34. 10YR8/3 (浅黄橙) しまりやや有、粘性無
35. 10YR2/1 (黒) しまりやや有、粘性無
36. 10YR8/3 (浅黄橙) しまり有、粘性無、壁の崩落土
37. 7.5YR8/3 (浅黄橙) 砂混シルト しまり有、粘性無、壁の崩落土
38. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性有
39. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無
40. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、マサ土多量
41. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無
42. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、貼床

SI25 カマド

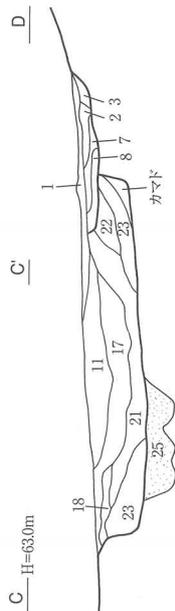
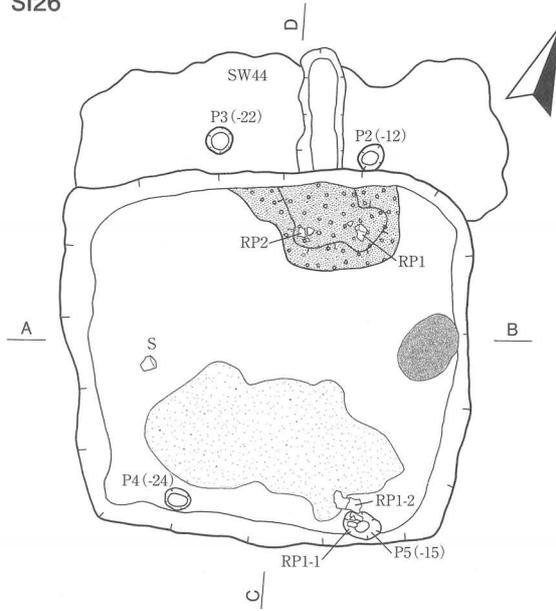
1. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有、炭化物微量
2. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり欠、粘性無
4. 10YR4/2 (灰黄褐) しまり有、粘性無、炭化物少量
5. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、壁の崩落
6. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無
7. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無
8. 10YR6/8 (明黄褐) しまり有、粘性やや有
9. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
10. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
焼土ブロック混入
11. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無
12. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、
袖石の抜き取り痕
13. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性やや有、
袖・支脚構築土
14. 5YR7/4 (にぶい橙) 焼焼部焼土

SI25 カマド



第38図 SI25竪穴住居跡(2)

SI26

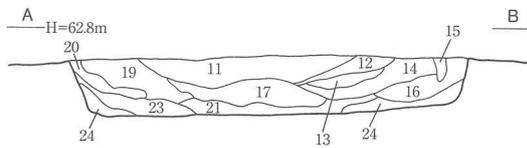


SW44

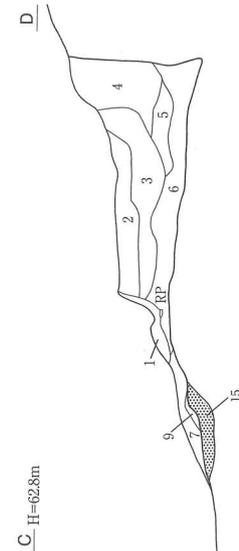
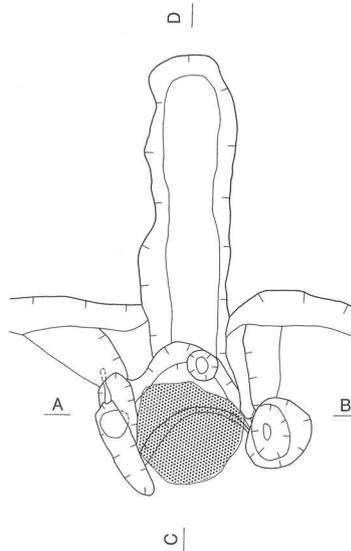
1. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無
2. 7.5YR5/3 (にぶい褐) しまり有、粘性無、炭化物少量
3. 10YR4/2 (灰黄褐) しまり有、粘性無、壁の崩落土
4. 7.5YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性無、炭化物少量
5. 10YR3/1 (黒褐) しまり有、粘性無、炭化物少量
6. 7.5YR6/3 (にぶい褐) しまりやや有、粘性無、炭化物少量
7. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、炭化物少量
8. 10YR2/1 (黒) しまり有、粘性無、炭化物多量
9. 10YR1.7/1 (黒) 炭化物層
10. 5YR7/4 (にぶい橙) 弱い焼土

SI26

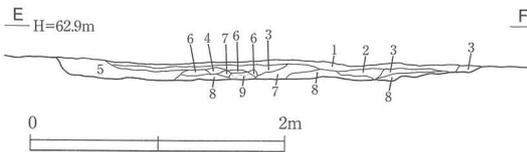
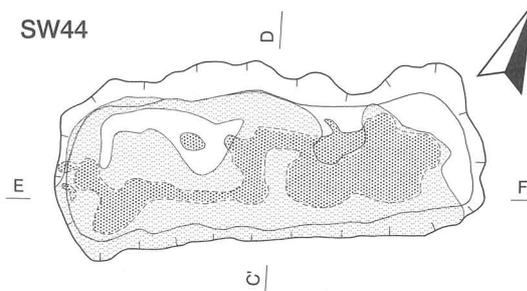
11. 10YR2/1 (黒) しまり有、粘性無
12. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
13. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、マサ土多量混入
14. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性無
15. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
16. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無
17. 10YR4/2 (灰黄褐) しまり有、粘性無、炭化物少量
18. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
19. 10YR4/2 (灰黄褐) しまり有、粘性無
20. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
21. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性無
22. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
23. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無
24. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
25. 10YR7/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性無、貼床



SI26 カマド

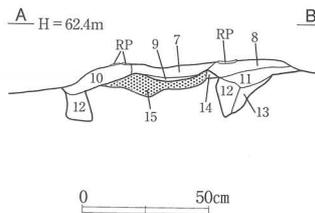


SW44



SI26 カマド

1. 2.5Y7/3 (浅黄) 粘性無
2. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
3. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
4. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
5. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無
6. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
7. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無、カマド上部の崩落土
8. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
9. 5YR6/6 (橙) しまり有、粘性無、カマド上部の崩落土
10. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
11. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
12. 2.5Y7/4 (浅黄) しまりやや有、粘性無、黄褐色土少量、しまり
13. 2.5Y6/8 (明黄褐) しまり有、粘性無、神石の裏込土
14. 7.5YR5/6 (明褐) しまり極めて有、粘性無、袖梅染土
15. 5YR4/6 (赤褐) 燃焼部焼土



第39図 SI26竪穴住居跡・SW44炭窯

崩れ落ちている。燃焼部の東西に抜き取り痕がみられ、カマド本体は芯材として石あるいは土器を使用しつつ明褐色土で構成されていたものと考えられる。燃焼部は径40cm程度の円形で皿状の窪みを持ち、同範囲に厚さ5cmほどの赤褐色焼土が広がる。煙出し穴と煙道がSW44の削平を受け共に上部が消失している。煙道は長さ100cmを測り、断面の観察から掘り込み式であると思われる。煙道底面の勾配はほとんどなく、幅20cmほどの間隔で煙出し部へと掘り込まれている。

遺物は、土師器の甕形土器がカマド付近の埋土下層から出土のRP3が接合した2点(52・53)、破片が約十数点出土した。この他鉄製品として、釘(12)、角棒状鉄製品(13)、釘状鉄製品、板状鉄製品が下層の褐色土中から出土している。

SW44の平面形は長方形を呈し、規模は開口部約340×140cm、底部約320×100cmを測る。長軸方向は東北東-西南西にあり、SI26の北壁とほぼ平行する。壁は外傾して立ち上がり、壁高は北壁が約14cm、南壁が約10cm、西壁が約16cm、東壁で約6cmである。埋土は9層で褐色土を主体とし、底面近くの埋土には炭化物粒を含む。最下層にはほぼ全面に炭化物層が広がり、南側に厚い堆積をみせる。底面は平坦で中央部に東西を横切るように、火熱により橙色変化をした厚さ数mm～2cm程の焼土が認められた。

出土遺物はなく、炭化物は分析の結果クリと判明した。

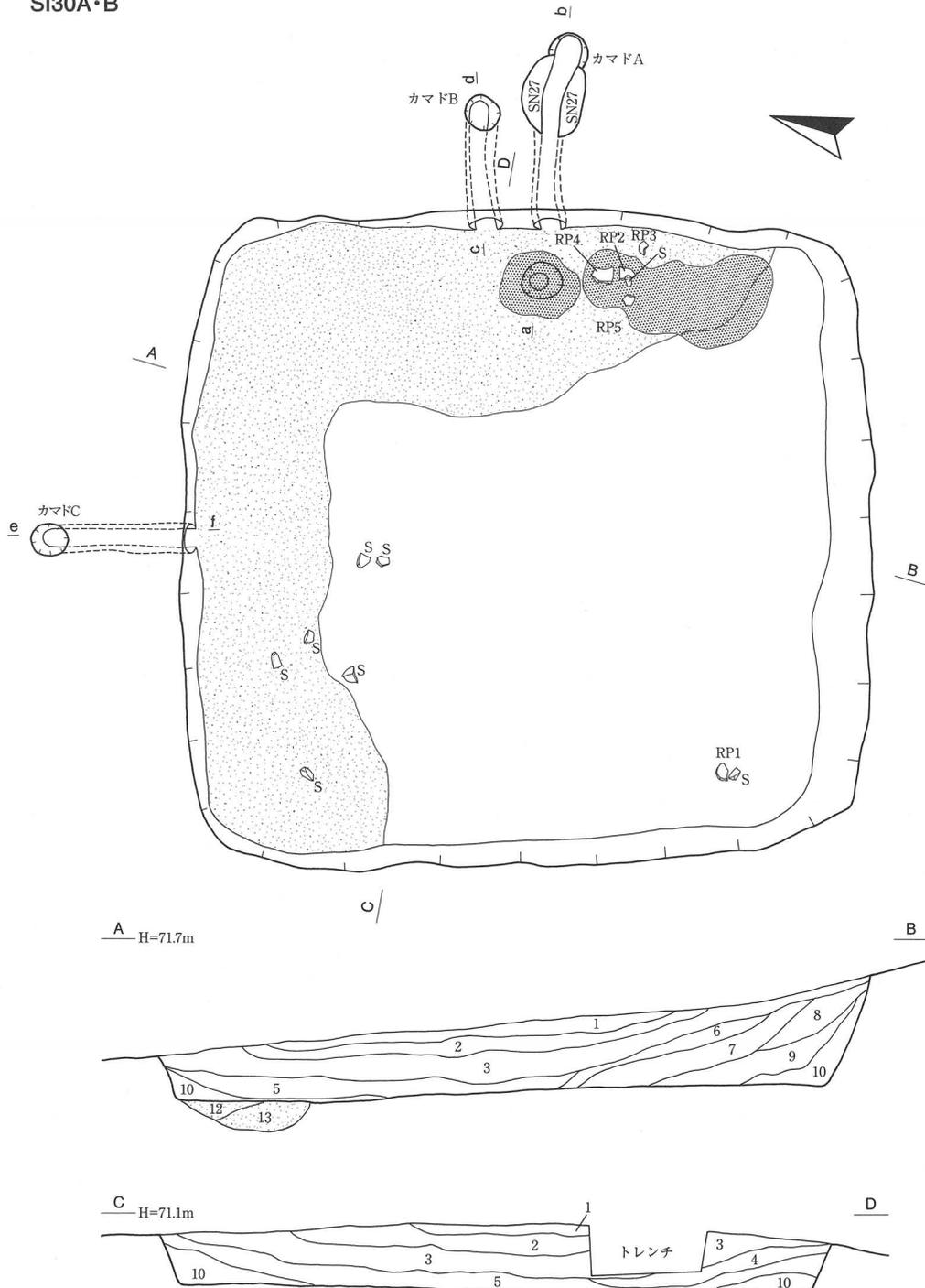
(赤石)

SI30A・B 竪穴住居跡 (第40・41図、遺物図版8・81・117、写真図版28・216・271・300)

D区赤21区の北側平坦部、VII D-13 l グリッドを中心にVII D-12 l・13 k・13 m・14 l グリッドに跨って位置する。検出面はIV～V層である。本遺構にはカマドが3基遺存しており、東壁南側に位置するものをカマドA、その北側に並行して位置するものをカマドB、北壁に位置するものをカマドCとした。3基のカマドの詳細については後述するが、住居の構築期が拡幅等により2期以上に渡る可能性が考えられることから、SI30A・Bとした。またカマドA煙道・煙出部にはSN27が重複しており、カマドAを切って残存している。遺存する平面形は隅丸方形を呈し、規模は壁長一辺が約5.5mを測る。それぞれの主軸方位はカマドA・BがE-19°-N、カマドCがN-17°-Wで、床面積は28.4㎡である。壁は鋭角的に立ち上がり、壁高は南壁で約90cm、北・東・西壁で約45cmを測る。埋土は10層に細分されるが、基本的にはレンズ状を成す自然堆積と思われる、上～中位に黒褐色土、下位に明黄褐色土、壁際に黄褐～明黄褐色土と大別できる。また、カマドA南側には約160×50～80cmの不整な広がりをした赤褐色焼土が3～5cm程堆積していたが、ブロック状を成すことから廃棄されたものと思われる。床面は平坦で堅く締まり、北東壁沿いにL字型に貼床が施されている。柱穴・床面施設等は検出されなかった。

カマドは前述の通りに3基遺存している。カマドAは東壁のほぼ中央に位置し、本体部のほとんどは遺存せず、燃焼部のみ確認できる。燃焼部は径35cmの円形で皿状に窪んでおり、約65×55cmの不整形をした厚さ5～7cm程の明赤褐色焼土が広がる。煙道・煙出部にはSN27が重複しており、またその精査の際に調査員の認識不足により掘り過ぎてしまった為、残存状況は不良である。残存部から、煙道は刳り貫き式で、奥行約170cm、径25cmと推定される。先端に向かってやや南方向に曲がり、下り勾配である。煙出は径35cmと推定され、深さは約70cmで垂直に掘り込まれている。カマドBは東壁の中央からやや北側に位置し、本体部は遺存しない。煙道・煙出部は木根による攪乱が著しく、それにより全容を把握できずに掘り切ってしまったため、埋土等の詳細は不明である。煙道は刳り貫き式で、残存する奥行は約110cm、径は約30cmを測り、勾配はやや下り勾配である。煙出は径約30cmの円形で、深さ30cmに垂直に掘り込まれている。カマドCは北壁のほぼ中央に位置し、本体部は遺存しない。煙道は奥行約135cm、径約25cmの刳り貫き式である。先端に向かって下り勾配で、煙道壁天井部は被熱により赤褐色を帯びており、その厚さは1cm程度で

SI30A・B

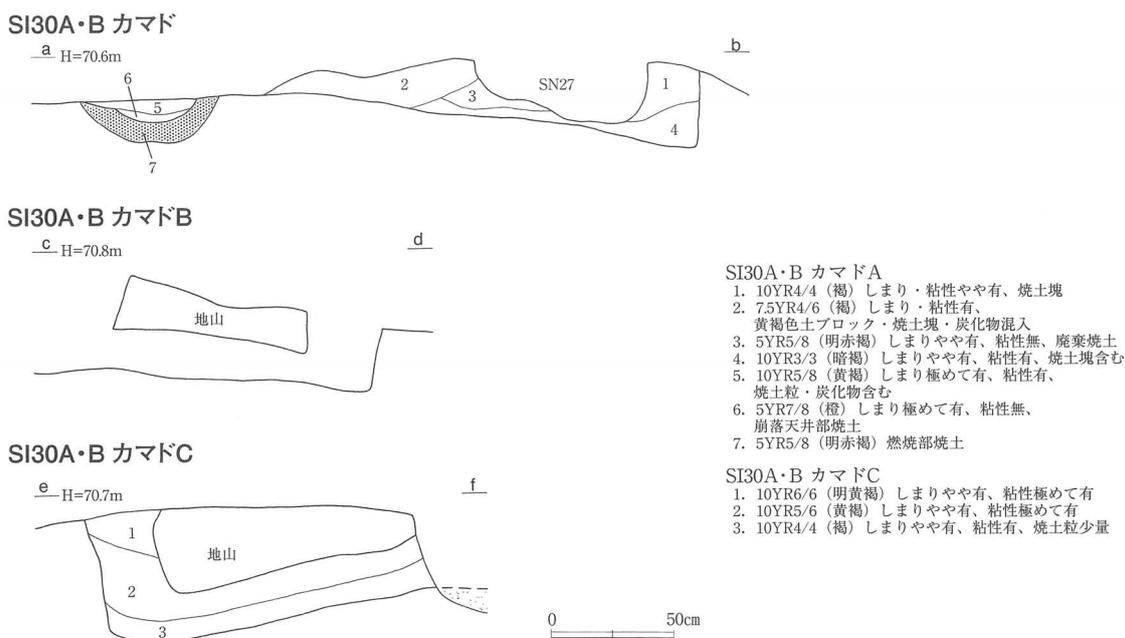


SI30A・B

1. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性無、木根多い
2. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性やや有
3. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性やや有、炭化物微量混入
4. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無
5. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性やや有
6. 10YR6/8 (明黄褐) しまり有、粘性やや有
7. 10YR6/8 (明黄褐) しまり極めて有、粘性やや有、マサ土混入
8. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有
9. 10YR5/8 (黄橙) しまり・粘性有
10. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有、焼土粒混入
11. 10YR6/8 (明黄褐) しまり・粘性極めて有、貼床
12. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性極めて有、貼床
13. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有、貼床

0 2m

第40図 SI30A・B竪穴住居跡(1)



第41図 SI30A・B 竪穴住居跡(2)

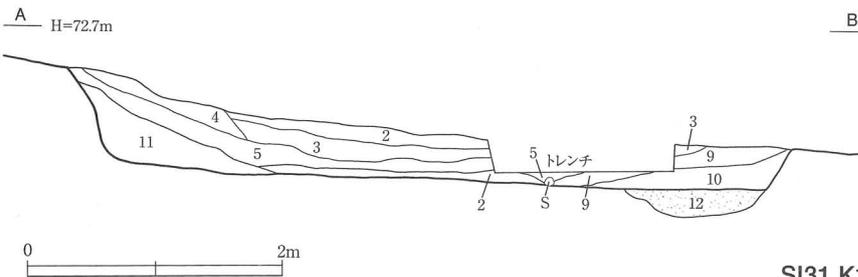
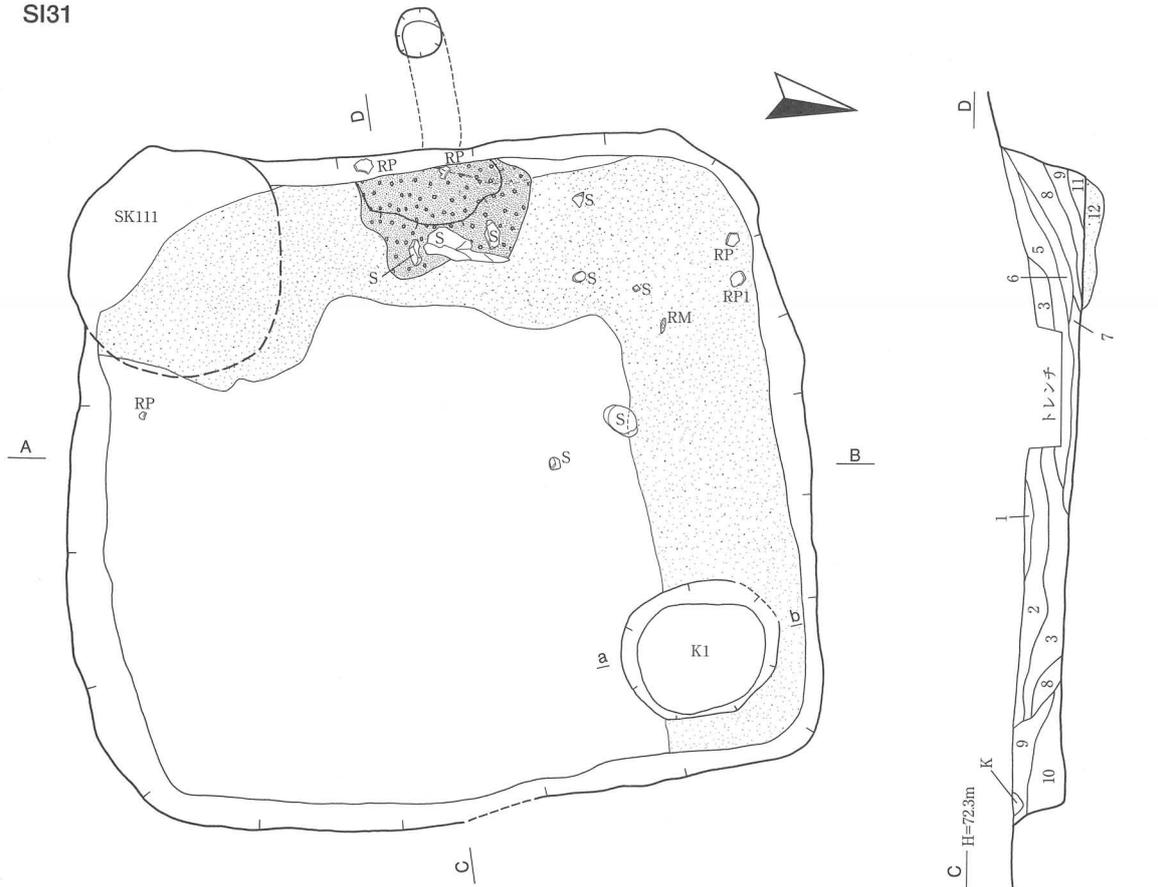
ある。煙出は径約25cm、深さ約55cmを測り、垂直に掘り込まれている。以上の3基のカマドの状況から、燃焼部が遺存しているカマドAはカマドB・Cよりも新しいと思われる、現存するSI30Aに伴う。また、各カマド煙道の長さを比較してみると、カマドB煙道は他2基よりも際立って短く、SI30A構築時の拡幅に起因する可能性がある。よって、カマドBはSI30B期に伴うものと思われる。カマドCについては様々な可能性が考えられるが、SI30Aに付随するカマドAへの造り替え以前のものと考えられ、SI30Aに伴うと思われる。よって新旧関係は、(旧)カマドB→カマドC→カマドA(新)と推測される。

遺物は、土師器が総数で小袋で2袋程出土している。その内ある程度復元できたものは甕形土器の2点があり、RP2・4・5が接合した(54)、RP3と埋土下位出土の破片が接合した(55)がある。また埋土中出土の坏形土器4片がSI31出土のものと接合(59)した。この他、須恵器の甕形土器片RP1(56)、砥石S1(28)、刀子1点(14)がそれぞれ床面より出土している。

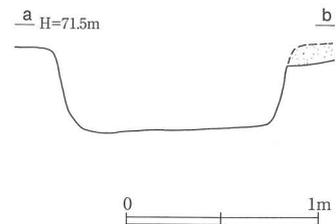
S I 31 竪穴住居跡 (第42・43図、遺物図版8・60・81・117、写真図版29・216・249・271・300)

D区赤21区北側の平坦部、ⅦD-13m・13n・14m・14nグリッドに跨って位置し、検出面はV層及びVI層上面である。本遺構は南西隅の精査過程で検出したSK111と重複しており、残存するSK111北西壁の状態が本遺構を切っていることから、本遺構の方が古いと思われる。平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺約5.4mを測る。主軸方位はW-18°-S、床面積は25.4㎡である。壁は鋭角的に外傾して立ち上がり、壁高は斜面上方の南・西両壁で約70cm、斜面下方の北・東両壁で約35~40cmを測る。埋土はレンズ状の自然堆積で10層に細分されるが、上位に黒褐色土、下位に褐色土、壁際に黄褐色土の3層に大別できる。床面は平坦で堅く締まり、北・西壁に沿ってL字型に貼床が施されている。また床面施設として北東隅に土坑(K1)を検

SI31



SI31 K1

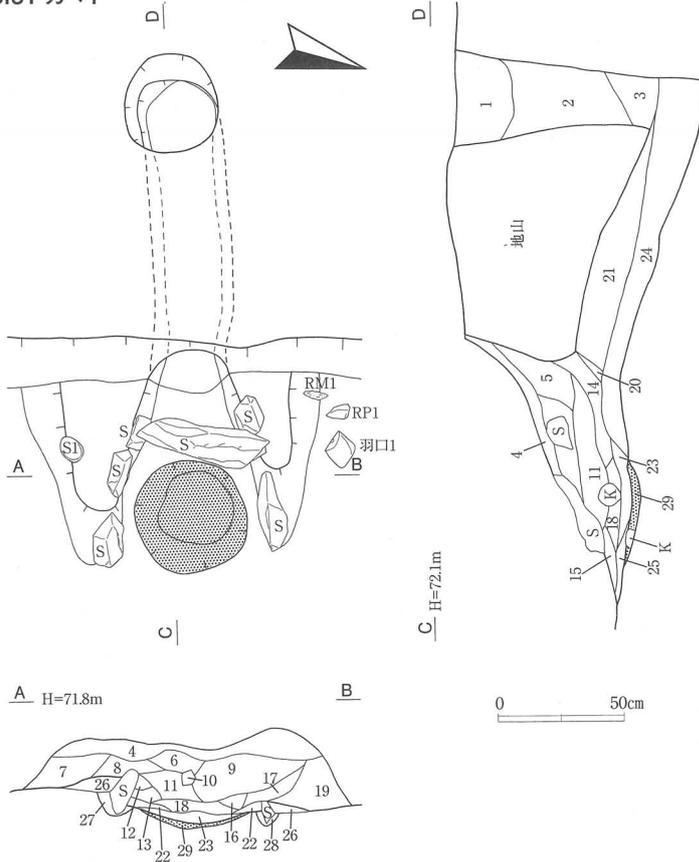


SI31

1. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性やや有
2. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性やや有
3. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性無
4. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性やや有
5. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性無
6. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性やや有
7. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性やや有
8. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性やや有
9. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性やや有
にふい黄橙色ブロック混入
10. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性やや有
11. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性有、壁の崩落土
12. 10YR6/8 (明黄褐) しまり有、粘性やや有、貼床

第42図 SI31竪穴住居跡(1)

SI31 カマド



SI31 カマド

1. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有
2. 10YR5/8 (黄褐) しまり有、粘性やや有
3. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性やや有、炭化物少量
4. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性有
5. 10YR6/8 (明黄褐) しまり・粘性有
6. 10YR6/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性有
7. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有
8. 10YR6/8 (明黄褐) しまり有、粘性やや有、全体に焼土粒を少量
9. 10YR5/8 (黄褐) しまり欠、粘性やや有
10. 7.5YR6/8 (橙) しまり欠、粘性欠、天井部の崩落焼土塊
11. 10YR6/8 (明黄褐) しまり・粘性有
12. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有
13. 10YR7/6 (明黄褐) しまり欠、粘性無、マサ土
14. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性やや有、焼土粒
15. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有、焼土粒
16. 7.5YR5/8 (明褐) しまり有、粘性やや有
17. 10YR5/8 (黄褐) しまり有、粘性やや有全体に焼土粒～塊含む
18. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
19. 10YR6/8 (明黄褐) しまり・粘性有
20. 2.5Y7/6 (明黄褐) しまり欠、粘性無、煙道部天井崩落土
21. 10YR7/6 (明黄褐) しまり欠、粘性無
22. 7.5YR5/6 (明褐) しまりやや有、粘性有、燃烧部からの被熱
23. 7.5YR6/8 (橙) しまり有、粘性無、天井内壁の崩落焼土
24. 10YR5/8 (黄褐) しまり有、粘性やや有、炭化物少量
25. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有、焼土粒中量
26. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性有、袖部
27. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性有、芯材堀方
28. 10YR6/8 (明黄褐) しまり・粘性有、芯材堀方
29. 5YR6/8 (橙) 燃烧部焼土

第43図 SI31竪穴住居跡(2)

出したが、貼床の精査途中でその存在を確認できたため、埋土の状況等詳細は不明である。平面形は楕円形で、規模は開口部約125×105cm、底部約100×80cm、深さは推定50cmである。

カマドは遺構西壁の中央に位置する。本体天井部は崩落しているが、その他の部位は比較的遺存状態が良い。本体中央には長さ50～60cm程の自然石が2個崩落しており、裏面に被熱痕跡があることから天井部の架構に用いられていたものと思われる。袖部は芯材に自然石を使用しており、天井部同様その内側は被熱により赤褐色に変化しており、外側にのみ黄褐色粘土で構築されている。燃烧部は径約45cmの円形を呈し、皿状に窪み、同範囲に厚さ2～4cmの橙色焼土が広がる。また支脚痕は確認されなかったが、右袖部北側から羽口(7)が出土しており、支脚として代用していた可能性も考えられる。煙道は削り貫き式で長さ約120cm、径約25cmを測る。勾配は先端に向かって下り、煙出へと続く。煙出は径約40cmの円形で、垂直に掘り込まれており、深さは約100cmを測る。

遺物は、土師器の甕形土器と坏形土器片が全体で小袋で1袋程出土しており、埋土下位出土の坏形土器片がS I 30出土のものと同接合(59)した。また床面出土のRP1・2が接合し、ほぼ完形に復原(58)できた。その他、前述の羽口(7)、埋土下位から砥石1点、カマドRM1として楔状鉄製品(15)、床面及び埋土上位から不明鉄製品が出土している。

S I 32 竪穴住居跡、S K I 21 竪穴状遺構（第44図、遺物図版8・9・81、写真図版30・216・271）

D区赤21区中央緩斜面部の西側斜面、ⅦD-14p・14q・15q グリッドに位置し、Ⅳ層及びⅤ層で検出した。検出時の状況から、当初は単独の竪穴住居跡（S I 32）と考え精査を開始したが、南東側で重複するS W50を検出した。その後、掘り上がりの南側の床面の状態や平面形状の歪さから、再度埋土断面を観察した結果、S K I 21が確認された。よって新旧関係は、(旧) S I 32→S K I 21→S W50 (新) となる。

S K I 21は上述の様な検出状況であったため、残存部分は僅かであるが、推定すると平面形は略円形を呈すると思われる。規模は開口部径推定3.7m、底部径推定3.2mで、床面積は9.2㎡と推定される。壁は外傾して立ち上がり、壁高は斜面上方で約55cm、斜面下方で約15cmを測る。埋土は5層に細分されるが、基本的には黄褐～褐色系の自然堆積と思われる。床面はほぼ平坦で極めて堅く締まる。本遺構はS I 32廃絶後、埋没過程の窪みを利用し構築されたものと思われる。

遺物は、土師器の甕形土器の小破片が埋土上位より約10点（内1点：67）、砥石が埋土中より1点、鉄滓が微量出土した。

S I 32の平面形は歪な隅丸長方形を呈し、規模は南・北壁長が約3.3m、東・西壁長約4mを測る。主軸方位はE-12°-N、床面積は11.9㎡である。壁は外傾して立ち上がり、壁高は北・西両壁で約40cm、S K I 21と重複する南・東両壁で約15cmが遺存するが、検出面からの深さは約65cmである。埋土はS K I 21に切られているため、2層のみ残存している。床面は平坦で締まりが強く、貼床が南側を除いた部分に施されている。床面施設として、遺構中央からやや北西方向に向かった所には、明赤褐色をした地床炉が存在する。歪な円形を呈し、規模は径約25cm、厚さは約4cmを測り、極めて堅く締まる。周辺の土をサンプリングしたが、鍛造剥片等は検出されなかった。

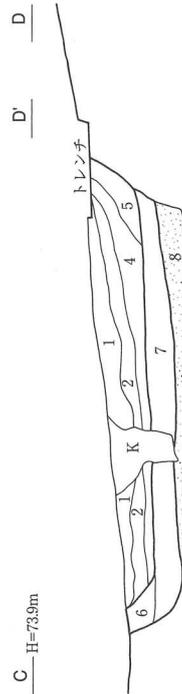
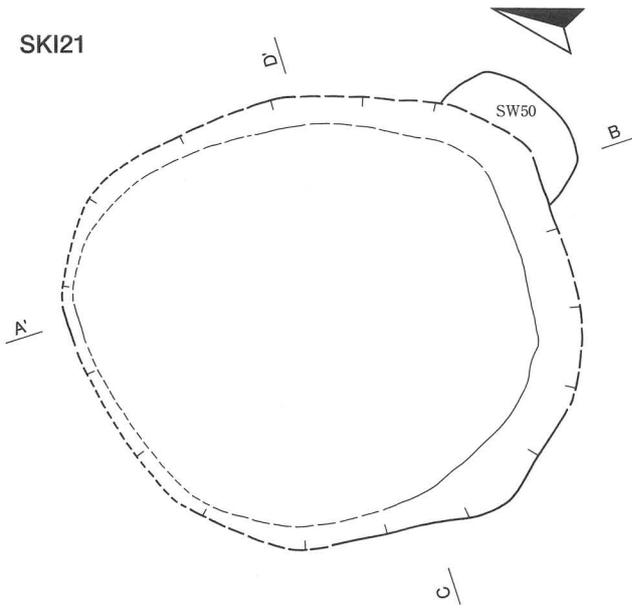
カマドは遺構東壁の中央からやや南寄りに位置する。本体部の遺存状態は悪く、燃焼部のみ確認された。燃焼部は径約45cmの不整な円形を呈し、厚さ7cm前後の明赤褐色焼土が広がる。煙道は削り貫き式であるが、遺構東壁を精査する際に掘り過ぎてしまったため詳細は不明だが、推定される規模は長さ140cm、径約35cmで、煙出に向かって下り勾配となっている。煙出は径43cmの円形で、深さは約85cmで垂直に掘り込まれている。

遺物は、埋土中より須恵器の甕形土器の口縁部片1点（61）と土師器の甕形土器の破片が小袋で1袋ほどしか出土しておらず、埋土2層出土の破片4点が接合（60）した。（小林）

S I 36 竪穴住居跡（第45図、遺物図版8・81・117、写真図版31・32・216・271・300）

D区赤21区南側平坦部のⅦD-17s グリッドに位置し、検出面はⅤ層である。精査を進めるうちに中央部で炭窯（S W51）が検出された。S I 36の埋まりきる前の窪みを利用して造られており、新旧関係はS I 36が古い。平面形は隅丸方形を呈し、一辺は約5mである。主軸方位はN-54°-Eで、床面積は22.4㎡である。壁は北東及び南東壁はほぼ直角に立ち上がり、北西及び南西壁はやや外傾して立ち上がる。壁高は南東壁で約90cm、北西壁で約20cm、南西及び北東壁で約60cmを測る。埋土は褐色土が主体の4層で自然堆積である。床面は平坦で堅く締まる。貼床は谷側北西部と中央部に施されている。床面に住居の構築物と思われる炭化材と焼土が点在しており、この住居は焼失したものと思われる。遺存する炭化材は多くはないが、中には主柱に使用されたと思われる径20cm程度の太いもの（RC4）と梁等に使用されたと思われる径5～10cm程度の細いもの（RC7～9等）との区別ができた。またカヤ（RC1-ススキ）の形を留めるものがあり、屋根を葺いていたものが焼け落ちたと推測される。炭化材の分析の結果、クリとナラが確認されており、住居建築には身近な材料を使用している。また、床面にはピットが4基みられ、配置・規模から主柱穴

SKI21



SKI21

1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや欠、粘性有、炭化物少量
2. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有、焼土粒・炭化物少量
3. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性有、明黄褐色土・炭化物少量
4. 10YR5/8 (黄褐) しまり有、粘性極めて有、
5. 10YR7/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性有

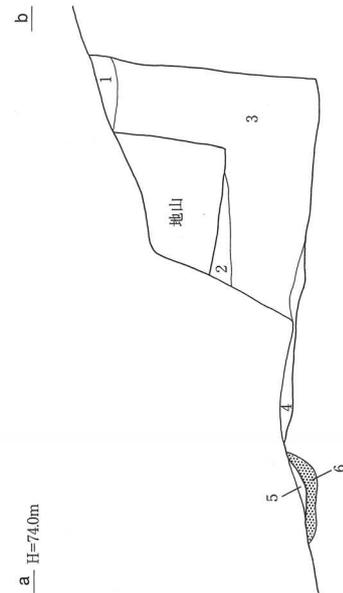
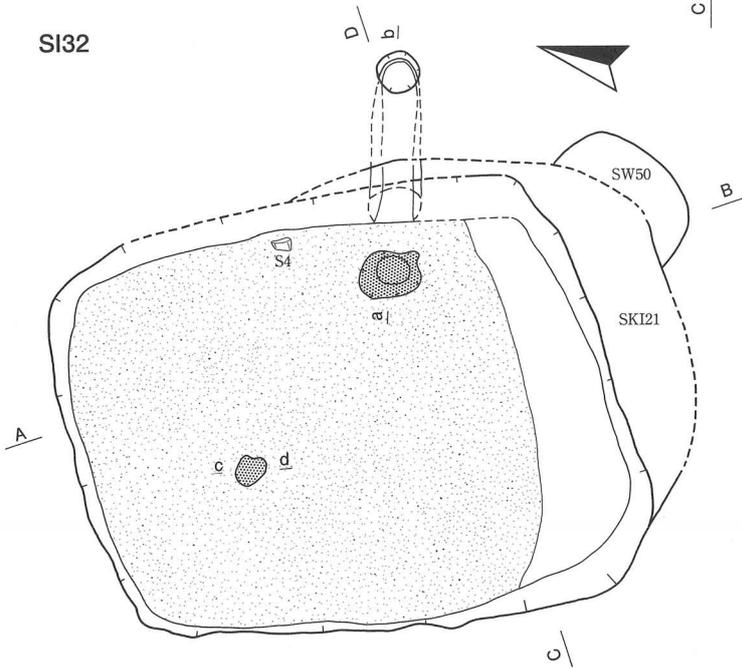
SI32

6. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性有
7. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性有
8. 10YR7/8 (黄橙) しまり有・粘性やや有、貼床

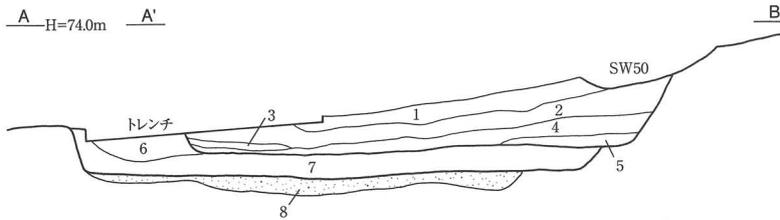
SI32 カマド

1. 10YR5/8 (黄褐) しまりやや有、粘性極めて有
2. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり欠、粘性やや有
3. 10YR3/4 (暗褐) しまり欠、粘性有
4. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有、炭化物・焼土粒を少量
5. 10YR6/6 (明黄褐) しまり欠、粘性極めて有
6. 5YR5/8 (明赤褐) 燃焼部焼土

SI32



A H=74.0m A'

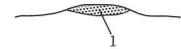


SI32 カマド

a H=74.0m

SI32 地床炉

c H=73.1m d



SI32 地床炉

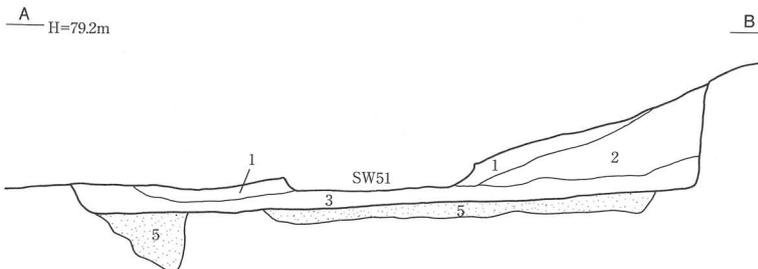
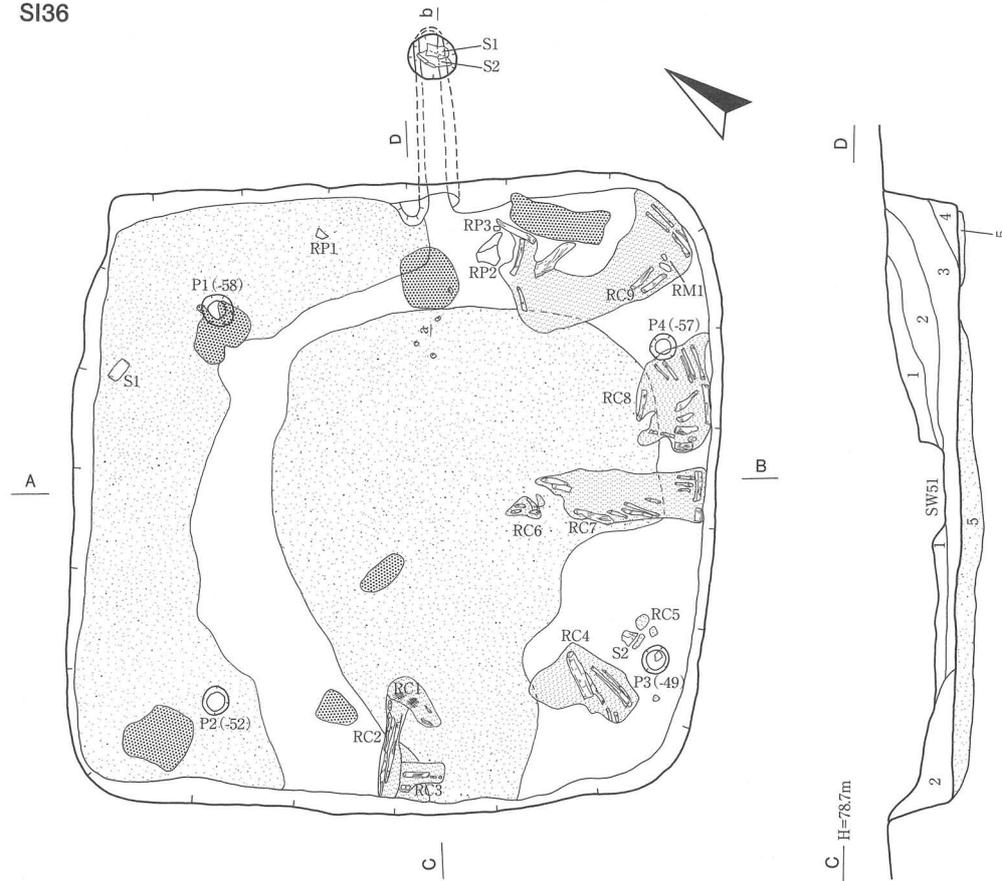
1. 5YR5/8 (明赤褐) 焼土

0 2m

0 50cm

第44図 SI32竪穴住居跡・SKI21竪穴状遺構

SI36



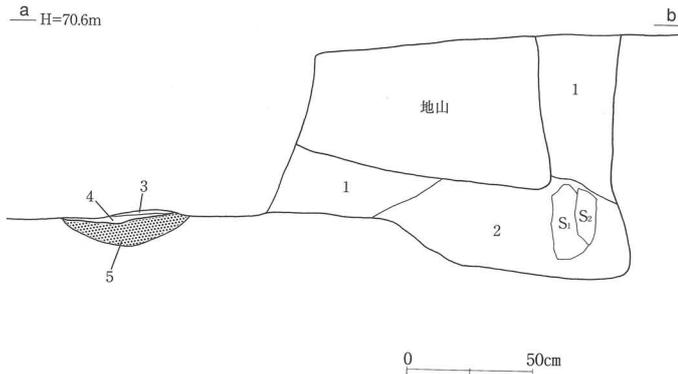
SI36

1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、木根多い
2. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性無
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有、炭化物微量
4. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性有
5. 10YR7/8 (黄橙) しまり有、粘性やや有、貼床

SI36 カマド

1. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有
2. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性有、炭化物微量
3. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有、明黄褐色土ブロック・炭化物含む
4. 7.5YR5/6 (明褐) しまり有、粘性やや有、天井部内壁の崩落焼土
5. 5YR5/6 (明赤褐) 燃焼部焼土

SI36 カマド



第45図 SI36竪穴住居跡

であったと思われる。

カマドは北東壁の中央付近やや南寄りに付設されているが、本体部分の遺存状態は悪く、北側に造り出しの袖部分がわずかに残っている程度である。燃焼部には径45～50cmの円形で、厚さ5～12cmの明褐色焼土が広がる。煙道は刳り貫き式で長さ80cmを測る。奥に向かってやや下りながら煙出部へと続く。煙出部は径約30cm、深さは約100cmで垂直に掘り込まれている。煙出部の下部には長さ20～30cm、幅10cmほどの石が2個確認でき、人為的に投げ込まれたと思われる。

遺物は土師器の甕形土器と坏形土器があわせて小袋で2袋ほど出土し、甕形土器が床面出土のRP1とRP2が接合した1点(63)、埋土下層から坏形土器が1点(62)出土した。石製品は煙出部の下位(S1・2)から砥石2点(32・33)、鉄製品はRM1の板状鉄製品(18)、鉄鐸が床面及び埋土中から2点(16・17)、釘が埋土中から1点、鉄滓が埋土中から少量出土している。

S I 37 竪穴住居跡 (第46図、写真図版32)

D区赤21区南側平坦部、ⅦD-18s～19sグリッドに位置し、検出面はV層である。南東側が崩落しており、その崩落部分と遺構の壁との区別がつかず壁を掘り上げてしまい一部不明となってしまった。平面形は隅丸方形を呈し、規模は北東壁長約3.2m、北西壁長約3.7mを測り、南東壁長約4m、南西壁長約3.1mと推測される。主軸方位はS-49°-Eで、床面積は9.7㎡である。壁はやや外傾して立ち上がり、崩落のみられる南東壁は上部がさらに大きく外傾する。壁高は北東壁で約40cm、北西壁で約30cm、南東壁で約120cm、南西壁で約60cmを測る。埋土は9層に細分されるが、大きくは上位中央部を中心とした黒褐色土とその周囲にみられる地山からの流れ込みの褐色土に大別され、自然堆積である。床面は平坦で堅く締まる。貼床は谷側北東部を中心に施されている。住居の東隅に直径約100cmの円形で、深さ約40cmほどのすり鉢状の土坑が1基みられる。

カマドは南東壁のやや西寄りに付設されているが、本体部分には架構・構築物等は一切残存しておらず、燃焼部に焼土を残すのみである。燃焼部は径50cmほどの不整な円形で明黄褐色の焼土が広がっている。煙道は刳り貫き式で、長さ110cmを測り、勾配はほとんどなく煙出し部へと続く。煙出し部は径35cm、深さ100cmほどで垂直に掘り込まれている。

遺物は、土師器の甕形土器片1点と二つに割れた磨石が床面から出土したのみである。

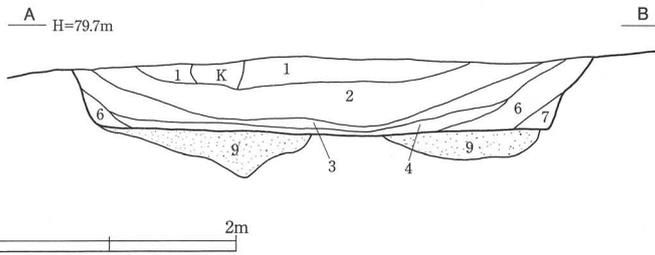
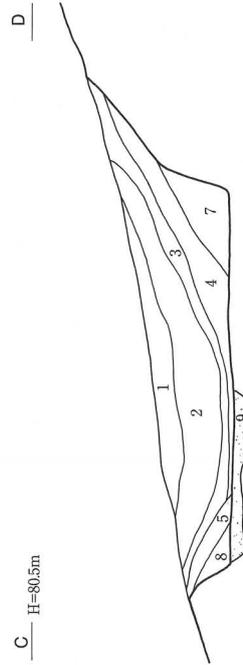
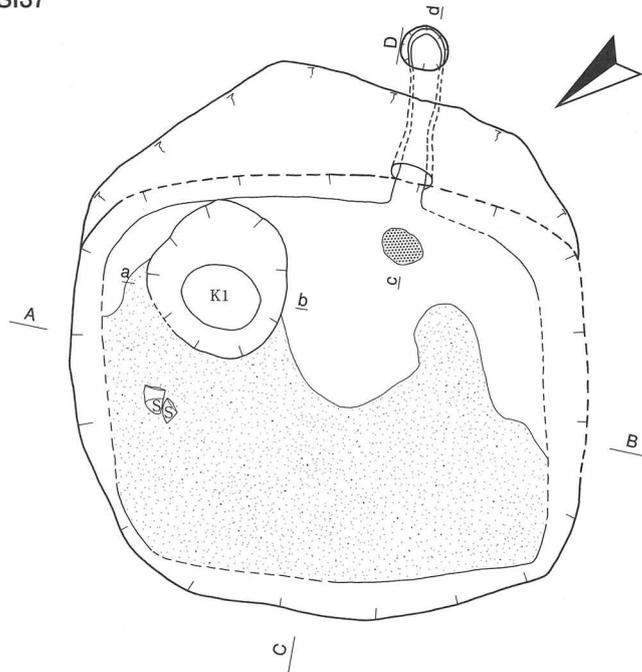
S I 38 竪穴住居跡、S W 56 炭窯 (第47図、遺物図版8・81・118、写真図版33・216・272・300)

D区赤21区の南側馬の背状部の西側斜面、ⅦE-19a～20aグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。検出時の状況から、当初は単独の竪穴住居跡と考え精査を始めたが、その過程において、北東壁付近で多量の炭化物を含む層が検出された。埋土断面を観察した結果、S I 38の埋没過程の窪みを利用した炭窯(S W 56)が確認された。よって、新旧関係は(新)S W 56→S I 38(旧)となる。

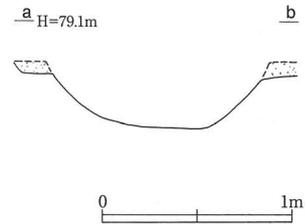
S W 56の平面形は楕円形を呈し、規模は開口部約200×80cm、底部約180×70cmを測る。長軸方向は西北西-東南東でS I 38の東壁とほぼ平行する。壁は山側北壁がほぼ直角に立ち上がり、約10cmを測るが、南壁及び東西の壁はなだらかに立ち上がる。埋土は黒褐色土の単層である。底面上には炭化物が認められた。底面はおおむね平坦で、火熱により底面中央と壁の一部が厚さ2～3mmで弱く赤色変化している。遺物は出土せず、炭化物は分析により、クリと判明した。

S I 38の平面形は隅丸長方形を呈し、規模は北東・南西壁長が約400cm、北西・南東壁長が約3mを測る。主軸方位はN-35°-Eで、床面積は10.3㎡である。壁は北東壁が崩落しているが残存部及び北西、南東壁はほぼ直角に立ち上がり、南西壁はやや外傾して立ち上がる。壁高は北西・南東壁が約60cm、谷側の南西

SI37



SI37 K1



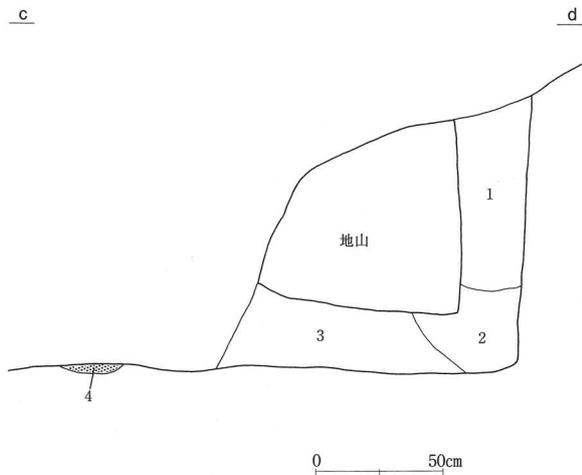
SI37

1. 10YR3/2 (黒褐) しまり有、粘性やや有、植根多い
2. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有
3. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有
4. 10YR5/8 (黄褐) しまり有、粘性極めて有、
にぶい黄褐色土少量
5. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性有
6. 10YR6/8 (明黄褐) しまり・粘性やや有、
にぶい黄褐色土ブロック少量
7. 10YR5/8 (黄褐) しまり欠、粘性極めて有、壁の崩落土
8. 10YR7/8 (黄橙) しまり欠、粘性極めて有、壁の崩落土
9. 10YR8/6 (黄橙) しまり有、粘性やや有、貼床

SI37 カマド

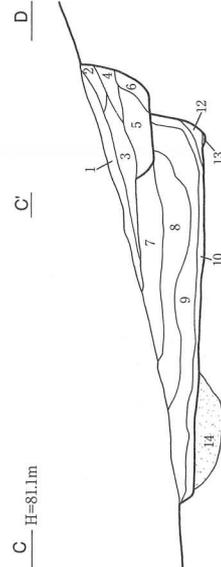
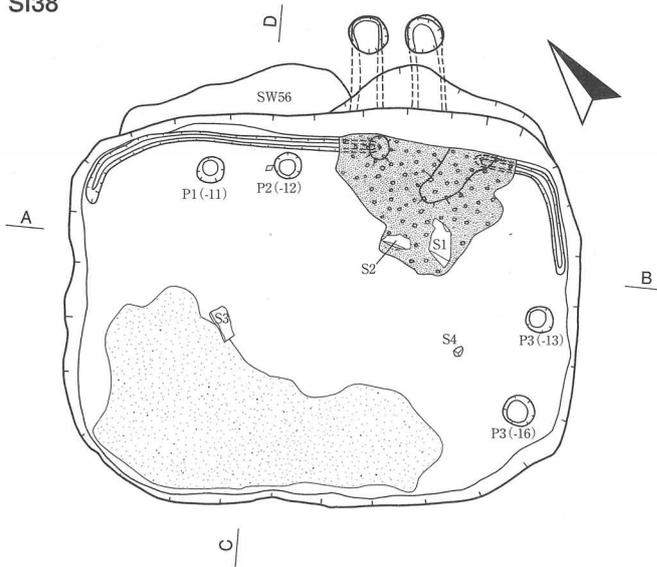
1. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性やや有
2. 10YR6/8 (明黄褐) しまり・粘性やや有
炭化物微量含む
3. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性やや有
4. 7.5YR5/8 (明赤褐) 燃焼部焼土

SI37 カマド



第46図 SI37竪穴住居跡

SI38

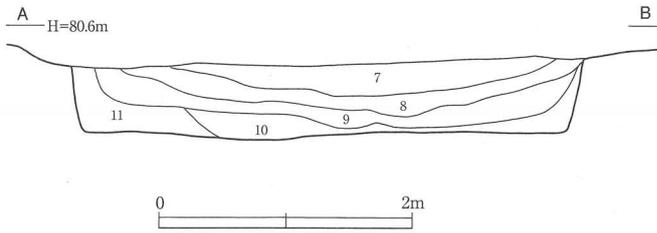


SW56

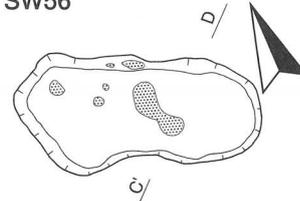
1. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性無
2. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
3. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有、炭化物を微量
4. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性やや有
5. 10YR3/1 (黒褐) しまり有、粘性無、炭化物多量
6. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無

SI38

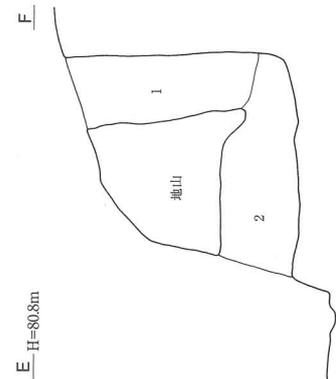
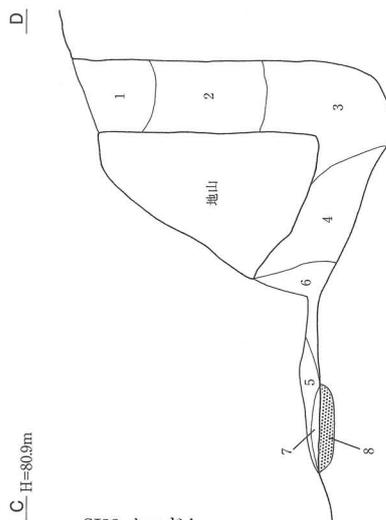
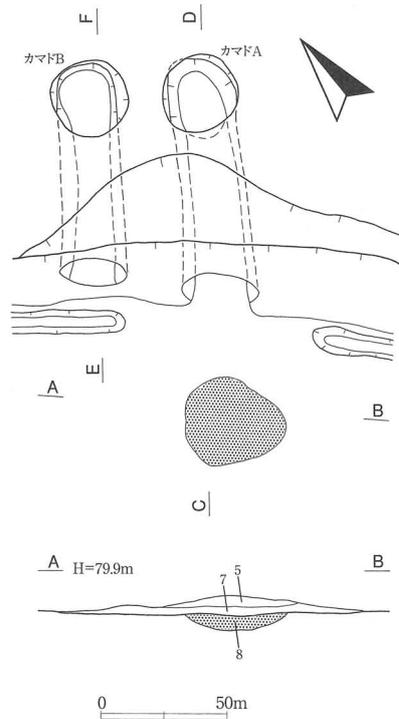
7. 10YR4/2 (灰黄褐) しまり有、粘性やや有
8. 10YR5/2 (灰黄褐) しまり有、粘性無、炭化物微量
9. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、炭化物微量
10. 10YR7/6 (明黄褐) しまり有、粘性無、炭化物微量
11. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、マサ土多量
12. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性やや有
13. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無
14. 10YR7/6 (明黄褐) しまり有、粘性無、貼床



SW56



SI38 カマドA・B



SI38 カマドA

1. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性やや有
2. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり・粘性やや有
3. 10YR5/3 (にぶい黄橙) しまり・粘性やや有、炭化物微量
4. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり・粘性やや有
5. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性有
6. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
7. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性やや有、炭化物微量
8. 5YR7/4 (にぶい橙) 焼部焼土

SI38 カマドB

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
2. 10YR5/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無

第47図 SI38竪穴住居跡・SW56炭窯

壁が約10cm、北東壁は残存部で約40cmを測る。埋土はマサ土の混じる褐色土系で、12層に細分される自然堆積である。床面は平坦で堅く、貼床が谷側の南西部分に施されている。床面施設としては、幅7～8cm、深さ6～7cmの周溝が北東側壁沿いに約350cm巡っている。また、柱穴と思われるピットが北東壁と南東壁際にそれぞれ2基検出された。

カマドは北東壁の南寄りに2基並んで検出され、構築土が芯材に使われたと思われる2個の石と共に南東側に崩れ広がっている。袖等はどちらにもみられないが燃焼部焼土は南側の1基(カマドA)にのみ残存している。北側1基(カマドB)が南側に比べやや高い位置に付設され、周溝もカマドAの煙道入り口付近では途切れていることから、カマドAに伴うものであり、カマドAはカマドBの廃絶後床面を下げて造り替えたものと推測される。燃焼部には径40cmほどの不整な円形で、厚さ5～6cmの橙色焼土が広がる。煙道はどちらも削り貫き式で、カマドAは下り勾配で奥行約90cmを測り、カマドBの勾配はほとんど無く奥行約80cmを測る。煙出部は両者とも径30cmほどで垂直に掘り込まれており、カマドAで深さ約120cm、カマドBで約90cmを測る。

遺物は、土師器の甕形土器が小袋で2袋程出土し、床面から出土のものが接合(64)した。その他、敲・磨石が床面から1点(34)、鉄鐸が北西側床面から4点(19～21)、釘1点と鉄滓少量がカマド付近の埋土から出土している。なお敲・磨石(34)は半分に割れた状態で検出されたが、S I 44の埋土中で検出されたものと接合した。

S I 39 竪穴住居跡 (第48図、遺物図版9・118、写真図版34・216・300)

D区赤21区の南側馬の背状部の西側斜面、VII E-20 b グリッドに位置し、検出面はVI層上面である。尾根の落ち際で検出され斜面下の南西側は崩落により壁は立たない。残存部から平面形は歪な隅丸方形で、規模は北東壁長が約3mを測り、北西壁長が約2m以上、南東壁長が約2.4m以上、南西壁長が約2.9m前後と推測される。主軸方位はN-43°-Eで、床面積は5.8㎡である。残存する壁はやや外傾して立ち上がる。壁高は北東壁が約60cm、北西壁が約20cm、南東壁が約30cmを測る。埋土はマサ土の混じる褐色土系で4層に分けることができる自然堆積であり、各層に炭化物粒を微量に含む。床面はおおむね平坦であるが木根による凹凸も部分的にみられる。貼床は施されていない。床面施設としては北西側に地床炉と思われる火熱によって生じた径20cm、厚さ1cmほどの焼土が円形に広がっている。

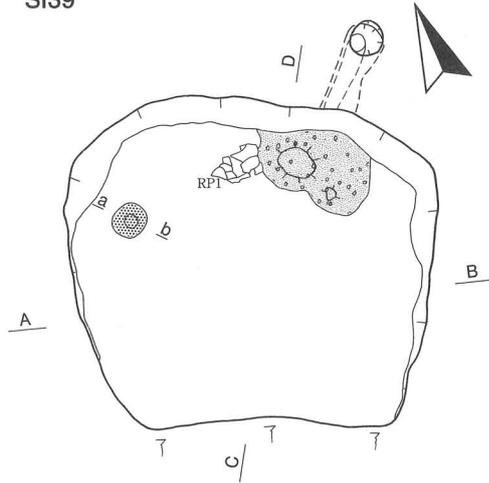
カマドは北東壁の南寄りに付設されており、構築土が崩れた状態で広がっている。本体の遺存状態は良くなく、袖の芯材の抜き取り痕が残る程度である。抜き取り痕は焼土の外側の東西に10～15cmの円形で、深さ4～5cmで1カ所ずつみつかった。燃焼部には径30cmほどの不整な円形で厚さ5～7cmの橙色焼土が広がる。煙道は削り貫き式で、長さは約100cmを測り、緩やかな下り勾配を保ち煙出部へと続く。煙出部は、径約30cmで垂直に掘り込まれており、深さ約90cmを測る。

遺物は土師器の甕形土器が小袋で3袋ほど出土した。主なものとして、甕形土器はカマド付近の床面RP 1・2が接合したほぼ完形の1点(65)、埋土上層からの1点(66)、鉄鐸が東側床面から2点(22・23)出土している。

S I 44 竪穴住居跡、S W 66 炭窯 (第49図、遺物図版81・118、写真図版34・272・301)

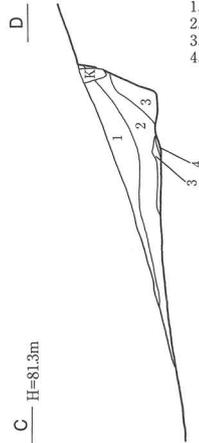
D区赤22区の尾根頂部の平坦部分、VIII E-7 d～7 e グリッドに位置し、検出面はIV層及びV層である。精査後まもなく中央部分の埋土上層から鉄生産関連炉(S X W 22)が検出された。また南東端の床面付近において、炭化物の広がりを確認した。この炭化物の下部に微弱な焼土がみられること、またその形態から炭窯(S W 66)と判断した。両方ともS I 44の埋没後に構築されたもので、新旧関係は、(新)S X W 22→S W 66

SI39



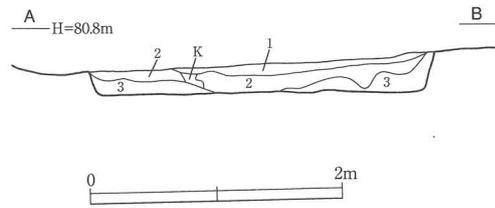
SI39

1. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性無、炭化物微量
2. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、炭化物微量
3. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、炭化物微量
4. 10YR5/8 (黄褐) しまりやや有、粘性無

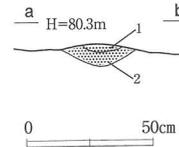


SI39 地床炉

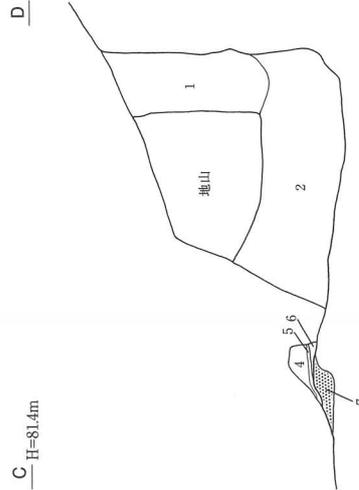
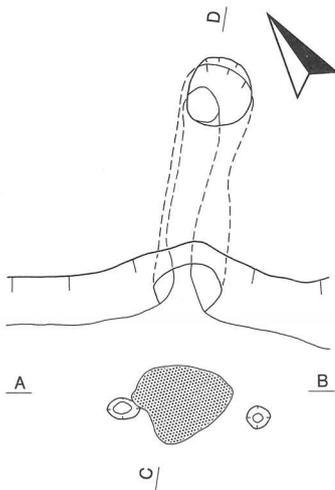
1. 7.5YR4/6 (褐) 焼土
2. 7.5YR7/4 (にぶい橙) 焼土



SI39 地床炉

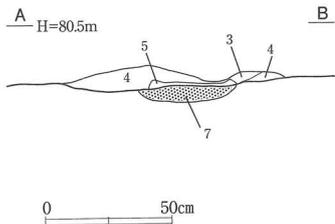


SI39 カマド



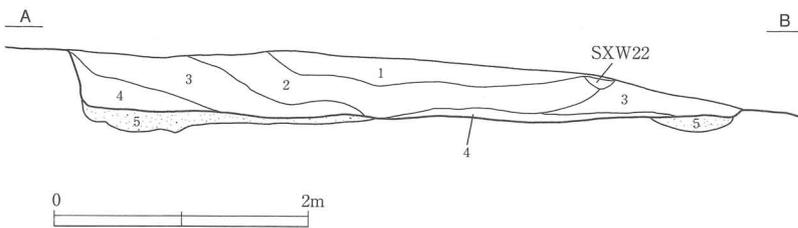
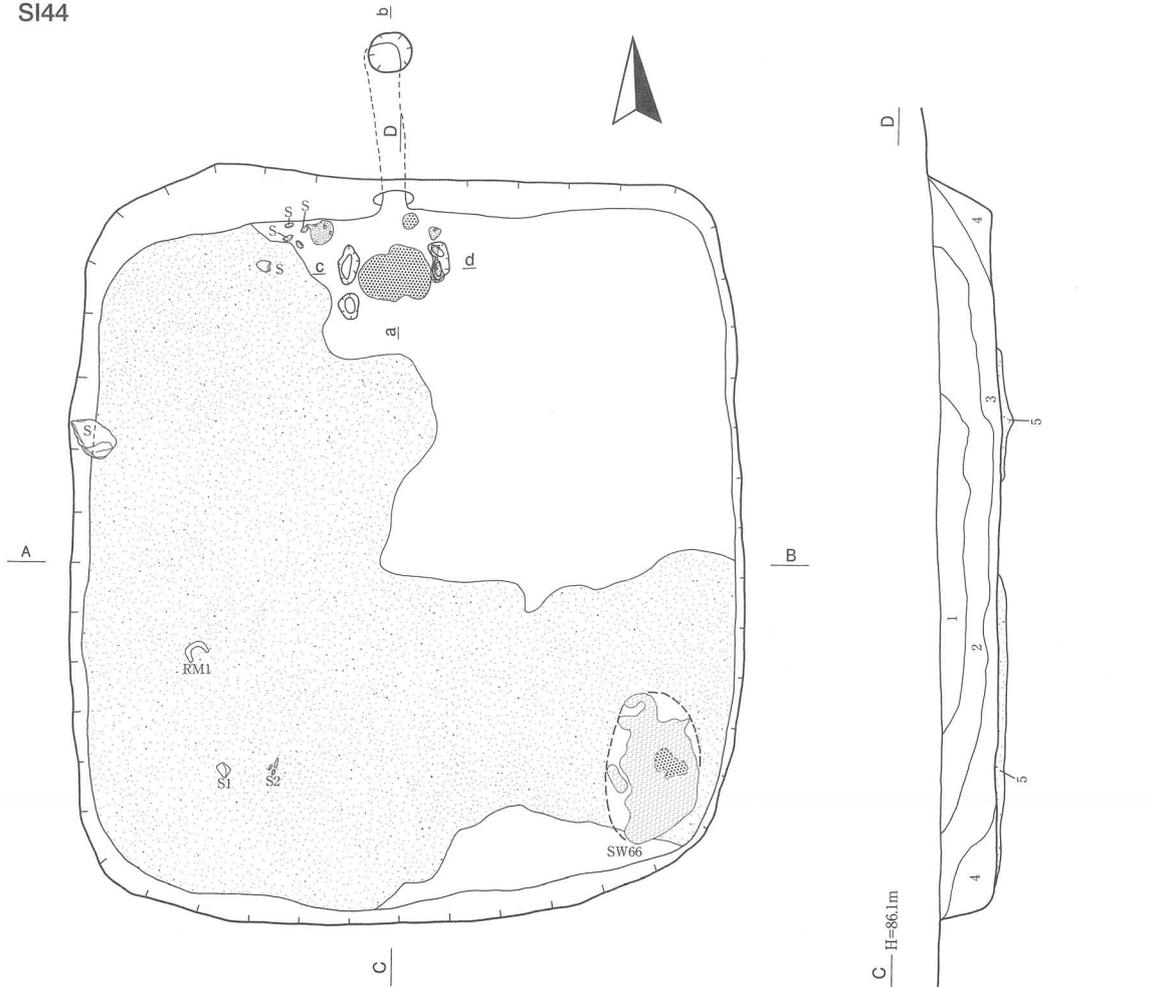
SI39 カマド

1. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性無、マサ土混入
2. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性無、マサ土混入
3. 10YR5/8 (黄褐) しまりやや有、粘性無、崩落構築土
4. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無
5. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性無、炭化物少量
6. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性無
7. 7.5YR7/3 (にぶい橙) 燃焼部焼土

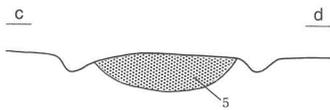


第48図 SI39 竪穴住居跡

SI44

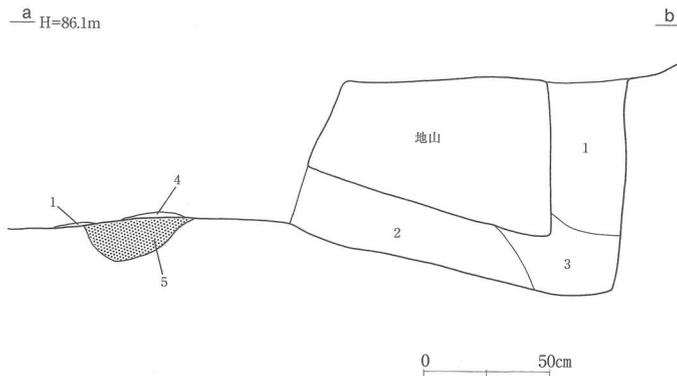


- SI44
1. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性やや有
 2. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性やや有、褐色土を斑に含む
 3. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有、暗褐色土を斑に含む
 4. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性有
 5. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有、貼床



- SI44 カマド
1. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性有、炭化物微量
 2. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性有、炭化物微量
 3. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有
 4. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性有
 5. 2.5YR4/8 (赤褐) 燃焼部焼土

SI44 カマド



第49図 SI44竪穴住居跡・SW66炭窯

→S I 44 (旧) と考えられる。

S W 66は、上記のような状態での検出であったため、その大半は不明である。平面形は略楕円形が推定され、規模は炭化物混じりの黒色土の広がり約100×60cmの範囲で確認された。壁、埋土等は不明で、厚さ1cm程度の極めて弱く明赤褐色変化した焼土が認められた。遺物は出土せず、炭化物は分析の結果、クリと判明した。

S I 44の平面形は隅丸長方形で、規模は北壁長約5m、南壁長約5.1m、東・西壁長が約5.4mである。主軸方位はN-3°-Eで、床面積は26.4㎡である。壁は北壁と東壁がやや外傾して立ち上がるが、南壁と西壁はほぼ直角に立ち上がる。壁高は北壁が約50cm、南壁・西壁が約45cm、東壁が約10cmを測る。埋土は黒褐色土系で5層の自然堆積である。床面は平坦で堅く締まり、柱穴等は認められなかった。貼床は西側半分から南壁にかけて施されている。

カマドは北壁のほぼ中央に付設されているが、本体の遺存状態は良くない。袖は確認できないが、燃焼部の周囲には芯材の抜き取り痕と思われる径10cmほどの窪みが3基ある。またカマドに伴うと思われる灰白色粘土が燃焼部の周囲に3カ所に径20~30cm程度の塊で検出された。燃焼部には径約50~60cmの略円形で、厚さ15cmほどの赤褐色焼土が広がる。なお、この燃焼部焼土は熱残留地磁気測定を行なっている。煙道は削り貫き式で、奥行130cmを測り、下り勾配を保ちながら煙出部へと続く。煙出部は径約30cmで垂直に掘り込まれており、深さは約80cmである。

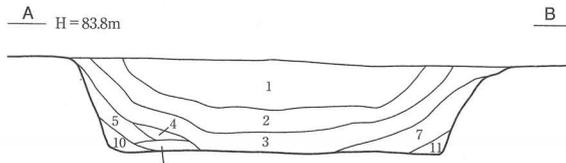
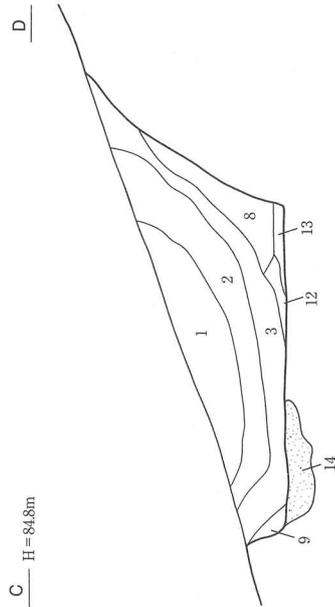
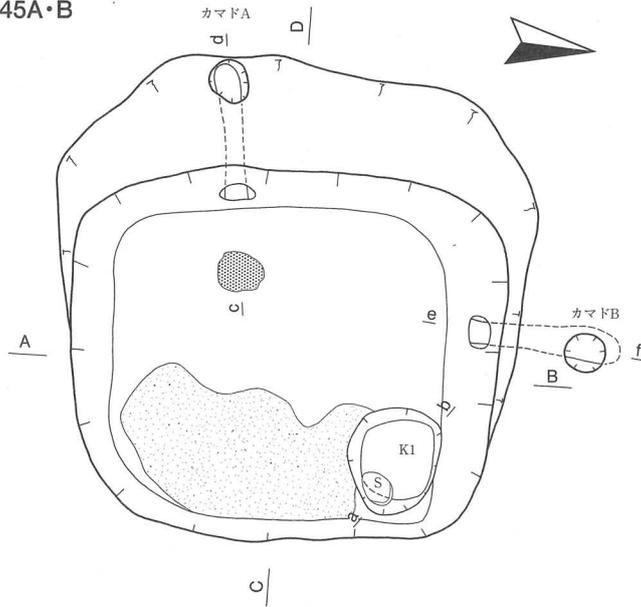
遺物は、土器は土師器の破片のみで埋土中から十数点出土している。この他、埋土から敲・磨石1点(34)、鉄製品として、鋤先が南西側床面RM1の1点(24)、鏝が煙道入り口付近から1点(25)出土している。なお、半分に割れた敲・磨石(34)はS I 38の床面出土のものと同接合した。(赤石)

S I 45A・B 竪穴住居跡 (第50図、遺物図版82、写真図版35・272)

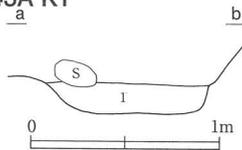
D区赤22区中央部の東側斜面、ⅧD-8t・9tグリッドに位置し、検出面はⅣ層及びⅥ層上面である。本遺構にはカマドが2基遺存しており、西壁に位置するものをカマドA、北壁に位置するものをカマドBとした。詳細については後述するが、それぞれに伴う床面が存在したと推定されることから、カマドAに伴うものをS I 45A、カマドBに伴うものをS I 45Bと判断した。平面形は傾斜により崩落した部分が多いが隅丸略方形を呈し、崩落部を除いた規模は西壁で約3.4m、東壁で約3m、南・北両壁で約2.7mを測る。それぞれの主軸方位はカマドAがW-11°-S、カマドBがN-1°-Eで、床面積は6.3㎡である。壁は外傾して立ち上がり、壁高は西壁で約120cm、南・北壁で約70cm、東壁で約30cmを測る。埋土はレンズ状の自然堆積で12層に細分される。床面は平坦で締まりがあり、遺構東側には貼床が施されている。床面施設としては、遺構北東隅にはK1土坑が掘り込まれている。S I 45A貼床を切っていることから、S I 45Aに伴う床面施設と考えられる。開口部の平面形はS I 45A北壁と接する歪な楕円形を呈すが、底部形は隅丸略方形に近い形状である。開口部は約85×70cm、底部は一辺約50~60cmを測る。断面形は平底鍋形を呈し、深さは約20cmを測る。また、K1検出面、つまりS I 45A床面にはS1が存在する。S1は鉄生産に関わる要石と思われるが、S1の状況は使用面が下面にあること、K1埋土・底面及びその周囲のS I 45A床面からは鉄生産に関連する状況が乏しいことから、K1埋没後に廃棄されたもので、本遺構に伴う可能性は低いと思われる。

カマドは前述の2基が存在する。カマドAは西壁の中央から南側に付設され、本体部のほとんどが遺存せず燃焼部のみ確認できた。燃焼部に窪みは無く、径約30cm、厚さ約5cmの不整な円形の橙色焼土が広がる。煙道は床面から7cm程高い位置にあり、奥行約110cm、径約30cmの削り貫き式である。先端に向かって下

SI45A・B



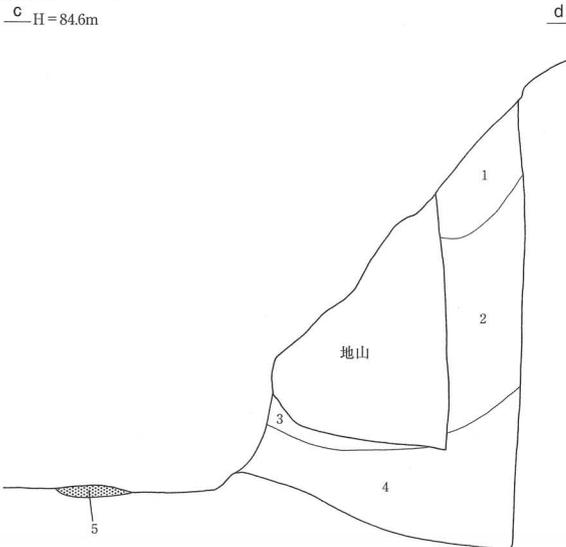
SI45A K1



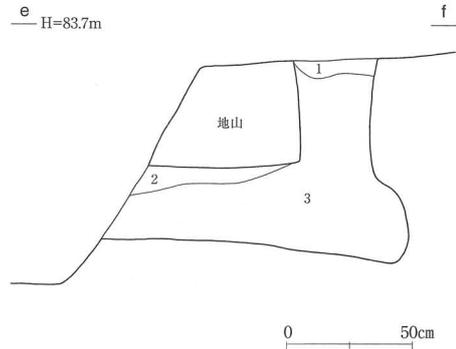
SI45A K1

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、マサ土を多く含む

SI45A カマドA



SI45B カマドB



SI45A カマドA

1. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性やや有、褐色土ブロック少量
2. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性やや有
3. 10YR6/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
4. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性やや有、炭化物微量
5. 7.5YR6/6 (橙) 燃焼部焼土

SI45B カマドB

1. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、にぶい黄褐色土ブロック少量
2. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性無
3. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、炭化物微量

第50図 SI45A・B竪穴住居跡

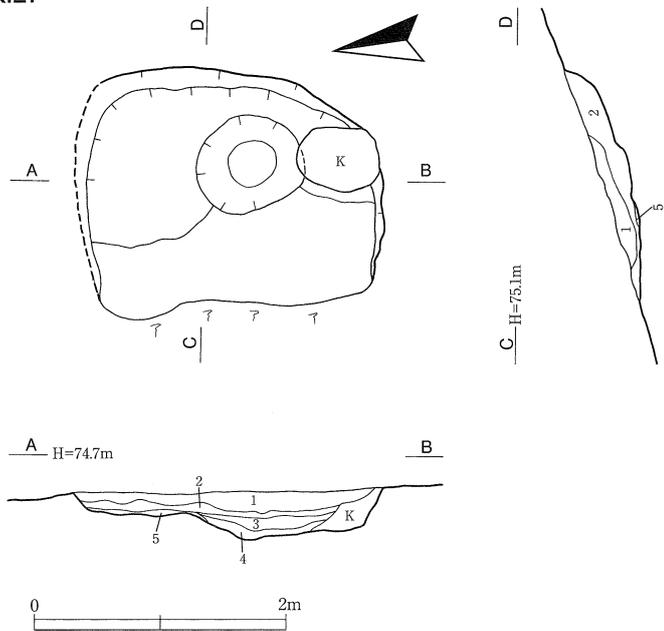
り勾配で煙出へと続く。煙出は径約35cm、深さ約140~180cmで垂直に掘り込まれている。一方、カマドBは北壁の中央からやや西側に付設され、本体部は遺存しない。煙道は床面から18cm程高い位置にある笊り貫き式で、奥行約120cm、径約30cmを測り、勾配はほとんど無い。煙出は径約30cm、深さ約80cmで垂直に掘り込まれ、煙道の途中にぶつかる。以上の両カマドの状況から、カマドB使用時の床面は現存する床面より高い位置にあり、S I 45B床面を掘り下げて、S I 45A及びカマドAを構築したものと推測される。

遺物は非常に少量で、埋土中より土師器の甕形土器片3点と鉄塊系遺物1点、床面から前述の要石1点(35)が出土したのみである。(小林)

SK I 27 竪穴状遺構 (第51図、写真図版35)

D区赤21区中央緩斜面部の西側斜面、VII D-15q グリッドに位置し、検出面はV層上面である。斜面下の西側部分が崩落し、精査時には北側一部を掘削したため不明な部分がある。平面形は略方形を呈し、規模は残存値で東・西壁長が約2.3m前後、北壁長が1.8m前後、南壁長が1.3m前後で、床面積は7.2㎡である。壁は外傾して立ち上がり、東側で約30cmを南側で約20cmを測る。埋土は褐色土主体の5層に細分され、ほとんどの層にわずかながら炭化物粒が含まれる自然堆積である。床面は堅く締まり、東部分は西にわずかに傾斜し、西部分は平坦である。中央部分に円形で径100cm、深さ20cm程度の皿状の掘り込みがある。掘り込み部分の中央床面には廃棄されたと思われる焼土がわずかにみられた。出土遺物はない。(赤石)

SKI27



SKI27

1. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有、炭化物少量
2. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性やや有、におい黄橙色土ブロック混入、炭化物微量
3. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性やや有、炭化物微量
4. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性やや有、炭化物・廃棄焼土微量
5. 10YR7/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有

第51図 SKI27 竪穴状遺構

S X W22鉄生産関連炉跡 (第52図、写真図版36)

D区赤22区の南側平坦部、ⅧE-7d・8dグリッドに位置する。本遺構はS I 44埋没後に構築されており、S I 44検出面下約3～5cmで検出した。検出時の状況として、鉄塊を含む歪な楕円形状の黒色土と還元色土が広がることから、鉄生産関連炉跡であると判断した。また、黒色土部分には鉄塊等を含み、掘り込みを有する。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部約30×20cm、底部約15×10cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる丸底鍋形で、壁高は約7cmを測る。埋土は前述の通り、鉄滓・鉄塊を含む黒色土の単層である。底面は木根による攪乱が著しいため凹凸がある。底面及び壁面は還元色に一部変化しているが、調査員の鉄生産関連炉に関する知識の乏しさにより大半を損なってしまったため、全容は不明である。

遺物は鉄滓が微量と鉄塊系遺物の小塊が十数点出土している。

(小林)

SW43炭窯 (第52図、写真図版36)

D区赤20区の中央、尾根頂部のⅧD-7dグリッドに位置する。検出面はⅥ層上面である。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部約170×100cm、底部約140×80cmを測る。長軸方向は北北西-南南東にある。壁は鋭角的に立ち上がり、壁高は北壁で約20cm、南壁で約10cmを測る。埋土は3層で黄橙色土を主体とし、底面に近い層で炭化物粒の混入がみられる。埋土の最下層にはほぼ全面に炭化物層が広がる。炭化物層は中央部に7～8cmと厚く、壁際に薄い堆積をみせる。底面は平坦で中央部分が火熱により、厚さ数mm赤色変化しており、炭窯と判断した。出土遺物は無く、炭化物はクリと鑑定された。

SW46炭窯 (第52図、写真図版36)

D区赤18区の南側東斜面のⅥC-20rグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。平面形は急勾配な立地のため谷側部分の崩落が著しく全容ははっきりしないが、残存部分の形状から楕円形を呈すると考えられる。規模は開口部約180×50cm以上、底部は約140×40cm以上と推定される。長軸方位は北西-南東を示し等高線に平行する。残存する山側の西壁はほぼ直角に立ち上がり、約20cmを測る。埋土は4層で褐色土を主体とし、全体に炭化物粒が混入する自然堆積である。埋土の最下層にはほぼ全面に厚さ1～2cmの炭化物層が広がり、一部は崩落し斜面下に流れ出ている。底面は平坦で、壁や底面に10cm程度の広がり度で厚さ数mm～1cm程の火熱により弱く赤褐色変化した部分が点在する。以上のことより炭窯と判断した。出土遺物はなく、炭化物は分析の結果クリと判明した。

(赤石)

SW50炭窯 (第52図、写真図版36)

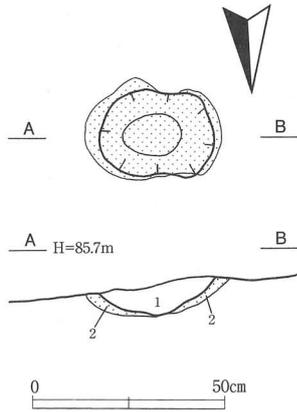
D区赤21区中央緩斜面部の西側斜面肩口、ⅧD-15pグリッドに位置する。本遺構はS I 32・S K I 21の精査過程で検出したもので、検出面はⅣ層である。実際の重複関係はS K I 21との間にみられ、S K I 21南東壁上部を壊す形で掘り込まれている。平面形は円形を呈し、規模は開口部径約110cm、底部径約90cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは約15cmである。埋土は4層に細分されるが、基本的には上位に褐色土系が堆積し、下位には炭化物層が認められる。底面は緩い傾斜がついており、厚さ1cm程度の赤褐色焼土の広がりが一部みられる。以上により、本遺構は炭窯であると判断した。遺物は4層から出土した炭化物のみで、鑑定の結果、クリであることが判った。

(小林)

SW51炭窯 (第52図、写真図版36)

D区赤21区の南側平坦部のⅧD-17sグリッドに位置する。当初S I 36の中央部埋土中の炭化物の多い範囲として認識したが、精査途中での底面や断面の観察から別遺構であることが判明した。本遺構はS I 36の床面に近い埋土中で検出されており、S I 36を切っていることからS I 36より新しい。S I 36の精査時に誤って壁付近を一部掘り下げてしまい不明な部分があるが、残存部分から平面形は長楕円形を呈すると思われ、

SXW22



SXW22

1. 10YR2/3 (黒褐) しまり欠、粘性有、鉄滓多く含む
2. 5Y2/1 (黒) しまり欠、粘性やや有

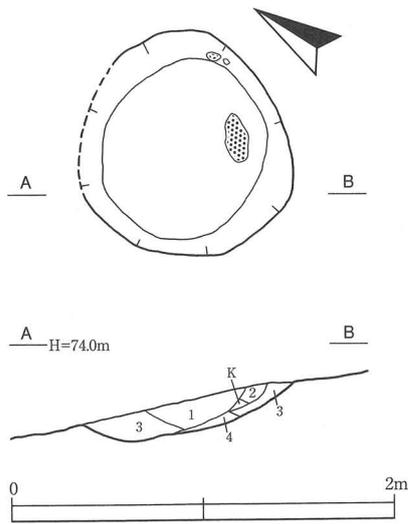
SW43

1. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性無
2. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無
3. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、炭化物少量
4. 10YR1.7/1 (黒) 炭化物層
5. 5YR7/4 (にぶい橙) 弱い焼土

SW46

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
2. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無
3. 10YR1.7/1 (黒) 炭化物層
4. 10YR8/3 (浅黄橙) しまりやや有、粘性無、炭化物粒少量
5. 7.5YR8/2 (灰白) しまり極めて有、粘性無

SW50



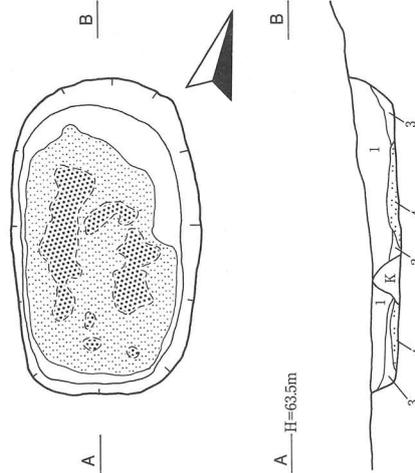
SW50

1. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有
2. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性有
3. 10YR4/3 (褐) しまり・粘性やや有、黄褐色土少量
4. 10YR1.7/1 (黒) 炭化物層

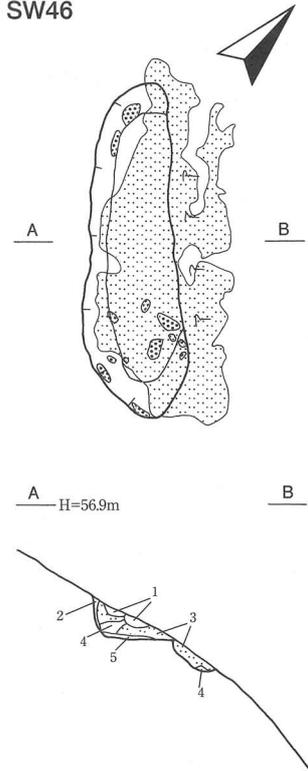
SW51

1. 10YR2/3 (黒褐) 炭化物層

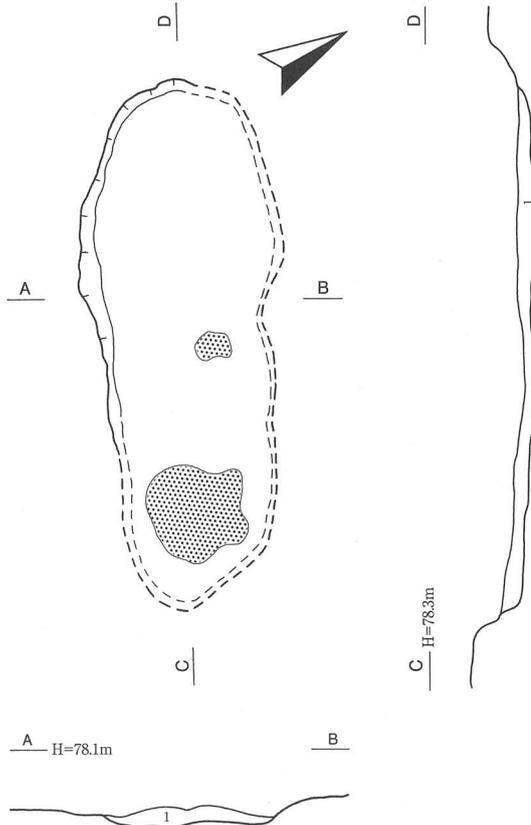
SW43



SW46



SW51



第52図 SXW22鉄生産関連炉跡・SW43・46・50・51炭窯

規模は開口部約280×100cm 前後、底部約270×90cm前後と推定される。長軸方向は北西－南東にあり、残存する壁はなだらかに立ち上がり、南壁及び西壁で約10cmを測る。埋土は炭化物を多く含む単層である。底面は平坦で堅く締まっており、中央部に径10cm、南東部に径40cm程度の略円形の火熱で赤色変化した厚さ2～3mmの焼土がみられた。以上の観察から本遺構は炭窯であり、S I 36が埋まりきる前の窪みを利用して構築したものと思われる。遺物は出土せず、炭化物は分析によりクリと判明した。(赤石)

S K 111土坑 (第53図、写真図版37)

D区赤21区の北側平坦部、ⅦD-13nグリッドに位置し、検出面はV層である。本遺構はS I 31南西隅を精査中に確認したもので、埋土断面からの切り合いは不明だが、残存する北西壁の状態がS I 31を切っていることから、S I 31より新しいものと思われる。残存部から、平面形は円形を呈していたものと思われる。推定される規模は開口部径180cm、底部径140cmである。断面形は平底鍋形を呈し、深さは残存する南西壁で約70cmを測る。埋土は8層に細分されるが、上位に流入土、壁際に崩落土が堆積する自然堆積と思われる。底面は概ね平坦で、S I 31床面とほぼ等しいと思われる。遺物は出土しなかった。(小林)

S K 114土坑 (第53図、写真図版37)

D区赤21区の南側馬の背状部のⅦD-18tグリッドに位置し、検出面はV層上面である。平面形・規模は歪な円形を呈し、開口部約200×160cm前後、底部約140×120cm前後を測る。壁はなだらかに立ち上がり、断面形は深い皿状を呈し、深さ20cmを測る。埋土は6層で褐色土主体であり、中心部から底部の層に炭化物粒の混入がみられる。層状に堆積しているが極めて堅く締まっており、人為的に埋め戻したと思われる。底面はおおむね平坦で斜面同様西側から東側にかけて緩やかに上る。遺物は出土しなかった。(赤石)

S K 115土坑 (第53図、写真図版37)

D区赤21区南側平坦部の南西斜面、ⅦE-19aグリッド杭を中心に位置し、Ⅵ層上面で検出した。平面形は円形で、規模は開口部径約105cm、底部径約85cmを測る。壁はほぼ直角に立ち上がり、断面形は平底鍋形を呈する。壁高は山側で約70cm、谷側で約45cmを測る。また壁のほぼ全体が被熱により赤褐色に変化しているが、厚さは1cm以下で弱く焼けている。埋土はレンズ状の自然堆積で15層に細分されるが、上位に褐色土、中位に明黄褐色土、下位・壁際に黄褐色土、最下層に炭化物層と大別できる。底面は平坦で、壁同様に厚さ1cm以下の赤褐色焼土が確認された。以上の状況より、本遺構は炭窯若しくは炉跡の可能性も考えられるが、壁高が山側で約70cm、谷側で約45cmと本遺跡の同遺構と比較しても非常に深いことから、炭窯・炉跡とは考え難く、土坑と判断した。遺物は出土しなかった。

S K 118土坑 (第53図、写真図版37)

D区赤21区の中央緩斜面部、ⅦD-14oグリッドに位置し、検出面はV層である。平面形は歪な円形を呈し、規模は開口部約175～145cm、底部径は約120～100cmを測る。断面形は平底鍋形をし、深さは約30cmを測る。埋土は褐～黄褐色系の4層に細分され、自然堆積と思われる。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。(小林)

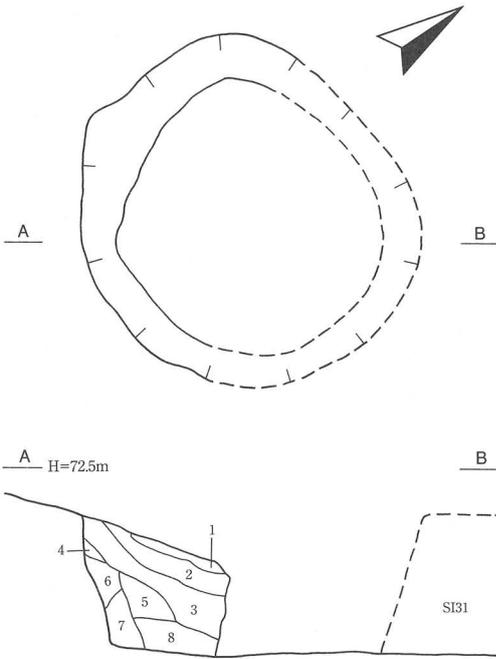
S N 10焼土遺構 (第54図)

D区赤20区中央の尾根頂部、ⅦD-7eグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。平面形は不整形であり、4つの部分が集まった形をしており、広がりには20×20cm程度である。厚さは2～3cm前後であり、橙色の弱い焼けで締まりも弱い。遺物は出土しなかった。(赤石)

S N 12焼土遺構 (第54図)

D区赤21区の中央緩斜面部、ⅦD-14oグリッドに位置し、検出面はV層である。不整形な橙色焼土の広

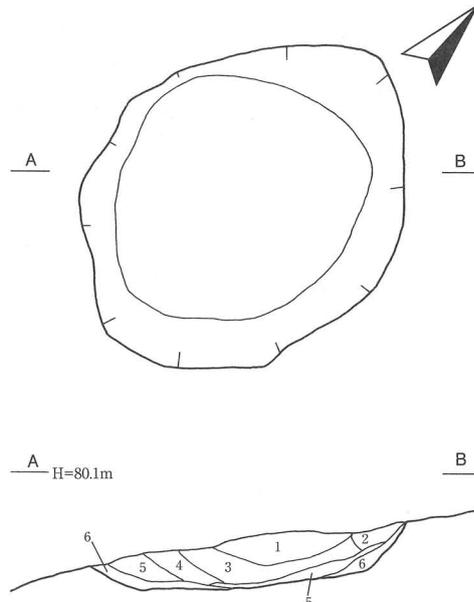
SK111



SK111

1. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性やや有
2. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性有
3. 10YR5/8 (黄褐) しまりやや有、粘性有
4. 10YR8/6 (黄橙) しまり欠、粘性無、マサ土混入、壁の崩落土
5. 10YR6/8 (明黄褐) しまり・粘性やや有、マサ土少量混入
6. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性有
7. 10YR7/6 (明黄褐) しまり欠、粘性無
8. 10YR5/8 (黄褐) しまり欠、粘性有

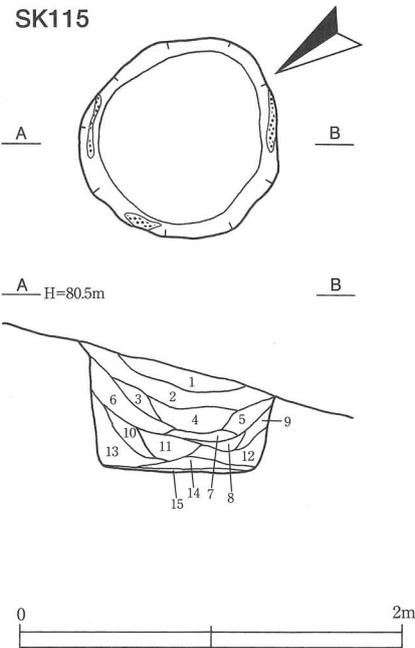
SK114



SK114

1. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性やや有、木根極めて多い
2. 10YR4/2 (灰黄褐) しまり極めて有、粘性無
3. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性やや有、炭化物微量
4. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性やや有、炭化物微量
5. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性やや有
6. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有

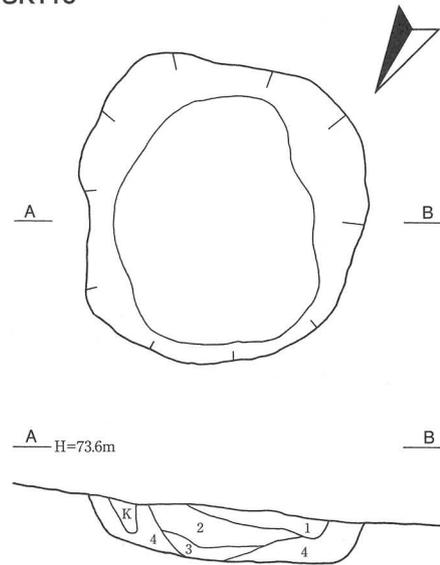
SK115



SK115

1. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性やや有
2. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性やや有
3. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性やや有
4. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性やや有
5. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
6. 10YR5/8 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有、明黄褐色土ブロック少量混入
7. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性やや有
8. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
9. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
10. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性やや有
11. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性やや有、褐色土多量混入
12. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性やや有、焼土粒・炭化物微量混入
13. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
14. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性やや有、炭化物中量混入
15. 10YR2/1 (黒) しまり欠、粘性欠、炭化物層

SK118



SK118

1. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性やや有、木根多い
2. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性有、黄褐色土ブロック・炭化物少量混入
3. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有、明記褐色土ブロック・炭化物微量混入
4. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性極めて有

第53図 SK111・114・115・118土坑

がりで、規模は約160×15～65cmを測る。厚さは最大13cmを測り、極めて堅く締まる。本遺構とその周囲より土壌サンプルを採集したが、鍛造剥片は混入していなかった。遺物は出土しなかった。

S N14焼土遺構（第54図）

D区赤21区中央緩斜面部の西側斜面肩口、ⅦD-15qグリッドに位置し、検出面はⅣ層である。赤褐色焼土の広がりとして検出した。検出状況は図と写真に記録したものの、調査員の指示が行き届かなかったため、幾度にもわたるクリーニング作業により消失させてしまった。そのため詳細は不明であるが、平面形は不整な楕円形を呈し、規模は約20×13cmを測り、極めて堅く締まる。遺物は出土しなかった。

S N27炉跡（第54図、写真図版28）

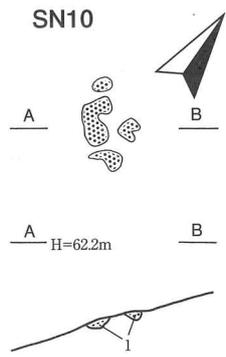
D区赤21区北側の尾根頂部から東側斜面へと続く肩口、ⅦD-14lグリッドに位置し、Ⅳ層で検出した。本遺構はS I 30AカマドA煙道及び煙出部と重複しており、それらを切っている。検出時の状況として、廃棄された焼土塊や炭化物が広範囲に不整に広がっていることから炭窯を想定し、ベルトを設定し精査を行った結果、設定ベルトから外れた部分に浅い掘り込みを有し、全体的に強い被熱により橙色変化した焼土が広がることから、炉跡であると判断した。掘り込みの平面形は楕円形を呈し、規模は開口部約70×50cm、底部約45×30cmを測る。断面形は浅い平底鍋形を呈し、深さは約15～20cmを測る。埋土は掘り切ってしまったため詳細は不明であるが、黒褐色土系に焼土塊が大量に混入する様相であった。底面は木根による攪乱により凹凸がある。底面及び壁面に広がる橙色焼土の厚さは約5～10cmを測る。焼土の断ち割りをを行った際の断面観察の結果、底面及び壁面には貼土が施されていることが判明した。重複するS I 30AカマドAの煙道天井の大部分が残存しておらず、煙道内にブロック状の黄褐色土や焼土塊及び炭化物が混入していることから、S I 30A廃絶後に天井が崩落した若しくは天井を崩落させた土を利用して、本遺構を構築したものと考えられる。遺物は出土せず、また鉄生産関連炉の可能性を考えて土壌サンプルを行ったが、鉄塊及び鍛造剥片等は検出されなかった。

S N28炉跡（第54図、写真図版37）

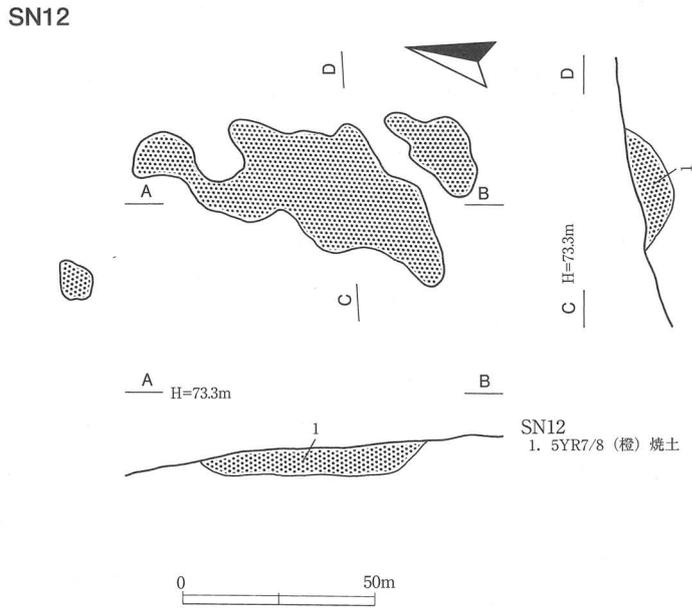
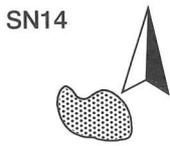
D区赤21区南側平坦部の東側斜面肩口、ⅦD-19s・20sグリッドに位置し、検出面はⅣ層である。検出時の状況として、北西側に焼土が確認でき、その平面形プランから炭窯と考えたが、精査の結果、浅い掘り込みを有し、底面に厚い焼土が広がることから炉跡と判断した。平面形は円形を呈し、規模は開口部径約75cm、底部径約70cmを測る。壁は山側のみ遺存し鋭角に立ち上がり、深さは約20cmを測る。埋土は山側から流入した自然堆積と思われる、2層に分けられる。底面はほぼ平坦で、不整な明赤褐色焼土が広がり、その規模は約55×60cmを測る。厚さは7cm前後で極めて堅く締まる。遺物は出土しなかった。

S N30炉跡（第54図、写真図版37）

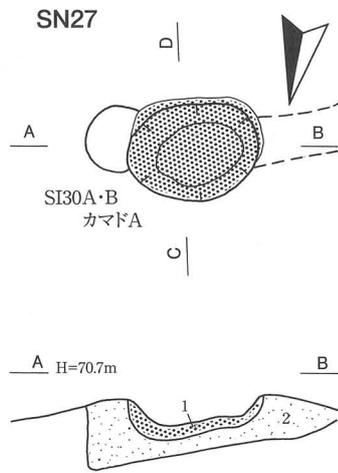
D区赤21区中央緩斜面部の西側斜面肩口、ⅦD-14p・15pグリッドに位置し、Ⅴ層で検出した。検出時の状況から土坑と考えたが、精査の結果、底面に厚い焼土の広がりをもつことから炉跡と判断した。平面形は略楕円形で、規模は開口部約130×100cm、底部約105cm×80cmを測る。長軸方向は最も高低差のある北東-南西方向にあり、等高線に直交する。壁は斜面上方では緩やかに外傾して立ち上がり、壁高は約30cmを測るが、斜面下方では壁は遺存しない。埋土は斜面上方から下方へと流入した自然堆積と思われる、3層に分けられる。また、遺構中央には大きさ約15×10cm、厚さ8cm程の橙色粘土質ブロックが、遺構北東壁には大きさ約20cm×15cm、厚さ5cm程度の浅黄橙色粘土質ブロックがいずれも3層下位に混在する。底面はほぼ平坦で、底面中央には略楕円形をした明赤褐色焼土が広がる。規模は約50×25cm、厚さは約4cmを測り、極めて堅く締まる。遺物は土師器の甕片が数点出土したのみである。（小林）



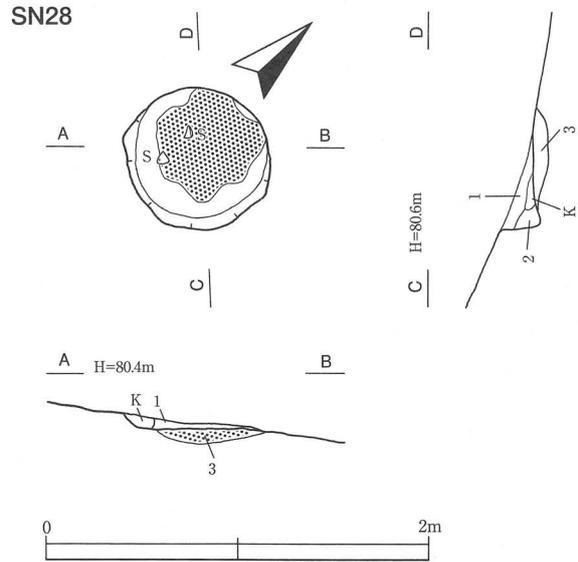
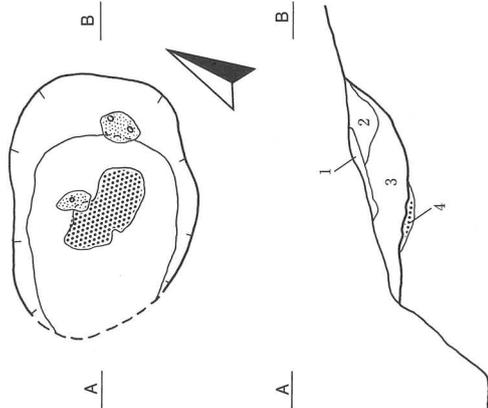
SN10
1. 7.5YR7/6 (橙) 焼土



SN12
1. 5YR7/8 (橙) 焼土



SN30



SN27
1. 5YR6/8 (橙) 焼土
2. 10YR6/6 (明黄褐) 粘土

SN28
1. 10YR3/4 (暗褐) しまり欠、粘性有
2. 10YR5/6 (黄褐) しまり欠、粘性有
3. 5YR5/8 (明赤褐) 焼土

SN30
1. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性極めて有
2. 10YR5/8 (黄褐) しまりやや有、粘性有、炭化物微量含む
3. 10YR6/6 (明黄褐) しまり欠、粘性有、焼土粒・炭化物少量含む
4. 5YR5/8 (明赤褐) 焼土

第54図 SN10・12・14焼土遺構・SN27・28・30炉跡

2) E区の遺構

E区は、V字形に北側方向に延びるD・F区2本の幹尾根の間になる大きな谷部分である。地形概況としては、全体的には北側に高度を下げながら開けるが、北部(緑7・8区)と南部(緑9・10区)とでは谷底の緩斜面部で高低差があり、2段の大きな洞状を呈する。北部では谷底の広さは南北長約40m、幅5～10m前後、標高は25～33m、南部では南北長約30m、東西幅5～13m前後、標高は45～50mほどである。北部の東側斜面は急勾配でF区赤24区尾根頂部に、西側では斜面裾に現況で沢が流れており、そこからD区の枝尾根赤19区の尾根頂部にかなりの急勾配で至る。南部の東側斜面は急勾配でF区赤23区の尾根頂部に、南西の斜面も急勾配でD区赤21区の尾根頂部に至るが、北西側には赤20区尾根頂部に至る部分に小さな洞状の谷(緑10区)が2本ある。

検出された主な遺構としては、竪穴住居跡23棟、工房跡20棟、竪穴状遺構1棟、鉄生産関連炉跡17基、炭窯11基、土坑27基、炉跡5基、焼土遺構9基、溝跡1条、廃土場2ヶ所などがある。分布状況としては、北部谷では大半が東側斜面に立地し、古代の住居等は3～4棟が重複する数ヶ所のまとまりが認められ、南部谷では東西の斜面裾に立地し、遺構は希薄である。

①緑7・8区

緑7・8区は、E区の一段低い北部谷であり、主に谷底から赤24区尾根頂部に至る東側斜面にあたる。ところで、この斜面中腹には伐採木搬出用に掘削された道路が1条あり、便宜的にこれを区境に上位を緑8区、下位を緑7区としたものであるが、緑8区の北端の斜面上位は小さな沢状地形となっており、やや傾斜が緩やかである。本地区は上記のように急勾配の谷地形となっているため、層序は単純ではなく、谷底に下るに従い堆積層位が増えて基本層序のⅢ層が細分される。遺構の集中する東側斜面の中腹、つまり緑7区上端部から上位ではⅢ層は存在せず、緑8区北側の沢部にはⅣ・Ⅴ層が認められるが、Ⅱ層下は概ねⅥ層の基盤層となっている。中腹より下位ではⅢ層が3層以上に細分されるが、水成の二次堆積もあり、一様ではない。およそⅢa・b層が古代、Ⅲc層が縄文時代の遺構検出面で、これ以下は無遺物層となる。また谷底のⅢc層上面には二次堆積と思われる火山灰(分析の結果、白頭山苦小牧火山灰に十和田a火山灰がブロック的に混じる)が部分的に認められた。

遺構は、竪穴住居跡、工房跡、竪穴状遺構、鉄生産関連炉跡、炭窯、土坑、炉跡、焼土遺構などがある。分布状況としては、緑7区には竪穴住居跡14棟、工房跡10棟、竪穴状遺構1棟、鉄生産関連炉跡5基、炭窯4基、土坑22基、炉跡3基、焼土遺構5基、緑8区には竪穴住居跡8棟、工房跡6棟、鉄生産関連炉跡6基、炭窯3基、土坑5基、炉跡1基、焼土遺構1基、溝跡1条が位置するが、大半は斜面上部から下位斜面裾に立地し、斜面上部では緑8区の北側の狭い洞部に上下の重複関係で集中的にある。

なお、緑7区の遺構の半数と緑8区のSX I 09A～Cについては前述のとおり、精査途中での担当調査員の交代があったため、以下の記述について記録不備により一部不明確な部分もある。(小山内)

SX I 01・02工房跡、S I 27A・B竪穴住居跡

(第55図、遺物図版9・13・60・62・82・83・118、写真図版38・39・216・219・249・250・262・272・301・311・312)

E区緑7区東斜面中央上部、VII B-15 t・16 t、VII C-15 a・16 a・16 bグリッドに位置し、検出面は東に向かって斜面上部、下方部、南側はマサ土(Ⅵ層)、北側は褐色土(Ⅳ層)と異なる様相を示していた。検出時の状況としては、暗褐色土の長軸約10m、短軸約3～6mの長楕円形のプランとして検出した。また、このプランの南側にS I 43のプランを検出していたが、精査の結果、かなり近接して存在していることがわかった。このことから同時存在の可能性は低いと思われ、切り合いがあったと推測される。しかし、切り合いの

部分をトレンチにより掘ってしまったこと、S I 43との重複を考えず調査を進めてしまったことで、新旧は不明となってしまった。S X I 01・02、S I 27A・Bについては、検出時の状況から何棟かの重複を想定し、等高線と平行するベルト1本をプランのほぼ中央に、等高線と直行するベルトをプランを3等分する位置に2本それぞれ設置し、精査を開始した。しかし、その結果予想以上に斜面上部の崩落が激しく、等高線と平行に設置したベルトが遺構にかからなかった。また、切り合いを見るためにベルトに沿って入れたサブトレンチは、貼床を考えずに掘り進めてしまい、S X I 01の床を壊してしまった。更にS X I 01の北壁とS X I 02の床も重複の様子を理解できぬままに掘り進めてしまい、その結果、図に示すような掘りあがりとなってしまった。このような結果となったのは全て理解力のなさや状況変化に対応できなかった調査員の責任である。断面写真の観察と掘り上がりの様子を合わせて鑑みると、S X I 02が初めに作られ、S X I 02が埋まった後にS I 27が作られ、最後にS X I 01がS I 27のカマドを壊して貼床をしていることから、ほとんどS I 27と時間差がなくS X I 01が作られた可能性が高いと思われる。以下からは掘りあがった平面形と断面観察から推測されるS X I 01・02、S I 27A・Bについて述べていきたい。

S X I 01については、堅穴状の掘り込みと地床炉を確認したことから、工房跡と判断した。掘り過ぎのため、床面の推定は検出した地床炉の標高値から推定した。掘り上がりから推測される規模は、長軸6.1m、短軸2.6～3mの略長方形の平面形を呈すると思われる。長軸方向は等高線と平行する北-南にあり、推定される床面積は12.4㎡である。東壁は鋭角的に立ち上がり、上部で外傾する。南北壁は斜面に沿って減ずる。西壁は斜面のため自然崩落により遺存しない。壁高は東壁約60cm、南壁約15cm、北壁約10cmを測る。埋土は壁が崩落したものと考えられるマサ土と、斜面上部からの堆積と考えられる暗褐色土の自然堆積と思われる。床面は調査員の観察力のなさから、サブトレンチで把握できていたにも関わらず掘りすぎてしまい、一部、下に重複するS I 27の床面まで掘り下げてしまった。斜面下方には、整地するための暗褐色土と黄褐色土の混じる張り出し上の貼床を確認できた。また、本遺構の床を整地する際にS I 27カマドA・Bを壊しており、カマドが位置する周辺も貼床を確認できた。しかし、大部分については、前述したとおり掘り過ぎにより不明となってしまった。断面写真の観察から床面はおおむね平坦であったと思われる。柱穴は南壁際に4本認められたが、床面を掘りすぎているためS I 27に伴う柱穴の可能性も考えられる。地床炉は遺構の中央よりやや南側に位置する。平面形はほぼ楕円形を呈し、規模は40cm×33cmで焼土の厚さは8cmである。周辺の土のサンプリングをし、鍛造剥片の抽出を行なったが検出されなかった。

S X I 02については、S X I 01と同じく、堅穴状の掘り込みと地床炉を確認したことから、工房跡と判断した。本遺構はS K 109・131と重複する。新旧関係については断面の観察からS K 109はS X I 02を作るために、人為的に埋められた様相が認められ、S K 131は推測されるS X I 02から西側に張り出すように位置していることから、両土坑ともに旧いと思われ、本遺構に伴う可能性は低い。掘り過ぎのため、床面については検出した地床炉の標高値から推定した。残存部から平面形は略長方形を呈していたと推測される。規模は残存部では長軸約3m、短軸約2～3mである。長軸方向は等高線と平行する北-南方向にあり、残存する床面積は5.1㎡である。壁は鋭角的に立ち上がり、北壁と東壁が一部遺存するのみである。西壁は斜面による自然崩落のため遺存せず、南壁はS I 27Aに壊され遺存しない。壁高は、東壁で約60cm、北壁で約20cmを測る。埋土は壁が崩落したと思われる褐色土とマサ土の上に斜面上部から流入した暗褐色土の自然堆積の様相を示している。床面は前述したように調査員がきちんとした把握ができないまま掘り過ぎてしまい、とくに北西側の床の大部分を破壊してしまった。よって一部残存している床面及び断面写真から推測すると、おおむね平坦であったと思われる。貼床はS K 109において人為的に埋められ、整地された部分は確

認できたが、それ以外の部分については貼床に注意せずに調査を進めたために不明となってしまった。斜面に立地していることから、整地するために施していた可能性が高い。地床炉は遺存している東壁際より45cmほど西に位置する。平面形は不整形で62×43cmを測り、焼土の厚さは11cmである。S X I 01同様周辺土のサンプリングを行ない、鍛造剥片の抽出を行なったが検出されなかった。

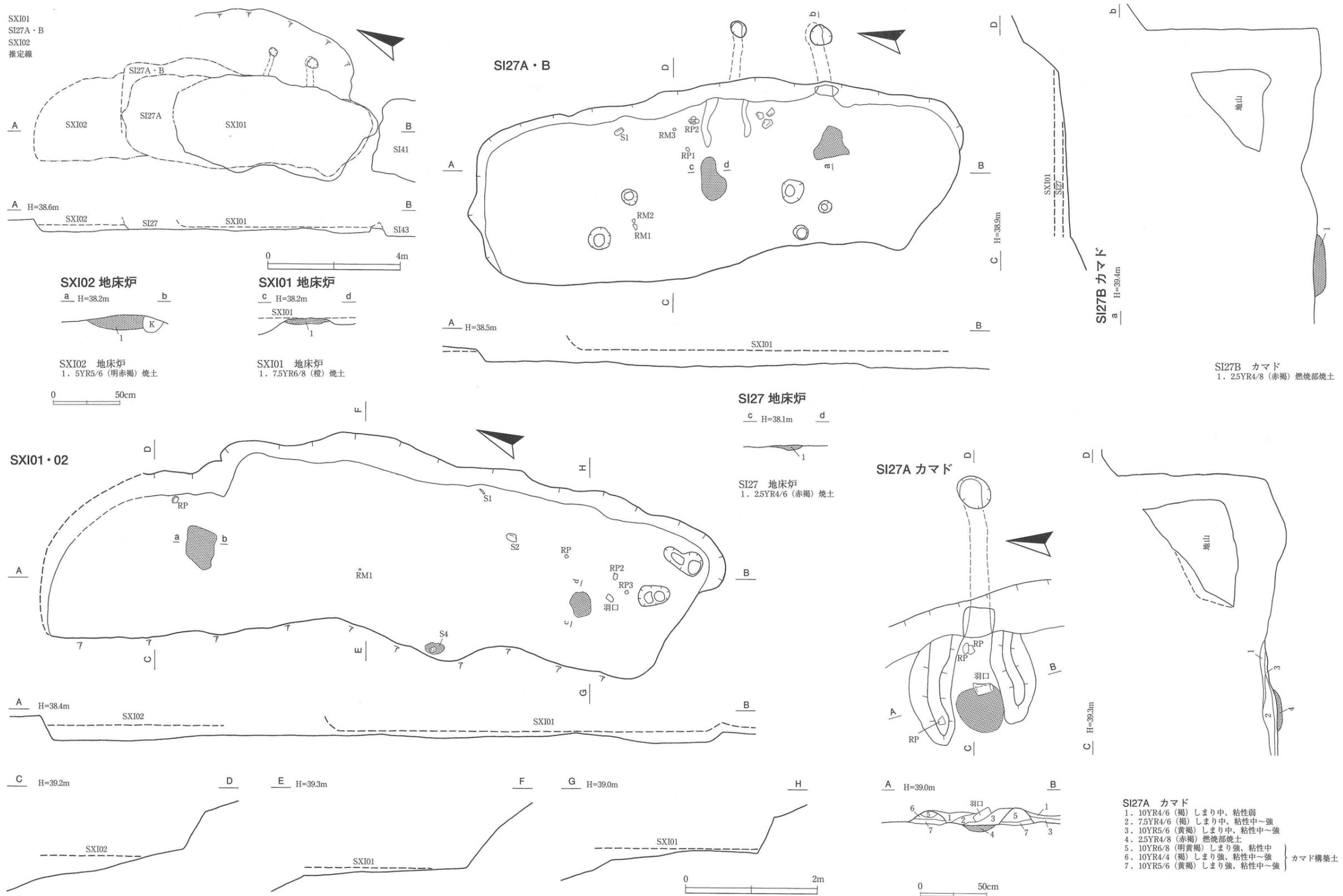
S I 27については、検出状況としてS X I 01を精査中に2基の煙出しと煙道入口を検出し、S X I 01の床面にS I 27AカマドAの両袖を確認した。2基のカマドの内、カマドAを持つ住居をS I 27Aとし、カマドBを持つ方をS I 27Bとした。精査の結果、両カマドの残存状態からカマドAの方が新しいものと思われるが、単なる造り替えが行われたものか、拡幅がされたことによるものか、または時間差のある重複関係にあるのかは、調査が行き届かなかったため不明である。また掘り上がりの状況から、S X I 02との重複部分である北東には、張り出したコーナー部分が存在しており、恐らくS I 27の北東隅部分と推測される。その部分を総合すると平面形は略長方形を呈し、規模は長軸7.8m、短軸2.8m以上と推測される。長軸方向は等高線と平行する北-南方向にあり、床面積は16.0㎡である。壁はS X I 01精査時の誤った調査により、東壁はS X I 01と共通する様相となってしまっており、詳細は不明である。立ち上がりは鋭角的で、壁高は南壁で約20cm、北壁の残存部で約15cm、西壁は斜面下方のため遺存しない。埋土はS X I 01の貼床にあたる。床面はおおむね平坦で堅く締まっている。貼床については、調査員の観察不足からはっきりした状況は不明である。また、S X I 01斜面下方に張り出して施されていた貼床についても、調査員の認識不足のためS X I 01・S I 27どちらに伴うものか不明となってしまった。柱穴は西側に4本認められた。径が35cm前後のものが2本、20cm前後のものが2本である。前者の方は掘りこみの深さなどから支柱穴の可能性が高いと思われる。また、カマドAの西側には不整形を呈した規模55×25～35cm、厚さ1～3cmの地床炉を確認した。カマドAに近接していることから、同時存在の可能性は低いと考えられる。

カマドAは東壁の中央からやや南側に位置する。S X I 01を作る際に本体部はだいぶ破壊されたと思われるが、袖部と燃焼部焼土を確認できた。袖部は黄褐～明黄褐色土系の粘土で構築されている。燃焼部はおおむね平坦であり、径35cm、厚さ5cmの赤褐色焼土が広がる。また燃焼部上の埋土中から土製支脚が出土している。煙道は削り貫き式で奥行き210cm、径24cmを測り、やや下り勾配を保ちながら煙出し穴へ続く。煙出し穴の径は58cmで、深さは220cmである。

カマドBについては、本体部の痕跡は認められず、燃焼部焼土のみの検出となった。約35～45×35～47cmの不整形で、厚さ10cm前後で赤褐色を呈する。煙道は削り貫き式で奥行き210cm、径34cmを測り、下り勾配を保ちながら煙出しへ続く。煙出しの径は55cmで深さは260cmである。

遺物は、S X I 01から土師器の甕形土器片が総量小袋1つ出土し、接合したのは埋土上位出土の1点(150)である。その他、S 2の砥石1点(19)、羽口片33点、鉄製品1点(44)が埋土中位より出土している。鉄滓等の出土は埋土中から、流状滓2.6kg、炉内滓0.4kg、鉄塊系遺物0.89kgである。S X I 02については、土師器の甕形土器片が総量で小袋1つ出土し、その内接合したのは、埋土中位～下位出土の2点(152・153)である。その他は埋土中より坏2点、羽口片8点、磨石1点が出土している。鉄滓等の出土は流状滓0.8kg、炉内滓1.1kg、鉄塊系遺物0.59kgである。S I 27Aについては、土師器の甕形土器片が総量で小袋1つ出土し、接合したのは1点(142)である。その他、カマド燃焼部の東端に支脚に使用したと思われる土製品1点(1)、坏1点、S 4の砥石1点(2)、S 1の磨石1点(25)が出土している。しかし、これら出土遺物については、床面を把握せず精査を行ったことにより、必ずしもS X I 01・02とS I 27A・Bの遺物が、それぞれどちらに伴うものか不確かなものもある。

(本多)



第55図 SI27A・B竪穴住居跡・SXI01・02工房跡

S I 43A・B 竪穴住居跡（第56・57図、遺物図版9・10・60・82、写真図版39・217・249・272）

E区緑7区東斜面中央上部、ⅦC-16bグリッドに位置し、検出面はマサ土（Ⅵ層）である。SK I 25、SK I 38・153と重複し、本遺構の精査過程での検出状況からSK I 38が新しく、SK I 25、SK I 153が古いと思われる。また検出時の状況から北側に続く何棟（SX I 01、SI 27A・B）かとの重複を想定し、等高線と平行するベルト1本をすべてのプランを通るようにほぼ中央に設置して精査を開始したが、その結果予想以上に斜面上部の崩落が激しく、等高線と平行に設置したベルトは意味をなさず、等高線とかなり近接していることから同時存在の可能性は低いと思われるが、新旧関係は不明である。さらに直行するベルトも端に寄っていたため埋土観察の役にはたたなかった。様子を理解できぬままに進めてしまい、その結果、図に示すような掘りあがりとなってしまった。（本多）

本遺構は急斜面に立地し、埋土がⅥ層起源のマサ土であったため当初は確認できず、精査過程でカマドを4基検出したものであり、残存状況からカマドの造り替えではなく、4度の建替えと思われるが、壁の状態やカマド煙道及び燃焼部焼土の遺存状況から、AカマドのA住居跡1棟（新）とDカマドのB住居跡1棟（古）の2棟についておよそ把握できたものである。

S I 43Aは、西の谷側が崩落により消失し全容は不明だが、残存する壁と貼床範囲から平面形・規模は一辺約4m前後の隅丸方形と推定され、主軸方位はN-75°-E、床面積は推定約16㎡である。遺存する壁は外傾して立ち上がり、崩落により上位がより開いている。壁高は山側東壁で最大約50cmから谷側に向かい低くなる。埋土は詳細は不明だが下位の壁崩落のマサ土と上位の黒ボク流入土に大別される。床面は平坦で堅締、壁際を除く中央部に広く貼床が施されていたが、その遺存状況からはB住居跡に伴うものの残存とも考えられる。床面施設は不規則配置の柱穴7本とカマド北側の東壁際に幅約10cm、深さ約3cmの壁溝が検出された。また南東部で焼土が検出されたが、状況からカマドB・Cの燃焼部焼土と考えられる。

カマドAは山側東壁の中央やや南寄りに付設され、本体天井部が崩落しているものの遺存状態は良好である。本体部は、袖部には芯材として長さ30cmほどの3個と、天井部の架構には長さ60cmほどの垂角礫1個を組み、黄褐色粘土で構築されていた。燃焼部は約90×50cm、深さ約4cmほどの楕円形に浅く掘り窪められており、底部では火熱により50cmほどの略楕円形の広がり、厚さ1cmほどに赤色変化した焼土が確認された。煙道は奥行き約130cm、径約30cmの削り貫き式で、外側に向かってかなり緩い下り勾配となっていた。煙だしピットは径約30cmの略円形で深さ約120cmを測る。

S I 43Bは、南東隅付近の壁とカマドD及び貼床の残存状態から1棟と判断したものであるが、遺存部は極めて少ない。推定される平面形・規模は長軸が東西方向で長辺約4.5m、短辺約3.5mの隅丸長方形で、主軸方位は東-西、床面積は推定約15.7㎡である。壁は崩落により上位がより開いて外傾して立ち上がり、壁高は山側東壁で最大約50cmから谷側に向かい低くなる。埋土・床面はA住居跡のため不明である。

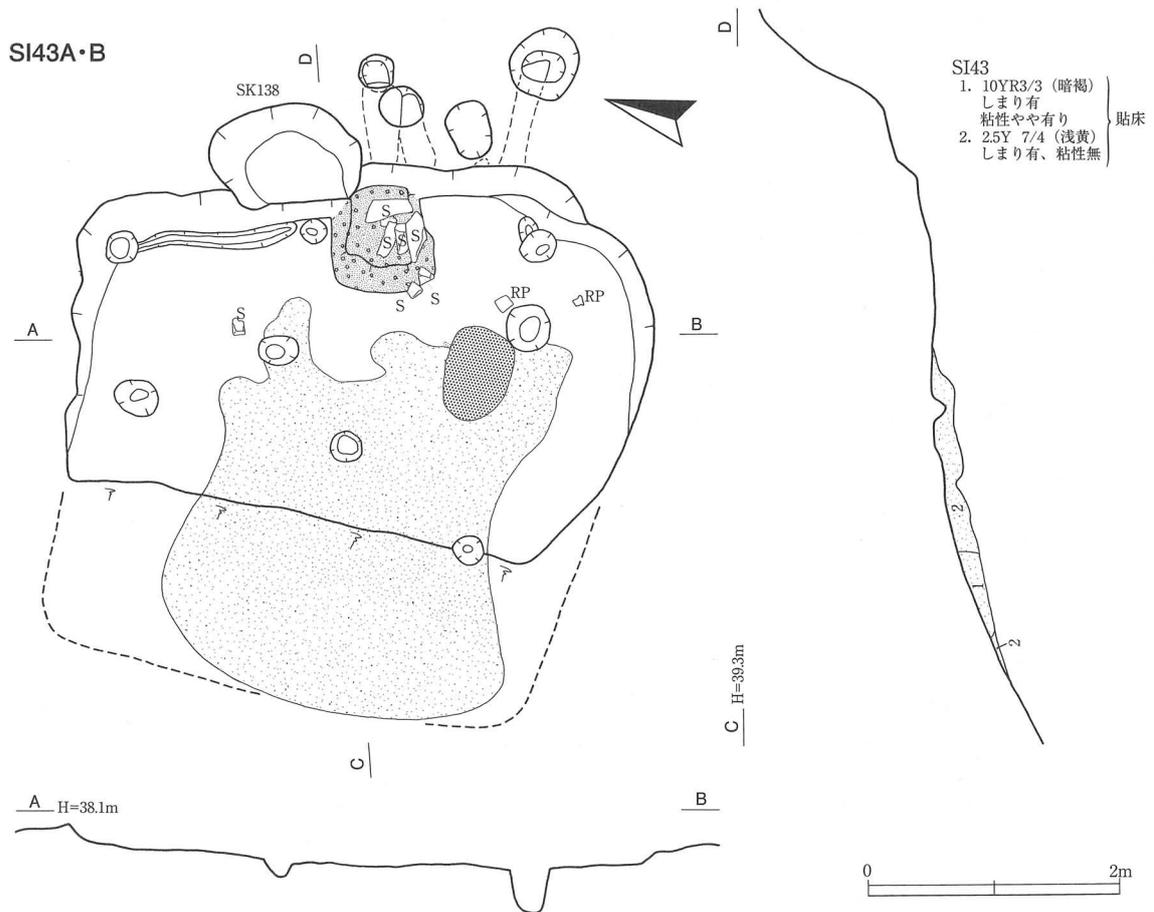
カマドDは山側東壁の南側に付設されていたが、本体部は消失しており、南袖位置に小ピット2基と燃焼部焼土を検出したのみで、袖芯材には石を使用したものと考えられる。焼土は径約35cmの略円形で厚さ5cmほどが火熱により赤色変化した。煙道は奥行き約130cm、径約25cmの削り貫き式で、外側に向かってかなり緩い下り勾配となっていた。煙だしピットは上位が崩落により広がっているが、下位残存部では径約25cmの略円形を呈し、深さ約130cmを測る。

カマドB・Cは、山側東壁に付設された削り貫き式の煙道・煙出しと燃焼部焼土を確認できたもので、主軸方位はおおよそ東-西である。両カマド燃焼部焼土の区別はできないが、70×50cmの略楕円形で厚さ10cmほどが火熱により赤色変化した。

カマドBの煙道は奥行き推定約150cm、径は約30cmを測り、外側に向かって緩い下り勾配で煙出しピットより奥まで掘られていた。煙だしピットは径約30cmの略円形で深さ約110cmを測る。

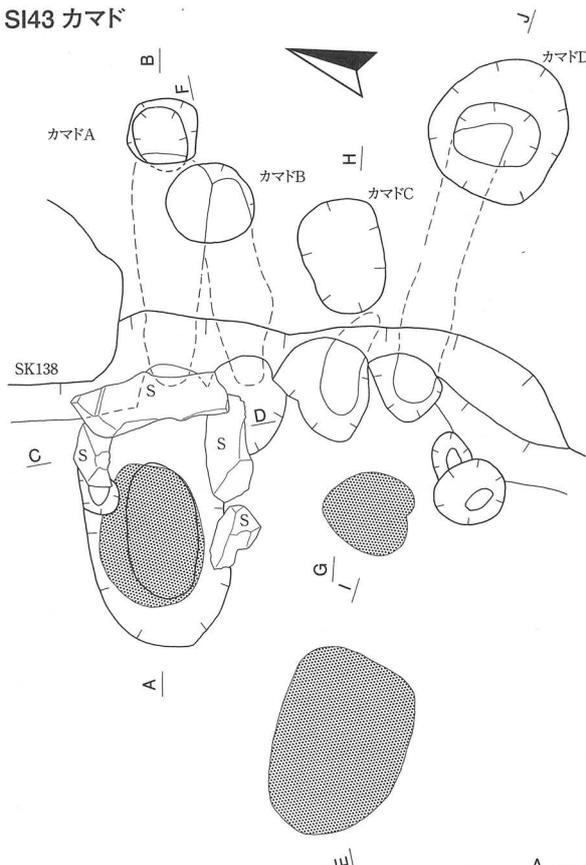
カマドCの煙道は奥行き推定約120cm、径は約25cmでほぼ水平である。煙だしピットは約30×40cmの略楕円形で、山側に向かい斜めに掘られ、深さ約110cmを測る。

遺物はほとんどA住居に伴うもので、土器は、埋土下層と床面及びカマドA・Dから土師器の甕形土器がおよそ5個体分と坏形土器片1点、埋土中から須恵器の甕形土器片1点(75)が出土し、形状をおよそ把握できた復元個体は土師器の甕形土器2点(70・73)である。また床面からは羽口片1点(9)、埋土中から砥石1点(38)、磨石1点、鉄製品(釘?)1点、鍛冶滓がカマドAと埋土中から少量出土した。



第56図 SI43A・B竪穴住居跡(1)

SI43 カマド



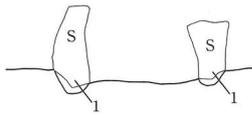
SI43 カマドB
 1. 5YR5/8 (明赤褐)
 2. 5YR4/8 (赤褐)
 3. 5YR5/3 (にぶい赤褐)

燃焼部焼土

E H=39.0m

C H=39.2m

D

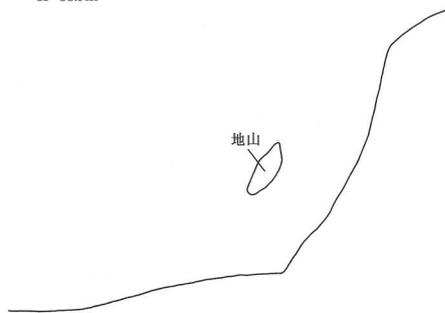


SI43 カマド

1. 10YR5/6 (黄褐) しまり強、粘性弱
 袖石の裏込め土、マサ土粒混入多い

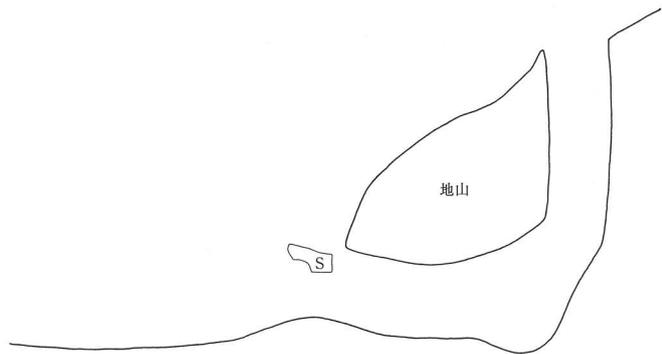
G H=38.9m

H



A H=39.1m

B

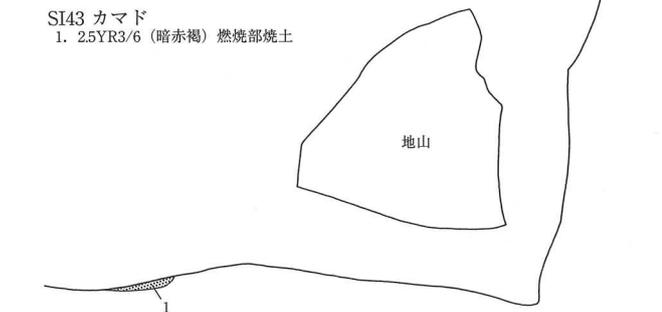


I H=39.1m

J

SI43 カマド

1. 2.5YR3/6 (暗赤褐) 燃焼部焼土



第57図 SI43A・B竪穴住居跡(2)

S I 46 竪穴住居跡・S X I 06 工房跡

(第58・59図、遺物図版10・13・14・58・61・63・64・83・118、写真図版40・217・219・247・249～251・273・301・312)

E区緑7区の北部東斜面中腹、ⅦB-12sグリッドを中心に位置し、検出面はⅣ・Ⅵ層上面である。本遺構は急斜面に立地するため東山側が崩落しており、検出当初はカマド煙出しを確認できず、S X I 01・02と類似する状況から何棟かの工房跡の重複を想定し、等高線と平行するベルト1本、直行するベルト3本を設定し、また検出面で鉄鉗が出土したことから鍛冶工房の可能性を念頭に入れて精査を開始した。山側の崩落土除去後にS I 46カマド煙出しとS K 155を確認し、また掘り下げの過程では順次計3段の高低差のある床面が現れたことから竪穴住居跡1棟と工房跡2棟の重複と考えられたが、掘りあがりの状態と断面観察から工房跡は1棟と判断したもので、新旧関係は(新)S X I 06→S I 46→S K 155(古)である。

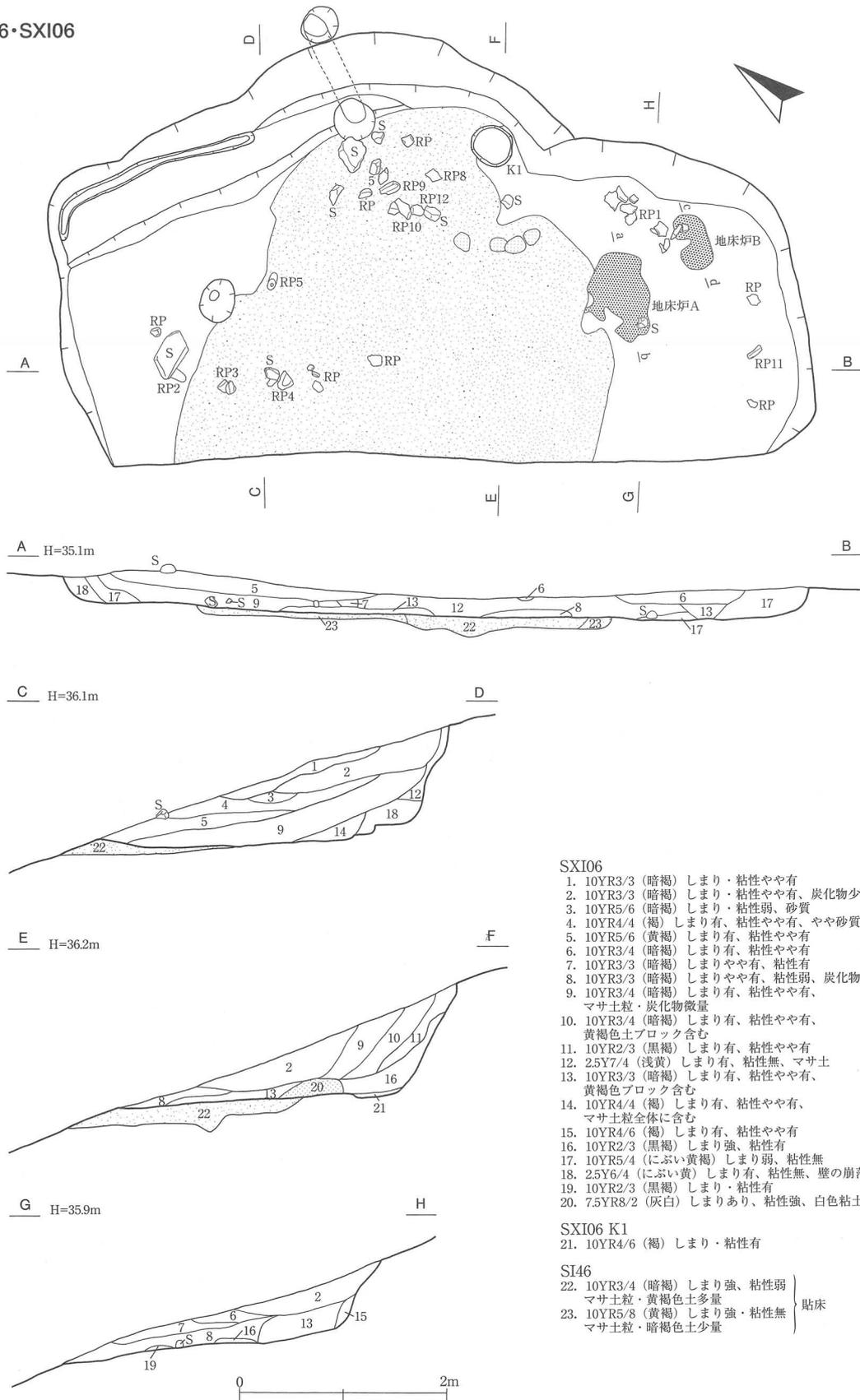
S I 46は、西谷側が崩落により、南北両側壁はS X I 06によって消失しており全容は不明だが、残存する壁と貼床範囲から平面形・規模は一辺約4～5m前後の隅丸方形と推定され、主軸方位はN-30°-E、床面積は20㎡を超えるぐらいと推定される。一部遺存する北東壁は外傾して立ち上がり、壁高は約15cmを測る。埋土はS X I 06のため存在せず、床面は平坦で堅締、北隅を除いて全体的に貼床が施されていたと推測される。柱穴等の床面施設は検出されなかった。

カマドは山側北東壁の中央やや東寄りに付設されているが、刳り貫き式の煙道・煙出しと燃烧部焼土を確認できたもので、S X I 06によって本体部は消失している。なお、当初の調査担当者が図示したカマド構築土と思われたものは、全体的な状況からみて廃棄の黄褐色粘土と考えられる。燃烧部は80×55cmの楕円形で深さ約5cmに掘り窪められ、底部では火熱により40cmほどの不整形の広がり、厚さ1cm以下に赤色変化した焼土が確認された。煙道は奥行き約120cm、径約30cmを測り、外側に向かってかなり緩い下り勾配となっていた。煙だしピットは径約40cmの略円形で深さ約150cmを測る。

S X I 06は、やはり西谷側が崩落によって消失しており全容は不明だが、遺存状況からS I 46を拡張する形で建替えが行われたものと思われる。平面形は、等高線と平行する北西-南東が長軸方向のおよそ隅丸長方形を呈するが、北東部山側はS I 46の掘り方を利用したためか中央部が北側に張り出す。規模は、長軸約7m、短軸は中央部で最大約4m、南北両側は3m前後、残存する床面積は約20.5㎡である。壁は外傾して立ち上がり、崩落により上位がより開いている。壁高は山側北東壁で最大約100cmから谷側に向かい低くなる。埋土は、大半が流入と崩落の繰り返しと思われる黒色系土と褐色系土及びマサ土のおよそ20層に細分され、部分的に上位の工房跡からの廃棄と考えられる鉄生産関連遺物を多量に含む黄褐色系土や中央付近の床面では白色粘土が認められた。床面は明瞭ではないが大きく3段の高低差があり、最も低い南東部から北西部では約15cmほど高くなり、山側北東部ではさらに約15cmほどの明瞭な段差をもった棚状となっていた。床面施設としては、中央部山側の壁際に位置と残存状況からS I 46の貯蔵穴とも考えられるK 1土坑、北西部の中央に柱穴状ピット1基、南東部に地床炉A・Bの2基、それと北東部の棚部壁際に幅約7cm、深さ約3cmの壁溝を検出した。K 1は径約40cm、深さ約5cmの丸底皿形、地床炉はAが50cm前後とBが30cm前後の不整な広がり、火熱により厚さ7～10cmに赤色変化した。

遺物は埋土及び床面から多量に出土し、当初S I 46カマド出土としていたものも、上記のことからすべてS X I 06に伴うものと判断した。土器は、土師器の甕形土器10個体分以上と坏形土器3点が出土し、埋土出土の坏形土器の完形1点(138)のほか、形状をおよそ把握できた復元個体は主に元カマドと南東部東側床面から出土した土師器の甕形土器6点(79・80・130・132～134)である。土製支脚は埋土中から2点(4・5)、羽口は破片を含め総量で約80点が出土し、およそ形状を復元できた個体20点の大半は、元カマドと北西部の

SI46・SXI06



SXI06

1. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性やや有
2. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性やや有、炭化物少量
3. 10YR5/6 (暗褐) しまり・粘性弱、砂質
4. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有、やや砂質
5. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性やや有
6. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性やや有
7. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性有
8. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性弱、炭化物少量
9. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性やや有、マサ土粒・炭化物微量
10. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性やや有、黄褐色土ブロック含む
11. 10YR2/3 (黒褐) しまり有、粘性やや有
12. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性無、マサ土
13. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有、黄褐色ブロック含む
14. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有、マサ土粒全体に含む
15. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性やや有
16. 10YR2/3 (黒褐) しまり強、粘性有
17. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり弱、粘性無
18. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性無、壁の崩落土
19. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有
20. 7.5YR8/2 (灰白) しまりあり、粘性強、白色粘土

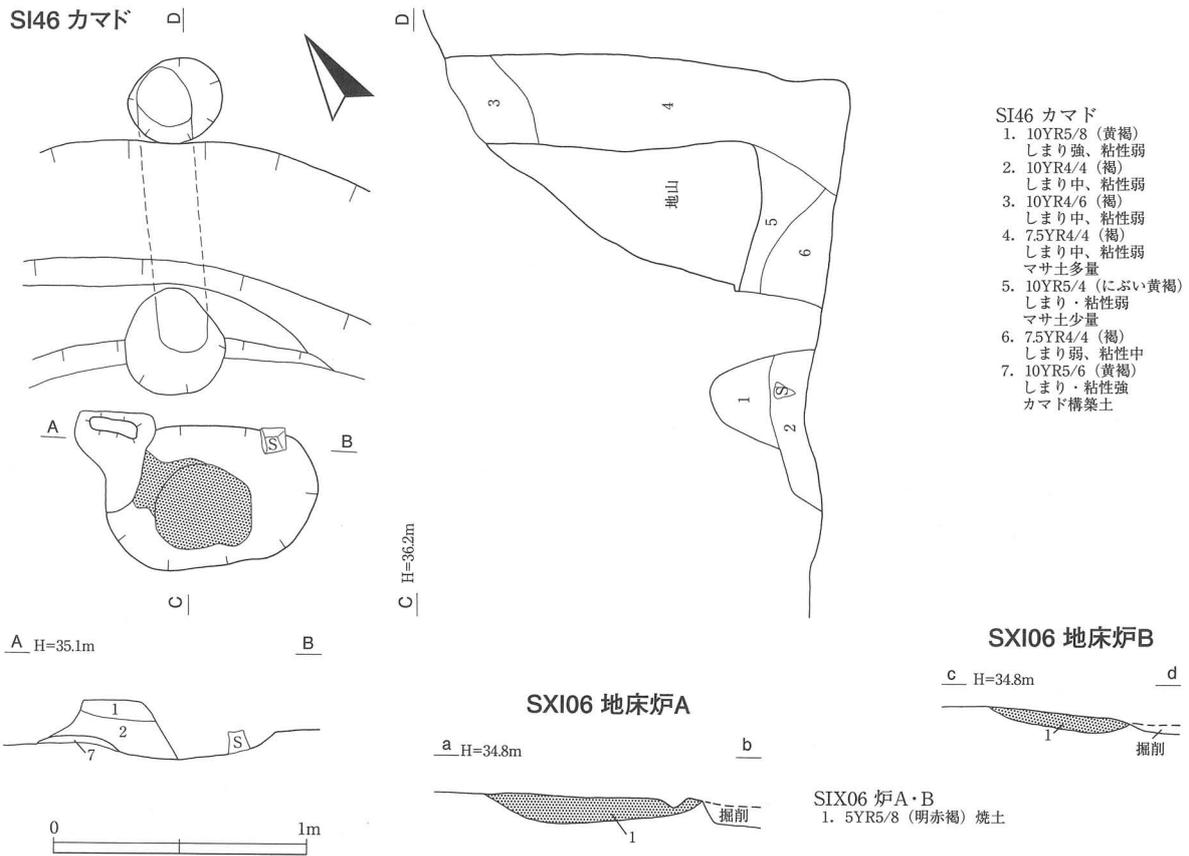
SXI06 K1

21. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性有

SI46

22. 10YR3/4 (暗褐) しまり強、粘性弱
マサ土粒・黄褐色土多量
23. 10YR5/8 (黄褐) しまり強・粘性無
マサ土粒・暗褐色土少量

第58図 SI46竪穴住居跡・SXI06工房跡(1)



第59図 SI46竪穴住居跡・SXI06工房跡(2)

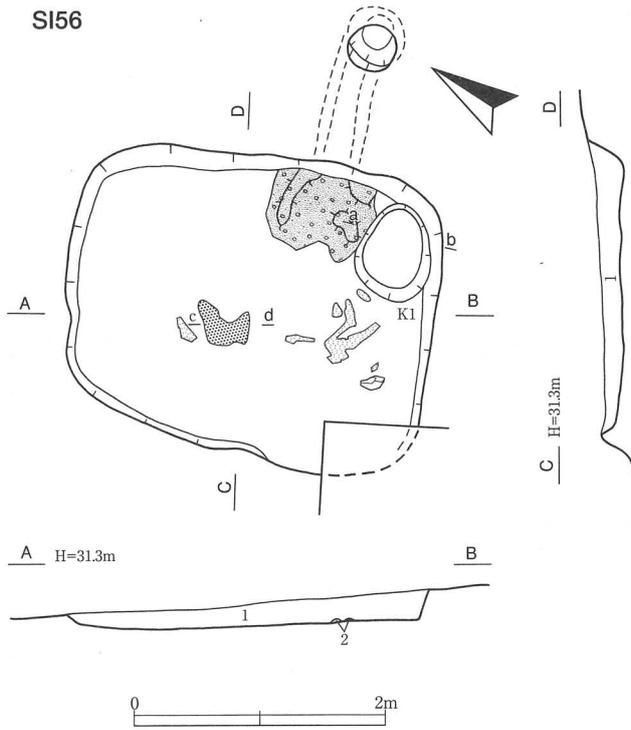
2ヶ所で埋土下位から床面にてまとまりが認められた。鉄製品は埋土中から刀子片と鉄鏃(30)が各1点、北西側検出面(位置的に床面に近いと思われるが)で鉄鉗1点が出土した。鍛冶滓類はほとんどが埋土中から総量約45kgが出土した。このほか埋土中から砥石1点(44)と炉壁片が少量出た。また鍛冶工房と想定して床面での埋土を収集したところ、極めて微量ながら鍛造剥片が抽出され、鍛冶炉は検出されなかったが、鍛冶工房跡と判断した。

S I 56竪穴住居跡 (第60図、写真図版41)

E区緑7区の中央部の東斜面裾、ⅦC-11b・cグリッドに位置し、検出面はⅢb層である。平面形・規模は南隅をトレンチで破壊してしまったが、およそ南-北に長軸方向となる長軸約3m、短軸約2.4mの隅丸長方形を呈する。主軸方位はN-65°-E、床面積は約6㎡を測る。壁は外傾して立ち上がり、壁高は20~10cmを測る。埋土はⅢ層起源の黒色土の単層である。床面は概ね平坦で堅締であった。床面施設としては東隅に貯蔵穴と思われるK1土坑1基と中央に地床炉1基が検出され、K1は平面形・規模が長軸約80cm、短軸約60cmの略楕円形で、深さ約5cmの皿形を呈する。地床炉は30cm前後の不整な広がり、火熱により厚さ約3cmほどが赤色変化していた。

カマドは北東壁の中央南寄りに付設され、本体天井部が崩落しているものの遺存状態は比較的良好である。本体部は、袖部に架構・芯材としての石や土器などは認められず、黄褐色土で構築されていた。燃烧部の掘

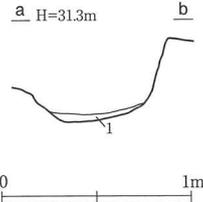
SI56



SI56

1. 10YR2/1 (黒) しまり・粘性有、炭化物微量
2. 10YR1.7/1 (黒) しまり・粘性有、炭化物多量

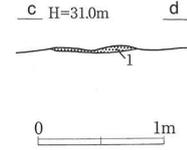
SI56 K1



SI56 K1

1. 10YR2/1 (黒) しまりやや有・粘性有

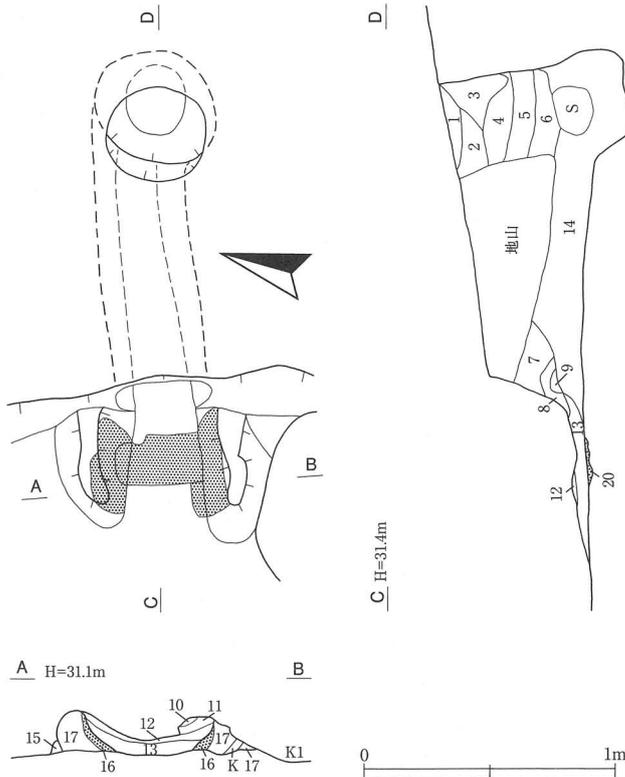
SI56 地床炉



SI56 地床炉

1. 5YR5/8 (明赤褐) 焼土

SI56 カマド



SI56 カマド

1. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有
2. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有
黄褐色土・黒褐色土少量混入
3. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有
暗褐色土少量
4. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有
黄褐色土少量
5. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有・粘性有
6. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有・粘性有
7. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有・粘性有
8. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、焼土少量
9. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性有
10. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまり強、粘性やや有
11. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり強・粘性やや有
12. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり強、粘性やや有
13. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性やや有
焼土・炭化物多量
14. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性やや有
15. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり・粘性やや有
黒色土混入
16. 7.5YR5/8 (明褐) 袖の内壁の焼け } カマド
17. 2.5Y5/6 (黄褐) しまり強、粘性やや有 } 構築土
18. 5YR6/8 (橙) 燃焼部焼土

第60図 SI56竪穴住居跡

り込みはなく、底部から袖の内側にかけて火熱により不整な広がり、厚さ2cmほどに赤色変化した焼土が確認された。煙道は奥行き約130cm、径約15～40cmの削り貫き式で、外側に向かって下り勾配である。煙出しピットは径約40cmの略円形で、煙道よりも深く掘り込まれ、深さは約70cmを測る。

遺物は、南側の床面で廃棄と思われる炭化材が出土したのみである。

S I 58 A～C 竪穴住居跡・S X W 27 鉄生産関連炉跡（第61～63図、遺物図版10・11・62・82・118、写真図版42・43・217・218・250・272・301・311）

E区緑7区の北部東斜面中腹、VII B-11 r グリッド杭を中心に位置し、検出面はVI層上面である。本遺構は急斜面に立地するため東山側が崩落しており、検出当初はカマド煙出しを確認できず、やや規模が小さいがS X I 06と状況が類似することから重複する工房跡を想定し、等高線と平行するベルト1本、直行するベルト2本を設定して精査を開始した。山側の崩落土除去後には多数の柱穴状プランを確認したが、この時点ではカマド煙出しの特定はできなかったものの、S I 43同様に数度の建替えの可能性が考えられた。精査過程でカマドは5基検出され、残存状況から数度の建替えと判断され、壁や貼床の状態やカマド煙道及び燃焼部焼土の遺存状況から、(新) A～C (古) の住居跡3棟についてはおよそ推定されたものである。

S I 58 Aは、南西谷側が崩落により消失し全容は不明だが、残存部と貼床範囲から、平面形は等高線と平行する北西-南東が長軸方向のおよそ隅丸長方形を呈し、規模は長軸約6m、短軸は5m前後、床面積は約30㎡と推定される。主軸方位はN-45°-Eである。遺存する壁は外傾して立ち上がり、北東山側の上半が崩落により2段に外反していた。壁高は山側北東壁で最大約150cmから谷側に向かい低くなる。埋土は、およそ10層に細分されるが、上位の流入による黒色土、中～下位は崩落によるマサ土を多く含む黄褐色系土を主体とし、間に廃棄と考えられる鉄生産関連遺物を多量に含む黄褐色土層、北西と南東壁際下位には流入の黒色系土と大別される。床面は北西側に緩く傾斜するがおよそ平坦で堅締、壁際を除いて隅丸方形基調で南東谷側に一部張り出して貼床が施されていた。後に精査の結果この方形部分がC住居と判断されたものである。床面施設としてはカマドの両脇に貯蔵穴と思われるK1・2土坑2基、中央谷側寄りにS X W 27、不規則配置の柱穴7本と壁を巡る外側に9基を検出した。カマド南側のK1は開口部80×60cmの略楕円形で深さ約15cmの丸底鍋形、北側のK2は径約50cmの略円形で深さ約25cmの丸底鍋形を呈す。柱穴は配置と規模から南東壁側のP1～3と北西壁側のP4・5は主柱穴の可能性が高い。

カマドAは山側北東壁の南側に付設され、一部本体天井部も残り、遺存状態は良好である。本体部は、袖部に芯材として長さ30cmほどの8個と、天井部の架構に長さ50cmほどの垂角礫1個を組み、黄褐色粘土で構築されていた。燃焼部は幾分掘り込まれ、底部には火熱により不整な50cmほどの広がり、厚さ1cm以下に赤色変化した焼土が確認された。煙道は奥行き約120cm、径約30cmの削り貫き式で、外側に向かって上り勾配となっていた。煙だしピットは径約30cmの略円形で深さ約100cmを測る。

S X W 27は、炉跡及び隣接して設置された鉄砧石を検出したもので、炉跡の平面形・規模は長軸約35cm、短軸15～25cmの略楕円形を呈し、中央では深さ約5cmを測るが、北西側に狭く深さも約3cm以下と浅くなり、底面に微妙な勾配で高低差がある。北西側を除き、炉内から外側にかけて径約30cmの円形に、火熱により厚さ3cmが赤色変化しており、また南西の一部が弱く還元化していた。鉄砧石は長さ約55cm、幅約33cm、高さ約35cmの大きさで、設置穴は一回り大きく、深さ約10cmに掘り込まれていた。

炉内のサンプル土中から僅かながら鍛造剥片が抽出されたこともあって鍛練鍛冶炉跡と判断した。

S I 58 Bは、山側北東壁の中央部とカマドBの残存状態から1棟と判断したものであるが、遺存部は極めて少ない。平面形・規模は一辺3.5～4m前後の方形基調と推定され、主軸方位はN-50°-E、床面積は

約14㎡前後と推定される。遺存する壁は東隅の一部のみで、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約60cmほどである。埋土・床面はA住居跡のため不明である。

カマドBは山側東壁の南端に付設されていたが、本体部分はS I 58A・K1に破壊され不明である。ただし位置的にやや疑問もあるが、40cmほどの略円形で厚さ1cm以下の火熱による赤色変化が認められ、燃烧部焼土の残存と考えられる。残存する煙道は奥行き約110cm、径約35cmの削り貫き式で、水平に煙出しよりも奥まで掘り込まれている。煙だしピットは径約30cmの略円形で、深さ約120cmを測る。

S I 58Cは、A住居跡の貼床除去後の形態とカマドCの残存状態から1棟と判断したものである。南西側は崩落により消失し、全容は不明だが、平面形・規模は一辺3.5～4m前後の隅丸方形、床面積は約14㎡前後と推定される。主軸方位はN-40°-Eである。遺存する壁は高さ約5cmほどが外傾して立ち上がり、埋土はA住居跡のため不明である。床面はカマド等の残存状況からA・B住居の構築の際幾分削平されていると思われ、地床炉とは判断付きかねる厚さ1cm以下の火熱により赤色変化した弱い焼土が3ヶ所認められた。床面施設としては北西壁に接するK4～6土坑3基、柱穴3基とカマド南側の北東壁際で幅約10cm、深さ約2cmの壁溝を検出した。K4は開口部径約100cmの略円形で深さ約100cmのバケツ形、K5は開口部110×80cmの略楕円形で深さ約50cmの丸底鍋形を呈す。K6は単独の土坑というよりK4・5を連結する浅め掘り込みで、幅約110cm、連結した長さは約290cm、正味の長さは約70cm、深さは約40cmを測る。いずれも黄褐色系土の人為堆積で、K4の埋土中位には鉄滓類が多量に含まれる。

カマドCは北東壁のほぼ中央に付設されていたが、本体部分は削平されて消失しており不明である。ただし位置的に燃烧部焼土と思われる20cmほどの略円形で厚さ1cm以下の火熱による赤色変化が認められた。煙道も先端部を除き削平されているが、溝状の痕跡があり、奥行き約200cm、径約20cmの削り貫き式で、水平に煙出しよりも奥まで掘り込まれている。煙だしピットは径約25cmの略円形で、深さ約110cmを測る。

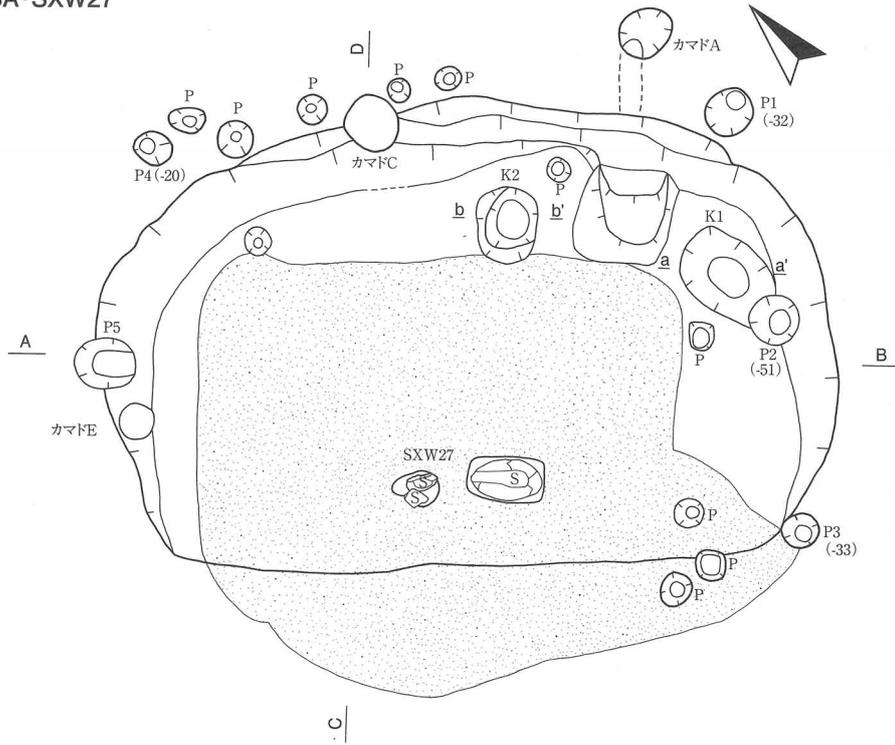
カマドD・Eは、それぞれA住居跡の南東壁と北西壁に付設された削り貫き式の煙道と煙出しを確認したもので、主軸方位はおよそ北西-南東の対極にある。残存部分では、Dカマドの煙道は奥行き約100cm、径約25cmの水平、煙だしピットは径約40cmの略円形で深さ約150cmを測る。Eカマドの煙道は奥行き約110cm、径は約30cmで外側に向かって下り勾配、煙だしピットは径約30cmの略円形で深さ約60cmを測る。

遺物はほとんどA住居に伴うもので、種別・量とも多く出土した。土器は大半が埋土中からで、土師器の甕形土器がおよそ5個体分、坏形土器8個体分、台付坏1点、あかやき土器の甕形土器が1個体、坏形土器1個体、台付坏が3個体分、須恵器の甕形土器片約10点出土し、土師器坏形土器の完形3点(90・92・97)を含み、形状をおよそ把握できた復元個体は主に土師器とあかやき土器の坏類7点(91・93～96・99・101)である。土製支脚は埋土中から1点(2)と元位置は留めないがカマドA埋土から完形1点(3)、羽口は床面から1点(18)と埋土中から破片約70点出土した。石製品は埋土中から砥石2点(39・40)と磨石1点、S X W 27の鉄砧石1点は運搬不可能だったため持ち帰れなかったが、上面は使用によるものと思われるゴツゴツした3面があり、被熱による部分的な赤色変化が認められた。鉄製品は埋土下位から完形釘1点(26)と埋土中から不明品数点出土した。鍛冶滓類は埋土中から約45kg、C住居K4埋土中から約5kgが出土した。このほか埋土中から鉄塊系遺物50個ほどと炉壁片が少量出土した。また、A住居床面とS X W 27から収集した土から鍛冶剥片が微量出土した。

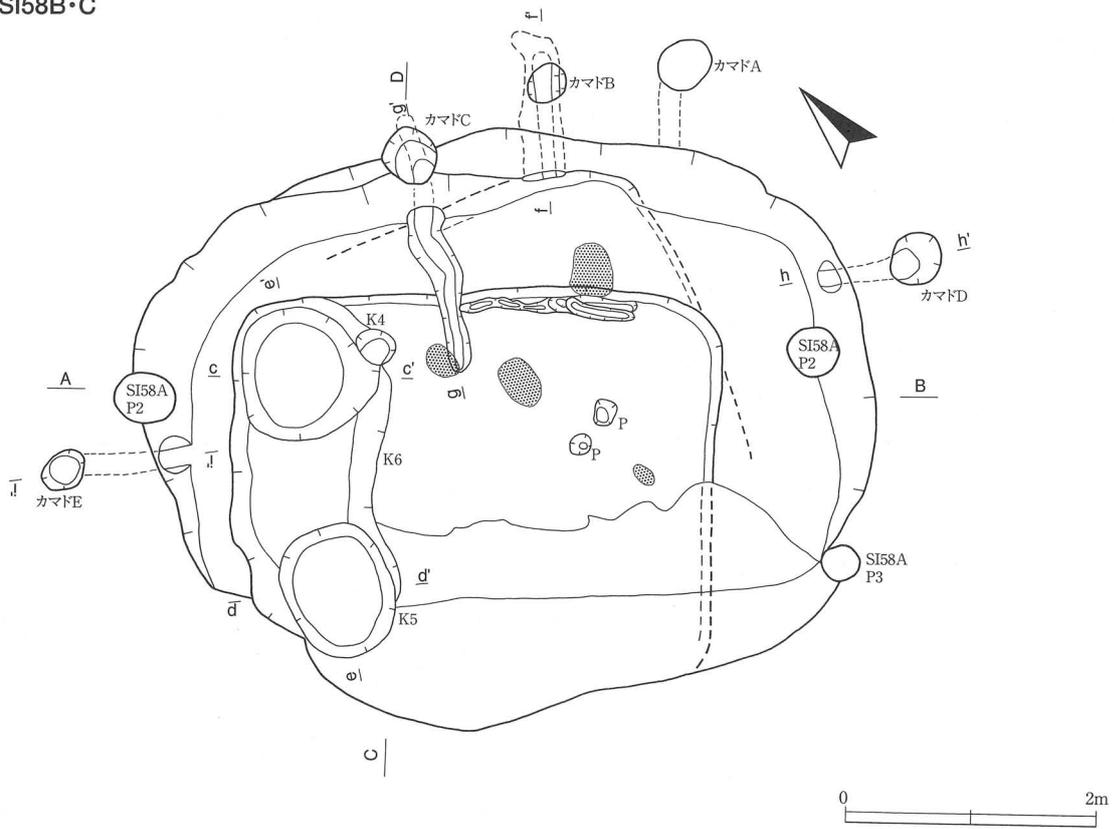
S I 59 竪穴住居跡・S X W 28 鉄生産関連炉跡 (第64図、遺物図版62、写真図版44・250)

E区緑7区の中央部東斜面下位、ⅦC-12a・bグリッドに位置し、検出面はⅢ層上面である。検出状況としてはⅢ層黒褐色土面でやや色味の異なる黒色土の不整な落ち込みを認めたが、プランが不明瞭であった

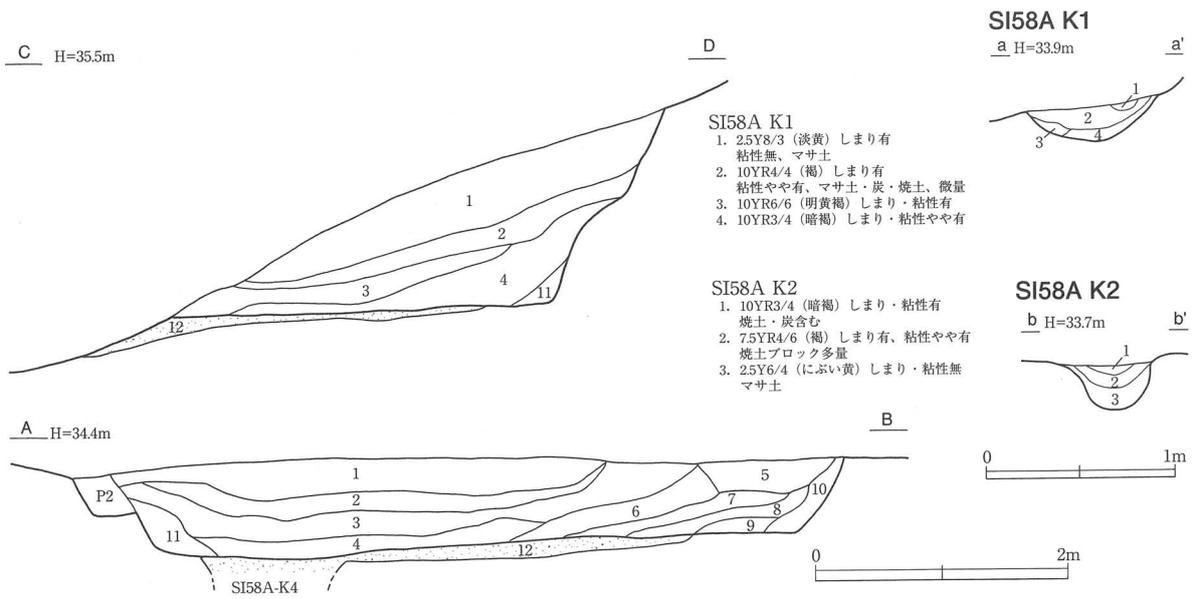
SI58A・SXW27



SI58B・C



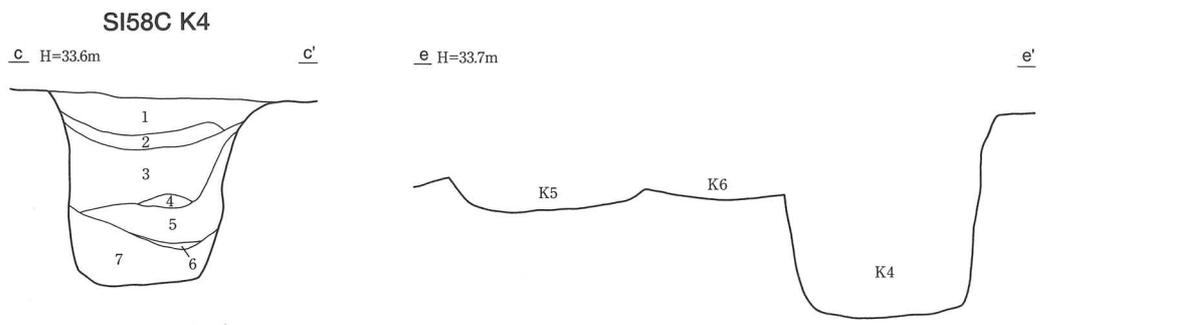
第61図 SI58A～C竪穴住居跡・SXW27鉄生産関連炉跡(1)



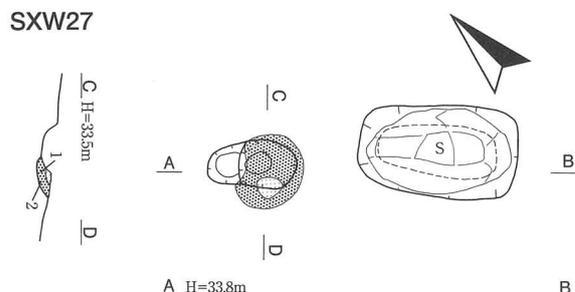
- SI58A K1**
- 25Y8/3 (淡黄) しまり有
粘性無、マサ土
 - 10YR4/4 (褐) しまり有
粘性やや有、マサ土・炭・焼土、微量
 - 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性有
 - 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性やや有

- SI58A K2**
- 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有
焼土・炭含む
 - 75YR4/6 (褐) しまり有、粘性やや有
焼土ブロック多量
 - 25Y6/4 (にぶい黄) しまり・粘性無
マサ土

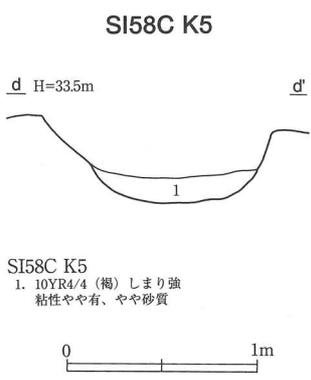
- SI58A**
- 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性やや有
 - 10YR5/8 (黄褐) しまり有、粘性無、砂質
 - 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、鉄滓・炭化物多量
 - 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
 - 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、マサ土混じる
 - 25Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性無
 - 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性やや有、やや砂質
 - 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有、焼土ブロック少量
 - 10YR4/4 (褐) しまり強、粘性やや有、焼土・炭化物少量
 - 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、壁の崩落土
 - 10YR6/8 (明黄褐) しまり有、粘性やや有
 - 10YR3/4 (暗褐) しまり強、粘性やや有、少塵多い、貼床



- SI58C K4**
- 10YR4/4 (褐) しまり・粘性やや有、砂質
 - 10YR7/4 (にぶい黄橙) 堅くしまる・粘性無、マサ土多量
 - 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有、マサ土少量、鉄滓多量
 - 10YR2/3 (黒褐) しまり有、粘性やや有
 - 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり弱、粘性無、壁の崩落土
 - 10YR17/1 (黒) 炭化物層
 - 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性やや有、鉄滓多量



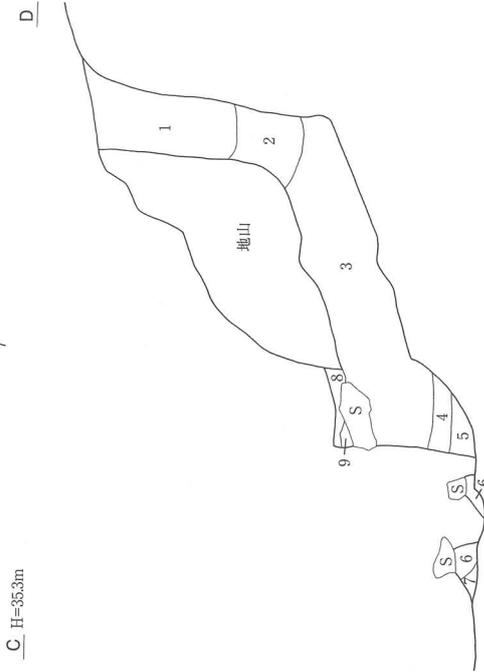
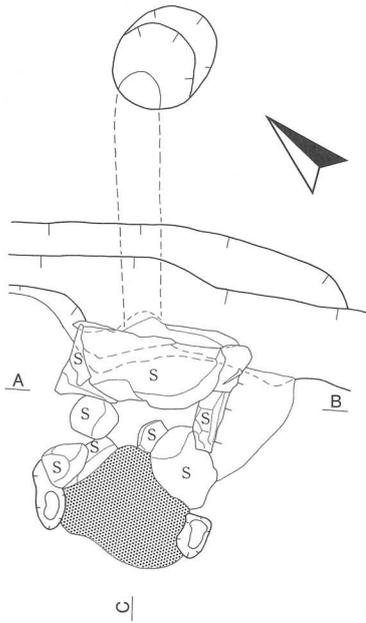
- SXW27**
- 25Y7/1 (灰白) 還元部
 - 5YR6/4 (にぶい赤褐) 焼土
 - 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有



- SI58C K5**
- 10YR4/4 (褐) しまり強
粘性やや有、やや砂質

第62図 SI58A～C竪穴住居跡・SXW27鉄生産関連炉跡(2)

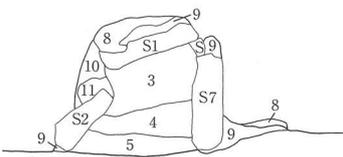
SI58A カマドA □



SI58A カマド

1. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性やや有
2. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性弱
3. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり弱、粘性やや有
4. 10YR3/4 (暗褐) しまり弱、粘性やや有
5. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性やや有
焼土粒含む
6. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有
7. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性やや有
8. 10YR7/6 (明黄褐) 堅くしまり
粘性やや有
9. 10YR6/8 (明黄褐) 堅くしまる
粘性やや有
10. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性無
11. 10YR4/4 (褐) しまり無・粘性やや有

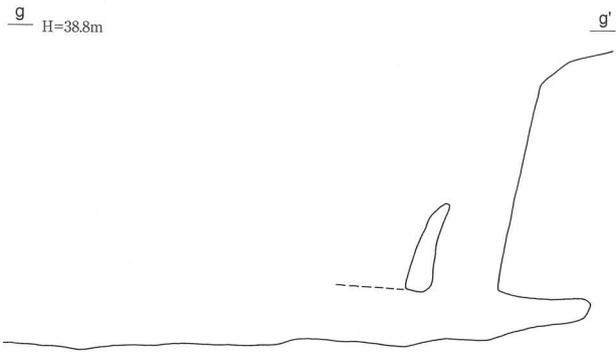
A H=34.2m



B

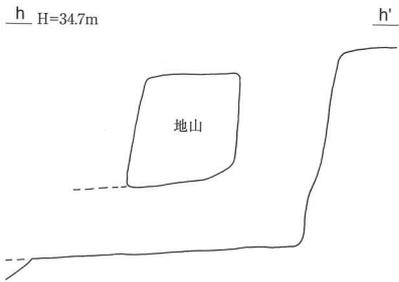
SI58C カマドC

g H=38.8m



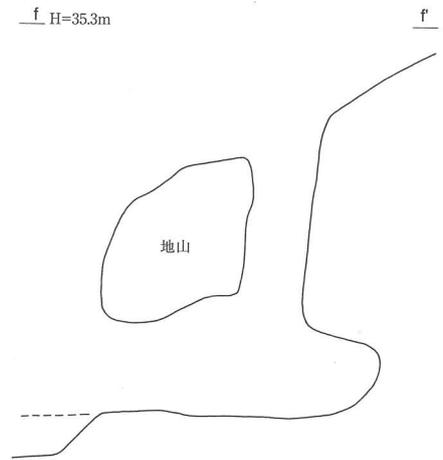
SI58 カマドD

h H=34.7m



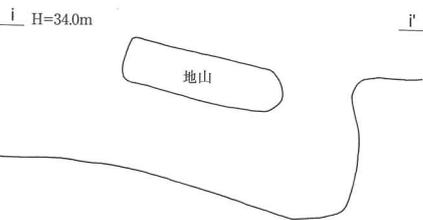
SI58B カマドB

f H=35.3m



SI58 カマドE

i H=34.0m



第63図 SI58A～C竪穴住居跡・SXW27鉄生産関連炉跡(3)

ため、地形に合わせたベルトを設定して精査を開始したものである。精査過程において床面でカマドとS X W28を検出し、堅穴住居跡と判明したものだが、カマドとS X W28の遺存関係から当初住居跡として構築使用されたものが、鍛冶工房に改築転用されたものと考えられる。

S I 59の平面形・規模は、山側の北東と南東壁が崩落によりやや丸みをもって膨らむが、およそ一辺約3 mほどの隅丸方形を呈し、主軸方位はN - 60° - W、床面積は約8.1㎡を測る。壁は外傾して立ち上がり、山側の北東と南東壁では崩落によりさらに外傾していた。壁高は山側の最大約130cmから谷側で約30cmと低くなる。埋土は26層に細分されるが、流入と崩落によるⅢ層起源の黒色系土を主体とする自然堆積で、部分的に鉄生産関連遺物をやや多く含む廃棄と思われる黒ボク系から褐色系土が存在する。床面はⅣ層褐色土中にあり、概ね平坦で堅締であった。床面施設としてはカマドの対極に柱穴1基、中央にS X W28とこの北側に隣接して付属すると考えられるK1土坑が検出された。S X W28については後述する。

カマドは北西壁のほぼ中央に付設されているが、本体は工房改築時に破壊されたと思われ遺存せず、燃焼部はさらにK1土坑に切られていたが、およそ径80cmの略円形で、深さ15cmほどに掘り窪めてから貼床されたと思われ、径約40cmの略円形に火熱により厚さ3 cmほどの赤色変化した焼土が確認された。煙道は奥行き約100cm、径約30cmの削り貫き式で、外側に向かって緩い下り勾配である。煙出しピットは径約30cmの略円形で、煙道よりも幾分深く掘り込まれ、深さは約50cmを測る。

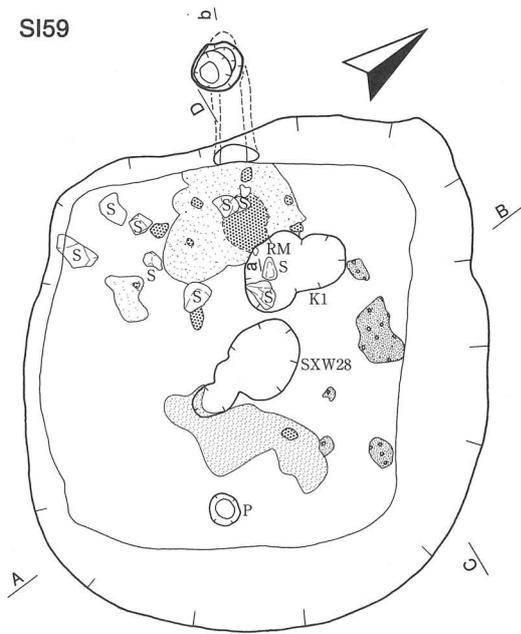
S X W28は、K1とともに検出時から鍛造剥片が視認され、炉跡の南側には炭化物が広く分布していたもので、鉄生産等に関連する遺構と考えられ、精査は埋土を回収しながら行うこととした。精査の結果、サンプル土から多量の鍛造剥片と微量の粒状滓が採集され、鍛練鍛冶炉跡とこれに付属するK1土坑と判断された。炉跡は検出時プランとして南側が小さいダルマ形を呈していたが、精査の結果、南側は径約27cm、深さ約10cmの浅いP1柱穴状ピットとこれと連結する長さ約10cm、幅約25cm、深さ約6cmの炉跡に向かって緩い下り勾配の溝跡が取り付くものと判明した。平面形・規模は南北長軸で開口部は約65×53cm、底部は約28×10cmの略楕円形を呈し、断面形は中央部が深さ約15cmと最も深い変形した播鉢形を呈し、埋土は全体的に鍛造剥片を多量に含む黒色系土が堆積していた。南北の一部で途切れるが、壁面中位は火熱により赤色変化しており、溝跡に近い部分では底面付近の東西で弱く還元していた。K1土坑は炉跡の北西側に隣接し、平面形・規模は長軸約85cm、短軸約40cmと約60cmの北側が小さいダルマ形を呈し、壁は外傾して立ち上がり、深さは約8 cmとおおよそ一律で概ね底面は平坦である。埋土は基本的にはゴツゴツした径1 cm以下の粒状の鍛冶滓を多量に含む黒色土の単層である。細部はともかくとして形態や配置の状況はS X W17や30と類似することから、P1は竈に関連するもの、連結溝跡は羽口の装着痕、K1北側は鉄砧石の設置穴、南側は工人の足入れ穴と推定される。

遺物は、羽口が床面から1点(23)と埋土中から破片約50点、鍛冶滓類は埋土中から約8kg、S X W28埋土からは約1.4kgと鍛造剥片が多量に出土し、また埋土中と床面から鉄塊系遺物が3個と鉄生産関連遺物は比較的多く出土したが、土器類は埋土中から土師器の甕形土器とあかやき土器の台付坏が数点と極めて少ない。このほか西隅の埋土下位から床面にかけて20~30cm前後の礫が10個ほどまとまって出土しており、S X W28に関連したものか廃棄かは判断が付きかねた。

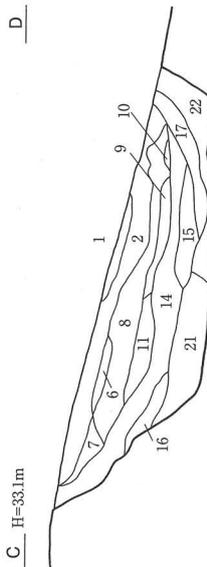
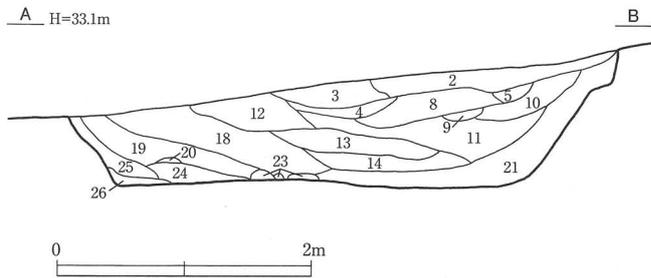
S I 60堅穴住居跡 (第65図、遺物図版11・12・62・80、写真図版41・218・250・272・311)

E区緑7区の北部東斜面中腹、ⅦB-12・13 t グリッドに位置し、検出面はⅢ層上面である。検出状況としてはⅢ層黒褐色土面で褐色土の不整な落ち込みを認めたものだが、プランが不明瞭であったため、地形に合わせたベルトを設定して精査を開始した。精査過程において床面でカマドAを検出したため、堅穴住居跡

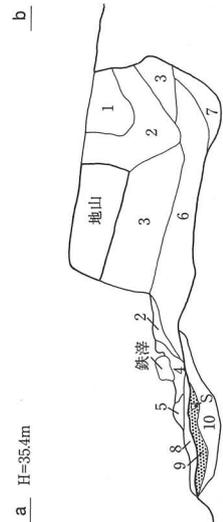
SI59



A H=33.1m



C H=33.1m



a H=35.4m

0 50cm

SI59 カマド

1. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有
粘性有、黄粘土・焼土粒多量
2. 10YR3/3 (暗褐) しまり弱、粘性有
黄褐色土少量
3. 10YR2/3 (黒褐) しまり弱、粘性有
4. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有
5. 10YR7/8 (黄橙) 堅くしまる、粘性無
焼土粒微量
6. 10YR2/3 (黒褐) しまり弱、粘性有
焼土ブロック少量
7. 10YR3/1 (黒褐) しまり弱、粘性有
8. 7.5YR5/6 (明褐) しまり有、粘性無
焼土ブロック・炭化物少量
9. 5YR5/8 (明赤褐) 燃焼部焼土
10. 7.5YR3/1 (黒褐) しまり・粘性有
炭化物・焼土粒微量、貼床

SI59

1. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性やや有
2. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有、少礫多量
3. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有
4. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有
5. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有
6. 10YR2/1 (黒) しまり有・粘性やや有
7. 10YR2/1 (黒) しまりやや有、粘性有
8. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有
9. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性有、マサ土多量
10. 10YR2/3 (黒褐) 堅くしまる、粘性有
11. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有、炭化物多量
12. 10YR2/3 (黒褐) 堅くしまる、粘性やや有、マサ土多量
13. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有
14. 10YR4/4 (褐) 堅くしまる、粘性やや有
15. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、砂質
16. 10YR3/2 (黒褐) しまり有、粘性やや有
17. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有、マサ土少量
18. 10YR3/3 (暗褐) 堅くしまる、粘性やや有、マサ土多量
19. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有
20. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有
21. 10YR2/1 (黒) しまりやや有、粘性有
22. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有
23. 10YR1.7/1 (黒) 炭化物
24. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性やや有、マサ土少量
25. 10YR2/1 (黒) しまり・粘性有
26. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有、黒ボク土多量

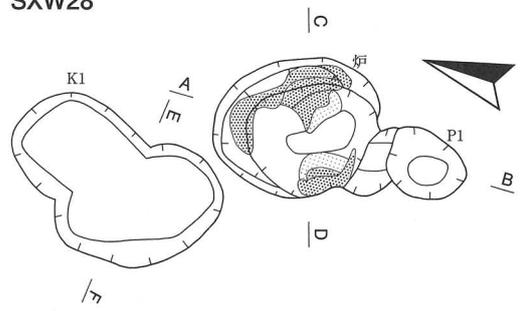
SXW28

1. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有
2. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有、炭・鍛造剥片大量
3. 10YR1.7/1 (黒) しまりやや有、粘性有、炭・鍛造剥片大量
4. 10YR1.7/1 (黒) しまりやや有、粘性有、炭・鍛造剥片多量
5. 5YR5/8 (明赤褐) 焼土
6. 5YR7/2 (明褐灰) 還元部
7. 7.5YR7/8 (黄橙) 還元中性化
8. 2.5YR3/1 (黒褐) 還元むしやき

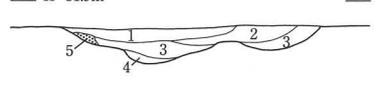
SXW28 K1

1. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有、小鍛冶滓多量、黄粘土混入
2. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有

SXW28



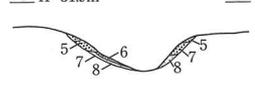
A H=31.9m



E H=31.9m



C H=31.9m



0 50cm

第64図 SI59竪穴住居跡・SXW28鉄生産関連炉跡

と判明したが、北西壁の観察でさらにカマドBを検出したもので、残存状況からカマドの造り替えと判断した。平面形・規模は、北東壁の開口部ではかなり崩落しているが、等高線と平行する北西－南東に長軸方向となる長軸約3.8m、短軸約3.2mの隅丸長方形を呈する。主軸方位は長軸方向と一致し、床面積は約8.1㎡を測る。壁は外傾して立ち上がり、北東壁の上半は崩落によりかなり外傾する。壁高は山側北東壁で最大約120cmから谷側壁の約30cmと低くなる。埋土はおよそ20層に細分されるが、上位に人為的堆積と思われる褐色土、下位は流入と崩落によるマサ土混じりの黒色土の自然堆積で、中位では廃棄と思われる鉄生産関連遺物をやや多く含む部分的な褐色系土が認められた。床面は概ね平坦で堅締、南西谷側には貼床が施されていた。床面施設は配置から支柱穴と思われる3本を検出した。

カマドAは、山側南東壁の東側に付設されていたが、本体部は遺存状態が悪く、袖位置に小ピット4基と燃焼部焼土を検出したのみで、袖芯材には石を使用したものと考えられる。焼土は径約40cmの略円形で厚さ5cmほどが火熱により赤色変化していた。煙道は奥行き約120cm、径約30cmの削り貫き式で、外側に向かって下り勾配となって煙出しよりも奥まで掘り込まれていた。煙だしピットは径約50cmの略円形で、深さ約100cmを測る。カマドBは、Aと対称位置の北西壁の西側に付設され、煙道と煙出しのみ残存していた。煙道は奥行き約130cm、径約30cmの削り貫き式で、外側に向かって緩い下り勾配となっていた。煙だしピットは径約35cmの円形で、深さ約80cmを測る。

遺物はやや多くすべて埋土中から出土した。土器は、土師器の甕形土器片が少量、坏形土器4個体分、台付坏片数点、須恵器の甕形土器片2点が出土し、形状をおよそ把握できた復元個体は坏形土器3点(108・111・112)である。羽口は破片約20点、石製品はカマドA埋土中から砥石1点(41)、鍛冶滓類は約10kg、鉄塊系遺物は3個が出土した。

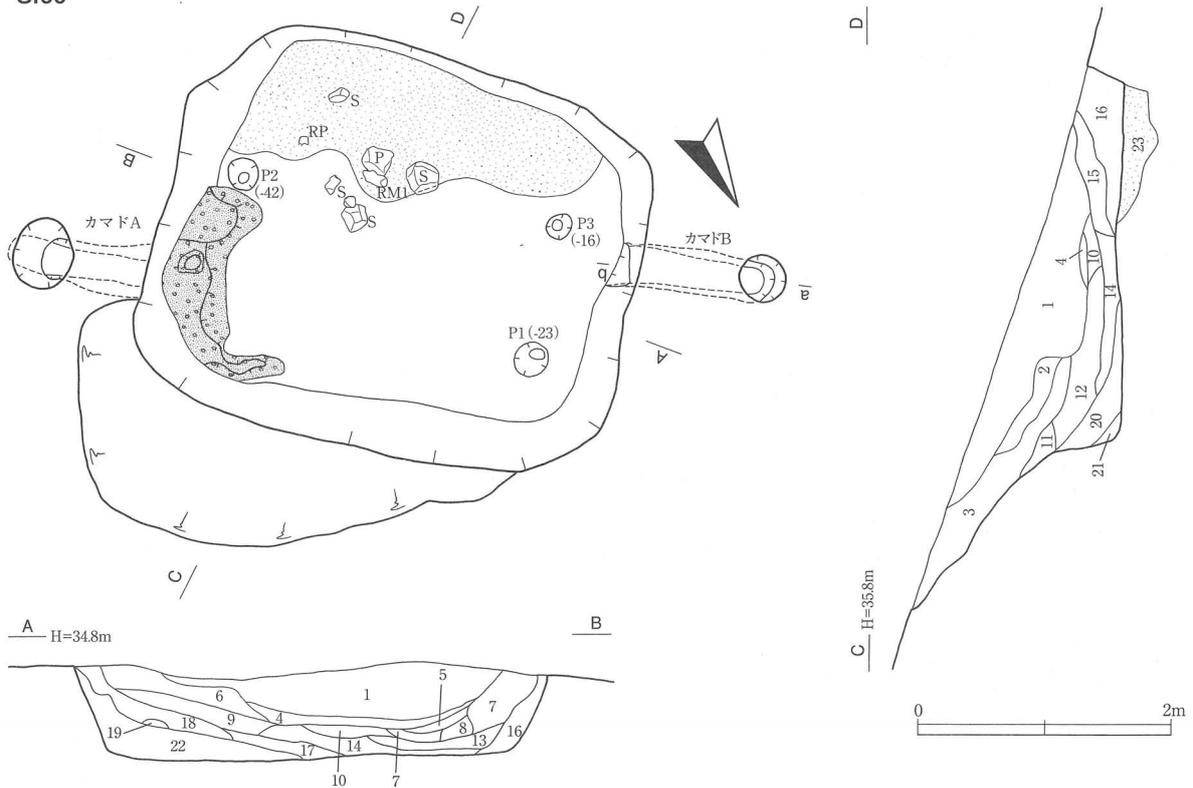
S 161 竪穴住居跡 (第66図、遺物図版12・83・118、写真図版45・218・272・301)

E区緑7区の南部東斜面中腹、VII C-15・16d グリッドに位置し、検出面はⅢ・Ⅳ層上面である。当初の検出プランは、長軸が等高線と平行する他の重複建替えが繰り返された遺構と類似したことから何棟かの重複を想定し、等高線と平行及び直行するベルトを各2本設定して精査を開始した。精査の結果、東山側はⅣ層の縁辺をプランと勘違いしたものであり、床面でカマドを検出したことから竪穴住居跡と判明したものである。南側にはSK149が接するが、直接の切りあいがなく、新旧関係は不明である。平面形・規模は西谷側が崩落により消失して全容は不明だが、長軸方向が南北の長軸約3m、短軸約2.5mの隅丸長方形と推定される。主軸方位は東西、床面積は約9㎡である。遺存する壁は鋭角的に外傾して立ち上がり、壁高は山側東壁の最大約50cmから谷側に向かい低くなる。埋土は黒色土を主体とする7層に細分され、全体的に炭化物と焼土粒を多く含み、床上には建築材であったと思われる炭化材を含む炭化物層が認められた。床面はⅣ層上面で止まり、およそ平坦で比較的堅締、中央部分では堅くしまった焼土の広がりや認められるなどの状況から焼失住居と思われる。炭化材は分析の結果、クリが多く一部タモも混じると判明した。床面施設は検出されなかった。

カマドは東壁の南側に付設され、本体天井部が崩落しているが遺存状態は比較的良好である。右袖部は芯材として20～30cm大の石2個が設置され、全体的には黄褐色粘土で構築されていた。燃焼部は60×50cmの楕円形で、深さ約5cmほどに掘り込まれ、底部は火熱により30×20cmほどの楕円形で、厚さ3cmほどが赤色変化していた。煙道は奥行き約90cm、幅約40cmの掘り込み式と推定され、外側に向かい上り勾配となっている。煙出しピットは煙道よりも深く掘りこまれ、径約35cm、深さは約50cmを測る。

遺物は埋土下位及び床面から出土し、土器は土師器の甕形土器が4個体分と、須恵器の壺形土器片が2点

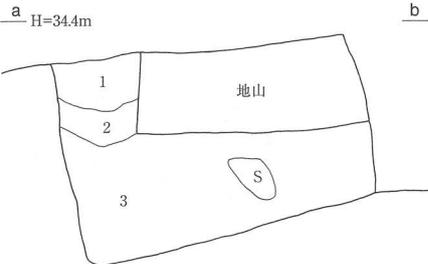
SI60



SI60

1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有
2. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有
3. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有、炭化物少量
4. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性有
5. 10YR2/3 (黒褐) しまり強、粘性有
6. 10YR3/2 (黒褐) しまり強、粘性やや有、マサ土多量
7. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有
8. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性有
9. 10YR4/4 (褐) しまり強、粘性やや有、マサ土多量
10. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性有
11. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性有
12. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有
13. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性やや有、マサ土多量
14. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性有
黄褐色土、炭化物微量
15. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有、地山ブロック微量
16. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有
17. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性やや有
炭化物微量、マサ土多量
18. 10YR5/6 (黄褐) しまり強、粘性有、マサ土多量
19. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有
20. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有
21. 10YR4/4 (褐) しまり弱、粘性有
22. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性強
23. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、貼床

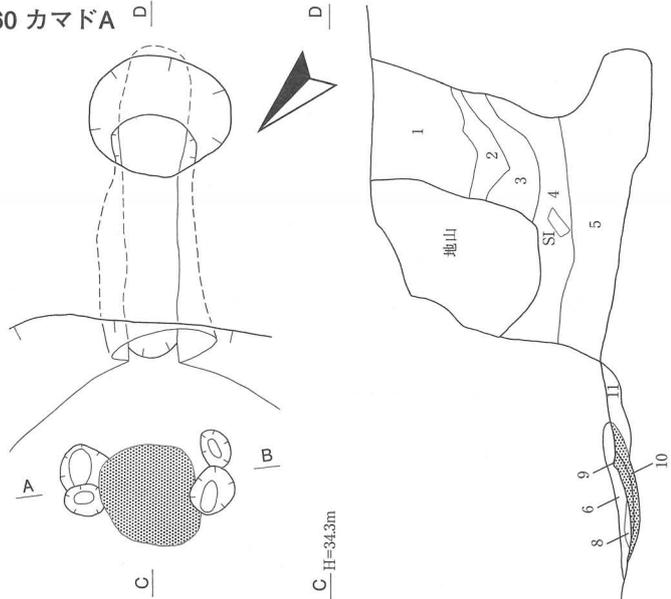
SI60 カマドB



SI60 カマドB

1. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有、黄褐色土少量
2. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、黄褐色土・炭化物・焼土多量
3. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性やや有

SI60 カマドA

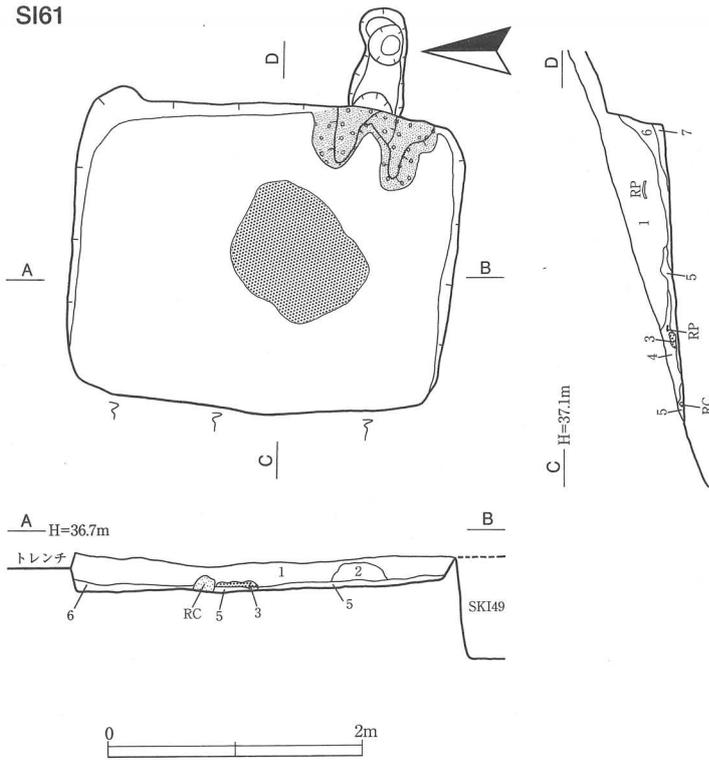


SI60 カマドA

1. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性有
2. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有
黄褐色土多量
3. 10YR3/3 (暗褐) しまり弱、粘性やや有
4. 10YR2/3 (黒褐) しまり弱、粘性有
5. 10YR3/4 (暗褐) しまり弱、粘性有
6. 7.5YR4/6 (褐) しまり・粘性有
焼土ブロック少量
7. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有
褐色土ブロック少量
8. 7.5YR5/8 (明褐) しまり強、粘性無
9. 5YR5/8 (明赤褐) } 燃焼部焼土
10. 5YR3/4 (暗赤褐) }
11. 10YR3/4 (暗褐) しまり強、粘性有、貼床

第65図 SI60竪穴住居跡

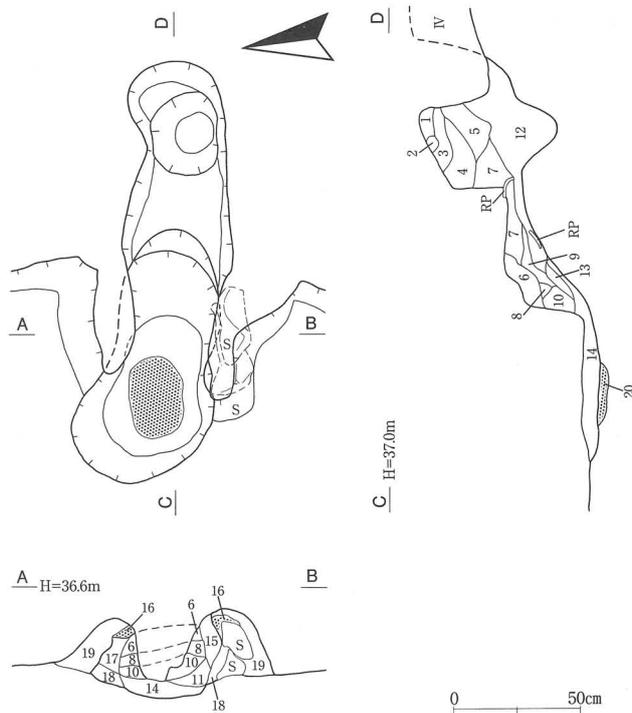
SI61



SI61

1. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性やや有、炭化物微量
2. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性やや有
黄褐色土ブロック・焼土ブロック・炭化物少量
3. 7.5YR2/1 (黒) しまり・粘性やや有
黄褐色土ブロック・炭化物多量
4. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有、炭化物・焼土微量
5. 10YR1.7/1 (黒) しまりやや有、粘性無、炭化物層
6. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性やや有
7. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有

SI61 カマド



SI61 カマド

1. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性やや有
2. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、炭・焼土粒少量
3. 10YR6/6 (明黄褐) 堅くしまる、粘性有
4. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有、炭粒少量
5. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、黄褐色土・焼土微量
6. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、南側に黄粘土多量
7. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有
8. 10YR4/3 (におい黄褐) しまりやや有、粘性有、黄褐色土・焼土多量
9. 7.5YR5/6 (明褐) しまり・粘性有、黄粘土と焼土が混じったもの
10. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性有
11. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性有、炭粒少量
12. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有
13. 5YR5/8 (明赤褐) 堅くしまる、粘性無、暗褐色土混入
天井の内壁の崩落土
14. 5YR3/6 (暗赤褐) しまり弱、粘性やや有
暗褐色土に焼土が混じったもの
15. 7.5YR5/8 (明褐) しまり有、粘性無、黄褐色土・焼土粒少量
16. 5YR5/8 (明赤褐) 堅くしまる、粘性弱、焼土
17. 7.5YR5/8 (明褐) しまり有、粘性やや有、黄褐色土・焼土粒少量
18. 7.5YR4/4 (褐) しまり・粘性有、焼土ブロック多量
19. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性有、カマド構築土
20. 5YR4/8 (赤褐) 燃焼部焼土、カマド内壁焼土

第66図 SI61竪穴住居跡

で、形状をおよそ把握できた復元個体は土師器の甕形土器 2 点 (114・115) である。このほか羽口片 7 点、砥石 1 点 (42)、鉄製品の鉄鐸 1 点 (27)、鍛冶滓類約 1 kg、鉄塊系遺物 1 個が出土した。また北東隅から炭化したケヤキの木製椀 (RC1) と思われるものが出土したが、取り上げは適わなかった。

S X I 07 工房跡・S X W 24 鉄生産関連炉跡、S I 62 竪穴住居跡・S X W 26 鉄生産関連炉跡

(第 67・68 図、遺物図版 13・14・62・64・83、写真図版 46・47・218・219・250・251・262・273・312・313)

E 区緑 7 区の中央部東斜面下位、Ⅶ C - 13 b グリッドに位置し、検出面はⅢ層上面である。検出当初は 2 m ほどの不整な褐色土プランとその谷側下方に一部途切れる馬蹄形で周堤状を呈する炉跡 (S X W 24) を確認したものであり、炉跡周囲では鉄生産関連遺物が出土することから鍛冶工房跡 (S X I 07) と考え精査を開始した。床面がⅢ層黒色土中であつたため見極めが難しく、谷側の炉跡付近から山側に向かって掘り進めたところマサ土の壁を確認し、さらにこの下位の黒色土を埋土とする遺構の存在が伺われた。精査の結果、S I 62・S X W 26 を検出したものだが、断面の観察から S X W 26 は 2 時期あり、S I 62 カマドと S X W 26 の残存状況から、当初 S X W 26 C を伴う工房跡として構築使用されたものが、貼床をして S X W 26 A を伴う S I 62 に改築したものである。また位置的に S X I 18 と重複するが平成 10 年度の試掘トレンチのため新旧関係は不明である。

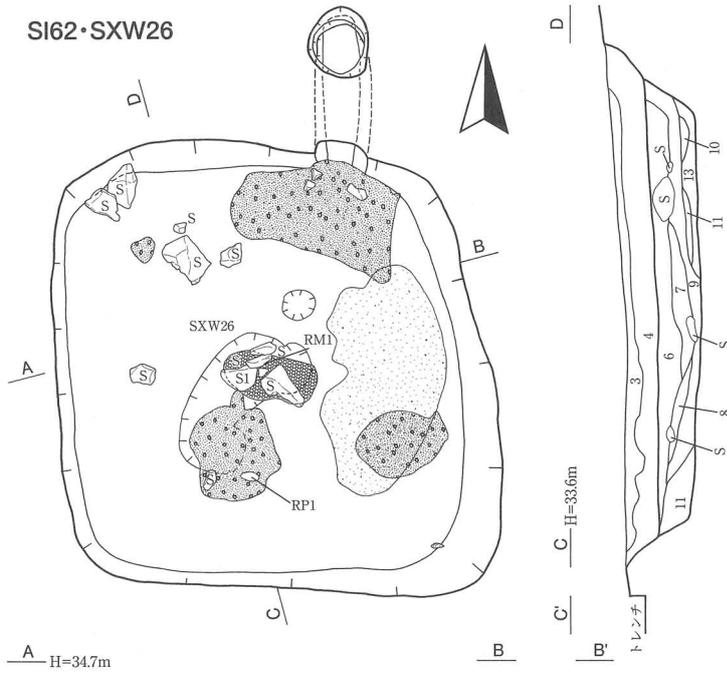
S X I 07 の平面形・規模は、山側東壁上位と谷側が崩落しているが、長軸が等高線と平行する南北にあり、長軸約 4.5 m、短軸約 4 m の歪な隅丸長方形を呈し、床面積は約 12.4 m² を測る。壁は外傾して立ち上がり、山側東壁上位では崩落によりさらに外反していた。壁高は山側の最大約 120 cm から谷側に向かい低くなる。埋土は上位の褐色系土と下位の黒色土に大別される流入と崩落による自然堆積である。床面はⅢ層黒色土中にあり、概ね平坦で堅締であつた。床面施設としては S X W 24 が検出され、平面形は床中央側が開き、対極で一部途切れる馬蹄形の周堤状を呈し、規模は長軸約 135 cm、短軸約 80 cm、周堤の幅は約 15 cm、高さ約 5 cm を測る。周堤上と内側は全体的に火熱により弱く赤色変化した焼土となっており、状況からほぼ現況を留めていると思われる。収集土からは鍛造剥片は抽出されなかったが、形態及び他の鉄生産関連遺物の出土から鍛冶工房と判断した。

遺物はほとんど埋土下位から出土し、土器は土師器の甕形土器片が少量と、坏形土器片数点、須恵器の甕形土器片 2 点で、形状を把握できた復元個体はない。このほか羽口がほぼ完形の 1 点 (50) を含む 5 個体と破片 11 点、鍛冶滓類約 4.5 kg、鉄塊系遺物 2 個、それと炉壁が少量出土した。

S I 62 の平面形・規模は、およそ一辺約 3.5 m ほどの歪な隅丸方形を呈し、主軸方位は南 - 北、床面積は約 9 m² を測る。壁は山側の上位は S X I 07 によって不明だが、遺存部分は外傾して立ち上がる。壁高は山側の最大約 110 cm から谷側で約 40 cm と低くなる。埋土は 10 層に細分される黒色系土を主体とする人為的堆積で、中位には鉄生産関連遺物を多く含む廃棄と思われる黄褐色系土が存在する。床面は全体的に黒色土で貼床されていたが、掘り下げ中には床面を把握できず、ベルト下に残った S X W 26 A の一部を除き、下位の工房床まで掘り進めたため床面の状態は不明である。床面施設としては中央に S X W 26 A とこの北側に隣接して付属すると考えられる P 1 柱穴状ピットが検出された。S X W 26 A については S X W 26 C と併せて後述する。

カマドは北壁の東側に付設され、本体部は上記のとおり掘り下げたため全容は不明であるが、袖部には芯材としておよそ 20 cm 大の石 3 個が遺存し、燃焼部は火熱により厚さ約 3 cm ほどが赤色変化していた。煙道は奥行き約 130 cm、径約 40 cm の削り貫き式で、外側に向かって緩い下り勾配で煙出しよりも奥まで掘り込まれていた。煙出しピットは径約 40 cm の略円形で、推定される深さは約 110 cm である。

SI62・SXW26

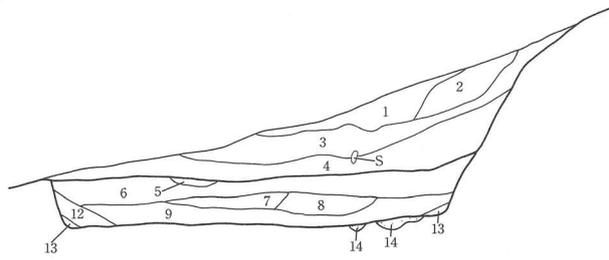


SXI07

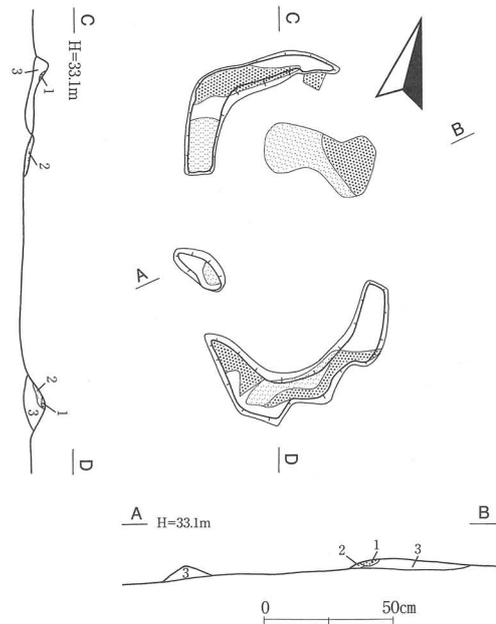
1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性弱
マサ土ブロック少量
2. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有
炭化物微量
3. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有
4. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有

SI62

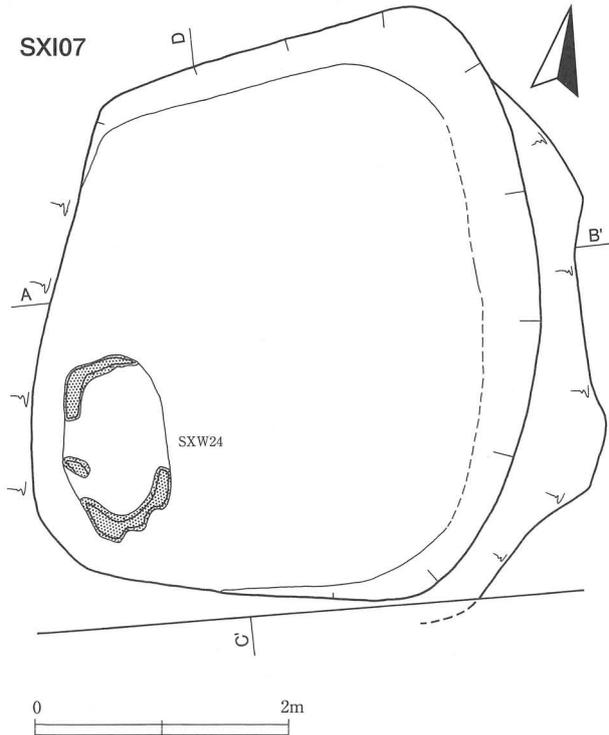
5. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有
6. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性やや有
7. 10YR6/8 (明黄褐) しまり無、粘性弱
8. 10YR4/4 (褐) しまり弱、粘性やや有
9. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性やや有
10. 10YR6/8 (明黄褐) しまり無、粘性弱
11. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性やや有
12. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性やや有
13. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性やや有
14. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有、炭化物多量
焼土ブロック微量、貼床



SXW24



SXI07

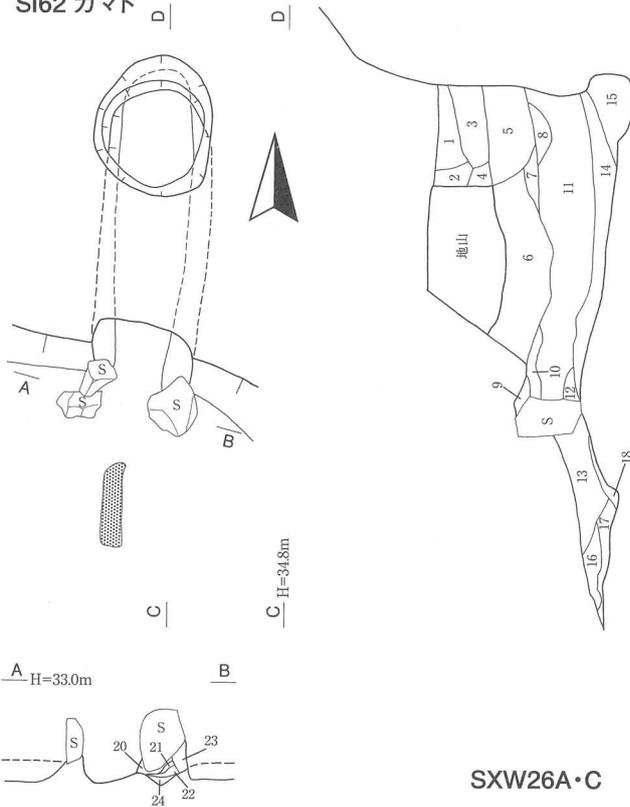


SXW24

1. 7.5YR4/6 (褐) しまり・粘性有
2. 10YR1.7/1 (黒) 炭化物
3. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有

第67図 SI62竪穴住居跡・SXIO7工房跡・SXW24・26鉄生産関連炉跡(1)

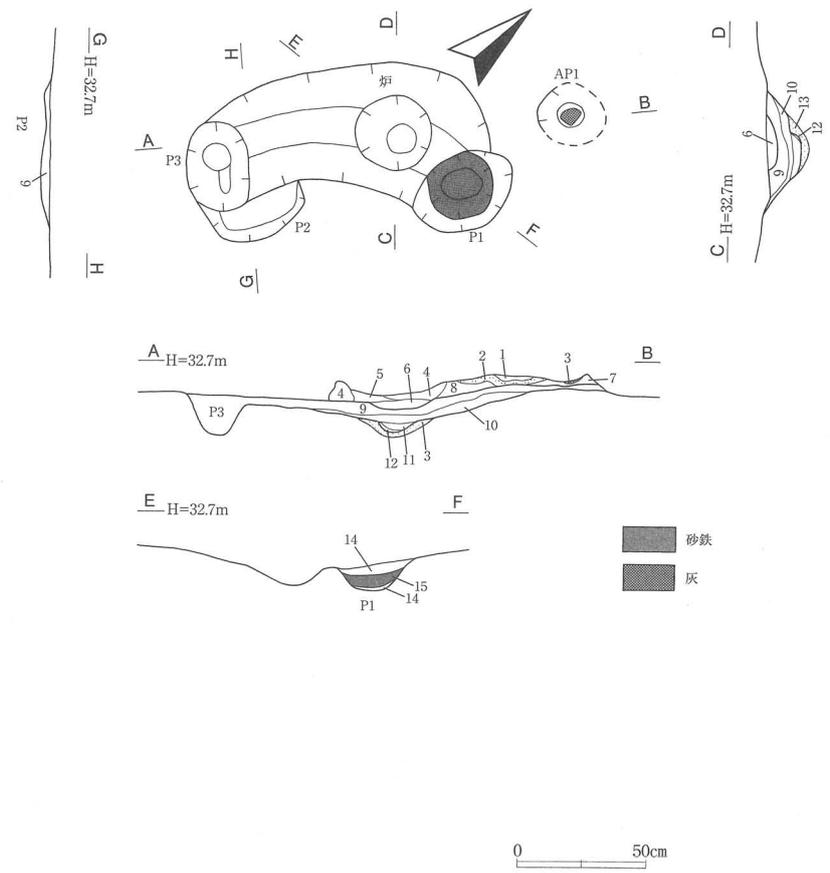
SI62 カマド



- SI62 カマド
- 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり弱、粘性有
 - 10YR3/3 (暗褐) しまり弱、粘性有
 - 10YR6/6 (明黄褐) しまり弱、粘性有
 - 10YR3/3 (暗褐) しまり弱、粘性有
黄褐色土少量
 - 10YR2/3 (黒褐) しまり弱、粘性有
 - 10YR3/2 (黒褐) しまり弱、粘性有
 - 10YR7/8 (黄橙) しまり弱、粘性有
 - 10YR2/3 (黒褐) しまり弱、粘性有
 - 10YR7/8 (黄橙) しまり強、粘性無
 - 10YR3/3 (暗褐) しまり中、粘性有
 - 10YR2/3 (黒褐) しまり中、粘性有
黄褐色土多量
 - 10YR2/3 (黒褐) しまり強、粘性やや有
焼土ブロック多量
 - 10YR7/8 (黄橙) しまり中、粘性有
炭化物・焼土ブロック・黒ボク土多量
 - 10YR3/3 (暗褐) しまり強、粘性弱
 - 10YR6/6 (明黄褐) しまり弱、粘性有
 - 10YR2/2 (黒褐) しまり中、粘性有
 - 10YR3/4 (暗褐) しまり強、粘性弱
 - 10YR3/3 (暗褐) しまり強、粘性弱
 - 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性有
 - 10YR5/8 (黄褐) しまり有、粘性やや有
 - 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有
 - 10YR6/8 (明黄褐) しまり有、粘性やや有
 - 10YR5/8 (黄褐) しまり強、粘性無

SXW26A・C

- SXW26A
- 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性やや有
 - 10YR1.7/1 (黒) しまり有、粘性やや有
炭化物層
 - 2.5Y7/1 (灰白) しまり有、粘性無、灰
 - 10YR2/3 (黒褐) しまり有、粘性強
 - 10YR5/3 (黒褐) } カマド
しまり有、粘性強 } 構築土
 - 10YR3/4 (暗褐) } 崩落
しまり弱、粘性有 }
 - 10YR2/1 (黒) しまり有、粘性やや有
炭化物少量
 - 10YR4/6 (褐) しまり・粘性やや有
- SXW26C
- 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有
 - 10YR2/2 (黒褐) しまり強、粘性有
炭化物少量
 - 10YR2/2 (黒褐) しまり強、粘性やや有
 - 2.5Y6/1 (黄灰) しまり有、粘性無
 - 10YR1.7/1 (黒) しまり強、粘性無
還元(蒸し焼き)
 - 10YR2/2 (黒褐) しまり強、粘性有
灰・砂鉄混じる
 - 10YR1.7/1 (黒) 砂鉄



第68図 SI62竪穴住居跡・SX107工房跡・SXW24・26鉄生産関連炉跡(2)

S X W26は、上記のとおり掘り下げた結果、床中央で多量の鍛造剥片と径1cm以下の粒状鍛冶滓や炭化物の広がりを視認し、断面ベルトの観察から改築した床面が確認されたもので、A炉とA P1についてはベルト下部分のみの検出となってしまった。残存部分が少ないため平面形・規模は不明だが、C炉跡の上位に鍛造剥片を多量に含む窪み(精査時A炉)、これとA P1の間に底面が堅く締まった炭化物層の窪み(精査時B炉)が存在し、弱い還元蒸焼状態と推測された。A P1は浅い窪みと底面で灰を検出したもので、他の鍛練鍛冶炉との対比から記載順に鉄砧石の設置穴(元A)、炉跡(元B)、鞆関連ピット(A P1)と推定される。C炉跡は、端部が丸い幅広の弓なり状のプランとして検出したもので、全体的な平面形・規模は長軸約120cm、短軸約45cmの略楕円形で、深さ約5cm以下の溝状を呈し、中央北寄りには径約30cm、深さ約3cmの擂鉢状の底面が堅く締まった弱い還元蒸焼状態が検出され、南端部は35×25cmの楕円形で、深さ約15cmのP3、この東側に隣接する35×15cm、深さ約3cmの浅いP2、北端部は40×30cmの略円形で、深さ約10cmの鍋形を呈し、下位に貯蔵と思われる砂鉄溜りのあるP1があり、形態的には他の鍛冶炉跡と異質ではあるが、構造の対比からは中央部が炉跡、P2・3が鉄砧石の設置穴、P1は鞆関連あるいは作業時に何らかの目的で使用した砂鉄の貯蔵穴と考えられる。

遺物はほとんど埋土中の廃棄土から出土し、土器は土師器の坏形土器1個体(119)のほかは甕形及び坏形土器片が数点、不明鉄製品が2点、羽口片が約20点、要石(鉄砧石)1点、大量に廃棄された復元不可能な炉壁片と鍛冶滓類約10kg、鉄塊系遺物1個、それとS X W26 A・Cから多量の鍛造剥片と少量の粒状滓が出土した。

S I 63 竪穴住居跡 (第69図、遺物図版12・62、写真図版48・218・250・311)

E区緑7区の北部東斜面中腹、VII B-9・10 q グリッドに位置し、検出面はVI層上面である。平面形は等高線と平行する北西-南東が長軸方向のおよそ隅丸長方形を呈し、規模は長軸約4m、短軸約1.5m、床面積は約4.3㎡を測る。主軸方位はN-45°-Eである。遺存する壁は鋭角的に外傾して立ち上がり、壁高は山側北東壁で最大約60cmから谷側の約10cmと低くなる。埋土は5層からなる流入と崩落による黒色土とマサ土の自然堆積である。床面はおよそ平坦で堅締、床面施設は検出されなかった。

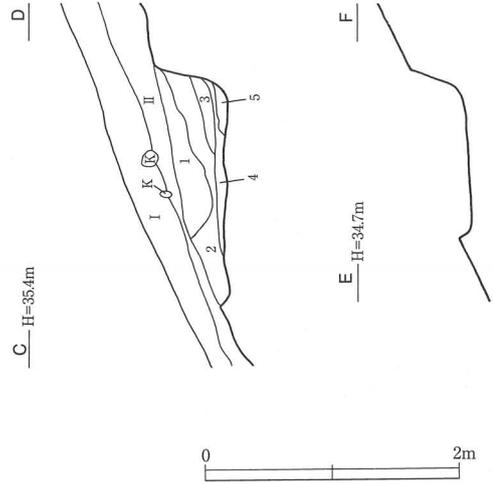
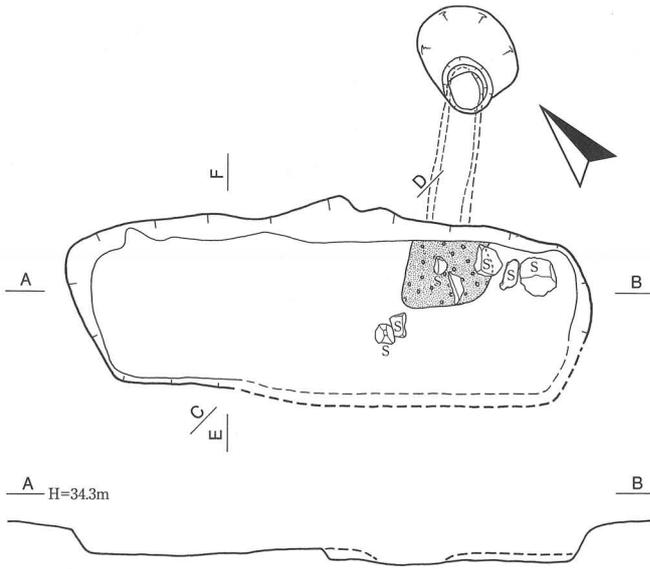
カマドは山側北東壁の南側に付設され、一部本体天井部も残り、遺存状態は良好である。本体部は、袖部に芯材としてコブシ大から長さ20cmほどの礫を用い、天井部の架構に長さ50cmほどの直角礫1個を組み、黄褐色粘土で構築されていた。燃焼部は幾分掘り込まれ、底部には火熱による広がり、厚さとも微少な赤色変化した焼土が確認された。煙道は奥行き約140cm、径約30cmの削り貫き式で、ほぼ水平に掘り込まれ、煙だしピットは径約30cmの略円形で深さ約110cmを測る。本遺構は規模からみて、一般的な竪穴住居跡というよりも炊事のみを行った厨房施設的な可能性が高いと思われる。

遺物は土師器の甕形土器片と須恵器の甕形土器片が埋土中から少量、羽口はカマド煙道から1点(28)と埋土中から破片約10点、磨石片1点、鍛冶滓類約11kgが出土した。

S I 91 A・B 竪穴住居跡 (第70・71図、遺物図版15・58・64・83・84、写真図版49・220・247・251・273)

E区緑8区の北部東斜面上位、VII B-18 q・r グリッドに位置し、重機道によって掘削されたVI層中で検出した。検出当初、マサ土を多く含むV層起源と思われる黄褐色系土の方形プランと煙道(A)を確認して精査を開始したが、掘り下げ段階でも埋土が全体的に人為的な黄褐色系土ということもあって貼床土と判別できずに1棟と考えていたが、精査過程でカマド(B)を検出したことと断面観察の結果、同程度の規模で竪穴住居跡を改築したものと判断した。また本遺構はS I 92、S X W34・66、S W87、S K209と重複し、切り合い状況から確認した新旧関係は(新)S W87→S X W34・66→S K209→S I 91(古)だが、S I 92について

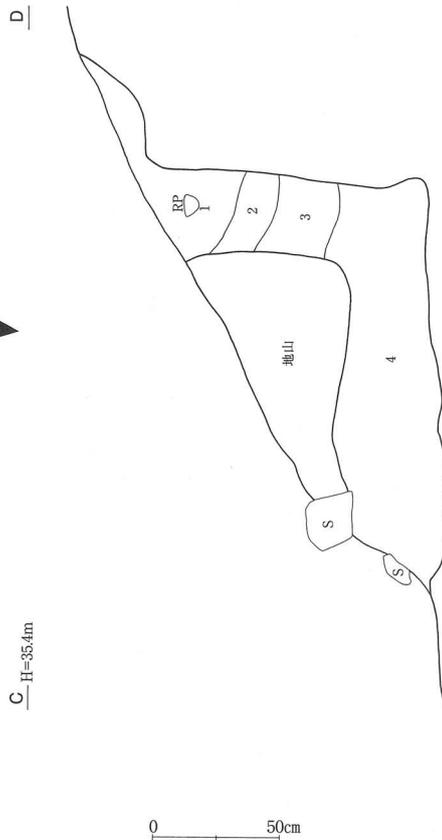
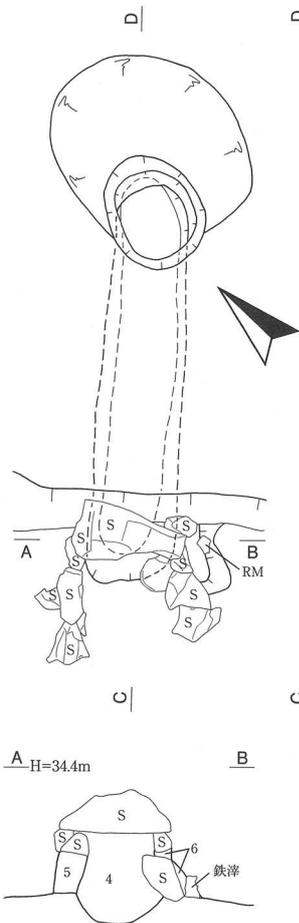
SI63



SI63

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
2. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無
3. 10YR2/3 (黒褐) しまり有、粘性やや有
4. 10YR2/1 (黒) しまり有、粘性無、炭化物多量
5. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり弱、粘性無

SI63 カマド



SI63 カマド

1. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性やや有
2. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性弱
3. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性弱
4. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有
5. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
少礫・マサ土多量
6. 10YR6/6 (明黄褐) しまり強、粘性無

カマド
構築土

第69図 SI63竪穴住居跡

ては重機道に著しく削平されており不明である。

S I 91Aは、上記とおり掘り下げたためベルト残存部からの推定となるが、平面形・規模は一辺およそ3.5mほどの隅丸略方形と推定され、主軸方位はN-30°-W、床面積は推定約12㎡である。壁は外傾して立ち上がり、壁高は最大約30cmが残る。埋土は11層に細分されるが、全体的にマサ土を多く含む黄褐色系土の人為堆積である。床面及び床面施設は掘削したため不明である。

カマドAは北西壁のほぼ中央に付設されていたが、重機道によって削平され、煙道と煙出しが残るのみである。煙道は奥行き約120cm、幅約35cmで削り貫き式か掘り込み式かは不明である。煙だしピットは煙道先端部の谷側にずれており、径約25cm、深さ約20cmが残る。

S I 91Bは、谷側が崩落により消失しているが、遺存状態は比較的良好で、平面形は長軸が等高線と平行する南北方向の隅丸長方形を呈し、規模は長軸約4m、短軸約3.5mを測る。主軸方位はN-30°-W、床面積は約12.7㎡である。残存する壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は山側北東壁の最大約50cmから谷側に向かい低くなる。埋土は6層に細分されるが、全体的にマサ土を多く含む黄褐色系土の人為堆積であり、A住居の貼床土である。床面は平坦で堅締、およそ谷側の半分に貼床が施されていた。床面施設としては南隅にK1土坑1基と中央付近に地床炉A・Bの2基、山側の壁際を半周する幅約10cm、深さ約5cmの壁溝が検出された。K1の平面形・規模は開口部径約50cmの円形で、深さ約25cmの鍋形を呈し、埋土は褐色土単層の人為的堆積である。地床炉A・Bは共に40cmほどの不整形で、厚さ約3cmほどが火熱により赤色変化した焼土である。

カマドBは北西壁の中央やや東寄りに付設され、本体天井部は消失していたが、袖部は架構・芯材として石や土器などは認められないが、抜き取りの小ピットが4基検出され、黄褐色土で構築されていた。燃焼部はおよそ平坦で、火熱により40×30cmほどの不整形で、厚さ5cmほどに赤色変化した焼土が確認された。煙道は奥行き約130cm、径約30cmの削り貫き式で、外側に向かい下り勾配である。煙出しピットは、径約30cmの略円形で深さは煙道よりも深く約50cmが残る。

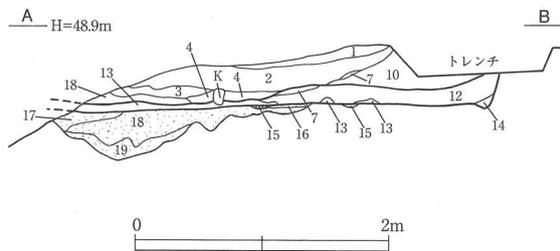
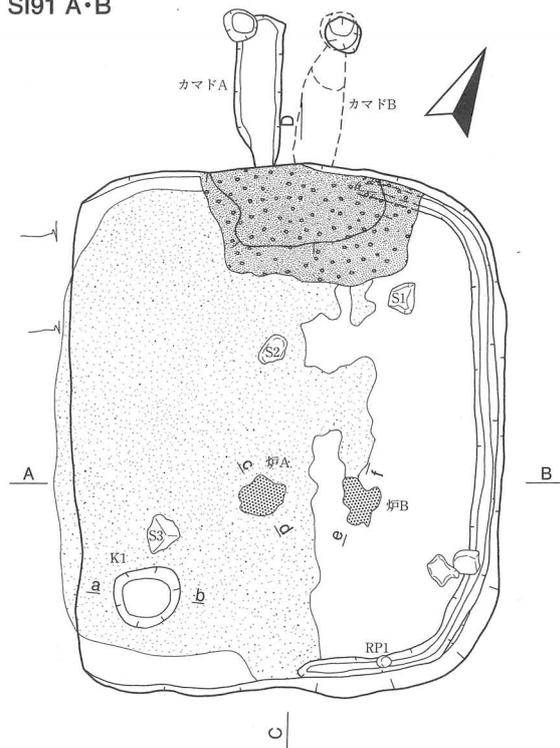
遺物はほとんど埋土中から出土し、土器は土師器の甕形土器片と坏形土器片が少量と須恵器の甕形土器片1点(159)、南側の壁溝上から支脚1点(6)とカマドから羽口1点(54)、埋土中から砥石2点(48・49)、要石1点(47)、カマドから磨石1点(46)と鍛冶滓類が少量出土した。

S I 92 竪穴住居跡 (第71図、遺物図版84、写真図版50・273)

E区緑8区の北部東斜面上位、ⅦB-18qグリッド杭を中心に位置し、重機道で掘削されたⅦ層中で検出した。検出時の状況としては、全体的に重機道に削平されたためプランは不明で、山側東壁の一部と2mほどの不整な落ち込みを確認し、精査過程でカマド煙道を検出したことで竪穴住居跡と判明したものである。平面形・規模は掘削され不明だが、東壁の残部とカマドの位置、及び貼床残部の範囲から長軸が等高線と平行するおよそ南-北にある長軸5m前後、短軸2.5m前後の隅丸長方形と推定され、主軸方位はN-60°-E、床面積は約12㎡と推定される。北隅を除き、東壁はカマドとの位置関係から本遺構に伴うものか重機の爪痕か疑問も残るが、残存部ではかなり外傾して立ち上がり、壁高は最大約30cmが残る。埋土は北隅の一部に褐色土単層と壁際溝跡にⅦ層起源の自然堆積土が僅かに残るのみである。床面及び床面施設は掘削したため不明であるが、南側には貼床が施されていた。

カマドは東壁の南側に付設されていたが、重機道によって削平され、煙道と煙出しが残るのみである。煙道は奥行き約110cm、幅約20cmの削り貫き式で、外側に向かい下り勾配である。煙出しピットは、径約30cmの略円形で深さ約60cmが残る。

SI91 A・B



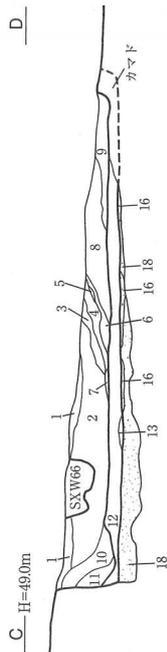
SI91A

1. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
2. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性やや有、炭化物微量
3. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質、マサ土少量
4. 10YR7/2 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、マサ土多量
5. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性やや有、マサ土少量
6. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質、マサ土少量
7. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性やや有、マサ土少量
8. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、黒ボク土・マサ土混じる
9. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性やや有、マサ土微量
10. 10YR5/8 (黄褐) しまり有、粘性無、砂質
11. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性やや有、炭化物微量

SI91B

12. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性無、砂質
13. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有、やや砂質
14. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質 (周溝)
15. 5YR5/6 (赤褐) 炉A焼土
16. 10YR5/8 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
17. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性無、マサ土少量
18. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、マサ土多量
19. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性やや有、マサ土少量

貼床



SI91B K1

a H=48.4m b



SI91 K1

1. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性無、砂質、炭化物微量

0 1m

SI91B 炉A

c H=48.4m d



SI91 炉A

1. 5YR5/4 (にぶい赤褐) 弱い焼土

SI91B 炉B

e H=48.4m f



SI91 炉B

1. 5YR4/6 (赤褐) 強い焼土
2. 5YR5/4 (にぶい赤褐) 弱い焼土

0 50cm

SI91 カマドA

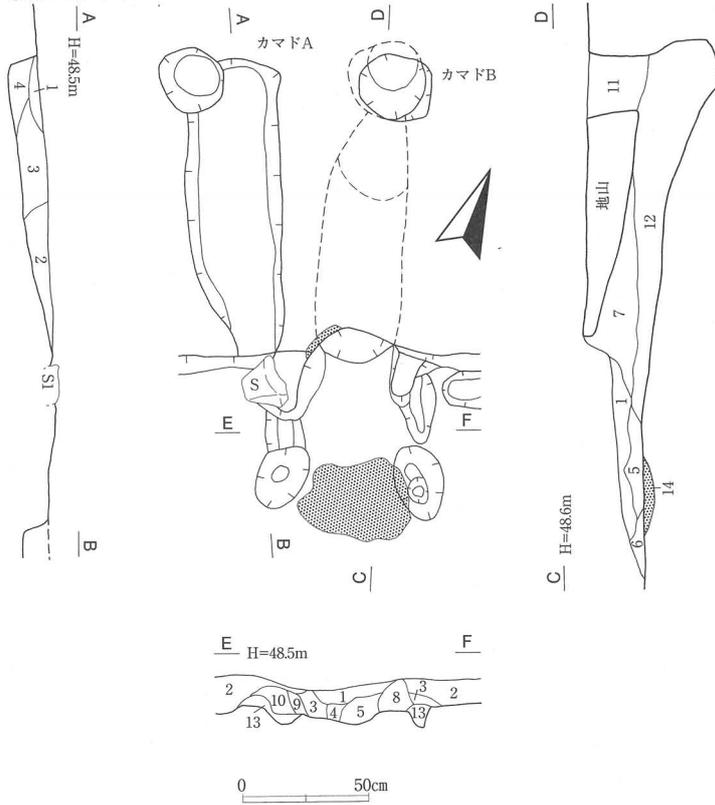
1. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性有
2. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性やや有、やや砂質、黄褐土ブロック・マサ土ブロック微量
3. 10YR3/4 (暗褐) しまり極めて有、粘性やや有、やや砂質、炭化物微量
4. 10YR2/2 (黒褐) しまり極めて有、粘性有、炭化物少量

SI91 カマドB

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性やや有
2. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性やや有、黄褐土ブロック少量
3. 7.5YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性有、弱い焼土化
4. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
5. 7.5YR4/3 (褐) しまりやや有、粘性有、焼土ブロック微量
6. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有、焼土粒を微量含む
7. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
8. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性有
9. 5YR4/6 (赤褐) カマド内壁焼土の崩落土
10. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
11. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性有、黄褐土混じる
12. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
13. 7.5YR4/6 (褐) しまり・粘性有
14. 5YR5/4 (にぶい赤褐) 燃焼部焼土

第70図 SI91竪穴住居跡(1)

SI91 カマド



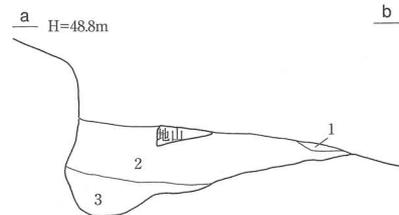
SI91 カマドB

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性やや有
2. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性やや有、黄褐色土ブロック少量
3. 7.5YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性有、弱い焼土化
4. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり、粘性やや有
5. 7.5YR4/3 (褐) しまりやや有、粘性有、焼土ブロック微量
6. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有、焼土粒を微量
7. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
8. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性有
9. 5YR4/6 (赤褐) カマド内壁焼土の崩落土
10. 10YR5/6 (赤褐) しまり極めて有、粘性有
11. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性有、黄褐色土が混じる
12. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり、粘性やや有
13. 7.5YR4/6 (褐) しまり、粘性有
14. 5YR5/4 (にぶい赤褐) 熱焼部焼土

SI91 カマドA

1. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性有
2. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性やや有、やや砂質、黄褐色土ブロック・マサ土ブロック微量
3. 10YR3/4 (暗褐) しまり極めて有、粘性やや有、やや砂質、炭化物微量
4. 10YR2/2 (黒褐) しまり極めて有、粘性有、炭化物少量

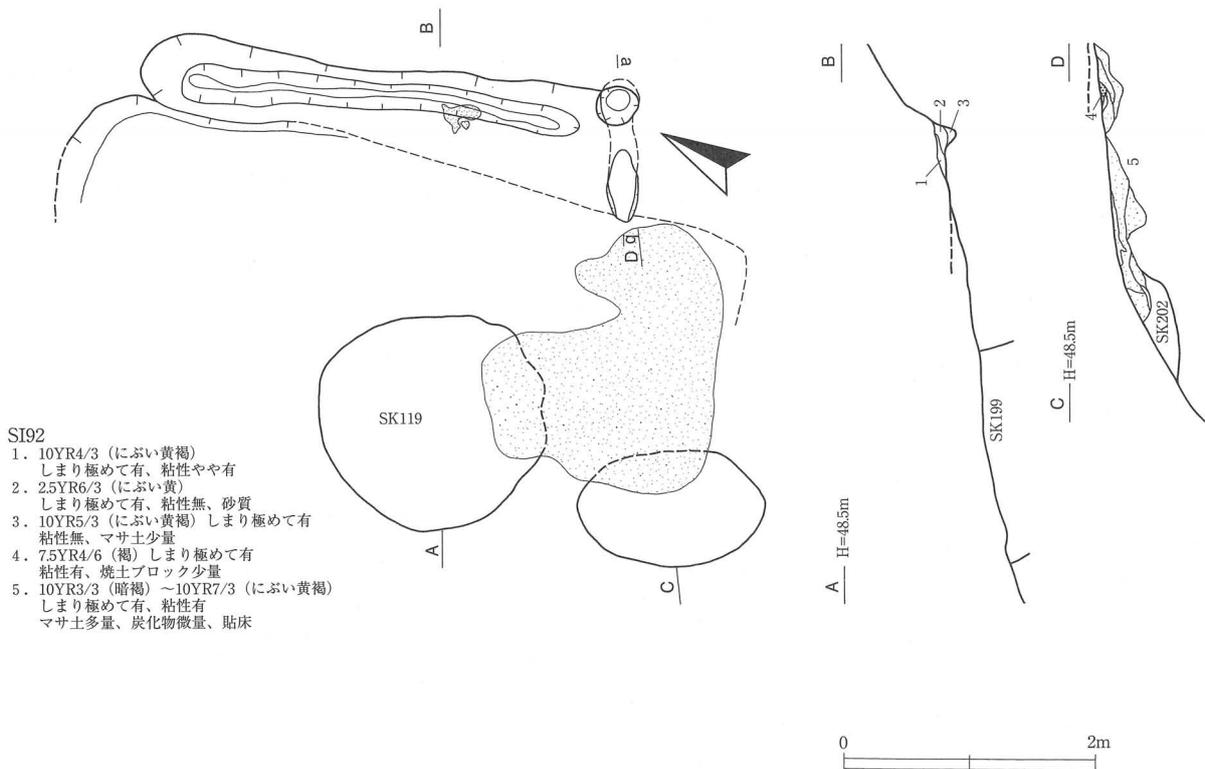
SI92 カマド



SI92 カマド

1. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、マサ土多量
2. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性やや有
3. 10YR3/3 (暗褐) しまり、粘性有、焼土粒微量

SI92



SI92

1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性やや有
2. 2.5YR6/3 (にぶい黄) しまり極めて有、粘性無、砂質
3. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、マサ土少量
4. 7.5YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性有、焼土ブロック少量
5. 10YR3/3 (暗褐) ~ 10YR7/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性有、マサ土多量、炭化物微量、貼床

第71図 SI91竪穴住居跡(2)・SI92竪穴住居跡

遺物はすべて北隅埋土中から出土し、土器は土師器の甕形土器片と須恵器の甕形土器片が微量、羽口片数点、砥石2点(50・51)、刀子片1点と鍛冶滓類が約1.5kg出土した。(小山内)

**S X I 09A 工房跡・S X W23 鉄生産関連炉跡、S X I 09C 工房跡・S X W42 鉄生産関連炉跡、
S X I 09B・E 工房跡、S I 126A～C 竪穴住居跡**

(第72～75図、遺物図版15・16・65・84・85・118・119、写真図版51～54・220・252・262・263・274・301・313・314)

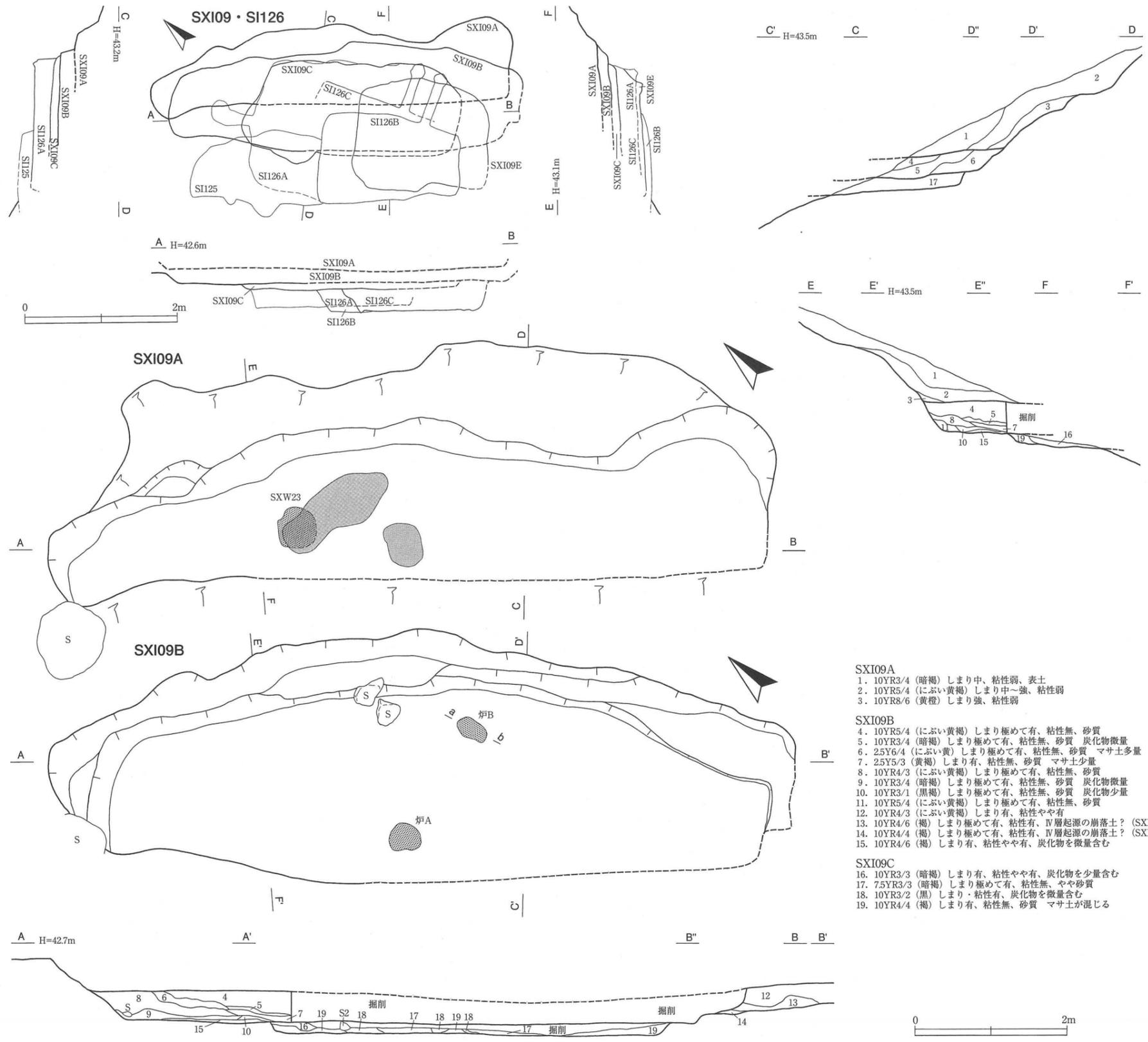
初年度当初は、緑8区の急斜面地での試掘では遺構が検出されず、北東山側の斜面上位が未伐採地ということと重機道下ということもあって面的な調査は不要と判断していた部分であった。後に本遺構群の精査の進行による状況変化から周辺の拡幅の必要が生じたが、調査全体の工程から初年度はA工房跡まで精査を終了し、残りは次年度に繰り越すこととしたものである。初年度の検出状況としては、重機道下の緑7区北東縁辺斜面での検出作業時に、始めIV層と考えた褐色土上で焼土が数基検出され、またその周辺では鍛造剥片が視認されたことから掘削された鍛冶炉の残存として精査を開始した。しかし、精査過程で焼土下の褐色土から遺物が出土することが確認され、IV層ではなく、遺構が存在するものと考えられたため粗掘して拡幅したところ、等高線と平行する長軸の不鮮明なプランを検出した。同時進行となったが、精査が先行していたS X I 01等の類似する状況を踏まえて、何棟かの重複を想定し、等高線と平行するベルト1本をプランのほぼ中央に、等高線と直行するベルトをプランを3等分する位置に2本それぞれ設置し、精査を行った。しかし、全体的に人為的な褐色から黄褐色系の埋土であったため、切り合いを見るためにサブトレンチをいれたが、床も重複の様子も理解できずに掘り進めてしまい、その結果、A工房跡はS X W23周辺以外、B工房跡は南側の半分、C工房跡は南西部を掘りあげてしまった。(本多)

本遺構群はE区緑8区の北端東斜面の微小な洞状地形のⅦB-15q・rグリッドを中心に位置し、検出面はIV～VI層上面だが、すべて上下の重複関係にあり、精査過程で順次確認されたものである。断面観察と床面や炉跡等の確認検出状況から、新旧関係は(新)S X I 09A・S X W23→S X I 09B→S X I 09C・S X W42→S X I 09E→S I 126B→S I 126A→S I 126C→S I 125(古)である。また位置的にS I 127と重複するが直接的な切り合いがないため新旧関係は不明である。以下新旧順に記述する。

S X I 09Aは、上記のとおり大半が破壊されてしまい、また山側北東壁上位と谷側が崩落により消失しているため全容は不明だが、残存部分と断面ベルトの観察から平面形・規模は、長軸が等高線と平行する北西-南東にあり、長軸約9.5m、短軸2～1mほどの山側が弓なりとなる歪な隅丸長方形を呈し、床面積は約13㎡と推定される。壁は外傾して立ち上がり、山側北東壁上位は崩落によりかなり外反していた。壁高は山側の最大約50cmから谷側に向かい低くなる。埋土は上位の流入黒色土と下位の壁崩落のマサ土に大別される自然堆積である。残存する床面は概ね平坦だが、南端の山側は半円形に張り出し、高低差約10cmのテラス状となっていた。床面施設としては中央北よりにS X W23が残るのみである。

S X W23の平面形・規模は、掘削により南側の一部が消失したが、およそ径50cmほどの略円形、深さ約10cmの鍋形を呈すると思われる、埋土は鍛造剥片を少量含む黒色土の単層である。底面は被熱により南東側が中性化、中央が還元、北西側が蒸焼状態で堅く締まっていた。また下部構造としての掘り込みはないが、掘り方下の全体は厚さ5cmほどが火熱により赤色変化しており、炉構築前の湿気抜きのためのものと思われる。炉跡以外は確認できないため不確かではあるが、炉跡の上面周囲では多量の鍛造剥片が出土していることと炉跡の構造及び底面の状態から精錬及び鍛錬を行った鍛冶炉の可能性が高いものと考えられる。

S X I 09Bは、上記のとおり南半部が破壊されてしまい、また谷側が崩落により消失しているため全容は不明だが、残存部分と断面ベルトの観察から平面形・規模は、長軸が等高線と平行する北西-南東にあり、



第72図 SXI09工房跡(1)・SI126竪穴住居跡(2)

長軸約9.8m、短軸2.5～1.5mほどの中央が膨らむ隅丸長方形を呈し、床面積は約17㎡と推定される。遺存する壁は外傾して立ち上がり、残存する壁高は山側の最大約40cmから谷側に向かい低くなる。埋土は12層に細分されるが、全体的にマサ土を含む褐色から黄褐色系土の人為堆積である。床面は残存部では概ね平坦だが、南端の山側は方形に張り出し、高低差約10cmのテラス状となっていた。床面施設としては中央部の山側と谷側で、いずれも40cmほどの広がり、火熱による赤色変化が厚さ2cm以下と弱い焼土の地床炉A・2基を検出した。炉Aは初年度に検出した焼土うちの一つであり、この上面では鍛造剥片が出土していたことから鍛冶工房跡の可能性が高い。

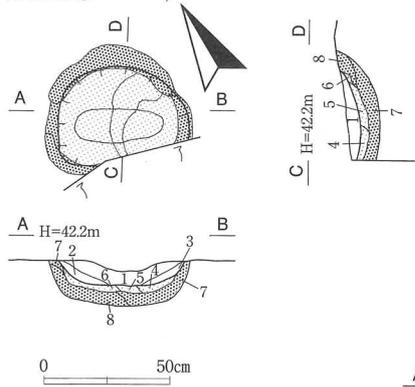
S X I 09 C は、上記のとおり南西部が破壊されてしまい、また谷側が崩落により消失しているため全容は不明だが、残存部分から平面形・規模は、長軸が等高線と平行する北西-南東にあり、長軸約5.5m、短軸約2.5mほどの隅丸長方形で、床面積は約11㎡と推定される。遺存する壁は外傾して立ち上がり、残存する壁高は山側の最大約15cmから谷側に向かい低くなる。埋土は4系土の人為的堆積と思われる。残存する床面は概ね平坦で、堅締である。床面施設としては北西部の谷側にS X W 42と付属するK 1土坑、この山側にA炉と中央にB炉の地床炉2基が検出された。地床炉Aは、90×60cmの不整形で火熱により厚さ約15cm、地床炉Bは140×50～60cmの不整なダルマ形で火熱により厚さ約8cmほどが赤色変化していたもので、堅く焼き締まっていた。B炉の谷側部分は初年度に焼土として確認していたもので、周囲では鍛造剥片が採集されていた。

S X W 42は谷側が崩落して一部消失しているが、平面形・規模は、等高線と平行する長軸で開口部125×75cm、底部50×40cmの略楕円形を呈し、壁は外傾して立ち上がり、山側の中位には幅約10cmほどの棚が半周し、壁高は最大約20cmを測る鍋形を呈する。埋土は上位の人為的な褐色系土と下位の鍛造剥片や炭化物を少量含む黒ボク系の自然堆積土に大別される。底面は谷側に緩い下り勾配で、被熱により全体的に蒸焼状態で部分的に還元して堅く締まっていた。またこの下位には長軸約110cm、短軸約80cm、深さ約5cmの楕円形で鍋形の掘り方が確認された。埋土は全体的に黒色系土で堅く締まり、径1cm前後の小鍛冶滓粒が多量に含まれ弱く赤色変化しており、下部構造的掘り方か、あるいは操業の繰り返しによるものと考えられる。K 1土坑はS X W 42の山側に接し、平面形・規模は長軸約160cm、短軸約80cmの楕円形で、深さ約5cmほどの浅い皿形を呈する。埋土は上位の人為的褐色系土と下位の炭化物を多く含む黒色土に大別される。S X W 42と連結する部分の両端には、径約20cmほどの火熱により赤色変化した部分が認められ、配置的にみてK 1は輪座で焼土部分が羽口の装着痕跡と考えられる。配置・形態及び多量の鍛造剥片が出土していることから、精錬及び鍛練を行った鍛冶炉の可能性が高い。

遺物は、初年度分については重複を把握せずに取り上げたため、A～C工房跡のいずれに帰属するか不明であるが、いずれにしても土器類は土師器の甕形及び坏形土器片が中袋一つ、須恵器の甕形土器片数点と形状復元できた個体はなく、羽口はB床面とS X W 42から各1点(60・61)と破片約100点、炉壁片がB・C床面とS X W 42埋土から数点、砥石1点と磨石6点、不明鉄製品6点、鍛冶滓類はA埋土から約8kg、B埋土から約6kg、C埋土から約1kg、S X W 42及びK 1から約13kgの総量約28kg出土し、このほかA～Cの分別不可能な分が約37kgある。鉄塊系遺物はBから2個、S X W 42から3個、分別不可能な7個、A・S X W 23とC・S X W 42からは多量の鍛造剥片と少量の粒状滓が出土した。

S X I 09 E は、谷側が崩落により消失しているが、残存部分から平面形・規模は、一辺3.5m前後の隅丸方形で、床面積は約9㎡と推定される。遺存する壁は外傾して立ち上がり、残存する壁高は山側の最大約60cmから谷側に向かい低くなる。埋土は14層に細分されるレンズ状の堆積を呈するが、全体的にマサ土を

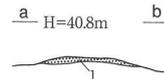
SXW23



SXI09A・SXW23

1. 10YR2/1 (黒) しまり中～強、粘性中
2. 10YR4/6 (褐) しまり中～強、粘性中
焼土ブロック混入
3. 10YR3/1 (黒褐) しまり強、粘性中
4. 2.5Y2/1 (黒) 固くしまる、粘性無、
炭化物多量、還元蒸焼
5. 2.5Y5/1 (黄灰) 固くしまる、粘性無、還元部
6. 2.5Y6/4 (にぶい黄) 固くしまる、粘性無
中性化焼土
7. 7.5YR4/6 (褐) 固くしまる、粘性無、焼土
8. 5YR5/8 (赤褐) 固くしまる、粘性無、焼土

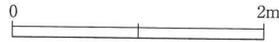
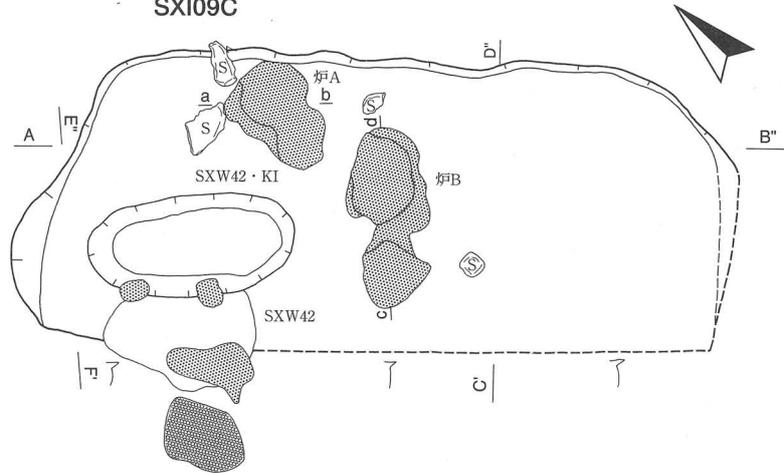
SXI09B 炉B



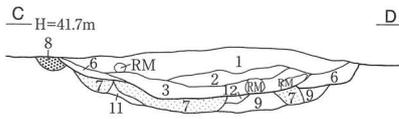
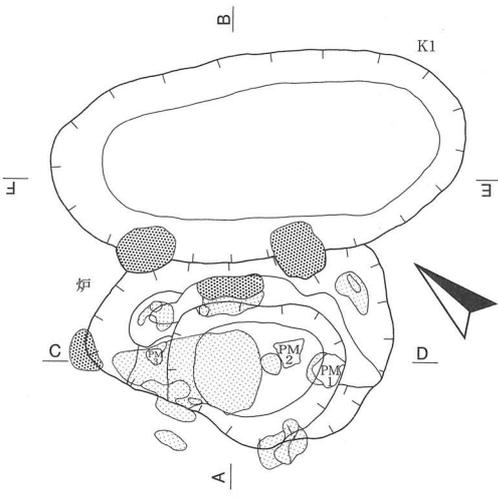
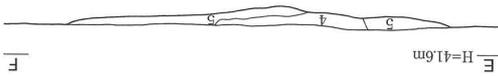
SXI09 炉B

1. 7.5YR3/4 (暗褐) 弱い焼土

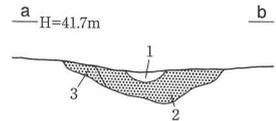
SXI09C



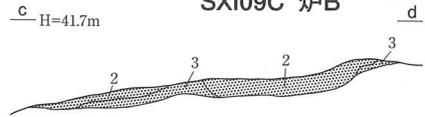
SXW42



SXI09C 炉A



SXI09C 炉B



SXI09C 炉A・B

1. 7.5YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無
2. 5YR5/8 (赤褐) 強い酸化焼土
3. 5YR3/6 (暗赤褐) 弱い酸化焼土

SXW42 K1

1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有
粘性無、砂質 炭化物・焼土粒微量
2. 10YR2/2 (黒褐) しまり無、粘性やや有
炭化物少量
3. 10YR1.7/1 (黒) しまり無、粘性やや有
炭化物多量、焼土粒微量、小鍛冶滓少量
4. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり極めて有
粘性無、マサ土多量
5. 10YR1.7/1 (黒) しまり・粘性有
炭化物多量、焼土ブロック微量
6. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性やや有
7. 7.5YR2/1 (黒) しまり極めて有、粘性無
還元蒸焼
8. 7.5YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性無
焼土ブロック多量
9. 7.5YR3/4 (暗褐) しまり極めて有、粘性無
焼土粒を微量含む、小鍛冶滓多量
10. 7.5YR2/2 (黒褐) しまり極めて有、粘性無
炭化物微量、小鍛冶滓少量
11. 7.5YR3/4 (暗褐) しまり極めて有、粘性無
弱い焼土

K1埋土

貼土

第73図 SXI09工房跡(2)・SXW23・42鉄生産関連炉跡

含む暗褐色から黄褐色系土の人為的堆積である。床面は概ね平坦で堅締、床面施設としては中央部とその山側に地床炉2基と、炉の部分で途切れるが山側に半周する幅約15cm、深さ約8cmほどの壁溝を検出した。地床炉Aは、80×60cmの不整楕円形で火熱により厚さ約15cm、地床炉Bは90×50cmの不整形で火熱により厚さ約5cmほどが赤色変化していたもので、堅く焼き締まっていた。

遺物はほとんど埋土中から出土し、土器は土師器の甕形土器1個体分(161)、羽口は掲載した1点(62)と破片15点、炉壁片数点、砥石1点(56)、鉄製品は北東部の壁溝からほぼ完形の軸棒付紡錘車2点(31・32)と穂積具2点(33・34)、鍛冶滓類は約10kg、鉄塊系遺物は2個出土した。

S I 126 Bは、谷側は崩落により、南側の大半はE工房跡によって消失し、遺存状態は悪く、また埋土が黄褐色系土の人為堆積で平面的に重複する遺構とのプランの区別がつかず、北側も掘り下げてしまったが、断面の観察からA住居跡より新しく、また精査の結果、カマド構築の痕跡を検出し、状況からE工房跡の精査時には壁の崩落と見ていた部分が煙出しの残存部と判断し、住居跡と考えたものである。残存する部分と貼床範囲から平面形・規模は長軸が等高線と平行する南北方向の長軸約4m、短軸約3mの隅丸長方形を呈すると思われる。主軸方位はN-55°-E、床面積は推定約10㎡である。残存する壁は鋭角的に外傾して立ち上がり、壁高は約60cmから谷側に向かい低くなる。埋土は全体的にマサ土を多く含む黄褐色系土の人為堆積である。床面は概ね平坦で堅締で、山側を除き貼床が施されていた。床面施設としては南隅に径約40cm、深さ約25cmを測る貯蔵穴と思われるK1土坑1基とカマドの西側に径約35cmの略円形で、厚さ約3cmほどが火熱により赤色変化した地床炉1基を検出した。

カマドは北東壁の南側に付設されていたが、燃烧部焼土と袖芯材の抜き取り跡と思われる小ピット4基と煙出しが一部残存するのみである。燃烧部はおおよそ平坦で、火熱により径約40cmの円形で、厚さ5cmほどに赤色変化した焼土が確認された。煙道は奥行き約110cmで外側に向かい緩い上り勾配と推定される。煙出しピットは、径約30cmで深さ約60cmほどが残る。

遺物は北隅床面から比較的まとまって出土し、土器は土師器の甕形土器1個体分(162)と坏形土器片1点、羽口は掲載した1点(59)と破片約20点、炉壁片1点と鍛冶滓類が約8kg出土した。

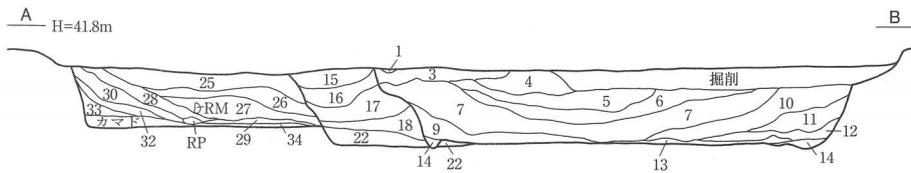
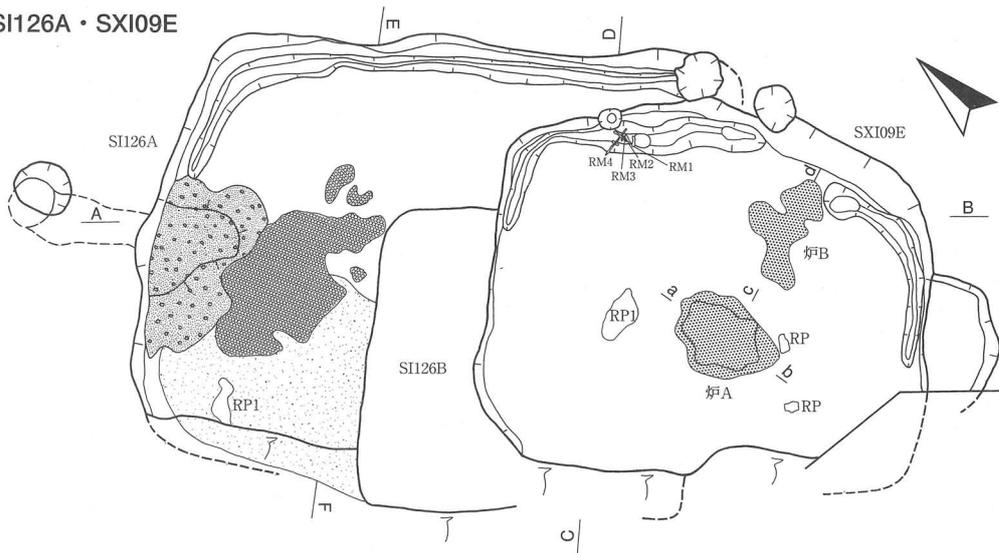
S I 126 Aは、谷側は崩落により、南半はB住居跡とE工房跡によって消失していた。残存する部分と貼床範囲から平面形・規模は長軸が等高線と平行する南北方向の長軸約4.5m、短軸約3.5mの隅丸長方形を呈すると思われる。主軸方位はN-40°-W、床面積は推定約14㎡である。残存する壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は最大約50cmから谷側に向かい低くなる。埋土は全体的にマサ土を多く含む黄褐色系土の人為堆積である。床面は概ね平坦で堅締で、谷側半分ほどに貼床が施され、床面施設は検出されなかった。

カマドは北西壁のほぼ中央に付設され、本体天井部は消失し、袖部は架構・芯材として石や土器などは認められないが、抜き取りの小ピット4基が検出され、黄褐色土で構築されていた。燃烧部は径約80cmほどの円形で、深さ約5cmほどに掘り窪められ、底面は火熱により径50cmほどの略円形で、厚さ5cmほどに赤色変化していた。煙道側の焼土端に支脚の抜き取り痕跡が検出された。煙道は奥行き約120cm、径約30cmの削り貫き式で、外側に向かい下り勾配である。煙出しピットは径約40cmの略円形で深さ約50cmが残る。

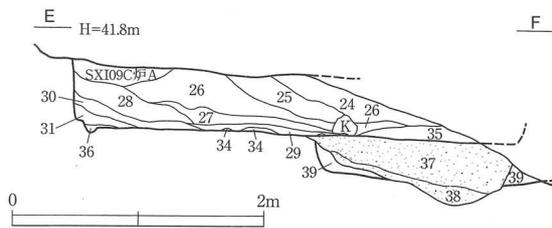
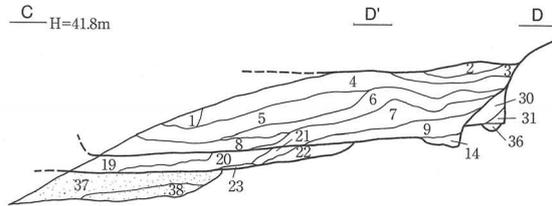
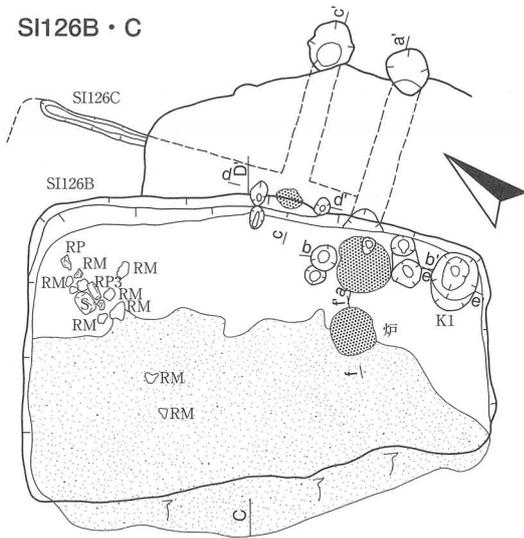
遺物は、土器は埋土中から土師器の甕形土器片が少量と坏形土器片数点、須恵器の甕形土器片1点、羽口は埋土中からほぼ完形の羽口1点(57)と床面廃棄土からの掲載2点(55・58)を含む破片約50点、炉壁が廃棄土中から少量、埋土中から砥石1点、鉄塊系遺物が7個と鍛冶滓類が総量32kgと大量に出土した。

S I 126 Cは、A住居跡床面で長さ約90cm、幅約10cm、深さ約2cmの直線的な溝跡と、B住居跡カマド北側の壁際でカマド構築の痕跡を確認し、位置関係からE工房跡の精査時には壁の崩落と見ていた部分が煙

SI126A・SXI09E



SI126B・C



SXI09E

1. 10YR2/1 (黒) しまり極めて有、粘性有、炭化物微量
2. 10YR5/2 (灰黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質 マサ土多量
3. 10YR3/2 (黒褐) しまり極めて有、粘性やや有、炭化物・焼土粒微量
4. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性無
5. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性やや有
6. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性やや有、炭化物微量
7. 10YR3/4 (暗褐) しまり極めて有、粘性無
8. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性やや有
9. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
10. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有
11. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性やや有
12. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性有
13. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性有、炭化物少量
14. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、周溝

SI126B

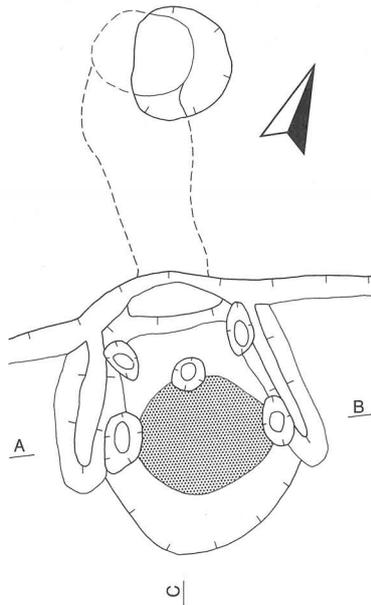
15. 10YR3/2 (黒褐色) しまり極めて有、粘性やや有
炭化物・焼土粒微量、マサ土少量
16. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性やや有
マサ土中量
17. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、黒ボコ土多量
18. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、マサ土多量

SI126A

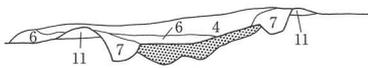
19. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性有、黄褐土多量
炭化物微量
20. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無
21. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無
22. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性無、黄褐土少量
23. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性無、炭化物少量
24. 10YR3/4 (暗褐) しまり極めて有、粘性やや有
25. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性やや有
炭化物・焼土粒微量
26. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性有
27. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無
28. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有、炭化物・焼土粒微量
29. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性無
30. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性やや有
31. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、砂質、マサ土多量
32. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性有
33. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性やや有
34. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性やや有、炉壁、鉄滓多量
35. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有
36. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり無、粘性無
37. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性有、黄褐土ブロック多量
38. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無
39. SI125 埋土 (縄文)

第74図 SXI09工房跡(3)・SI126竪穴住居跡(2)

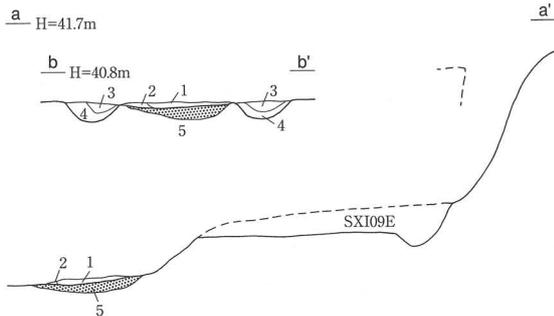
SI126A カマド



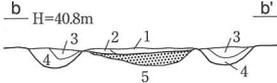
A H=41.2m



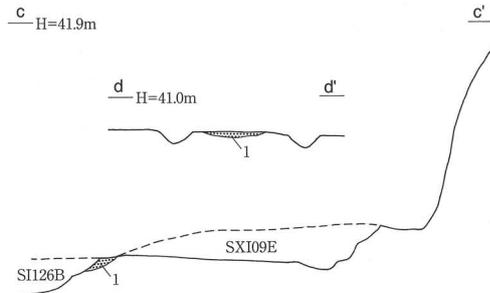
SI126B カマド



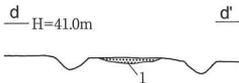
a H=41.7m



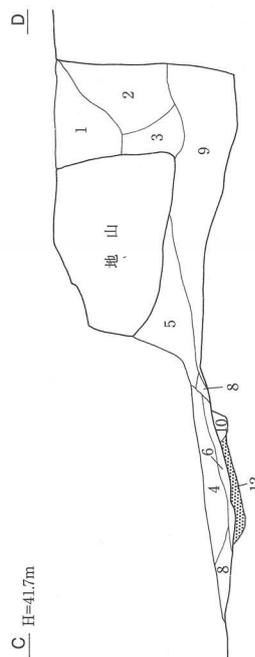
SI126C カマド



c H=41.9m



SI126B

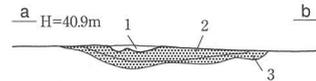


C H=41.7m

SI126A カマド

1. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性やや有、炭化物を微量含む
2. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有
3. 10YR4/6 (褐) しまり無・粘性やや有
4. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
5. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性無
6. 7.5YR5/4 (明褐) しまり有、粘性無
7. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性有、焼土粒微量
8. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性やや有、炭化物・焼土粒微量
9. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性無
10. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性有、焼土粒少量
11. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性有、袖
12. 5YR4/6 (赤褐) 燃焼部焼土

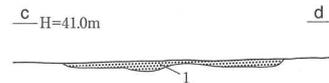
SXI09E 炉A



SXI09E 炉A

1. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性有
2. 5YR5/8 (明赤褐) 強い酸化焼土
3. 7.5YR4/4 (褐) 弱い酸化焼土

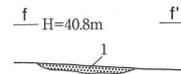
SXI09E 炉B



SXI09E 炉B

1. 5YR4/4 (にぶい赤褐) 焼土

SI126B 炉



SI126B 炉B

1. 5YR4/6 (赤褐) 焼土

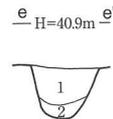
SI126B カマド

1. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性有
2. 7.5YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性有
3. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性有、焼土ブロック微量
4. 10YR6/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
5. 5YR4/8 (赤褐) 燃焼部焼土

SI126C カマド

1. 5YR4/8 (赤褐) 燃焼部焼土

SI126B K1



e H=40.9m e'

SI126B K1

1. 10YR3/4 (暗褐) しまり無、粘性有、炭化物を微量含む
2. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり無、粘性無

第75図 SXI09工房跡(4)・SI126竪穴住居跡(3)

出しの残存部と判断し、住居跡と考えたものである。残存状況からはカマド以外の推測は不可能である。

カマドは北東壁に付設されていたが、燃焼部焼土の残骸と袖芯材の抜き取り跡と思われる小ピット3基、煙出しが一部残存するのみである。燃焼部焼土は火熱により厚さ5cmほどに赤色変化していた。煙道は奥行き約130cmで、外側に向かい緩い上り勾配と推定される。煙出しピットは、径約30cmで深さ約60cmほどが残る。遺物は出土しなかった。

S I 127 竪穴住居跡 (第76図、遺物図版16・84、写真図版556・2206・2736・313)

E区緑8区の北端東斜面中腹のⅦB-16r・sグリッドに位置し、検出面はⅣ～Ⅵ層上面である。本遺構はS X I 09等の精査に伴う拡幅によって検出され、当初は、山側が崩落により不明瞭なプランで、等高線と平行する長軸方向でS X I 09A・Bの延長部と考えたものだが、精査の結果、山側に棚状のテラスを伴った竪穴住居跡と判明した。山側のテラスは崩落により不鮮明、谷側はトレンチ掘削で消失したため全容は不明だが、テラス部分の平面形・規模は長軸約4m、短軸約1mの不整な楕円で、壁は崩落により全体的にかなり外傾し、壁高は山側の最大40cmから谷側に向かい低くなる。底面は南側は一段約10cmほど低く、全体的に谷側の住居跡に向かい緩く傾斜している。住居跡の平面形・規模は残存部分から一辺約2m前後の隅丸方形、床面積は約3.5㎡前後と推定され、主軸方位はN-70°-Eである。遺存する壁は鋭角的に外傾して立ち上がり、壁高は山側北東壁で最大約40cmから谷側に向かい低くなる。埋土は9層からなる流入と崩落によるマサ土を含むⅣ層起源の褐色系土の自然堆積である。床面はおよそ平坦で堅締、床面施設としては南側に径約65cmの円形で、深さ約30cmの鍋形のK1土坑1基が検出された。

カマドは山側北東壁の北寄りに付設され、遺存状態は良好である。本体部は、袖部に芯材として長さ20cmほどの複数の礫を組み、天井は中央が開くように架構に長さ40cmほどの垂角礫2個を組み構築していた。燃焼部は平坦で、火熱により径約50cmの略円形で、厚さ5cmほどの赤色変化した焼土が確認され、煙道側には支脚と思われる石1個が検出された。煙道は短く水平に掘り込まれ、奥行き約30cm、幅25cm、深さ40cmを測るが、煙道というよりも天井石の外側が煙出しとして開口していたものと思われる。

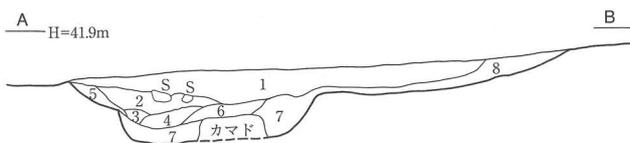
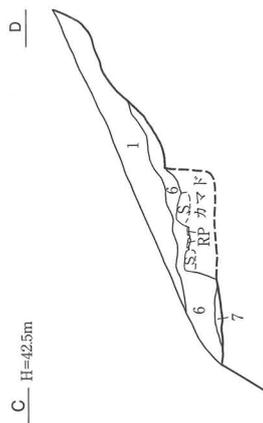
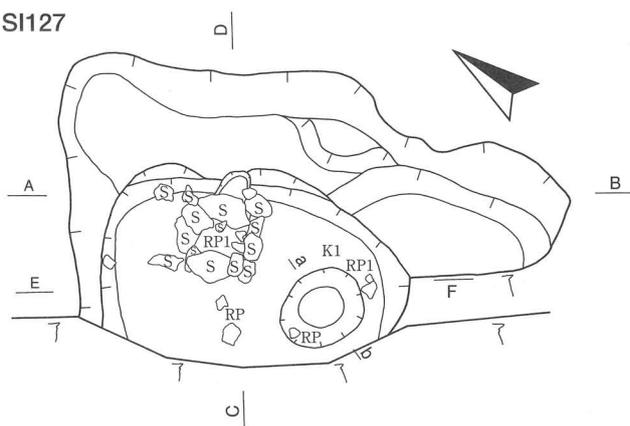
遺物は、土器が南側埋土下位から土師器の甕形土器1個体分(164)と埋土中から破片中袋一つ、坏形土器片数点、このほか埋土中から羽口片数点、磨石数点、不明鉄製品1点、鍛冶滓類約1.5kg、鉄塊系遺物4個が出土した。

S I 128 竪穴住居跡、S X I 27A・C 工房跡 (第77・78図、遺物図版16、写真図版55・56・220・314)

E区緑8区の北部東斜面上位、ⅦB-19sグリッド杭を中心に位置し、重機道によって掘削されたⅥ層中で検出した。当初、等高線と平行する長軸の不明瞭なプランで、緑7区の重複する工房等と類似する状況であったことから、何棟かの重複を想定し、長軸方向に1本と、短軸方向に2本のベルトを設置して精査を開始した。精査の結果、同程度の規模で改築したと思われる工房跡2棟と竪穴住居跡1棟と判明した。また本遺構はS W 85～87、S X W 64・65と重複しており、切り合い状況から確認した新旧関係は(新)S W 85～87→S X W 64・65→S X I 27A→S X I 27C→S I 128(古)である。

S I 128は、S X I 27Aの精査時に煙道を検出し、C工房跡の北側床面で貼床範囲として残存するプランを確認したもので、谷側は崩落により、南側は工房跡によって消失しており全容は不明だが、残存する壁と貼床範囲から平面形・規模は一辺約2.5m前後の隅丸方形で床面積は約6㎡と推定される。主軸方位はN-75°-Eである。一部遺存する壁は外傾して立ち上がり、壁高は約5cmが残る。埋土及び床面はC工房跡のため存在せず不明だが、全体的に貼床が施されていたと推定される。床面施設は配置から主柱穴と思われる2基と北西側で径約60cmの円形で、深さ約20cmの鍋形のK1土坑1基が検出された。

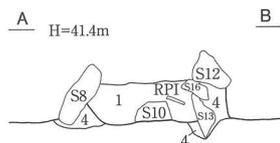
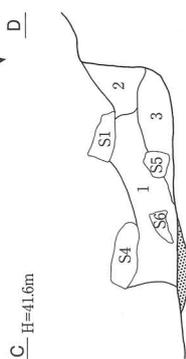
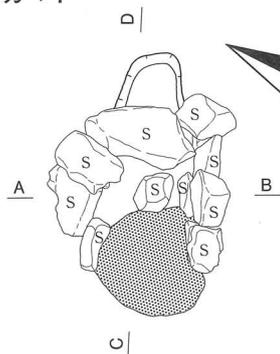
SI127



SI127

1. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無、砂質
2. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無、砂質
3. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性無、砂質
4. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質
5. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有、やや砂質
6. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無、砂質
7. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性やや有、やや砂質
8. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
9. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有、炭化物を少量

SI127 カマド



SI127 KI

a H=41.2m b



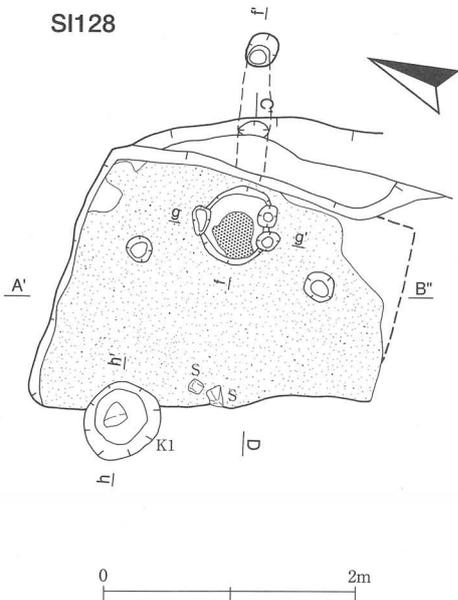
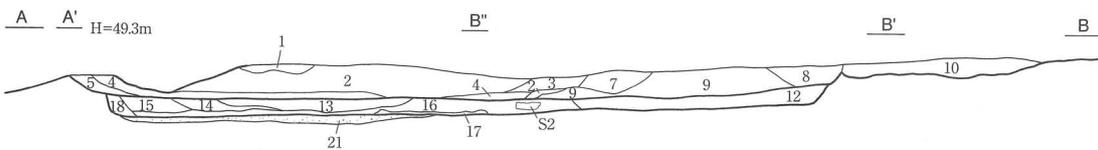
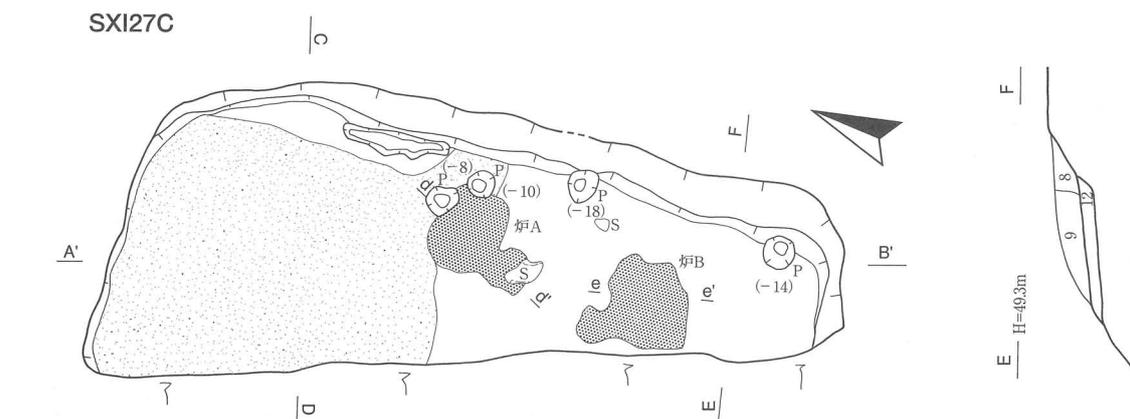
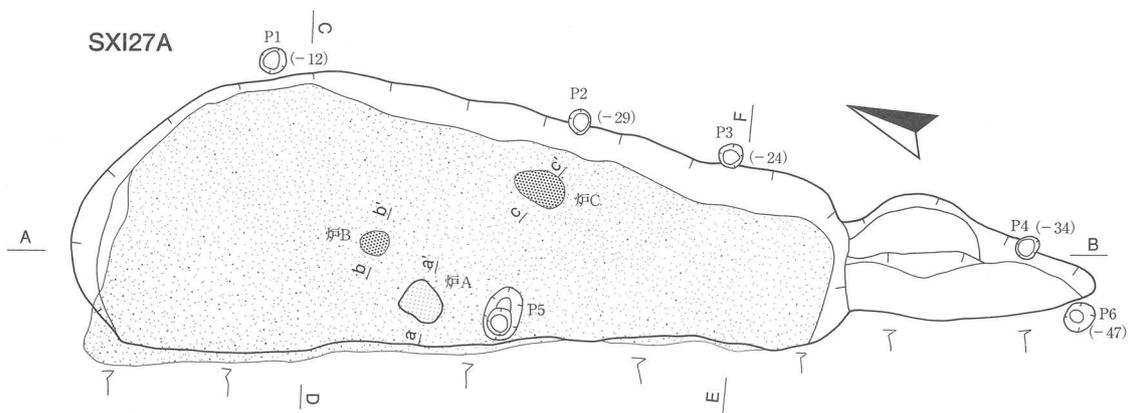
SI127 カマド

1. 10YR4/4 (褐) しまり無・粘性やや有
2. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性やや有
3. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有
4. 10YR3/4 (暗褐) しまり極めて有、粘性有、カマド構築土
5. 5YR4/6 (赤褐) 焼部焼土

SI127 KI

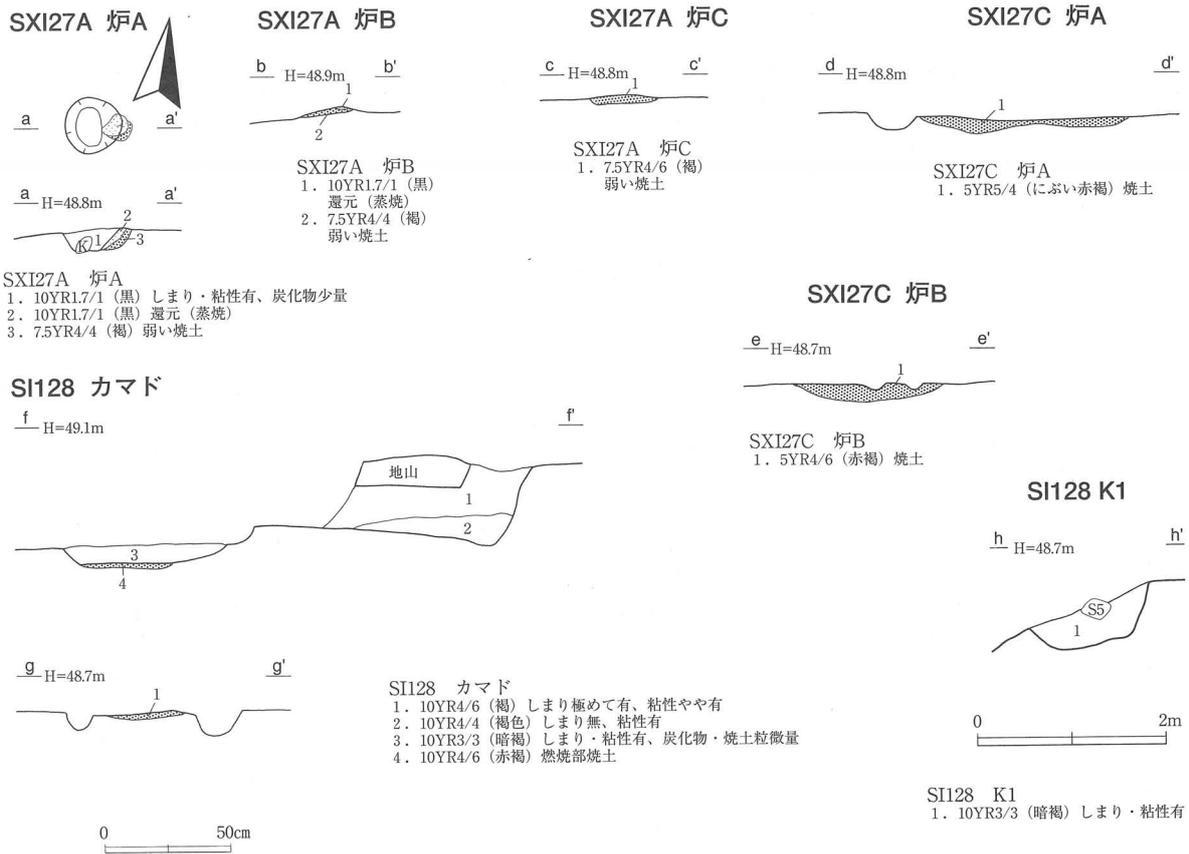
1. 10YR4/4 (褐) しまりやや欠、粘性有

第76図 SI127竪穴住居跡



- SXI27A**
1. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性やや有、炭化物を微量
 2. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性無、砂質
 3. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、炭化物を微量含む
 4. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有
 5. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
 6. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有
 7. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有、炭化物を少量
 8. 10YR6/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質、マサ土多量
 9. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性有、炭化物を微量含む
 10. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性無
- SXI27B**
12. 10YR3/1 (黒褐) しまりやや有、粘性有、炭化物を微量
 13. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性無、マサ土と黄褐土の混土
 14. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性やや有
 15. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性無
 16. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性無
- SI128**
17. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有、炭化物少量
 18. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性有
 19. 10YR3/4 (暗褐) しまり極めて有、粘性やや有、炭化物微量
 20. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有、炭化物・焼土粒微量
 21. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性有、貼床

第77図 SI128竪穴住居跡・SXI27A・C工房跡(1)



第78図 SII28竪穴住居跡・SXI27A・C工房跡(2)

カマドは山側北東壁の中央やや北寄りに付設されていると思われる。本体天井部は消失し、袖部は架構・芯材として石や土器などは認められないが、抜き取りの小ピット3基が検出された。燃焼部は径約50cmほどの円形で、深さ約10cmほどに掘り窪められ、底面は火熱により35cmほどの不整形で、厚さ3cmほどが赤色変化していた。煙道は奥行き約100cm、径約20cmの削り貫き式で、外側に向かい緩い下り勾配である。煙出しピットは径約25cmの略円形で深さは約30cmが残る。

遺物は、貼床から土師器の甕形土器片少量、羽口1点、不明鉄製品1点、鍛冶滓類が微量出土した。

SXI27Aは、西谷側が崩落によって消失しており全容は不明だが、遺存状況からSXI27Cの建替えが行われたものと思われる。平面形は、等高線と平行する北-南が長軸方向の楕円形基調で、南端には南北に長いテラス状の棚が2段取り付く。規模は、長軸総長約8m、内テラス分が約2m、短軸は北側の最大約2.3mから南側で約1.5m、テラス部分では約1mが残存し、残存する床面積は約9㎡である。壁は外傾して立ち上がり、壁高は山側北東壁で最大約20cmから谷側に向かい低くなる。埋土は流入と崩落の繰り返しと思われる黒色系土とマサ土混じりの褐色系土に大別される。床面は概ね平坦で堅締、テラス部分では谷側に向かい緩く傾斜し、それぞれ10cmほどの高低差がある。床面施設としては、中央部にA~C炉の3基と段差のある連結した柱穴状ピット1基、それと山側壁の外側に一列に並ぶ柱穴4基を検出した。炉Aは径約25cmの円形で、深さ約8cmの鍋形を呈し、埋土は炭化物を少量含む黒色土の単層である。東壁の一部が弱還元

の蒸焼状態で、この下位は火熱により薄く赤色変化していた。検出時の状況から念のため埋土を収集したところ、極めて微量ながら鍛造剥片が抽出され、状況等から隣接するP5が鉄砧石の設置穴で炉Aは鍛練鍛冶炉の可能性が考えられる。炉B・Cは地床炉で、それぞれ径約25cm前後と40×25cm前後の広がり、火熱により厚さ約2cmほどが薄く赤色変化していた

遺物は、埋土中から土師器の甕形土器片が少量と坏形土器片数点、羽口片2点、鍛冶滓類が少量と炉Aから極めて微量ながら鍛造剥片が出土した。

S X I 27 Cは、やはり西谷側が崩落によって消失しており全容は不明だが、遺存状況から平面形・規模は、等高線と平行する北-南が長軸方向の長軸約5.5m、短軸は北側の最大約2.5mから南側で約1.5mの隅丸長方形と推定され、残存する床面積は約9㎡である。遺存する壁は外傾して立ち上がり、壁高は山側北東壁で最大約15cmから谷側に向かい低くなる。埋土は褐色系土のA工房跡の貼床土である。床面は概ね平坦で堅締、床面施設としては、中央部にA・Bの地床炉2基と柱穴2基、東壁北側に長さ約80cm、幅約15cm、深さ約2cmの壁溝と東壁南側に柱穴2基が検出された。炉Aは長軸約90cm、短軸70～30cmのダルマ形、炉Bは90×70cm前後の不整な広がり、火熱により厚さ約6cmほどが赤色変化していた。

遺物は、埋土中から土師器の甕形土器片がわずかと須恵器の甕形土器片1点、鍛冶滓類が微量と鉄塊系遺物1点が出土した。

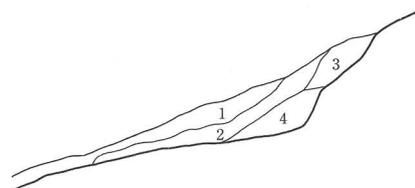
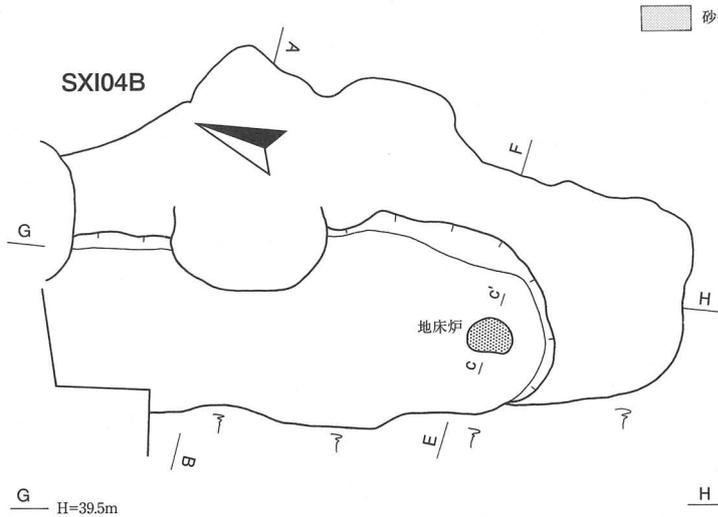
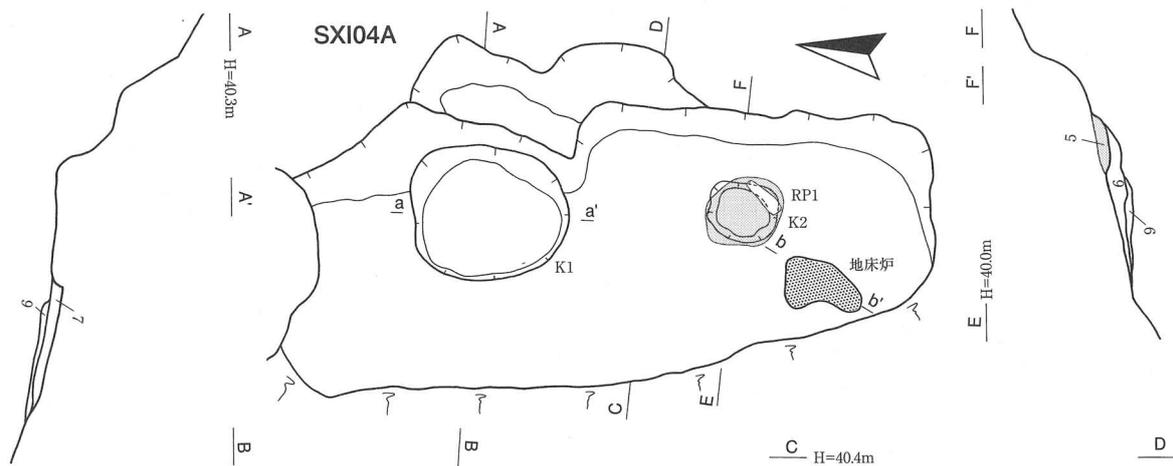
S X I 04 A～C 工房跡 (第79図、遺物図版13・62、写真図版57～59・219・250)

E区緑7区の中央部東斜面上部、ⅦC-17dグリッド杭を中心に位置し、検出面はⅣ～Ⅵ層上面だが、すべて上下の重複関係にあり、精査過程で山側に順次拡張の建替えとして確認されたものである。またS N31 A・B炉跡、S K I 25堅穴状遺構、S K I 137土坑と重複し、確認検出状況から、新旧関係は(新)S K I 137→S X I 04 A→S X I 04 B→S X I 04 C・S K I 25→S N31(古)であるが、S X I 04 CとS K I 25の新旧については切り合い部分をトレンチで破壊したため不明である。

S X I 04 Aは、東山側と西谷側が崩落によって不明瞭、北端がS K I 137によって消失しており全容は不明だが、平面形は、等高線と平行する北-南が長軸方向の略長方形基調で、中央山側には高低差約20cmで小さなテラス状の棚が取り付く。規模は、残存部分で長軸約5.5m、短軸は北側の約2.2m前後、テラス部分では長さ約1m、幅約30cmを測り、残存する床面積は約8.2㎡である。壁は外傾して立ち上がり、テラス部分では崩落によりさらに外反する。壁高は山側北東テラス部分で最大約70cmから谷側に向かい低くなる。埋土は流入と崩落による褐色系土の自然堆積である。床面は谷側に向かい緩く傾斜しているが、およそ平坦で堅締、B工房跡部分が貼床されていた。床面施設としては中央山側にK1土坑と南側にK2土坑の2基、南西谷側に地床炉1基を検出した。K1は径約110cmの略円形で、深さ約10cmの皿形、K2は径約50cm、深さ約10cmの鍋形を呈し、K2の埋土上位は砂鉄層となっており、念のため埋土を収集したが、鍛造剥片は抽出されなかった。炉は約70×40cmの不整形で、火熱により厚さ約5cmほどが赤色変化していた。

遺物は埋土中から土師器の甕形土器片約10点、K2検出面で羽口1点(30)が出土した。

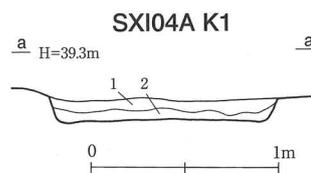
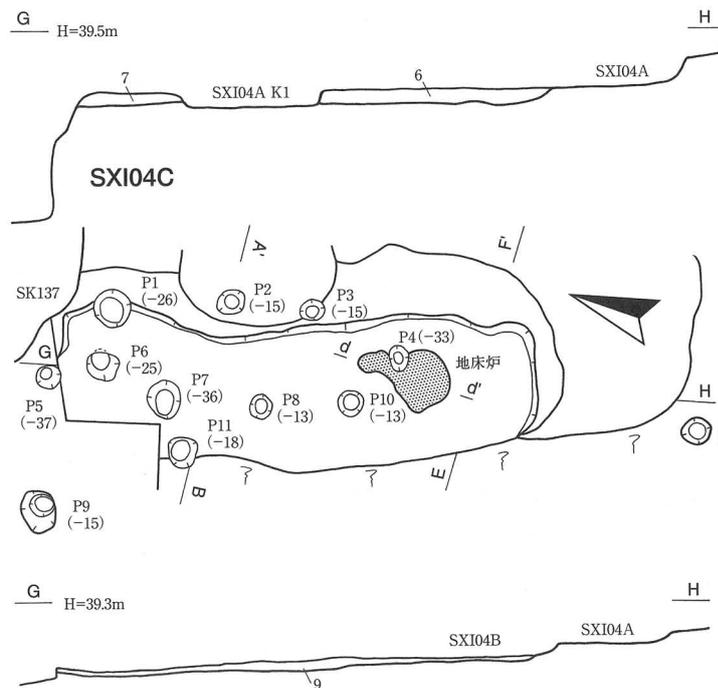
S X I 04 Bは、西谷側が崩落によって不明瞭、山側の一部がA工房跡K1に、北端がトレンチによって消失しており全容は不明だが、平面形・規模は、等高線と平行する北-南が長軸方向で、残存部分で長軸約4m、短軸約1.5m前後の略楕円形基調で、残存する床面積は約5㎡である。遺存する壁は外傾して立ち上がり、壁高は山側で最大約10cmから谷側に向かい低くなる。埋土は黄褐色土と黒色土の人為的堆積である。床面は谷側に向かい緩く傾斜しているが、およそ平坦で堅締、C工房跡部分が貼床されていた。床面施設としては、南側に径約30cmの略円形で、火熱により厚さ約3cmほどが赤色変化していた地床炉1基を検出した。



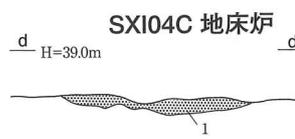
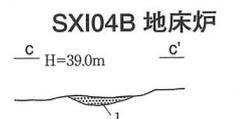
- SXI04A**
- 10YR4/6 (褐) しまり弱～中、粘性中
 - 10YR3/4 (暗褐) しまり弱～中、粘性強
 - 7.5YR4/6 (褐) しまり弱～中、粘性強
 - 10YR4/6 (褐) しまり中、粘性中～強
 - 砂鉄

- SXI04B**
- 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性やや有
 - 10YR6/8 (明黄褐) しまり・粘性有
 - 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有

- SXI04C**
- 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性有
褐色土・黄褐色土混じる



- SXI04A K1**
- 10YR4/6 (褐) しまり中～強、粘性中
 - 7.5YR5/8 (明褐) しまり中～強、粘性中～強



- SXI04A～C 地床炉**
- 5YR5/8 (明赤褐) 焼土

第79図 SXI04A～C工房跡

遺物は、埋土中から鍛冶滓が微量出土した。

S X I 04 Cは、西谷側が崩落によって不明瞭、北端がトレンチによって消失しており全容は不明だが、平面形・規模は、等高線と平行する北-南が長軸方向で、残存部分で長軸約3.8m、短軸約1.2m前後の略長方形基調で、残存する床面積は約4㎡である。遺存する壁は外傾して立ち上がり、壁高は山側で最大約5cmから谷側に向かい低くなる。埋土は黒色土の人為的堆積である。床面は概ね平坦で堅締、床面施設としては、南側に約75×50~20cmの不整形で、火熱により厚さ約6cmほどが赤色変化した地床炉1基と柱穴を12基検出したが、いずれの工房跡に伴うものか判然としない。遺物は出土しなかった。

S X I 05 工房跡 (第80図、遺物図版13・63、写真図版59・219・250・251・262・312)

E区緑7区の北部東斜面上部、ⅦB-13qグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。東山側と西谷側が崩落によって不明瞭だが、平面形・規模は、一辺約2.5m前後の隅丸方形を呈すると推定され、残存する床面積は約3.1㎡である。遺存する壁は鋭角的に外傾して立ち上がり、山側上位は崩落によりかなり外反する。壁高は山側壁で最大約100cmから谷側に向かい低くなる。埋土は11層に細分されるが、流入と崩落による黒色系土の自然堆積である。床面は概ね平坦で堅締、床面施設としては、北西壁側に径約20cmの略円形で、火熱により厚さ約1cmほどが赤色変化した地床炉1基と隣接する柱穴2基を検出した。

遺物は炉周辺の埋土下位から土師器の甕形土器片2点と坏2個体分(128・129)、羽口5個体分(31~35)と破片約20点、炉壁片少量、鍛冶滓類が約4kg出土した。

S X I 10 工房跡・S X W25鉄生産関連炉跡 (第80図、写真図版60・262・313)

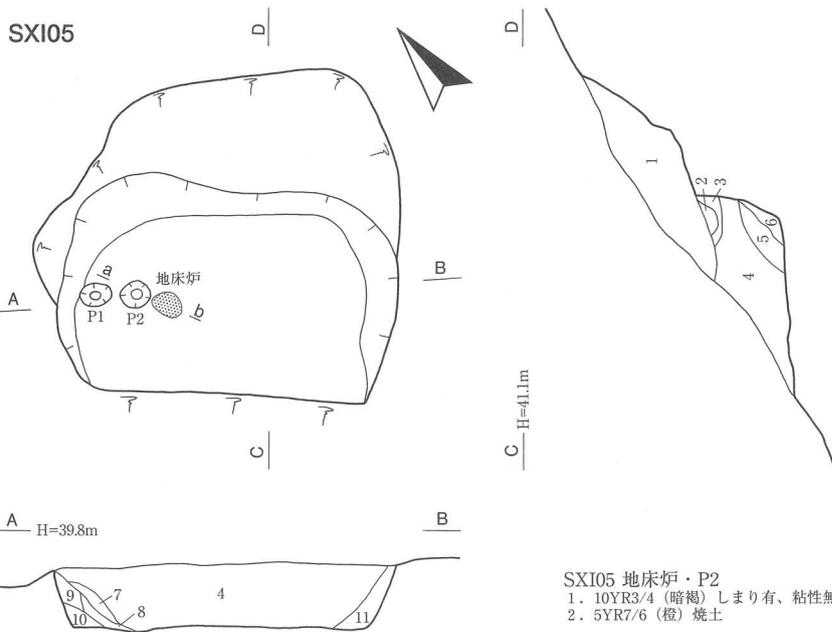
E区緑7区の北部東斜面中腹、ⅦB-13・14sグリッドに位置し、検出面はⅣ・Ⅵ層上面である。検出時には不整な楕円形基調のプランと北西谷側に溝状の張り出しを確認したものだが、精査の結果、北側部分は上位がS W63、下位溝状はS W69炭窯と判明し、新旧関係はS W63・69が本遺構より新しい。平面形は、等高線と平行する北西-南東の長軸方向で、谷側は崩落により消失しているが、山側中央が張り出す凸形を呈する。規模は、長軸約4.5m、短軸は中央部で最大約2.5m、南北両側は1.6m前後、残存する床面積は約12㎡である。壁はやや鋭角的に外傾して立ち上がり、壁高は山側北東壁で最大約60cmから谷側に向かい低くなる。埋土は、流入と崩落の繰り返しと思われるマサ土混じりの黒色系土と褐色系土の6層からなる。床面は谷側に向かい緩い傾斜となっているが、およそ平坦で堅締、床面施設としては、中央部山側の張り出し部にK1土坑1基と南西谷側にS X W25を検出した。K1の平面形・規模は170×110cmの楕円形で、深さ約25cmの鍋形を呈し、埋土は検出面に炭化物の広がり認められたが、基本的には褐色土の単層である。

S X W25は、検出時のプラン縁辺が蒸焼状態の黒色と山側の一部が被熱により中性化と赤色変化しており、また微量ながら鍛造剥片が視認できたことから鉄生産関連炉跡と判断したものである。平面形・規模は、径約40cmほどの略円形で、深さ約10cmの鍋形を呈し、埋土は基本的には黒色土の単層で、下位は炭化物層である。底面は被熱により全体的に蒸焼状態で堅く締まっていた。

遺物は、埋土から土師器の甕形土器片、羽口片、炉壁片が数点、鍛冶滓約1kgが出土した。

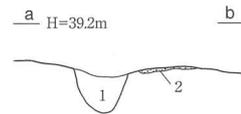
S X I 18 工房跡 (第81図、写真図版61)

E区緑7区の中央部東斜面下位、ⅦC-13cグリッドに位置し、検出面はⅢ層上面である。S X I 07と位置的に重複するが平成10年度の試掘トレンチのため新旧は不明である。平面形・規模は、谷側が崩落しているが、長軸が等高線と平行する南北にあり、長軸約5m、短軸約2.7mの歪な隅丸長方形を呈し、床面積は約10㎡を測る。壁は鋭角的に外傾して立ち上がり、壁高は山側の最大約60cmから谷側に向かい低くなる。埋土は流入と崩落によるⅢ層起源の黒色土の自然堆積である。床面はⅢ層黒色土中にあり、概ね平坦で堅締

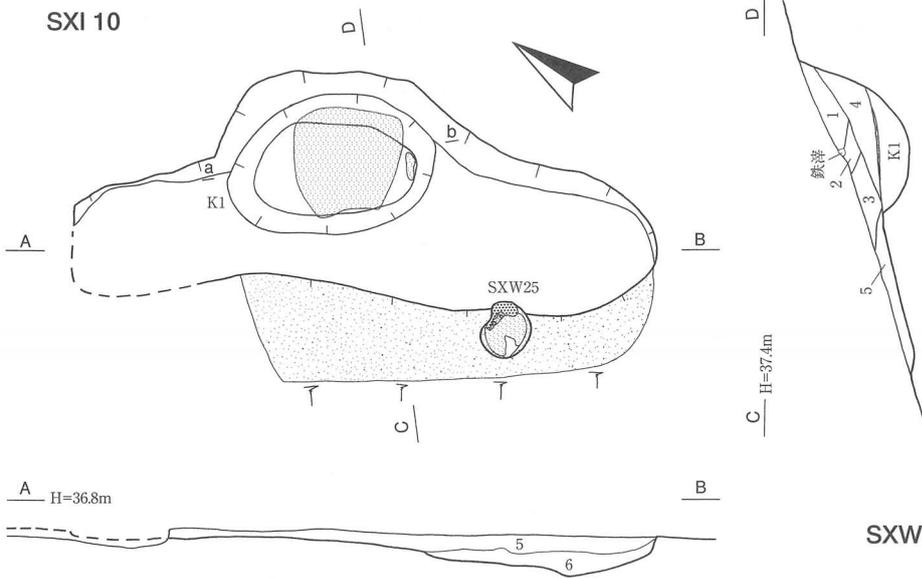
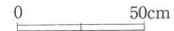


- SXI05**
- 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性やや有 東壁崩落部
 - 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性やや有
 - 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無
 - 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有 西側に炭化物・鉄滓・羽口多い
 - 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性やや有 やや砂質
 - 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、砂質
 - 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、砂質
 - 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無 明褐色土のブロック微量
 - 2.5Y7/4 (浅黄) しまりやや有、粘性無
 - 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまり・粘性無
 - 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性やや有

SXI05 地床炉・P2



- SXI05 地床炉・P2**
- 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無
 - 5YR7/6 (橙) 焼土

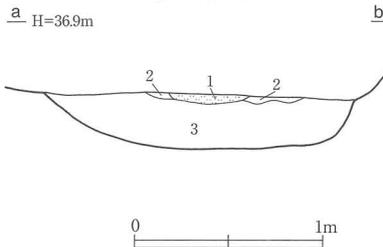


- SXW25**
- 7.5YR5/8 (明褐) しまり強、粘性無
 - 2.5Y6/8 (明黄褐) しまり強、粘性無
 - 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有 焼土粒混入
 - 10YR1.7/1 (黒) しまり有、粘性やや有 炭化物層

- SXI10**
- 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有
 - 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有 粘性有、マサ土多量
 - 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有 マサ土・炭化物少量
 - 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性やや有 マサ土少量
 - 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有
 - 10YR4/4 (褐) しまり弱・粘性有



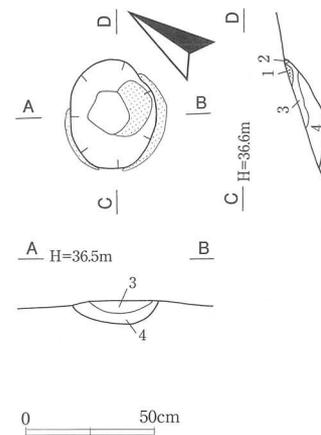
SXI10 K1



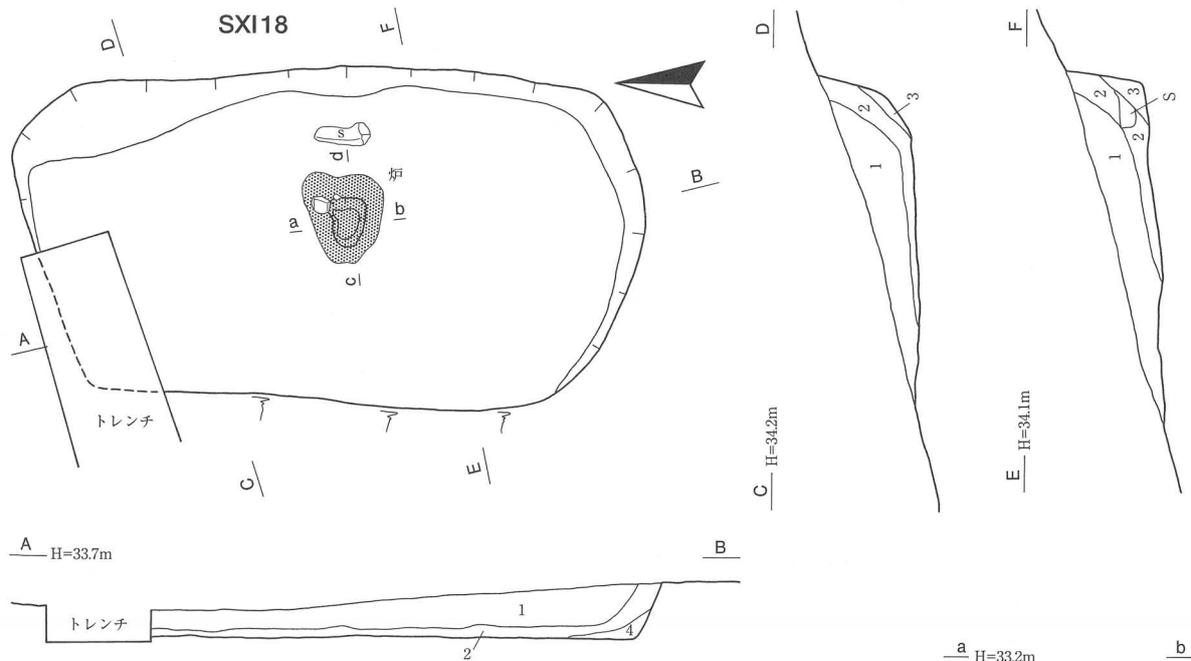
- SXI10 K1**
- 10YR1.7/1 (黒) しまり有 粘性やや有、炭化物層
 - 10YR3/4 (暗褐) しまり有 粘性やや有、焼土・炭混入
 - 10YR4/6 (褐) しまり・粘性有



SXW25



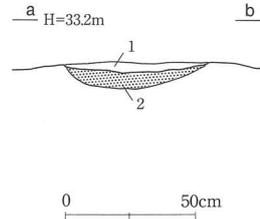
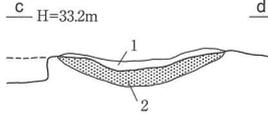
第80図 SXI05・10工房跡・SXW25鉄生産関連炉跡



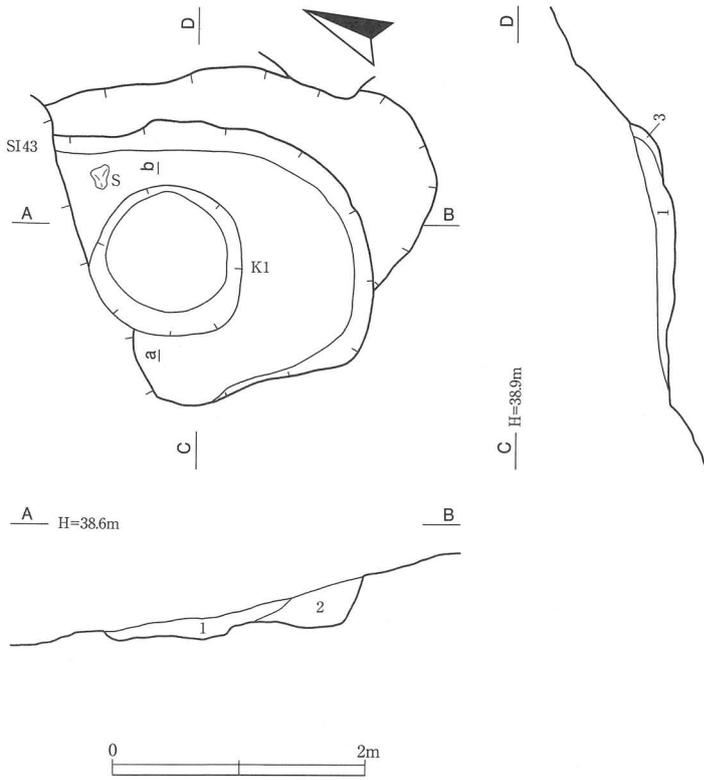
SXI18

1. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無
2. 10YR2/2 (黒褐) しまり有、粘性やや有
3. 10YR4/6 (褐) しまり強、粘性有
4. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有

SXI18 炉



SKI25



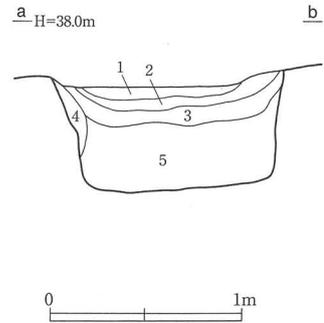
SXI18 炉

1. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性有
2. 5YR4/8 (赤褐) 焼土

SKI25

1. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有
2. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有
3. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性やや有

SKI25 K1



SKI25 K1

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり中、粘性無、砂質
2. 10YR3/4 (暗褐) しまり中、粘性弱、炭化物少量・少礫混入
3. 10YR4/6 (褐) しまり中、粘性弱、炭化物少量・少礫混入
4. 10YR4/4 (褐) しまり中、粘性弱、少礫混入
5. 7.5YR4/6 (褐) しまり中、粘性弱、少礫多く混入

第81図 SXI18工房跡・SKI25竪穴状遺構

であった。床面施設としては、中央に40×25cmほどの略楕円形で、深さ約5cmと浅い掘り込みの炉跡1基が検出され、周囲70×50cmの範囲が火熱により厚さ約7cmほどに赤色変化していた。

遺物は埋土から土師器の坏形土器片数点、羽口片1点、鍛冶滓が少量出土した。

S K I 25 竖穴状遺構（第81図、遺物図版14、写真図版61・219）

E区緑7区の中央部東斜面上部、ⅦC-16cグリッドに位置し、検出面はⅣ・Ⅵ層上面である。SN31、SI43と重複するが、前述のとおりSI43の精査時に掘り上げたことと切り合い部分をトレンチで破壊したため新旧関係は不明である。平面形・規模は、北側がSI43との重複で不明だが、残存部から等高線と平行する南北の長軸方向で、長軸2.5m以上、短軸約2.2m前後の楕円形を呈すると推定され、残存する床面積は約3.5㎡である。壁は外傾して立ち上がり、山側では崩落によりかなり外反し、壁高は山側の最大約60cmから谷側に向かい低くなる。埋土は流入と崩落による黒色土と褐色土の自然堆積である。床面は概ね平坦で堅締、床面施設としては、中央に径約120cmの略円形で、深さ約70cmのK1土坑が1基検出され、埋土には多量の礫が含まれた。

遺物は埋土下位から、土師器の甕形土器片少量、羽口片1点、鍛冶滓が微量出土した。

S X W34・66 鉄生産関連炉跡（第82図、写真図版62・314）

E区緑8区の北部東斜面上位、ⅦB-18・19rグリッドに位置し、本来は工房跡に伴うものと思われるが、重機道によって掘削されたⅥ層中とSI91Aの埋土上面で検出した。当初は、共に鍛造剥片が視認された焼土を切る形のSXW34と、これに隣接するK1小土坑を検出したものだが、SXW66とK2土坑はSI91Aの精査過程で確認したもので、埋土上位がSI91と類似する褐色土であったためSXW66の西半分とK2土坑の北側を掘削してしまった。いずれも鍛造剥片が視認され、配置等を含めた状況から鍛練鍛冶炉跡と付属する土坑と判断したものである。切り合いと検出状況から新旧関係は(新)SW87→SXW34→SXW66→SI91(古)と考えられる。

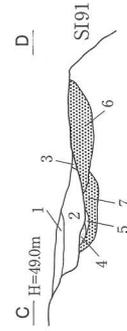
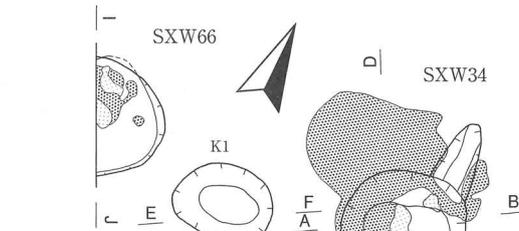
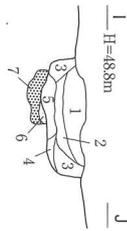
S X W34は、平面形・規模は径約50cmの略円形を呈し、北側には長さ約25cm、幅約15cm、深さ約3cmの炉跡に向かって緩い下り勾配の溝跡が取り付く。断面形は深さ約10cmの鍋形を呈し、埋土は基本的には鍛造剥片と炭化物を含む自然堆積の黒色土の単層である。溝跡部分を除く北側は火熱により約50cmほどの広がり、厚さ約10cmほどが強く赤色変化し、炉内上位は全体的に火熱により弱く赤色変化しており、底面は中央が還元、周囲も黒く蒸焼状態となって堅く締まっていた。K1小土坑は炉跡の西側に隣接し、平面形・規模は約40×30cmの楕円形、断面形は深さ15cmの丸底鍋形を呈し、埋土は炉跡と同様に鍛造剥片を多量に含む。K2土坑はSXW66及びK1の南側に隣接し、残存部から平面形・規模は径約70cm前後の略円形と推定され、断面形は深さ約15cmの丸底鍋形を呈し、埋土は上位褐色土と下位の鍛造剥片と径1cm以下のゴツゴツした鍛冶滓粒を含む黒色土に大別される。

S X W66は、残存部から平面形・規模は径約45cmの略円形と推定され、断面形は深さ約15cmの鍋形を呈し、埋土は鍛造剥片と炭化物を含む黒色系土6層からなる自然堆積である。底面の北西側は火熱により弱く赤色変化しており、部分的に黒く蒸焼状態となって堅く締まっていた。

検出状況及び他の鍛練鍛冶炉施設との対比から、SXW34北側の溝跡が羽口の装着痕、K1小土坑が付属する鉄砧石の設置穴、K2土坑がSXW66に付属する鉄砧石の設置穴と推定される。

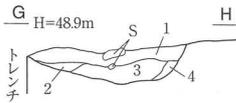
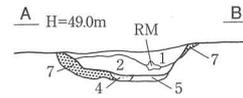
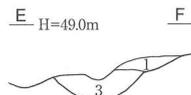
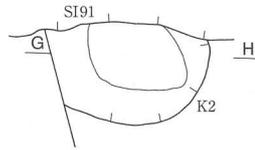
遺物は、土師器の甕形土器片約10点と羽口片2点がSXW34埋土から、SXW34・66、K1・2土坑の各々の埋土及び底面から鍛冶滓が約0.2～0.6kgと多量の鍛造剥片が出土した。

SXW34・66



SXW66

1. 10YR2/2 (黒褐) しまり有
粘性やや有、炭化物微量
2. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有
粘性有、黄褐色土ブロック少量
3. 10YR4/4 (褐) しまり有
粘性無、砂質
4. 10YR2/2 (黒褐) しまり有
粘性やや有、炭化物微量
5. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有
炭化物少量
6. 7.5YR2/1 (黒) しまり極めて有
粘性無、炭化物多量、還元蒸焼
7. 7.5YR3/2 (黒褐) しまり極めて有
粘性無、弱い焼土



SXW34 K1

1. 10YR2/3 (黒褐) しまり極めて有
粘性有、炭化物微量
2. 10YR1.7/1 (黒) しまり・粘性有
炭化物微量、鍛造剥片少量

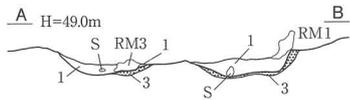
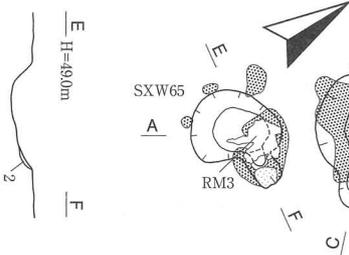
SXW34 K2

1. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性有
炭化物を微量含む
2. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性有
3. 10YR3/2 (黒褐) しまり極めて有、粘性有
炭化物・小鍛冶滓少量、鍛造剥片微量
4. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有
炭化物微量

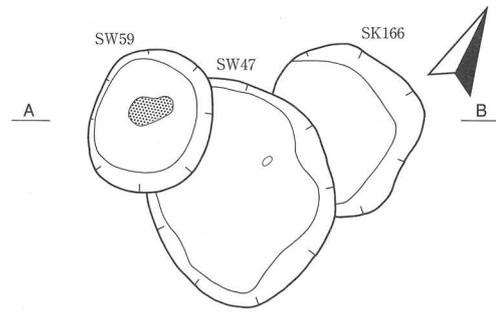
SXW34

1. 10YR2/3 (黒褐) しまり極めて有、粘性有
炭化物微量
2. 10YR1.7/1 (黒) しまり・粘性有
炭化物微量
3. 7.5YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有
焼土粒少量
4. 10YR4/2 (灰黄褐) 還元部
5. 10YR3/1 (黒褐) 還元蒸焼
6. 5YR4/8 (赤褐) 強い焼土
7. 7.5YR4/6 (褐) 弱い焼土

SXW64・65



SW47・59・SK166



SXW64・65

1. 10YR1.7/1 (黒) しまり・粘性有、炭化物・鍛冶滓少量
2. 10YR4/1 (褐灰) 還元焼土
3. 5YR3/3 (暗赤褐) 弱い焼土

0 50cm

0 1m

第82図 SXW34・64・65・66鉄生産関連炉・SW47・59炭窯・SK166土坑

S X W64・65鉄生産関連炉跡（第82図、写真図版62・314）

E区緑8区の北部東斜面上位、ⅦB-18rグリッドに位置し、本来は工房跡に伴うものと思われるが、重機道によって掘削されたS X I 27の埋土上面、S W 86の底面で検出した。当初は、縁辺が弱く赤色変化した隣接する二つの略円形プランを確認したもので、両遺構とも黒色埋土中に鍛冶滓が認められたことから埋土を収集したところ、鍛造剥片が微量ながら採取できたことと炉跡の状態から鍛練鍛冶炉跡と判断したものである。付属する施設等は検出できず、両遺構の新旧も不明であるが、重複関係は（新）S W 86→S X W 64・65→S X I 27（古）である。

S X W 64は、平面形・規模は径約45cmの略円形を呈し、南東側には長さ約10cm、幅約13cm、深さ約3cmの炉底面に向かって緩い下り勾配の張り出しが取り付く。断面形は深さ約18cmの鍋形を呈し、埋土は炭化物と鍛冶滓を少量含む黒色土の単層である。炉内は全体的に火熱により弱く赤色変化しており、張り出しの下位は一部還元状態となっていた。

S X W 65は、平面形・規模は径約35cmの略円形を呈し、東側には長さ・幅共約10cm、深さ約3cmの炉底面に向かって緩い下り勾配の張り出しが取り付く。断面形は深さ約10cmの鍋形を呈し、埋土は炭化物と鍛冶滓を少量含む黒色土の単層である。炉内は主に東側が火熱により弱く赤色変化しており、張り出し部分は一部還元状態となっていた。

他の鍛練鍛冶炉との状況対比から、各々の張り出しが羽口の装着痕と考えられる。

遺物は各々の埋土から椀形滓各1点を含む鍛冶滓類が約1kgと鍛造剥片が微量出土した。（小山内）

S W 47・S W 59炭窯、S K 166土坑（第82図、写真図版63）

E区緑7区東側の斜面中腹、ⅦC-15bに位置し、検出面はⅥ層である。検出状況としては、黒褐色土の不整な楕円形の広がり認められ、埋土上面に炭化物も見えたため、S W 47の1基と考え精査をした。その結果、調査員の観察不足から、当初は検出プランに重複関係が認められなかったのが、精査を進める中でS W 47の北側に別の暗褐色の広がり認められ、S W 59を検出した。続いて、S W 47のクリーニング中に西側に黒褐色の広がり認められ、S K 166を検出したものである。S K 166については当初埋土上面に炭化物粒が疎らに確認できたことから、炭窯と考えていたが、炭化物粒の出土が埋土上面のみからであり、底部に焼土が認められないことから土坑と判断したものである。結果として3基の重複があったが、以上のような検出状況から精査に及んだことにより、新旧関係については不明となってしまった。

S W 47については、掘り上がりから、平面形は略楕円形を呈すると推測される。規模は開口部約110×105cm、底部約100×74cmと推測される。壁は斜面上方である東側は緩やかに立ち上がり、壁高は24cmを測る。斜面下方である西側は、前述した状況により遺存していない。埋土は下層に炭化物層が認められる。底面は堅く締まり、斜面下方に向かってやや傾斜している。以上のことから炭窯と判断した。遺物は、埋土下位から出土した土師器片1点のみであった。また、最下層の炭化物は、鑑定の結果、クリであった。

S W 59については、掘り上がりから平面形は楕円形を呈し、規模は開口部80×64cm、底部60×52cmを測る。壁は斜面上方である東側は緩やかに立ち上がり、壁高は残存する部分で12cmを測る。斜面下方である西側は掘り過ぎのため不明となってしまった。埋土は下層に炭化物粒が多く混じる。底面はやや堅く締まりがあり、斜面下方に向かって傾斜している。底面には範囲20×10cm、厚さ1cm以下の焼土が認められた。以上のことから炭窯と判断した。出土遺物はない。

S K 166については、残存部から推測される平面形は、略楕円形を呈し、規模は開口部約90×80cm、底部約75×60cmと推測される。壁は斜面上方である東側は緩やかに立ち上がり、壁高は約20cmを測る。斜面下

方である西側は、重複関係を掴めないまま精査を進めたため遺存していない。底面は堅く締まり、斜面下方に向かってやや傾斜している。出土遺物はない。(本多)

SW63炭窯 (第83図、写真図版63)

E区緑7区の北部東斜面中腹、ⅦB-13sグリッドに位置し、検出面はⅣ・Ⅵ層上面である。検出時にはSXI10の一部と見ていたものだが、精査の結果、焼土は確認できなかったものの、埋土下位に炭化物を比較的多く含むことと緑7区の炭窯と形態が類似することから炭窯と判断した。新旧関係はSXI10より本遺構が新しい。平面形は、谷側が崩落により、南側がSXI10として掘削したため消失したが、残存部からはおよそ楕円形と推測され、長軸方向は等高線と平行する北西-南東にある。規模は残存する部分で長軸約200cm、短軸約120cmを測り、壁は外傾して立ち上がり、壁高は山側北壁の最大約40cmから谷側に向かい低くなる。埋土は黒色系土の自然堆積で、下位には残材の炭化物を多く含む。底面は谷側に緩く傾斜し、赤色変化した焼土は認められなかった。遺物は出土しなかったが、炭化物は分析によりクリと判明した。

SW69炭窯 (第83図)

E区緑7区の北部東斜面中腹、ⅦB-13sグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。検出時にはSXI10の一部と見たものだが、焼土は確認できなかったものの、埋土に炭化物をやや含むことと形態から炭窯と判断した。SXI10より本遺構が新しい。平面形・規模は、谷側が崩落により消失しているが、長軸方向が等高線と平行する北西-南東で、長さ約280cm、幅約30cmが残る。壁は外傾して立ち上がり、壁高は山側北壁の最大約12cmから谷側に向かい低くなる。埋土は炭化物を含む黒色土の単層である。残存する底面は平坦で、赤色変化した焼土は認められず、遺物は出土しなかった。

SW74炭窯・SK155土坑 (第83図、写真図版63)

E区緑7区の北部東斜面中腹、ⅦB-13r・sグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。当初SXI06の崩落と見ていたものだが、精査の結果、SK155と焼土は確認できなかったものの、埋土に焼土と炭化物をやや含むことと緑7区の他の炭窯と形態が類似することからSW74を一応炭窯と判断した。SXI06より本遺構が新しい。

SW74の平面形・規模は、径約70cmの略円形で、壁は鋭角的に外傾して立ち上がり、壁高は山側北壁の最大約30cmから谷側の約5cmと低くなる。埋土は黒色系土の自然堆積で、下位には残材の炭化物を多く含む。底面は山側は浅く窪み、全体的には谷側に緩く傾斜し、赤色変化した焼土は認められなかった。

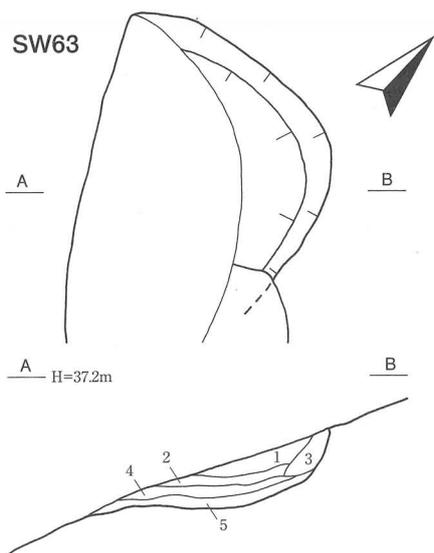
SK155の平面形・規模は、西側がSXI06によって消失しているが、残存部から径約70cmの略円形を呈すると推測され、壁は外傾して立ち上がり、壁高は山側北壁の最大約7cmから谷側に向かい低くなる。埋土は黒色土の単層である。両遺構の山側が長さ約40cm、幅約15cm、深さ約3cmの溝で連結しているが、雨裂と思われる。遺物は出土しなかった。

SW85炭窯 (第83図、写真図版63)

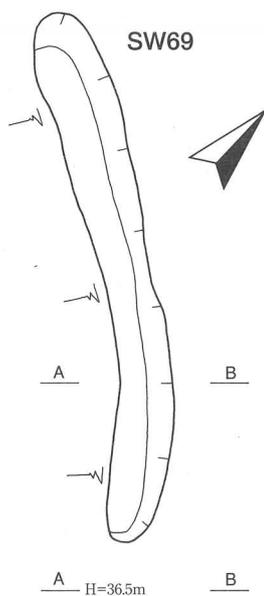
E区緑8区の北部東斜面上位、ⅦB-19r・sグリッドに位置し、重機道によって掘削されたSXI27の埋土上面で炭化物の広がりとして検出したもので、本遺構が新しい。平面形・規模は、長軸方向が等高線と平行する北西-南東で、長軸約160cm、短軸約100cmの楕円形で、壁は外傾して立ち上がり、壁高は約10cmが残る。埋土は基本的には残材の炭化物の単層である。残存する底面はおおよそ平坦で、赤色変化した焼土は認められなかった。遺物は土師器の甕形土器片数点が出土した。

SW86炭窯 (第83図、写真図版63)

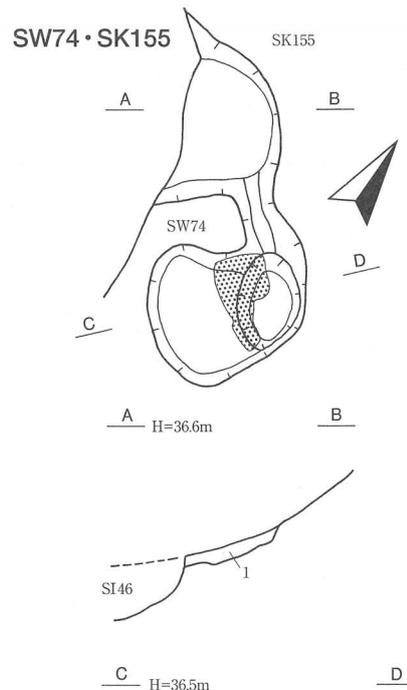
E区緑8区の北部東斜面上位、ⅦB-18・19rグリッドに位置し、重機道によって掘削されたSXI27の



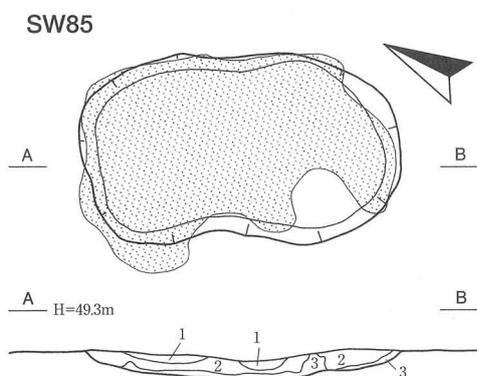
- SW63
1. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有
 2. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有
 3. 10YR3/4 (暗褐) しまり無、粘性有
 4. 10YR1.7/1 (黒) しまりやや有、粘性有
 5. 10YR5/8 (黄褐) しまりやや有、粘性有



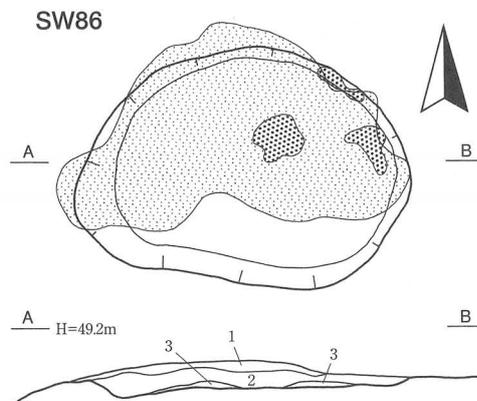
- SW69
1. 10YR2/2 (黒褐) しまり有、粘性やや有



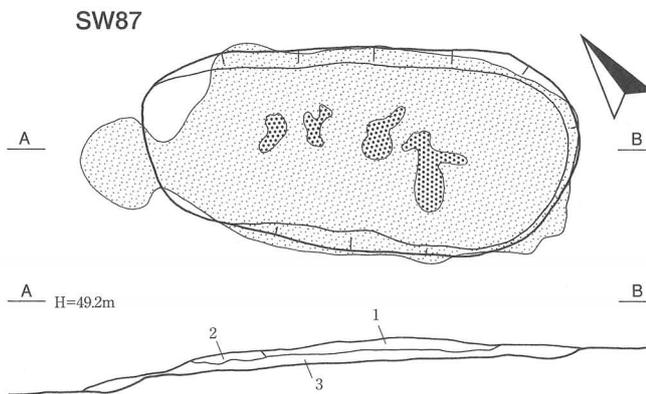
- SW74
1. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性やや有
 2. 10YR2/1 (黒) しまり・粘性やや有
 3. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性やや有
 4. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性やや有
- SK155
1. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有



- SW85
1. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性無、炭化物少量
 2. 10YR2/1 (黒) しまり極めて有、粘性やや有、炭化物層
 3. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性やや有、炭化物少量
 4. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、炭化物微量



- SW86
1. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性無、炭化物少量
 2. 10YR2/1 (黒) しまり極めて有、粘性やや有、炭化物層
 3. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性やや有、炭化物少量



- SW87
1. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性無、砂質、炭化物少量
 2. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性有、地山ブロック少量
 3. 10YR2/1 (黒) しまり極めて有、粘性やや有、炭化物層



第83図 SW63・69・74・85・86・87炭窯・SK155土坑

埋土上面で炭化物の広がりとして検出した。S X W64・65を底面で検出し、新旧関係は(新)本遺構→S X W64・65→S X I 27(古)である。平面形・規模は、長軸方向が東西の長軸約180cm、短軸約120cmの楕円形で、壁は外傾して立ち上がり、壁高は約10cmが残る。埋土は基本的には残材の炭化物の単層である。残存する底面はおおよそ平坦で、一部火熱による赤色変化した焼土が認められた。

遺物は埋土下位から土師器の甕形土器片約10点とS X W64・65に伴うものかもしれない鍛冶滓類約1.3kgが出土した。

S W87炭窯 (第83図、写真図版63)

E区緑8区の北部東斜面上位、ⅦB-19r・sグリッドに位置し、重機道によって掘削されたS I 91埋土上面及びⅥ層中で炭化物の広がりとして検出したもので、本遺構が新しい。平面形・規模は、長軸方向が等高線と平行する北西-南東で、長軸約280cm、短軸約100cmの楕円形で、壁は外傾して立ち上がり、壁高は約5cmが残る。埋土は基本的には残材の炭化物の単層である。残存する底面はおおよそ平坦で、部分的に火熱による赤色変化した焼土が認められた。遺物は出土しなかった。(小山内)

S K 100土坑 (第84図、写真図版64)

E区緑7区東側斜面の中腹、ⅦC-16a・17aグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。本遺構は急斜面に位置するため、斜面下方は自然崩落により消失している。遺存する平面形は略方形を呈し、規模は開口部約120×105cm、底部約90×75cmが遺存する。壁は斜面上方では鋭角的に立ち上がり、壁高約70cmを測るが、斜面下方は遺存しない。埋土は5層に細分されるが、基本的には斜面上方からの流入土と壁の崩落土の自然堆積と思われる。底面は平坦で極めて堅く締まる。また遺構周辺からは、本遺構に伴うと思われる柱穴が4基確認できた。遺物は出土しなかった。(小林)

S K 109土坑 (第84図、遺物図版15、写真図版64・219)

E区緑7区東側の斜面中腹、ⅦB-15tに位置し、検出面はⅣ層である。本遺構はS X I 02との重複が見られる。検出状況として、S X I 02精査時にS X I 02の壁と考えて掘り進めていたところ、壁が円形に巡る様相を示し、更ににぶい黄褐色土の円形の広がりを確認した。平面形はほぼ円形を呈し、規模は開口部約160~180cm、底部約180~190cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、東側は上部で内傾する。壁高は東側で150cm、西側で75cmを測る。埋土は12層に分層され、褐色土と黄褐色土の2層に大別される。埋土上位は、斜面上部からの流れ込みによる褐色土の自然堆積(S X I 02埋土)と思われるが、埋土中~下位は、斜面下方である西側からの堆積の様相を示し、にぶい黄褐色のしまりのある土が見られることから、S X I 02を作る際に整地する目的で、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。以上のことから、S K 109はS X I 02よりも旧いと推測される。底面は堅く締まり、おおむね平坦である。

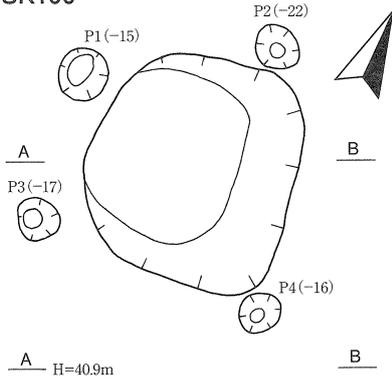
遺物は土師器の甕形土器の底部と口縁部片が埋土下位から2点(156・158)出土している。また、埋土上位から土師器の甕形土器の底部と口縁部片が2点(155・157)出土しているが、S X I 02に伴う可能性が考えられる。(本多)

S K 119土坑 (第84図、写真図版64)

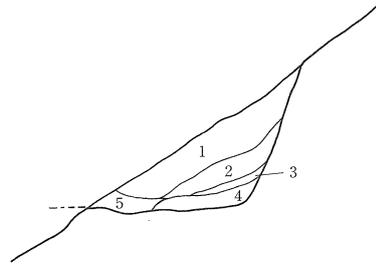
E区緑7区の北部東斜面中腹、ⅦB-12rグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。平面形・規模は略楕円形を呈し、開口部約170×130cm前後、底部約135×105cm前後を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は東の山側で最大約100cmから東側の約35cmと谷側に向かい低くなる。埋土は10層に細分されるが、上位の褐色系土と下位の黒色土がレンズ状の自然堆積である。底面は概ね平坦である。

遺物は土師器の甕形土器片少量と坏形土器片2点、羽口片4点、鍛冶滓少量が出土した。(小山内)

SK100



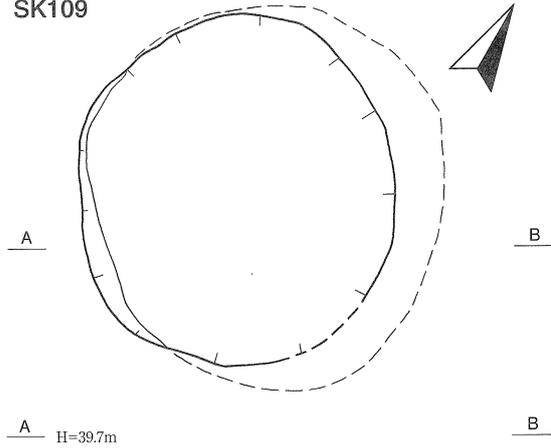
A H=40.9m



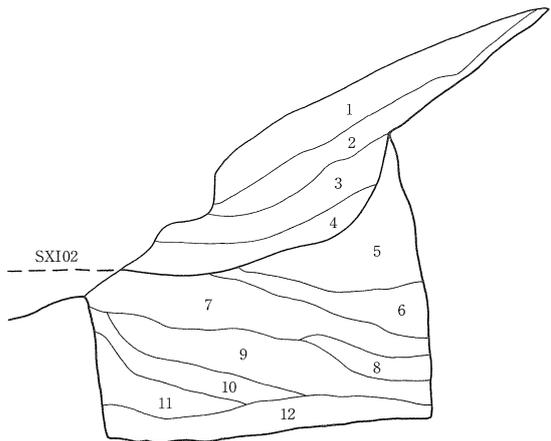
SK100

1. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有
2. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性やや有
3. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性やや有
4. 10YR2/1 (黒) しまり堅、粘性やや有
5. 10YR2/2 (黒褐) しまり堅、粘性やや有

SK109



A H=39.7m

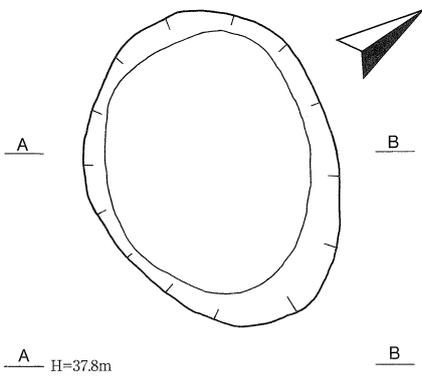


SK109

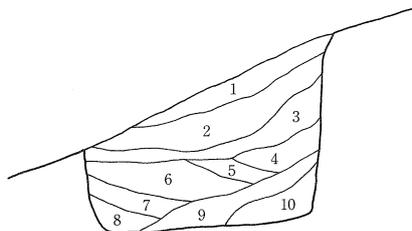
1. 10YR4/4 (褐) しまり中、粘性弱
2. 10YR4/4 (褐) しまり中、粘性無
3. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり中～強、粘性なし
4. 10YR4/6 (褐) しまり中、粘性弱
5. 10YR4/6 (褐) しまり中～強、粘性無
6. 10YR4/4 (褐) しまり中～強、粘性弱
7. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり中～強、粘性弱、マサ土少量
8. 10YR4/4 (褐) しまり中、粘性弱
9. 10YR4/4 (褐) しまり中～強、粘性弱、マサ土多量
10. 10YR4/6 (褐) しまり中、粘性中、マサ土少量
11. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり中、粘性弱
12. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり中～強、粘性無

SX102埋土

SK119

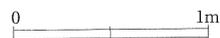


A H=37.8m



SK119

1. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性弱
2. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり弱、粘性中
3. 10YR4/6 (褐) しまり中、粘性弱～中
4. 10YR4/4 (褐) しまり中～強、粘性中
5. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり強、粘性中
6. 10YR4/4 (褐) しまり中～強、粘性中、炭化物粒少量
7. 10YR3/4 (暗褐) しまり中、粘性弱
8. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり中、粘性弱
9. 10YR3/4 (暗褐) しまり中、粘性中～強
10. 10YR4/4 (褐) しまり中、粘性中～強



第84図 SK100・109・119土坑

S K 131土坑 (第85図)

E区緑7区東側の斜面中腹、ⅦB-15tに位置し、検出面はⅥ層である。本遺構はS X I 02との重複が見られ、S X I 02を精査中に床面で楕円形の暗褐色土の広がりとして確認したものであり、S X I 02よりも古い。また、S X I 02の平面形から西側に張り出すように位置していることから、S X I 02に伴う可能性は低いと考えられる。平面形はほぼ楕円形を呈し、規模は開口部約220×160cm、底部約180×115cmを測る。長軸方向は等高線に直交する東-西方向にある。壁は斜面上方である東側では鋭角的に立ち上がり、上部で外傾する。斜面下方である西側では、鋭角的に立ち上がる。壁高は東側が57cm、西側が27cmを測る。埋土は4層に分層される。4層の黄褐色土の上に暗褐色土と褐色土が斜面上部から流れ込んでいる様相から自然堆積と思われる。底面は堅く締まり、おおむね平坦である。出土遺物はない。

S K 135土坑 (第85図、写真図版64)

E区緑7区東側の斜面中腹、ⅦC-15aに位置する。検出面はⅥ層である。本遺構はS K 164と重複し、西側の一部を切られる。検出状況として、S K 164を精査後、斜面上方の東側において、S K 164に切られる暗褐色土の広がりとして確認したことから、S K 135はS K 164よりも古いと思われる。残存部から推測される平面形は、不整な楕円形を呈し、開口部は推定約110×80~100cm、底部約70×43cmである。長軸方向は等高線に直交する東-西方向にある。壁は緩やかに立ち上がり、上部で外傾する。壁高は約25cmである。埋土は2層に分層される。にぶい黄褐色土の上に斜面上方から流れ込んだ褐色土が堆積していることから、自然堆積と思われる。底面は堅く締まり、おおむね平坦であるが、底面の一部が木根による攪乱を受けている。出土遺物はない。

S K 136土坑 (第85図)

E区緑7区東側の斜面中腹、ⅦC-14aに位置し、検出面はⅥ層である。本遺構は、S K 165と重複し、東側壁の上部を切られる。検出状況として、S K 165を精査中に斜面下方の西側底面において、S K 165に切られる暗褐色土の広がりとして確認した。残存部から推測される平面形は、不整形を呈し、規模は開口部約120~125cm、底部約80~86cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、西側は木根の攪乱により遺存しない。壁高は南側が25cm、北側が14cmを測る。埋土は3層に分層される。斜面上部から流入した暗褐色と褐色の土が堆積していることから自然堆積と思われる。底面は堅く締まり、おおむね平坦であるが、底面の一部が木根による攪乱を受けている。出土遺物はない。(本多)

S K 137土坑 (第85図、遺物図版15、写真図版64・220)

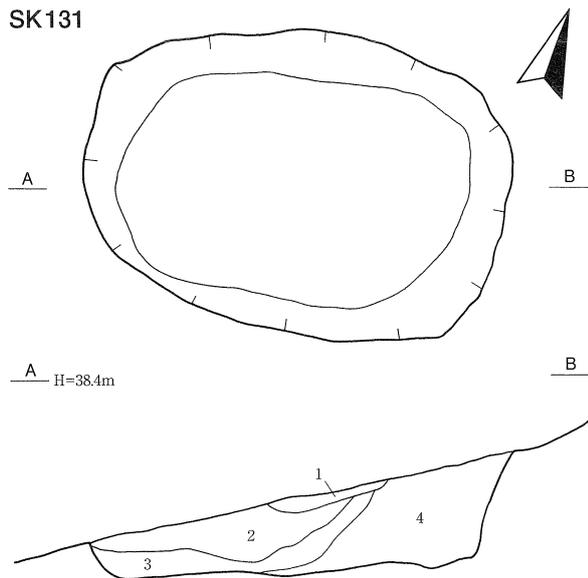
E区緑7区の中央部東斜面上部、ⅦC-17cグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。S X I 04Aと重複し、本遺構が新しい。平面形・規模は、山側開口部が崩落しているが、開口部径約130cm、底部径約130cmの円形で、断面形は深さ約100cmのフラスコ状を呈する。埋土は9層に細分される褐色系土と黒色土が交互のレンズ状の自然堆積である。底面は概ね平坦である。

遺物は土師器の甕形土器片数点と坏形土器片及び羽口片が各1点、鍛冶滓が微量出土した。

S K 138土坑 (第85図)

E区緑7区の中央部東斜面上部、ⅦC-16bグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。当初S I 43の崩落と見たものだが、精査の結果土坑と判明したもので、本遺構が新しい。平面形・規模は、西側をS I 43の掘削で消失したが、残存部から開口部径約130cm前後、底部径約75cm前後の略円形と推測され、壁は外傾して立ち上がり、壁高は山側の最大約70cmから谷側に向かい低くなる。埋土は掘削したため不明、底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

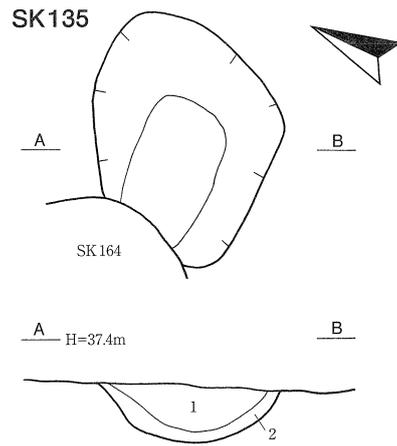
SK131



SK131

1. 10YR3/3 (暗褐) しまり中、粘性中
2. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性中
3. 10YR5/6 (黄褐) しまり中、粘性中～強
4. 10YR5/8 (黄褐) しまり強、粘性中、マサ土多量

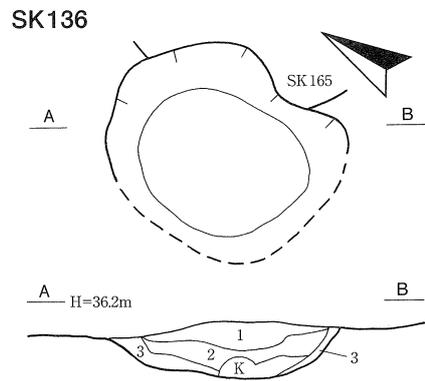
SK135



SK135

1. 10YR4/4 (褐) しまり中～強、粘性中
2. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり中～強、粘性弱、マサ土多量

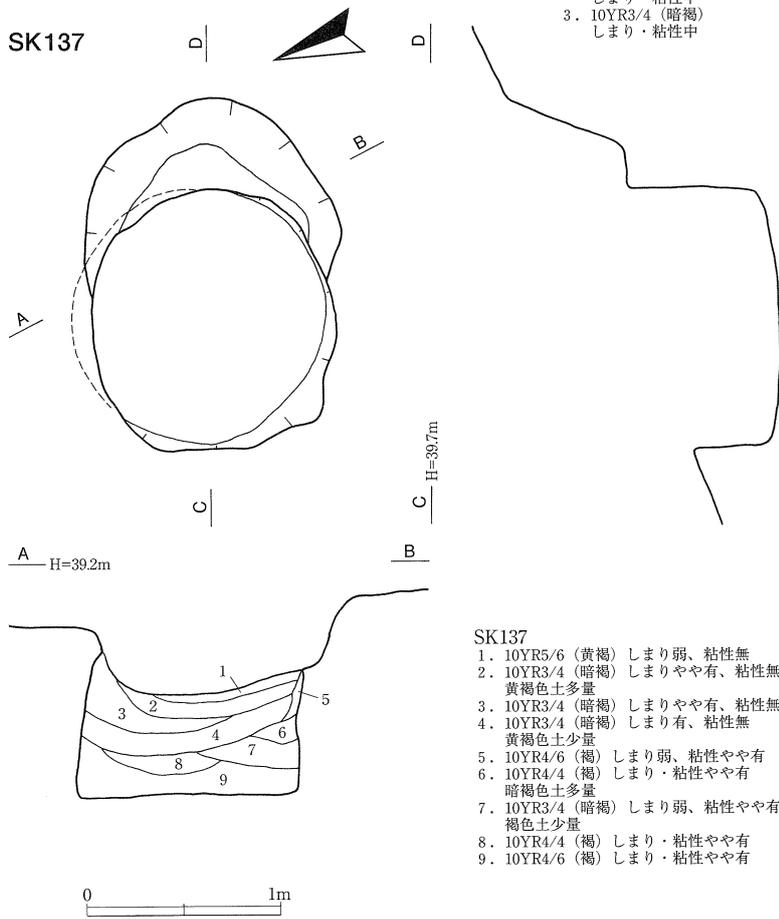
SK136



SK136

1. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性中
2. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性中
3. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性中

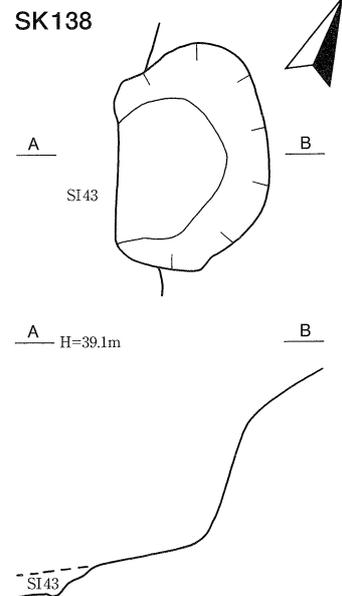
SK137



SK137

1. 10YR5/6 (黄褐) しまり弱、粘性無
2. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性無
黄褐色土多量
3. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性無
4. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無
黄褐色土少量
5. 10YR4/6 (褐) しまり弱、粘性やや有
6. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性やや有
暗褐色土多量
7. 10YR3/4 (暗褐) しまり弱、粘性やや有
褐色土少量
8. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性やや有
9. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性やや有

SK138



第85図 SK131・135・136・137・138土坑

S K 142土坑 (第86図、遺物図版15、写真図版64・220・325)

E区緑7区の北部東斜面中腹、ⅦB-13sグリッドに位置し、検出面はV・VI層上面である。平面形・規模は略楕円形を呈し、開口部約220×170cm前後、底部約140×115cm前後を測る。壁は下位は外傾し、山側上位はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は東の山側で最大約90cmから西側の約30cmと谷側に向かい低くなる。埋土は上位の褐色系土と下位の黄褐色系土に大別される人為的堆積である。底面は概ね平坦である。

遺物は埋土から須恵器の甕形土器片3点、羽口片9点、鍛冶滓約2kgと検出面で二枚貝が微量出土した。

S K 146土坑 (第86図、写真図版64)

E区緑7区の北部東斜面中腹、ⅦB-11r・sグリッドに位置し、検出面はVI層上面である。平面形・規模は略楕円形を呈し、開口部約200×180cm前後、底部約170×140cm前後を測る。壁は下位は鋭角的に外傾し、山側上位はさらに外反する。壁高は東の山側で最大約80cmから西側の約30cmと谷側に向かい低くなる。埋土は10層に細分される黄褐色系土と黒色土が交互のレンズ状の自然堆積である。底面は概ね平坦だが、中央に70×50cm、深さ約15cmの浅い鍋形のピットがある。

遺物は埋土から土師器の甕形土器片3点、羽口片1点が出土した。

S K 148土坑 (第86図、写真図版65)

E区緑7区の南部東斜面中腹、ⅦC-15dグリッドに位置し、検出面はⅢ・Ⅳ層上面である。平面形・規模は、開口部径約110cm、底部径約80cmの略円形で、断面形は深さ約70cmの筒状を呈する。埋土はⅢ層起源の黒色系土がレンズ状の自然堆積である。底面は概ね平坦である。

遺物は埋土から土師器の甕形土器片が1点のみ出土した。

S K 149土坑 (第86図、遺物図版15、写真図版65・220)

E区緑7区の南部東斜面中腹、ⅦC-15・16eグリッドに位置し、検出面はⅢ・Ⅳ層上面である。位置的にS I 61と重複すると思われるが、直接の切り合いがなく新旧は不明である。平面形・規模は、開口部径約100cm、底部径約90cmの略円形で、断面形は深さ約75cmの筒状を呈する。埋土はⅢ層起源の黒色系土6層からなる人為的堆積である。底面はやや凹凸がある。

遺物は埋土から土師器の甕形土器片が数点のみ出土した。

S K 151土坑 (第86図、遺物図版15、写真図版65・220)

E区緑7区の北部東斜面下位、ⅦB-8・9rグリッドに位置し、検出面はⅢ・Ⅵ層上面である。平面形・規模は略楕円形を呈し、開口部約145×100cm前後、底部約115×80cm前後を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は東の山側で最大約35cmから西側の約10cmと谷側に向かい低くなる。埋土はⅢ層起源の黒色系土の自然堆積である。底面は概ね平坦である。

遺物は埋土から土師器の甕形土器底部片2点(153・154)と鍛冶滓が少量出土した。

S K 152土坑 (第87図、遺物図版15、写真図版65・220)

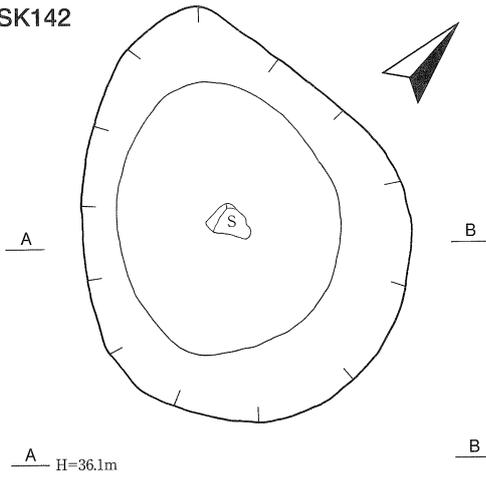
E区緑7区の北部東斜面下位、ⅦB-9sグリッドに位置し、検出面はⅢ・Ⅵ層上面である。平面形・規模は略楕円形を呈し、開口部約165×95cm前後、底部約150×85cm前後を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は東の山側で最大約45cmから西側の約10cmと谷側に向かい低くなる。埋土はⅢ層起源の黒色系土の自然堆積である。底面は概ね平坦である。

遺物は埋土から土師器の甕形土器片と坏形土器片が数点、鍛冶滓が微量出土した。

S K 153土坑 (第87図、遺物図版15、写真図版65・220)

E区緑7区の中央部東斜面上部、ⅦC-16b・cグリッドに位置し、検出面はV・Ⅵ層上面である。位置的

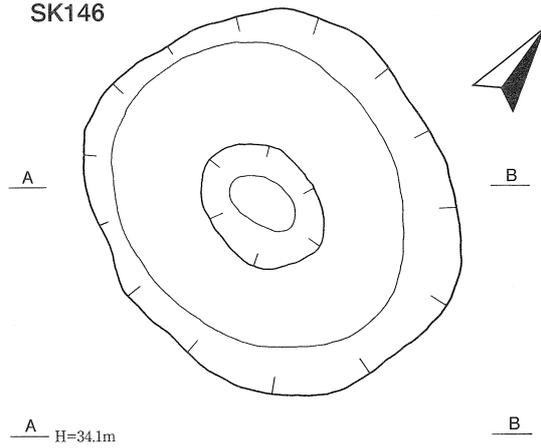
SK142



SK142

1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
2. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
4. 10YR5/6 (黄褐) しまり強、粘性有

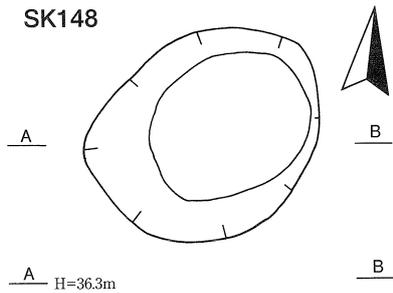
SK146



SK146

1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、砂質
2. 7.5YR5/8 (明褐) しまり強、粘性無、焼土ブロック
3. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性やや有、焼土・炭化物少量
4. 10YR2/3 (黒褐) しまり有、粘性やや有
5. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性弱
6. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり弱、粘性無、マサ土
7. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性弱、マサ土多量
8. 10YR2/3 (黒褐) しまり有、粘性やや有
9. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性弱
10. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性やや有

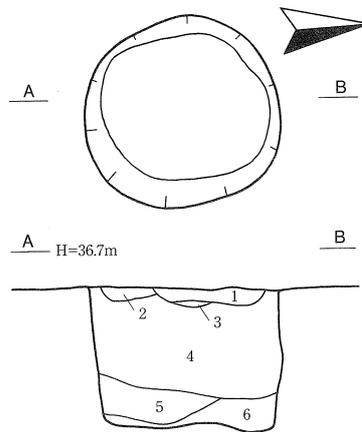
SK148



SK148

1. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有
2. 10YR2/1 (黒) しまりやや有、粘性有
3. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性やや有
4. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有
5. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有

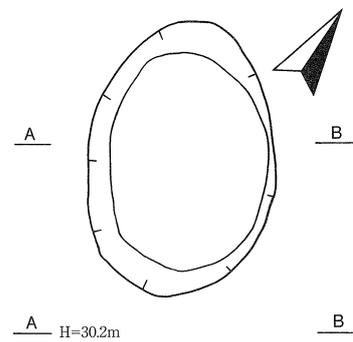
SK149



SK149

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有
2. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有
3. 10YR1.7/1 (黒) 炭化物
4. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性有
5. 10YR2/3 (黒褐) しまり強、粘性有
6. 10YR3/3 (暗褐) しまり強、粘性有

SK151



SK151

1. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性やや有
2. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性やや有
3. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性弱



第86図 SK142・146・148・149・151土坑

にS I 43・S K I 25と重複すると思われるが、直接的な切り合いがなく新旧は不明である。平面形・規模は、開口部径約170cm、底部径約145cmの略円形で、壁の開口部が崩落によりやや開くが、断面形は深さ約100cmの筒状を呈する。埋土は7層に細分されるが、上位褐色系土と下位の黒色土が大別される水平堆積の人為的ものと思われる。底面は概ね平坦である。

遺物は土師器の甕形土器片少量、羽口片と砥石片各1点、鍛冶滓約1kgが出土した。(小山内)

S K 163土坑 (第87図、写真図版65)

E区緑7区東側の斜面中腹、ⅦC-15aグリッドのほぼ中央に位置し、検出面はⅥ層である。検出状況としては、暗褐色土の広がりから炭化物粒が見られたことから、当初は炭窯として精査を進めたが、炭化物は埋土上面からの出土のみであり、それ以外の層からの出土はなかった。また、底面に焼土が認められなかったことから土坑と判断した。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部128×87cm、底部は110×70cmである。長軸方向は等高線と平行する北西-南東方向にある。壁は斜面上方である東側は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は20cmを測る。斜面下方である西側は鋭角的に立ち上がるが、斜面のため自然崩落により削られており、壁高は5cmと低い。埋土は3層に分層される。壁の崩落と思われる黄褐色土の上に斜面上からの流入した暗褐色の土が堆積していることから自然堆積と思われる。底面は堅く締まり、斜面下方に向かってやや傾斜している。南東隅の一部が木根による攪乱を受けている。出土遺物はない。

S K 164土坑 (第87図、写真図版65)

E区緑7区東側の斜面中腹、ⅦC-15aグリッドの北西隅に位置し、検出面はⅥ層である。本遺構はS K 135・167と重複する。本遺構精査中に下位からS K 135・167を検出したため、両土坑より本遺構が新しい。検出状況としては、黒褐色土の広がりから炭化物粒が疎らに見えたことから、当初は炭窯として精査を開始したが、炭化物の出土は埋土上面からのみであり、底面に焼土も確認できないことから、土坑と判断したものである。平面形は略円形を呈し、規模は開口部約100~130cm、底部約80~110cmである。壁は斜面上方である東側では鋭角的に立ち上がり、壁高は27cmを測る。斜面下方である西側の立ち上がりは緩やかであるが、傾斜のため自然崩落により削られていると思われ、壁高は7cmと東側に比べて低い。埋土は3層に分層される。また、3層下位の遺構のほぼ中央部に廃棄されたと思われる焼土が見られたが、埋土上層は、暗褐色土と黒褐色土の土が斜面上部から流入した自然堆積と思われる。底面はやや堅く締まり、おおむね平坦である。出土遺物はない。

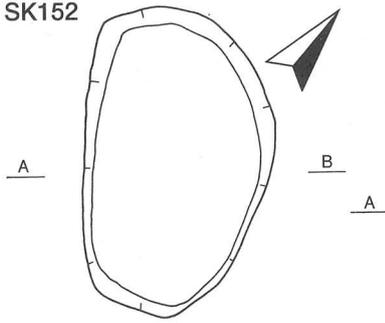
S K 165土坑 (第87図、写真図版66)

E区緑7区東側の斜面中腹、ⅦC-14aグリッドの北東に位置し、検出面はⅥ層である。本遺構はS K 136・167と重複する。本遺構底面でS K 136・167を検出したため、両土坑より本遺構が新しい。検出状況としては、暗褐色土の広がりが認められ、炭化物粒が埋土上面に見えたことから、炭窯として精査を開始したが、炭化物の出土は埋土上面からのみであり、底面に焼土が確認できないことから土坑と判断したものである。平面形は略円形を呈し、規模は開口部約115~145cm、底部約100~120cmである。斜面上部である東側では、壁は緩やかに立ち上がり、壁高は30cmを測る。斜面下方である西側も立ち上がりは緩やかであるが、自然崩落により削られており、壁高は4cmとかなり低い。埋土は4層に分層される。3層下位の遺構のほぼ中央に廃棄されたと思われる焼土が見られたが、埋土上層は暗褐色土と黒褐色土が斜面上部から流入した自然堆積と思われる。底面は堅く締まり、斜面下方に向かってやや傾斜している。出土遺物はない。

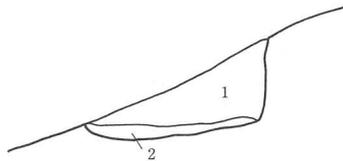
S K 167土坑 (第87図、写真図版66)

E区緑7区東側斜面上部、ⅦC-15aグリッドの北西隅に位置し、検出面はⅥ層である。本遺構は、S

SK152



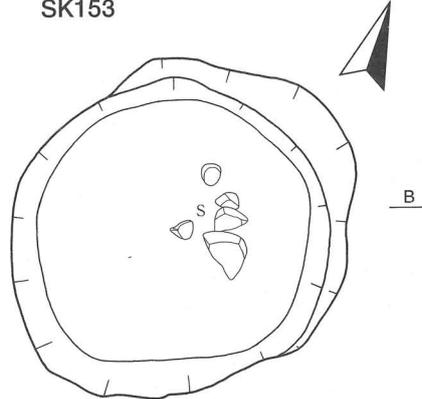
A H=30.0m



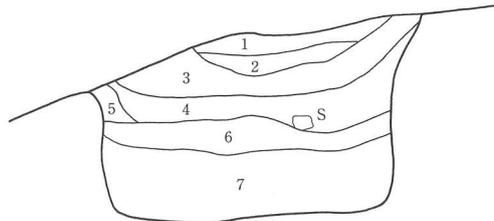
SK152

- 1. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性やや有
- 2. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性やや有

SK153



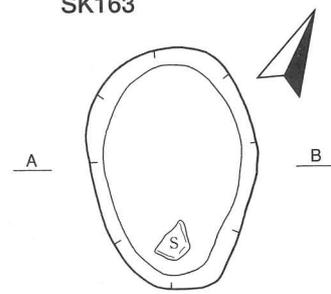
A H=37.8m



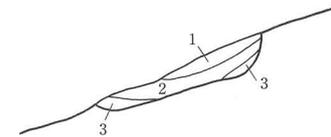
SK153

- 1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり強、粘性無
- 2. 10YR2/3 (黒褐) しまり中、粘性弱
- 3. 10YR4/4 (褐) しまり中、粘性弱
- 4. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり中、粘性弱、炭化物少量
- 5. 10YR3/2 (黒褐) しまり中、粘性弱
- 6. 10YR5/6 (黄褐) しまり中、粘性弱
- 7. 10YR3/3 (暗褐) しまり中、粘性弱、炭化物少量

SK163



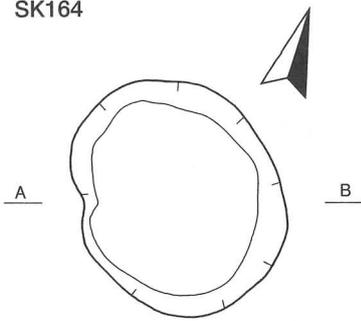
A H=37.7m



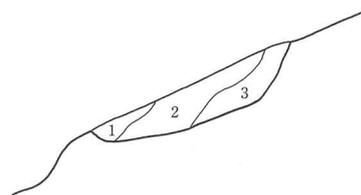
SK163

- 1. 10YR3/4 (暗褐) しまり中、粘性弱
- 2. 10YR2/2 (黒褐) しまり中、粘性弱
- 3. 10YR5/6 (黄褐) しまり中、粘性弱

SK164



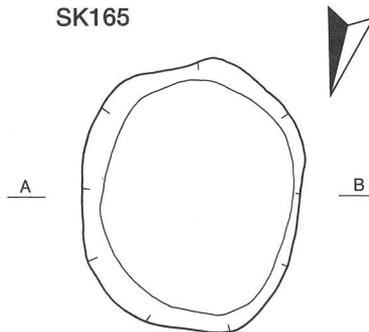
A H=37.5m



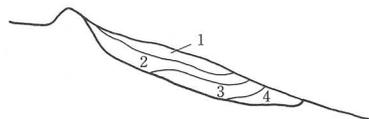
SK164

- 1. 10YR3/4 (暗褐) しまり弱、粘性中
- 2. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性中、炭化物少量
- 3. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性中

SK165



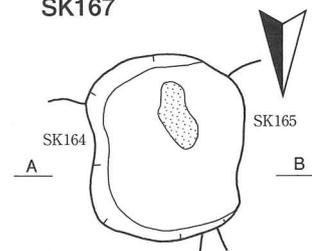
A H=36.8m



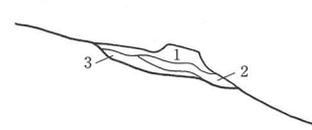
SK165

- 1. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無
- 2. 10YR2/2 (黒褐) しまり有、粘性やや有
- 3. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性無
- 4. 10YR2/3 (黒褐) しまり有、粘性やや有

SK167



A H=37.4m



SK167

- 1. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性中
- 2. 10YR2/1 (黒) しまり・粘性中、炭化物少量
- 3. 10YR4/6 (褐) しまり中、粘性弱



第87図 SK152・153・163・164・165・167土坑

K164・165と重複する。検出状況としては、SK164・165を精査していたところ、両遺構の底面にまたがる黒褐色土の楕円形の広がりをもつものを認め、SK164・165より古い。埋土上～中位から炭化材を検出したため当初は炭窯としていたが、炭化材の出土が底部からではないことと、底面に焼土が確認できないことから、土坑と判断したものである。残存する平面形は、歪な円形を呈し、開口部約100×70～80cm、底部約87×60～70cmである。残存する壁は、東壁は緩やかに立ち上がり、壁高は8cmを測り、西壁はSK165により遺存しない。埋土は3層に分層される。褐色土、暗褐色土、黒褐色土が斜面上方である東側から流入していることから、自然堆積と思われる。底面は堅く締まり、斜面下方に向かってやや傾斜している。

遺物は上～中位から炭化材が出土し、鑑定の結果、クリであることがわかった。 (本多)

SK199土坑 (第88図、遺物図版16・17・85・119、写真図版66・220・274・301)

E区緑8区の北部東斜面上位、VII B-17 p・q グリッドに位置し、重機道によって掘削されたSI92の床面で検出した。埋土が貼床土であったことから本遺構が古い。平面形・規模は、開口部径約175cm、底部径約185cmの略円形で、断面形は深さ約35cmのフラスコ状を呈する。埋土は17層に細分されるが、SI92の貼床土となる黄褐色系土の人為的堆積である。底面は概ね平坦だが、中央に径約50cm、深さ約20cmのピットがある。

遺物は埋土から土師器の甕形土器片20数点、須恵器の甕形土器片1点、砥石1点(57)、棒状鉄製品1点(35)、鉄塊系遺物1点と鍛冶滓約0.6kgが出土した。

SK200土坑 (第88図、写真図版66)

E区緑8区の北部東斜面上位、VII B-18 r グリッドに位置し、V層上面で検出した。平面形・規模は、谷側が崩落により消失しているが、開口部径約100cm、底部径約85cmの略円形と推定され、断面形は深さ約50cmの鍋形を呈する。埋土は褐色土の単層である。

遺物は埋土から土師器の甕形土器片と坏形土器片が数点出土したのみである。

SK202土坑 (第88図、写真図版66)

E区緑8区の北部東斜面上位、VII B-17 q グリッドに位置し、重機道によって掘削されたSI92の床面で検出した。埋土が貼床土であったことから本遺構が古い。平面形・規模は、谷側が崩落により消失しており、残存部では開口部約150×90cm前後、底部約115×80cm前後の略楕円形を呈し、壁は外傾して立ち上がり、壁高は東の山側で最大約20cmから谷側に向かい低くなる。埋土は上位SI92貼床土、中位黒色土と下位褐色土は自然堆積である。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

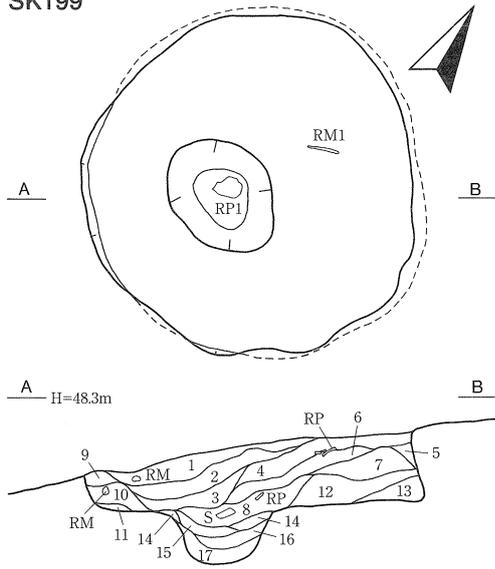
SK209土坑 (第88図、写真図版66)

E区緑8区の北部東斜面上位、VII B-17 q グリッドに位置し、V層上面でSI91の精査過程で検出した。本遺構が切られ、古い。平面形・規模は、北側はSI91により、谷側は崩落により消失しているが、開口部径約90cm、底部径約30cmの略円形と推定され、壁は底面から明瞭な稜をもたず立ち上がり、深さ最大約35cmを測る不整なボール形を呈す。埋土は褐色土の単層である。遺物は出土しなかった。

SK274土坑 (第88図、遺物図版16、写真図版66・221・263)

E区緑8区の北端東斜面の微小な洞状地形のVII B-15・16 q グリッドに位置し、検出面はVI層上面だが、当初SX I 09の崩落部と見ていた部分であり、精査の結果土坑と判明したものである。平面形・規模は、谷側が崩落により消失しており、残存部では開口部約175×75cm前後、底部約150×65cm前後の略楕円形を呈し、壁は外傾して立ち上がり、壁高は東の山側で最大約50cmから谷側に向かい低くなる。埋土はマサ土を主体とした自然堆積で、底面は概ね平坦である。

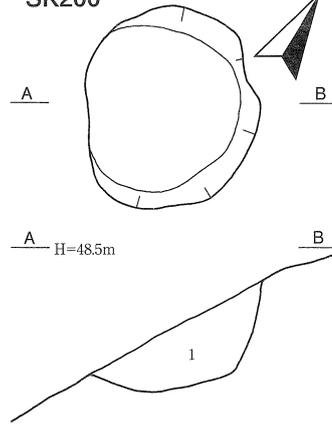
SK199



SK199

1. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質、炭化物微量
2. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、マサ土少量
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、マサ土微量
4. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質
焼土粒・炭化物微量
5. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質
6. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質、炭化物微量
7. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、マサ土少量
8. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性無、砂質
炭化物微量、焼土粒少量
9. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性やや有
10. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質
焼土粒・炭化物微量
11. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性やや有
12. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質
13. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質
14. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無、砂質、炭化物微量
15. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、マサ土微量
16. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、砂質
17. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性無、砂質

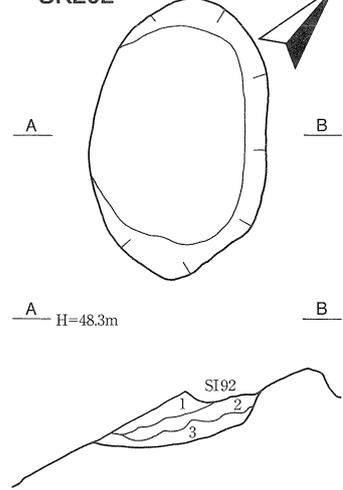
SK200



SK200

1. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有

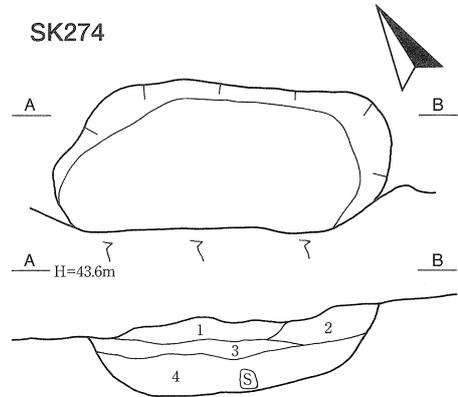
SK202



SK202

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有
2. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性有、炭化物微量
3. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性有

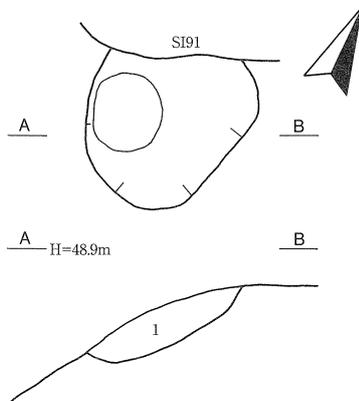
SK274



SK274

1. 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまり極めて有、粘性無、砂質
2. 2.5Y4/6 (オリーブ褐) しまり有、粘性無、砂質
3. 2.5Y5/3 (黄褐) しまり有、粘性無、砂質
4. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり極めて有、粘性無、砂質

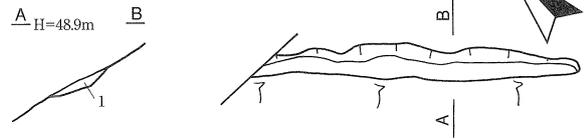
SK209



SK209

1. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有

SD21



SD21

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、砂質、マサ土多量



第88図 SK199・200・202・209・274土坑・SD21溝跡

遺物は埋土から土師器の甕形土器片と羽口片数点、炉壁と鍛冶滓類が微量出土した。

S D 21 溝跡 (第88図、写真図版66)

E区緑8区の北端東斜面のⅦB-16qグリッドに位置し、北西側調査区外に続く。検出面はⅥ層上面である。等高線と平行するもので、谷側は崩落により消失しているが、検出した部分では総長約4m、幅約30cmを測る。横断面形は浅い皿形を呈し、山側の壁は約10cmを測る。埋土はマサ土の単層である。底面はやや谷側に傾斜するが、概ね平坦である。遺物は出土しなかった。(小山内)

S N 06 焼土遺構 (第89図)

E区緑7区中央斜面下方部、ⅦC-11bグリッドに位置し、検出面はⅢb層である。検出状況としては、橙色焼土の広がりとして認めたものである。平面形は不整形である。規模は27×12~23cm、焼土の厚さは5cmで、堅く締まる。出土遺物はない。

S N 07 焼土遺構 (第89図)

E区緑7区中央斜面下方部、ⅦC-11bグリッドに位置し、検出面はⅢb層である。検出状況としては、橙色焼土の斑な広がり、焼成の強い橙色焼土部と焼成の弱い明褐色焼土部が確認できる。平面形は不整形であり、規模は81×38~45cmで、橙色の焼土の厚さは11cmである。焼土は堅く締まる。出土遺物はない。

S N 08 焼土遺構 (第89図)

E区緑7区中央斜面下方部、ⅦC-12cグリッド南東に位置し、検出面はⅢb層である。検出状況としては、橙色焼土の広がりとして認めたものである。調査員の不手際により、平面図作成前に熱残留磁気測定を行ない遺構の大部分を破壊してしまったため、熱残留磁気測定後に作成した平面図、測定前の平面写真などから推測される平面形は不整形であった。焼土の厚さは5~10cm前後と推測される。出土遺物はない。

S N 09 焼土遺構 (第89図)

E区緑7区中央斜面下方部ⅦC-12dグリッドに位置し、検出面はⅢb層である。検出状況としては、橙色焼土の広がりとして認めたものである。平面形は不整な3部分が認められる。規模は北側の焼土が21×11cm、東側に位置する焼土が12×10cm、西側に位置する焼土が13×11cmで、焼土の厚さは4~5cmである。やや堅く締まる。出土遺物はない。(本多)

S N 25 焼土遺構 (第89図)

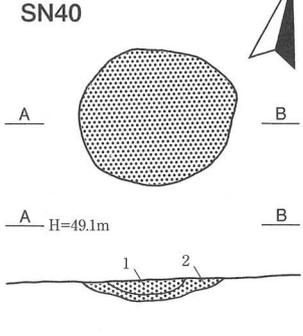
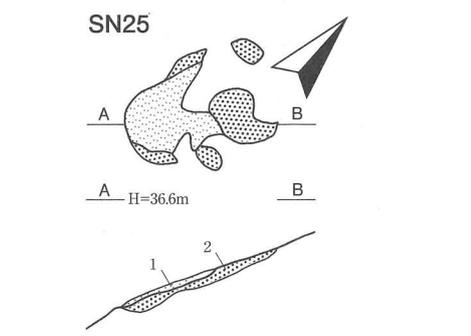
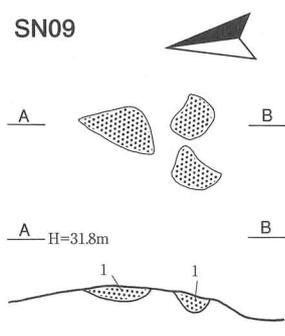
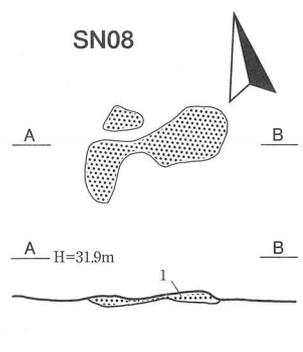
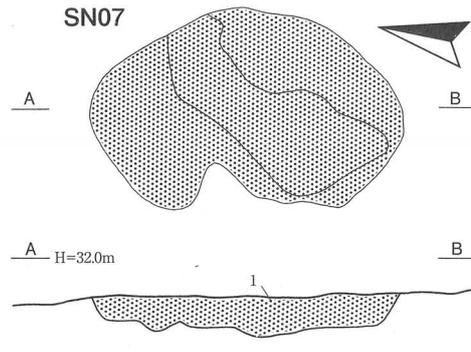
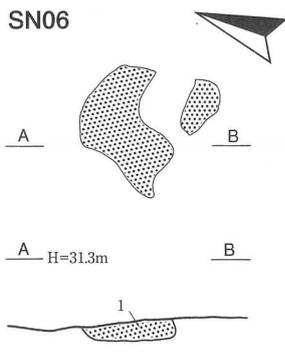
E区緑7区の北部東斜面中腹、ⅦB-13rグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。当初S X I 06の崩落と見ていたものだが、崩落土の除去後に炭化物と焼土の広がりを確認したものであり、状況から炭窯の底部痕跡の可能性もある。平面形は部分的に散在する不整形で、炭窯の底部で確認される焼土と類似する。焼土の厚さは2cm以下で火熱による赤色変化も弱い。上面の炭化物以外に遺物は出土しなかった。

S N 31 A・B 炉跡 (第89図)

E区緑7区の中央部東斜面上部、ⅦC-16cグリッドに位置する。S X I 04Cの貼床下のⅣ層中で検出し、掘り込みを有する炉跡であると判断した。確認状況から、新旧関係は(新)S X I 04C→S N 31 A→B(古)である。

S N 31 Aは、平面形・規模は、開口部長軸約105cm、短軸約90cm、底部長軸約80cm、短軸約65cmの略隅丸方形を呈し、壁は外傾して立ち上がり、壁高は約10cmが残る。埋土はS X I 04Cの貼床土である。底面は概ね平坦で、中央には火熱により40×30cmの広がり、厚さ3cmほどが赤色変化していた。遺物は出土しなかった。

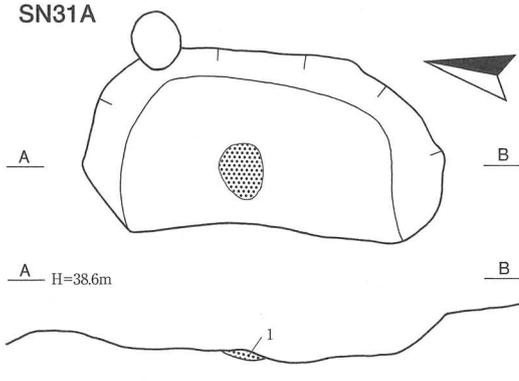
S N 31 Bは、谷側が崩落により消失しているが、残存部での平面形・規模は、開口部長軸約190cm、短軸



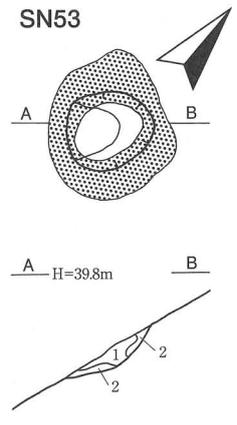
SN06~09
1. 7.5YR6/8 (橙) 焼土

SN25
1. 7.5YR5/8 (明褐) しまり有、粘性やや有、炭化物多量
2. 7.5YR5/8 (明褐) 弱い焼土

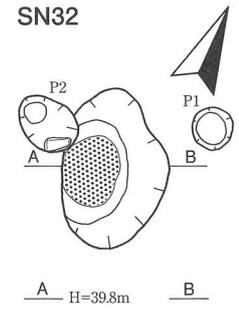
SN40
1. 5YR5/4 (にぶい赤褐) 強い焼土
2. 7.5YR5/4 (にぶい褐) 弱い焼土



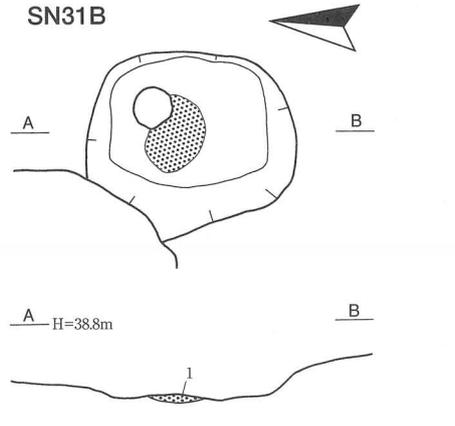
SN31A
1. 5YR5/8 (明赤褐) 焼土



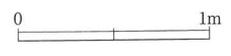
SN53
1. 10YR3/3 (暗褐) しまり無
粘性有、炭化物微量
2. 7.5YR4/6 (褐) 弱い焼土



SN32
1. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有
2. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性やや有
3. 10YR2/2 (黒褐) しまり有、粘性やや有
4. 5YR4/8 (赤褐) 焼土



SN31B
1. 5YR6/8 (橙) 焼土



第89図 SN06・07・08・09・25・40焼土遺構・SN31A・B・32・53炉跡

約90cm、底部長軸約140cm、短軸約75cmの略楕円形を呈し、壁は外傾して立ち上がり、壁高は山側の最大約25cmから谷側に向かい低くなる。埋土はS X I 04Cの貼床土である。底面は概ね平坦で、中央には火熱により20cmほどの広がり、厚さ3cmほどが赤色変化していた。遺物は出土しなかった。(小山内)

S N 32 炉跡 (第89図、遺物図版64、写真図版251)

E区緑7区東側斜面の中腹、ⅦC-16a グリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。本遺構は検出時の状況から土坑と思われたが、精査の結果、底面に厚く強い赤褐色変化した焼土が広がることから、掘り込みを有する炉跡であると判断した。本遺構斜面下方は自然崩落により消失しているため遺存しない。また本遺構西側でP2、斜面上方でP1を確認した。P2は本遺構を切ることから本遺構に伴わないものと考えられるが、本遺構とP1及びP1とP2の関係については不明である。遺存する平面形は略楕円形を呈すが、本来は円形に近い形状を呈すと推定される。遺存する規模は開口部約85×55cm、底部約50×35cmを測る。壁は斜面上方では外傾して鋭角的に立ち上がり、壁高は約45cmを測るが、斜面下方においては遺存しない。埋土は斜面上方から流入した褐色土系の自然堆積で、3層に分けられる。底面はほぼ平坦で、厚さ5cm程度の赤褐色焼土が広がっている。

本遺構からの出土遺物はないが、P2から羽口(53)が出土した。(小林)

S N 40 焼土遺構 (第89図)

E区緑8区の北部東斜面上位、ⅦB-18q グリッドに位置し、重機道によって掘削されたⅥ層中で検出した。位置・面的に見てS X W34等と関連したものであった可能性が高い。平面形は径約40cmの円形で、厚さ約5cmほどが火熱により赤色変化していた。遺物は出土しなかった。

S N 53 炉跡 (第89図)

E区緑8区の北端東斜面のⅦB-14r グリッドに位置し、検出面はⅣ層上面である。赤色変化の弱いリング状の焼土を確認し、精査の結果、掘り込みを有する炉跡であると判断した。谷側が崩落により消失しているが、残存部での平面形・規模は、開口部径約25cm、底部径約15cmの略円形を呈し、遺存する壁は外傾して立ち上がり、壁高は山側の最大約10cmから谷側に向かい低くなる。埋土は基本的には炭化物を微量含む黒色土の単層である。底面は谷側に向かい緩く傾斜し、底面中央を除き火熱によりおよそ径30cmほどの広がり、厚さ1cm以下が弱く赤色変化していた。遺物は出土しなかった。(小山内)

② 緑9区・緑10区

緑9・10区はE区南半の一段高い谷部にあたる。両区の位置する地形は、赤22区を起点とした北西方向・北方向に延びるVの字状をした尾根に囲まれた埋没谷である。緑9区谷底は緩やかな勾配で北方向に開け、一段下がった緑7区へと繋がる。緑9区の東側斜面は赤23区尾根頂部、西側斜面は赤21区尾根頂部へとそれぞれ繋がる急傾斜となっている。緑10区は緑9区の西側の区域で、赤20区の東側斜面にある2本の小さな沢筋にあたり、中腹で合流して緑9区谷底へと至るややきつい傾斜となっている。2本の沢筋の各々の規模は、北側沢筋の谷底では長さ約25m、幅約3m、南側沢筋の谷底では長さ約35m、幅約10mであり、標高差は赤20区尾根頂部と緑10区下方では約18mである。検出面は両区とも、尾根と繋がる斜面上方においてはⅣ層～Ⅵ層となるが、斜面中腹から谷の最深部においてはE区北側の緑7区同様、黒色土のⅢ層が細分され、Ⅲa層が古代の検出面となる。

遺構は緑9区では、竪穴住居跡1棟、工房跡2棟、鉄生産関連炉跡4基、炭窯2基、焼土遺構3基、炉跡1基、廃土場2ヶ所、緑10区では、工房跡2棟、鉄生産関連炉跡2基、炭窯1基が検出された。分布状況は赤23区の尾根頂部から下る斜面中腹の緑9区、緑10区の北側沢筋の斜面裾部分に集中する。(小山内)

S I 129 竪穴住居跡・S X W30・67 鉄生産関連炉跡、S X H07・08 排土場

(第90・91・95図、遺物図版17・65・66・85・86・119、写真図版67・221・252・263・274・275・301・314・315)

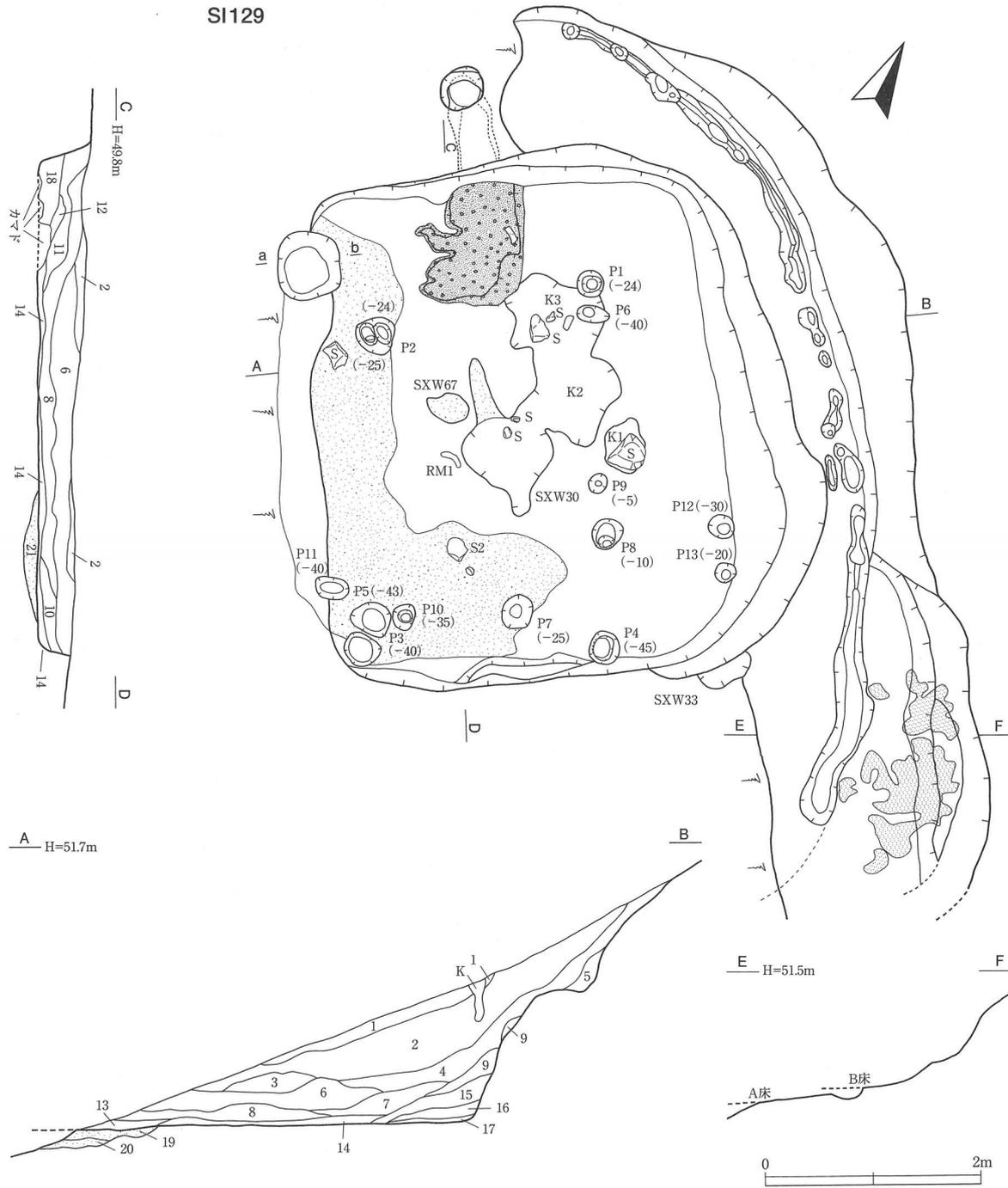
E区緑9区の東側斜面中腹のⅧC-20tグリッドを中心に位置し、検出面はⅣ～Ⅵ層上面である。検出時にはS X I 14を含めて等高線と平行する北西-南東に長軸方向となる長さ約15m、幅約2mの長大で、かつ北側の斜面に方形の張り出すプランを検出したものである。急斜面に立地するため東山側が崩落しており、プランは不明瞭で重複状況を確認できなかったが、何棟かの工房跡の重複を想定し、幅のある北側には等高線と平行するベルト1本、直行するベルト2本、南側は幅が狭かったため直行する2本を設定して精査を開始した。精査の結果、北側の張り出し方形プランがS I 129、この東山側がテラス状平場、南側がS X I 14 A・Bの建替えであることが判明し、S X W33の存在状況からS I 129のテラス状の棚は古い工房跡を利用したものである可能性が高い。また、S I 129の下位斜面裾にはⅢ層黒褐色土上面にS X H07・08とした2m四方の2ヶ所、厚さ10cm前後の黄褐色系土のマウンド状の広がりが見出され、状況からS I 129等の構築時の排土と思われる。なお、本遺構はS X W30等の床面施設とカマドについては精査着手の次年度に精査を行ったものである。断面観察と遺物出土状況等から新旧関係は(新)S X I 14A・S X W32→S I 129・S X W30・67、S W103→S X I 14B、S I 129テラス・S X W33(古)と考えられる。

S I 129は、谷側が崩落により消失しているが、遺存する貼床範囲から、テラス部分を除いての平面形・規模は一辺約5m前後の隅丸方形を呈すると推定され、主軸方位はN-35°-W、床面積は約17㎡である。テラス部分は山側が崩落してプランが不明瞭となっているが、長軸は等高線と平行する北西-南東にあり、残存部では長軸約9m、短軸2～1mほどの山側中央が張り出す弓形を呈し、床面積は約4.3㎡を測る。また、この南端の山側は半円形にさらに張り出し、高低差約10cm以下の棚状となっていた。壁はS I 129では鋭角的に外傾して立ち上がり、山側上位とテラス部分では崩落のためやや外反する。壁高は住居部分では山側北東壁の最大約110cmから谷側に向かい低くなり、テラス部分では山側北東壁の最大約70cmから谷側に向かい低くなる。埋土はⅢ層起源と思われる黒色系土を主体とするおよそ20層に細分され、テラス部分を含む上半には崩落によるマサ土が多く混じり、下位にはS X I 14等の廃棄と思われる鉄滓類や鍛造剥片と炭化物が多く含まれ、下位床近くに増える。またテラス南側の棚下位にもS X I 14等に関連したものと考えられる炭化物の広がりが認められた。住居床面は概ね平坦で堅締、南西谷側縁から南壁際にL字状に貼床が施され、テラス部分では壁際に一部途切れるが、長さ約8m、幅10～20cm前後、深さ約3cmほどの壁溝がある。床面施設としては北西隅にK1土坑1基、中央にS X W30とこれに付属すると考えられる土坑3基(K1～3)、柱穴14基が見出された。S X W67については貼土されていたもので、鍛冶炉の造り替えと考えられる。K1の平面形・規模は開口部径約60cmの略円形で、深さ約30cmの丸底鍋形を呈し、埋土は炭化物混じりの黒色土の単層である。柱穴は配置・規模から鍛冶炉の建替えと連動したと思われ、P1～4が新主柱穴、P2・4～6が古主柱穴と思われる。S X W30・67については後述する。

カマドは北西壁の中央やや西寄りに付設され、本体天井部は消失していたが、袖部には芯材抜き取りの小ピット1基と架構・芯材として一部石や羽口の使用が認められ、黄褐色土で構築されていた。燃焼部は径約60cmほどの略円形で、深さ約5cmほどに掘り窪められ、底面中央は火熱により40×30cmほどの不整形で、厚さ2cmほどが赤色変化していた。煙道は奥行き約120cm、径約40cmの削り貫き式で、外側に向かいきつい下り勾配である。煙出しピットは、径約40cmの略円形で深さ約115cmを測る。

S X W30は、今次調査で確認されたセット関係の最も良好な鍛練鍛冶炉の一つであるが、当初は周辺の床直上の埋土中で鍛造剥片を視認したため、鍛練鍛冶炉を想定して掘り下げを行ったところ、鉄砧石及びそ

SI129



SI129

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 1. 10YR2/3 (黒褐) 固くしまる、粘性有、マサ土多量 2. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有 3. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有
マサ土ブロック多量 4. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有 5. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性有、地山土少量 6. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有、炭化物・鉄滓少量 7. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有
炭化物・少鉄滓微量 8. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有
炭化物・鉄滓多量 9. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、褐色土少量 10. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有 11. 10YR5/8 (黄褐) しまりやや有、粘性有 12. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有 | <ul style="list-style-type: none"> 13. 10YR6/8 (明黄褐) 固くしまる、粘性有 14. 10YR2/1 (黒) しまり・粘性有
炭化物・鉄滓多量 15. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有
谷側に鉄滓・炭化物多量 16. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性有 17. 10YR3/4~4/6 しまり極めて有、粘性有
炭化物微量 18. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有
黄褐色土ブロック少量 19. 10YR3/4 (暗褐) しまり極めて有、粘性有、炭化物微量 20. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無 21. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性有 } 貼床 |
|--|--|

第90図 SI129竪穴住居跡・SXW30・67鉄生産関連炉跡(1)

の設置穴のK 1 土坑と、不整な円形土坑 3 基が屈曲して連結したプランを検出したものである。状況から精査は埋土を収集しながら行うこととした。精査の結果、南側プランが鍛練鍛冶炉跡で、中央と北側のプランは付属する土坑と判断された。炉跡の平面形・規模は開口部径約70cm、底部径約35cmの略円形を呈し、南東側には長さ約30cm、幅約18cm、先端部から炉底面まで下り勾配の張り出し溝が取り付く。またこの対極にも長さ約50cm、幅約15～25cm、深さ 3～5 cmの炉に向かって緩い下り勾配の張り出し溝D1が取り付いているが、埋土がS X W67と同様に貼土であったことと配置からS X W67も含め2度にわたり造り替えられた可能性がある。北側K 2 土坑とは幅約40cm、長さ約10cm、深さ約7 cmほどの浅い掘り込みで連結する。断面形は深さ約15cmの丸底鍋形を呈し、埋土は炭化物と鍛造剥片を多く含む黒色系土で下位ほど混入量が多くなる。底面中央は南北両側の張り出し溝の方向に細長く還元し、この周囲は火熱により赤色変化していた。K 1 土坑は炉跡の東側に位置し、鉄砧石が遺存する。鉄砧石は人頭大で、厚さは約20cmほどで半分が埋置され、掘り方は石より一回り大きめに掘られていた。K 1 埋土上面では鍛造剥片が少量採集された。K 2 土坑は炉跡の北側に連結するもので、平面形・規模は長軸約100cm、短軸約60cmの略楕円形を呈し、炉跡とK 1 の中間となる南側に三角状に深さ約8 cmの一段高い張り出し、また北側K 3 土坑とは幅約15cm、長さ、深さとも約7 cmほどの溝で連結する。断面形は深さ約25cmの薬研状を呈し、埋土は上・下位が褐色系土、中位が褐色土で、全体的に径1 cm以下のゴツゴツした鍛冶滓粒や鍛造剥片を多く含み、下位には20cm前後の大きな石が3個廃棄されていた。K 3 土坑はK 2 の北側に連結するもので、平面形・規模は径約80cmの略円形を呈するが、断面の観察から建替えのP 6 柱穴との関係と埋土の状態から半分ほど埋め立てた新旧2時期が考えられる。断面形はいずれも平底鍋形を呈し、新期の深さは約20cm、古期では35cmを測る。埋土はそれぞれの上位が人為的な褐色系土、下位が黒色土で鍛冶滓を少量と鍛造剥片を多量に含む。配置と埋土及び遺物の出土状況から炉跡南北の張り出し溝は羽口の装着痕跡で、南側の羽口溝とK 1 鉄砧石、K 2 の足入れ穴が最終のセットと考えられ、北側D 1 溝跡とK 2 の南側張り出しが鉄砧石の設置穴のセットと推測される。K 3 新については新セットに伴うと考えられるが性格は不明、古は旧セットかS X W67に伴うものと考えられる。

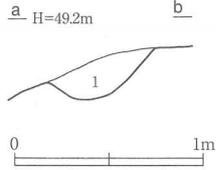
S X W67は、S X W30の西側に隣接し、炉底部付近のみの検出である。遺存する部分での平面形・規模は開口部35×30cm、底部22×14cmの略楕円を呈する。断面形は深さ約7 cmが残る丸底鍋形を呈し、埋土は上位が貼土、下位が炭化物と鍛造剥片を少量含む黒色系土である。底面の東側は還元状態、西側は火熱により赤色変化していた。

遺物は、土器類は埋土下位及び床面とカマドから土師器の甕形土器がおよそ1個体分と坏形土器3個体分、須恵器の甕形土器片1点が出土し、形状をおよそ把握できた復元個体は、カマドと埋土下位出土が接合した甕形土器1点(183)、床面とカマド及びP1埋土出土の破片が接合した土師器の坏形土器2点(188・189)である。羽口は口径を把握できた10個体と破片約50点が出土し、装着角度の推定可能なカマド芯材と床面出土の2点(64・65)とS X W30関連出土の3点(70～72)を除き埋土上位から出土した。炉壁は埋土上位から少量とS X W30埋土から破片1点、石製品は埋土上位から砥石と磨石各1点、S X W30・K 1 鉄砧石(59)とK 2 埋土から要石1点(58)、鉄製品は床面から筒状2点(37・38)と鎌先1点(39)、埋土から刀子1点(36)鉄廷状の鉄塊1点(40)と不明品2点(釘?)、埋土及び床面から鉄塊系遺物27個と鍛冶滓類が約42kg、S X W30関連から鉄塊系遺物7個、鍛冶滓類約14kgと多量の鍛造剥片、S X W67から鍛冶滓約0.7kgが出土した。

S X W33鉄生産関連炉跡 (第91図、写真図版70・315)

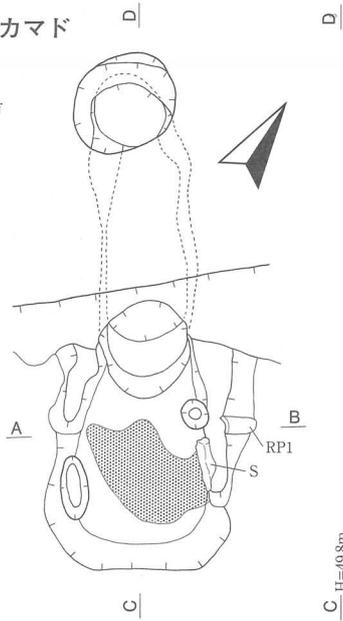
本遺構はⅧC-1tグリッド、S I 129南東隅で切られ、テラスの平場の谷側端に位置し、本来はS I 129

SI129 K1



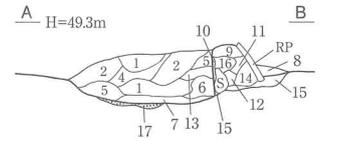
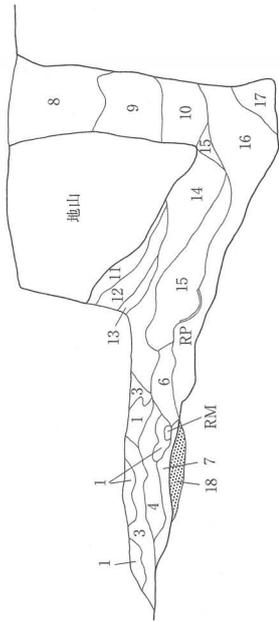
SI129 K1
1. 10YR3/4 (暗褐色) しまり・粘性有
炭化物微量、黄褐色ブロック少量

SI129 カマド



SI129 カマド

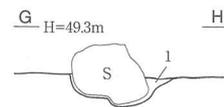
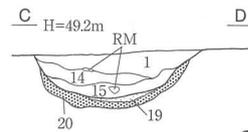
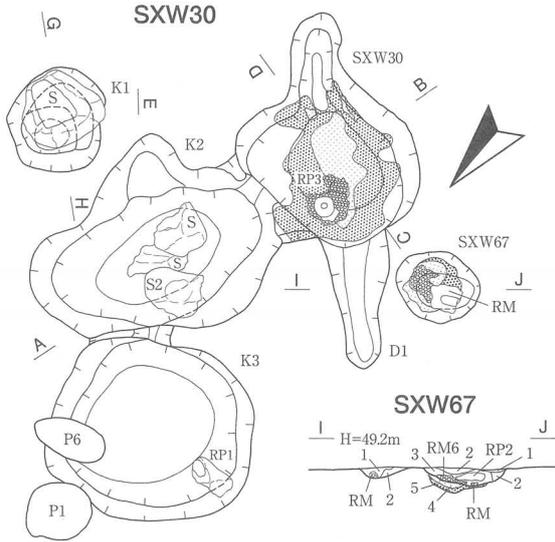
- | | |
|---------------------------------------|-----|
| 1. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性有 | カマド |
| 2. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性無 | |
| 3. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有 | カマド |
| 4. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、黄褐土微量 | |
| 5. 7.5YR4/6 (褐) しまり・粘性やや有 | カマド |
| 6. 7.5YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性無 | |
| 7. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無、マサ土ブロック少量 | カマド |
| 8. 10YR4/6 (明褐) しまり・粘性やや有、炭化物微量 | |
| 9. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有 | カマド |
| 10. 10YR6/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性無、砂質 | |
| 11. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性やや有 | カマド |
| 12. 10YR7/6 (黄橙) しまり・粘性有 | |
| 13. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性やや有 | カマド |
| 14. 10YR7/6 (黄橙) しまり極めて有、粘性有、下位焼土化 | |
| 15. 7.5YR4/6 (褐) しまり・粘性やや有、弱い焼土、内壁崩落土 | カマド |
| 16. 10YR3/3 (暗褐) しまり無、粘性有 | |
| 17. 10YR6/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性無 | カマド |
| 18. 7.5YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、焼土粒微量 | |
| 19. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性有 | カマド |
| 20. 10YR5/8 (黄褐) しまり極めて有、粘性有 | |
| 21. 5YR5/8 (明赤褐) しまり極めて有、粘性無 | カマド |
| 22. 5YR4/6 (赤褐) しまり極めて有、粘性無 | |
| 23. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性有 | カマド |
| 24. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性やや有 | |
| 25. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性有 | カマド |
| 26. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性有 | |
| 27. 5YR5/6 (赤褐) 燃焼部赤土 | カマド |



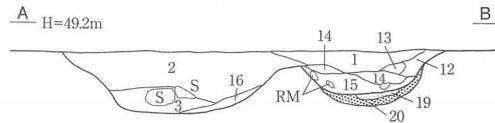
SXW30 K1
1. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有
鍛造剥片多量

SXW30

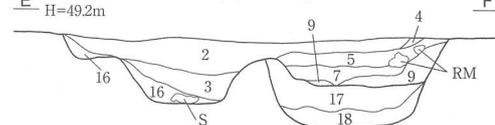
SXW30 K1



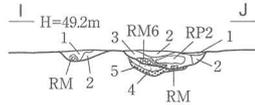
SXW30 K2



SXW30 K2・3



SXW67



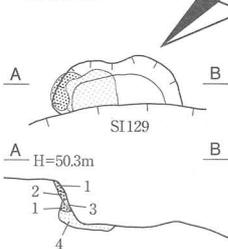
SXW67

- 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性有、炭化物少量
- 2.5Y5/4 (黄褐) しまり極めて有、粘性有、炭化物少量
- 10YR2/1 (黒) しまり・粘性有、炭化物多量、小鍛冶滓多量
- 5Y6/1 (灰オリーブ) 還元部
- 5YR5/8 (明赤褐) 焼土

SXW33

- 5YR3/4 (暗赤褐) しまりやや有、粘性有
- 5YR4/4 (におい赤褐) しまり・粘性有
- 2.5Y7/2 (灰黄) 固くしまる、粘性無
- 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有、還元蒸焼

SXW33



SXW30

- 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、炭化物微量
- 10YR3/3 (暗褐) しまり無、粘性有、炭化物微量
- 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有、炭化物多量
- 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性無、砂質、壁の崩落土
- 10YR2/1 (黒) しまりやや有、粘性有、炭化物多量、小鍛冶滓・鍛造剥片少量
- 2.5Y5/2 (暗灰黄) しまり極めて有、粘性無、還元部
- 5YR4/6 (赤褐) しまり極めて有、粘性無、焼土

SXW30 K2

- 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有、炭化物微量、小鍛冶滓多量
- 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性やや有、炭化物微量、小鍛冶滓多量、鍛造剥片少量
- 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性有、小鍛冶滓少量

SXW30 K3

- 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性やや有
- 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有、やや砂質、小鍛冶滓微量
- 2.5Y7/4 (浅黄) しまり極めて有、粘性無
- 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有
- 2.5Y7/4 (浅黄) しまり極めて有、粘性無、小鍛冶滓少量
- 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、炭化物微量、小鍛冶滓微量

第91図 SI129竪穴住居跡・SXW30・67鉄生産関連炉跡(2)、SXW33鉄生産関連炉跡

テラスを工房跡として伴うものと思われる。当初S I 129の崩落と思われたが、精査時に底部還元部分を確認したため鍛造剥片は採集できなかったが、状態から鉄生産関連炉跡と判断した。北西側がS I 129によって消失しているため全容は不明だが、遺存する部分から平面形・規模は開口部50×30cm前後、底部35×18cm前後の略楕円形と推定され、断面形は深さ約20cmの平底鍋形を呈し、埋土は炭化物を少量含む黒色系土である。北東壁の上位は火熱により赤色変化した焼土、底面の東側は還元状態となっていた。

遺物は、土師器の甕形土器片と羽口片が数点、鉄塊系遺物1個と鍛冶滓約0.5kgが出土した。

S X I 14 A・B 工房跡、S X W 32 鉄生産関連炉跡

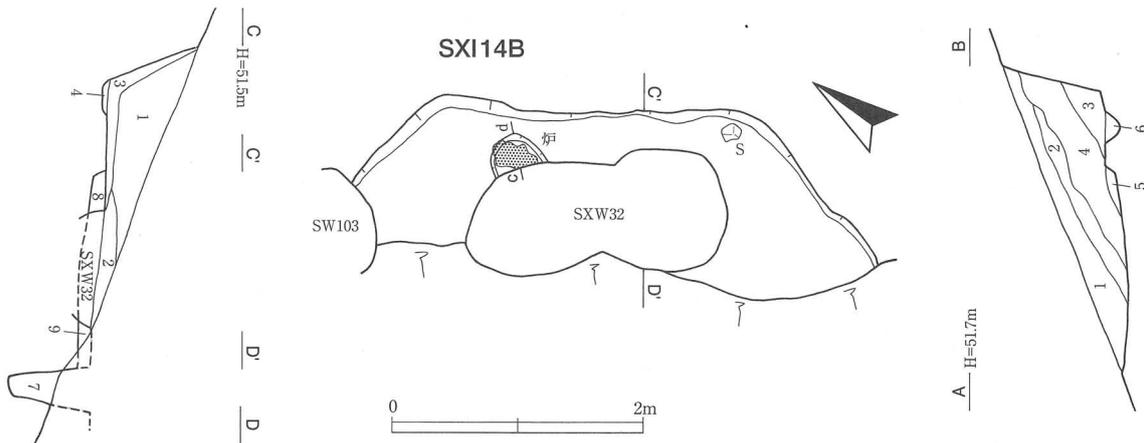
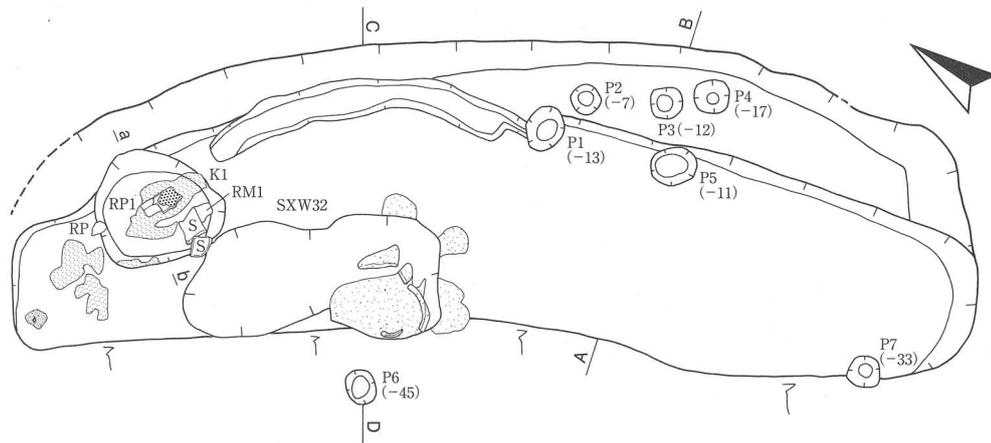
(第92・93図、遺物図版17・66、写真図版68・221・253・263・315)

E区緑9区の東側斜面中腹のⅧD-1・2a グリッドを中心に位置し、検出面はⅣ～Ⅵ層上面である。前記のとおり、何棟かの工房跡の重複を想定し、幅が狭かったため等高線と直行する2本を設定して精査を開始した。なお、本遺構はS X W 32等の床面施設については次年度に跨いで精査を行ったものである。新旧関係は(新)S X I 14 A・S X W 32→S I 129、S W 103→S X I 14 B(古)である。

S X I 14 Aは、谷側が崩落により消失し、全容は不明だが、遺存する平面形・規模は、長軸が等高線と平行する北西-南東にあり、長軸約7.6m、短軸2～2.5mほどの不整な略楕円形を呈し、南東部の山側は長さ約370cm、幅30～60cmの三日月状に張り出し、高低差約7cmのテラス状となっていた。床面積は約12㎡、テラス部分は約2㎡を測る。壁は外傾して立ち上がり、壁高は山側の最大約80cmから谷側に向かい低くなる。埋土は上位の流入黒色系土と下位の壁崩落の褐色土に大別される自然堆積である。床面は概ね平坦で堅締、B工房跡分は貼床とされていた。床面施設としては北西谷側にS X W 32、この北山側にK1土坑1基、柱穴はテラスに3基とその付近の壁際に2基、谷側に2基の計7基が検出され、配置から谷側のP6・7は支柱穴の可能性がある。また北東部壁際に長さ約230cm、幅約25cm前後、深さ約3cmほどの壁溝がある。K1は検出当初、上面に炭化物の広がりとはほぼ完形の羽口1点が出土したことから、鉄生産関連炉跡を想定して精査を行ったが、埋土からは鍛造剥片も抽出されず、浅い窪みのような土坑と判明した。配置的にはS X W 32に関連するものと思われる。平面形・規模は開口部径約100cmの略円形で、深さ約5cmの皿形を呈し、埋土は炭化物を多く含む黒色土の単層である。

S X W 32は、検出当初二つの略円形の連結したプランを検出し、南側プランの東壁縁が赤色変化していることと炉壁の基部痕跡と考えられる黄褐色粘土及び炉壁片や鍛冶滓類が確認されたことから、鉄生産関連炉跡と北側は付属施設のK1土坑と考え、「キの字」にベルトを設定して精査を開始した。掘り下げの初期において炉内にK1側が開く馬蹄形に倒壊した炉壁塊が出土し、これまでに検出した鍛練鍛冶炉とは趣を異にし、平成11年度調査で検出された製鉄炉と類似するような雰囲気が見られた。ただし谷側に前庭部らしき痕跡は認められず、また工房の斜面側には廃滓場が確認されなかったことから、製鉄炉との判断はできかねた。精査の結果、当初K1土坑と考えた北側は出土遺物が少ないため掘り下げが進み、構築初期の底面まで掘り上げてしまったが、断面観察と炉底に遺存する椀形滓等の遺物出土状況や炉底の状態から、K1を前庭部とする炉跡で、造り替えではなく数度の連続した操業による新旧の堆積と判断した。平面形・規模は、全体の長軸は約210cmで等高線と平行して南東-北西にあり、炉は径約100cmの略円形で、断面形は深さ約30cmの丸底鍋形を呈する。炉底は全体的に堅く締まり、一部蒸焼の黒色となっていたが、全体的に還元状態にあり、壁中位は中性化、上位と倒壊した炉壁の内面側は火熱で赤色変化した。前庭部は開口部約130×90cm、底部約100×65cmの略楕円形で、断面形は深さ約35cmの平底鍋形を呈し、炉よりもやや深く掘り込まれ、底面は炉湯口から北側に向かい緩やかに傾斜していた。埋土はおよそ30層に細分されるが、全体的に

SXI14A



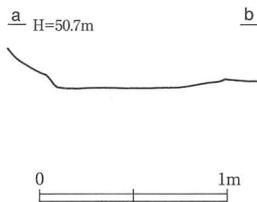
SXI14A・B

1. 10YR3/3 (暗褐色) しまり・粘性有
 2. 10YR3/4 (暗褐色) しまり・粘性有、褐色土多く混じる
 3. 10YR4/4 (褐色) しまり・粘性有
 4. 10YR4/3 (にぶい黄褐色) しまり・粘性有
 5. 10YR4/6 (褐色) しまり・粘性有、壁の崩落
 6. 10YR3/4 (暗褐色) しまり無、粘性有、炭化物微量
 7. 10YR3/3 (暗褐色) しまり無、粘性有、炭化物微量
 8. 10YR4/6 (褐色) しまり強、粘性有
 9. 10YR3/3 (暗褐色) しまり極めて有、粘性有、炭化物少量
- } SXI14Aの貼床

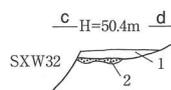
SXW32



SXI14A K1



SXI14B 炉

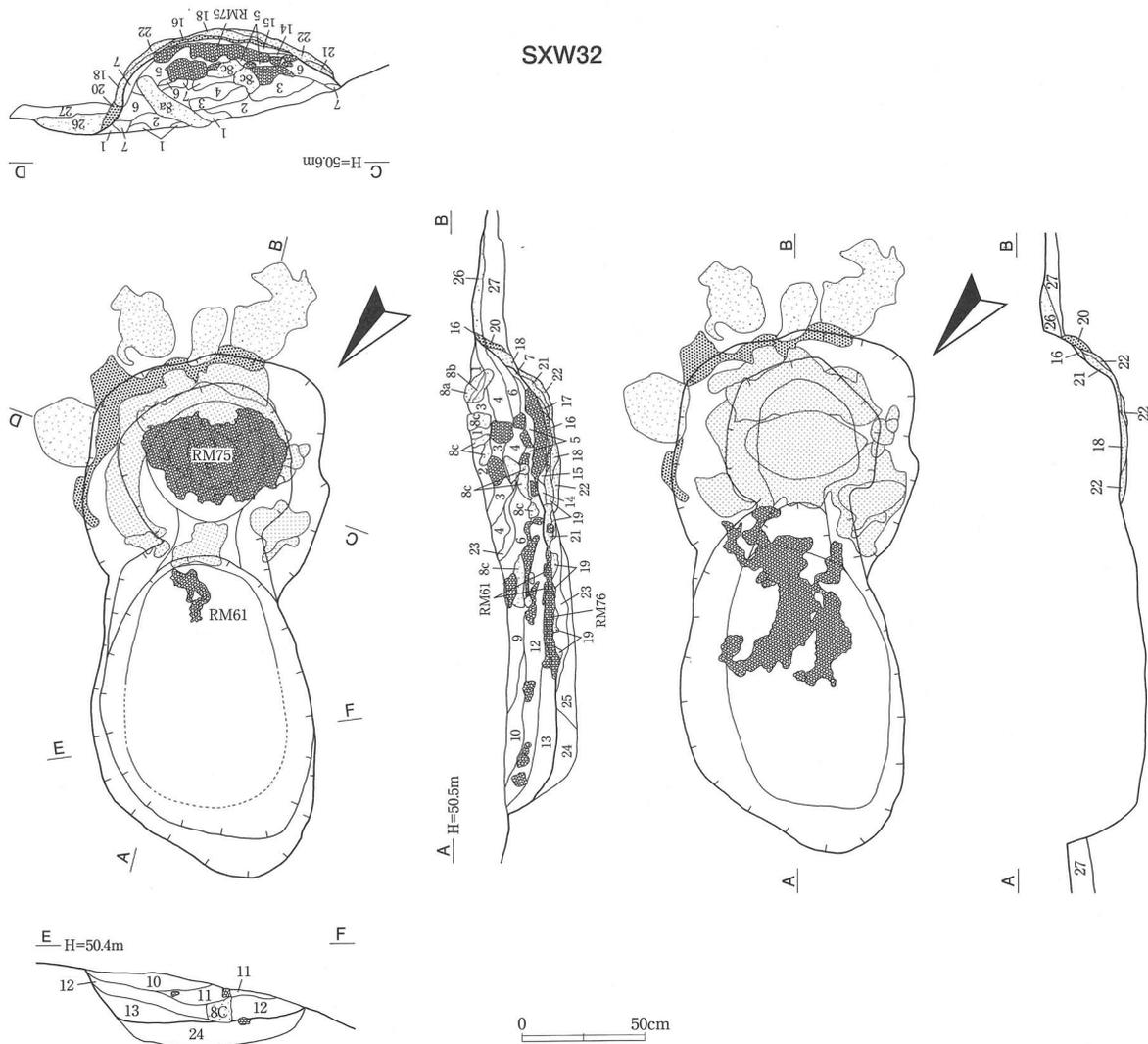


SXI14B 炉

1. 10YR3/3 (暗褐色) しまり極めて有、粘性有、炭化物少量、SXI14Aの貼床
2. 5YR4/6 (赤褐色) 焼土



第92図 SXI14A・B工房跡・SXW32鉄生産関連炉跡 (1)



SXW32 (新)

1. 10YR3/4 (暗褐) しまり無、粘性有、焼土粒微量、白粘土
2. 7.5YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性有、焼土多量
3. 10YR6/8 (明黄褐) しまり・粘性無、ボソボソ
炉壁 (外壁) 崩壊土
4. 7.5YR5/8 (明褐) しまり・粘性無、ボソボソ
炉壁 (内壁) 崩壊土
5. 7.5YR4/6 (褐) しまり・粘性無、ボソボソ、炉壁 (内壁) 崩壊土
6. 7.5YR3/2 (黒褐) しまり無、粘性有、焼土粒微量、流入土
7. 5YR4/6 (赤褐) 焼土ブロック
- 8a. 10YR5/8 (黄褐) しまり極めて有、粘性無
炉壁外壁
- 8b. 5YR5/8 (明赤褐) しまり極めて有、粘性無
炉壁内壁焼土化
- 8c. 7.5YR6/6 (橙) しまり極めて有、粘性無
炉壁内壁弱い焼土化
9. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性有
黄褐土ブロック・炭化物微量、小鍛冶滓少量
10. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有、小鍛冶滓・炭化物少量
11. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有、炭化物少量、小鍛冶滓多量
12. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有、炭化物微量、小鍛冶滓多量
13. 7.5YR2/1 (黒) しまり無、粘性有、小鍛冶滓多量

SXW32 (古)

14. 7.5YR4/4 (褐) しまり有、粘性無
15. 7.5YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性無、小鍛冶滓多量
16. 5YR5/6 (明赤褐) しまり極めて有、粘性無、焼土
17. 2.5Y4/2 (明灰褐) しまり有、粘性無
18. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性やや有 } 還元 (中性化)
19. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり極めて有、粘性無
20. 7.5YR3/2 (黒褐) しまり極めて有、粘性やや有、弱い焼土
21. 2.5GY (オリーブ灰) しまり極めて有、粘性無、強い還元部
22. 10YR17/1 (黒) しまり極めて有、粘性やや有、還元蒸焼
23. 10YR2/3 (黒褐) しまり有、粘性無、小鍛冶滓多量
24. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有、炭化物微量
25. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、小鍛冶滓多量
26. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性有、炉壁の基礎
27. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性有、炭化物少量、貼床

第93図 SXI14A・B工房跡・SXW32鉄生産関連炉跡 (2)

黒色土を基調とし、鍛冶滓類・炉壁片・焼土・炭化物を多量に含み、前庭部には小片が多く、炉内には大片が多く含まれる。全体的に下位埋土には小割された径1～3cmほどの小鍛冶滓が多く混じり堅く締まっていた。最終の作業面では炉底におよそ70×35cm、重さ約12kgの炉底滓と見まがう大きさの椀形滓(RM75)、湯口には作業によって流れ出た流状の鍛冶滓(RM61)が旧状を留めていた。

南側炉壁基部痕跡の黄褐色粘土が2ヶ所途切れている部分に羽口装着の可能性が考えられ、また倒壊した炉壁で原形をおよそ留めるものの高さが約20cmほどであったことと、廃滓場や炉壁の残骸も他に認められないことから、高さ30cm以下の炉壁が周堤状に巡っていたと考えられ、廃滓場もなく、想定される炉壁の高さと鍛冶滓が主体であることと鉄滓の成分分析結果からも精錬鍛冶炉の可能性が高い。

遺物は、土器類は埋土から土師器の甕形土器片が少量と須恵器の甕形土器片1点、羽口はK1検出面の完形1点(73)とSXW32出土及び埋土出土の口径を把握できた4個体と破片約50点、炉壁はSXW32から大量に、埋土及び床面から鍛冶滓が約7kg、K1から鍛冶滓約1.5kg、SXW32から鍛冶滓類約20kgと鉄塊系遺物1個、前庭部埋土から鍛冶剥片が微量出土した。

SX I 14Bは、西谷側が崩落により、北端がSW103、中央部がSXW32によって消失しており全容は不明だが、平面形・規模は、等高線と平行する北西-南東が長軸方向で、残存部分で長軸約4m、短軸約1.2m前後の山側が狭い台形状を呈し、残存する床面積は約4㎡である。遺存する壁は外傾して立ち上がり、壁高は山側で最大約10cmから谷側に向かい低くなる。埋土は黄褐色土混じりの黒色土の人為的堆積である。床面は谷側に向かいやや傾斜しているが、およそ平坦で堅締である。床面施設としては、北東部に浅い掘り込みの炉跡1基を検出したが、西半がSXW32によって消失している。残存部から平面形・規模は、径約40cmの略円形で、深さ約3cmの皿形と推定され、底面は火熱により厚さ約2cmほどが赤色変化していた。

遺物は、埋土から土師器の甕形土器片、坏形土器片、羽口片が各数点出土した。(小山内)

SX I 16工房跡、SXW18鉄生産関連炉跡 (第94図、遺物図版66、写真図版69・253・264・315・316)

E区緑10区の北側沢筋の斜面裾部、ⅦC-12rグリッドに位置し、検出面はⅢa層である。本遺構はSXW18鉄生産関連炉を伴う。検出時の状況は傾斜により斜面下方部が消失しており、炉体部であるSXW18の焼土と鍛冶剥片の広がり確認できた。当初、調査員の認識不足と検出面と埋土の色調が酷似していたため、竪穴状の掘り込みの無い鉄生産関連炉のみと判断し、焼土遺構的精査を行った後に熱残留地磁気測定を行ったため、SXW18及びSX I 16の東側半分を損壊させてしまった。その後鍛冶剥片の採集過程において、山側下層に更に広がる様相を呈したことにより、ベルトを設定して掘り進めた結果、工房跡であることが判明した。残存する平面形は略長方形を呈し、規模は西壁長約2.7m、北・南壁長約1mが残存し、床面積は3.2㎡であるが、検出状況時の鍛冶剥片の分布状況とその標高値から、長軸2.8m、短軸2m以上が推測される。長軸方向は等高線と平行する北-南方向にある。壁は斜面上方ではほぼ直角に立ち上がり、壁高は約30cmを測るが、斜面下方では遺存しない。埋土は3層に分かれるが、基本的には斜面上方から流入した黒色土系の自然堆積と思われる。床面は平坦で、遺構北側には鉄滓(RM1群)が山積みの状態で出土している。

床面施設として、北側にSXW18と土坑K1・K2が検出された。三者の位置関係は、北側中央にK1が位置し、その西側と接するK2・K1の南西方向に少し距離をおいてSXW18が位置する。

K1の平面形は略円形を呈し、規模は開口部45～55cm、底部径約20cmを測る。断面形は丸底鍋形を呈し、深さは最深部で17cmを測る。埋土は5層に分かれ、鍛冶剥片が中位から下位に多量混入している。また検出面から埋土1層には人頭大の自然石1個と10cm大の自然石数個が確認された。底面は堅く締まる。

K2の平面形は楕円形を呈し、規模は長軸約40cm、短軸約30cmを測り、長軸東方向の延長線上でK1と

接する。K 2 の断面形は皿状を呈し、深さは約5cmを測る。埋土は暗褐色土の単層で、小鉄滓を少量含む。底面は平坦で堅く締まる。

S X W18は精査の結果、掘り込みを有する炉であることが判明した。残存部から推定される平面形は円形で、規模は開口部径約40cm、底部径約20cmと推定される。断面形は皿状を呈していたと思われ、残存する深さは約5cmを測る。埋土は鍛造剥片・小鉄塊を少量含む黒褐色土である。底面及び壁面は極めて堅く締まり、それぞれ厚さ1cm前後の壁上半部は還元焼土、下半部から底面にかけては酸化焼土として褐灰色及び橙色に熱変化している。

遺物は、埋土中より羽口の破片が10点、ほぼ完形の羽口が中央床面から1点(78)、釘状鉄製品がK 1埋土中より1点、鉄塊系遺物がRM1群より2点出土している。また、炉内及びその周辺からは鍛造剥片や小鉄滓が多量に出土しており、以上の出土遺物及び床面施設の配置関係から、本遺構は鍛錬鍛冶炉を伴う工房跡と考えられる。

S X I 17工房跡、S X W29鉄生産関連炉跡（第94図、写真図版69・316）

E区緑10区の北側沢筋の斜面裾部、ⅦC-12s・13sグリッドに位置し、検出面はⅢa層である。本遺構には鉄生産関連炉としてS X W29を伴う。当初、試掘トレンチにより炭化物の広がりを検出したため炭窯と考えたが、精査の結果、堅穴状の掘り込みを有し、炉や付属する施設等が確認できたため、工房跡であると判断した。しかし試掘トレンチにより、遺構南東部は損壊してしまったため、詳細は不明である。残存部から推定される平面形は長方形を呈し、規模は長軸2.6m以上、短軸1.6m以上と思われる。残存する床面積は3.7㎡である。長軸方向は等高線に直行する西-東方向にある。残存する西・北壁はほぼ直角に立ち上がり、壁高は西壁で約50cm、北壁で約20cmを測る。埋土はⅢ層を起源とする黒褐色土の自然流入である。現存する床面は谷底に傾斜しているが、本来は平坦であったものと推測される。ところで、本遺構から1m程南側には基本層序ベルトが存在し、断面観察からは本遺構の立ち上がりは確認できないことから、その範囲にまでは及ばないものの、後述の床面施設の配置関係から、張り出し状の作業場の空間が広がっていたと推測される。

床面施設としては、炭化物の広がりを精査した結果、S X W29と土坑K1・K2を検出した。3基の位置関係は、遺構中央にK1が位置し、その東側にはS X W29が近接し、K2はS X W29南西側に半筒状の掘り込みにより連結する。

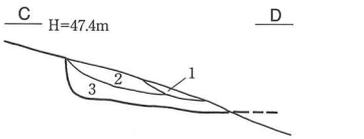
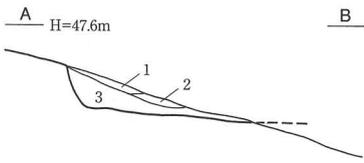
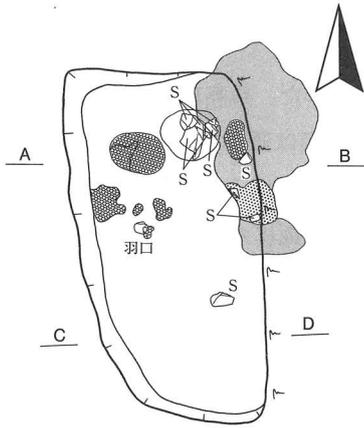
K 1の平面形は楕円形を呈し、規模は約60×50cmを測る。断面形は皿状を呈し、残存する深さは12cm前後を測る。埋土は3層に分層され、各層に炭化物を含む黒色土の堆積である。底面には締まりが認められる。

K 2の平面形は瓢箪形を呈し、規模は長軸約60cm、長軸と直交する2本の短軸はそれぞれ約35cm、約25cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは約10cmを測る。埋土は床面精査時に共に掘り切ったため、詳細は不明であるが、黒色土の単層であったと思われる。底面はほぼ平坦である。また、S X W29と連結する半筒状の掘り込みは、K2からS X W29に向かって約10°程下る勾配となっており、その高低差は2cm前後を測る。

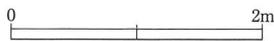
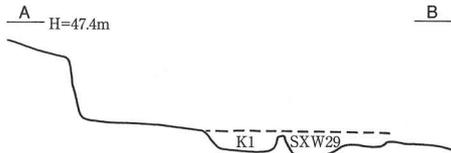
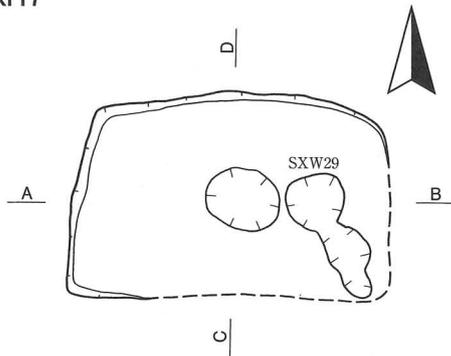
S X W29の平面形は円形を呈し、開口部径約45cm、底部径約30cmを測る。断面形は鍋形を呈し、深さは約15cmである。埋土は黒色土の3層から成り、下位には鍛冶滓及び炭化物が非常に多く含まれている。底面及び壁面は堅く締まり、青灰色の還元焼土と明黄褐・赤褐色の酸化焼土がそれぞれ広がっていたが、精査の際、調査員の説明不足により掘り過ぎてしまったため、厚さ等の詳細は不明である。

遺物は埋土中より土師器の甕形土器片1点、羽口片2点、鉄塊系遺物2点が出土している。S X W29埋土

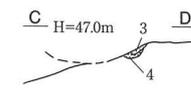
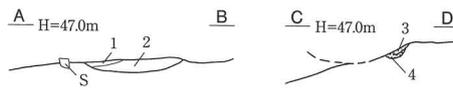
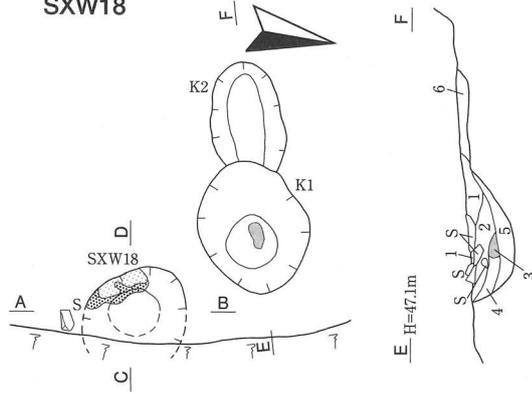
SXI16



SXI17



SXW18



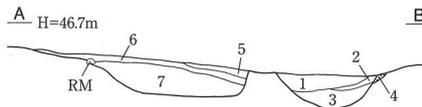
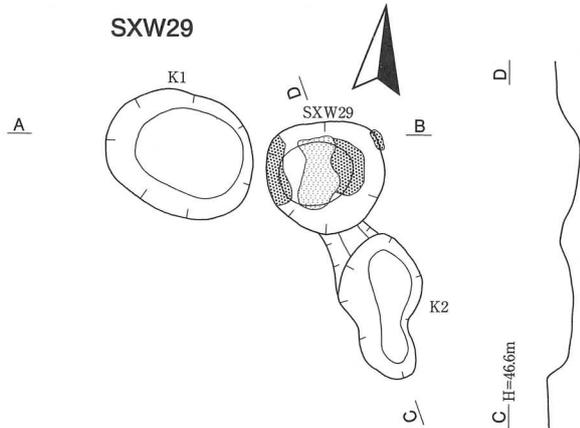
SXI16

1. 10YR2/1 (黒) しまり・粘性有、炭化物微量
2. 10YR1.7/1 (黒) しまり・粘性有
3. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有、焼土粒微量

SXW18

1. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性極めて有、焼土粒少量
 2. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有、鉄滓
 3. 10YR5/1 (褐灰) しまり極めて有、粘性有、鍛造剥片付着、還元色焼土
 4. 7.5YR6/8 (橙) 酸化焼土
- K1・K2
1. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有、小鉄滓少量
 2. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有
 3. 5B4/1 (暗青灰) しまり欠、粘性やや有、鍛造剥片層
 4. 10YR2/2 (黒褐) しまり有、粘性やや有
 5. 10YR3/3 (黒褐) しまり有、粘性やや有
 6. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有、黄褐色土粒・焼土粒混入

SXW29



SXW29

1. 10YR2/1 (黒) しまり・粘性有
 2. 10YR2/1 (黒) しまりやや有、粘性有、焼土粒微量、鉄滓少量
 3. 10YR1.7/1 (黒) しまり・粘性有、鉄滓少量
 4. 7.5YR4/8 (赤褐) 焼土
- K1
5. 10YR2/1 (黒) しまり・粘性有、炭化物少量
 6. 10YR1.7/1 (黒) しまり・粘性有、炭化物少量
 7. 10YR2/1 (黒) しまり欠、粘性有



第94図 SXI16・17工房跡・SXW18・19鉄生産関連炉跡

下位からは多量の鍛冶滓と炭化物が出土しており、これを鑑定した結果、クリであることが判った。

床面施設の配置関係及び形態から、S X W29炉体部を中心に、K 1は鉄砧石の抜き取り痕、S X W29とK 2の連結部分である半筒状の掘り込みは羽口の装着痕、K2はそれに繋がる送風施設であったと考えられる。以上により、本遺構は鍛冶工房であった可能性が高い。

S W75炭窯（第95図、写真図版70）

E区緑9区北側の東側斜面裾部、ⅦC-17q・17rグリッドに位置し、検出面はⅢa層及びⅥ層である。傾斜に立地しているため、遺構斜面下方は自然崩落により消失している。遺存部から推定される平面形は略長方形を呈し、規模は開口部約230×115cm、底部約205×90cmが遺存する。長軸方向は北西-南東方向にあり、等高線に平行する。遺存する壁は鋭角的に立ち上がり、壁高は東・南壁で約30cm、北壁で約5cmを測るが、西壁のほとんどは遺存しない。埋土は4層に分かれ、最下層には炭化物のまとまりがみられる。これらをサンプリングし鑑定した結果、クリであることが判った。底面はほぼ平坦で、厚さ1cm以下の赤褐色焼土の広がりが見られる。遺物は出土しなかった。

S W77炭窯（第95図、写真図版70）

E区緑10区の北側沢筋の斜面裾部、ⅦC-13sグリッドに位置し、検出面はⅢa層である。平面形は略楕円形を呈し、規模は開口部約120×95cm、底部約105×75cmを測る。長軸方向は西-東にあり、等高線に直交する。壁は鋭角的に立ち上がり、壁高は約10cmを測る。埋土は黒色の流入土と炭化物層の2層に分かれる。底面はほぼ平坦でしまりがある。遺物は炭化物層より出土した炭化物のみで、鑑定した結果、クリであることが判った。

（小林）

S W103炭窯（第95図、写真図版70）

E区緑9区の東側斜面中腹のⅦD-1aグリッドに位置する。S X I 14Bの床面で検出した。当初、S X I 14Bに伴う土坑と考えられたが、精査の結果、単独の炭窯と判断した。本遺構が新しい。平面形はおおよそ隅丸方形を呈し、規模は開口部110×100cm、底部105×85cm、断面形は深さ約35cmの箱形を呈する。埋土は上位に厚く黒色土、中位に薄く褐色土、下位に炭化物を含む黒色土、底面には残材の炭化物層が堆積する。底面はおおむね平坦で、北西側の壁際下位に火熱により厚さ1cm以下に赤色変化した焼土が部分的に認められた。遺物は出土しなかった。

（小山内）

S N21焼土遺構（第95図）

E区緑9区北側の谷底緩斜面部、ⅦC-15qグリッドに位置し、検出面はⅢa層である。不整な円形状の橙色焼土の広がり、規模は径約60cmを測る。中央部分は被熱が強かったためか黄橙色を呈する。厚さは4cm程で堅く締まる。遺物は出土しなかった。

S N22焼土遺構（第95図）

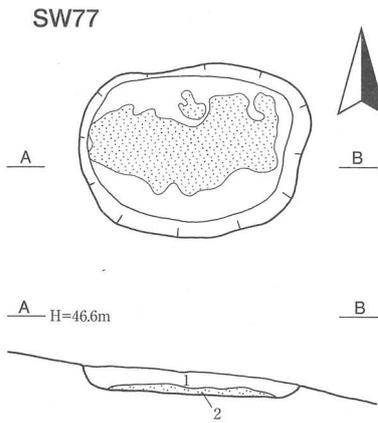
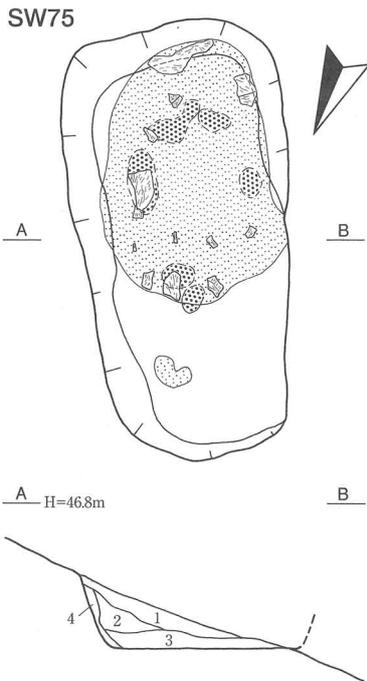
E区緑9区の谷底緩斜面部、ⅦD-17aグリッドに位置し、検出面はⅢa層である。円形を呈する赤褐色焼土の広がり、径約7cm、厚さ約2cmを測る。遺物は出土していない。

S N23焼土遺構（第95図）

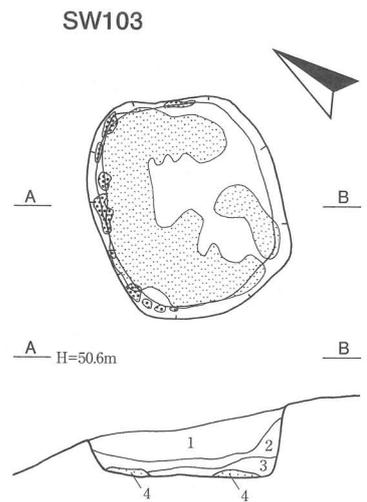
E区緑9区中央の東側斜面の中腹、ⅦD-19aグリッドに位置し、検出面はⅢa層である。円形を呈する赤褐色焼土の広がり、径約9cm、厚さ約2～3cmを測る。遺物は出土しなかった。

S N26炉跡（第95図、写真図版70）

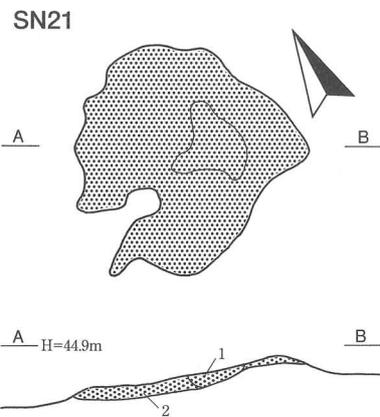
E区緑9区中央の東側斜面の中腹、ⅦC-20sグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。本遺構は斜面下方の大半を自然崩落により消失している。遺存する平面形は半円形であるが、本来は円形若しくは楕円



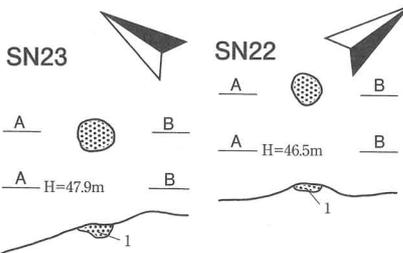
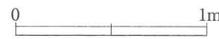
- SW77**
1. 10YR2/1 (黒) しまり欠、粘性有
炭化物少量
 2. 10YR1.7/1 (黒) しまり欠、粘性有
炭化物層



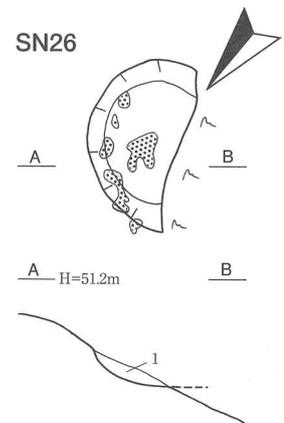
- SW103**
1. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有
 2. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性有
 3. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有
炭化物少量
 4. 10YR1.7/1 (黒) 炭化物層



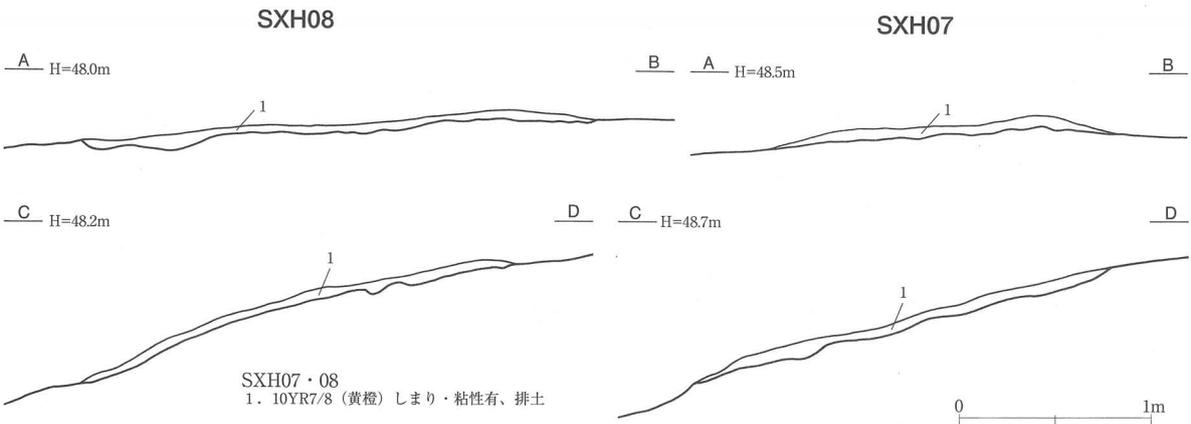
- SN21**
1. 10YR7/8 (黄橙) 焼土
 2. 7.5YR7/6 (橙) 焼土



- SN22・23**
1. 5YR4/6 (赤褐) 焼土



- SN26**
1. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性有



第95図 SW75・77・103炭窯・SN21・22・23焼土遺構・SN26炉跡・SXH07・08排土場

形を呈していたと思われる。遺存部から推定される規模は開口部径約90cm、底部径約60cmである。壁は斜面上方では緩やかに立ち上がり、深さ約7cmを測るが、斜面下方では遺存しない。埋土は暗褐色土の単層で自然堆積と思われる。底面は木根による攪乱のためやや凹凸がある。また底面には、厚さ1～2cm程の明赤褐色焼土が点々と広がっている。遺物は出土しなかった。(小林)

3) F区の遺構

F区は、調査区南端最高位部を要としてV字形に北側に延びる2本の幹尾根のうち東側の1本であり、この北端部が島田・中谷地遺跡として宮古市教育委員会によって昭和60年度に調査が実施されている。地形概況としては、尾根の先端部は上記発掘調査後、岩手県立宮古短期大学の建設に伴い掘削され消失しているが、D区同様にV字の要部分であるD区赤22区から北方向の尾根先端部に向かい階段状に段差を持ち、緩急の傾斜で順次高度を下げていく。調査区北端では北東方向に延びる枝尾根(赤25C区)があり、この東側斜面には現況で数ヶ所棚状の狭い平場が認められた。中央にはテラス状の狭い枝尾根(赤25D区)があり、両側は洞状(赤25A・B区)となっており、部分的ではあるが比較的緩い傾斜となっているが、全体的には尾根筋の両側は急勾配の斜面となって谷底に至る。標高は最高位部D区赤22区から先端の平坦部(赤24区)までのおよそ250mの距離で約86mから53m前後と標高差が約33m、尾根部と谷部の平均的な比高は20～30mほどである。尾根筋の緩斜面部分は、やはりD区同様に山側の馬の背状の狭い部分とやや平坦で広い部分が交互にあるが、D区ほど段の形成は複雑ではない。また、この各区とした段を繋ぐ部分は急傾斜となっている。尾根頂部の幅は、比較的広い部分でも6m以下、馬の背状の部分では1m前後である。

検出された主な遺構は、掘立柱建物跡2棟、竪穴住居跡56棟、工房跡31棟、竪穴状遺構20棟、鉄生産関連炉14基、炭窯13基、土坑78基、炉跡13基、焼土遺構8基、溝跡7条、廃土場6ヶ所、陥し穴1基(縄文)、不明遺構1基などがある。分布の状況は、尾根頂部各区の平坦部や緩斜面部、及び北部の比較的緩く棚状の平場がある東斜面を中心に集中し、幹尾根の西向き急斜面にも一部立地している。(小山内)

①赤23・24区

赤23・24区は、F区幹尾根頂部を主体とし、段地形により南北に2分した。赤23区はD区最高位部である赤22区から分岐して下る尾根の南側であり、南半部は尾根頂部幅1～2m前後と明瞭な平坦部がなく比較的急傾斜、北半部は平面的にはS字状に蛇行する緩傾斜となって北方向に低くなる。南北の傾斜の変換点あたりには北東方向に大きな枝尾根(赤27区)が延びる。北半部では現況で西側向きの谷頭部分が幅約6m、長さ約20mの広さで棚状の平坦部を形成しており、状況からみて人工的に削平整地されたものと思われる。その西側斜面下は森林伐採時の掘削によって、現状では段差があるものの本来は尾根頂部から続く緩斜面であったと思われる。北半部の尾根頂部の標高は約70m、整地平坦部では68m前後、斜面下では60m前後である。東西両側の斜面は急傾斜で西側斜面下には緑9区谷部へと続く。赤24区は赤23区から急傾斜で一段下がった尾根上であり、段地形により南北に2分し、南側をA区、北側をB区とした。A区南半部では比較的緩い斜面、北半部では尾根頂部幅1m前後と狭い馬の背状を呈している。南半部は作業の都合上赤24区に区別しているが、本来隣接し同一コンタ上にある赤23区西側斜面下と一連のものであると思われる。B区は尾根頂部に現況で幅5m前後、長さ約30mほどの平坦部を形成しており、表土が薄い上に遺構もほとんど埋土が無く床面を検出したことから人工的に削平整地されたものと思われる。調査区外の尾根先端部は前述のとおり掘削され消失している。標高はA区では60m前後、B区では53m前後である。東西両側の斜面は急傾斜で西側斜面下には緑8区が、B区北側からは北東に延びる枝尾根(赤25区)が続く。

遺構は、縄文時代の陥し穴1基と、古代の竪穴住居跡、工房跡、竪穴状遺構、鉄生産関連炉跡、炭窯、土坑、炉跡、焼土遺構、溝跡、排土場、性格不明遺構などがある。分布状況としては、赤23区には竪穴住居跡18棟、工房跡5棟、竪穴状遺構8棟、炭窯4基、土坑23基、炉跡5基、焼土遺構2基、溝跡2条、廃土場1ヶ所、性格不明遺構1基、赤24区には竪穴住居跡12棟、工房跡10棟、竪穴状遺構7棟、掘立柱建物跡2棟、鉄生産関連炉跡1基、炭窯2基、土坑21基、炉跡3基、焼土遺構2基、溝跡4条、柱穴群2ヶ所、廃土場2ヶ所が位置し、赤23区では大半が北半の整地平坦部に、赤24区では尾根頂部を中心に集中し、この西側斜面にも一部立地する。(高原)

S I 48竪穴住居跡 (第96図、遺物図版67・86・119、写真図版71・253・275・301)

F区赤23区ほぼ中央の西斜面、ⅦD-10gグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。煙出しピット付近をSN15炉跡に切られており、新旧関係はS I 48が古い。平面形はいびつな隅丸長方形で、規模は北壁長2.1m、南壁長2.8m、東壁長3.4m、西壁長2.8mである。主軸方位はN-1°-Wで、床面積は約6㎡である。壁はやや外傾して立ち上がるが、崩落の著しい東壁は中ほどから上部にかけて大きく外傾し、北壁も上部が外傾する。壁高は北壁が約90cm、南壁が約80cm、東壁が約150cm、西壁が約20cmを測る。埋土は褐色土系で13層に細分される自然堆積である。床面は木根の影響による凹凸がみられ、貼床は西側部分に施されている。

カマドは北壁のやや西寄りに付設されており、構築土と構築材と思われる人頭大から握り拳大程度の石が9個ほど煙道入り口付近に一部折り重なるように検出された。本体は石を芯材とした構造と考えられ、燃焼部の東側には1個の石が構成時と同様と思われる状態で存在し、西側には径10~20cmの芯材の抜き取り痕と思われる窪みが3基検出された。燃焼部には径40~50cmの不整な円形で、厚さ約10cmの橙色の焼土が広がる。煙道は削り貫き式で奥行き100cmを測り、下り勾配を保ちながら煙出し部へと続く。煙出し部は上部をSN15に切られており不明な点は残るが、ピット径約30cm、深さは残存部で約60cmを測る。

遺物は土師器の甕形土器片が埋土中から数点、土製品が床面から羽口1・2の接合で1点(79)、要石が1点(46)、鉄製品は釣針(?)が埋土上層から1点(41)、鉄鏃が埋土下層から1点出土した。

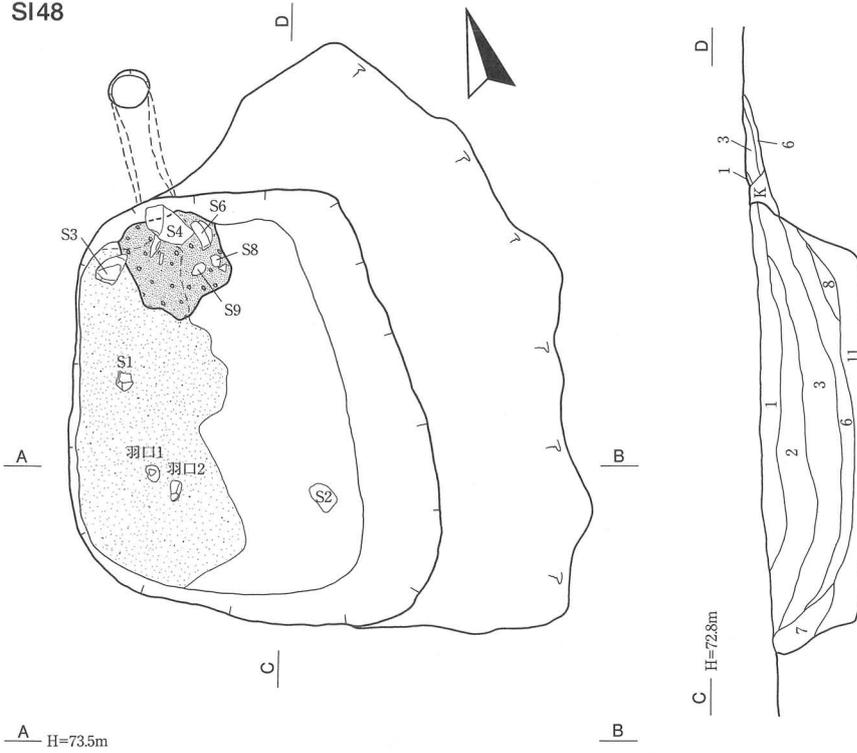
S I 49A・B竪穴住居跡 (第97・98図、遺物図版18・86、写真図版72・221・222・275)

F区赤23区北半の整地平坦部南端、ⅧD-10c・10dグリッドに位置する。検出面はⅣ層上面である。検出時の状況としては、複数の竪穴住居跡が重複する不整なプランがみられ、精査の結果、S I 49Aの南西部分に小規模のS I 49Bの重複が確認され、平面状況からS I 49Aの方が新しいことが判った。更にS I 49Aも掘り上がりの平面形態、断面形態から単独の遺構ではなく一回り小型の住居からの作り替えが行なわれたと考えられる。しかしかなりの部分が作り替えの際に壊されていることや、重複関係が把握しきれず全体を掘り上げてしまったため、個々の全容は不明である。東壁の北側一辺と北壁、西壁の一部に作り替え前の住居の平面形状が現れていると考えられ、旧住居はS I 49Aの主に北側に位置していたと思われる。

S I 49Aの掘り上がりの平面形は山側東部が扇形に広がった不整な五角形を呈する。規模は北壁長約4.2m、東壁長約6.2m(北側一辺約2.8m・南側一辺3.4m)を測り、南壁長約300cm、西壁長約4mである。主軸方位はE-37°-Nで、床面積は約19㎡である。壁は外傾して立ち上がり、壁高は北壁で60cm、南壁で50cm、東壁で90cm、西壁で20cmを測る。埋土は褐色土系で8層に分けることができ主に自然堆積と思われるが、重複のみられる西壁付近ではブロック混入土もあり人為的と思われる部分もある。床面はやや凹凸がみられ、谷側の西部から中央一帯にかけて貼床が施されている。南西端には廃棄焼土と茶系の粘土質土の混じった50×60cmほどの広がり、鉄滓が検出された。床面施設としては柱穴が3基検出された。

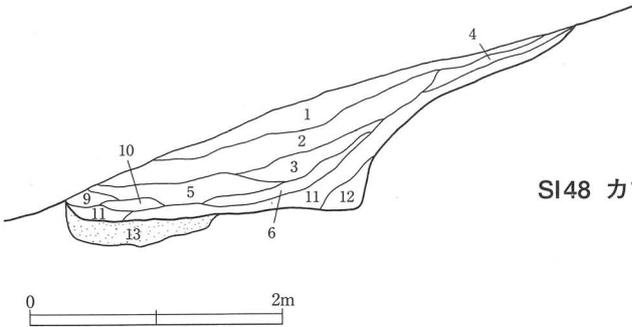
カマドは北東隅に付設され、崩壊した構築土がカマドに関係すると思われる3個の石と焼土を伴って広が

SI48

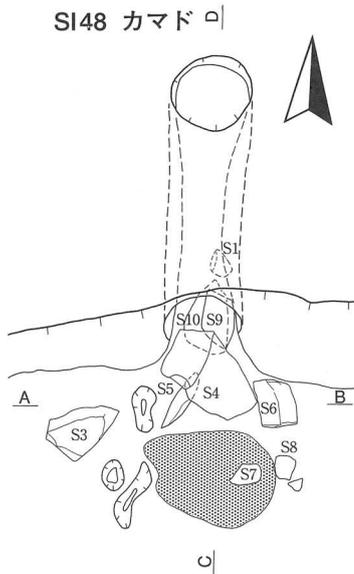


A H=73.5m

B

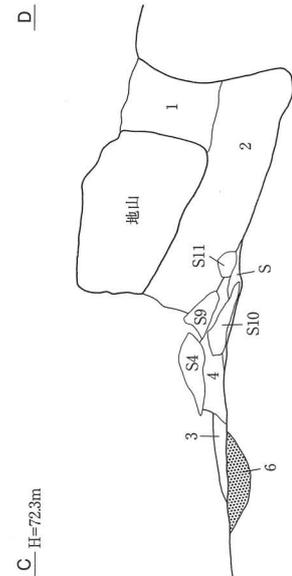


SI48 カマド



A H=71.9m

B



C H=72.3m

0 50cm

SI48

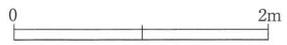
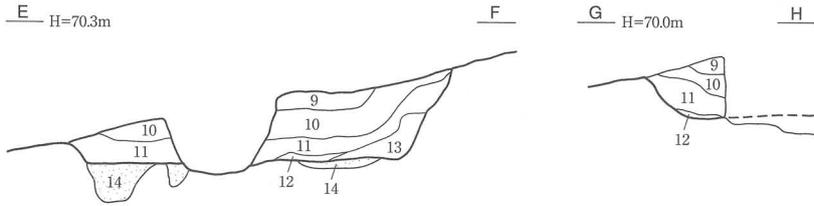
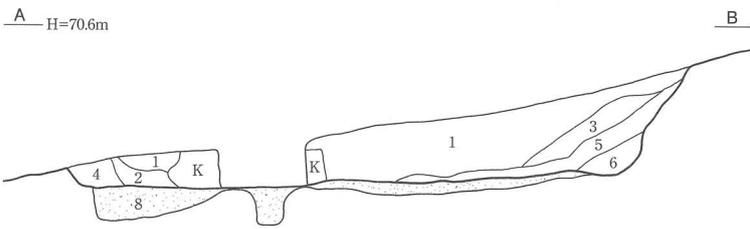
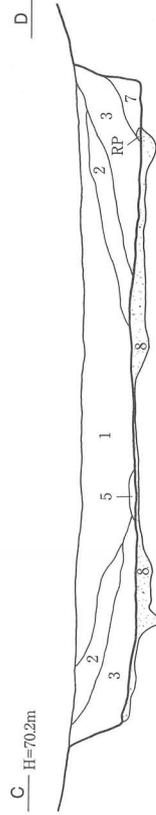
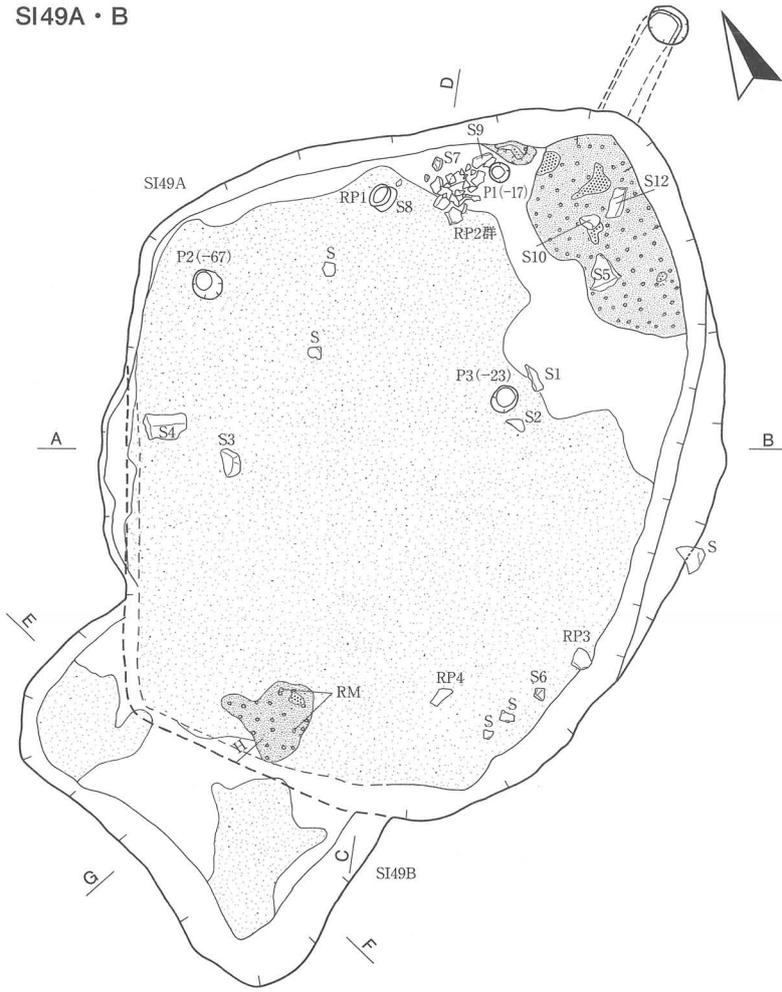
1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有、マサ土ブロック混入有
2. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性やや有、マサ土ブロック混入有
3. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有、暗褐色土を多量、炭化物微量
4. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり・粘性やや有、にぶい黄褐色土多量
5. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性やや有、炭化物微量
6. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性やや有
7. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり・粘性やや有
8. 10YR6/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性無
9. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
10. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、炭化物微量
11. 10YR8/4 (浅黄橙) しまりやや有、粘性無
12. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無
13. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無

SI48 カマド

1. 10YR6/8 (明黄褐) しまり・粘性やや有
2. 10YR7/6 (明黄褐) しまり・粘性やや有
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有、焼土粒微量
4. 10YR7/6 (明黄褐) しまり・粘性やや有
5. 10YR7/6 (明黄褐) しまり・粘性やや有
6. 5YR8/4 (淡橙) 燃焼部焼土

第96図 SI48竪穴住居跡

SI49A・B



SI49A

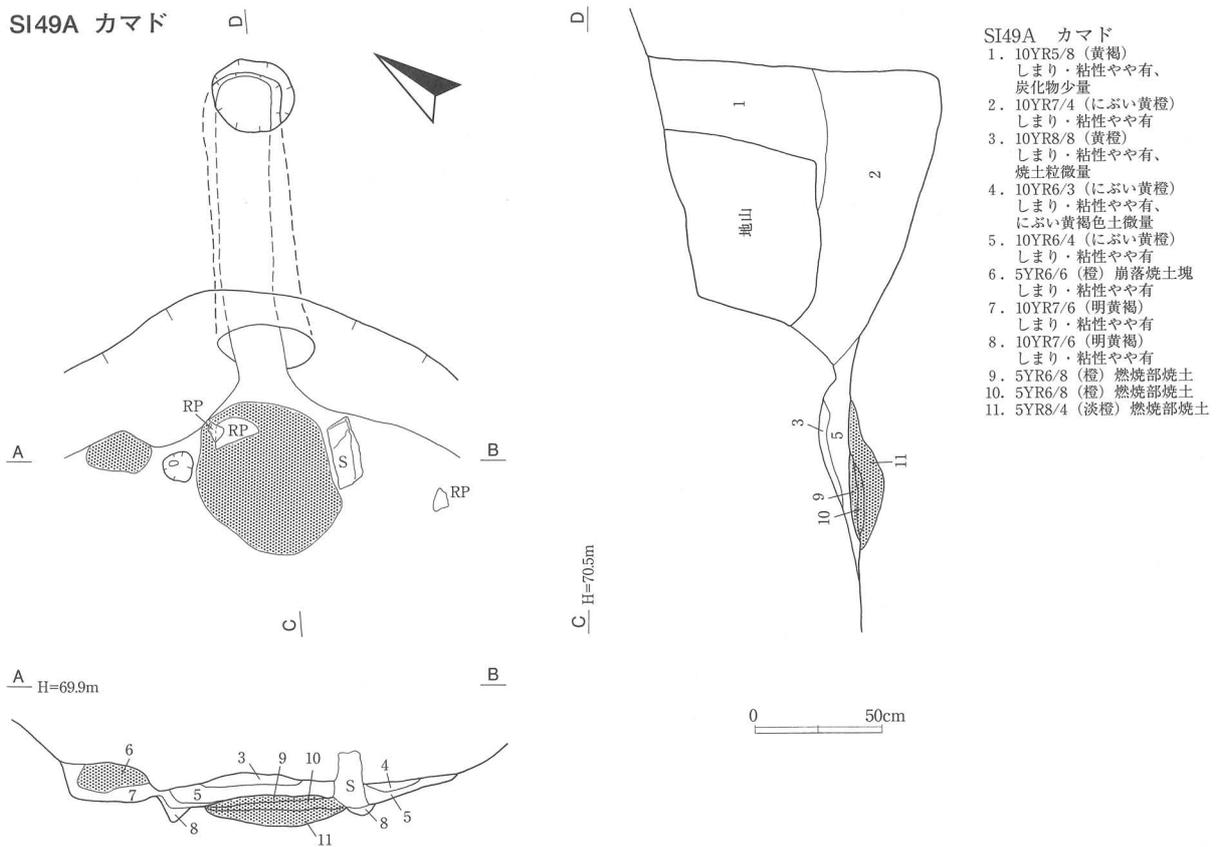
1. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有、黄褐色土ブロック・炭化物少量
2. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有、暗褐色土ブロック少量
3. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性有、炭化物少量
4. 10YR6/8 (明黄褐) しまり・粘性有、にぶい黄褐色土混入
5. 10YR7/6 (明黄褐) しまり欠、粘性極めて有
6. 10YR8/6 (黄橙) しまり欠、粘性極めて有
7. 10YR5/6 (黄褐) しまり欠、粘性極めて有、明褐色土混入
8. 10YR8/4 (浅黄橙) しまり有、粘性やや有、貼床

SI49B

9. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有、炭化物微量
10. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性やや有、炭化物少量
11. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性有
12. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり・粘性有
13. 10YR7/8 (黄橙) しまり・粘性有
14. 10YR8/8 (黄橙) しまり有、粘性やや有、貼床

第97図 SI49A・B竪穴住居跡 (1)

SI49A カマド



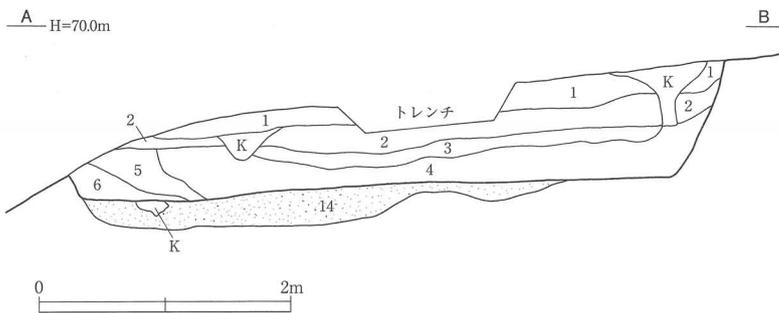
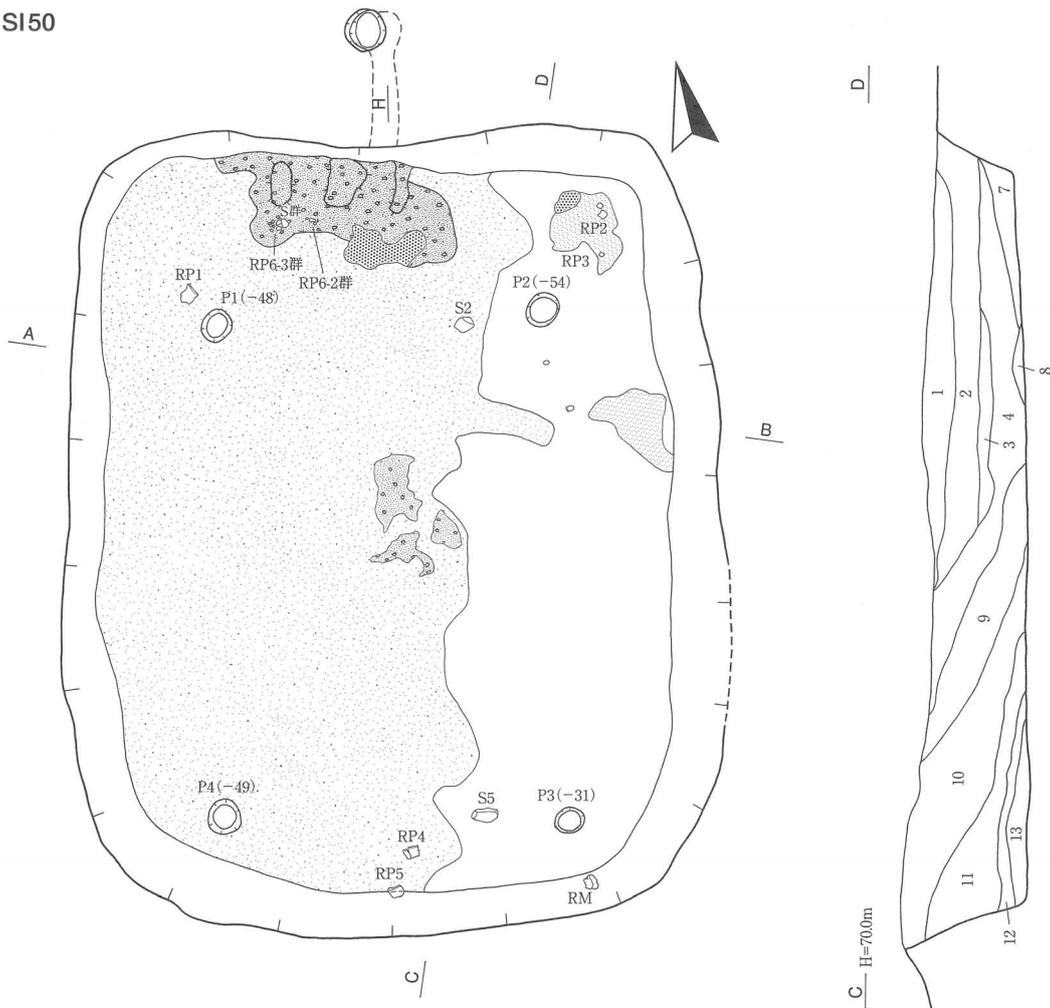
第98図 SI49A・B竪穴住居跡 (2)

る。石のひとつは30×10cmほどで燃焼部焼土の東外側に突き刺さっており袖の芯材として使用された形状を残している。燃焼部焼土の西側には径10cmほどの石の抜き取り痕が確認された。燃焼部には径50～60cmの円形で、厚さ約10cmの橙色焼土が広がる。煙道は削り貫き式で奥行き110cmを測り、下り勾配を保ちながら煙出し部へと続く。煙出し部は径約30cmで垂直に掘り込まれており深さは110cmである。

SI49Bの平面形は残存部から方形基調とみられ、残存部分での規模は北壁長で約1.3m、南壁長で1.7m、西壁長で約3mである。壁は外傾して立ち上がり南東壁で70cm、南西壁で40cm、北西壁で20cmを測る。埋土は褐色系の6層であるが特に南側の堆積層において堅く締まり人為的に堆積したと思われる。床は平坦で堅く、西隅と南隅には貼床が施されている。本遺構は竪穴住居跡としたが特に平面形・規模から竪穴住居跡とは断定しがたい点も残る。

遺物のすべてはSI49A出土のものである。須恵器が埋土中及び床面からそれぞれ1点(198・199)、土師器の甕形土器がRP2の接合でほぼ完形品となり1点(193)、RP1及びRP3の接合で2点(191・192)、カマド付近から1点(194)、埋土中から2点(195・196)、破片が9号袋半分、坏形土器が1点(197)、破片1点、須恵器の甕形土器片2点、羽口片4点、鉄製品の刀子が埋土中から1点、砥石が3点(63・64・65)と磨石が数点、鉄滓が少量出土した。

SI50



SI50

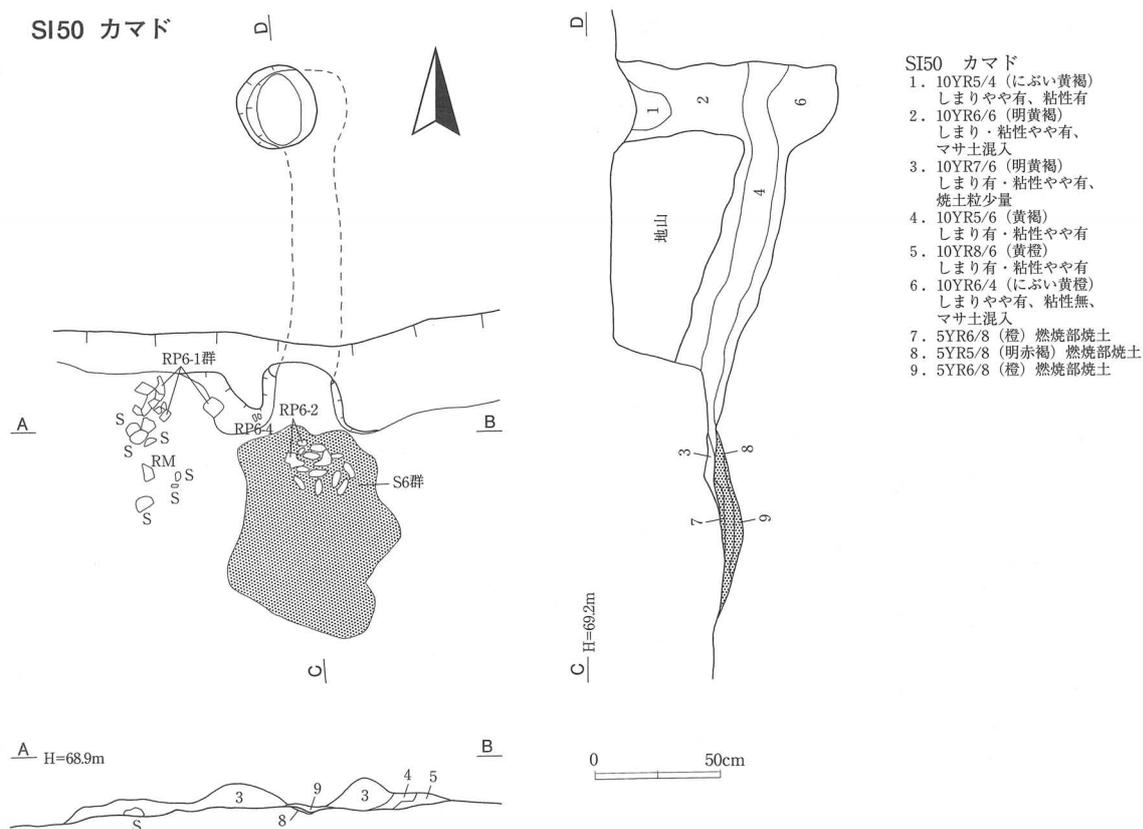
1. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性有
2. 10YR7/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性欠
3. 10YR7/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有、にぶい黄橙色土少量、炭化物微量
4. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性やや有、黄橙色粘土質土斑に混入、炭化物微量
5. 10YR6/8 (明黄褐) しまり有、粘性やや有、マサ土斑に混入
6. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有、炭化物微量
7. 10YR6/8 (明黄褐) しまり有、粘性やや有、焼土ブロック少量、炭化物微量
8. 10YR7/6 (明黄褐) しまり・粘性やや有
9. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性やや有、マサ土混入
10. 10YR7/6 (明黄褐) しまり・粘性やや有、黄橙色土粒・マサ土混入、炭化物少量
11. 10YR7/8 (黄橙) しまり極めて有、粘性有、マサ土混入
12. 10YR8/4 (浅黄橙) しまり有、粘性やや有、マサ土多量
13. 10YR7/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有、炭化物微量
14. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有、貼床

第99図 SI50竪穴住居跡 (1)

S I 50 竪穴住居跡 (第99・100図、遺物図版18・19・86・119、写真図版73・222・275・301)

F区赤23区北半の整地平坦部南側、ⅧD-10b~10cグリッドに位置する。検出面はⅣ層上面である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は北壁長約4.6m、南壁長約4.8m、東西壁長がそれぞれ約6.4mを測る。主軸方位はN-7°-Eで、床面積は約24.5㎡である。壁は外傾して立ち上がり、北壁約70cm、南壁約100cm、東壁約90cm、西壁約20cmを測る。埋土は褐色土系で20層に細分されるが、基本土層Ⅳ・Ⅴ層を構成する土が極めて締めりをもった状態で堆積している。特に下層部で南側からの流入をみせる層においてその傾向が顕著で南に隣接する遺構を掘った際の投げ込まれたものと推測され、人為堆積と考えられる。床面は平坦で堅く締めり、貼床は西側半分に施されている。中央部には100×120cm、100×170cmほどで厚さ1~2cmの赤みを帯びた酸化土と茶色の粘土が極めて堅く締まった状態で広がりを見せている。北東隅と東壁中央付近には双方とも40×50cm程度の広がりで廃棄された炭化物があり、北東隅の炭化物には廃棄されたと思われる焼土も混入していた。床面施設としては柱穴が4基検出され、配置・規模から支柱穴と思われる。

カマドは北側ほぼ中央に付設され、崩壊した構築土は広範囲に広がりを見せている。カマドの一部を構成していた壁の作り出し部分はわずかにみられるが袖は確認されなかった。燃焼部の上に握り拳よりやや小さめの丸石が10個ほど置かれていた。同様の置き石が西に1m離れたところにもみられる。目的、意図については不明である。燃焼部は径約40×50cm、深さ4~5cmほど皿状に窪み、約50×80cmの略方形で、厚さ約



第100図 SI50竪穴住居跡 (2)

10cmの橙色焼土が広がりを見せる。煙道は削り貫き式で奥行き120cmを測り、下り勾配を保ちながら煙出し部へと続き、煙出し部の立ち上がり部分では深さ14~15cm程度の窪みになっている。煙出し部は径約30cmで垂直に掘り込まれており深さは90cmである。

遺物は、須恵器が1点(209)、土師器の甕形土器がRP6群の接合で4点(201・203~205)、床面から1点(200)、カマド付近から1点(206)、埋土から1点(207)、柱穴(P1)から1点(202)、土師器の坏形土器が床面から1点(208)出土した。この他、砥石が埋土中及び床面からそれぞれ1点(66・67)、磨石が埋土中から2点(68・69)、鉄製品は、釘と刀子が埋土中からそれぞれ1点、鉄鐸が床面から1点(43)、釣針(?)がカマド付近から1点(42)、鉄滓が埋土中及び床面から少量出土している。(赤石)

S I 69竪穴住居跡、S N 86炉跡・S X H 09廃土場

(第101・102図、遺物図版19・87・119、写真図版74・222・275・301・302・316)

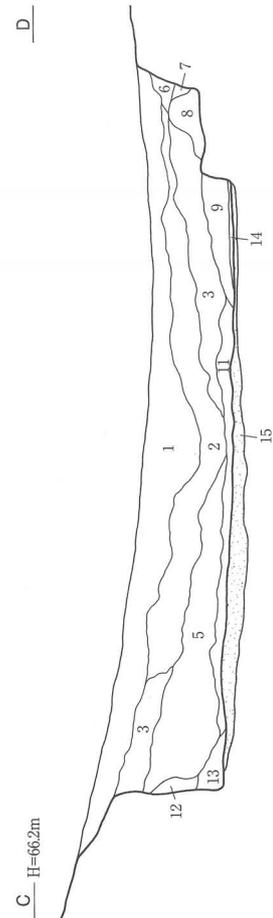
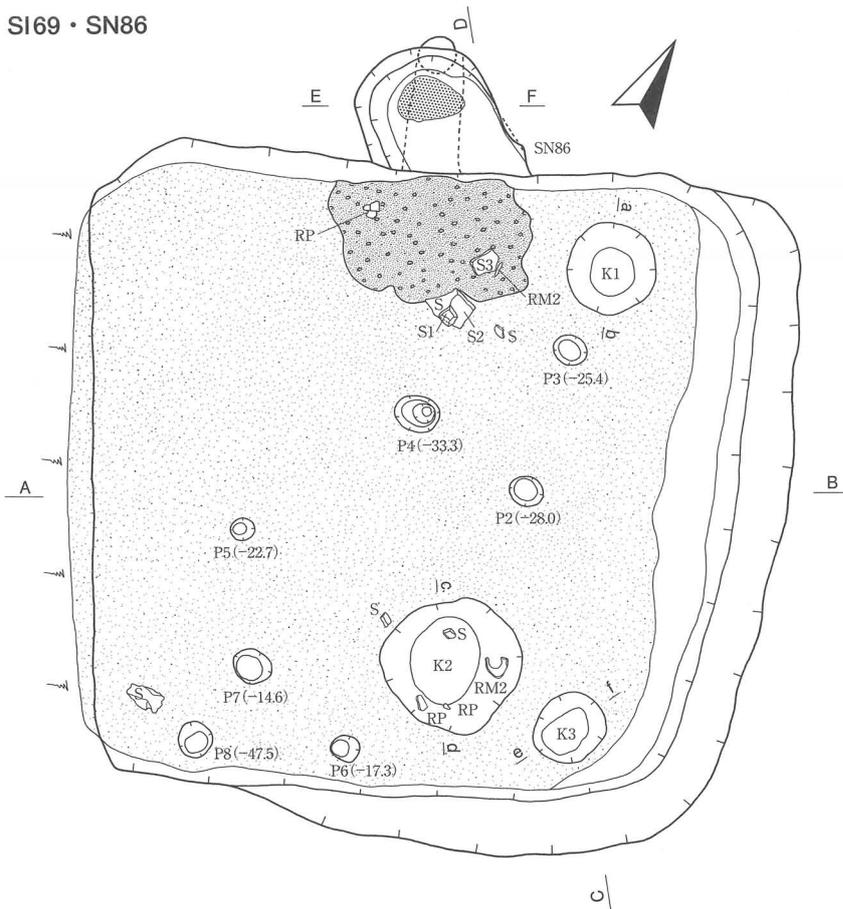
赤23区北半部、ⅧC-7r・8rグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。SK I 29・SX 44・SK T 02と重複関係にあり、これらの遺構を切っている。また、北壁並びにカマド煙道煙出し部を掘り込みのあるSN 86炉跡が切っているが、断面からこの立ち上がりを確認することができなかった。このことからみてこの炉が本遺構を切っているというよりは廃棄後の完全に埋まりきっていない窪みを利用した炉ないし工房があった可能性が考えられる。SX H 09はS I 69の南西斜面下に位置し、検出当初、明黄褐色土が人為的に埋められた不整形のプランを呈することから、人為的に埋められた遺構ではあるものの、竪穴住居跡等の遺構の可能性が低いと、性格不明遺構として精査を開始した。精査の結果、壁面・床面は確認されずに自然斜面が検出され、埋土が上位から明黄褐色土・暗褐色土と基本層序の逆順に堆積していることから、状況から見て斜面上に位置するS I 69構築時の廃土が堆積したものであると判断した。

S I 69は平面形・規模は北壁は5.2m残存し、東壁は5m遺存し、南壁は4.8m残存していることから一辺5m前後の隅丸形状を呈するものと思われる。主軸方位はN-26°-W、床面積は残存部分で23.7㎡を測る。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は東壁で118cmを測り、北壁・南壁は西に向かうにつれて低くなっていく。埋土は上位は黒褐色土、中位は暗褐色土、下位は褐色土を主体とした自然堆積を呈し、15層に細分された。床面は平坦で堅く締まり東壁際以外の全面に貼床が施されている。床面施設として住居北東・南東コーナー付近より土坑3基(K1~K3)、住居北西部以外の床面より柱穴が7基検出された。K1の平面形は円形状を呈し、径73×70cm、断面形は逆台形状を呈し、深さ42cmを測る。K2の平面形は楕円形状を呈し、径111×99cm、断面形は皿状を呈し、深さ12cmを測る。K3の平面形は楕円形状を呈し、径59×52cm、断面形は皿状を呈し、深さ11cmを測る。

カマドは北壁中央に位置する。本体部の残存状況はあまり良くない。両袖はにぶい黄褐色質粘土で構築されたのではないかとと思われる。燃焼部は60×58cmの略円形状を呈する、深さ2cmの掘り込みの底部に径51×44cmの略円形状の、厚さ9cmの焼土が形成されている。煙道部は長さ1.34m、幅42cmの削り貫き式の煙道で下り勾配で煙出し部へ続いている。煙出し部は31×29cmの楕円形状を呈し、深さ110cmを測る。

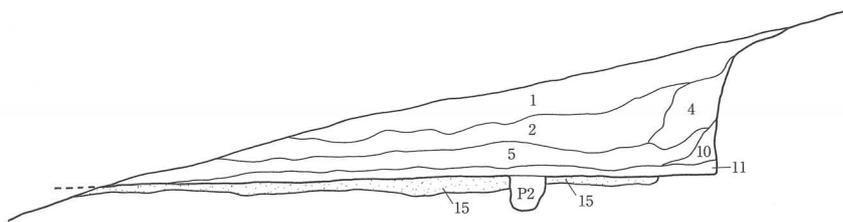
S N 86炉跡は前述のように平面形・規模は不明だが、長軸106cm、短軸103cm、深さ29cmの掘り込みの北側底部に径51×35cm、厚さ6cmの焼土が形成されている。遺物は土師器が小袋1袋分、須恵器片が3点、羽口片が3点、石製品が3点(砥石・敲石・磨石各1点)、鉄製品が5点(鋤先・刀子・筒状・釘各1点、板状2点)と鉄滓が出土している。このうち掲載した遺物は床面より出土した砥石(70)、S1の敲石(71)、刀子(44)、カマドより出土した筒状鉄製品(46)と板状鉄製品(48)、K2土坑から出土したRM1の鋤先(45)、埋土中より出土した土師器(210・211)と須恵器(212)と板状鉄製品(47)と釘(49)である。

SI69・SN86



A H=66.2m

B

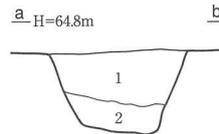


0 2m

SI69

1. 10YR2/3 (黒褐) しまり無、粘性有、褐色土多く、炭化物・焼土少量
2. 10YR3/4 (暗褐) しまり無、粘性有、褐色土多く、炭含む
3. 10YR4/6 (褐) しまり無、粘性有、黄褐色土含む
4. 10YR4/4 (褐) しまり無、粘性有、浅黄橙色土・炭含む
5. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性有
6. 10YR4/4 (褐) しまり無、粘性有、炭含む、焼土微量
7. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性有
8. 10YR4/4 (褐) しまり無、粘性有、浅黄橙色、炭含む
9. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性有、黄褐色土少量、炭・焼土含む
10. 10YR7/8 (黄橙) しまり少し有、粘性有、褐色土多く、炭含む
11. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性有、浅黄橙色土多く、褐色土含む、炭微量
12. 10YR7/8 (黄橙) しまり無、粘性有、褐色土多く、炭化物・焼土微量
13. 10YR4/4 (褐) しまり無、粘性有、炭含む
14. 10YR7/8 (黄橙) しまり極有、粘性少し有、褐色土混入、炭含む
15. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、貼床

SI69 K1

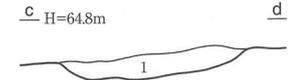


SI69 K1

1. 10YR4/6 (褐) しまり極有、粘性無、暗褐色土多く、炭含む
2. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性少し有、炭少量

0 1m

SI69 K2



SI69 K2

1. 10YR5/8 (黄褐) しまりやや有、粘性少し有、炭含む

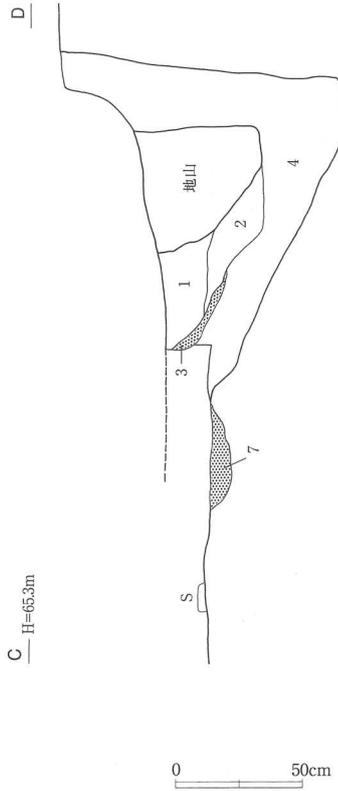
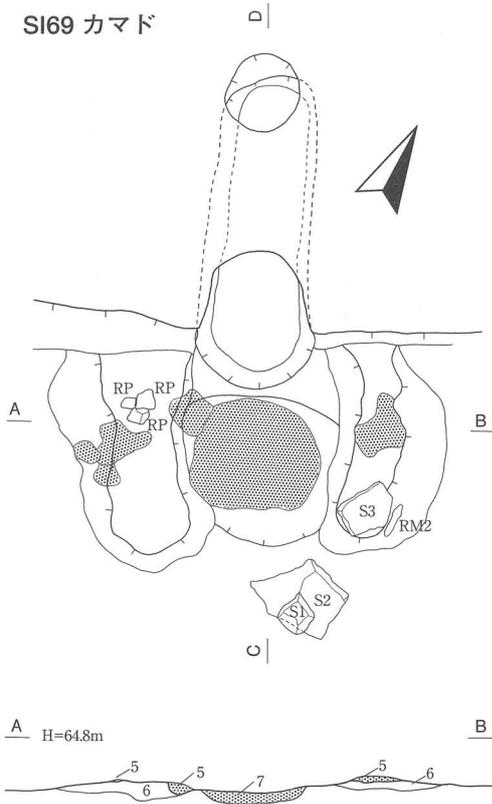
SI69 K3

e H=64.9m f



第101図 SI69竪穴住居跡・SN86炉跡 (1)

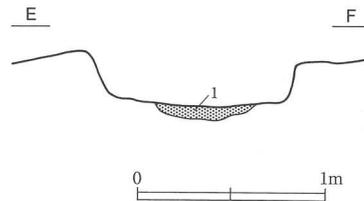
SI69 カマド



SI69 カマド

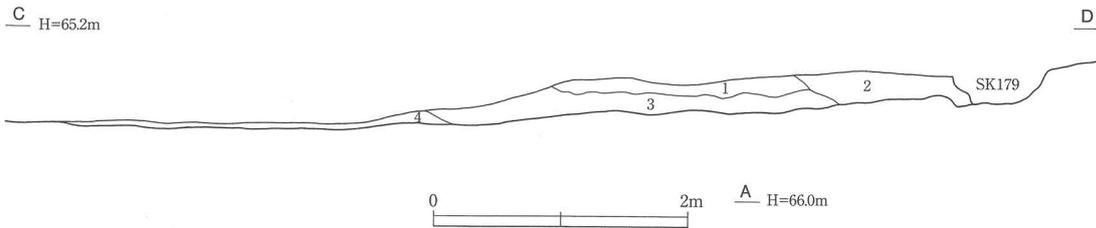
1. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無、マサ土・炭を微量
2. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性少し有、炭・焼土含む
3. 2.5YR4/6 (赤褐) しまり極有、粘性無
4. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性少し有、炭少量
5. 10YR6/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、炭少量
6. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極有、粘性無、炭・焼土含、袖土
7. 2.5YR5/8 (明赤褐) 焼土

SN86



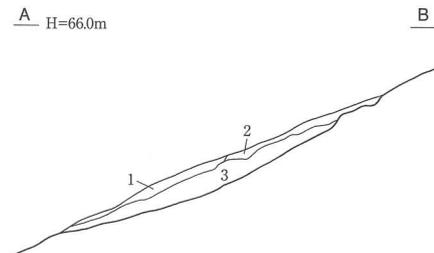
- SN86
1. 5YR6/4 (にぶい橙) 焼土

SXH09



SXH09

1. 10YR6/8 (明赤褐) しまり有、黄褐色土多く炭化物少量
2. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、炭化物少量
3. 10YR4/6 (褐) しまり有、炭化物微量
4. 10YR6/8 (明黄褐色) しまり有



第102図 SI69竪穴住居跡・SN86炉跡(2)・SXH09排土場

S X H 09の平面形・規模は7.2×2.5mの不整形を呈し、最大厚28cmを測る。埋土は上位に明黄褐色土、中位に暗褐色土、下位に褐色土の人為堆積である。

遺物は埋土中より土師器甕片が4点、羽口片が5点と鉄滓が出土している。

S I 70B 竪穴住居跡、S X I 67 工房跡 (第103図、遺物図版67、写真図版75・253)

赤23区北半部から赤27区に枝分かれする尾根の谷頭、ⅧC-10pグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。森林伐採時の道路の削平によって東側を消失しており、検出時から南壁中央壁際にある掘り込みをもつ炉と貼床が見えていたので、そこから床面を出していったが、検出当初から単独の竪穴住居跡であると思いきりこんでいたためカマド付近の床面を燃焼部焼土がでるまで掘り込んでしまった。精査途中で床面レベルが合わないことに気づき断面を再検討した結果、単独の竪穴住居跡ではなく、古い竪穴住居跡(S I 70B)を貼床して工房跡(S X I 67)に建て替えしたものであると判断した。よって新旧関係は(新)S X I 67→(旧)S I 70Bである。

S X I 67は東側斜面が消失しているため全体の平面形・規模は不明であるが、西壁は2.7m遺存し、北壁は1.7m、南壁では0.8m残存していることから一辺約2.7mの隅丸方形を呈したものである。床面積は残存部分で7.3㎡を測る。壁は西壁・南壁はやや外傾して立ち上がり、北壁は下半部は鋭角的に立ち上がり上半部は外半している。壁高は西壁で26cmを測り、南北壁では東側に向かうにつれて低くなっていく。埋土は暗褐色～黄橙色土を主体とした自然堆積を呈している。床面はほぼ平坦で堅く締まり全面に貼床が施されている。床面施設として西壁際から壁溝と南東床面から掘り込みを有する炉が検出された。周溝は一部とぎれるが長さ1.18m、幅18～24cm、深さ10cmを測る。炉は33×25cmの楕円形を呈し、深さ1.5cmの掘り込みの底部に22×12cmの楕円形状を呈する厚さ3cmの焼土が検出された。

S I 70Bは平面形・規模はS X I 67と同じで、主軸方位はN-22°-E、床面積は残存部分で6.9㎡を測る。壁は西・南壁はやや外傾して立ち上がり、北壁は下半部は鋭角的に立ち上がり上半部は外半している。壁高は西壁で40cmを測り、北壁・南壁は東側に向かい低くなっていく。床面はほぼ平坦で締まっている。

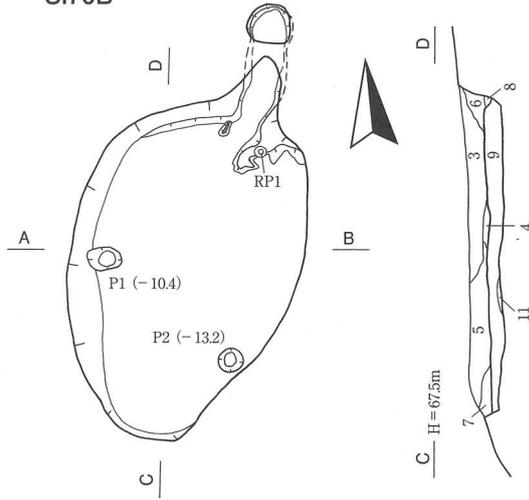
カマドは北壁に位置する。本体部はわずかに左袖の一部と右袖を残すのみで残存状況は不良である。袖部は褐色質粘土で構築され、支脚は轆の羽口を転用している。燃焼部は明瞭な焼土は確認されなかった。煙道部は長さ84cm、幅33cmの削り貫き式の煙道で下り勾配で煙出し部に続いている。煙出し部は34×31cmの円形を呈し、深さ59cmを測る。

遺物は埋土中より須恵器片が1点、羽口片が貼床中より2点、S I 70Bのカマドより1点出土した。このうち掲載した遺物はR P 1の羽口(80)1点で、S I 70Bのカマド支脚に転用されている。また、S X I 67炉付近のサンプル土から、わずかに鍛造剥片が出土したことから鍛冶工房の可能性が考えられる。

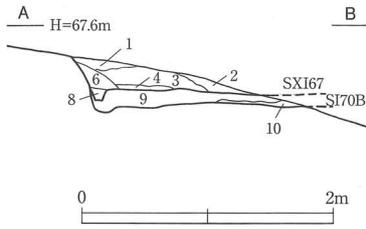
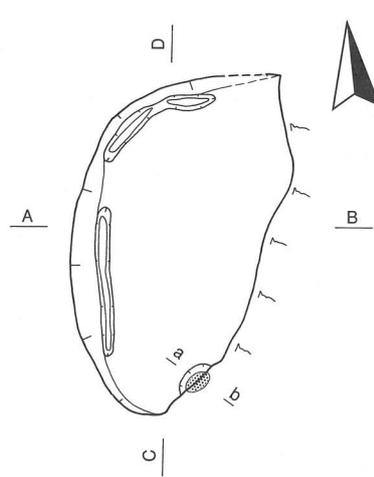
S I 71 竪穴住居跡 (第104図、遺物図版67、写真図版75・253)

赤23区北半部から赤27区に枝分かれする尾根の南側斜面上、ⅧC-10°・11°グリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出した。南西コーナー付近でS W 79に切られ、北西コーナー付近でS K 184を切っており、新旧関係は(新)S W 79→S I 71→(旧)S K 184である。東側斜面が崩落しているため平面形・規模は不明であるが、平面形は隅丸方形を呈し、規模は西壁で2.2m遺存し、北壁で1.7m、南壁で1.5m残存している。主軸方位はN-30°-E、床面積は残存部分で6.4㎡を測る。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は西壁で54cmを測り、北壁・南壁では東側に向かうにつれて低くなる。埋土はにぶい黄褐色土を主体とした自然堆積を呈し、床面近くでは炭を含んだ黒褐色土の広がりが見られる。床面はほぼ平坦で堅く締まり全面に貼床が施されている。

SI70B



SXI67



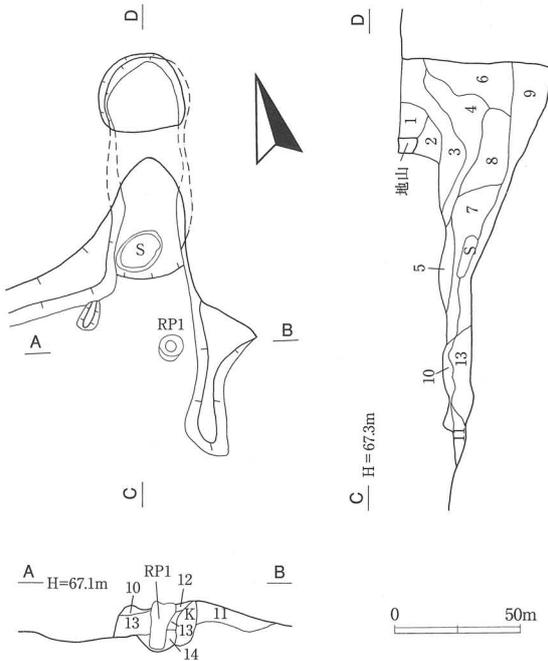
SXI67

1. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり少し有、粘性無、暗褐色土・炭少量
2. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無、明黄褐色ブロック・炭含む
3. 10YR7/6 (明黄褐) 砂質土、しまり少し有、粘性無、暗褐色ブロック・炭少量
4. 10YR8/6 (黄橙) しまり有、粘性少し有
5. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性無、明黄褐色ブロック・炭少量、焼土を含む
6. 10YR8/6 (黄橙) しまり有、粘性少し有
7. 10YR7/8 (黄橙) しまり有、粘性無
8. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり無、粘性無、黄橙色土少量、にぶい黄褐色土含む

SI70B

9. 2.5Y8/3 (淡黄) しまり有、粘性少し有、黄橙色ブロック混入、炭微量
10. 10YR7/2 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、暗褐色土少量、炭含む
11. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、にぶい黄橙・炭多く含む

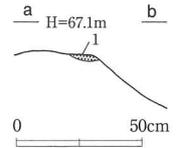
SI70B カマド



SXI67 炉

SXI67 炉

1. 2.5YR5/8 (明赤褐) 焼土

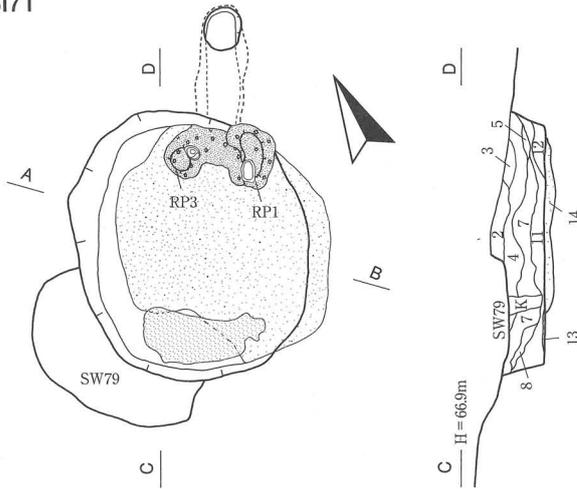


SI70B カマド

1. 10YR7/6 (黄橙) しまり有、粘性無、マサ土少量
2. 10YR8/4 (浅黄橙) しまり有、粘性無、炭・マサ土少量
3. 10YR8/6 (黄橙) しまり少し有、粘性無、マサ土・炭含む
4. 10YR7/6 (明黄褐) しまり無、粘性有、黄橙色土少量、炭含む
5. 10YR8/4 (浅黄橙) しまり有・粘性無、マサ土少量
6. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、淡黄色土多く含む
7. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、淡黄色土多く含む
8. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、淡黄色土多く含む
9. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり無、粘性無、マサ土・焼土微量
10. 5YR5/8 (明赤褐) しまり極有、粘性無、黄橙色土・炭含む
11. 10YR3/1 (黒褐) しまり有、粘性無、炭・焼土多く含む、袖
12. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性少し有、黒褐色土・マサ土含む
13. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性無、炭少量、焼土含む
14. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、支脚の掘り方の埋土

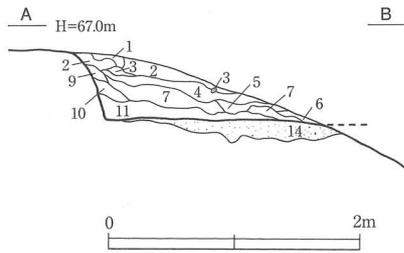
第103図 SI70B竪穴住居跡・SXI67工房跡

SI71

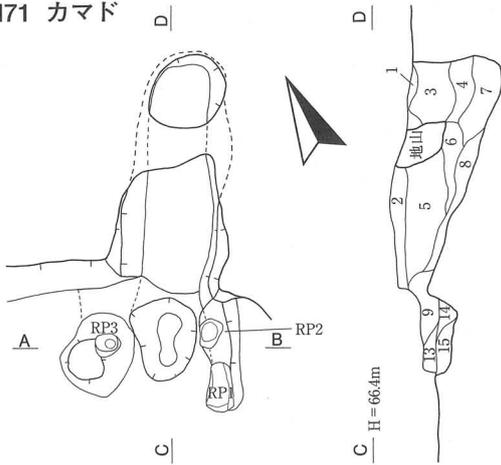


SI71

1. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無、にぶい黄橙色土・炭含む
2. 10YR8/4 (浅黄橙) しまり少し有、粘性無、にぶい黄褐色土混入
3. 10YR4/4 (褐) しまり無、粘性無
4. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり少し有、粘性無、浅黄橙色土混入
5. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、暗褐色土・炭含む
6. 10YR3/2 (黒褐色) しまり有、粘性無、暗褐色土・炭・焼土粒含む
7. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり無、粘性無、にぶい黄褐ブロック少量
8. 10YR7/6 (明黄褐) しまり有、粘性無、にぶい黄褐色土少量
9. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、にぶい黄褐色土を多く、炭含む
10. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無、にぶい黄褐色土混入、炭含む
11. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
12. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無、にぶい黄褐色土多く、炭含む、焼土少量
13. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性少し有、炭層
14. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭微量、マサ土含む、貼床

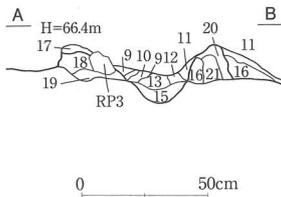


SI71 カマド



SI71 カマド

1. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性無、マサ土少量、焼土粒微量
2. 10YR8/4 (浅黄橙) しまり有、粘性無、(崩落土)
3. 7.5YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性無、黄褐色土少量、炭・焼土粒微量
4. 7.5YR4/4 (褐) しまり少し有、粘性やや有、黄褐色土少量、炭化物を含む
5. 10YR8/6 (黄橙) しまり少し有、粘性無、にぶい黄褐色土含む、炭少量
6. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性少し有、黄褐色土少量、炭含む
7. 10YR3/3 (暗褐) しまり無、粘性少し有、浅黄褐色土少量、炭含む
8. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、炭・焼土粒含
9. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性少し有、炭・焼土粒含む
10. 2.5YR4/6 (赤褐) しまり有、粘性無、褐色土・炭含む
11. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性無、暗褐色土・炭・焼土粒少量
12. 2.5YR8/3 (淡黄) しまり無、粘性無、にぶい黄褐色土含む
13. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性少し有、炭・焼土粒少量
14. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性少し有、炭・焼土粒・マサ土微量
15. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性無、炭・焼土粒・マサ土少量含む
16. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭・焼土多く、袖
17. 2.5YR4/8 (赤褐) しまり有、粘性無、炭少量
18. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性少し有、炭含む、袖
19. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極有、粘性少し有、炭含む、袖
20. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性やや有、袖土
21. 7.5YR4/6 (褐) しまり有、粘性少し有、熱変した袖土



第104図 SI71竪穴住居跡

カマドは北壁に位置する。本体部は天井が崩落しているものの残存状況は比較的良好であったが、燃焼部分を掘り過ぎた為、燃焼部焼土の状況は不明である。袖部は韃の羽口を芯材として褐色質粘土で構築されている。支脚は確認されなかったが、燃焼部中央から31×29cmの円形状を呈し、深さ8.6cmを測るピットが検出されており支脚の据え方の穴と考えられる。煙道部は長さ1.02m、幅38cmの削り貫き式の煙道で下り勾配で煙出し部へ続く。煙出し部は31×27cmの円形を呈し、深さ37cmを測る。

遺物はカマドより韃の羽口3個体、埋土中より土師器甕の破片が5点出土した。この内掲載した遺物は韃の羽口3点(81~83)で、R P 2(82)とR P 3(83)はカマド右袖からR P 1(81)は左袖から出土した。

S I 72 竪穴住居跡 (第105・106図、遺物図版20・67・87・120、写真図版76・222・223・254・275・276・302)

赤23区北半部、ⅧC-7qグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。検出時には南側に隣接するS X 44を切っている竪穴住居跡として精査を開始した。東コーナー付近を精査中に廃棄された焼土の広がりからS K 189に切られ、S K 188を切っていることを確認し、また南壁中央を精査中にS K T 02のプランを検出し、同遺構を切っている事を確認した。なおS K 188・S X 44・S K T 02との新旧関係であるが、S X 44の精査段階で同遺構がS K 188に切られ、S K T 02を切っていることを確認していることから、新旧関係は(新)S K 189→S I 72→S K 188→S X 44→(旧)S K T 02である。

平面形は隅丸形状を呈し、規模は北西壁で4.8m、北東壁で4.7m、南東壁で4.5m、南西壁で4.6m、主軸方位はW-40°-N、床面積は17.5㎡を測る。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は北東壁106cm、南西壁22cmを測り、西側に向かうにつれて低くなる。埋土は上位は褐色土、中位は暗褐色土、下位はにぶい黄褐色土を主体とした人為堆積を呈し、22層に細分された。南側方向から投げ込まれた土が多い堆積状況を呈しており、南側約1mに隣接するS I 69竪穴住居跡が自然堆積を呈し、かつ同時存在が考えられないほど近接していることから、S I 69構築時に出た廃土を本遺構に投げ込んだ可能性が考えられる。床面は平坦で堅く締まり北東壁際1m前後を除いた全面に貼床が施されている。床面施設として北東壁際と南東壁中央から東側にかけて周溝が、柱穴が北西壁際近くから2基(P 4・5)、南東壁際から3基(P 1・2・3)検出されたが、位置的に支柱穴とはなりえるのはP 3とP 4であると思われる。カマドは北西壁中央に位置する。本体部の残存状況は不良である。

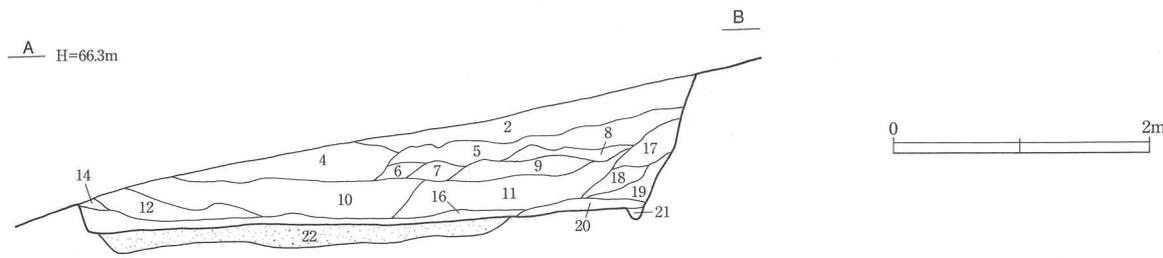
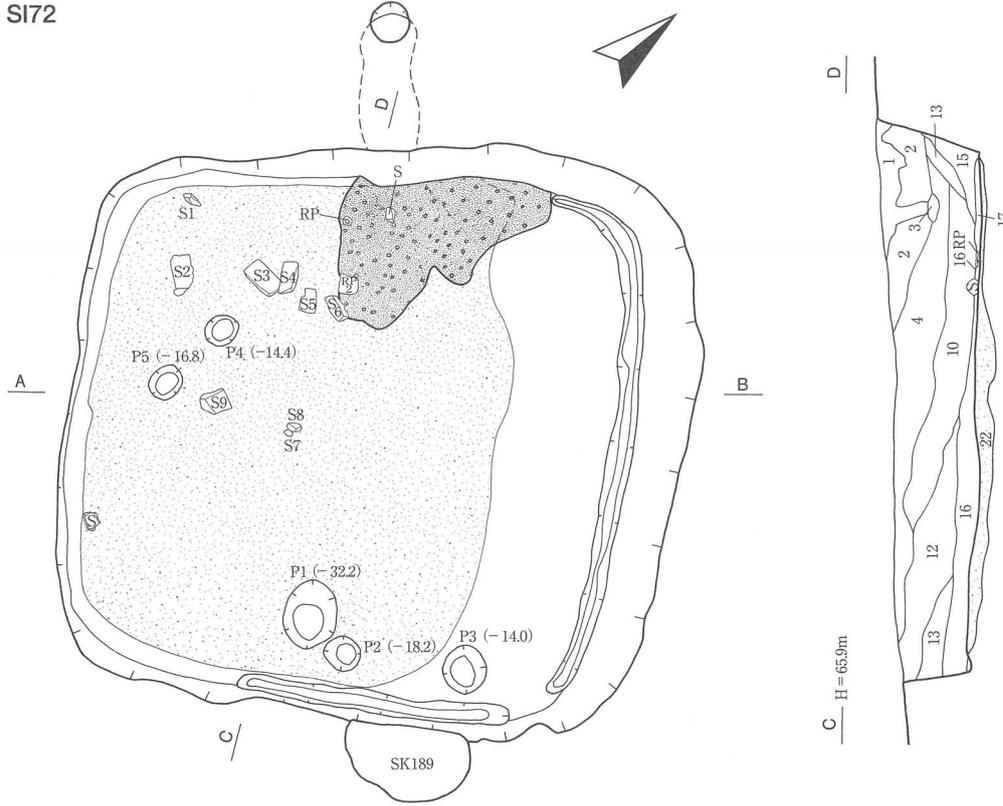
カマド周辺には袖の芯材に使われたと思われる角礫が散在していることから住居廃棄時に壊した可能性が考えられる。袖の一部を掘りすぎてしまったが、前述の角礫と左袖は羽口を使用して芯材とし褐色質粘土で構築されたのではないかとと思われる。燃焼部は径72×67cmの楕円形状に浅く掘り込まれ、径56×54cmの略円形状を呈する厚さ8cmの焼土が形成されている。燃焼部の奥には垂角礫が据えられており、支脚として使用されたものと思われる。煙道部は長さ1.26m、径48cmの削り貫き式の煙道で下り勾配で煙出し部へ続いている。煙出し部は34×33cmの円形を呈し、深さ139cmを測る。

遺物は土師器が9号袋1/2袋分、羽口が6点、石製品が4点(砥石3点、磨石1点)と鉄滓が出土している。このうち掲載した遺物は土師器4点、羽口、砥石3点、磨石1点、刀子1点で、カマドよりR P 4(213)・R P 5(215)・(216)の土師器甕3点とR P 6の羽口(84)を掲載した。(84)の羽口はカマド左袖の芯材に転用されている。また、床面から出土した遺物で掲載したものはR P 1の土師器甕(214)、S 6(72)・S 3(73)・S 1(74)の砥石3点、S 7の磨石(75)、刀子(50)である。

S I 73 竪穴住居跡 (第107図、遺物図版67・87・88・120、写真図版77・254・277・302・316)

赤23区北半部、ⅧC-6p・6qグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。本遺構はS I 130構築時に人為的に埋められている上にカマド燃焼部付近をS K 278に切られている。よって新旧関係は(新)S I 130→S

SI72



SI72

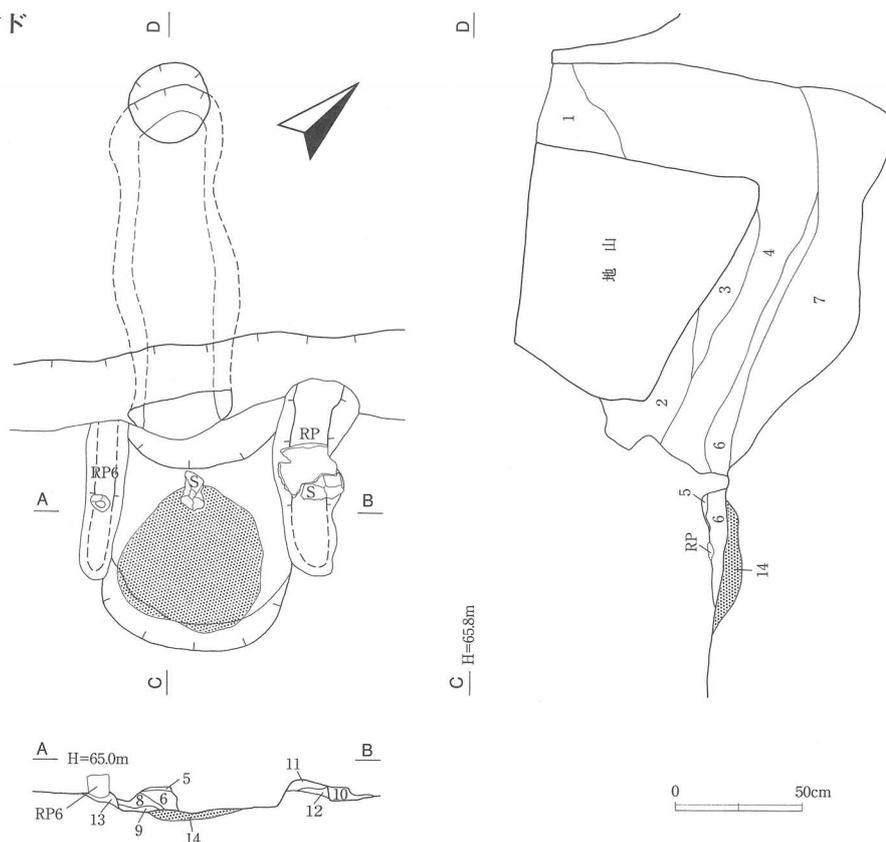
1. 10YR3/3 (暗褐) しまり少し有、粘性無、マサ土少量、炭含む
2. 10YR6/8 (明黄褐) しまり有、粘性有、暗褐色土・炭・焼土粒・マサ土少量、褐色土多く含む
3. 10YR4/4 (褐) しまり少し有、粘性有、明黄褐色土少量、炭含む
4. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性少し有、褐色ブロック多く、黄褐色ブロック・炭・焼土粒を含む
5. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性有、明黄褐・浅黄橙色土・炭・焼土含む
6. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性少し有、明黄褐色ブロック多く、浅黄橙色土・炭・焼土含む
7. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有、明黄褐・浅黄橙少量、炭微量
8. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性有、暗褐・浅黄橙色土少量、炭微量
9. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性有、明黄褐色ブロック多く、浅黄橙ブロック・焼土少量含む
10. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有、褐色ブロック多量、浅黄橙色ブロック・焼土含む
11. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有、褐色・浅黄橙色ブロック多く、炭・焼土含む
12. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性有、明黄褐・浅黄橙少量、炭・焼土微量
13. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性有、明黄褐色・暗褐色土・炭少量
14. 10YR4/4 (褐) しまり少し有、粘性少し有、浅黄橙・明黄褐色土多量、炭微量
15. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性有、黒褐色土少量
16. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有、褐色土多量、黒褐・炭少量
17. 10YR7/6 (明黄褐) しまり極有、粘性少し有、マサ土含む
18. 10YR6/8 (明黄褐) しまり有、粘性無、マサ土含む
19. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無、マサ土・炭含む
20. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性有、暗褐色土・炭少量
21. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、マサ土少量
22. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極有、粘性少し有、黄褐色土混入、炭含む、貼床

SI72 カマド

1. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性少し有、炭含む
2. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、明黄褐色土・炭含む
3. 2.5Y8/4 (淡黄) しまり無、粘性無
4. 10YR6/8 (明黄褐) しまり有、粘性無、褐色土・炭・焼土含む
5. 5YR4/8 (赤褐) しまり極有、粘性無
6. 7.5YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性無、炭・焼土多く含む
7. 5YR4/8 (赤褐) しまり少し有、粘性無
8. 7.5YR3/4 (暗褐) しまり少し有、粘性無、炭含む
9. 5YR4/8 (赤褐) しまり少し有、粘性無
10. 10YR4/6 (褐) しまり極有、粘性少し有、炭・焼土含む
11. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性少し有、炭・焼土含、袖
12. 10YR4/4 (褐) しまり極有、粘性少し有、炭・焼土含、袖
13. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性少し有、袖
14. 5YR4/8 (赤褐) 焼土

第105図 SI72竪穴住居跡(1)

SI72 カマド



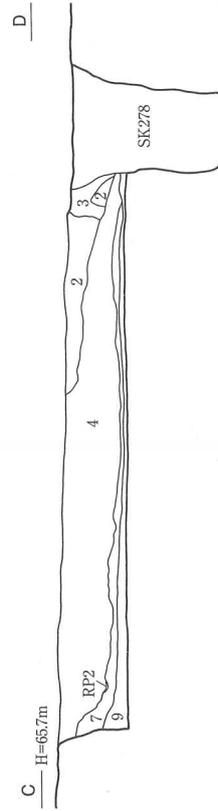
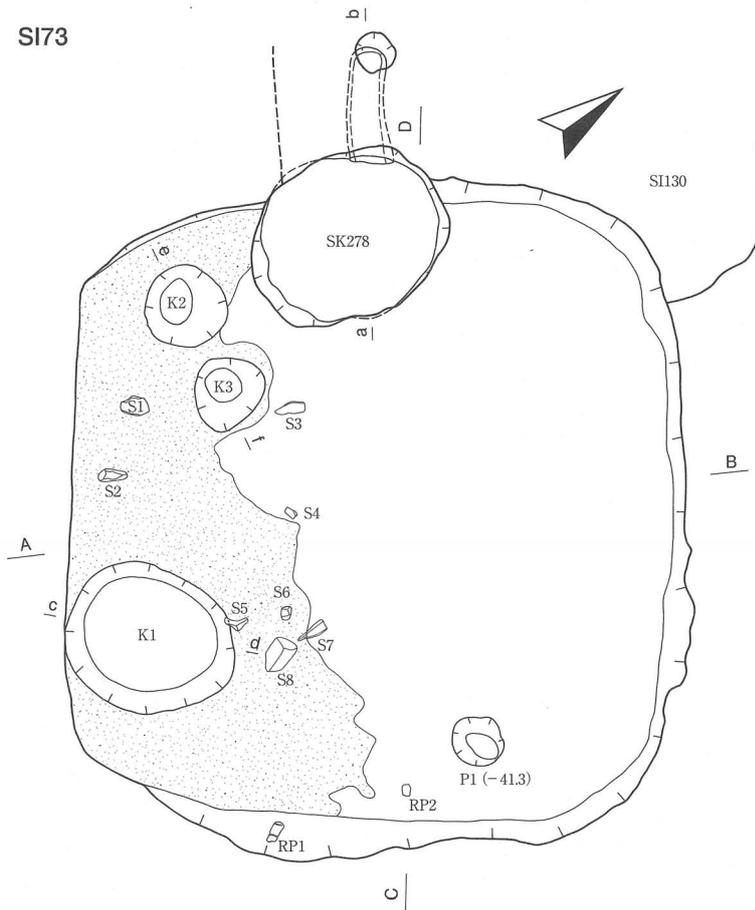
第106図 SI72竪穴住居跡(2)

K278→(旧) S I 73である。西側斜面が崩落しているため平面形・規模ははっきりしないが、北東壁は5.2m遺存し、南東壁は4.2m、北西壁は4.7m残存していることから、一辺5m前後の隅丸方形状を呈するものと思われる。主軸方位はN-58°-W、床面積は残存部分で18.7㎡を測る。壁は鋭角的に立ち上がり、壁高は南東壁で75cmを測り、北西・北東壁は西に向かうにつれて低くなっていく。埋土は上・中位はにぶい黄褐色土、下位は黒色土を主体とした人為堆積を呈し、13層に細分された。床面は平坦で堅く締まり西側の床には貼床が施されている。床面施設として住居西側を中心に土坑3基(K1~K3)と、南東壁際から柱穴が1基検出された。K1の平面形は楕円形状を呈し、径138×115cm、断面形は逆台形状を呈し、深さ31cmを測る。K2の平面形は円形を呈し、径65cmを測り、断面形は逆台形状を呈し、深さ26cmを測る。K3の平面形は円形状を呈し、径59×58cm、断面形は逆台形状を呈し、深さ24cmを測る。

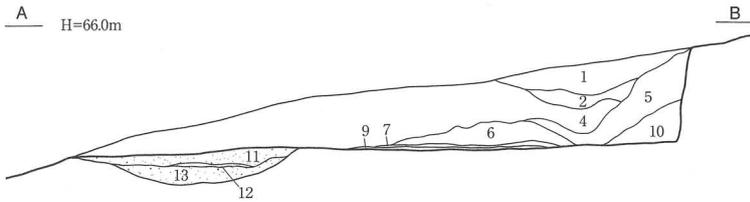
カマドは北西壁中央西よりに位置する。本体部はS K278に破壊されているため不明である。煙道部は長さ1.04m、幅33cmの刳り貫き式の煙道で下り勾配で煙出部へ続いている。煙出部は33×31cmの楕円形状を呈し、深さ75cmを測る。

遺物は土師器片が小袋1袋分、羽口5点、砥石3点、磨石1点、鉄製品2点(筒状・鉄鐸各1点)と鉄滓が出土した。掲載した遺物は羽口1点(85)、(77)・S5(78)・(79)の砥石3点、磨石1点(76)、鉄鐸2点(51・52)で、(85)羽口と(78・79)砥石は床面より、(51・52)鉄鐸は貼床より、それ以外は埋土中より出土している。

SI73



A H=66.0m



0 2m

SI73 K2・K3



SI73 K2・K3

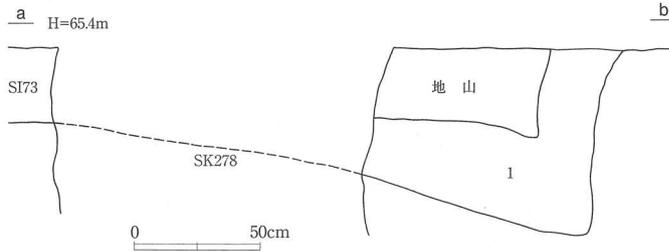
1. 10YR5/6 (黄褐) しまり極有 粘性少し有、炭少量
2. 10YR1.7/1 (黒) しまりやや有 粘性少し有、焼土ブロックを含む
3. 10YR6/3 (にぶい黄褐) しまりやや有 粘性少し有、炭含む

SI73

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭・マサ土含む
2. 10YR5/8 (黄褐) しまり極有、粘性少し有
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭・マサ土含む
4. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性少し有、炭を含む
5. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、炭・マサ土含む
6. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無
7. 10YR7/8 (黄橙) しまり極有、粘性少し有、炭微量
8. 10YR5/6 (黄褐) しまり極有、粘性少し有、炭含む
9. 10YR2/1 (黒) しまり有、粘性無、炭の層
10. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、炭含む
11. 10YR5/6 (黄褐) しまり極有、粘性少し有、炭少量、貼床
12. 10YR1.7/1 (黒) しまりやや有、粘性少し有、焼土ブロック含む炭の層
13. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有、明黄褐色ブロック、炭・マサ土混入、貼床

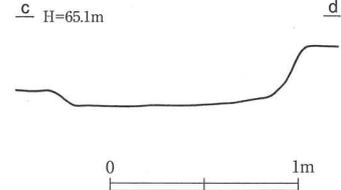
SI73 カマド

a H=65.4m



SI73 K1

c H=65.1m



SI73 カマド

1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性少し有 にぶい黄褐色土混入、炭含む

第107図 SI73竪穴住居跡

S I 74 竪穴住居跡 (第108図、遺物図版20・120、写真図版77・223・302)

赤23区北半部、ⅧC-41グリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。北側斜面が崩落しているため平面形・規模ははっきりしないが、西壁は2.6m、東壁は1.7m残存し、南壁は3.7m遺存していることから一辺4m弱の隅丸方形を呈しているものと思われる。主軸方位はN-4°-E、床面積は残存部分で10.7㎡を測る。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は南壁で32cmを測り、西・東壁は北に向かうにつれて低くなる。埋土は上位は黒褐色土、下位は黄褐色土を主体とした自然堆積で8層に細分された。床面は平坦で堅く締まり住居中央と東壁際以外の全面に貼床が施されている。床面施設として住居中央付近に径16×11cmの楕円形状を呈し、厚さ2cmの焼土が形成された地床炉が1基、土坑が住居北側から1基(K1)、南壁際から2基(K2・3)、南東コーナー付近に周溝が検出されている。K1の平面形は楕円形状を呈し、径66×49cm、断面形は逆台形状を呈し、深さ19cmを測る。K2の平面形は楕円形を呈し、径48×30cmを測り、壁は上半部は外傾して、下半部はやや外傾して立ち上がり、深さ20cmを測る。K3の平面形は楕円形状を呈し、径46×39cm、断面形は逆台形状を呈し、深さ9cmを測る。

カマドは東壁中央に位置する。本体部の残存状況はあまりよくない。両袖は芯材の抜き取り穴と考えられるピットが各2個ずつあり、右袖には黄褐色粘土で構築された袖土が一部残存している。燃焼部は径64×49cm、厚さ4cmの焼土が形成されている。燃焼部の奥には支脚の抜き取り痕と思われる径約20cm、深さ8cmのピットがある。煙道部は長さ1.08m、幅37cmの煙道で下り勾配で煙出し部へ続き立地状況から掘り込み式かと思われる。煙出し部は33×32cmの方形を呈し、深さ25cmを測る。

遺物は土師器が9号袋1袋分弱、須恵器片が1点、羽口片が6点、磨石が1点、鉄製品(鉄鐸)が1点と鉄滓が出土している。このうち掲載した遺物は土師器甕2点と鉄鐸で、RP1の土師器甕(218)は床面から(217)の土師器甕と(53)の鉄鐸は埋土中から出土している。

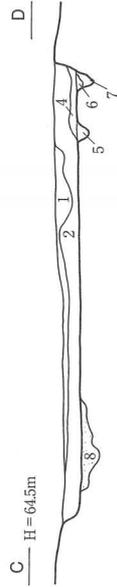
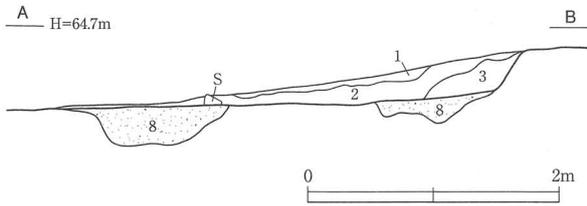
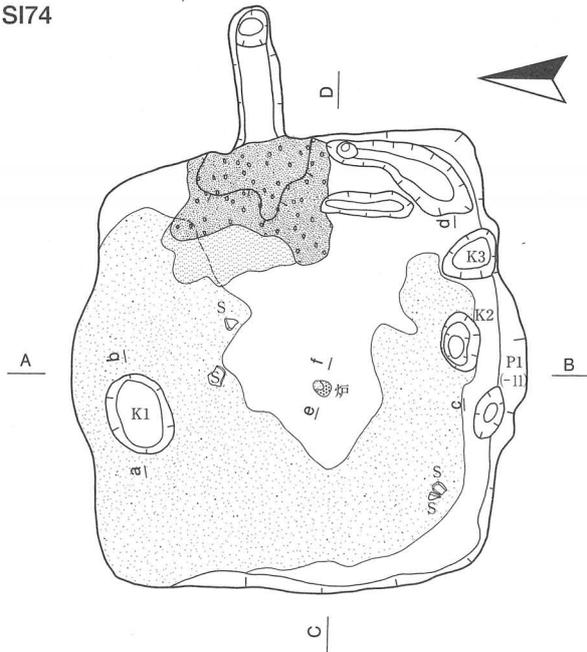
S I 75・131 竪穴住居跡、S K I 33A・B 竪穴状遺構

(第109・110図、遺物図版20・21・68・88・89・120、写真図版78・79・223・254・277・278・302)

赤23区北半部、ⅧC-4n・4°グリッドに位置している。検出当初から複数棟あることが予想されていたが、埋土が薄いことから平面プランではその他の新旧関係を確認することができなかつたので、共通のベルトを設定して精査を開始した。精査の結果S I 131の東壁を検出したが、壁面自体は堅くしまった崩落土で、それ自体はS K I 33の埋土であることが確認された。それ以外の壁面は前述の検出状況のためから確認できなかったが、精査過程でS K I 33内に堆積している崩落土をS I 131のカマド煙道部が切っていることと、S I 131内では焼土の広がりが見られ、広がりがない部分よりも若干レベルが低くなることから、S I 131の範囲は焼土の広がりが見られる範囲になると推定される。また、S I 131の西壁はS K 191を切っていることがベルトから確認された。S K I 33は東壁の軸が微妙に食い違いを見せていることから、2棟の重複があることを想定して精査を進めた。その結果、東壁の切り合い関係が認められたので新しい方をA、古い方をBとした。S I 75は検出当初からS I 133・S K I 33A・Bが横方向に多重重複しているプランに南半部を切られている竪穴住居跡として検出し精査を行った。また、南西コーナー付近をS K 191に切られている。よって、新旧関係は(新)S I 131→S K I 33A・B→(旧)S I 75である。また、これらの遺構とS K 191との重複関係であるが、S K 191はS I 131に切られ、S I 75を切っているが、S K I 33A・Bとの新旧関係は不明である。

S I 75は、平面形・規模は長軸約6.8m、短軸4.5mの隅丸長方形形状を呈する。主軸方位はE-1°-W、床面積は残存部分で26.6㎡を測る。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は東壁で28cm、西壁で4cmを測り北

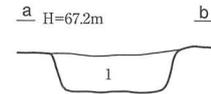
SI74



SI74

1. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無
褐色ブロック混入、炭含む
2. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無
褐色ブロック混入、炭微量
3. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無
黄褐色土混入
4. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
5. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無
6. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無
7. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有
粘性無、マサ土・炭少量
8. 10YR5/8 (黄褐) しまり有、粘性やや有
マサ土を微量、貼床

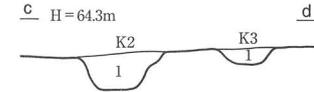
SI74 K1



SI74 K1

1. 10YR5/6 (黄褐) しまり有
粘性やや有、褐色ブロック
・炭・マサ土少量含む

SI74 K2・K3



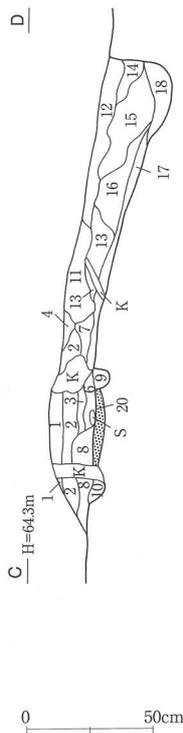
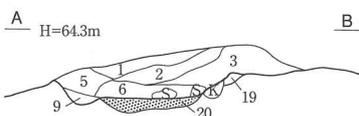
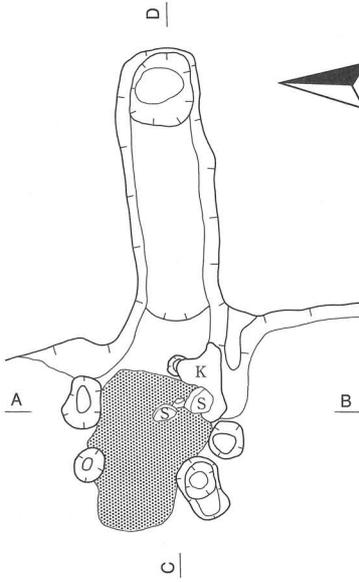
SI74 K2

1. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無、炭・マサ土少量

SI74 K3

1. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性無、マサ土少量

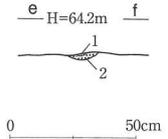
SI74 カマド



SI74 炉

SI74 炉

1. 2.5YR5/8 (明赤褐) 焼土
2. 2.5YR6/8 (橙) 焼土



SI74 カマド

1. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無、暗褐色ブロック少量
2. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性やや有、炭・焼土ブロック含む
3. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性有、炭・焼土ブロック含む
4. 10YR5/8 (黄褐) しまり有、粘性やや有
5. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性有、焼土粒少量
6. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性有、焼土含む
7. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性やや有、焼土ブロック含む
8. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性無、炭少量、焼土粒含む
9. 10YR3/3 (暗褐) しまり無、粘性無、石の抜き取り穴
10. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性無、石の抜き取り穴
11. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無、黄褐色ブロック少量
12. 10YR2/3 (黒褐) しまり有、粘性無、にぶい黄橙ブロック少量
13. 10YR2/3 (黒褐) しまり有、粘性やや有
14. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有
15. 10YR3/2 (黒褐) しまり有、粘性無、暗褐色ブロック含む
16. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
17. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性無、
にぶい黄褐色ブロック少量
18. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無
19. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
20. 5YR3/6 (暗赤褐) 焼土

第108図 SI74竪穴住居跡

壁・南壁では西側に向かうにつれて低くなっていく。埋土はにぶい黄褐色土を主体とした人為堆積で7層に細分された。床面は平坦で堅く締まり、北・西壁際を中心に貼床が施されている。床面施設として北西コーナー近くから土坑1基(K1)が、住居中央からやや南西コーナーよりに、掘り込みのある炉2基(炉A・B)と柱穴(P2)が、南東コーナーからカマドの間に周溝が、住居中央から北東・北西コーナーよりに柱穴(P1・3)が検出されており、P1・3は位置的に主柱穴になるものと思われる。K1は径65×59cmの円形を呈する。断面形は鍋状を呈し、深さ24cmを測る。炉Aは径40×23cmの楕円形状で、深さ3cmを測る掘り込みの底部付近に厚さ1cm弱の焼土の広がりが検出された。炉Bは径28×22cmの略円形状で、深さ3cmを測る掘り込みの底部付近に厚さ2cm弱の焼土の広がりが検出された。

カマドは東壁中央南よりに位置する。本体部の残存状況は不良で、両袖に袖の芯材に用いたと思われる自然石と、本体部付近には礫が散在しており住居廃棄時に破壊された可能性が考えられる。燃焼部は径74×67cmの掘り込みの全面に厚さ8cmの焼土が形成されている。燃焼部の奥には亜角礫が据えられており、支脚として使用されたものと思われる。煙道部は長さ約91cm、幅約25cmの削り貫き式の煙道で下り勾配で煙出し部へ続いており、天井部分は約32cmが崩落せずに残存しているが、全体的に土圧で潰れて断面形が楕円形状を呈している。煙出し部は31×22cmの楕円形を呈し、深さ18cmを測る。

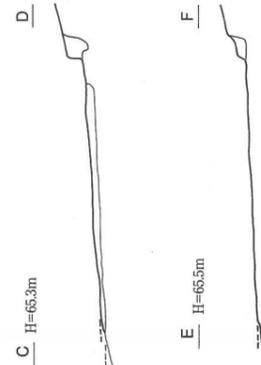
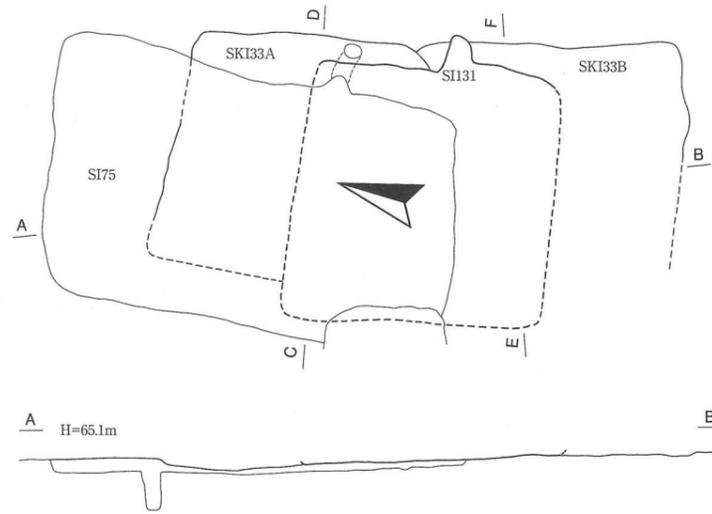
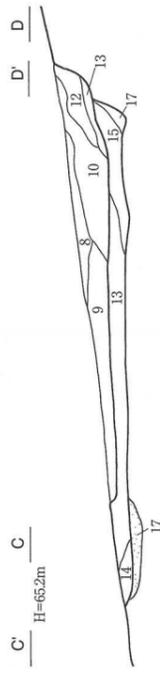
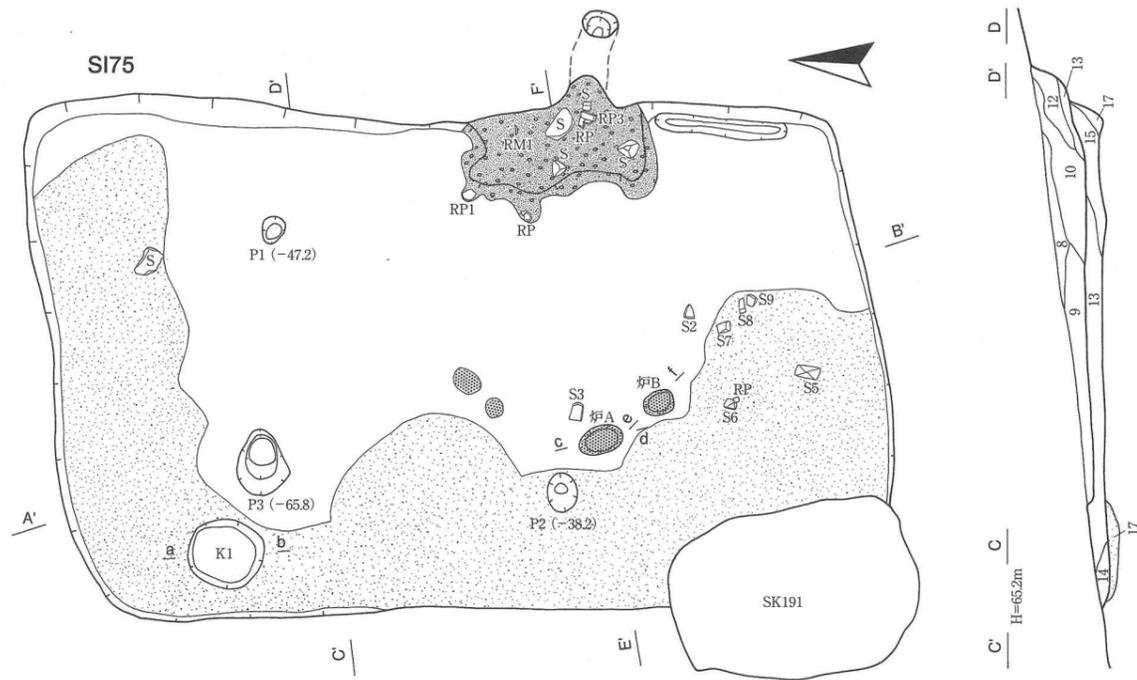
遺物は床面・埋土中より土師器片が9号袋1袋分、須恵器片が1点、羽口が1点、鉄製品(板状・刀子)が3点、砥石が4点と鉄滓が出土している。このうち掲載された遺物はカマドより出土した土師器甕(220)と、S2(80)・S3(81)の砥石2点、RM1の板状鉄製品(54)と、炉A付近より出土した砥石2点(82・83)、埋土中より出土した土師器甕1点(219)と羽口(86)である。また、炉A・B付近のサンプル土から、わずかに鍛造剥片が出土したことから鍛練鍛冶を行っていたものと考えられる。

S I 131は平面形は隅丸方形形状を呈すると思われ、確認できた東壁が約4mである。SK I 33Bの東壁際が人為堆積を呈し、その西側が自然堆積を呈することから見て、住居の範囲は残存する東壁部分よりもさらに南に広がる可能性が想定される。主軸方位はN-70°-E、推定される床面積は18.8㎡を測る。壁は東壁のみ残存し壁高10~22cmを測る。埋土はにぶい黄褐色土を主体とした自然堆積を呈し、床面近くには焼土と炭の広がりが見られることから焼失住居であると思われる。床面はほぼ平坦で堅く締まる。

カマドは東壁中央に位置する。本体部の残存状況は良好である。両袖は3乃至4個の自然石を芯材に用いて褐色質粘土で構築されている。天井石は亜角礫が1個煙道部入り口付近に残存し、燃焼部焼土上面に1個崩落土に流されて現位置を保っていない天井石になる可能性のある自然石が出土している。また、本体部内からはカマドの部材として使用されたと思われる亜角礫が多数出土している。燃焼部は径43×34cm、厚さ7cmの焼土が形成されているが一部木の根によって攪乱を受けている。燃焼部の奥には亜角礫が据えられており、支脚として使用されたものと思われる。煙道は水平に掘りこまれ、長さ55cm、幅45cm、深さ33cmを測り、埋土の状況と天井石の状況から住居より外側の部分は煙出しとして開口していたものと推測される。

遺物は埋土・床面より土師器片が小袋1袋分、須恵器片が1点、石製品が5点(砥石2点、敲石1点、磨石2点)と鉄滓が出土している。このうち掲載した遺物は床面より出土したRP1の土師器甕(227)とS7の砥石(90)とS14の敲石(91)、埋土中より出土した須恵器片(228)である。

SK I 33Aは遺存する北壁長約4m前後、東壁長約4.2m前後を測ることから、一辺約4m前後の隅丸方形形状を呈すると思われ、残存する床面積は約8.8㎡を測る。壁は鋭角的に立ち上がり、壁高は西壁約7cm、北壁約10cm、東壁約35cmを測る。埋土はにぶい黄褐色~黄橙色土を主体とした人為堆積を呈し、床面近くには明黄褐色土を主体とした崩落土と炭と焼土の広がりがみられる。床面はやや平坦で締まる。床面施設は東



0 2m

SI75 K1

a H=64.5m b



SKI33B K1

g H=64.9m h



0 1m

SI75 炉A

c H=64.4m d

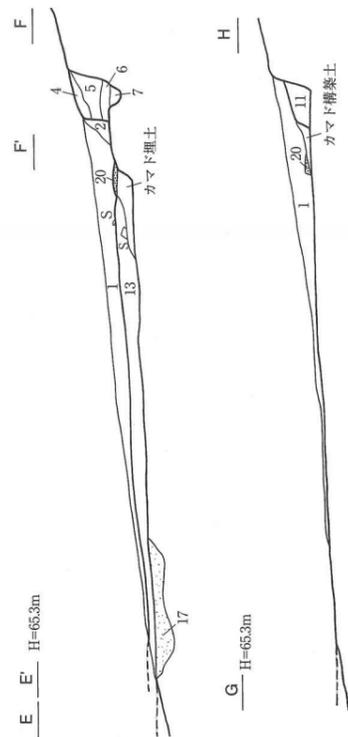
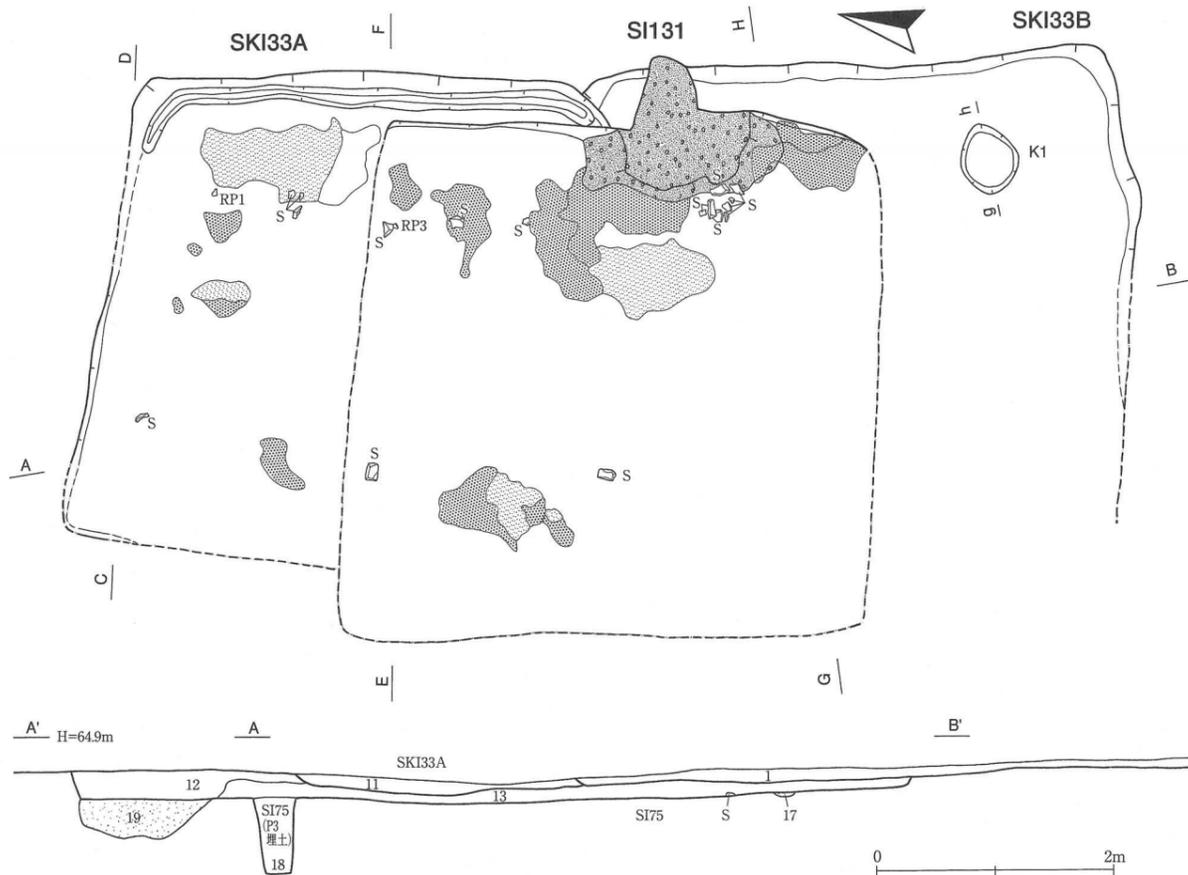


SI75 炉B

e H=64.4m f



0 50cm



SI75・131・SKI33A・B

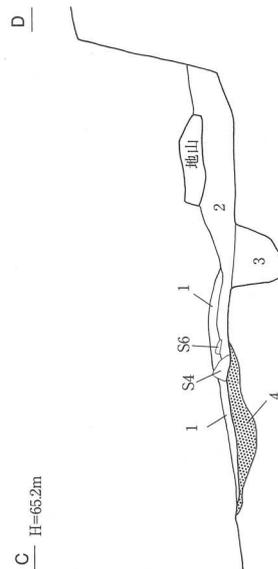
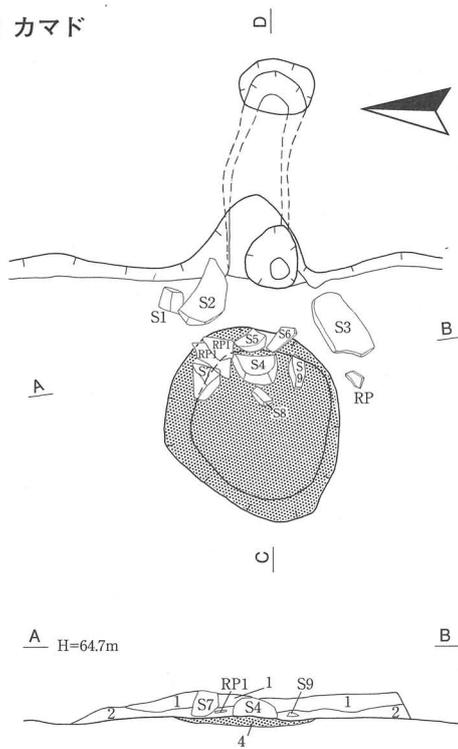
1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、明黄褐土・炭微量
2. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無、炭少量
3. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、黄橙土多、炭少量
4. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
5. 10YR7/6 (明黄褐) しまり極有、粘性少し有、マサ土・炭微量
6. 10YR8/6 (黄橙) しまり極有、粘性無
7. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、にぶい黄橙土含、炭少量
8. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、黄橙土含、炭少量
9. 10YR5/6 (黄褐) しまり極有、粘性少し有、黄橙土・炭含
10. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり少し有、粘性無、暗褐土多、炭含
11. 10YR4/4 (褐) しまり極有、粘性少し有、黄橙土・炭含
12. 10YR7/6 (明黄褐) しまり有、粘性無、炭微量
13. 2.5YR/4 (淡黄) しまり有、粘性無、マサ土少量
14. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極有、粘性無、明黄褐土含、炭微量
15. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり極有、粘性無、炭微量
16. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極有、粘性無、炭少量
17. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極有、粘性無
18. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性少し有、炭少量
19. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり少し有、粘性やや有、炭含
20. 5YR6/4 (にぶい橙) しまり有、粘性無

SI75 炉A・B

1. 10YR2/1 (黒) しまりやや有、粘性やや有、炭層
2. 5YR6/6 (橙) しまり有、粘性無、焼土

第109図 SI75・131竪穴住居跡(1)・SKI33A・B竪穴状遺構

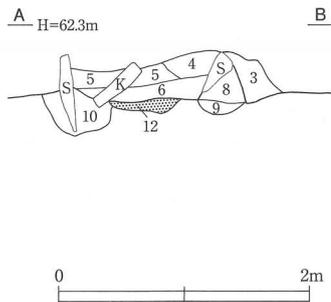
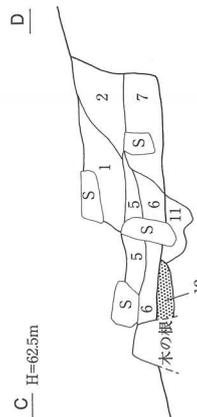
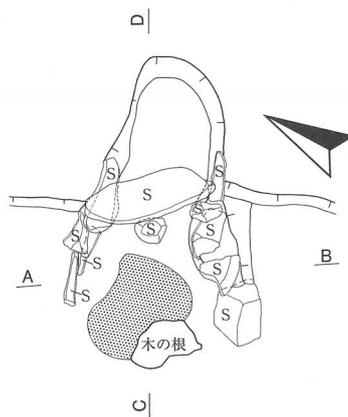
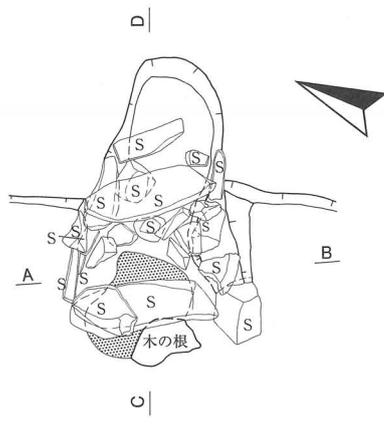
SI75 カマド



SI75 カマド

1. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり少し有、粘性やや有炭含む
2. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり少し有、粘性やや有炭多量、焼土ブロック少量
3. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり少し有、粘性やや有炭含む
4. 5YR6/8 (橙) 焼土

SI131 カマド



SI131 カマド

1. 10YR5/6 (黄褐) しまり少し有、粘性少し有、炭微量
2. 2.5Y8/6 (黄) しまり有、粘性無
3. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭・焼土少量
4. 10YR4/4 (褐) しまり極有、粘性無、炭少量
5. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性少し有、炭・焼土含む
6. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性少し有、炭・焼土ブロック混入
7. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性少し有
8. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性無、マサ土微量、袖土
9. 10YR4/4 (褐) しまり極有、粘性無、黄橙色土含、袖石の据え方
10. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性無、炭・焼土粒微量、袖石の据え方
11. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無、マサ土微量、支脚の据え方
12. 5YR6/8 (橙) 焼土

第110図 SI75・131竪穴住居跡(2)

壁際で壁溝が検出された。長さ約4m、幅約18cm、深さ約10cmを測る。遺物は出土しなかった。

S K I 33 Bは遺存する東壁長約4.5m、残存する南壁長約2m前後を測り、残存部分から隅丸長方形基調を呈するものと思われる。床面積は遺存状態が悪いことから計測しなかった。壁は東壁・南壁の一部が残存し、鋭角的に立ち上がり、壁高は東壁約32cm、南壁約6cmを測る。埋土はにぶい黄褐色土を主体とした人為堆積を呈する。床面はほぼ平坦で堅く締まる。床面施設は南東から土坑(K1)が検出された。K1の平面形は楕円形状を呈し、径59×49cm、断面形は円筒状を呈し、深さ34cmを測る。

遺物は埋土中・床面から土師器片が3点、K1埋土中より羽口片が1点出土している。このうち掲載したのは床面より出土した土師器甕(232)である。

S I 76竪穴住居跡 (第111図、遺物図版20・21・68・88・89・120、写真図版80・223・254・277・302)

赤23区北半部、ⅧC-3m・4mグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。カマド煙道部をS I 74に、西壁をS K 192に切られ、東壁中央付近でS K 203を南東コーナー付近でS I 75を切っていることから、新旧関係は(新)S I 74・S K 192→S I 76→(旧)S I 75・S K 203である。但し、S I 74とS K 192、S I 75とS K 203との新旧関係は不明である。平面形は概ね隅丸長方形を呈し、規模は一辺約5.3mを測る。主軸方位は煙道部が残存していないため不明であるが、概ね真北方向を向いていたものと思われる。床面積は残存部分で22.8㎡を測る。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は西壁で8cm、東壁で59cmを測り、北壁・南壁では西側に向かうにつれて低くなっていく。埋土は上位はにぶい黄褐色土、下位は黄褐色土を主体とした人為堆積を呈し、埋土中位には焼土?の投げ込み等も見られる。床面はほぼ平坦で堅く締まり住居中央を除く全面に貼床が施されている。床面施設として住居中央付近に地床炉2基(炉A・B)が検出されている。炉Aは径44×36cmの円形を呈し、深さ6cmを測る掘り込みの底部に厚さ2cmの焼土が形成されている。炉Bは径25×7cmの楕円形を呈し、厚さ4cmの焼土が形成されている。また、住居の対角線上に柱穴が4基(P1～P4)検出されており、これらが主柱穴になるものと思われる。これらの他に住居中央付近に柱穴が1基(P5)検出されている。

カマドは北壁中央付近に位置する。本体部の残存状況は不良である。わずかに褐色質粘土で構築された右袖の一部が検出されたのみで袖はほとんど残存していない。燃烧部は径約65×63cm、厚さ13cmの焼土が形成されている。煙道部は検出されなかった。位置的に煙道部があると想定される線上にはS I 74の南西コーナーがあり、かつ本遺構の北壁付近からは南から北へ下る緩斜面上にあることから、煙道部はS I 74に切られかつ、残存したかもしれない部分は斜面の崩落によって消失したものと思われる。

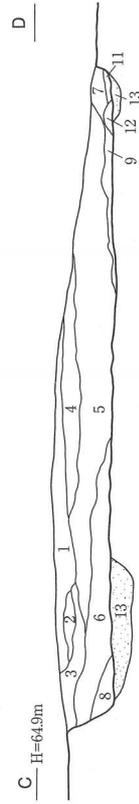
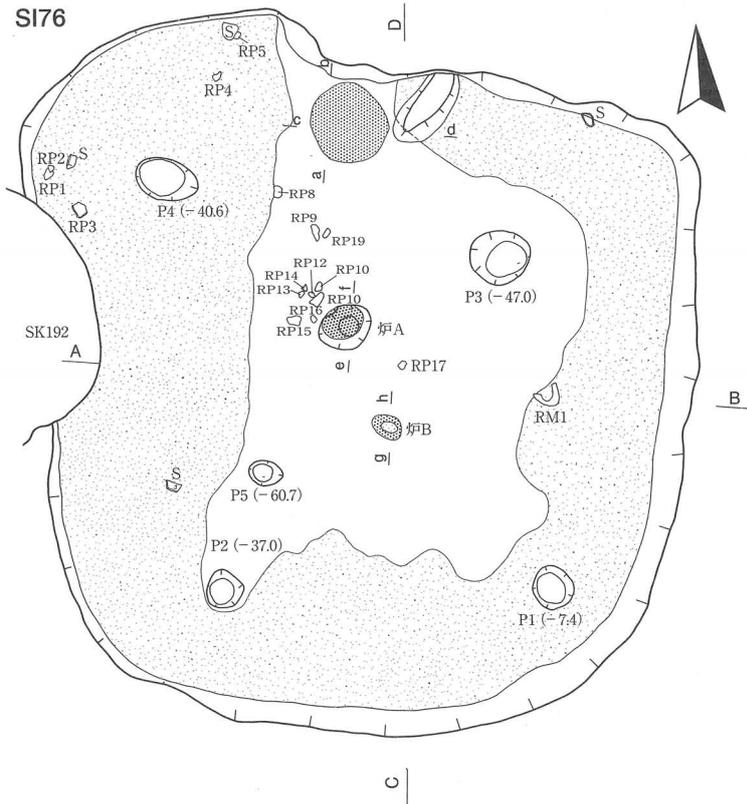
遺物は土師器片が9号袋1袋分、須恵器片が12点、羽口片が26点、砥石2点、磨石2点、軽石1点、鋤先1点と刀子2点と鉄滓が出土している。このうち掲載した遺物は須恵器1点、羽口1点、磨石2点、砥石・鋤先・刀子各1点で、(221)の須恵器とR P 9の羽口(87)とS 2の磨石(84)とS 3の砥石(86)は床面から、(55)の刀子は貼床中から、(85)の磨石と(56)の刀子と(57)の鋤先は埋土から出土している。また、炉A・B付近のサンプル土から、わずかに鍛造剥片が出土したことから鍛練鍛冶を行っていたものと考えられる。

S I 77 C竪穴住居跡、**S X I 68 A・B**工房跡、**SW 81**炭窯

(第112・113図、遺物図版21・68・89・120、写真図版81・82・223・254・278・302)

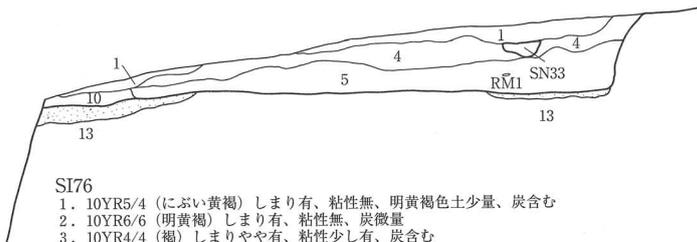
赤23区西側斜面下、ⅧC-2°グリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。前述の通り森林伐採時における掘削の影響で西側斜面が消失したため、その部分のプランの状況から上下に複数棟有ることが予想されたので共通のベルトを設定し精査を開始した。S X I 68 Aは当初竪穴住居跡と考えたが、床面から掘り込みのある炉を検出したことから工房跡と判断した。同遺構床面精査中に黄褐色土のプランを確認し精査に入った

SI76



A H=65.2m

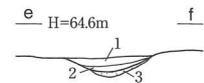
B



SI76

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、明黄褐色土少量、炭含む
2. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無、炭微量
3. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性少し有、炭含む
4. 2.5Y8/4 (淡黄) しまりやや有、粘性無、にぶい黄褐色土多く、炭微量
5. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性無、明黄褐色土・炭含む
6. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性少し有、炭多く、焼土粒微量
7. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、黄褐色土含む、炭少量
8. 10YR5/6 (黄褐) しまり極有、粘性無、炭含む
9. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、淡黄色土含む、炭微量
10. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性少し有、炭・マサ土含む
11. 10YR4/4 (褐) しまり極有、粘性少し有、黄褐色土含む、炭微量
12. 10YR7/6 (明黄褐) しまり有、粘性無、炭微量
13. 2.5Y8/4 (淡黄) しまり有、粘性無、マサ土少量・貼床

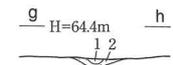
SI76 炉A



SI76 炉A

1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性少し有、灰黄褐・炭含む
2. 10YR2/1 (黒) しまり有、粘性少し有、炭の層
3. 7.5YR6/8 (橙) 焼土

SI76 炉B



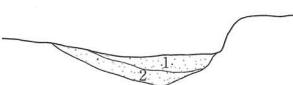
SI76 炉B

1. 10YR2/1 (黒) しまり有、粘性少し有、炭の層
2. 7.5YR6/8 (橙) 焼土

SI76 カマド

a H=64.5m

b



c H=64.4m

d



SI76 カマド

1. 5YR5/8 (明赤褐) 焼土
2. 5YR6/8 (橙) 焼土
3. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性少し有、袖土



第111図 SI76竪穴住居跡

所、床面から地床炉を検出したことから工房跡と判断した。この遺構がSX I 68Bである。S I 77CはSX I 68Bの貼床を剥がした際にカマド崩落土の広がりを確認したことからSX I 68Bの貼床ではなく堅穴住居跡と判断した。SW81は当初S I 77Cの煙道部が崩落したプランであると思い精査を開始したが、精査の過程で底部のレベルがカマドのレベルと一致せず、底部直上で炭の広がり確認されたことから天井部が崩落した部分ではなく炭窯であると判断した。よってこの場所では最初に堅穴住居跡(S I 77C)を構築し、その堅穴を埋め戻して工房跡(SX I 68B)に改築し、その工房跡が廃棄された所に炭窯(SW81)を構築し、その跡を埋め戻して工房跡(SX I 68A)を構築したものであると思われる。以上の検出・精査状況から新旧関係は(新)SX I 68A→SW81→SX I 68B→(旧)S I 77Cである。

SX I 68Aは平面形は隅丸長方形を呈し、規模は東壁で5.5m遺存し、南壁で3m、北壁で1.7m残存している。床面積は残存部分で14.1㎡を測る。壁は下半部は鋭角的に、上半部はやや外傾して立ち上がる。壁高は東壁で97cmを測り、北壁・南壁は西側に向かうにつれて低くなっていく。埋土はにぶい黄褐色土を主体とした自然堆積を呈す。床面はほぼ平坦で締まっている。床面施設として南床面から地床炉が検出された。炉は54×44cmの楕円形を呈し、深さ8cmの掘り込みの壁面を中心に厚さ2cmの焼土が検出された。

遺物は土師器片が21点、羽口が8点、石製品(砥石・要石)が2点埋土中より出土している。このうち掲載したのは埋土中より出土した羽口片(88)、砥石(92)、床面中央付近より出土した要石(93)である。また、炉付近のサンプル土から、わずかに鍛造剥片が出土したことから鍛冶工房の可能性が考えられる。

SX I 68Bは平面形は隅丸長方形を呈し、規模は東壁で4.2m遺存し、南壁で2.1m、北壁で0.7m残存している。床面積は残存部分で11.8㎡を測る。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は東壁で28cmを測り、北壁・南壁は西側に向かうにつれて低くなっていく。床面はほぼ平坦で締まっている。床面施設として南床面から地床炉が検出された。地床炉は40×19cmの楕円形を呈し、厚さ2cmを測る。遺物は出土しなかった。炉付近のサンプル土から、わずかに鍛造剥片が出土したことから鍛冶工房の可能性が考えられる。

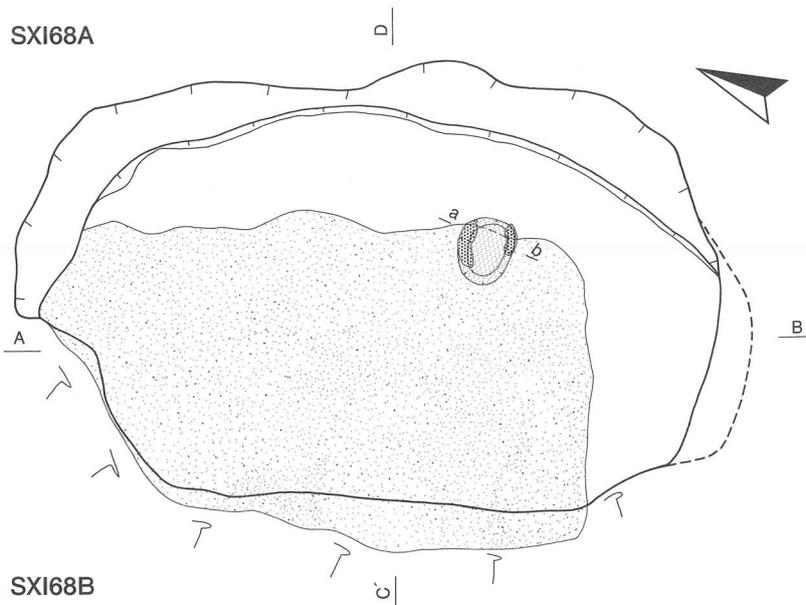
S I 77Cの平面形は隅丸長形状を呈し、規模は西壁で2m、北壁で2.4m残存し、東壁で4.3m、南壁で3.1m遺存している。主軸方位はN-20°-W、床面積は残存部分で10.9㎡を測る。壁は鋭角的に立ち上がり、壁高は西壁2cm、東壁40cmを測り、北壁・南壁は西側に向かうにつれて低くなっていく。埋土は褐色系の土を主体とした人為堆積を呈し、17層に細分された。床面は平坦で堅く締まり中央から西側部分に貼床が施されている。床面施設として床面中央やや南よりから径109×82cmの楕円形を呈し、深さ27cmを測る土坑(K1)が、西壁を除く壁際から周溝が、北西コーナー付近から柱穴が検出されている。

カマドは東壁中央南よりに位置する。本体部の残存状況は不良でわずかに袖部は芯材の抜き取り痕が両袖に2個ずつあるのみで、住居廃棄時に袖石は抜き取られたものと思われる。燃焼部は径42×30cm、厚さ2cmの焼土が形成されている。燃焼部の奥には垂角礫が据えられており、支脚として使用されたものと思われる。煙道部は長さ1.09m、幅39cmの削り貫き式の煙道で下り勾配で煙出し部へ続いている。煙出し部は33×24cmの略円形を呈し、深さ66cmを測る。

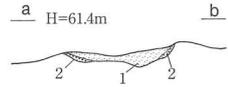
遺物は土師器片が8点、石製品が2点(砥石1点、磨石1点)、鉄製品1点(板状)と鉄滓が出土している。このうち掲載した遺物はカマドより出土した土師器甕(223)、床面より出土したS1の砥石(87)、貼床より出土した板状鉄製品(58)である。

SW81は、西壁の一部を消失してしまっていたが、平面形は略円形を呈すると思われ、規模は推定で開口部径約138×79cm、底部径約100×55cmを測る。断面形は深い皿状を呈し、深さは24~35cmを測る。埋土は炭混じりの上位は褐色土・下位は黒色土である。底面は概ね平坦で堅く締まる。底面の一部には被熱した橙

SXI68A

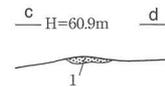


SXI68A 炉A



SXI68A 炉A
 1. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性少し有、炭の層
 2. 2YR5/6 (明赤褐) 焼土

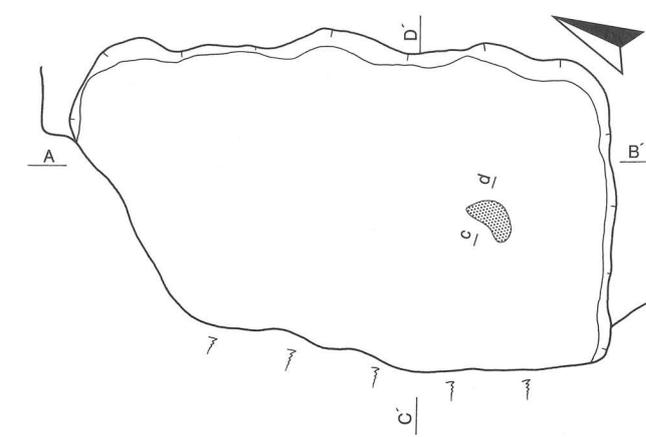
SXI68B 炉A



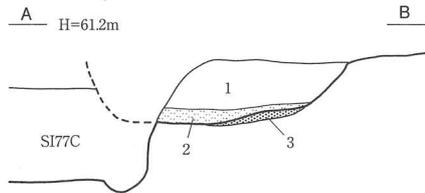
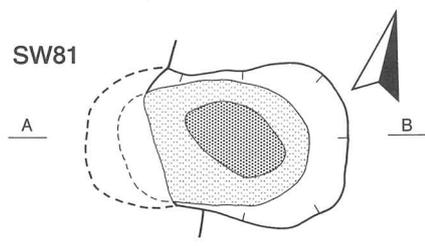
SXI68B 炉A
 1. 5YR5/6 (明赤褐) 焼土

0 50cm

SXI68B



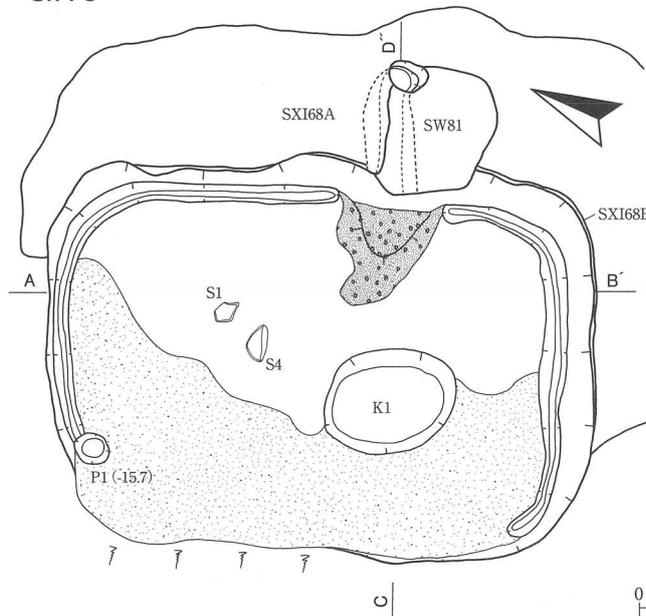
SW81



SW81
 1. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性少し有、小石含む、炭少量
 2. 10YR2/1 (黒) しまり有、粘性少し有、礫含む、灰黄褐色土混入、炭の層
 3. 5YR6/6 (橙) 焼土

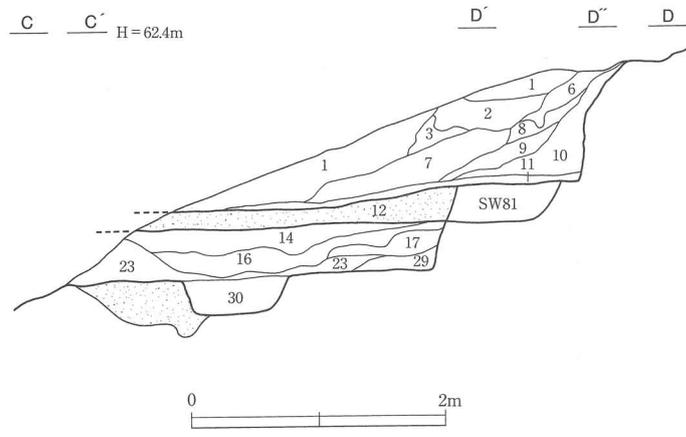
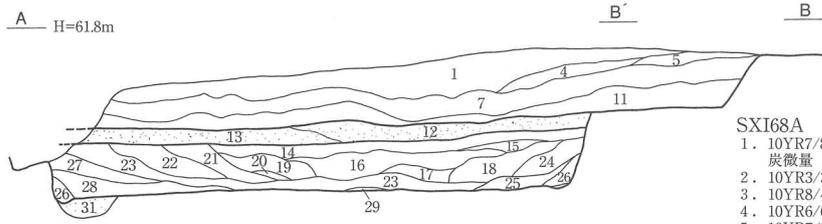
0 1m

SI77C



0 2m

第112図 SI77C 竪穴住居跡・SXI68A・B 工房跡(1)・SW81 炭窯

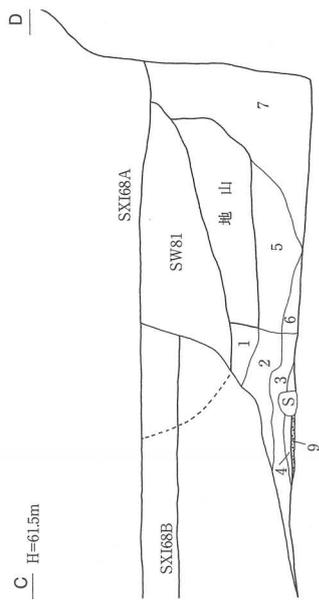
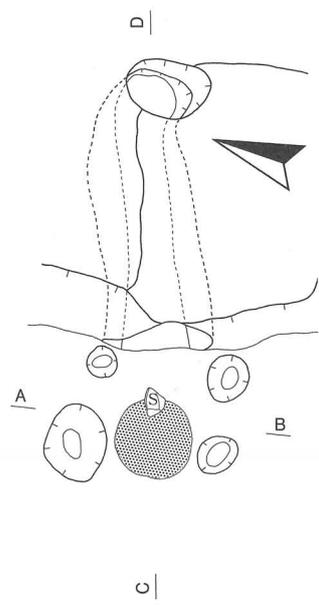


- SXI68A**
1. 10YR7/8 (黄橙) しまり極有、粘性無、にぶい黄褐色土多量、炭微量
 2. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性少し有、炭含む
 3. 10YR8/4 (浅黄橙) しまりやや有、粘性無
 4. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極有、粘性少し有、炭含む
 5. 10YR7/8 (黄橙) しまり極有、粘性無
 6. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有、炭少量
 7. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
 8. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性少し有、浅黄褐色土・炭含む
 9. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、礫含む、黄褐色土少量、炭微量
 10. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性やや有、炭・礫含む
 11. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性少し有、マサ土混入、黄褐色土・炭を含む

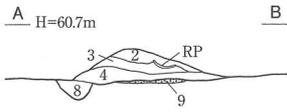
- SXI68B**
12. 10YR7/8 (黄橙) しまり極有、粘性少し有、マサ土混入、にぶい黄褐色土・炭含む
 13. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有

- SI77C**
14. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり極有、粘性無、黄褐色・褐色土混入、炭・マサ土含む
 15. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性少し有、炭・焼土ブロック含む
 16. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性やや有、にぶい黄褐色土混入、炭・礫少量
 17. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり極有、粘性無、黄褐色・褐色土混入、炭・マサ土含む
 18. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性やや有、にぶい黄褐色土混入、炭・礫少量
 19. 10YR7/6 (明黄褐) しまり極有、粘性少し有、黄褐色土混入、炭含む
 20. 10YR4/6 (褐) しまり極有、粘性やや有、炭含む
 21. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり極有、粘性無、明黄褐色土含む、炭少量
 22. 10YR5/6 (黄褐) しまり極有、粘性少し有、明黄褐色・にぶい黄褐色土混入、炭少量・焼土微量
 23. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有、黄褐色土・炭少量
 24. 10YR8/2 (灰白) しまり有、粘性無
 25. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性やや有、にぶい黄褐色土混入、炭含む
 26. 10YR8/2 (灰白) しまり有、粘性無
 27. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性有、炭少量、礫含む
 28. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有、炭微量、礫含む
 29. 10YR3/2 (黒褐) しまり有、粘性少し有、炭含む
 30. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性無、KI埋土
 31. 2.5Y7/3 (浅黄) しまり有、粘性無、小石含む、貼床

SI77C カマド



- SI77C カマド**
1. 2.5Y8/4 (淡黄) しまり有、粘性無、マサ土ブロック含む
 2. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無、明黄褐色土含む、炭少量
 3. 5YR5/8 (明赤褐) しまり有、粘性少し有、褐色土・炭含む
 4. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有、焼土粒・炭少量
 5. 2.5Y8/4 (淡黄) しまりやや有、粘性無
 6. 10YR8/4 (浅黄橙) しまりやや有、粘性無、黄橙ブロック・炭含む
 7. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性少し有、炭・焼土ブロック含む
 8. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり少し有、粘性無、炭・マサ土含む
 9. 2.5Y6/4 (にぶい橙) 焼土



第113図 SI77C竪穴住居跡・SXI68A・B工房跡(2)

色の焼土の広がりが見られ、厚さ4cmを測る。遺物は出土しなかった。

S I 78 竪穴住居跡 (第114図、遺物図版21・120、写真図版83・223・302)

赤23区西側斜面下、ⅧC-1n・2nグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。本遺構は覆土が完全に埋まりきる前の窪みにSW80が構築されていることから新旧関係は(新)SW80→(旧)SI78である。西側斜面が消失しているため平面形・規模は不明だが、規模は東壁で4.8m遺存し、南壁で2.9m、北壁で3.5m残存していることから一辺が5m弱の隅丸方形状を呈するものと思われる。主軸方位はN-5°-W、床面積は残存部分で14.0㎡を測る。壁は下半部でやや外傾して、上半部で外傾して立ち上がる。壁高は東壁で91cmを測り、北壁・南壁は西側に向かうにつれて低くなっていく。埋土は褐色系の土を主体として11層に細分されたが、埋土上位はSW80構築時ないし炭の掻き出し時の影響を受けているものと思われる。床面は平坦で堅く締まり中央から西側部分に貼床が施されている。床面施設として南東コーナーより土坑(K1)が検出された。径77×61cmの楕円形状を呈し、深さ16cmを測る。

カマドは東壁中央南よりに位置する。本体部の残存状況は良好である。両袖は3個の自然石を芯材に用いて褐色質粘土で構築されている。燃烧部は奥半分に径36×34cm、深さ3cmの掘り込みがあり、その掘り込みの手前に、径36×34cm、厚さ5cmの焼土が形成されている。煙道部は長さ1.47m、幅31cmの削り貫き式の煙道で下り勾配で煙出し部へ続く。煙出し部は49×40cmの楕円形を呈し、深さ101cmを測る。

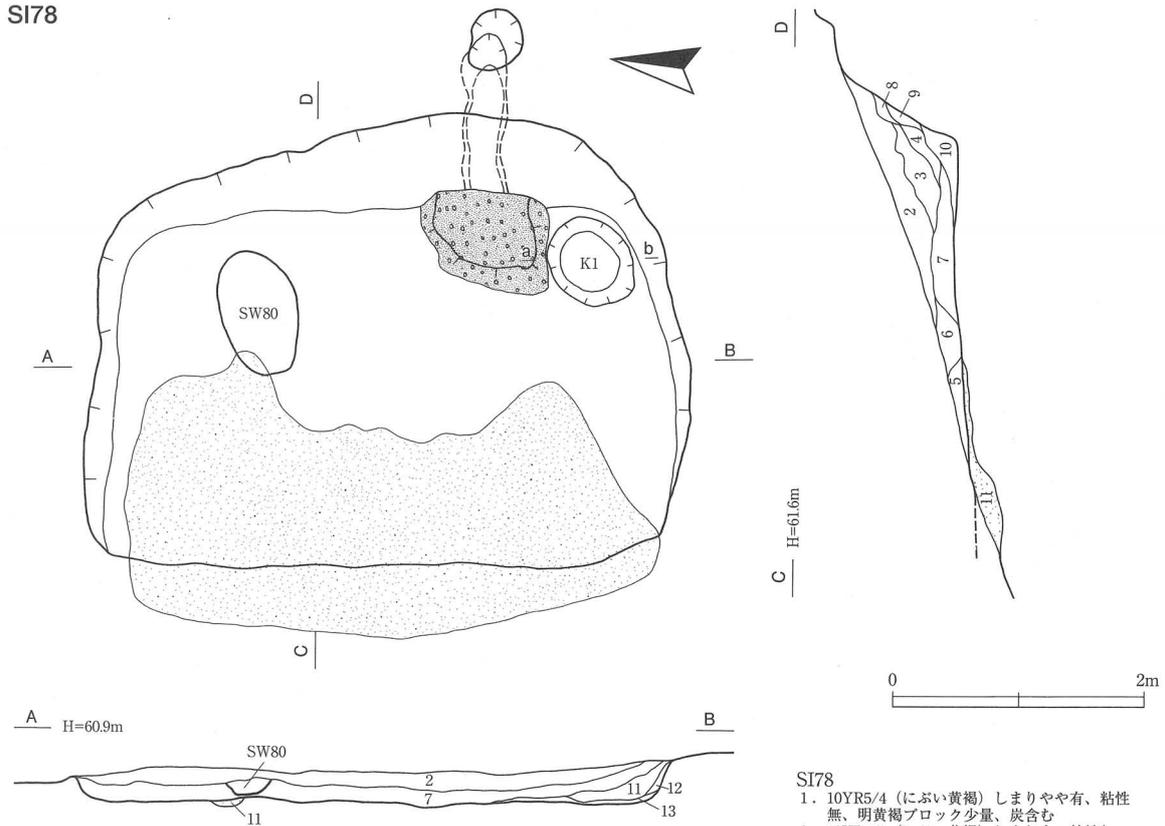
遺物は土師器片が9号袋1袋分、須恵器片1点、羽口片1点、磨石1点、鏝?1点と鉄滓が出土している。掲載した遺物はカマドより出土した土師器甕(224)と埋土中より出土した鏝?(59)である。

S I 86C・D 竪穴住居跡、S X I 70 工房跡、S K I 34 竪穴状遺構、S X H 10 廃土場

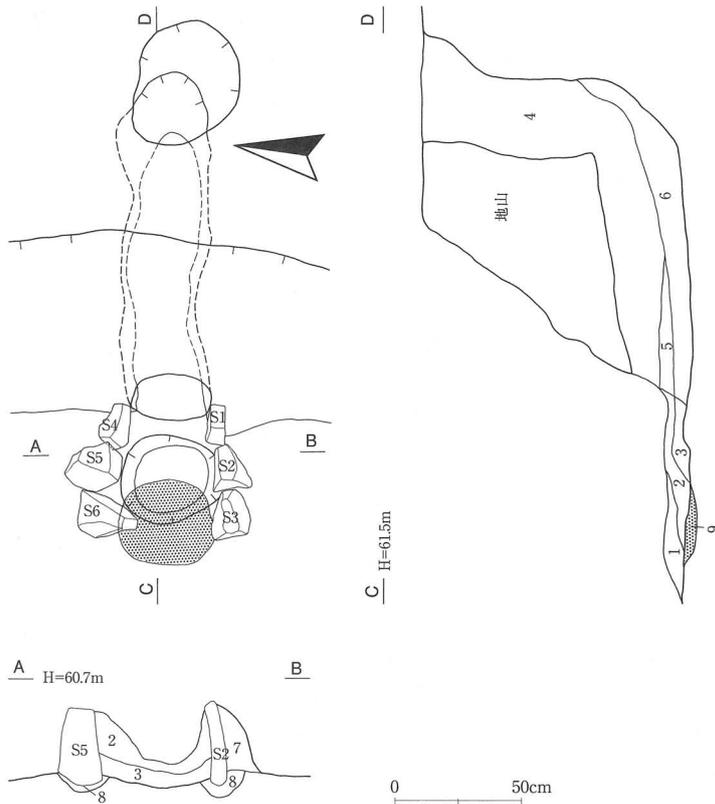
(第115・116図、遺物図版21・68・89・90・120、写真図版84・85・223・254・278・279)

赤23区西側斜面下、ⅧC-1k・2kグリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出された。本遺構の検出された場所は森林伐採時の掘削によって削平を受けていることから、残存状況は非常に悪く、一辺6m前後の大きい竪穴住居跡のプランとその南西コーナー付近にもう一棟竪穴住居跡のプランを検出したが、平面プランから新旧関係を確認することができなかつたので共通のベルトを設定して精査を開始した。残存状況が悪かつたことと埋土がにぶい黄褐色系の土で検出面の土と類似しているため、精査に苦慮し、炉が検出された面を床面と判断しそこから掘っていったところ、本来は炉のある床面は当初検出した竪穴より古い遺構で、その古い遺構を埋め立てて竪穴を構築した状況が断面観察等から判明し、結果的に2棟を一気に掘ってしまっている状況に気づいた。その後の精査の結果から、上の遺構からはカマド・炉等は確認されなかつたため竪穴状遺構(S K I 34)であると判断し、下の遺構からは炉が検出されたことから工房跡(S X I 70)であると判断した。また、S X I 70 工房跡床面精査中ににぶい黄褐色土のプランを確認し精査に入った所、カマドを検出し竪穴住居跡であると判断した。この遺構がS I 86Cである。S I 86Dは当初からS K I 34の南西コーナー付近で検出し、S K I 34・S X I 70 精査中に断面観察等からS X I 70に切られている状況を確認し、カマドを検出したことから同遺構より古い竪穴住居跡であると判断した。以上の状況からみてこの場所は同時存在であるかは不明であるが、S I 86CとS I 86Dが構築され、それらを埋め戻してS X I 70を構築し、それを埋め戻してS K I 34を構築したものと思われる。よって、新旧関係は(新)S K I 34→S X I 70→(旧)S I 86C・Dである。また、S K I 34はS X I 70を埋め戻した際に生じた貼床が検出されるはずだが、以上のような精査過程を経たため推定線でしか表記できず貼床範囲は図示していない。S X H 10はS I 86C・D他の北西側斜面下に位置する。検出時の状況がS X H 09と類似している為、掘削廃土の可能性があると考え精査に入った。精査の結果、壁面・床面は確認されずに自然斜面が検出され、埋土が上位から褐色土・黒褐色土

SI78



SI78 カマド



SI78

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、明黄褐色ブロック少量、炭含む
2. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭・焼土少量、明黄褐色ブロック含む
3. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極有、粘性少し有、炭微量
4. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性少し有、炭少量
5. 10YR4/4 (褐) しまり極有、粘性少し有、炭・焼土粒含む
6. 2.5Y8/6 (黄) しまりやや有、粘性無、にぶい黄褐色土混入
7. 10YR7/6 (明黄褐) しまり極有、粘性無、炭微量、にぶい黄褐色土少量
8. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性無、炭少量
9. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極有、粘性少し有、炭を含む
10. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性無
11. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性無、粘床

SI78 K1

a H=60.6m b



SI78 K1

1. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性有、明黄褐色土・炭混入、焼土ブロック含む

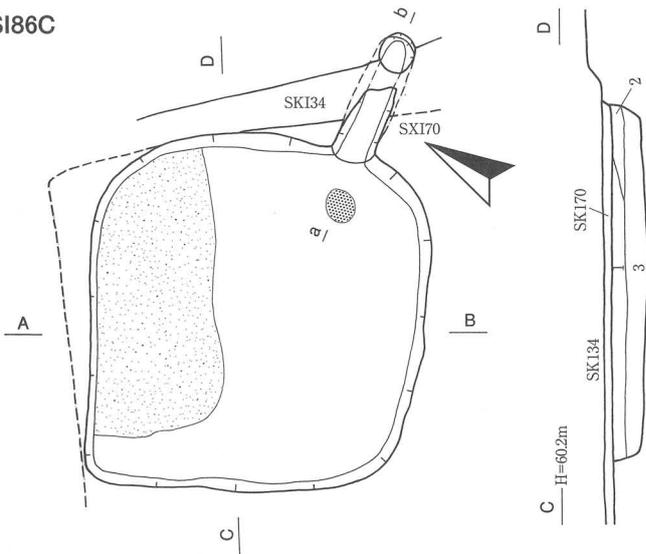
0 1m

SI78 カマド

1. 10YR8/6 (黄橙) しまり有、粘性無、炭微量
2. 7.5YR4/6 (褐) しまり有、粘性有、焼土・炭含む
3. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無、マサ土・炭含む
4. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性少し有、にぶい黄褐色土・炭含む
5. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性少し有、にぶい黄褐色土・炭
6. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極有、粘性少し有、黄橙色土・炭
7. 10YR4/6 (褐) しまり極有、粘性少し有、炭含む、袖
8. 10YR4/6 (褐) しまり極有、粘性少し有、黄橙色土・炭含、袖石の据え方
9. 2.5YR6/4 (にぶい橙) 焼土

第114図 SI78竪穴住居跡

SI86C

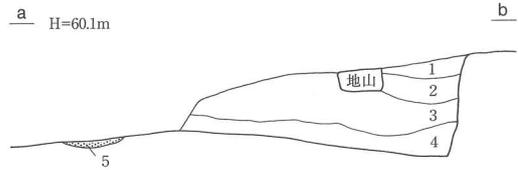
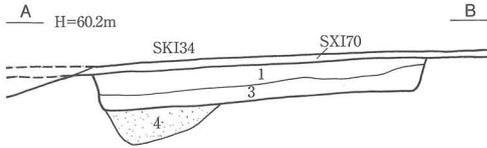


SI86C

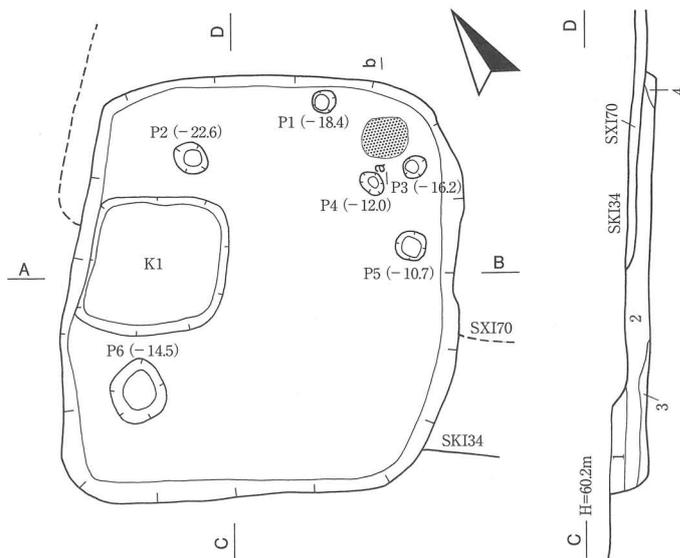
1. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭少量
2. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、浅黄褐色土と炭含む
3. 10YR8/3 (浅黄橙) しまりやや有、粘性無
4. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性少し有、貼床

SI86Cカマド

1. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性少し有、炭少量
2. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有、炭含む
3. 10YR8/3 (浅黄橙) しまりやや有、粘性無
4. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性少し有、炭・焼土含む
5. 2.5YR6/4 (にぶい橙) 燃焼部焼土



SI86D

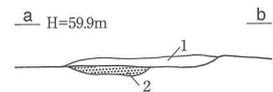
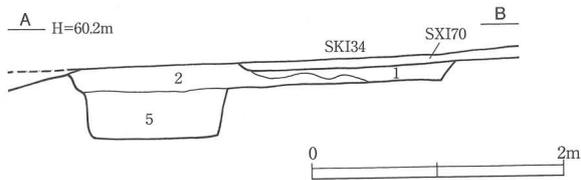


SI86D

1. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性少し有、炭少量
2. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性やや有、炭含む
3. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性やや有
4. 10YR8/3 (浅黄橙) しまりやや有、粘性無

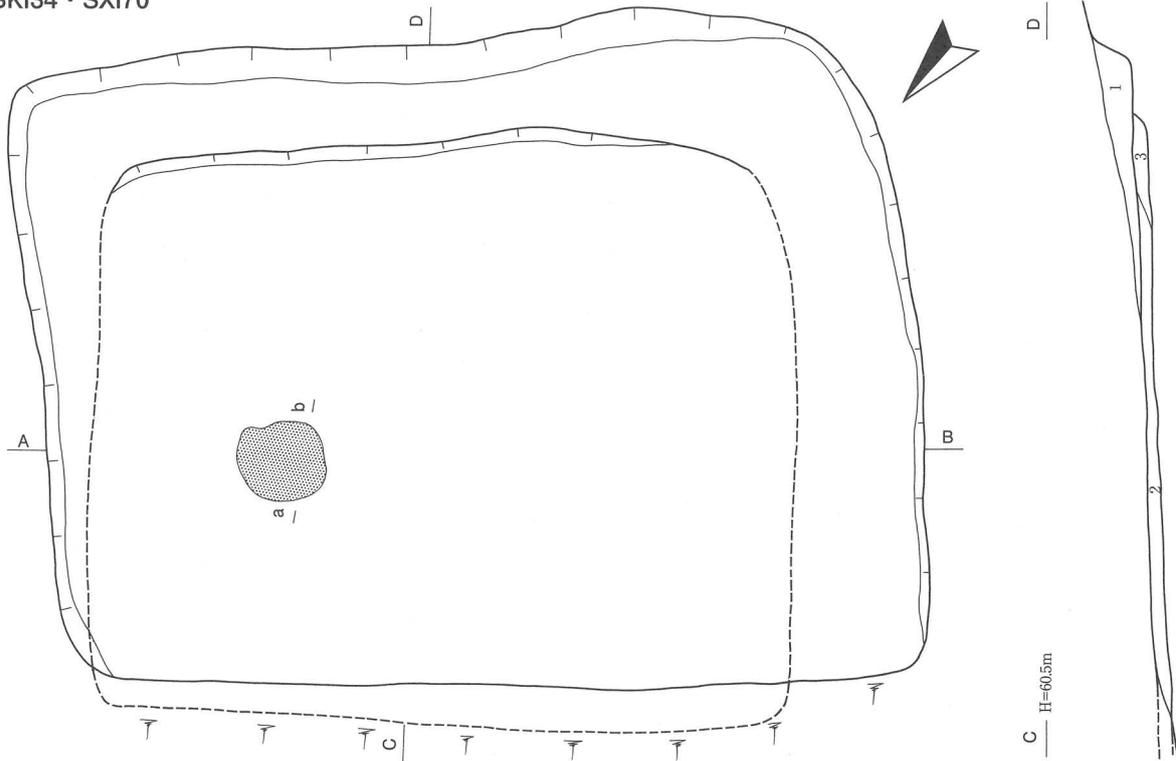
SI86D K1

5. 2.5Y5/3 (黄褐) しまり有、粘性無、下位を中心に灰黄褐色土・炭少量



第115図 SI86C・D竪穴住居跡

SKI34・SXI70



A H=60.3m



SKI34・SXI70

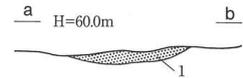
1. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性少し有、炭少量
2. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性少し有、炭少量
3. 10YR7/2 (にぶい黄橙) しまり有、粘性少し有

SXI70 炉

1. 2.5YR6/4 (にぶい橙) 焼土

SXI70 炉

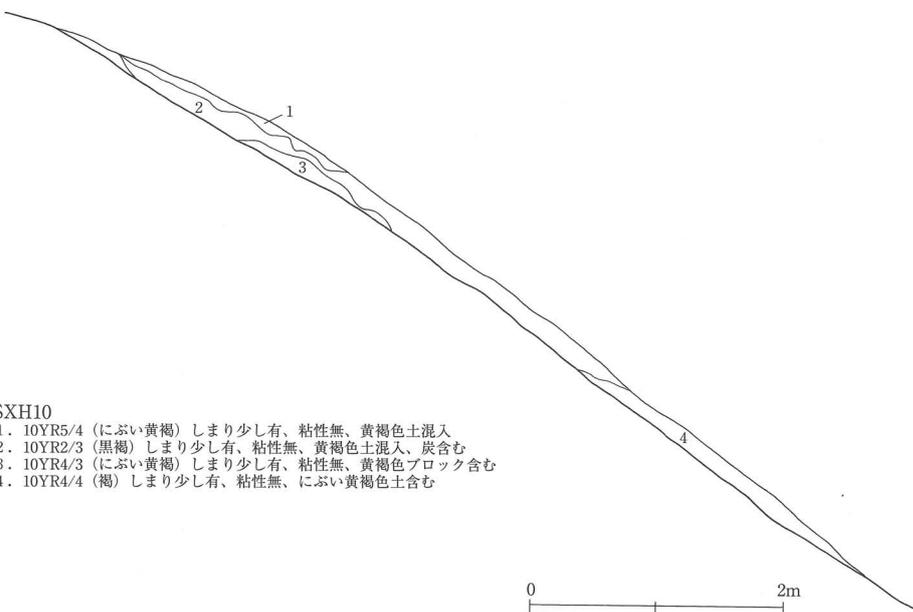
a H=60.0m



SXH10



A H=59.0m



SXH10

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり少し有、粘性無、黄褐色土混入
2. 10YR2/3 (黒褐) しまり少し有、粘性無、黄褐色土混入、炭含む
3. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり少し有、粘性無、黄褐色ブロック含む
4. 10YR4/4 (褐) しまり少し有、粘性無、にぶい黄褐色土含む

第116図 SXI70工房跡・SKI34竪穴状遺構・SXH10排土場

と基本層序の逆順に堆積しており、状況からみて斜面上に位置するS I 86C・D等を構築した際の掘削廃土が堆積したものと判断した。

S K I 34は平面形・規模は残存部から6.5×5 m前後の隅丸長方形状を呈するものと思われる。床面積は残存部分で32.8㎡を測る。壁は外傾して立ち上がる。壁高は南東壁で35cmを測り、北東・南西壁は西に向かうにつれて低くなっていく。埋土はにぶい黄橙色土の単層で自然堆積を呈している。床面はほぼ平坦で締まっている。

遺物は土師器片が小袋1袋分、羽口が4点、砥石が2点、鉄製品が3点と鉄滓が出土している。このうち掲載した遺物は埋土中より出土した羽口(90)と穂積具(60)と鉄鐸(61)と鞘金具(62)、検出面より出土した砥石(95)である。

S X I 70の平面形・規模は南東壁が4.4m残存していることと断面観察から推定で、5.5×4.5m前後の隅丸長方形状を呈するものと思われる。床面積は残存部分で24.8㎡を測る。壁は外傾して立ち上がる。壁高は南東壁で10cmを測り、北東・南西壁は西に向かうにつれて低くなっていくはずだが掘りすぎたためあくまで推定でしかない。埋土はにぶい黄褐色土を主体とした人為堆積を呈し2層に細分された。床面はほぼ平坦で締まっている。床面施設として中央からやや北コーナーよりの床面から地床炉が1基検出された。炉は67×65cmの楕円形を呈し、厚さ6cmの焼土が形成されている。

遺物は出土しなかった。

S I 86Cの平面形は隅丸方形状を呈し、規模は北西壁長2.7m、北東壁長2.8m、南東壁長2.6m、南西壁長2.6mを測る。主軸方位はN-6°-E、床面積は6.2㎡を測る。壁はやや外傾して立ち上がる。壁高は北西・北東壁で30cm、南東壁で26cm、南西壁で22cmを測る。埋土はにぶい褐色系の土を主体とした人為堆積を呈し、3層に細分された。床面は平坦で堅く締まり中央から北西壁際部分に貼床が施されている。

カマドは北東壁東コーナー際に位置する。本体部の残存状況は不良でカマド構築粘土は検出されず、わずかに燃焼部焼土と煙道が残存しているのみである。両袖は残存していないため詳細は不明である。燃焼部は径27×23cm、厚さ3cmの焼土が形成されている。煙道部は長さ1.11m、幅35cmの削り貫き式の煙道で下り勾配で煙出し部へ続いている。煙出し部は径31cmの円形を呈し、深さ81cmを測る。以上のことから本遺構はカマドを破壊し、きれいに掃除してから住居を廃棄したものと推測される。

遺物は掲載した土師器甕(226)と砥石1点(88)と、鉄滓が埋土中より出土した。

S I 86Dの平面形は隅丸長方形状を呈し、規模は北西壁長3.4m、北東壁長2.8m、南東壁長3.3m、南西壁長2.8mを測る。主軸方位は煙道部がS X I 70によって切られているため不明である。床面積は8.4㎡を測る。壁は外傾して立ち上がる。壁高は北西壁で22cm、北東壁で7cm、南東壁で14cm、南西壁で31cmを測る。埋土はにぶい黄褐色系の土を主体とした人為堆積を呈し、4層に細分された。床面は平坦で締まっている。床面施設として北西壁中央付近より土坑(K1)と柱穴(P1~6)が検出された。土坑は径111×107cmの隅丸方形状を呈し、深さ40cmを測る。柱穴の中で位置的に主柱穴となりえるのは、P2・6の2基である。

カマドは東コーナー付近に位置する。本体部の残存状況は不良である。カマドの構築粘土に使われたと思われる褐色系粘土が4cm程堆積するのみで両袖は残存せず、わずかにカマドの芯材の抜き取り穴とも思われるピットが3基(P1・P3・P4)残存するのみである。燃焼部には径36cmの円形を呈し、厚さ4cmの焼土が形成されている。また、煙道部はS X I 70構築時に削平を受けたと思われ、残存していない。

以上のことから本遺構はS I 86Cと同様にカマドを破壊し、きれいに掃除してから住居を廃棄したものと推測される。遺物は掲載した床面出土の砥石(89)1点のみである。

S I 93B 竪穴住居跡、S X I 30・71・73B 工房跡・S X H11 廃土場

(第117～119図、遺物図版20・22・24・68・92・120・121、写真図版86・87・223・224・226・254・280・302・303・316)

赤24A区南端部、ⅧC-3i・3jグリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出された。当初、遺構の中央付近にあった抜根跡の断面観察と、南西壁際からカマドの煙出しピットを検出していたことから、単独の竪穴住居跡であると思いき精査を開始したが、精査途中に炉を検出し、前述の抜根跡の断面観察を再度行ったところ、一段下に竪穴住居跡(S I 93B)があると判明したので、S I 93Bを貼床して改築された工房跡(S X I 71)であると判断した。また、S I 93Bの北東壁を精査中に同遺構の床面より高いレベルで鍛造剥片を検出し、壁面ならびに周辺を面的に再度検出し直した所、断面に上下二時期の重複(S X I 73A・B)を確認した。また、北東に隣接するS K I 36の壁面からも同様のプランを確認しており、床面から地床炉が検出されたことから工房跡と判断した。この遺構がS X I 73Aである。S X I 73Bからは炉等は検出されなかったものの、鍛造剥片が入ったピットを有する遺構を検出した。このピットは鍛造時に出た剥片を、遺構廃棄時にかき集めたものと思われる。問題はS I 93Bとの新旧関係であるが、同遺構精査中にS X I 73A・Bの床面レベルで床面ないし床面施設を確認していないので、少なくともS X I 73AはS I 93B・S K I 36よりは古い遺構であると思われる。よって新旧関係は(新)S X I 71→S I 93B・S K I 36→S X I 73A→(旧)S X I 73Bである。また、S X I 73A・Bを検出した際のクリーニングでS I 93Bの南東壁際から褐色土系のプラン等を確認し同遺構の断面ベルトを延長して精査を開始し、床面に地床炉をもつ工房跡を検出した。この遺構がS X I 30である。S X I 30はS I 93Bより古いことは確認できたが、隣接するS X I 71A・BとS K I 36とは直接的な切り合い関係が無いため新旧関係は不明だが、これらの遺構との距離が近すぎるため、同時存在の可能性は低いと思われる。S X H11はS I 93Bの北側斜面下に位置する。当初斜面上に立地する竪穴住居跡として精査を開始したが、壁面・床面は確認されず自然斜面が検出され、埋土が上位から褐色土・黒色土と基本層序の逆順に堆積しており、状況から見て斜面上に位置するS I 93B等を構築した際の掘削廃土が堆積したものと判断した。

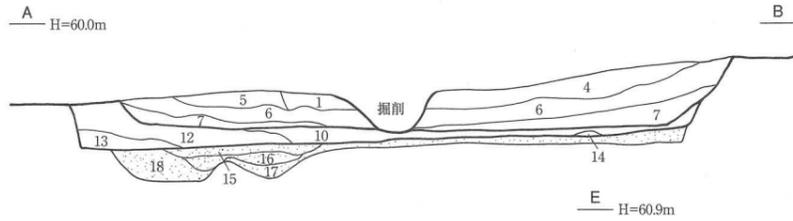
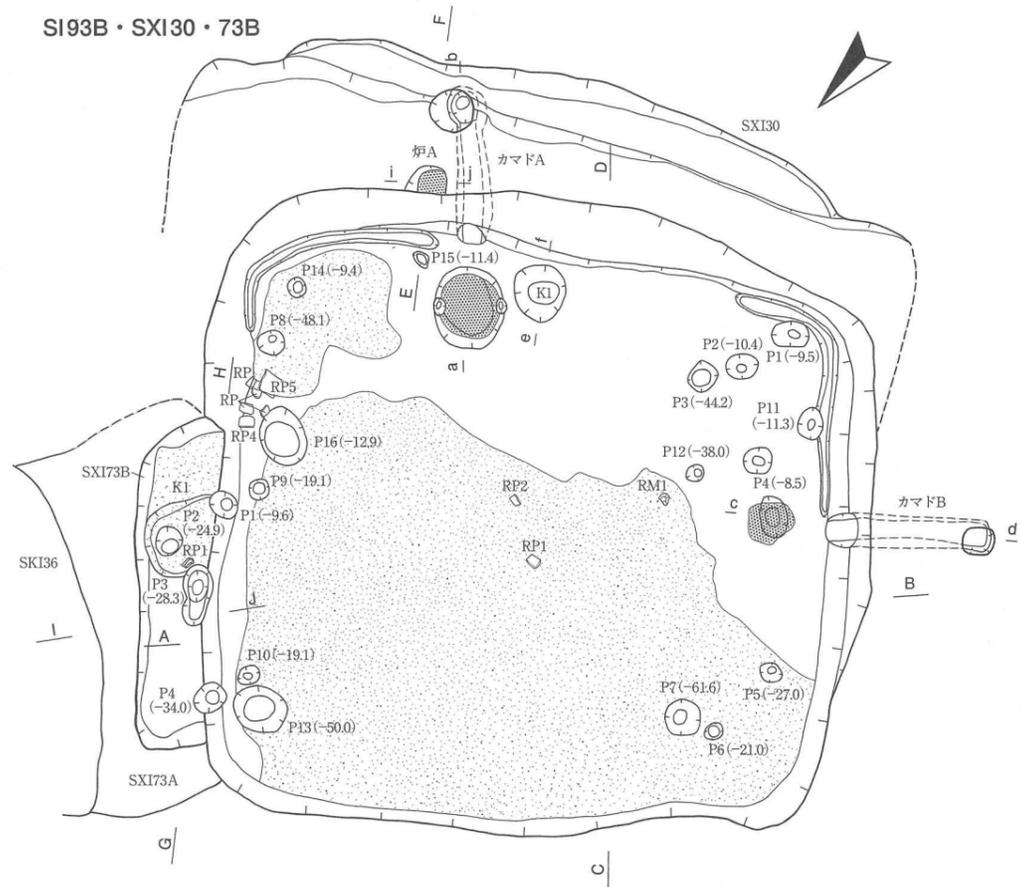
S X I 71の平面形は隅丸形状を呈し、規模は北西壁長4.9m、北東・南東壁長5.1m、南西壁長4.7mを測る。床面積は残存部分で19.0㎡を測る。壁は外傾して立ち上がる。壁高は南東壁で90cm、北西壁で17cmを測り、北東・南西壁は西に向かうにつれて低くなっていく。埋土は黒褐色系を主体とした自然堆積を呈し7層に細分された。床面はほぼ平坦で締まっている。床面施設として中央からやや北コーナーよりの床面から地床炉が1基検出された。地床炉は58×36cmの楕円形を呈し、厚さ10cmの焼土が形成されている。

遺物は土師器片が9号袋約1/3袋、須恵器3点、羽口片6点、鉄製品(祭具)が1点出土した。このうち掲載した遺物は埋土出土の土師器甕(261)、検出面出土の土師器甕(262)、床面出土のRM1の祭具(77)である。炉付近のサンプル土から、わずかに鍛造剥片が出土したことから鍛冶工房の可能性が考えられる。

S I 93Bの平面形は隅丸形状を呈し、規模は北西壁長4.9m、北東壁と南東壁長5.1m、南西壁長4.7mを測る。主軸方位はN-44°-E、床面積は残存部分で23.0㎡を測る。壁は鋭角的に立ち上がり、壁高は北西壁12cm、南東壁120cmを測り、北東・南西壁は西に向かうにつれて低くなっていく。埋土は褐色土系を主体とした人為堆積を呈し、8層に細分された。床面は平坦で堅く締まり、北・東コーナーでは周溝が検出された。また、住居中央から西側にかけて貼床が施されている。床面施設としてカマドA右脇より土坑が1基(K1)、住居内各地から柱穴が13基検出されている。K1の平面形は楕円形状を呈し、径48×44cm、断面形は丸底状を呈し、深さ16cmを測る。また位置的にP3・7・8・13の4基が主柱穴となりえる。

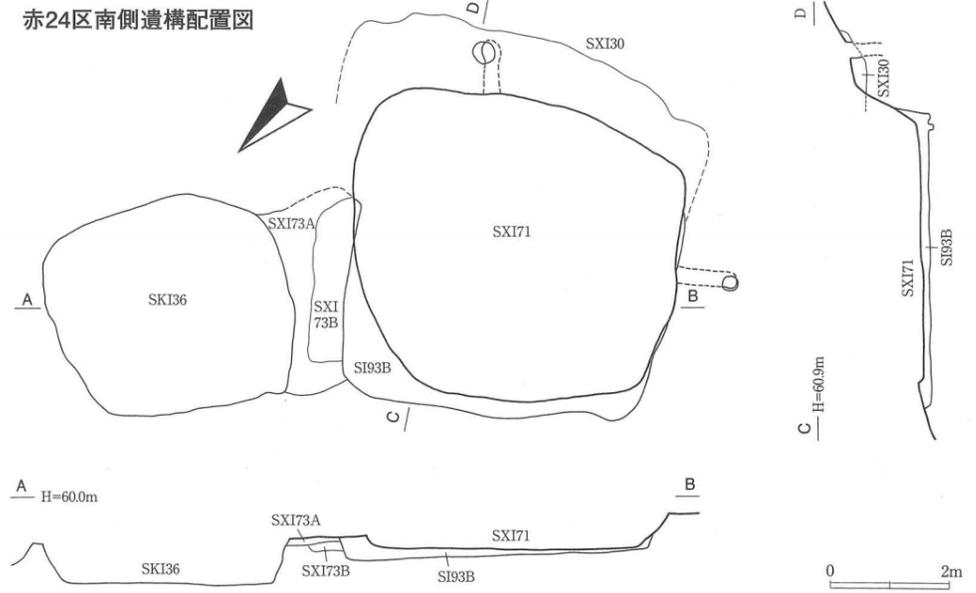
カマドは南東壁中央(カマドA)と南西壁中央(カマドB)で検出された。検出状況から見て建て替えて

SI93B・SXI30・73B

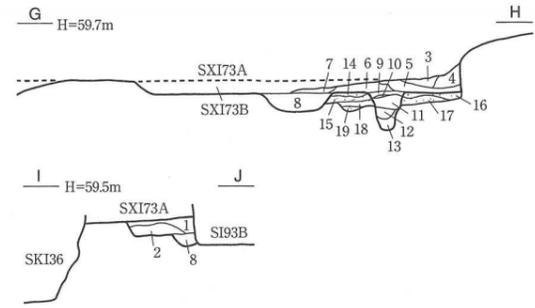
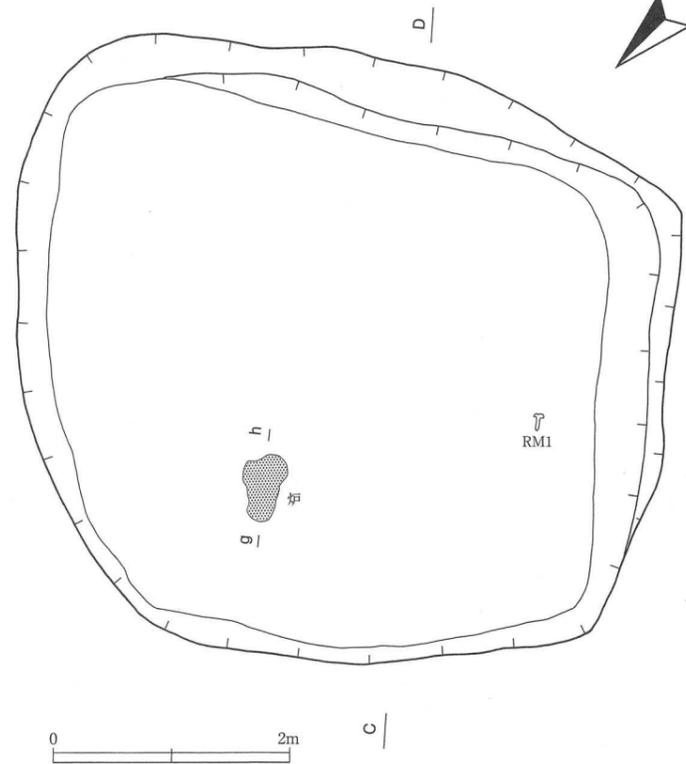


- SXI71**
1. 2.5Y7/4 (浅黄) 砂質 しまり極有、粘性無、黒褐色土含む、炭微量
 2. 10YR2/3 (黒褐) しまり極有、粘性少し有、炭・マサ土含む
 3. 10YR4/4 (褐) しまり極有、粘性少し有、褐色土・炭少量
 4. 10YR7/6 (明黄褐) しまり極有、粘性少し有、暗褐色土含む、炭微量
 5. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性少し有、黄褐色ブロック含む、炭微量
 6. 10YR5/6 (黄褐) しまり極有、粘性少し有、暗褐ブロック、炭含む、焼土粒少量
 7. 10YR3/2 (黒褐) しまり有、粘性有、黄褐ブロック・にぶい黄褐色土・炭含む
- SI93B**
8. 10YR4/6 (褐) しまり極有、粘性有
 9. 10YR4/4 (褐) しまり極有、粘性少し有、炭・焼土少量
 10. 10YR5/8 (黄褐) しまり極有、粘性少し有、淡黄色土・明黄褐色土混入
 11. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性やや有、黄褐色土・炭含む
 12. 10YR6/8 (明黄褐) しまり極有、粘性少し有、淡黄ブロック混入
 13. 2.5Y8/4 (淡黄) しまり有、粘性無、にぶい黄褐色土含む
 14. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性やや有、黄褐色土・炭含む
 15. 10YR6/8 (明黄褐) しまり極有、粘性少し有、淡黄ブロック混入
 16. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有、黄褐色土・炭含む
 17. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性少し有、淡黄ブロック混入
 18. 2.5Y8/4 (淡黄) しまり有、粘性無、にぶい黄褐色土含む
- SXI30**
19. 10YR3/1 (黒褐) しまり有、粘性やや有、炭微量
 20. 10YR4/4 (褐) しまり少し有、粘性少し有、黒褐色土・にぶい黄褐色土粒含む、炭少量

赤24区南側遺構配置図



SXI71

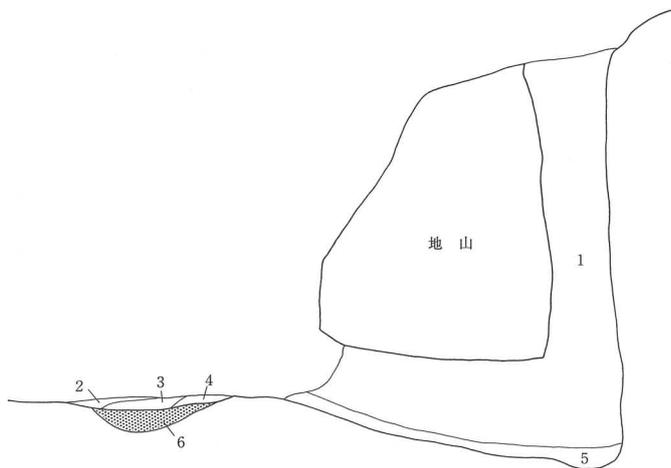


- SXI73B**
1. 10YR2/3 (黒褐) しまり有、粘性少し有、黄褐色土・炭を混入
 2. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性少し有、黄褐色ブロック混入、黒褐色土含む
 3. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性無、黄褐ブロック混入、炭を含む
 4. 10YR5/8 (黄褐) しまりやや有、粘性有、炭少量
 5. 10YR4/4 (褐) しまり極有、粘性少し有
 6. 10YR4/6 (褐) しまり極有、粘性少し有、黄褐色混入 炭を含む
 7. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性少し有、黄褐色ブロック混入、炭含む
 8. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有、黄褐色土混入 炭含む
 9. 2.5Y7/4 (浅黄) しまりやや有、粘性無、にぶい黄褐色土含む
 10. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有、黄褐色土混入、炭含む
 11. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性やや有、黄褐色ブロック・炭含む、鍛造剥片多量
 12. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性少し有、黒褐色土混入 炭含む
 13. 10YR2/3 (黒褐) しまり少し有、粘性無、炭含む
 14. 10YR2/3 (黒褐) しまり有、粘性少し有、炭微量
 15. 2.5Y7/4 (浅黄) しまりやや有、粘性無、にぶい黄褐色土含む
 16. 10YR2/3 (暗褐) しまり有、粘性少し有、炭微量
 17. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性少し有、黄褐色ブロック混入
 18. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有、黄褐色土混入、炭含む
 19. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有、にぶい黄褐色土混入

第117図 SI93B竪穴住居跡・SXI30・71・73A・B工房跡・SKI36竪穴状遺構(1)

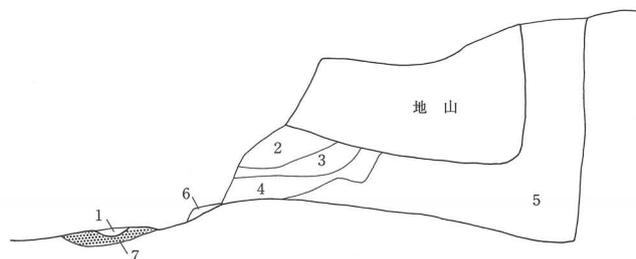
SI93B カマドA

a H=60.7m



SI93B カマドB

c H=60.0m



SKI36

1. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性無、黄褐色土混入、炭含
2. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極有、粘性無、浅黄色ブロック混入、炭を含む
3. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性無、明黄褐色土・炭含
4. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、浅黄色ブロック混入、炭含む
5. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、浅黄色ブロック混入、炭含む
6. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、明黄褐色・浅黄色ブロック混入
7. 10YR2/1 (黒) しまり・粘性少し有
8. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、浅黄色土含
9. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、浅黄色土・にぶい黄褐色土含む、炭少量
10. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性少し有、黄褐色ブロック混入、炭含む
11. 10YR7/6 (明黄褐) しまり極有、粘性少し有、褐色ブロック含む、炭少量
12. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性やや有、黄褐色・にぶい黄褐色土含む
13. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性やや有、炭含む
14. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性少し有、褐色土・炭混入
15. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性少し有、炭少量
16. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性少し有、褐色土・炭含
17. 10YR3/4 (暗褐) しまり少し有、粘性無
18. 10YR2/3 (黒褐) しまり少し有、粘性少し有、褐色ブロック含む、炭少量
19. 10YR2/1 (黒) しまりやや有、粘性無、褐色土・炭含む
20. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性少し有、褐色土ブロック混入、炭含む
21. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性少し有、褐色ブロック・炭を含む

SI93B K1

e H=59.2m



SI93B K1

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、淡黄色土含む
2. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
3. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
4. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性やや有
5. 2.5Y7/4 (淡黄) しまり極有、粘性やや有

0 1m

SI93B カマドA

1. 10YR4/4 (褐) しまり無、粘性有
2. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性有、炭少量
3. 10YR2/1 (黒) しまり極めて有、粘性無、炭多量
4. 7.5YR4/4 (褐) しまり無、粘性有
5. 10YR3/4 (暗褐) しまり無、粘性有、炭少量
6. 5YR7/3 (にぶい橙) 焼土

SI93B カマドB

1. 7.5YR4/4 (褐) しまり有、粘性有、炭・焼土少量
2. 10YR6/6 (明褐) しまり有、粘性有、黒褐色土少量
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり無、粘性有
4. 10YR4/4 (褐) しまり無、粘性有
5. 10YR3/4 (暗褐) しまり無、粘性有
6. 10YR5/8 (暗褐) しまり無、粘性有
7. 5YR7/3 (にぶい橙) 焼土

SXI71 炉

g H=59.1m

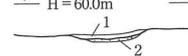


SXI71 炉

1. 5YR5/8 (明赤褐) 焼土

SXI30 炉A

i H=60.0m



SXI30 炉A

1. 7.5YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性少し有
2. 5YR4/8 (明赤褐) 焼土

22. 2.5Y7/4 (浅黄) しまりやや有、粘性無、にぶい褐色土含
23. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
24. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無
25. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性少し有、炭少量
26. 2.5Y7/4 (浅黄) しまりやや有、粘性無
27. 10YR5/8 (黄褐) しまりやや有、粘性少し有、浅黄色土含
28. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性少し有、明黄褐色土混入、炭含
29. 10YR7/6 (明黄褐) しまり有、粘性無、マサ土を混入
30. 10YR6/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性無、炭含
31. 10YR7/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性無、暗褐色土混入、炭含

SXI73A

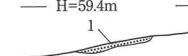
32. 10YR2/3 (黒褐) しまり有、粘性少し有、黄褐色土・炭混入

SXI73B

33. 10YR2/3 (黒褐) しまり有、粘性少し有、黄褐色土・炭混入
34. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性少し有、黄褐色ブロック混入、黒褐色土含
35. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有、黄褐色土混入、炭含

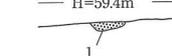
SXI73A 炉A

a H=59.4m



SXI73A 炉B

c H=59.4m

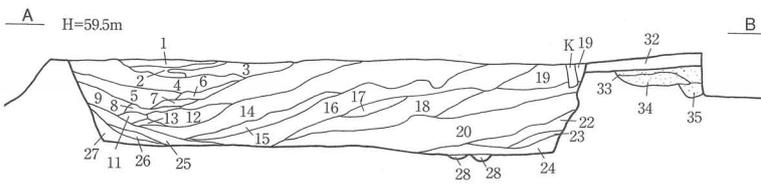
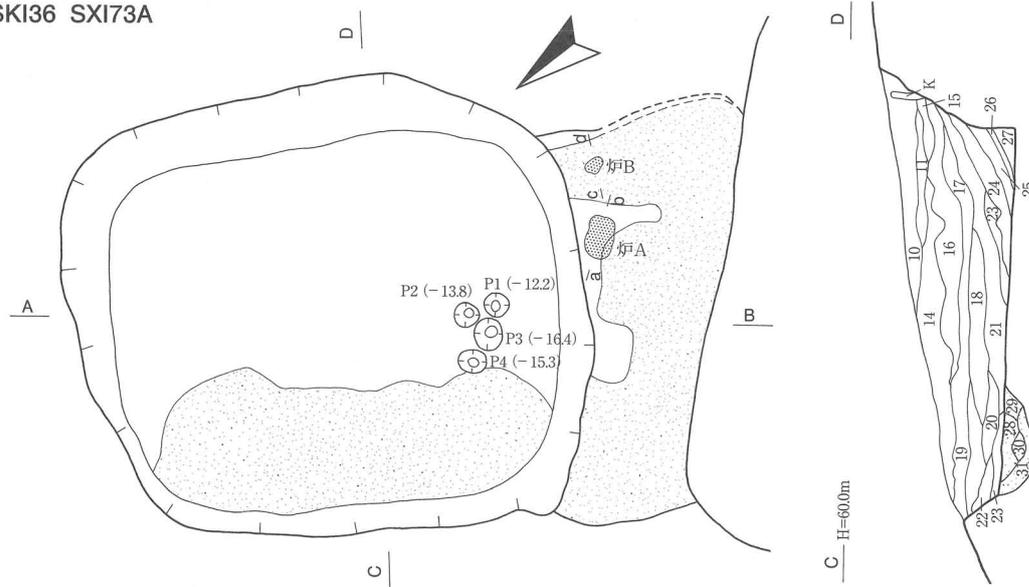


SXI73A 炉A・B

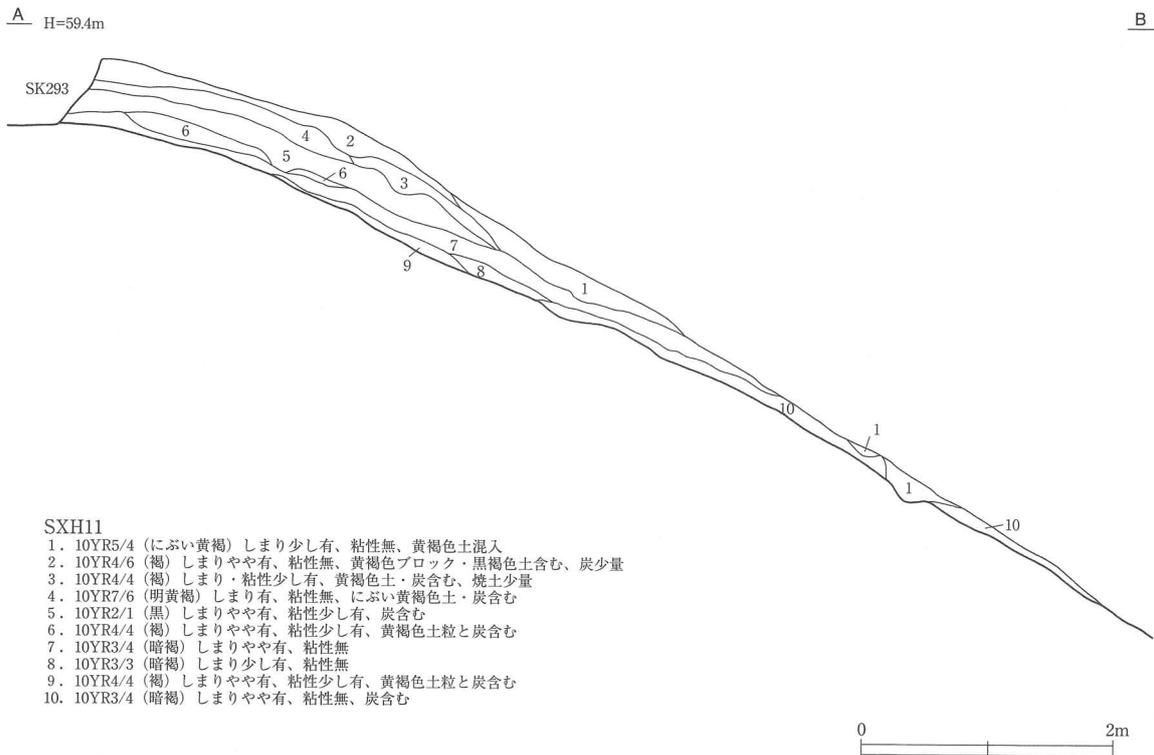
1. 5YR4/8 (明赤褐) 焼土

0 50cm

SKI36 SXI73A



SXH11



- SXH11
1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり少し有、粘性無、黄褐色土混入
 2. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性無、黄褐色ブロック・黒褐色土含む、炭少量
 3. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性少し有、黄褐色土・炭含む、焼土少量
 4. 10YR7/6 (明黄褐) しまり有、粘性無、にぶい黄褐色土・炭含む
 5. 10YR2/1 (黒) しまりやや有、粘性少し有、炭含む
 6. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性少し有、黄褐色土粒と炭含む
 7. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性無
 8. 10YR3/3 (暗褐) しまり少し有、粘性無
 9. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性少し有、黄褐色土粒と炭含む
 10. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性無、炭含む

第119図 SXI73A工房跡・SKI36竪穴状遺構(3)・SXH11排土場

はなくカマドの造り替えと思われ、燃焼部の残存状況からみてカマドAがカマドBより新しいものと思われる。カマドAの本体部の残存状況は不良である。燃焼部は径70×61cmの楕円形を呈する深さ5cmの掘り込みの底部を中心に、径50cm、厚さ8cmの焼土が形成されている。また掘り込みの両脇には袖の芯材の貫き取り穴になる可能性のあるピットが各1基検出されている。煙道部は長さ137cm、幅30cmの削り抜き式の煙道で下り勾配で煙出し部へ続いている。煙出し部は37×35cmの楕円形を呈し、深さ168cmを測る。カマドBの本体部の残存状況は不良である。燃焼部には径40×35cm、厚さ7cmの焼土が残るのみである。煙道部は長さ140cm、幅31cmの削り貫き式の煙道で下り勾配で煙出し部へ続いている。煙出し部は25×24cmの楕円形を呈し、深さ94cmを測る。

遺物は土師器片が小袋1袋分、須恵器片が25点、敲石が1点、鉄製品が3点（紡錘車・鏝・棒状各1点）と鉄滓が出土している。このうち掲載した遺物はカマドより出土した土師器坏（240）、床面より出土した土師器甕（238・239）と須恵器（241～245）、貼床中より出土した鏝（69）、埋土中より出土した棒状鉄製品（68）と鉄製紡錘車（70）である。

S X I 73 Bの平面形・規模は大半がS I 93 Bに切られているためはっきりしないが、北西壁が0.5m、南東壁が0.7m残存し、北西壁が2.7m遺存していることから、少なくとも一辺2.7m前後ある隅丸長方形乃至方形であったと思われる。床面積は残存部分で1.3㎡を測る。壁は北西・北東壁は外傾して、南東壁は鋭角に立ち上がる。壁高は北西壁で11cm、南東壁で37cmを測り、北東壁は西に向かうにつれて低くなっていく。埋土は上位は黒褐色系、下位は褐色系の土を主体とした人為堆積を呈す。床面はほぼ平坦で締まり、中央から南の部分には貼床が施されている。床面施設として中央付近から土坑が1基（K 1）、その周辺からピットが4基（P 1～P 4）検出された。土坑はS I 93 Bに切られているため平面形・規模ははっきりしないが長軸が61cm残存し、短軸が53cm遺存することから、楕円ないし隅丸形状を呈するものと思われ、深さ10cmを測る。柱穴の中で位置的に支柱穴となりえるのは無いと思われるが、P 1から多量の鍛造剥片が出土しており、本遺構が人為的に埋め戻されていることから、工房跡廃棄時に鍛造剥片をかき集めて埋めたものであると思われる。

遺物は土師器片が1点、須恵器片が2点、羽口片が1点、鉄製品（筒状）が1点、P 1より鍛造剥片が出土している。このうち掲載した遺物は埋土中より出土した筒状鉄製品（78）と床面より出土したR P 1の羽口（93）である。

S X I 30は遺構の大半をS I 93 Bに切られている為、平面形・規模ははっきりしないが、南東壁が6.2m残存していることから長軸6m前後の隅丸長方形乃至長方形を呈するものと思われ。床面積は残存部分で4.4㎡を測る。壁は外傾して立ち上がる。壁高は南東壁で48cmを測る。埋土は上位は黒褐色土、下位は褐色土を主体とした自然堆積を呈し2層に細分された。床面はほぼ平坦で締まっている。床面施設として南東壁中央壁際の床面から地床炉を1基検出した。炉は径35×25cm、深さ3cmの掘り込みの底部に26×22cmの楕円形状を呈し、厚さ1cmの焼土が形成されている。遺物は土師器片が6点と鉄滓が出土した。

S X H 10の平面形・規模は6.2×6.3mの方形状を呈し、最大厚約30cmを測る。埋土は上位に褐色土、中位に黒褐色土、下位にぶい黄褐色土の人為堆積である。遺物は出土しなかった。

S X H 11の平面形・規模は7.6×8.0mの楕円形状を呈し、最大厚70cmを測る。埋土は上位に褐色土、中位に黒色土、下位に暗褐色土の人為堆積である。

遺物は土師器片が8点、羽口片・刀子・砥石・要石が各1点と鉄滓が出土した。このうち掲載した遺物は検出面より出土した刀子（79）と埋土中より出土した土師器甕（269）と砥石（104）と要石（105）である。

S X I 73 A 工房跡、S K I 36 竪穴状遺構 (第117～119図、写真図版88)

赤24A区南半部、ⅧC-3i・4iグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。検出当初は単独の竪穴住居跡であると考え精査を開始したが、S K I 36の南西壁でS X I 73等を切っている状況を確認した。S K I 36はカマドや地床炉等が検出されなかったことから竪穴住居跡ではなく竪穴状遺構と判断した。S X I 73 Aは前述の通り床面から地床炉が検出されたことから工房跡と判断した。S K I 36北コーナー付近の肩部がS I 94 Aに切られており、これらの遺構の新旧関係は(新) S I 94 A→S I 93 B・S K I 36→S X I 73 A→(旧) S X I 73 Bであると思われる。

S K I 36の平面形は隅丸長方形を呈し、規模は北西壁長3.9m、北東壁長3.3m、南東壁長3.8m、南西壁長3.5mを測る。床面積は9.4㎡を測る。壁はやや外傾して立ち上がる。壁高は南東壁で106cm、北西壁で28cmを測り、北東・南西壁は西側に向かうにつれて低くなっていく。埋土は上位はにぶい黄褐色土系、中位は暗褐色土系、下位は褐色土系の土が堆積する人為堆積を呈し、31層に細分された。床面は平坦で締まっており、中央部分から北西壁際にかけて貼床が施されている。床面施設は住居中央やや南西よりに柱穴4基が検出されている。遺物は土師器片が9点、羽口片が1点出土している。

S X I 73 Aの平面形・規模はS K I 36・S I 93 Bに切られている上に北西側斜面の崩落で判然としないが、北西-南東方向で約3m残存していることから、一辺3m前後あったものと思われる。床面積は残存部分で3.5㎡を測る。壁は外傾して立ち上がる。壁高は南東壁で10cmを測る。埋土は黒褐色土系を主体とした人為堆積を呈す。床面はほぼ平坦で締まっている。床面施設として中央から東コーナーよりの床面から地床炉が2基(炉A・B)検出された。炉Aは32×22cmの楕円形を呈し、厚さ3cmの焼土が形成されている。炉Bは12×10cmの楕円形を呈し、厚さ4cmの焼土が形成されている。遺物は出土しなかった。

S I 94 A 竪穴住居跡 (第120・121図、遺物図版22・68・91・121、写真図版89・224・254・279・302・303・316)

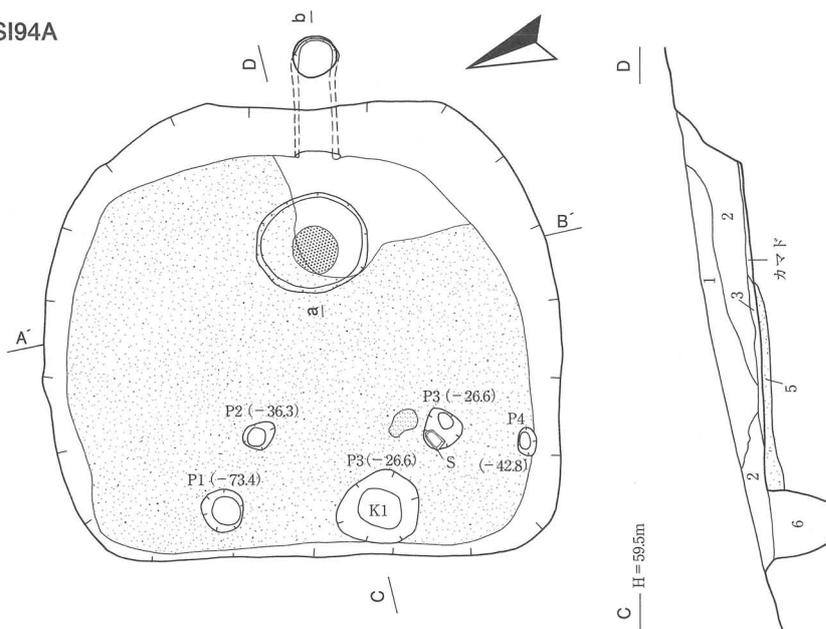
赤24A区南半部、ⅧC-4hグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。本遺構は新旧2棟の竪穴住居跡が重複していることが検出段階で判明していたので、新しい住居をA、古い住居をBとし、共通のベルトを設定して精査を開始した。また、本遺構南壁を精査中に、S K I 36の北コーナーの肩部を切っているのを確認しているのと同遺構よりは新しい。よって新旧関係は(新) S I 94 A→(旧) S I 94 B・S K I 36であるが、S I 94 BとS K I 36との新旧関係は不明である。

平面形は隅丸方形を呈し、規模は西壁長4m、北壁長3.7m、東壁長4.1m、南壁長3.5mを測る。主軸方位はE-21°-S、床面積は10.1㎡を測る。壁は外傾して立ち上がる。壁高は西壁で7cm、東壁で50cmを測り、南・北壁は西壁に向かうにつれて低くなる。埋土は上位は暗褐色土、中位はにぶい褐色土、下位は黒色土を主体とした自然堆積を呈し、5層に細分された。床面は平坦で締めりカマド付近以外に貼床が施されている。床面施設として、西壁際より土坑(K1)と住居西側に柱穴が4基(P1～P4)検出されている。土坑は69×57cmの楕円形状を呈し、深さ37cmを測る。柱穴は位置的に主柱穴とはなりえないと思われる。

カマドは東壁中央に位置する。本体部の残存状況は不良で、わずかに燃焼部焼土と煙道が残存しているのみである。両袖は残存していないため詳細は不明である。燃焼部は87×81cm、深さ6cmの掘り込みの底部中央付近に径38cm、厚さ8cmの焼土が形成されている。煙道部は長さ98cm、幅33cmの削り貫き式の煙道で下り勾配で煙出し部へ続いている。煙出し部は径約33cmの円形を呈し、深さ75cmを測る。

遺物は土師器片が9号袋1/2袋分、須恵器片1点、羽口片が4点、石製品が2点(砥石・磨石)、鉄製品が4点(錫杖状・板状・釣針・棒状)と鉄滓が出土している。掲載した遺物は埋土中より出土した羽口(92)・釣針(71)・棒状鉄製品(72)・板状鉄製品(73)、検出面より出土した土師器甕(246)・磨石(99)・砥石(100)である。

SI94A



SI94A

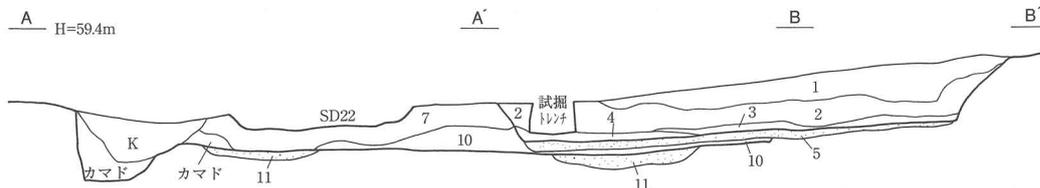
1. 10YR2/2 (暗褐) しまり有、粘性少し有、にぶい黄褐色土・炭含む
2. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、灰黄褐色土含む
3. 10YR2/1 (黒) しまり有、粘性少し有
4. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性少し有、炭含む
5. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性少し有、浅黄色土混入、炭・焼土ブロック含む

SI94 K1

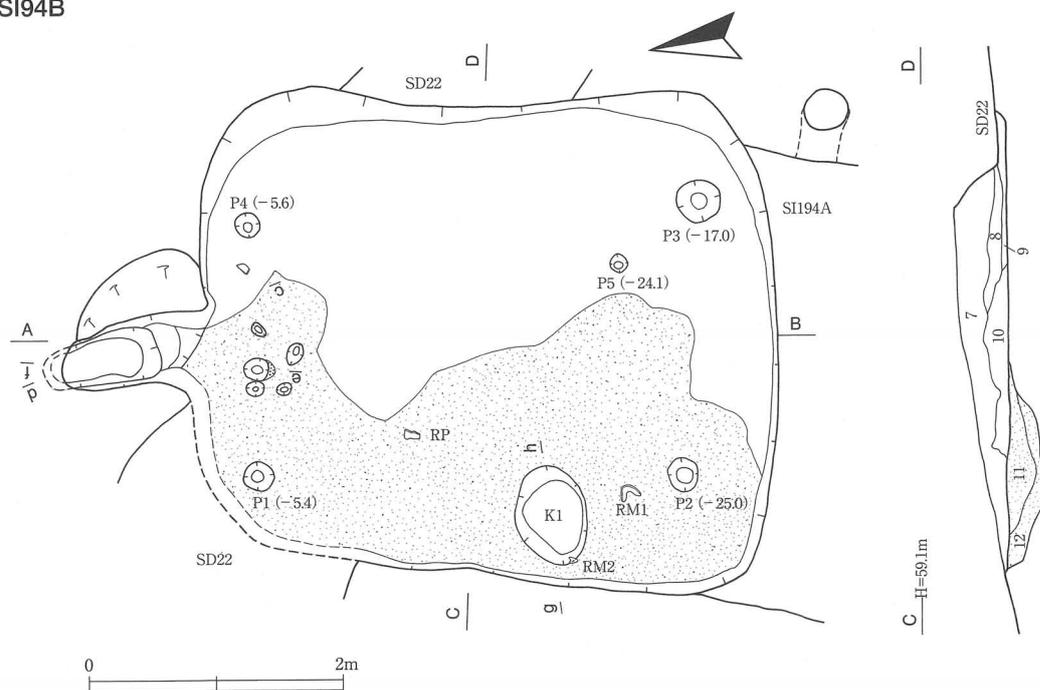
6. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性少し有、褐色ブロック・炭含む

SI94B

7. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、黄褐色土含む、炭少量、焼土微量
8. 10YR3/2 (黒褐) しまり有、粘性無、黄褐色ブロック、炭を少量
9. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭含む
10. 2.5Y7/4 (淡黄) しまり有、粘性無、黄褐色ブロック少量、炭・マサ土含む
11. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、黄褐色ブロック少量、炭含む、貼床
12. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、貼床



SI94B



第120図 SI94A・B竪穴住居跡(1)

SI94B 竪穴住居跡 (第120・121図、遺物図版22・23・121、写真図版90・224・303)

赤24A区南半部、ⅧC-4g・4hグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。本遺構はSI94AとSD22に切られていることから、新旧関係は(新)SD22・SI94A→(旧)SI94Bである。

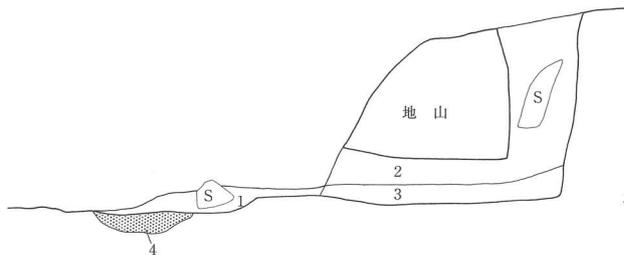
平面形・規模は住居北半分をSD22に切られているため、北西コーナー付近を消失しているが、西壁は3.3m、北壁は2.4m残存し、東壁は4.5m、南壁は4.2m遺存することから、4.5×4m前後の隅丸長形状を呈するものと思われる。主軸方位はN-14°-E、床面積は推定で15.1㎡を測る。壁は外傾して立ち上がる。壁高は西壁で3cm、東壁で10cmを測り、北壁は西壁に向かうにつれて低くなるが、南壁はSI94Aに切られているため僅かに壁の立ち上がりが残るのみである。埋土はにぶい褐色系の土を主体とした人為堆積を呈し、4層に細分された。床面は平坦で堅く締まり中央から西側部分に貼床が施されている。床面施設として、西壁際より土坑(K1)と各コーナーから住居中央に少しよったところを中心に柱穴が5基(P1~P5)検出されている。土坑は79×57cmの楕円形状を呈し、深さ25cmを測る。位置的に主柱穴となる柱穴はP1~P4の4基であると思われる。

カマドは北壁中央に位置する。本体部はSD22と攪乱により消失しており残存状態は不良で、僅かに芯材の抜き取り穴と思われるピットが4基と径16×5cm、厚さ2cmの燃焼部焼土が残存するのみである。燃焼部焼土のすぐ奥には支脚の抜き取り穴と思われる径20×18cm、深さ7cmのピットが検出されている。煙道部は長さ約1.22m、幅約53cmの煙道で下り勾配で煙出し部へ続いているが、攪乱により削り貫き式か掘り込み式かは不明である。煙出し部の深さは63cmを測る。

SI94A カマド

a H=59.5m

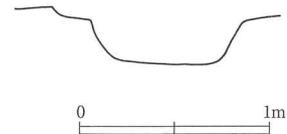
b



SI94B K1

g H=58.7m

h



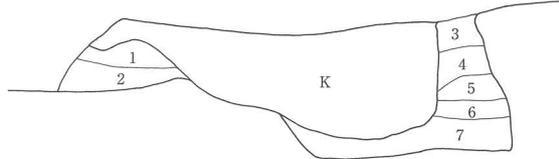
SI94A カマド

1. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性少し有、にぶい黄褐色土・炭含む
2. 10YR3/1 (黒褐) しまり有、粘性少し有、炭・焼土粒含む
3. 7.5YR4/4 (褐) しまり極有、粘性少し有、炭少量
4. 5YR7/3 (にぶい橙) 焼土

SI94B カマド

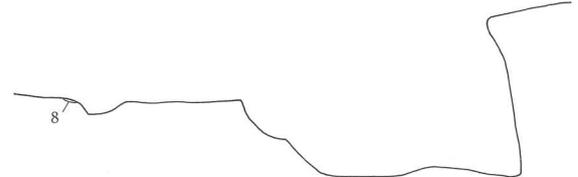
c H=58.9m

d



e H=58.9m

f



SI94B カマド

1. 2.5Y8/3 (淡黄) しまり無、粘性無、にぶい黄褐色土含む、炭を少量
2. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性無、淡黄色土・炭含む
3. 2.5Y8/3 (淡黄) しまり少し有、粘性無
4. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無、にぶい黄褐色土混入、炭少量
5. 2.5Y8/3 (淡黄) しまり有、粘性無
6. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、炭微量
7. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無、炭少量
8. 5YR7/3 (にぶい橙) 焼土

第121図 SI94A・B竪穴住居跡(2)

遺物は土師器片が19点、須恵器片が3点、羽口片が1点、磨石が1点、鉄製品が4点（鋤先・鉄鍬・楔様？・釣針各1点）と鉄滓が出土している。このうち掲載した遺物は床面より出土した土師器甕（247・248）とRM1の鋤先（74）、RM2の鉄鍬（75）と埋土中より出土した土師器坏（249）と楔様？（76）である。

S I 95 竪穴住居跡（第122図、遺物図版68・92、写真図版91・254・280）

赤24B区北半部、ⅧB-2r・2sグリッドに位置するが、前述の通り削平・整地によって遺構の残存状況は極めて悪く、僅かに残っていたカマド構築粘土と考えられる褐色系粘土と周溝跡をⅥ層中で検出した。

平面形・規模は壁面と埋土はほとんど残存していないが、北西・南西コーナーで周溝を確認し、床面土坑と同一面にある炉の位置と床面のレベルから見て、長軸7.7m、短軸4.5m弱の隅丸長形状を呈していたものと推測される。主軸方位はN-79°-E、床面積は推定で約31.7㎡を測る。壁はやや外傾して立ち上がる。壁高は西壁で17cmを測る。埋土は竪穴本体は黒色、周溝にはぶい黄褐色の土を主体としている。床面は平坦で堅く締まる。床面施設として西壁際付近より土坑1基（K1）と柱穴5基（P1～P5）と住居中央付近より地床炉を1基と、カマド以外の西壁際と北西コーナー付近から周溝を検出した。K1は93×71cmの楕円形状を呈し、深さ66cmを測る。柱穴の中で位置的に主柱穴となるものはP4・5の2基であると思われる。炉は45×23cmの楕円形を呈し、厚さ4cmの焼土が形成されている。

カマドは西壁中央に位置する。本体部の残存状況は不良である。両袖は芯材の抜き取り穴と考えられるピット各2個以外は確認されなかった。燃焼部は径62×43cm、厚さ8cmの焼土が形成されている。煙道部は状況から見て掘り込み式と思われ、長さ1.33m、幅41cmで煙出し部へ続いているが境が明瞭でない。

遺物は土師器片が小袋1/2袋分と羽口2点で、掲載した遺物はカマドより出土した羽口（94）である。

S I 100 竪穴住居跡（第123図、遺物図版23、写真図版91・92・225）

赤24A区西斜面、ⅧC-2fグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。検出当初からSK I 43と重複関係にあることは確認していたが新旧関係が判然としなかったため、共通のベルトを設定して精査を開始した。断面観察の結果SK I 43に切られている事を確認したので、新旧関係は（新）SK I 43→（旧）S I 100である。西側斜面が消失しているため平面形・規模は不明だが、北壁で約1m、南壁で2.2m残存し、東壁で2.5m遺存していることから一辺が約3m弱の隅丸長形状を呈するものと思われる。主軸方位はE-40°-S、床面積は残存部分で5.4㎡を測る。壁はやや外傾して立ち上がる。壁高は東壁で91cmを測り、北壁・南壁は西側に向かうにつれて低くなっていく。埋土にはぶい黄褐色系の土を主体として8層に細分され、床面は平坦で堅く締まり中央から西側に貼床が施されている。

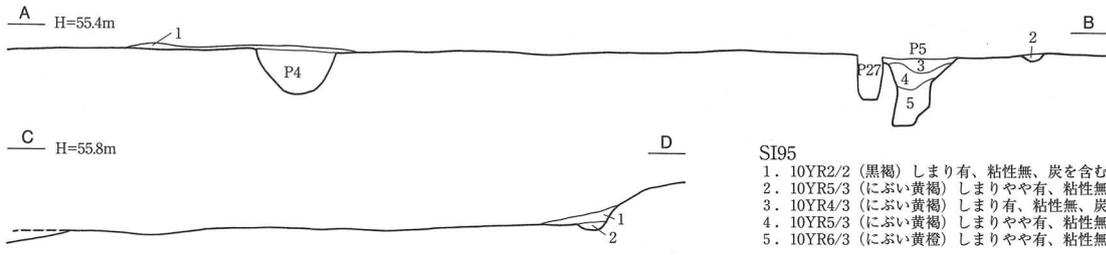
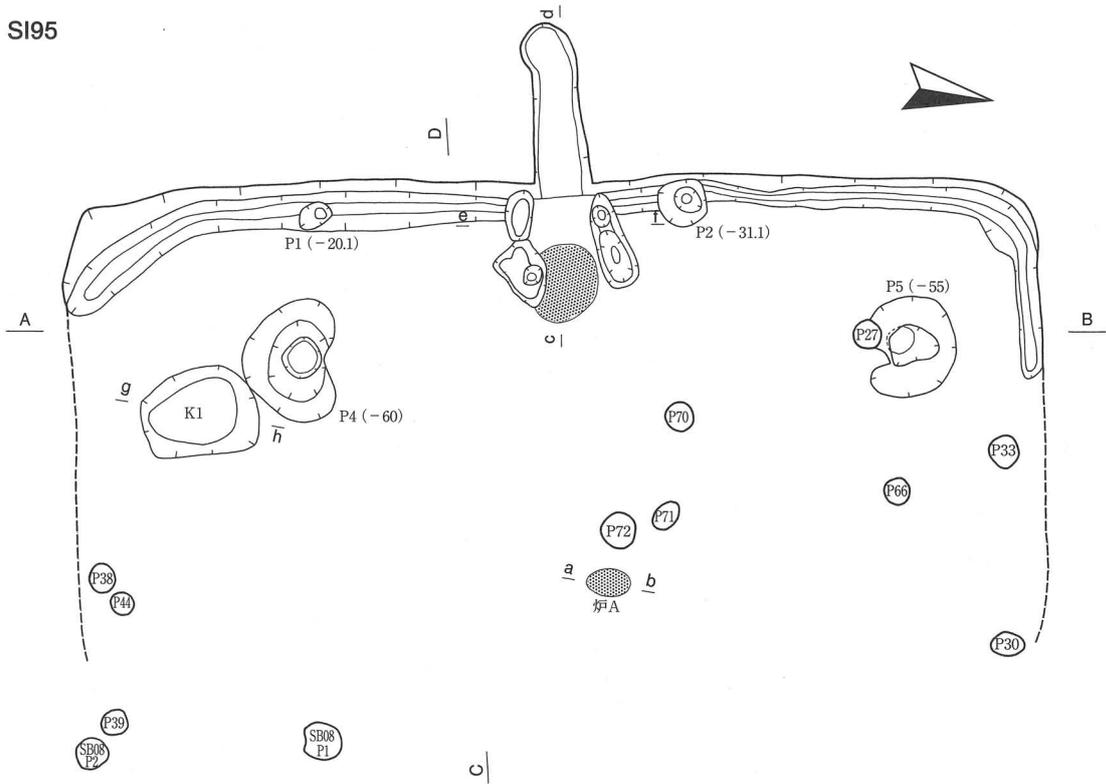
カマドは南東コーナーに位置する。本体部の残存状況は良好である。両袖は自然石を各3個づつ芯材に用いて、ぶい黄褐色土粘土で構築されている。天井石は垂角礫が1個煙道部入り口付近に残存し、カマド燃焼部北側に1個崩落土に流されて現位置を保っていない天井石になる可能性のある自然石が出土している。燃焼部は径31×30cm、厚さ5cmの焼土が形成されている。煙道部は長さ1.22m、幅38cmの刳り貫き式の煙道で下り勾配で煙出し部へ続いている。煙出し部は径38×30cmの楕円形を呈し、深さ86cmを測る。

遺物は土師器片が9号袋1袋分、磨石が1点と鉄滓が出土している。掲載した遺物は土師器甕8点で、(250)・RP3(256)・RP1(257)は床面から、(251・252・254)はカマドから、(253・255)は埋土出土である。

S I 101 竪穴住居跡（第124図、遺物図版24、写真図版92・225・226）

赤24A区西斜面、ⅧC-1d・2dグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。西側斜面が消失しているため平面形・規模は不明だが、北壁で約1.5m残存し、東壁で3m遺存し、南壁で約2m残存していることから一辺が約3m弱の隅丸長形状を呈するものと思われる。主軸方位はN-15°-W、床面積は残存部分で5.3㎡

SI95

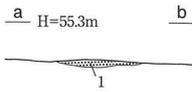


SI95

1. 10YR2/2 (黒褐) しまり有、粘性無、炭を含む
2. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
3. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭含む
4. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、炭少量
5. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、炭少量



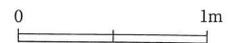
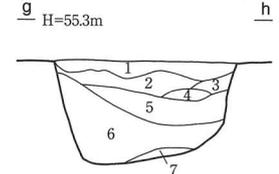
SI95 炉A



SI95 K1

1. 10YR2/2 (黒褐) しまり有、粘性無
2. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
3. 10YR2/1 (黒) しまりやや有、粘性無、炭含む
4. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
5. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、にぶい黄褐色土・黄褐色ブロック含む
6. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり少し有、粘性無
7. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性無、炭を含む

SI95 K1

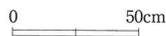
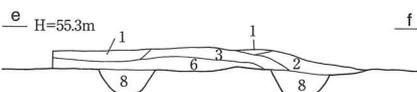
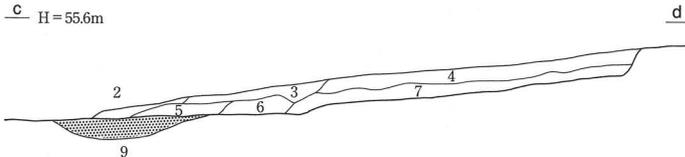


SI95 炉A

1. 5YR7/3 (にぶい橙) 焼土

SI95 カマド

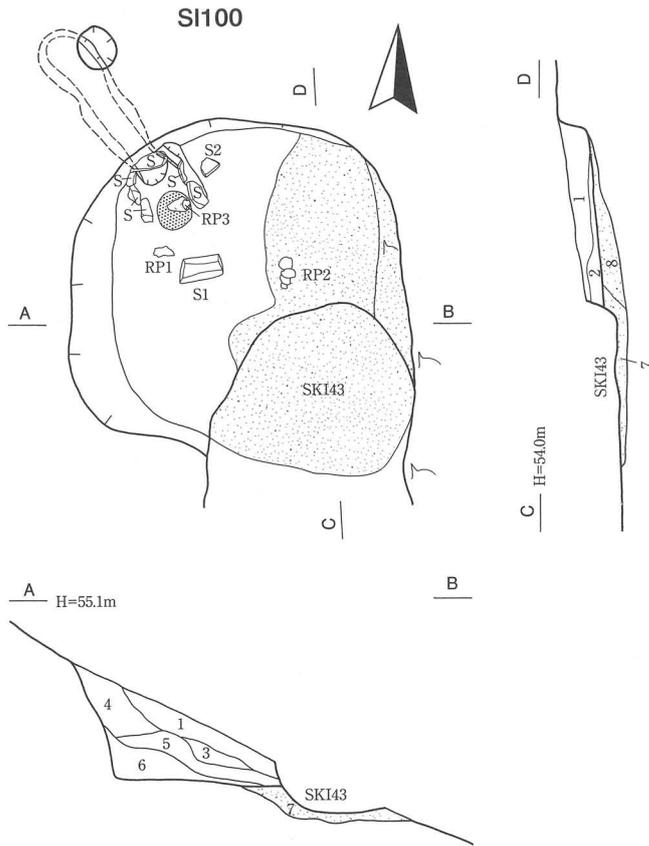
c H=55.6m



SI95 カマド

1. 10YR2/2 (黒褐) しまり有、粘性無、炭含む
2. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、炭・焼土粒含む
3. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
4. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、焼土ブロック・炭含む
5. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性少し有
6. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性無、黄褐色ブロック・炭含む
7. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性無
8. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
9. 5YR7/4 (にぶい橙) 焼土

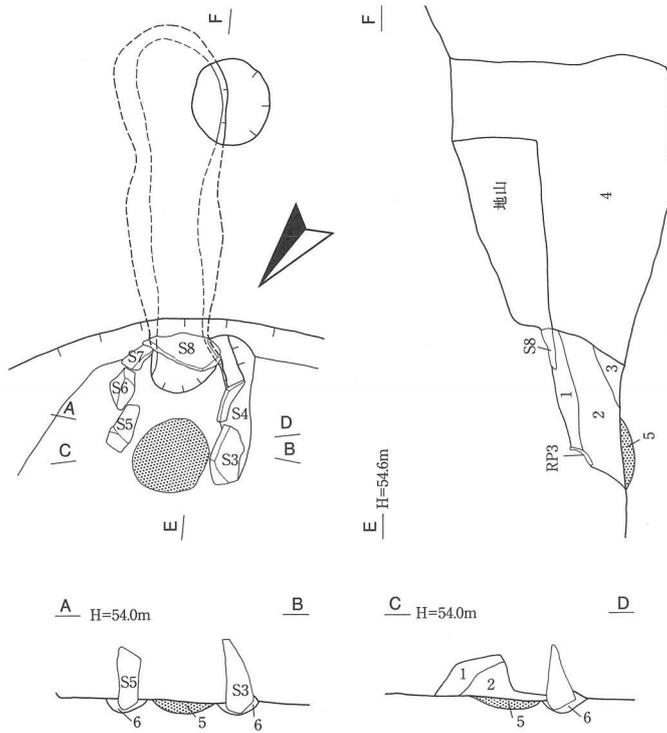
第122図 SI95竪穴住居跡



SI100

1. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無、
にぶい黄橙色含む、炭少量
2. 10YR8/3 (浅黄橙) しまりやや有、粘性無
3. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、
黄褐色土含む、炭・焼土少量
4. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性無、褐色土含む、炭微量
5. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無、褐色土・炭含む
6. 10YR8/3 (浅黄橙) しまり有、粘性無、マサ土含む
7. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、貼床
8. 2.5Y7/4 (浅黄) しまりやや有、粘性無、
にぶい黄褐色土含む、炭少量、貼床

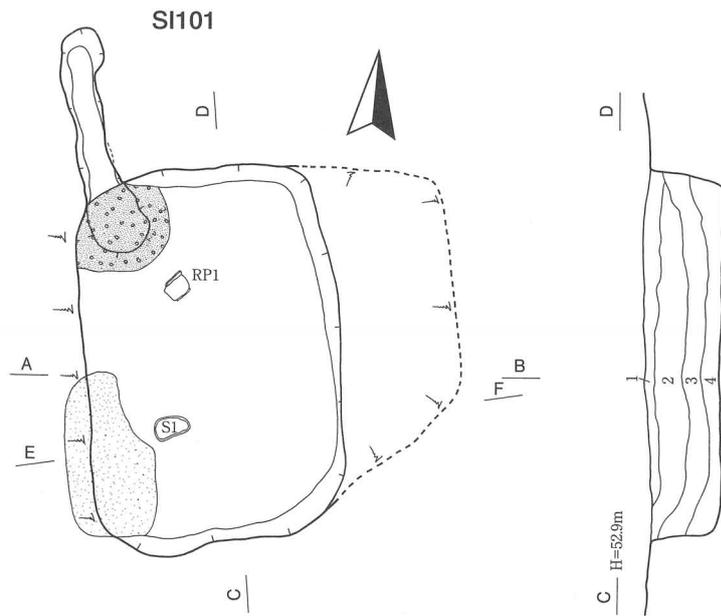
SI100 カマド



SI100 カマド

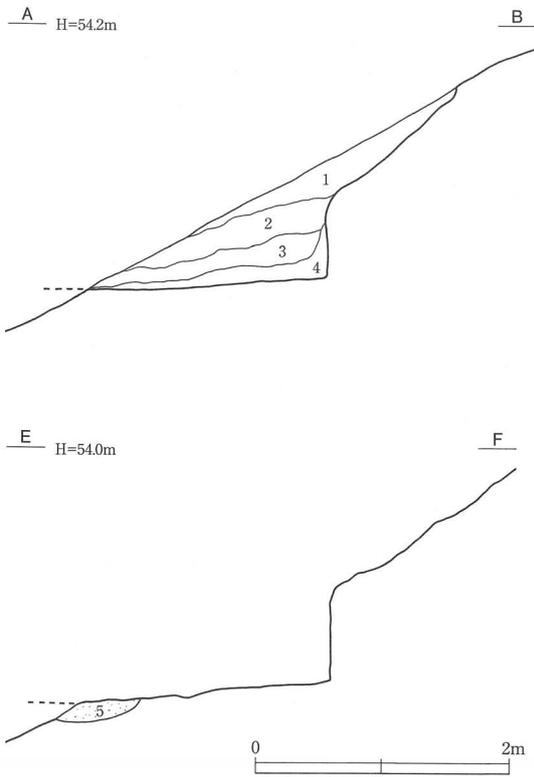
1. 2.5Y8/3 (淡黄) しまりやや有、粘性無
2. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、
3. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、
黒褐色土含む
4. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無、炭・焼土少量
5. 5YR7/3 (にぶい橙) 焼土
6. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無

第123図 SI100 竪穴住居跡

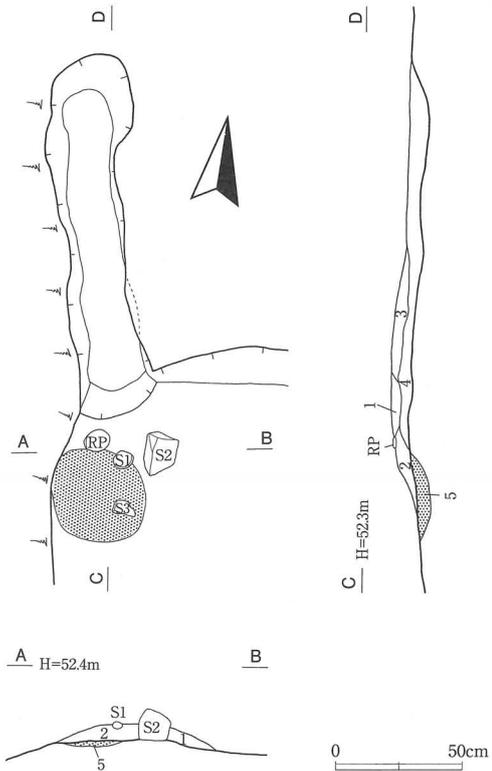


SI101

1. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、炭含む
2. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、にぶい黄褐色土含む、炭少量
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、にぶい黄褐色土・炭含む
4. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、にぶい黄褐色土・炭含む
5. 2.5Y8/3 (淡黄) しまり有、粘性無、貼床



SI101 カマド



SI101 カマド

1. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性無、炭少量
2. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭・焼土ブロック含む
3. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、マサ土混入
4. 10YR5/2 (灰黄褐) しまりやや有、粘性無、炭少量
5. 5YR7/3 (にぶい橙) 焼土

第124図 SI101 竪穴住居跡

を測る。壁はやや鋭角的に立ち上がる。壁高は東壁で96cmを測り、北壁・南壁は西側に向かうにつれて低くなっていく。埋土はにぶい黄褐色系の土を主体として5層に細分された。床面は平坦で堅く締まり南西部分の一部に貼床が施されている。

カマドは北壁斜面際に位置する。本体部の残存状況は不良である。袖は右袖に芯材になると思われる直角礫が1個あるのみで、袖土は確認されなかった。燃烧部は径38×37cm、厚さ5cmの焼土が形成されている。煙道部は長さ1.45m、幅28cmで下り勾配で煙出し部へ続いているが、斜面の崩落が激しく刳り貫き式か掘り込み式なのかは不明で、煙出し部との境が明瞭でない。

遺物は土師器片が9号袋1袋分、須恵器片が1点出土している。このうち掲載した遺物は土師器甕2点で、R P 1 (258) は床面から、(259) はカマドから出土している。

S I 106竪穴住居跡、S X I 34工房跡 (第125図、遺物図版25・121、写真図版93・226・303・316)

赤24B区北半部、ⅧC-3cグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。各遺構とも前述の通り、削平整地の影響で埋土は非常に薄く残存状況は良くない。検出当初は単独の工房跡(S X I 34)と考え精査を開始したが、S X I 34南壁付近の埋土中から土坑4基を検出した。これらの土坑はS X I 34の壁面より外側まで張り出していることから、S X I 34とは別時期の遺構であると考えられ、精査の結果、土坑ではなく炭を混入した層を確認し炭窯と判断した2基(S W 105・106)と底面付近から現地性の焼土を検出し掘り込みのある炉跡と判断した2基(S N 56・57)に変更した。これらの遺構とS X I 34との新旧関係だがS W 105・106とS N 56は新しく、S N 57は古い。S X I 34より新しいとした遺構間の新旧関係はS N 56はS W 106より新しい事は確認したが、S W 105との新旧関係は不明である。また、S W 106精査時に同遺構に切られているカマド煙道のプランを検出した。検出した壁面の軸線がS X I 34と若干異なることから、この煙道部はS X I 34とは別時期のカマドで、住居本体部分はS X I 34・S W 106等に切られている竪穴住居跡(S I 106)であると判断した。これらの遺構の新旧関係は(新)S W 105・106・S N 56→S X I 34→(旧)S I 106・S N 57である。また、S I 106とS N 57との新旧関係は不明である。

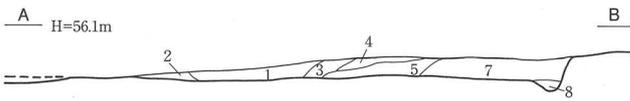
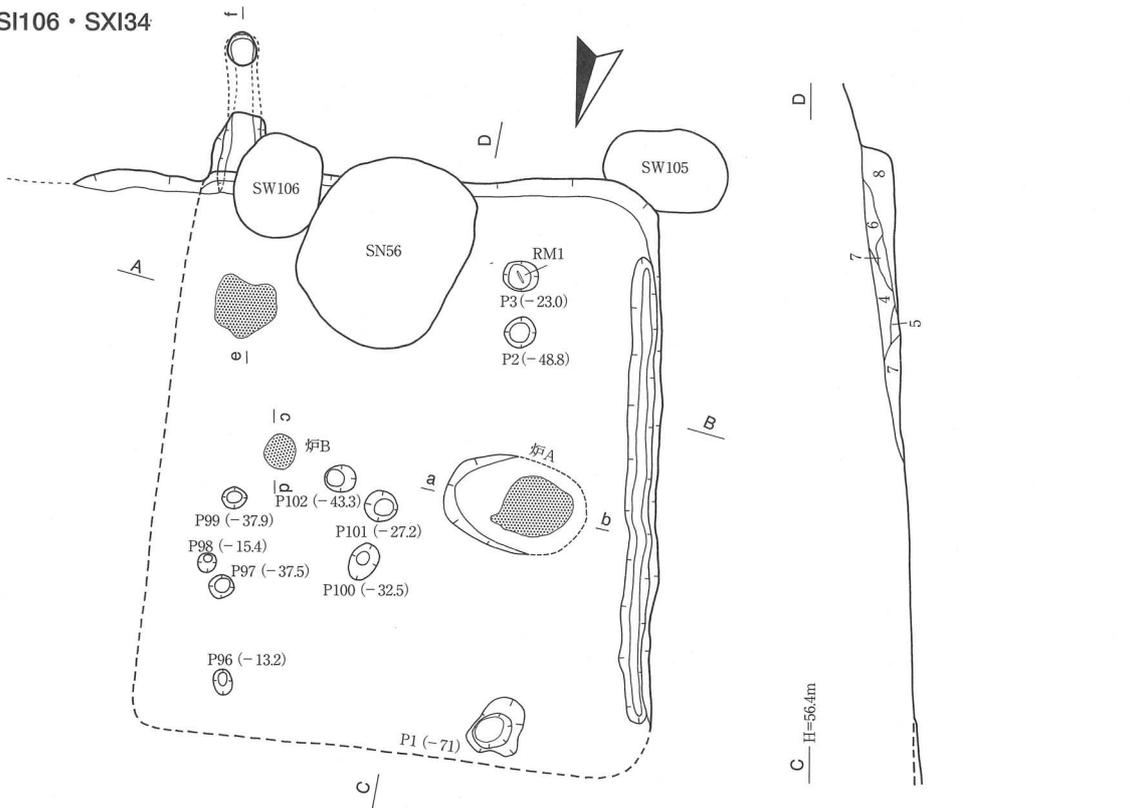
S X I 34は北東側を削平整地の影響で消失しているために平面形・規模ははっきりしないが、西壁は4.4m、南壁が3.7m残存していることから、長軸5m前後、短軸4m前後の隅丸長形状を呈していたものと思われる。床面積は残存部分で17.6㎡を測る。壁はやや外傾して立ち上がる。壁高は西壁で24cm、南壁で19cmを測り、西壁は北へ、南壁は東に向かうにつれて低くなる。埋土は浅黄色土系を主体とした自然堆積を呈し8層に細分された。床面はほぼ平坦で締まり、西壁際に幅16~21cm、深さ8cmの周溝が検出された。床面施設として中央から西よりと東よりの床面から炉が2基、柱穴が3基(P 1~P 3)検出された。このほかに柱穴が7基(P 96~P 102)検出されているが、状況から見て柱穴群に関連するものと考えられる。炉Aは開口部径111×75cm、深さ9cmの掘り込みの底部中央に55×49cmの楕円形状を呈する、厚さ3cmの焼土が形成されている。炉Bは27×24cmの楕円形状を呈し、厚さ7cmの焼土が形成されている。

遺物は鉄製品が3点(鉄鏃・板状鉄製品・刀子)、石製品が2点(砥石・磨石)が出土した。このうち掲載した遺物は検出面から出土した鉄鏃(83)、床面より出土した板状鉄製品(84)・R M 1の刀子(85)である。

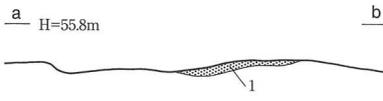
S I 106は大半がS W 106・S X I 34に切られているため、僅かにカマドとカマド付近の壁面が残存するのみなので、平面形・規模は不明である。主軸方位はN-16°-W、床面積は不明である。壁はやや外傾して立ち上がり、南壁で19cmを測る。

カマドは南壁に位置する。本体部の残存状況は不良で、燃烧部焼土が残存しているのみである。燃烧部は径49×43cm、厚さ5cmの焼土が形成されている。煙道部は長さ1.28m、幅26cmの刳り貫き式の煙道で下り

SI106・SXI34

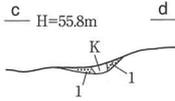


SXI34 炉A



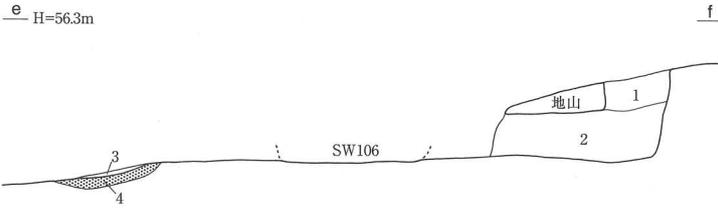
SXI34 炉A
1. 5YR7/4 (にぶい橙) 焼土

SXI34 炉B



SXI34 炉B
1. 5YR7/4 (にぶい橙) 焼土

SI106 カマド



SI106 カマド
1. 2.5Y7/3 (浅黄) しまりやや有、粘性無
2. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性無、炭含む
3. 10YR5/6 (黄褐) しまり極有、粘性無
4. 5YR7/4 (にぶい橙) 焼土

第125図 SI106竪穴住居跡・SXI34工房跡

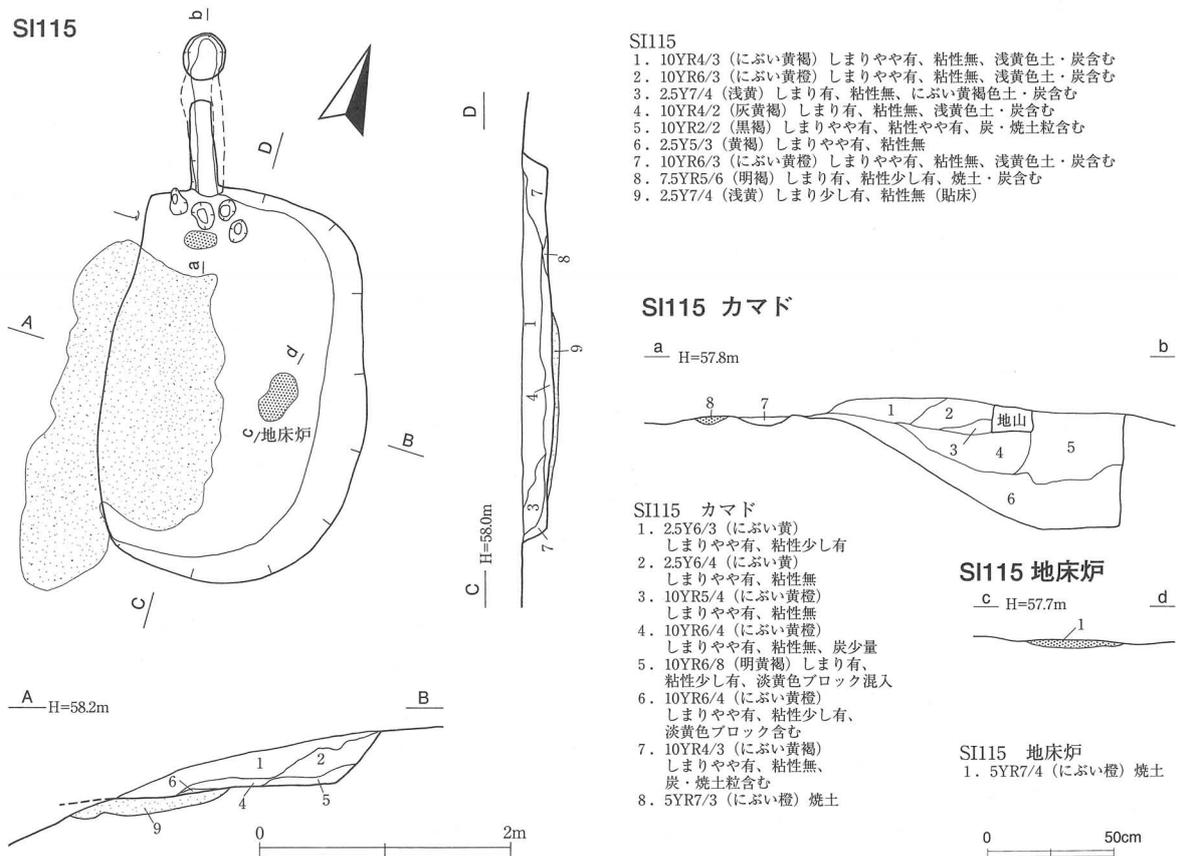
勾配で煙出し部へ続く。煙出し部は径28×25cmの円形で、深さ37cmを測る。遺物は出土しなかった。

S I 115 竪穴住居跡 (第126図、遺物図版120、写真図版94・95・302)

赤24A区北半部、ⅧC-4d・4eグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。本遺構は埋土上にS N45が構築されていることから新旧関係は(新)S N45→(旧)S I 115である。西側斜面が消失しているため平面形・規模は不明だが、東壁で3.1m遺存し、南壁で1.9m、北壁で1.2m残存していることから一辺が約3m弱の隅丸方形状を呈するものと思われる。主軸方位はN-20°-W、床面積は残存部分で5.7㎡を測る。壁はやや外傾して立ち上がる。壁高は東壁で43cmを測り、北壁・南壁は西側に向かうにつれて低くなっていく。埋土はにぶい黄褐色系の土を主体として9層に細分された。床面は平坦で堅く締まり中央から西側部分に貼床が施されている。床面施設として東壁際より地床炉が検出された。径42×24cmの楕円形状を呈し、厚さ4cmのにぶい橙色の焼土が形成されている。

カマドは北壁中央西よりに位置する。本体部の残存状況は不良である。両袖は左袖に1個、右袖に2個の芯材の抜き取り痕と思われるピットが検出されている。燃焼部は径26×15cm、厚さ貫3cmの焼土が形成されている。燃焼部の奥から径23×16cm、深さ4cmの掘り込みがあり、支脚の抜き取り痕と思われる。煙道部は長さ約1.3m、幅約26cmの刳り貫き式の煙道で下り勾配で煙出し部へ続いている。煙出し部は36×30cmの楕円形を呈し、深さ47cmを測る。

遺物は土師器片15点、須恵器片1点、羽口片3点、鉄鏃1点と鉄滓が出土し、炉付近のサンプル土から、わずかに鍛造剥片が出土したことから鍛練鍛冶を行っていたと思われる。



第126図 SI115 竪穴住居跡

S I 130 竪穴住居跡 (第127図、写真図版94・95・316)

赤23区北半部、ⅧC-5p・6pグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。本遺構はS I 73・S K 277・278を切っており、これらの遺構が人為堆積を呈することから、本遺構構築時にこれらの遺構を埋め立てて構築したのではないかと推測される。新旧関係は(新)S I 130→(旧)S I 73・S K 277・278である。ただし、重複関係からS K 278はS I 73より新しいが、S I 73とS K 277は直接的な切り合い関係がないので不明である。検出当初から西側斜面が崩落しているため平面形・規模ははっきりしないが、北東壁は5.5m遺存し、南東壁は2.1m残存していることと、貼床の検出状況から長軸5.5m前後、短軸4m前後の隅丸長方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-35°-E、床面積は残存部分で18.4㎡を測る。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は北東壁で34cmを測り、北西・南東壁は西に向かうにつれて低くなっていく。埋土は上位は暗褐色土、下位はにぶい黄褐色土を主体とした自然堆積を呈し、8層に細分された。床面は平坦で強く締まり、幅22cm、深さ13cmの周溝がカマド以外の壁際から検出されている。また、住居中央から北西にかけて貼床が施されている。床面施設として中央付近より炉2基(炉A・B)が、北西付近より土坑1基(K 1)が、中央付近で6基柱穴が検出され、北東壁と平行して柱穴が5基検出され、状況から本遺構に伴うものと判断した。K 1の平面形は隅丸長方形を呈し、一辺約73cm、断面形は皿状を呈し、深さ13cmを測る。炉Aは長軸35cm、短軸28cmの不整形を呈し、厚さ5cmの焼土が形成されている。炉BはP 8に切られているため、全容は不明だが長軸33cm、短軸17cmの楕円形状を呈するものと思われ、厚さ7cmの焼土が形成されており、その範囲は床面のみならずK 1の壁面まで広がっている。また、K 1の埋土中からは現位置を保っていないものの、垂角礫や羽口片が出土している。このことから見て、K 1は少なくとも炉A使用時に工房的な作業場として使用されたものと推測され、K 1付近の土をサンプリングしたが鍛造剥片は出土しなかった。

カマドは北東壁中央南よりに位置する。本体部の残存状況は良好である。両袖は3乃至4個の自然石を芯材に用いてにぶい黄褐色質粘土で構築されている。天井石は垂角礫が1個煙道部入り口付近に残存し、カマド燃烧部西側に1個崩落土に流されて現位置を保っていない天井石になる可能性のある自然石が出土している。燃烧部は径33×31cm、厚さ4cmの焼土が形成されている。煙道はゆるやかな下り勾配で掘りこまれ、長さ31cm、幅22cm、深さ37cmを測り、埋土の状況と天井石の状況から住居より外側の部分は煙出しとして開口していたものと推測される。

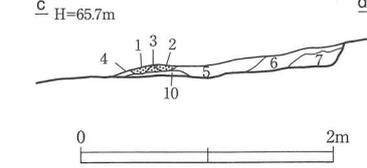
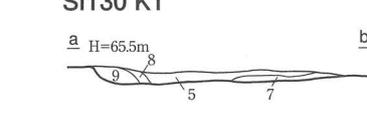
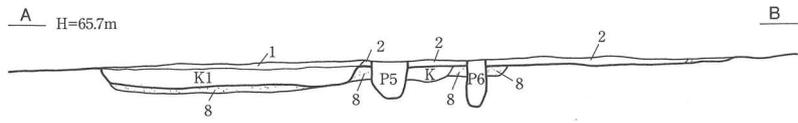
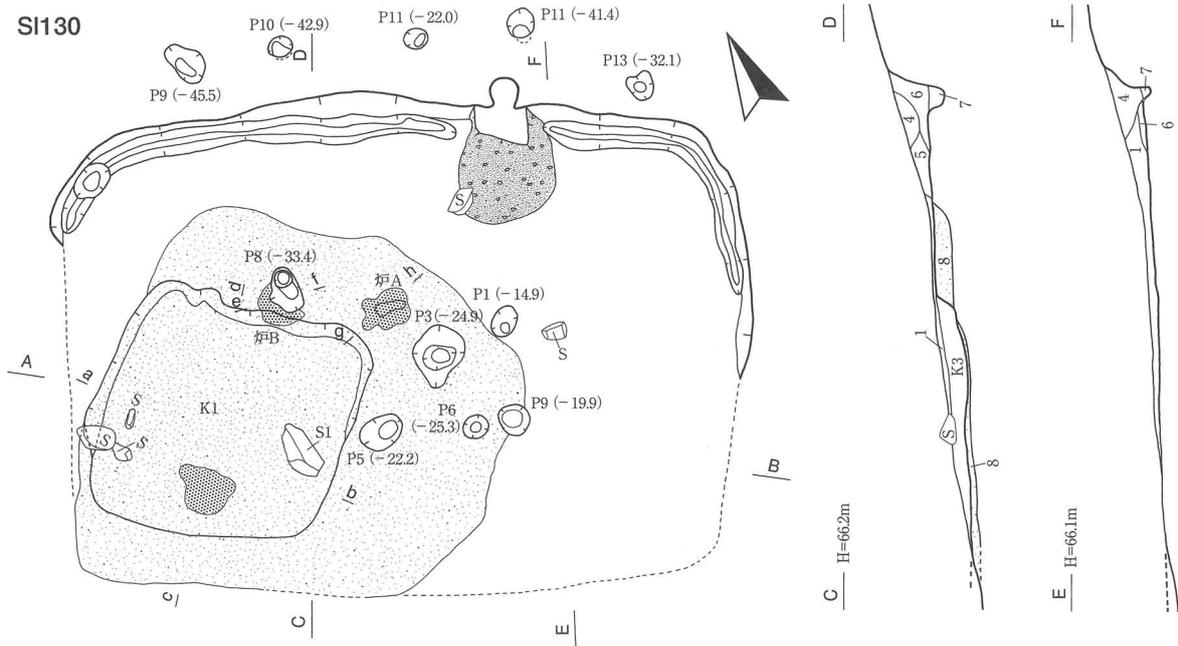
遺物は土師器片が13点、羽口片が14点と鉄滓が出土している。

S I 132 竪穴住居跡 (第128図、遺物図版25・92、写真図版96・226・280)

赤24B区南半部、ⅧC-2a・2bグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。北西側斜面が消失しているため平面形・規模ははっきりしないが、東壁は5.3m遺存し、南壁は2.5m残存していることから長軸5.3m前後の隅丸長方形ないし方形を呈しているものと思われる。主軸方位はN-21°-E、床面積は残存部分で11.0㎡を測る。壁は鋭角的に立ち上がり、壁高は南壁で23cmを測り、東壁は北に向かうにつれて低くなる。埋土は上位はにぶい黄褐色土、下位は灰黄褐色土を主体とした自然堆積で5層に細分された。床面は平坦で強く締まっている。床面施設として南・北壁際に柱穴が7基(P 1~P 7)検出されているが、位置的に主柱穴となりえるのはP 2・P 7の2基であると思われる。

カマドは北壁に位置するが斜面の崩落により、本体部の残存状況はあまり良くない。右袖は芯材の抜き取り穴と考えられるピットが2個あるのみで袖土は確認されなかった。燃烧部は径27×21cm、厚さ4cmの焼土が形成されている。煙道部は煙出しピット付近が攪乱によって、煙道西側部分が斜面の崩落によって消失しているため全容は不明だが煙道は長さ41cm、幅23cm残存し、下り勾配で煙出し部へ続いているが削り貫

SI130



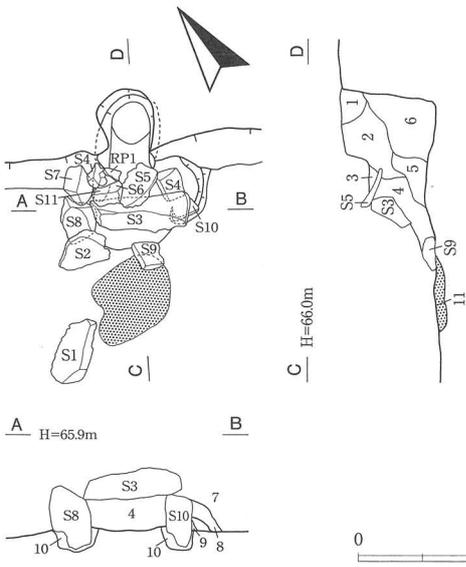
SI130

1. 10YR3/3 (暗褐) しまり少し有、粘性無、にぶい黄褐土多、マサ土・炭少量
2. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり少し有、粘性無、にぶい黄褐土多、炭少量
3. 10YR3/2 (黒褐) しまり少し有、粘性無、炭少量
4. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり少し有、粘性無、マサ土・炭含む
5. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまり少し有、粘性無、にぶい黄褐土多く、炭含む
6. 10YR5/2 (灰黄褐) しまりやや有、粘性無、にぶい黄褐土多く、炭含む
7. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり少し有、粘性無、浅黄橙土多く、炭少量
8. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、炭少量 (貼床)

SI130 K1

1. 7.5YR6/6 (橙) しまり少し有、粘性少し有、炭含む
2. 7.5YR6/6 (橙) しまりやや有、粘性少し有、暗褐色土・炭含む
3. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性少し有、暗褐色土・炭・焼土含む
4. 10YR4/2 (灰黄褐) しまり有、粘性少し有、炭・焼土ブロック多含
5. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性少し有、黒褐色・褐色土少量、炭含
6. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり少し有、粘性少し有、炭少量
7. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性少し有、炭・焼土ブロック含
8. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性少し有、マサ土含
9. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性少し有、焼土・炭含
10. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、明黄褐色土・焼土含

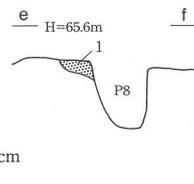
SI130 カマド



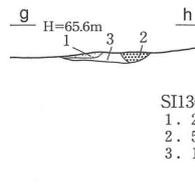
SI130 カマド

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、炭・焼土粒含
2. 10YR4/2 (灰黄褐) しまりやや有、粘性無、淡黄色土・炭・焼土粒含む
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり少し有、粘性無、褐色土・炭・焼土粒多く含む
4. 2.5YR8/3 (淡黄) しまり有、粘性無、灰黄褐色土・炭含む
5. 2.5YR8/4 (淡黄) しまりやや有、粘性無、マサ土と炭含む
6. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり少し有、粘性無、炭微量
7. 10YR8/4 (浅黄橙) しまり有、粘性無
8. 10YR4/2 (灰黄褐) しまりやや有、粘性無、炭含む
9. 10YR7/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
10. 10YR6/2 (灰黄褐) しまり有、粘性無、褐灰色土・マサ土混入、袖石の据え方
11. 5YR7/4 (にぶい橙) 焼土

SI130 炉B



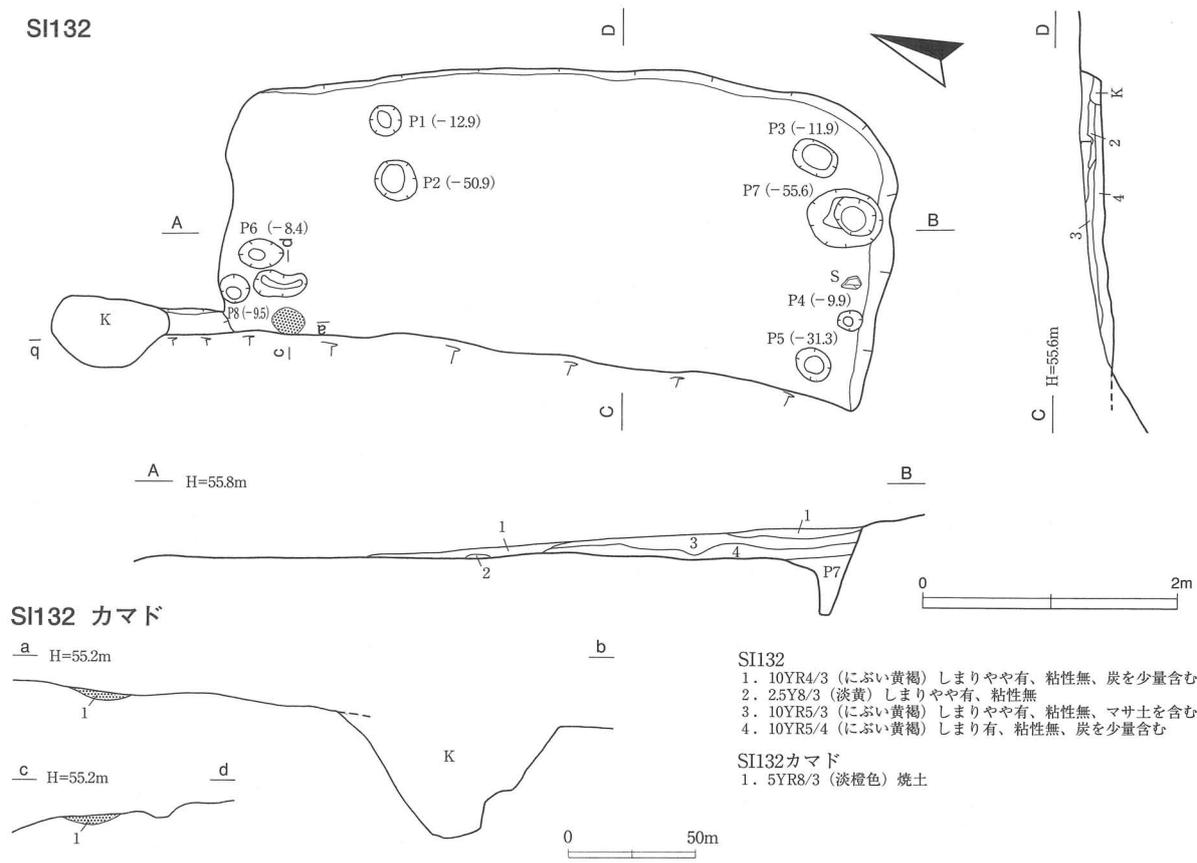
SI130 炉A



SI130 炉A・B

1. 2.5YR5/8 (明赤褐) 焼土
2. 5YR5/6 (明赤褐) 焼土
3. 10YR5/3 (にぶい黄褐)

第127図 SI130竪穴住居跡



第128図 SI132竪穴住居跡

き式か掘り込み式かは不明である。

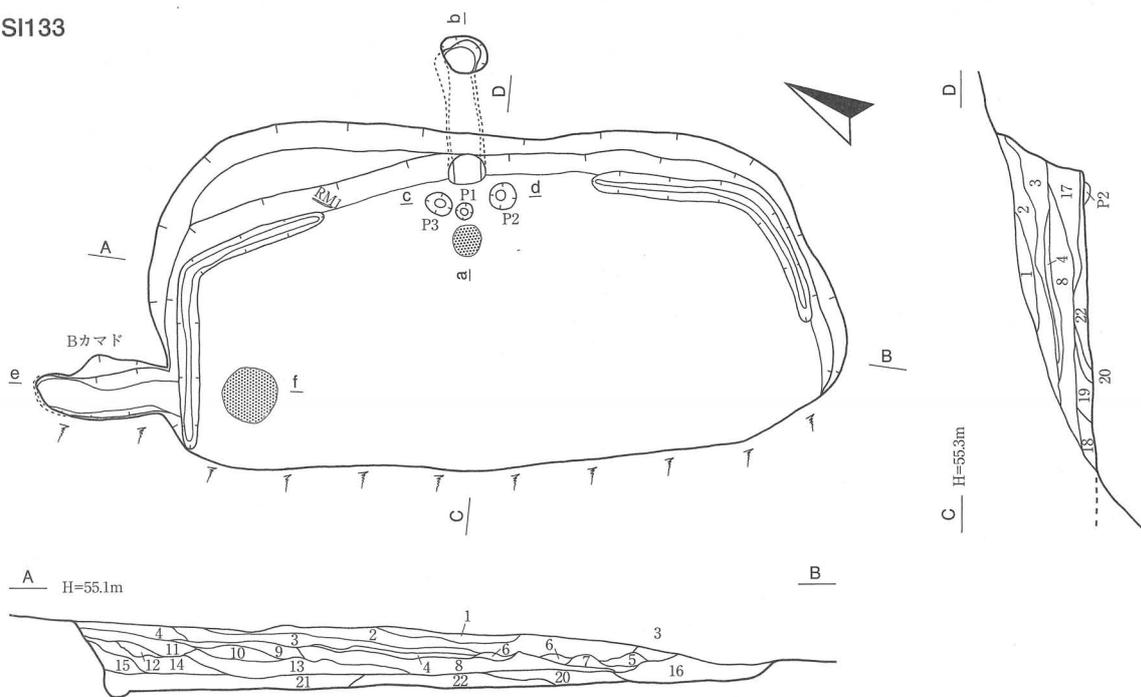
遺物は土師器片が9号袋1袋分、須恵器片が5点、磨石が1点と鉄滓が出土している。このうち掲載した遺物は埋土中より出土した土師器甕(270)と検出面より出土した磨石(107)である。

SI133竪穴住居跡 (第129図、遺物図版25・121、写真図版96・226・303)

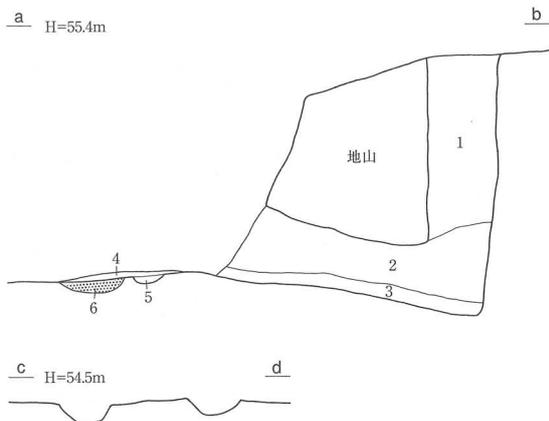
赤24B区南半部、ⅧB-1s・1tグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。西側斜面が消失しているため平面形・規模は不明だが、東壁は4.8m遺存し、北壁は2.7m、南壁は1.9m残存していることから、一辺約5m前後の隅丸長方形ないし方形を呈していたものと思われる。主軸方位はN-60°-E、残存する床面積は10.5㎡を測る。壁は下半部は鋭角的に、上半部は外傾して立ち上がる。壁高は東壁で71cmを測り、南・北壁は西壁に向かうにつれて低くなる。埋土は上位はにぶい黄色、中位は黒色土、下位はにぶい黄褐色土を主体とした自然堆積を呈し、17層に細分された。床面は平坦で締まっている。床面施設として、東壁中央のカマドA付近を除き周溝が検出された。周溝は幅約20cm、深さ6cmを測る。

カマドは東壁中央(カマドA)と北壁(カマドB)に位置する。カマドBを切るように周溝が巡っていることから、カマドBを廃棄した後にカマドAを構築したものと思われる。カマドAは本体部の残存状況は不良で、わずかに燃焼部焼土と袖の芯材と支脚の抜き取り穴と思われるピットと煙道が残存しているのみである。燃焼部は径25×22cm、厚さ5cmの焼土が形成されている。支脚の抜き取り穴と思われるピットは径

SI133



SI133 カマドA



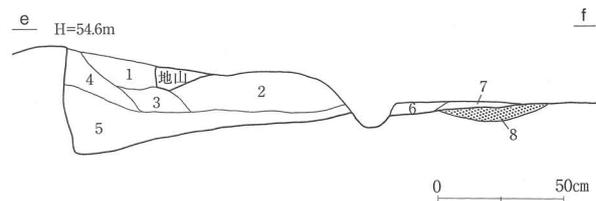
SI133 カマドA

1. 25Y7/4 (浅黄) しまりやや有、粘性無、炭少量
2. 10YR8/3 (浅黄橙) しまり有、粘性無
3. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
4. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性少し有、炭・焼土粒少量
5. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、にぶい黄褐色土含む
6. 5YR7/3 (にぶい橙) 焼土

SI133

1. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭少量
2. 25Y7/3 (浅黄) しまり有、粘性無、にぶい黄褐色土含む
3. 10YR3/1 (黒褐) しまりやや有、粘性無、炭少量
4. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、にぶい黄褐色土含む
5. 25Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性無
6. 10YR4/2 (灰褐) しまり極有、粘性無
7. 25Y7/3 (浅黄) しまり有、粘性無
8. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭含む
9. 10YR4/2 (灰黄褐) しまりやや有、粘性無
10. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、にぶい黄褐色土含む
11. 10YR2/1 (黒) しまり少し有、粘性無、炭含む
12. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、にぶい黄褐色土含む
13. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
14. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、にぶい黄褐色土含む
15. 25Y7/3 (浅黄) しまり有、粘性無
16. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、にぶい黄褐色土含む
17. 10YR3/1 (黒褐) しまりやや有、粘性無、炭少量
18. 10YR4/2 (灰黄褐) しまりやや有、粘性無
19. 10YR2/1 (黒) しまりやや有、粘性無、炭含む
20. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
21. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭少量
22. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無

SI133 カマドB



SI133 カマドB

1. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性少し有
2. 25Y8/3 (淡黄) しまり少し有、粘性無、焼土粒少量
3. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性少し有、炭含む
4. 10YR4/6 (褐) しまり少し有、粘性無
5. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性無、炭含む
6. 25Y8/4 (淡黄) しまりやや有、粘性無
7. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性無
8. 5YR7/4 (にぶい黄橙) 焼土

第129図 SI133竪穴住居跡

14cm、深さ4cmを測る。煙道部は長さ1.18m、幅26cmの削り貫き式の煙道で下り勾配で煙出し部へ続いている。煙出し部は径39×30cmの楕円形を呈し、深さ110cmを測る。カマドBは本体部の残存状況は不良で、わずかに燃焼部焼土と煙道が残存しているのみである。燃焼部は径44×43cm、厚さ7cmの焼土が形成されている。煙道部は長さ1.07m、幅38cmの削り貫き式の煙道で下り勾配で煙出し部へ続いている。煙出し部は径35×29cmの楕円形を呈し、深さ42cmを測る。

遺物は土師器片が9号袋1袋分強、須恵器片が3点、羽口片が3点、鉄製品が2点と鉄滓が出土し、掲載した遺物は埋土出土の土師器甕(271~274)、須恵器(275)、RM1の刀子(80)、筒状鉄製品(81)である。

S I 134 竪穴住居跡 (第130図、遺物図版25、写真図版97・226)

赤24B区北半部、ⅧB-20r・20sグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。本遺構は検出当初から焼土の広がりを法面の断面から確認し、工房跡であると判断して精査を開始したが、その焼土の北側にわずかに煙道部が残存していることが精査途中で判明したので竪穴住居跡であると判断した。西側斜面が消失しているため平面形・規模ははっきりしないが、東壁は3.3m遺存し、北壁は1.1m、南壁は1.2m残存していることから一辺3.4m前後の隅丸長方形ないし方形状を呈したと思われる。主軸方位はN-9°-W、床面積は残存部分で3.5㎡を測る。壁は鋭角的に立ち上がり、壁高は東壁で41cmを測り、北・南壁は西に向かって低くなる。埋土はにぶい黄色土を主体とした自然堆積である。床面は平坦で堅く締まっている。

カマドは北壁に位置するが斜面の崩落により煙道部と燃焼部焼土がわずかに残存するのみである。燃焼部は径23cm、厚さ6cmの焼土が形成されている。煙道部は斜面の崩落によって消失しているため全容は不明だが長さ1.31m、幅53cm残存し、下り勾配で煙出し部へ続いているものと思われる。斜面の崩落が激しく削り貫き式か掘り込み式なのかは不明である。

遺物は土師器片13点と鉄滓が出土している。掲載した遺物は埋土中より出土した土師器甕(276)である。

S I 135 竪穴住居跡、S X I 44B 工房跡 (第130図、写真図版97)

赤24B区西斜面、ⅧB-1rグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。検出当初はSK239に切られている単独の工房跡として精査を開始したが、プランの途中で壁面が立ち上がり、残りの部分にサブトレンチを入れて断面観察を行ったところ、斜面下の遺構に斜面上の遺構が切られている新旧2時期の重複関係があることが確認された。本来であれば1棟ずつ精査を行うべきであるが斜面上の遺構の床面自体が斜面下の遺構に切られているという重複関係だったので同時に精査を行っている。その過程で斜面下の遺構からはカマドを斜面上の遺構からは炉跡を検出したので、前者を竪穴住居跡(S I 135)、後者を工房跡(S X I 44B)と判断した。新旧関係は(新)S I 135→(旧)S X I 44Bである。

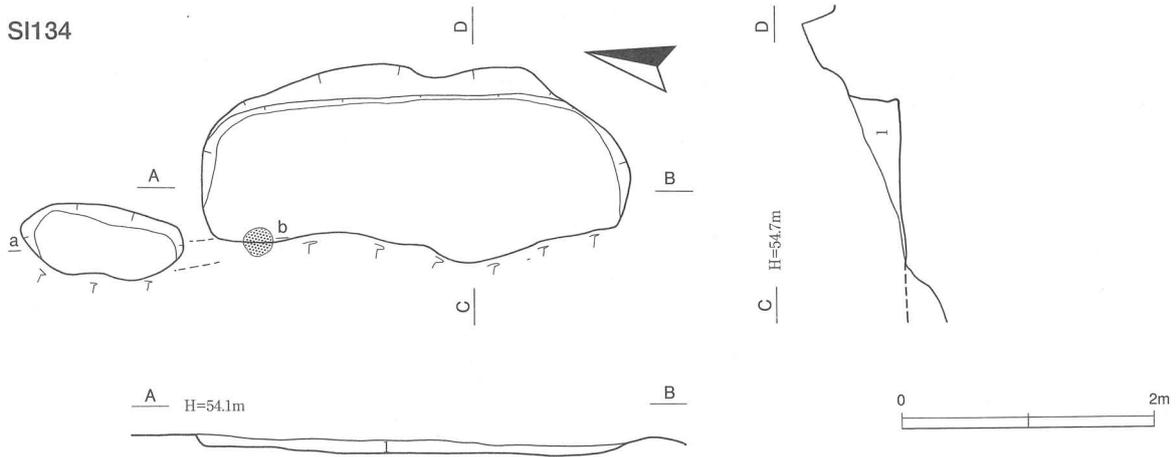
S I 135は西側斜面が消失していることとSK239に切られているため平面形・規模ははっきりしないが、北壁は0.6m、東壁は2.6m残存していることから、長軸2.5m以上、短軸1m以上の隅丸長方形乃至方形を呈しているものと思われる。主軸方位はN-71°-E、床面積は残存部分で1.3㎡を測る。壁は外傾して立ち上がり、壁高は東壁で34cmを測り、北壁は西に向かうにつれて低くなる。埋土は上位は黒褐色土、下位は明黄褐色土を主体とした自然堆積で4層に細分された。床面は平坦で堅く締まっている。

カマドは東壁に位置する。本体部の残存状況は不良で、僅かに燃焼部焼土が残存しているのみである。燃焼部は径24cm、厚さ3cmの焼土が形成されている。煙道部は長さ99cm、幅24cmの削り貫き式の煙道で下り勾配で煙出し部へ続いている。煙出し部は径36cmの円形を呈し、深さ92cmを測る。

遺物は土師器片が小袋1袋分、羽口片が2点と鉄滓が出土している。

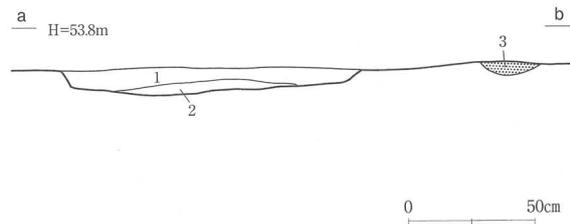
S X I 44Bは西側斜面が消失し、S I 135・SK239に切られているため平面形・規模ははっきりしないが、

SI134



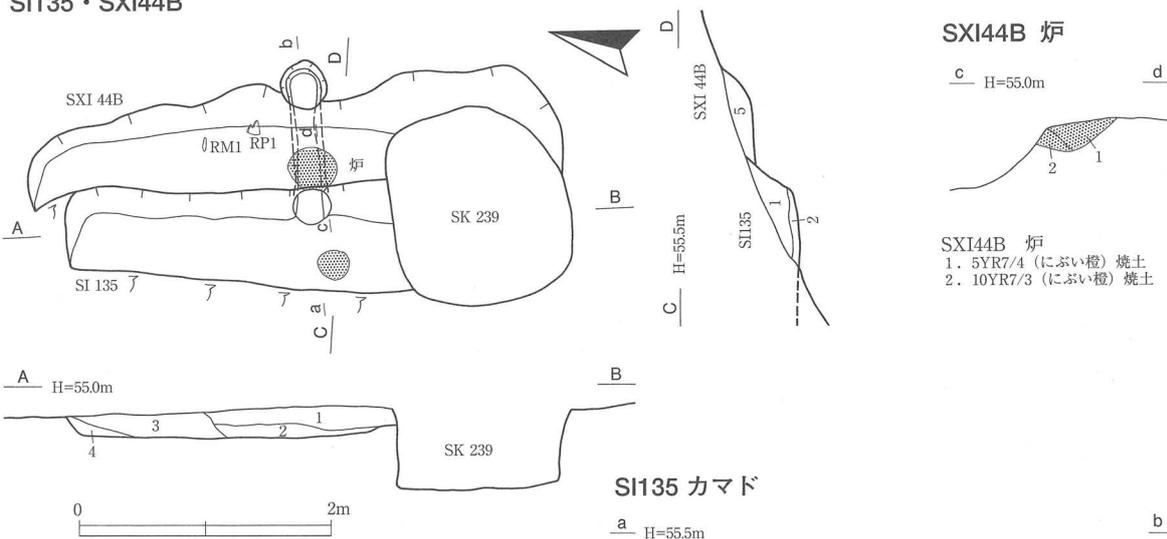
SI134
1. 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまり有、粘性無、炭少量

SI134 カマド



SI134 カマド
1. 10YR2/3 (黒褐) しまり有、粘性無
2. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり少し有、粘性無
3. 5YR7/4 (にぶい橙) 焼土

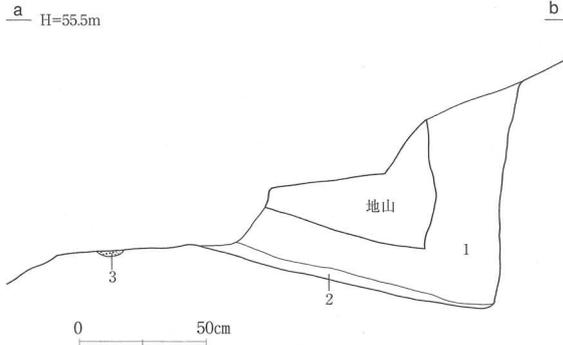
SI135・SXI44B



SXI44B 炉

SXI44B 炉
1. 5YR7/4 (にぶい橙) 焼土
2. 10YR7/3 (にぶい橙) 焼土

SI135 カマド



SI135
1. 2.5Y5/3 (黄褐) しまり極有、粘性無、明黄褐色・炭含
2. 10YR6/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性無、炭少量
3. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無
4. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまり少し有、粘性無、炭含

SXI44B
5. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無

SI135カマド
1. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、マサ土・炭少量
2. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性無、炭・焼土含
3. 5YR7/3 (にぶい橙) 焼土

第130図 SI134・135竪穴住居跡・SXI44B工房跡

東壁が4.2m遺存し、北壁が0.8m、南壁が0.9m残存していることから、長軸5m前後、短軸約1m前後の隅丸長方形を呈していたと思われる。床面積は残存部分で1.2㎡を測る。壁は外傾して立ち上がる。壁高は東壁で19cmを測り、北・南壁は西に向かい低くなっていく。埋土はにぶい黄褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。床面はほぼ平坦で締まっている。床面施設として東壁中央壁際から地床炉が検出された。炉は39×31cmの楕円形状を呈し、厚さ11cmの焼土が形成されている。遺物は出土しなかった。

S X I 33工房跡、S X W39鍛冶炉跡（第131図、写真図版98）

赤24B区南半部、ⅧC-4cグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。本遺構はS K I 37・S N57と重複関係にあり、両遺構に切られている。よって新旧関係は（新）S N57→S K I 37→（旧）S X I 33である。北側を前述の削平整地の影響で消失し、東側をS K I 37・S N57に切られているために平面形・規模ははっきりしないが、西壁は2m、南壁は2.4m残存していることから、一辺2.5m以上の隅丸長方形乃至方形を呈していたものと思われる。床面積は残存部分で4.5㎡を測る。壁はやや外傾して立ち上がる。壁高は西壁で28cm、南壁で30cmを測り、西壁は北へ、南壁は東に向かうにつれて低くなっていく。埋土は浅黄色土系を主体とした自然堆積を呈し3層に細分された。床面はほぼ平坦で締まっている。床面施設として西壁際から地床炉が2基、南壁際から柱穴が4基（P1～P4）が検出された。炉Aは長軸62cm、短軸35cmの不整形を呈し、厚さ3cmの焼土が形成されている。炉Bは長軸49cm、短軸38cmの不整形を呈する厚さ3cmの焼土が形成されている。また、S X I 33北東部からは鍛造剥片等の遺物が出土している為、鉄生産関連施設の存在を想定して精査を進めた所、北東部からS X W39とK1を検出した。

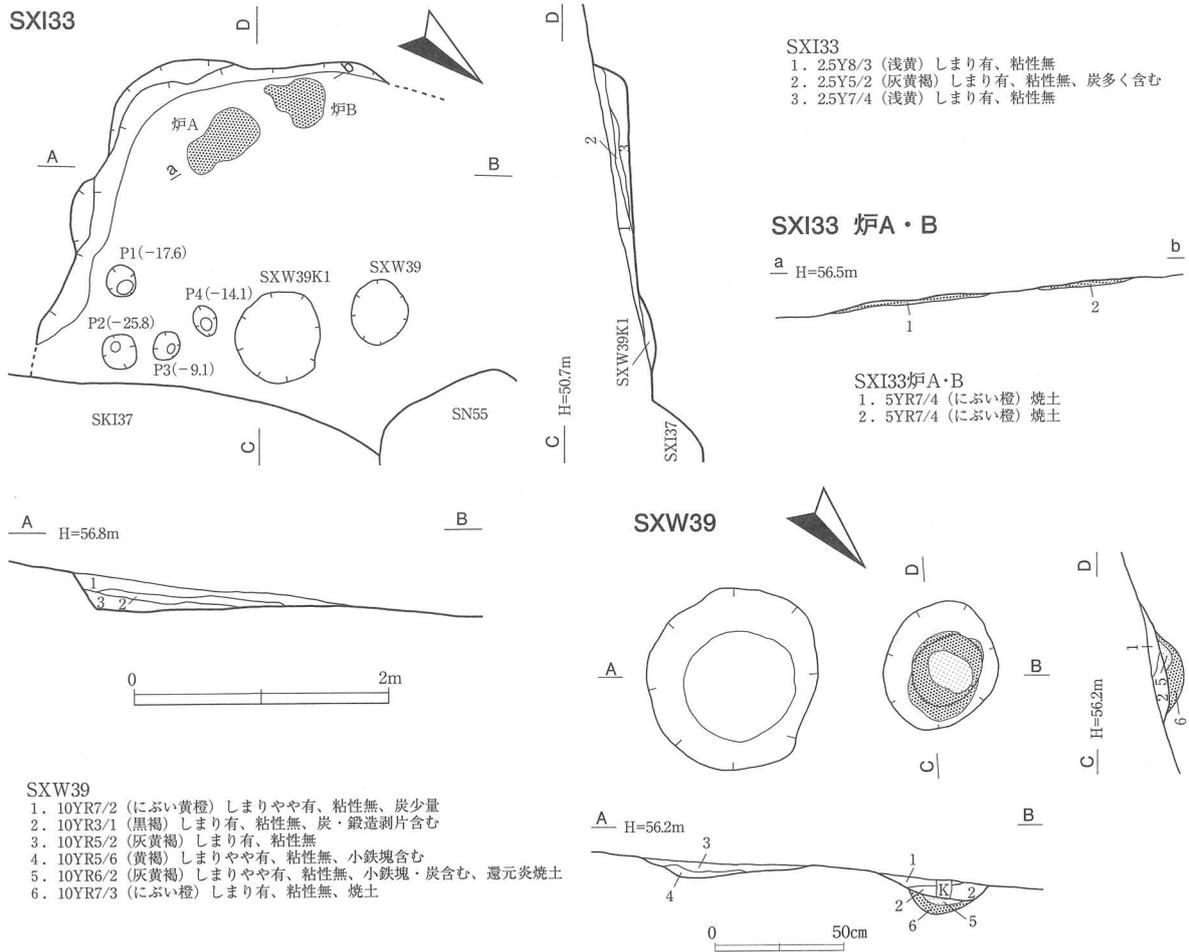
S X W39の平面形・規模は開口部径54×44cm、底部径30×27cmの楕円形状を呈する。断面形は浅皿状を呈し、深さ8cmを測る。埋土は上位はにぶい黄褐色土、下位は炭と鍛造剥片を含む黒褐色土を主体とした自然堆積で3層に細分された。底面は締まっており、底面中央付近を中心ににぶい黄橙色の焼土と弱い還元炎焼土が形成されており、厚さ8cmを測る。K1の平面形・規模は開口部径72×67cm、底部径44×43cmの円形状を呈する。断面形は皿状を呈し、深さ6cmを測る。埋土は灰黄褐色土を主体とした自然堆積を呈し3層に細分された。底面は概ね平坦で締まっている。状況から見てS X W39は鍛冶炉跡で、K1はそれに伴う鉄砧の掘り方の可能性が想定される。

遺物は、S X W39から鍛造剥片・鍛冶滓等が、K1から土師器片が1点出土した。

S X I 69工房跡、S K I 32堅穴状遺構（第132図、遺物図版21・68、写真図版99・223・254・316）

赤23区西側斜面下、ⅧC-11グリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。検出段階で2棟の堅穴住居跡と1基の土坑との切り合いがあると思ひ、共通のベルトを設定して精査を開始した。精査の結果、当初2棟の堅穴住居跡が切り合っていると考えていた部分からは、地床炉がある遺構がカマドも炉も検出されなかった遺構を切っていることが確認され、前者を工房跡（S X I 69）、後者を堅穴状遺構（S K I 32）と判断した。断面観察等から、これらの遺構の新旧関係はS X I 69がS K I 32とS K 276より新しいが、S K I 32とS K 276との新旧関係は直接的な切り合い関係にないので不明である。

S K I 32はS X I 69とS K I 31Cに切られている為、平面形・規模ははっきりしないが、西壁で2.3m残存し、東壁で1.2m残存し、南壁で3.5m遺存していることから、一辺3.5m前後の隅丸方形を呈するものと思われる。床面積は残存部分で3.5㎡を測る。壁はやや外傾して立ち上がる。壁高は東壁で31cm、西壁で5cmを測り、南壁は西側に向かうにつれて低くなっていく。埋土は4層に細分され、にぶい黄褐色土系を主体とした人為堆積を呈する。床面は平坦で締まっており、西壁際で貼床が施されている。床面施設は柱穴3基と西壁際から径71×70cm、深さ12cmの楕円形状を呈する土坑1基（K1）が検出されている。



第131図 SXI33工房跡・SXW39鉄生産関連炉跡

遺物は土師器片が12点、羽口片が3点出土している。このうち掲載した遺物は床面より出土したR P 1の土師器甕(230)、埋土中より出土した土師器甕2点(229・231)、K 1より出土した羽口(89)である。

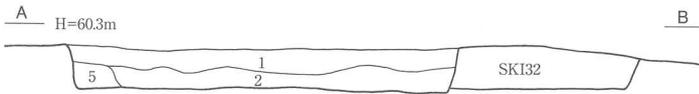
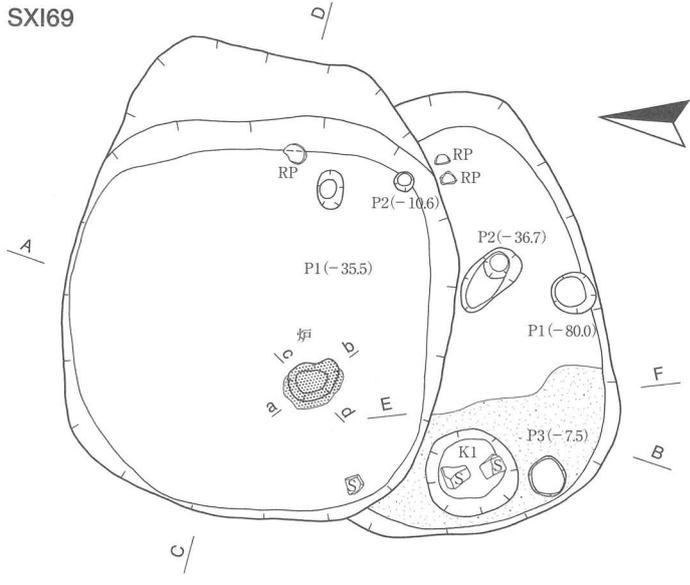
S X I 69は平面形は隅丸方形を呈し、規模は西壁で3m、北壁で3.8m、東壁で3m、南壁で3.9mを測る。床面積は7.2㎡を測る。壁は鋭角的に立ち上がるが、東壁の上半部は崩落の影響で外傾して立ち上がる。壁高は西壁で5cm、東壁で70cmを測り、北壁・南壁は西側に向かうにつれて低くなっていく。埋土は褐色土系を主体とした自然堆積を呈す。床面はほぼ平坦で締まっている。床面施設として中央からやや南西コーナーよりの床面から掘り込みのある炉と南東コーナー付近から柱穴2基が検出された。炉は48×37cmの楕円形を呈し、深さ6cmの掘り込みの壁面・底面を中心に厚さ4cmのにぶい橙色の焼土が検出された。

遺物は埋土より鉄滓と炉付近のサンプル土から、わずかに鍛造剥片が出土したことから鍛冶工房の可能性が考えられる。

S X I 72工房跡 (第132図、遺物図版24・91、写真図版100・226・280)

赤24A区北半部、ⅧC-5eグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。本遺構は当初、竪穴住居跡として精査を開始したが、カマドは検出されず地床炉のみが検出されたことから工房跡と判断した。東側斜面が消失しているため平面形・規模ははっきりしないが、西壁は4.9m遺存し、北壁は1.8m、南壁が1.3m残存していることから、一辺5m前後の隅丸長方形乃至方形状を呈していたものと思われる。床面積は残存部分で

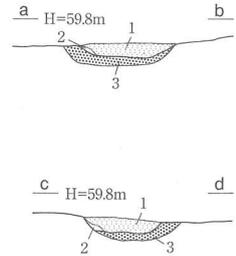
SXI69



SXI69

1. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性少し有、炭含む
2. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり少し有、粘性少し有、暗褐色土含、炭微量
3. 10YR4/2 (灰黄褐) しまりやや有、粘性やや有、にぶい黄褐色土、炭含む
4. 10YR7/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有、炭微量
5. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭微量

SXI69 炉

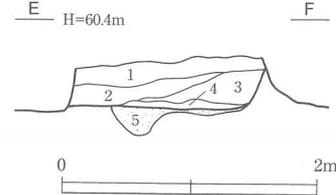


SXI69 炉

1. 10YR1.7/1 (黒) しまり有、粘性少し有、炭層
2. 10YR6/2 (灰黄褐) しまり極有、粘性少し有
3. 10YR6/4 (にぶい橙) 焼土

0 50cm

SKI32

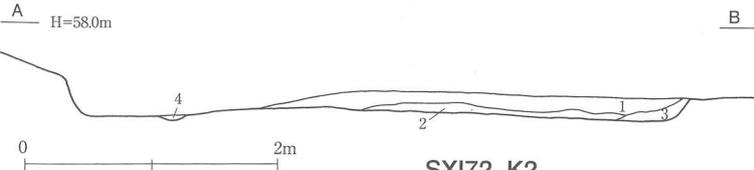
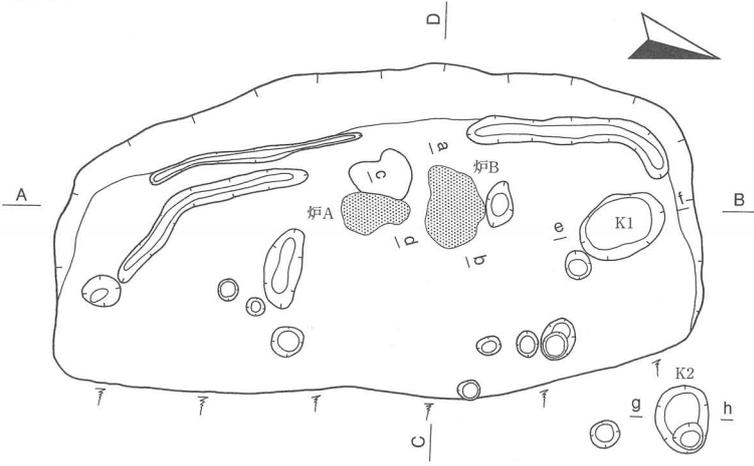


0 2m

SKI32

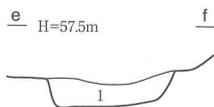
1. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性無、マサ土
2. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり中・粘性少
3. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり無、粘性少し有
4. 10YR5/6 (黄褐) しまり中、粘性無、炭含
5. 2.5Y7/4 (浅黄色) しまり有、粘性無、貼床

SXI72



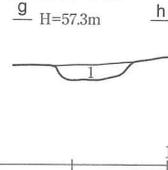
0 2m

SXI72 KI



e H=57.5m

SXI72 K2



g H=57.3m

SXI72 K1

1. 10YR4/1 (褐灰) しまり有、粘性無、炭少量

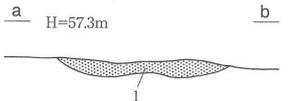
SXI72 炉A・B

1. 5YR6/6 (明赤褐) 焼土

SXI72 K2

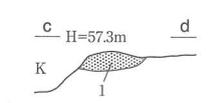
1. 10YR3/1 (黒褐) しまり有、粘性無、炭少量

SXI72 炉B



a H=57.3m

SXI72 炉A



c H=57.3m

0 50cm

第132図 SXI69・72工房跡・SKI32竪穴状遺構

7.3㎡を測る。壁は外傾して立ち上がる。壁高は西壁で43cmを測り、北・南壁は東に向かうにつれて低くなっていく。埋土は上位は灰黄褐色土、中位は黒褐色土、下位はにぶい黄褐色土を主体とした自然堆積を呈し3層に細分された。床面はほぼ平坦で締まり、中央付近以外の西壁際から幅7～20cm、深さ3～7cmの周溝が検出された。また、南西コーナーよりの内側では2重となる総長1.8m、幅12～16cm、深さ2～3cmの溝が検出されている。床面施設として西壁際から地床炉が2基、北西コーナー付近から土坑(K1)が1基、柱穴が10基(P1～P10)検出された。炉Aは攪乱の影響で全容は不明だが長軸52cm、短軸34cmの不整形状を呈する厚さ8cmの焼土が形成されている。炉Bは長軸66cm、短軸47cmの不整形状を呈する厚さ7cmの焼土が形成されている。K1は長軸69cm、短軸51cmの楕円形状を呈する。断面形は逆台形状を呈し、深さ15cmを測る。また、斜面の崩落で標高が下がっているがこの工房に伴う可能性の高い柱穴2基(P11・P12)と土坑1基(K2)を図示している。K2は長軸53cm、短軸43cmの楕円形状を呈する。断面形は鍋状を呈し、深さ16cmを測る。東壁際から径22cm前後の円形状を呈した、深さ16cmのピットが検出された。

遺物は土師器片が9号袋1袋分、砥石が1点出土している。このうち掲載した遺物は床面より出土したR P1(263・264)とR P2(265)の土師器甕3点と、埋土中より出土した砥石1点(101)である。炉付近のサンプル土から、わずかに鍛造剥片が出土したことから鍛冶工房の可能性が考えられる。

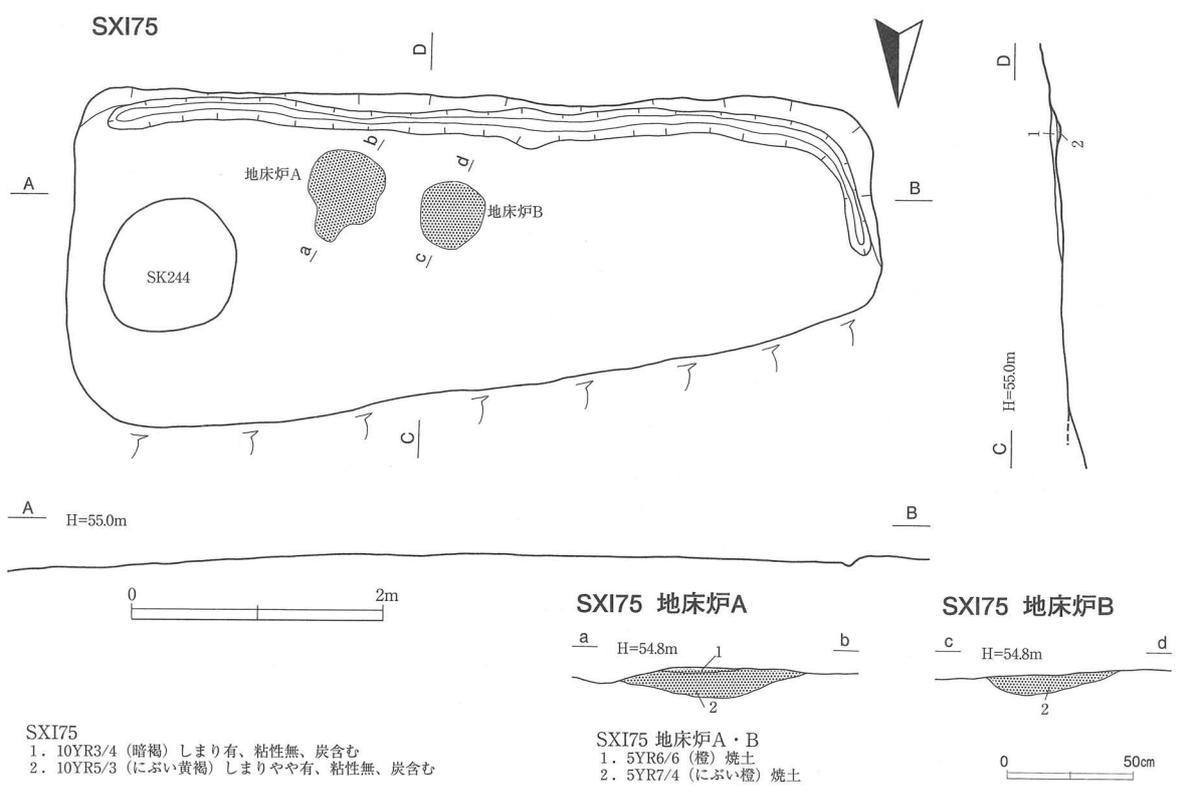
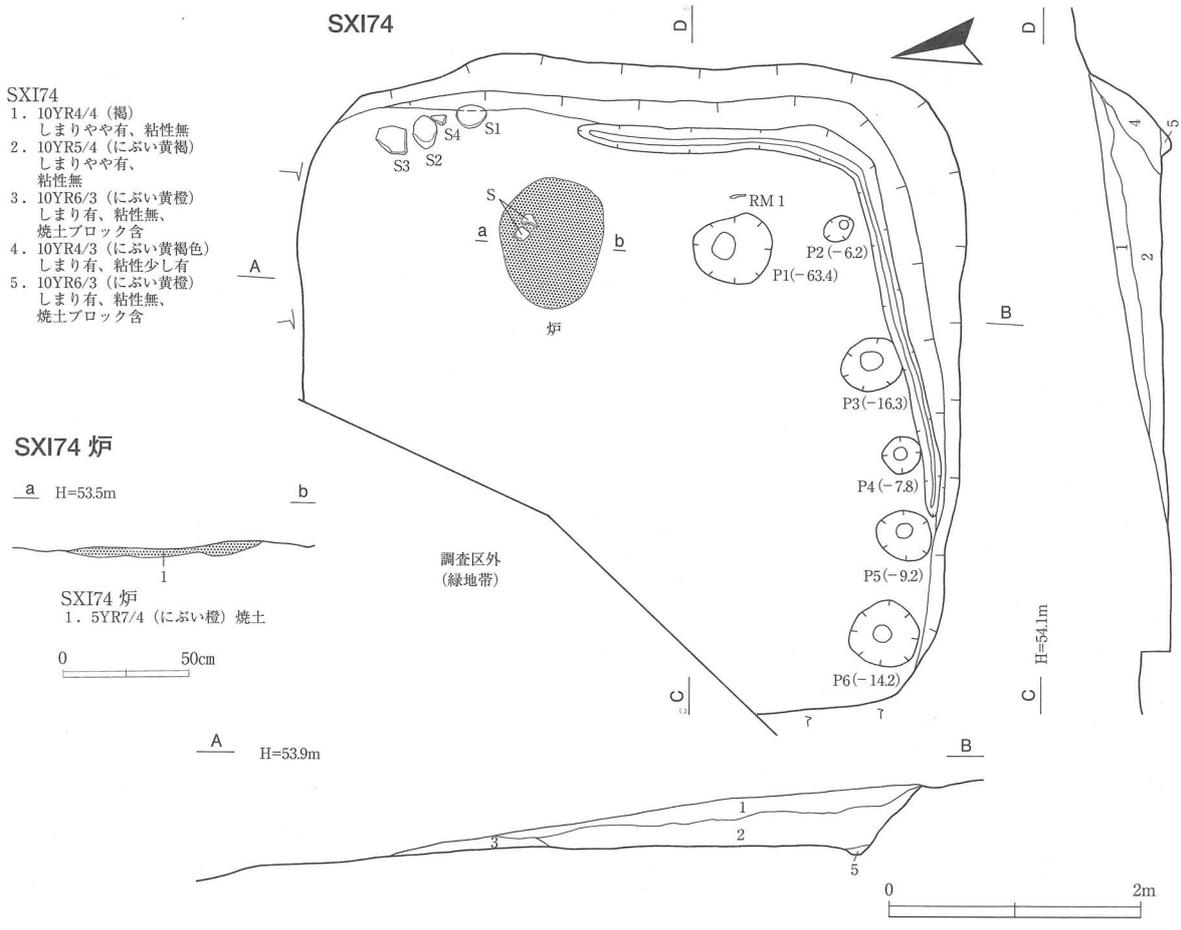
S X I 74 工房跡 (第133図、遺物図版25・92・122、写真図版100・226・280・303・316)

赤24B区北端部、ⅦB-20n・20oグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。本遺構は当初竪穴住居跡として精査を開始したが、カマドは検出されず地床炉のみ検出されたことから工房跡と判断した。西・北側斜面が消失し、また北西部が調査区外になっているために平面形・規模ははっきりしないが、東壁は5m、南壁が4.7m残存していることと、床面の残存状況から一辺5m前後の隅丸形状を呈していたものと思われる。床面積は残存部分で17.7㎡を測る。壁は外傾して立ち上がる。壁高は東壁で55cm、南壁で50cmを測り、東壁は北に、南壁は西に向かうにつれて低くなっていく。埋土は褐色土系を主体とした自然堆積を呈し3層に細分された。床面はほぼ平坦で締まり、東壁中央から南壁中央付近まで幅18～23cm、深さ5～7cmの周溝が検出された。床面施設として中央から北東よりで地床炉が1基、南壁際から柱穴が6基(P1～P6)検出された。炉は103×81cmの楕円形状を呈する厚さ8cmの焼土が形成されている。

遺物は土師器片が2点、須恵器片が2点、羽口片が1点、砥石が2点、鉄製品が2点(刀子・鍋?)と鉄滓が出土している。このうち掲載した遺物は埋土中より出土した須恵器(277・278)・P1より出土した砥石(108)、床面より出土した刀子RM1(85)、攪乱より出土した鍋?(86)である。

S X I 75 工房跡 (第133図、写真図版101)

赤24B区北端から赤25C区枝尾根へ下る斜面上、ⅧC-1o・2oグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。S K244と重複関係にあり同遺構より新しい。本遺構は検出当初、プランが長方形で炭を多く含むことから炭窯であると思い精査を開始したが、壁面・底面にはまとまった炭や焼土の広がりはなく床面から地床炉2基を検出したことから工房跡と判断した。北側斜面が消失しているため平面形・規模ははっきりしないが、西壁が1.3m、東壁が0.4m残存し、南壁が6.3m遺存していることと、床面の残存状況から長軸6m前後、短軸約2.7m前後の隅丸長方形を呈したものと思われる。床面積は残存部分で13.8㎡を測る。壁は外傾して立ち上がる。壁高は南壁で14cmを測り、西・東壁は北に向かい低くなっていく。埋土は暗褐色土系を主体とした自然堆積を呈し2層に細分された。床面はほぼ平坦で締まっている。床面施設として北壁中央壁際から地床炉が2基検出された。炉Aは73×58cmの楕円形状を呈する厚さ11cmの焼土が形成されている。炉Bは53×52cmの楕円形を呈する厚さ8cmの焼土が形成されている。遺物は出土しなかった。



第133図 SXI74・75工房跡

SK I 28 竪穴状遺構 (第134図)

赤24B区北半部、ⅧB-1q・1oグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。前述の通り削平・整地によって遺構の残存状況は極めて悪く、本遺構も当初は溝のプランのみで考えそうになったほどだった。しかし、溝の西側は微妙に谷頭の高まりが残存しているのに対し、その東側は比較的平坦面が続いていたことからこの溝は西壁際の周溝でその東側に床面がギリギリ残存している可能性があることに気づき、竪穴状遺構でないかと考え精査を開始した。平面形・規模は埋土がほとんど無い上に床面施設も周溝付近の柱穴しか確認できなかったことから不明ではあるが、周溝が4.5m残存していることから、一辺4.5m前後はあったものと思われるが推測の域を出ない。壁と床面積は壁面とコーナーが検出されていないことから不明である。埋土は検出時からほとんど無いため不明である。床面は平坦で締まっている。床面施設は西壁際から長さ4.51m、幅27cm、深さ22cmの周溝と、それに伴う柱穴3基(P1～P3)が検出されており、P1・P2は支柱穴になる可能性があると思われる。遺物は出土しなかった。

SK I 29 竪穴状遺構、SX 44 (第134図、写真図版101)

赤23区北半部、ⅧC-8qグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。SK I 29はSI 69・SK 188・SX 44と重複し、SI 69・SK 188に切られ、SX 44を切っている。SX 44はSI 69・72の精査時に両遺構に挟まれた部分に人為堆積で埋められたかのような土が広がっており、何らかの遺構があったもののこの遺構が廃棄された後にSI 69・72・SK I 29等に切られており、残存部分があまりにも少ないことから性格不明遺構とした。新旧関係は(新)SI 69・72・SK 188→SK I 29→SX 44→(旧)SK T02である。

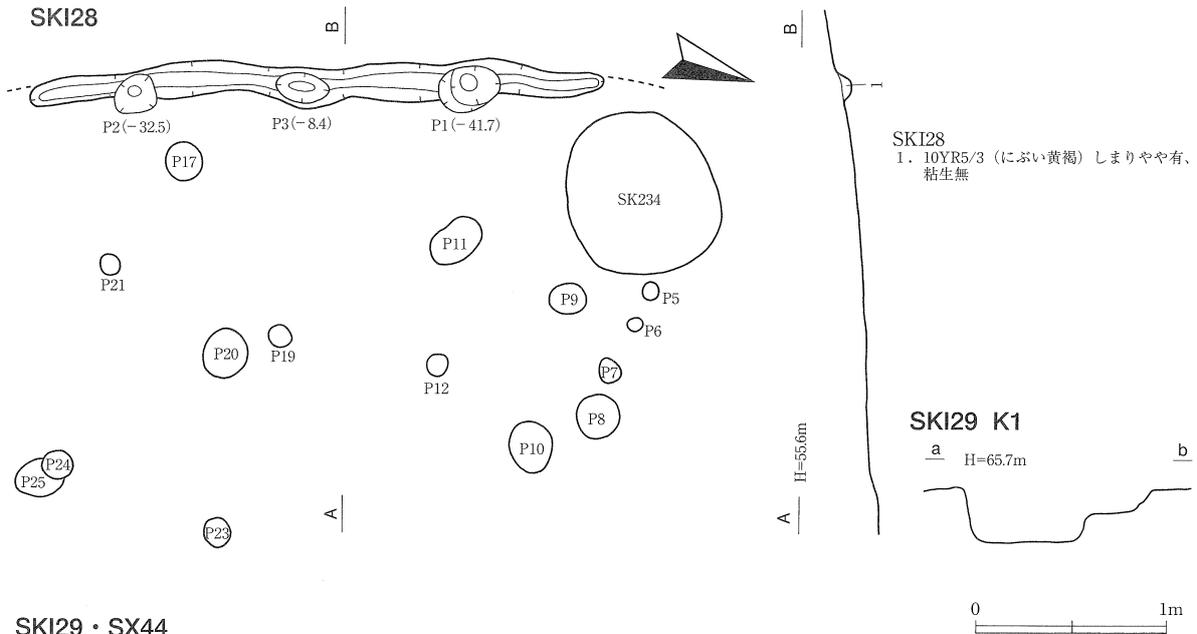
SK I 29は重複関係が激しいのと斜面の崩落から壁面の消失が著しく、全体的なプランははっきりしないが、北・東壁縁に不整なテラス状の張り出しをもつ。平面形・規模は東壁で3m遺存し、南壁で1.5m、北壁で1.53m残存していることから、一辺約3m以上の隅丸方形乃至長方形を呈すると思われる。張り出しは壁縁から奥に長さ0.7～1.7mの広さがある。床面積は残存部分で4.4㎡を測る。壁は下半部はやや外傾し、上半部は外傾して立ち上がる。壁高は東壁で35cmを測り、北壁・南壁は西側に向かうにつれて低くなっていく。張り出しは床面より16～35cm高く、その壁高は39cmを測り、西に向かうにつれて低くなっていく。埋土は10層に細分され、上位は黒褐色、中位はにぶい黄褐色土系の土を主体とした自然堆積を呈する。床面は平坦で締まっている。床面施設として遺構内から土坑が2基(K1・K2)、柱穴が4基(P1～P4)検出している。K1の平面形は不整形を呈し、径95×84cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、深さ18cmを測る。K2の平面形は楕円形状を呈し、径104×77cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、深さ32cmを測る。

遺物は埋土中より土師器片が4点、羽口片が5点出土している。

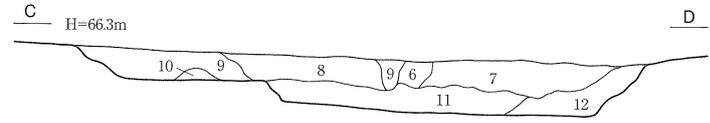
SX 44の平面形・規模は前述の遺構に切られているので不明である。底面は概ね平坦で締まっている。また、底面から土坑が1基(K1)検出された。埋土は褐色土系を主体とした人為堆積である。K1は平面形は楕円形状を呈し、径104×76cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、深さ21cmを測る。西壁際から径36cmの円形状を呈する、深さ20cmのピットを検出している。遺物は出土しなかった。

SK I 31A～C 竪穴状遺構 (第135図、遺物図版90、写真図版102・103・278)

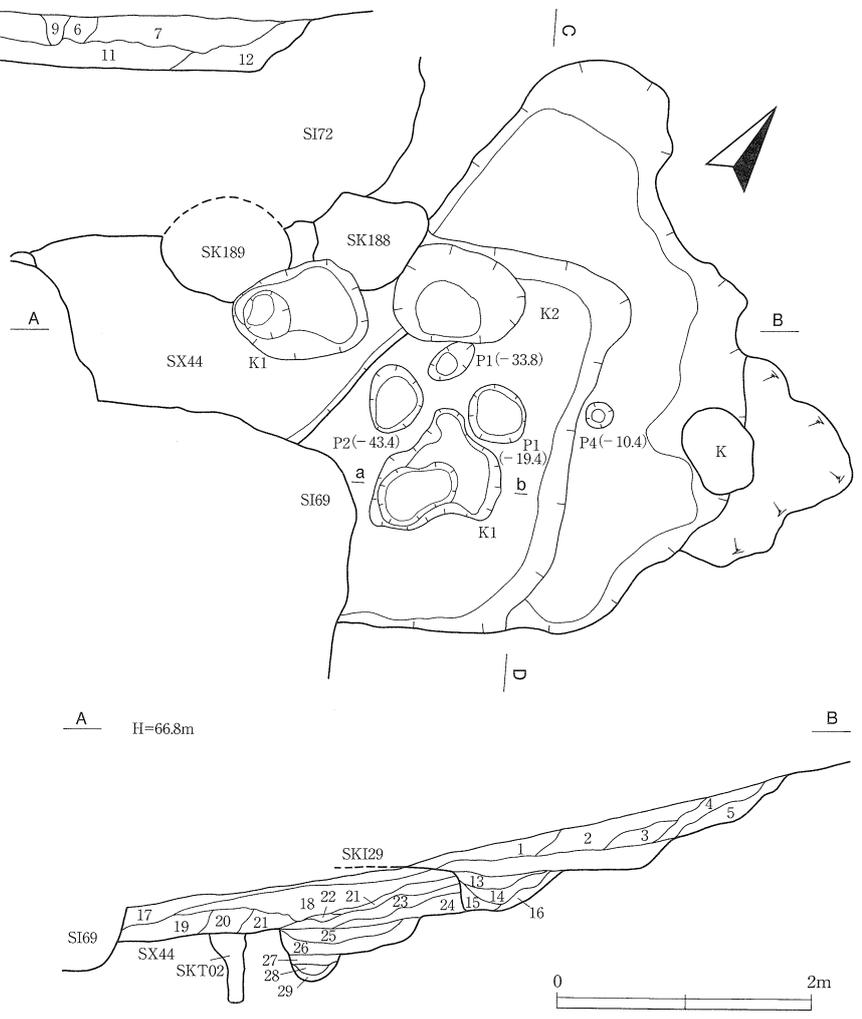
赤23区西側斜面下、ⅧC-1m・2mグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。検出当初から複数棟の重複があることが予想されたが、前述の通り森林伐採時における掘削道路の影響で埋土が薄く、切り合い関係が判然としなかったので共通のベルトを設定して精査を開始した。まず、検出段階から明らかに一番新しいSK I 31Aから精査に入り同遺構の壁面を観察したところ、東壁からSK 280のプランを、それ以外の壁面から上下に2時期の遺構の切り合い(SK I 31B・C)を確認し、SW104はSK I 31B北東コーナーで



SKI29・SX44



- SKI29・SX44**
1. 10YR2/3 (黒褐) しまり無、粘性有、褐色ブロック・炭多く、焼土粒含む
 2. 10YR5/8 (黄褐) しまり中、粘性少し有、褐色土多く、マサ土含む
 3. 10YR4/6 (褐) しまり中、粘性少し有、褐色土・炭含む
 4. 10YR5/8 (黄褐) しまり中、粘性無、暗褐色土多く、炭含む
 5. 10YR7/8 (黄橙) しまり中、粘性無、にぶい黄褐色土多く、炭含む
 6. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無、黄褐色土・マサ土含む
 7. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性少し有、黄褐色土少量
 8. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性少し有、黄褐色土・マサ土含む
 9. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性少し有、黄褐色土・炭含む
 10. 10YR5/8 (黄褐) しまり中、粘性少し有、マサ土・炭・焼土含む
 11. 10YR6/8 (明黄褐) しまり有、粘性無、マサ土・炭含む
 12. 7.5YR4/6 (褐) しまり有、粘性少し有、炭微量
 13. 10YR3/4 (暗褐) しまり中、粘性少し有、炭含む
 14. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無、炭含む
 15. 10YR5/6 (黄褐) しまり極有、粘性無
 16. 10YR5/8 (黄褐) しまり極有、粘性少有
 17. 10YR2/3 (黒褐) しまり無、粘性有、褐色ブロック・炭多く、焼土粒含む
 18. 10YR4/4 (褐) しまり極有、粘性無、明黄褐色・淡黄色土・炭少量
 19. 10YR5/6 (黄褐) しまり極有、粘性無、褐色土含む、炭少量
 20. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性やや有、炭含む
 21. 10YR4/6 (褐) しまり極有、粘性有
 22. 10YR5/8 (黄褐) しまり極有、粘性有、淡黄色ブロック少量
 23. 10YR5/6 (黄褐) しまり極有、粘性やや有、褐色土含む、炭微量
 24. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性有、炭微量
 25. 10YR4/4 (褐) しまり極有、粘性やや有、炭微量
 26. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性有、淡黄色少量
 27. 10YR6/8 (明黄褐) しまり小、粘性無
 28. 10YR5/8 (黄褐) しまり小、粘性無
 29. 10YR6/6 (明黄褐) しまり小、粘性無



第134図 SKI28・29竪穴状遺構・SX44

プランを確認した。新旧関係は(新)SK I 31A→SK I 31B→(旧)S I 31Cである。なお、SK 280はSK I 31Aより古く、SW104はSK I 31Bより新しいが、その他の遺構との新旧関係は不明である。

SK I 31Aは平面形は隅丸方形を呈し、規模は北壁で3.5m、東壁で3.6m、南壁で3.4m、西壁で3.3mを測る。床面積は残存部分で3.7㎡を測る。壁は下半部はやや外傾し、上半部はより外傾して立ち上がる。壁高は東壁で159cm、西壁で82cmを測り、北壁・南壁は西側に向かうにつれて低くなっていく。埋土は14層に細分され、にぶい黄褐色土を主体とした自然堆積を呈する。床面は平坦で締まっている。

遺物は埋土中より土師器片が小袋1袋分と鉄滓が出土している。

SK I 31Bは西側斜面が崩落し、東側の大部分をSK I 31Aに北壁の一部をSW104に切られているため平面形・規模は不明だが、南北長4.2m、東西長2.7mを測ることから約4.2×2.7mの隅丸長方形を呈するものと思われる。床面積は残存部分で4.9㎡を測る。壁は外傾して立ち上がる。壁高は東壁で66cmを測り、北壁・南壁は西側に向かうにつれて低くなっていく。埋土は浅黄色土を主体とした人為堆積を呈する。床面は平坦で締まっている。遺物は出土しなかった。

SK I 31Cは平面形は隅丸長方形を呈すると思われる、規模は北壁で2.6m遺存し、東壁で1.4m、南壁で0.6m残存し、西壁で3.3m遺存している。床面積は残存部分で10.0㎡を測る。壁はやや外傾して立ち上がる。壁高は北壁で26cm、東壁で24cm、南壁で31cm、西壁で19cmを測る。埋土は4層に細分され、にぶい黄褐色土を主体とした人為堆積を呈する。床面は平坦で締まっている。南西コーナー付近に径39×35cmの楕円形を呈する焼土の広がりを検出し、当初は地床炉の可能性もあると見て精査したが、地床炉ではなく廃棄焼土である事を確認した。遺物は掲載したS 1の砥石1点(94)が出土している。

SK I 35 竪穴状遺構 (第136図、遺物図版91、写真図版103・280)

赤24A区北半部、ⅧC-4fグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。検出当初は竪穴状住居跡と考え精査を開始したが、カマド・炉等が検出されなかったことから竪穴状遺構と判断した。平面形・規模は埋土がほとんど無い上に西側部分が斜面の崩落で消失しはっきりしないが、東壁で5.1m遺存し、北壁で0.2m、南壁で2m残存していることから、一辺5m前後の隅丸方形を呈するものと思われる。床面積は残存部分で14.4㎡を測る。壁はやや外傾して立ち上がる。壁高は東壁で12cmを測り、南壁は西側に向かうにつれて低くなっていく。埋土は検出時からほとんど無い為不明だが、浅黄橙色土で貼床が施されている。床面は平坦で締まっており、北・南壁際と中央部分以外に貼床が施されている。床面施設は柱穴1基(P1)と東壁際から径70×62cm、深さ22cmの楕円形状を呈する土坑1基(K1)が検出されている。

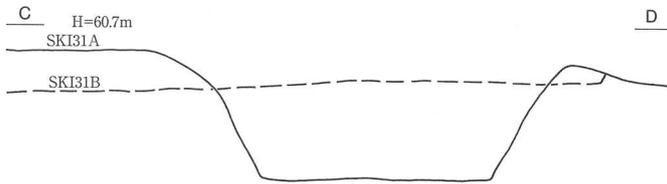
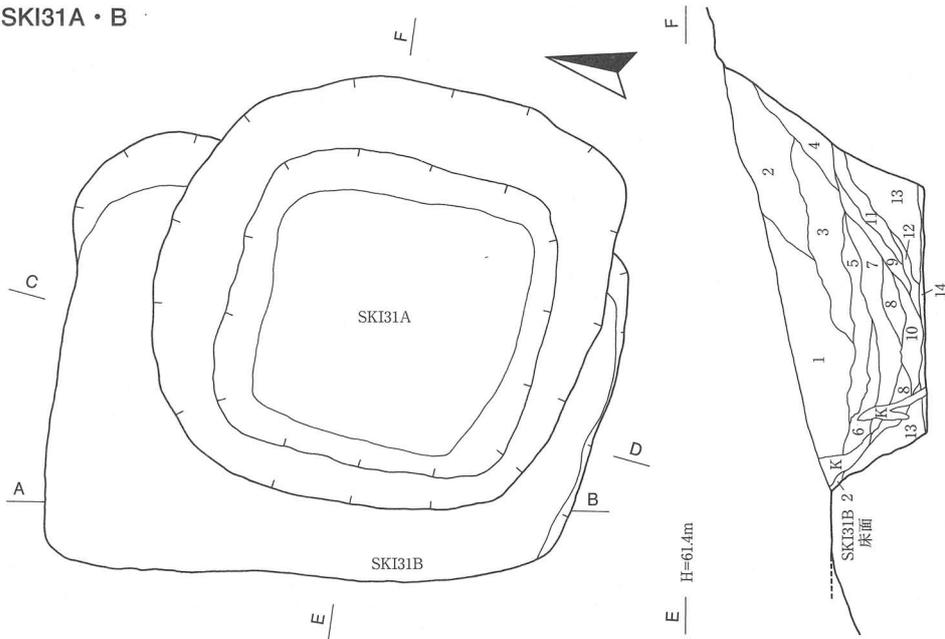
出土遺物は検出面から砥石(102)・要石(103)各1点と鉄滓が埋土中より出土した。

SK I 37 竪穴状遺構 (第136図、写真図版103)

赤24B区南半部、ⅧC-4c・5cグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。検出当初は形状と立地から炭窯と考え精査を行ったが、埋土・床面等から明瞭な炭・焼土は確認されず、カマド・炉等も検出されなかったことから、竪穴状遺構であると判断した。また、北コーナー付近でSN55に切られ、西壁付近でSX I 33を切っていることから、新旧関係は(新)SN55→SK I 37→(旧)SX I 33である。

平面形・規模は東側部分が斜面の崩落と攪乱によって判然としないが、南西壁は5.3m遺存し、南東壁は1.4m残存することから、長軸5m強、短軸1.5m以上の隅丸長形状を呈するものと思われる。床面積は11.3㎡を測る。壁はやや外傾して立ち上がる。壁高は南西壁で74cmを測り、南東壁は東側に向かうにつれて低くなっていく。埋土は上位は浅黄色土、中～下位はにぶい黄色土を主体とした自然堆積を呈し、5層に細分された。床面は平坦で締まっている。床面施設は北西壁際と北コーナー付近から柱穴(P1～5)が検出さ

SKI31A・B



SKI31A

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、にぶい黄橙色土含む
2. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、炭微量
3. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無、炭微量
4. 10YR7/6 (明黄褐) しまり少し有、粘性無
5. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無、炭少量
6. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
7. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭含む
8. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、浅黄橙色土含む
9. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭微量
10. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭含む、焼土微量
11. 10YR8/4 (浅黄橙) しまり有、粘性無
12. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無、炭・焼土微量
13. 10YR7/6 (明黄褐) しまり極有、粘性やや有、マサ土含む
14. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭微量

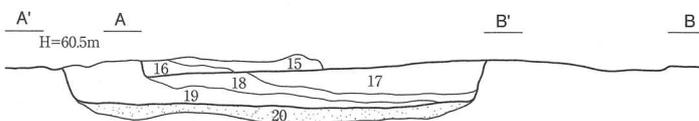
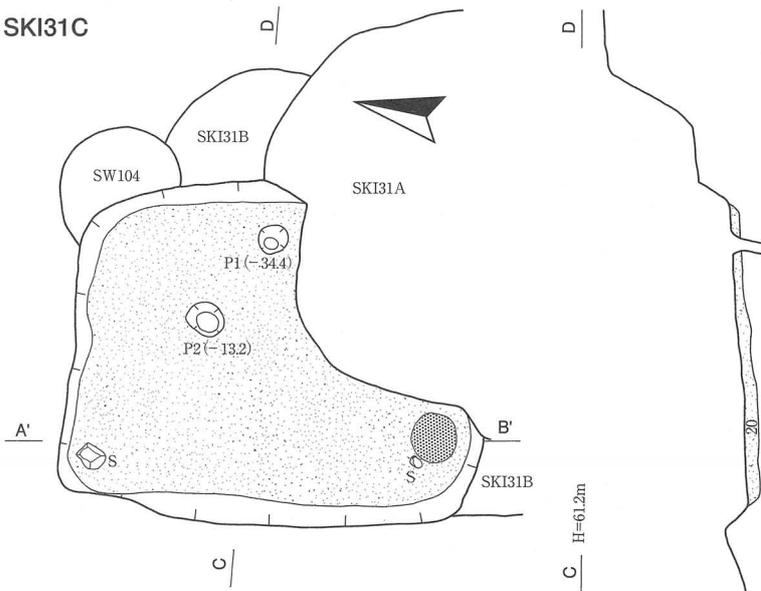
SKI31B

15. 2.5Y7/3 (浅黄) しまり有、粘性無
16. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性無

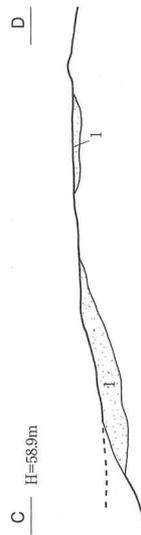
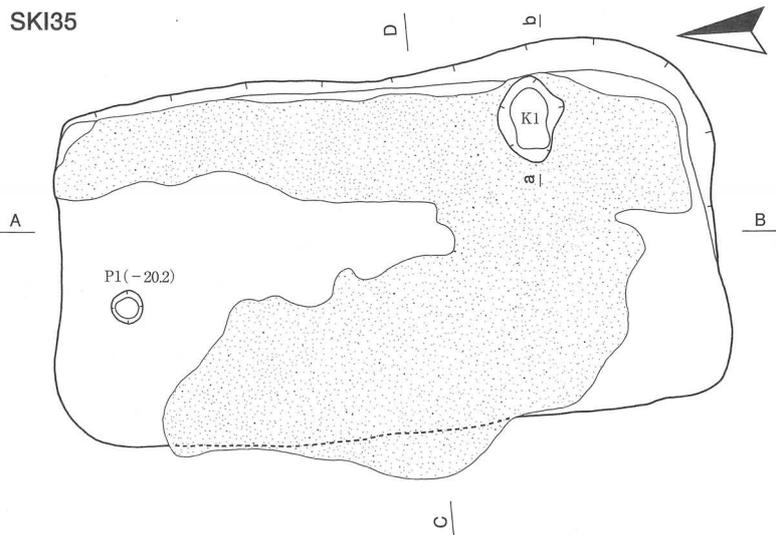
SKI31C

17. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性無、マサ土含
18. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性少し有、炭含む
19. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり無、粘性少し有、炭少量
20. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性無、炭含む、貼床

SKI31C



第135図 SKI31A~C 竖穴状遺構

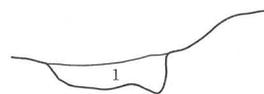


SKI35
1. 2.5Y7/4 (浅黄) しまりやや有、粘性無、
にぶい黄褐土含、炭微量



SKI35 K1

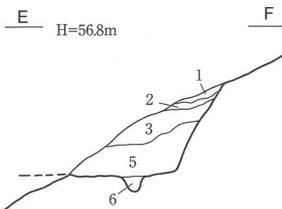
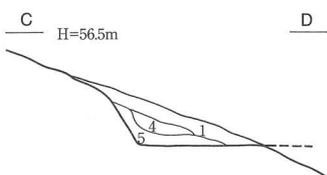
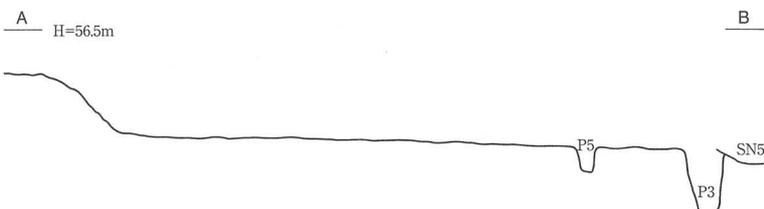
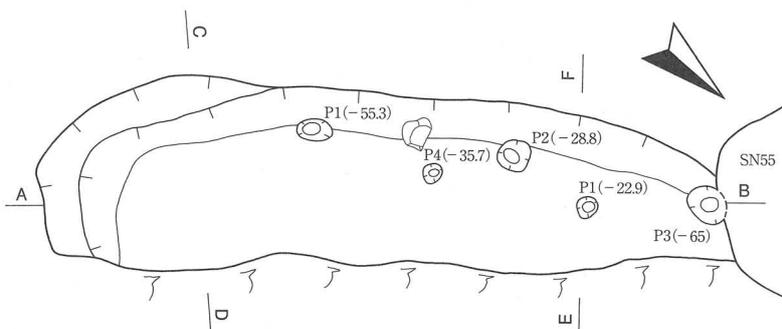
a H=58.9m b



SKI35 K1
1. 10YR6/3 (にぶい黄橙)
しまりやや有、粘性無



SKI37



SKI37

1. 2.5Y7/3 (浅黄) しまりやや有、粘性無
2. 5YR8/3 (浅橙) しまりやや有、粘性無、炭多
3. 2.5Y7/3 (浅黄) しまりやや有、粘性無
4. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまりやや有、
粘性少し有、炭少量
5. 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまりやや有、
粘性無、炭微量
6. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無



第136図 SKI35・37竪穴状遺構

れているが、位置的に支柱穴となりえるものは無いものと思われる。遺物は土師器片が1点のみ出土している。

SK I 38 竪穴状遺構 (第137図、写真図版104)

赤24B区北半部、ⅧC-20o・20pグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。検出当初は形状と立地から炭窯と考え精査を行ったが、埋土・床面等から明瞭な炭・焼土は確認されず、カマド・炉等も検出されなかったことから、竪穴状遺構であると判断した。北東コーナー付近でSK 283と重複関係にあり、同遺構を切っていることから、新旧関係は(新)SK I 38→(旧)SK 283である。平面形・規模は西側部分が斜面の消失と攪乱によって判然としないが、東壁は3.8m遺存し、南壁は1.5m、北壁は0.9m残存することから、長軸4m弱、短軸2m以上の隅丸長形状を呈するものと思われる。床面積は5.5㎡を測る。壁はやや外傾して立ち上がる。壁高は東壁で37cmを測り、北壁・南壁は西側に向かうにつれて低くなっていく。埋土は上位は黒褐色土、中～下位はにぶい褐色土を主体とした自然堆積を呈し、6層に細分された。床面は平坦で締まっている。床面施設は北壁際と南壁際と北東コーナー付近から柱穴(P 1～3)が検出されている。このうちP 1・2は位置的に支柱穴となりえると思われる。遺物は出土しなかった。

SK I 43 竪穴状遺構 (第137図、写真図版104)

赤24A区西斜面、ⅧC-2eグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。SI 100と重複関係にあるが、平面から新旧関係が判然としなかったため、共通のベルトを設定して精査を開始した。断面観察の結果、同遺構を切っている事を確認したので、新旧関係は(新)SK I 43→(旧)SI 100である。検出当初は形状と立地から炭窯と考え精査を行ったが、埋土・床面から明瞭な炭・焼土は確認されず、カマド・炉等も検出されなかったことから、竪穴状遺構と判断した。平面形・規模は西側部分が斜面の崩落によって判然としないが、東壁は5.8m遺存し、南壁は1m、北壁は0.9m残存することから、長軸6m弱、短軸1m以上の隅丸長形状を呈するものと思われる。床面積は5.2㎡を測る。壁は外傾して立ち上がる。壁高は東壁で53cmを測り、北壁・南壁は西側に向かうにつれて低くなる。埋土はにぶい褐色土を主体とした自然堆積を呈し、6層に細分された。床面は平坦で締まっている。遺物は土師器片が4点出土している。

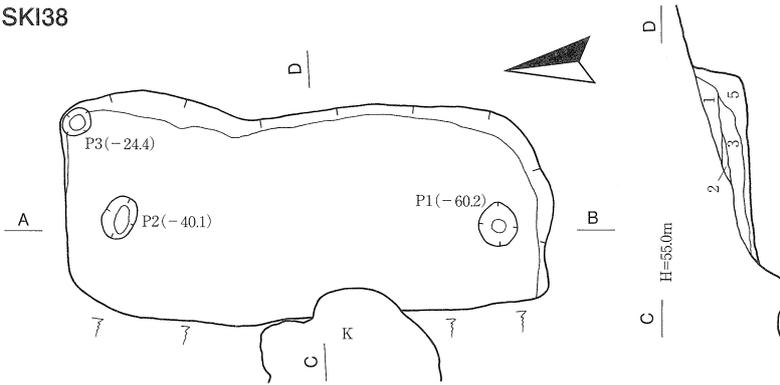
SK I 50 竪穴状遺構 (第137図)

赤24B区北半部、ⅧB-2n・3oグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出した。検出当初は土坑と考え精査を開始したが、赤24区内に立地する竪穴状遺構と規模・形状等が類似することから、斜面の崩落で東半部を消失した竪穴状遺構と判断した。東側斜面の崩落で東半部を消失しているが、平面形・規模は隅丸長形状を呈し、北西壁は1.1m、南東壁は0.9m残存し、南西壁は3.9m遺存する。壁は外傾して立ち上がる。壁高は南西壁で22cmを測り北西・南東壁では東に向かうにつれて低くなっていく。埋土は2層に細分され、上位は暗褐色土、下位はにぶい黄褐色土を主体とした自然堆積である。底面は概ね平坦である。床面施設として中央よりやや南東壁よりから柱穴を1基検出している。遺物は土師器片が1点のみ出土した。

SW79 炭窯 (第138図、写真図版105)

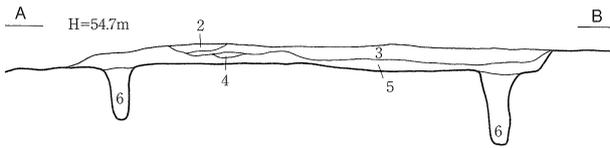
赤23区中央東側から枝分かれする赤27区尾根基部の南側斜面上、ⅧC-10o・10pグリッドに位置している。本遺構はSI 71を精査中に南東部から炭と焼土の広がりが見られ、竪穴住居跡の断面を検討した結果、竪穴が完全に埋まりきる前の窪みを利用して構築した炭窯であると判断した。検出状況から本遺構はSI 71より新しい。調査員の状況把握が遅れたことから遺構の東半分を掘り過ぎてしまったが、平面形は略円形を呈すると思われ、規模は推定で開口部径149×141cm、底部径123×122cmを測る。断面形は鍋形状を呈し、深さは18～56cmを測る。埋土は炭混じりの暗褐色土である。底面は概ね平坦である。東壁の一部には被熱した赤色の焼土の広がりが見られ、厚さ4cmを測る。遺物は出土しなかった。

SKI38



SKI38

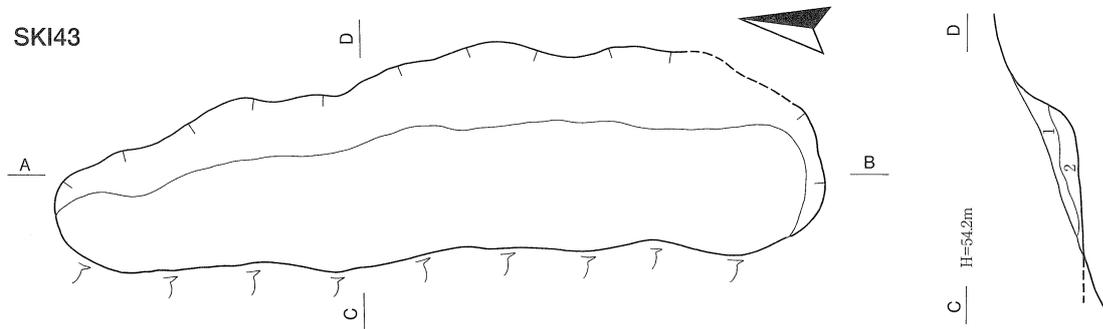
1. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性少し有、にぶい黄色土・炭含
2. 25Y6/3 (にぶい黄) しまりやや有、粘性無
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極有、粘性少し有、黄褐色土含
4. 10YR7/2 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、マサ土含む
5. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、炭含む
6. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無



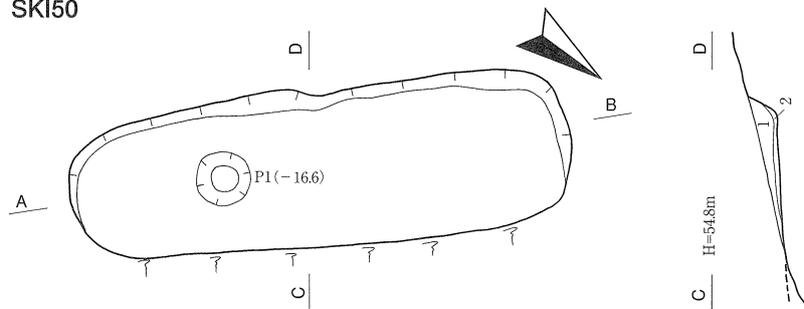
SKI43

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭微量
2. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無、にぶい黄褐土含
3. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、黄褐土・炭含
4. 25Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性無
5. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり少し有、粘性無
6. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭微量

SKI43



SKI50



SKI50

1. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無、炭少量
2. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無



第137図 SKI38・43・50竪穴状遺構

S W80炭窯 (第138図、写真図版105)

赤23区西側斜面下、ⅧC-2nグリッドに位置する。本遺構はS I 78精査中に炭の広がりを確認し精査を進めたところ、断面観察等からS I 78が完全に埋まりきる前の窪みを利用して構築した炭窯であると判断した。検出状況から本遺構はS I 78より新しい。西壁の一部を消失してしまったが、平面形は楕円形を呈すると思われ、規模は推定で開口部径100×60cm、底部径81×43cmを測る。断面形は浅皿状を呈し、深さは15～22cmを測る。埋土は上位は炭混じりの褐色土で下位に炭層の広がりがみられる。底面は中心に向かって緩やかに下っている。北・南壁の一部には被熱した明赤褐色の焼土の広がりが見られ、厚さ5cmを測る。遺物は出土しなかった。

S W104炭窯 (第138図、写真図版105)

赤23区西側斜面下、ⅧC-2mグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。本遺構はS K I 31B北東コーナーを精査中にいぶい黄褐色土に焼土が含まれたプランを確認し精査に入った。当初はS K I 31B埋土を掘り込んでいたことから、同遺構より新しい掘り込みのある炉跡と考え精査を進めたが、底面に明瞭な焼土の広がりが無く、埋土下位に炭を含んだ層が見られたことから炭窯であると判断した。南壁の一部を消失したが、平面形は略円形を呈すると思われ、規模は推定で開口部径116×93cm、底部径79×65cmを測る。断面形は半円状を呈し、深さは17～46cmを測る。埋土は炭混じりの褐色土で底面付近に炭層の広がりがみられる。底面は西壁際約30cm程は平坦で底から東壁に向かって緩やかに上がり東壁の立ち上がりにぶつかっており、締まっている。東壁の一部には被熱した橙色の焼土の広がりが見られ、厚さ1cmを測る。

遺物は土師器片が10点と鉄滓が出土している。

S W105炭窯 (第138図、写真図版105)

赤24B区南半部、ⅧC-3cグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。前述の通りS X I 34南西コーナーを切っている土坑と考え精査を行ったが、底面に明瞭な焼土の広がりが無いものの、埋土に炭が混入した層が認められることから炭窯であると判断した。新旧関係は(新)S W105→S X I 34→(旧)S N57である。検出が遅れたため北東壁の一部を消失してしまったが、平面形は楕円形を呈し、規模は開口部径101×69cm、底部径93×58cmを測る。断面形は鍋状を呈し、深さは12～18cmを測る。埋土は上位はいぶい黄色、中位は炭が混入した暗灰黄褐色土、下位は炭が混入したにいぶい黄色を主体とした人為堆積を呈する。底面は締まっている。遺物は出土しなかった。

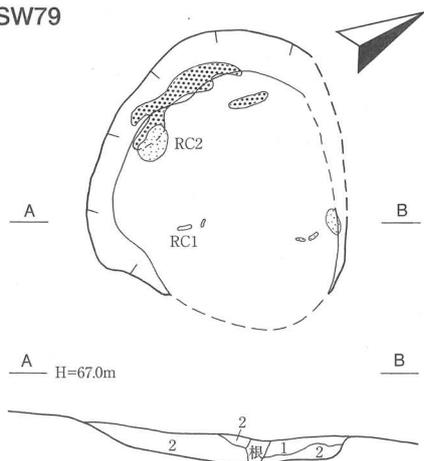
S W106炭窯 (第138図、写真図版105)

赤24B区南半部、ⅧC-3cグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。前述の通り当初はS X I 34・S I 106を切っている土坑と考え精査を進めたが、底面に明瞭な焼土の広がりが無いものの、埋土に炭が混入した層が見られることから炭窯であると判断した。また、S N56と重複関係にあり同遺構に切られていることから、新旧関係は(新)S N56→S W106→S X I 34→(旧)S I 106である。前述の削平整地によって北半分の壁面がはっきりしないが、平面形は円形を呈し、規模は開口部径82×71cm、底部径73×71cmを測る。断面形は鍋状を呈すると思われ、深さは最大14cmを測る。埋土は炭を含んだ灰黄褐色土を主体とした自然堆積を呈する。底面は締まっている。遺物は出土しなかった。(島原)

S K 129土坑 (第139図、遺物図版21、写真図版106・223)

F区赤23区中央斜面部の西側斜面上方、ⅧD-10e・9eグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。本遺構は傾斜地に立地するため、斜面下方の西側は自然崩落により消失している。検出時の状況は、褐色土系の不整なプランの西側に約20～30cm大の自然石数個を確認した。平面形は歪な円形を呈し、規模は開口

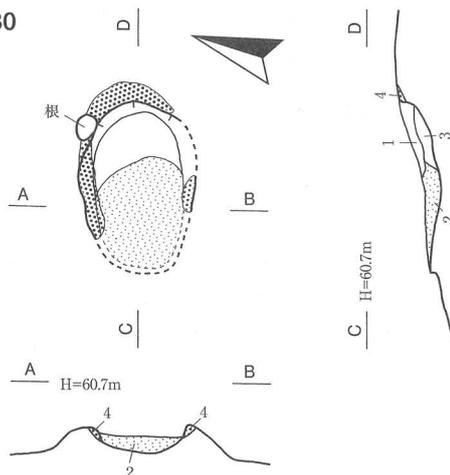
SW79



SW79

1. 10YR3/2 (暗褐) しまり少し有、粘性無、褐色ブロック、炭含
2. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり少し有、粘性無、浅黄橙色土混入
3. 5YR5/4 (にぶい赤褐) 焼土

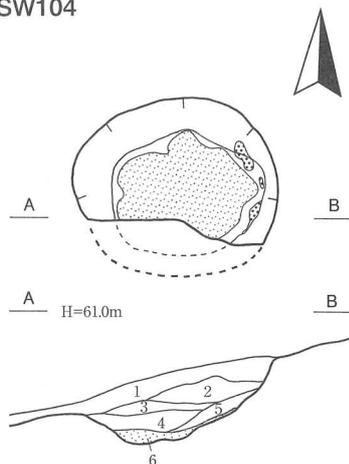
SW80



SW80

1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性少し有、炭・マサ土少量
2. 10YR1.7/1 (黒) しまりやや有、粘性少し有、炭層
3. 10YR2/1 (黒) しまりやや有、粘性少し有、炭層だが、焼土・暗褐色土含
4. 5YR5/8 (明赤褐) 焼土

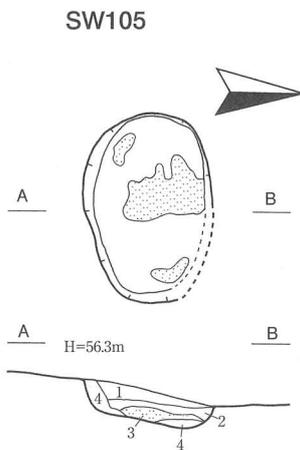
SW104



SW104

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭・焼土粒含
2. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無、明黄褐色土・炭含む
3. 7.5YR5/6 (明褐) しまり有、粘性少し有、マサ土・焼土含む
4. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性やや有、明黄褐色土混入、炭含
5. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性やや有、炭含む
6. 10YR2/1 (黒) しまり少し有、粘性少し有、炭の層

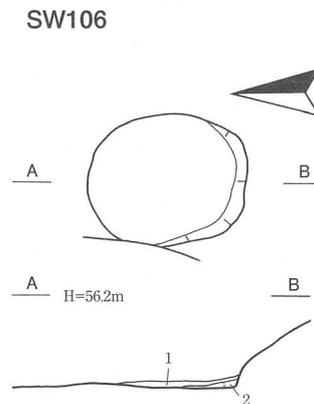
SW105



SW105

1. 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまりやや有、粘性無
2. 2.5Y5/2 (暗灰黄褐) しまりやや有、粘性無、炭混入
3. 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまりやや有、粘性無、炭の層
4. 2.5Y7/3 (浅黄) しまりやや有、粘性無、炭微量

SW106



SW106

1. 10YR4/2 (灰黄褐) しまりやや有、粘性無、炭含
2. 5YR7/3 (にぶい橙) しまりやや有、粘性無

0 1m

部約125～140cmを測る。壁は斜面上方の東側では緩やかに立ち上がり、深さは約40cmを測る。本遺構底面は二段構造となっており、遺構中央から斜面上方の東壁は明瞭な稜を持たず緩やかに立ち上がるが、遺構中央から西側にかけては、一旦5cm程立ち上がり、その後幅約45～50cmの平坦部が約40cm程続く。埋土は8層に細分される黄褐～明黄褐色土で、その堆積状況からも人為堆積と思われる。また、埋土下層には炭化物や焼土粒が混入している。底面は堅く締まり、遺構中央には厚さ1cmにも満たない橙色焼土が楕円形に広がっていた。

遺物は、埋土5層より土師器の甕形土器の大破片が出土し、下半部を復原(233)できた。本遺構は土坑状の掘り込みを有し、底面に微弱ながら焼土が検出されていることから炉跡の可能性も考えられる。しかし、検出時の自然石の状況や人為的な埋め戻しがされていること、底面焼土が薄いことや遺物の状況などから炉跡とは考え難く、墓坑の可能性も考えられる。(小林)

S K 168土坑 (第139図、写真図版106)

赤23区北半部、ⅧC-8qグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、開口部径116×66cm、底部径95×43cmを測る。断面形は鍋形を呈し、深さは約20cmを測る。埋土は黄褐色土を主体とした自然堆積である。遺物は埋土中より鉄滓が出土している。

S K 178土坑 (第139図、写真図版106)

赤23区北半部、ⅧC-6qグリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。平面形・規模は円形を呈し、開口部径134×119cm、底部径111×95cmを測る。断面形は鍋形を呈し、深さ43cmを測る。埋土は上位は黄褐色土、下位は明黄褐色土を主体とした人為堆積である。

遺物は埋土中より土師器片が1点出土した。

S K 179土坑 (第139図、写真図版106・316)

赤23区北半部、ⅧC-8tグリッドに位置している。本遺構はS X H 09排土上面で検出し、新旧関係は(新) S K 179→(旧) S X H 09である。検出面はⅣ層上面である。平面形は円形を呈し、開口部径83×80cm、底部径67×61cmを測る。壁は外傾して立ち上がり、壁高は28cmを測る。埋土は暗褐色～褐色土を主体とした人為堆積で特に埋土中位では10～20cmの礫と鉄滓類が廃棄されている。底面は概ね平坦である。遺物は埋土中より羽口片と鉄滓類が出土している。

S K 180土坑 (第139図)

赤23区北半部、ⅧC-8q・9qグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。平面形は円形を呈し、規模は推定で開口部径97×94cm、底部径61×54cmを測る。断面形は鍋形を呈し、深さ約21cmを測る。埋土は黄褐色土を主体とした自然堆積である。遺物は出土しなかった。

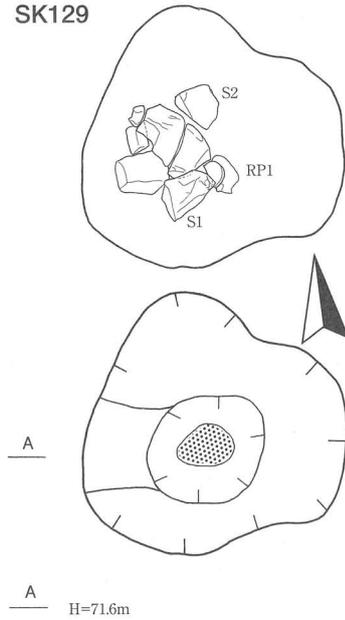
S K 184土坑 (第139図、写真図版106)

赤23区北半部東側から枝分かれする赤27区尾根の南側斜面上、ⅧC-10oグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。S I 71竪穴住居跡に切られ、埋土がにぶい黄褐色土を主体とした人為堆積であることから、S I 71構築時には埋め戻されていたものと思われる。平面形・規模は楕円形を呈し、開口部径86×72cm、底部径72×61cmを測る。壁は外傾して立ち上がり壁高は13cmを測る。遺物は出土しなかった。

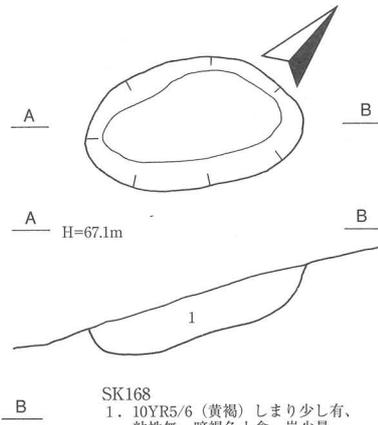
S K 185土坑 (第140図、遺物図版120、写真図版106・302)

赤23区北半部、ⅧC-4pグリッドに位置する。本遺構はS K I 33Bと重複関係にあり、平面・断面プランから本遺構がS K I 33Bを切っている状況を確認できなかったことと、本遺構が人為堆積を呈することから、S K I 33Bより古い遺構であると思われる。平面形・規模は円形を呈し、開口部径143×142cm、底部径

SK129



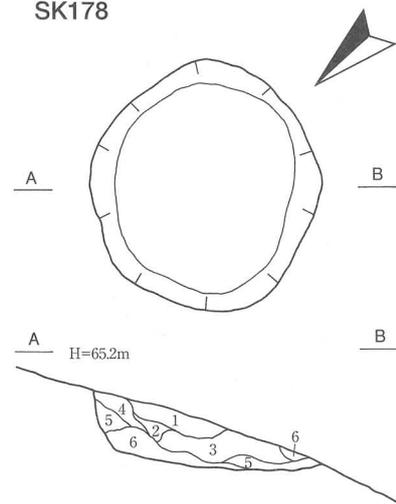
SK168



SK168

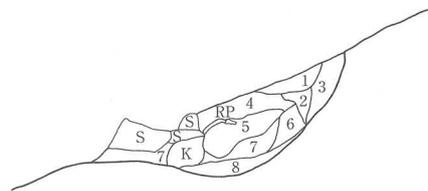
1. 10YR5/6 (黄褐) しまり少し有、粘性無、暗褐色土含、炭少量

SK178



SK178

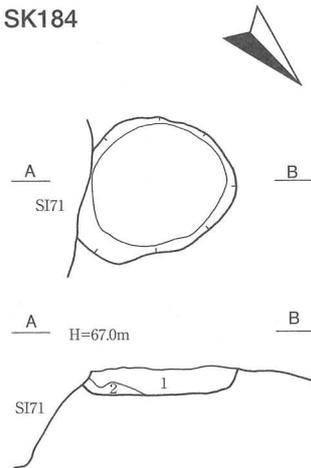
1. 10YR5/8 (黄褐) しまり無、粘性有
2. 10YR4/6 (褐) しまり無、粘性有
3. 10YR5/6 (黄褐) しまり無、粘性有
4. 10YR6/6 (明黄褐) しまり無、粘性有
5. 10YR4/4 (褐) しまり無、粘性有
6. 10YR6/8 (明黄褐) しまりやや有、粘性有



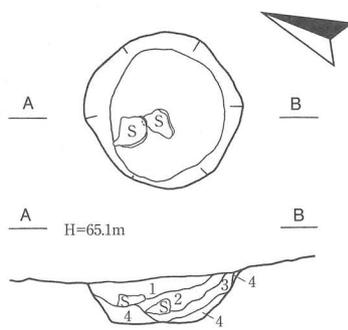
SK129

1. 2.5Y5/4 (黄褐) しまりやや有、粘性無
2. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性無
3. 10YR6/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性無、壁崩落土
4. 2.5Y7/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性無
5. 10YR7/6 (明黄褐) しまり欠、粘性無
6. 10YR7/8 (黄橙) しまり欠、粘性無
7. 10YR5/6 (黄褐) しまり極有、粘性有
8. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有、炭化物少量

SK184



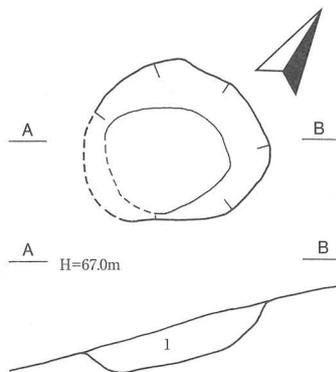
SK179



SK179

1. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性やや有、炭少量
2. 10YR5/8 (黄褐) しまり無、粘性無、鉄滓・礫含
3. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性無、炭少量
4. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性無

SK180



SK180

1. 10YR5/6 (黄褐) しまり少し有、粘性無、暗褐色土含、炭少量

SK184

1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、明黄褐ブロック・暗褐色土・炭含
2. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性無、明黄褐色土少量



第139図 SK129・168・178~180・184土坑

152×149cmを測る。壁は底部から開口部にむかって内湾気味に立ち上がり壁高は75～113cmを測る。埋土はにぶい黄褐色土と黄褐色土が互層に堆積する人為堆積である。底面は概ね平坦である。遺物は埋土中より土師器甕片が6点、羽口片が1点、鉄製品（鉄鐸）が1点、磨石が1点、埋土最下層より鉄滓が出土している。このうち掲載したのは埋土中位より出土した鉄鐸（63）である。

S K 186土坑（第140図、写真図版107）

赤23区北側の尾根上、ⅧC-41グリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。S I 74と重複関係にあるが、平面プラン上から新旧関係が把握できなかったため、同堅穴と一緒に精査を行ない、断面観察から（新）S K 186→（旧）S I 74であると判断した。平面形は不整な方形状を呈し、規模は推定で開口部147×111cm、底部107×87cmを測る。断面形は鍋形を呈し、深さ21cmを測る。埋土は上位は暗褐色土、下位は黄褐色土を主体とした自然堆積である。底面は概ね平坦で底面の西側からは平面形が楕円形状を呈し、開口部径71×39cm、深さ25cmのピットが検出された。遺物は出土しなかった。

S K 187土坑（第140図、遺物図版21・90・91、写真図版107・223・279）

赤23区北半部、ⅧC-30グリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出した。平面形・規模は方形状を呈し、開口部133×123cm、底部107×105cmを測る。壁はやや外傾気味に立ち上がり、壁高は36～54cmを測る。埋土は上位は暗褐色土、下位は黄橙色を主体とする人為堆積で、上位層を中心に石製品等が投げ込まれている。底面は概ね平坦である。

遺物は埋土中より土師器甕片が3点、石製品が2点出土した。このうち掲載したのは埋土中より出土した土師器甕1点（234）と砥石1点（97）と、S 1の砥石（98）である。

S K 188土坑（第140図、写真図版107）

赤23区北半部、ⅧC-8qグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。S I 72堅穴住居跡と重複関係にあり、同住居跡との重複部分周辺の壁面にはりついていた廃棄焼土をS K 188埋土中で確認することができなかったことから、本遺構はS I 72よりも古い遺構であると判断した。平面形は楕円形状を呈し、残存部分の規模は開口部径80×58cm、底部径97×61cmを測る。断面形は鍋形を呈し、深さ40cmを測る。埋土は褐色土を主体とする人為堆積である。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S K 189土坑（第140図、写真図版107）

赤23区北半部、ⅧC-8qグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。S I 72堅穴住居跡の南東壁面を精査中に廃棄焼土混じりの崩落土を切っているプランを確認し精査に入った。検出状況からS I 72堅穴住居跡よりも新しいと考えられるが、検出が遅れたため北西部分の一部を消失してしまっている。平面形は円形を呈すると考えられ、規模は推定で開口部径98×84cm、底部径61×50cmを測る。断面形は逆台形状を呈すると考えられ、深さは約50cmを測る。埋土は上位は褐色土、下位は暗褐色土を主体とする人為堆積である。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S K 190土坑（第140図、写真図版107）

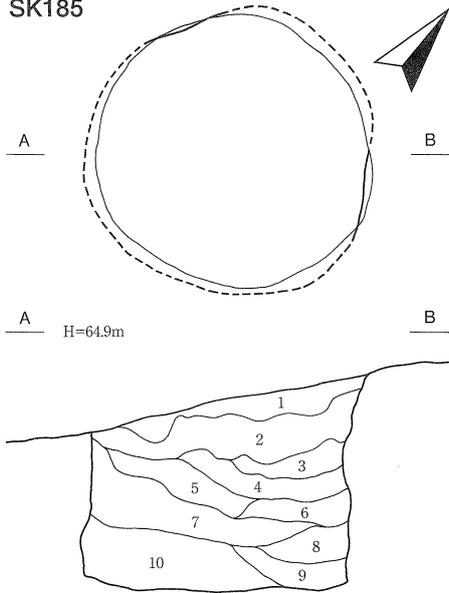
赤23区北半部、ⅧC-8qグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。平面形・規模は略円形を呈し、開口部径73×57cm、底部径41×37cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、深さは44cmを測る。埋土は上・中位は明黄褐色土、下位は黄橙色土を主体とする人為堆積である。底面は概ね平坦である。

遺物は出土しなかった。

S K 191土坑（第141図、遺物図版21・120、写真図版107・224・302）

赤23区北半部、ⅧC-30グリッドに位置する。本遺構はS I 75の南西コーナーを切って構築し、人為的

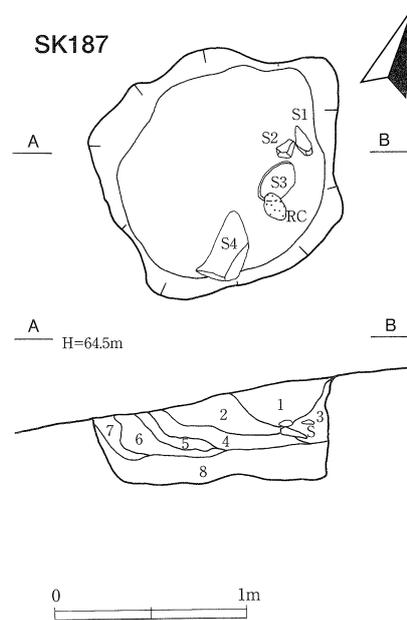
SK185



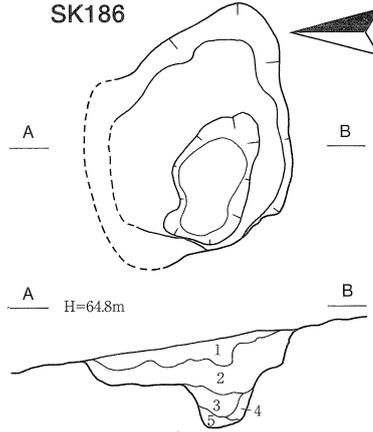
SK185

1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極有、粘性無、炭・マサ土含
2. 2.5Y8/6 (黄) しまり有、粘性無、にぶい黄褐色混入、焼土・炭含む
3. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、明黄褐色土・炭含む
4. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性少し有、褐色土・炭含む
5. 10YR4/2 (灰黄褐) しまり極有、粘性無、明黄褐色・黄色土・炭含む
6. 2.5Y8/6 (黄) しまり極有、粘性無、にぶい黄褐色・明黄褐色土多く、炭少量
7. 10YR6/8 (明黄褐) しまり極有、粘性無、黄色土、マサ土・炭多く含む
8. 10YR6/8 (明黄褐) しまり極有、粘性少し有、にぶい黄褐色土多く、炭含む
9. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり極有、粘性有、明黄褐色土多く、炭少量
10. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性少し有、明黄褐色土・炭少量、鉄滓微量

SK187



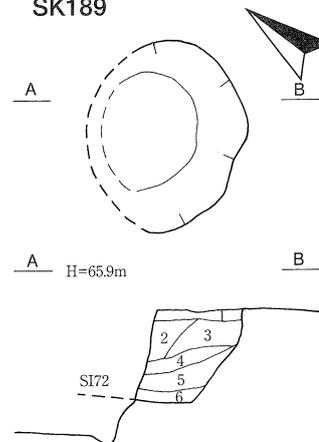
SK186



SK186

1. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無、VI層含
2. 10YR6/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性無、炭微
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
4. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無
5. 10YR4/6 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無

SK189



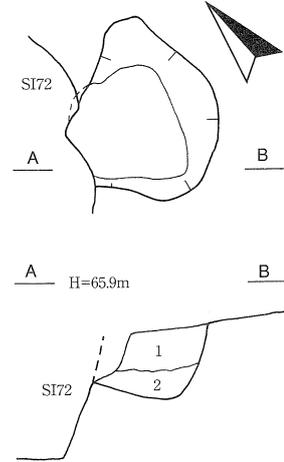
SK189

1. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり極有、粘性無、暗褐ブロック多、マサ土・炭含
2. 10YR4/4 (褐) しまり極有、粘性無、褐色・黄褐色ブロック・炭少量
3. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性少し有、黒褐色土・マサ土・炭含、焼土微量
4. 10YR3/3 (暗褐) しまり少し有、粘性無、にぶい黄褐色土・焼土・炭多く含む
5. 2.5Y8/4 (淡黄) しまり極有、粘性無、炭微量
6. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性少し有、にぶい黄褐色土・炭含

SK187

1. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性少し有、黄褐色土・炭少量
2. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性無、暗褐色土・炭・焼土粒含む
3. 10YR6/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性少し有、暗褐色土混入、炭少量
4. 10YR3/3 (暗褐) しまり少し有、粘性無、にぶい黄褐色土含、焼土・炭多く含む
5. 2.5Y8/4 (淡黄) しまり極有、粘性無、炭微量
6. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性少し有、にぶい黄褐色土・炭含
7. 10YR8/6 (黄橙) しまり極有、粘性無、にぶい黄褐色土・炭微量
8. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、炭微量

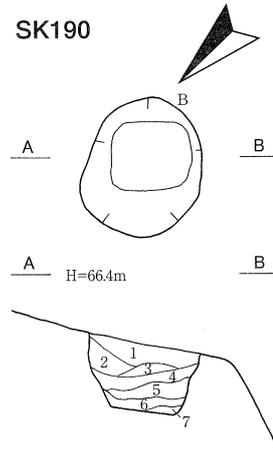
SK188



SK188

1. 7.5YR4/6 (褐) しまり有、粘性少し有、褐色土多く、マサ土・炭・焼土含む
2. 7.5YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有、明褐色・褐色土少量、炭・焼土・マサ土含

SK190



SK190

1. 7.5YR5/6 (明褐) しまり極有、粘性無、炭・マサ土混入
2. 7.5YR5/4 (にぶい褐) しまり極有、粘性無、マサ土含
3. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極有、粘性無、にぶい褐色混入、マサ土含
4. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極有、粘性無、にぶい褐色混入、マサ土含
5. 7.5YR5/4 (にぶい褐) しまり極有、粘性無、炭含む
6. 10YR5/8 (黄褐) しまり有、粘性無、炭含む
7. 7.5YR7/6 (橙) しまり有、粘性無、炭微量

に埋められた後に東壁の上部をS I 131に切られていることから、新旧関係は(新)S I 131→S K 191→(旧)S I 75である。平面形・規模は隅丸長形状を呈し、開口部209×145cm、底部193×119cmを測る。壁はやや外傾気味に立ち上がり、壁高は28～44cmを測る。埋土は黄褐色～にぶい黄橙色土を主体とする人為堆積である。底面は概ね平坦である。

遺物は埋土中から土師器甕片が4点と波板状鉄製品が1点、埋土下位から鉄製品(刀子)が1点、底面から土師器甕が1個体出土した。このうち掲載したのは底面から出土したほぼ完形のR P 1の土師器甕(235)と、埋土最下層から出土したR M 1の刀子(64)と埋土中より出土した棒状鉄製品(65)である。本遺構は底面に完形土器・鉄製品を置いた後に、埋め戻しを行なっていることから、廃棄時ないし周辺遺構の構築時になんらかの意味合いを持たせて遺物を埋めた可能性が考えられる。

S K 192土坑 (第141図、写真図版107)

赤23区北半部、ⅧC-3mグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。S I 76竪穴住居跡を切っていることから、S I 76よりも新しい遺構である。平面形・規模は楕円形状を呈し、開口部径244×211cm、底部径168×165cmを測る。壁は外傾気味に立ち上がり、壁高は43～121cmを測る。埋土は11層に細分され、上位はにぶい黄褐色土、中位は暗褐色土、下位はにぶい黄褐色土を主体とした人為堆積である。底面は概ね平坦である。

遺物は埋土中より土師器甕片が6点、須恵器片が1点と鉄滓が出土している。

S K 195土坑 (第141図、写真図版108)

赤23区北半部、ⅧC-5o・5pグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。平面形・規模は楕円形状を呈し、開口部径197×137cm、底部径171×107cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さ12～15cmを測る。埋土はにぶい黄褐色土を主体とした自然堆積である。底面は概ね平坦で、北西コーナー際よりピットが検出されている。径22cmの円形を呈し、深さ12cmを測る。遺物は出土しなかった。

S K 196土坑 (第141図、写真図版108)

赤23区北半部、ⅧC-3pグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。平面形・規模は楕円形状を呈し、開口部径207×182cm、底部径162×145cmを測る。壁はやや外傾気味に立ち上がり、壁高は4～61cmを測る。埋土は4層に細分され、上位は黄褐色土、中位はにぶい黄褐色土、下位は黄色土を主体とした自然堆積である。底面は東半部は概ね平坦で、西半部は緩やかな斜面状を呈す。

遺物は埋土中より土師器甕片が8点出土している。

S K 203土坑 (第142図、遺物図版22、写真図版108・224)

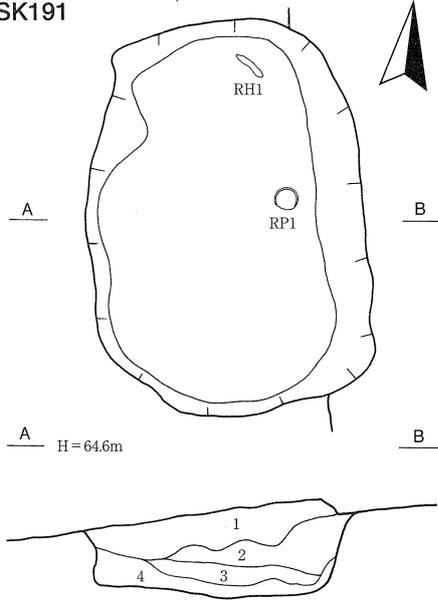
赤23区北半部、ⅧC-4mグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。S I 76竪穴住居跡と重複関係にあり、本遺構がS I 76竪穴住居跡に切られていることから、S I 76よりも古い遺構である。推定される平面形は楕円形状を呈し、残存部分の規模は開口部径96×59cm、底部径57×33cmを測る。断面形は碗状を呈し、深さは21cmを測る。埋土は2層に細分され、上位はにぶい黄色土、下位は灰黄褐色土を主体とした自然堆積である。底面は概ね平坦である。

遺物は底面より土師器甕片が3点、羽口が1点出土している。このうち掲載した遺物は底面より出土したR P 1の土師器甕(236)である。

S K 210土坑 (第142図)

赤24A区南半部、ⅧC-2jグリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出された。平面形・規模は楕円形状を呈し、開口部径172×153cm、底部径123×114cmを測る。断面形は深鉢状を呈し、壁高は22～44cmを測る。埋土

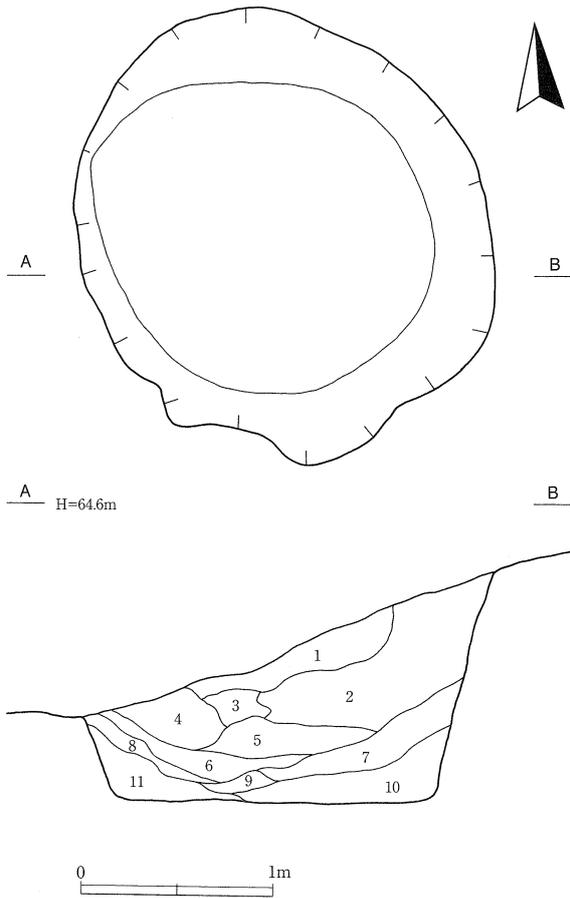
SK191



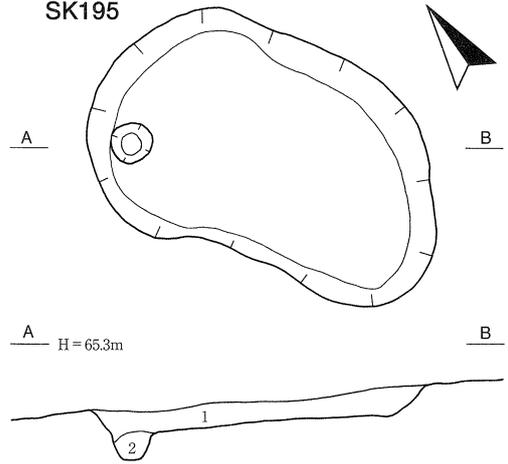
SK191

1. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、黄色土・炭含む
2. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無、炭・焼土ブロック多く含む
3. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性少し有、炭含む
4. 10YR8/6 (黄橙) しまり極有、粘性無

SK192



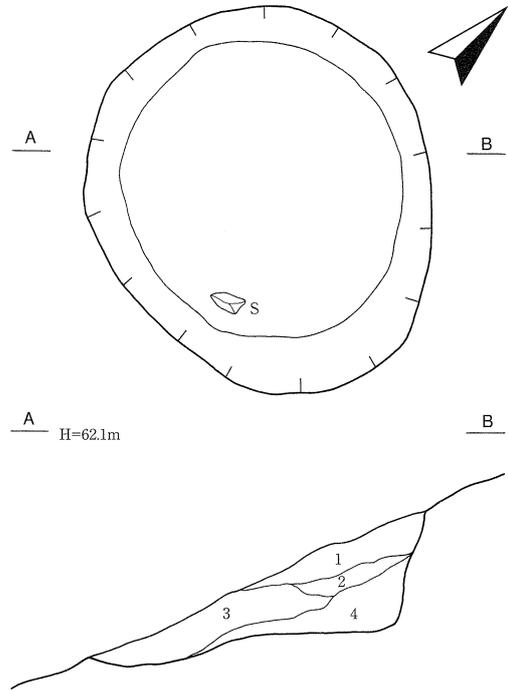
SK195



SK195

1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性有、褐色土・炭含む
2. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無、にぶい黄褐色土・炭・マサ土含

SK196



SK196

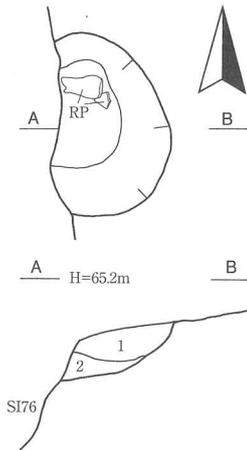
1. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性少し有、炭微量
2. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性少し有
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性少し有、炭微量
4. 2.5YR8/6 (黄) しまりやや有、粘性やや有

SK192

1. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性無、明黄褐色土・炭少量
2. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、マサ土・炭含、焼土少量
3. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無、炭含む
4. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性無、褐色土・炭含む
5. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性少し有、黄色ブロック多、炭含
6. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性無、黄色土多、褐色土含む
7. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性少し有、炭含む
8. 10YR4/6 (褐) しまり極有、粘性少し有、炭微量
9. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極有、粘性有、炭含む
10. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性少し有
11. 10YR4/4 (褐) しまり極有、粘性有、褐色土・マサ土含む

第141図 SK191・192・195・196土坑

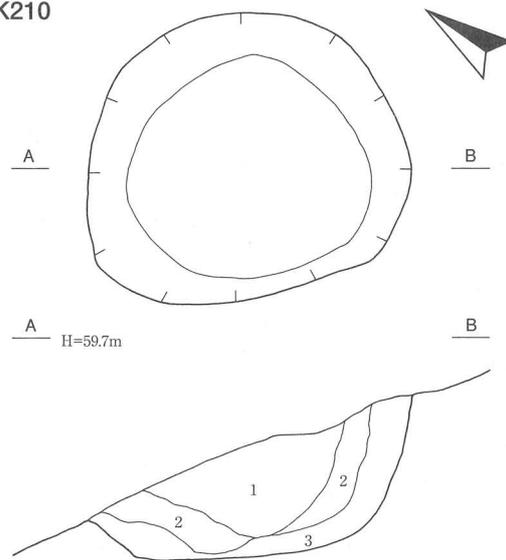
SK203



SK203

1. 25Y6/3 (にぶい黄) しまり極有、粘性無、にぶい黄橙色土・焼土ブロック含む
2. 10YR4/2 (灰黄褐) しまり極有、粘性少し有、にぶい黄橙色土・炭含む

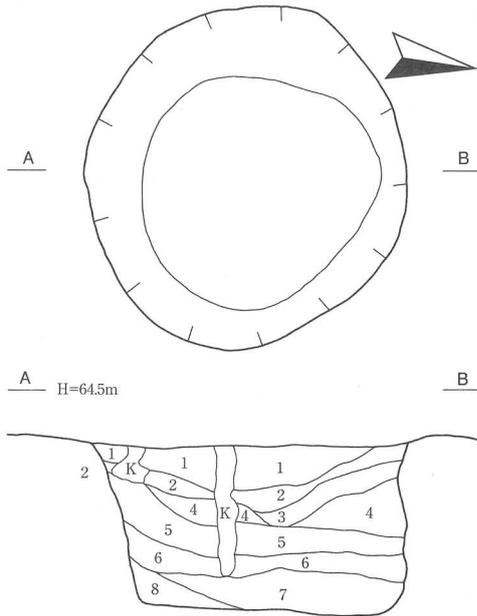
SK210



SK210

1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、にぶい黄橙色土混入、炭少量、焼土微量
2. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性無、にぶい黄褐色土含、炭少量
3. 10YR5/3 (黄褐) しまりやや有、粘性無

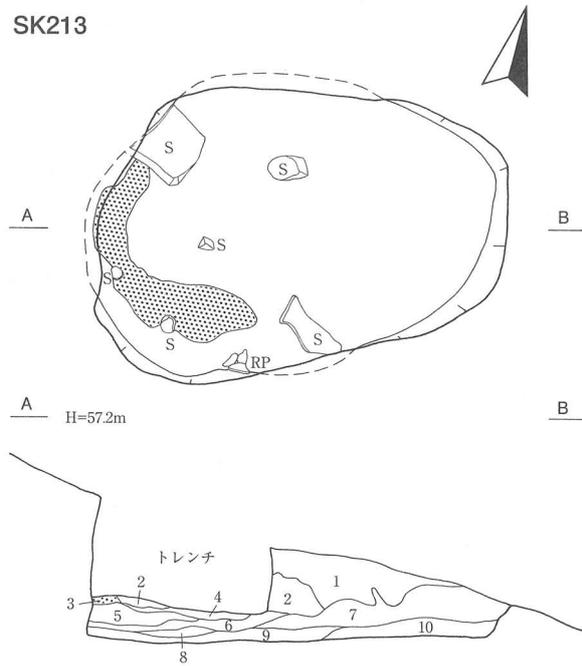
SK211



SK211

1. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、黄橙色土含、炭少量
2. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性有、黄橙色土・炭少量
3. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性少し有、黄橙土・炭・マサ土含
4. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性少し有、黄橙土・炭・マサ土含
5. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性少し有、黄橙土・炭・マサ土含
6. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性少し有、黄橙土・炭・マサ土含
7. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性有、黄橙色土・炭含
8. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性有

SK213



SK213

1. 10YR6/2 (灰黄褐) しまりやや有、粘性無、炭少量
2. 10YR2/1 (黒) しまり少し有、粘性無
3. 5YR6/4 (にぶい橙) 焼土
4. 10YR2/1 (黒) しまり有、粘性無、炭少量、焼土粒微量
5. 10YR3/1 (黒褐) しまり少し有、粘性無、炭微量
6. 25Y6/3 (にぶい黄) しまりやや有、粘性無
7. 10YR5/2 (灰黄褐) しまり有、粘性無、炭・焼土粒微量
8. 7.5YR3/1 (黒褐) しまりやや有、粘性無
9. 10YR5/2 (灰黄褐) しまり有、粘性無、炭・焼土粒微量
10. 10YR4/2 (灰黄褐) しまり有、粘性無



第142図 SK203・210・211・213土坑

は3層に細分され、上位はにぶい黄褐色土、中位は暗褐色土、下位は黄褐色土を主体とした人為堆積で隣接するS I 93Bとの距離が約1mしかないことから同時存在であるとは考えにくく、状況からみてS I 93B構築時の廃土が投げ込んだ可能性があると思われる。底面は概ね平坦である。

遺物は土師器片が2点出土している。

S K 211土坑 (第142図、遺物図版90、写真図版108・279)

赤23区北半部、ⅧC-3nグリッドに位置する。S I 75床面精査中ににぶい黄橙色のプランを確認し、精査に入った。新旧関係は(新)S I 75→(旧)S K 211である。平面形・規模は円形状を呈し、開口部径185×169cm、底部径122×119cmを測る。断面形は深鍋状を呈し、深さは89cmを測る。埋土は8層に細分され、にぶい黄色土を主体とした人為堆積である。底面は概ね平坦である。

遺物は埋土中より土師器甕片が3点、石器(砥石・磨石)が2点と鉄滓が出土している。このうち掲載した遺物は埋土中より出土した砥石(96)である。

S K 213土坑 (第142図、遺物図版24、写真図版108・226)

赤24A区北半部東谷頭上、ⅧC-5eグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。本遺構は平成10年に行われた試掘調査のT28トレンチにおいて本遺構の西半分が検出されている。平面形・規模は楕円形状を呈し、開口部径214×155cm、底部径210×154cmを測る。壁は東壁は外傾し、それ以外の壁はオーバーハングないし鋭角的に立ち上がる。壁高は17~74cmを測る。埋土は10層に細分され、上位はにぶい黄色土・黒色土、中・下位は灰黄褐色土主体の人為堆積で埋土中位には焼土と礫が投げ込まれている。底面は概ね平坦である。

遺物は土師器片が小袋1/2袋分、羽口片が2点と鉄滓が出土している。このうち掲載した遺物は埋土中より出土した土師器甕2点(266・267)である。

S K 215土坑 (第143図、写真図版108)

赤24A区南半部、ⅧC-4jグリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出された。S D 23溝跡と重複関係にあり、本遺構がS D 23溝跡に切られていることから、S D 23よりも古い遺構である。推定される平面形は楕円形状を呈し、残存部分の規模は開口部径115×101cm、底部径88×76cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは11cmを測る。埋土は2層に細分され、上位は黒色土、下位は暗褐色土を主体とした自然堆積である。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S K 223土坑 (第143図、遺物図版92・122、写真図版108・280・303)

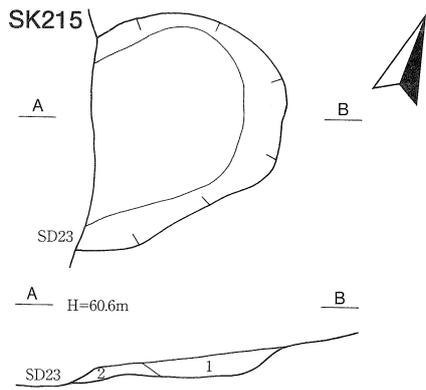
赤24B区北半部、ⅧC-3sグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。S B 08とP 37と重複関係にあり、同遺構に切られている。平面形・規模は円形を呈し、開口部径155×153cm、底部径150×149cmを測る。壁は鋭角的に立ち上がる。壁高は97~121cmを測る。埋土は13層に細分され、上位は黒褐色土、中位はにぶい黄褐色土、下位は黒色土を主体とした人為堆積である。底面は概ね平坦である。

遺物は土師器片が3点、石製品が3点(砥石2点、磨石1点)、鉄製品が1点出土している。このうち掲載した遺物は埋土中より出土した磨石(109)、砥石(110)、錫杖状鉄製品(87)である。

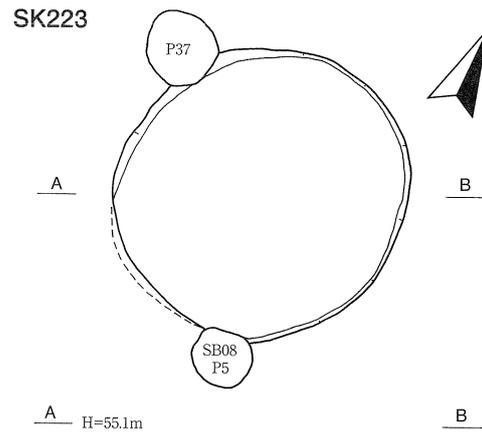
S K 224土坑 (第143図、遺物図版25・122、写真図版109・226・303)

赤24B区北半部、ⅧC-3rグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。平面形・規模は円形を呈し、開口部径198×180cm、底部径150×138cmを測る。壁は下半部は鋭角ないしオーバーハング気味に、上半部は外傾して立ち上がる。壁高は90~112cmを測る。埋土は13層に細分され、上位は黒色土、中位はにぶい黄褐色土、下位は黒色土系を主体とした自然堆積である。底面は概ね平坦である。

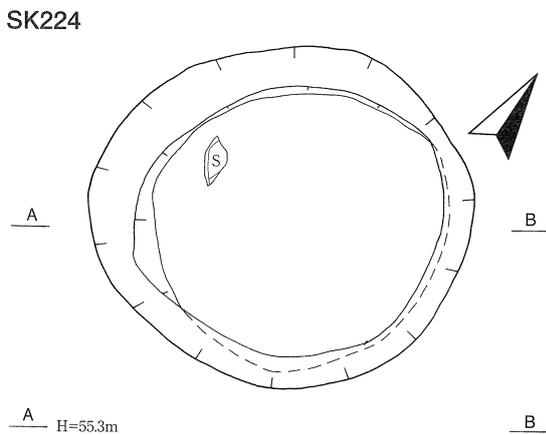
遺物は土師器片が7点、羽口片が3点、鉄製品が3点(棒状2点・錫杖状?1点)と鉄滓が出土し、掲載



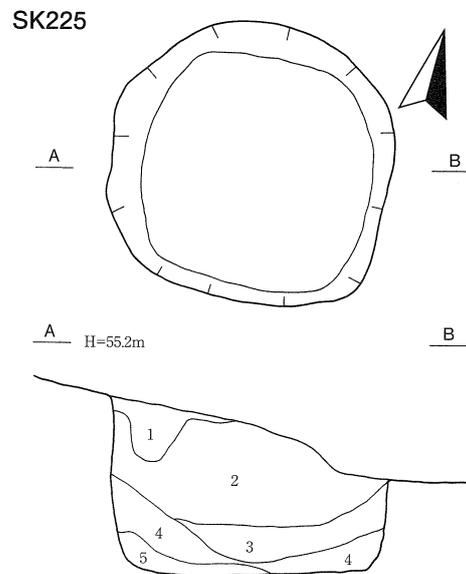
- SK215
- 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有、黄褐色土混入
 - 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有、黄褐色土・炭含む



- SK223
- 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無、炭少量
 - 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、マサ土混入
 - 10YR4/6 (褐) しまり極有、粘性少し有、炭含む
 - 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、黄褐色土・炭含む
 - 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、黄褐色ブロック・炭含む
 - 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、明黄褐色土・炭含む
 - 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、マサ土混入
 - 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、黄褐色土・炭含む
 - 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無、炭少量
 - 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無
 - 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、マサ土混入
 - 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、黄褐色土・炭含む
 - 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無、黄褐色ブロック・炭含む



- SK224
- 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性少し有、にぶい黄色土・炭含む
 - 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまりやや有、粘性無
 - 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭・マサ土混入、黄褐色土含む
 - 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
 - 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭・マサ土含む
 - 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、マサ土混入、炭含む
 - 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、炭・マサ土含む
 - 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、マサ土混入、炭少量
 - 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、マサ土混入、炭少量
 - 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性無、炭含む
 - 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、炭・マサ土含む
 - 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、炭・マサ土含む
 - 10YR2/1 (黒) しまりやや有、粘性少し有、炭・焼土粒含む



- SK225
- 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭少量
 - 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、炭・焼土粒含む
 - 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、炭・焼土粒多量
 - 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
 - 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、炭・焼土粒含む

0 1m

第143図 SK215・223~225土坑

した遺物は埋土中出土の棒状鉄製品(88・90)と錫杖状鉄製品?(89)と土師器甕の底部破片(279)である。

S K 225土坑 (第143図、遺物図版92、写真図版109・280)

赤24B区北半部、ⅧB-2qグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。S K 226・227と重複関係にあり、本遺構がS K 226・227を切っている。平面形・規模は円形を呈し、開口部径149×148cm、底部径120×119cmを測る。壁は鋭角的に立ち上がる。壁高は50~92cmを測る。埋土はにぶい黄褐色土を主体とした自然堆積を呈し5層に細分された。底面は概ね平坦である。

遺物は土師器片4点、磨石2点が出土し、掲載した遺物は埋土中出土の磨石(111)である。

S K 226土坑 (第144図)

赤24B区北半部、ⅧB-3qグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。S K 225・227と重複関係にあり、S K 225・227に切られている。平面形・規模は西半分をS K 225・227に切られているためはっきりしないが、残存部分から開口部径約272cm、底部径約260cmを測ることから、一辺約2.7m前後の円形を呈するものと思われる。壁は外傾して立ち上がる。壁高は35~47cmを測る。埋土は淡黄色系土を主体とした人為堆積を呈し3層に細分された。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S K 227土坑 (第144図、遺物図版92、写真図版109・280)

赤24B区北半部、ⅧB-3qグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。S K 225・226・228と重複し、S K 226・228を切り、S K 225に切られている。平面形・規模は方形を呈し、開口部199×170cm、底部165×154cmを測る。壁は外傾して立ち上がる。壁高は36~51cmを測る。埋土は5層に細分され、上位は淡黄色土、中位は暗褐色土、下位は淡黄色土を主体とした人為堆積である。底面は概ね平坦である。

遺物は土師器片と埋土より砥石(112)が出土した。

S K 228土坑 (第144図、写真図版109)

赤24B区北半部、ⅧB-3pグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。S K 227と重複関係にあり、同遺構に切られている。平面形・規模は円形を呈し、開口部径136×134cm、底部径131×128cmを測る。壁は外傾して立ち上がり、壁高は西側で16cmを測り、東側に向かうにつれて低くなっていく。埋土は2層に細分され、にぶい黄褐色土を主体とした自然堆積である。底面は概ね平坦で、壁面際に幅10~17cm、深さ8~10cmの周溝が検出された。遺物は出土しなかった。

S K 229土坑 (第144図、遺物図版25、写真図版109・226)

赤24B区北半部、ⅧB-3pグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。平面形・規模は楕円形状を呈し、開口部径86×64cm、底部径78×46cmを測る。壁は外傾して立ち上がる。壁高は14~21cmを測る。埋土はにぶい黄色土の単層で、自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。

遺物は掲載した土師器甕(280)が出土した。

S K 230土坑 (第144図、遺物図版92、写真図版109・280)

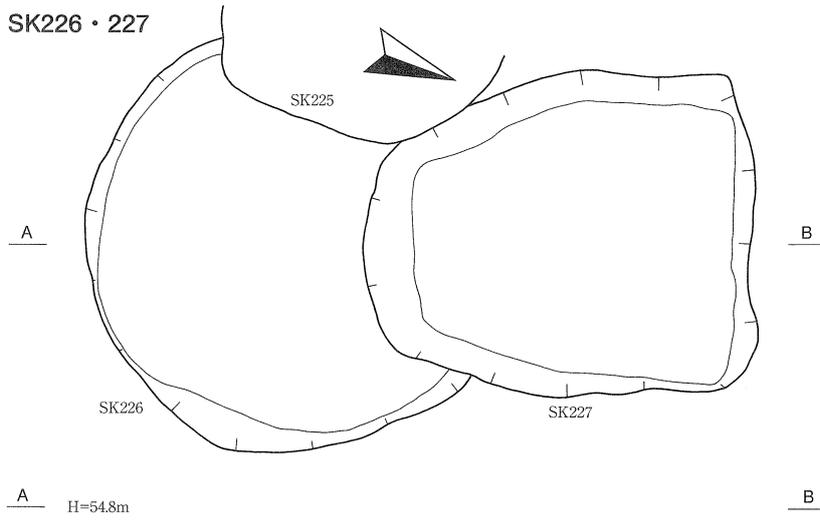
赤24B区北半部、ⅧB-2pグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。S K 231・P15と重複関係にあり、P15に切れ、S K 231を切っている。平面形・規模は方形を呈し、開口部177×176cm、底部163×150cmを測る。壁は鋭角的に立ち上がる。壁高は57~59cmを測る。埋土は5層に細分され、にぶい黄橙色を主体とした自然堆積である。底面は概ね平坦である。

遺物は土師器片が2点、砥石が1点出土し、掲載した遺物は埋土出土の砥石(113)である。

S K 231土坑 (第144図、写真図版109)

赤24B区北半部、ⅧB-2pグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。S K 231と重複関係にあり、同遺

SK226・227



A H=54.8m

B

SK227

1. 2.5Y8/4 (淡黄) しまり有、粘性無
2. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭・焼土粒含む
3. 10YR7/6 (明黄褐) しまり有、粘性無、にぶい黄褐色土含む
4. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無、炭・焼土粒混入
5. 2.5Y8/4 (淡黄) しまり有、粘性無

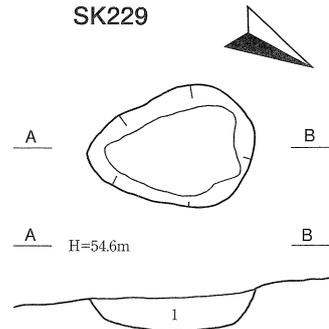
SK226

6. 2.5Y8/4 (淡黄) しまりやや有、粘性無
7. 10YR4/2 (灰黄褐) しまり有、粘性無、炭・焼土粒少量
8. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり極有、粘性無、炭微量

SK230

1. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、マサ土混入、炭含む
2. 2.5Y8/3 (淡黄) しまりやや有、粘性無、にぶい黄橙色土混入
3. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、炭少量
4. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、炭少量
5. 2.5Y8/3 (淡黄) しまりやや有、粘性無、にぶい黄橙色土混入

SK229



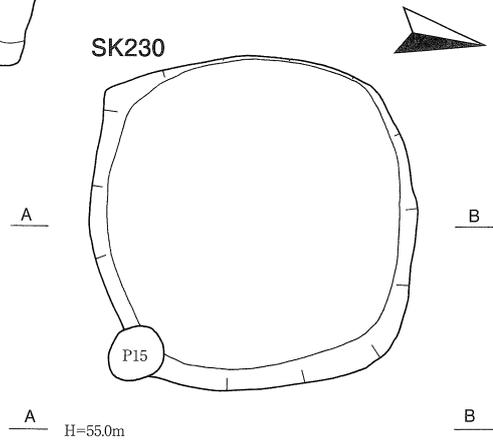
SK229

1. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまりやや有、粘性無、マサ土・炭含む

A H=54.6m

B

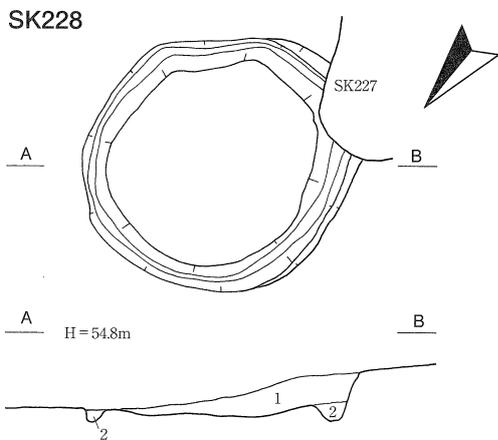
SK230



A H=55.0m

B

SK228



A H=54.8m

B

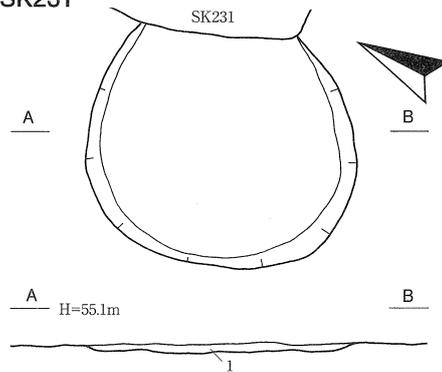
SK228

1. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性無、炭少量
2. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭含む

SK231

1. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭有

SK231



A H=55.1m

B



第144図 SK226~231土坑

構に切られているため、西壁の一部を消失しているが、平面形は円形を呈するものと思われ、残存する規模は開口部径141×121cm、底部径130×116cmを測る。壁は外傾して立ち上がる。壁高は2～5cmを測る。埋土はにぶい黄褐色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S K 232土坑 (第145図、遺物図版25、写真図版110・226)

赤24B区北半部、ⅧB-1o・1pグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。平面形・規模は円形を呈し、開口部径155×152cm、底部径133×128cmを測る。壁は鋭角的に立ち上がる。壁高は50～63cmを測る。埋土は2層に細分され、にぶい黄橙色を主体とした自然堆積である。底面は概ね平坦で、底面中央に径73×63cm、深さ15cmのピットが検出されている。

遺物は土師器片2点、羽口片1点と鉄滓が出土し、掲載した遺物は埋土出土の土師器甕(281)である。

S K 234土坑 (第145図、写真図版110)

赤24B区北半部、ⅧB-1pグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。平面形・規模は楕円形を呈し、開口部径130×120cm、底部径106×93cmを測る。壁は外傾して立ち上がる。壁高は26～39cmを測る。埋土は3層に細分され、上位は黒色土、下位はにぶい黄褐色土を主体とした自然堆積である。底面は概ね平坦である。遺物は土師器片が7点出土している。

S K 235土坑 (第145図、写真図版110)

赤24B区北半部、ⅧB-3pグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出した。平面形・規模は円形を呈し、開口部径198×180cm、底部径178×167cmを測る。壁は鋭角的に立ち上がる。壁高は西側で98cm、東側で2cmを測り、東に行くにつれて低くなる。埋土は9層に細分され、上位はにぶい黄褐色土、中位は暗褐色土、下位はにぶい黄褐色土主体の自然堆積である。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S K 239土坑 (第146図、遺物図版25、写真図版110・226・326)

赤24B区西斜面、ⅧB-1sグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。S I 135・S X I 44Bと重複関係にあり、これらの遺構を切っている。よって新旧関係は(新)S K 239→S I 135→(旧)S X I 44Bである。平面形・規模は隅丸形状を呈し、開口部157×143cm、底部141×130cmを測る。断面形は深鍋状を呈し、深さ57～61cmを測る。埋土は自然堆積を呈し9層に細分されたが、3層は最大厚9cm、範囲約119×71cmの貝層が形成されていた。貝層はイガイを主体としており、廃棄単位として7層を識別した。

遺物は土師器片が小袋1/2袋分と鉄滓が出土している。掲載した遺物は埋土中より出土した土師器甕(282)である。なお貝類の詳細は第二分冊を参照して頂きたい。

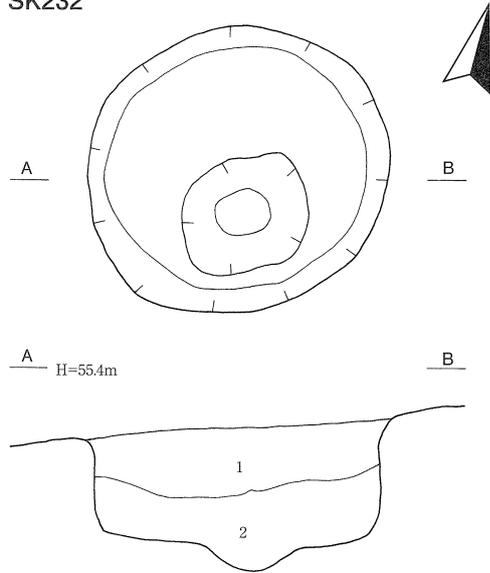
S K 240土坑 (第145図、写真図版111)

赤24B区北半部、ⅧB-20qグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。西側斜面の崩落によって西壁の大半を消失しているが、平面形・規模は楕円形を呈し、開口部径183×155cm、底部径123×122cmを測る。壁は外傾して立ち上がる。壁高は東壁で61cmを測り、北・南壁は西に向かうにつれて低くなっていき、西壁は斜面の崩落によって立ち上がり方が微妙に残るのみである。埋土は3層に細分され、にぶい黄橙色を主体とした自然堆積である。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S K 242土坑 (第147図、写真図版111)

赤24B区北半部、ⅧB-2nグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。平面形・規模は不整な略円形状を呈し、開口部径207×185cm、底部径203×186cmを測る。壁は鋭角的に立ち上がる。壁高は38～95cmを測る。埋土は8層に細分され、上位はにぶい黄褐色土、下位は黒褐色土系を主体とした自然堆積である。底面は概ね平坦である。遺物は土師器片が3点出土している。

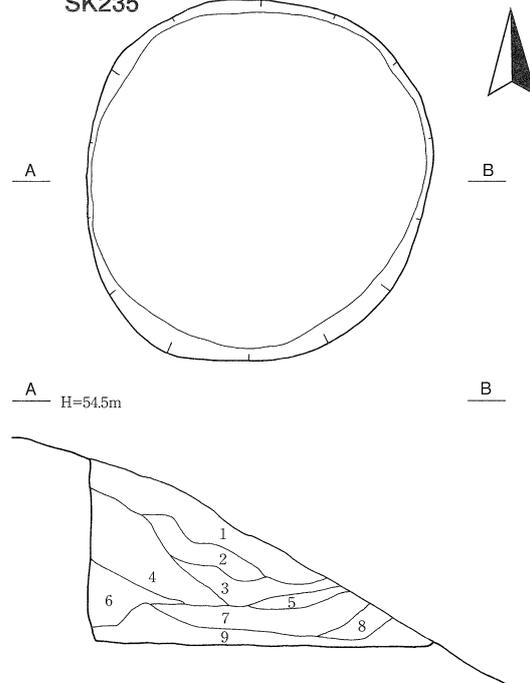
SK232



SK232

1. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、炭少量
2. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、黄褐色ブロック含む

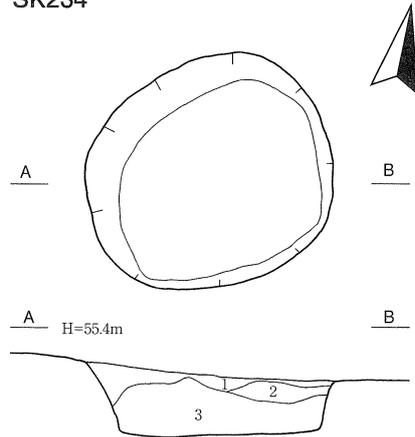
SK235



SK235

1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、浅黄色土・炭含む
2. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無、炭・焼土粒含む
3. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性無、浅黄色ブロック、炭・焼土粒含む
4. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、浅黄色土・炭含む
5. 10YR4/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
6. 2.5Y5/3 (黄褐) しまり極有、粘性無、明黄褐色土・炭含む
7. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
8. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、浅黄色土・炭含む
9. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、浅黄色土・炭含む

SK234



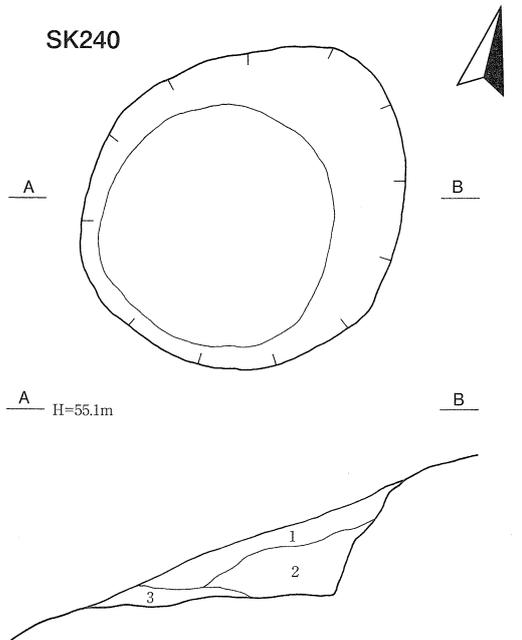
SK234

1. 10YR2/1 (黒) しまり有、粘性無、炭少量
2. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、マサ土混入
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭含む

SK240

1. 10YR7/2 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、炭含む
2. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
3. 10YR8/3 (浅黄橙) しまり有、粘性無

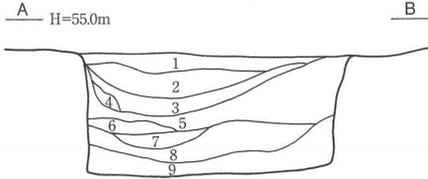
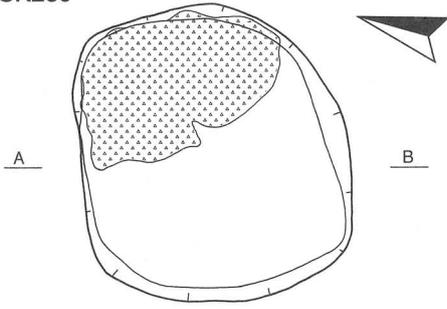
SK240



0 1m

第145図 SK232・234・235・240土坑

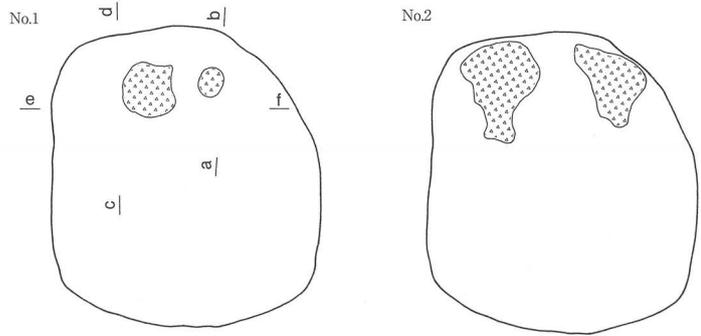
SK239



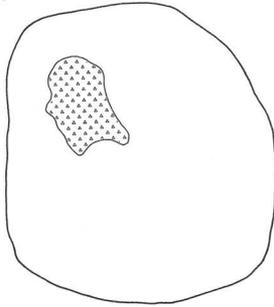
SK239

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭含む
2. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
3. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性無、炭含む、貝混入 (貝層)
4. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、マサ土・炭含む
5. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、マサ土・炭含む
6. 10YR3/2 (黒褐) しまり有、粘性無、マサ土・炭含む
7. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性無、炭と焼土粒含む
8. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
9. 10YR5/2 (灰黄褐) しまりやや有、粘性無、マサ土ブロック含む

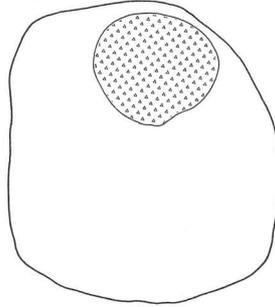
SK239 貝層



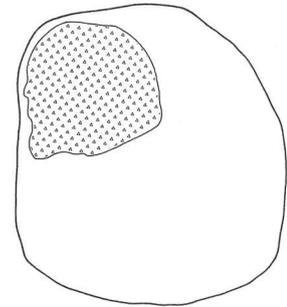
No.3



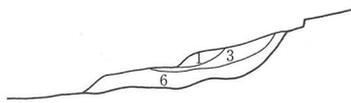
No.4



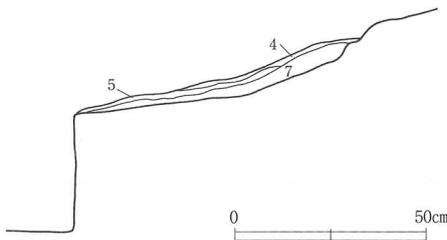
No.5



a H=54.9m b



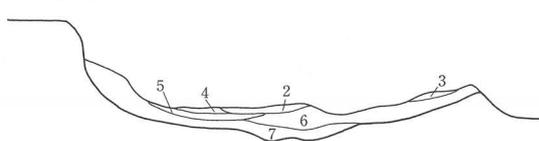
c H=54.9m d



SK239 貝層

1. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、貝多く含む (混貝土層)
2. 10YR4/2 (灰黄褐) しまりやや有、粘性無 (混貝土層)
3. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性無 (純貝層)
4. 10YR3/2 (黒褐) しまり有、粘性無、貝多く含む (純貝層)
5. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、貝多く含む (混貝土層)
6. 10YR4/3 (灰黄褐) しまりやや有、粘性無 (混貝土層)
7. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無 (純貝層)

e H=54.9m f



第146図 SK239土坑

S K 244土坑 (第147図、遺物図版25・92、写真図版226・280)

赤24B区北半部、ⅧB-2oグリッドに位置する。本遺構はS X I 75床面精査時にぶい黄褐色土のプランを確認し精査を開始した。当初はS X I 75の床面施設の可能性も考えたが、本遺構が人為堆積を呈し、S X I 75は建て替えが行われていないことから、S X I 75構築時に埋め戻されたものと判断した。よって新旧関係は(新)S X I 75→(旧)S K 244である。平面形・規模は円形を呈し、開口部径117×105cm、底部径107×93cmを測る。壁は鋭角的に立ち上がる。壁高は50～61cmを測る。埋土はにぶい黄褐色土を主体とした人為堆積を呈し、5層に細分した。底面は概ね平坦である。

遺物は土師器片が9点、石製品1点と鉄滓が出土した。このうち掲載した遺物は埋土中より出土した土師器甕(283)と川原石(114)である。

S K 276土坑 (第147図、写真図版111)

赤23区西側斜面下、ⅧC-11グリッドに位置する。本遺構はS X I 69精査中に北壁付近からにぶい黄褐色系のプランを確認し精査に入った。よって新旧関係は(新)S X I 69→(旧)S K 276である。平面形・規模は円形を呈し、開口部径224×210cm、底部径140×130cmを測る。壁面は下位はやや外傾して、上位は外傾して立ち上がる。深さは102～128cmを測る。埋土は9層に細分され、にぶい黄色土系を主体とした人為堆積である。底面は概ね平坦で、中央に径55cm、深さ20cmの円径のピットを検出している。

遺物は土師器片が8点出土している。

S K 277土坑 (第147図、写真図版111)

赤23区北半部、ⅧC-5pグリッドに位置する。本遺構はS I 130床面精査中にプランを確認し精査に入った。新旧関係は(新)S I 130→(旧)S K 277である。平面形・規模は円形を呈し、開口部径133×124cm、底部径116×111cmを測る。断面形は深鍋状を呈し、深さ89cmを測る。埋土はにぶい黄色土を主体とした人為堆積で9層に細分された。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S K 278土坑 (第148図、遺物図版22・120、写真図版111・224・302・316)

赤23区北半部、ⅧC-5pグリッドに位置する。本遺構はS I 130床面精査中に暗褐色のプランを確認し精査に入った。新旧関係は(新)S I 130→(旧)S K 278である。平面形・規模は楕円形状を呈し、開口部径164×131cm、底部径128×119cmを測る。壁面は下半部が内湾気味に立ち上がり、上半部は外傾している。深さは約121cmを測る。埋土は7層に細分され、暗褐色とにぶい黄色土が互層に堆積した人為堆積である。底面は概ね平坦である。

遺物は埋土中より土師器片が1点、鉄製品が1点出土している。このうち掲載した遺物は埋土中位より出土した土師器甕(237)と棒状鉄製品(66)である。

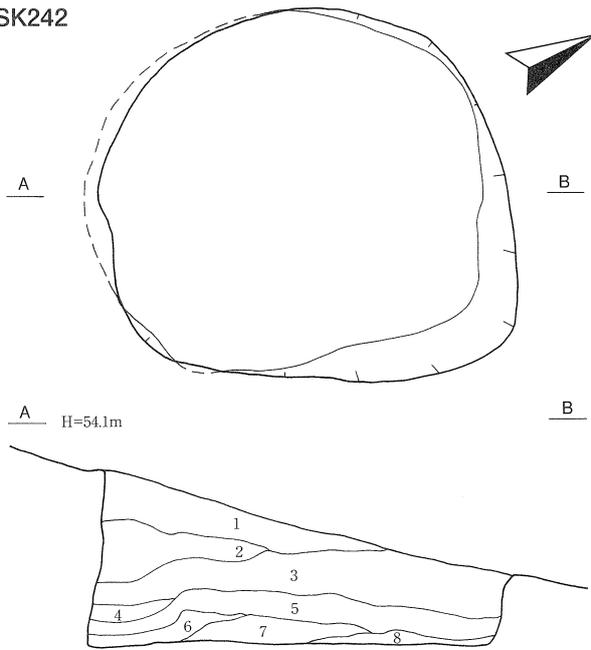
S K 279土坑 (第148図、写真図版111)

赤23区北半部、ⅧC-4oグリッドに位置する。本遺構はS K I 33B床面精査中にぶい黄橙色のプランを確認し精査に入った。新旧関係は(新)S K I 33B→(旧)S K 279である。平面形・規模は楕円形状を呈し、開口部径159×132cm、底部径111×79cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは29cmを測る。埋土はにぶい黄色土を主体とした人為堆積である。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S K 280土坑 (第148図、写真図版111)

赤23区西側斜面下、ⅧC-2mグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。本遺構はS K I 31A東壁面精査にぶい黄橙色のプランを確認し精査に入った。検出当初は底部付近に焼土を確認していたことから掘り込みのある炉跡として精査を行ったが、現地性の焼土が遺構内から確認されなかったことから土坑であると

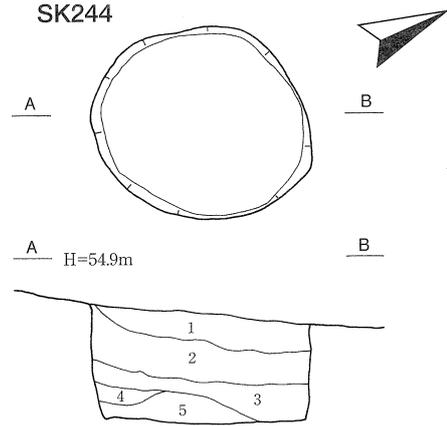
SK242



SK242

1. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性少し有、炭含む
2. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、黄褐色土混入
3. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
4. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、黄褐色土混入
5. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性少し有、浅黄色土混入
6. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、黄褐色土混入
7. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性少し有、炭少量
8. 10YR1.7/1 (黒) しまり有、粘性少し有、炭少量

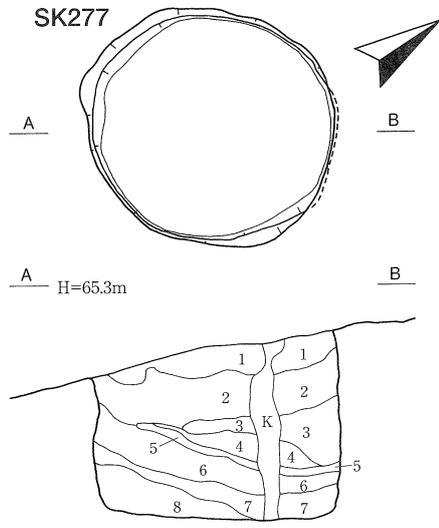
SK244



SK244

1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、炭微量
2. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、炭少量
3. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
4. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、炭少量
5. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無

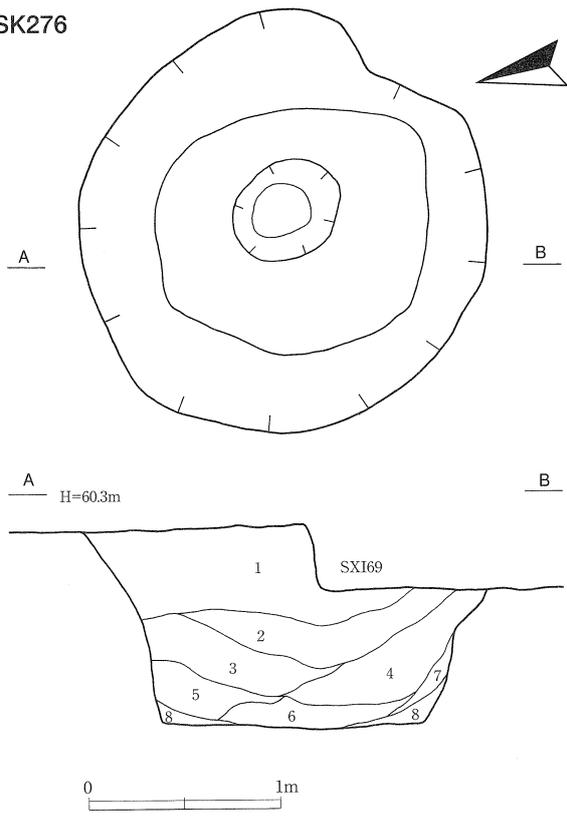
SK277



SK277

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極有、粘性無、明黄褐色土混入、炭微量
2. 10YR3/4 (暗褐) しまり極有、粘性やや有、黄褐色ブロック混、炭微量
3. 10YR4/6 (褐) しまり極有、粘性やや有、黒褐色ブロック混入
4. 10YR5/6 (黄褐) しまり極有、粘性やや有、明黄褐色土混入
5. 10YR4/4 (褐) しまり極有、粘性有、明黄褐色土少量、炭微量
6. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極有、粘性やや有、明黄褐色土混入
7. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極有、粘性やや有、明黄褐色土混入
8. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性有、明黄褐色土少量、炭微量

SK276

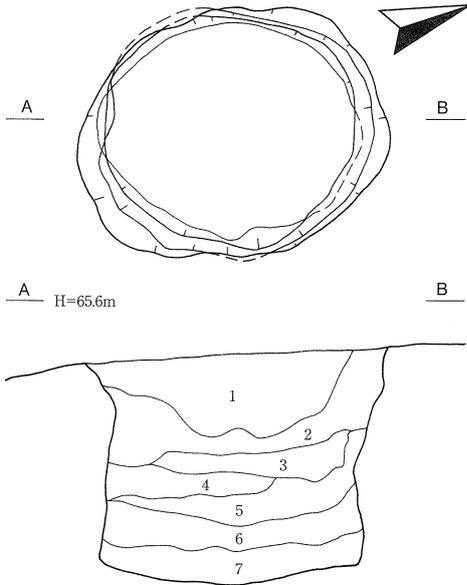


SK276

1. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無、炭微量、焼土極少量
2. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性少し有、にぶい黄褐色土・炭含む
3. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、炭・焼土微量
4. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、φ1~5mmの礫多く含む
5. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性少し有
6. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、にぶい黄褐色土・炭含む
7. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
8. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性無、炭多く含む

第147図 SK242・244・276・277土坑

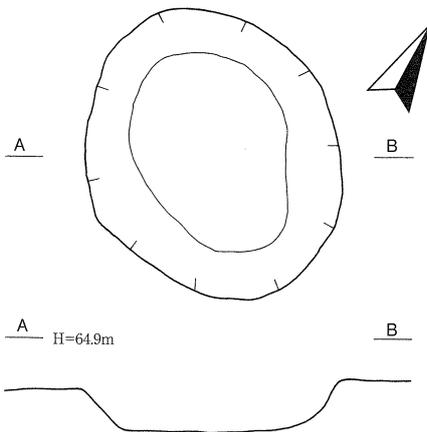
SK278



SK278

1. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性無、黄褐色土混、炭含
2. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり極、粘性無、黄褐色土多、炭少量
3. 10YR3/1 (黒褐) しまり中、粘性小、暗褐色土・炭多
4. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性小、明黄褐色土・炭少量
5. 10YR3/2 (黒褐) しまり中、粘性小、明黄褐ブロック少、炭多
6. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり極、粘性無、明黄褐ブロック・炭少
7. 10YR7/6 (明黄褐) しまり極、粘性小、黄褐色土少、炭含

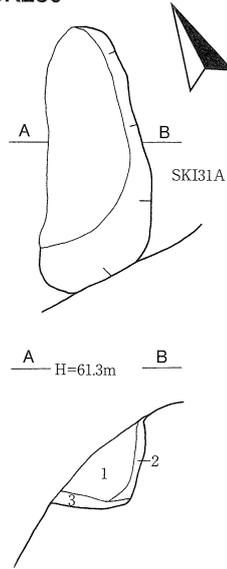
SK279



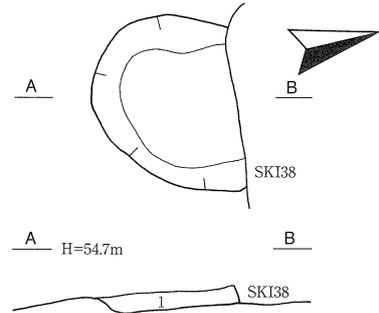
SK282

1. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性無、炭含
2. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、黄褐色土混、炭少量
3. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、にぶい黄褐色土含む
4. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、にぶい黄褐色土含む
5. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、にぶい黄褐色土混入、炭少量
6. 10YR8/4 (浅黄橙) しまり有、粘性無、マサ土混入
7. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、炭少量
8. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
9. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、炭少量
10. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、黄褐色土混入、炭少量

SK280



SK283



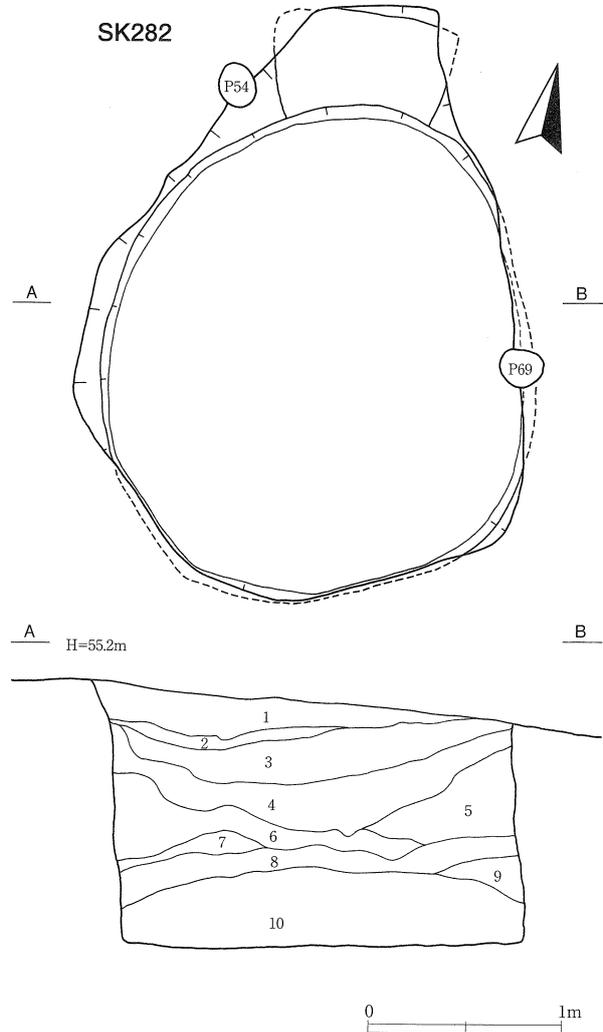
SK283

1. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、炭含む

SK280

1. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり・粘性有、明黄褐色土・マサ土含
2. 2.5Y8/3 (淡黄) しまり有、粘性無
3. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性少し有、炭少量

SK282



第148図 SK278~280・282・283土坑

判断した。新旧関係は(新)SK I 31A→(旧)SK 280である。西半部を消失しているが、推定される平面形は長楕円形状を呈し、残存部分の規模は推定で開口部径124×61cm、底部径95×48cmを測る。断面形は鍋状を呈し、深さ約50cmを測る。埋土はにぶい黄橙色土を主体とした自然堆積である。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

SK 282土坑 (第148図、写真図版112)

赤24B区北半部、ⅧB-3s・3tグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出した。当初小型の工房跡と考え精査を開始したが、床面から炉跡が検出されなかったことから大型の土坑と判断した。また、SN54とSB08に切られていることから、新旧関係は(新)SN54・SB08→(旧)SK 282である。平面形・規模は楕円形を呈し、開口部径264×239cm、底部径253×217cmを測り、北壁に62×91cmの方形の張り出しを持つ。壁は鋭角的に立ち上がる。壁高は118～141cmを測る。埋土は10層に細分され、上位は黒褐色、中・下位はにぶい黄褐色土を主体とした自然堆積である。底面は概ね平坦で、張り出し部との比高差は15cmを測る。また、張り出し部が別遺構である可能性も考え精査を進めたが、断面観察から壁面の立ち上がりは認められなかったため、一連の遺構であると思われる。遺物は土師器片が1点と鉄滓が出土した。

SK 283土坑 (第148図、写真図版112)

赤24B区北半部、ⅧB-20oグリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出された。SK I 38に南半分を切られているため全容は不明だが、平面形は円形を呈するものと思われ、規模は残存部分で開口部径90×75cm、底部径60×59cmを測る。壁は外傾して立ち上がる。壁高は9～11cmを測る。埋土はにぶい黄褐色土の単層で、自然堆積を呈する。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。(島原)

SN 15炉跡 (第149図、遺物図版68、写真図版254)

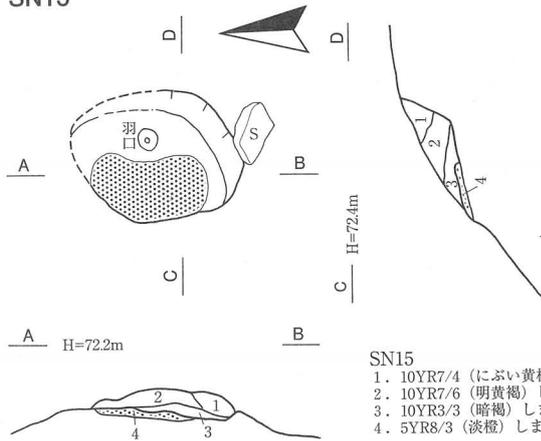
F区赤23区ほぼ中央の西斜面、ⅧD-9fグリッドに位置し、検出面はⅣ層である。西谷側が崩落していることと、隣接するSI 48の煙出し穴部の検出の際周囲を削平してしまい全容は不明となっている。掘り込み部分の平面形は円形基調をなすと思われ、規模は開口部約90×70cm前後、底部約80×60cm前後と推測される。残存する東壁は外傾して立ち上がり、壁高は約25cmを測る。埋土は黄褐色～黒褐色系の3層で自然堆積と思われる。底面は斜面下にやや傾斜し、西側部分に約60×30cm、厚さ4～5cmの焼土が広がる。色調は橙色系で締まりは強くない。炭窯の可能性も考えられたが、以上の観察と炭化物及び炭化物層が認められないことから炉跡と判断した。遺物は底面から羽口(91)が直立した形で出土した。(赤石)

SN 33・35・37炉跡・SN 36焼土遺構 (第149図、写真図版112)

赤23区北半部、ⅧC-4mグリッドに位置する。これら4基の遺構はSI 76の埋土中位を精査中に黒色もしくは淡黄色土プランと焼土の広がりを確認し順次精査に入った。状況から見て同遺構が完全に埋まりきる前の窪地にこれらの炉跡・焼土遺構を構築したものと思われるが、本遺跡の他の炉跡と比較してみると掘り込みが小規模で焼土の形成があまりことから、人為的に掘り込み炉を構築したというよりはSI 76が完全に埋まりきる前の窪地の凹部分を利用して炉にしたか、SI 76が人為堆積を呈することからみて、炉というよりはただ単に熱を持った何かを窪地に廃棄した可能性も考えられるが推測の域を出ない。少なくともSI 76より新しい遺構であることは確かである。

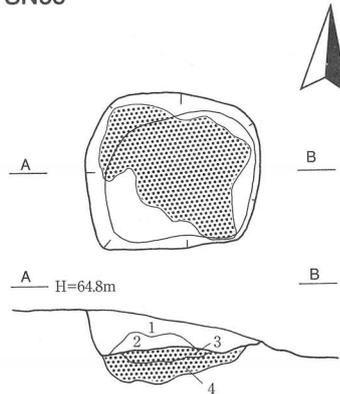
SN 33は上記のような検出状況であったために、南半部を掘りすぎてしまったが、平面形は楕円形状を呈するものと思われ、規模は残存部分で開口部径26×20cm、底部径16×14cmを測る。断面形は半円状を呈し、深さ11cmを測る。埋土は上位は灰黄褐色土、中・下位は黒色土を主体とした人為堆積を呈し、壁面に厚さ5cmの焼土が形成されている。遺物は出土しなかった。

SN15



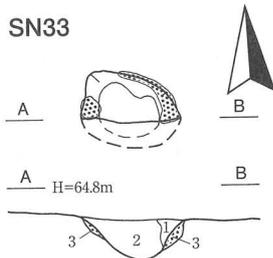
SN15
 1. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無
 2. 10YR7/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性やや有
 3. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性無
 4. 5YR8/3 (淡橙) しまりやや有、粘性無

SN35



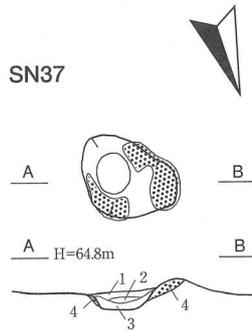
SN35
 1. 2.5Y8/4 (淡黄) しまりやや有、粘性無、炭含む
 2. 10YR1.7/1 (黒) しまり少し有、粘性無
 3. 5YR6/8 (橙) 焼土
 4. 5YR6/4 (にぶい橙) 焼土

SN33



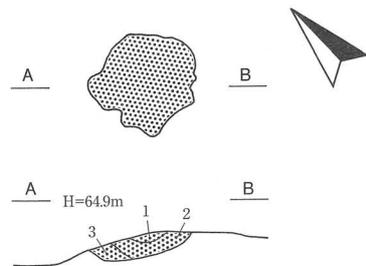
SN33
 1. 10YR5/2 (灰黄褐) しまりやや有、粘性無
 2. 10YR1.7/1 (黒) しまり少し有、粘性無、炭の層
 3. 5YR5/6 (明赤褐) 焼土

SN37



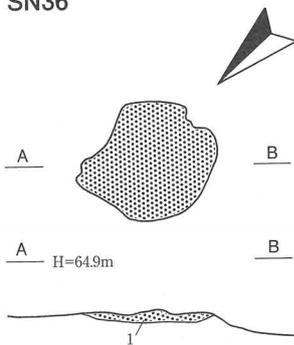
SN37
 1. 2.5Y8/4 (淡黄) しまりやや有、粘性無、炭含む
 2. 10YR7/6 (明黄褐) しまり極有、粘性無
 3. 10YR1.7/1 (黒) しまり少し有、粘性無
 4. 5YR6/4 (にぶい橙) 焼土

SN34



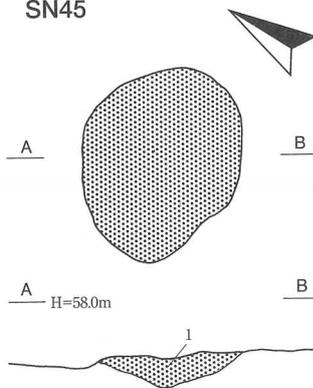
SN34
 1. 5YR3/6 (暗赤褐) 焼土
 2. 5YR5/8 (明赤褐) 焼土
 3. 5YR6/8 (橙) 焼土

SN36



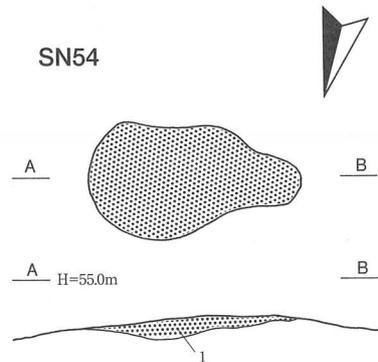
SN36
 1. 5YR6/4 (にぶい橙) 焼土

SN45



SN45
 1. 5YR6/4 (にぶい橙) 焼土

SN54



SN54
 1. 5YR4/6 (赤褐) 焼土



第149図 SN15・33・35・37炉跡・SN34・36・45・54焼土遺構

S N 35は平面形・規模は方形を呈し、開口部50×45cm、底部42×39cmを測る。断面形は鍋状を呈し、深さ12cmを測る。埋土は淡黄色を主体とした人為堆積を呈し、底面を中心に長軸46cm、短軸27cmの不整形状を呈する厚さ9cmのにぶい橙色焼土が形成されている。遺物は出土しなかった。

S N 36は平面形は楕円形を呈し、規模は37×31cmである。厚さは3cmを測り、にぶい橙色の堅く締まった現地性の焼土である。遺物は出土しなかった。

S N 37は平面形・規模は楕円形を呈し、開口部径26×20cm、底部径10×9cmを測る。断面形は鍋状を呈し、深さ5cmを測る。埋土は淡黄色を主体とした人為堆積を呈し、壁面を中心に厚さ3cmのにぶい橙色焼土が形成されている。遺物は出土しなかった。

S N 34焼土遺構 (第149図)

赤23区北半部、ⅧC-4oグリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整形を呈し、長軸28cm、短軸26cm、厚さ6cmを測る。橙色の堅く締まった現地性の焼土である。遺物は出土しなかった。

S N 45焼土遺構 (第149図)

赤24A区北半部、ⅧC-4dグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。S I 115検出時に同遺構の埋土上面で本遺構が検出されたことから、S I 115より新しい。平面形・規模は52×43cmの楕円形状を呈し、厚さ7cmを測る。にぶい橙色の堅く締まった現地性の焼土である。遺物は出土しなかった。

S N 54焼土遺構 (第149図、写真図版316)

赤24B区南半部、ⅧC-3tグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。S K 282検出時に同遺構の埋土上面で本遺構が検出されたことから、S K 282より新しい。平面形は不整形を呈し、長軸56cm、短軸31cm、厚さ6cmを測る。赤褐色の堅く締まった現地性の焼土である。遺物は検出面で鉄滓を出土した。

S N 55炉跡 (第150図、写真図版112・316)

赤24B区南半部、ⅧC-4cグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。S K I 37と重複関係にあり、同遺構を切っている。北東斜面の崩落によって北東壁の一部を消失しているが、平面形は隅丸方形状を呈するものと思われ、規模は残存部分で開口部160×132cm、底部144×92cmを測る。断面形は鍋状を呈し、深さ36cmを測る。埋土は上位は黄褐色土、中位はにぶい黄褐色土、下位は暗褐色土を主体とした自然堆積を呈し、底面中央付近を中心に44×40cmの楕円形状を呈する厚さ4cmの焼土が形成されている。

遺物は土師器片が3点出土している。

S N 56炉跡 (第150図)

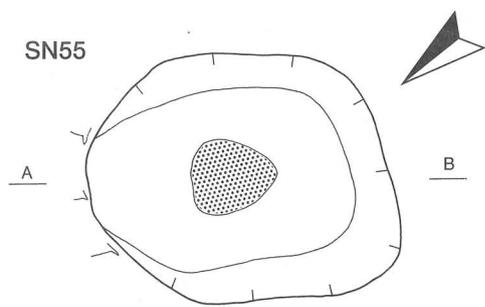
赤24B区南半部、ⅧC-3cグリッドに位置する。前述の通り、本遺構はS X I 34・S W 106と重複関係にあり、これらの遺構を切っている。新旧関係は(新) S N 56→S W 106→(旧) S X I 34である。平面形・規模は楕円形を呈し、開口部径154×122cm、底部径150×104cmを測る。断面形は深鍋状を呈し、深さ42cmを測る。埋土はにぶい黄褐色土を主体とした人為堆積を呈し、底面中央付近を中心に52×48cmの楕円形状を呈する厚さ2cmの焼土が形成されている。遺物は出土しなかった。

S N 57炉跡 (第150図)

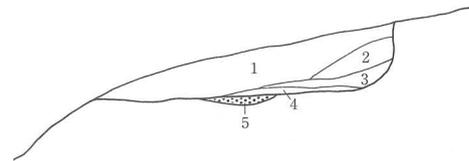
赤24B区南半部、ⅧC-3cグリッドに位置する。前述の通りS X I 34・S W 105と重複関係にあり、同遺構等に切られている。平面形・規模は方形を呈し、開口部径159×128cm、底部径140×93cmを測る。断面形は鍋状を呈し、深さ33cmを測る。埋土は上位は黄褐色土、下位は暗褐色土を主体とした自然堆積を呈し、底面中央を中心に44×40cmの楕円形状を呈する厚さ5cmのにぶい橙色の焼土が形成されている。

遺物は出土しなかった。

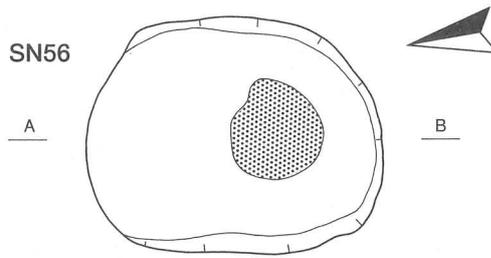
(島原)



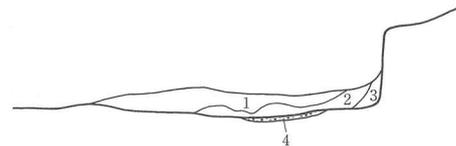
A H=56.1m B



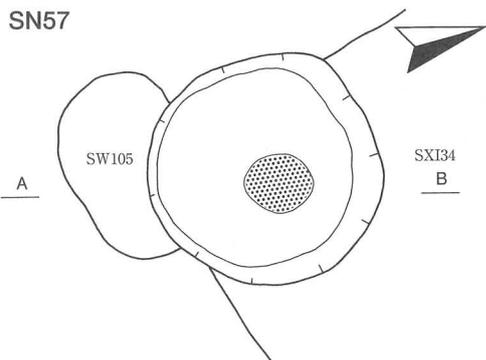
- SN55
1. 2.5Y5/3 (黄褐) しまり有、粘性無、淡黄色ブロック含、炭少量
 2. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性少し有、暗褐色土・炭含む
 3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
 4. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性無、炭多く含む
 5. 5YR7/3 (にぶい橙) 焼土



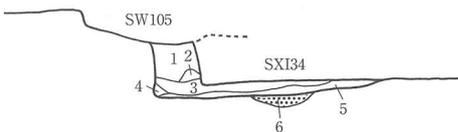
A H=56.3m B



- SN56
1. 2.5Y7/3 (浅黄) しまりやや有、粘性無
 2. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭含む
 3. 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまりやや有、粘性無、炭含む
 4. 5YR7/4 (にぶい橙) 焼土



A H=65.3m B



- SN57
1. 2.5Y7/2 (灰黄) しまりやや有、粘性無、黄橙色ブロック含む
 2. 10YR8/6 (黄橙) しまり有、粘性少し有、
 3. 10YR4/2 (灰黄褐) しまりやや有、粘性無、炭少量
 4. 2.5Y6/2 (灰黄) しまりやや有、粘性無
 5. 10YR2/3 (黒褐) しまり少し有、粘性無、炭多く含む
 6. 5YR7/4 (にぶい橙) 焼土



第150図 SN55・56・57炉跡

S D19溝跡 (第151図、写真図版113)

F区赤23区中央の西側斜面、ⅧD-9fグリッドを中心にⅧD-9e・10e・10fグリッドに跨って位置し、等高線に平行する北-南方向に延びる。検出面はⅥ層上面である。検出された規模は総長約5m、平均幅約80cmを測る。壁は外傾して立ち上がり、深さは斜面上方の東側で約10~30cmを測るが、斜面下方の西側では遺存しない。埋土は北側では明黄褐色土の単層で、中央から南側にかけては褐色土と壁の崩落による黄褐色土の自然堆積である。底面は堅くしまる。以上において溝跡と判断したが、平面形・規模からは炭窯の可能性も考えられる。遺物は出土しなかった。(小林)

S D20溝跡 (第151図、写真図版113)

赤23区北半部、ⅧC-4k・4l・5k・5lグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。尾根東側肩部と平行する形で尾根を縦断し、総長13.4m、幅0.88~1.38mを測る。横断面形は浅い皿形を呈し、深さは4~16cmを測り、北側に向かうにつれて深くなっていく。埋土は上位は黒褐色土、下位は黄褐色系の自然堆積である。底面は概ね平坦で締まっている。遺物は出土しなかった。

S D22溝跡 (第151図、遺物図版24、写真図版113・226)

赤24A区南半部、ⅧC-2~4gグリッドに位置し、検出面はⅤ層上面である。本遺構はS I 94Bと重複関係にあり、同遺構を切る。等高線に直交する形で尾根を寸断し、総長18.9m、幅1.4~1.7mを測る。横断面形は浅い皿形を呈し、深さは17~20cmを測り、尾根上で深く、斜面下に向かうにつれて浅くなっていく。埋土は黒褐色土単層の自然堆積である。底面は概ね平坦で締まっている。

遺物は土師器片が6点、磨石が1点と鉄滓が出土し、掲載した遺物は埋土出土の土師器甕(268)である。

S D23溝跡 (第152図)

赤24A区南半部、ⅧC-5jグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。本遺構はS K 215と重複関係にあり、同遺構を切る。平面形はほぼ直線状を呈し、規模は総長2.54m、幅70cmを測る。横断面形は浅い皿形を呈し、深さ6~8cmを測る。埋土は上位に黒褐色土、下位に褐色土の自然堆積である。底面は概ね平坦で締まっている。遺物は出土しなかった。

S D24溝跡 (第152図)

赤24A区南半部、ⅧC-5jグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。平面形は緩い弧状を呈し、規模は総長5.1m、幅58~70cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、深さ28~45cmを測る。埋土は褐色系土主体の自然堆積を呈する。底面は概ね平坦で締まっている。遺物は土師器片が3点出土した。

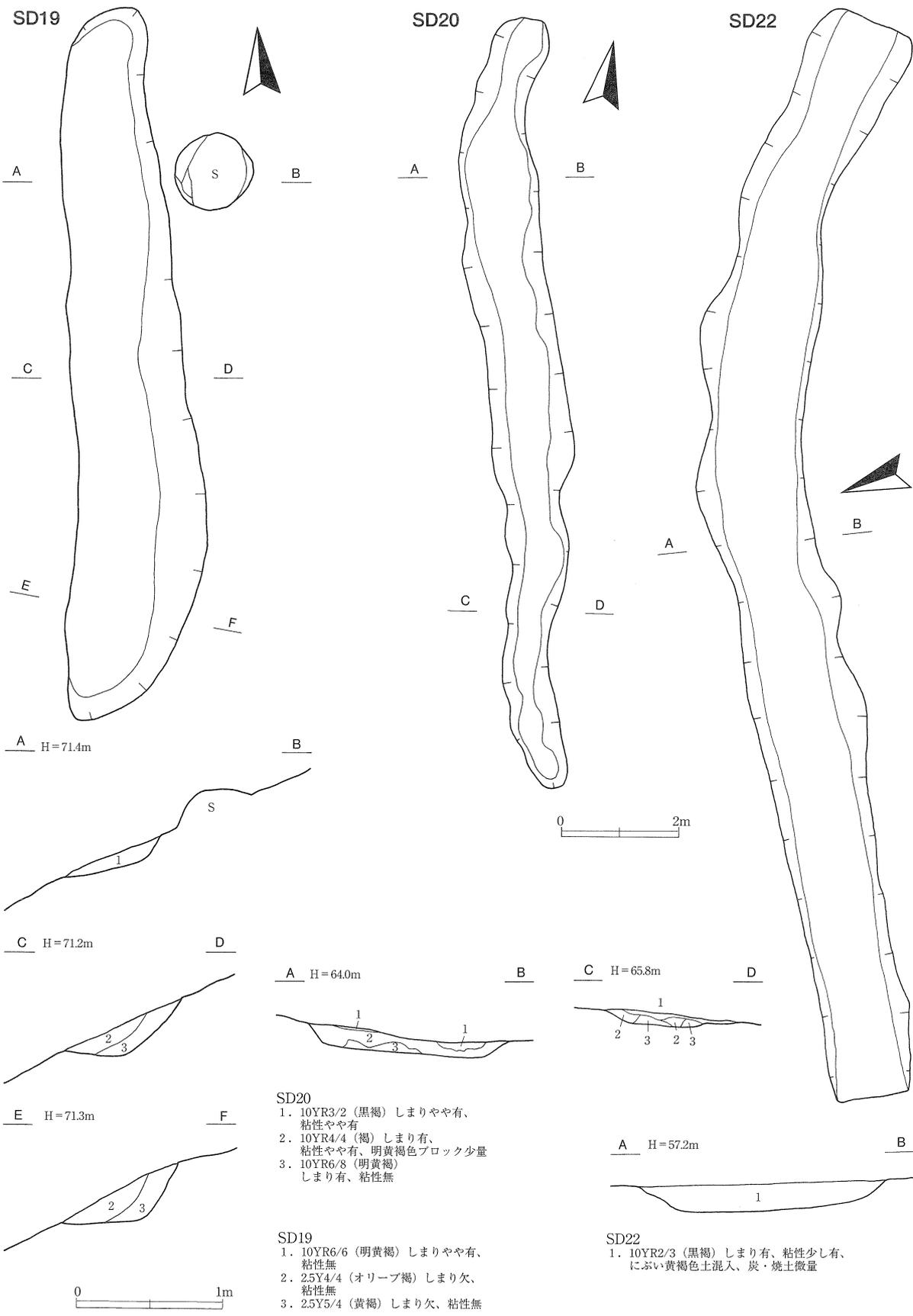
S D25溝跡 (第152図、写真図版113)

赤24B区北半部~赤25B区、ⅧB-3q・rグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。S X I 40と重複関係にあり、同遺構に切られている。東側斜面の崩落によって、残存状況は不良で、本来連続してあったと推測される中央部分が消失してしまっている。等高線と平行する形で尾根東側肩部付近を縦断しており、総長17.4m、幅0.40~1.00mを測る。横断面形は浅い皿形を呈し、深さは最大14cmを測る。埋土は暗褐色土の単層で自然堆積を呈する。底面は概ね平坦で締まっている。遺物は出土しなかった。

また、S D 20・22~25は立地状況・規模等から一連の遺構と考えられ、道路状遺構の可能性が想定される。

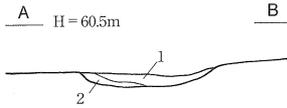
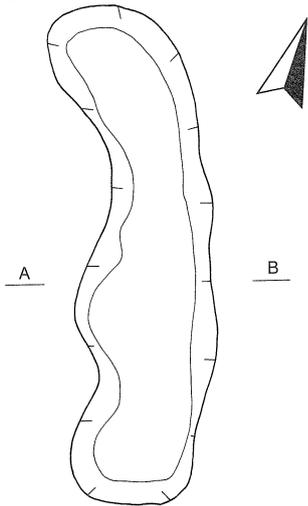
S B 07掘立柱建物跡 (第153図)

赤24B区北半部、ⅧB-2pグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。前述の通り本遺構が構築された際に削平・整地が行われたとすれば、現況での直接的な重複関係は認められないが、状況から見てS K I 28より新しい遺構であると推測される。2間(3.82m)×1間(2.56m)の南北棟建物跡である。長軸方向は

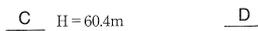


第151図 SD19・20・22溝跡

SD23



- SD23
 1. 10YR2/3 (黒褐)
 しまりやや有、粘性無、炭含
 2. 10YR4/6 (褐)
 しまりやや有、粘性少し有

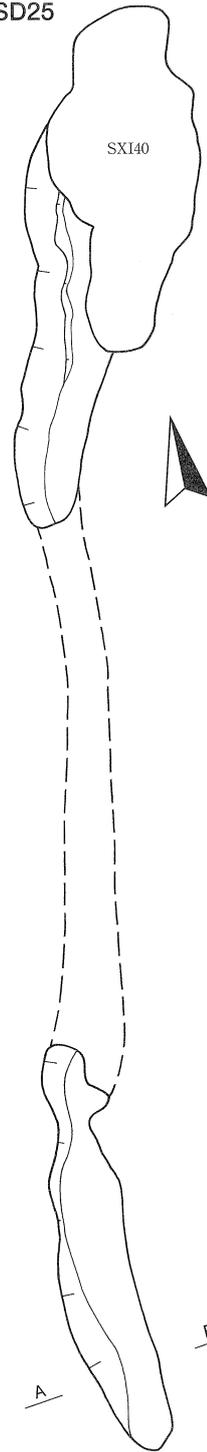


- SD24
 1. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性少し有、
 暗褐色土・炭・焼土粒含む
 2. 10YR4/3 (におい黄褐) しまりやや有、粘性無
 3. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性やや有
 4. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性やや有、炭・焼土含

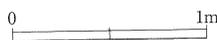
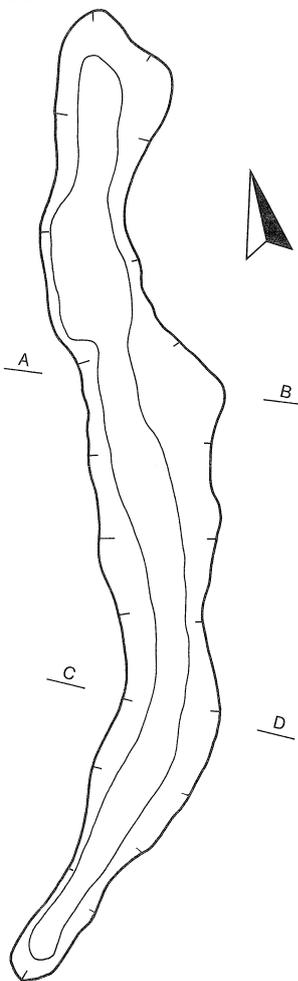


- SD25
 1. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性無、マサ土混入

SD25

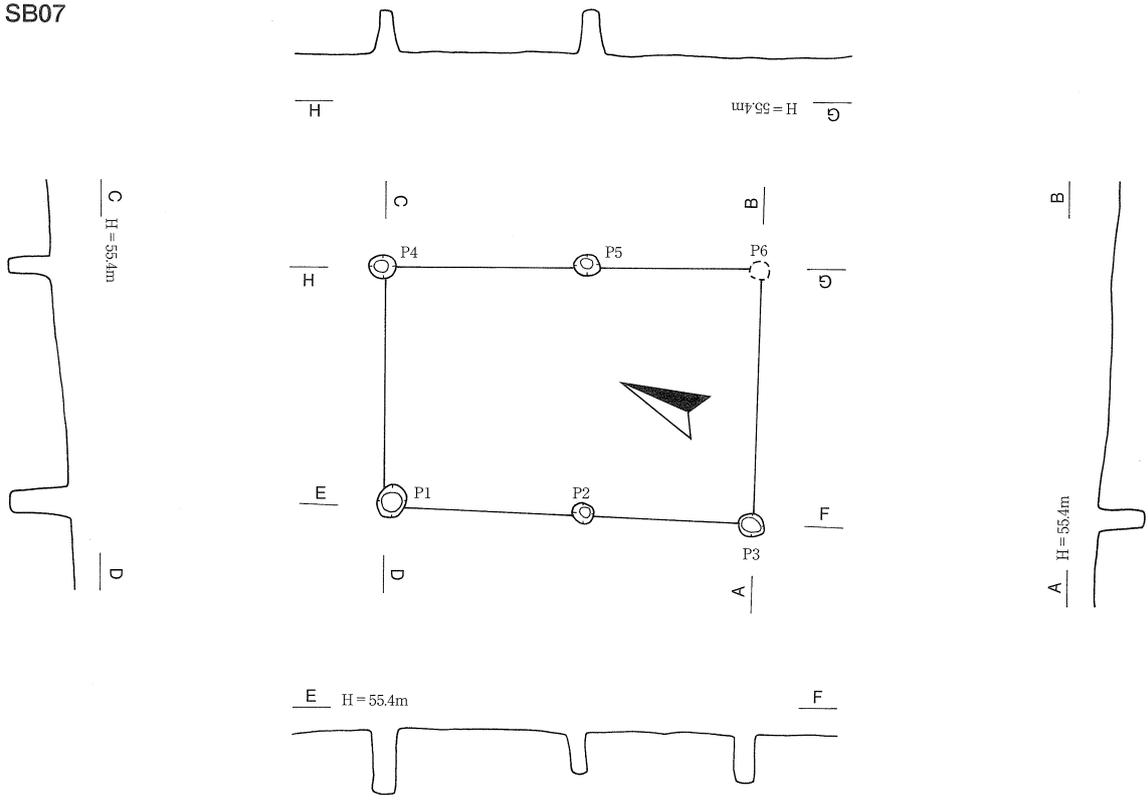


SD24

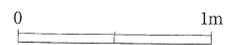
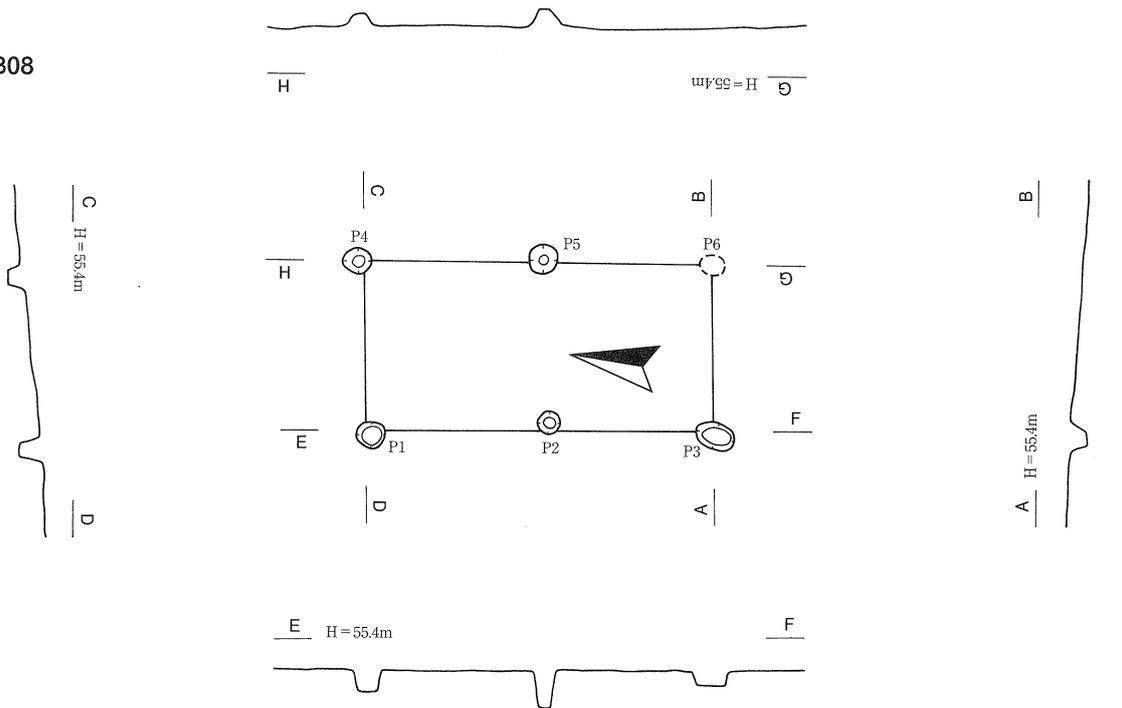


第152図 SD23・24・25溝跡

SB07



SB08



第153図 SB07・08掘立柱建物跡

W-26° - Nである。梁行柱間が2.56m、桁行柱間は1.76mと2.08mを測るものがある。柱穴の規模は23～37cm、深さ41～57cmを測る。遺物は出土しなかった。

S B07柱穴計測表

NO	径(cm)	深さ(cm)	平面形	備考
P1	37×31	57.2	楕円形	旧P1
P2	25×21	41.9	円形	旧P2
P3	29×25	49.5	円形	旧P9

NO	径(cm)	深さ(cm)	平面形	備考
P4	28×23	42.8	円形	旧P66
P5	42×36	44.6	円形	旧P3

S B08掘立柱建物跡 (第153図)

赤24B区北半部、ⅧB-3sグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。SK223・282と重複関係にあり同遺構を切っている。また、SK282と重複しているP6は調査員の不手際から平面図を取り損ねている。2間(3.60m)×1間(1.80m)の南北棟建物跡である。長軸方向はW-11° - Nである。梁行・桁行とも柱間は1.80mを測る。柱穴の規模は25～40cm、深さ10～50cmを測る。遺物は出土しなかった。

S B08柱穴計測表

NO	径(cm)	深さ(cm)	平面形	備考
P1	37×31	57.2	楕円形	旧P1
P2	25×21	41.9	円形	旧P2
P3	29×25	49.5	円形	旧P9

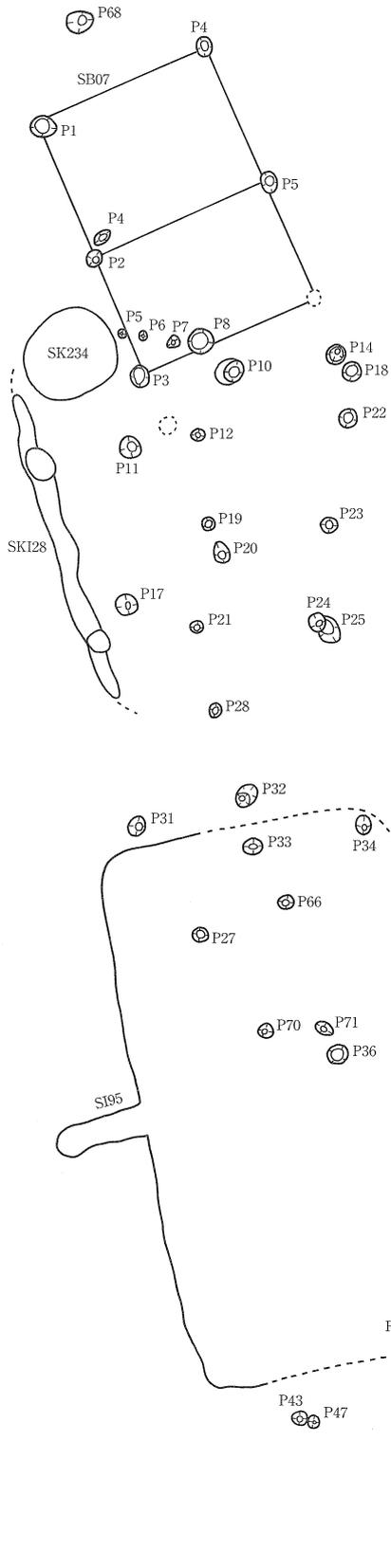
NO	径(cm)	深さ(cm)	平面形	備考
P4	28×23	42.8	円形	旧P66
P5	42×36	44.6	円形	旧P3

赤24B区柱穴状土坑群 (第154図、遺物図版92、写真図版281)

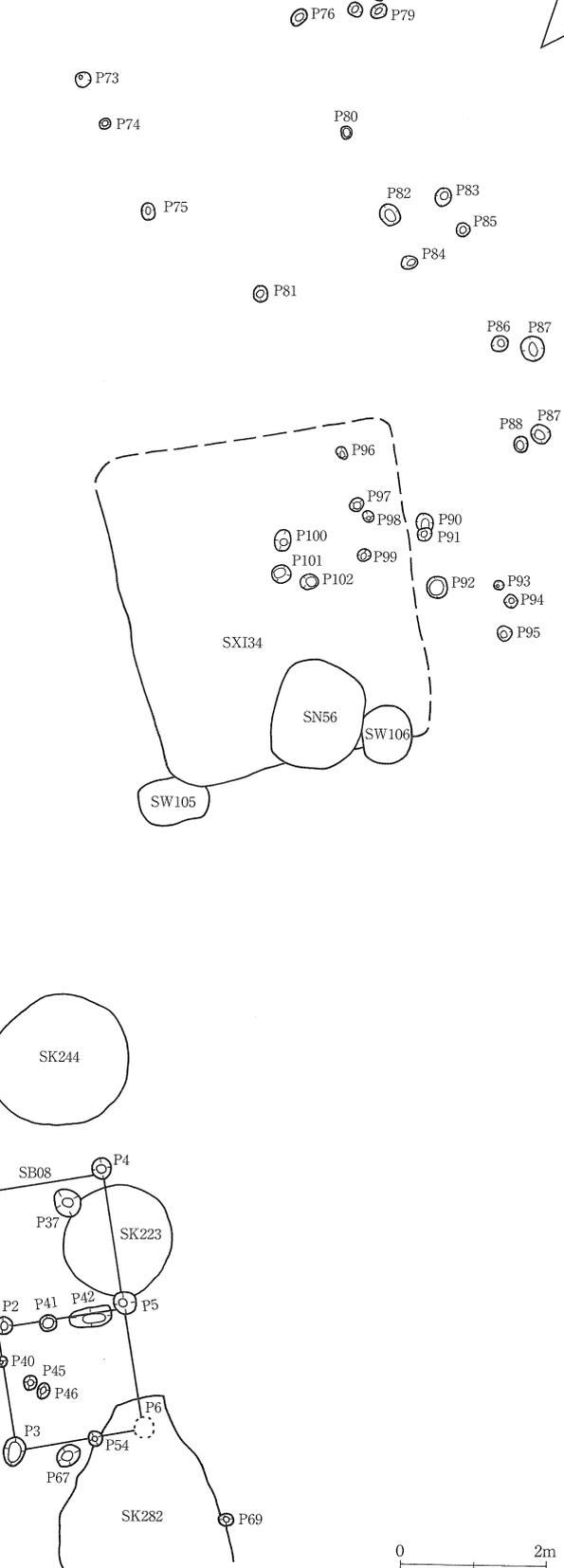
前述の通り赤24B区は削平・整地されているが、この部分から柱穴状土坑が多数検出されている。これらの柱穴状土坑は他の遺構を切っていること、削平整地されている部分からのみ検出されることからみて、竪穴住居跡等の遺構が廃絶された後に削平整地し、掘立柱建物跡等を構築したものと思われる。掘立柱建物跡を構成する柱穴以外の柱穴は74基を数え、24B区のほぼ全域にわたって分布しているが、SI95の南側には遺構が全く検出されない空白域が南北方向で約10m程あるので、空白域より北側を1群、南側を2群とした。1群からは44基、2群から30基の柱穴状土坑が検出されている。平面形は円形・楕円形・方形などがあるが、円形・楕円形が主体を占める。深さは4～57.6cmを測るが、規則性は認められず、また掘り方を持った柱穴は確認されていない。埋土は黒褐色～灰黄褐色土系の自然堆積を呈する。

遺物は土師器片が数点出土していることから古代に属する可能性が高いと思われる。またNO17埋土から鉄滓が、NO21埋土から土師器片が、NO24埋土からは砥石(115)が出土している。欠番のNO1～3・9・66はS B07、NO60～65はS B08を構成する柱穴である。(島原)

赤24(B)区 柱穴状土坑 1 群



赤24(B)区 柱穴状土坑 2 群



第154图 赤24(B)区柱穴状土坑群

赤24B区柱穴状土坑1群柱穴計測表

N0	径(cm)	深さ(cm)	平面形	備考
4	29×16	19.7	橢円形	
5	14×11	8.1	橢円形	
6	13×11	6.4	橢円形	
7	19×16	22.8	不整形	
8	36×35	16.1	円形	
10	41×33	23.4	橢円形	
11	45×30	42.1	橢円形	
12	18×16	36.1	円形	
14	30×29	20.0	円形	
17	47×24	22.3	橢円形	鉄滓出土
18	27×26	48.8	円形	
19	21×17	9.3	円形	
20	40×36	45.7	円形	
21	18×16	9.3	円形	土師器片出土
22	26×25	25.1	円形	
23	24×21	40.3	円形	
24	23×23	57.6	円形	砥石出土
25	30×[26]	19.2	橢円形	
27	22×22	32.5	円形	
28	20×17	40.1	橢円形	
31	25×23	48.9	橢円形	
32	34×25	57.6	橢円形	

N0	径(cm)	深さ(cm)	平面形	備考
33	28×24	12.8	円形	
34	29×20	44.8	橢円形	
37	42×36	44.6	円形	
38	23×21	37.4	円形	
39	22×21	14.3	円形	
40	15×13	28.5	円形	
41	26×22	17.0	橢円形	
42	60×25	19.7	方形	
43	23×19	44.2	円形	
44	18×16	18.3	円形	
45	21×18	29.8	円形	
46	23×16	10.1	橢円形	
47	18×17	32.2	円形	
48	25×23	53.6	円形	
54	20×20	44.8	円形	
66	20×20	6.1	円形	
67	35×26	14.1	橢円形	
68	37×31	32.9	橢円形	
69	21×18	40.1	円形	
70	23×23	29.0	円形	
71	27×18	8.8	橢円形	
72	20×20	36.7	円形	

赤24B区柱穴状土坑2群柱穴計測表

73	21×19	16.0	円形	
74	16×16	16.9	円形	
75	24×17	24.2	橢円形	
76	25×18	11.4	橢円形	
77	22×18	11.1	橢円形	
78	20×13	18.6	橢円形	
79	26×20	15.4	橢円形	
80	19×15	16.8	円形	
81	21×21	33.1	円形	
82	31×27	8.7	橢円形	
83	27×23	23.4	橢円形	
84	24×19	15.8	円形	
85	21×20	9.0	円形	
86	25×23	25.2	円形	

87	33×29	22.0	円形	
91	22×19	26.6	円形	
92	32×29	6.3	円形	
93	15×14	4.0	円形	
94	19×19	33.7	円形	
95	21×20	34.6	円形	
96	20×15	13.2	橢円形	
97	20×18	37.5	円形	
98	16×15	15.4	円形	
99	20×18	37.9	円形	
100	31×23	32.5	橢円形	
101	26×25	29.2	円形	
102	24×21	43.3	円形	

②赤25区

赤25区は、F区尾根部北端に残る北東方向に延びる枝尾根(C区)とその南東側斜面にあたる。南東側斜面の中央中腹には張り出した狭小な15m四方ぐらいの尾根平坦部(D区)があり、この南北両側(北A区・南B区)は洞状の沢地形となっており、現況で数段の棚状の狭い平場が認められ、部分的ではあるが比較的緩い傾斜となっている。中央中腹張り出し平坦部の標高は42m前後である。

遺構は、竪穴住居跡27棟、工房跡16棟、竪穴状遺構5棟、鉄生産関連炉跡13基、炭窯7基、土坑34基、炉跡8基、焼土遺構1基、溝跡1条があり、分布状況としては、枝尾根頂部の緩斜面部とこの南東斜面の中央中腹張り出し平坦部と、この両側洞の棚状の狭い平場にあり、H区緑13区谷部に至る斜面下位は急傾斜をなし、遺構は存在しない。(小山内)

S I 119竪穴住居跡・S X I 54工房跡

(第155・156図、遺物図版32・58・98・125、写真図版114・231・247・285・306)

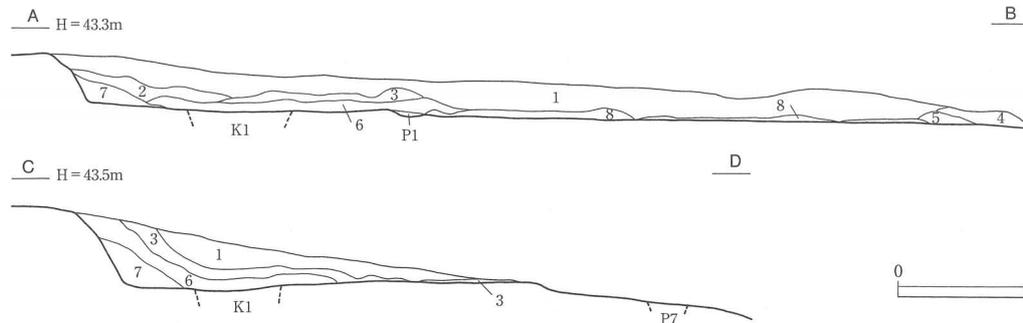
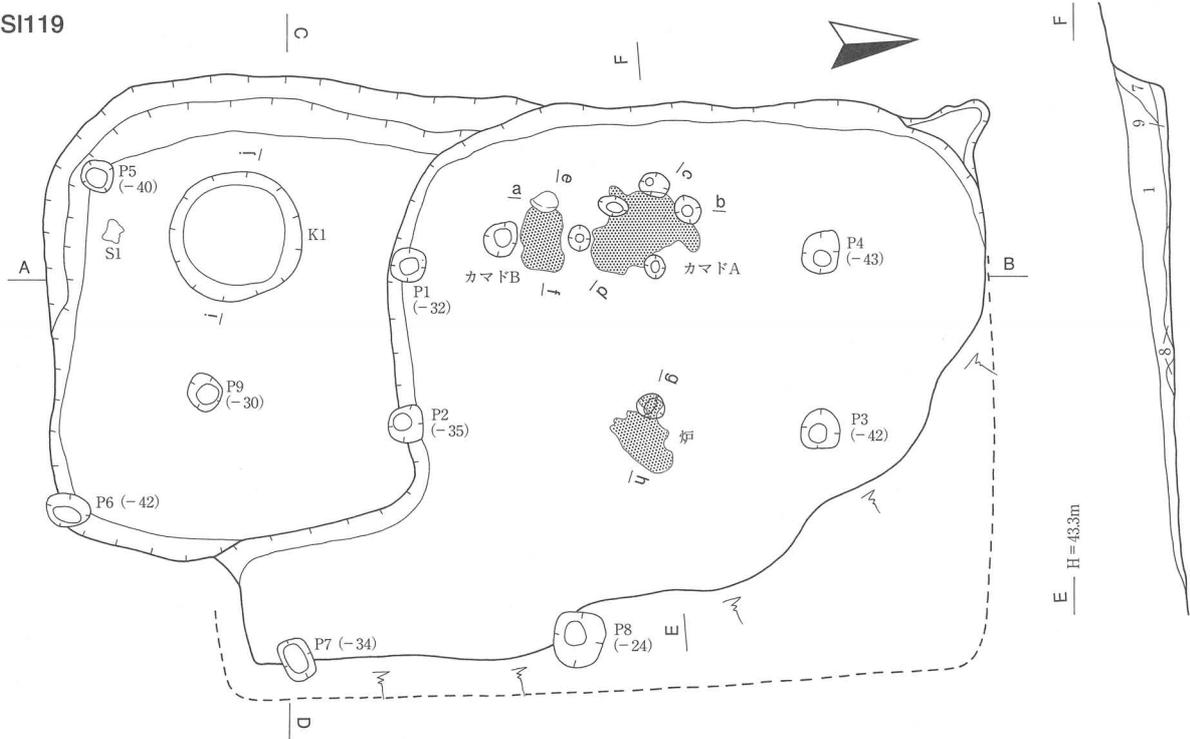
赤25D区のⅧB-10 l・m・nグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。幹尾根中腹にある舌状の枝尾根緩斜面の肩口に立地しており、北東の谷側が削れている。検出時のプランは山側1～2棟と谷側2棟の重複と考え、ベルトを斜面に沿って山側の南と重複部、及び谷側の北に1本ずつ、また谷側に斜面と直角方向に1本の合計4本組んで精査を開始した。精査の過程で山側は床面が平坦であることから1棟と捉え、谷側は床面に段差を伴うが埋土に切り合いがないことからテラス状の張出しを伴う1棟と判断した。なお詳細については後述してあるが、山側の1棟は工房跡(S X I 54)、谷側の1棟は竪穴住居跡(S I 119)と認定している。

S I 119はS X I 54より新しく重複による影響はないが、北東側(谷側)が崩落しており平面形の詳細は不明である。残存する壁や柱穴の配列で推察するとS-89°-Wを主軸方位とし、南側にテラス状の張出部を伴う隅丸方形を呈していたと思われる。西側(山側)の壁長は張出部を含めて6.8mあり、南側(張出部)は3.1mを測る。壁はいずれも外傾して立ち上がって、壁高は西側中央で60cm、南側中央で40cmを測り、北西隅の壁上に溝状の木根による攪乱部分がある。また残存部から推定すると床面積は27.0㎡程度あったと思われる。張出部は2.4×3.1mの広さの隅丸長方形で北側床面より約5cm高くなっており、西側壁寄りには径が約1.0mで深さが90cmを測る筒状の(K1)土坑を伴っている。埋土は大半がにぶい黄褐色土で床面近くに薄く黒褐色土の層があり、張出し部の下層に炭を片状に含んだにぶい黄褐色土が堆積している。床面は柱穴を9基(P1～P9)伴っている。規模・配置から判断してP3～P8は主柱穴、P1・P2・P9は副柱穴と捉える。床面施設としては炉を1基検出している。炉の規模は35×55cmで不整形を呈し焼土の厚さは5cmあり、深さ3cm程度の窪みが見られる。窪みの埋土は少量の鍛造剥片を含んでおり足場穴や鉄碇石は検出していないが、簡単な鍛冶を行っていたと思われる。

カマドは西側壁寄りの中央に位置している。初期の段階では煙道が見られず地床炉と捉えていたが、焼土周辺から芯材の石と抜き取り穴を検出し、他の地区で煙道のない原形をとどめたカマドを数基確認しており、同形態のカマドであると判断した。また燃焼部焼土は2つに分かれており、A・Bの造り替えの可能性が考えられる。焼土はAが約50×80cm、Bは30×50cmの規模で不整形を呈し、厚さは3～4cmを測る。

遺物は検出面から土師器の甕の破片(370)が、検出面、埋土及び張出部の土坑から鉄族(139)、磨石(150・151)や碇石(152)及び鍛冶滓が出土している。そのほか土坑や柱穴から土師器の坏や甕の破片が数点出土している。

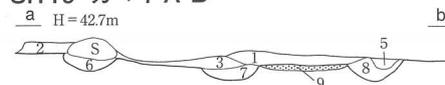
SI119



SI119

1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり中、粘性無
2. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり中、粘性無、炭化物微量
3. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり中、粘性無
4. 10YR3/3 (暗褐) しまり弱、粘性無
5. 10YR4/4 (褐) しまり中、粘性無
6. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり強、粘性無、炭化物微量
7. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまり強、粘性無
8. 10YR2/3 (黒褐) しまり中、粘性無
9. 5YR6/4 (にぶい橙) しまり堅、粘性無、炭化物中量、カマド内壁構築土崩落

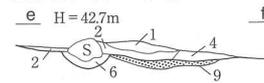
SI119 カマドA・B



SI119 カマドA



SI119 カマドB



SI119 炉

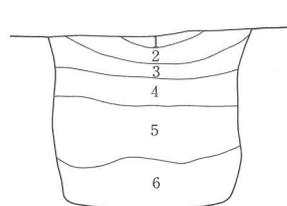


SI119 炉

1. 10YR2/2 (黒褐) しまり強、粘性無
2. 5YR6/4 (にぶい橙) 焼土

SI119 K1

i H=42.8m j



SI119 K1

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性無
2. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり強、粘性無
3. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり中、粘性無
4. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり強、粘性無、砂質、マサ土多量
5. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり中、粘性無、焼土、砂質、炭化物少量
6. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり小、粘性無、砂質

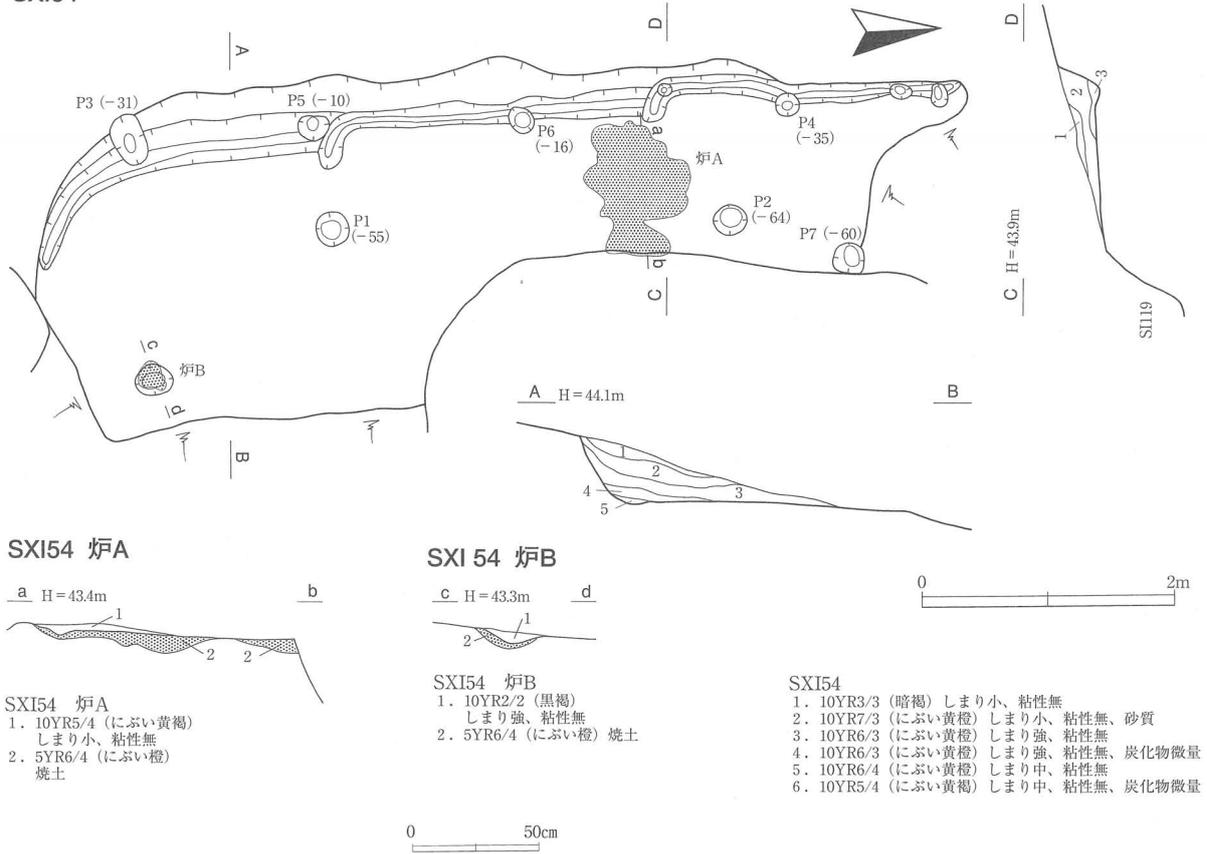
SI119 カマドA・B

1. 10YR5/6 (黄褐) しまり強、粘性無、炭化物微量
2. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり強、粘性無
3. 10YR7/6 (明黄褐) しまり強、粘性有
4. 5YR6/4 (にぶい橙) 固い、粘性無、炭化物中量、カマド内壁構築土
5. 10YR6/6 (明黄褐) シルト、しまり強、粘性無
6. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性やや有、マサ土ブロック多量
7. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり弱、粘性無
8. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり強、粘性無
9. 5YR6/4 (にぶい橙) 焼土



第155図 SI119竪穴住居跡

SXI54



第156図 SXI54工房跡

SXI54はSI119竪穴住居跡によって東側を切られ、北と南東側（谷側）が崩落しており平面形と規模の詳細は不明である。壁長は西側（山側）の残りが6.5m、南側が1.4mあり、残存する床面積は約11.5㎡を測る。また西側の壁は外傾して立ち上がり、壁高は53cmある。埋土は上位に暗褐色土、下位ににぶい黄橙色土が堆積し、床面近くに粒状の炭化物を含んだ層がある。床面は壁溝と、柱穴を7基（P1～P7）伴っている。壁溝は残存する壁際にあり途中2カ所で湾曲しながら切れており、建て替え・拡張があったと思われる。柱穴は遺構の平面形が不明で配列の想定ができないが、規模で判断するとP1～P3・P6が主柱穴、P4・P5・P7が副柱穴と捉える。床面からは地床炉と炉を1基ずつ検出している。地床炉の焼土は1.0×1.3mの規模で不整な形状を呈し厚さは7cmを測り、東側がSI119によって切られている。

炉は南東側にあり、18×21cmの規模で不整な楕円形を呈し、断面形は丸底鍋形で深さが5cmを測る。埋土から鍛造剥片を少量検出しており、簡単な鍛冶を行っていた可能性がある。

遺物は床面中央から支脚（7）、地床炉付近から土師器の甕破片（9号1/3袋）が出土している。

（亀）

S I 120B 竪穴住居跡、S X I 78 工房跡、S X W58 鉄生産関連炉跡跡

(第157・158図、遺物図版32・33・71・72・98・99・125・126、写真図版115・116・231・232・257・285・286・306・321)

F区赤25(D)区のテラスから下る東側急斜面部の下方、ⅧB-12k~13lグリッドに位置し、検出面はⅥ層である。検出時の状況から、単独の竪穴住居跡と考え精査を開始したが、約10cm程掘り下げたところで焼土を検出した。その後埋土断面を観察した結果、この焼土を伴うS X I 78とその下部のS I 120Bの2棟が存在することが判った。

S X I 78は、下部に存在するS I 120Bの埋没過程に構築されたものと思われる。斜面下方の東側は崩落により遺存しないが、平面形は隅丸長方形を呈すると思われ、規模は長辺約3.6m、短辺1.6m以上が推測される。長軸方向は等高線に平行し、床面積は3.9㎡が遺存する。壁はほぼ直角に立ち上がり、壁高は斜面上方の西壁で最大の約60cmを測る。埋土は4層に細分され、斜面上方から流入した自然堆積と思われる。床面は概ね平坦で、北東側に地床炉が検出された。地床炉は約90×30cmの不整形に明褐色焼土が広がり、厚さは約3~7cmを測る。

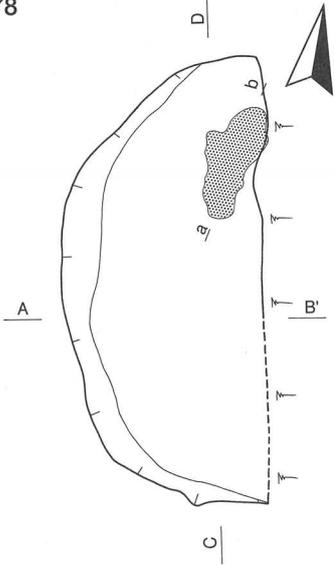
遺物は、土器は土師器の甕形土器片が小1袋程出土した。主なものとして、検出面出土のNo.390、埋土上位出土のNo.391、埋土中出土のNo.392などがある。この他、丸棒状鉄製品が埋土上位から1点(No.154)と鉄滓が埋土中から多量出土している。

S I 120Bは、斜面下方の東側は崩落により遺存しないが、平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺約340cmが推測される。本遺構からはカマドが2基確認されており、遺存状態の良好な方をカマドA、不良な方をカマドBとした。主軸方位はカマドAではW-30°-N、カマドBではN-8°-Eで、床面積は6.9㎡が遺存する。壁は鋭角的に立ち上がり、壁高は約55~110cmを測る。埋土は11層に細分されるが、上位の暗オリーブ褐色系と下位のオリーブ褐色土に大別される。床面は平坦で堅く締まり、貼床が斜面下方の東側に施されている。床面施設として、北東側に土坑(K1)と東側中央に地床炉が確認された。K1の平面形は円形を呈し、規模は径約60cmを測る。断面形は丸底鍋形を呈し、深さは約35cmを測る。地床炉は径約30cmの円状に橙色焼土が広がり、厚さは1cm程度である。また、西側で径約10~20cm、深さ7~17cm程のピット6基を確認したが、配置や形態から支柱穴と思われる。

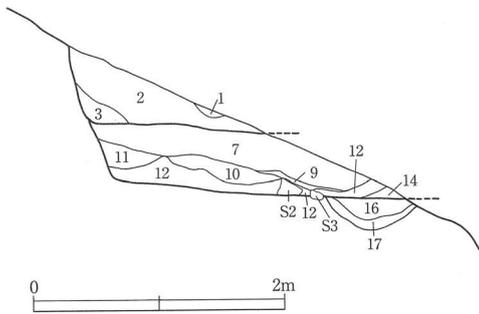
カマドAは北西隅に付設している。検出時において、褐~黄褐色土の広がりや自然石数個が確認された。天井部の架構には自然石が用いられており、壁側と手前側に架けられているが、埋没過程で手前側のものは崩落している。袖部にも芯材として同様に自然石数個が利用されている。これらの外側には褐色粘土が見られることから、これを貼り付けて構築していたものと思われる。燃焼部はほぼ平坦で、径約55cmの円形に明赤褐色焼土が広がり、厚さは最大5cmを測る。煙道部は削り貫き式で、長さ約90cm、径約25cmを測り、先端に向かってやや下り勾配である。煙出部は径約30~40cm、深さ135cmで、垂直に掘り込まれている。カマドBは北壁の中央に付設されているが、遺存状態は悪い。確認された燃焼部は平坦で、約40×20cmの楕円状に明赤褐色焼土が広がり、厚さは最大5cmを測る。煙道部は崩落により詳細は不明だが、長さ約125cmを測り、先端に向かって下り勾配である。両者のカマドの残存状態から、本遺構においてカマドBからAへ造り替えが行われたものと思われる。

本遺構の床面精査時において、鍛造剥片が視認でき、また南東側に鉄砧石と思われる数個の石(S2~5)が散在していたことから鍛錬鍛冶施設の存在が考えられた。結果、遺構南東側にS X W58と付属施設と思われるK2~6が確認された。なお検出時確認されたS2~5は、原位置を留めておらず、廃絶時に破脚された可能性が高い。これらの位置関係は、S X W58から南側にK2・4、南西側にK3、南東側にK5、北西

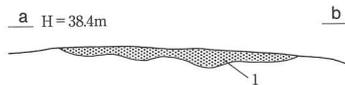
SXI 78



A H=39.5m

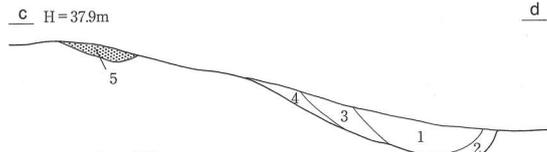


SXI 78 地床炉



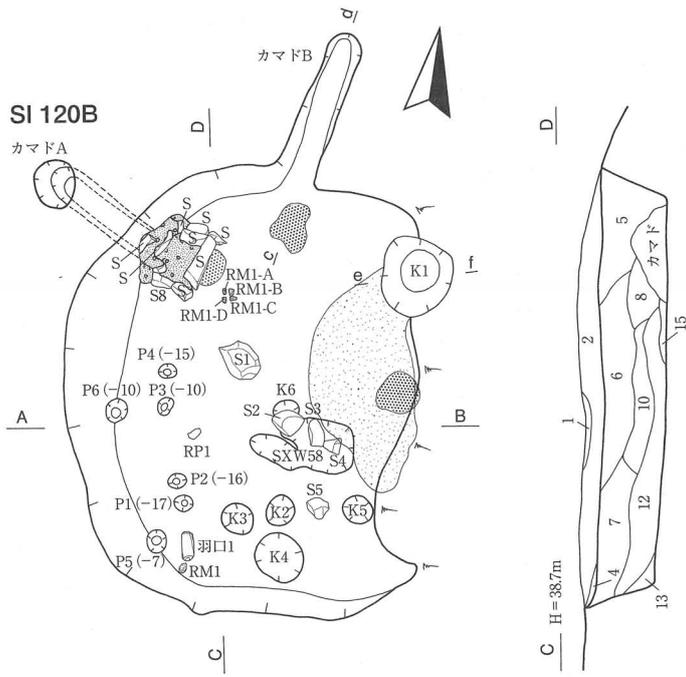
SXI78 地床炉
1. 7.5YR5/6 (明褐) 焼土

SI 120B カマドB



SI120B カマドB
1. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性無
2. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性極めて有
3. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有
4. 2.5Y5/6 (黄褐) しまり・粘性欠
5. 5YR5/8 (明赤褐) 燃焼部焼土

SI 120B



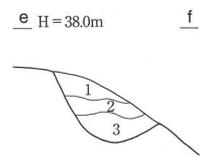
SXI78

1. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり欠、粘性やや有、明黄褐色土粒少量
2. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり有、粘性無
3. 10YR3/2 (黒褐) しまり有、粘性無、明黄褐色土粒少量
4. 10YR2/2 (黒褐) しまり有、粘性無、炭化物微量

SI120B

5. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性やや有
6. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり・粘性やや有
7. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり欠、粘性やや有
8. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり有、粘性やや有
9. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり欠、粘性やや有
10. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性欠
11. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり有、粘性欠
12. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり有、粘性欠
13. 2.5Y4/6 (オリーブ褐) しまり有、粘性無
14. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり欠、粘性有
15. 2.5Y3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有
16. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり極めて有、粘性無、貼床
17. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性無、貼床

SI 120B K1

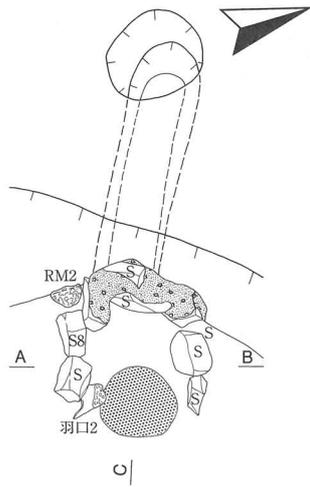


SI120B K1

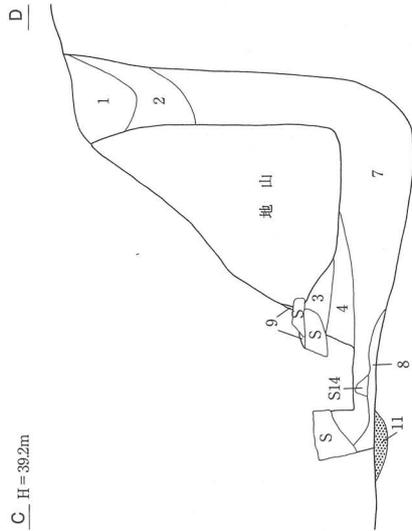
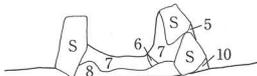
1. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり有、粘性欠
2. 2.5Y3/1 (黒褐) しまり有、粘性やや有、炭化物中量
3. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり有、粘性無

第157図 SI120B竪穴住居跡・SXW58鉄生産関連炉跡・SXI78工房跡 (1)

SI120B カマドA



A L=38.2m



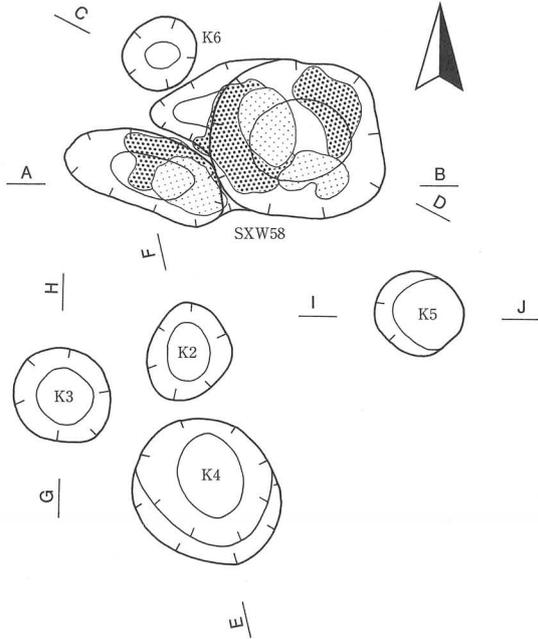
C H=39.2m

0 50cm

SI120B カマドA

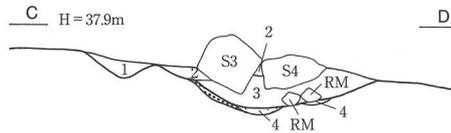
1. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性極めて有
2. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性やや有
3. 2.5Y4/4 (オリブ褐) しまり・粘性欠
4. 2.5Y4/6 (オリブ褐) しまり・粘性欠、黄褐色土ブロック少量
5. 2.5Y5/4 (黄褐) しまりやや有、粘性欠
6. 10YR7/8 (黄橙) しまり・粘性有、崩落構築土
7. 2.5Y4/3 (オリブ褐) しまり・粘性欠
8. 2.5Y3/3 (暗オリブ褐) しまり・粘性有、褐色土ブロック少量
9. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性有、天井部構築土
10. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性有、袖部構築土
11. 5YR5/8 (明赤褐) 焼部焼土

SXW58



A H=37.9m

0 50cm



SXW58 K6

1. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり有、粘性やや有

SXW58

2. 2.5Y3/3 (暗オリブ褐) しまり・粘性欠
3. 10YR2/1 (黒) しまり・粘性有、鍛造剥片多量
4. 5G1.7/1 (緑黒) 還元焼土
5. 5YR5/8 (明赤褐) 酸化焼土

E H=38.0m



SXW58 K2

1. 2.5Y3/1 (黒褐) しまり欠、粘性やや有、鍛造剥片多量

SXW58 K4

2. 2.5Y4/4 (オリブ褐) しまり欠、粘性無

G H=38.0m



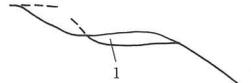
SXW58 K3

1. 2.5Y3/3 (暗オリブ褐) しまり・粘性欠

SXW58 K5

1. 2.5Y4/4 (オリブ褐) しまり・粘性欠

I H=37.9m



第158図 SI120B鑿穴住居跡・SXW58鉄生産関連炉跡・SXI78工房跡 (2)

側に隣接してK 6が存在する。K 2の規模・平面形は約25×20cmの楕円形で、断面形は浅い皿状を呈し、深さは約3～4cmを測る。K 3の規模・平面形は径約25cmの円形で、断面形は皿状を呈し、深さは約5cmを測る。K 4の規模・平面形は径約35～40cmの略円形で、断面形は鍋形を呈し、深さは10～15cmを測る。K 5は東側が崩落により遺存しないため詳細は不明だが、規模・平面形は径約25cmの円形で、断面形は鍋形が推測され、深さは5cm以上と思われる。K 6の規模・平面形は径約20cmの円形で、断面形は皿状を呈し、深さは約5cmを測る。

S X W58は径約40～45cmの円形を呈する部分と約45×20cmの楕円形を呈する部分が確認された。また円形部分の西側にはテラス状の浅い掘り込みがみられることから、位置的に羽口の装着痕の可能性が考えられる。断面形はいずれも皿状を呈し、深さは約5cmを測る。埋土は2層に分別され、鍛造剥片等が多く見られる。また、断面状況から両者の埋没時期は同時であると判断される。底面には緑黒色の還元焼土と明赤褐色の酸化焼土が広がり、厚さは2～3cmを測る。

以上により、本遺構は鍛錬鍛冶炉跡である可能性が高く、炉として2基が機能していたものと思われるが、上記の様に、埋土断面からは新旧の判断はつかない。また、配置関係や個々の状況から、鉄砧石の設置痕としてK 2が考えられるが、その他については何らかの鍛錬鍛冶関連施設と思われるが、詳細は不明である。

遺物は、土器は土師器の甕形土器片が中1袋、坏形土器片が1点出土した。主なものとして、埋土中出土のNo.371などがある。土製品として羽口がK 1埋土出土のNo.135、カマド内出土の羽口2 (136)、埋土下位出土のNo.137、床面出土の羽口1 (138) の4点が出土した。石製品は砥石がカマドの芯材として転用されているS 8 (154) とカマド内出土のS 14 (153) の2点、鉄砧石が床面S 1 (155) と、床面S 3とS N 66・S I 150 B出土のものと接合したNo.146の2点、要石(?) が床面より1点出土した。鉄製品は釘が埋土下位より1点(143)、鉄鐸が埋土中位出土のRM1-A～Dとして4点(139～142)が一括して出土した。その他、鉄塊系遺物が埋土下位より2点、鉄滓が床面とS X W58内とK 2・4・5から多量、鍛造剥片が床面及びS X W58と各施設内から多量出土した。

(小林)

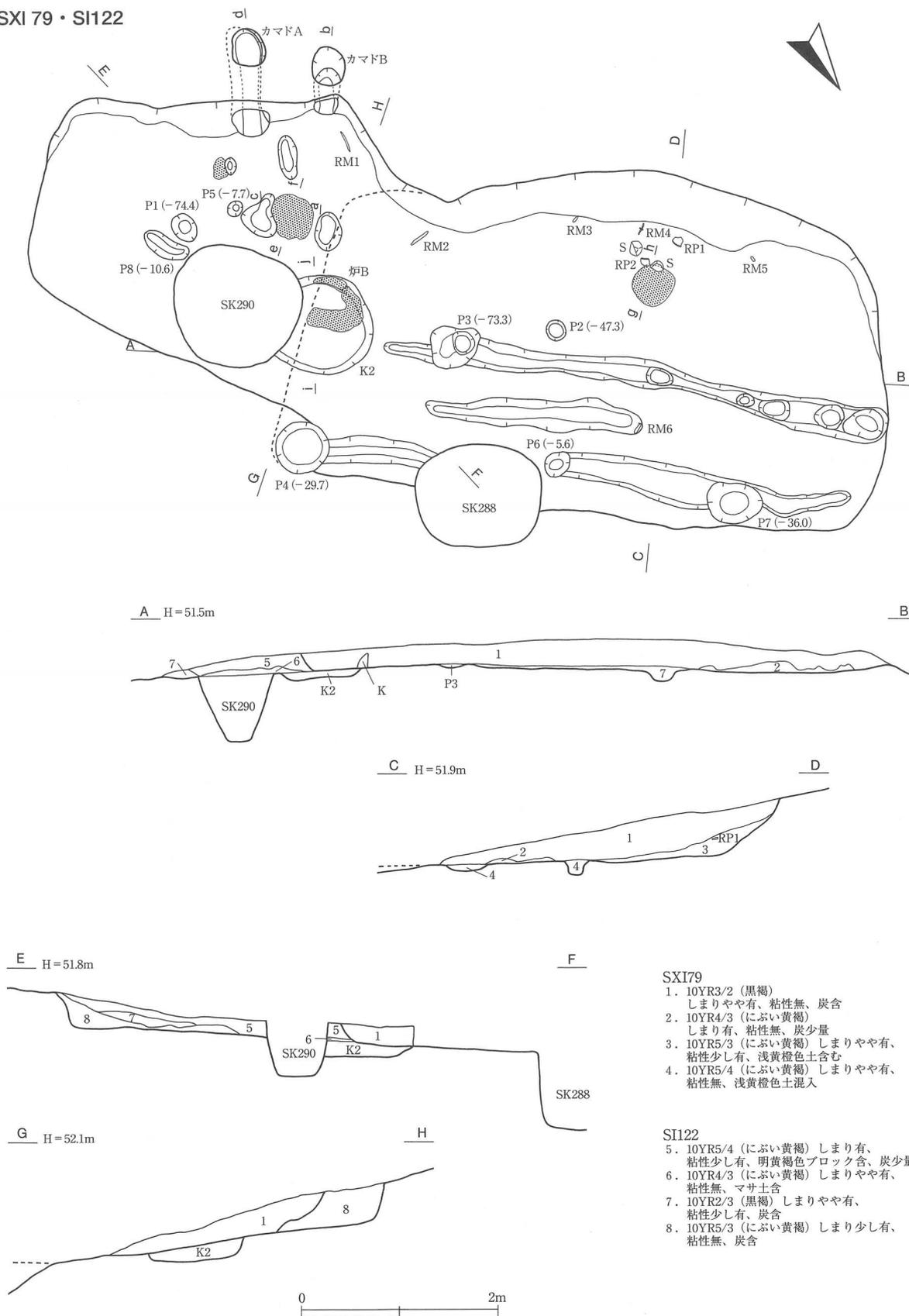
S I 122 竪穴住居跡、S X I 79 工房跡

(第159・160図、遺物図版30・31・98・124・125、写真図版117・118・230・285・305・306・321)

赤25C区南半部、ⅧB-3m・4mグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。検出当初から辺の軸が異なることから少なくとも2棟の遺構があると思われたが、平面プランから新旧関係ははっきり見えなかったのて共通のベルトを設定して精査を開始した。北側の遺構からはカマドが確認されず地床炉のみが検出されたため竪穴住居跡ではなく工房跡と判断した。断面観察からS X I 79がS I 122を切っているのを確認したので、新旧関係は(新)S X I 79→(旧)S I 122である。また、S I 122はS K 290に切られ、S X I 79はS K 288に切られ、S K 289を切っている。

S X I 79は北側斜面が消失しているため平面形・規模ははっきりしないが、西壁は1.2m残存し、南壁が5.5m遺存していることと、断面観察から、長軸5.5m、短軸3m以上の隅丸長方形ないし方形を呈していたものと思われる。床面積は残存部分で17.7㎡を測る。壁は外傾して立ち上がる。壁高は南壁で56cmを測り、西壁は北に向かうにつれて低くなっていく。埋土はにぶい黄褐色土を主体とした自然堆積を呈し4層に細分された。床面はほぼ平坦で締まり、住居中央から北を中心に床面に幅10～41cm、深さ7～15cmの溝が3条検出されており、これらの溝は根太の痕跡ではないかと思われる。床面施設として住居南壁際中央の床面から地床炉が1基、住居中央から北側を中心に柱穴が5基(P 2・3、P 5～7)検出された。炉は44×42cmの楕円形状を呈する厚さ4cmの焼土が形成されている。柱穴の内では位置的に主柱穴となりえるものはP 4・

SXI 79・SI122

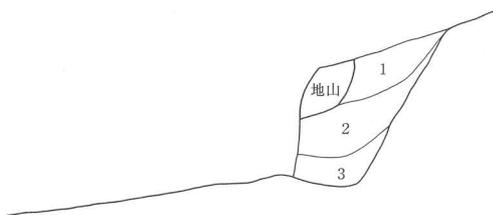


第159図 SI122竪穴住居跡・SXI 79工房跡 (1)

SI122 カマドB

a H=52.1m

b



e H=51.3m

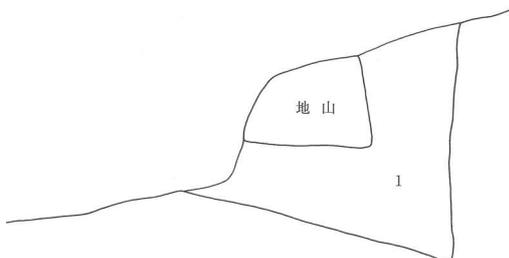
f



SI122 カマドA

c H=52.1m

d



SXI 79 炉A

g H=51.2m

h



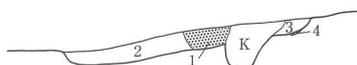
SXI79 炉A

1. 5YR7/3 (にぶい橙) 焼土

SXI 79 炉B・SI122 K2

i H=51.2m

j



SXI79 炉B

1. 5YR6/4 (にぶい橙) 焼土

SI122 K2

2. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、マサ土ブロック含
3. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
4. 5YR6/4 (にぶい橙) 焼土

SI122 カマドB

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭含
2. 10YR4/2 (灰黄褐) しまりやや有、粘性無、炭少量
3. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
4. 5YR7/3 (にぶい橙) 焼土

SI122 カマドA

1. 10YR5/8 (黄褐) しまり有、粘性少し有

0 50cm

第160図 SI122竪穴住居跡・SXI 79工房跡 (2)

P 7 の 2 基でないかと思われる。

遺物は土師器片が 9 号袋 1/2 袋分、羽口片が 1 点、鉄製品が 4 点 (紡錘車・鉄鏝 2 点・釣針)、砥石 3 点と鉄滓が出土した。このうち掲載した遺物は床面より出土した R P 1 の土師器甕 (364)・R M 4 の鉄製紡錘車 (136) と R M 6 (134)・R M 5 (135) の鉄鏝、埋土中より出土した土師器甕 (363)・釣針 (137)、検出面より出土した土師器甕 (362) と砥石 3 点 (147~149) である。

S I 122 は北・東側斜面が消失し、西側部分を S X I 79 に切られているため平面形・規模ははっきりしない。西壁は 1.1m、東壁は 0.7m 残存し、南壁は 2.8m 遺存しているが、残存する壁の状況では、不整な隅丸形状を呈していたものと思われる。主軸方位は W-31° - S、床面積は 7.0㎡ を測る。壁は外傾して立ち上がる。壁高は南壁で 53cm を測り、西・東壁は北に向かうにつれて低くなる。埋土は暗褐色土を主体とした人為堆積を呈し、4 層に細分した。床面は平坦で締まる。床面施設は住居中央付近より柱穴を 3 基 (P 1・P 5・P 8) 検出しているが、支柱穴となりえるかは不明である。また住居中央西よりから土坑が 1 基 (K 2) 検出されている。土坑は S K 290 に一部を切られているが径 100cm の円形を呈し、深さ 7cm を測る。南壁の一部に厚さ 1cm の焼土の広がりが見られる。またこの土坑の埋土の一部には厚さ 7cm の焼土が形成されており、S X I 79 使用時に被熱したものと思われる。

カマドは南壁中央 (カマド A) と南西コーナー付近 (カマド B) に位置する。カマド A は本体部の残存状

況は不良で僅かに袖石の抜き取り穴と考えられるピットが各1個ずつ検出されたのみである。また、燃焼部焼土は検出されなかった。住居廃棄時に完全に破壊された可能性が考えられる。煙道部は長さ71cm、幅30cmの削り貫き式の煙道で下り勾配で煙出し部へ続いている。煙出し部は径41×37cmの楕円形を呈し、深さ95cmを測る。カマドBは本体部の残存状況は不良であるが、配置状況から43×40cmの楕円形を呈し、厚さ11cmを測る焼土と、その脇に袖石の抜き取り穴と考えられるピット2基が検出されている。これら燃焼部焼土と袖石の抜き取り穴の痕跡は精査時には別遺構の可能性を考えていたが、整理中にカマドBの本体部に当たる可能性もあると気づき、こちらの可能性が高いと考えている。煙道部は残存部分で長さ49cm、幅27cmの削り貫き式の煙道で下り勾配で煙出し部へ続く。煙出し部は径38×33cmの円形を呈し、深さ67cmを測る。

遺物は土師器片が9号袋1/2袋分、羽口片が1点、砥石が2点、鉄製品が2点(刀子・棒状)と鉄滓が出土した。このうち掲載した遺物は床面より出土したRM1の刀子(124)とRM2の棒状鉄製品(125)と埋土中より出土した土師器甕(354)である。(島原)

S I 123 竪穴住居跡 (第161図、遺物図版32・99、写真図版119・231・286)

F区赤25D区の平坦部西端ⅧB-7m・nグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。S I 147・148・150、S K 247・249・292と重複し、検出状況等から確認できた新旧関係は(新)S I 148・147→S K 247・249・292→S I 150→S I 123(古)である。東側はS I 148・S K 249、南側がS I 147・S K 247・292により、南東側は崩落によって消失しており、全容は不明だが、遺存部分から平面形・規模は一辺約5mの隅丸略方形で、床面積は約22㎡ほどと推定され、主軸方位はN-40°-Wである。壁は鋭角的に外傾して立ち上がり、壁高は西山側の最大約60cmから東側に向かい低くなる。埋土はマサ土を主体とする人為堆積である。床面は平坦で堅締、谷側の南東壁際には貼床が施されていた。床面施設としては中央西より一部S I 148に破壊された炉跡1基と柱穴6基、それと遺存する壁際には幅10~20cmほどの周溝が検出された。炉の平面形・規模は開口部約65×50cmの楕円形で、深さ約5cmの浅い皿形を呈し、中央部はさらに径約20cmの円形で、深さ約3cmで掘り窪められ、火熱により厚さ約2cmほどが赤色変化していた。配置・規模からP1~4が支柱穴と思われるが、S K 249の位置に東隅の支柱穴があったものと思われる。

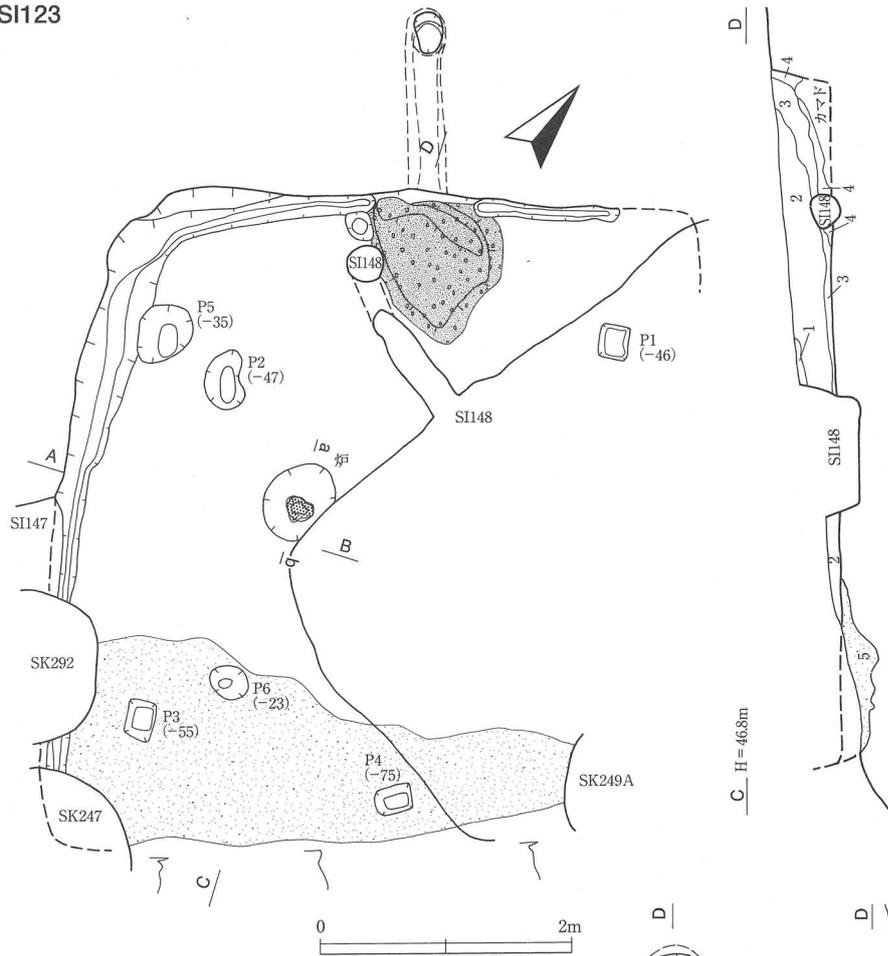
カマドは北西壁のほぼ中央に付設され、本体天井部は崩落し、袖部は架構・芯材として石や土器などは認められないが、抜き取りの小ピット4基が検出され、黄褐色土で構築されていた。燃焼部は平坦で火熱により50×30cmほどの略楕円形で、厚さ4cmほどが赤色変化していた。煙道側の焼土の端に支脚の抜き取り痕跡が検出された。煙道は奥行き約150cm、径約30cmの削り貫き式で、外側に向かい下り勾配で煙出しピットより奥まで削り貫かれていた。煙出しピットは径約30cmの略円形で深さは約115cmを測る。

遺物は、土器はカマドから土師器の坏形土器1個体(372)と炉跡から破片数点と埋土から甕形土器片約20点、カマド袖から須恵器の甕形土器片1点(373)、埋土から羽口片3点、カマドから磨石1点(156)と鍛冶滓が微量出土した。(小山内)

S I 124 竪穴住居跡、S X H 13 廃土場 (第162図、遺物図版26・70・123、写真図版120・227・256・304・318)

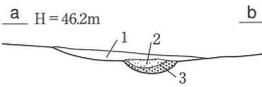
F区赤25(A)区洞部中央の斜面上方、ⅧB-8h~9iグリッドに位置し、検出面はⅢ層・Ⅳ層及びⅥ層である。検出時の状況は、にぶい黄色土が不整に広がる範囲として認識したが、様相が全く不明であったため、トレンチを入れて断面状況を窺った。結果、斜面上方より廃棄された掘削廃土の広がり(S X H 13)であることが判った。また、この下部にはこれより古い竪穴住居跡(S I 124)が存在していることも確認された。断面状況から推察すると、斜面上方の遺構の掘削廃土を下方に廃棄したものが、廃絶後のS I 124に自然流入し、この場所に廃土が止まった人為的自然堆積と思われる。よって埋土は、S I 124からS X H 13まで一

SI123



SI123

1. 10YR3/4 (暗褐) しまり極めて有、粘性無、砂質
2. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、砂質
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質、炭化物微量
4. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、砂質、炭化物微量
5. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、砂質、貼床



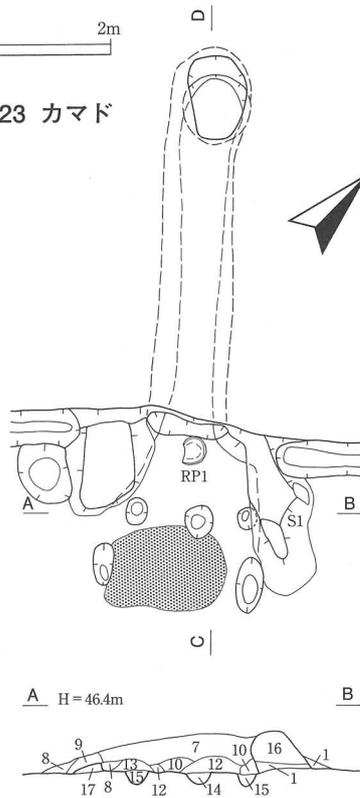
SI123 カマド

SI123 炉

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質
2. 10YR2/1 (黒) 炭化物層
3. 5YR4/8 (赤褐) 焼土

SI123 カマド

1. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性無、砂質
2. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや欠、粘性無
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性無、砂質
4. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、砂質、焼土粒微量
5. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性やや有、焼土粒微量、カマド構築土崩落
6. 10YR5/8 (黄褐) しまり極めて有、粘性有、カマド構築土崩落
7. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有、マサ土少量
8. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性有
9. 10YR7/2 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、マサ土多量
10. 7.5YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性有、カマド内壁焼土化
11. 10YR3/4 (暗褐) しまり無、粘性有
12. 7.5YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性有、焼土ブロック・炭化物微量
13. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有、地山ブロック・焼土粒微量
14. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性無
15. 10YR3/4 (暗褐) しまり無、粘性有
16. 10YR5/8 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
17. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性有
18. 5YR4/8 (赤褐) 燃焼部焼土



第161図 SI123竪穴住居跡

連の堆積となるが、断面図に関しては紙面の都合上、S I 124の検出面で層位を分割した。以下の事実記載はこれに従ったものである。また、その後のS X H13の精査過程において、円形の黒褐色土のプランを確認したが、半裁の結果、S I 124と同様にS X H13によって覆われた土坑(S K 297)と判断した。よって新旧関係は、(新)S X H13→S I 124、S K 297(旧)となる。

S X H13は、約600×550cmの不整な広がり、厚さは最大約70cmを測る。層位は上位のマサ土起源の浅黄色土系、中位の黄褐色土、下位の黒褐色土系に大別される。

遺物は、土器は埋土中より土師器の甕形土器片が小1袋、坏形土器片が1点、羽口は破片が約10点出土した。主なものとして、羽口は埋土上位より出土したNo.112・113がある。その他、砥石が埋土中より1点、鉄鐸が埋土上位より1点(No.103)、鉄鏃が埋土上位より1点(No.104)、釣針が埋土中より1点、鉄塊系遺物が埋土中より1点、鉄滓が埋土上位より中量出土している。

S I 124の平面形は隅丸略方形を呈し、規模は一辺約2.7mを測る。主軸方位はS-5°-Wで、床面積は5.5㎡を測る。壁は斜面下方の東壁ではやや外傾するが、その他の壁はいずれもほぼ直角に立ち上がる。壁高は斜面上方の西壁で約75cm、北・南壁で約40cm、東壁で約20cmを測る。埋土は24層に細分されるが、上述の通り、斜面上方からの人為的流入と判断される。床面はほぼ平坦で堅く締まり、南西隅に完形の土師器の甕(RP1)が遺存していた。

カマドは南壁の中央に付設されているが、本体部の遺存状態は悪い。自然石1個が立位状態で確認されたが、位置的に袖の芯材に使用したものと思われる。燃焼部は明確な焼土は検出されなかったが、径約70cmの浅い皿状に窪んでいる。煙道部は割り貫き式で、奥行き約110cm、径約35cmを測り、先端に向かって下り勾配である。煙出部は径約25~40cm、深さ約95cmで、垂直に掘り込まれている。

遺物は、土器は埋土中より土師器の甕形土器片が小1袋、坏形土器片が2点、前述の床面RP1(No.284)が出土し、土師器の甕形土器は埋土中出土のNo.285、坏形土器は赤25(D)区尾根上のS I 150A・B出土のものと接合したNo.286などがある。その他、鉄滓が埋土中及び下位より中量出土した。

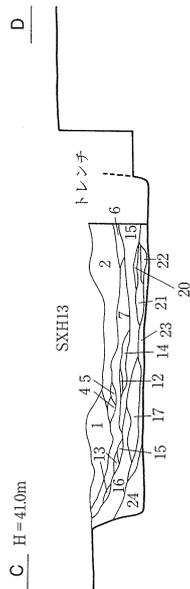
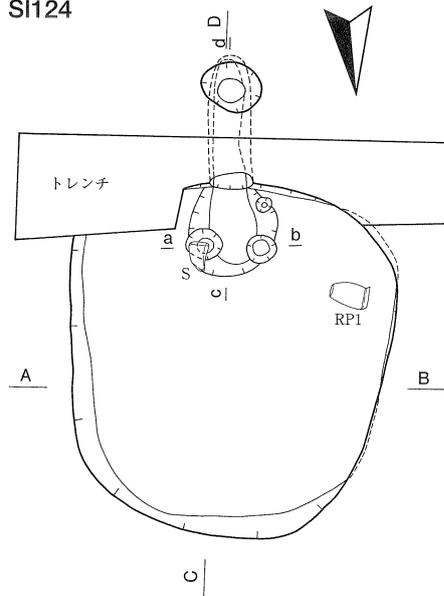
S I 140 竪穴住居跡 (第163図、遺物図版26、写真図版120・227)

F区赤25(A)区洞部南側の斜面中腹、VIII B-12 j グリッドに位置し、検出面はVI層である。検出時の状況において、斜面下方が崩落した竪穴住居跡とその上方に溝状のプランが検出できたことから、炭窯と考え精査を開始したが、結果、竪穴住居跡に伴う棚状施設と判断した。本体部の平面形は遺存部から隅丸方形または隅丸長方形と思われ、規模は南西壁で約2.9m、北西・南東壁で1.4m以上が推測される。主軸方位はW-40°-N、床面積は2.7㎡が遺存する。遺存する壁はほぼ直角に立ち上がり、壁高は斜面上方の南西壁で最大の約80cmを測る。埋土は6層に細分される斜面上方からの自然堆積と思われる。床面は平坦で堅く締まる。床面施設として、遺構西側に径約25cm、深さ約10cmの柱穴1基が確認された。棚状施設の平面形は溝状を呈し、規模は約380×60cm、遺存する斜面上方の壁は鋭角的に立ち上がり、深さは約45cmを測る。

カマドは北西壁に付設されている。袖部は崩落により左袖のみ遺存するが、自然石3個が立位状態で遺存しており、芯材として利用されている。断面観察からこの外側には僅かに黄褐色粘土が遺存しており、これを貼り付けて構築したものと思われる。燃焼部はほぼ平坦で、径約30cm、最大厚8cm程の不整な円状の明褐色焼土が広がる。煙道部は崩落により詳細は不明だが、立地的に掘り込み式と思われ、長さ約110cmを測り、先端に向かってやや下り勾配である。

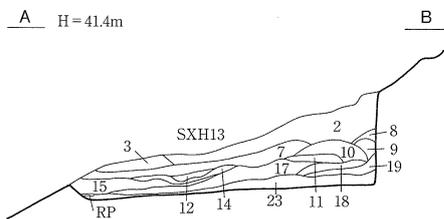
遺物は、土師器の甕形土器片が約10点出土し、主なものとして床面RP1のNo.287と埋土中位出土のNo.288などがある。この他、埋土中より羽口の破片が2点出土したのみである。(小林)

SI124

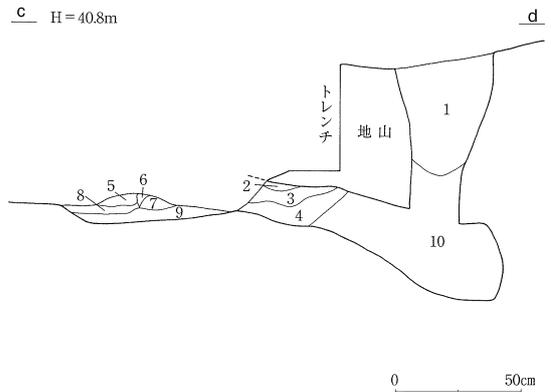
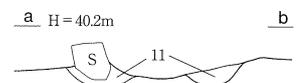


SI124

1. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり有、粘性欠
2. 10YR2/3 (黒褐) しまり有、粘性やや有
3. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり有、粘性やや有
4. 2.5Y5/6 (黄褐) しまり欠、粘性無
5. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性有
6. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり有、粘性やや有
7. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり有、粘性極めて有
8. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性無
9. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有
10. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有
11. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまりやや有、粘性有
12. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有
13. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有
14. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり・粘性欠
15. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性有
16. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有、
焼土粒・炭化物中量含む
17. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり・粘性有
18. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有
19. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有
20. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり欠・粘性無
21. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有、
焼土粒少量含む
22. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、
焼土塊多量含む
23. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり有、粘性極めて有
24. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有



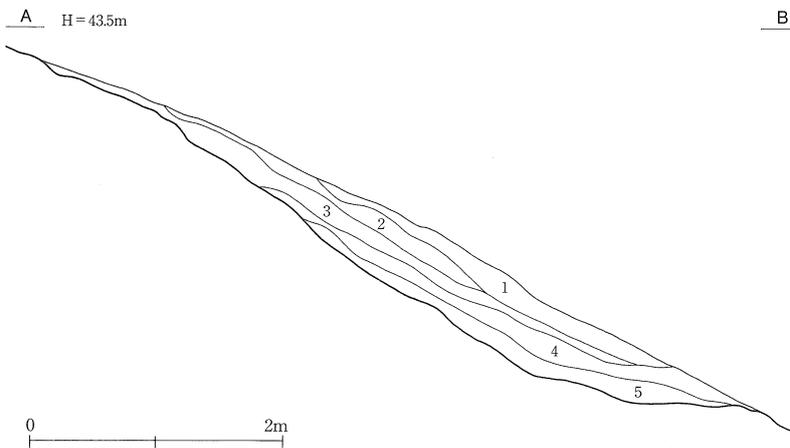
SI124 カマド



SI124 カマド

1. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、黄褐色土ブロック多量
2. 10YR3/3 (暗褐) しまり無、粘性有
3. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無
4. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性有、
暗褐色土・焼土ブロック少量、炭化物微量
5. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性有、
暗褐色土・焼土ブロック多量
6. 10YR4/6 (赤褐) 焼土ブロック
7. 10YR5/8 (黄褐) しまり極めて有、粘性有、崩落構築土
8. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有、崩落した弱焼土
9. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有、焼土粒・炭化物微量
10. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有
11. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、焼土塊少量

SXH13



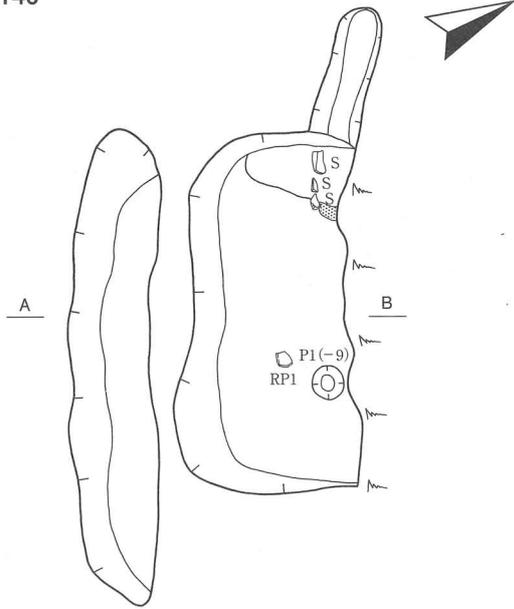
B

SXH13

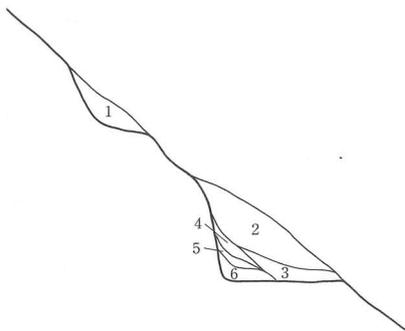
1. 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまり有、粘性欠、
炭化物中量混入
2. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性欠、
炭化物少量混入
3. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性欠、
焼土粒・炭化物少量混入
4. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり有、
粘性有、炭化物少量混入
5. 2.5Y3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有、
炭化物少量混入

第162図 SI124竪穴住居跡・SXH13廃滓場

SI140



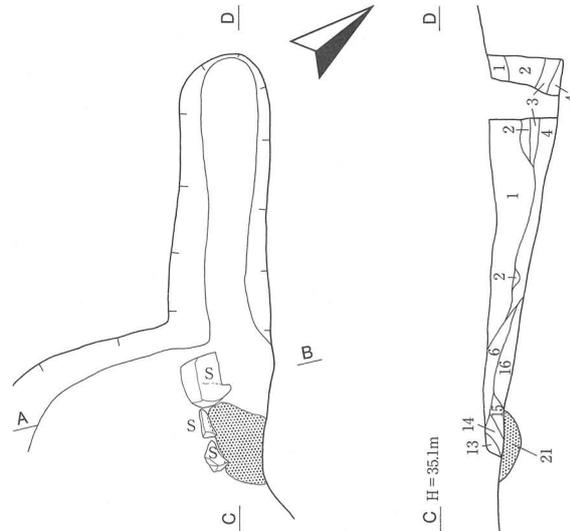
A H=37.3m



SI140

1. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性やや有
2. 10YR3/2 (黒褐) しまり有、粘性やや有
3. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有
4. 10YR2/2 (黒褐) しまり欠 粘性有
5. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性極めて有
6. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有

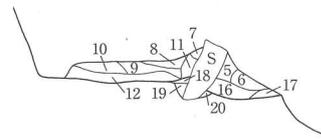
SI140 カマド



A H=35.3m

B

C H=35.1m



0 50cm

SI140 カマド

1. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有
2. 10YR2/2 (黒褐) しまり極めて有、粘性有
3. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性有
4. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性有
5. 10YR5/8 (黄褐) しまりやや有、粘性有、焼土塊少量
6. 10YR7/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有、焼土塊少量
7. 10YR2/3 (黒褐) しまり欠 粘性有
8. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有
9. 7.5YR4/4 (褐) しまり・粘性有、焼土粒・炭化物少量
10. 7.5YR5/6 (赤褐) カマド内壁の崩落焼土
11. 10YR6/6 (明黄褐) しまり欠 粘性極めて有
12. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
13. 10YR3/4 (暗褐) しまり欠 粘性有
14. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性有、炭化物少量
15. 7.5YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性有
16. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有、炭化物少量
17. 10YR4/4 (褐) しまり欠 粘性有
18. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性有、袖部構築土
19. 2.5Y4/4 (オリブ褐) しまり欠 粘性有、芯材の抜き取り痕
20. 10YR3/3 (暗褐) しまり欠 粘性有、材の抜き取り痕
21. 7.5YR5/6 (明褐) 燃焼部焼土

第163図 SI140竪穴住居跡

S X I 47 A 工房跡・S X W 50・51 鉄生産関連炉跡、S X I 47 B 工房跡・S X W 55 A・B 鉄生産関連炉跡、
S I 141 A～C、142 A～D 竪穴住居跡（第164～169図、遺物図版29・30・70・71・96・97・123・124、
写真図版121～128・229・230・256・265・283・284・304・305・319・320）

本遺構群はF区赤25B区中央の東谷側に傾斜のきつい洞状地形の北部、ⅧB-5・6 o・p・q グリッドに位置し、検出面はⅢ～Ⅵ層上面である。検出状況としては、平成10年度試掘調査において黒色土中から多量の鉄滓類と、鍛造剥片の広がり2ヶ所が視認されていたもので、当初は等高線と平行する北東-南西方向の長軸約13m、短軸は北半が西山側に広く約7m、南側約4mの不鮮明で長大なプランを検出したものである。特に幅のある北部は確実に2棟以上の重複と考えられたが、埋土のほとんどが人為的堆積のためプランが特定できなかった。いずれ何棟かの重複を想定し、等高線と平行する長軸と北側の山側にベルトを2本、等高線と直行するベルトを南北と中央に3本設置して精査を行ったところ、精査過程において高低差のある床面に達することで、上下左右に重複するプランが、そして断面観察で新旧関係が順次確認されたものである。把握できた新旧関係は、(新) S X I 47 B・S X W 55 A・B→S X I 47 A・S X W 50・51→S I 141 A→S I 141 B→S I 141 C→S I 142 A→S I 142 B (古)と、(新) S X I 47 B→S X I 47 A→S I 142 C→S I 142 D (古)であるが、S I 141 A～C及びS I 142 A・BとS I 142 C・Dとの新旧関係は直接的な切り合いがないため不明である。またS X I 47 BはS K 287に、S I 141 AはS W 97に、S I 141 CはS W 107に切られる。

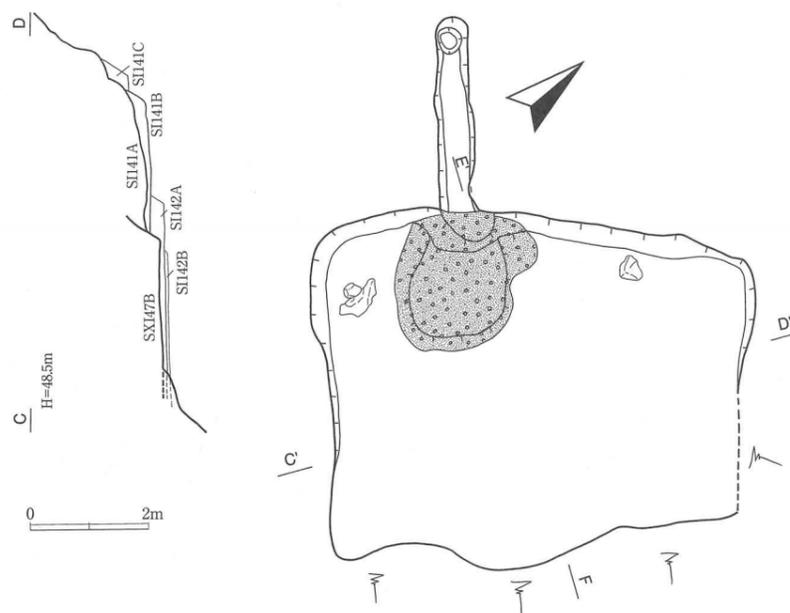
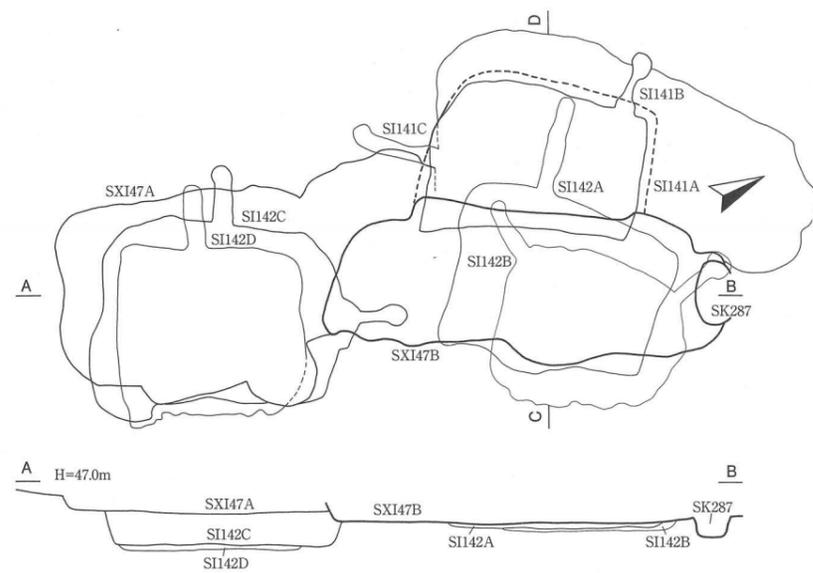
なお、本遺構群の精査は2ヵ年に亘り、初年度はS X I 47 A・BとS I 141 A～Cの5棟、残り4棟は次年度に行ったものである。以下新旧順に記述する。

S X I 47 Bは、上記のとおり試掘調査で鍛造剥片が視認されていたもので、遺構群北部谷側のⅧB-6 o・p グリッドに位置し、検出面はⅢ～Ⅵ層上面である。本遺構はS I 141 B床面でプランを確認した。北端はS K 287により、西山側壁の中央上位はS I 141の掘り下げを同時進行させたため、また谷側は崩落により消失しており、全容は不明だが、残存部分からの平面形・規模は、等高線と平行する北東-南西の長軸約6.5m、短軸約2mほどの隅丸長方形を呈し、床面積は約13㎡ほどと推定される。壁は外傾して立ち上がり、S I 141と重複する上位部分では崩落により外反していた。壁高は断面観察から山側の最大約60cmから谷側に向かい低くなる。埋土は上位のマサ土を多く含む人為的な黄褐色系土と下位の暗褐色系土に大別される。残存する床面は概ね平坦で、S I 142部分が貼床とされていた。床面施設としては中央谷側で試掘時に周辺で鍛造剥片が視認されていたS X W 55 A・Bの2基と山側に地床炉2基を検出した。

S X W 55 Aの平面形・規模は、径約45cmの略円形で、深さ約8cmの丸底鍋形、S X W 55 Bの平面形・規模は、開口部約15×10cmの略楕円形で、深さ約5cmの丸底鍋形を呈し、埋土はいずれも上位が人為的な褐色系土、下位が鍛造剥片を少量含む黒色土である。底面は黒く蒸焼状態で堅く締まり、周囲は部分的に火熱により弱く赤色変化していた。地床炉A・Bは100×40～70cmの不整なダルマ形で、火熱により厚さ約5～10cmほどが赤色変化していたもので、堅く焼き締まっていた。

遺物は、地床炉付近の埋土下位から土師器の甕形土器片が少量と坏形土器片2点、羽口はS X W 55 B検出面からほぼ完形の羽口1点(125)と周辺埋土下位から破片約10点、B炉上と埋土中から磨石約10点、鉄製品が埋土から刀子・リング状各1点と不明品9点、鍛冶滓類が埋土から約2.5kgとS X W 55 A・Bからそれぞれ少量と鍛造剥片が多量に出土した。

S X I 47 Aは、やはり試掘調査で鍛造剥片が視認されていたもので、遺構群南部ⅧB-6 p グリッド杭を中心に位置し、検出面はⅢ～Ⅵ層上面である。北側はS X I 47 Bにより、山側西壁上位と谷側が崩落により消失しているため全容は不明だが、遺存部分での平面形・規模は、長軸が等高線と平行する北東-南西にあ



SXI47B

- 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、砂質、炭化物微量
- 7.5YR3/3 (暗褐) 廃棄焼土
- 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性無、砂質
- 10YR3/3 (暗褐) しまり、粘性やや有、炭化物微量
- 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無、砂質
- 5YR4/8 (赤褐) 焼土

SI141A

- 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質
- 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質、地山ブロック少量
- 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質、地山土中量
- 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無、砂質
- 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質、マサ土少量
- 10YR3/2 (黒褐) しまり有、粘性無、炭化物微量
- 10YR6/2 (灰黄褐) しまり有、粘性無、マサ土
- 10YR4/2 (灰黄褐) しまり有、粘性無、砂質、炭化物微量
- 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無、焼土粒微量
- 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性無、炭化物微量
- 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、マサ土ブロック
- 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、マサ土少量
- 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無、炭化物微量
- 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性無、マサ土粒・炭化物ブロック微量
- 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質、炭化物微量
- 10YR17/1 (黒) 炭化物層
- 10YR5/6~5YR4/8 (黄褐~赤褐) しまり極めて有、粘性有、内側焼土化、カマド構築土
- 7.5YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性やや有、弱い焼土、カマド天井部崩落土
- 5YR4/4 (にぶい赤褐) カマド燃焼部焼土

SI141B

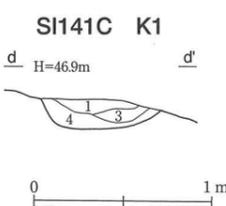
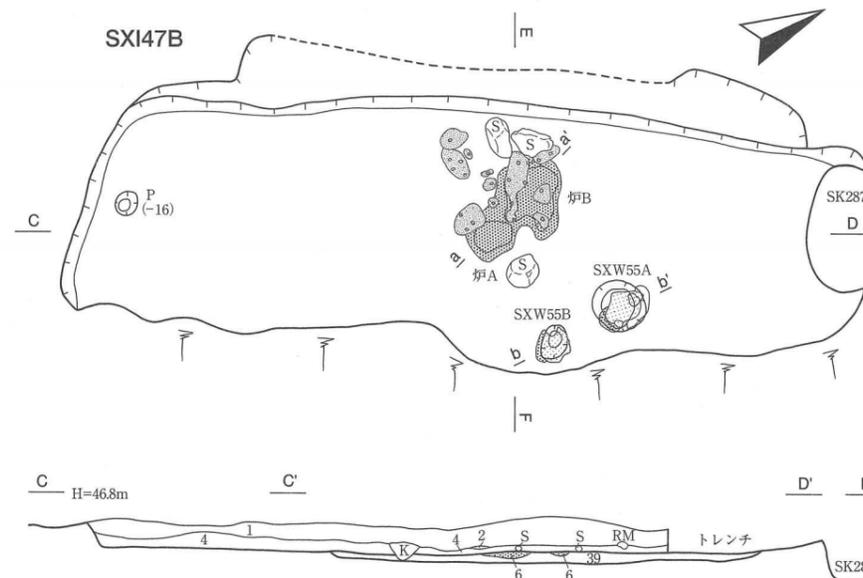
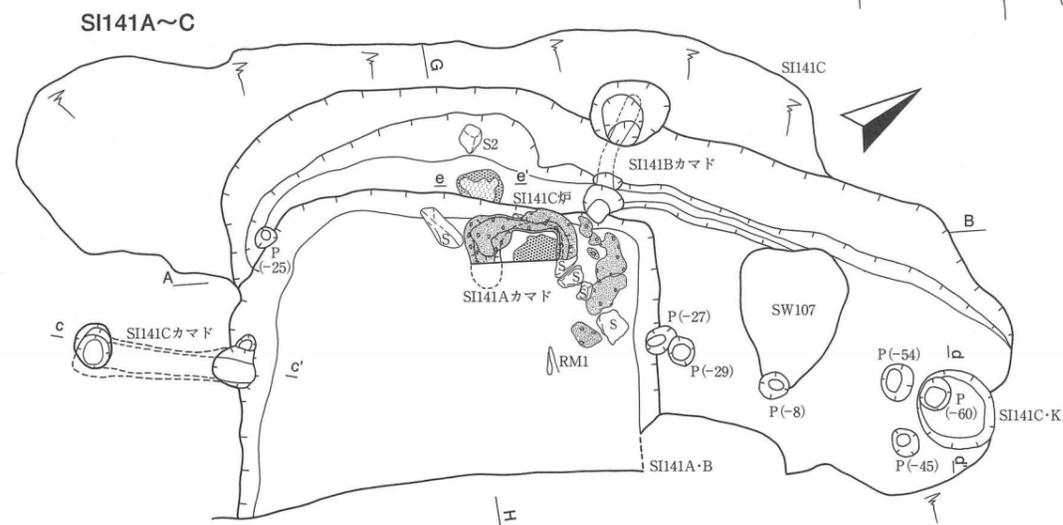
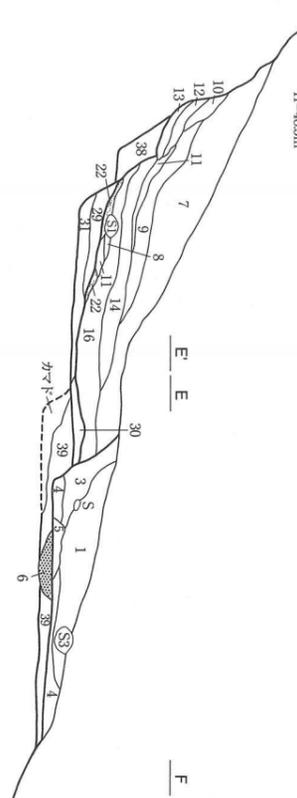
- 10YR5/8 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
- 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質、炭化物微量
- 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無
- 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭化物微量
- 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性やや有、黄褐色粘土少量、炭化物微量
- 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性無

SI141C

- 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質、炭化物微量
- 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、砂質
- 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質
- 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性やや有、炭化物少量
- 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、砂質
- 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無
- 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、マサ土少量

SI142A

- 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性やや有、炭化物微量

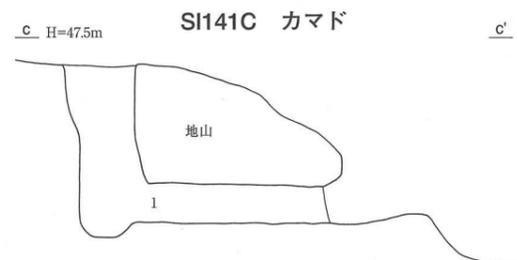


- SI141C K1
- 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有、炭化物微量、地山ブロック少量
 - 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性有
 - 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有

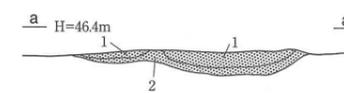


SI141C 炉

- SI141C 炉
- 10YR2/1 (黒) 炭化物層
 - 5YR4/6 (赤褐) 焼土

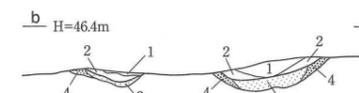


SI141C カマド



- SXI47B 炉A・B
- 5YR4/8 (赤褐) 強い焼土
 - 7.5YR3/4 (暗褐) 弱い焼土

- SI141C カマド
- 10YR3/4~4/4 (暗褐~褐) しまり極めて有、粘性有、黄褐色土ブロック多量



- SXW55A・B
- 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性無、砂質
 - 10YR2/1 (黒) しまりやや有、粘性有、炭化物微量、鍛造剥片少量
 - 10YR17/1 (黒) 弱い還元部
 - 7.5YR4/4 (褐) 弱い焼土

第164図 SI141・142竪穴住居跡・SXI47工房跡(1)・SXW55鉄生産関連炉跡

り、長軸約4.5m、短軸3.5mほどの隅丸長方形を呈し、床面積は約13㎡ほどと推定される。北端の山側には半径約1mほどの略半円形で高低差約10cmほどのテラス状の張り出しがある。遺存する壁は鋭角的に外傾して立ち上がり、山側上位は広く崩落していた。壁高は山側の最大約40cmから谷側に向かい低くなる。埋土は流入と崩落の繰り返しによる黒色系土と褐色系土の自然堆積である。床面は概ね平坦で、床面施設としては谷側にK1・2の土坑2基とその間にS X W50、北端にS X W51と付属施設と考えられるK2土坑1基、南北両側の中央に地床炉A・Bの各1基、山側壁と平行する等間隔の柱穴4基とテラスに1基を検出した。K1土坑は谷側が崩落しているが、平面形・規模は径約150cmの略円形で、深さ約65cmの鍋形を呈する。埋土は炭化物を全体的に含む黒色土系土がレンズ状となる自然堆積である。K2土坑もやはり谷側が崩落しているが、平面形・規模は径約120cmの略円形で、深さ約55cmの鍋形を呈する。埋土はK1と同様である。いずれも埋土から微量の鍛造剥片が出土した。地床炉Aは、100×50～90cmの不整なダルマ形で、火熱により厚さ約12cm、地床炉Bは70×50cmの不整形で火熱により厚さ約8cmほどが赤色変化していたもので、堅く焼き締まっていた。

S X W50は、平面形・規模は径約22cmの略円形で、断面形は深さ約4cmの丸底鍋形を呈する。埋土は多量の炭化物と鍛造剥片を微量含む黒色土の単層である。掘り込み内面は全体的に黒く蒸焼状態で堅く締まり、周囲は火熱により弱く赤色変化していた。

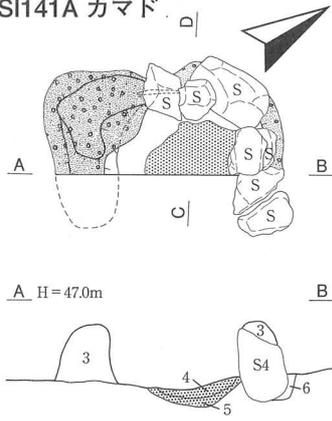
S X W51は、北東端がS X I 47Bに破壊され、また西半は焼土等が顕著でなかったため底面の判断が付きず掘りすぎてしまい全容は不明だが、平面形・規模は約100×60cmの略楕円形で、断面形は深さ約10cmの丸底鍋形を呈すると推定され、埋土は基本的には炭化物と鍛造剥片を少量含む黒色土の単層である。底面中央は火熱により弱く赤色変化し、斑点状の黒い蒸焼状態が僅かに認められた。付属するK2土坑はS X W51の山側に隣接し、平面形・規模は径約40cmの円形で、深さ約10cmほどの鍋形を呈する。埋土は上・下位に黄褐色系土と中位に黒色土で、中・下位には鍛造剥片を多量に含み、状況から鉄砧石の設置穴と考えられる。

遺物は、埋土から土師器の甕形土器片が少量と須恵器の甕形土器片1点、羽口片5点、炉壁片微量、砥石と磨石各1点、鉄製品の不明品1点、鍛冶滓類が埋土から約1.5kgとK1・2及びS X W50からそれぞれ少量とS X W51及びK2から約2kg、そしてS X W50・51関連から多量の鍛造剥片が出土した。

S I 141 Aは、遺構群北部山側のⅧB-60グリッドを中心に位置し、検出面はⅥ層上面である。S I 141 C床面でプランを確認したが、埋土が人為的堆積であったことと結果的に床面がフラットではなかったため、ベルト部分とカマド付近以外はB住居床面まで掘削してしまい、また谷側はS X I 47Bによって消失しており、全容は不明である。主に断面観察と残存部分からの推定となるが、B住居跡の窪みを利用したものと思われ、平面形・規模は、一辺約3.5mほどの隅丸長方形を呈し、床面積は約8㎡ほどと推測される。主軸方位はN-45°-Wである。壁は外傾して立ち上がり、山側は崩落してかなり外反する。壁高は断面観察から山側の最大約120cmから谷側に向かい低くなる。埋土はおよそ20層に細分されるが、全体的にマサ土と黄褐色土を多く含む褐色系土の人為的堆積で、床上には部分的に炭化物層が認められた。床面はB住居跡が一部自然崩落と人為的に埋めた状態をそのまま使用したと思われる、幾分凹凸があり、山側から谷側に傾斜していた。床面施設については掘り下げにより不明となってしまった。

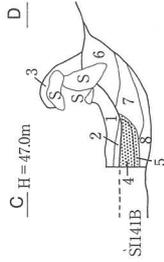
カマドは北西壁際の北寄りに付設されていたが、住居外に煙道及び煙出しを有しないものであった。掘り下げにより炊き口を一部破壊してしまったが、遺存状態はかなり良好で、人頭大から拳大の石を芯材として黄褐色粘土で馬蹄形に構築されていた。燃焼部はおおよそ平坦で、火熱により約30cmほどの広がり、厚さ約7cmほどが赤色変化していた。

SI141A カマド



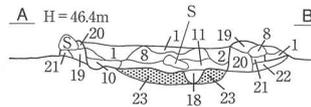
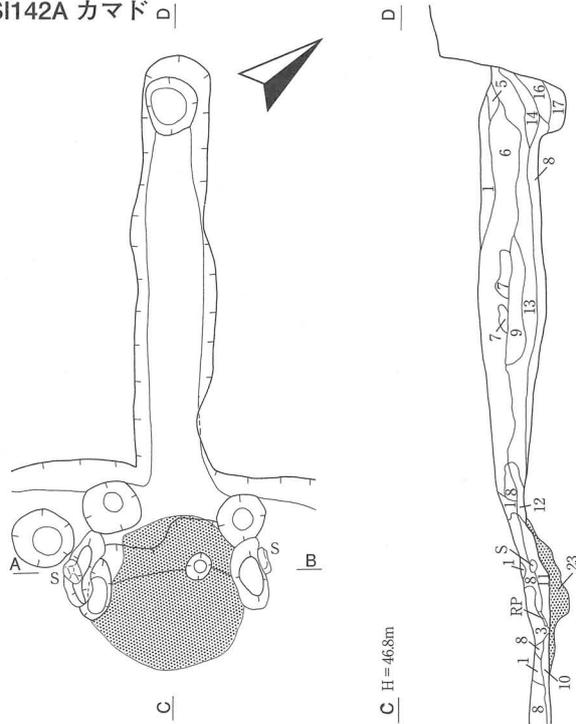
SI141A カマド

1. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無、炭化物微量
2. 7.5YR4/4 (褐) しまりやや欠、粘性やや有、弱い焼土
3. 10YR5/8 (黄褐) しまり極めて有、粘性有、カマド構築土
4. 5YR4/3 (にぶい赤褐) 燃焼部焼土
5. 7.5YR5/6 (黄褐)
6. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、マサ土少量
7. 10YR3/4 (暗褐) しまり極めて有、粘性無、砂質、炭化物微量
8. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性やや有、黄褐色ブロック・炭化物微量



SI141B
埋土

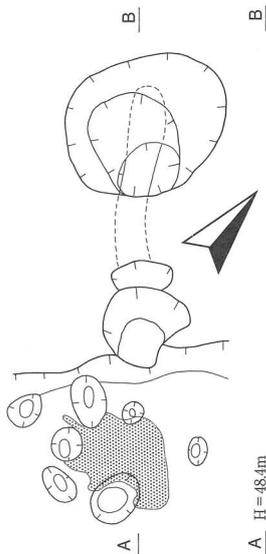
SI142A カマド



SI142A カマド

1. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性有、炭化物微量
2. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、焼土ブロック少量
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性やや有、カマド構築土の崩落
4. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質、炭化物・焼土ブロック微量
5. 10YR5/8 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
6. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性無、炭化物少量、焼土粒微量
7. 10YR7/2 (にぶい黄橙) マサ土ブロック
8. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性有、カマド構築土崩落
9. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無
10. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有、炭化物・焼土粒微量
11. 7.5YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有、炭化物・焼土粒微量
12. 7.5YR3/3 (暗褐) しまり・粘性やや有
13. 10YR3/1~3/3 (黒褐~暗褐) しまりやや有、粘性無
14. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性やや有、褐色土ブロック少量
15. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり・粘性無、砂質
16. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性無
17. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり・粘性無、砂質
18. 7.5YR4/4 (褐) しまり無、粘性有
19. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性やや有
20. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性有
21. 10YR3/4 (暗褐) しまり極めて有、粘性有
22. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性有
23. 5YR5/8 (明赤褐) 燃焼部焼土

SI141B カマド



SI141B カマド

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質
2. 7.5YR3/2 (黒褐) しまり無、粘性有、炭化物多量
3. 7.5YR3/2 (黒褐) しまり無、粘性有、炭化物・焼土粒微量
4. 5YR4/4 (赤褐) 焼土



第165図 SI141・142竪穴住居跡 (2)

遺物は、土器は主に埋土から土師器の甕形土器 1 個体分 (337) と破片が少量、坏形土器片 3 点、埋土から羽口片約 10 点、炉壁片数点、要石 1 点 (134)、鉄製品が床面から折り曲げられた完形の直刀 1 点 (105) と完形の刀子 1 点 (106)、埋土からほぼ完形の刀子と鉄鏃各 1 点 (107・108) と鍛冶滓が微量出土した。

S I 141 B は、遺構群北部山側のⅧ B-6 o グリッドを中心に A 住居跡下位に位置し、検出面はⅥ層上面である。S I 141 C 床面でプランを確認した。谷側は S X I 47 B によって消失しており、全容は不明だが、残存部から平面形・規模は、一辺約 3.5m ほどの隅丸方形を呈し、主軸方位は N-40° - W、床面積は約 9 m² ほどと推測される。壁は外傾して立ち上がり、山側は崩落して外反していた。壁高は断面観察から山側の最大約 150cm から谷側に向かい低くなる。埋土はおよそ 10 層に細分されるが、炭化物混じりの黒色土の自然堆積最下層を除き、全体的にマサ土と黄褐色土を多く含む褐色系土の人為的堆積である。床面は平坦で堅締、床面施設は検出されなかった。

カマドは北西壁の端に付設されていたが、本体部は消失しており、袖部芯材の石や土器などは認められないが、抜き取りの小ピット数基が検出された。燃烧部はおよそ平坦で火熱により約 40cm ほどの広がり、厚さ約 5 cm ほどが赤色変化していた。煙道は A・C 住居跡の同時精査によって一部不明となってしまったが、状況から奥行き約 110cm、径約 20cm の削り貫き式で、外側に向かい緩い上り勾配で煙出しよりも奥まで掘り込まれていた。煙出しピットは径約 20cm の略円形で深さは約 90cm が残る。

遺物は、埋土から土師器の甕形土器片が少量と羽口片約 10 点、鍛冶滓が微量出土した。

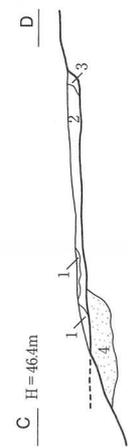
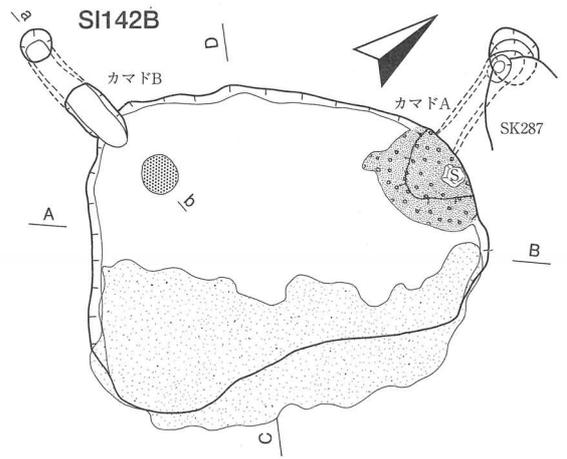
S I 141 C は、遺構群北部山側のⅧ B-6 o グリッドを中心に位置し、検出面はⅥ層上面である。A・B 住居跡の精査時に南西側の壁面でカマド煙道を検出し、竪穴住居跡と判明した。南半は A・B 住居跡に、北半の谷側は崩落と S X I 47 B によって消失しており、全容は不明だが、残存部から平面形・規模は、長軸が等高線と平行する南西-北東方向の長軸約 6 m、短軸約 3 m 前後の隅丸長方形を呈すると思われる。主軸方位は S-40° - W、床面積は約 18m² ほどと推測される。壁は外傾して立ち上がり、山側は崩落によりかなり外反していた。壁高は山側の最大約 150cm から谷側に向かい低くなる。埋土は全体的にマサ土と黄褐色土を多く含む褐色系土の人為的堆積である。床面は平坦で堅締、床面施設としては北端で径約 55cm の略円形で深さ約 15cm の鍋形の K 1 土坑 1 基と南西壁際で径約 45cm の略円形で厚さ約 2 cm ほどが赤色変化した地床炉 1 基を検出した。

カマドは南西壁に付設されていたが、本体部は A・B 住居跡によって消失しており、煙道と煙出しのみ遺存する。残存部では煙道は奥行き約 150cm、径約 30cm の削り貫き式で、ほぼ水平に掘り込まれ、煙出しピットは径約 35cm の略円形で深さは約 80cm を測る。

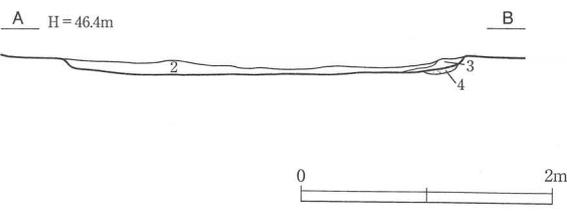
遺物は埋土から土師器甕形土器片と鍛冶滓が微量、K 1 土坑から坏形土器片 1 点と鍛冶滓が微量出土した。

S I 142 A は、遺構群北部谷側のⅧ B-6 o グリッドを中心に S X I 47 B 工房跡下位に位置し、検出面はⅢ～Ⅵ層上面である。S X I 47 B と S I 141 B 床面でプランを確認した。谷側は崩落により消失しており、全容は不明だが、残存部から平面形・規模は一辺約 3.5m ほどの隅丸方形を呈し、主軸方位は N-45° - W、床面積は約 9 m² ほどと推定される。残存する壁は外傾して立ち上がり、壁高は山側最大約 20cm から谷側に向かい低くなる。埋土は暗褐色土の単層である。床面は概ね平坦で堅締で、S I 142 B 部分が貼床とされていた。床面施設は検出されなかった。

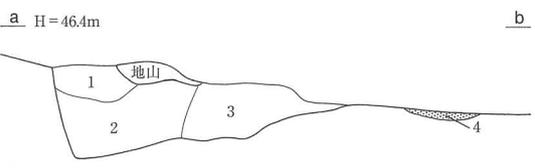
カマドは北西壁の南よりに付設されているが、本体天井部は崩落し、袖部は架構・芯材として石や土器などは認められないが、抜き取りの小ピット 3 基が検出され、黄褐色土で構築されていた。燃烧部は煙道側が一段約 5 cm ほど高くなっているが、およそ平坦で、火熱により径約 60cm ほどの略円形で、厚さ約 8 cm ほど



- SI142B
- 1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、マサ土少量
 - 2. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性無
 - 3. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり極めて有、粘性無、マサ土
 - 4. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、黄褐色ブロック少量、貼床
- SI142A
貼床土

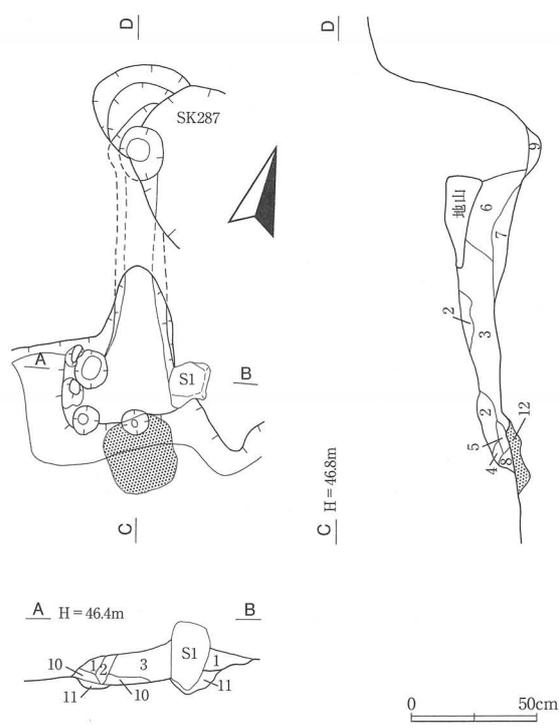


SI142B カマドB



- SI142B カマドB
- 1. 10YR3/1 (黒褐) しまり極めて有、粘性有
 - 2. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性無
 - 3. 10YR5/6 (黄褐) 焼土ブロック、黄褐色土粘多量、人為堆積
 - 4. 5YR4/6 (赤褐) 燃焼部焼土

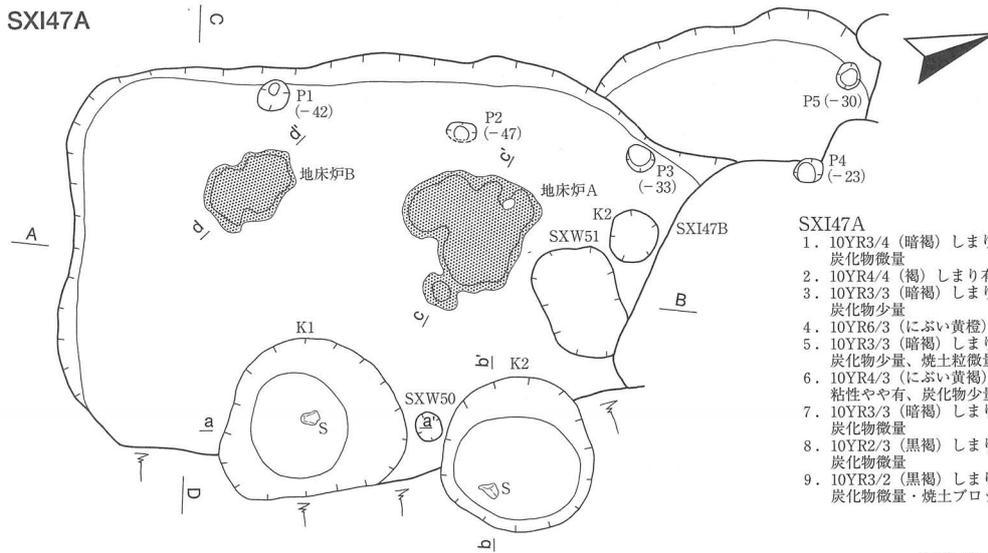
SI142B カマドA



- SI142B カマドA
- 1. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性やや有、黄褐色土粒少量
 - 2. 10YR6/8 (明黄褐) しまり極めて有、粘性有
 - 3. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性やや有、黄褐色土粒少量
 - 4. 5YR4/8 (赤褐) カマド内壁の焼土
 - 5. 7.5YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性無、焼土粒微量
 - 6. 10YR4/6 (褐) しまり無、粘性有
 - 7. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性無
 - 8. 7.5YR4/6 (褐) しまり有、粘性無、焼土粒少量
 - 9. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無
 - 10. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性やや有、黄褐色土・焼土小ブロック少量
 - 11. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
 - 12. 5YR4/6 (赤褐) 燃焼部焼土

第166図 SI142B竪穴住居跡 (3)

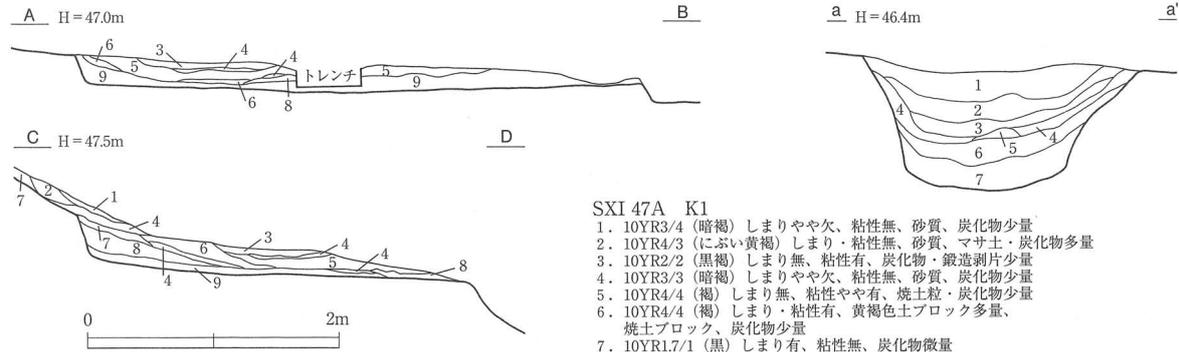
SXI47A



SXI47A

1. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性やや有、炭化物微量
2. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無、マサ土少量
3. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有、炭化物少量
4. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
5. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有、炭化物少量、焼土粒微量
6. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有、炭化物少量
7. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有、炭化物微量
8. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性有、炭化物微量
9. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有、炭化物微量・焼土ブロック微量

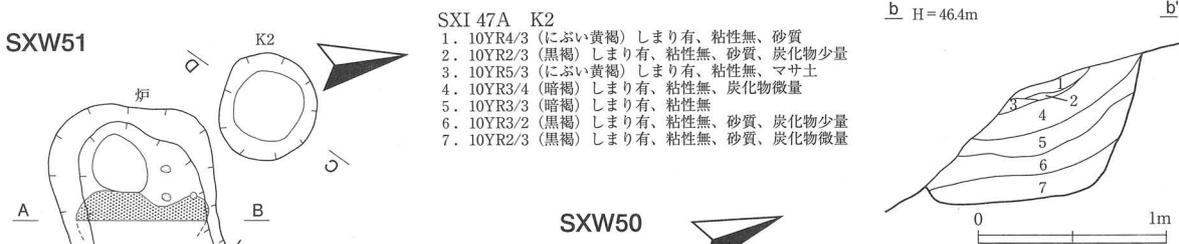
SXI47A K1



SXI 47A K1

1. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性無、砂質、炭化物少量
2. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性無、砂質、マサ土・炭化物多量
3. 10YR2/2 (黒褐) しまり無、粘性有、炭化物・鍛造剥片少量
4. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性無、砂質、炭化物少量
5. 10YR4/4 (褐) しまり無、粘性やや有、焼土粒・炭化物少量
6. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有、黄褐色土ブロック多量、焼土ブロック、炭化物少量
7. 10YR1.7/1 (黒) しまり有、粘性無、炭化物微量

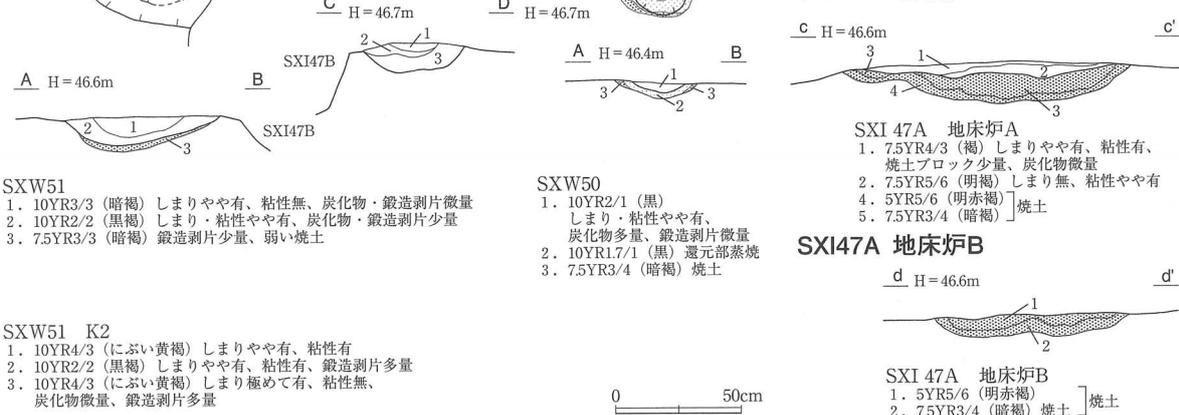
SXI47A K2



SXI 47A K2

1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質
2. 10YR2/3 (黒褐) しまり有、粘性無、砂質、炭化物少量
3. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、マサ土
4. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無、炭化物微量
5. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性無
6. 10YR3/2 (黒褐) しまり有、粘性無、砂質、炭化物少量
7. 10YR2/3 (黒褐) しまり有、粘性無、砂質、炭化物微量

SXI47A 地床炉A



SXI 47A 地床炉A

1. 7.5YR4/3 (褐) しまりやや有、粘性有、焼土ブロック少量、炭化物微量
2. 7.5YR5/6 (明褐) しまり無、粘性やや有
4. 5YR5/6 (明赤褐) 焼土
5. 7.5YR3/4 (暗褐) 焼土

SXI47A 地床炉B

1. 5YR5/6 (明赤褐)
2. 7.5YR3/4 (暗褐) 焼土

第167図 SXI47A工房跡 (2)・SXW50・51鉄生産関連炉跡

どが赤色変化していた。煙道と煙出しの上部はS I 141Bによって掘削されて消失しているが、煙道の奥行きは約170cm、幅約30cmで、水平に掘り込まれ、煙出しピットは径約25cmの略円形で煙道よりも深く、深さ約50cmが残る。

遺物は、土器は埋土及びカマド煙道から土師器の甕形土器片約20点、埋土から羽口片5点、砥石片1点と鍛冶滓が極めて微量出土した。

S I 142Bは、遺構群北部谷側のⅧB-6oグリッドを中心にS I 142Aの下位に位置し、検出面はⅢ～V層上面である。S I 142A床面でプランを確認した。谷側は崩落により消失して全容は不明だが、貼床範囲と残存部から平面形・規模は一辺約3mほどの隅丸方形を呈し、床面積は約8㎡ほどと推定される。カマドは造り替えと思われるA・Bの2基あり、主軸方位は、Aがおよそ北方向、Bがおよそ西方向である。残存する壁は外傾して立ち上がり、壁高は山側最大約7cmから谷側に向かい低くなる。埋土は基本的には暗褐色土の単層である。床面は概ね平坦で堅締で、谷側半分が貼床とされていた。床面施設は検出されなかった。

カマドAは北隅に付設され、本体天井部は崩落し、袖部は芯材石1個と抜き取りの小ピット2基が検出され、黄褐色土で構築されていた。燃焼部は煙道側が一段約5cmほど高くなっているが、およそ平坦で火熱により径約30cmほどの略円形で、厚さ3cmほどが赤色変化し、煙道側に支脚抜き取り痕と思われる小ピットがある。煙道は奥行きは約120cm、径約20cmの削り貫き式で、先端が外側に向かい緩く傾斜していた。煙出しピットは東側がS K 287に切られているが、径約40cm前後の略円形で、深さ約60cmが残る。カマドBは西隅に付設され、煙道部と燃焼部焼土が残るのみである。燃焼部焼土は火熱による径約30cmほどの略円形で、厚さ約3cmほどが残る。煙道は奥行きは約120cm、径約25cmの削り貫き式で、外側に向かい緩く傾斜していた。煙出しピットは径約25cm前後の略円形で、深さ約35cmが残る。

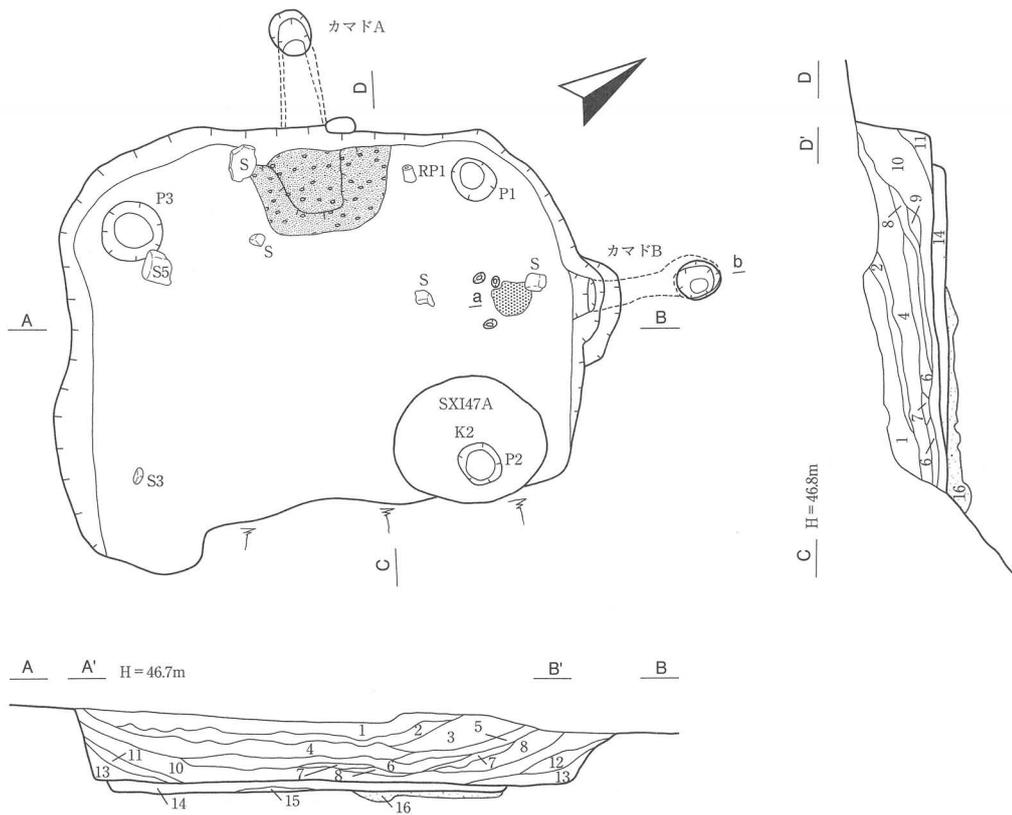
遺物は、カマド袖石の砥石1点(135)と貼床から刀子1点(109)、磨石1点(136)、埋土からほぼ完形の鏝1点(110)と鍛冶滓が微量出土した。

S I 142Cは、遺構群南部のⅧB-6pグリッドを中心にS X I 47A工房跡下位に位置し、検出面はⅢ～VI層である。S X I 47A床面でプランを確認した。谷側が崩落により消失しているため全容は不明だが、残存部から平面形・規模は一辺約4mほどの隅丸方形を呈すると推定され、床面積は約11㎡が残る。カマドは造り替えと思われるA・Bの2基あり、主軸方位は、AがN-60°-W、BがN-30°-Eである。残存する壁は鋭角的に外傾して立ち上がり、壁高は山側最大約60cmから谷側に向かい低くなる。埋土はおよそ10層に細分される褐色系土と黒色系土が互層となる人為的堆積である。床面は概ね平坦で堅締で、S I 142D部分が貼床とされていた。床面施設としては配置から主柱穴と考えられる柱穴3基を検出した。

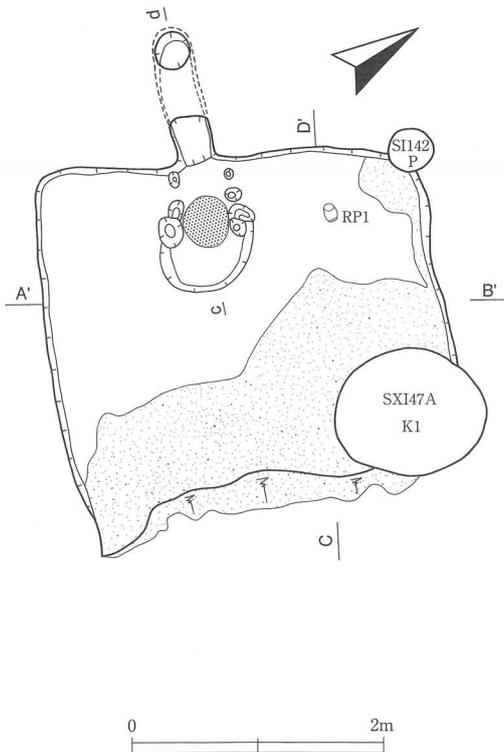
カマドAは北西壁の中央に付設されていたが、本体部は崩落し、袖部芯材の石や土器などは認められないが、抜き取りの小ピット6基が検出された。燃焼部は径約100cmほどの略円形で、深さ約5cmほどに掘り窪められ、煙道近くが火熱により40×30cmほどの広がり、厚さ5cmほどが赤色変化していた。煙道は奥行き約110cm、径約30cmの削り貫き式で、外側に向かい下り勾配となっていた。煙出しピットは、径約35cmの略円形で深さ約110cmを測る。カマドBは北東壁の西よりに付設され、煙道部と燃焼部焼土が残るのみである。燃焼部焼土は火熱による径約30cmほどの略円形で、厚さ約5cmほどが残る。煙道は奥行き約115cm、径約35cmの削り貫き式で、外側に向かい緩く傾斜していた。煙出しピットは径約30cm前後の略円形で、深さ約50cmが残る。

遺物は、土器は埋土から土師器の甕形土器片少量と坏形土器片数点、須恵器の甕形土器片数点、カマド及び床面から羽口2点(120・121)と砥石及び磨石各2点、鉄製品は床面からほぼ完形の鉄鏝3点(111～113)

SI142C



SI142D



SI142C

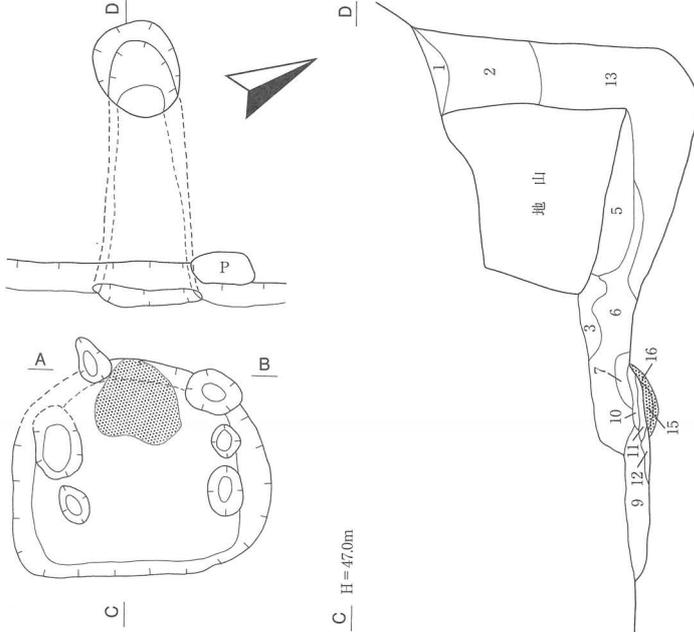
1. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性無、砂質、炭化物微量
2. 10YR4/3 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、砂質、マサ土中量
3. 10YR3/4 (暗褐) しまり極めて有、粘性無、砂質、炭化物微量
4. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性無、砂質
5. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無、炭化物極めて微量
6. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質、マサ土粒少量
7. 10YR2/3 (黒褐) しまり有、粘性無、やや砂質
8. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質、マサ土多量
9. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有、地山・炭化物少量
10. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有
11. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有、焼土粒微量
12. 10YR2/3 (黒褐) しまり有、粘性やや有、炭化物微量
13. 10YR3/2 (黒褐) しまり有、粘性やや有、褐色土ブロック微量

SI142D

14. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性やや有、炭化物微量
15. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有、黄褐色ブロック少量
16. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性無、貼床

第168図 SI142C・D 竪穴住居跡 (4)

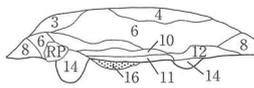
SI142C カマドA



SI142C カマドA

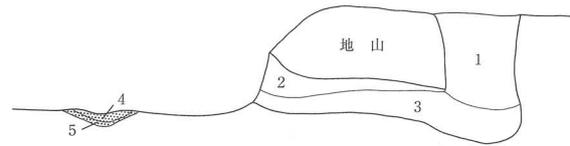
1. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性有
2. 10YR2/2 (黒褐) しまり無、粘性有
3. 10YR3/4 (暗褐) しまり無、粘性有
4. 10YR3/3 (暗褐) しまり無、粘性有
5. 10YR3/3 (暗褐) しまり無、粘性有
6. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性有、地山ブロック多量、焼土ブロック微量
7. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性有、カマド構築土崩落、下位が焼土化
8. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有
9. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有
10. 7.5YR4/4 (褐) しまり無、粘性有、弱い焼土
11. 7.5YR5/4 (にぶい褐) しまり無、粘性有、弱い焼土
12. 7.5YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性有、黄褐色土少量、焼土ブロック微量
13. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性無
14. 10YR3/2 (黒褐) しまり無、粘性やや有
15. 5YR5/6 (明赤褐)
16. 7.5YR4/4 (褐) 燃焼部焼土

A H=46.2m



SI142C カマドB

a H=46.4m

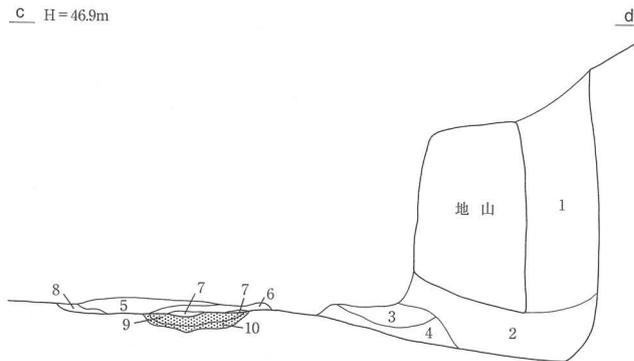


SI142C カマドB

1. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性有、炭化物微量
2. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性やや有、黄褐色土・焼土粒微量
3. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有、黄褐色土ブロック微量
4. 5YR5/6 (明赤褐)
5. 7.5YR3/4 (暗褐) 燃焼部焼土

SI142D カマド

c H=46.9m



SI142D カマド

1. 10YR3/3 (暗褐) しまり無、粘性やや有、炭化物微量
2. 10YR3/4 (暗褐) しまり無、粘性有
3. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有
4. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有、黄褐色土ブロック・焼土ブロック多量
5. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、黄褐色土ブロック少量、炭化物微量
6. 7.5YR4/4 (褐) しまり無、粘性有、焼土粒多量、炭化物少量
7. 7.5YR5/4 (にぶい褐) しまり無、粘性有
8. 10YR2/2 (黒褐) しまり無、粘性有、炭化物微量
9. 5YR5/6 (明赤褐)
10. 7.5YR3/4 (暗褐) 燃焼部焼土

0 50cm

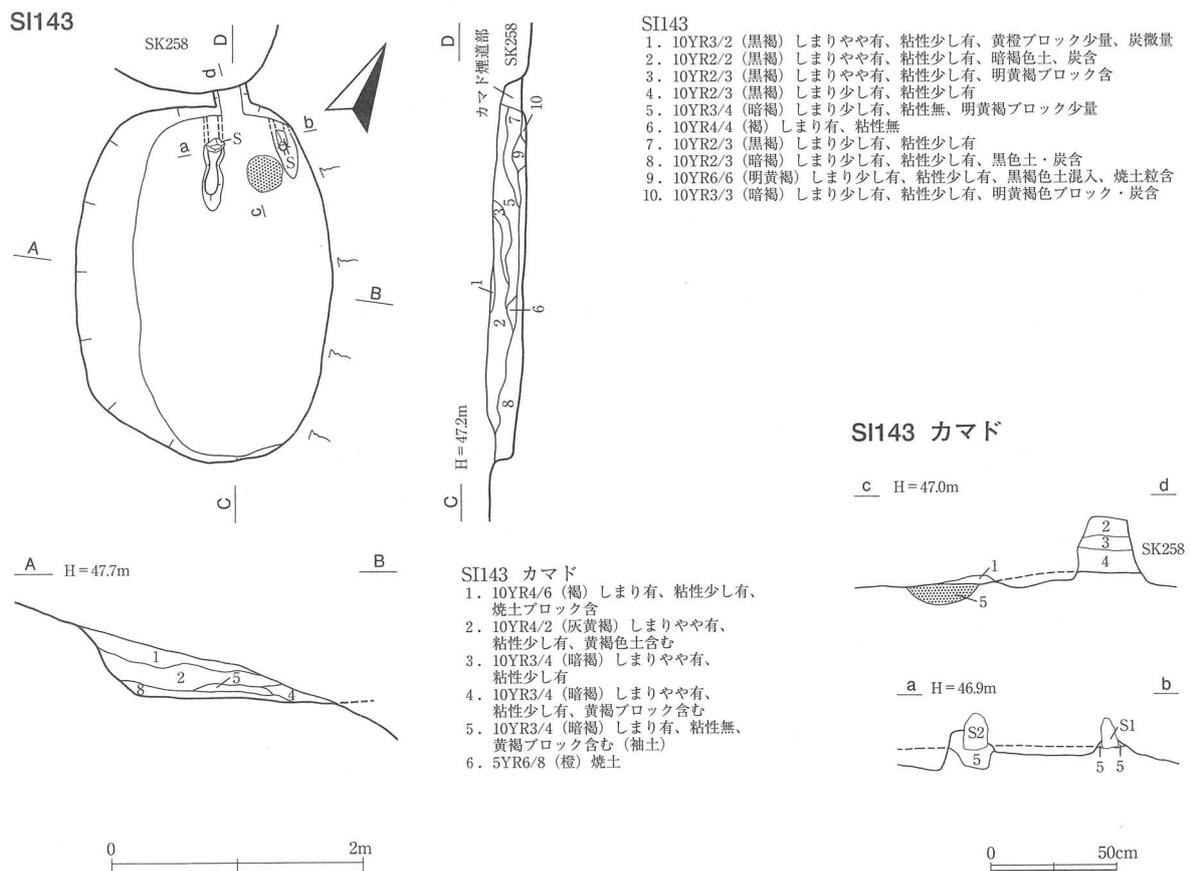
第169図 SI142C・D竪穴住居跡 (5)

とカマド及び埋土から釣り針状のものが4点、埋土から細い棒状と刀子片各1点、鍛冶滓が約1.5kgと鉄塊系遺物3個が出土した。

SI142Dは、遺構群南部のⅧB-6pグリッドを中心にSI142Cの下位に位置し、検出面はⅢ～Ⅳ層である。SI142C床面でプランを確認した。谷側が崩落により消失しているため全容は不明だが、残存部から平面形・規模は一辺約3mほどの隅丸方形を呈し、床面積は約9㎡と推定される。主軸方位はN-60°-Wである。残存する壁は鋭角的に外傾して立ち上がり、壁高は山側最大約10cmから谷側に向かい低くなる。埋土は基本的には褐色土混じりの黒色系土の人為的堆積である。床面は概ね平坦で堅締、東谷側半分が貼床とされていた。床面施設は検出されなかった。

カマドは北西壁の中央やや南よりに付設されていたが、本体部は消失しており、袖部芯材の石や土器などは認められないが、抜き取りの小ピット7基が検出された。燃焼部は径約70cmほどの略円形で、深さ約3cmほどに掘り窪められ、掘り込みの煙道側が火熱により径40cmほどの円形で、厚さ約6cmほどが赤色変化していた。煙道は奥行き約110cm、径約30cmの削り貫き式で、外側に向かい緩い下り勾配となっていた。煙出しピットは、径約30cmの略円形で深さ約110cmを測る。

遺物は、床面から土師器の甕形土器1個体(345)と埋土から破片と坏形土器片及び須恵器の甕形土器片が数点出土した。(小山内)



第170図 SI143竪穴住居跡

S I 143 竪穴住居跡 (第170図、写真図版129)

赤25D区東斜面、ⅧB-61グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出された。本遺構は煙道の一部と煙出しピットをSK258に切られている。よって新旧関係は(新)SK258→(旧)SI143である。東側斜面が崩落しているため平面形・規模は不明だが、西壁は2.8m遺存し、北壁と南壁は1.7m残存していることから、長軸3m弱、短軸1.7m以上の隅丸長方形ないし方形を呈していたものと思われる。また、本遺構は埋土の黒褐色土が検出面であるⅣ層の土と類似しているために精査に苦慮し、壁面並びにカマドの一部を掘りすぎている。主軸方位はN-40°-W、床面積は3.9㎡を測る。壁は外傾して立ち上がる。壁高は西壁で49cmを測り、南・北壁は東に向かうにつれて低くなる。埋土は上位は黒黄褐色、下位は暗褐色土を主体とした自然堆積を呈し、10層に細分された。床面は平坦で締まっている。

カマドは北壁に位置する。本体部の残存状況はあまり良くない。袖は自然石を1個芯材に用いて暗褐色粘土で構築されている。燃焼部は30×29cm、厚さ8cmの焼土が形成されている。煙道部は幅27cmの煙道が22cm残存しているが、SK258に大半を切られており、掘り込み式なのか削り貫き式なのかは不明である。

遺物は出土しなかった。

S I 144 竪穴住居跡 (第171図、遺物図版31・124、写真図版129・230・305)

赤25C区南半部、ⅧB-3mグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。本遺構はSKI42構築時に人為的に埋められている上に北東コーナーをSXI79に切られているが、SKI42とSXI79は直接的な切り合い関係が無いため両遺構どうしの新旧関係は不明である。少なくとも新旧関係は、(新)SKI42・SXI79→(旧)SI144である。

北側斜面が崩落しているため平面形・規模ははっきりしないが、西壁は3.6m、東壁は1.5m残存し、南壁は5.3m遺存していることから長軸5m前後、短軸4m前後の隅丸長方形を呈しているものと思われる。主軸方位はW-9°-S、床面積は残存部分で15.9㎡を測る。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は南壁で55cmを測り、西・東壁は北に向かうにつれて低くなる。埋土はにぶい黄色土を主体とした人為堆積で13層に細分された。床面は平坦で堅く締まっている。床面施設として西壁・北壁際を中心に柱穴が3基(P1～P3)検出されているが、位置的に支柱穴となり得るのはP2であると思われる。

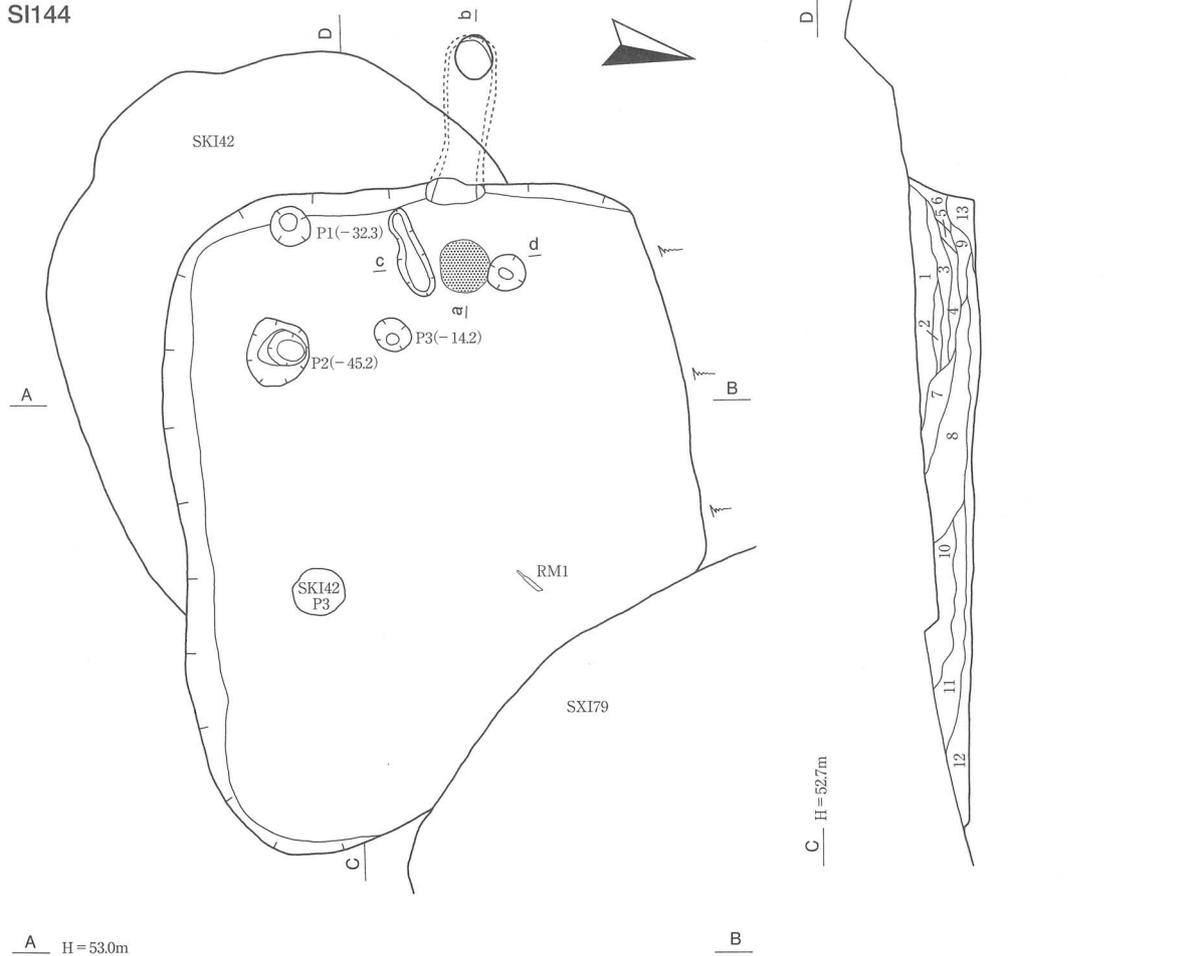
カマドは西壁に位置する。本体部の残存状況は不良で、両袖は芯材の抜き取り穴と考えられるピットが各1個あるのみで袖土は確認されなかった。燃焼部は径42×39cm、厚さ3cmの焼土が形成されている。煙道部は長さ1.35m、幅41cmの削り抜き式の煙道で下り勾配で煙出し部へ続いている。煙出し部は径36×29cmの楕円形状を呈し、深さ87cmを測る。

遺物は土師器片が15点、炉壁片が1点、鉄製品が1点と鉄滓が出土している。このうち掲載した遺物は床面より出土したRM1の小刀(126)と埋土中より出土した土師器甕(355)である。

S I 145 竪穴住居跡 (第172図、写真図版130)

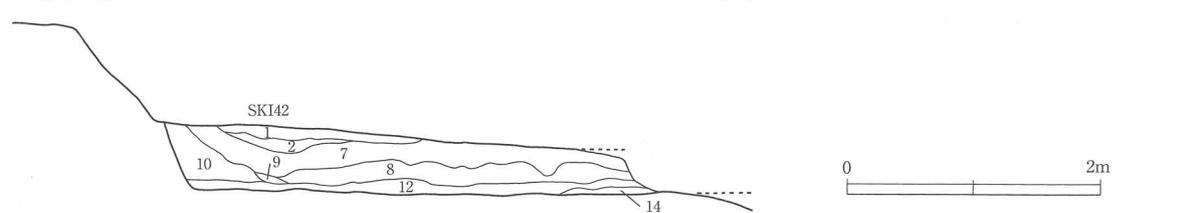
赤25C区北半部、ⅧB-5i・6iグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。東側斜面が崩落しているため平面形・規模は不明だが、西壁は4.7m遺存し、北壁は1.7m、南壁は1.6m残存していることから、長軸約5m弱、短軸2m以上の隅丸長方形乃至方形を呈していたものと思われる。主軸方位はW-4°-S、床面積は5.5㎡を測る。壁は鋭角的に立ち上がる。壁高は西壁で61cmを測り、南・北壁は東に向かうにつれて低くなる。埋土は上位はにぶい黄褐色、中位は褐色土、下位は黒褐色土を主体とした自然堆積を呈し、10層に細分された。床面は平坦で締まっている。床面施設としてカマド左脇より柱穴を1基(P1)検出したが、支柱穴となり得るかは不明である。

SI144



A H=53.0m

B



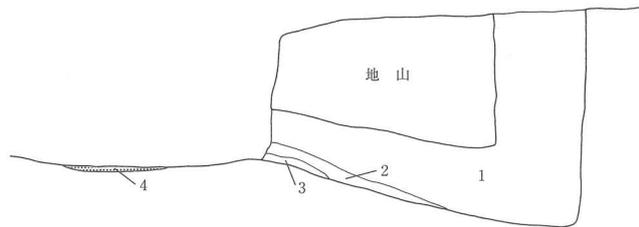
SI144 カマド

a H=52.1m

b

SI144

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、明黄褐色ブロック含
2. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性少し有、にぶい黄褐色土含
3. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性少し有、明黄褐色ブロック含
4. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性少し有、にぶい黄褐色土含
5. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性少し有
6. 10YR6/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性少し有、マサ土含
7. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性少し有、黄褐色ブロック・炭少量含む、マサ土含
8. 2.5YR/4 (淡黄) しまりやや有、粘性無
9. 10YR6/8 (明黄褐) しまり・粘性やや有、炭・焼土含
10. 2.5Y6/3 (浅黄) しまりやや有、粘性無
11. 2.5Y7/4 (浅黄) しまりやや有、粘性無
12. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性少し有、明黄褐色ブロック含
13. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性少し有
14. 10YR6/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性少し有、マサ土含



c H=51.5m

d

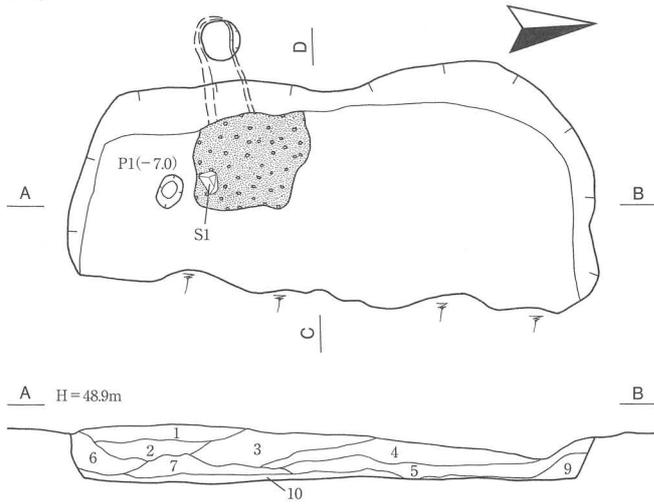


SI144 カマド

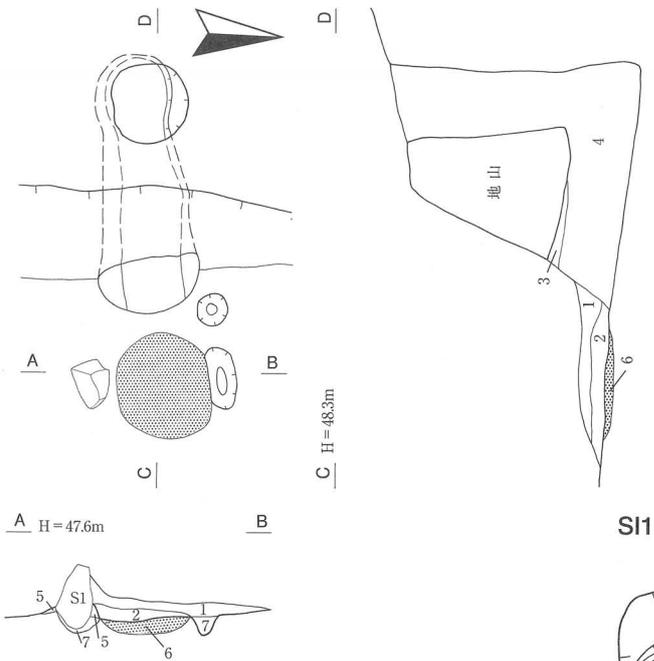
1. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性少し有
2. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有、炭・焼土含む
3. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性やや有、炭含む
4. 5YR7/4 (にぶい橙) 焼土
5. 10YR4/2 (灰黄褐) しまり有、粘性無

第171図 SI 144 竪穴住居跡

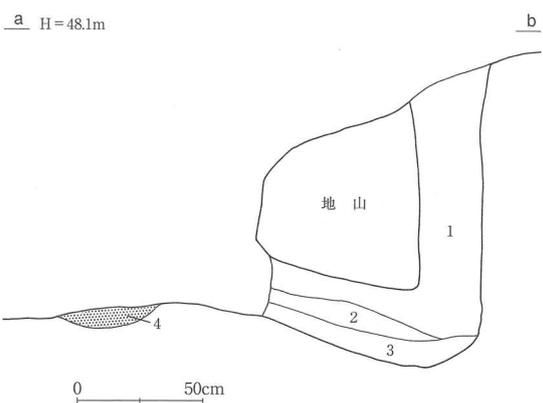
SI145



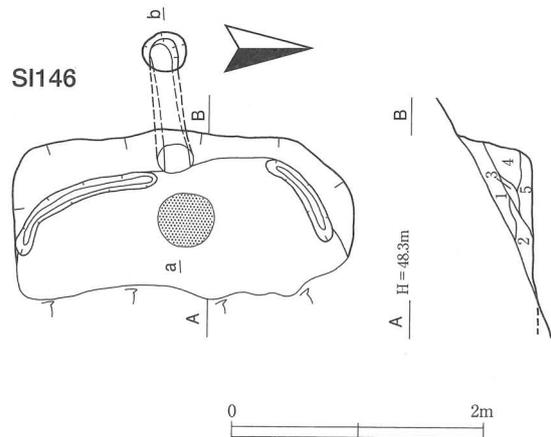
SI145 カマド



SI146 カマド



SI146



SI145

1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、浅黄褐色ブロック含
2. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、浅黄褐色ブロック・炭含
3. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性無、にぶい黄褐色・炭含
4. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、炭含
5. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無、黒褐色・淡黄色土含
6. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、炭含
7. 2.5Y8/4 (淡黄) しまりやや有、粘性無
8. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性少し有、黄褐色ブロック・炭含
9. 2.5Y7/4 (浅黄) しまりやや有、粘性少し有、炭含
10. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性少し有、炭含

SI145カマド

1. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性やや有、焼土ブロック含む
2. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無、炭含む
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり少し有、粘性無、焼土・マサ土含む
4. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、炭・マサ土含む
5. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性無、にぶい黄褐色土含む
6. 5YR7/4 (にぶい橙) 焼土
7. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、石の据え方の埋土

SI146

1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、炭少量
2. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり少し有、粘性無
3. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり少し有、粘性無
4. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり少し有、粘性無、マサ土ブロック含
5. 10YR3/3 (暗褐) しまり少し有、粘性無

SI146 カマド

1. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性少し有、明黄褐色ブロック含む
2. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり少し有、粘性無、炭少量
3. 10YR4/4 (褐) しまり少し有、粘性無、炭少量
4. 5YR7/3 (にぶい橙) 焼土

第172図 SI145・146竪穴住居跡

カマドは西壁中央南よりに位置する。本体部の残存状況はあまりよくない。左袖は自然石を1個芯材に用いて褐色粘土で構築されているが、右袖より芯材の抜き取り穴と思われるピットが2基検出されたのみである。燃烧部は42×37cm、厚さ6cmの焼土が形成されている。煙道部は長さ99cm、幅34cmの削り貫き式の煙道で下り勾配で煙出し部へ続いている。煙出し部は径31×30cmの円形を呈し、深さ101cmを測る。

遺物は土師器片が2点、羽口片が1点出土している。

S I 146 竪穴住居跡 (第172図、遺物図版71、写真図版130・257)

赤25C区北半部、ⅧB-6jグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。検出当初はSK272を切っている土坑として精査を開始したが、西壁中央からカマドを検出したので竪穴住居跡と判明した。東側斜面が崩落しているため平面形・規模ははっきりしないが、西壁は2.6m遺存し、北壁は1m、南壁は0.9m残存していることから、長軸2.5m前後、短軸1m以上の隅丸長方形乃至方形を呈しているものと思われる。主軸方位はW-1°-S、床面積は残存部分で2.3㎡を測る。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は西壁で62cmを測り、北・南壁は東に向かうにつれて低くなる。埋土は上・中位はにぶい黄褐色土、下位は黒褐色土を主体とした自然堆積で5層に細分された。床面は平坦で堅く締まり、カマド両側の壁面際から周溝が検出された。周溝は幅11~14cm、深さ5~7cmを測る。

カマドは西壁中央に位置する。本体部の残存状況は不良でカマド構築粘土・袖は確認されず、僅かに燃烧部焼土が残存しているのみである。燃烧部は径44cm、厚さ9cmの焼土が形成されている。煙道部は長さ111cm、幅23cmの削り貫き式の煙道で下り勾配で煙出し部へ続いている。煙出し部は径34×31cmの円形を呈し、深さ121cmを測る。

遺物は土師器片が小袋1袋分、羽口片が2点と鉄滓が出土している。遺物は羽口片が2点出土している。このうち掲載した遺物は埋土中より出土した羽口(131)である。(島原)

S I 147 竪穴住居跡 (第173図、遺物図版32、写真図版131・231)

F区赤25D区の平坦部南西端ⅧB-7n・oグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。S I 123・SK 247・292と重複し、検出状況から新旧関係は(新)SK 247→S I 147→S I 123・SK 292(古)である。東谷側はSK 247と崩落によって消失しており、全容は不明だが、遺存部分から平面形・規模は、北東-南西の長軸約3.5m、短軸約2.5m前後の歪な隅丸略長方形で、床面積は約11㎡ほどと推定され、主軸方位はN-50°-Wである。壁は外傾して立ち上がり、壁高は西山側の最大約40cmから東側に向かい低くなる。埋土は黒色土を主体とする人為的堆積と思われる。床面は平坦で堅締、床面施設としてはカマドの両側に柱穴1基と長さ約60cm、幅約25cmの壁溝状のものを検出した。

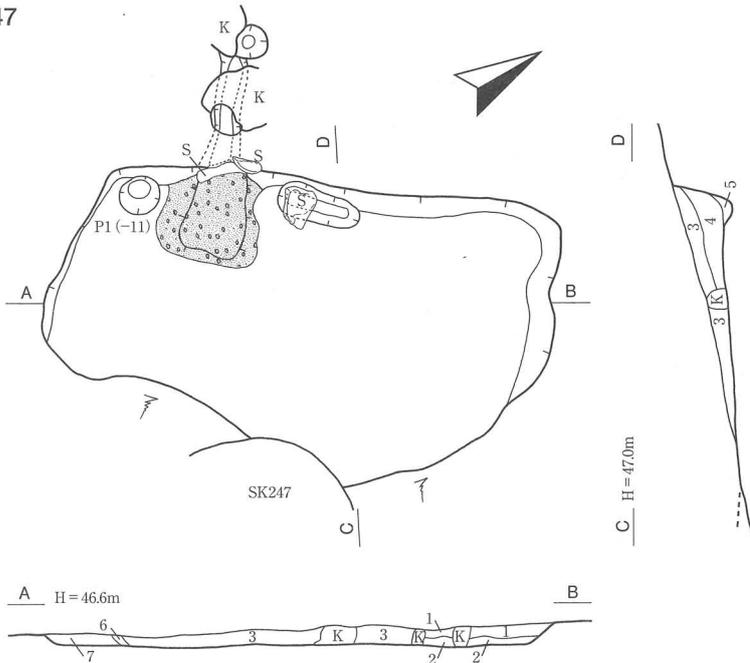
カマドは北西壁の南端に付設され、煙道先端と煙出しは木根によって破壊されていたが、本体部の遺存状態はかなり良好で、袖部には芯材として人頭大の石を用い、天井部の架構には長さ45cmほどの垂角礫1個を組み、黄褐色粘土で構築されていた。燃烧部はおよそ平坦で火熱により40×30cmほどの略楕円形で、厚さ約3cmほどが赤色変化していた。煙道は奥行き約130cm、径約30cmほどの削り貫き式で、外側に向かい上り勾配である。煙出しピットは径約30cmの略円形で煙道よりも深く35cmほどが残る。

遺物は、カマドから芯材あるいは支脚に使用したと思われる土師器の甕形土器半個体が2点、(374・375)と須恵器の壺形土器片2点、埋土から羽口片1点と鍛冶滓約0.7kgが出土した。

S I 148 竪穴住居跡 (第174図、遺物図版32・99・100・126、写真図版119・231・286・306)

F区赤25D区の平坦部西端ⅧB-7nグリッド杭を中心に位置し、検出面はⅥ層上面である。検出当初煙出しを確認できず、S I 123の精査時に煙道を検出して住居跡と判明したものである。S I 123・150、SK

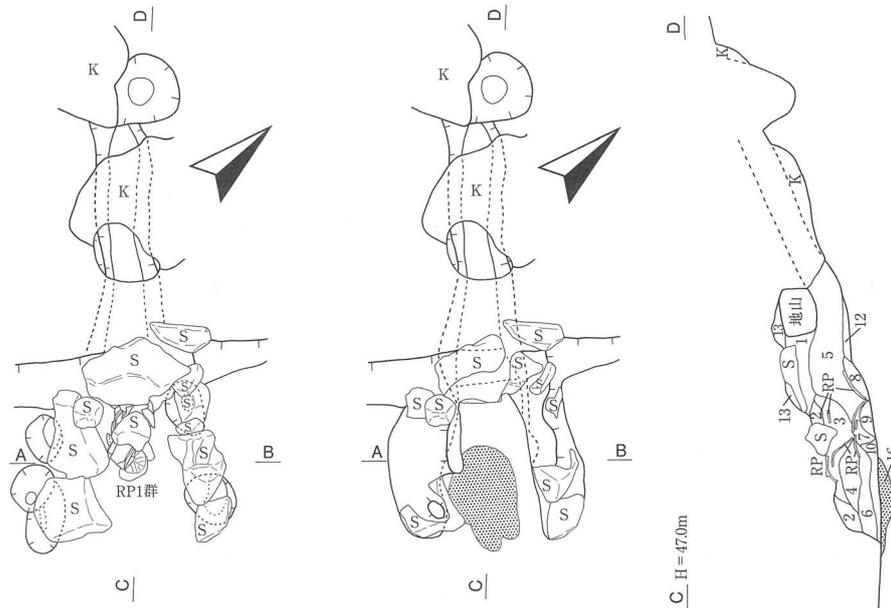
SI147



SI147

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性有
2. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性有
3. 10YR3/4 (暗褐) しまり極めて有、粘性有、マサ土粒少量
4. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性有、炭化物少量
5. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
6. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有
7. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性有、焼土ブロック少量

SI 147 カマド



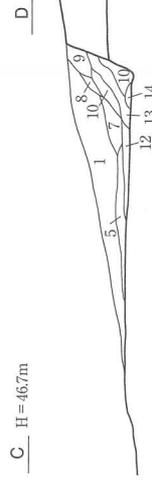
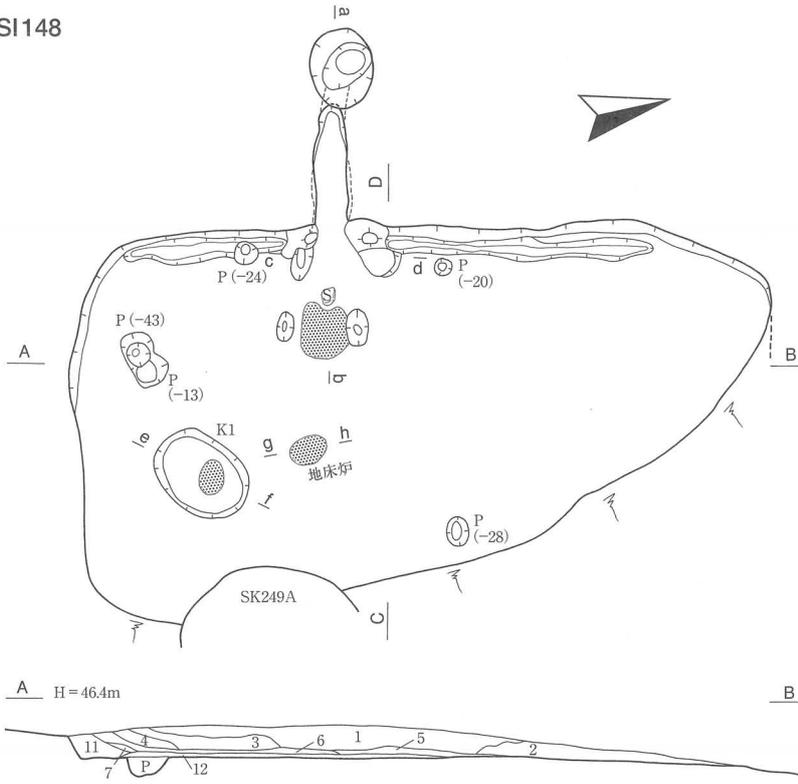
SI147 カマド

1. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性有
2. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有、炭化物・焼土粒微量
3. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性有、カマド天井部崩落土
4. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性無、焼土ブロック微量
5. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性無
6. 7.5YR4/6 (褐) しまり・粘性有、焼土ブロック少量
7. 10YR4/6 (褐) しまり無、粘性やや有、炭化物・焼土粒微量
8. 7.5YR4/6 (褐) しまり・粘性無
9. 7.5YR4/4 (褐) しまり無、粘性有、焼土粒少量
10. 7.5YR4/4 (褐) しまり無、粘性有、焼土粒少量
11. 7.5YR4/6 (褐) しまり・粘性有、焼土ブロック少量
12. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、マサ土
13. 10YR5/8 (黄褐) しまり極めて有、粘性有、黄褐色粘土
14. 10YR7/2 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、砂質
15. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性やや有
16. 5YR4/6 (赤褐) 燃焼部焼土

カマド
構築土

第173図 SI147竪穴住居跡

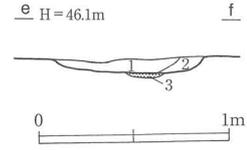
SI148



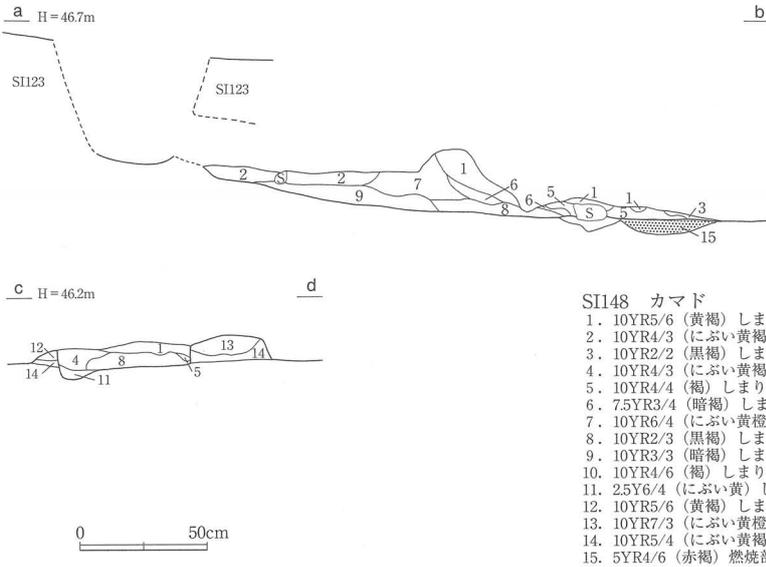
SII148

1. 10YR3/4 (暗褐) しまり極めて有、粘性有
2. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性有、マサ土粒多量
3. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有、マサ土ブロック中量
4. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有
5. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性有、炭化物微量
6. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性有
7. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有
8. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有、炭化物微量
9. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性無、炭化物微量
10. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質
11. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質
12. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有、炭化物少量、焼土粒微量
13. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有、炭化物微量
14. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質

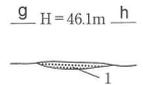
SI148 K1



SI148 カマド



SI148 地床炉



SII148 炉B

1. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有、炭化物微量
2. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性有、炭化物を少量含む
3. 5YR4/6 (赤褐) 焼土

SI148 地床炉
1. 5YR4/6 (赤褐) 焼土

SII148 カマド

1. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
2. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、砂質
3. 10YR2/2 (黒褐) しまり無、粘性有、炭化物少量
4. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性有
5. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性有、焼土粒微量
6. 7.5YR3/4 (暗褐) しまり極めて有、粘性有、焼土ブロック少量、カマド内壁崩落部
7. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、砂質
8. 10YR2/3 (黒褐) しまり極めて有、粘性有、焼土ブロック・炭化物微量
9. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性無、砂質、炭化物微量
10. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性やや有
11. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性やや有
12. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
13. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性有、白粘土
14. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無
15. 5YR4/6 (赤褐) 燃焼部焼土

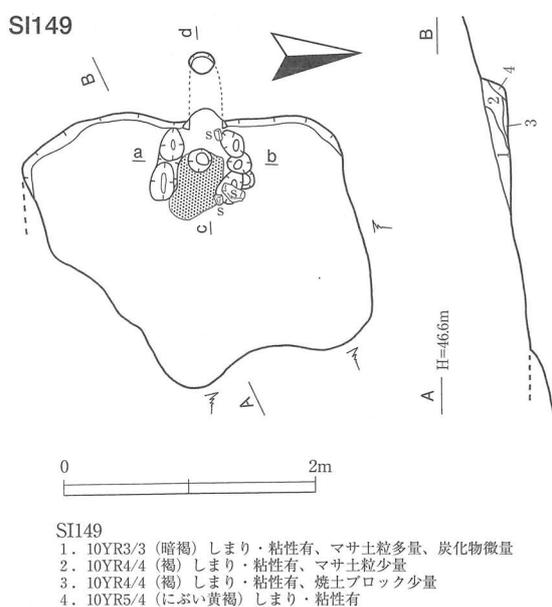
カマド
構築土

第174図 SI148竪穴住居跡

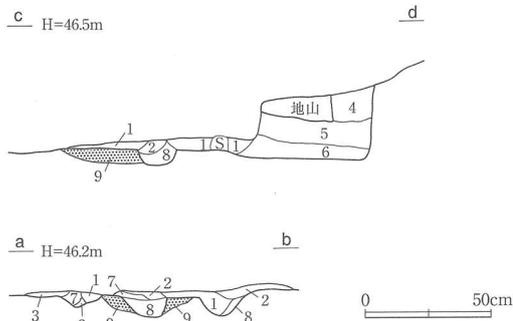
249・292と重複し、検出状況等から確認できた新旧関係は(新) S I 148→S K 249・292→S I 150→S I 123(古)である。東側はS K 249と崩落によって消失しており、全容は不明だが、遺存部分から平面形・規模は、およそ北-南の長軸約5.5m、短軸約3.5m前後の隅丸略長方形で、床面積は約15㎡ほどと推定され、主軸方位はN-70°-Wである。壁は外傾して立ち上がり、壁高は西山側の最大約50cmから東側に向かい低くなる。埋土は流入と崩落の繰り返しの黒色系土と褐色系土が互層となる自然堆積である。床面は平坦で堅締、北側S I 150部分は貼床となっていた。床面施設としては南側中央にK 1土坑とこの北隣に地床炉1基、このほか柱穴4基と西壁際のカマド両側で総長約4m、幅約15cm、深さ約3cmの壁溝を検出した。K 1の平面形・規模は開口部約80×60cmの楕円形で、深さ約5cmの浅い皿形を呈し、底面中央は径約20cmほどの略円形で、厚さ約2cmほどが火熱により弱く赤色変化していた。地床炉は径約30cmほどの略円形で、火熱により厚さ約3cmほどが赤色変化していた。

カマドは西壁の南よりに付設されているが、煙道及び煙出しの上部をS I 123の精査時に掘削したため消失してしまった。本体天井部は崩落し、袖部は架構・芯材として石や土器などは認められないが、抜き取りの小ピット3基が検出され、黄褐色土で構築されていた。燃焼部は平坦で火熱により径約40cmほどの略円形で、厚さ約5cmほどが赤色変化していた。煙道側の焼土の端には支脚と思われる拳大の石が埋置されていた。煙道はS I 123ベルトの観察から削り貫き式と見られ、奥行き約160cm、径約30cmほどと推定され、外側に向かい緩い上り勾配となっていた。煙出しピットは深さ約40cmほどと思われる。

遺物は、埋土から土師器の甕形土器片少量と坏形土器片数点、須恵器の甕形土器片1点、カマドから羽口片2点、床面から砥石1点(158)、埋土から磨石2点、鉄製品は埋土からほぼ完形の鉄鎌・鉄鐮・釣針各1点(145~147)と鍛冶滓が約0.6kg出土した。



SI149 カマド



第175図 SI149竪穴住居跡

S I 149 竪穴住居跡 (第175図、遺物図版126、写真図版132・306)

F区赤25D区の平坦部北端ⅧB-7mグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。S I 150A・Bのカマド煙出しを床面で検出したことから本遺構が新しい。東側の大半が崩落によって消失しており、全容は不明である。遺存部分から平面形・規模は一辺約2.5mほどの隅丸方形を呈し、床面積は約8㎡と推定される。主軸方位はおおよそ西にある。壁は山側西壁のみ遺存し、壁高約20cmで外傾して立ち上がる。埋土は西山側に僅かに残るだけで、上位黒色土と下位褐色系土が流入した自然堆積である。床面は平坦で堅締、床面施設は検出されなかった。

カマドは西壁のほぼ中央に付設されているが、本体部は消失し、袖部は架構・芯材として石や土器などは認められないが、抜き取りの小ピット5基が検出された。燃焼部は平坦で火熱により60×35cmほどの広がり、厚さ約5cmほどが赤色変化していた。煙道側の焼土の端には支脚の抜き取りと思われる小ピットがある。煙道は奥行き約50cm、径約25cmの削り貫き式で、本体より一段約3cmほど低く水平に掘り込まれていた。煙出しピットは径約20cm、深さ約25cmを測る。

遺物は、埋土から土師器の甕形土器片約10点、カマド煙道から鉄廷状の鉄塊1点(147)と埋土及びカマドから鍛冶滓が少量出土した。(小山内)

S I 150A・B 竪穴住居跡・S X W69鉄生産関連炉跡

(第176・177図、遺物図版26・32・33・72・98・100・126、写真図版132・133・227・231・232・257・285・286・306・321)

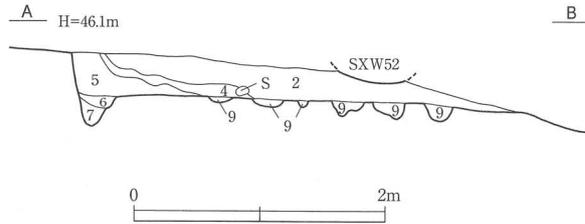
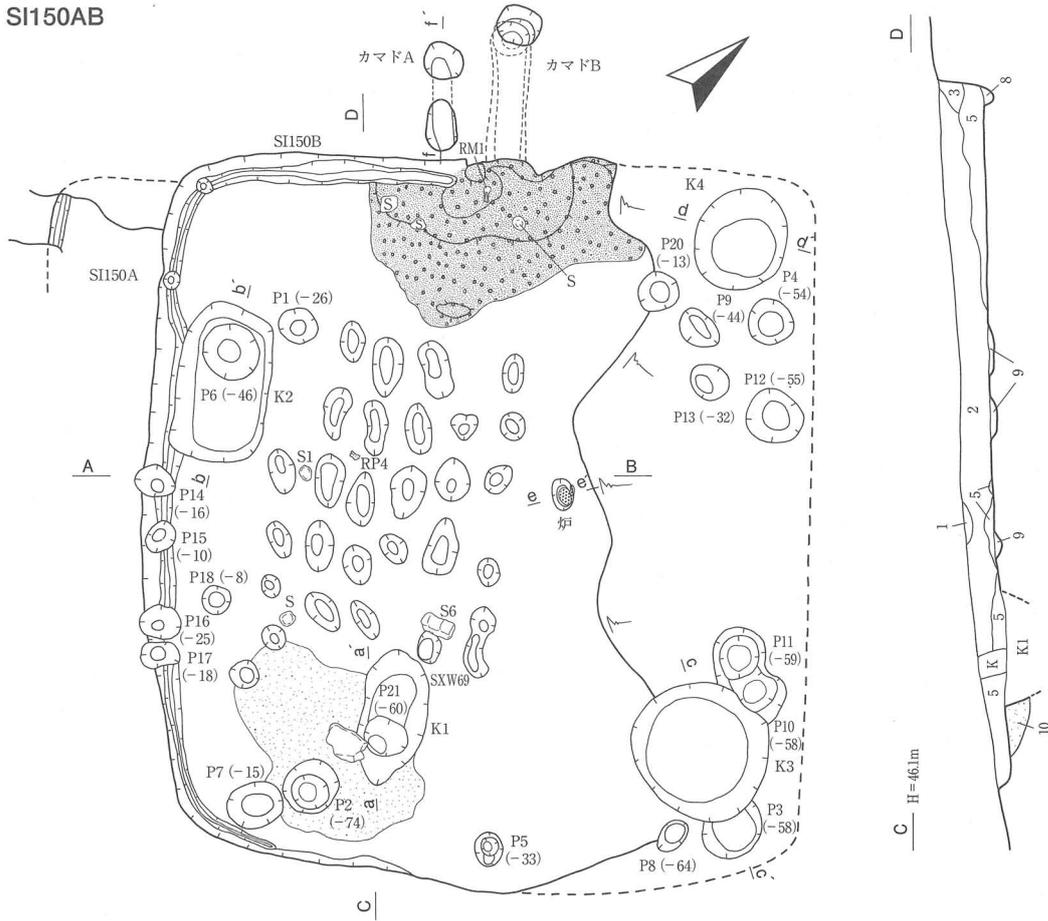
赤25D区のⅧB-7・8m・nグリッドに位置し、幹尾根中腹にある舌状の枝尾根緩斜面のⅥ層上面で検出している。S I 150Bは検出の初期段階で確認しているが、S I 150AはS I 123の北側に一部見られる壁溝とS I 150Bの北西壁側で検出した煙道の残存によって確認した遺構である。S I 123、S I 148、S I 149、S X W52及びS N48と重複し、切り合い関係からS I 123、S I 148、S I 149はS I 150A・Bより新しいと判断する。S X W52はS I 150Bの検出面で確認し、S N48はS I 150Bの埋土中で検出しており、いずれもS I 150Bより新しく、またS I 150Aに伴う可能性が考えられる。S I 150AとS I 150Bの新旧はS I 150Aに伴うと想定する柱穴が、S I 150Bの床面施設の埋土を切っており、S I 150Aが新しいと捉える。

S I 150AはS I 123とS I 148によって大部分を切られており、規模・平面形の詳細は不明である。残存するカマド煙道・煙り出しピット、及び壁溝で推察すると主軸方位はN-50°-Wと思われる。

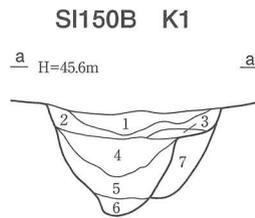
カマド煙道は削り貫き式で西側(山側)を向き、残りの奥行きが85cm・径が25cmを測り下り勾配になっている。煙り出しピットの残存は、深さが25cm・径が30cmを測る。出土遺物はない。

S I 150BはS X W52とS N48が埋土の一部を切るだけで、重複による遺構への影響は少ない。但し床面が北側(谷側)の途中から削られており、規模・形状の詳細は不明である。壁面の残存と検出した柱穴の配置で推察すると、平面形はN-50°-Wを主軸方位とする隅丸長方形を呈していたと思われる。壁長は南西側が5.3m、北西及び南東側の残りがそれぞれ3.2m・1.5mを測り、推定する床面積は約27.0㎡である。壁はいずれも垂直気味に立ち上がり、壁高は南西及び北西側中央で35cm、南東側中央で10cmある。埋土は褐色土主体の人為的堆積と思われる。床面は南側の一部に貼床されており、柱穴を17基(P1~P5・P10~P21)に伴い、残存する壁際に壁溝が見られる。柱穴は規模・配置から判断してP1~P5は主柱穴、P19~P21は副柱穴、また南西側壁際のP14~P18は出入口の段を付設した跡で、北東側崩落部で検出したP10~P13は主柱穴の付け替え跡と考える。他のP6~P9はその配置からS I 150Aの主柱穴と想定する。そのほか床面中央付近から6列×5行に並んだ楕円形の窪みを検出しているが、床板を支える根太跡と推察している。床面施設としては四隅から土坑を4基(K1~K4)、中央東側から炉を1基及び中央南側から鍛冶炉を1

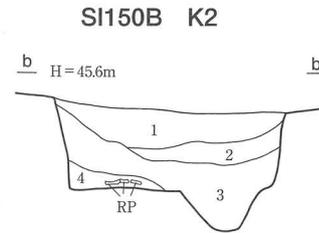
SI150AB



- SI150B
1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり中、粘性無
 2. 10YR4/4 (褐) しまり中、粘性無
 3. 10YR3/3 (暗褐) しまり中、粘性無
 4. 10YR3/4 (暗褐) しまり中、粘性無、炭化物微量
 5. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり中、粘性無、マサ土粒少量
 6. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり中、粘性無
 7. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり弱、粘性無
 8. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり小、粘性無
 9. 10YR7/4 (にぶい黄橙) 砂質、しまり中、粘性無、貼床
 10. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり中、粘性無、根太跡



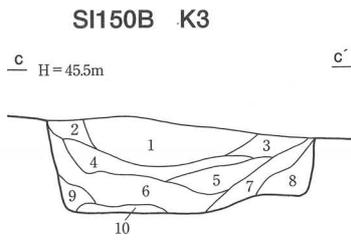
- SI150B K1
1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり中、粘性無
 2. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり中、粘性無
 3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり中、粘性無、黄褐色土ブロック少量
 4. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり強、黄褐色土ブロック少量
 5. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり強、粘性無
 6. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり中、粘性無
 7. 10YR8/4 (浅黄橙) 砂質、しまり中、粘性無



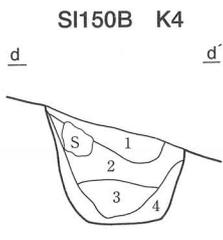
- SI150B K2
1. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり強、粘性無、炭化物少量
 2. 10YR4/4 (褐) しまり中、粘性無
 3. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり強、粘性無
 4. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり中、粘性無



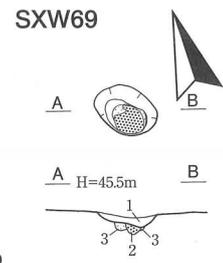
第176図 SI150AB竪穴住居跡・SXW69鉄生産関連炉跡(1)



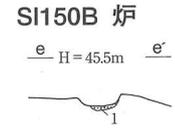
- SI150B K3
1. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有、マサ土粒少量
 2. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有
 3. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性有、マサ土粒微量
 4. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性有、マサ土粒少量
 5. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有
 6. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性有、炭化物微量
 7. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり・粘性有
 8. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまり・粘性有
 9. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり・粘性有
 10. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまり・粘性有



- SI150B K4
1. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有、炭化物少量
 2. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有、マサ土粒少量
 3. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有
 4. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり・粘性有、マサ土粒中量



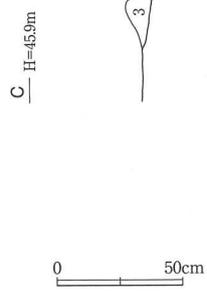
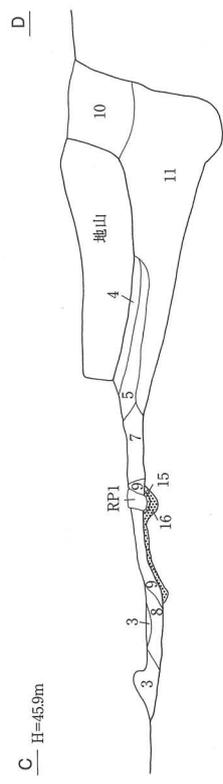
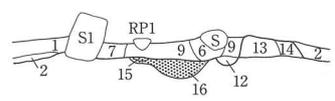
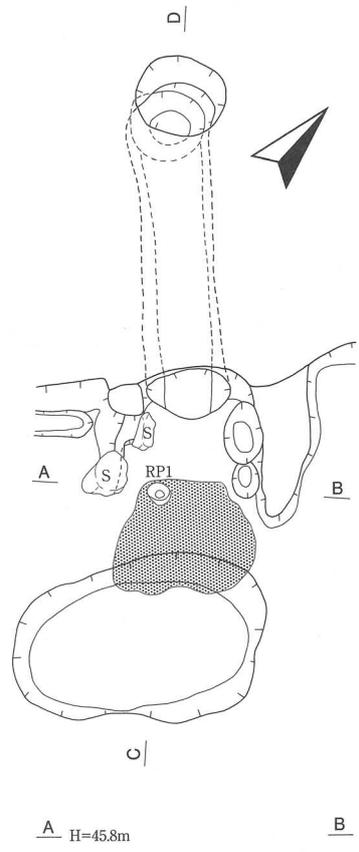
- SXW69
1. 10YR2/2 (黒褐) しまり強、粘性無
 2. 5YR6/4 (にぶい橙) 焼土
 3. 2.5Y2/1 (黒) 還元部、蒸焼



- SI150B 炉
1. 5YR6/4 (にぶい橙) 焼土

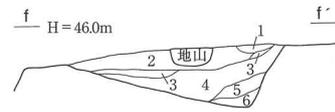


SI150B カマドB



- SI150B カマドB
1. 10YR4/6 (褐) しまり強、粘性無、焼土・黄褐色土ブロック多量
 2. 10YR4/6 (褐) しまり強、粘性無
 3. 10YR4/6 (褐) しまり中、粘性無、黄褐色土ブロック中量
 4. 10YR5/4 (にぶい黄橙) しまり中、粘性無、マサ土多量
 5. 10YR5/6 (黄褐) しまり強、粘性やや有
 6. 5YR5/8 (明赤褐) 焼土、カマド内壁崩落土
 7. 10YR4/6 (褐) しまり強、粘性無、焼土ブロック少量
 8. 10YR3/4 (暗褐) しまり中、粘性無
 9. 7.5YR5/8 (明褐) しまり中、粘性無、焼土ブロック少量
 10. 10YR4/6 (褐) しまり中、粘性無
 11. 10YR3/4 (暗褐) しまり中、粘性無
 12. 10YR4/6 (褐) しまり中、粘性無、マサ土多量
 13. 10YR7/8 (黄橙) しまり強、粘性有
 14. 10YR7/8 (黄橙) しまり強、粘性有 } カマド構築土
 15. 5YR4/6 (赤褐) } 燃焼部焼土
 16. 5YR6/4 (にぶい橙) }

SI150A カマドA



- SI150A カマドA
1. 7.5YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性有、弱い廃棄焼土
 2. 10YR5/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、砂質
 3. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、砂質、マサ土
 4. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有、地山ブロック微量
 5. 10YR2/3 (黒褐) しまり無、粘性有
 6. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり無、粘性やや有

第177図 SI150AB竪穴住居跡・SXW69鉄生産関連炉跡(2)

基（S X W69）検出している。土坑K1は0.5×1.1mの規模の不整な楕円形で、深さは約50cmを測り断面形は鍋状を呈している。埋土に鍛造剥片を含み、S X W69と隣接し付近から鉄砧石S 2（146）が出土していることから鍛冶の足場穴と思われる。なおS I 150Aの主柱穴と捉えるP 7が土坑K 1の埋土を切っており、S I 150AがS I 150Bより新しいと判断したものである。土坑K 2は0.7×1.3mの規模で隅丸方形を呈し、深さが50cmを測り、壁は垂直気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦で主柱穴P 1を伴っている。土坑K 3は平面形が径1.1mの不整な円形で、深さが約50cmあり断面形は鍋状を呈している。土坑K 4は崩落した肩口にあって70×80cmの規模の楕円形を呈し、断面形は鉢形で深さが約60cmを測る。炉は17×25cmの規模の楕円形で深さ3cmの窪みを伴っており、窪みの底面には厚さ2cm程度の焼土がある。

S X W69鍛冶炉は土坑K 2の北側に隣接し、18×25cmの規模の楕円形で深さが約5cmあり、埋土に鍛造剥片を含んでいる。底部の焼土は10×15cmの楕円形を呈して厚さ4cmを測り、一部弱い還元状態にある。

カマドは北西側（山側）壁のほぼ中央に位置している。検出時には、煙道が崩れた構築粘土で塞がれており、カマド袖の左側壁面には芯材石S 1・S 2が付設したままあった。右側床面には抜き取り穴が見られ、燃焼部には支脚に転用したと思われる羽口R P 1（139）が残っていた。燃焼部焼土は45×55cmの不整な楕円形を呈し中心の厚さは約5cmを測り、焚き口部分は0.7×1.0cmの規模の楕円状で一段低い位置にある。煙道は削り貫き式で奥行きが1.4m・径が28cmあり、奥が入り口より30cm程度深く下り勾配になっている。また、煙り出しピットは深さが62cmで、径が33cmを測る。

住居跡として登録しているが、出土遺物から判断して製品加工を目的とした本格的な鍛造作業が行われていた可能性がある。また根太跡の側に鍛冶炉を伴うのは不自然で、住居として利用した時期と作業場として利用した時期との二時期あった可能性も推察される。柱穴数が多いのは作業場として利用していた際の、建物の補強の為とも考えられる。

遺物はカマド構築粘土の上から鉄斧R M 1（152）が出土したほか、刀子（149）、雁股鏃（150）、鉄鏃（151）、板状鉄（153）、釣針（154）といった鉄製品及び前述の鉄砧石のほか鉄塊系遺物（5点）や鍛冶滓（3点）等、鍛造に伴う遺物が埋土や土坑K 1・K 2から出土している。また土師器の甕（380～383）や坏（384～386）、及び須恵器片（387～389）等の土器類や、磨石や砥石等の石器類が埋土や床面及び土坑K 1～K 3から出土している。（亀）

S I 180A・B・C 堅穴住居跡、**S X I 55A** 工房跡、**S K 299** 土坑

（第178図、遺物図版26・27・68・93・122、写真図版134・135・151・227・228・254・263・281・304・317）

F区赤25（A）区北側の棚部、ⅧB-11f～12dグリッドに位置し、検出面はⅥ層である。検出時の平面プランから、数棟の堅穴形状の遺構の重複が推測されたため、これらが把握できるよう共通の断面ベルトを設定し、精査を開始した。結果、埋土断面及び掘り上がりの平面形状などから、堅穴住居跡3棟（S I 180A・B・C）、工房跡1棟（S X I 55A）、土坑2基（S K 298・299）が確認された。これらの新旧関係は、断面状況や平面形の直接的な切り合い及び相対関係から、（新）（S K 299→S X I 55A）、S K 298→S I 180A→S I 180B・C（旧）となる。以下、新しい遺構の順に追って説明する。なお、S K 298については当初に設定した断面ベルト外で検出されたため、個別に後述する。

S K 299について、当初の検出プランから単独の遺構S X I 55Aとして精査を行ったが、埋土断面及び掘り上がりの形状から、これを切る土坑であることが判った。平面形は略円形を呈し、規模は開口部径約150～160cm、底部径約140cmを測る。壁はいずれもほぼ直角に立ち上がり、斜面上方の西側の上半部は崩落により外反する。深さは斜面上方で約85cm、斜面下方で約40cmを測る。埋土は7層に細分されるが、上位の

オリブ褐色土、中位の浅黄色土、下位ののび黄色土に大別される。底面は平坦である。

遺物は、土器は総数で土師器の甕形土器片が約10点、坏形土器が1点出土した。この他、刀子が埋土中より1点、鉄滓が埋土中より少量出土した。

S X I 55 Aは、**S K 299**によりその大半が切られているため詳細は不明だが、平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長辺約2.4×短辺約1.5mが推測される。長軸方向は等高線に平行し、床面積は推定2.8㎡である。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は斜面上方の北西壁で最大の約15cmを測る。埋土は黄褐色の単層である。床面はおよそ平坦で締まりがある。床面施設として、遺構西側に炉Aと南東側に炉Bが検出された。炉Aは床面から僅かに窪んでおり、底面に厚さ1cmに満たない橙色焼土が点在する。また、この南東方向には径約30cm、深さ約10cmのピット(P P 1)が確認できる。これらの埋土からは多量の小鍛冶滓が出土しており、また土壌サンプルを行った結果、少量の鍛造剥片が検出されたことから、鍛冶関連施設であった可能性が考えられる。炉Bは地床炉で、径約30cm、厚さ1cm未満の微弱な橙色焼土が広がる。

遺物は、磨石が埋土中より2点、鉄製品として、検出面より鉄斧(No96)が、埋土中位より鉄鏟(No95)、筒状鉄製品(No97)、釘(No98)、板状鉄製品(No99)がそれぞれ1点出土した。また、鉄塊系遺物が埋土上位より1点、炉壁が埋土中より1点(No26)、上記の様に鉄滓が多量と鍛造剥片が少量出土した。

S I 180 Aについて、精査過程で床面の異なる堅穴住居跡(**S I 180 B・C**)が確認されたが、その新旧関係を見誤ったため、本遺構の北側の詳細は不明となってしまった。残存部から、平面形は隅丸長方形を呈すると思われる、規模は長辺7m以上、短辺3.2m以上が推測される。長軸方向は等高線に平行し、床面積は20.0㎡以上が推測される。壁は斜面上方の西壁では鋭角的に立ち上がり、上半部は崩落により外反するが、北・南壁では緩やかに立ち上がる。壁高は西壁で最大約80cmを測るが、斜面下方に進むに従い減少する。また斜面上方には、長さ約370cm、幅約20～50cm、深さ約5～15cmの溝状の施設が確認された。埋土は14層に細分されるが、各層位の状況から斜面上方より流入した自然堆積と思われる。床面はほぼ平坦で、貼床が主に斜面下方に部分的に施されている。床面施設として、遺構南側に約50×40cmの範囲内に不整に橙色焼土が広がる地床炉が確認された。この下部には壁溝が確認できるが、地床炉との重複関係から、古い段階のものと判断され、本遺構は拡張された可能性が高い。また、地床炉の下部から溝状の施設(D 1)も検出されており、その形状からカマドの煙道部と思われるが、これに伴う壁等は確認されないことから、本遺構と平面形状を異にする古い住居があった可能性が考えられる。この他、柱穴と思われるピット4基(P 9～12)が確認された。

本遺構のカマドは西壁に付設されている。当初は焼土の広がりを確認したことから地床炉と考えていたが、検出時にこの周辺に黄褐色粘土が広がっていたことや、この周囲に芯材の抜き取り痕と思われる小ピットが確認できることから、煙道施設のないカマドと判断した。燃焼部は平坦で、橙色焼土が60×70cmの範囲内に不整に広がるが、厚さは1cmにも満たない。この両脇には径約15～25cm、深さ7～29cmの小ピットが5基(P P 1～5)確認でき、上記の様に芯材の抜き取り痕と思われる。また、P P 6については位置的に支脚の抜き取り痕の可能性が考えられる。

遺物は、土器は土師器の甕形土器片が中1袋、坏形土器片が数点、須恵器の坏形土器片が1点出土した。主なものとして、土師器の甕形土器は床面出土の破片が接合したNo289、埋土下位出土のNo290、埋土上位出土のNo308などがある。この他、磨石3点(内1点:No116)、川原石2点が埋土中より、鉄滓が埋土中及び貼床より少量出土した。

S I 180 B・Cの検出時の状況は上記の通りである。詳細については後述するが、本遺構は拡張等により

構築期が2期以上に渡る可能性が高いことから、S I 180B・Cと表記した。本遺構からカマドは2基検出されており、残存状況から新しい方をカマドA、旧い方をカマドBとした。上述の重複関係の他に、カマドAの煙出部とS X I 90が重複しているが、S X I 90の埋土断面及び検出時の状況から、本遺構よりS X I 90の方が新しいものと思われる。斜面下方は崩落により遺存しないが、平面形は隅丸長方形と思われ、規模は長辺約5m、短辺3.1m以上が推測され、長軸方向は等高線に平行する。主軸方位はカマドAではN-29°-E、カマドBではW-23°-Nで、床面積は12.7㎡が遺存する。壁はほぼ直角に立ち上がり、壁高は斜面上方の西壁で約60cm、北壁で約40cm、南壁で約20cmが残存する。埋土は8層に細分されるが、上位には黄褐色土が多く見られ、S I 180Aの貼床土の可能性も考えられる。床面は平坦で堅く締まる。また、床面には多くの炭化材が確認されたが、形状から柱材や梁材と思われ、本遺構が焼失住居である可能性が高い。なお、この炭化材を鑑定した結果、いずれもクリであることが判った。床面施設として、遺構南西隅に土坑(K 1)が検出された。K 1の平面形は円形を呈し、規模は開口部径約55cm、底部径約35cmである。断面形は鍋底形を呈し、深さは約30cmを測る。また、西壁から北壁沿いにかけて壁溝が確認されたが、西壁沿い部分からは東方向に壁溝が2本延びており、本遺構において拡幅が2回以上行われた可能性が高い。また、柱穴が8基(P 1~8)確認されたが、P 4・7・8は配置状況や形状から現状の住居跡の主柱穴と考えられるが、その他についての帰属時期は不明である。遺構の中央からやや西寄りの位置には地床炉が確認された。約50×30cmの不整な楕円状に広がり、明赤褐色を帯びている。

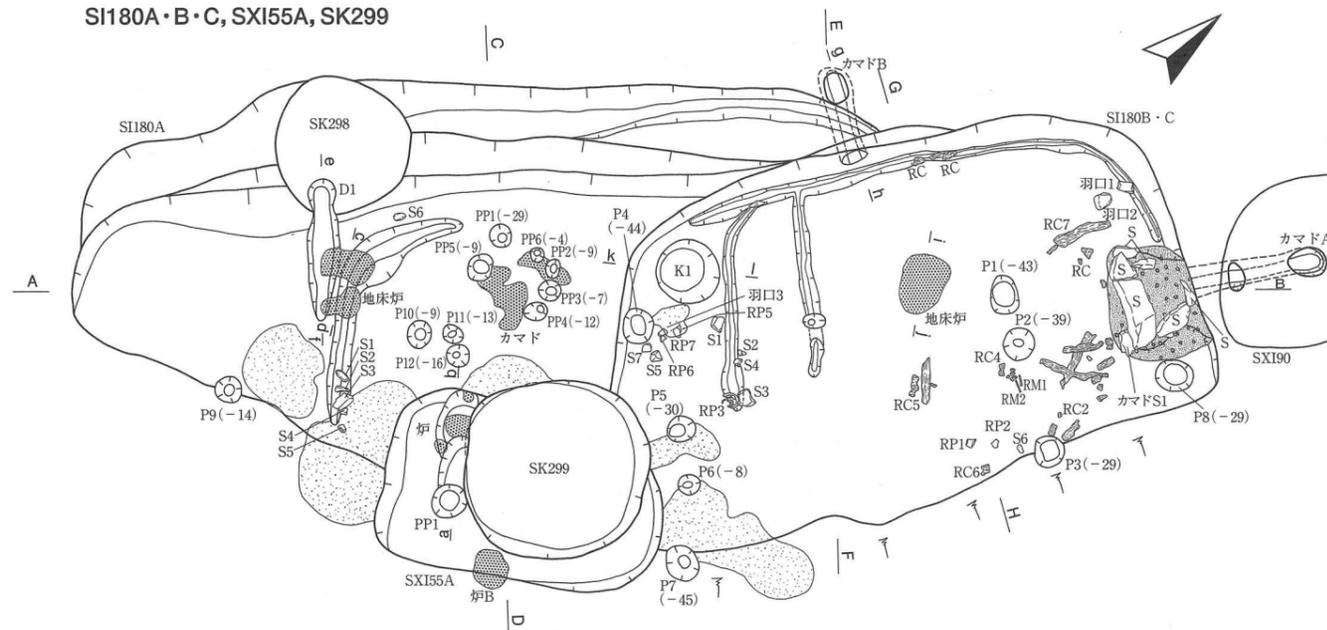
カマドAは北壁の中央部に付設されており、遺存状態は良好である。天井部の架構には自然石が用いられており、壁側と手前側に架けられているが、埋没過程で手前側のものは崩落している。袖部にも芯材として同様に自然石数個が利用されている。これらの内面は被熱痕跡が著しく、外面にのみ黄褐色粘土で構築されていた。燃焼部は平坦で、約30×20cmの楕円状に明赤褐色焼土が広がる。この北側には羽口を代用した支脚が立位状態で遺存している。煙道部は削り貫き式で、長さ約115cm、径20~25cmを測り、先端に向かってやや下り勾配である。煙出部は径約30cm、深さ約35cmが残存し、垂直に掘り込まれている。カマドBは西壁の中央部に付設されており、煙道施設のみ確認できる。煙道部は削り貫き式で、残存長約85cm、径約25cmを測り、先端に向かって下り勾配である。煙出部は径約25cm、深さ約80cmで、垂直に掘り込まれている。上述の様に残存状態からは現状より古い段階のものであり、拡幅以前の時期に伴うものと思われる。また、煙道部と床面の地床炉はほぼ直線上に位置することから、本カマドの燃焼部焼土である可能性も考えられる。

遺物は、土器は土師器の甕形土器片が中1袋、坏形土器片が数点出土した。主なものとして、甕形土器はRP 1・2と床面出土の破片が接合した(291)、カマド出土の破片とP 8埋土出土の破片が接合した(292)、床面RP 3の(293)、床面RP 5・6とカマド出土の破片が接合した(294)、坏形土器は床面出土の(295)、床面RP 4の(296)などがある。石製品は砥石として床面S 1の(117)とカマドS 1の(118)の2点、磨石として埋土中出土の(119)と床面S 6の(120)の2点、敲石として床面S 7の(121)などがある。この他、羽口はカマド支脚として使用されていた(95)と埋土中から(96)、床面より羽口1・2が、鉄製品は釘が床面よりRM 1・2として(91・92)が、鉄滓が埋土中より微量出土している。

S I 181 竪穴住居跡、S X I 181 A 工房跡、S X H 16 廃滓場 (第179~181図、遺物図版27~29・69・70・94・95・122・123、写真図版136・227~229・255・256・263~265・282・304・316~319)

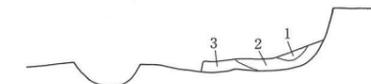
F区赤25(A)区洞部の中央、ⅧB-9f~12iグリッドに位置し、検出面はⅢ・Ⅳ・Ⅵ層である。検出時の状況において、不整形に大きく広がるプランが確認されたが、様相が全く把握できなかったため、トレン

SI180A・B・C, SXI55A, SK299



SXI55A 炉

a H=37.9m



- SXI55A 炉
 1. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり有、粘性欠
 2. 2.5Y2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有、
 焼土粒微量、鉄滓少量含む
 3. 2.5Y3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有、
 鉄滓中量含む

SI180B・C K1

k H=37.9m



- SI180B・C K1
 1. 2.5Y8/4 (淡黄) しまり有、粘性欠
 2. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性欠

0 1m

SI180A 地床炉

c H=37.9m



- SI180A 地床炉
 1. 5YR6/6 (橙) 焼土

SI180A D1

e H=37.9m



SI180B・C 地床炉

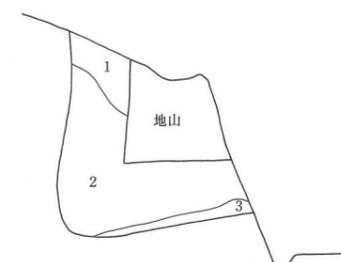
i H=37.6m



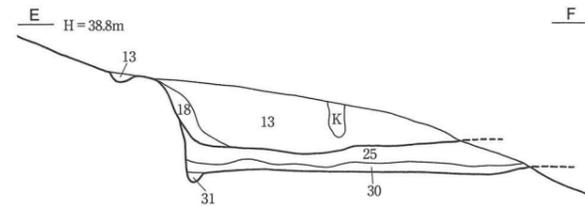
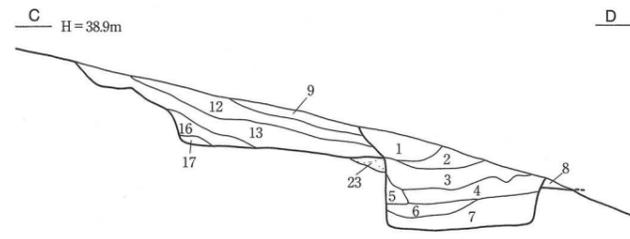
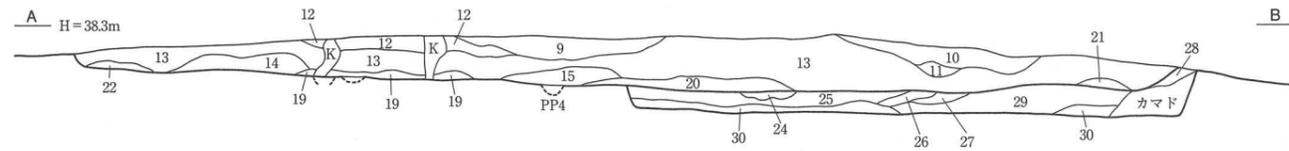
- SI180B・C 地床炉
 1. 5YR5/6 (明赤褐) 焼土

SI180B・C カマドB

g H=38.7m



- SI180B・C カマドB
 1. 5YR7/4 (浅黄) しまり有、粘性欠
 2. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまりやや有、粘性欠
 3. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり有、粘性やや有



0 2m

SK299

1. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり極めて有、粘性欠
2. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり有、粘性やや有
3. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり有、粘性やや有
4. 2.5Y7/4 (浅黄) しまりやや有、粘性欠
5. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり・粘性やや有
6. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性やや有
7. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性やや有

SXI55A

8. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性欠

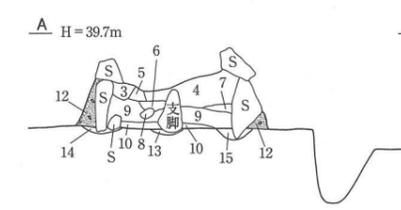
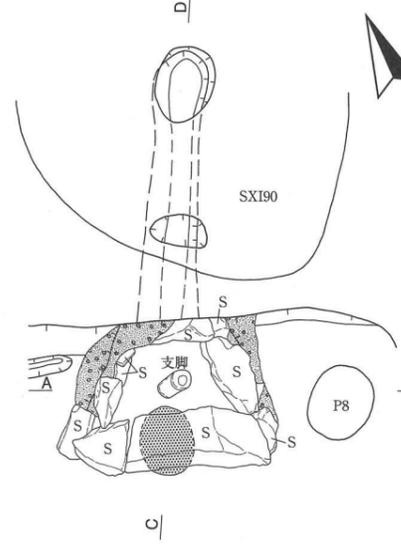
SI180A

9. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり有、粘性やや有
10. 2.5Y4/6 (オリーブ褐) しまり有、粘性欠
11. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまり有、粘性欠
12. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性欠
13. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性やや有、焼土粒・炭化物少量
14. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり有、粘性やや有
15. 2.5Y5/6 (黄褐) しまり有、粘性やや有、炭化物中量
16. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり有、粘性やや有、焼土粒微量
17. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有、焼土塊微量
18. 2.5Y7/4 (浅黄) しまりやや有、粘性欠
19. 2.5Y2/1 (黒) しまり・粘性有、炭化物少量
20. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり有、粘性やや有
21. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり・粘性有
22. 2.5Y4/6 (オリーブ褐) しまり・粘性有、焼土塊微量
23. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり有、粘性やや有、貼床

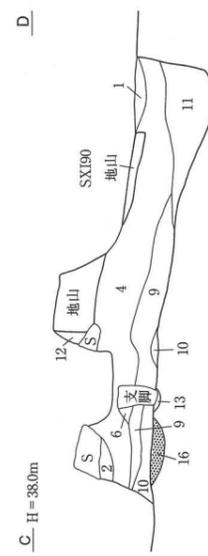
SI180B・C

24. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性欠
25. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
26. 2.5Y5/6 (黄褐) しまり・粘性やや有
27. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性有
28. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり欠、粘性やや有
29. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性有
30. 2.5Y3/1 (黒褐) しまり極めて有、粘性有
31. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり欠、粘性やや有、壁溝

SI180B・C カマドA



A H=39.7m



C H=38.0m

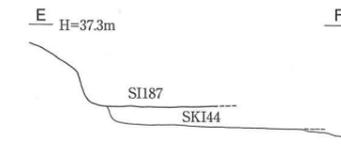
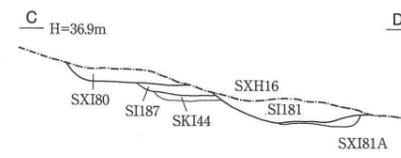
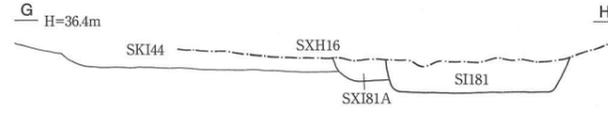
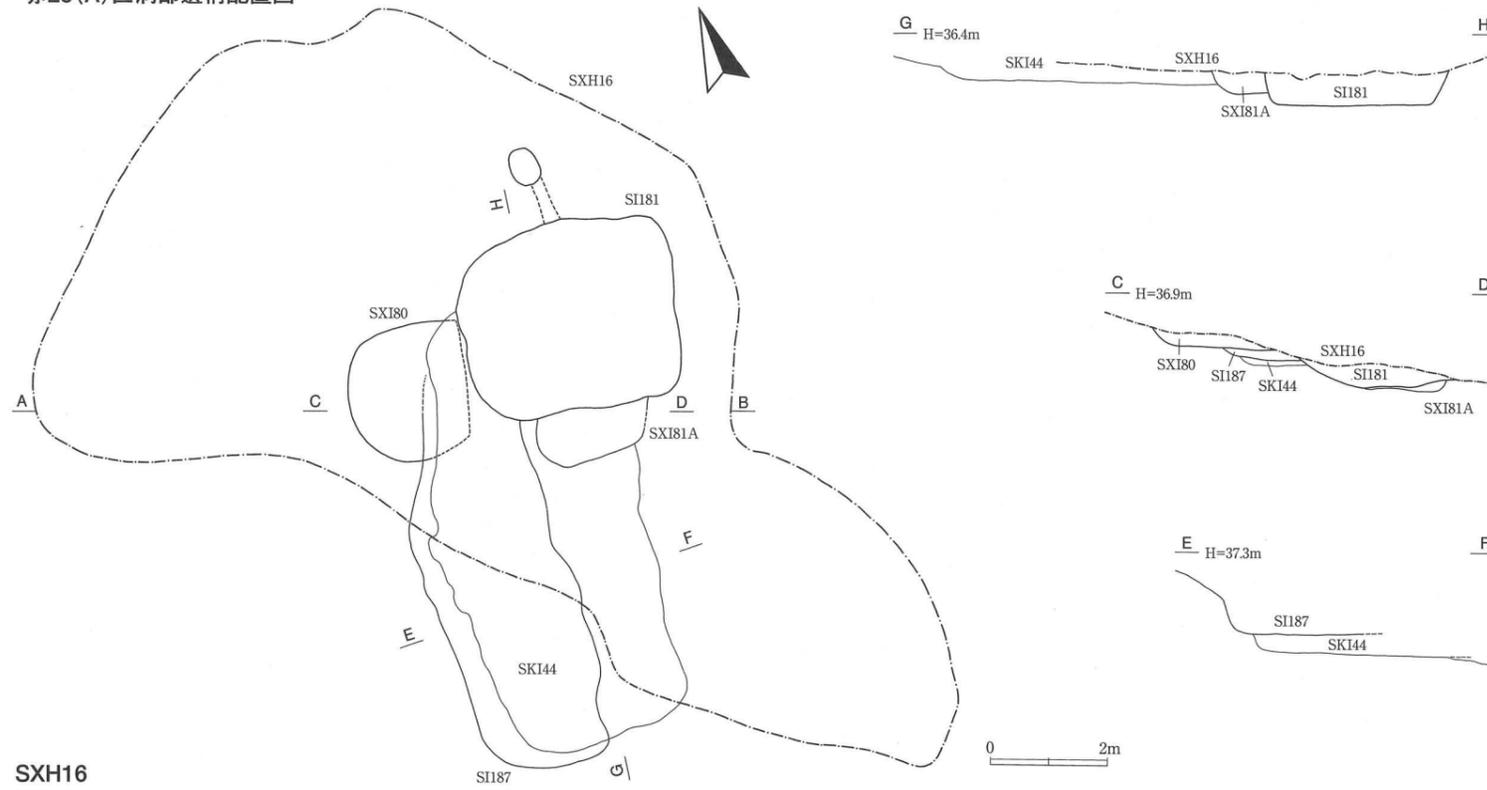
0 50cm

SI180B・C カマドA

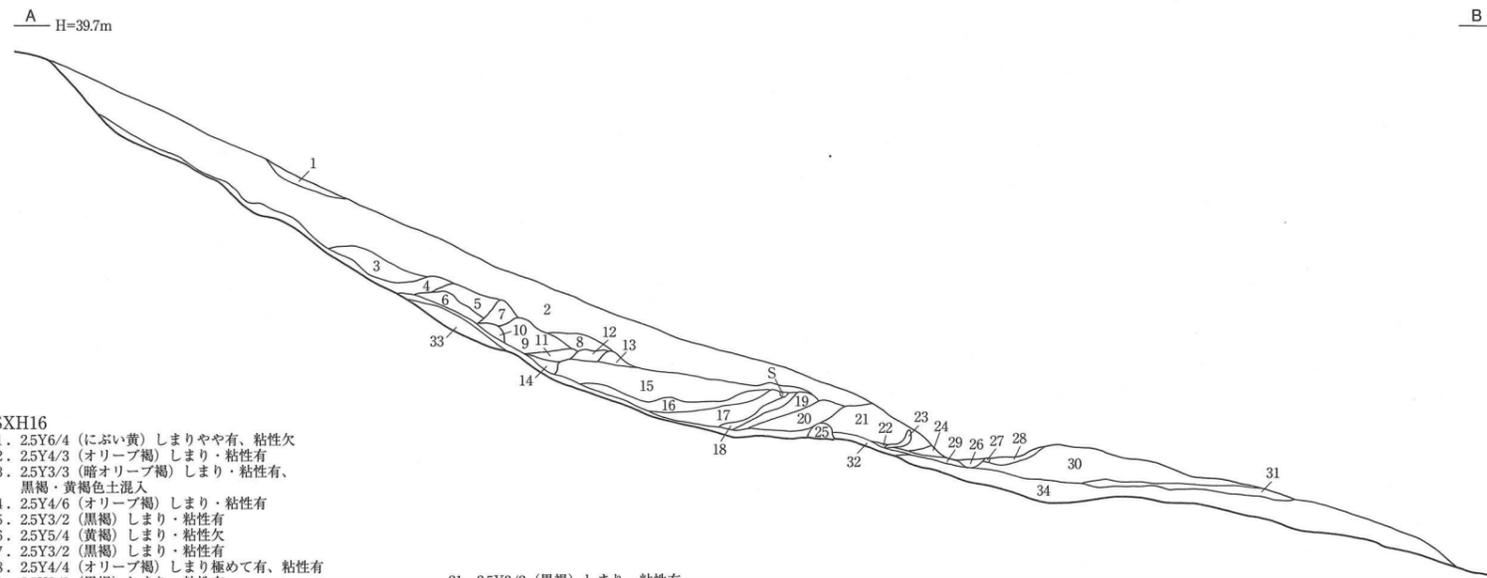
1. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性有
2. 10YR5/6 (黄褐) しまり欠、粘性有
3. 10YR5/8 (黄褐) しまり欠、粘性有
4. 10YR6/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性有
5. 10YR4/6 (褐) しまり欠、粘性有、
微量
6. 5YR4/6 (赤褐) 崩落焼土ブロック
7. 7.5YR4/4 (褐) 崩落焼土
8. 5YR5/8 (明赤褐) 崩落焼土ブロック
9. 10YR4/4 (褐) しまり欠、粘性有
10. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性有
11. 10YR3/3 (暗褐) しまり欠、粘性有
12. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性欠
13. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有、
支脚の堀り方
14. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり有、粘性欠、
芯材の堀り方
15. 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまり有、粘性欠、
芯材の堀り方
16. 5YR5/8 (明赤褐) 燃焼部焼土

第178図 SI180A～C竪穴住居跡・SXI55A工房跡・SK299土坑

赤25(A)区洞部遺構配置図



SXH16



SXH16

1. 25Y6/4 (にぶい黄) しまりやや有、粘性欠
2. 25Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性有
3. 25Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有、黒褐・黄褐色土混入
4. 25Y4/6 (オリーブ褐) しまり・粘性有
5. 25Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有
6. 25Y5/4 (黄褐) しまり・粘性欠
7. 25Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有
8. 25Y4/4 (オリーブ褐) しまり極めて有、粘性有
9. 25Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有
10. 25Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性欠
11. 25Y8/4 (淡黄) しまりやや有、粘性欠
12. 25Y4/3 (オリーブ褐) しまり極めて有、粘性有
13. 25Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有
14. 25Y8/4 (淡黄) しまりやや有、粘性欠
15. 25Y4/6 (オリーブ褐) しまり・粘性有、炭化物混入
16. 25Y3/3 (暗オリーブ褐) しまりやや有、粘性有
17. 25Y3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有、黄褐色土ブロック微量
18. 25Y3/3 (暗オリーブ褐) しまりやや有、粘性有、黄褐色土ブロック多量
19. 25Y3/1 (黒褐) しまりやや有、粘性有
20. 25Y4/3 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性有

21. 25Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有
22. 25Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有
23. 25Y5/4 (黄褐) しまりやや有、粘性欠
24. 25Y3/1 (黒褐) しまり・粘性有
25. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有
26. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性極めて有
27. 25Y4/2 (暗灰黄) しまり極めて有、粘性有
28. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性極めて有
29. 25Y3/2 (黒褐) しまり極めて有、粘性有
30. 10YR2/1 (黒) しまりやや有、粘性有
31. 25Y4/4 (オリーブ褐) しまり有、粘性欠
32. 25Y4/2 (暗灰黄) しまり極めて有、粘性有
33. 25Y4/4 (オリーブ褐) しまり有、粘性欠
34. 25Y5/3 (黄褐) しまり・粘性極めて有

第179図 赤25(A)区洞部遺構配置図・SXH16廃滓場

チを入れて断面状況を窺った。結果、斜面上方より廃棄された掘削廃土の広がり(SXH16)であることが判った。この下部にはSXH16により埋没した遺構が多く存在しており、竪穴住居跡2棟(SI181・187)、工房跡2棟(SXI80・81A)、竪穴状遺構1棟(SKI44)、鍛錬鍛冶炉跡3基(SXW70・71・73)が確認された。これらの新旧関係は、断面状況及び掘り上がりの平面形状などから、①(新)SI181→SI187、SX I 81A→SKI44(旧)、②(新)SX I 80(SXW71)→SI187→SKI44(旧)となり、SI181とSX I 80の関係については不明である。SXH16は以上の遺構を覆っており、数期に渡って廃棄が行われたものと思われる。SXW70・73はSXH16廃棄過程の一時期に構築されたものと思われるが、SXH16の上位により検出されていることから、上記の遺構より新しい時期のものである可能性が高い。なお、SXH16は各遺構の埋土と一連のものとして判断されるが、便宜上、SI181及びSX I 80の検出面で分割した。また、以下の事実記載及び実測図は一定のまとまりごとに記載することとした。

SXH16は約17×7.5mの不整な広がり、厚さは最大約70cmを測る。層位はⅢ層及びⅥ層起源のものが多く、34層に細分される。

遺物は、土器は土師器の甕形土器片が大1袋、坏形土器片が約50点、須恵器の甕形土器片が約10点、壺形土器片が数点出土した。主なものとして、土師器の甕は埋土中出土の(328~331)、台付坏は埋土中出土の(332)、須恵器の壺は埋土中出土のものとしてSX I 81A出土のものが接合した(333)、同じく埋土中出土のものとSK300出土のものと接合した(334)、須恵器の甕は検出面出土の(335)などがある。この他、埋土中より砥石が2点(132・133)、羽口が6点(114~119)、刀子が1点(101)、鉄鐸が1点(102)、炉壁が4点(39~42)、鉄塊系遺物が2点、鉄滓が多量出土している。

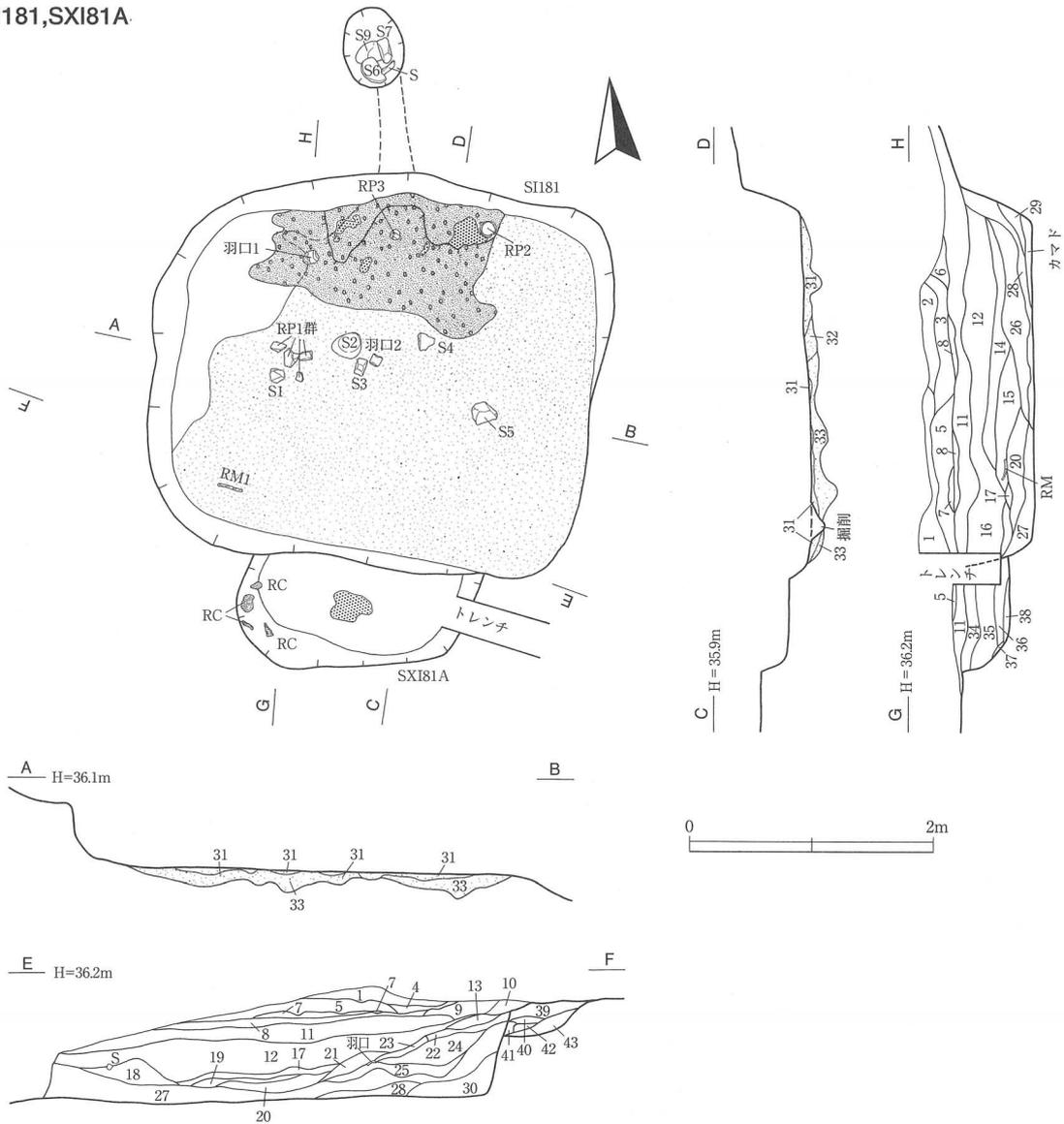
SI181の平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺約3.5mを測る。主軸方位はN-5°-Eで、床面積は9.2㎡である。壁はいずれも鋭角的に立ち上がり、壁高は約20~60cmが遺存する。埋土は19層に細分されるが、上述の通り、SXH16と一連の人為的堆積と判断される。床面は平坦で堅く締まり、貼床が北西側を除いたほぼ全面に施されている。

カマドは北壁のほぼ中央に付設されている。本体部の遺存状態は不良で、燃焼部のみ確認できる。燃焼部は平坦で、約70×50cmの楕円状に明赤褐色焼土が広がり、厚さは約5~8cmを測る。この北側には土師器の甕(RP3)が伏せられた状態で設置されており、支脚として使用されていたことが判る。またこの周囲から小ピット5基が検出されたが、配置的に袖部の芯材の抜き取り痕と思われる。煙道部は削り貫き式で、長さ約125cm、径約25cmを測り、先端に向かってやや下り勾配である。煙出部は約65×50cmの楕円形を呈し、深さは検出時に上面を掘り下げ過ぎたため110cm以上が推測され、垂直に掘り込まれている。

遺物は、土器は土師器の甕形土器片が中1袋、坏形土器片が数点出土した。主なものとして、土師器の甕は上記の支脚のRP3の(297)、煙出部出土のRP4・6・7が接合した(298)、カマド付近出土のRP2の(299)、土師器の鉢は床面RP1群の(300・301)、須恵器の壺形土器片は埋土中出土の(302)などがある。石製品は鉄砧石が煙出部出土のS6(122)とS9(123)の2点、磨石が埋土中より1点(124)、砥石が床面出土のS1(125)、煙出部出土のS7(127)、埋土中から1点(128)、貼床から1点(126)出土した。この他、羽口が埋土中及び埋土下位から計6点(97~102)、刀子が床面RM1として1点(93)、炉壁が埋土下位より1点(24)、鉄塊系遺物が埋土中より1点、鉄滓が埋土中より多量出土している。

SXI81Aは、SI181に大半を切られているため詳細は不明である。平面形は隅丸方形を呈すると思われる、規模は一辺約1.7mが推測され、床面積は1.0㎡が残存する。壁は鋭角的に立ち上がり、壁高は約40cmを測る。埋土は5層に細分されるが、上位のオリーブ褐色土、中位の黄褐色土、下位の黒褐色土に大別できる。

SI181, SXI81A



SXH16

1. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有
2. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性欠
3. 2.5Y3/3 (暗褐) しまり・粘性やや有
4. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有
5. 2.5Y3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有
6. 2.5Y5/3 (黄褐) しまり有、粘性欠
7. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり欠、粘性無
8. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性有
9. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり・粘性有
10. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有
11. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有、炭化物少量

SI181

12. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有、焼土粒・炭化物少量
13. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有、浅黄色土ブロック混入
14. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有、焼土塊少量
15. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有、焼土粒・炭化物少量
16. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり欠、粘性無
17. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり欠、粘性無
18. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有、浅黄色土ブロック・炭化物混入
19. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり欠、粘性極めて有
20. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり欠、粘性無
21. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有、焼土粒少量
22. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有、浅黄色土ブロック混入
23. 2.5Y5/4 (黄褐) しまりやや有、粘性欠
24. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有、焼土粒少量
25. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有、焼土粒・炭化物少量
26. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり・粘性有
27. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有、浅黄色土ブロック下層に混入
28. 2.5Y4/2 (灰黄褐) しまり・粘性極めて有

29. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり欠、粘性やや有
30. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性有、浅黄色土ブロック・炭化物混入
31. 2.5Y8/4 (淡黄) しまり極めて有、粘性無、貼床
32. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり極めて有、粘性無、貼床
33. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有、貼床

SXI81A

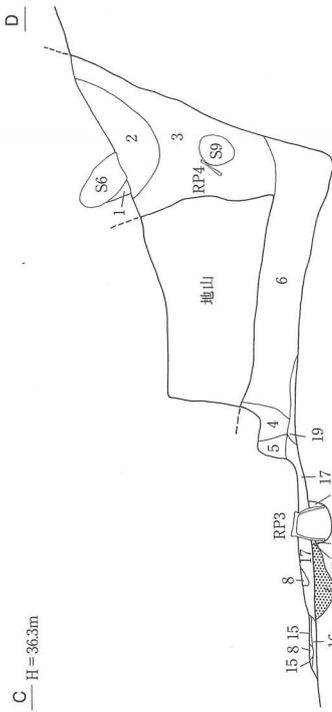
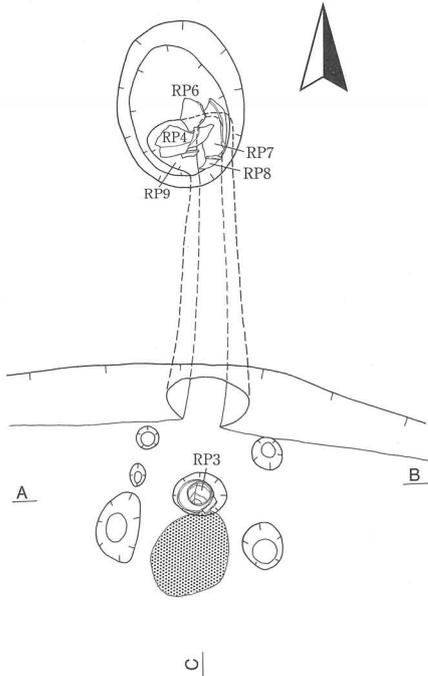
34. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有
35. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性有、炭化物微量
36. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり欠、粘性無
37. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり・粘性有
38. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり極めて有、粘性有、貼床

SKI44

39. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり有、粘性やや有
40. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまりやや有、粘性有
41. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性有
42. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり欠、粘性無
43. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有

第180図 SI181竪穴住居跡(1)・SXI81A工房跡

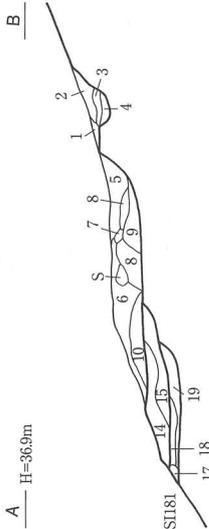
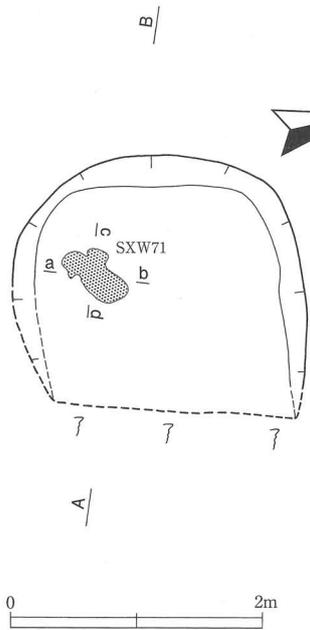
SI181 カマド



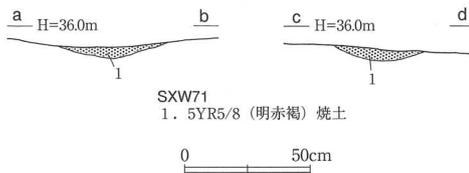
SI181 カマド

1. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり欠、粘性やや有
2. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり欠、粘性やや有
3. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまり・粘性やや有
4. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり欠、粘性やや有
5. 2.5Y8/4 (淡黄) しまり極めて有、粘性無
6. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり欠、粘性有
7. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性有、崩落構築土
8. 2.5Y8/4 (淡黄) しまりやや有、粘性欠
9. 5YR4/8 (赤褐) 崩落焼土塊
10. 2.5Y8/4 (淡黄) しまりやや有、粘性欠
11. 2.5YR4/8 (赤褐) 崩落焼土塊
12. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性有、崩落構築土
13. 2.5Y7/3 (浅黄) しまり有、粘性欠
14. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性有、焼土塊中量
15. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、黄褐色土・焼土ブロック少量
16. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性有
17. 10YR4/3 (にぶい黄) しまり・粘性有、焼土塊・炭化物中量
18. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有
19. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性有
20. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有、支脚の掘り込み
21. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり・粘性やや有、芯材の抜き取り痕
22. 7.5YR4/4 (褐) 支脚の掘り込み埋土の被熱部
23. 5YR5/8 (明赤褐) 燃焼部焼土

SXI80, SXW71



SXW71



- SXW71
1. 5YR5/8 (明赤褐) 焼土

SXI80

1. 10YR2/2 (黒褐) しまり欠、粘性有
 2. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり有、粘性無
 3. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有
 4. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり極めて有、粘性無
 5. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり欠・粘性無
 6. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有
 7. 10YR2/1 (黒) しまりやや有、粘性有
 8. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性有
 9. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有
 10. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性有
- SI187
11. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有、焼土粒・炭化物少量
 12. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり欠、粘性無
 13. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有、浅黄色土ブロック混入
 14. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性有、焼土塊微量
 15. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり・粘性有、焼土塊微量
 16. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり極めて有、粘性有
- SKI44
17. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有
 18. 2.5Y5/3 (黄褐) しまり有、粘性欠
 19. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり有、粘性欠

第181図 SI181竪穴住居跡(2)・SXI80工房跡・SXW71鉄生産関連炉跡

床面は平坦で堅く締まる。床面施設として、遺構南側に地床炉が確認された。地床炉は約15×10cmの不整形に明赤褐色焼土が広がるが、厚さは1cm未満である。

遺物は、土器は土師器の甕形土器片が小1袋程、坏形土器片が数点出土した。主なものとして、土師器の甕形土器は埋土中出土の(319・320)、坏形土器は埋土中出土の(321)などがある。この他、埋土中より砥石が1点(129)、磨石が2点、釣針が1点、炉壁が2点(30・31)、鉄滓が多量出土している。

S I 187 竪穴住居跡、S K I 44 竪穴状遺構

(第182図、遺物図版27・28・69・122・123、写真図版137・228・229・255・263・264・304・317・318)

F区赤25(A)区洞部中央の斜面中腹、ⅧB-10g~11iグリッドに位置し、検出面はⅢ層及びⅣ層である。検出時において本遺構の南西側のプランが確認できたが、その他の部分はS X H 16により不明瞭であった。本遺構と重複する遺構の新旧関係はS I 181等に上述した通りである。

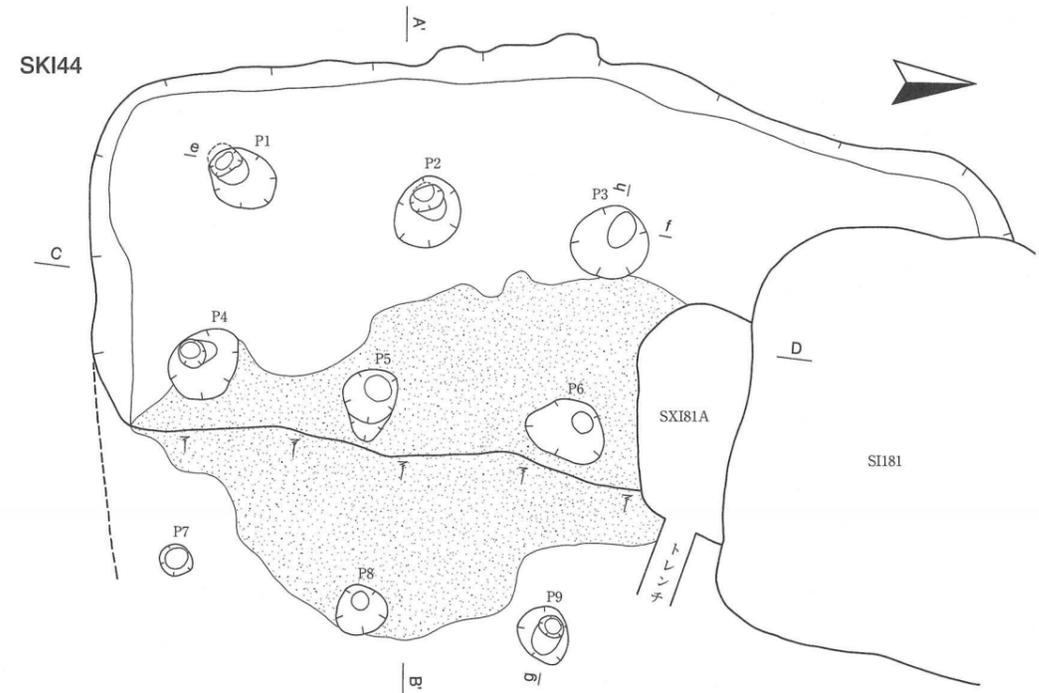
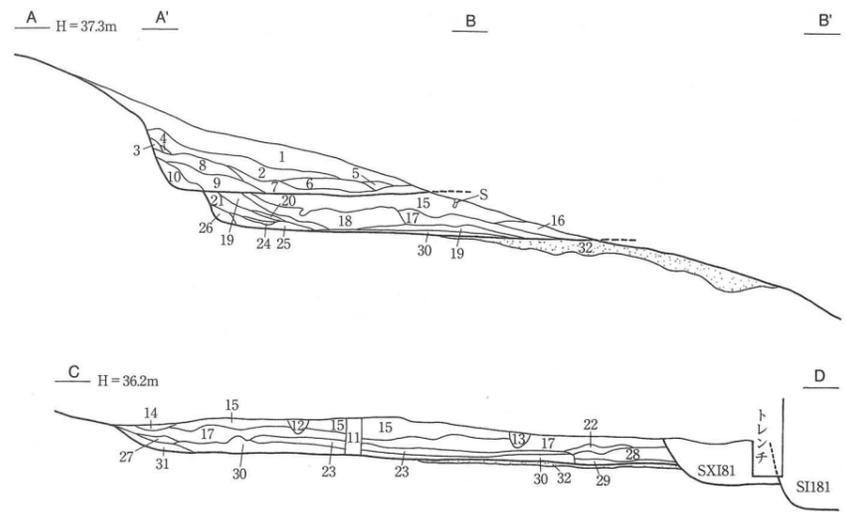
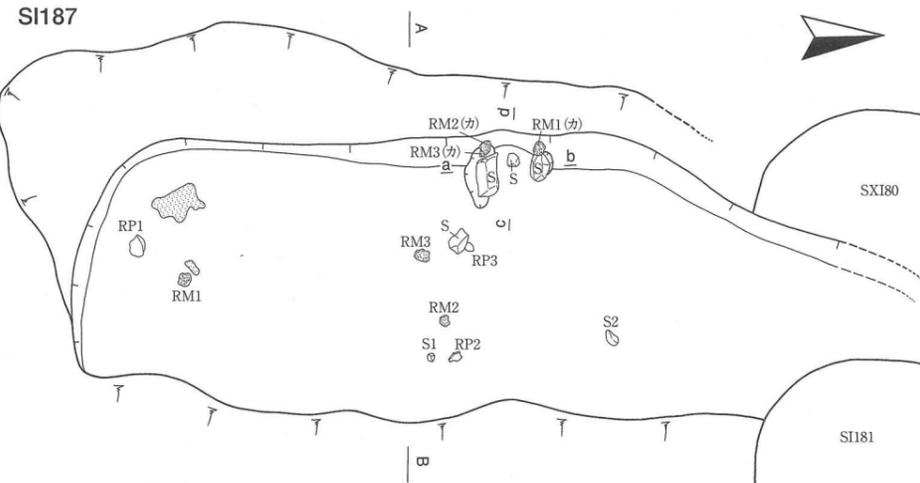
S I 187はS I 181及びS X I 80に北側の大半が切られ、また斜面下方は崩落により遺存しないため詳細は不明であるが、平面形は隅丸長方形を呈すると思われ、規模は長辺7m×短辺2.3m以上が推測される。長軸方向は等高線に平行し、床面積は12.6㎡以上と思われる。壁は鋭角的に立ち上がり、斜面上方の西壁は上半部が崩落により外反する。壁高は西壁で最大の約80cmを測る。埋土は10層に細分され、S X H 16の及ばない部分は主にⅢ層起源の黒褐～暗褐色土で構成されている。床面は概ね平坦である。遺構南西隅に約40×20cmの微細な炭化物の広がり確認された。

カマドは西壁の中央に付設されているが、残存状態は不良である。袖部には芯材として自然石が立位状態で対に据えられている。これらの間が燃焼部と考えられるが、使用頻度が少なかったためか、燃焼部焼土は検出されなかった。煙道施設等も確認されなかったが、検出時において崩落した構築粘土と思われる明黄褐色土が広がることや上記の状況から、本カマドは煙道施設のないカマド跡と考えられる。

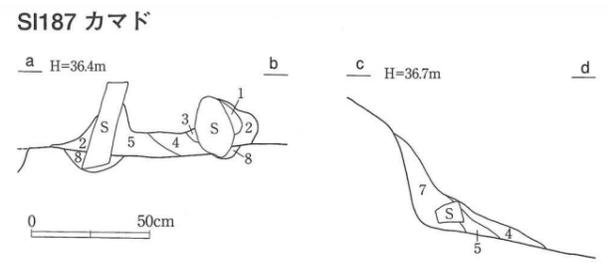
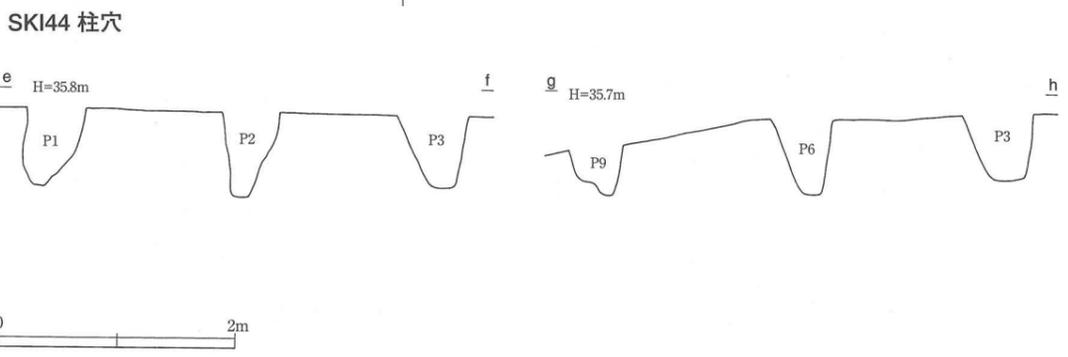
遺物は、土器は土師器の甕形土器片が中1袋、坏形土器片が十数点、須恵器の甕形土器片が数点出土した。主なものとして、検出面出土のNo.309・314、埋土上位出土のNo.304・305、埋土中出土のNo.303・310・313、カマド出土のNo.311・312、須恵器の甕形土器は埋土上位出土のNo.306、床面RP 2のNo.307などがある。この他、鉄砧石が埋土中から2点、羽口が埋土上位から1点(No.103)、埋土中から1点(No.104)、釘が埋土中位から1点(No.94)、炉壁が床面RM 3として1点(No.25)、鉄塊系遺物が埋土中から4点、鉄滓が埋土中及び床面から多量出土している。

S K I 44はS I 187の下部に存在し、S I 181及びS X I 81Aに北側の大半が切られている。斜面下方が崩落により遺存しないが、平面形は隅丸長方形を呈すると思われ、規模は長辺約7.7m、短辺4.9m以上が推測される。長軸方向は等高線に平行し、床面積は20.7㎡以上と思われる。斜面上方の西壁は鋭角的に、南壁は緩やかに立ち上がり、壁高は約25cmが残存する。埋土は18層に細分されるが、主にⅢ層起源の黒褐～暗褐色土で構成されている。床面は概ね平坦で、貼床が斜面下方側に施されている。また床面には3×3の総柱となる柱穴9基が確認された。各柱穴の詳細は以下の表に記載した通りである。P 7以外はいずれも抜き取りのため開口部が広がっている。柱間は1.65~1.7mを測り、軸方向は壁の辺とほぼ等しい。S I 181に切られているため詳細は不明だが、北側に延びる可能性も考えられる。

遺物は、土器は土師器の甕形土器片が小1袋程と須恵器の甕形土器片が数点、鉄滓が埋土及び貼床から多量出土した。掲載遺物は、土師器は埋土出土の甕(323)、須恵器は埋土上位出土の甕(326)と壺は(324)などがある。この他、刀子が埋土上位より1点(100)、炉壁が埋土中より2点(32・33)出土した。



- SI187
- 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有
 - 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有
 - 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有
 - 10YR2/3 (黒褐) しまり欠、粘性有
 - 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまりやや有、粘性有
 - 2.5Y3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有
 - 2.5Y3/1 (黒褐) しまり・粘性有
 - 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有
 - 2.5Y2/1 (黒) しまり・粘性有
 - 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有
 - 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有
 - 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまり欠、粘性極めて有
 - 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有
 - 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有
 - 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有
 - 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有、焼土粒・炭化物少量
 - 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまりやや有、粘性欠、黒褐色土混入
 - 2.5Y5/3 (黄褐) しまりやや有、粘性有、黒褐色土混入
 - 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり欠、粘性無
 - 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有
 - 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有
 - 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有
 - 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有
 - 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有
 - 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり・粘性有
 - 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性有、黄橙色土ブロック混入
 - 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有
 - 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまりやや有、粘性欠
 - 2.5Y2/1 (黒) しまり・粘性有
 - 10YR8/4 (浅黄橙) しまり欠、粘性無
- SKI44
- 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性やや有、柱穴か?
 - 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性やや有、柱穴か?
 - 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有、柱穴か?
 - 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり有、粘性欠
 - 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有
 - 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有
 - 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり・粘性有
 - 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性有、黄橙色土ブロック混入
 - 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有
 - 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまりやや有、粘性欠
 - 2.5Y2/1 (黒) しまり・粘性有
 - 10YR8/4 (浅黄橙) しまり欠、粘性無



- SI187 カマド
- 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性有
 - 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有、明黄褐色土ブロック混入
 - 10YR4/2 (灰黄褐) しまりやや有、粘性有、明黄褐色土ブロック・焼土塊少量
 - 10YR4/2 (灰黄褐) しまりやや有、粘性有、焼土塊中量
 - 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有、焼土塊中量
 - 10YR2/1 (黒) しまりやや有、粘性有
 - 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性有、崩落構築土
 - 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性有、芯材の埋り方

第182図 SI187竪穴住居跡・SKI44竪穴状遺構

	径 (cm)	深さ (cm)	平面形	底面標高 (m)
P 1	25	65	略円形	34.98
P 2	30×20	72	楕円形	34.88
P 3	32×21	62	楕円形	34.98
P 4	24	62	円形	34.87
P 5	22	72	円形	34.77

	径 (cm)	深さ (cm)	平面形	底面標高 (m)
P 6	17	53	円形	34.85
P 7	26	26	円形	35.01
P 8	16	35	円形	34.85
P 9	19	42	円形	34.82

S X I 80工房跡、S X W71鉄生産関連炉跡 (第181図、遺物図版28・69、写真図版138・228・255)

F区赤25(A)区洞部中央の斜面中腹、ⅧB-10g・10hグリッドに位置する。本遺構はS X H16の精査過程で検出したもので、新旧関係等は上述の通りである。斜面下方の東側は崩落により遺存しないため詳細は不明であるが、平面形は隅丸方形を呈すると思われ、規模は一辺約2.2m、床面積は3.3㎡以上が推測される。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は斜面上方の西壁で最大約30cmが遺存する。埋土は7層に細分されるが、S X H16と一連の人為的流入と判断される。なお、S X H16掘削時に掘り抜けてしまったため平面形は不明であるが、埋土断面より本遺構の斜面上方には深さ約20cm程の掘り込みが確認でき、本遺構に伴う施設である可能性が考えられる。床面はほぼ平坦で、南西側にS X W71が確認された。検出時において、鍛造剥片が少量視認できたため、鍛錬鍛冶施設が想定されたが、確認されたのはS X W71のみであった。S X W71は明確な掘り込みはなく、ほぼ平坦で、約60×25cmの不整形に明赤褐色焼土が広がり、厚さは約5cmを測る。

遺物は、土器は土師器の甕形土器片が約10点出土しており、主なものとして埋土中出土のNo318がある。この他、羽口が埋土中より1点(No108)、鉄滓・鍛造剥片が埋土中及びS X W71周辺から少量出土しており、本遺構が鍛錬鍛冶炉跡である可能性が考えられる。(小林)

S X I 40工房跡 (第183図、遺物図版124、写真図版138・305)

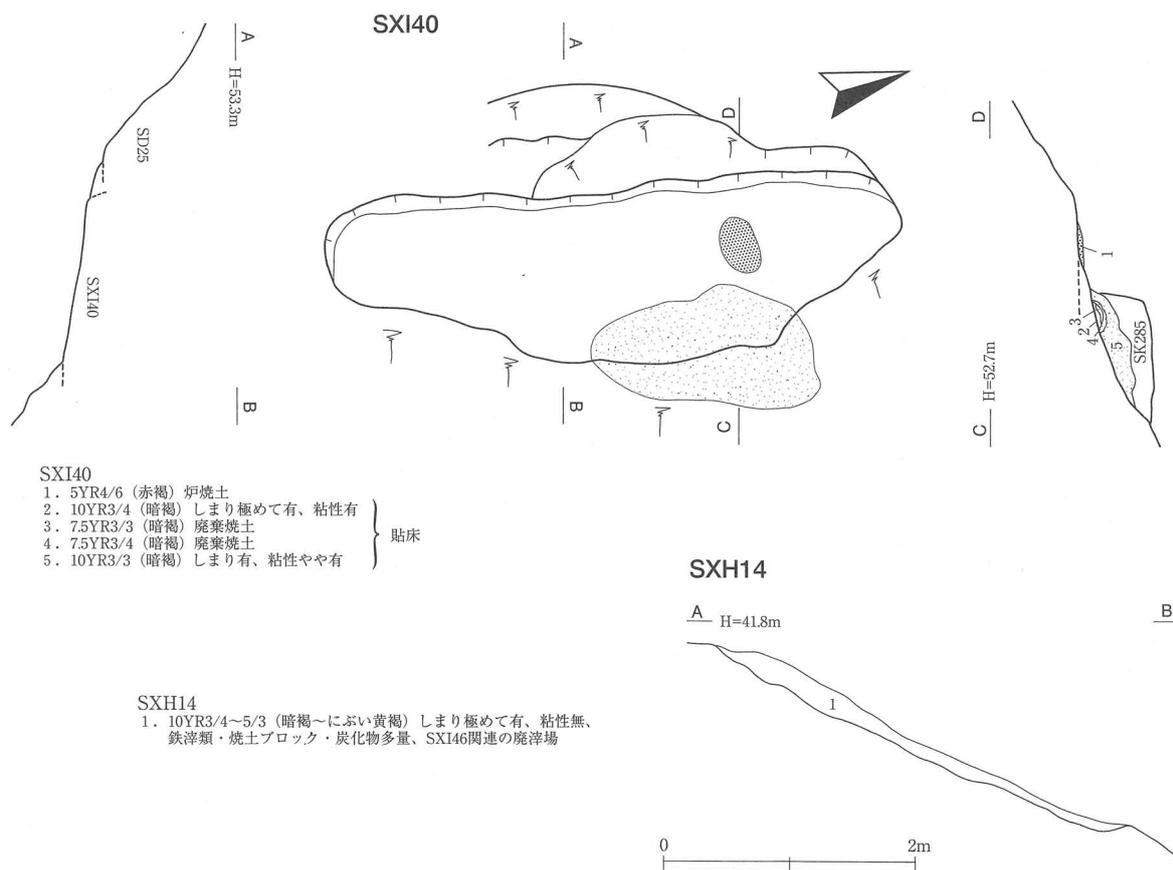
F区赤25B区、洞部から赤24B区尾根上に至る斜面上部、ⅧB-4oグリッドを中心に位置し、検出面はⅥ層上面だが、年度を跨ぐ調査区境にあり、表土が薄いこともあって粗掘でほとんど掘削してしまい、検出時には山側の壁際と床面で炉跡を確認したに留まる。山・谷側とも崩落が著しい。重複状況は山側南西部で赤23区から続くと考えられるS D25溝跡(道路状)を切り、貼床下ではS K285を検出したことから本遺構が新しい。残存部での平面形・規模は、等高線と平行する北-南が長軸方向の長軸約4.6m、短軸約2m前後の略隅丸長方形で、床面積は約9㎡と推定される。残存部分で壁は外傾して立ち上がり、中央部は崩落によりかなり外反する。壁高は山側西壁で最大約35cmから谷側に向かい低くなる。床面は谷側に向かい緩く傾斜しているが、およそ平坦で堅締、北東谷側のS K289周辺が貼床とされていた。床面施設としては北側中央に約50×30cmの楕円形で、火熱により厚さ約4cmの赤色変化した地床炉を検出した。

遺物は埋土から土師器甕形土器片約10点、羽口片と砥石片各1点、検出面で刀子1点(117)が出土した。

S X I 46工房跡・S X W47B・D鉄生産関連炉跡、S X H14廃滓場

(第183・184図、遺物図版70・71・97・124、写真図版139・140・256・257・265・284・305・319・320)

F区赤25B区、東谷側に向かいやや傾斜のきつい洞状地形の南部、ⅧB-7tグリッドを中心に位置し、検出面はⅢ・Ⅵ層上面である。本遺構は平成10年度試掘調査において黒色土中で鍛造剥片が視認されていたものだが、このトレンチによって北端が一部破壊されていた。検出状況としては基本層序のⅥ層とⅢ層の境目であったため、山側は崩落により不明瞭、谷側は埋土とⅢ層の識別が困難でプランの把握に苦慮したもの



第183図 SXI40工房跡・SXH14廃滓場

であり、またこの斜面下方には鉄滓類や焼土、炭化物等が広く認められたことから、重複も想定し、とりあえず等高線と平行するベルトを1本と直行するベルト2本を設置して精査を開始した。精査の結果、南側には本遺構に切られるS N66炉跡を検出し、斜面下位はS X H14廃滓場と判明した。

S X I 46は、北東部が一部トレンチにより、西山側と南東谷側は崩落により消失しており、全容は不明である。残存部での平面形は不整形で、規模は開口部では等高線と平行する北東-南西方向は約4m前後、直行方向は約3.5m前後が残る。壁と床面の状態、及び床面施設のあり様からはS X W47Dと炉Bを伴う新工房とS X W47Bと炉Aを伴った旧工房の建替えの可能性が考えられ、新工房と考えられるプランの平面形・規模は、残存状態と地形状況及び試掘時の遺物出土状況から推測すると一辺約2.5m前後の隅丸略方形で、南西側に炉跡が張り出すものと考えられ、床面積は約6㎡ほどと推定される。旧工房については規模はともかくとして新工房よりも5~10cmほど床面が高く、類似形態で西側に炉跡が張り出すものと思われる。また、南西山側隅には床面との高低差が約60cm、総長約2.5m、幅15~60cmの「くの字」状の棚があるが、新旧いずれに伴うものか判断はつけかねる。壁は棚部分を除き、全体的に明瞭な稜を持たず、緩やかに外傾して立ち上がり、棚より上位は崩落によりかなり外傾する。壁高は山側西壁で最大約150cmから谷側に向かい低くなる。埋土はⅢ層起源と思われる崩落によるマサ土混じりの黒色系土8層からなる自然堆積である。床面は谷側に向かい緩く傾斜しているが、およそ平坦で堅締である。床面施設としては炉A・Bの2基とS X

W47B・Dの炉跡2基と関連施設と考えられるK1・2土坑と遺存する鉄砧石を検出した。SXW47等については後述する。炉Aは、床面よりも約5cmほど底面が高く、長軸約60cm、短軸約35cmの楕円形に張り出して掘り込まれたもので、底面及び山側壁の中位が火熱により厚さ約1～5cmほどが赤色変化していた。炉Bは、幅130cm、奥行き約80cmの隅丸略方形に張り出して掘り込まれ、底面の西側が径約60cmほどの略円形で、火熱により厚さ約3cmほどが赤色変化していた。

SXW47B・Dは、当初鍛造剥片が視認される土坑プラン4基と遺存する鉄砧石を検出したが、精査開始時の状況では性格の判断ができず、A～Dピットとして扱ったもので、精査の結果、SXW47B・Dが炉跡、C・Dが関連施設と考えられるK1・2土坑と判断したものである。

SXW47Bは、北側の緩やかな壁面で確認され、北東部が試掘トレンチによって、東側は新工房の改築によって消失したと思われる。壁は西山側の一部のみ残存するが、焼土と還元範囲から平面形・規模は25×45cmの楕円形で、断面形は深さ5～10cm前後の丸底鍋形を呈したと推定される。底面は火熱により弱く赤色変化し、山側壁際は黒く蒸焼状態で堅く締まり、鍛造剥片が微量採取された。

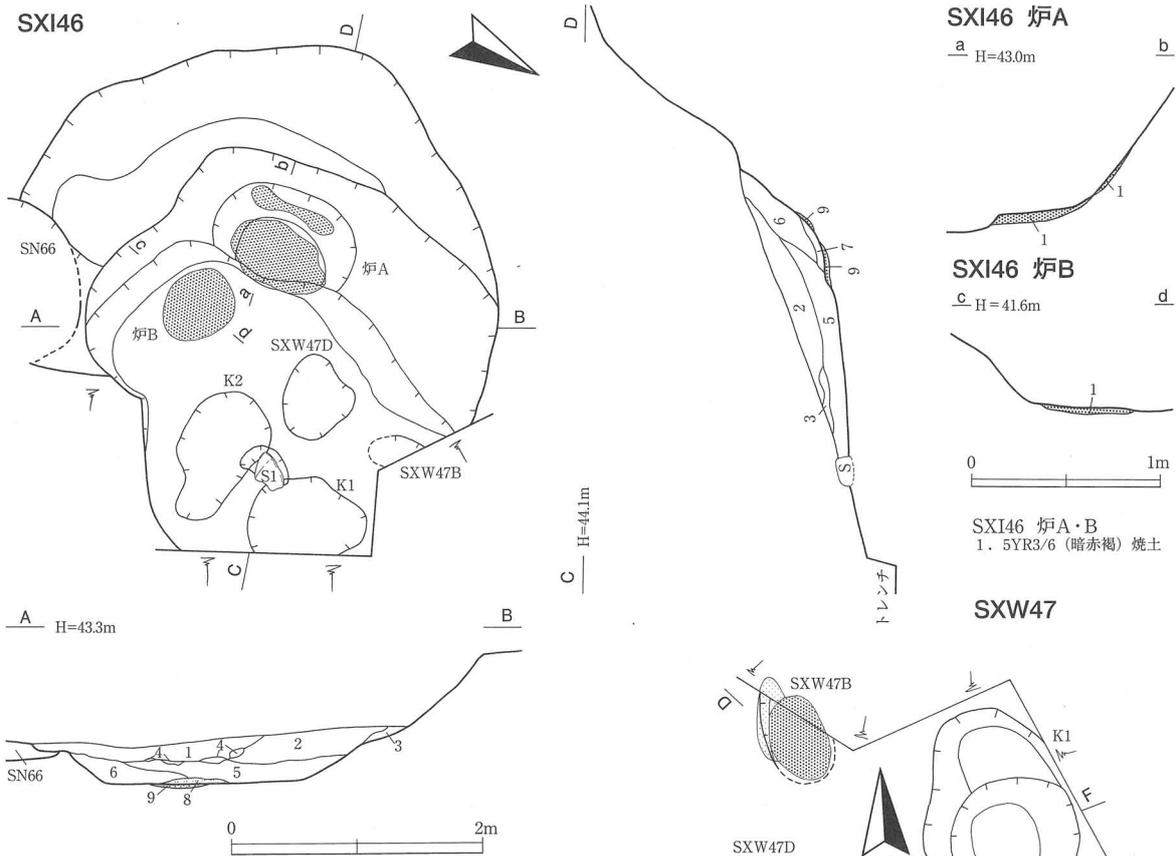
SXW47Dは、今次調査で確認されたセット関係の最も良好な鍛練鍛冶炉の一つであり、鍛造剥片が視認されたことから精査は埋土を収集しながら行った。炉跡の平面形・規模は開口部が約70×60cmの北側がやや張り出した歪な略円形を呈し、断面形は深さ約10cmの丸底鍋形を呈し、埋土は炭化物と鍛造剥片を多く含む黒色系土で下位ほど混入量が多くなる。底面から東壁の一部が黒く蒸焼状態で堅く締まり、北側突出部分の下位ではやや強く還元し、東半の南北両側は火熱により弱く赤色変化していた。K1土坑はB及びD炉の東側に位置し、東端は一部トレンチによって消失している。平面形・規模は開口部では長軸約90cm、短軸約70cmの略楕円形を呈し、南側は径約50cmの円形で、深さ約25cmの丸底鍋形に深く掘り込まれ、北側は10cmほど一段高い棚状となっていた。埋土は炭化物と鍛造剥片及び径1cm以下のゴツゴツした鍛冶滓粒を多量に含む黒色系土で、下位は蒸焼に近い状態で堅く締まっていた。K2土坑はD炉とK1の南側に位置し、平面形・規模は開口部では長軸約110cm、短軸約65～35cmのダルマ形を呈し、深さ約4cmを測る。底面は平坦だが、西端は径約40cmの略円形で、深さ約7cmの丸底鍋形に掘り込まれていた。埋土はK1同様、炭化物と径1cm以下のゴツゴツした鍛冶滓粒を多くと鍛造剥片を微量含む黒色系土で、下位は蒸焼に近い状態で堅く締まっていた。遺存する鉄砧石はD炉の東側でK1・2の間に位置し、掘り方は人頭大の石よりも一回り大きく、深さ約10cmほど埋置されていた。配置と埋土及び遺物の出土状況からD炉跡北側の突出部が羽口の装着痕跡で、鉄砧石とK2の足入れ穴が最終のセットと考えられ、K1はB炉とのセットと推測される。またK1・2の椀形の掘り込みについては、底面の状態からさらに2基の鍛冶炉の造り替えがあった可能性も考えられる。

遺物は、土器は埋土から土師器の甕形土器片少量と須恵器の甕形土器片数点、羽口は南側棚から1点(122)、SXW47B・Dから各1点(123・124)と埋土から破片約10点、鉄砧石1点(139)と埋土から要石1点(140)と磨石1点(141)、鉄製品は埋土から細い棒状品1点、鍛冶滓類が埋土から約6kgとSXW47関連から約10kg、それと鍛造剥片が大量に出土した。

SXH14は、およそ4m四方の不整な広がり、厚さ約20～30cm程の堆積で、すべてSXI46の作業による廃棄と思われる。

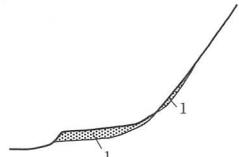
遺物は、土器は土師器の甕形土器と坏形土器の破片数点、羽口片約70点、鍛冶滓類が総量約35kgと多量に、鍛造剥片が少量出土した。

(小山内)



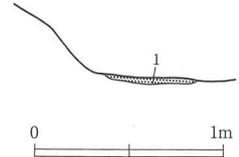
SXI46 炉A

a H=43.0m b



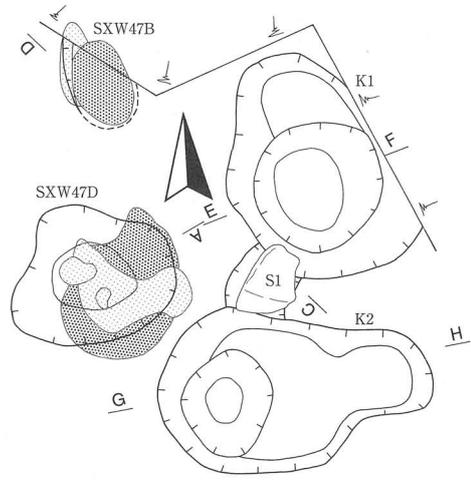
SXI46 炉B

c H=41.6m d



SXI46 炉A・B
1. 5YR3/6 (暗赤褐) 焼土

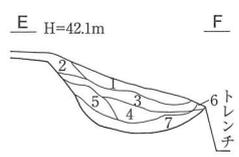
SXW47



SXI46

1. 10YR2/2 (黒褐) しまり有、粘性やや有、マサ土粒少量
2. 10YR3/1 (黒褐) しまり有、粘性やや有、マサ土粒少量
3. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性無、砂質、マサ土多量
4. 10YR2/1 (黒) しまり・粘性有、炭化物・焼土ブロック多量
5. 10YR3/2 (黒褐) しまり極めて有、粘性やや有、炭化物微量
6. 10YR3/3・10YR4/3 (暗褐・にぶい黄褐) しまり有、粘性無、厚さ数cmの互層
7. 10YR3/2 (黒褐) しまり極めて有、粘性無、砂質、マサ土多量
8. 10YR2/1 (黒) しまり極めて有、粘性有、炭化物多量
9. 5YR3/6 (暗赤褐) 焼土

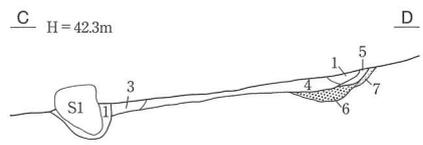
SXW47 K1



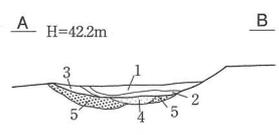
SXW47 K1

1. 10YR2/2 (黒褐) しまり有、粘性無
2. 10YR2/1 (黒) しまり有、粘性無、炭化物微量
3. 10YR1.7/1 (黒) しまり・粘性有、炭化物多量
4. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有、小鉄滓・炭化物少量
5. 10YR2/1 (黒) しまり・粘性有、鉄滓多量
6. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
7. 7.5YR1.7/1 (黒) しまり極めて有、粘性無、極小鍛冶滓・鍛造剥片微量

SXW47B 鉄砧石



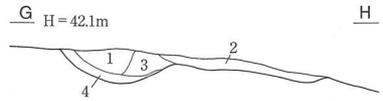
SXW47D



SXW47D

1. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性無、砂質、マサ土多量
2. 10YR1.7/1 (黒) しまりやや有、粘性有、炭化物・鍛造剥片多量
3. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性無、マサ土多量、炭化物微量
4. 7.5YR1.7/1 (黒) 還元部蒸焼
5. 7.5YR4/4 (褐) 弱い焼土

SXW47 K2



SXW47 K2

1. 10YR2/1 (黒) しまり無、粘性有、小鍛冶滓多量、炭化物少量
2. 10YR1.7/1 (黒) しまり・粘性有、炭化物少量、小鍛冶滓多量
3. 7.5YR2/1 (黒) しまり極めて有、粘性有、焼土ブロック・黄褐色土ブロック多量
4. 7.5YR1.7/1 (黒) しまり極めて有、粘性有、炭化物少量

SXW47B 鉄砧石

1. 10YR2/2 (黒褐) しまり有、粘性無、砂質
2. 10YR2/1 (黒) しまり有、粘性無、炭化物微量
3. 10YR2/1 (黒) しまり・粘性有、鉄滓多量
4. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有、小鍛冶滓・炭化物少量
5. 5YR3/6 (暗赤褐) 焼土
6. 7.5YR1.7/1 (黒) 還元部蒸焼
7. 10YR2/1 (黒) しまり極めて有、粘性無、炭化物微量、鍛造剥片少量、鉄砧石の裏込土



第184図 SXI46工房跡・SXW47B・D鉄生産関連炉跡

S X I 58工房跡 (第185図、遺物図版28・69、写真図版141・228・255)

F区赤25(A)区洞部南側の斜面中腹、ⅧB-11i・jグリッドに位置し、検出面はⅢ層及びⅣ層である。検出時の状況から、斜面上方に同形状の別遺構が重複するものと考えたが、埋土断面観察の結果、本遺構に伴う棚状施設と判断した。斜面下方の北・東側は崩落により遺存しないが、平面形は隅丸長方形基調と思われる、規模は長辺5.9m以上×短辺1.8m以上が推測される。長軸方向は等高線に平行し、床面積は6.3㎡以上と思われる。遺存する斜面上方の西壁は緩やかに立ち上がり、棚状施設部分ではほぼ直角に立ち上がり、壁高は本体部分で約25cm、棚状施設部分で約50cmを測る。埋土は9層に細分されるが、主にⅢ層起源の土で構成される自然堆積と思われる。床面はほぼ平坦である。床面施設として、中央付近に土坑(K1)、斜面下方の東側に炉A、西壁付近に炉Bが確認された。K1は径約50cmの円形を呈し、深さは約15cmを測る。炉Aは約60×50cmの不整形を呈し、深さ約10cmの掘り込みを有する。同形状に明赤褐色焼土が広がり、厚さは約7～8cmを測る。炉Bは地床炉で、径約40cmの円状に赤褐～明赤褐色焼土が広がり、厚さは約5cmを測る。この他、K1の北側に径約30cm、深さ約30cmの柱穴と思われるピットが確認された。

遺物は、土器は土師器の甕形土器片が約30点、坏形土器片が1点、須恵器の甕形土器片が数点、羽口が数点出土した。主なものとして、土師器の甕形土器は埋土中出土の(315)、検出面出土の(316)、羽口は検出面出土の(105)や埋土中出土の(106)などがある。この他、埋土中より鉄滓が微量出土している。

S X I 60工房跡 (第185図、遺物図版28、写真図版141・228)

F区赤25(A)区洞部北側の斜面中腹、ⅧB-9f～10gグリッドに位置し、検出面はⅥ層である。斜面下方の東側は崩落により遺存しないが、平面形は隅丸長方形を呈すると思われる、規模は長辺約3.2m、短辺1.3m以上が推測される。長軸方向は等高線に平行し、床面積は2.8㎡が遺存する。壁はやや鋭角的に立ち上がり、壁高は斜面上方の西壁で最大約20cmを測る。埋土は4層に細分されるが、各層位状況から斜面上方から流入した自然堆積と思われる。床面は概ね平坦で、貼床が斜面下方に施されている。床面施設として、遺構の中央に地床炉が確認された。地床炉は約70×35cmの不整形に広がり、橙色を帯びている。

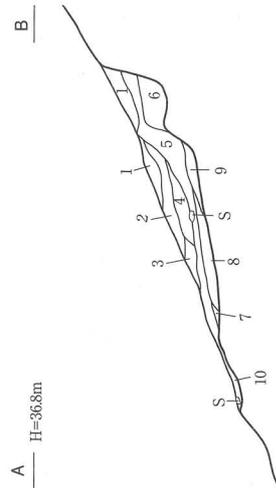
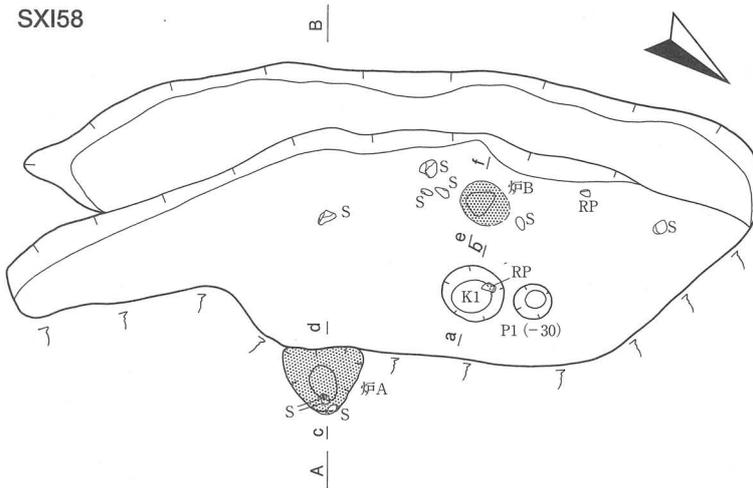
遺物は、埋土中より土師器の甕形土器片が数点(内1点：317)と磨石が1点出土したのみである。(小林)

S X I 63工房跡 (第186図、遺物図版31・71・125、写真図版142・230・257・305・320)

赤25C区中央、ⅧB-4k・4lグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出した。北側斜面が消失しているため平面形・規模ははっきりしないが、西壁は3.4m、南壁が2.2m残存していることから、一辺3.5m前後の隅丸方形状を呈するものと思われる。床面積は残存部分で6.4㎡を測る。壁は外傾して立ち上がる。壁高は西壁で38cm、南壁で26cmを測り、西壁は北に、南壁は西に向かうにつれて低くなる。埋土は上位は灰黄褐色土、下位はにぶい黄褐色土を主体とした自然堆積を呈し8層に細分された。床面はほぼ平坦で締まり、住居中央付近を中心に貼床が施されている。床面施設として住居中央の床面から地床炉が1基、南西コーナー際の床面から土坑が1基(K1)、南壁中央壁際から柱穴が1基(P1)検出された。炉は22×20cmの楕円形状を呈し、厚さ4cmの焼土が形成されている。この炉の付近には礫と羽口が出土しており、ここに鍛冶施設があった可能性を考え精査を進めたが、礫と羽口が床面から若干浮いていること、また粘土等で構築されている形跡が無いことから、地床炉の周辺にこれらの遺物が流れ込んだものと考えている。土坑は86×51cmの楕円形状を呈し、深さ31cmを測る。

遺物は土師器片が9号袋1/3袋分、羽口片20点、鉄製品1点と鉄滓が出土した。掲載したのは床面より出土したRP1(357)と(359)の土師器甕・RP2の羽口(135)と、埋土中より出土した土師器甕(356・358)・土師器坏(360)とRP4(132)・(133)・RP2(134)の羽口3点、鍋状?鉄製品(127)である。

SXI58



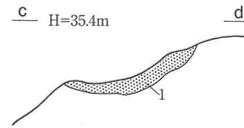
A H=36.8m



SXI58

1. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有
2. 2.5Y3/1 (黒褐) しまりやや有、粘性有
3. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまりやや有、粘性有
4. 2.5Y6/4 (におい黄) しまり欠、粘性無
5. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有
6. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有
7. 10YR2/1 (黒) しまり・粘性有
8. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有
9. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有
10. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり極めて有、粘性有、焼土粒・炭化物少量、炉A埋土

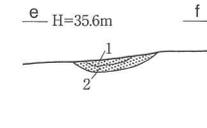
SXI58 炉A



SXI58 炉A

1. 5YR5/6 (明赤褐) 焼土

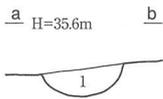
SXI58 炉B



SXI58 炉B

1. 5YR4/8 (赤褐) 焼土
2. 5YR5/8 (明赤褐) 焼土

SXI58 K1

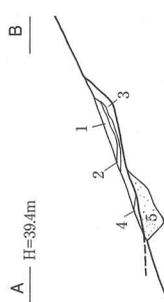
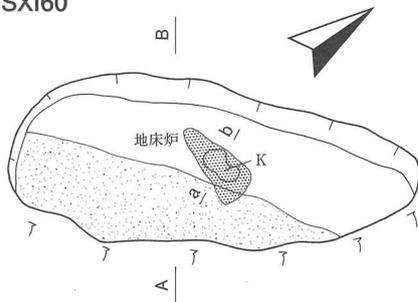


SXI58 K1

1. 10YR2/3 (黒褐) しまり欠、粘性有

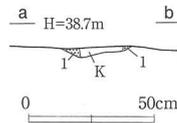


SXI60



A H=39.4m

SXI60 地床炉



SXI60 地床炉

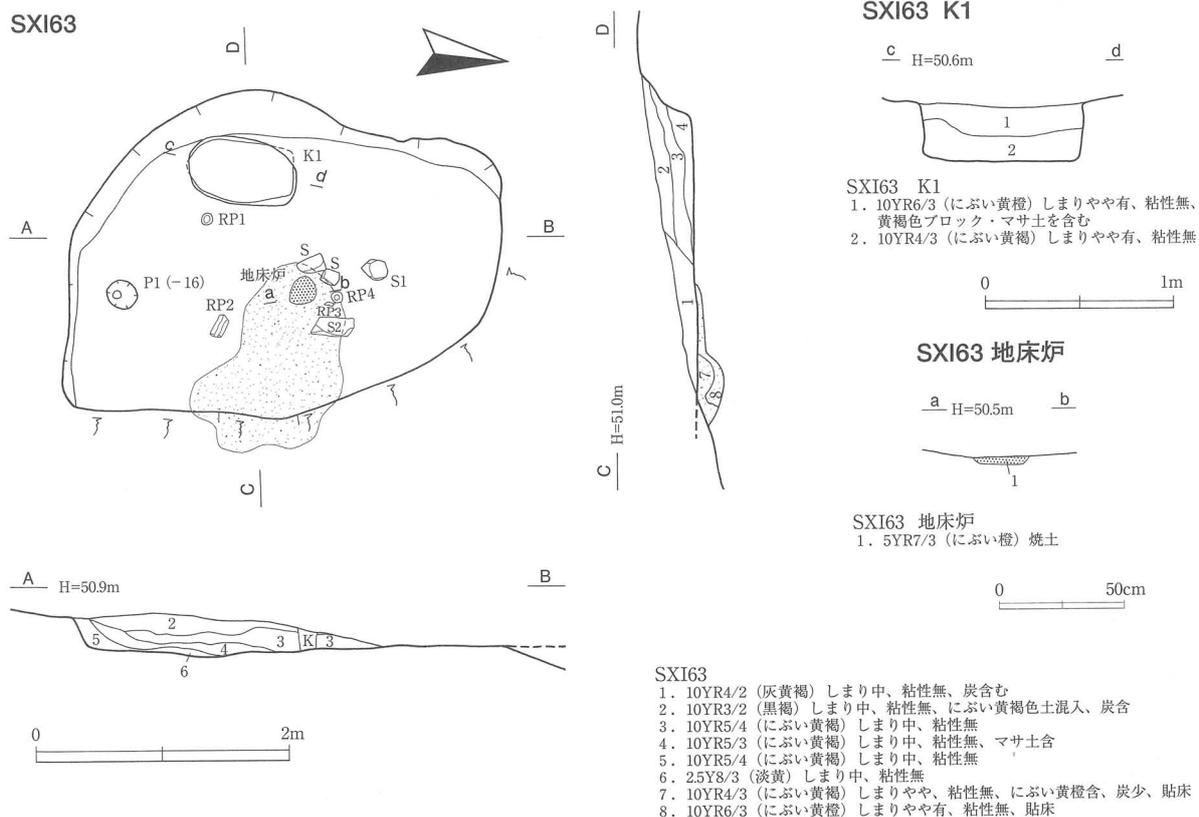
1. 7.5YR6/6 (橙) 焼土

SXI60

1. 2.5Y6/4 (におい黄) しまり有、粘性欠
2. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
3. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性欠
4. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり極めて有、粘性有
5. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性やや有、貼床



第185図 SXI58・60工房跡



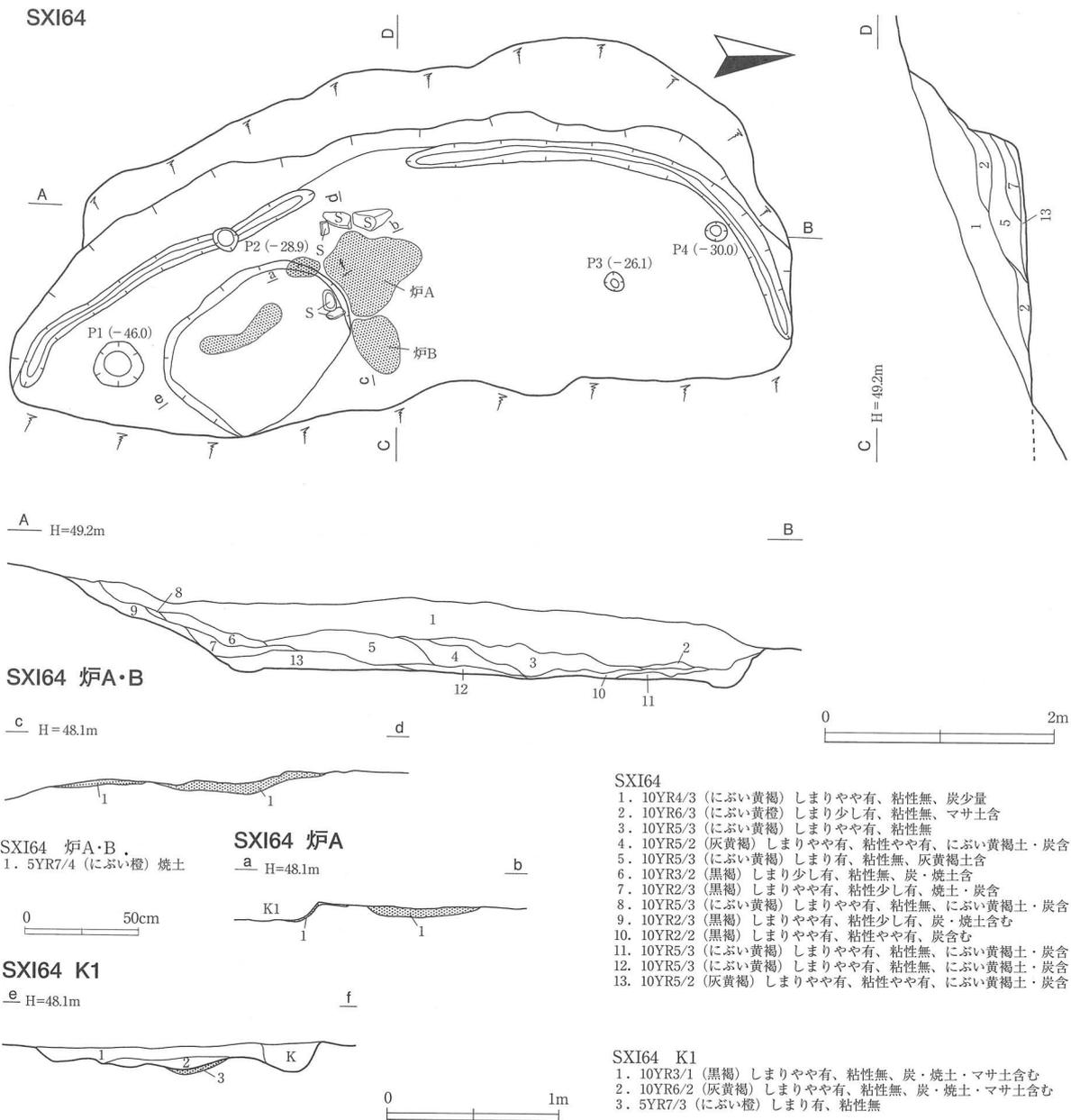
第186図 SXI63工房跡

S X I 64工房跡 (第187図、遺物図版325、写真図版142・230・305・306・320)

赤25C区中央、ⅧB-5j・5kグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。東側斜面が消失しているため平面形・規模ははっきりしないが、西壁は6.8m遺存し、北壁が1.6m、南壁が1.1m残存していることから、長軸6.7m前後の隅丸長方形を呈していたものと思われる。床面積は残存部分で8.5㎡を測る。壁は上半部は外傾して、下半部はやや外傾して立ち上がる。壁高は西壁で95cmを測り、北・南壁は東に向かうにつれて低くなっていく。埋土は上位はにぶい黄褐色土、中位は黒褐色土、下位はにぶい黄褐色土を主体とした自然堆積を呈し13層に細分された。床面はほぼ平坦で締まり、西壁中央付近を除く壁際に周溝が巡っている。床面施設として住居中央の床面から地床炉が2基(炉A・炉B)、住居中央南よりの床面から土坑が1基(K1)、住居壁際を中心に柱穴が4基(P1~P4)検出された。炉Bの周辺には礫が5個出土しており、ここに鍛冶施設があった可能性を考え精査を進めたが、礫が床面から若干浮いていること、また粘土等で構築されている形跡が認められなかったことから、地床炉の周辺にこれらの礫が流れ込んだものと考えている。炉Aは81×73cmの不整形を呈し、厚さ6cmの焼土が形成されている。炉Bは51×36cmの楕円形状を呈し、厚さ4cmの焼土が形成されている。K1は170×125cmの楕円形状を呈し、深さ16cmを測り、底面中央付近から長軸79cm、短軸19cmの長楕円形状を呈する、厚さ2cmの焼土が形成されている。

遺物は土師器片が9号袋1/2袋分、須恵器片が1点、鉄製品が6点(板状3点・穂積具・小刀・棒状)と鉄滓が出土している。このうち掲載した遺物は埋土中より出土した土師器甕(361)と小刀(128)・穂積具(129)・棒状鉄製品(130)・棒状鉄製品(131)と攪乱中より出土した板状鉄製品2点(132・133)である。

(島原)

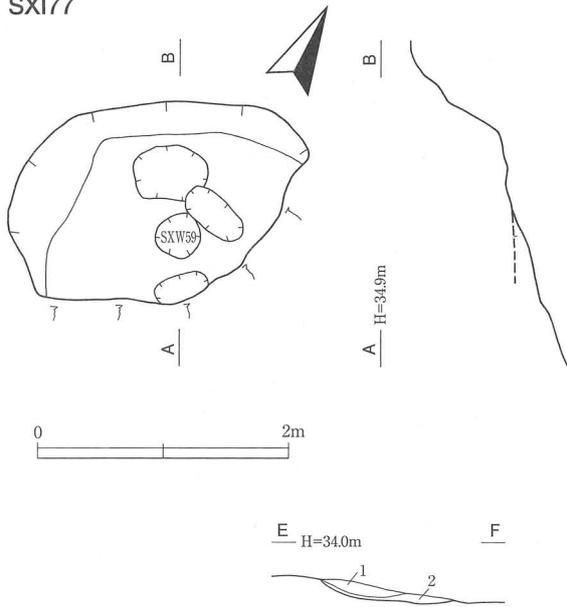


第187図 SXI64工房跡

S X I 77工房跡、S X W 59鉄生産関連炉跡 (第188図、遺物図版69、写真図版143・255・264・317・318)

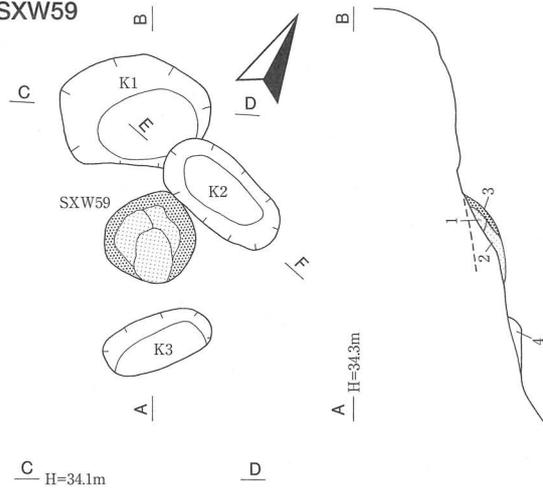
F区赤25(A)区洞部中央の斜面下方、ⅧB-13 f・gグリッドに位置し、検出面はⅥ層である。検出時の平面プランが不整形であったことや、鉄滓が多量に出土することから、斜面上方の遺構からの廃滓・廃土の広がりと考え精査に臨んだが、底面で炉跡が確認されたことから、廃滓・廃土により埋没した工房跡であることが判った。崩落により斜面下方の大半は遺存しないが、平面形は隅丸方形を基調とするものと思われ、規模は一辺2.3m以上、床面積2.0㎡以上が推測される。遺存する壁は鋭角的に立ち上がり、壁高は北壁で最大約50cmを測る。埋土は褐色土系で構成されており、上記の通り、斜面上方の遺構から廃棄されたものと推測される。床面は崩落によるためかやや凹凸が見られる。

SXI77



- SXI77 K2
1. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有、褐色土ブロック少量
 2. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり有、粘性欠

SXW59

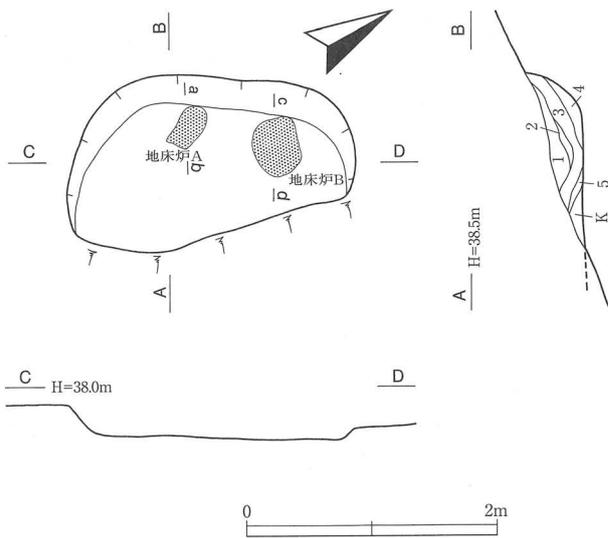


- SXI77 K1
1. 2.5YR6/4 (にぶい黄) しまりやや有、粘性欠

- SXW59
1. 10Y6/1 (灰) 還元焼土
 2. 5G1.7/1 (緑黒) 還元焼土
 3. 7.5YR5/6 (明褐) 酸化焼土
- SXW59 K3
4. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性有

0 50cm

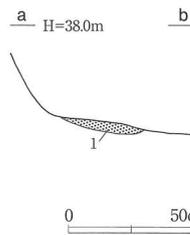
SXI90



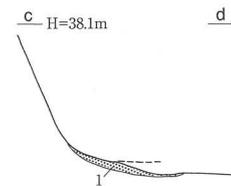
- SXI90
1. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有
 2. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり有、粘性欠
 3. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性有
 4. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有
 5. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有

SXI90 地床炉A

SXI90 地床炉B



- SXI90 地床炉A
1. 5YR5/6 (明赤褐) 焼土



- SXI90 地床炉B
1. 5YR5/8 (明赤褐) 焼土

第188図 SXI77・90工房跡・SXW59鉄生産関連炉跡

前述の通り、本遺構の中央部においてS X W59を確認した。この周辺には微量の鍛造剥片が視認されたため、鍛冶関連施設を想定して精査を開始した。その結果、S X W59を中心に北側にK 1、北東側にK 2、南側にK 3が確認された。K 1の平面形は略円形を呈し、規模は約45～60cmを測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さは約3cmほどである。K 2の平面形は長楕円形を呈し、規模は約55×25cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは約6cm程である。K 3は斜面下方が崩落により遺存しないため、詳細は不明だが、平面形は長楕円形を呈し、規模は約45×20cm以上が推測される。断面形は皿状を呈し、深さは約5cm程である。

S X W59は検出時において既に還元色焼土がみられることから、崩落により上面は失われたものと思われる。確認された平面形は円形を呈し、規模は径約35cmを測る。中心部には灰～緑黒色の還元焼土、この周囲には明褐色の酸化焼土が広がり、厚さは約5～6cmを測る。以上の様に、炉が還元色を帯びていることや鍛造剥片が確認できることから、本遺構は鍛錬鍛冶炉と考えられる。また周囲で確認されたK 1～3については、S X W59同様に上面が崩落しているものと思われ、配置及び形態から鉄砧石の設置痕として、K 1にその可能性が考えられるが、いずれにしても詳細は不明である。

遺物は、羽口が埋土中より1点(107)、鉄塊系遺物が検出面より1点、炉壁が埋土中より1点(27)と検出面より2点(28・29)、鉄滓が埋土中から多量、鍛造剥片が炉及び周辺から微量出土した。

S X I 90工房跡(第188図、写真図版144)

F区赤25(A)区北側の棚部、ⅧB-12dグリッドに位置し、検出面はⅥ層である。検出時の状況から、当初は土坑と考え精査に臨んだが、底面に焼土が確認され、また掘り上がりの形状から工房跡と判断した。本遺構の南側において、S I 180B・Cのカマド煙出部と重複するが、埋土断面観察の結果、本遺構の方が新しいことが判った。斜面下方の東側は崩落により遺存しないが、平面形は隅丸長方形を呈すると思われる、規模は長辺約2.3m、短辺1.4m以上が推測される。長軸方向は等高線に平行し、床面積は1.9㎡が遺存する。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は斜面上方の西壁で最大約40cmを測る。埋土は5層に細分されるが、主に褐色土系で構成される自然堆積と思われる。床面は平坦で堅く締まる。床面施設として、西壁際に地床炉が2基(地床炉A・B)確認された。地床炉Aは西壁の南寄りに位置し、約35×20cmの楕円状を呈し、最大厚約5cmで明赤褐色を帯びている。地床炉Bは西壁の北寄りに位置し、径約40～45cmの略円形を呈し、最大厚約3～4cmで明赤褐色を帯びている。遺物は出土しなかった。

S K I 30竪穴状遺構(第189図、遺物図版28、写真図版144・229)

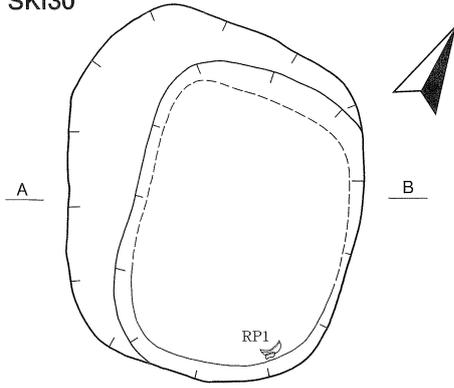
F区赤25(A)区洞部中央の斜面上方、ⅧB-8jグリッドに位置し、検出面はⅣ層である。調査員の判断ミスにより、検出時において確認できた人為堆積の覆土を、試掘後に埋め戻したトレンチの覆土と勘違いしたため、埋土の上位部分を掘削してしまった。斜面上方には崩落部が広がるが、平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長辺約2.5m×短辺約1.7mを測る。長軸方向は等高線に平行し、床面積は3.0㎡を測る。壁はいずれもほぼ直角に立ち上がり、壁高は西壁で約100cm、北壁で約75cm、南壁で約50cm、東壁で約20cmを測る。埋土は11層に細分されるが、各層位の状況から人為堆積と思われる。色調が相似していたため、床面と貼床の区別がつかず、一部床面を掘り過ぎてしまったが、断面観察から、床面はほぼ平坦で、貼床は主に斜面下方に施されていたものと推測される。

遺物は、土器は土師器の甕形土器片が約30点、須恵器の甕形土器片が数点とRP1として長頸瓶が1点(No.322)出土した。その他、羽口片が埋土中より2点出土した。(小林)

S K I 40竪穴状遺構(第189図、写真図版145)

F区赤25B区、洞部から赤24B区尾根上に至る斜面上部、ⅧB-5r・sグリッドに位置し、検出面はⅥ層

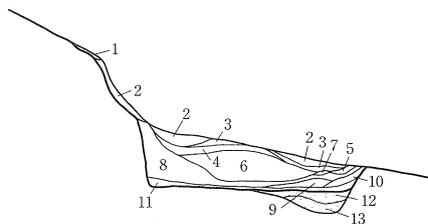
SKI30



SKI30

1. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性有
2. 2.5Y4/3 (オリブ褐) しまり有、粘性欠、炭化物中量
3. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性有
4. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有、炭化物少量
5. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有
6. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有、炭化物多量
7. 2.5Y4/3 (オリブ褐) しまりやや有、粘性欠
8. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有、にぶい黄色土ブロック少量
9. 2.5Y7/4 (浅黄) しまりやや有、粘性無
10. 2.5Y3/3 (暗オリブ褐) しまり欠、粘性欠
11. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有、炭化物少量、灰層
12. 10YR2/1 (黒) しまりやや有、粘性有、貼床
13. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性有、貼床

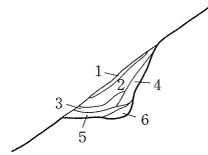
A H=43.4m



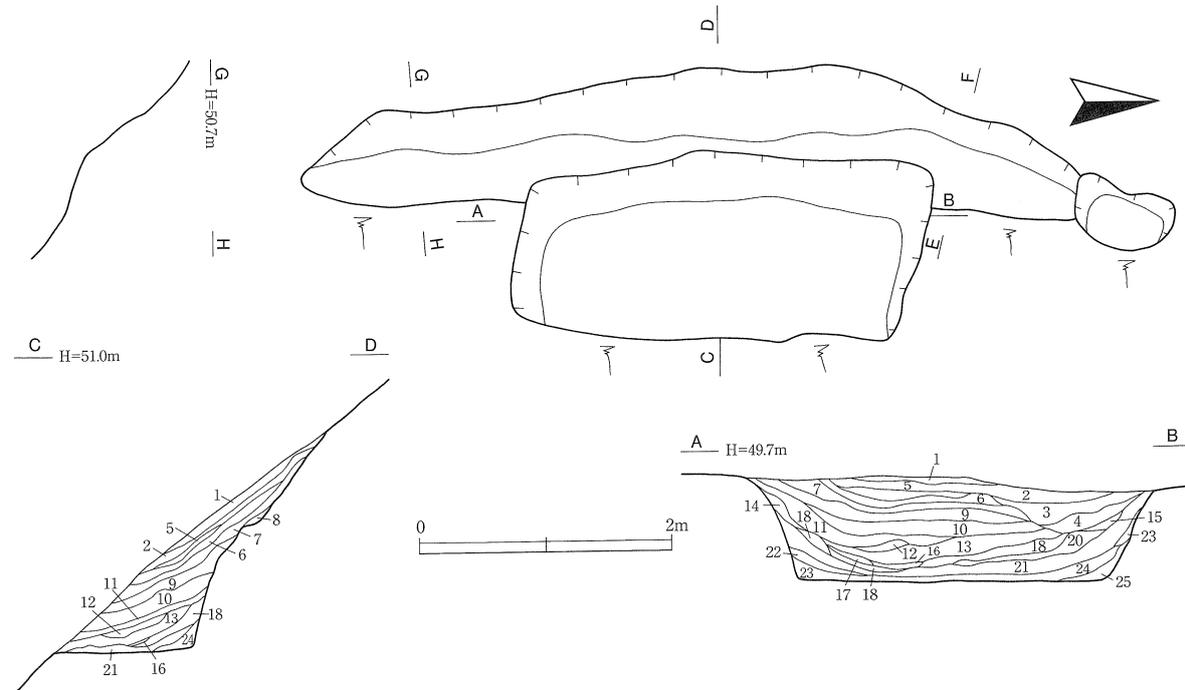
SKI40 テラス

1. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有
2. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有
3. 10YR3/3 (暗褐) (暗褐) しまりやや有、粘性有
4. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有、褐色土ブロック少量
5. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有
6. 10YR2/1 (黒) しまり・粘性有

E H=50.6m



SKI40



SKI40

1. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有
2. 10YR2/1 (黒) しまり・粘性有
3. 10YR2/2 (黒褐) しまり有、粘性やや無、炭化物微量
4. 10YR2/3 (黒褐) しまり有、粘性やや無
5. 10YR2/3 (暗褐) しまり・粘性有、マサ土粒微量
6. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや無、マサ土ブロック微量
7. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや無、炭化物微量
8. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有、黄褐色土ブロック微量
9. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有、マサ土粒微量
10. 10YR3/2 (黒褐) しまり有、粘性無、砂質、マサ土粒少量
11. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性無、砂質、マサ土少量
12. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや無
13. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有、マサ土ブロック多量
14. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有、マサ土粒少量
15. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有
16. 2.5YR3/3 (暗赤褐) しまり有、粘性無、焼土
17. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無
18. 10YR3/2 (黒褐) しまり有、粘性無、砂質、マサ土粒多量
19. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有、マサ土粒少量
20. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有、黄褐色土ブロック微量
21. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有、マサ土ブロック少量
22. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性無、砂質、マサ土多量
23. 10YR4/4 (褐) しまりやや・粘性無、砂質、マサ土多量
24. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性無、砂質、マサ土粒多量
25. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有、砂質、マサ土粒少量

第189図 SKI30・40 竪穴状遺構

上面である。立地から山・谷側とも崩落が著しく、当初山側上位は広く崩落したもので中央下位の長方形プランを遺構と考えたものだが、精査の結果、山側上位は棚状のテラスと判明したものである。平面形・規模は、等高線と平行する北-南が長軸方向の長軸約3.2m、短軸約1.5m前後の隅丸長方形で、床面積は約3㎡を測る。山側テラスでは開口部長軸約7m、幅約70cm、平坦部の幅は中央部で約10cm、両側で約50cmを測る。壁は鋭角的に外傾して立ち上がり、テラス部分では崩落によりかなり外反する。壁高は山側西壁で最大約180cm、テラスまでは約100cmで、谷側に向かい低くなる。埋土はおよそ30層に細分されるが、全体的に崩落によるマサ土を含む黒色系土の流入した自然堆積である。床面はおよそ平坦で堅締、床面施設は検出されなかった。

遺物は埋土から土師器の甕形土器片数点と須恵器の甕形土器片1点が出土したのみである。

S K I 41 竪穴状遺構 (第190図、写真図版145)

F区赤25B区、洞部から赤24B区尾根上に至る斜面中腹、ⅧB-5pグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。立地から山・谷側とも崩落が著しい。平面形・規模は、残存部と貼床範囲から一辺約3m前後の略長方形で、床面積は約7㎡と推定される。山側北方向には長さ約2m、幅約40cm、深さ約5cmの溝が取り付く。壁は鋭角的に外傾して立ち上がり、壁高は山側の最大約60cmから谷側に向かい低くなる。埋土はおよそ20層に細分される黒色系土と褐色系土が崩落と流入の繰り返しによる自然堆積である。床面はおよそ平坦で堅締、山側壁際を除き貼床が施されていた。床面施設は検出されなかった。

遺物は埋土から土師器の甕形土器片約10点、須恵器の甕形土器片1点、鍛冶滓が微量出土した。(小山内)

S K I 42 竪穴状遺構 (第190図、写真図版146)

赤25C区南半部、ⅧB-3mグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。検出当初工房跡であると考え精査を開始したが、カマド・炉等が検出されなかったことから竪穴状遺構であると判断した。本遺構はS I 144を切っていることから新旧関係は(新)S K I 42→(旧)S I 144である。平面形・規模は北側部分が斜面の崩落で消失しはっきりしないが、南西壁で2.7m、北東壁で3m残存し、南壁で4.7m遺存していることから、一辺5m前後の隅丸方形を呈するものと思われる。床面積は残存部分で11.3㎡を測る。壁は外傾して立ち上がる。壁高は南西壁で95cm、北東壁で6cmを測り、南東壁は東側に向かうにつれて低くなっていく。埋土は上位は暗褐色土、下位にはぶい黄褐色土を主体とした自然堆積で4層に細分された。床面は平坦で締まっている。床面施設は柱穴4基(P1～P4)が検出されており、位置的に4基とも主柱穴になる可能性があると思われる。

遺物は土師器片が13点、羽口片が7点と鉄滓が出土している。

(島原)

S X W52 鉄生産関連炉跡 (第191図、写真図版146)

F区赤25D区平坦部中央、ⅧB-8mグリッドに位置し、S I 150Bの埋土上面で検出した。位置・レベル的に見てS I 150Aに伴うものであった可能性が高い。北斜面下位側が一部削平され全容は不明だが、焼土等の広がりから平面形・規模は開口部径約50cmの略円形を呈し、断面形は深さ約8cmの丸底鍋形を呈すると推定され、埋土は基本的には炭化物と鍛造剥片を微量含む黒色土の単層である。底面は全体的に黒く蒸焼状態で堅く締まり、斑点状に一部やや強く還元し、北側縁は火熱により弱く赤色変化していた。

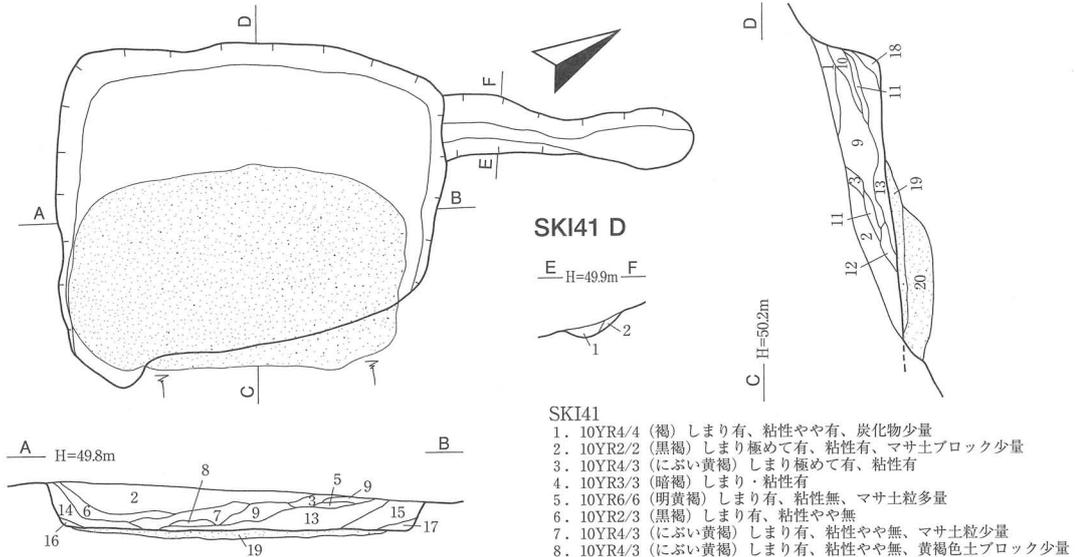
遺物は埋土から鍛冶滓と鍛造剥片が微量出土したのみである。

(小山内)

S X W53 鉄生産関連炉跡 (第191図、写真図版146)

F区赤25(A)区洞部中央の斜面下方、ⅧB-11hグリッドに位置する。本遺構はS X H16上に構築されている。本遺構の上面は崩落により失われたものと思われ、確認された状態は焼土の範囲のみである。焼土

SKI41



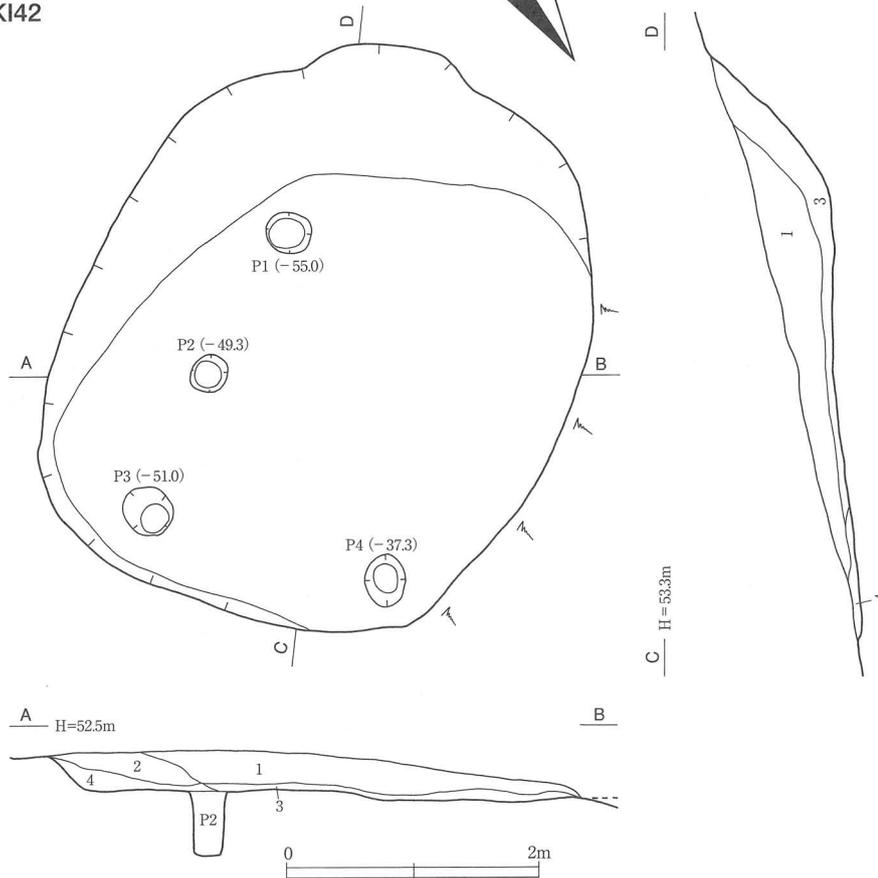
SKI41 D

1. 10YR3/2 (暗褐) しまり極めて有、粘性やや有
2. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無、砂質、マサ土粒少量

SKI42

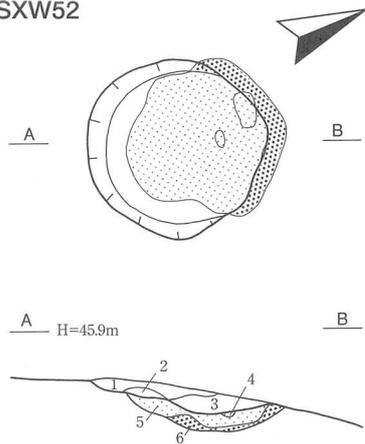
1. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性無、マサ土含む
2. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性少し有、炭少量
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性少し有、黄褐色土含む
4. 10YR8/4 (黄橙) しまりやや有、粘性無、にぶい黄橙色土含む

SKI42



第190図 SKI41・42竪穴状遺構

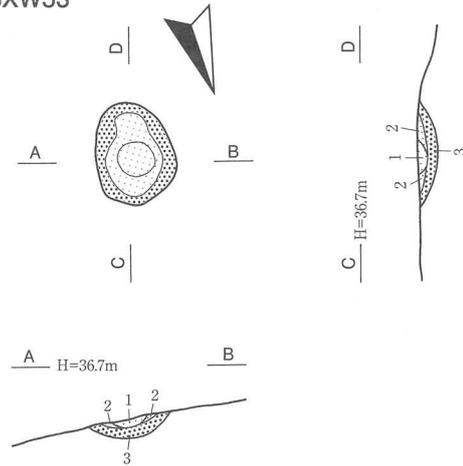
SXW52



SXW52

1. 10YR3/2 (黒褐) しまり無、粘性やや有
2. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有、炭化物微量
3. 10YR2/1 (黒) しまりやや有、粘性有、炭化物少量、鍛造剥片微量
4. 2.5Y5/1 (黄灰) 還元部
5. 2.5Y2/1 (黒) 還元部蒸焼
6. 7.5YR3/2 (黒褐) 弱い焼土

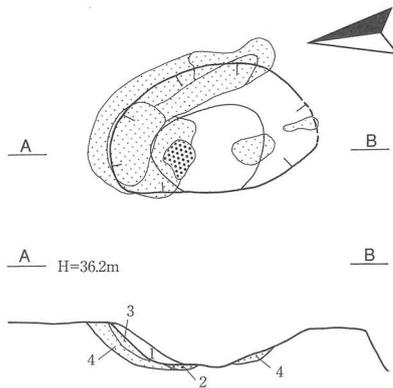
SXW53



SXW53

1. 10G2/1 還元焼土
2. 5G1.7/1 (緑黒) 還元焼土
3. 5YR3/2 (暗赤褐) 酸化焼土

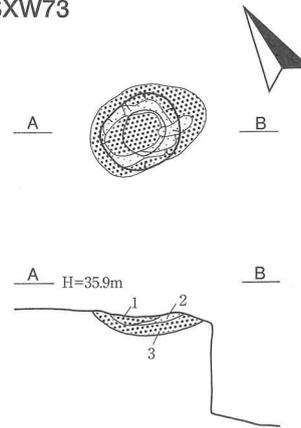
SXW70



SXW70

1. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性極めて有
2. 5YR4/8 (赤褐) 酸化焼土
3. 5G2/1 (緑黒) 還元焼土
4. 5BG1.7/1 (青黒) 還元焼土

SXW73



SXW73

1. 7.5YR6/6 (橙) 酸化焼土
2. 5G1.7/1 (緑黒) 還元焼土
3. 7.5YR4/4 (明褐) 酸化焼土

0 50cm

第191図 SXW52・53・70・73鉄生産関連炉跡

は約55×40cmの楕円状に広がり、中央部分は緑黒色の還元焼土、その周囲は暗赤褐色の酸化焼土となっており、厚さは約5cmを測る。本遺構において鍛造剥片等は確認されなかったが、還元焼土が広がることから鉄生産に関連する炉跡である可能性が高い。遺物は出土しなかった。

S X W70鍛錬鍛冶炉跡（第191図、写真図版146・264）

F区赤25(A)区洞部中央の斜面下方、ⅧB-11hグリッドに位置する。本遺構はS X H16掘削時に検出したもので、S X H16埋土上位中に構築されている。残存状態は不良であるが、平面形は楕円形を呈し、規模は開口部約60×30cm、底部約30×25cm程が推測される。断面形は皿状を呈し、深さは約10cmを測る。埋土は確認されたのはオリブ褐色土のみである。底面はやや凹凸が見られる。底面及び壁面には緑黒～青黒色の還元焼土が広がり、一部で赤褐色の酸化焼土も確認でき、厚さは最大約7cmを測る。

遺物は、炉壁が埋土中から1点(Na34)と埋土中や底面から鉄滓と鍛造剥片が少量出土しており、本遺構は鍛錬鍛冶炉跡である可能性が高い。

S X W73鍛錬鍛冶炉跡（第191図）

F区赤25(A)区洞部中央の斜面下方、ⅧB-11hグリッドに位置する。本遺構はS X H16掘削時に検出したもので、S X H16埋土中位中に構築されている。平面形は円形を呈し、規模は開口部径約20cm、底部径約10cmを測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さは2cm程である。埋土については不明である。底面に広がる焼土は約35×20cmの楕円状を呈する。中心部に橙色の酸化焼土、その周囲に緑黒色の還元焼土、更にその周囲に明褐色の酸化焼土が広がり、厚さは最大約5cmを測る。

遺物は、底面から鍛造剥片が少量出土しており、本遺構は鍛錬鍛冶炉跡である可能性が高い。（小林）

S W96炭窯（第192図、写真図版147）

F区赤25B区洞状地形の南部、東谷側に向かいやや傾斜のきつい斜面下位のⅧB-7sグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。谷側は崩落により消失して全容は不明だが、残存部での平面形・規模は、長軸約80cm、短軸約55cmの略楕円形を呈し、壁は外傾して立ち上がり、深さ約10cmを測る。埋土は炭化物を多く含む黒色土の単層で、底面は谷側にやや傾斜し、火熱により厚さ約5cmほどが弱く赤色変化しており、形態と状況から炭窯と判断した。遺物は出土しなかった。

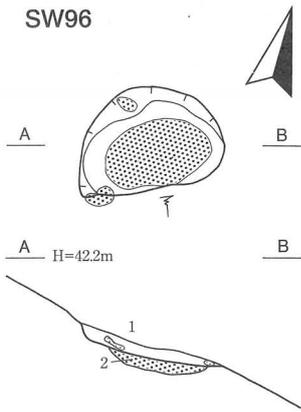
S W97炭窯（第192図、遺物図版124、写真図版147・305）

F区赤25B区洞状地形の北部、ⅧB-5oグリッドに位置し、S I 141の埋土上面で検出した。谷側は崩落により消失して全容は不明だが、残存部での平面形・規模は、長軸約120cm、短軸約80cmの略楕円形を呈し、壁は外傾して立ち上がり、深さ約15cmを測る。埋土は炭化物を少量含む黒色土の単層で、底面は谷側にやや傾斜し、部分的に火熱により厚さ約1cm以下の弱い赤色変化した焼土が認められた。形態と状況から炭窯と判断した。

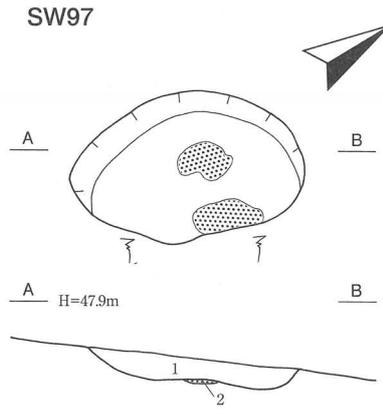
遺物は埋土から角棒状の不明鉄製品1点(123)が出土した。

S W99A・B炭窯（第192図、写真図版147）

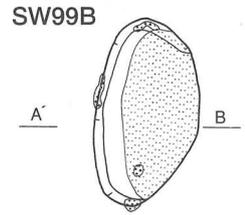
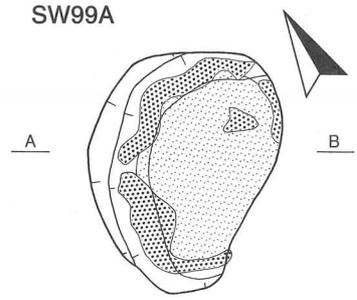
F区赤25B区洞状地形の中央、東谷側に向かいやや傾斜のきつい斜面下位のⅧB-7pグリッドに位置し、検出面はⅢ層上面であるが、B炭窯はA炭窯の底面で確認した。窪みを再利用した造り替えと考えられる。谷側は崩落により消失して全容は不明だが、残存部でのAの平面形・規模は、長軸約130cm、短軸約80cmの略楕円形、Bの平面形・規模は長軸約100cm、短軸約55cmの略楕円形を呈し、いずれも壁は外傾して立ち上がり、Aの深さ約45cm、Bの深さは約10cmを測る。埋土は炭化物を少量含む黒色系土で、最下層は炭化物層となっていた。底面は谷側にやや傾斜し、壁面には部分的に火熱により厚さ約1cm以下の弱い赤色変化



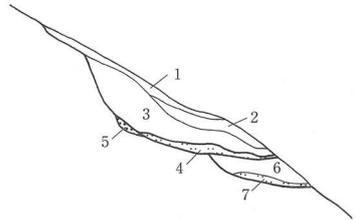
- SW96**
 1. 10YR2/2 (黒褐) しまり有、粘性無、炭化物多量
 2. 7.5YR3/3 (暗褐) 弱い焼土



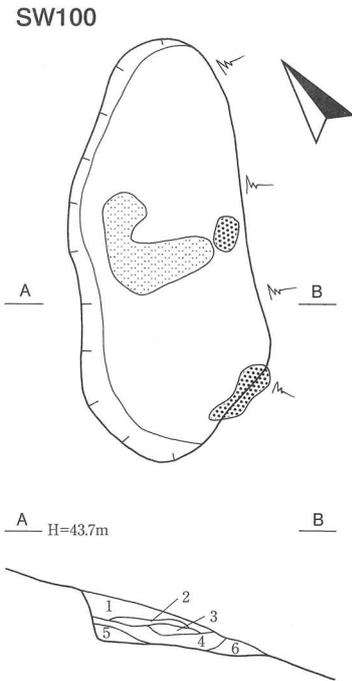
- SW97**
 1. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有、炭化物少量
 2. 7.5YR3/3 (暗褐) 弱い焼土



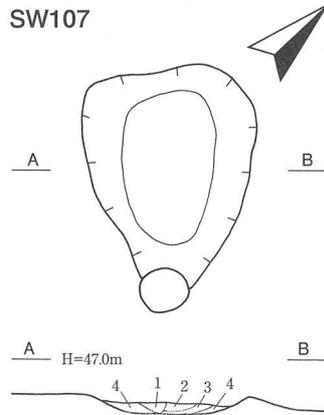
A H=45.6m A' B



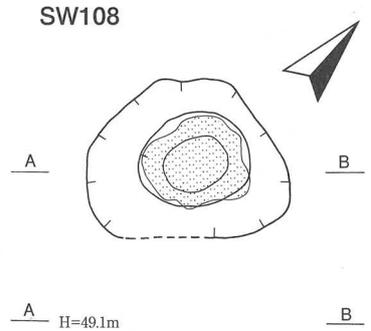
- SW99A・B**
 1. 10YR2/1 (黒) しまり・粘性有
 2. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有、炭化物少量
 3. 7.5YR2/1 (黒) しまり・粘性有
 4. 10YR1.7/1 (黒) 炭化物層
 5. 5YR4/6 (赤褐) 焼土
 6. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有
 7. 10YR1.7/1 (黒) 炭化物層



- SW100**
 1. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、炭化物微量
 2. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有
 3. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有
 4. 10YR3/3 (暗褐) しまり堅く、粘性有、炭化物微量
 5. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり堅く、粘性有
 6. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性有



- SW107**
 1. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有
 2. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有
 3. 10YR2/1 (黒) 炭化物層
 4. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性やや有



- SW108**
 1. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり弱、粘性無
 2. 5BG2/1 (青黒) 炭化物層



第192図 SW96・97・99A・B・100・107・108炭窯

した焼土が認められた。形態と状況から炭窯と判断した。

遺物は埋土から土師器の甕形土器片と羽口片数点と鍛冶滓が極めて微量出土した。

SW100炭窯（第192図、写真図版147）

F区赤25D区平坦部突端の東端谷頭、ⅧB-10mグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。谷側は崩落により消失して全容は不明だが、残存部での平面形・規模は、長軸約225cm、短軸約90cmの略楕円形を呈し、山側北西壁は外傾して立ち上がり、深さ約25cmを測る。埋土は炭化物を微量含む黒色系土で、底面中央には残材の炭化物層が認められた。底面は谷側にやや傾斜し、一部火熱により厚さ約1cm以下の弱い赤色変化が認められた。形態と状況から炭窯と判断した。遺物は出土しなかった。

SW107炭窯（第192図、写真図版147）

F区赤25B区洞状地形の北部、ⅧB-6oグリッドに位置する。当初プランを把握しておらず、SI141C床面で検出したものだが、残存状況から本遺構が新しいと考えられ、上部は掘削により消失してしまった。残存部での平面形・規模は、長軸約120cm、短軸約85cmの歪な略楕円形を呈し、断面形は皿形で深さ約7cmが残る。埋土は炭化物を微量含む黒色系土で、底面には残材の炭化物層が部分的に認められた。底面では焼土が確認されなかったが、状況から炭窯と判断した。

遺物は鍛冶滓が極めて微量出土した。

（小山内）

SW108炭窯（第192図、写真図版147）

赤25C区のⅧB-5jグリッドに位置し、尾根頂部東側肩口のⅥ層上面で検出している。平面の形状は不整な楕円形を呈すが、長軸が1.1m、短軸が85cmで長・短軸の差はあまりない。また長軸はNE-SWを向き、尾根筋と平行にある。断面形は椀形状で、壁高は西側（山側）が35cm・東側（谷側）が15cmを測り、南東側の壁の一部が攪乱を受けている。埋土は上位ににぶい黄橙色土が堆積し底部に厚さ7cm程度の炭化物層（分析結果：クリの木）がある。なお底面には焼土跡は見られない。

（亀）

SK233土坑（第193図、遺物図版124、写真図版148・305）

F区赤25B区、洞部から赤24B区尾根上に至る斜面中腹、ⅧB-5n・oグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。平面形・規模は、開口部径約110cm、底部径約100cmの円形で、断面形は深さ約50cmの筒状を呈する。埋土は暗褐色系土の人為的堆積である。底面は概ね平坦である。

遺物は土師器の甕形土器片1点、S字形の板状鉄製品1点(122)と鍛冶滓が微量出土した。

SK236土坑（第193図、写真図版148）

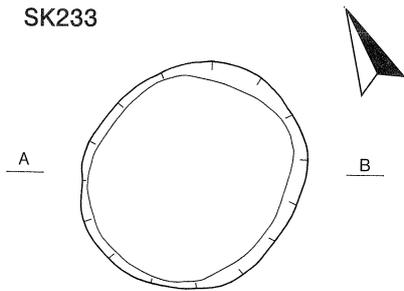
F区赤25B区、洞部から赤24B区尾根上に至る斜面中腹、ⅧB-4oグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。平面形・規模は、開口部径約100cm、底部径約80cmの円形で、断面形は深さ約60cmの深鍋形を呈する。埋土は暗褐色系土の自然堆積である。底面は概ね平坦である。

遺物は土師器の甕形土器片が数点出土したのみである。

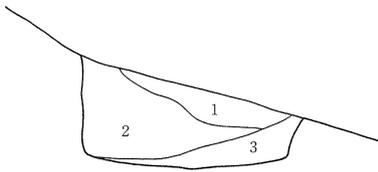
SK245土坑（第193図、写真図版148）

F区赤25D区平坦部南端、東谷側に向かう斜面上位のⅧB-8oグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。谷側半分が崩落により消失して不明である。遺存部から平面形・規模は、開口部径約180cm、底部径約160cmの円形で、断面形は深さ約50cmの筒状を呈すると推定される。埋土は上位黒色系土、下位黄褐色系土の自然堆積である。底面は概ね平坦だが、谷側に小ピットもしくは崩落による深さ10cmほどの落ち込みがある。遺物は出土しなかった。

SK233



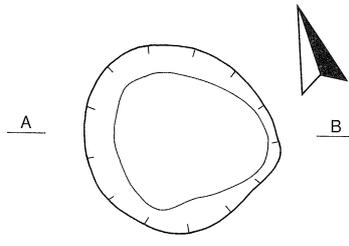
A H=50.8m



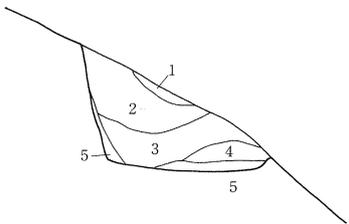
SK233

1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有
2. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性やや有、炭化物微量
3. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性やや有、炭化物微量

SK236



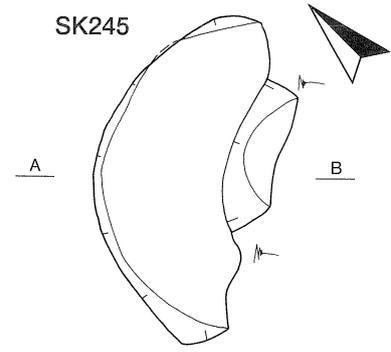
A H=52.0m



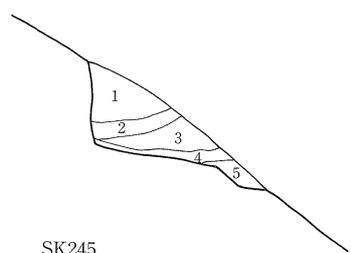
SK236

1. 10YR2/2 (黒褐) しまり極めて有、粘性やや有
2. 10YR2/3 (黒褐) しまり有、粘性やや有
3. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有
4. 10YR3/4 (暗褐) しまり極めて有、粘性有
5. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有

SK245



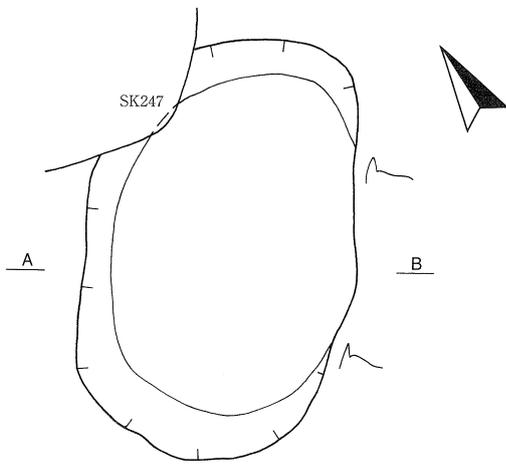
A H=45.7m



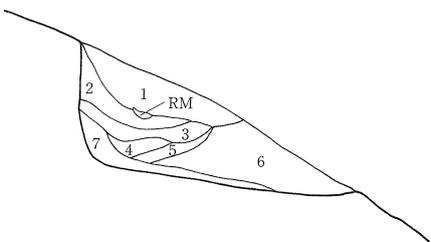
SK245

1. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有
2. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有
3. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有
4. 10YR6/8 (明黄褐) しまり・粘性やや有
5. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性やや有、砂質

SK246



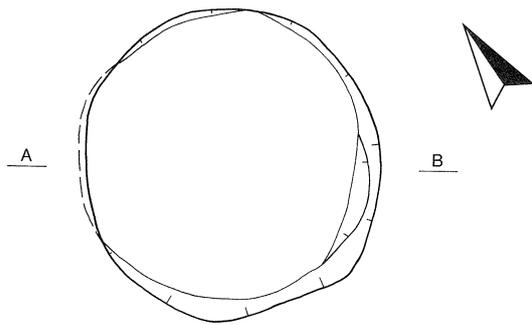
A H=46.1m



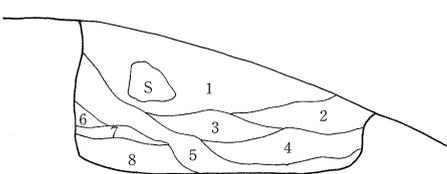
SK246

1. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有、地山ブロック少量
2. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有
3. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有、マサ土粒少量
4. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有
5. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有
6. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有
7. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性有

SK247



A H=46.3m



SK247

1. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有
2. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有、マサ土粒少量
3. 10YR3/2 (黒褐) しまり極めて有、粘性有、マサ土粒少量
4. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有
5. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性有、マサ土ブロック中量
6. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや無、粘性有
7. 10YR4/4 (褐) しまりやや無、粘性有、マサ土ブロック多量
8. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有



第193図 SK233・236・245~247土坑

S K 246土坑 (第193図、遺物図版126、写真図版148・306)

F区赤25D区平坦部南端、東谷側に向かう斜面上位のⅧB-7oグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。S K 247と重複し、本遺構が切られる。谷側の一部が崩落により消失して不明である。遺存部から平面形・規模は、開口部230×150cm、底部約180×130cmの楕円形で、断面形は深さ約60cmの筒状を呈すると推定される。埋土は黒色系土7層からなる自然堆積である。底面は概ね平坦である。

遺物は土師器の甕形土器片約10点と坏形土器片1点、底面からほぼ完形の鉄鏃1点(155)、鍛冶滓類が微量出土した。

S K 247土坑 (第193図、写真図版148)

F区赤25D区平坦部南端、東谷側に向かう斜面谷頭のⅧB-7oグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。S K 246と重複し、本遺構が切れる。平面形・規模は、開口部径約150cm、底部径約150cmの円形を呈し、断面形は深さ約75cm筒状で一部袋状となっている。埋土は崩落のマサ土を全体的に含む黒色系土の自然堆積である。底面は概ね平坦である。

遺物は土師器の甕形土器片約10点と羽口片2点、鍛冶滓類が微量出土した。

S K 249 A・B土坑 (第194図、遺物図版33、写真図版148・232)

F区赤25D区平坦部中央、ⅧB-8nグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。S I 123・148と重複し、本遺構が新しい。検出時には同規模の円形の連結したプランを確認したが、埋土上位が褐色系の人為的なものであったため、区別ができなかったが、断面の観察で新Aと古Bが判明した。Aの平面形・規模は、開口部径約120cm、底部径約90cmの円形、Bの平面形・規模は、開口部径約110cm、底部径約115cmの円形を呈し、Aの断面形は深さ約60cmの平鍋、Bの断面形は深さ約60cmの袋状となっていた。埋土はいずれも全体的にマサ土を含む褐色系土の人為的堆積である。底面はどちらも概ね平坦である。

遺物はA埋土から土師器の甕形土器片約10数点が出土した。

S K 253土坑 (第194図、写真図版148)

F区赤25D区平坦部南側の谷頭、ⅧB-8nグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。谷側が崩落により消失しているが、遺存部から平面形・規模は、開口部径約150cm、底部約145cmの円形で、断面形は深さ約40cmの筒状を呈すると推定される。埋土は褐色系土の人為的堆積である。底面は概ね平坦である。遺物は土師器の甕形土器片が1点出土したのみである。

S K 254土坑 (第194図、遺物図版33・126、写真図版149・232・306)

F区赤25D区平坦部南東の谷頭、ⅧB-9nグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。平面形・規模は、開口部約180×160cm、底部約210×180cmの楕円形で、断面形は深さ約100cmのフラスコ状を呈する。埋土はおよそ20層に細分される流入と崩落の繰り返しによるマサ土混じりの黒色系土と黄褐色系土の自然堆積である。底面は概ね平坦である。

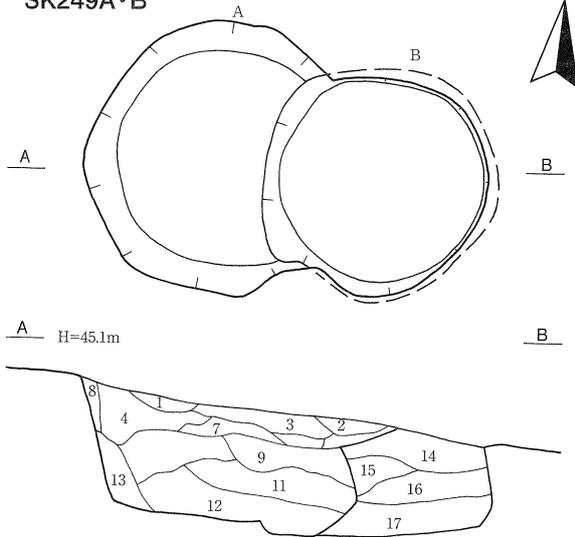
遺物は土師器の甕形土器片数点、鉄鐸が1点(156)と鍛冶滓が極めて微量出土した。

S K 256土坑 (第195図、写真図版149)

F区赤25D区平坦部北側谷頭、ⅧB-9mグリッドに位置し、検出面はⅥ層上面である。北東谷側が一部崩落により消失しているが、平面形・規模は、開口部約210×170cm、底部約200×150cmの略楕円形で、断面形は深さ約35cmの皿状を呈すると思われる。埋土は褐色土の単層で、底面は概ね平坦である。

遺物は土師器の甕形土器片が2点出土したのみである。(小山内)

SK249A・B



SK249A

1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性有
2. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有
3. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性有、マサ土ブロック少量
4. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性有、マサ土粒中量
5. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性有
6. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性有、マサ土粒中量
7. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性有、マサ土粒少量
8. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性有
9. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性有、マサ土ブロック少量、炭化物微量
10. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性有、マサ土ブロック中量
11. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性有、マサ土ブロック少量
12. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性有、マサ土ブロック中量、炭化物微量
13. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性有

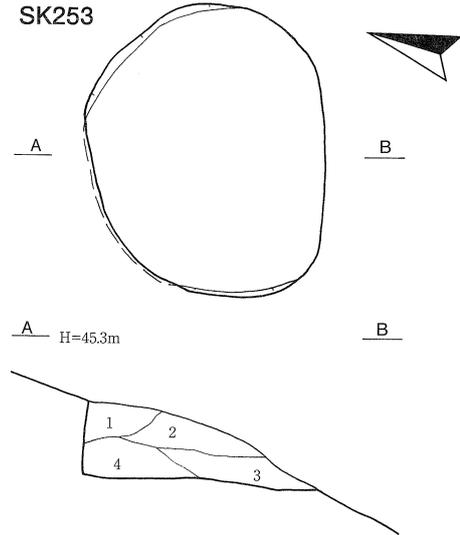
SK249B

14. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性有
15. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性有、炭化物微量
16. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり極めて有、粘性有、マサ土多量
17. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性有

SK254

1. 2.5Y7/3 (浅黄) しまり有、粘性やや有、マサ土ブロック中量
2. 2.5Y5/3 (黄褐) しまり有、粘性やや有、マサ土ブロック少量
3. 2.5Y4/3 (オリブ褐) しまり有、粘性やや有
4. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり・粘性有、マサ土多量
5. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性有、マサ土ブロック少量
6. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性有、マサ土ブロック少量
7. 10YR3/2 (黒褐) しまり極めて有、粘性有、マサ土ブロック少量
8. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性有、マサ土ブロック少量
9. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性有
10. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性有、マサ土ブロック中量
11. 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまり極めて有、粘性有、マサ土多量
12. 2.5Y7/3 (浅黄) しまり・粘性有、マサ土ブロック中量
13. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性有、マサ土ブロック微量
14. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性有、炭化物微量
15. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性有
16. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや無、粘性有、マサ土粒少量
17. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり極めて有、粘性やや有、マサ土多量
18. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性有
19. 10YR7/4 (浅黄) しまり極めて有、粘性やや有、マサ土多量
20. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性有
21. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性有
22. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有、
23. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性やや有

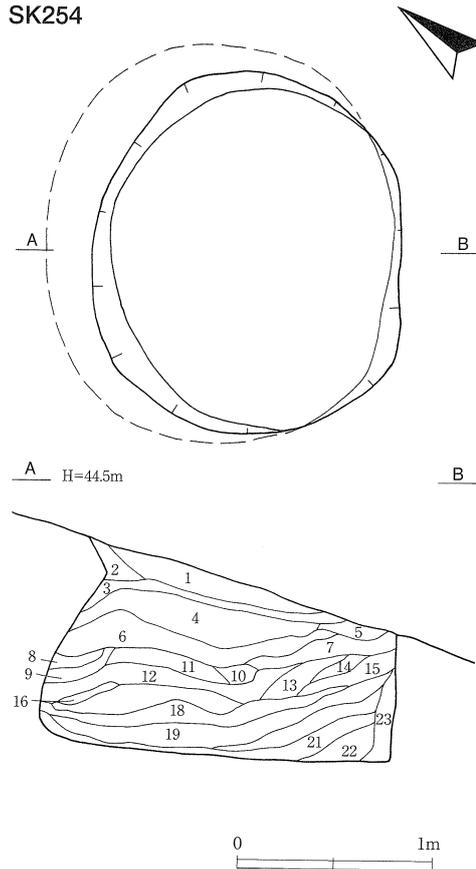
SK253



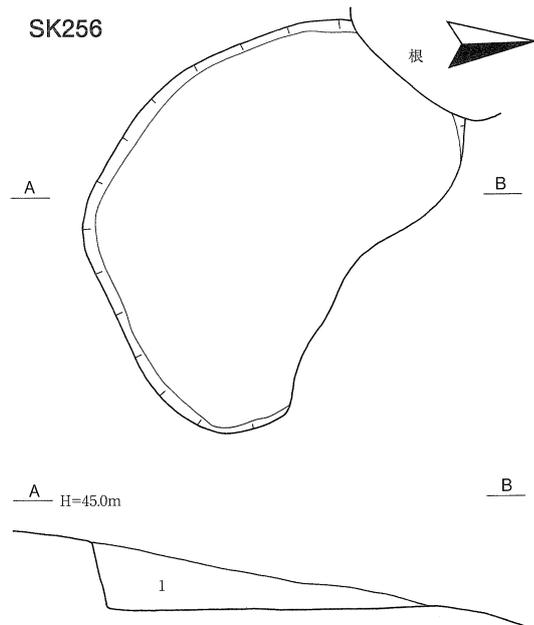
SK253

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
2. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有
3. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有
4. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性有、マサ土ブロック少量

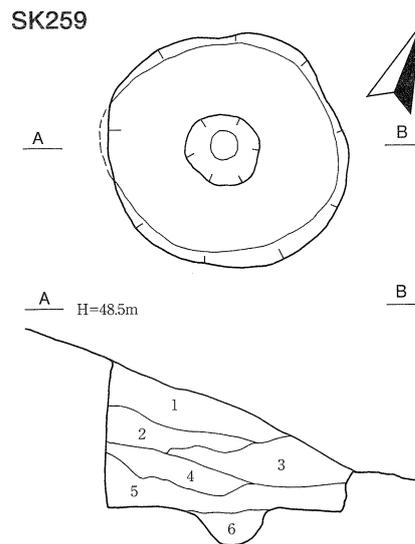
SK254



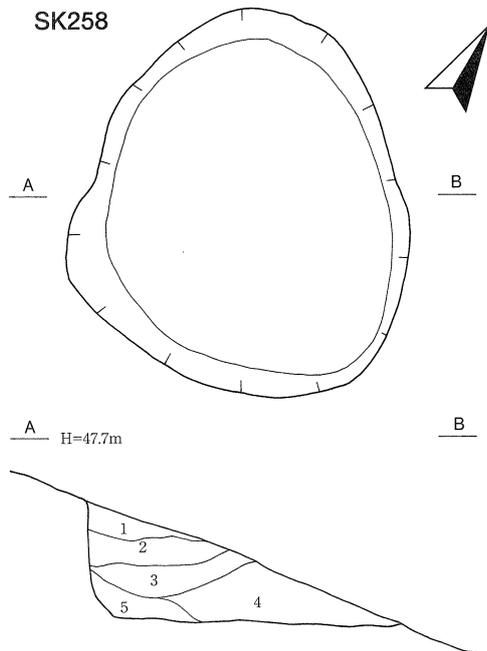
第194図 SK249A・B・253・254土坑



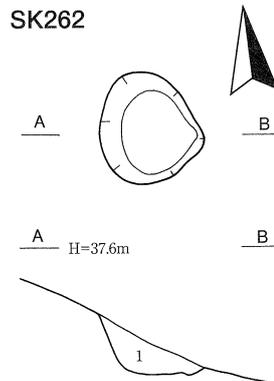
SK256
1. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性やや有、マサ土粒多量



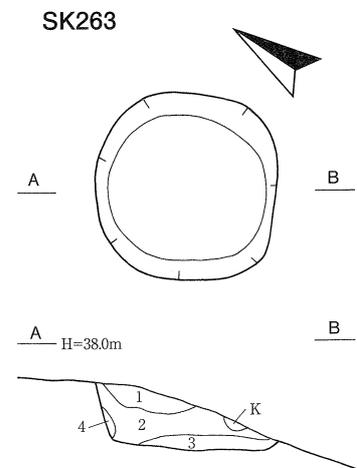
SK259
1. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性少し有、褐土混、炭少、マサ含
2. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性少し有、にぶい黄橙土混、炭少
3. 10YR5/2 (灰黄褐) しまり有、粘性無、褐色ブロック・マサ土含
4. 10YR4/2 (灰黄褐) しまりやや有、粘性無、にぶい黄橙土混入
5. 10YR5/2 (灰黄褐) しまり有、粘性無、にぶい黄橙土・褐色ブロック含
6. 10YR6/2 (灰黄褐) しまりやや有、粘性無



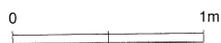
SK258
1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、褐色土含
2. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまりやや、粘性無、にぶい黄橙土含む
3. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや、粘性無、にぶい黄橙土・炭含
4. 10YR4/2 (灰黄褐) しまり有、粘性無、にぶい黄橙含
5. 10YR3/2 (黒褐) しまり少、粘性無、にぶい黄橙含



SK262
1. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり有、粘性やや有



SK263
1. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり欠、粘性やや有
2. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり欠、粘性やや有
3. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり有、粘性やや有
4. 2.5Y7/4 (浅黄) しまりやや有、粘性欠



第195図 SK256・258・259・262・263土坑

S K 258土坑 (第195図、写真図版149)

赤25D区南半部、ⅧC-61グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出された。S I 143を切っていることから新旧関係は(新) S K 258→(旧) S I 143である。平面形・規模は楕円形を呈し、開口部径204×177cm、底部径173×146cmを測る。壁は鋭角的に立ち上がる。壁高は北壁で62cm、南壁で4cmを測り、西・東壁は南に向かうにつれて低くなる。埋土は5層に細分され、上位はにぶい黄褐色土、中位は暗褐色土、下位は黒褐色土を主体とした自然堆積である。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S K 259土坑 (第195図、写真図版149)

赤25D区東斜面、ⅧC-61グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出された。平面形・規模は円形を呈し、開口部径約125×122cm、底部径約119×110cmを測る。壁は鋭角的に立ち上がる。壁高は21～79cmを測る。埋土は6層に細分され、上位は暗褐色土、中位は黒褐色土、下位は灰黄褐色土を主体とした自然堆積である。底面は概ね平坦で、底面中央付近から径36×38cmの円形を呈する、深さ16cmの土坑が検出された。遺物は出土しなかった。

(島原)

S K 262土坑 (第195図、写真図版149)

F区赤25(A)区北側棚部の斜面下方、ⅧB-12eグリッドに位置し、検出面はⅥ層である。平面形は略楕円形を呈し、規模は開口部約60×45～55cm、底部約45×30～40cmを測る。壁は斜面上方の西側は鋭角的に立ち上がり、深さは約30cmを測るが、斜面下方の東側は崩落により僅かしか遺存せず、緩やかに立ち上がり、深さは約5cmを測る。埋土は暗オリーブ褐色土の単層である。底面は東側に凹凸が見られるが、概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S K 263土坑 (第195図、写真図版149)

F区赤25(A)区北側棚部の斜面下方、ⅧB-11fグリッドに位置し、検出面はⅥ層である。平面形は円形を呈し、規模は開口部径約100cm、底部径約75cmを測る。壁はほぼ直角に立ち上がり、深さは5～30cmを測る。埋土は4層に細分され、各層位の状況から自然堆積と思われる。底面はほぼ平坦である。

遺物は、埋土中から土師器の甕形土器片が約10点、磨石が1点、鉄滓が微量出土した。

S K 264土坑 (第196図、遺物図版95、写真図版149・283)

F区赤25(A)区北側の棚部、ⅧB-11fグリッドに位置し、検出面はⅥ層である。検出時において、北側の平面プランが不整形を呈していたため、遺構の重複または木根などによる攪乱が及ぶものと考え精査を開始したが、埋土断面観察の結果、柱穴と思われるピットが重複していることが判った。これは径約40cmの円形を呈し、深さは約25cmを測る。新旧関係はS K 264を切っており、位置的にS I 180Aに伴う柱穴である可能性が考えられる。本遺構の平面形は円形を呈し、規模は開口部径約95cm、底部径約65～75cmを測る。壁は鋭角的に立ち上がり、深さは30～50cmを測る。埋土は4層に細分され、各層位の状況から人為堆積の可能性はある。底面は平坦である。

遺物は、埋土中より土師器の甕形土器片数点、鉄滓が中量、砥石1点(No130)が出土した。

S K 266土坑 (第196図、写真図版149)

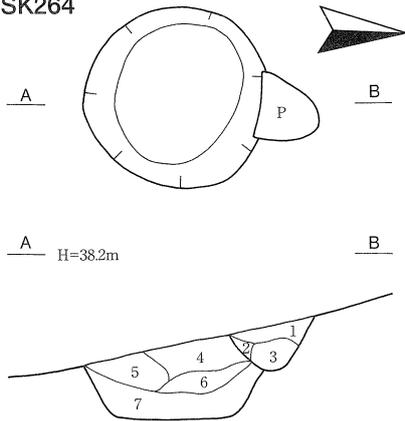
F区赤25(A)区洞部北側の斜面上方、ⅧB-10fグリッドに位置し、検出面はⅥ層である。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部約75×65cm、底部約55×40cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは約15cmを測る。埋土はオリーブ褐色土の単層である。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

(小林)

S K 269土坑 (第196図、遺物図版31、写真図版150・231)

赤25C区南半部、ⅧB-4m・5mグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。S K 270に切られているこ

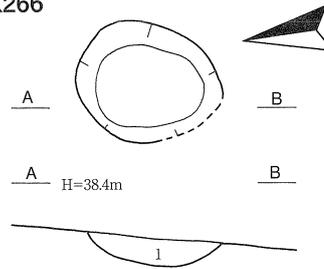
SK264



SK264

1. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまりやや有、粘性有
2. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまりやや有、粘性欠
3. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性欠
4. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有
5. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり欠、粘性有
6. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり・粘性やや有
7. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性やや有、焼土ブロック少量

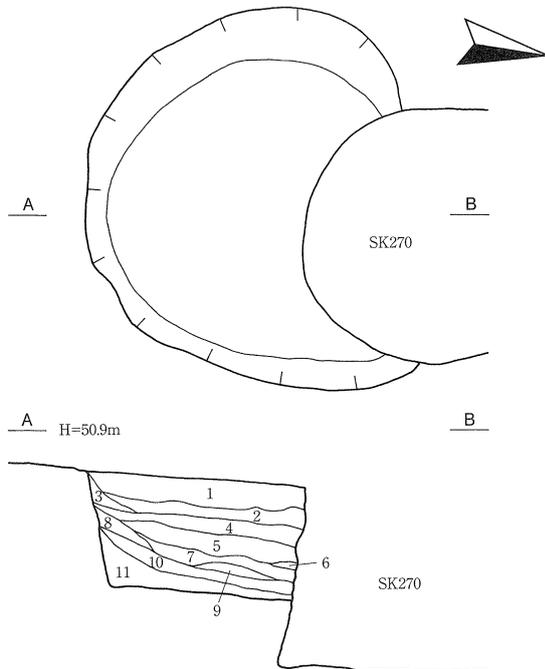
SK266



SK266

1. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり有、粘性やや有、黄褐色土ブロック少量

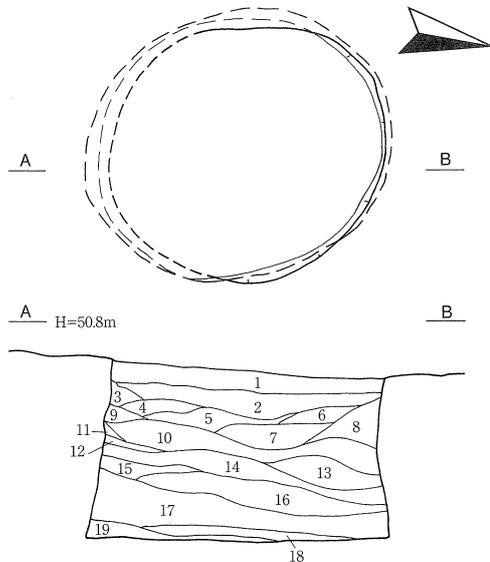
SK269



SK269

1. 10YR4/2 (灰黄褐) しまり有、粘性無
2. 10YR3/2 (黒褐) しまり有、粘性無、炭含
3. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
4. 10YR4/2 (灰黄褐) しまり有、粘性無、炭含
5. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、淡黄色ブロック含
6. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
7. 10YR4/2 (灰黄褐) しまり有、粘性無
8. 10YR4/2 (灰黄褐) しまり有、粘性無、黒褐色土含
9. 10YR4/2 (灰黄褐) しまり有、粘性無
10. 10YR4/2 (灰黄褐) しまり有、粘性無
11. 10YR4/2 (灰黄褐) しまり有、粘性無

SK270



SK270

1. 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまり有、粘性無、炭含む
2. 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまりやや有、粘性無、にぶい黄褐混入・炭含
3. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
4. 10YR4/1 (褐灰) しまりやや有、粘性無、にぶい黄色土含、炭少量
5. 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまり有、粘性無、にぶい黄褐土・焼土・炭含
6. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
7. 10YR6/2 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、マサ土混入
8. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無
9. 10YR5/2 (灰黄褐) しまり有、粘性無
10. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、マサ土混入、炭含
11. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
12. 10YR5/2 (灰黄褐) しまり有、粘性無
13. 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまり有、粘性無、炭含
14. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、にぶい黄色土・炭含
15. 10YR4/1 (褐灰) しまりやや有、粘性無、にぶい黄色土含、炭少量
16. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、マサ土混入、炭含
17. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、炭・焼土少量
18. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、マサ土混入、炭含
19. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、炭・焼土少量



第196図 SK264・266・269・270土坑

とから新旧関係は(新) S K 270→(旧) S K 269である。S K 270に切られているため、平面形・規模ははっきりしないが、開口部径194cm前後、底部径155cm前後の円形状を呈すると思われる。壁は鋭角的に立ち上がる。壁高は最大62cmを測る。埋土は11層に細分され、上位は黒褐色土、中・下位は灰黄褐色土を主体とした人為堆積である。底面は概ね平坦である。

遺物は土師器片が12点出土し、掲載した遺物は埋土中出土の土師器甕3点(365～367)である。

S K 270土坑 (第196図、写真図版150)

赤25C区南半部、ⅧB-5mグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。S K 269と重複関係にあり、同遺構を切っている。よって新旧関係は(新) S K 270→(旧) S K 269である。平面形・規模は円形を呈し、開口部径91×84cm、底部径95×88cmを測る。壁は下半部は内湾気味に、上半部は鋭角的に立ち上がる。壁高は83～94cmを測る。埋土は19層に細分され、上位はにぶい黄褐色土、中・下位は灰黄褐色土を主体とした人為堆積である。底面は概ね平坦である。遺物は土師器片が3点と鉄滓が出土している。

S K 272土坑 (第197図、遺物図版31、写真図版150・231)

赤25C北半部、ⅧB-5jグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。S I 146に切られていることから、新旧関係は(新) S I 146→(旧) S K 272である。S I 146に切られているため、平面形・規模ははっきりしないが、残存部分で開口部径156×132cm、底部径134×105cmを測り、平面形は楕円形状を呈すると思われる。壁は外傾して立ち上がる。壁高は西壁で最大63cmを測り、東側に向かうにつれて低くなっていく。埋土は7層に細分され、上位はにぶい黄褐色土、中・下位は灰黄褐色土を主体とした人為堆積である。底面は概ね平坦である。

遺物は土師器片が19点、須恵器片が1点と鉄滓が出土している。このうち掲載した遺物は埋土中より出土した土師器甕2点(368・369)である。

(島原)

S K 285土坑 (第197図)

F区赤25B区、洞部から赤24B区尾根上に至る斜面上部、ⅧB-4oグリッドに位置し、S X I 40の貼床除去後に検出した。本遺構が古く、南側の棚状の掘り込みはS X I 40の掘り方と思われる。谷側が崩落により消失して不明であるが、遺存部から平面形・規模は、開口部径約110cm、底部約90cmの略円形で、断面形は深さ約45cmの筒状を呈すると推定される。埋土は暗褐色系土の人為的堆積である。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

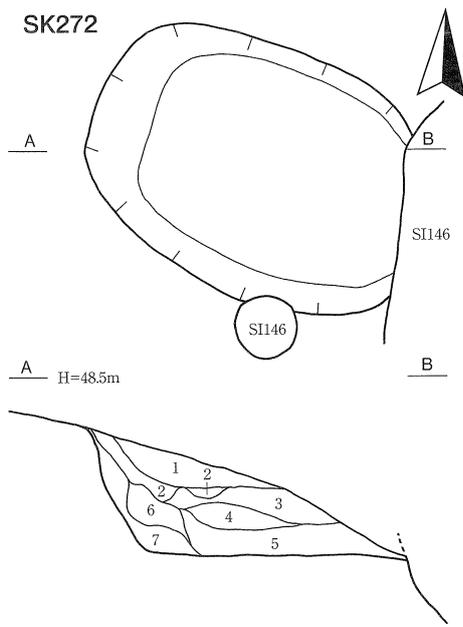
S K 287土坑 (第197図、写真図版150)

F区赤25B区洞状地形の北部、ⅧB-6oグリッドに位置し、検出面はⅥ層中である。本遺構はS I 141C・S X I 47Bを切る。平面形・規模は、開口部約110×75cm、底部約90×60cmの楕円形で、断面形は深さ約35cmの筒状を呈する。埋土は上位の黒色系土と下位のマサ土混じりの黄褐色系土の自然堆積である。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

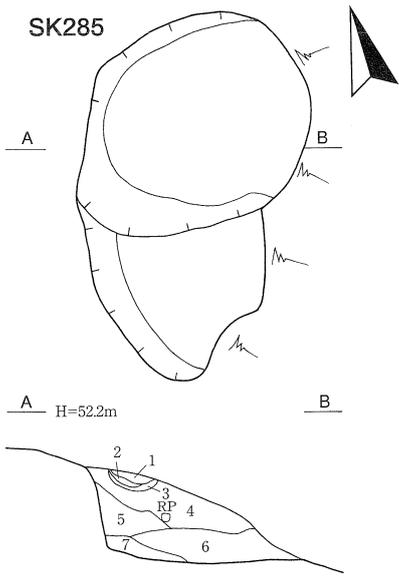
(小山内)

S K 288土坑 (第197図、写真図版150)

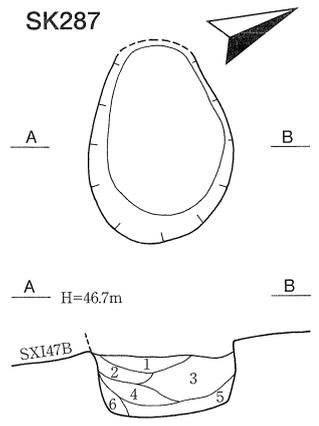
赤25C南半部、ⅧB-4lグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出した。S X I 79と重複関係にあり、同遺構を切っている。よって新旧関係は(新) S K 288→(旧) S X I 79である。S X I 79に切られているため平面形・規模ははっきりしないが、開口部径125×104cm、底部径97×85cmの楕円形状を呈す。断面形は深鍋状を呈し、深さ65～74cmを測る。埋土は6層に細分され、上位は暗褐色土、中位はにぶい黄褐色土、下位はにぶい黄橙色土を主体とした自然堆積である。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。



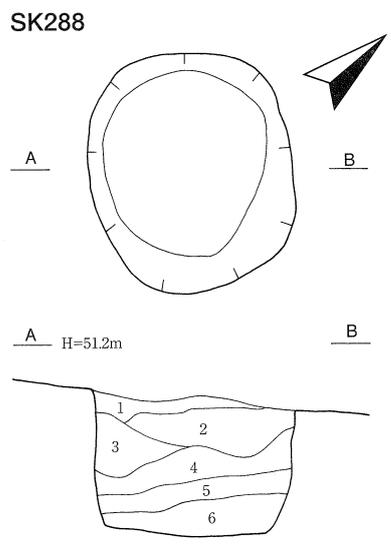
- SK272
1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、炭を少量含む
 2. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、マサ土を含む
 3. 10YR4/2 (灰黄褐) しまりやや有、粘性無、焼土とマサ土と炭を含む
 4. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、マサ土と炭を含む
 5. 10YR4/2 (灰黄褐) しまりやや有、粘性無、炭を含む
 6. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、マサ土と炭を含む
 7. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、炭を少量含む



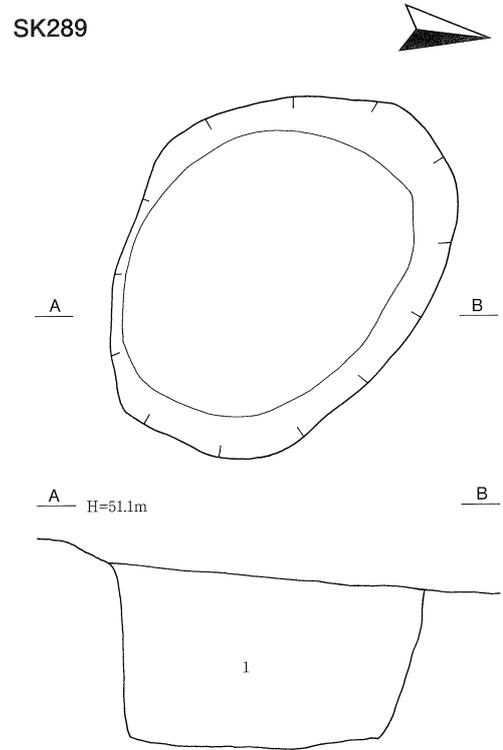
- SK285
1. 10YR3/4 (暗褐) しまり極めて有、粘性有
 2. 7.5YR3/3 (暗褐) 廃棄焼土
 3. 7.5YR3/4 (暗褐) 廃棄焼土
 4. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性やや有
 5. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性やや有
 6. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、マサ土
 7. 10YR2/1 (黒) しまり極めて有、粘性有



- SK287
1. 10YR3/4 (暗褐) しまり極めて有、粘性やや無
 2. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有
 3. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有
 4. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性有、マサ土ブロック少量
 5. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性やや有
 6. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり・粘性有



- SK288
1. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性無、炭少量
 2. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、炭少量、焼土含
 3. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまり少し有、粘性無、マサ土混入
 4. 10YR5/2 (灰黄褐) しまりやや有、粘性無、マサ土・炭少量
 5. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまり少し有、粘性無、マサ土混入
 6. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、マサ土多、炭少量



- SK289
1. 2.5Y7/3 (浅黄) しまりやや有、粘性無、マサ土含、炭少量



第197図 SK272・285・287~289土坑

S K 289土坑（第197図、写真図版150）

赤25C南半部、ⅧB-31グリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。本遺構はS X I 79構築時に人為的に埋められている。よって新旧関係は(新) S X I 79→(旧) S K 289である。開口部径207×161cm、底部径161×125cmの楕円形状を呈する。断面形は深鍋状を呈し、深さ77～93cmを測る。埋土は浅黄色土を主体とした人為堆積である。底面は概ね平坦である。遺物は埋土中より鉄滓が出土した。

S K 290土坑（第198図、写真図版150）

赤25C南半部、ⅧB-4mグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。S I 122を切っている。よって新旧関係は(新) S K 290→(旧) S I 122である。開口部径131×127cm、底部径101×95cmの円形状を呈する。断面形は深鍋状を呈し、深さ77cmを測る。埋土は6層に細分され、上位は黄褐色土、中位はにぶい黒褐色土、下位はにぶい黄橙色土を主体とした自然堆積である。底面は概ね平坦である。

遺物は埋土中より鉄滓が出土した。

S K 291土坑（第198図、遺物図版72、写真図版258）

赤25D区東斜面、ⅧB-6mグリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出された。南側斜面が崩落して壁面の一部が消失しているが、平面形・規模は円形状を呈し、開口部径164×101cm、底部径139×89cmを測る。壁は外傾して立ち上がる。壁高は北壁で31cmを測り、西・東壁は南に向かうにつれて低くなる。埋土は灰黄褐色土を主体とした単層の自然堆積である。底面は概ね平坦である。

遺物は埋土中より羽口が2点と鉄滓が出土し、掲載した遺物は羽口(140)1点である。 (島原)

S K 292土坑（第198図、写真図版151）

F区赤25D区平坦部南西端、ⅧB-7nグリッドに位置し、Ⅵ層中のS I 147床面で検出した。本遺構が新しく、S I 123とも重複するが新旧関係は不明である。平面形・規模は、開口部径約125cm、底部約115cmの円形で、断面形は深さ約35cmの筒状を呈する。埋土はマサ土を多く含む褐色系土の人為的堆積である。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。 (小山内)

S K 293土坑（第198図、写真図版151）

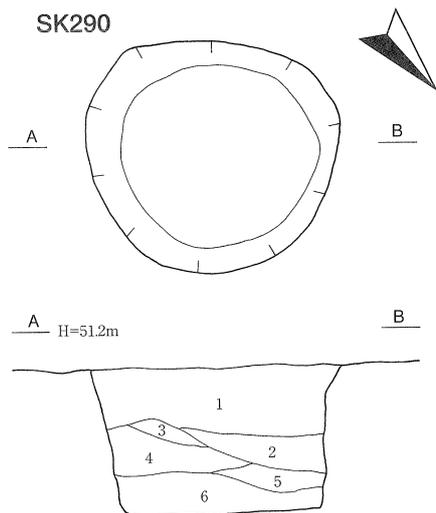
赤25C区のⅧB-3nグリッドに位置し、尾根頂部緩斜面のⅥ層上面で検出している。谷側が削られており形状・規模の詳細は不明であるが、残存部における長軸は2.3m・短軸は1.5mを測る。また平面形はやや楕円がかった円形を呈していたと考えられる。山側(南西側)の壁はやや内傾気味に立ち上がり、壁高は40cmある。底面はほぼ平坦で、谷側に深さ15cm程度の窪みを伴っている。埋土は上位に黄橙色砂質土、下位ににぶい黄橙色土が堆積し、所々木根による攪乱が見られる。遺物は出土していない。 (亀)

S K 294土坑（第199図、写真図版151）

F区赤25(C)区中央の東側斜面、ⅧB-6j・kグリッドに位置し、検出面はⅥ層である。斜面下方の東側は崩落により遺存しないため詳細は不明だが、平面形は円形または楕円形を呈すると思われ、規模は開口部径140cm以上、底部径120cm以上が推測される。遺存する斜面上方の西側の壁はほぼ直角に立ち上がり、深さ約25cmを測る。埋土は褐色土の単層である。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

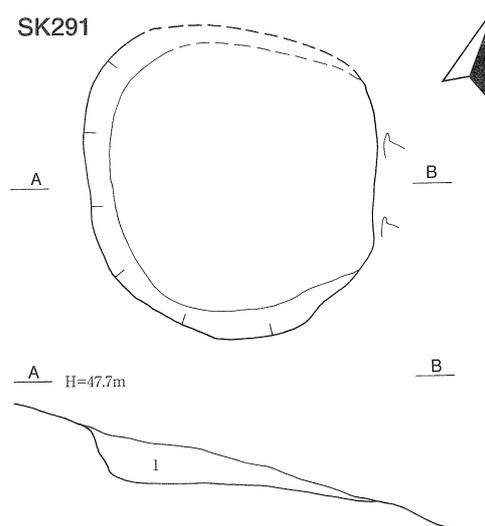
S K 295土坑（第199図、写真図版151）

F区赤25(C)区中央の東側斜面、ⅧB-6jグリッドに位置し、検出面はⅥ層である。斜面下方の東側は崩落により遺存しないが、平面形は円形または楕円形を呈すると思われ、規模は開口部径70cm以上、底部径65cm以上が推測される。遺存する斜面上方の西側の壁は緩やかに立ち上がり、深さ約15cmを測る。埋土はオリーブ褐色土の単層である。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。



SK290

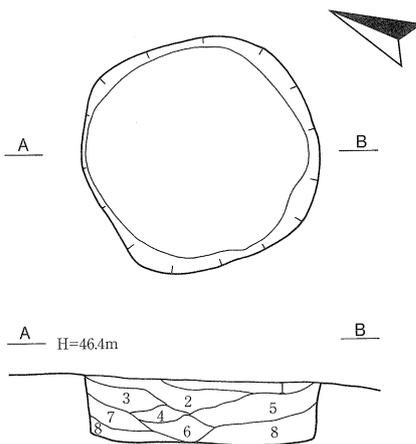
1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、炭・焼土多く、浅黄橙土含
2. 7.5YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性少し有、焼土ブロック多く含
3. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、マサ土多く含
4. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性無、マサ土多く、炭含
5. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、マサ土多く、炭含
6. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、マサ土多く、炭含



SK291

1. 10YR4/2 (灰黄褐) しまり有、粘性無、マサ土含、炭少量

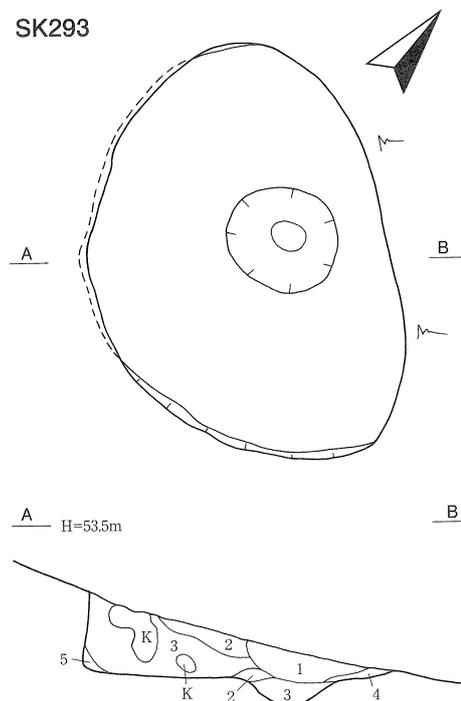
SK292



SK292

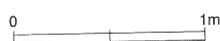
1. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有
2. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性有、マサ土粒中量
3. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有、マサ土ブロック中量、炭化物微量
4. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性有、マサ土ブロック多量
5. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性有、マサ土粒少量
6. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性有、マサ土ブロック多量
7. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性有、マサ土粒少量
8. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性有、マサ土粒少量

SK293



SK293

1. 10YR7/8 (黄橙) しまり中、粘性無、砂質
2. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり中、粘性無
3. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり中、粘性無
4. 10YR6/6 (明黄褐) しまり中、粘性無、砂質
5. 10YR6/6 (明黄褐) しまり中、粘性やや有



第198図 SK290~293土坑

S K 297土坑（第199図、写真図版151）

F区赤25(A)区洞部中央の斜面上方、ⅧB-8h・iグリッドに位置する。検出状況及び重複する遺構との新旧関係はS I 124に記述した通りである。斜面下方の東側は崩落により遺存しないが、平面形は略円形を呈し、規模は開口部径約100～120cm、底部径約70～80cmが推測される。遺存する斜面上方の西側の壁はほぼ直角に立ち上がり、深さは約50cmを測る。埋土は上位の浅黄色土と下位の暗オリーブ褐色土に分層される。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S K 298土坑（第199図、写真図版151）

F区赤25(A)区北側の棚部、ⅧB-11e・fグリッドに位置し、検出面はⅥ層である。本遺構はS I 180Aの西壁精査時に確認した。本遺構と重複する遺構との新旧関係は前述のS I 180A等に記述した通りである。平面形は円形を呈し、規模は開口部径約120cm、底部径約90～100cmを測る。壁はほぼ直角に立ち上がり、深さは約70cmを測る。埋土は10層に細分されるが、各層位の状況から、斜面上方より流入した自然堆積と思われる。底面はほぼ平坦で堅く締まる。

遺物は土師器の甕形土器片が約30点出土した。

S K 300土坑（第200図、遺物図版29・69、写真図版151・229・255・264・265・318）

F区赤25(A)区洞部北側の斜面中腹、ⅧB-11gグリッドに位置し、検出面はⅥ層である。平面形は略円形を呈し、規模は開口部径約170～220cm、底部径約70～90cmを測る。壁は下部は鋭角的に立ち上がるがその後緩やかになり、斜面上方の北西側上部は外反する。深さは約40～110cmを測る。埋土は24層に細分されるが、状況から人為的堆積と思われる。底面はほぼ平坦で、遺構東側には階段状の段差が確認された。

遺物は、土器は埋土中より土師器の甕形土器片が約30点、坏形土器片が約10点、須恵器の甕形土器片が約5点、壺の破片1点(Na.326)と坏の破片1点(Na.327)が出土した。この他、羽口が埋土上位より3点(Na.109・110・111)、炉壁が埋土中及び埋土上位より4点(Na.35・36・37・38)、鉄塊系遺物が埋土下位より2点、鉄滓が多量、鍛造剥片が埋土下位より少量出土している。また、埋土下位から廃棄された炭化材が出土しており、鑑定の結果、クリであることが判った。以上の出土遺物からも人為的に廃棄されたものと判断でき、これらの遺物は周辺及び斜面上方の遺構に帰属するものと思われる。

S K 301土坑（第199図、写真図版151）

F区赤25(A)区洞部北側の斜面上方、ⅧB-10fグリッドに位置する。本遺構はS X H 16掘削後に検出したものである。斜面下方の南側は崩落により遺存しないが、平面形は円形または楕円形を呈するものと思われる。規模は開口部径90cm以上、底部径85cm以上が推測される。遺存する斜面上方の北壁はほぼ直角に立ち上がり、深さは約15cmを測る。埋土はにぶい黄色土の単層である。底面は概ね平坦である。

遺物は出土しなかった。

(小林)

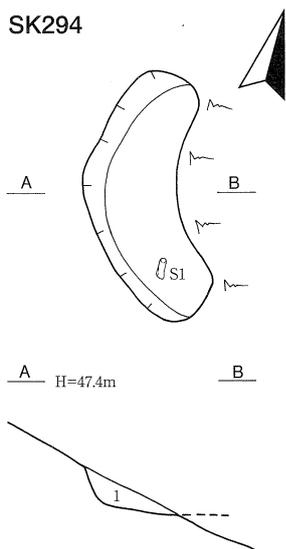
S N 47炉跡（第200図、写真図版152）

F区赤25B区洞状地形の中央山側斜面下位、ⅧB-5pグリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出した。谷側は崩落により消失して全容は不明だが、残存部での平面形・規模は、長軸約155cm、短軸約80cmの略楕円形を呈し、山側壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約50cmを測る。山側上位には半円形のテラスが認められたが、断面観察から窪みを利用した炭窯の痕跡の可能性はある。埋土は炭化物混じりの黒色系土で、テラス底面の延長レベルには炭化物層が認められた。底面は概ね平坦で、薄く灰が残り、中央部が火熱により厚さ約5cmほどで弱く赤色変化していた。形態と状況から炭窯の可能性もある。

遺物は埋土から土師器の甕形土器片約20点が出土した。

(小山内)

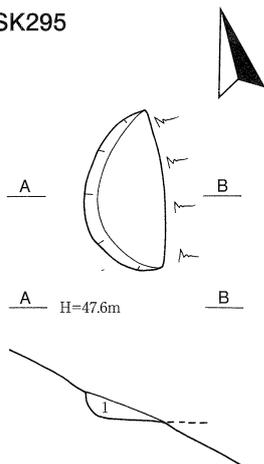
SK294



SK294

1. 2.5Y4/6 (オリーブ褐) しまり有、粘性欠

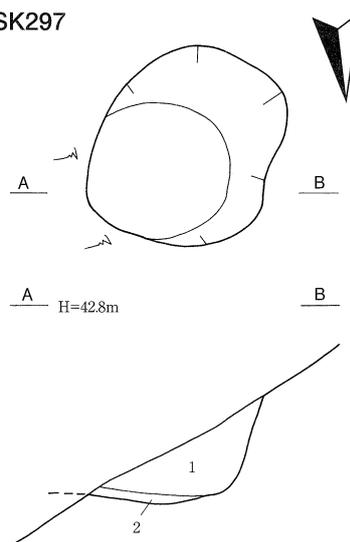
SK295



SK295

1. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり有、粘性欠

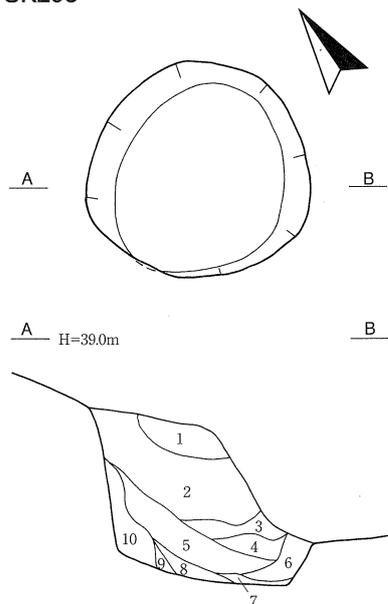
SK297



SK297

1. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり極めて有、粘性欠
2. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり極めて有、粘性有

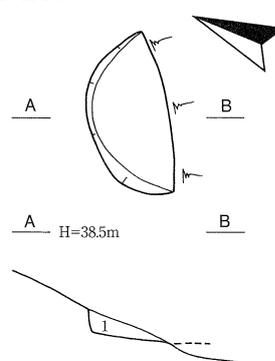
SK298



SK298

1. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまりやや有、粘性欠
2. 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまりやや有、粘性欠
3. 2.5Y4/6 (オリーブ褐) しまり有、粘性やや有
4. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまりやや有、粘性欠
5. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまりやや有、粘性有
6. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有
7. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性やや有
8. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性やや有
9. 2.5Y3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有
10. 2.5Y5/4 (黄褐) しまりやや有、粘性欠

SK301

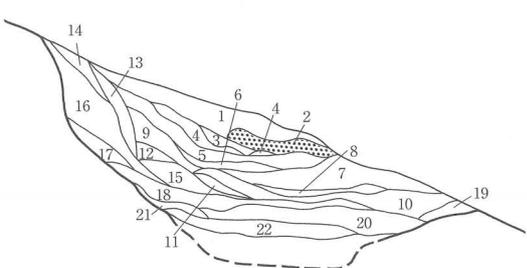
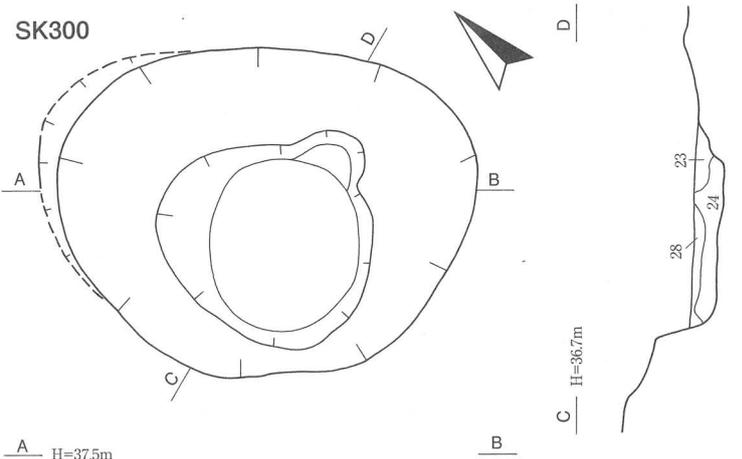


SK301

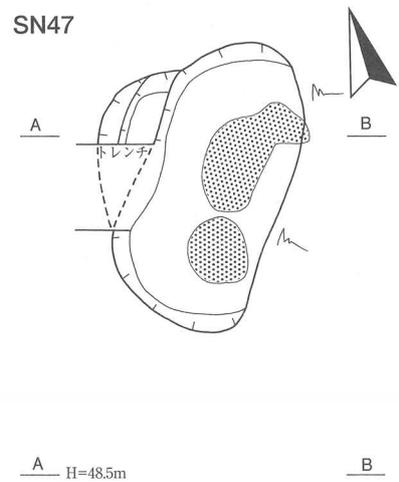
1. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性無



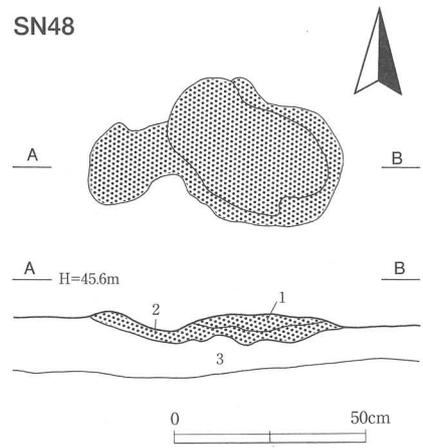
第199図 SK294・295・297・298・301土坑



- SK300
1. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり有、粘性欠、鉄滓・焼土粒・炭化物少量
 2. 5YR4/6 (赤褐) 廃棄焼土塊
 3. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり欠、粘性やや有、炭化物少量
 4. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性欠
 5. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり有、粘性やや有、焼土塊微量
 6. 2.5Y2/1 (黒) しまりやや有、粘性有、炭化物多量
 7. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性やや有
 8. 2.5Y5/3 (黄褐) しまり・粘性やや有
 9. 7.5YR5/6 (明褐) 廃棄焼土塊
 10. 10YR3/2 (黒褐) しまり欠、粘性やや有、炭化物少量
 11. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり・粘性やや有
 12. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性やや有、焼土粒微量
 13. 2.5Y3/1 (黒褐) しまり・粘性やや有、焼土粒微量、炭化物中量
 14. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性やや有
 15. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり・粘性欠
 16. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり有、粘性やや有
 17. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり欠、粘性やや有
 18. 2.5Y3/1 (黒褐) しまり・粘性やや有、焼土粒微量
 19. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性やや有、炭化物少量
 20. 2.5Y3/2 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有、焼土粒・炭化物少量
 21. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有
 22. 2.5Y2/1 (黒) しまりやや有、粘性有、炭化物少量
 23. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有、焼土粒・炭化物少量
 24. 2.5Y2/1 (黒) しまりやや有、粘性有、炭化物少量



- SN47
1. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有、炭化物微量
 2. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有、炭化物層
 3. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有、炭化物微量
 4. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有、黄褐色土ブロック少量
 5. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有
 6. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有
 7. 5YR4/6 (赤褐) } 焼土
 8. 7.5YR3/3 (暗褐) }



- SN48
1. 5YR6/8 (橙) } 焼土
 2. 5YR3/6 (明赤褐) }

第200図 SK300土坑・SN47・48炉跡

S N48炉跡 (第200図)

赤25D区のⅧB-8mグリッドに位置し、S I 150Bの埋土中で検出している。平面形は東西を長軸とする不整な楕円形を呈し、規模は39×66cmを測る。焼土は厚さが7cmあり、上が橙色、下が明赤褐色の2層に分かれる。レベルがS I 150Aの床面より30cm程度低い位置にあり、S I 150Aに付設した掘り込みを伴う炉の可能性もある。遺物は土師器の甕の破片が3点出土している。(亀)

S N52炉跡 (第201図、写真図版152)

F区赤25(A)区洞部北側の斜面上方、ⅧB-10fグリッドに位置し、検出面はVI層である。検出時の平面プランが不明瞭であったため、本遺構と重複するS N61を合わせて1つの遺構と考え精査を開始したが、掘り上がりの形状及び底面焼土の広がりから、重複する2つの炉跡であることが判った。またこれらの新旧関係は、平面形状において本遺構がS N61に切られており、(新)S N61→本遺構(旧)となる。斜面下方の南東側は崩落により遺存しないが、平面形は楕円形を呈するものと思われ、規模は開口部70cm以上×約65cm、底部60cm以上×約45cmが推測される。壁は鋭角的に立ち上がり、深さは斜面上方の北西側で約35cmを測る。埋土の詳細は不明である。底面は概ね平坦で、約50×30cmの楕円状に明褐～橙色焼土が広がり、厚さは最大厚約5cmを測る。遺物は出土しなかった。

S N61炉跡 (第201図、写真図版152)

F区赤25(A)区洞部北側の斜面上方、ⅧB-10fグリッドに位置し、検出面はVI層である。検出時の状況及び重複する遺構との新旧関係は上述のS N52に記述した通りである。斜面下方の南東側は崩落により遺存しないが、平面形は楕円形を呈するものと思われ、規模は開口部80cm以上×約60cm、底部65cm以上×約50cmが推測される。壁は鋭角的に立ち上がり、深さは斜面上方の北西側で約30cmを測る。埋土は上位の浅黄色土と下位の炭化物を多く含む黒色土に分層される。底面は概ね平坦で、径約25cmの円状に橙色焼土が広がる。壁面にも同様の焼土が見られるが、いずれも厚さは1cm未満の微弱な焼土である。

遺物は出土しなかった。

S N62炉跡 (第201図)

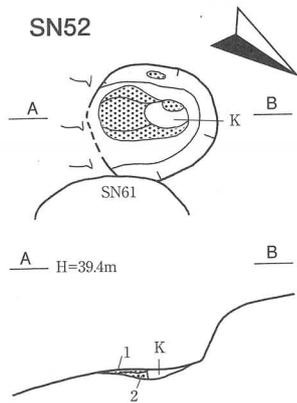
F区赤25(A)区洞部中央の斜面中腹、ⅧB-10hグリッドに位置する。本遺構はS X H16上に構築されている。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部約50×40cm、底部約30×20cmを測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さは約5cmである。埋土は炭化物を多く含む黒褐色土の単層である。底面は概ね平坦で、壁面において厚さ1cm未満の微弱な明褐色焼土が部分的に確認されたことにより、本遺構を炉跡と判断した。遺物は出土しなかった。

S N63炉跡 (第201図)

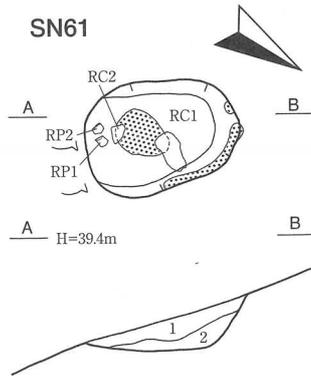
F区赤25(A)区洞部南側の斜面中腹、ⅧB-11iグリッドに位置し、検出面はIV層である。本遺構は兩列によりその大半が失われているため、詳細は不明である。平面形は楕円形を呈するものと思われ、規模は開口部約40×20cm、底部約30×20cmが推測される。断面形は浅い皿状を呈し、深さは3～4cm程である。埋土は黒褐色土の単層である。底面はほぼ平坦である。壁面において厚さ1cm未満の微弱な暗赤褐色焼土が確認されたことにより、本遺構を炉跡と判断した。遺物は出土しなかった。

S N64炉跡 (第201図)

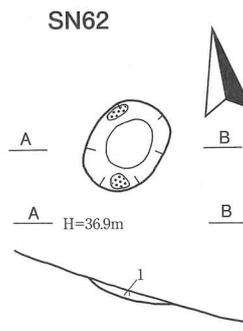
F区赤25(A)区洞部中央の斜面中腹、ⅧB-10hグリッドに位置する。本遺構はS X H16精査時に検出したもので、その大半は掘削してしまっただことにより残存しない。平面形は楕円形を呈するものと思われ、規模は開口部約65×50cm、底部約40×20cmが推測される。断面形は皿状を呈し、深さは約10cmを測る。



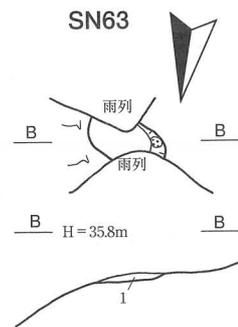
SN52
1. 7.5YR5/6 (明褐) 焼土
2. 5YR6/6 (橙) 焼土



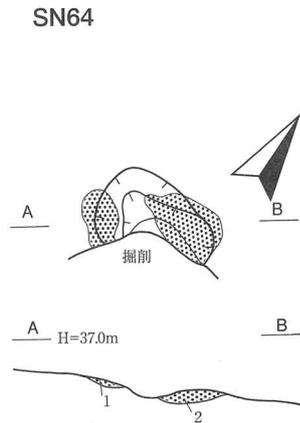
SN61
1. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性無
2. 10YR2/1 (黒) しまり・粘性有、炭化物中量



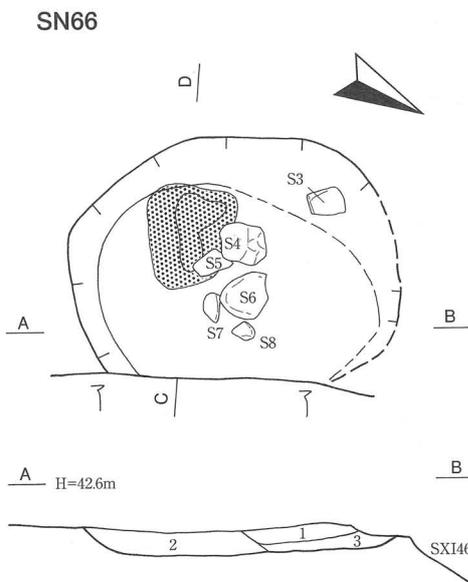
SN62
1. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり欠、粘性極めて有、炭化物多量



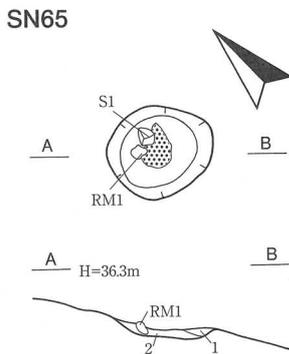
SN63
1. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有



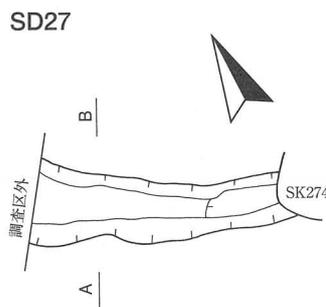
SN64
1. 5YR5/6 (明赤褐) 焼土
2. 7.5YR5/6 (明褐) 焼土



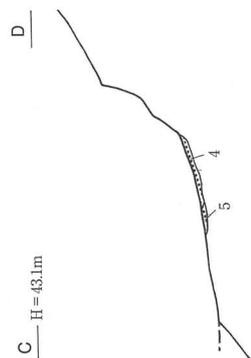
SN66
1. 10YR2/1 (黒) しまり極めて有、粘性有
2. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質
3. 10YR2/2 (黒褐) しまり有、粘性やや有
4. 5YR4/6 (赤褐)
5. 7.5YR4/4 (褐) 焼土 } 焼土



SN65
1. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有
2. 10YR2/1 (黒) しまり・粘性有



SD27
1. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり欠、粘性無



C

H=43.1m

第201図 SN52・61~66炉跡・SD27溝跡

埋土については不明である。底面には凹凸が見られる。底面及び壁面には明褐色及び明赤褐焼土が不整に広がり、厚さは5cm前後を測る。遺物は出土しなかった。

S N 65 炉跡 (第201図、遺物図版95、写真図版152・283)

F区赤25(A)区洞部中央の斜面中腹、ⅧB-11gグリッドに位置する。本遺構はSXH16上に構築されている。平面形は円形を呈し、規模は開口部径約50cm、底部径約40cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは5cmを測る。埋土は上位の黒褐色土と下位の黒色土に分層される。底面は概ね平坦である。底面中央には約20×15cmの楕円状に暗赤褐色焼土が広がるが、厚さは1cmにも満たない微弱なものである。

遺物は、砥石が底面S1として1点(No131)、鉄滓が同じくRM1として1点出土した。(小林)

S N 66 炉跡 (第201図、遺物図版97・98、写真図版152・284・285・320)

F区赤25B区洞状地形の南端、ⅧB-7aグリッドに位置し、SXI46の精査過程で検出したもので、本遺構が古く、検出面はⅢ層上面である。谷側は一部崩落により消失し、北側はSXI46埋土として掘削したため全容は不明だが、残存部での平面形・規模は、長軸約170cm、短軸約130cmの略楕円形と推定され、壁は外傾して立ち上がり、壁高は約50cmを測る。埋土はⅢ層起源の炭化物混じりの黒色系土の自然堆積で、人頭大から拳大の石が数個出土した。底面は概ね平坦で、中央部山側で径約50cmの円形の火熱により厚さ約5cmほどの赤色変化が認められた。

遺物は埋土から要石1点(145)とSII120B・150B出土の石と接合した鉄砧石1点(146)、鍛冶滓類約1.1kgが出土した。(小山内)

S D 27 溝跡 (第201図、写真図版152)

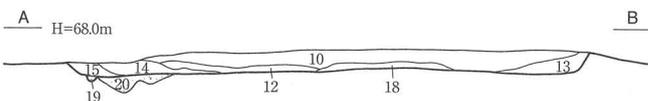
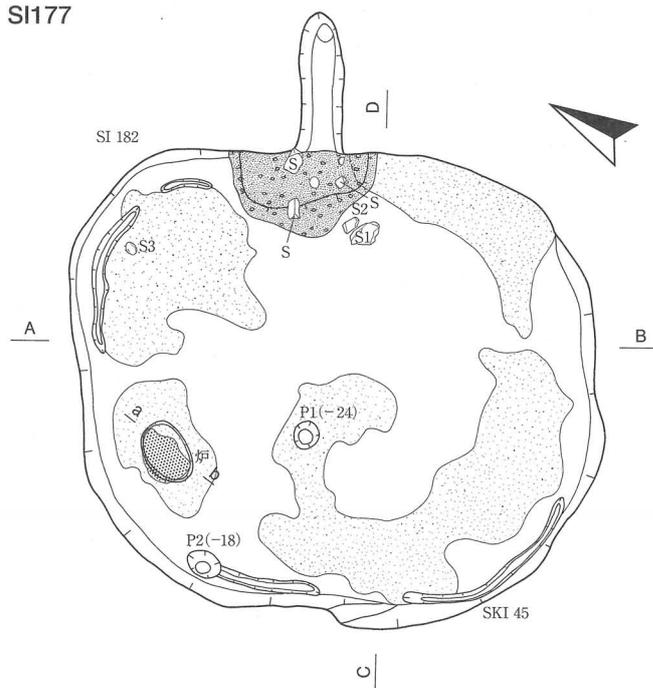
赤25C区のⅧB-5i・jグリッドに位置し、尾根頂部平坦面のⅥ層上面で検出している。走行方向はN-65°-Wで、東側をSK274土坑によって切られ西側は調査区外まで延びているため全長は不明である。幅は0.65~1.1mで調査区外(西側)に近くなるほど広がっている。断面形は浅い皿状を呈し、深さは8cmを測る。埋土はにぶい黄橙色土1層で、明黄褐色土をブロック状に含んでいる。鍛冶滓が1点埋土から出土しており、鍛造が行われていた当時の遺構と思われるが、詳細は不明である。(亀)

4) G区の遺構 (赤26区・緑14区)

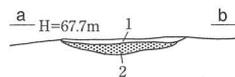
G区は調査区の南東部に位置する区域で、D区の南端から一段高度を下げて北東方向に延びる枝尾根(赤26区)と、この北側でF区に挟まれる洞部(緑14区)である。赤26区は、赤22区から分岐する小さな枝尾根であり、北東方向に向かって急激に高度を下げた部分で、緩やかな勾配のテラス状の尾根である。尾根頂部の標高は約65~70mで、全長約40m、幅約6~8mと狭小である。なお、この尾根頂部は平坦部を形成しているが、この区域の遺構の残存状態から、後世において人工的に削平整地された可能性がある。尾根の両側は急勾配となっており、北側は緑14区へと、南側は緑17区谷底へと至る。緑14区は、赤26区と赤23区の尾根の間により形成された扇状を呈する洞部分で、全長約80m、幅約25mを測る。赤26区同様、北東方向に高度を下げ、緑17区谷部へと繋がるが、その標高は約70~55mで高低差約25mもの急斜面地となっている。

検出された遺構は、竪穴住居跡、工房跡、竪穴状遺構、土坑、焼土遺構などである。これらの分布及び立地状況としては、赤26区では竪穴住居跡2棟、竪穴状遺構2棟、土坑5基、焼土遺構1基が存在し、いずれも尾根上平坦部やその両側斜面の肩口部分に立地している。緑14区では竪穴住居跡1棟、工房跡1棟が存在し、洞部中腹の急斜面地に立地している。(小林)

SI177



SI177 炉

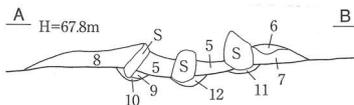
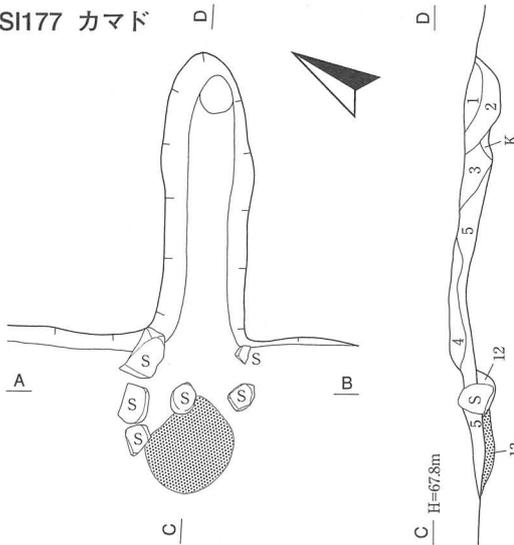


SI177 炉
 1. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有
 2. 7.5YR6/6 (橙) 焼土

SI177 カマド

1. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有
2. 10YR3/3 (暗オリーブ褐) しまりやや有、粘性有、黄褐色土粒微量
3. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり有、粘性やや有
4. 2.5Y4/6 (オリーブ褐) しまり・粘性有
5. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり有、粘性やや有
6. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性極めて有
7. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性やや有
8. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性有
9. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性有
10. 2.5Y5/4 (黄褐) しまりやや有、粘性欠
11. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性欠
12. 2.5Y4/6 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性有
13. 7.5YR5/8 (明褐) 燃焼部焼土

SI177 カマド



SII177

1. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性有
2. 2.5Y4/6 (オリーブ褐) しまり・粘性やや有
3. 2.5Y5/3 (黄褐) しまり有、粘性やや有
4. 2.5Y7/6 (明黄褐) しまり・粘性欠
5. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり・粘性有
6. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性やや有
7. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性有
8. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有、炭化物少量
9. 2.5Y5/6 (黄褐) しまり・粘性欠
10. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり有、粘性やや有
11. 2.5Y4/6 (オリーブ褐) しまり欠、粘性やや有
12. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有、炭化物少量
13. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり・粘性有
14. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり有、粘性やや有
15. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有
16. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり・粘性欠
17. 2.5Y5/6 (黄褐) しまり・粘性有
18. 2.5Y2/1 (黒) しまり・粘性やや有、炭化物中量
19. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性やや有、壁溝
20. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有、貼床
21. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり・粘性有、貼床

第202図 SI177竪穴住居跡

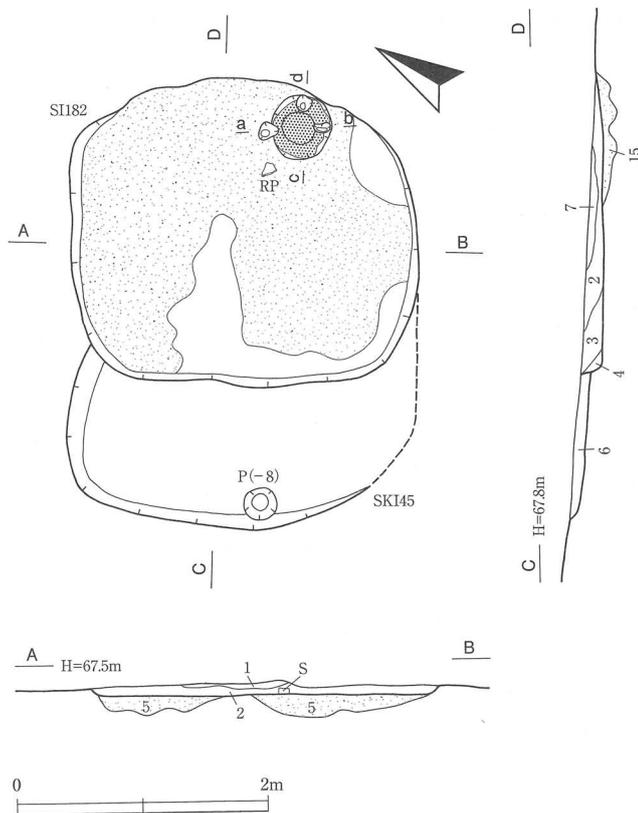
S I 177 竪穴住居跡 (第202図、写真図版153)

G区赤26区東部の尾根上平坦部、ⅧD-18q・18r・19q・19rグリッドに位置し、検出面はⅥ層である。本遺構とその周辺は、確認された遺構の遺存状態から、上面を何らかによって削平された可能性があるため、一部遺存状態が悪い。平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺約4mを測る。主軸方位はN-61°-Eで、床面積は12.5㎡である。壁は東壁の大半は遺存しないが、その他は鋭角的に立ち上がり、壁高は10~25cmを測る。なお、西壁の中央部分は階段状に立ち上がっており、床面の壁溝も途切れることから、出入口であった可能性が考えられる。埋土は19層に細分され、最下層は多量の炭化物が混入する黒色土のみ廃棄されたものと思われるが、その他は主にオリブ褐~黄褐色土で構成されており、自然堆積か人為堆積かは不明である。床面は平坦で堅く締まり、貼床が主に壁沿いに施されている。床面施設として、柱穴2基と壁溝が部分的に、また遺構北西側には炉跡も確認された。炉跡は約50×35cmの楕円形を呈し、皿状に3cm程窪んでいる。底面には最大厚約5cmの橙色焼土が広がる。

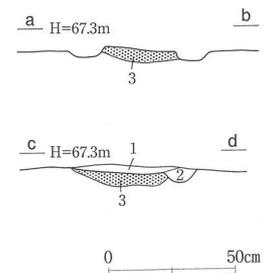
カマドは東壁の中央に付設されている。袖部には芯材として自然石を利用しており、立位の状態で5個検出された。燃焼部はほぼ平坦で、径約40cm、厚さ約3~4cmの明褐色焼土が広がる。この北東側には袖部同様、自然石が据えられており、支脚として使用されたものと思われる。煙道部は上面が削平されているため詳細は不明だが、立地的に掘り込み式と思われ、長さ約120cmを測る。

遺物は、土師器の甕形土器片が中1袋、須恵器の甕形土器片が2点、川原石が1点出土した。

SI182・SKI45



SI182 カマド



- SI182
 1. 2.5Y4/3 (オリブ褐) しまり有、粘性やや有
 2. 2.5Y4/6 (オリブ褐) しまり有、粘性欠
 3. 2.5Y5/4 (黄褐) しまりやや有、粘性欠
 4. 2.5Y4/4 (オリブ褐) しまり有、粘性欠
 5. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無、貼床
 SKI45
 6. 2.5Y3/3 (暗オリブ褐) しまり有、粘性欠
 SI182 カマド
 1. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性極めて有
 2. 2.5Y4/4 (オリブ褐) しまり・粘性有、支脚の抜き取り痕
 3. 5YR5/6 (明赤褐) 燃焼部焼土

第203図 SI182竪穴住居跡・SKI45竪穴状遺構

S I 182 竪穴住居跡、S K I 45 竪穴状遺構（第203図、遺物図版34、写真図版153・232）

G区赤26区東部の尾根上平坦部、ⅧD-19q・19r・20q・20rグリッドに位置し、検出面はⅥ層である。S I 177と同様の状況により、一部遺存状態が悪い。検出時の状況から、当初は単独の竪穴住居跡と考え精査を開始したが、埋土断面及び床面の状況から、2棟の重複する遺構であることが判った。新旧関係はS I 182がS K I 45を切っていることから、(新) S I 182→S K I 45 (旧) である。

S I 182は精査過程で、床面で炉跡と思われる焼土の広がりを検出したことから、当初は工房跡と考えたが、遺構東側の大半が遺存せず煙道部等は確認できないが、その位置的状況や抜き取り痕の存在から、これをカマドの燃焼部と考え、竪穴住居跡と判断した。遺存部から、平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺約2.8mが推測される。主軸方位は煙道部が確認できないため詳細は不明だが、およそ北東方向にあると思われる。床面積は6.4㎡が遺存する。遺存する壁は鋭角的に立ち上がり、壁高は5～20cmを測る。埋土は4層に細分され、斜面上方からの自然流入と思われる。床面は平坦で堅く締まり、貼床が大半に施されている。

カマドは東壁のやや南寄りに付設されており、燃焼部のみ確認できる。燃焼部は径約50cmの円形を呈し、皿状に窪んでいる。同様の規模に橙色焼土が広がり、厚さは5cm前後を測る。この北側・南側・東側には径10cm前後の小ピットが確認されたが、位置的に北側・南側のものは袖の芯材の抜き取り痕、東側のものは支脚の抜き取り痕と思われる。

遺物は、埋土中から縄文土器片が2点、土師器の甕形土器片が中1袋、坏形土器が1点(396)、鉄滓が1点出土した。

S K I 45はS I 182にその大半を切られているため詳細は不明だが、残存部より平面形は隅丸方形、規模は一辺約2.7mが推測され、床面積は2.5㎡が残存する。残存する壁は鋭角的に立ち上がり、壁高は約10cmを測る。埋土は暗オリーブ褐色土の単層である。床面はほぼ平坦で締まりがある。遺構西壁のやや南寄りにおいて、径約20cm、深さ約10cmの柱穴と思われるピットが確認された。遺物は出土しなかった。

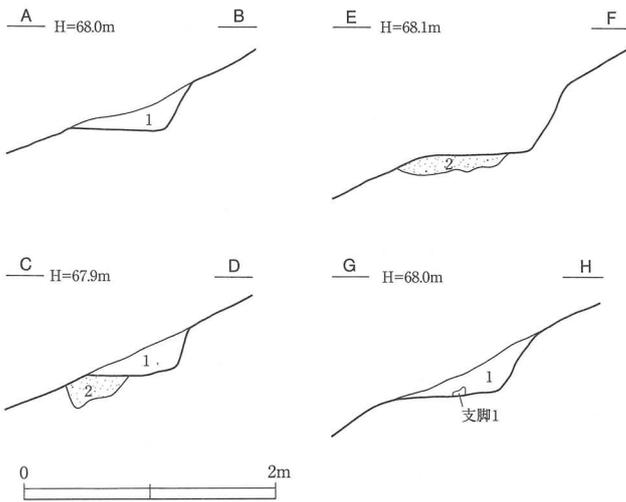
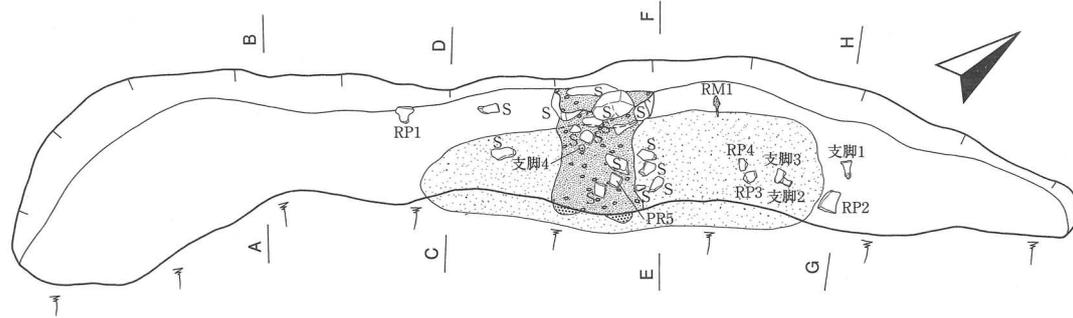
S I 186 竪穴住居跡（第204図、遺物図版34・58・127、写真図版154・232・247・307）

G区緑14区北東側の洞部の急斜面、ⅧD-12o～13nグリッドに位置し、検出面はⅢ層である。本遺構の斜面下方の南東側は崩落により遺存しない。遺存する平面形は弧状を呈するが、おそらく隅丸長方形であったものと思われる。規模は長辺約8.5m、短辺1.6m以上が推測される。長辺は等高線と平行し、床面積は4.9㎡以上が推測される。壁は遺存する北西壁は鋭角的に立ち上がり、壁高は約30～60cmを測る。埋土は黒褐～暗褐色土を基調とした単層で、Ⅲ層起源の自然流入土と思われる。床面はほぼ平坦で堅く締まり、貼床が遺構中央部に施されている。

カマドは、当初は煙道部が確認されなかったため、地床炉を伴う工房跡と考えたが、本遺跡内で煙道部を伴わないカマドが存在しており、本遺構もこれに当たるものと判断した。カマドは斜面上方の北西壁のほぼ中央に付設されている。袖部は自然石を立位の状態で芯材として使用しており、壁側のものが遺存している。天井部にも同じく自然石を架構に用いており、これらの内面は被熱の痕跡が著しいことから、全体としてはコの字状に外面にのみ粘土を貼り付けて構築していたものと思われる。また、壁際にも自然石が立位状態で据えられていることから、煙道施設を伴わないものと考えられる。燃焼部はほぼ平坦で、約70×50cmの不整な橙色焼土が広がる。この北西側には土製支脚（支脚4・5）が2本並んで据えられている。

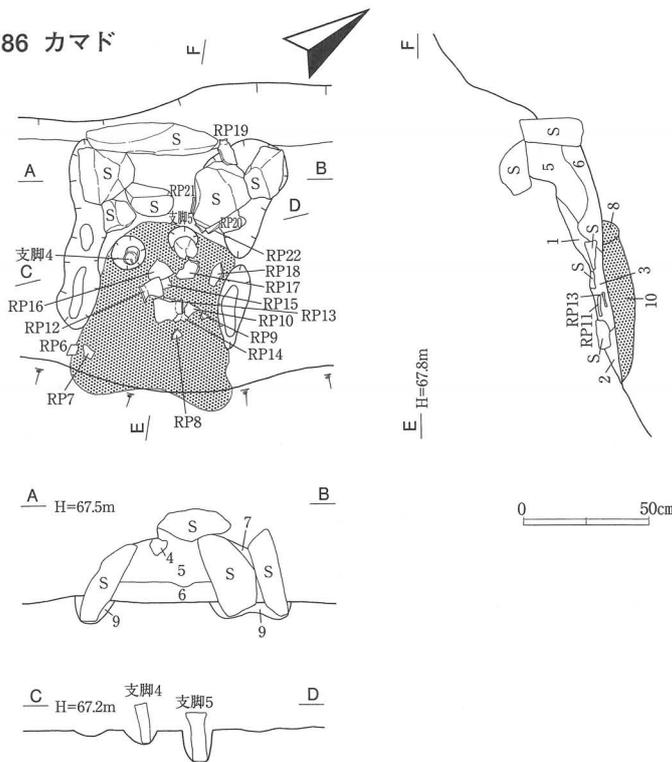
遺物は、土器は全体で土師器の甕形土器片が大1袋、坏形土器片が1点出土している。主なものとして、土師器の甕形土器は、カマド内出土のRP19・20・21が接合した397、同じくカマド出土のRP12の399、床面出土のRP3・4が接合した(398)、同じく床面出土の(400)、須恵器の大甕の破片として、床面RP2の(401)

SI186



- SI186
 1. 10YR3/2~3/3 (黒褐~暗褐) しまり欠、粘性有
 2. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性やや有、貼床

SI186 カマド



- SI186 カマド
 1. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性有
 2. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有
 3. 7.5YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有
 4. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまり有、粘性極めて
 5. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり欠、粘性有、
 焼土粒微量
 6. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性有
 7. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有、
 崩落構築土
 8. 10YR4/4 (褐) しまり欠、粘性有、
 支脚の掘り方埋土
 9. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有、
 芯材の掘り方埋土
 10. 5YR6/8 (橙) 燃焼部焼土

第204図 SI186竈穴住居跡

などがある。その他、土製支脚が上記のカマド内に遺存していた2点(9・11)の他に支脚1(10)・2(8)・3として床面から3点、鉄鏝が床面RM1(157)として1点出土した。

S X I 85工房跡 (第205図、写真図版154)

G区緑14区北東側の洞部の急斜面、ⅧD-12o・12pグリッドに位置し、検出面はⅢ層及びⅥ層である。本遺構の斜面下方の東側は崩落により遺存しない。本遺構南側には円形の土坑状に張り出す施設が付属している。本体部の平面形は遺存部から隅丸長方形、規模は長辺約3.6m、短辺2.1m以上が推測される。張り出し部の平面形は略円形を呈し、規模は径約100cmを測る。床面積は2.7㎡が遺存する。壁は斜面上方の西壁では崩落のため、緩やかに立ち上がるが、張り出し部の南側では鋭角的に立ち上がる。壁高は西壁で約110cm、南・北壁で約30cmを測る。また西壁の床面より一段高い位置には、壁溝状の掘り込みが確認された。埋土は7層に細分されるが、いずれもⅢ層及びⅥ層起源の混合土で、斜面上方から自然流入したものと思われる。床面はほぼ平坦で堅く締まる。床面施設として、張り出し部のほぼ中央に炉跡が確認された。径約40cmの円形を呈し、皿状に浅く窪み、径約50cmの円状に明褐焼土が広がる。

遺物は、土師器の甕形土器片が小1袋出土したのみである。

S K I 49竪穴状遺構、S K 329・330・335土坑 (第205図、写真図版155)

G区赤26区西部の尾根上平坦部、ⅧD-16s~17tグリッドに位置し、検出面はⅤ層及びⅥ層である。検出時の状況は、不整形に広がる暗オリーブ褐色土の広がりや土坑数基のプランが重複するものと認識した。全容が全く不明であったため、認識できる土坑と共通の断面ベルトを設定し掘り下げを行った。結果、土坑3基と竪穴形状の一辺のみ遺存する遺構が確認された。しかし、その内の1基は平面形状から柱穴(P1)と判断した。また土坑2基(S K 329・330)についても、当初は竪穴形状の遺構(S K I 49)よりも新しいものと考えたが、埋土断面を観察した結果、これより古いことが判明した。これにより、上記のP1はS K I 49に伴う柱穴である可能性が考えられる。またP1とS K 329の間には、これらと平面形を異にするプランが確認でき、掘り上がりの形状からこれらに大半を切られる土坑(S K 335)と判断した。よって、これらすべての新旧関係は、(新)S K I 49→S K 329・330→S K 335(旧)となる。以下、新しい遺構順に記載する。

S K I 49は、以上のような検出状況及び遺存部分が少ないため、詳細は不明である。僅かに残る西壁や貼床範囲から、3.8×0.9m以上の規模が推測され、床面積は3.0㎡が遺存する。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は約10cmを測る。埋土は暗オリーブ褐色土の単層である。床面は平坦で、貼床が南側に施されている。P1は径約30cm、深さ約65cmを測り、開口部は抜き取りのため径約50~60cmに開ける。

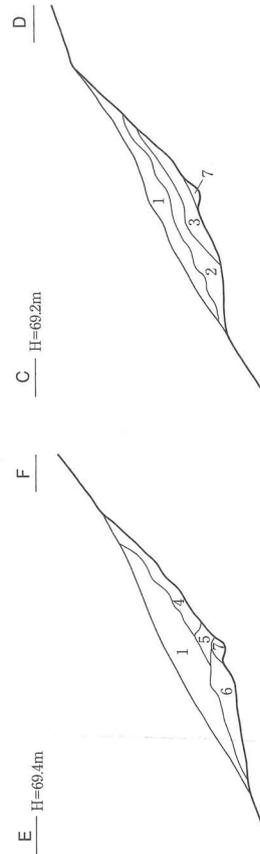
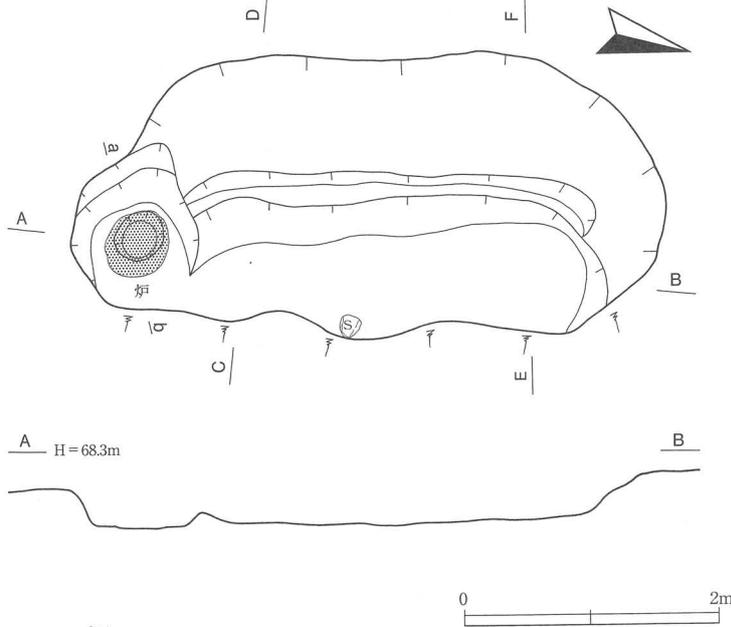
遺物はP1埋土から土師器の甕形土器片が3点出土した。

S K 329の平面形は略長方形を呈し、規模は開口部約120×95cm、底部約95×75cmを測る。長軸方向はおおよそ北西-南東方向にあり、等高線に平行する。壁はほぼ直角に立ち上がり、深さは約75cmを測る。埋土は6層に細分されるが、上~中位の暗オリーブ褐色土系、下位の明黄褐色土に大別される。各層位の状況から、人為的に埋め戻されたものと思われる。底面は概ね平坦である。

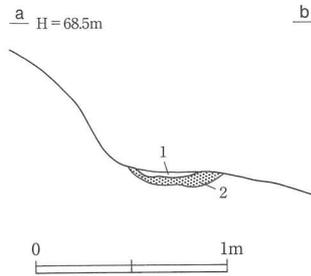
遺物は埋土中より、土師器の甕形土器片が数点と坏形土器片が1点出土した。

S K 330の平面形は略長方形を呈し、規模は開口部約120×90cm、底部約95×70cmを測る。長軸方向はおおよそ北西-南東方向にあり、等高線に平行する。壁はほぼ直角に立ち上がり、深さは約60cmを測る。埋土は上位の暗オリーブ褐色土と下位の明黄褐色土の2層に分別される。下位層には黄褐色土がブロック状に混入することから、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。底面は平坦である。遺物は土師器の甕形土器片が数点出土した。以上のようにS K 329・330は、規模や形態等類似する点が多く、その位置関係も並列し

SXI85



SXI85 炉



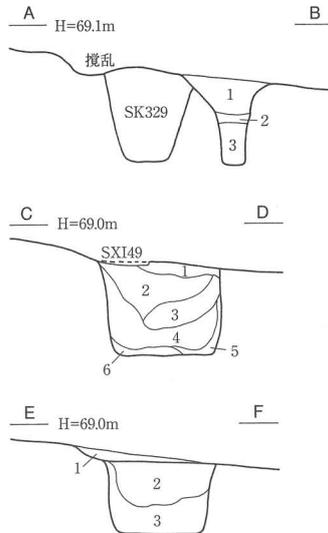
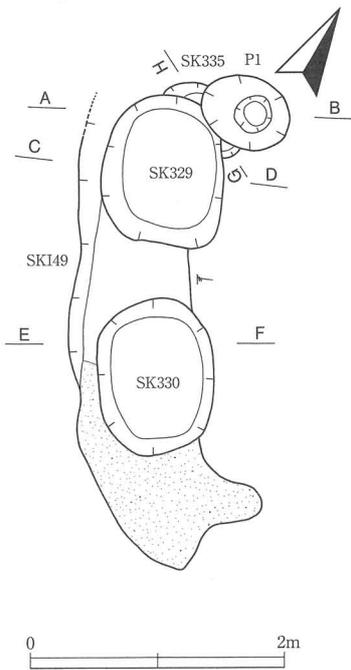
SXI85

1. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性無
2. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり欠、粘性無
3. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり欠、粘性無
4. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり欠、粘性無
5. 2.5Y3/1 (黒褐) しまり有、粘性無、
6. 2.5Y3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性欠
7. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり有、粘性無、壁溝

SXI85 炉

1. 2.5Y2/3 (黒褐) しまり・粘性有、炭化物微量
2. 7.5YR5/8 (明褐) 焼土

SKI49, SK329・330・335



SKI49

1. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり・粘性やや有
2. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり欠、粘性やや有
3. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまり欠、粘性無

SK329

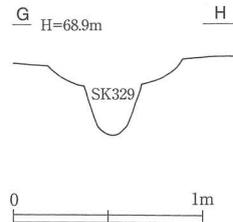
1. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有
2. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性有
3. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性有
4. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまりやや有、粘性有
5. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性有
6. 2.5Y7/6 (明黄褐) しまり有、粘性欠

SKI49

1. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有

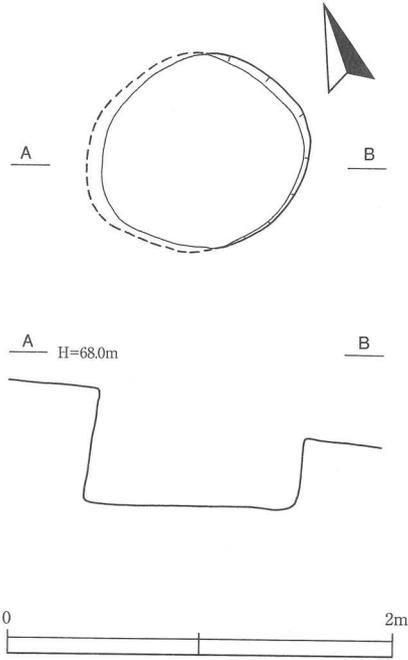
SK330

2. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有
3. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有、黄褐色土ブロック中量混入

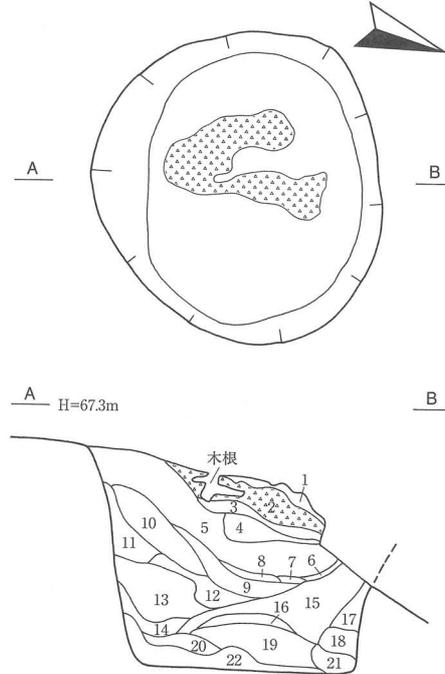


第205図 SXI85工房跡・SKI49竪穴状遺構・SK329・330・335土坑

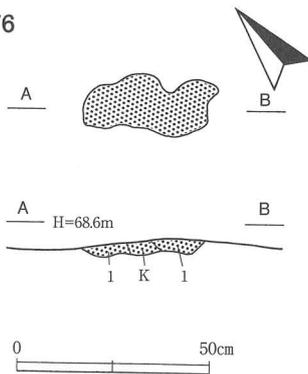
SK325



SK326



SN76



SN76

1. 7.5YR5/6 (明褐) 焼土

SK326

1. 2.5Y3/3 (暗オリブ褐) しまり有、粘性やや有
2. 2.5Y3/2 (黒褐) 貝層
3. 2.5Y3/3 (暗オリブ褐) しまり・粘性有
4. 2.5Y4/6 (オリブ褐) しまり有、粘性欠
5. 2.5Y4/4 (オリブ褐) しまり有、粘性欠
6. 2.5Y3/3 (暗オリブ褐) しまり極めて有、粘性欠
7. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり有、粘性極めて有
8. 2.5Y4/3 (オリブ褐) しまり有、粘性欠
9. 2.5Y3/3 (暗オリブ褐) しまり有、粘性欠
10. 2.5Y4/4 (オリブ褐) しまり有、粘性欠
11. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性欠
12. 2.5Y4/4 (オリブ褐) しまりやや有、粘性欠
13. 2.5Y5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性無
14. 2.5Y3/3 (暗オリブ褐) しまりやや有、粘性欠
15. 2.5Y4/4 (オリブ褐) しまり極めて有、粘性欠
16. 2.5Y3/3 (暗オリブ褐) しまり極めて有、粘性欠
17. 2.5Y3/3 (暗オリブ褐) しまり有、粘性欠
18. 2.5Y4/3 (オリブ褐) しまり有、粘性欠
19. 2.5Y4/4 (オリブ褐) しまりやや有、粘性欠
20. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまり欠、粘性やや有
21. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性やや有
22. 2.5Y3/3 (暗オリブ褐) しまり有、粘性欠

第206図 SK325・326土坑・SN76焼土遺構

て確認された。また、両遺構とも人為的堆積の様相を呈することから、墓壙の可能性も考えられる。

S K 335は上述の通り、P1とS K 329によってその大半を切られ、またS K I 49にも上半部は切られているものと思われ、詳細は不明である。残存部から、平面形は円形を呈し、規模は開口部径約70cm、底部径約50cmが推測される。断面形は皿状を呈し、深さは約10cmが残存する。埋土等は不明である。

遺物は出土しなかった。

S K 325土坑（第206図、写真図版155）

G区赤26区東部の南側斜面へと繋がる肩口、ⅧD-19r・19sグリッドに位置し、検出面はⅥ層である。平面形は円形を呈し、規模は開口部径約100～110cmを測り、底部径も同様である。壁はほぼ直角に立ち上がり、東側ではやや外傾、西側ではやや内傾する。深さは斜面上方の西側で約65cm、斜面下方の東側で約40cmを測る。埋土は調査員の指示が至らなかったため、記録することができなかったが、全体がⅥ層起源のマサ土で覆われており、ほぼ単層に近い状況の人為堆積であったと思われる。底面は平坦で堅く締まる。遺物は出土しなかった。

S K 326土坑（第206図、写真図版155・325）

G区赤26区東部の北側斜面へと繋がる肩口、ⅧD-20qグリッド杭を囲むように位置し、検出面はⅥ層である。検出時において既に貝片が確認でき、貝層の存在を意識して精査に臨んだが、遺構中央に大きな木根が存在しており、これにより大部分が攪乱されており、精査は難航を窮めた。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部約165×150cm、底部約140×110cmを測る。長軸方向は北東東-南西西方向にあり、等高線に平行する。壁は鋭角的に立ち上がり、上部はやや外反する。深さは斜面上方の南側で最大約110cmを測るが、斜面下方に向かうに従って減少する。埋土は22層に細分されるが、各層位や貝層を含むことから人為的に埋め戻されたものと判断できる。貝層は上位（2層）に形成されており、規模は約80×50cm、層厚は約15cmを測る。上記の通り、木根により攪乱されているため詳細は不明だが、主にイガイ科の一種で構成されている。詳細については、第二分冊を参照して頂きたい。底面は平坦で堅く締まる。

遺物は上記の貝類の他、埋土中より土師器の甕形土器片が3点出土したのみである。なお、貝層中より炭化材が出土したが、鑑定の結果、クリであることが判った。

S N 76焼土遺構（第206図）

G区赤26区中央部の尾根上平坦部、ⅧD-17rグリッドに位置し、検出面はⅤ層である。平面形は不整形で、規模は約30×15cmを測る。厚さは約3～4cm程で、明褐色を帯びている。出土遺物はない。（小林）

5) H区の遺構（赤27区・緑13・17区）

H区は調査区の北東部に位置する区域で、F区の中央から北東方向に延びる枝尾根（赤27区）と、この西側で赤25区に挟まれる谷部（緑13区）、東側で赤28区に挟まれる谷部（緑17区）を含む範囲である。中心部分となる赤27区は、赤23区の中央から分岐する比較的大きな枝尾根であり、北東方向に向かって概ね高度を下げ、いくつかの段地形を形成する。この地形概況と検出時の遺構のまとまりから、調査の進行上、便宜的に赤27(A)～(E)区の5つに区分けした。赤23区から一旦急激に高度を下げ、小さな洞を形成し、緑17区へと繋がる斜面部を赤27(D・E)区とした。この中腹から繋がる狭小な尾根上部分は馬の背状を呈しており、南側から、腰部分を赤27(C)区、腰から緩やかに一段下がった背部分を赤27(B)区、これより一段上がった肩部分を赤27(A)区とした。なお、赤27(D・E)区はこの地域を2カ年に渡って調査したため、便宜上、上位の平成13年度調査時区域を赤27(D)区、下位の平成14年度調査時区域を赤27(E)区とした。標高は洞

部の赤27(D・E)区で約68～43m、尾根頂部は赤27(C)区で約50m、赤27(B)区で約45m、赤27(A)区で約47～43mである。また、赤27(B)区尾根頂部の北側から中央にかけての一部は約15×5mの広さで平坦部を形成しており、状況的に人工的に削平整地されたものと思われる。尾根の両側は急勾配となっており、西側は緑13区へと、東側は緑17区へと繋がるが、赤27(A・B)区の東側斜面の中腹から下方辺りは僅かに緩やかになっている。緑13区は、F区幹尾根と赤27区の2本の尾根の分岐によりV字状に形成された谷部分である。尾根から繋がる南側は急傾斜となっているが、その後徐々に緩やかな傾斜で北東方向に開ける。谷底の広さは南西－北東長約200m、北西－南東幅約5～15mで、標高は30mを下回る低位であり、調査区北東側は現況でも谷地となっている。緑17区は、F区の南側調査区外に延びる幹尾根とこれより分岐する枝尾根(赤28区)により形成された大きな谷部分で、その内、赤27区と赤28区に挟まれた部分に当たる。調査区内はS字状にやや蛇行し、緩やかな傾斜で北東方向に開ける。谷底の広さは南西－北東長約150m、北西－南東幅約5～20mで、緑13区同様、標高は30mを下回り、北東側は現況でも谷地となっている。基本層序は概ね他の地域と同じ層序を成すが、赤27(D・E)区の洞部の上方から中腹の検出面は、褐色土より暗めの暗褐色土となっており、洞部を形成することにより混入した土層と考えられるが、IV層に対応するものと思われる。

検出された遺構は赤27区からのみである。緑13・17区は幅3m程の谷底から両側斜面裾までかかる長さのトレンチを20m程の間隔であけて調査した(緑13区:13本、緑17区:9本)が、遺構は検出されず、緑13区中央部のトレンチからのみ、西側の赤25区から流れ込んだと思われる鉄滓等が出土した。赤27区の主な遺構は、竪穴住居跡36棟、工房跡6棟、竪穴状遺構4棟、鉄生産関連炉跡4基、炭窯5基、土坑13基、炉跡4基、焼土遺構2基、掘立柱建物跡1棟、陥し穴1基、掘削廃土場1カ所などである。分布の状況は、尾根頂部と両側斜面肩口部分に集中しており、緑17区へと繋がる東側急斜面の中腹にも数基存在する。また洞部斜面上にも多くの遺構が立地しており、斜面上方から中腹にかけては鉄生産関連炉を伴った竪穴住居跡が集中している。

(小林)

S I 65竪穴住居跡、S X W68鉄生産関連炉跡

(第207・208図、遺物図版39・72・73・102・103・127、写真図版156・236・258・259・265・288・289・307・321・322)

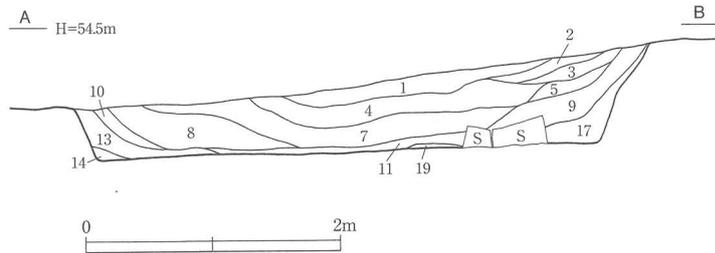
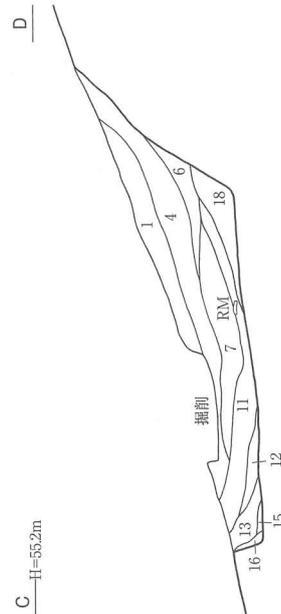
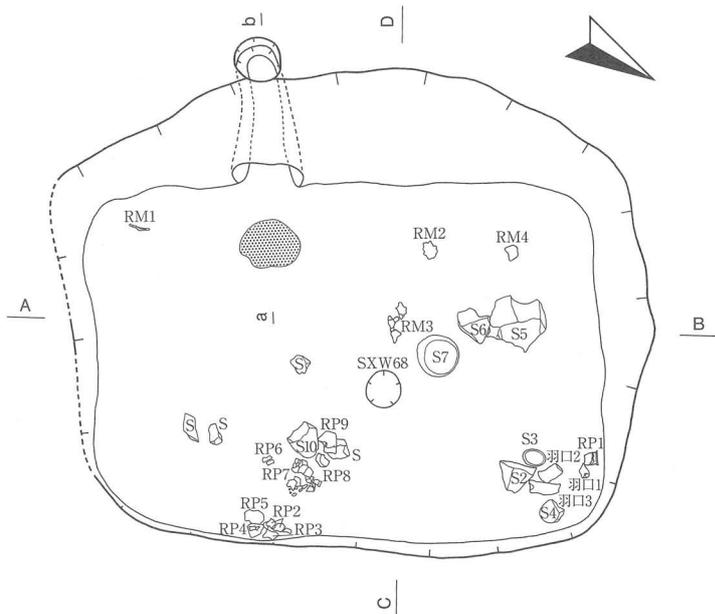
H区赤27(D)区洞部の斜面上方、ⅧC-15j・15k・16j・16kグリッドに位置し、検出面はIV層である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長辺約4.5m、短辺約3.3mである。主軸方位はW-36°-Sで、床面積は11.0㎡である。壁は鋭角的に立ち上がるが、斜面上方西・北壁の上半部は崩落によりかなり外反する。壁高は山側西壁で約85cm、北壁で約70cm、南壁で約40cm、東壁で約25cmと斜面下方の東方向に進むに従い減少する。埋土は19層に細分されるが、上位に褐色土、中位に黒褐色土、壁際に明黄褐色土、下位に褐色土と大別できる自然堆積である。床面は西側は概ね平坦であるが、それ以外はVI層の岩質のため凹凸がある。

カマドは山側の西壁のやや南寄りに付設されている。遺存状態は不良で、燃焼部のみ確認できる。燃焼部も岩質のため凹凸が著しく、径約40～45cmの歪な円状ににぶい橙色焼土が広がる。煙道部は刳り貫き式で、長さ約110cm、径約40cmで、先端に向かって下り勾配である。煙出部は径約25～30cm、深さ約140cmで、垂直に掘り込まれている。

本遺構床面において、鉄生産に関わる遺物が多数出土し、また遺構中央から鍛造剥片が検出されたことから、鉄生産関連施設の存在を想定して精査を進めた。その結果、遺構のほぼ中央に残存する鉄砧石(S7)とその東側にS X W68が確認された。

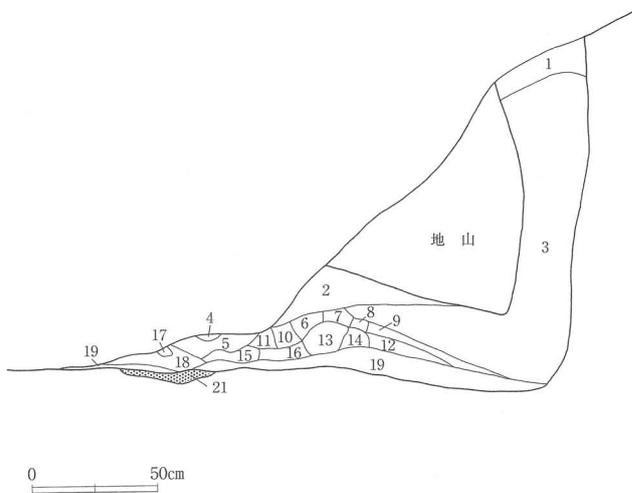
S X W68の平面形は円形を呈し、規模は径約30cmである。断面形は皿状を呈し、深さは約10cmを測る。

SI65



SI65 カマド

a H=55.0m



SI65

1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
2. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性やや有
3. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有、明黄褐色ブロック少量
4. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有、焼土粒・炭化物少量
5. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有
6. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性有
7. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有、炭化物微量
8. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性有、炭化物微量
9. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有
10. 10YR3/3 (暗褐) しまり欠、粘性有
11. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有
12. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性有、炭化物微量
13. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり欠、粘性有
14. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、炭化物微量
15. 10YR7/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性無
16. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性極めて有
17. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性極めて有
18. 10YR6/8 (明黄褐) しまり・粘性極めて有
19. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性有、焼土粒微量

SI65 カマド

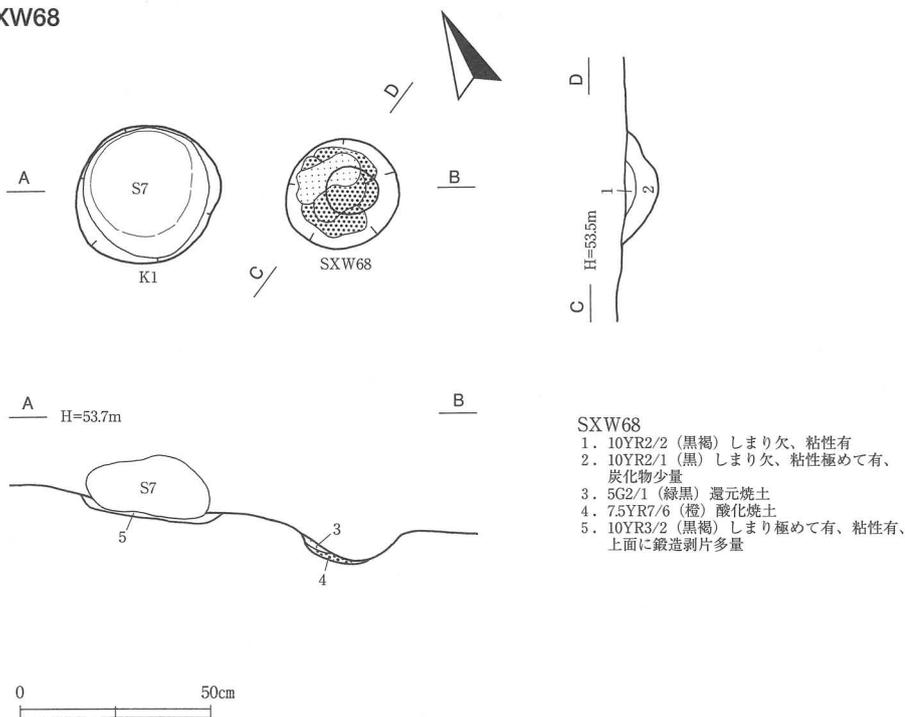
1. 10YR3/3 (暗褐) しまり欠、粘性有
2. 2.5YR6/6 (明黄褐) しまり欠、粘性無、種道部天井崩落土
3. 10YR5/8 (黄褐) しまり欠、粘性有
4. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有
5. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性極めて有、天井構築土
6. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有
7. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性欠
8. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性極めて有
9. 2.5Y5/6 (黄褐) しまり欠、粘性無
10. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性極めて有、天井構築土
11. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまり欠、粘性無
12. 7.5YR5/6 (明褐) しまり欠、粘性欠、炭化物微量
13. 7.5YR5/6 (明褐) しまり欠、粘性欠
14. 5YR4/8 (明褐) しまり極めて有、粘性有、焼土塊
15. 10YR3/3 (暗褐) しまり欠、粘性極めて有
16. 10YR5/8 (黄褐) しまり欠、粘性極めて有
17. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性極めて有
18. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性有、焼土粒微量
19. 10YR2/3 (黒褐) しまり欠、粘性やや有、焼土粒・炭化物少量
20. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性有
21. 5YR7/4 (にぶい橙) 燃焼部焼土

第207図 SI65竪穴住居跡・SXW68鉄生産関連炉跡(1)

埋土は黒褐色土と黒色土に分別される。底面は非常に堅く締まり、中央に赤褐・橙色の酸化焼土、北側に青灰色の還元焼土が広がっている。その西側には径約40cmの鉄砧石が遺存しており、その直下にはこれを設置するための掘り方が確認できる。掘り方の平面形は円形で、規模は径約40cmである。断面形は皿状を呈し、深さは約3～5cm程である。この埋土上面において鍛造剥片が確認でき、また遺存する鉄砧石の表裏両面の中央に敲打痕及び被熱痕跡が認められることから、幾度もこれを使用したことが窺える。また、床面の凹凸が著しいため確認はできなかったが、S X W68の還元部の位置から、炉の北側に羽口が取り付けいたと推測される。以上により、本遺構は鍛錬鍛冶炉を伴う竪穴住居跡であると判断される。

遺物は、土器は土師器の甕形土器が大半で約20点出土した。主なものとして、床面出土のRP 1の(461)、同じくRP 3・4・5・6・7・8・13が接合した(461)、埋土中出土の(462・463)などがある。また石製品として、床面より前述の鉄砧石(S 7)が1点(190)、要石(S 4・5)が2点(188・189)、敲・磨石(S 3)が1点(187)が出土している。この他、羽口が埋土下位より1点(148)、北東部床面(羽口1・2・3)から3点(146・147・149)、刀子が南西部床面(RM 1)と検出面からそれぞれ1点(171・172)、鉄滓が埋土中及び炉内から中量と鍛造剥片が炉内及び周辺から少量出土している。

SXW68



第208図 SI65竪穴住居跡・SXW68鉄生産関連炉跡(2)

S I 66 竪穴住居跡 (第209図、遺物図版39・103、写真図版157・236・289)

H区赤27(D)区洞部の斜面中腹、ⅧC-17i・17j・18i・18jグリッドに位置し、検出面はⅣ層である。本遺構は急斜面に位置するため、斜面上方には崩落部が広がり、斜面下方の東側は遺存しない。遺存部より平面形は隅丸方形を呈すると思われ、規模は西壁より一辺約3.8m前後が推測される。主軸方位はS-70°-Wで、床面積は9.3㎡である。壁はほぼ直角に立ち上がり、上半部は崩落により外傾する。壁高は斜面上方の西壁で最大の約115cmを測るが、その他の壁は東方向に進むに従い減少する。埋土は12層に細分され、黒褐～暗褐色土を基本とする斜面上方から流入した自然堆積である。床面はほぼ平坦で堅く締まり、貼床が中央部を横断するように施されている。床面施設として、遺構南西隅に土坑K1が張り出して構築されている。平面形・規模は約80×60cmの楕円形を呈する。床面からの深さは約5cmを測り、西側の断面形は袋状となる。カマド近くに位置することから、貯蔵施設であった可能性が考えられる。また、遺構北東側には地床炉が確認された。にぶい橙色を帯び、約30×20cmの楕円状に広がっているが、厚さは数mm程度の微弱な被熱範囲であった。

カマドは西壁のやや南寄りに付設されており、検出時の状況は自然石が数個散在していた。精査の結果、袖部の芯材として自然石2個が立位の状態で遺存していることから、それらも同様に用いられたものと思われる。燃焼部は明確な窪みはなく、径約40cm、厚さ約5～6cmのにぶい赤褐色焼土が広がる。その西方向には羽口が立位の状態で遺存しており、支脚として使用された可能性が高いが、燃焼部との位置関係から原位置は留めていないものと思われる。煙道部は刳り貫き式で、奥行約110cm、径約35cmで、上り勾配で先端へと向かう。煙出部は径約35cm、深さ約110cmで垂直に掘り込まれている。

遺物は、土師器の甕形土器片が約10点出土し、その内、埋土出土の破片とS I 68埋土上位出土の破片が接合した(465)、埋土下位出土の(464)などがある。その他、埋土中から磨石1点(191)、カマドから前述の羽口が1点(150)と埋土下位から破片が数点、鉄滓が埋土中及び床面から少量出土した。

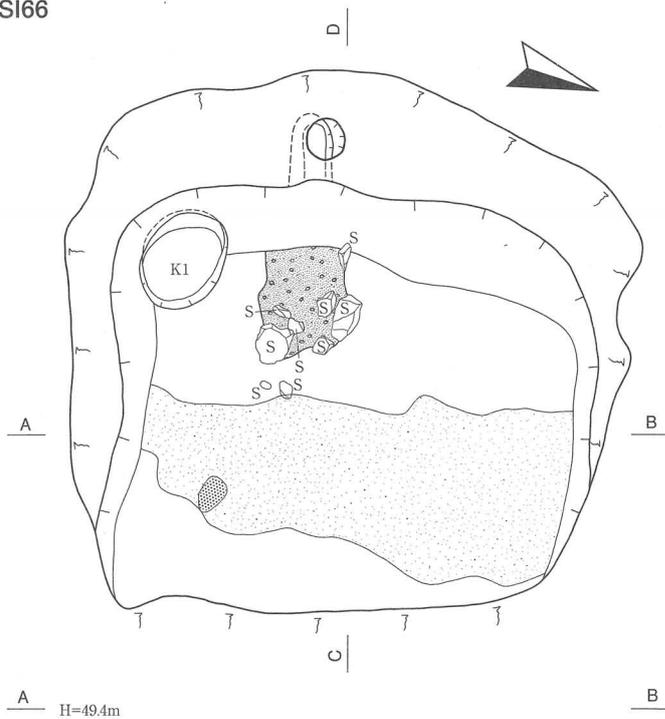
S I 67 竪穴住居跡、S X W37 鉄生産関連炉跡

(第210図、遺物図版39・74・128、写真図版158・236・259・265・307・322)

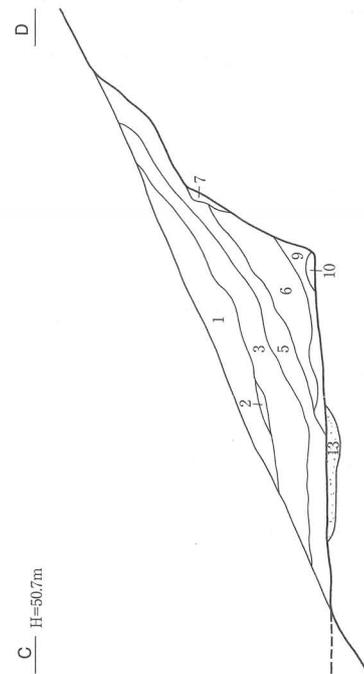
H区赤27(D)区洞部から南東側の張り出し部、ⅧC-17m・18mグリッドに位置し、検出面はⅥ層である。検出時の状況はにぶい黄色～オリーブ褐色土の不整形なプランであった。精査過程で斜面下方側の東壁が崩落により遺存しないため、歪なプランを成していたことが判明したが、そのため当初設定した断面ベルトは正軸に掛かっておらず、空断面でこれを補った。遺存する貼床範囲から、平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺約4.2mと推測される。主軸方位はN-15°-Eで、床面積は11.1㎡以上が推測される。遺存する壁は三方とも鋭角的に立ち上がり、壁高は山側の西壁で約90cmを測り、その他は東方向に進むに従い減少する。埋土は14層に細分されるが、各層位の状況から人為的に埋め戻されたものと判断される。床面はほぼ平坦で堅く締まり、貼床が東側に施されている。床面施設として、南西・南東側において径約30cmの柱穴を検出した。また、西側において土坑K1が確認された。K1は径約50cmの円形を呈す。断面形は椀形で、深さは約10cmである。埋土中には鉄滓が混入しており、この西側に位置するS X W37に関連して廃棄されたものと思われる。

カマドは北壁のほぼ中央に付設されている。本体部のほとんどは遺存せず、燃焼部焼土のみ確認できる。燃焼部焼土は橙色を帯び、径約30cmの円形に広がるが、厚さは1cmにも満たない。煙道部は刳り貫き式で、奥行約90cm、径約30cmで先端に向かって下り勾配である。煙出部は径約30cm、深さ約55cmで垂直に掘り込まれている。

SI66



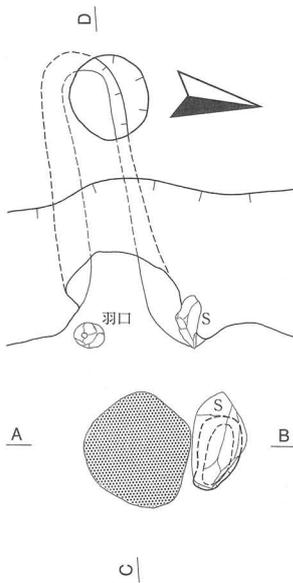
A H=49.4m



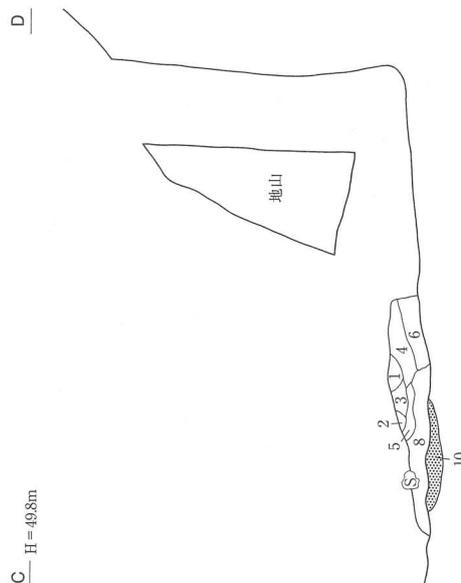
C H=50.7m



SI66 カマド



A H=48.7m



C H=49.8m



SI66

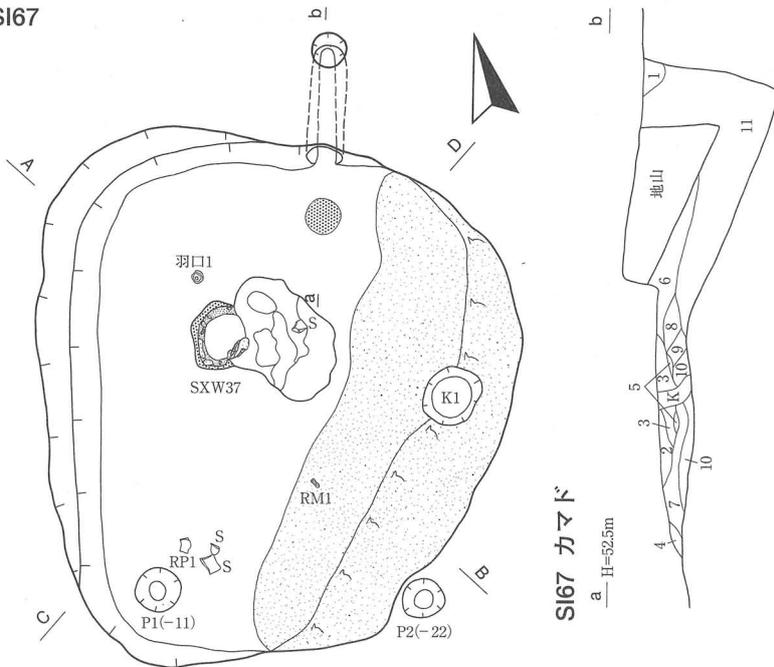
1. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性有、炭化物微量
2. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有、炭化物中量
3. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性有
4. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有
5. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性有
6. 10YR4/4 (褐) しまり欠、粘性極めて有
7. 10YR5/8 (黄褐) しまり欠、粘性有
8. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり欠、粘性極めて有
9. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性極めて有
10. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性極めて有
11. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有
12. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性極めて有
13. 10YR7/6 (明黄褐) しまり・粘性やや有、貼床

SI66 カマド

1. 10YR7/6 (明黄褐) しまり・粘性極めて有
2. 10YR8/6 (黄橙) しまり・粘性極めて有
3. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有、焼土粒少量
4. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性極めて有
5. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性有
6. 7.5YR4/4 (褐) しまり・粘性有、炭化物中量
7. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性やや有
8. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有、焼土粒・炭化物少量
9. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有、芯材の掘り込み
10. 5YR4/4 (にぶい赤褐) 燃焼部焼土

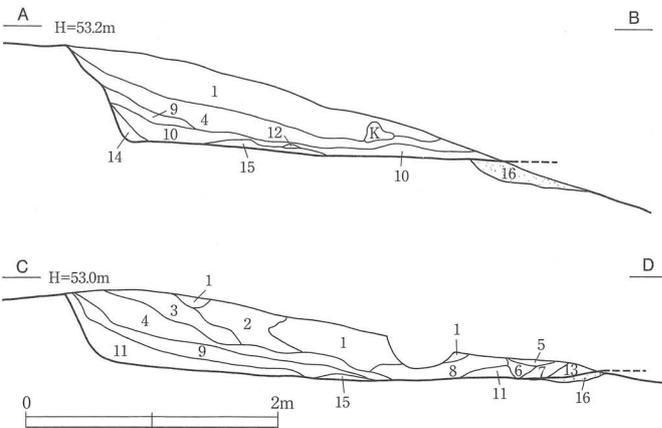
第209図 SI66竪穴住居跡

SI67



SI67 カマド

1. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり極めて有、粘性無
2. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性無
3. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性有、天井部崩落土
4. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性有、崩落構築土
5. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり欠、粘性やや有
6. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり欠、粘性やや有
7. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性極めて有
8. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性有、焼土粒微量
9. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有
10. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性やや有、焼土粒微量
11. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性やや有、焼土粒・炭化物中量



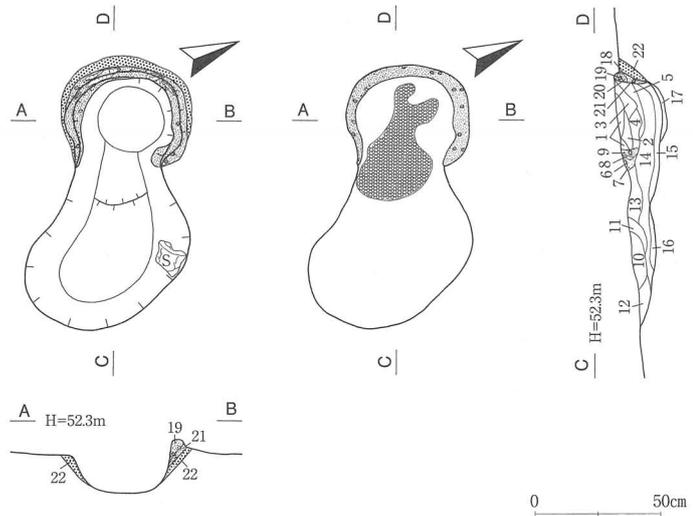
SI67

1. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性無
2. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり有、粘性やや有
3. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有
4. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり有、粘性やや有
5. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり有、粘性無、
6. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり欠、粘性無
7. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり欠、粘性やや有
8. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり有、粘性やや有、焼土粒・炭化物少量
9. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり有、粘性無
10. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり有、粘性無、焼土粒・炭化物・小鉄塊少量
11. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり有、粘性無、上位に黒褐色土混入
12. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性無
13. 2.5Y4/6 (オリーブ褐) しまり有、粘性やや有
14. 2.5Y7/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性無
15. 10YR5/8 (黄褐) しまり極めて有、粘性有、SXW37崩落構築土
16. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性欠、貼床

SXW37

SXW37

1. 7.5YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性有、構築土ブロック
2. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり有、粘性無
3. 2.5Y3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有
4. 7.5YR6/8 (橙) しまり有、粘性無、倒壊した炉壁
5. 7.5YR6/8 (橙) しまり有、粘性無、倒壊した炉壁
6. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性有、炉壁ブロック
7. 5Y2/2 (オリーブ黒) しまり極めて有、粘性無、炉壁ブロック
8. 5Y6/4 (オリーブ黄) しまり極めて有、粘性無、炉壁ブロック
9. 7.5YR5/8 (明褐) しまり極めて有、粘性無、炉壁ブロック
10. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性有、焼土ブロック中量
11. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり欠、粘性無
12. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性欠
13. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性極めて有
14. 2.5Y3/1 (黒褐) しまり有、粘性無、小鉄滓多量
15. 2.5Y2/1 (黒) しまり有、粘性やや有、小鉄滓多量
16. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性極めて有、焼土粒・炭化物少量
17. 10YR2/1 (黒) しまり・粘性有、還元焼土
18. 5Y6/4 (オリーブ黄) 炉壁 (還元)
19. 7.5YR5/8 (明褐) 炉壁 (酸化)
20. 5Y6/4 (オリーブ黄) 炉壁 (還元)
21. 2.5Y8/3 (淡黄) 炉壁 (酸化)
22. 5YR5/6 (明赤褐) 被熱部分



第210図 SI67竪穴住居跡・SXW37鉄生産関連炉跡

S X W37は住居中央からやや北側に位置する。検出時の状況において、周辺から小鍛冶滓と褐色構築土ブロックが多量に出土し、また床面にリング状に広がる炉壁と連結して、東方に楕円形をした褐色土プランを検出した。よって鉄生産関連炉とその附属施設を想定して精査を進めた。結果、S X W37とその掻き出し場に当たる前庭部であると判断した。規模・平面形はS X W37は径約45cmの円形、前庭部は約70×45～60cmの略楕円形を呈する。S X W37に遺存する炉壁は馬蹄形を呈し、前庭部と通じる湯口部分で開口している。壁は炉壁が遺存する部分ではほぼ直角に立ち上がり、深さは約15～20cmである。前庭部は皿状を呈し、深さは約10cmである。埋土は全体で16層に細分される。S X W37側の上位層は炉壁を構築していた褐色土ブロック及び自然流入した黒褐色土系である。4・5層は西側を構成していた炉壁が倒壊して流入したものである。6～9層は湯口部分と思われ、埋没過程でこれの上部に構築されていた炉壁が真下に崩落したものと考えられる。前庭部の上位に堆積する10～13層は人為堆積の褐～黄褐色土である。その下層の14・15層は、炉から前庭部へと続く一連の黒～黒褐色土層で小鍛冶滓を多量に含むことから、操業当時に堆積した不純物が残存した層と考えられる。17層は締まりのある黒色土であることから弱い還元化層と考えられ、17層上面を以て底面と捉えることができる。炉の形態及び出土した鉄滓の分析結果から、本遺構は精錬鍛冶炉である可能性が高い。

遺物は、土器は土師器の甕形土器片8点、須恵器の甕形土器片2点、羽口は破片7点出土した。主なものとして、須恵器は床面出土の甕形土器片のRP1(466)、羽口はS X W37周辺の崩落構築土上出土の羽口1(151)及びS X W37埋土出土の1点(152)などがある。その他、磨石が床面より1点、鉄廷状鉄製品RM1が床面より1点(118)、釘状鉄製品が埋土中より1点、S X W37及び周辺より鍛冶滓が多量出土した。

S I 68 竪穴住居跡 (第211図、遺物図版102、写真図版159・288)

H区赤27(C)区南部の尾根頂部、ⅧC-16f・17e・17fグリッドに跨って位置する。検出面はⅥ層である。本遺構の谷側北西壁は尾根の落ち際にかかるため、崩落により一部壁は立たない。また、遺構南東側は平成10年度調査時の北東-南西方向に延びる試掘トレンチにより一部削平されている。平面形は隅丸略方形を呈し、規模は南東・南西及び遺存部から計測される北西壁長で約3.2m、北東壁長で約2.6mを測る。主軸方位はE-33°-Sで、床面積は10.8㎡である。壁は北西壁以外は鋭角的に立ち上がり、壁高は南東壁で約45cm、南西壁で推定40cm、北東壁で約30cmを測る。埋土は9層に細分されるが、上位の黒褐色土を除いてⅥ層マサ土起源の土、若しくはマサ土の混入した土であり、層位の状況から自然堆積と思われる。床面はほぼ平坦で、貼床が谷側の北西部分と南隅に施されている。

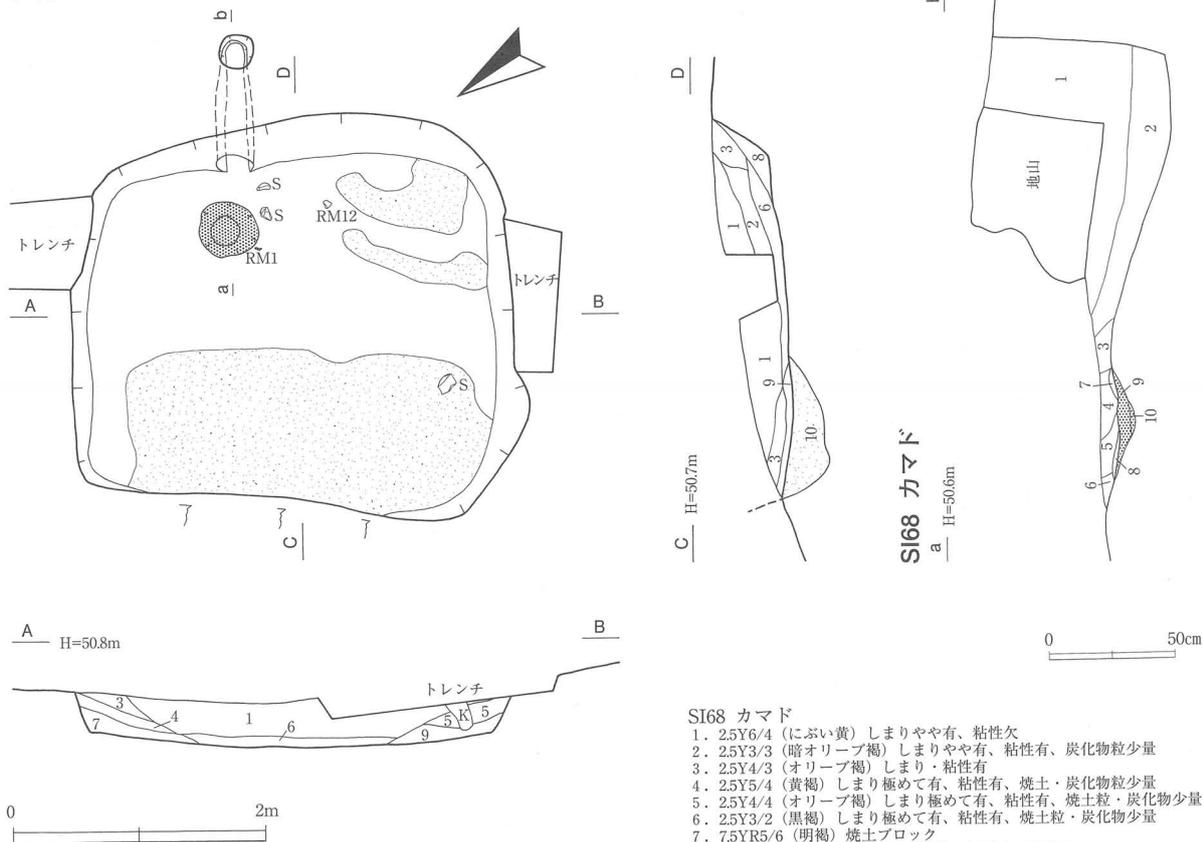
カマドは南東壁の中央からやや北寄りに付設されている。本体部のほとんどが遺存せず、燃焼部のみ確認できた。燃焼部は径約45cmの円形で皿状の窪みを有し、厚さ6cm前後の明赤褐色焼土が全体に広がる。煙道は削り貫き式で、奥行約105cm、径約25～30cmを測る。先端に向かい下り勾配である。煙出は径約30cm、深さ約70cmで垂直に掘り込まれている。

遺物は、土師器の甕形土器片1点が埋土から、床面より砥石(S1)1点(181)、不明鉄製品2点、鉄塊系遺物(RM2)1点、鉄滓が埋土中及び貼床内より微量出土している。

S I 79 竪穴住居跡 (第212図、遺物図版72、写真図版159・258)

H区赤27(C)区中央の尾根頂部、ⅧC-17e・17f・18e・18fグリッドに位置し、検出面はⅤ・Ⅵ層である。平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺約3.5mを測る。主軸方位はN-25°-E、床面積は9.5㎡である。壁は鋭角的に立ち上がり、一部において上半部が崩落により外傾する。壁高は約40～50cmを測る。埋土は15層に細分されるが、全体的にⅥ層起源の土で占められ、その層位状況から人為的に埋め戻された

SI68



SI68

1. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有
2. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性有
3. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり有、粘性やや有
4. 10YR6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性欠
5. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性欠
6. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性欠
7. 2.5Y7/6 (明黄褐) しまり有、粘性欠
8. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性欠
9. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性欠
10. 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまり有、粘性欠、貼床

SI68 カマド

1. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまりやや有、粘性欠
2. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまりやや有、粘性有、炭化物粒少量
3. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性有
4. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり極めて有、粘性有、焼土・炭化物粒少量
5. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり極めて有、粘性有、焼土粒・炭化物少量
6. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり極めて有、粘性有、焼土粒・炭化物少量
7. 7.5YR5/6 (明褐) 焼土ブロック
8. 7.5YR7/6 (橙) しまり有、粘性無、天井内壁崩落土
9. 5YR5/8 (明赤褐) 燃焼部焼土
10. 5YR6/6 (橙) 燃焼部焼土

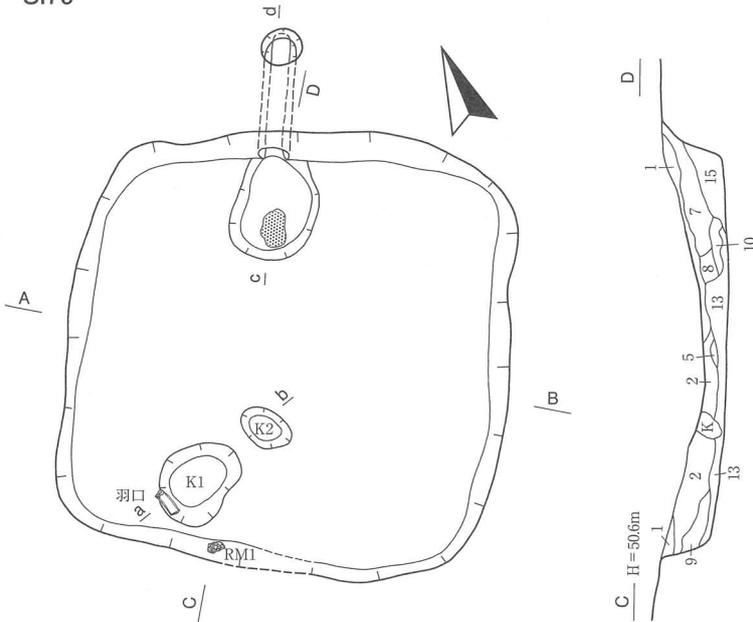
第211図 SI68竪穴住居跡

判断できる。床面はほぼ平坦で、堅く締まる。床面施設として遺構南側にK1・K2が検出された。検出時の状況は暗褐色土のプランが広がり、K1南西側には羽口が確認できた。K1は約70×50cmの歪な楕円形を呈するが、深さが僅か2cm程であるため、住居本来の窪みの可能性も考えられる。K2は約50×30cmの楕円形を呈し、深さは約5cmを測る。

カマドは北壁のやや西寄りに付設されている。遺存状態は不良で、燃焼部は浅く掘り窪められ、この南側に燃焼部焼土が約30×20cmで歪に広がる。微弱な焼成で、厚さは1cmにも満たない。煙道部は削り貫き式で、長さ約100cm、径約25cmで、先端に向かってやや下り勾配である。煙出部は径約30cm、深さ約65cmで、垂直に掘り込まれている。

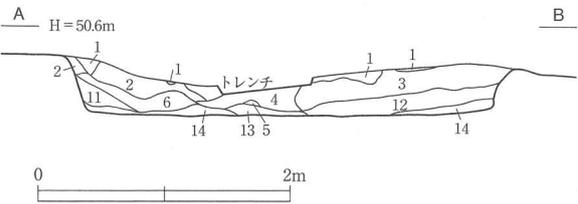
出土した遺物は、土師器は甕形土器片3点と坏形土器片1点と少量であった。その他、前述の羽口が1点(144)、鉄製品として埋土下位より釣針が1点(166)、南壁際の埋土下位から鍛冶滓(RM1)が1点と床面及びK1・2埋土中から鉄滓が少量と廃棄されたとされる鍛造剥片が微量出土した。

SI79

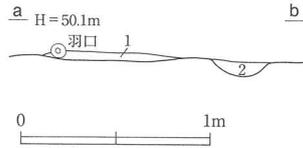


SI79

1. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性有
2. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり・粘性欠
3. 10YR7/6 (明黄褐) しまり・粘性欠
4. 2.5Y7/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有、黒褐色土混入
5. 10YR8/8 (黄橙) しまり有、粘性欠
6. 2.5Y7/6 (明黄褐) しまり・粘性やや有
7. 10YR8/8 (黄橙) しまり極めて有、粘性欠
8. 2.5Y4/6 (オリーブ褐) しまり有、粘性やや有
9. 2.5Y8/6 (黄) しまり極めて有、粘性無
10. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり有、粘性やや有
11. 10YR8/8 (黄橙) しまり有、粘性欠
12. 10YR8/6 (黄橙) しまり・粘性欠
13. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性有、炭化物粒少量
14. 10YR7/6 (明黄褐) しまり・粘性有、黄褐色土少量
15. 10YR8/6 (黄橙) しまり有、粘性欠、マサ土



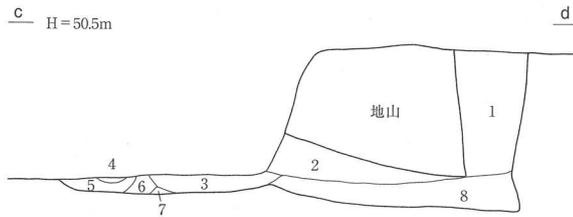
SI79 K1・2



SI79 K1・2

1. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有
2. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性やや有

SI79 カマド



SI79 カマド

1. 10YR7/6 (明黄褐) しまり有、粘性欠
2. 10YR8/6 (黄橙) しまり有、粘性欠
3. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有、焼土粒少量
4. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性有
5. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり・粘性有、炭化物微量
6. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまりやや有、粘性有、炭化物少量
7. 10YR8/8 (黄橙) しまり極めて有、粘性有
8. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性やや有
9. 7.5YR6/6 (橙) 燃焼部焼土

第212図 SI79竪穴住居跡

S I 80 竪穴住居跡 (第213図、遺物図版38・72・102・127、写真図版160・236・258・288・307)

H区赤27(C)区北側の尾根頂部、ⅧC-18d・18eグリッドに位置し、検出面はⅣ及びⅥ層である。平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺約3.3mを測る。主軸方位はN-25°-E、床面積は8.8㎡である。壁は鋭角的に立ち上がり、壁高は北西・南東壁で30cm前後、山側の南西壁で約60cm、谷側の北東壁で約20cmである。埋土は12層に細分されるが、ほとんどの層がⅣ～Ⅵ層起源の土で、その層位の状況から人為的に埋め戻されたものと思われる。床面は平坦で堅く締まる。

カマドは北東壁の中央に付設されているが、遺存状態は悪い。検出時の状況は、数個の自然石と土器が散在していた。それら自然石は袖部の芯材として使用されていたと思われ、右袖部の芯材は立った状態で残存していた。芯材を設置する際の掘り込みは無く、断面の状況から芯材裾の外側に微量の黄褐色の構築土が確認できる。燃烧部は平坦で、径約45cm、厚さ6cm前後の円形の明赤褐色焼土が広がる。また燃烧部焼土北側には、土師器の甕形土器が残存しており、その状況から支脚として用いられた可能性が高い。煙道部は斜面の落ち際にあるため一部しか遺存せず、また煙出部は遺存しないため、詳細は不明である。残存する煙道部の長さは約65cmで、やや下り勾配で先端に向かっていと推測される。

遺物は、土器が中袋で1袋程出土しており、そのほとんどが土師器である。甕形土器として、カマドRP1とRP6の一片が接合した(453)、カマド出土の(454)、坏形土器として、カマドRP2とRP1・RP6の一片が接合した9(455)、床面出土の(456・457)などがある。この他、羽口が1点(145)、砥石が2点(182・183)、磨石が1点(184)床面から、鉄鐸が床面(167)・埋土下位(168)・カマド(169)から、鉄滓が埋土中から微量出土している。

S I 81 竪穴住居跡 (第214図、遺物図版38・102、写真図版161・236・288)

H区赤27(C)区北部の尾根頂部から東側斜面にかけての肩口、ⅧC-19c・19dグリッドに位置し、検出面はⅣ及びⅥ層である。平面形は略隅丸長方形を呈し、規模は長辺約4.2m、短辺約3mを測る。主軸方位はN-11°-Wで、床面積は8.2㎡である。壁はほぼ直角に立ち上がり、山側では上半部は崩落により外傾する。壁高は山側の西壁で約130cm、北・南壁で約60~70cm、谷側の東壁で約20cmを測る。埋土は12層に細分されるが、そのほとんどが褐~黄褐色土系で、また中位から下位にかけて数十個の自然石が投げ込まれており、人為的に埋め戻されている。床面は平坦で堅く締まり、貼床が谷側を中心に施されている。床面施設として、東壁際の中央に土坑K1が検出された。平面形は楕円形を呈し、開口部約65×45cm、底部約50×30cmを測る。断面形は鍋形を呈し、深さは約20cmである。また、遺構西壁中央付近において、径約25cm、深さ約15cmの柱穴と思われるピットが1基確認された。

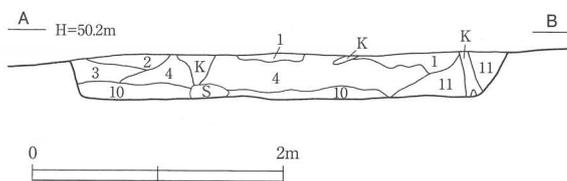
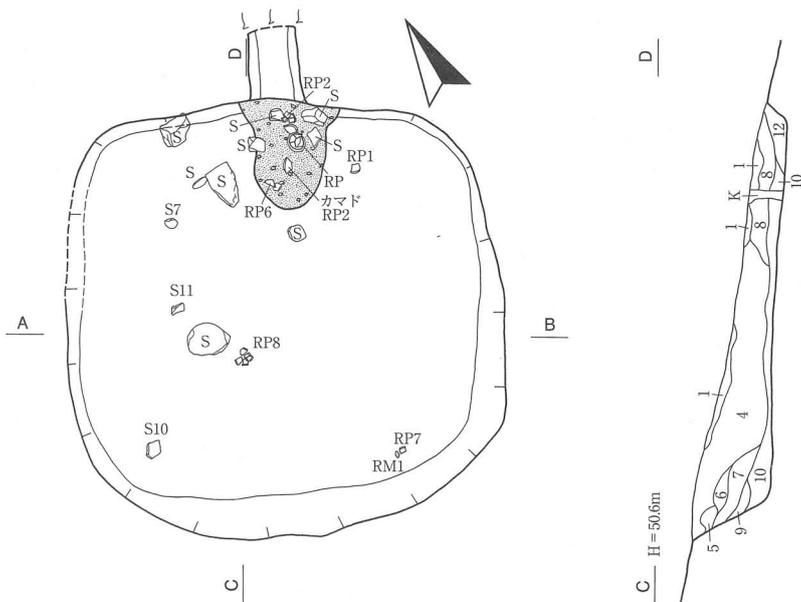
カマドは北壁のやや西寄りに付設されている。精査過程において、調査員の認識不足によりカマドの大半を損壊させてしまったため、検出時の状況及び断面観察による結果をもとに以下記述する。天井部は確認できないが、袖部は褐色粘土で構築されている。燃烧部はほぼ平坦で、径推定25cm、厚さ約3~4cmの赤褐色焼土が広がる。煙道部は奥行約100cm、径約20~30cmで、先端に向かって下り勾配である。煙出部は径約30cm、深さ約100cmで、垂直に掘り込まれている。

遺物は、土師器は甕形・坏形土器片合わせて数点しか出土しておらず、その内、煙出部埋土中から出土の坏形土器片が接合(458)した。その他、砥石がK1埋土から1点(185)出土した。

S I 82 竪穴住居跡 (第215図、遺物図版38・102・127、写真図版162・236・288・307)

H区赤27(C)区北部の尾根頂部、ⅧC-18c・18dグリッドに位置し、検出面はⅣ層である。平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺約3.7m前後を測る。主軸方位はS-26°-Wで、床面積は11.7㎡である。壁は鋭

SI80



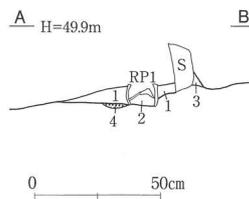
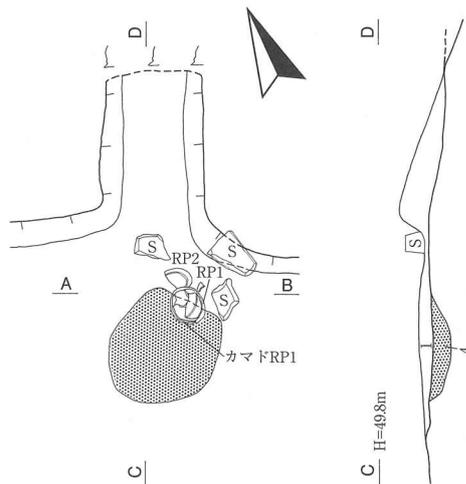
SI80 カマド

SI80

1. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性有
2. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまり有、粘性欠、炭化物微量
3. 2.5Y5/6 (黄褐) しまり有、粘性欠
4. 2.5Y8/6 (黄) しまりやや有、粘性欠
5. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり欠、粘性無
6. 10YR6/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性欠
7. 10YR7/6 (明黄褐) しまり欠、粘性やや有
8. 10YR5/8 (黄褐) しまり欠、粘性有
9. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり欠、粘性無
10. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有
11. 10YR7/8 (黄橙) しまり極めて有、粘性無
12. 10YR8/8 (黄橙) しまり極めて有、粘性欠

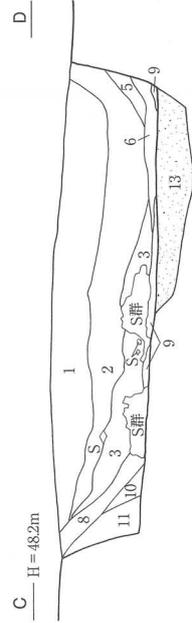
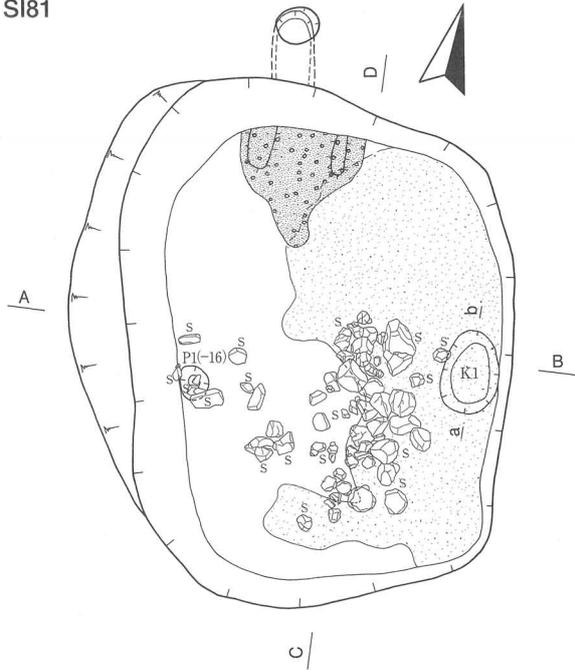
SI180 カマド

1. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性有、焼土粒微量
2. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性やや有
3. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有、袖構築土
4. 5YR5/8 (明赤褐) 燃焼部焼土



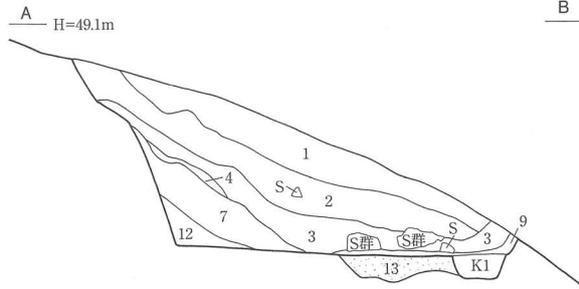
第213図 SI80竪穴住居跡

SI81

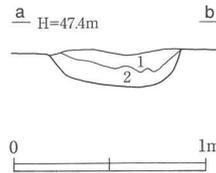


SI81

1. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性やや有
2. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性無、黄褐色土・炭化物少量
3. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有、黄褐色土ブロック・礫少量
4. 10YR5/8 (黄褐) しまり有、粘性やや有
5. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性やや有、明黄褐色土ブロック混入
6. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性やや有、黄褐色土混入
7. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性有、炭化物少量
8. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有、炭化物少量
9. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有
10. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性やや有、炭化物少量
11. 10YR6/8 (明黄褐) しまり有、粘性有、炭化物少量
12. 10YR5/8 (黄褐) しまり欠、粘性やや有
13. 10YR6/8 (明黄褐) しまり・粘性有、貼床



SI81 K1



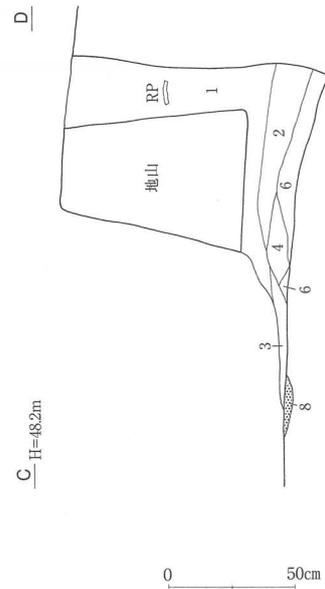
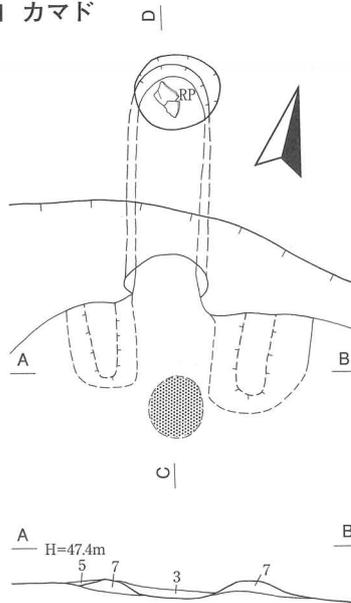
SI81 K1

1. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有
2. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性有

SI81 カマド

1. 10YR6/8 (明黄褐) しまりやや有、粘性有
2. 10YR5/6 (黄褐) しまり欠、粘性無、煙道部天井崩落土
3. 10YR6/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性有
4. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有
5. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、焼土粒・炭化物少量
6. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有
7. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性有、袖部構築土
8. 2.5YR4/8 (赤褐) 燃焼部焼土

SI81 カマド

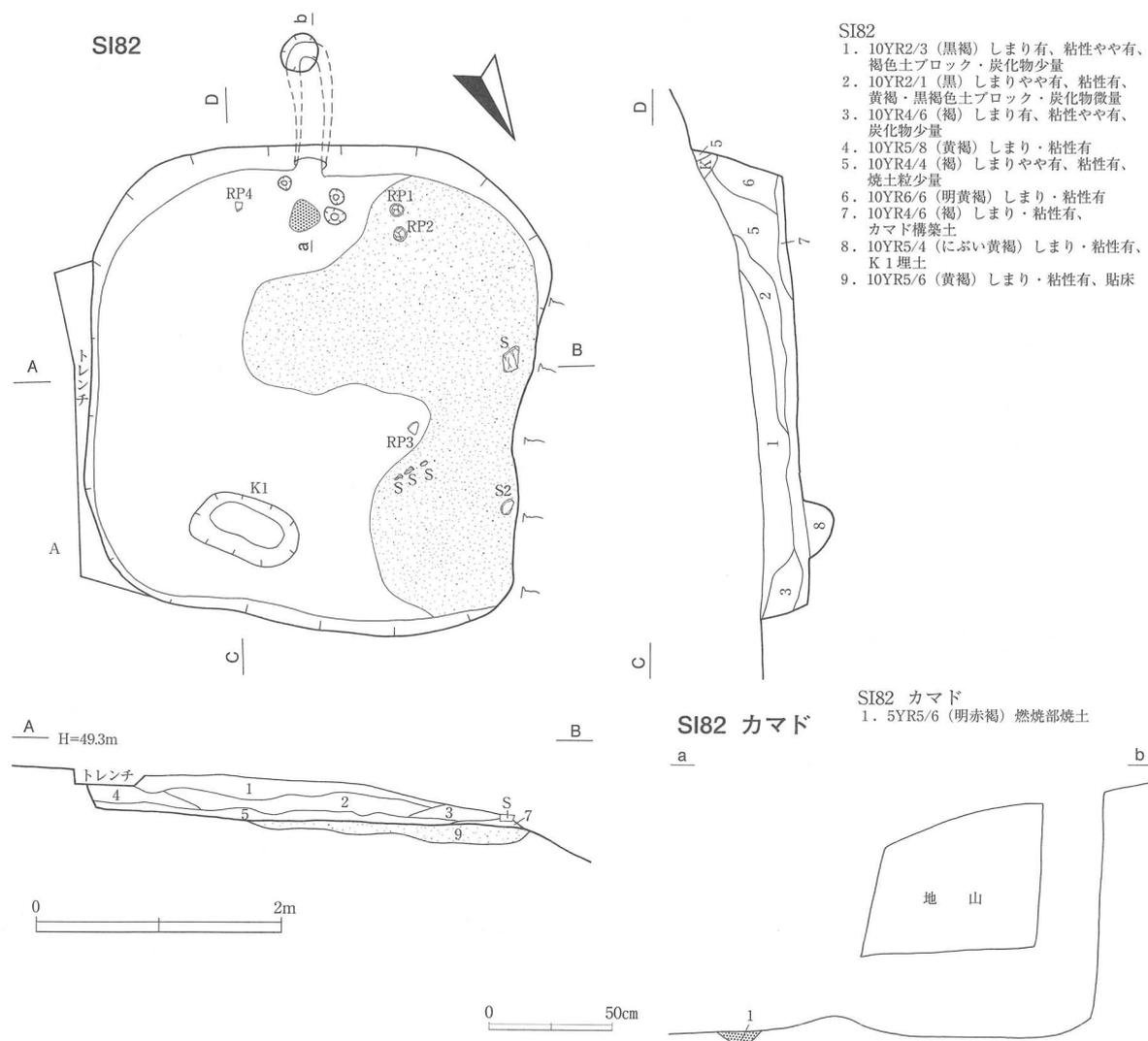


第214図 SI81竪穴住居跡

角的に立ち上がるが、北西壁は斜面の落ち際にかかるため、その一部は遺存しない。壁高は山側で最大の70cmを測るが、その他は北西方向に進むに従い減少する。埋土は7層に細分され、上位の黒褐色土系は自然堆積、下位の黄褐～明黄褐色土系は人為堆積と思われる。床面はほぼ平坦で堅く締まり、貼床が北西側を中心に施されている。床面施設として北東側に土坑K1が確認できる。検出時当初は貼床の一部と捉えたが、精査の結果、規模・形態から土坑と判断した。K1は約90×50cmの楕円形を呈し、深さは約20cmを測る。

カマドは南西壁のほぼ中央に付設されている。残存状態は不良で、天井・袖部等の痕跡はなく、燃烧部のみ確認できる。燃烧部は平坦で、約25×20cmの明赤褐色焼土が不整に広がる。その周囲には径約10～15cmの円形のピットが3基確認され、その位置関係から袖部芯材の抜き取り痕と思われる。煙道部は刳り貫き式で、長さ約110cm、径約30cmを測り、やや下り勾配で先端へと向かう。煙出部は径約30cm、深さ約100cmで垂直に掘り込まれている。

遺物は、土師器の甕形土器片と坏形土器片が合わせて約20点程出土し、主なものとして床面出土のRP3の459などがある。この他、磨石が床面出土のS2(186)と埋土中から1点、羽口の破片が埋土中より1片、板状鉄製品が埋土中から1点と釘が埋土上位より1点(170)、鉄塊系遺物が埋土中位より1点、鉄滓が床面より1点出土した。



第215図 SI82竪穴住居跡

S I 87A・B 竪穴住居跡（第216図、遺物図版36・101・127、写真図版163・234・287・307）

H区赤27(B)区南側の尾根頂部、ⅧB-19t、ⅧC-18a・19aグリッドに位置し、検出面はⅣ及びⅥ層である。検出時の状況から、本遺構は単独の1棟と考え精査を開始したが、掘り上がりの形が歪な五角形を呈しており、その部分の断面を観察したところ、床面のレベルをほぼ同じくする2棟の竪穴住居の重複関係が確認できた。これにより、新しい方をS I 87A、旧い方をS I 87Bとした。本遺構南西壁にはカマドが2基残存しており、その残存状態から、比較的良好なカマドをS I 87Aに、不良なカマドをS I 87Bに伴うものと判断した。これらの煙道・煙出部はS X I 76と重複しており、それにより、S I 87A・B、S X I 76の3基の遺構についての新旧関係が明らかになった。S I 87AはS X I 76検出時に煙出部のプランが確認できたため、S X I 76埋没後に構築されたものと思われる。一方、S I 87BはS X I 76検出時には煙出部のプランは確認できず、精査後の床面において煙出部のプランを確認できたことから、煙道上半部を壊してS X I 76が構築されたものと思われる。よって、これら3遺構の新旧関係は(新)S I 87A→S X I 76→S I 87B(旧)となる。また、本遺構は平成10年度試掘調査時のトレンチと、その後の年数経過に伴う崩落が著しかったため、遺構中央部埋土の大半の詳細が不明となった。

S I 87Aについて、平面形は略隅丸長方形を呈し、規模は長辺約4.6m、短辺約4.2mを測る。主軸方位はS-48°-Wで、床面積は18.4㎡である。壁は北西壁においてのみ緩やかに立ち上がるが、その他は鋭角的に立ち上がり、壁高は約25~55cmを測る。埋土は16層に細分されるが、各層位の状況から人為的に埋め戻された可能性が高い。床面はほぼ平坦で堅く締まり、貼床が全体的に施されている。

カマドは南西壁のほぼ中央に付設されているが、南西壁の精査時、埋土と壁の色調が酷似していたため掘り過ぎてしまい、煙道口を消失させてしまった。カマドの残存状態は不良で、袖部等は確認できないが、付近に自然石が数個散在していることから、芯材に使用されたものと思われる。燃烧部は平坦で、約40×30cmの不整な赤褐色焼土の広がり確認できる。煙道部は削り貫き式で、長さ推定160cm、径約30cmで、ほぼ平坦を保ちながら煙出部へと繋がる。煙出部は径約25cm、深さ約75cmで垂直に掘り込まれている。

S I 87Bについて、前述の通りS I 87Aによって切られるため、残存部分はそれより張り出した東隅とこれに繋がる南及び東壁の一部とカマド煙道部である。残存する東隅から平面形は、隅丸方形または隅丸長方形を呈すると思われ、規模は残存部から3.2m以上が推測される。主軸方位はS-60°-Wで、床面積は1.3㎡が残存する。残存する壁は直角に立ち上がり、壁高は約65cmを測る。残存部の埋土は6層に細分されるが、黄褐・褐色土で占められる層位状況から人為堆積と思われる。床面は平坦で締まりが認められ、貼床等は確認されなかった。

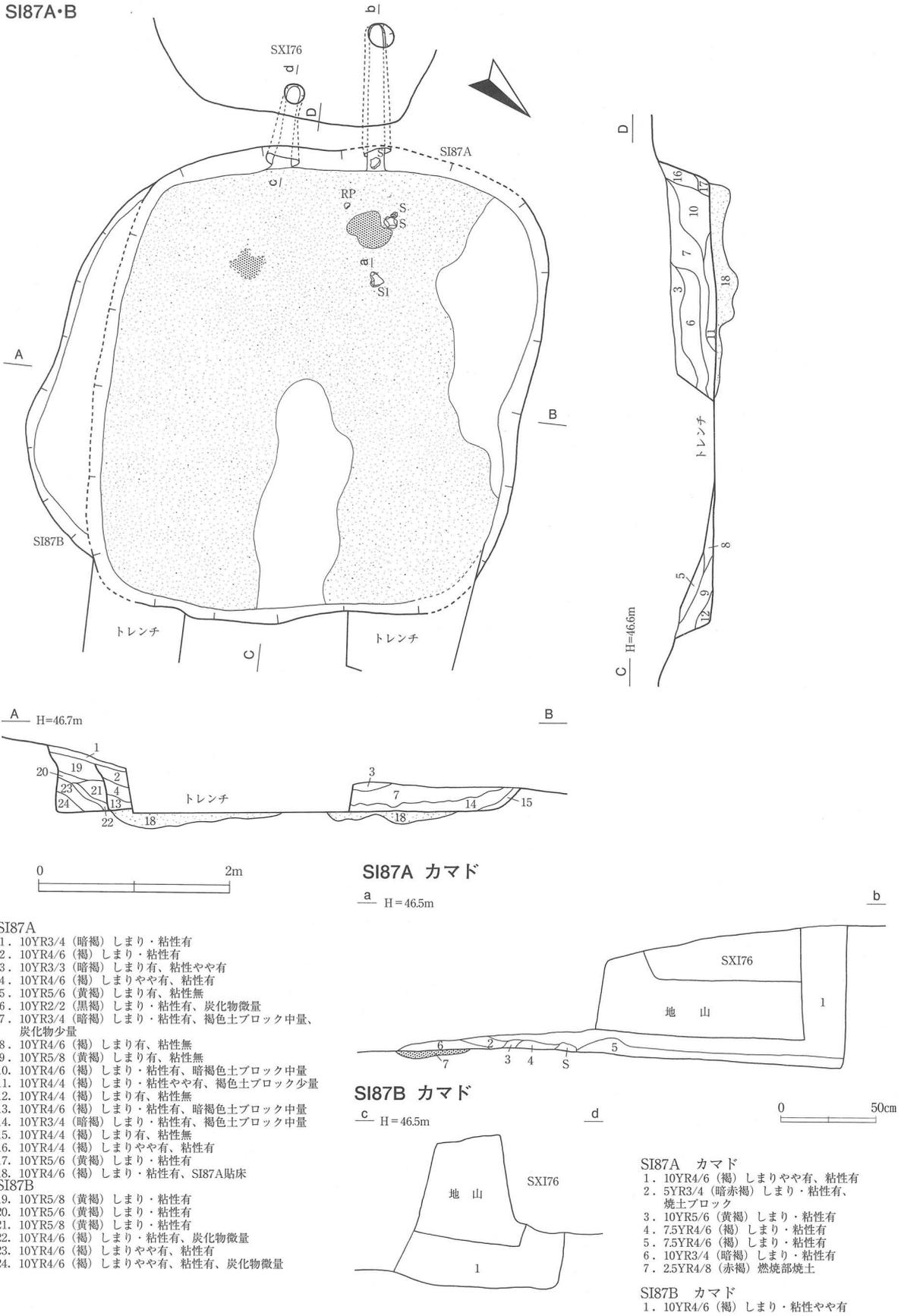
カマドはA同様、山側の南西壁に付設されているが、残存状態は極めて悪い。本体部の大半は残存せず、燃烧部焼土と思われる痕跡のみ確認された。これはS I 87A貼床を剥がした後に検出されたが、その上部はS I 87A構築時に掘削され、下部にまで及んだ被熱部分の残りのみが検出されたものと思われる。確認された範囲は約25×20cmの不整な橙色の広がり、厚さは数mm程度しか残存しない。煙道部は削り貫き式で、長さ約90cmが残存し、径約25cmで先端へと向かう。煙出部は径約25cm、深さ約30cmが残存する。

出土した遺物は、土師器が総量で小袋1袋程出土している。その大半は甕形土器片で、主なものとして、埋土中出土の426がある。その他、床面出土の砥石(S 1)が1点(177)、刀子が埋土上位より1点(160)、鉄滓が埋土中より微量出土した。これらのほとんどは、S I 87Aに帰属するものと思われる。

S I 88 竪穴住居跡（第217図、遺物図版58、写真図版163・247）

H区赤27(B)区南部の尾根頂部、ⅧB-19t・20s・20t、ⅧC-20aグリッドに位置し、検出面はⅥ層

SI87A・B



第216図 SI87A・B竪穴住居跡

である。本遺構は南隅でS I 114と重複しているが、検出時の状況においてS I 114を切っていることから、本遺構はS I 114より新しいと判断した。平面形は隅丸略方形を呈し、規模は北西壁長で約5.3m、南西・北東壁長で約5.1m、南東壁長で約4.3mを測る。主軸方位はS - 45° - W、床面積は21.9㎡である。壁は鋭角的に立ち上がり、北西・北東壁は上部で外傾する。壁高は山側の南西壁で約65cm、その他の壁で約30~40cmを測る。埋土は7層に細分される。上位の黒褐色土と壁際に堆積する黄褐色土は土質から自然流入したものと思われるが、中位から下位にかけては多量のマサ土ブロックが混入していることから、埋め戻された可能性が考えられる。床面はおよそ平坦で堅く締まり、南東壁から北東壁・北西壁沿いにかけてコの字状に貼床が施されている。遺構のほぼ四隅には支柱穴と思われるP 1~4が確認できる。

カマドは遺構南西壁のほぼ中央に付設されているが、遺存状態は不良で燃焼部のみ確認できる。燃焼部は平坦で、径約35cm、厚さ5cmの橙色焼土が円形に広がる。その両脇には径10cm前後の窪みがあり、芯材の抜き取り痕と思われる。また燃焼部焼土南西側には、掘り込んで据えられていた土製支脚が立位している。煙道は削り貫き式で、長さ約140cm、径約30cmを測り、下り勾配を保ちながら煙出部へと続く。煙出部は径約25cm、深さ約75cmで、垂直に掘り込まれている。

遺物は土師器の甕形・坏形土器破片が微量と、カマドに残存した土製支脚1点(13)が出土した。

S I 89 竪穴住居跡 (第218図、遺物図版36、写真図版164・234)

H区赤27(B)区中央の尾根頂部、IX B - 1 r・1 s・2 r・2 sグリッドに跨って位置する。検出面はVI層であるが、本遺構は尾根頂部に位置する他の住居と比べて掘り込みが浅く、また遺構南東壁は斜面の落ち際にかかるため遺存しない。本遺構カマド煙道残存部より平面形は隅丸方形を呈していたものと思われ、規模は一辺約4.5mが推定される。主軸方位はS - 33° - Wで、床面積は推定17.0㎡である。残存する壁はほぼ直角に立ち上がり、壁高は山側の北西壁で約45cm、北東・南西壁で約10~15cmである。埋土は8層に細分されるが、全体的に黄褐・浅黄色土系で占められており、その層位状況から人為的に埋め戻されたものと思われる。床面は平坦で堅く締まり、貼床が中央を除いて全体的に施されている。床面施設として、遺構南側には貯蔵穴と思われるK 1が掘り込まれている。これは当初、単独の土坑として精査を開始したが、埋土断面の状況、及び貼床がこれを含む範囲にまで及ぶことから、本遺構に伴う土坑であると判断した。平面形は略円形を呈するが、底部は歪な方形を呈し、北西側には一段高い三日月形のテラス部分を伴う。規模は開口部径約90~105cm、底部約50×60cm、テラス状部分約15×50cmを測る。住居床面から底部までの深さは約35cm、テラス状部分においては約10cmを測る。その他、柱穴を4基(P 1~P 4)確認したが、配列・深さから支柱穴と思われる。

カマドは南西壁のほぼ中央に付設されているが、本体部のほとんどは残存していない。袖部は当初、残存しないものと考え掘り進めたが、埋土断面観察の結果、右側のみ残存しており、明黄褐色土で構築されていた。燃焼部はほぼ平坦で、径約50cm、厚さ約15cmの明赤褐色焼土が円形に広がる。煙道部はS X I 26に切られているため詳細は不明であるが、立地的に掘り込み式と考えられ、残存部分で長さ80cm以上、径約30cmで、煙出部に向かってやや下り勾配であったことが推測される。

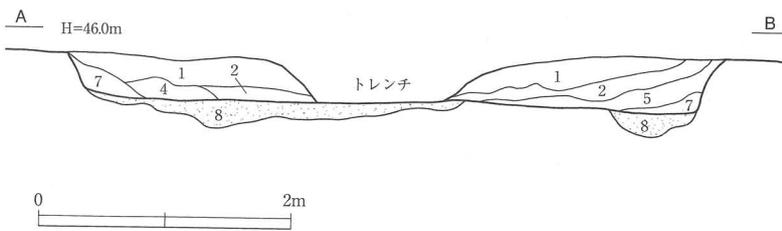
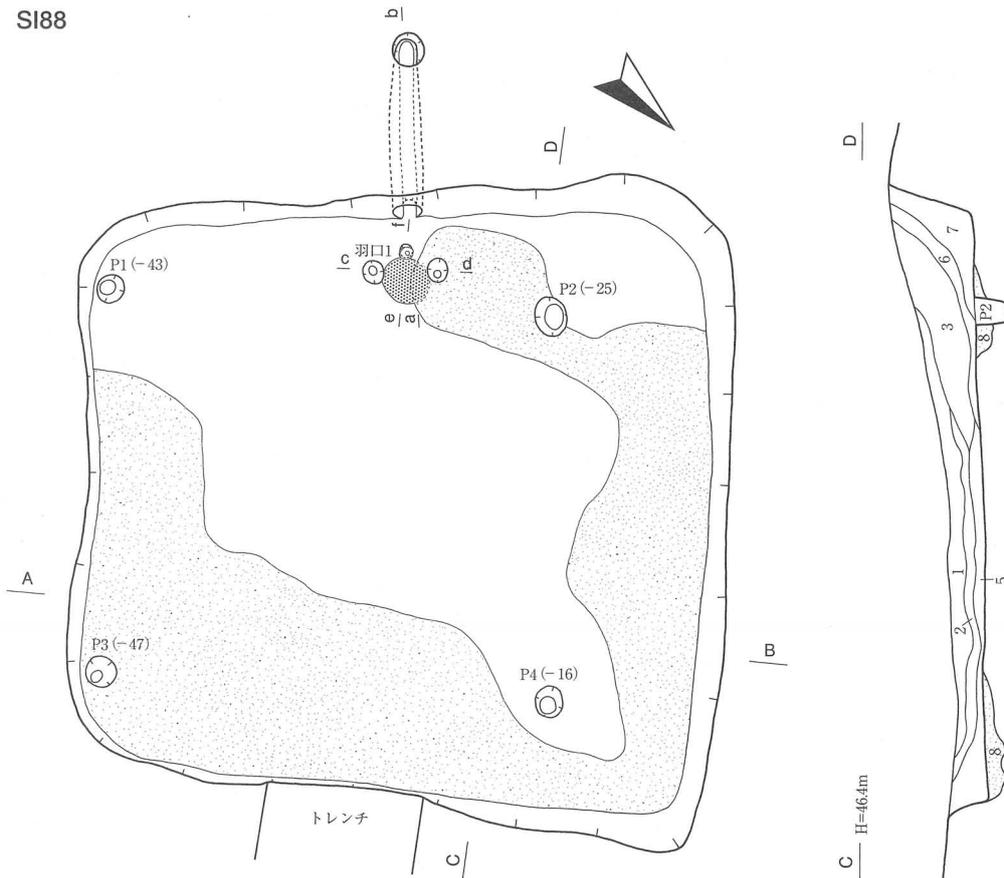
遺物は、そのほとんどが土師器の甕形土器の破片で十数点程しか出土していない。その内、カマドRP 1とカマド埋土上位より出土した数破片が接合(427)した。

S I 90 A・B 竪穴住居跡、S X I 26 工房跡

(第219・220図、遺物図版36・37・127、写真図版164・234・235・307)

H区赤27(B)区中央の尾根頂部、VIII B - 20 s、IX B - 1 s・1 tグリッドに位置し、検出面はVI層である。

SI88



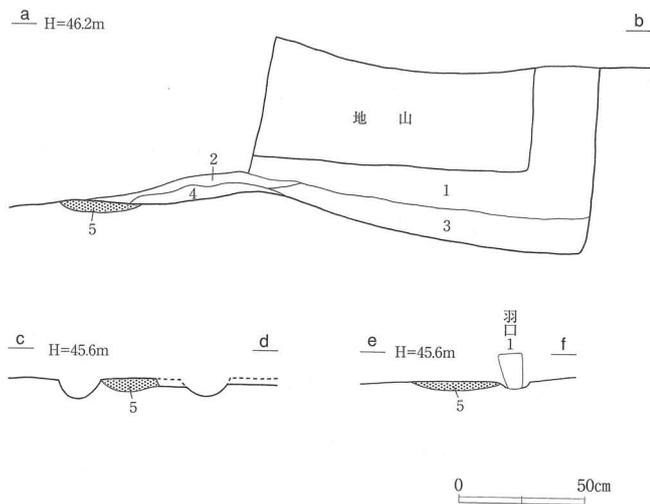
SI88 カマド

SI88

1. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有
2. 10YR4/2 (灰黄褐) しまり・粘性有、にぶい黄橙色土ブロック少量
3. 10YR5/8 (黄褐) しまり有、粘性やや有
4. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有
5. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性やや有、灰黄褐色土ブロック少量
6. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性有
7. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有
8. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性やや有、貼床

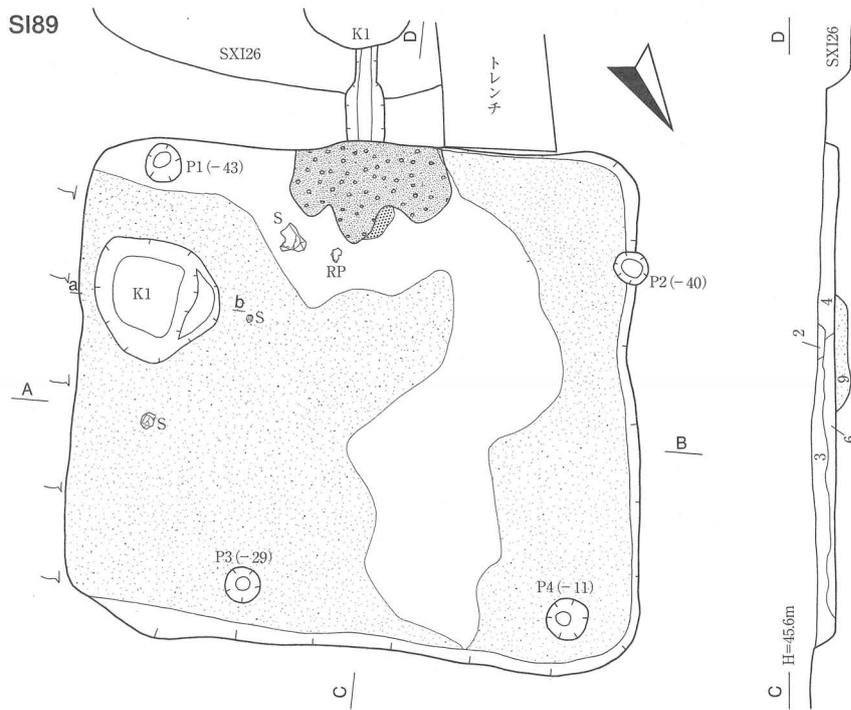
SI88 カマド

1. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性やや有、明黄褐色土ブロック少量
2. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有、明黄褐色土ブロック
3. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり・粘性やや有
4. 10YR2/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性有、焼土粒・炭化物少量
5. 2.5YR6/8 (橙) 燃焼部焼土



第217図 SI88竪穴住居跡

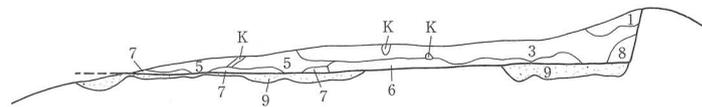
SI89



SI89

1. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性やや有
2. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性やや有
3. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性無、暗褐色土ブロック少量
4. 2.5Y5/3 (黄褐) しまり・粘性やや有
5. 2.5Y7/3 (浅黄) しまり・粘性やや有
6. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり・粘性やや有
7. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり・粘性やや有
8. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまりやや有、粘性無
9. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性無、貼床

A H=45.9m

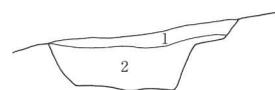


B

0 2m

SI89 K1

a H=45.4m



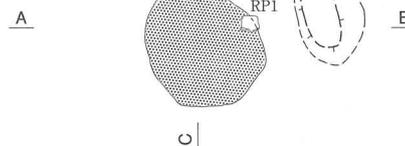
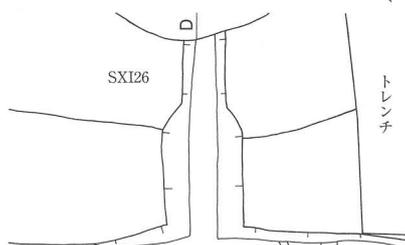
0 1m

b

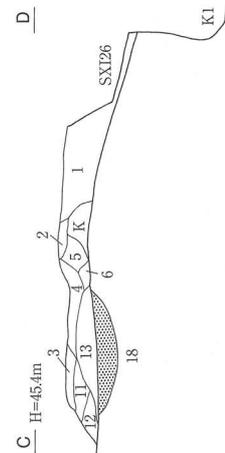
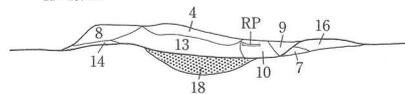
SI89 K1

1. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり有、粘性欠
2. 2.5Y7/4 (浅黄) しまりやや有、粘性無

SI89 カマド



A H=45.4m



0 50cm

SI89 カマド

1. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性欠
2. 10YR5/8 (黄褐) しまり有、粘性極めて有、天井崩落土
3. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有、天井崩落土
4. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有、天井崩落土
5. 10YR3/2 (黒褐) しまり有、粘性極めて有
6. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有
7. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり・粘性欠
8. 7.5YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性有、焼土粒・炭化物少量
9. 2.5Y4/6 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性有
10. 10YR3/4 (暗褐) しまり極めて有、粘性有、天井崩落土
11. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり欠、粘性無
12. 10YR3/1 (黒褐) しまり極めて有、粘性有、炭化物少量
13. 7.5YR5/6 (明褐) しまり・粘性有、天井内壁崩落土
14. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり欠、粘性無
15. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり欠、粘性無
16. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性極めて有、袖部
17. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性有、袖部
18. 2.5YR5/6 (明赤褐) 燃焼部焼土

第218図 SI89竪穴住居跡

検出時の状況及び遺構北西側に走る平成10年度時の試掘トレンチの断面観察から、2棟の竪穴形状の重複が見受けられたため、それらを把握できるよう共通の断面ベルトを設定し、精査を行なった。結果、新しい方がS X I 26、旧い方がS I 90であることが判った。

S X I 26は、上記の重複の他、北西側においてもS I 89カマド煙道部と重複しているが、精査の結果、本遺構がS I 89カマド煙道部を壊していることから、(新)本遺構→S I 89(旧)であることが判った。遺構南東壁は、斜面の落ち際にかかるため残存しない。残存部より平面形は隅丸略方形を呈し、規模は一辺約4mが推測され、計測される床面積は13.6㎡である。壁は鋭角的に立ち上がり、残存する壁高は約20～25cmを測る。埋土は6層に細分される自然堆積と思われる。床面は平坦で堅く締まる。床面施設として、遺構中央からやや西側に向かった位置に地床炉と、遺構北東側に土坑(K1)が確認できる。地床炉はトレンチによって切られているが、残存する範囲は約65×85cmの不整なにぶい橙色焼土の広がり、厚さは7cm前後を測る。K1の平面形は略円形を呈し、規模は開口部径約90～100cm、底部径約90cmを測る。断面形は袋状を呈し、深さ約40cmを測る。これら床面施設についてであるが、地床炉の検出時において、鍛造剥片が視認できたため、土壌サンプルを行い、選別を行った結果、少量の鍛造剥片が確認されたことから鍛錬鍛冶を行っていた可能性が考えられるが、セット関係となる鉄砧石の設置痕や足入れ穴等に当たる他施設が認められず、配置的に試掘トレンチによって損なわれた部分にあった可能性も考えられる。

遺物は、埋土中より土師器の甕形土器片数点と、地床炉付近から筒状鉄製品が1点(165)と鉄滓及び鍛造剥片が少量出土したのみである。

S I 90A・Bについて、北西壁から西隅を精査した際、辺と隅を結ぶ角度に違和感が感じられた。その後の調査の結果、貼床の施行範囲の状況、及びカマドが2基確認されたことから、2棟の住居の重複が推測された。残存状況が良いカマドを伴う新しい時期の住居をS I 90A、もう一方のカマドを伴う古い時期の住居をS I 90Bとした。カマドについての詳細は後述するが、S I 90Bカマドは残存状態も悪く、煙道部の長さがS I 90Aカマドと比較して短いこと、また西隅部の屈曲の状態から、北西壁はS I 90A・Bが共有するものと捉えられ、S I 90A構築時にS I 90Bの南西壁を押し上げたものと思われる。以上の点により、本遺構は拡幅により構築期が2時期に渡るものと考えられる。

S I 90Aの残存部から推測される平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長辺約5.7m、短辺約5mを測る。S I 90Bの貼床範囲から推測される平面形は隅丸方形で、規模は一辺約5mが推測される。主軸方位はS I 90AではS-37°-W、S I 90BではS-31°-Wで、残存部分から推定される床面積は約25.8㎡である。残存する壁はほぼ直角に立ち上がり、壁高は20～30cmである。埋土は7層に細分されるが、全体的にマサ土が混入した様相が見受けられ、ブロック状に土を含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。床面は平坦で締まりがあり、貼床が中央を除いた壁沿いに施されている。貼床範囲は前述の通り、S I 90B～A期への南西方向への拡幅を推測させる一因を示しているが、S I 90Bカマド煙道部の長さが短いことから、貼床の施行がS I 90B期にのみ伴うものとは考えにくく、南西部分においては一部拡幅後のS I 90A期においても施行されたものと考えられる。

S I 90Aカマドは、南西壁の中央からやや南側に付設されているが、残存状態は悪く、自然石や土師器片が散在していた。本体部は残存せず、燃烧部のみ確認できる。燃烧部は平坦で、径約40cm、厚さ約3～7cmの円形の明赤褐色焼土が広がる。燃烧部の両脇には袖の芯材の抜き取り痕が3基確認できる。周囲に散在する自然石が袖の芯材に用いられたものと思われる。煙道部は削り貫き式で、長さ約120cmを測り、下り勾配で先端へと向かう。煙出部は径約25cm、深さ約65cmで垂直に掘り込まれている。

S I 90Bカマドは、S I 90Aカマドと同じく南西壁に付設されているが、残存状態は極めて悪く、煙道部のみ残存している。煙道部は天井部が崩落しているため詳細は不明であるが、残存する煙道部の長さは約35cm、深さは約40cmを測る。

出土遺物は、土器は総数で土師器が約50点、須恵器が数点出土している。主なものとして、土師器の甕形土器は、RP 8・13・15・21・23と埋土中出土の破片が接合した(429)、RP15・16・18とS I 114カマド出土の破片が接合した(428)、RP17の(430)及びRP 2の(431)などがある。土師器の坏形土器は、貼床内出土の破片が接合した(436)、RP 9・10・11・12が接合した(433)、貼床内出土の破片と遺構外のものが接合した墨書土器の(432)、RP 1群の一部の(437)、カマド出土の(438)などがある。土師器の高台付坏は、RP 1群の一部とRP 4が接合した(434)、RP 3の(435)などがある。須恵器の甕形土器は、RP11の(440)、埋土上位出土の(441)、長頸瓶として貼床内出土の(439)などある。この他、鉄滓がカマド付近よりRM 1として2点、埋土中及び床面より少量出土している。

S I 96竪穴住居跡 (第220図、遺物図版37、写真図版165・235)

H区赤27(B)区北部の尾根頂部、IX B-2q・2r グリッドに位置し、検出面はVI層である。本遺構はS I 113と重複し、その新旧関係は検出プランの状況から(新)本遺構→S I 113(旧)である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長辺約3.7m、短辺約2.6mを測る。主軸方位はW-2°-Nで、床面積は8.5㎡である。壁はほぼ直角に立ち上がり、壁高は約20~25cmを測る。埋土は18層に細分されるが、そのほとんどが黄褐~明黄褐色土であり、ブロック状の土を多く含むことから人為的に埋め戻された可能性が高い。床面は平坦で堅く締まり、遺構東隅と中央側に貼床が施されている。床面施設として、遺構北西側には土坑(K 1)がある。K 1は径約45cmの円形を呈し、断面形は皿状で深さ約5cmを測る。

カマドは遺構西隅に付設されており、遺存状態は不良である。袖等は確認できず、燃烧部焼土のみ確認できる。燃烧部焼土は径約30cmの円形に広がっており、厚さは約5cmで明赤褐色を帯びている。その両脇にはそれぞれ径約10cmの小ピットが確認でき、その位置関係から袖の芯材の抜き取り痕と思われる。煙道部は立地的に掘り込み式と推測され、奥行約110cmを測る。

出土した遺物は少量で、土器は土師器の甕形土器片が十数点と坏形土器片が2点のみである。甕形土器片の主なものとして、埋土上位出土の(422)、床面RP 2の(423)などがある。その他、埋土上位より不明鉄製品が1点、埋土中より鉄滓が少量、床面中央より廃棄されたと思われる鍛造剥片が微量出土した。

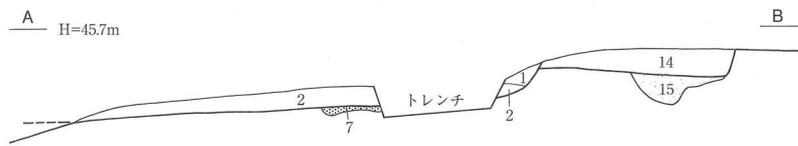
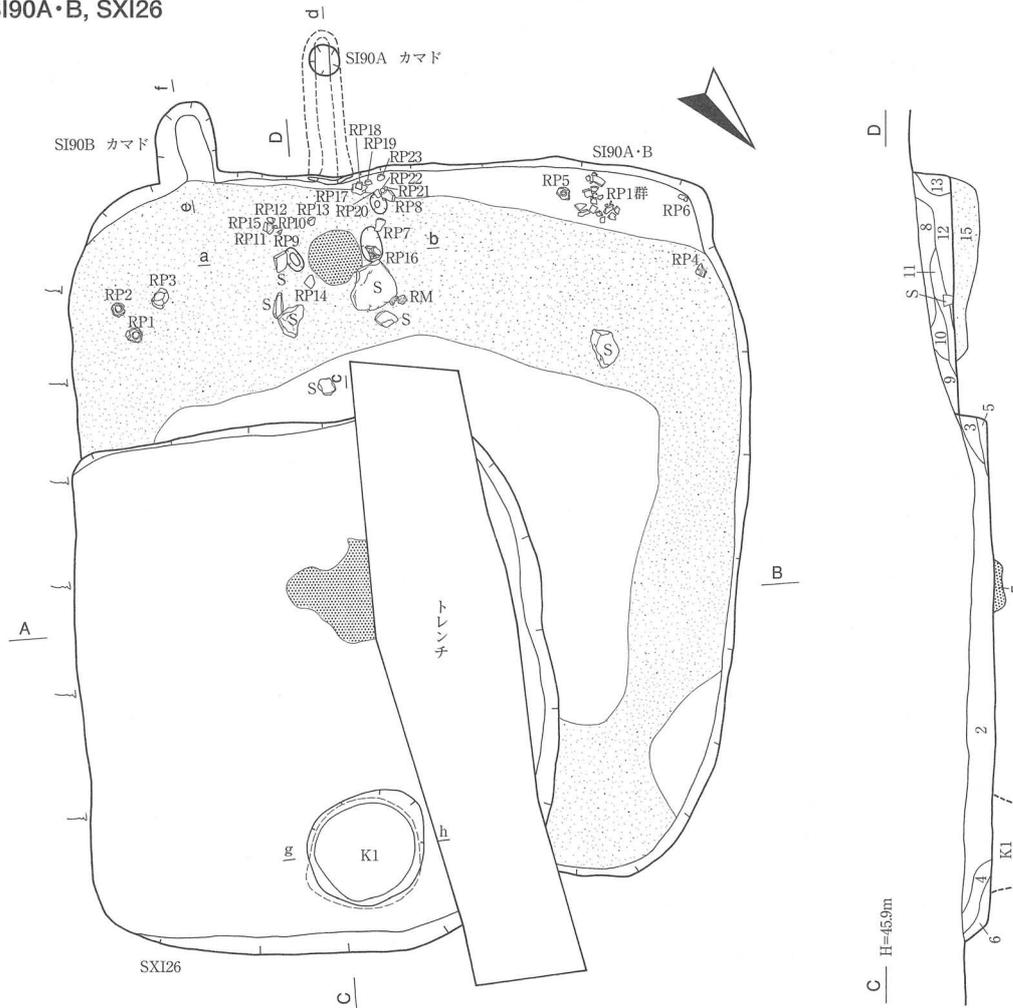
S I 97A・B竪穴住居跡

(第221図、遺物図版37・38・58・59・72・127、写真図版165・166・235・247・248・258・307)

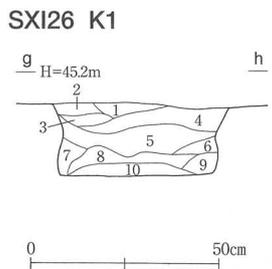
H区赤27(B)区北部の尾根頂部、IX B-3p・3q・4p・4q グリッドに跨って位置する。検出面はVI層である。検出時の状況から2棟の存在は認識していたが、検出プランからのみでは新旧関係が把握できなかったため、共通の断面ベルトを設定し同時に精査を行った。その結果、床面をほぼ同じくして、新しい住居S I 97Aと古い住居S I 97Bを確認した。この他、S I 97A煙出部はS I 113と重複するが、平面プランにおいてS I 113を切っていることから、S I 97Aの方が新しい。また、S I 97B煙道部もS I 98と重複するが、S I 98によって切られていることから、S I 97Bの方が古いことが判った。

S I 97Aについて、平面形は隅丸長方形を呈し、規模は北西・南東壁長で約3.2m、北東・南西壁長で約2.7mを測る。主軸方位はS-52°-W、床面積は7.4㎡である。壁はほぼ直角に立ち上がり、壁高は谷側の南東壁で約20cm、それ以外では約55~60cmである。埋土は9層に細分されるが、その大半にマサ土が混入し、下位層に関してはブロック状の土や焼土粒を含んでいることから、人為堆積の可能性が高い。床面は平

SI90A・B, SXI26



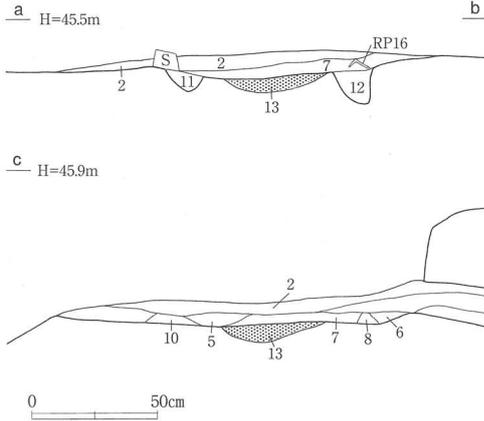
- SXI26**
- 10YR3/2 (黒褐) しまり有、粘性無
 - 10YR1.7/1 (黒) しまり有、粘性やや有、黒褐色土ブロック混入
 - 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有、黒褐色土ブロック・炭化物微量
 - 10YR4/2 (灰黄褐) しまり有、粘性無、黒褐色土ブロック・炭化物微量
 - 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性無、炭化物微量
 - 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭化物微量
 - 7.5YR6/4 (にぶい橙) 地床炉
- SI90A・B**
- 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性有、黄褐色土ブロック混入
 - 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有
 - 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性欠、マサ土
 - 2.5Y5/4 (黄褐) しまりやや有、粘性有、浅黄色土ブロック混入
 - 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまりやや有、粘性有、焼土ブロック少量
 - 10YR6/6 (明黄褐) しまり欠、粘性有
 - 2.5Y5/4 (黄褐) しまりやや有、粘性無
 - 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまりやや有、粘性無、貼床



- SXI26 K1**
- 2.5Y5/4 (黄褐) しまりやや有、粘性欠
 - 2.5Y7/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性無
 - 2.5Y5/4 (黄褐) しまり・粘性欠、黄褐色土ブロック混入
 - 2.5Y7/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性無
 - 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性欠
 - 2.5Y5/4 (黄褐) しまり・粘性欠
 - 2.5Y5/3 (黄褐) しまり欠粘性やや有
 - 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまりやや有、粘性無
 - 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり欠、粘性やや有
 - 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり有、粘性やや有

219図 SI90A・B竪穴住居跡(1)・SXI26工房跡

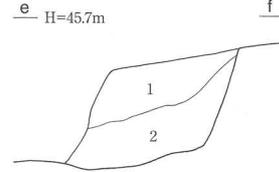
SI90A カマド



SI90A カマド

1. 10YR6/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性有、炭化物少量
2. 10YR4/4 (オリーブ褐) しまり極めて有、粘性やや有、炭化物少量
3. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性極めて有
4. 10YR5/4 (黄褐) しまり・粘性有
5. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有、焼土塊微量
6. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性極めて有、崩落構築土
7. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性極めて有、崩落構築土
8. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性極めて有、崩落構築土
9. 10YR4/6 (オリーブ褐) しまり極めて有、粘性有、炭化物少量
10. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり極めて有、粘性やや有、炭化物少量
11. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有、袖の抜き取り痕
12. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性有、袖の抜き取り痕
13. 2.5YR5/8 (明赤褐) 焼燃部焼土

SI90B カマド



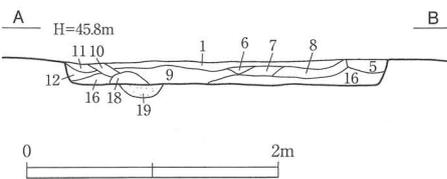
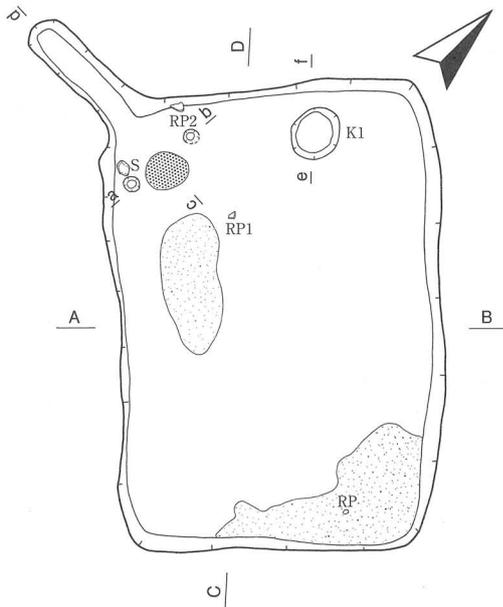
SI90B カマド

1. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり有、粘性欠、炭化物微量
2. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり・粘性欠

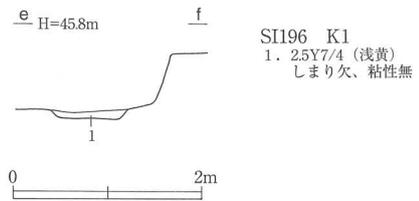
SI96

1. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性欠
2. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無
3. 2.5Y5/4 (黄褐) しまりやや有、粘性欠、黒褐土ブロック少量
4. 7.5YR5/6 (明褐) 廃棄焼土ブロック
5. 2.5Y7/6 (明黄褐) しまり有、粘性無
6. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり・粘性欠
7. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性欠
8. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性無
9. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性欠
10. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無
11. 2.5Y5/6 (黄褐) しまり有、粘性欠
12. 2.5Y7/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性欠
13. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性欠
14. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性無
15. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性欠
16. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性欠
17. 2.5Y3/1 (黒褐) しまり・粘性欠、明褐色土ブロック少量
18. 10YR5/8 (黄褐) しまり有、粘性極めて有、廃棄構築土ブロック
19. 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまり有、粘性欠、貼床

SI96



SI96 K1



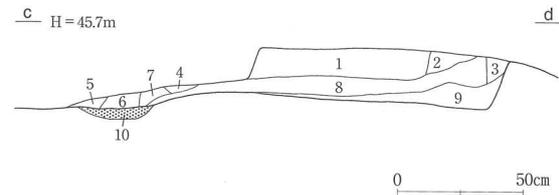
SI96 K1

1. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり欠、粘性無

SI96 カマド

1. 2.5Y5/6 (黄褐) しまり有、粘性やや有
2. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性欠、黄褐色ブロック混入
3. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり・粘性欠
4. 7.5YR4/4 (褐) しまり・粘性有、焼土塊少量
5. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性有、炭化物粒少量
6. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有、焼土塊少量
7. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、焼土塊少量
8. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性欠
9. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり・粘性欠
10. 5YR5/8 (明赤褐) 焼燃部焼土

SI96 カマド



第220図 SI90A・B竪穴住居跡(2)・SI96竪穴住居跡

坦で堅く締まり、貼床が遺構中央に施されている。床面施設として、北東壁から南東壁沿いにかけて、幅7cm前後、深さ5cm前後の壁溝が認められる。また、柱穴と思われるピット1基が北西壁に検出された。

カマドは南西壁の南寄りに付設されている。本体部の遺存状態は悪く、燃焼部のみ確認できた。燃焼部は約40×20cmの略楕円形を呈し、皿状に窪み、同様に厚さ約4cmのにぶい橙色焼土が広がる。煙道部は奥行約140cm、径約25cmを測り、やや下り勾配で先端へと向かう。煙出部は径約30cm、深さ約70cmで垂直に掘り込まれている。

遺物は、その大半が土師器の甕形土器片で約15点出土した。その他、羽口が床面より1点(142)、鉄製品として刀子が埋土上位より1点(161)出土している。

S I 97 Bについて、残存部より推測される平面形は隅丸長方形を呈すると思われ、規模は北西・南東壁長で約4m、北東・南西壁長で約3.7mを測る。主軸方位はN-51°-Eで、床面積は推定14.3㎡である。S I 97 Aにより残存しない南東壁を除いて、壁はほぼ直角に立ち上がり、壁高は50~70cmを測る。埋土は5層に細分されるが、すべての層においてマサ土を起源とした土で、中位から下位層においてはブロック状の土や炭化物が混入しており、また遺構西側には廃棄されたと思われる炭化材が残存していることから、人為的に埋め戻された可能性が高い。床面は平坦で堅く締まり、貼床が遺構西側に施されている。また、柱穴と思われるピットが北西壁際に1基と南西壁際に2基確認された。

カマドは北西壁の北西側に付設されているが、カマド本体の遺存状態は不良である。燃焼部は径約30cmの円形を呈し、皿状に窪んでいる。被熱範囲はそれより二周り程大きく、径約50cm、厚さ約15cmの橙色焼土が広がる。また燃焼部焼土の北側には、掘り込んで据えられた土製支脚(RH 2)が残存している。袖部は遺存しないが、カマド中央から南方向にかけて自然石が数個散在していることから、それらが芯材に用いられたものと思われる。また、芯材の抜き取り痕が壁際に楕円形のもの、燃焼部両脇に溝状のもの、左右対称に検出された。煙道部はS I 98に切られているため詳細は不明であるが、残存部より推測すると削り置き式で、長さは80cm以上、径30~35cmを測り、やや上り勾配で先端へ向かったものと思われる。

遺物は、土器は土師器の甕形土器片が11点出土している。その内、カマド出土のRP 1群が接合し、2個体の甕形土器(445・446)となった。その他、土製支脚としてカマドからRH 2(15)とRH 1群が接合したものの(14)の2点、板状鉄製品が埋土上位より1点(162)、釘状鉄製品が床面より1点出土している。

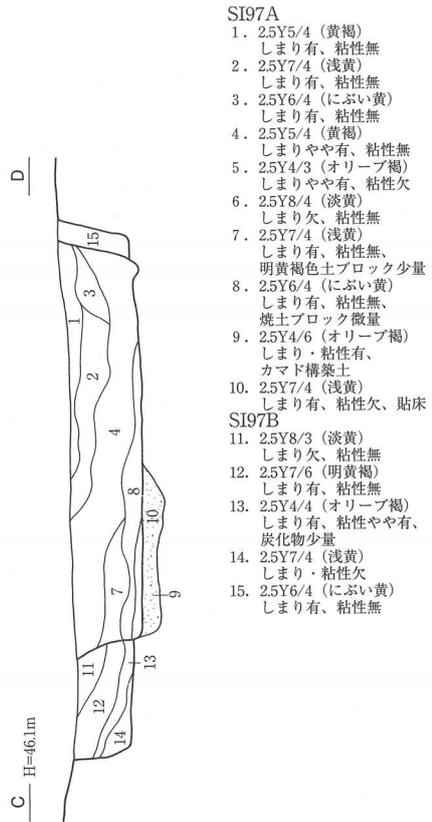
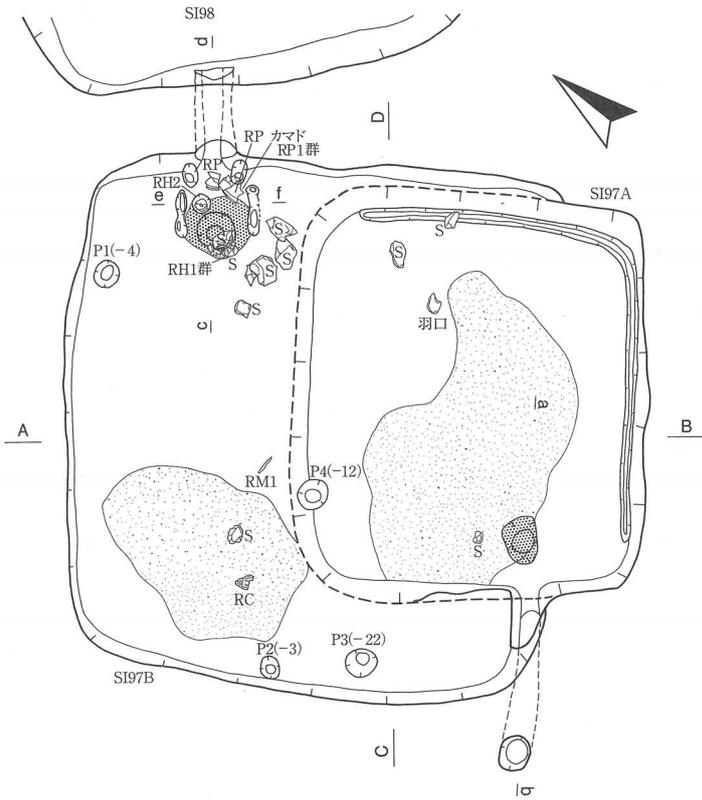
S I 98 竪穴住居跡、S X W 43 鉄生産関連炉跡

(第222・223図、遺物図版38・72・101・127、写真図版167・235・258・287・307)

H区赤27(B)区北側の尾根頂部、IX B-3o・3p・4o・4pグリッドに跨って位置し、検出面はVI層である。検出時の状況から、竪穴住居跡1棟とその北西辺に別の遺構と思われる張り出しが確認できたため、それらを把握できるよう断面ベルトを設定した。その後の精査において、断面ベルトを観察したが、切り合い関係は把握できなかったため、本竪穴住居跡に伴う棚状の張り出しと考え作業を進めたが、底面に焼土の広がり確認され、またこの直下にカマド煙道部が構築されていることから、再度埋土断面を考察した結果、本遺構を切る単独の炉跡(S N 44)であると判断した。また精査終了間際において、本遺構南東壁の上半部にも重複する遺構S W 89が確認されたが、調査員の認識が至らず、検出時期が遅かったため、その新旧関係を把握できなかった。しかし、この周辺の本竪穴住居埋土中に少量の炭化物を確認していたため、これがS W 89に伴う可能性は高く、本遺構より新しい時期に構築されたものと思われる。

S I 98の平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺約3.5mを測る。本遺構にはカマドが2基遺存しており、北東壁に遺存するものをカマドA、北西壁に遺存するものをカマドBとした。主軸方位はカマドAではE-

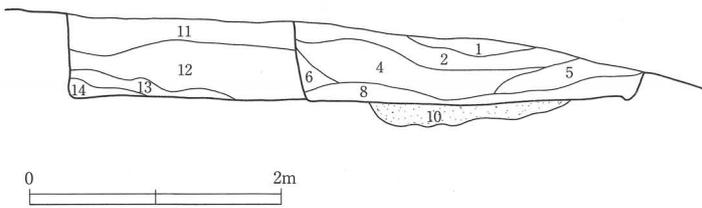
SI97A・B



SI97A

1. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性無
 2. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性無
 3. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性無
 4. 2.5Y5/4 (黄褐) しまりやや有、粘性無
 5. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性欠
 6. 2.5Y8/4 (淡黄) しまり欠、粘性無
 7. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性無、明黄褐色土ブロック少量
 8. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性無、焼土ブロック微量
 9. 2.5Y4/6 (オリーブ褐) しまり・粘性有、カマド構築土
 10. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性欠、貼床
- SI97B
11. 2.5Y8/3 (淡黄) しまり欠、粘性無
 12. 2.5Y7/6 (明黄褐) しまり有、粘性無
 13. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり有、粘性やや有、炭化物少量
 14. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり・粘性欠
 15. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性無

A H=46.2m



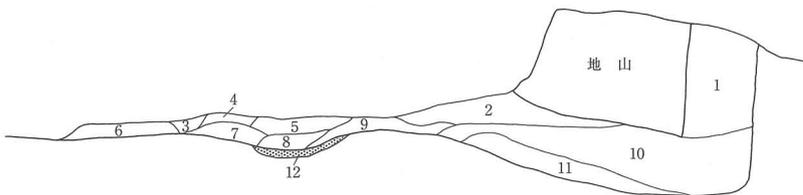
B

SI97A カマド

1. 10YR6/6 (明黄褐) しまり欠、粘性有
2. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり・粘性欠、黄褐色土・焼土ブロック少量
3. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり極めて有、粘性有
4. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり極めて有、粘性やや有
5. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性やや有、黄褐色土ブロック混入
6. 2.5Y5/6 (黄褐) しまり・粘性有
7. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり極めて有、粘性有
8. 10YR5/8 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
9. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性有
10. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり・粘性欠
11. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり・粘性欠
12. 5YR7/4 (にぶい橙) 燃焼部焼土

SI97A カマド

a H=46.8m



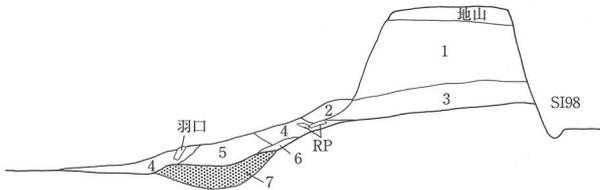
b

SI97B カマド

1. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり・粘性欠
2. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性有、炭化物微量
3. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性有、黄褐色土ブロック少量
4. 10YR5/8 (黄褐) しまり極めて有、粘性有、焼土粒少量
5. 2.5Y5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性欠
6. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり・粘性有、焼土粒・炭化物微量
7. 5YR6/6 (橙) 燃焼部焼土

SI97B カマド

c H=46.1m



d

e H=45.5m



第221図 SI97A・B竪穴住居跡

38° - N、カマドBではW-44° - Nで、床面積は9.5㎡である。壁は鋭角的に立ち上がり、壁高は約100～50cmを測り、最深部の北隅から南方向に進むに伴い減少する。埋土は24層に細分されるが、堆積状況から中～下位は人為的に埋め戻された可能性が高い。床面は平坦で堅く締まり、南東壁と2基のカマドを除いた部分に壁溝が巡らされている。北東・南東壁沿いにそれぞれ2基ずつ柱穴が確認された。また、遺構東隅には約60×50cm、厚さ約3cm程の炭化物の広がり確認できる。炭化物は各々1～3cm程の塊で、形を成す材等は見られず、この直下の底面に被熱痕跡が見られないことから廃棄されたものと思われる。またこれを鑑定した結果、クリであることが判った。

カマドAは北東壁の東寄りに付設されており、検出時の状況は明褐～黄褐色土が小規模に広がっていた。精査の結果、本体部はほとんど遺存せず、燃烧部のみが確認できる。燃烧部はほぼ平坦で、径約40cmの円状ににぶい橙色焼土が広がる。この両脇には溝状の掘り込みが確認でき、袖部の芯材の抜き取り痕と思われる。また、燃烧部のほぼ中央とその北東側には径約5cmのピット2基が確認でき、支脚痕と思われる。煙道部は削り貫き式で、奥行約100cm、径約35cmで、ほぼ平坦に先端へと向かう。煙出部は径約35cm、深さ約110cmで、垂直に掘り込まれている。

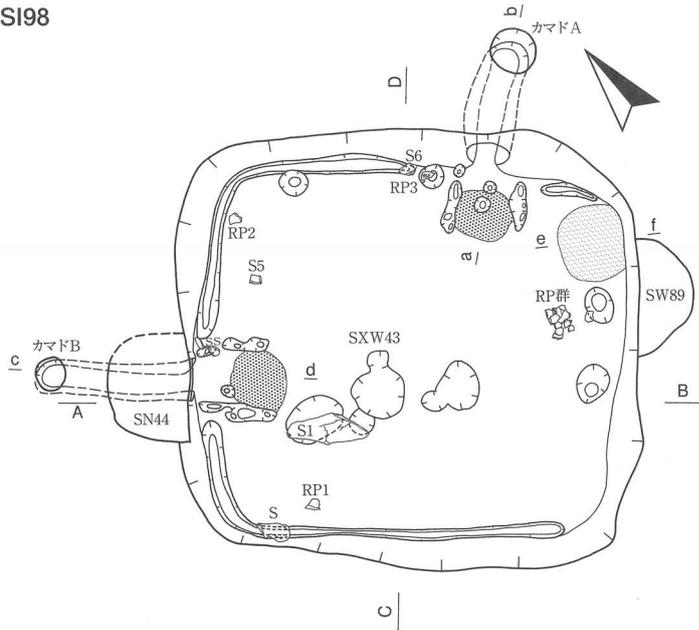
カマドBは北西壁の西寄りに付設されており、検出時の状況はカマドA同様、明褐～明黄褐色土が広がっていた。精査の結果、本体部は遺存せず、燃烧部のみ確認できる。燃烧部はほぼ平坦で、径約40cmの円状ににぶい赤褐色焼土が広がる。この両脇には袖部の芯材の抜き取り痕と思われる溝状の掘り込みが確認できる。また、燃烧部焼土西側には径約5cmの支脚痕と思われるピットが確認された。煙道部は削り貫き式で、奥行約120cm、径約30cmで、先端に向かってやや下り勾配である。煙出部は径約25～30cm、深さ約85cmで、垂直に掘り込まれている。

本遺構のほぼ中央部の精査時において、少量の鍛造剥片が視認され、その西側に約60×15cmの自然石(S1)が横位していたことから、これを鉄砧石と考え鍛錬鍛冶施設を想定して精査を行った。結果、SXW43とその東側にK1、その西側にK2が確認された。K1の平面形はやや歪んだ楕円形を呈し、規模は約40×25cmである。この西側には径約15cm、深さ3～4cm程の小ピットが取り付けられている。K1の断面形は皿状を呈し、深さは約5cmを測る。埋土は人為的な明黄褐色土の単層である。底面は締まりがある。K2は上述のS1の残存状態から、これを据え置くための掘り方と考えた。しかしS1を観察した結果、敲打痕が見られないことから鉄砧石とは考えられず、また、近接するカマドBの散乱した構築土上にS1が存在することから、S1とK2の関連性は認められない。K2の平面形は楕円形を呈し、規模は約45×35cmである。断面形は浅い皿状を呈し、深さは約4～5cmを測る。埋土は黒褐色土の単層である。底面は締まりがある。

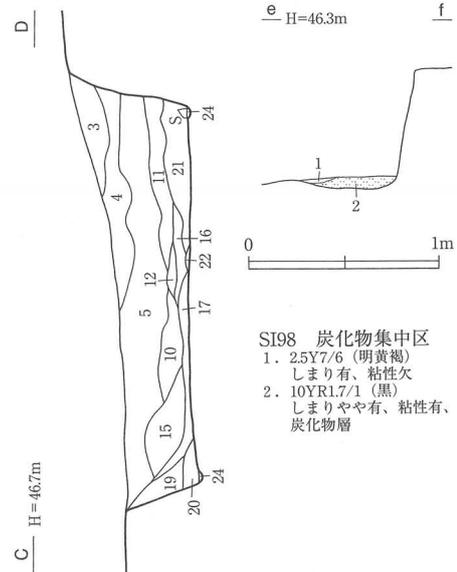
SXW43の平面形は円形を呈し、規模は径約40cmである。断面形は平底鍋形を呈し、深さは約10cmを測る。埋土は黒色土がほとんどで、一部上位に黄褐色土が堆積している。埋土中及び底面付近において少量の鍛造剥片を確認できた。底面は平坦で極めて堅く締まり、中央から北側壁にかけて淡橙色の酸化焼土が広がるが、還元焼土は確認できなかった。また、北東側には径約15～20cm、深さ約5cmの小ピット(PP1)、西側にも径約15cm、深さ3cm程度のSXW43に向かって下り勾配のピット状のもの(PP2)が付属している。これらの位置関係及び深さから、羽口の装着痕の可能性が考えられる。

以上の2基の羽口装着痕から、SXW43は2時期において使用された可能性がある。またK1・2は位置関係及び深さから鉄砧石の設置痕と思われ、それぞれ伴うものと考えられる。更に2基あるカマドとの位置・空間から、①SXW43・PP1・K2・カマドB、②SXW43・PP2・K1・カマドAのセット関係

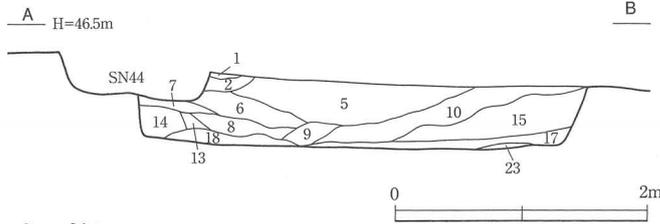
SI98



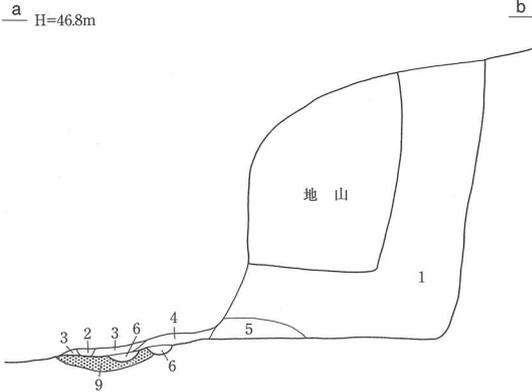
SI98 炭化物集中区



SI98 炭化物集中区
 1. 2.5Y7/6 (明黄褐) しまり有、粘性欠
 2. 10YR1.7/1 (黒) しまりやや有、粘性有、炭化物層



SI98 カマドA



SI98 カマドA

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性欠
2. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有
3. 7.5YR5/6 (明褐) しまり極めて有、粘性有
4. 7.5YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性有、焼土粒・炭化物混入
5. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有
6. 7.5YR5/8 (明褐) しまり・粘性有、支脚の抜き取り痕
7. 5YR7/4 (にぶい橙) 燃焼部焼土

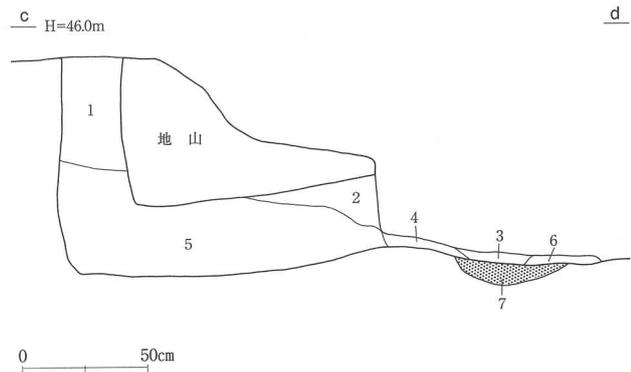
SI98 カマドB

1. 10YR6/6 (明黄褐) しまり欠、粘性有
2. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまり・粘性欠、焼土塊微量
3. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性極めて有、焼土塊・炭化物少量
4. 7.5YR3/4 (暗褐) しまり・粘性極めて有
5. 7.5YR5/6 (明褐) しまり欠、粘性有
6. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性有、焼土粒・炭化物微量
7. 5YR5/4 (にぶい赤褐) 燃焼部焼土

SI98

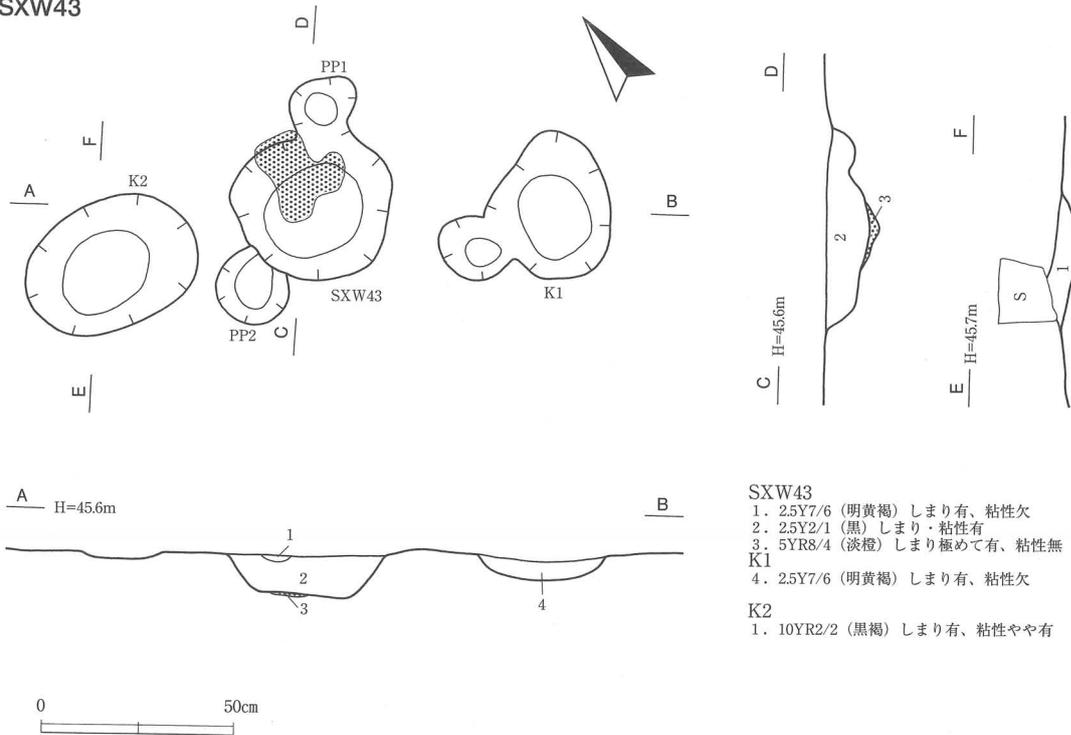
1. 2.5Y4/2 (暗灰黄) しまり・粘性欠
2. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまりやや有、粘性欠
3. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまりやや有、粘性欠
4. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性欠、炭化物少量
5. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性欠
6. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性欠
7. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性有、炭化物少量
8. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性やや有
9. 2.5Y7/6 (明黄褐) しまり有、粘性欠
10. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり有、粘性欠、炭化物中量
11. 2.5Y8/4 (淡黄) しまりやや有、粘性無
12. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性やや有、炭化物微量
13. 2.5Y7/6 (明黄褐) しまり・粘性欠、黒褐色土混入
14. 2.5Y7/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性欠
15. 2.5Y7/4 (浅黄) しまりやや有、粘性無
16. 2.5Y5/3 (黄褐) しまり・粘性やや有、炭化物微量
17. 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまり有、粘性欠
18. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性欠
19. 2.5Y7/3 (浅黄) しまり・粘性欠
20. 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまりやや有、粘性欠、炭化物微量
21. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性無
22. 10YR3/1 (黒褐) しまり・粘性有、炭化物少量
23. 2.5Y5/2 (暗灰黄) しまり極めて有、粘性欠
24. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり・粘性欠、壁溝

SI98 カマドB



第222図 SI98竪穴住居跡・SXW43鉄生産関連炉跡(1)

SXW43



第223図 SI98竪穴住居跡・SXW43鉄生産関連炉跡(2)

が推測される。しかし、カマドBがSXW43に近接することから、カマドBとSXW43が同時存在していたかという点には疑問が残ることから、③SXW43・PP1・K2・カマドA、④SXW43・PP2・K1・カマドA、⑤カマドB というように、住居の使用時期が3時期に渡る可能性も考えられるが、いずれにしても、これらの新旧関係を把握できる材料はなく、詳細は不明である。

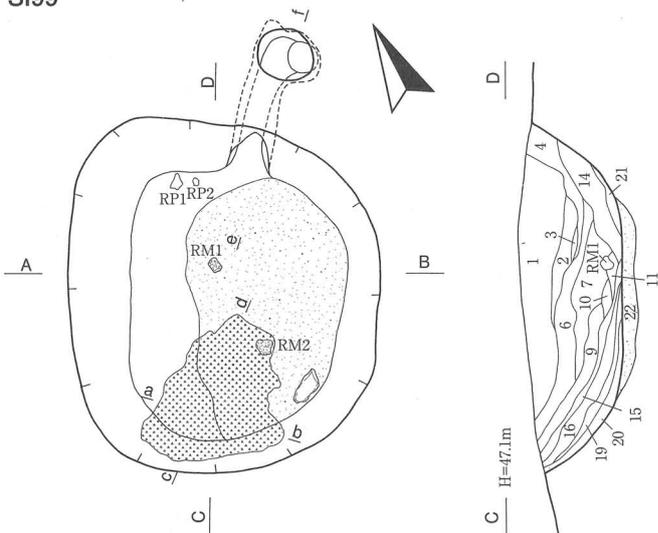
遺物は、土器は土師器の甕形土器片が埋土中から数点と床面出土のRP1・2・3の3点(447・448・449)が出土したのみである。その他、砥石が埋土下位から1点(178)と床面のS5・6が接合した1点(179)の合計2点が出土した。また、羽口が埋土中から数片とカマドA煙道内より1点(143)、鉄鏃が埋土上位より2点(163・164)と不明鉄製品が埋土中より2点、鉄塊系遺物が埋土中より1点、鉄滓が埋土中及びカマドBより少量、鍛造剥片と鉄滓がSXW43より少量出土した。

S199竪穴住居跡(第224図、遺物図版34、写真図版168・233・325)

H区赤27(A)区南側の尾根頂部、IXB-6nグリッドに位置し、検出面はVI層である。平面形は歪な隅丸長方形で、規模は長辺2.7m、短辺約2.5mを測る。主軸方位はN-44°-E、床面積は3.2㎡である。壁は北西・南東壁では鋭角的に立ち上がるが、南西・北東壁では緩やかに立ち上がる。壁高は北西壁で約80cm、北東・南西壁で約60~70cm、南東壁で約50cmを測る。埋土は21層に細分され、各層位の状況から人為的に埋め戻されたものと思われる。また、遺構南西側の埋土中位(16層)には貝層が形成されており、規模は0.9㎡、層厚は最大約15cmである。貝層は認識できる部分で廃棄が12単位・9層に細分された。主にイガイ科の一種で構成されており、1層は破碎した貝片がやや多く含まれる混貝土層、2~8層は残存状態の良好な貝で構成される純貝層、9層は比較的残存状態の良好な貝と破碎片が多く含まれる混貝土層となる。詳細については第二分冊を参照されたい。床面はほぼ平坦で堅く締まり、貼床が東側の大半に施されている。

カマドは北東壁のほぼ中央に付設されている。カマド周辺床面の精査過程において、調査員の指示が至ら

SI99

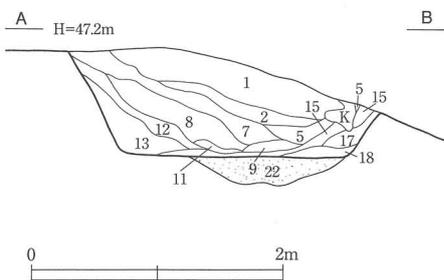


SI99

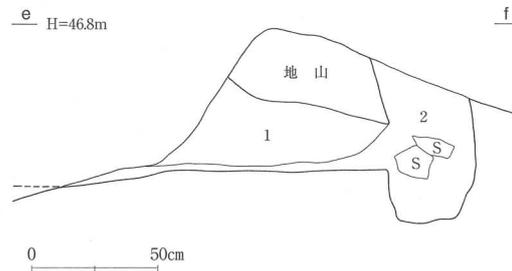
1. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり極めて有、粘性欠
2. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性やや有
3. 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまり有、粘性やや有
4. 2.5Y4/4 (オリブ褐) しまり・粘性有
5. 2.5Y3/3 (暗オリブ褐) しまり極めて有、粘性有、黄橙色土ブロック混入
6. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり極めて有、粘性無
7. 2.5Y4/3 (オリブ褐) しまり極めて有、粘性やや有、炭化物少量
8. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
9. 2.5Y5/3 (黄褐) しまりやや有、粘性無
10. 2.5Y3/1 (黒褐) しまり極めて有、粘性やや有、炭化物中量
11. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり極めて有、粘性無
12. 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまり極めて有、粘性欠
13. 2.5Y7/3 (浅黄) しまり有、粘性欠、暗オリブ褐色土混入
14. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性やや有、炭化物微量
15. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり極めて有、粘性有
16. 貝層
17. 2.5Y4/4 (オリブ褐) しまりやや有、粘性有
18. 2.5Y4/3 (オリブ褐) しまり極めて有、粘性有
19. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
20. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
21. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり極めて有、粘性無
22. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性欠、粘床

SI99 カマド

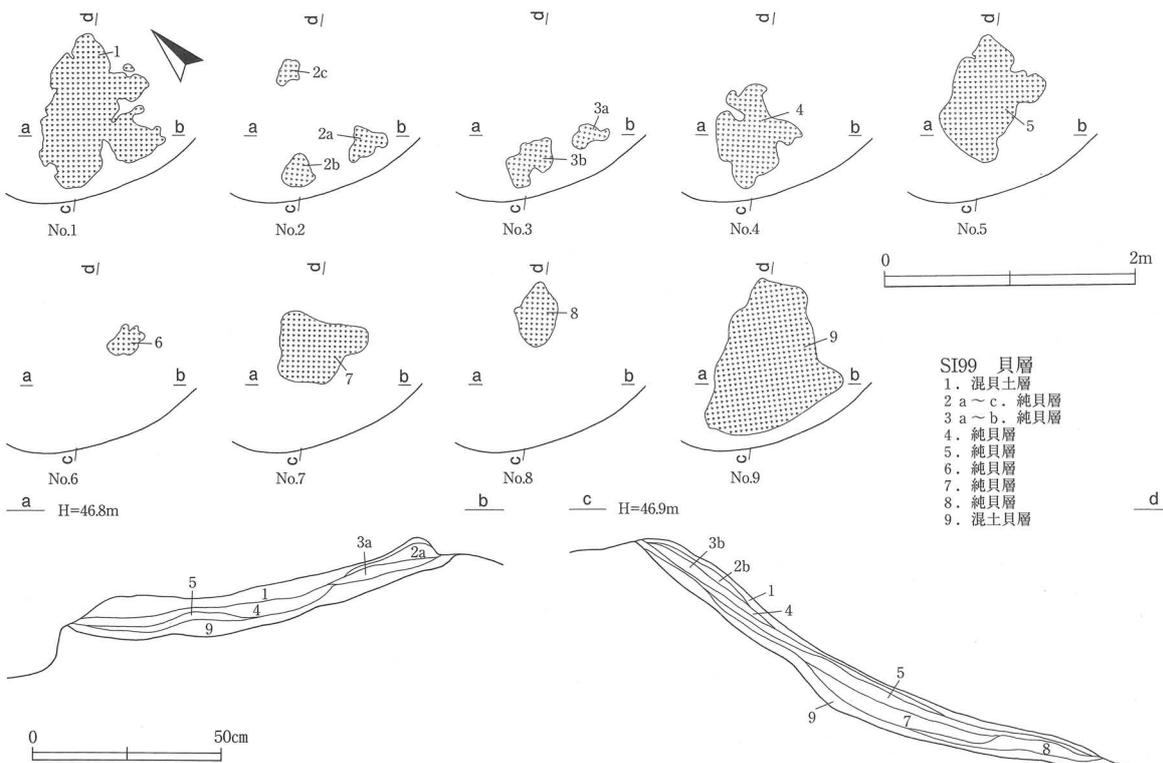
1. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無
2. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無



SI99 カマド



SI99 貝層



SI99 貝層

1. 混貝土層
- 2 a~c. 純貝層
- 3 a~b. 純貝層
4. 純貝層
5. 純貝層
6. 純貝層
7. 純貝層
8. 純貝層
9. 混貝土層

第224図 SI99竪穴住居跡

なかったため床面を掘り過ぎてしまい、袖部・燃焼部等を確認することができず、詳細は不明となってしまった。残存する煙道部については、長さ約115cm、径約25cmの削り貫き式で、先端に向かって概ね平坦である。煙出部は径約35～40cm、深さ約60cmを測り、煙道部より深く掘り込まれている。また、煙出部の埋土下位中には約15～20cm大の自然石2個が検出されたが、住居本体同様、廃棄されたものと思われる。

遺物は貝層出土の動物遺存体の他、土師器の甕形土器片が6点出土したのみで、RP1とカマド内出土の破片が接合した(257)などがある。その他、鉄滓がRM1・2の2点と貝層中より微量出土した。

S I 102 竪穴住居跡 (第225図、遺物図版100、写真図版169・287)

H区赤27(A)区の東側斜面、IXB-10j・10k・11j・11kグリッドに位置し、検出面はVI層である。本遺構は調査開始以前に設けられた木材伐採・搬出用の重機道により、遺構東側の大半が削平されている。検出時の状況及び重機道によって切られた断面の観察から、本遺構と南西側に隣接するS I 103との直接的な重複がみられなかったため、本遺構の精査を先行した。しかし、カマドの精査に臨んだ際、煙出部が検出できなかったため、S I 103の精査を行ったところ、これに伴う柵状施設が確認され、本遺構のカマド煙出部が柵状施設に切られる形で検出された。これにより、本遺構はS I 103より古いものと思われる。

残存部より、平面形は隅丸方形または隅丸長方形を呈すると思われる。規模は西壁で約3m、一部残存する北・南壁で約1.7mを測る。主軸方位はN-80°-Wで、床面積は4.1㎡以上と推測される。壁は鋭角的に立ち上がり、壁高は山側の西壁で約75cm、北・南両壁で約30～40cmを測る。埋土は12層に細分され、斜面上方から流入した自然堆積と思われる。床面はほぼ平坦で堅く締まり、貼床が東谷側に施されている。

カマドは西壁の南寄りに付設されているが、遺存状態は悪い。天井部・袖部の痕跡はなく、燃焼部のみが確認された。燃焼部は平坦で明褐色の被熱部分がみられるが、径約10cm、厚さ数mm程の微弱な円形の広がりであった。燃焼部の両脇には溝状の、その東側には円形の浅い掘り込みが左右対称に認められたが、おそらく芯材の抜き取り痕と思われる。煙道部は奥行約105cm、径約25cmの削り貫き式で、やや下り勾配で煙出部へと繋がる。煙出部は径約30cmで垂直に掘り込まれている。また深さは、前述の通り、S I 103柵状施設によりその一部を切られるが、検出面から105cm以上と推測される。

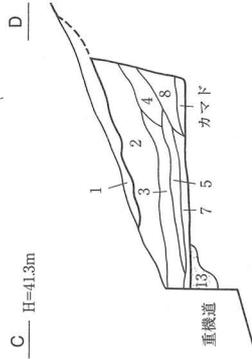
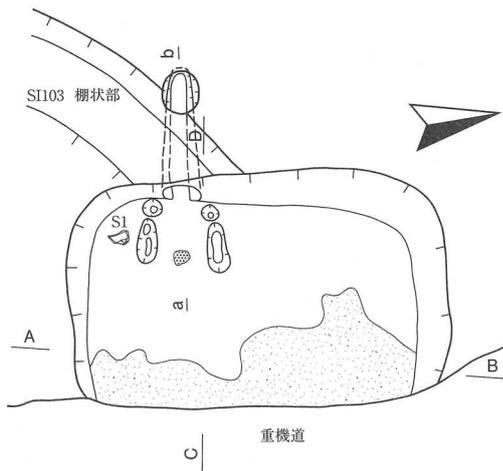
出土した遺物は少なく、土器は土師器の甕形土器片2点と坏形土器片1点が埋土中から出土した。その他、砥石としてカマド近くから出土したS 1(166)がある。

S I 103 竪穴住居跡 (第226図、遺物図版34・100、写真図版169・233・287)

H区赤27(A)区の東側斜面、IXB-10k・10lグリッドに位置し、検出面はVI層である。本遺構は調査開始以前の木材伐採及び搬出時に設けられた重機道によって、遺構東側の大半が削平されている。検出時の状況は、黒褐色土の不整なプランが大きく広がっていたため、竪穴状遺構2棟の重複と考えたが、精査の結果、竪穴住居跡1棟とその斜面上方に柵状の遺構と土坑(K1)が確認された。検出時当初、K1は単独の土坑と考えたが、柵状部分と共通に設定した断面ベルトから、柵状部分に伴うものであることが判明した。柵状部分は等高線と平行して構築されているが、竪穴住居跡の壁の辺は、等高線に直交も平行もしない、つまり45°傾いた状態で構築されている。そのため、竪穴住居跡と柵状部分は別々の遺構と考えたが、共通に設定した埋土断面の状況から、両者はお互い伴うものであると判断した。また前述の通り、本遺構はS I 102より新しく、本遺構を壊す形でS N46が構築されていることから、本遺構よりS N46が新しいと思われる。以上により、新旧関係は(新)S N46→S I 103→S I 102(旧)となる。

残存部分より、S I 103本体部分の平面形は隅丸方形または隅丸長方形を呈すると思われ、規模は一辺3～4m以上が推測される。主軸方位はN-30°-Wで、床面積は6.3㎡が残存する。残存する壁は鋭角的に

SI102

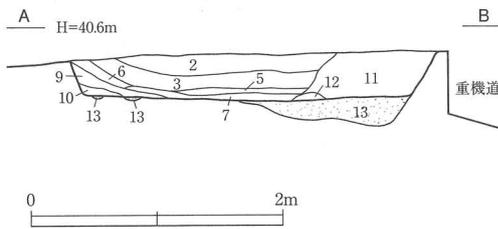


SI102

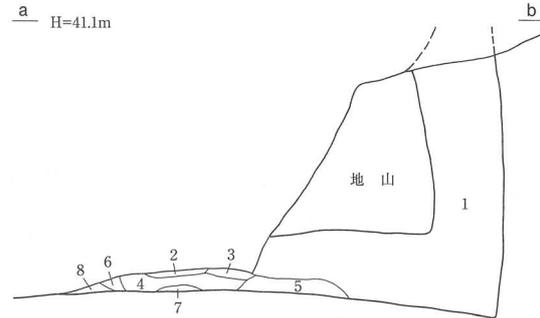
1. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり欠、粘性極めて有、SI103棚状施設埋土
2. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり欠、粘性有
3. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性やや有
4. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性やや有
5. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性やや有
6. 2.5Y5/3 (黄褐) しまり有、粘性やや有
7. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有
8. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性欠
9. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性欠、炭化物微量
10. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり欠、粘性やや有
11. 2.5Y4/6 (オリーブ褐) しまり有、粘性極めて有
12. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性やや有
13. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり・粘性やや有、貼床

SI102 カマド

1. 2.5Y5/3 (黄褐) しまり・粘性やや有
2. 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまり・粘性有
3. 10YR5/8 (黄褐) しまり極めて有、粘性有、天井部崩落土
4. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有、焼土粒・炭化物混入
5. 2.5Y7/3 (にぶい黄橙) しまり・粘性有
6. 10YR3/2 (暗褐) しまり・粘性有、炭化物少量
7. 10YR2/1 (黒) しまり極めて有、粘性有
8. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性有



SI102 カマド



第225図 SI102竪穴住居跡

立ち上がり、壁高は50~80cmを測る。本体部・棚状部分を含めた埋土の状況は、斜面上方より流入した自然堆積と思われる、14層に細分される。床面は平坦で堅く締まり、斜面下方の西側に貼床が施されている。また、南側には径約30cm、深さ約45cmのピットが1基検出された。棚状施設は本体部の斜面上方に位置し、北-南方向に延び、やや弓状を呈する。前述の通り、棚状部分はS I 102を切っていたものと思われるが、調査員の考察が至らなかったため、精査の順序が前後したことにより、その北端の詳細は不明となってしまった。その北端の一部はS I 102西-東断面ベルトから推定することができ、K 1と接する南端までの推測される長さは550cm以上で、幅は約40~50cmを測る。壁は山側に向かって鋭角的に立ち上がり、壁高は約50cmを測るが、谷側には壁はなく、本体部に向かってなだらかに下る。明確な棚状部分は、北側は調査の進行ミスによって詳細は不明、南側はK1と接することにより途切れるが、K 1の南側にも不明瞭な幾分緩い傾斜をもった範囲が続いている。これは自然崩落による窪み、またはその辺りを当時の人間が頻繁に移動したことによってできた窪みの可能性が考えられる。K1について、平面形は楕円形を呈し、山側は崩落したためか幾分開ける。規模は開口部約170×140cm、底部約135×110cmを測る。深さは最深部の山側では約50cm、棚状施設と接する北側では約35cm、住居本体に最も近い谷側では約20cmを測る。

カマドは北西壁に付設されているが、遺存状態は悪く、燃焼部のみ確認された。燃焼部に明確な窪みはなく、約50×40cmのにぶい橙色焼土が楕円形に広がる。その周囲には、袖部の芯材の抜き取り痕と思われる

ピットが3基検出された。また、カマドの東側においてRP1が出土したが、支脚として用いられた可能性が考えられる。煙道部は刳り貫き式で、奥行約140cm、径約25～30cmを測り、ほぼ平坦に先端へと向かう。煙出部は山側の棚状施設から本体部へと繋がるなだらかな部分に垂直に掘り込まれており、その一部はSN46によって切られている。規模は径約30cm、深さ約80cmで、煙道部底面より深く掘り込まれている。

遺物は、土師器は甕形土器片約20点と坏形土器片数点、須恵器片数点が出土している。主なものとして、甕形土器は、カマド近く出土のRP1の403、棚状部分の埋土中位出土の2片が接合した404、S I 104のRP1と棚状部分の埋土上位出土の破片が接合した406、坏形土器は、棚状施設の埋土中位出土の破片が接合した405などがある。その他、砥石が棚状部分の埋土中位より1点(167)、磨石が床面より2点(168・169)、鉄滓が埋土下位より微量出土している。

S I 104 竪穴住居跡、S X H12 廃土場 (第227・228図、遺物図版34・36・101、写真図版170・233・234・287)

S I 104は、H区赤27(A)区中央の尾根頂部、IX B-71・7m・8mグリッドに跨って位置し、検出面はVI層である。本遺構南東壁の精査過程において、重複するSN59を検出したが、その新旧関係は不明である。また、本遺構も赤27(B)区中央尾根頂部のもの同様、掘り込みが浅く、北西側の大半で壁が立たない。残存部より、平面形は隅丸方形または隅丸長方形を呈すると推測される。規模は遺存する南西壁で約6.3mを測り、一部残存する北西壁から4m以上と推測される。主軸方位はS-57°-Wで、床面積は17.4㎡以上が推測される。残存する壁はほぼ直角に立ち上がり、壁高は南西壁で最大約70cmを測るが、その他は北東方向に向うに従い減少する。埋土は4層に細分される自然堆積と思われる。床面は平坦で堅く締まる。

カマドは南西壁のほぼ中央に付設されており、遺存状態は比較的良好である。袖部は自然石を立位の状態で芯材として使用しており、ほぼ左右対称に配置されている。また、その上部には同じく自然石を架構に用いて、天井部を構成している。それらの内面は被熱の痕跡が著しく、外面にのみ黄褐色粘土で構築されている。燃焼部には、約50×35cmの不整な円形の明赤褐色焼土が広がる。燃焼部焼土と遺存する袖部の芯材の位置関係から、カマドの手前側にもう1組程、天井・袖部を構成する石組みがあった可能性が考えられるが、それに該当する抜き取り痕や崩落した自然石等は確認できなかった。煙道部は刳り貫き式で、その横断面形は方形に近く、一辺約40cm、奥行約120cmで、若干下り勾配で先端へと向かう。煙出部は径約30cm、深さ約100cmで垂直に掘り込まれている。

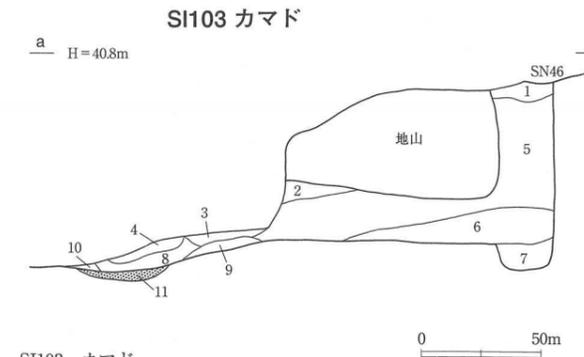
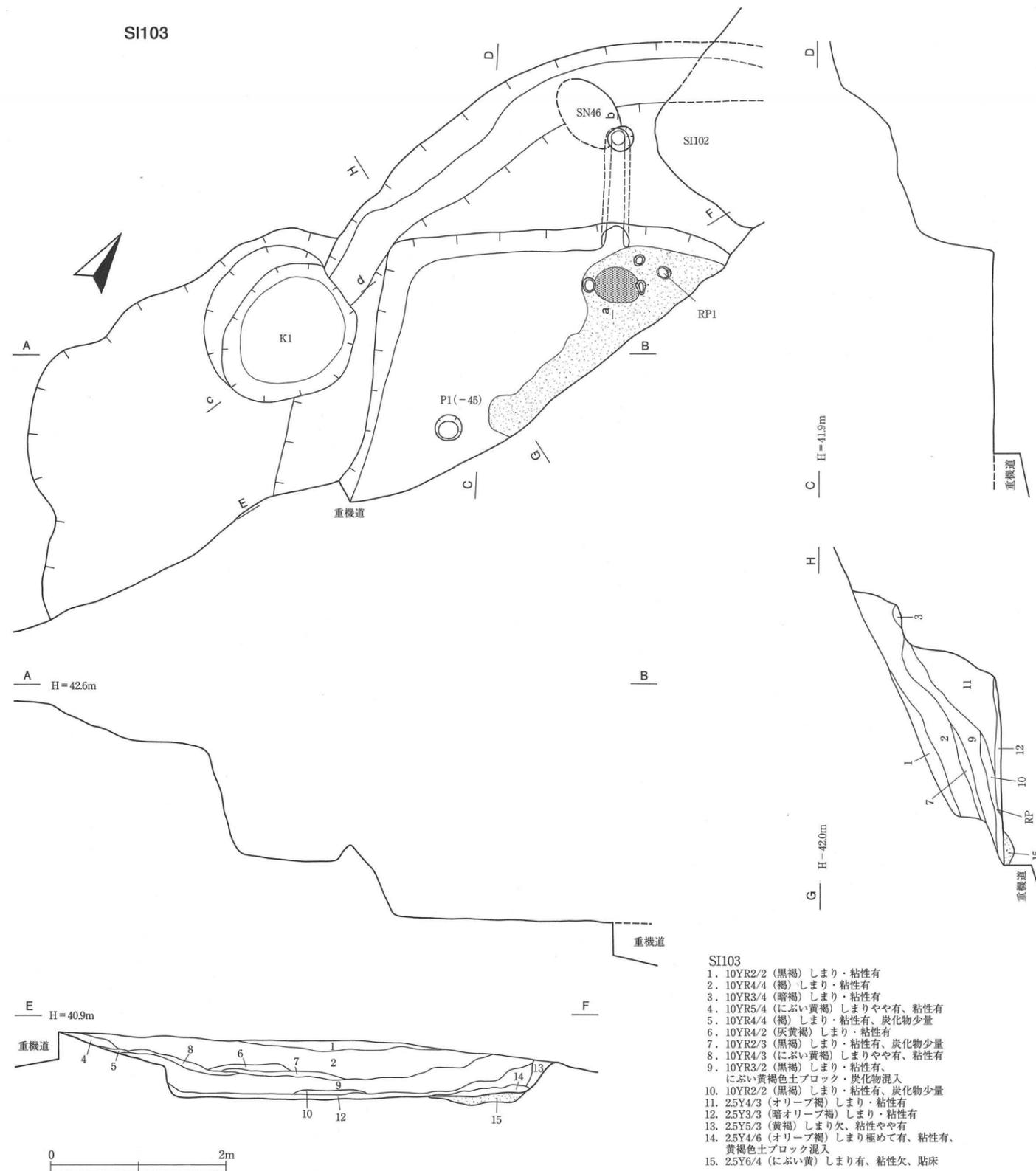
出土遺物の大半は、土師器の甕形土器片で、約25点出土している。その内、床面出土のRP1とS I 103棚状部分の埋土中位出土の破片が接合(406)した。その他、埋土中より磨石が1点(170)出土した。

S X H12はS I 104の北側の斜面部に位置し、検出面はIV・VI層である。検出時の状況から、人為的に埋め戻された竪穴住居跡と考えたが、精査の結果、斜面上方から廃棄された廃土の広がりであることが判った。またこの位置的状況から、尾根上のS I 104またはS I 105の掘削時の廃土と考えられる。平面形は歪な長楕円形で、規模は約14×4m、厚さは最大で約80cmを測る。層位は上位のマサ土、中位の暗褐色土、下位の褐色土に大別できる。

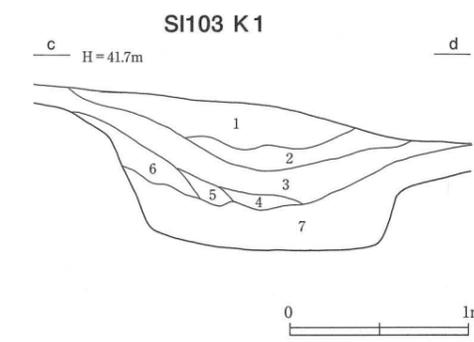
遺物は土師器片が約10点出土したのみで、土師器の甕形土器の埋土中位出土の(424・425)などがある。

S I 105 竪穴住居跡 (第229図、遺物図版35・101、写真図版170・233・287)

H区赤27(A)区尾根頂部のほぼ中央、IX B-8k・81・9k・91グリッドに跨って位置し、検出面はVI層である。本遺構の東半部には、平成10年度試掘調査時のトレンチが北東-南西方向に掘削されており、それにより北東・南西壁の一部は残存しない。平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺約4mを測る。主軸方位はS-53°-Wで、床面積は14.0㎡である。壁は鋭角的に立ち上がり、壁高は山側の南西壁で最大の約70cm



- SI103 カマド
- 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性有
 - 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまりやや有、粘性欠
 - 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性極めて有
 - 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性極めて有、焼土ブロック少量
 - 2.5Y5/4 (黄褐) しまり・粘性欠
 - 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有
 - 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり・粘性有
 - 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性極めて有
 - 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有、焼土粒少量
 - 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有
 11. 燃焼部焼土

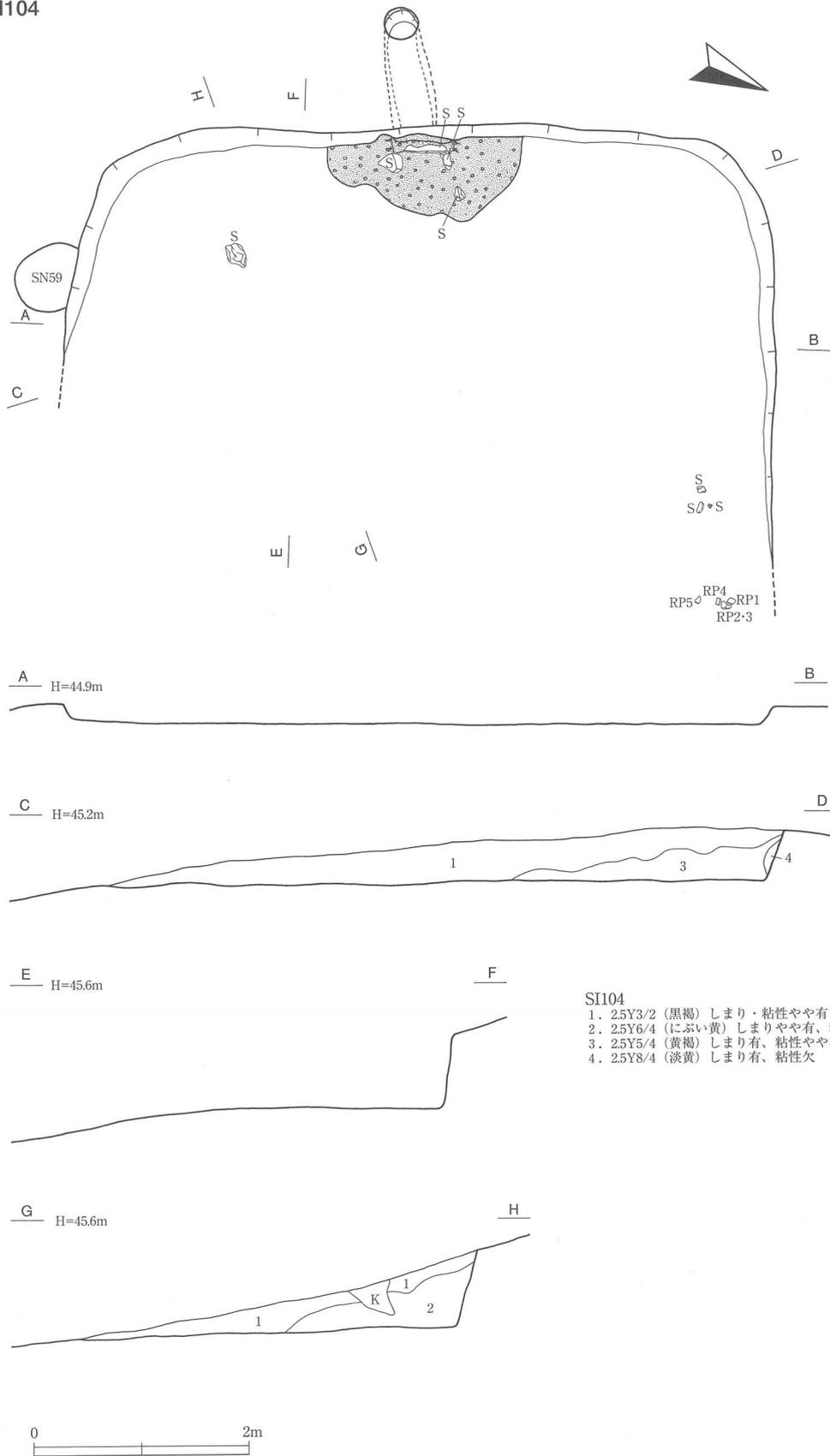


- SI103 K1
- 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり有、粘性やや有
 - 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまりやや有、粘性有
 - 2.5Y5/4 (黄褐) しまりやや有、粘性有
 - 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり欠、粘性有
 - 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性欠
 - 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性欠
 - 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり有、粘性やや有

- SI103
- 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有
 - 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有
 - 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有
 - 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性有
 - 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有、炭化物少量
 - 10YR4/2 (灰黄褐) しまり・粘性有
 - 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有、炭化物少量
 - 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性有
 - 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有、にぶい黄褐色土ブロック・炭化物混入
 - 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有、炭化物少量
 - 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性有
 - 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有
 - 2.5Y5/3 (黄褐) しまり欠、粘性やや有
 - 2.5Y4/6 (オリーブ褐) しまり極めて有、粘性有、黄褐色土ブロック混入
 - 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性欠、貼床

第226図 SI103竪穴住居跡

SI104

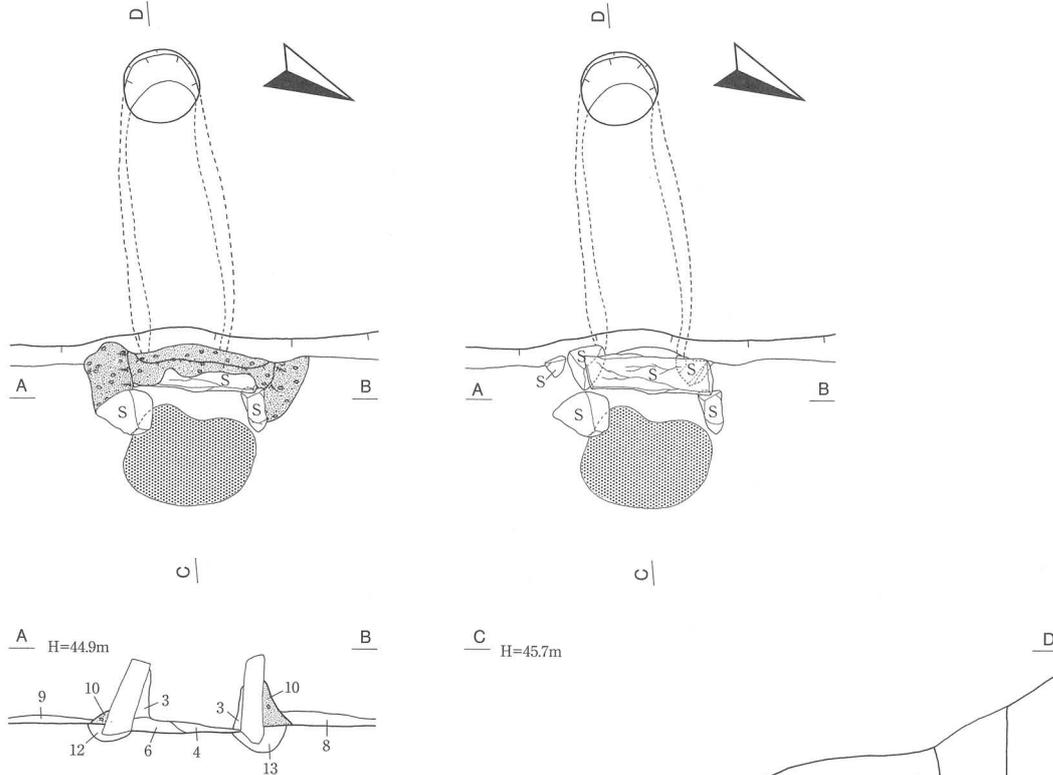


SI104

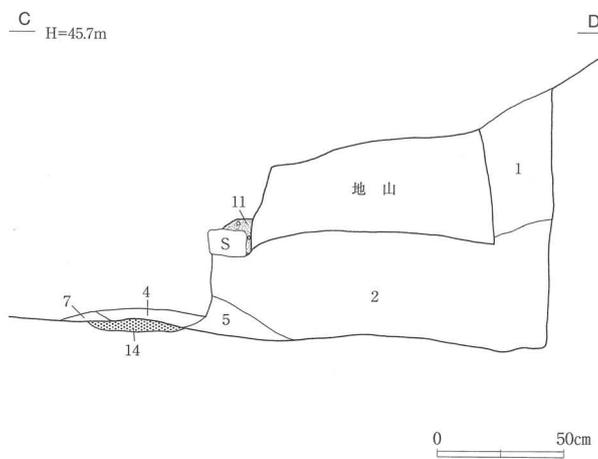
1. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性やや有
2. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまりやや有、粘性有
3. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性やや有
4. 2.5Y8/4 (淡黄) しまり有、粘性欠

第227図 SI104竪穴住居跡(1)

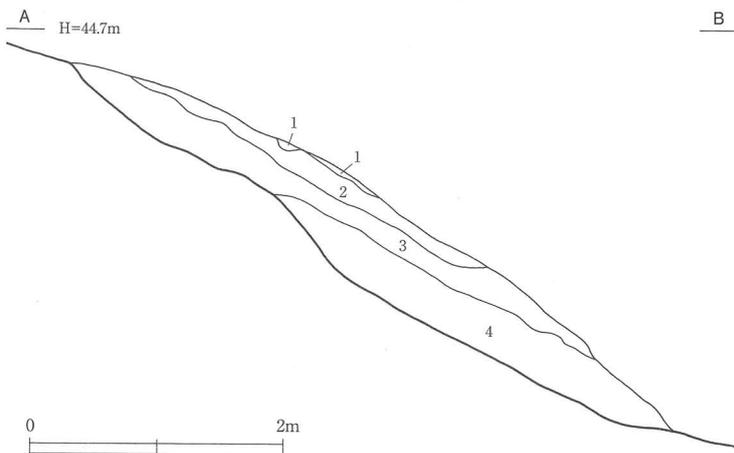
SI104 カマド



- SI104 カマド
1. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性やや有
 2. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり・粘性有
 3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性有
 4. 7.5YR4/6 (褐) しまり・粘性有
 5. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり・粘性有
 6. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性有、炭化物少量
 7. 2.5YR6/6 (橙) 焼土ブロック
 8. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有
 9. 10YR6/8 (明黄褐) しまり・粘性極めて有
 10. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性極めて有、カマド構築土
 11. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性極めて有、天井部構築土
 12. 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまり有、粘性やや有
 13. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり・粘性やや有
 14. 5YR5/8 (明赤褐) 焼土



SXH12



- SXH12
1. 10YR2/3 (黒褐) しまり欠、粘性有
 2. 10YR6/6 (明黄褐) しまり欠、粘性無
 3. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性やや有
 4. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有

第228図 SI104竪穴住居跡(2)・SXH12排土場

を測り、その他の壁は北東方向に向かって徐々に低くなる。埋土は17層に細分されるが、各層の状況や混入土の様子から、人為堆積の可能性が考えられる。遺構中央の埋土中位から獣骨片が、また遺構北隅近くでは、埋土下位より約40×10cm程の炭化材が検出された。この炭化材は鑑定の結果、クリであることが判った。床面は平坦で、締まりが認められる。床面施設等は検出されなかった。

カマドは南西壁のやや南寄りに付設されている。天井部・袖部は遺存しないが、自然石が立位の状態で遺存することから、芯材に用いられたものと思われる。また、検出時散在していた数個の自然石もこれらに使用された可能性が高い。燃焼部は約70×60cmの楕円形を呈し、皿状に窪んでいる。その中央には径35～45cmの略円形の浅黄橙色焼土が広がり、その厚さは約5cmを測る。燃焼部の南西方向には径15cm程のピットが確認でき、支脚痕と考えられる。煙道部は、試掘トレンチにより一部上半部が崩落しているが、削り貫き式で、奥行約150cm、径約30cmを測り、やや下り勾配で煙出部へと繋がる。煙出部は径約25cm、深さ約90cmではほぼ垂直に掘り込まれている。

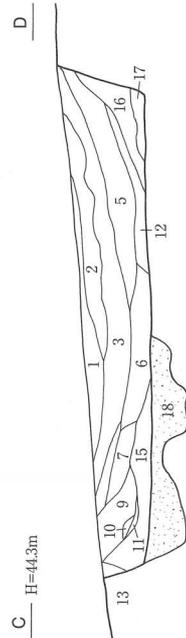
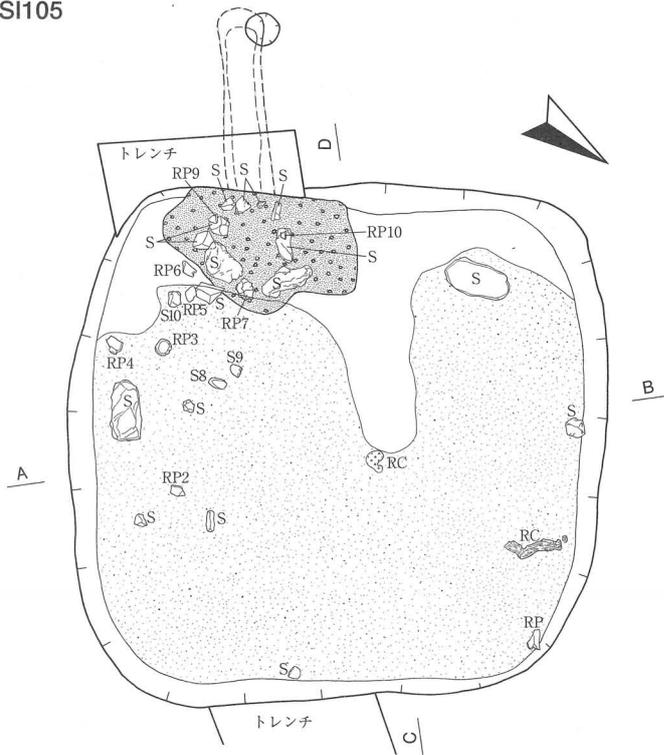
遺物は、土器は総量で大1袋程出土している。その大半は土師器の甕形土器で、主なものとして、カマド出土のRP1(411)、RP8-1(408)、RP8-2(410)、RP13(413)、RP3と埋土中出土の破片が接合した(409)、RP15と埋土中出土の破片が接合した(412)、埋土中出土の(407)などが挙げられる。土師器の坏形土器は数点で、主なものは埋土上位出土の(414)、床面出土のRP2(461)などがある。須恵器は甕形土器片1点(416)が埋土中位より出土したのみである。その他、磨石が床面出土のS8(172)・S9と埋土中から2点(171)の計4点、砥石が床面出土のS10の1点(173)、羽口片が埋土中より1点出土した。また埋土中位より出土した動物遺骸は鑑定の結果、種は不明だが、哺乳綱に属するものであることが判った。

S I 107 竪穴住居跡 (第230・231図、遺物図版35・101・127、写真図版171・234・287・307)

H区赤27(A)区南側の尾根上平坦部、IXB-5n～6oグリッドに位置し、検出面はVI層である。本遺構も赤27(B)区中央尾根頂部の遺構同様、掘り込みが浅く、南東側に至っては壁が立たず、この周辺の地形から人為的に改変された様子が見受けられることから、整地された可能性が高く、本遺構上面が削平されたものと思われる。精査過程において、北西部分で炭化物の広がりを確認したため、個別に断面ベルトを設定し作業したところ炭窯(SW101)が切り合っていることが判った。またこのSW101の精査後、方形の土坑(SK267)の重複も明らかになった。埋土断面の観察から、これら3基の遺構の新旧関係は(旧)本遺構→SK267→SW101(新)となる。この他、北隅部分においてSI118との重複も見られるが、平面プランより本遺構がSI118を切っていることが判った。また、遺構中央からやや南方向の部分においてSK268が検出された。当初は床面において確認できたため、本遺構より古いもの、若しくは本遺構に伴う床面施設の可能性が考えられたが、その規模・形態を他遺構と比較・検討した結果、前者であると判断した。

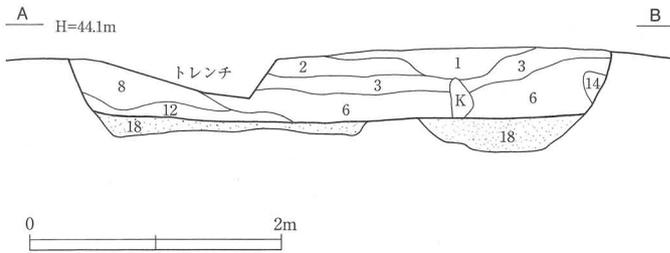
平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長辺約7.9m、短辺約4.6mを測る。主軸方位はW-35°-Nで、床面積は22.2㎡である。壁は鋭角的に立ち上がり、壁高は山側の北西壁で約50cmを測り、その他は南東方向に進むに連れ減少する。埋土は11層に細分される自然堆積と思われる。床面は概ね平坦で堅く締まりがある。床面施設として、西隅から北西壁及び南西壁沿いにかけて、幅約20cm、深さ約5cm程の壁溝が確認された。また、土坑K1・2の2基と地床炉A～Cの3基、柱穴P1・2の2基がそれぞれ検出された。K1は遺構のほぼ中央に位置し、開口部径約60cmの円形を呈する。断面形は平底鍋形で深さは約30cmを測る。北側においてP1と重複が見られ、その平面状況からはP1の方が新しく、これによりP1は本遺構に伴う柱穴である可能性は低く、前述した本遺構廃絶後の整地時への関連が示唆される。また、P2は北西壁際に位置しており、本遺構に伴う可能性も考えられるが、P1と同様の可能性も想定され断定はできない。K2は遺構

SI105



SI105

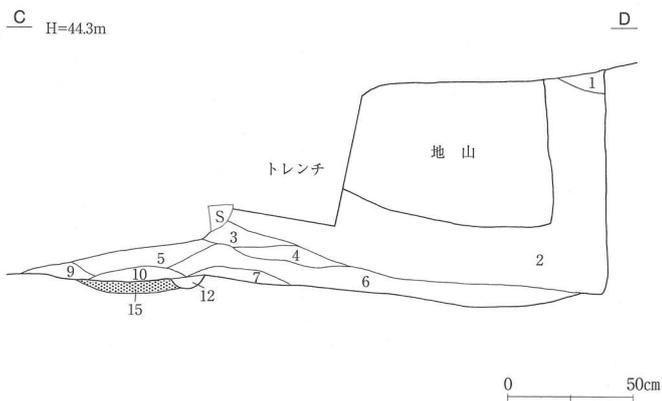
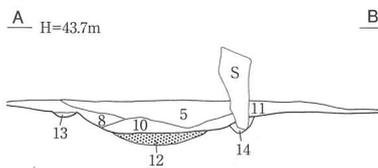
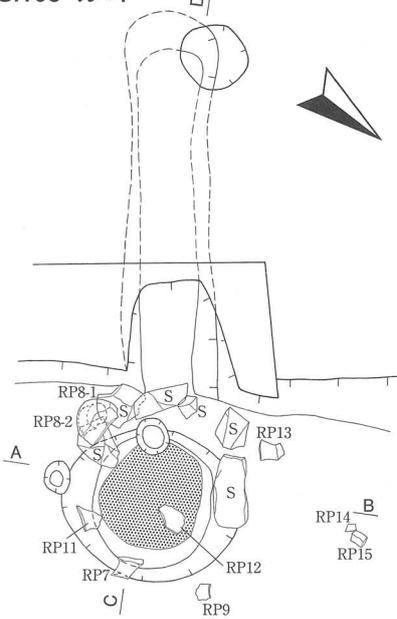
1. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性有
2. 2.5Y8/4 (淡黄) しまりやや有、粘性欠
3. 2.5Y3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有
4. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり・粘性有
5. 2.5Y7/6 (明黄褐) しまり・粘性無
6. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性やや有
7. 2.5Y7/4 (浅黄) しまりやや有、粘性欠
8. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性無
9. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり・粘性やや有、褐色土混入
10. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり極めて有、粘性やや有
11. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり欠、粘性有
12. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり・粘性有、炭化物微量
13. 2.5Y8/4 (淡黄) しまり・粘性欠
14. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり・粘性欠
15. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり・粘性やや有
16. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性無
17. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性有、カマド崩落構築土
18. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、貼床



SI105 カマド

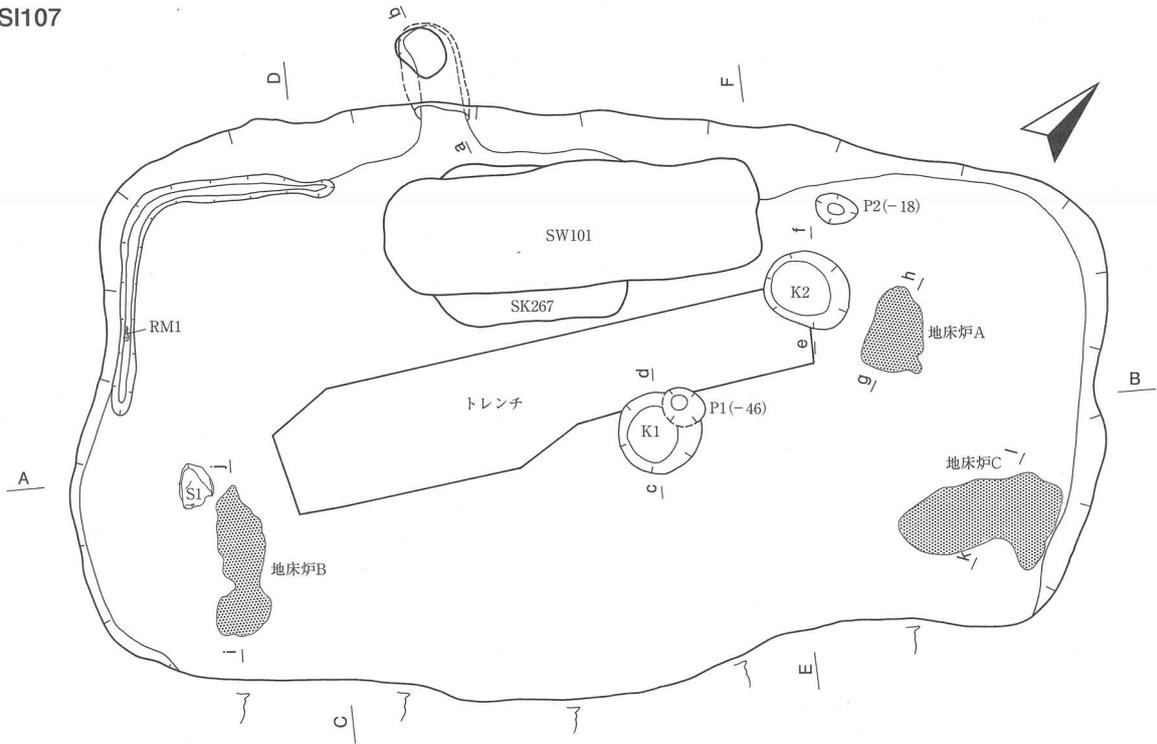
1. 2.5Y7/6 (明黄褐) しまり欠、粘性やや有
2. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり・粘性欠
3. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性やや有
4. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまりやや有、粘性欠
5. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性やや有、焼土粒少量
6. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり・粘性有、焼土粒少量
7. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまりやや有、粘性欠
8. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性有
9. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有、炭化物少量
10. 7.5YR5/6 (明褐) 崩落焼土塊
11. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり・粘性有
12. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性やや有
13. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり・粘性やや有
14. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり・粘性欠
15. 7.5YR8/4 (浅黄橙) 燃烧部焼土

SI105 カマド

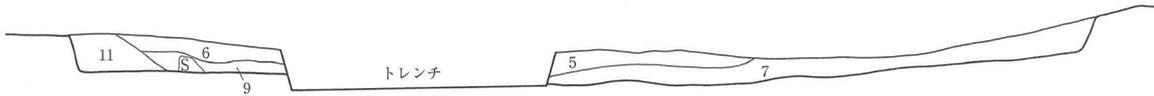


第229図 SI105竪穴住居跡

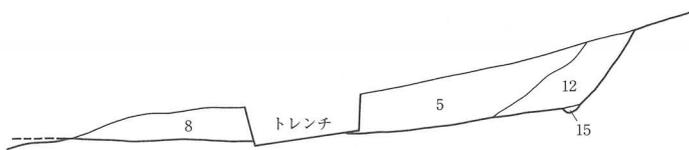
SI107



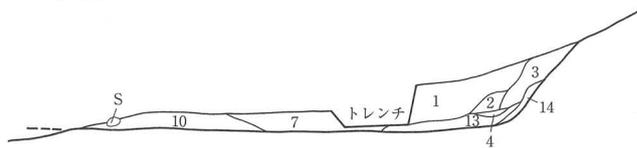
A H=47.0m



C H=47.4m



E H=47.4m

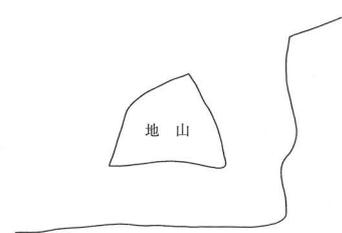


SI107

1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) SW101埋土
2. 10YR5/3 (にぶい黄褐) SW101埋土
3. 2.5Y5/4 (黄褐) SW101埋土
4. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) SW101埋土
5. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有、にぶい黄橙色土微量
6. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有
7. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有・粘性有
8. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有、炭化物微量
9. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有
10. 10YR2/2 (黒褐) しまり極めて有、粘性有、炭化物微量
11. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性やや有
12. 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまり有、粘性やや有
13. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり・粘性有
14. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性やや有
15. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性欠、壁溝

SI107 カマド

a H=47.4m



第230図 SI107竪穴住居跡(1)

北側に位置し、開口部径約60～70cmの略円形を呈する。断面形は深底鍋形で深さは約35cmを測る。この東側に地床炉Aが位置しており、その規模は約70×40cmで明黄褐～にぶい橙色焼土の不整な広がりである。これらの位置関係から、鉄生産関連の施設の可能性が考えられるが、鍛造剥片・鉄滓等は確認されなかった。地床炉Bは遺構南側に位置し、約120×30cmのにぶい橙色焼土が不整に広がる。付近に30cm前後の自然石(S1)が残存していることから、鍛錬鍛冶炉の可能性も考えられたが、鍛造剥片等は検出されず、S1にも使用痕跡は確認できなかった。地床炉Cは遺構東隅近くに位置し、規模約130×50cmで不整形に淡橙色焼土が広がる。他の地床炉2基同様、鉄生産に関わる鉄滓・鍛造剥片等は確認できなかった。

カマドは遺構北西壁の南寄りに付設されているが、SW101及びSK267の重複によりその本体部分は遺存せず、煙道・煙出部のみ確認できる。煙道部は削り貫き式で、長さ約100cm、径約45×25cmで、ほぼ平坦に先端へと向かう。煙出部は径約35～45cm、深さ約75cmで垂直に掘り込まれている。

遺物について、土器は土師器の甕形土器片が小袋で1袋程出土しており、その内、埋土中出土の2片が接合した(417)のみである。その他、磨石2点(174・175)が床面及び埋土中から、不明鉄製品が埋土中から2点、鉄鏃がRM1(158)と床面から1点(159)、鉄滓が床面から微量出土した。

S I 108 竪穴住居跡 (第231図、写真図版171)

H区赤27(A)区の北端、IXB-10h・10iグリッドに位置する。本遺構は調査開始以前に設けられた木材伐採・搬出用の重機道により、遺構の大部分が削平されており、重機道削平面において燃焼部焼土を確認したことにより、本遺構の存在を認識した。精査の結果、埋土はほとんど残存せず、辛うじて南隅とそれに繋がる南西・南東壁の一部と貼床範囲、カマド煙道部などが残存しているのみである。南西壁の精査においてSK284が検出されたが、平面状況より本遺構を切っていることから、新しいと判明した。

残存部分より推測される平面形・規模は、一辺3.7m以上を測る隅丸方形または隅丸長方形と思われる。主軸方位はS-34°-Wで、床面積は推定15.6㎡以上である。一部残存する南側壁は、鋭角的に立ち上がり、壁高は約70cmを測る。床面の状態は既に掘削されているため不明であるが、貼床が北東側に残存している。カマドは南西壁の中央からやや北西寄りに位置すると思われる。残存状態は極めて悪く、燃焼部焼土の痕跡のみ確認できる。燃焼部焼土は、被熱により橙色を帯び、約40×30cmの楕円状に確認できるが、厚さは数mm程度しか残存しない。煙道部は径約30cmを測り、長さは残存部から約80cmが推測され、やや下り勾配で先端へと向かう。煙出部は径約30cm、深さ約80cmで垂直に掘り込まれている。

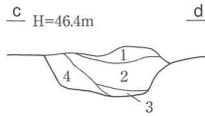
遺物は、貼床内より土師器の甕形土器片が2点、鉄塊系遺物が1点と南東壁付近の床面より鉄滓が少量出土したのみである。

S I 113 竪穴住居跡 (第232図、写真図版172)

H区赤27(B)区北側の尾根頂部から東側斜面にかけての肩口、IXB-2q・3q・2r・3rグリッドに位置し、検出面はVI層である。本遺構はSI96、SI97A及びSN43と重複する。検出プランから、SI96及びSI97A煙出部に切られており、またSN43は本遺構埋没後に形成された焼土遺構であることから、その新旧関係は(新)SI96・SI97A・SN43→本遺構(旧)となる。以上の重複とその立地により、本遺構の残存状態は悪い。

残存部及び貼床範囲より、平面形は隅丸方形、規模は一辺約4mが推定される。主軸方位はカマドがSI96に切られていることにより詳細は不明だが、およそ南西方向にあり、床面積は8.6㎡以上と推定される。残存する壁は鋭角的に立ち上がり、壁高は約30cmを測る。埋土は6層に細分され、各層位の状況から自然堆積と思われる。床面は平坦で堅く締まり、遺構北隅と斜面下方側に貼床が施されている。

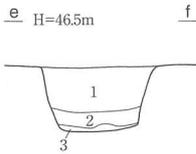
SI107 K1



SI107 K1

1. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性やや有
2. 10YR5/2 (灰黄褐) しまり・粘性やや有、灰黄褐ブロック混入
3. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
4. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有・粘性無

SI107 K2

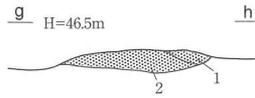


SI107 K2

1. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無
2. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性無
3. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無



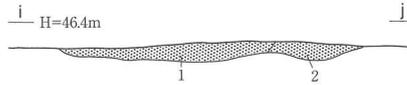
SI107 地床炉A



SI107 地床炉A

1. 5YR5/8 (明赤褐) 焼土
2. 5YR6/3 (にぶい橙) 焼土

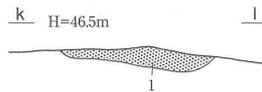
SI107 地床炉B



SI107 地床炉B

1. 5YR6/4 (にぶい橙) 焼土
2. 5YR7/4 (にぶい橙) 焼土

SI107 地床炉C



SI107 地床炉C

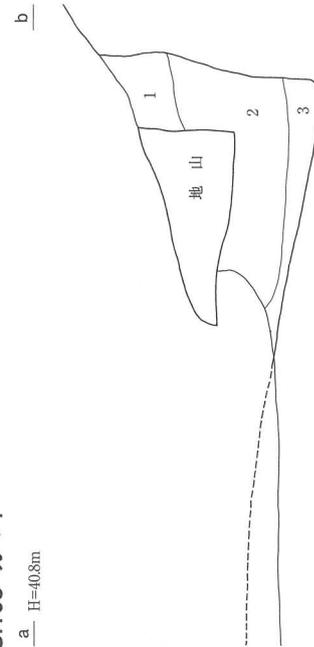
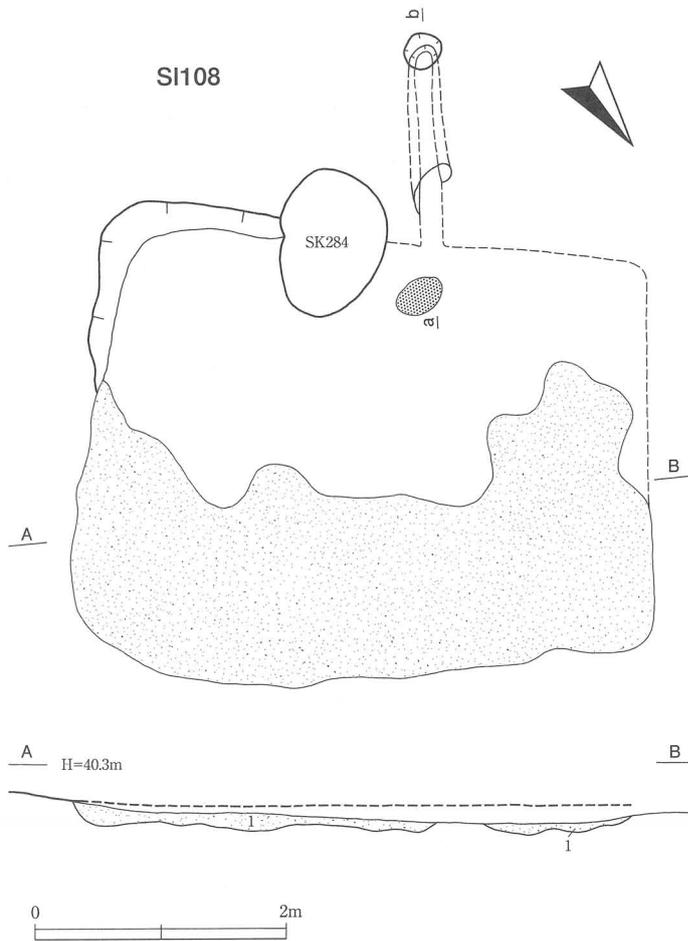
1. 5YR8/3 (淡橙) 焼土

SI108

1. 10YR7/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性無、貼床

SI108 カマド

1. 10YR6/6 (明黄褐) しまり欠、粘性有
2. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり欠、粘性無
3. 10YR3/2 (黒褐) しまり欠、粘性有、褐色土ブロック混入
4. 7.5YR6/6 (橙) 燃焼部焼土



SI108 カマド

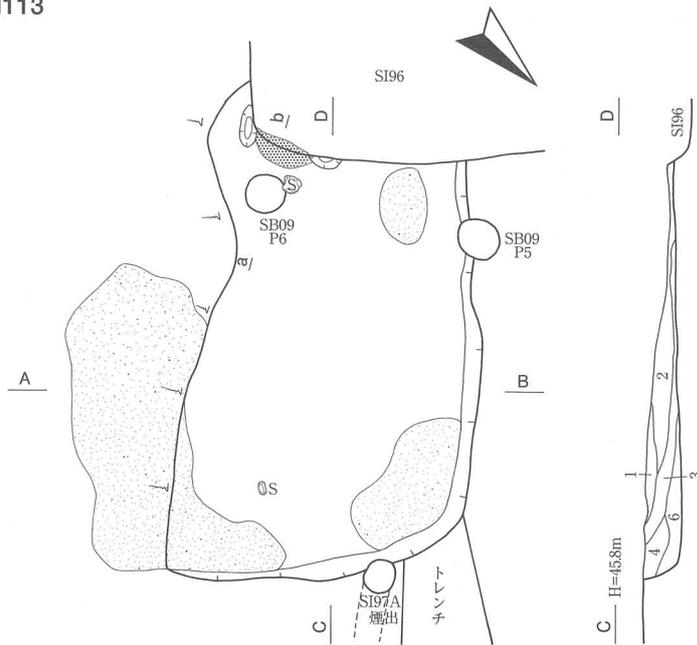
a H=40.8m

第231図 SI107竪穴住居跡(2)・SI108竪穴住居跡

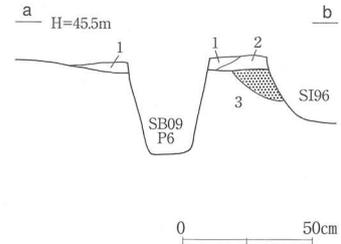
カマドは南西壁に付設されているが、前述の通り残存状態は不良である。僅かに燃焼部の痕跡の赤褐色焼土が残存しており、その被熱の厚さは約10cmを測る。その両脇にはそれぞれ小ピットが確認でき、袖の芯材の抜き取り痕と考えられる。煙道・煙出部については不明である。

遺物は極少量で、土師器の甕形土器片が埋土中より1点出土したのみである。

SI113



SI113 カマド

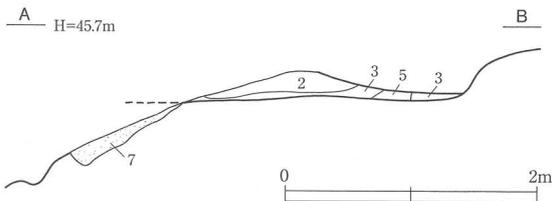


SI113

1. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまり・粘性有
2. 2.5Y7/6 (明黄褐) しまり・粘性有
3. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり欠・粘性有
4. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり・粘性有
5. 2.5Y5/3 (黄褐) しまり有、粘性やや有
6. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり・粘性有
7. 2.5Y5/4 (黄褐) しまりやや有、粘性欠、貼床

SI113 カマド

1. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性やや有
2. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり有、粘性欠
3. 5YR4/8 (赤褐) 燃焼部焼土



第232図 SI113竪穴住居跡

SI114竪穴住居跡 (第233図、写真図版172)

H区赤27(B)区南側の尾根上、ⅧC-20aグリッドに位置し、検出面はIV層及びVI層である。本遺構北西壁上半部においてSI88と重複するが、検出時の平面プランの状況から本遺構の方が古いと思われる。煙道部から北東壁においてもSK222と重複しており、埋土断面の状況からSK222に切られていることが判明した。南西壁において精査を行った際、埋土と壁の色調が酷似していたため判断を見誤り、壁を掘り過ぎてしまったため、南西壁は断面ベルトより推定したものである。また、本遺構にはカマドが2基残存しており、残存状態の比較的良好なものをカマドA、不良なものをカマドBとした。

平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長辺推定4.2m、短辺約3.2mである。主軸方位はカマドAはN-40°-E、カマドBはS-40°-Wで、床面積は7.1㎡である。壁は鋭角的に立ち上がり、北西・南西壁の上

半部は崩落のためやや外傾する。壁高は北西・南西壁で約100～110cm、北東・南東壁で約55～65cmを測る。埋土は24層に細分されるが、上位に黄褐～明黄褐色土、中・下位に褐～黄褐色土と大別でき、各層位状況から人為堆積の可能性が高い。床面はほぼ平坦で堅く締まり、貼床が中央部を中心に施されている。

カマドAは北東壁の東寄りに付設されている。天井・袖部の痕跡は確認できないが、左袖部分において自然石が立位の状態で残存していることから、袖部の芯材として用いられたものと思われる。精査の結果、掘り込んで据えられていたことが判ったが、内側に向かってかなり傾いており、崩落または破却によってこのような状態になったものと考えられる。燃焼部はほぼ平坦で、径約40cm、厚さ約5～6cmの明赤褐色焼土が円形に広がる。煙道・煙出部は前述の通りSK222に切られているため、下半部のみ残存する。奥行約110cm、径約30cmが推測され、やや下り勾配で先端へと向かう。カマドBは南西壁のやや西寄りに付設されているが、残存状態は不良で煙道・煙出部のみ残存する。南西壁を掘り過ぎたため、奥行は推定150cm、径約30cmの削り貫き式で、ほぼ平坦で先端へと向かう。煙出部は径25cm、深さ約125cmで垂直に掘り込まれている。以上の2基のカマドの状況から、カマドBからAへの造り替えが行われたものと推測される。

遺物は、土師器の破片が約10点と鉄滓がカマドAから1点出土したのみである。

S I 118 竪穴住居跡 (第234図、遺物図版58、写真図版173・247)

H区赤27(A)区南側の尾根頂部、IX B-5n・6nグリッドに位置し、検出面はVI層である。本遺構は南側部分でS I 107と重複しており、切られている。またS I 107同様、削平整地された可能性が考えられる。残存部より、平面形は隅丸長方形を呈し、規模は一辺約3.5mを測る。主軸方位はW-5°-N、残存する床面積は12.7㎡である。壁はほぼ直角に立ち上がり、壁高は約20～50cmを測る。埋土は10層に細分されるが、層位の状況から人為的に埋め戻されたものと思われる。床面は平坦で堅く締まり、貼床が中央から北東側の大部分に施されている。床面施設として、西側の中央にK 1土坑が検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は約100×70cmである。断面形は平底鍋形をし、深さは約30cmを測る。

カマドは遺構西壁の南寄りに付設されているが、その一部はS I 107の重複により損壊している。右袖部の芯材として自然石3個が立位の状態で用いられている。燃焼部は前述のS I 107の重複により詳細は不明だが、残存部から推定するに、ほぼ平坦で橙色焼土が径30cm以上の円形状に広がるものと思われる。支脚痕は確認できないが、K 1底面より土製支脚が検出されており、本カマドで使用された可能性が高い。煙道部は削り貫き式で、長さ約140cm、径約20cmで、先端へと向かってやや下り勾配である。煙出部は径約25cm、深さ約80cmで垂直に掘り込まれている。

出土した遺物はほとんど無く、前述のK 1底面より出土した土製支脚1点(12)のみである。

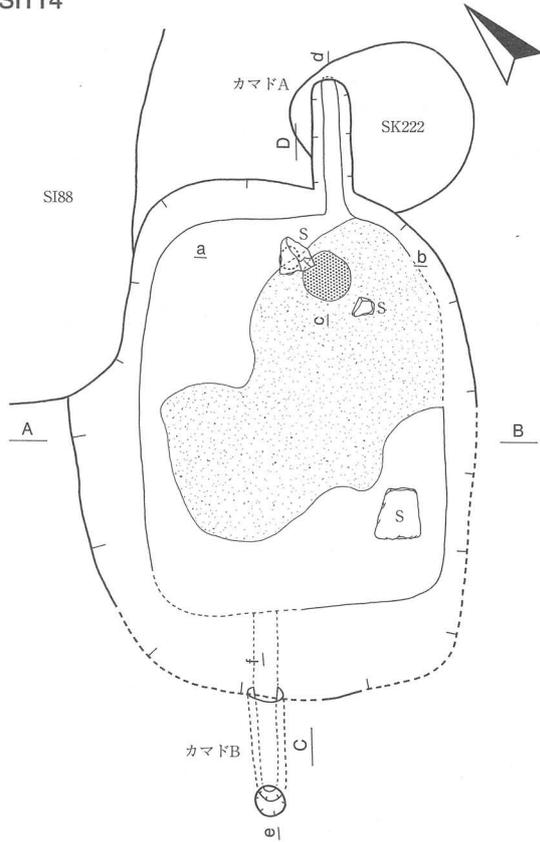
S I 136 竪穴住居跡、S XW35 鉄生産関連炉跡

(第235・236図、遺物図版39・103・128、写真図版174・237・289・307・322)

H区赤27(D)区洞部の斜面上方、VIII C-16k・16lグリッドに位置し、検出面はIV層である。本遺構は傾斜地に構築されているため、北東側は崩落により遺存しない。検出時において、この北東側で還元色焼土が確認できたため、鉄生産関連施設を想定して精査を開始した。また、本遺構北西壁においてS N60との重複が確認されたが、平面プランから本遺構がS N60を切っていることが判った。

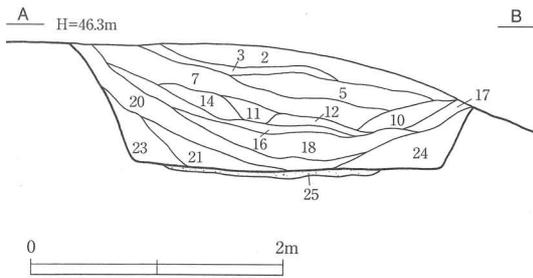
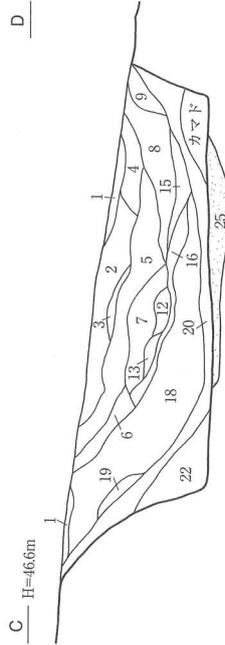
S I 136は、残存部より平面形は隅丸長方形を呈すると思われる、規模は長辺約5.3m、短辺3.1m以上が推測される。主軸方位はS-35°-Wで、床面積は推定14.4㎡以上である。壁はほぼ直角に立ち上がり、壁高は最大で斜面上方の南西壁で約80cmを測るが、北東方向に進むに従い減少する。埋土は14層に細分されるが、全体的に黒褐色土を基調とした自然堆積と思われる。床面はほぼ平坦で締まりが認められる。また、床面に

SI114

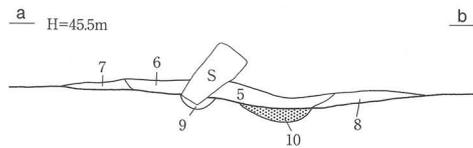


SI114

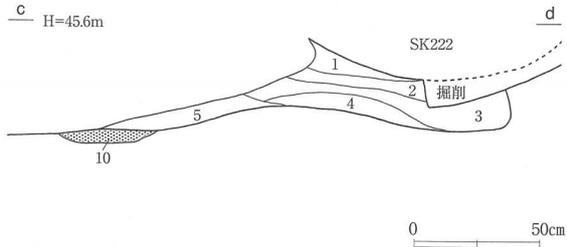
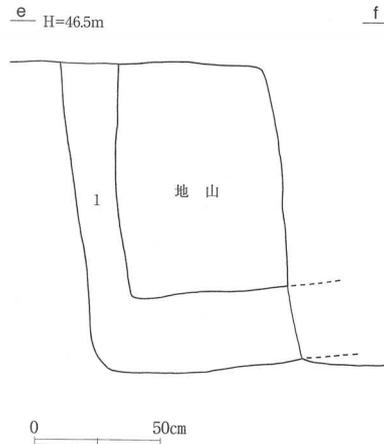
1. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性有、炭化物少量
2. 10YR5/8 (黄褐) しまりやや有、粘性有、炭化物少量
3. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまり・粘性有
4. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまり有・粘性やや有、淡黄色土ブロック中量
5. 10YR4/6 (褐) しまり欠、粘性極めて有
6. 10YR4/4 (褐) しまり欠、粘性極めて有、炭化物微量
7. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性極めて有、黄褐色土ブロック混入
8. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性極めて有、炭化物微量
9. 10YR5/6 (黄褐) しまり欠、粘性極めて有、炭化物微量
10. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性有、炭化物微量
11. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性有、黄褐色土ブロック混入
12. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性極めて有
13. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性極めて有、黄褐色土ブロック混入
14. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性極めて有
15. 10YR5/6 (黄褐) しまり欠、粘性有、淡黄・明黄褐色土ブロック混入
16. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性極めて有、黄褐色土ブロック混入
17. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり・粘性有
18. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性極めて有
19. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有
20. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性有
21. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり極めて有、粘性無
22. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性極めて有
23. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性無
24. 10YR3/2 (黒褐) しまり有、粘性無
25. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、貼床



SI114 カマドA



SI114 カマドB



SI114 カマドA

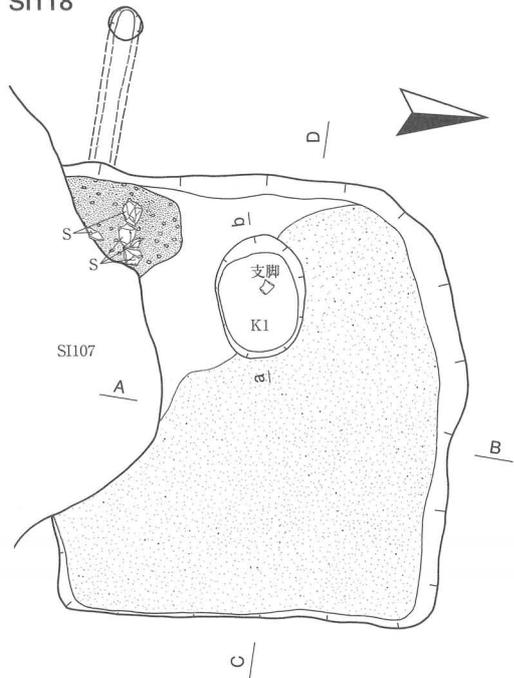
1. 2.5Y4/6 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性無
2. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり欠、粘性やや有
3. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無
4. 10YR3/3 (暗褐) しまり欠、粘性やや有、炭化物少量
5. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性有
6. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性極めて有、崩落構築土
7. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
8. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有
9. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性やや有
10. 5YR5/8 (明赤褐) 燃焼部焼土

SI114 カマドB

1. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性有

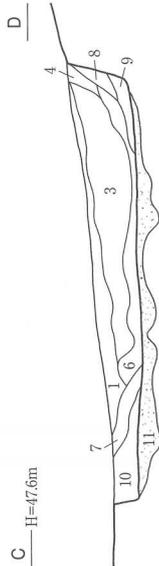
第233図 SI114竪穴住居跡

SI118

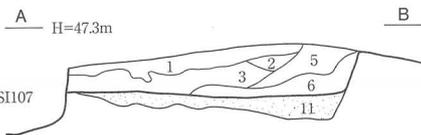
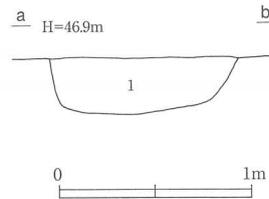


SI118

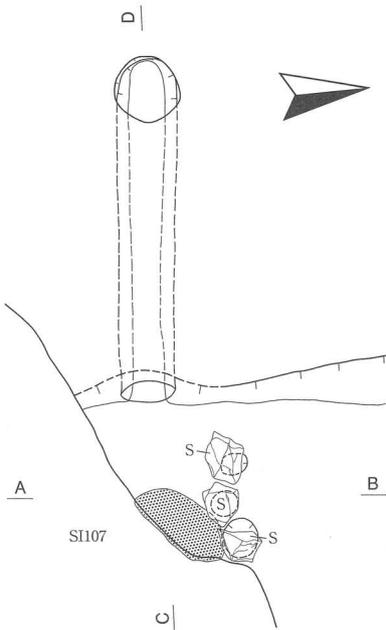
1. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり極めて有、粘性有
2. 2.5Y4/6 (オリーブ褐) しまり・粘性有
3. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性欠
4. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性やや有
5. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり有、粘性やや有
6. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまり・粘性有
7. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり極めて有、粘性無
8. 2.5Y7/6 (明黄褐) しまり・粘性有
9. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまり・粘性有
10. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性無
11. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり有、粘性無



SI118 K1

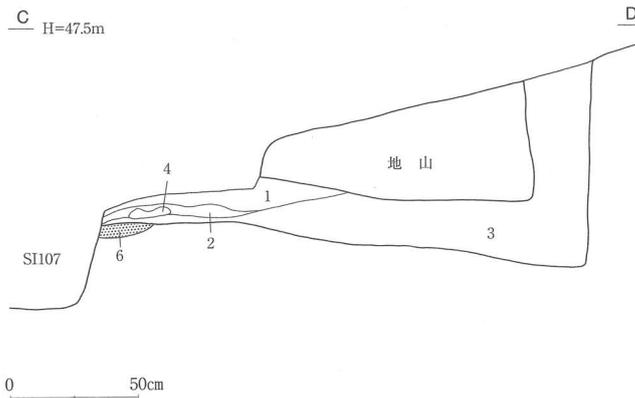
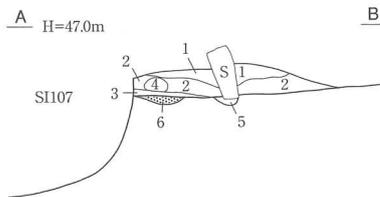


SI118 カマド



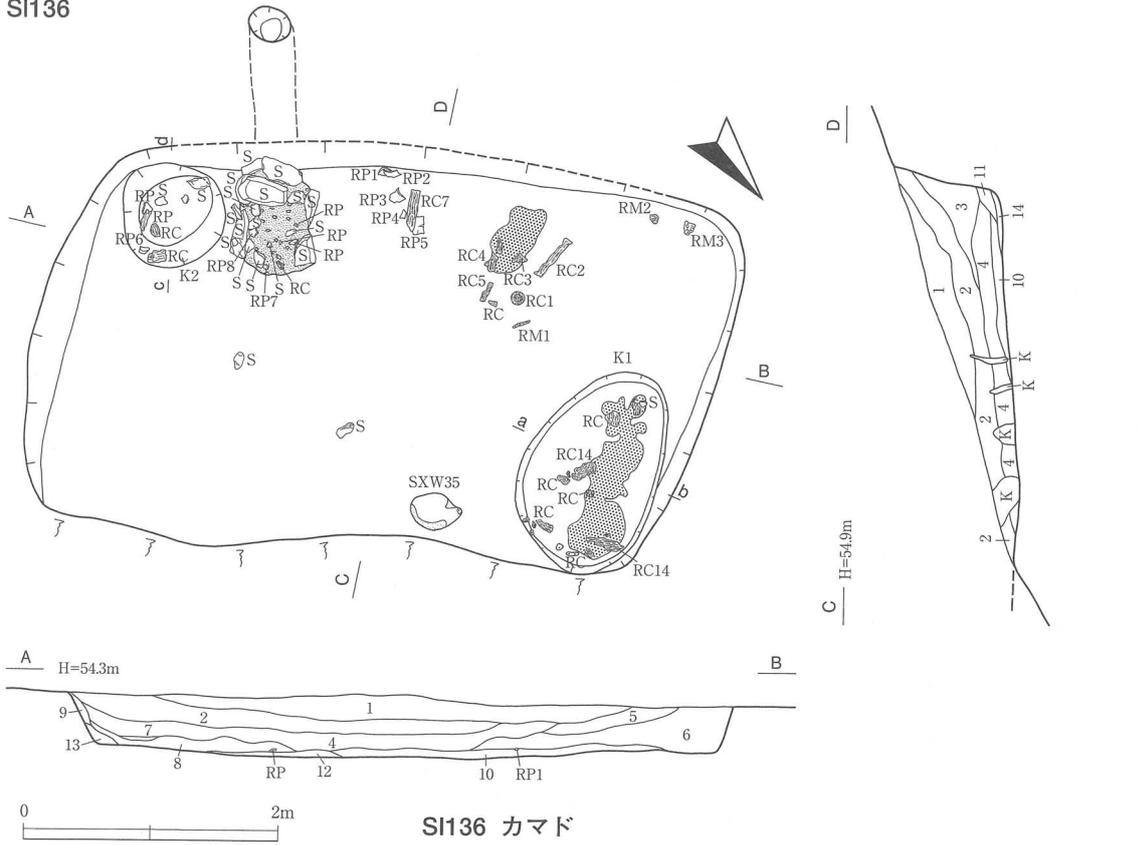
SI118 カマド

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
2. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性やや有
3. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性やや有
4. 5YR5/6 (明赤褐) しまり極めて有、粘性有、天井部崩落焼土塊
5. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性やや有、芯材の抜き取り痕
6. 5YR6/6 (橙) 燃焼部焼土



第234図 SI118竪穴住居跡

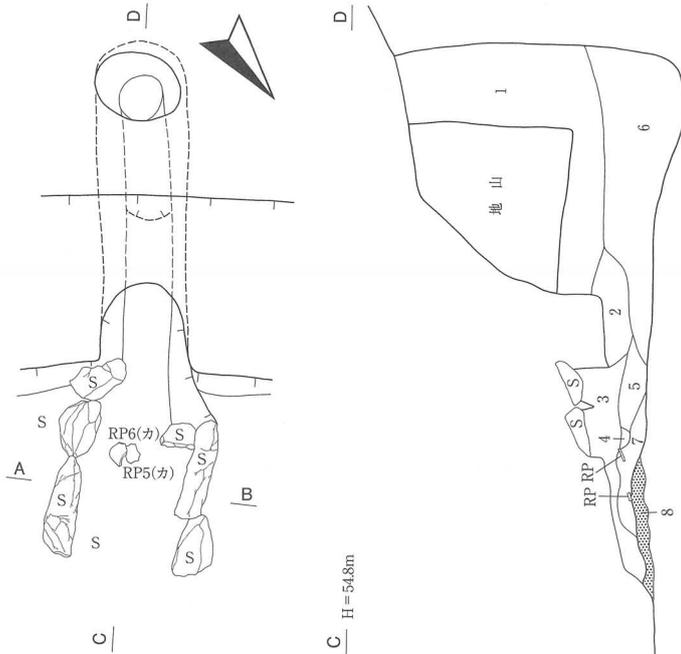
SI136



SI136 カマド

SI136

- 1. 10YR2/2 (黒褐) しまり欠、粘性有
- 2. 10YR3/2 (黒褐) しまり欠、粘性有、炭化物微量
- 3. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有
- 4. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有、炭化物微量
- 5. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有
- 6. 10YR3/2 (黒褐) しまり欠、粘性有、褐色土少量
- 7. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性やや有
- 8. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有、炭化物少量
- 9. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有
- 10. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有
- 11. 10YR2/3 (黒褐) しまり欠、粘性有
- 12. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有
- 13. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり欠、粘性有
- 14. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有



SI136 カマド

- 1. 10YR3/1 (黒褐) しまり欠、粘性有
- 2. 10YR3/4 (暗褐) しまり欠、粘性有
- 3. 10YR3/3 (暗褐) しまり欠、粘性有
- 4. 5YR6/6 (橙) 焼土ブロック
- 5. 10YR4/4 (褐) しまり欠、粘性有、炭化物少量
- 6. 10YR3/3 (暗褐) しまり欠、粘性有
- 7. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有
- 8. 5YR6/6 (橙) 焼土部焼土

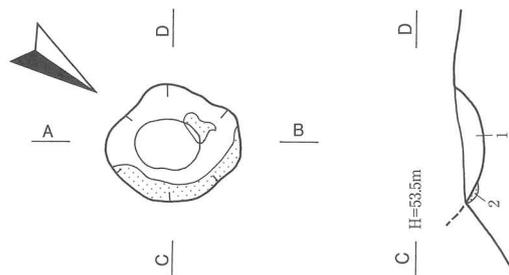
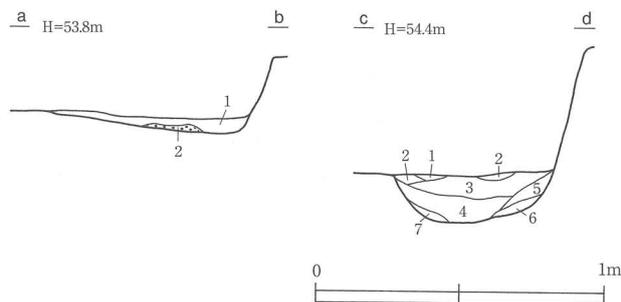


第235図 SI136竪穴住居跡・SWX35鉄生産関連炉跡(1)

SI136 K1

SI136 K2

SXW35



SI136 K1

1. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有
2. 5YR6/6 (橙) 焼土

SI136 K2

1. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり極めて有、粘性有
2. 10YR3/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性有
3. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性有、黄橙色ブロック・焼土粒・炭化物少量
4. 10YR2/2 (黒褐) しまり欠、粘性有、黄橙色ブロック・焼土粒・炭化物少量
5. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有、黄橙色ブロック混入
6. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり欠、粘性有
7. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり欠、粘性有、灰白色土・焼土ブロック混入

A

H=53.5m

B



0 50cm

SXW35

1. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有
2. 2.5GY2/1 (黒) 還元焼土

第236図 SI136竪穴住居跡・SXW35鉄生産関連炉跡(2)

は住居の構築材と思われる炭化材や赤褐色焼土が点在しており、本遺構は焼失住居と判断できる。残存する炭化材は径10cm程のものが多く、梁等に使用されたものと思われる(RC 2・5・7・10等)。その他、木椀(RC 1)が炭化して検出された。これらを分析鑑定した結果、クリであることが判った。床面施設として、土坑 K 1・2 が検出された。K 1 は遺構北側に位置し、径約170×100cmの楕円形を呈する。断面形は皿状で、深さは約5cmである。底面には焼失時の赤褐色焼土が広がり、炭化材も点在している。近接する SXW35 に関連する施設とも考えられるが、規模・形態を同様の遺構と比較した場合、その可能性は低く、用途等も不明である。K 2 は遺構南隅に位置し、径80cm前後の円形を呈する。断面形は椀形で、深さは約30cmを測る。カマド脇にあることから貯蔵穴として機能したと推測されるが、埋土中及び底面には炭化材が確認されず、検出面に炭化材が数点残存していることから、焼失以前に K 2 は埋没していた可能性が考えられる。

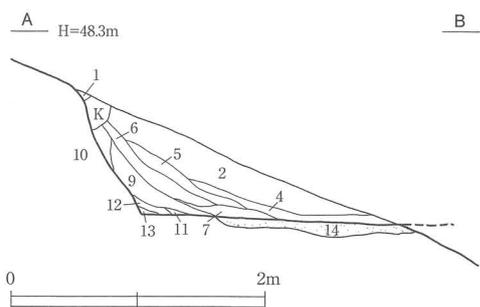
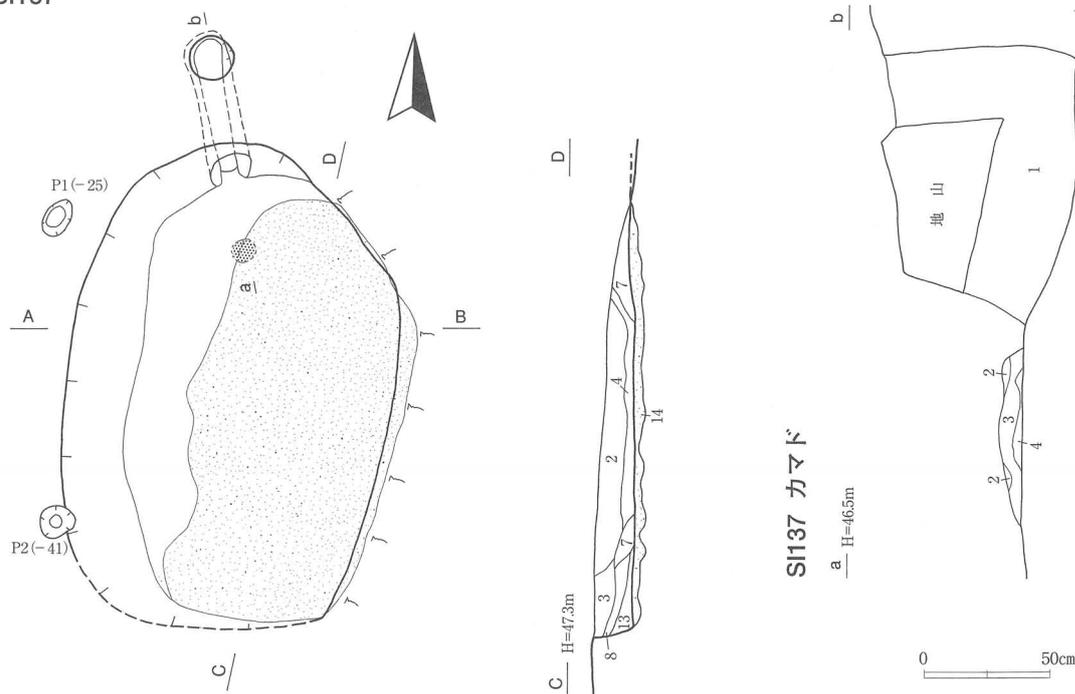
カマドは南西壁の南寄りに付設されており、遺存状態は比較的良好である。天井部の架構には自然石が用いられており、焼失時には現存していたと思われるが、その後の埋没過程において崩落している。袖部にも芯材として自然石数個が使用されており、これらの内側には被熱痕跡が見られることから、外側にのみ粘土を構築したものと思われるが、天井部同様、崩落したためか構築粘土は遺存していない。燃焼部は当初、焼土の広がりが確認できなかったため、使用頻度が少ないことにより焼土が形成されなかったと考えたが、実測図及び写真から再検討した結果、認識不足により燃焼部周辺を掘り過ぎていたことが判った。よって詳細は不明であるが、断面図から推察すると、約55×35cmの橙色焼土の広がりで、厚さは5cm前後と思われる。煙道部は刳り貫き式で、奥行約140cm、径約35cmを測り、先端へ向かってやや下り勾配である。煙出部は

径約30cm、深さ約110cmを測り、垂直に掘り込まれている。

S X W35は遺構北東側において検出されている。検出時の状況は前述の通り、谷側部分において既に還元色焼土が確認でき、また周辺からは少量の鍛造剥片も視認された。これにより、鍛錬鍛冶施設を想定して精査を行ったが、他に伴う施設等は検出されなかった。平面形は略円形を呈し、規模は径30～35cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは5cm程度である。埋土は黒褐色土の単層で、鍛造剥片を若干含む。底面は極めて強く締まり、還元色焼土が北東側壁上半部に広がる。以上の規模・形態及び状況から、本遺構は鍛錬鍛冶炉を伴う竪穴住居跡と判断される。

遺物は、土器は土師器の甕形土器片が約40点、坏形土器片が5点、須恵器の甕形土器片が2点出土した。その内、甕形土器の主なものとして、RP2・5が接合した(467)、カマド出土の破片が接合した(468)、カマド出土のRP8の(469)、坏形土器として、カマドRP5の(470)などがある。その他、砥石が埋土下位より1点(192)、羽口片がカマド埋土から2片と埋土中から4片、鉄製品として釘(楔?)が床面(RM1)から1点(174)、鉄塊系遺物がカマドから1点、鉄滓が床面(RM2・3)から2点と埋土中・カマド・K1・S X W35からそれぞれ少量、鍛造剥片がS X W35から少量出土した。

SI137



SI137

1. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性やや有
2. 10YR2/3 (黒褐) しまり欠、粘性有
3. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有
4. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有
5. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性やや有
6. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有
7. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有、
黄褐色土粒少量
8. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有
9. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性有
10. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性有
11. 10YR4/2 (灰黄褐) しまり・粘性有、
明黄褐色土粒少量
12. 10YR6/6 (明黄褐) しまり欠、粘性有
13. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有、
炭化物少量
14. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有、貼床

SI137 カマド

1. 10YR4/4 (褐) しまり欠、粘性有
2. 10YR6/8 (明黄褐) しまり・粘性有
3. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有、黄褐色土・焼土混入
4. 10YR5/8 (黄褐) しまり有、粘性極めて有

第237図 SI137竪穴住居跡

S I 137 竪穴住居跡 (第237図、遺物図版128、写真図版175・307)

H区赤27(D)区の洞部斜面中腹、ⅧC-18h・18iグリッドに位置し、検出面はⅣ層である。本遺構は急斜面に位置することから、斜面下方の東側の大半は崩落により遺存しない。立地的に当初は何らかの工房跡と考え精査を開始したが、結果、カマドを伴う竪穴住居跡であることが判明した。遺存部から平面形は隅丸方形または隅丸長方形を呈すると推測される。規模は長辺約3.8mを測り、短辺は南壁より2.4m以上が推測される。主軸方位はN-13°-Wで、床面積は6.4㎡が遺存する。山側の西壁はやや膨らみをもって立ち上がり、南壁においてはほぼ垂直に立ち上がる。壁高は西壁で最大の約80cmを測るが、その他の壁は東方向へ向かうに従い減少する。埋土は13層に細分され、斜面上方から流入した自然堆積と思われる。床面は平坦で堅く締まり、貼床が中央から斜面下方にかけて施されている。床面施設等は検出されなかったが、遺構外側に柱穴と思われるピットが2基確認された。

カマドは北壁の西寄りに付設されている。遺存状態は悪く、天井・袖部は確認できず、燃焼部のみ確認された。燃焼部は平坦で窪みはなく、径約20cmの赤褐色焼土が円形に広がるが、弱い焼成で厚さは1cmにも満たない。煙道部は刳り貫き式で、長さ約120cm、径約30cmで、下り勾配で先端へと向かう。煙出部は径約35cm、深さ約80cmで垂直に掘り込まれている。

遺物は、埋土下位より鉄鐸1点(175)と鉄滓が埋土中・床面・貼床から微量出土した。

S I 138 竪穴住居跡 (第238図、遺物図版38・59、写真図版175・235・248)

H区赤27(B)区南部の東側斜面中腹、ⅨC-3bグリッドに位置し、検出面はⅣ層である。本遺構は重機によって尾根上の表土掘削を終えた後、その降り道として削平した際に検出されたため、埋土の一部は掘削されている。また、本遺構は急斜面地に構築されているため、斜面下方の東側は遺存しない。本遺構西側において、重複するSW91が検出されたが、埋土断面の状況から本遺構廃絶後に構築されたものと思われる。残存部から平面形は隅丸方形または隅丸長方形を呈すると推測される。規模は西壁長で約3mを測り、北壁で約0.8m、南壁で約0.5mが残存する。主軸方位はN-78°-Wで、残存部分の床面積は2.9㎡である。残存する壁は鋭角的に立ち上がり、検出面からの壁高は約20~40cmを測る。埋土は暗褐~黒褐色土の5層に細分される自然堆積と思われる。床面は平坦で締まりが認められる。貼床は確認できなかったが、本遺跡の急傾斜地に遺存する他の遺構を見てみると、斜面下方に貼床が施されている例が多いことから、本遺構にも施行されていた可能性が考えられる。床面施設として、遺構北東部に径約30cm、厚さ2~3cm程のにおい赤褐色の地床炉が円形に広がる。遺構北西隅付近には径約20cm、深さ約15cmの柱穴1基が確認された。

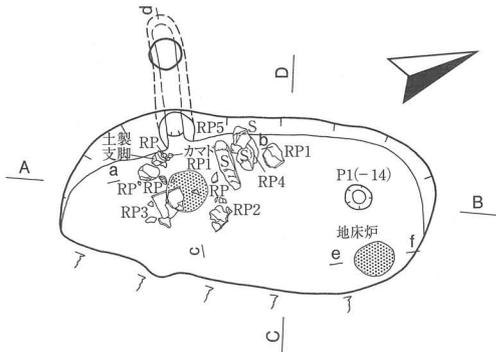
カマドは西壁の南寄りに付設されている。検出時の状況は、自然石数個が崩落により散在していた。精査の結果、その中の一つが立位の状態で見えられており、袖部の芯材として使用されている。断面の観察から、その両側は褐色土で構築されているが、掘り込み等はみられなかった。燃焼部は平坦で、径約30cm、厚さ2~3cm程度の赤褐色焼土が円形に広がる。支脚痕は確認できなかったが、カマド付近より土製支脚が検出されている。煙道部は刳り貫き式で、長さ約105cm、径約30cmを測り、下り勾配で先端へと向かう。煙出部は径約25cm、深さ約95cmでやや斜めに掘り込まれている。

遺物は、土師器は甕形土器片のみが約10点程出土した。主なものとして、床面出土のRP1・2・3・カマドRP1がそれぞれ接合した(450)、RP5の(451)などがある。その他、カマド近くから前述の土製支脚が1点(16)、埋土中から刀子状鉄製品が1点、鉄滓が埋土中及びP1から微量出土した。

S I 139 竪穴住居跡、SK I 39 竪穴状遺構 (第239・240図、遺物図版36・72、写真図版176・234・258)

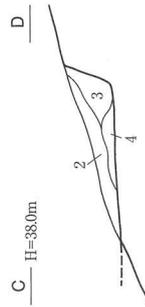
H区赤27(A)区南部の東側斜面中腹、ⅨB-6p・6q・7p・7qグリッドに位置し、検出面はⅥ層である。

SI138

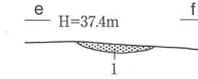


SI138

1. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性有
2. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有、褐色土ブロック混入
3. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、黒褐色土ブロック少量
4. 10YR2/2 (黒褐) しまり極めて有、粘性有
5. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、褐色土ブロック混入

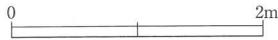
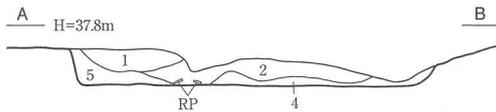


SI138 地床炉



SI138 地床炉

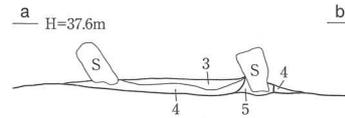
1. 5YR4/4 (にぶい赤褐) 焼土



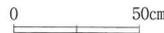
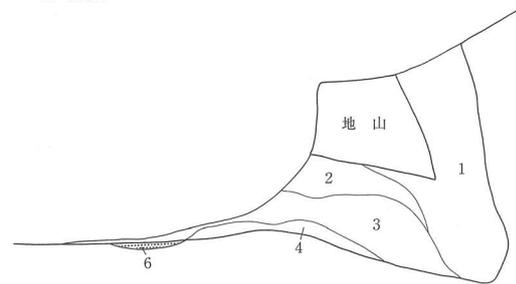
SI138 カマド

1. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性やや有
2. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性やや有
3. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性やや有
4. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性やや有
5. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性やや有、袖部構築土
6. 5YR4/8 (赤褐) 燃焼部焼土

SI138 カマド



SI138 カマド

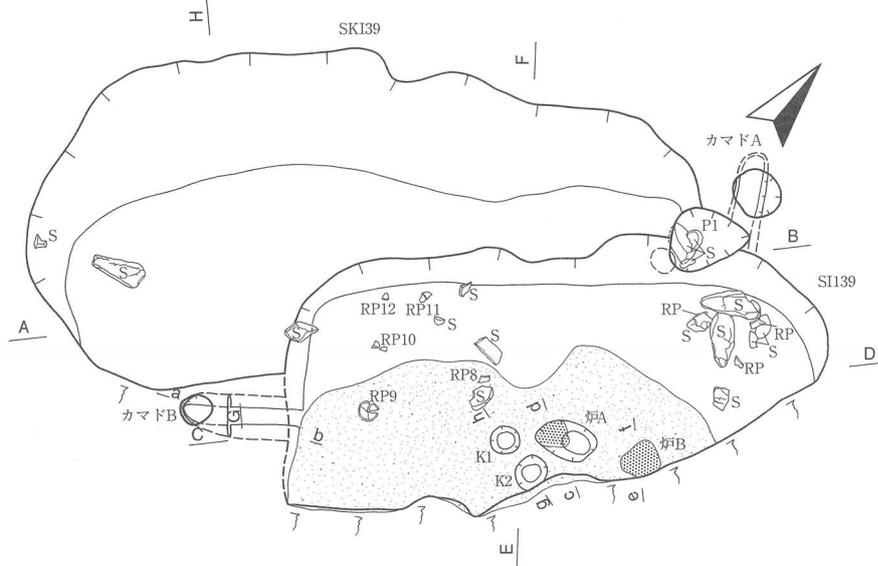


第238図 SI138竪穴住居跡

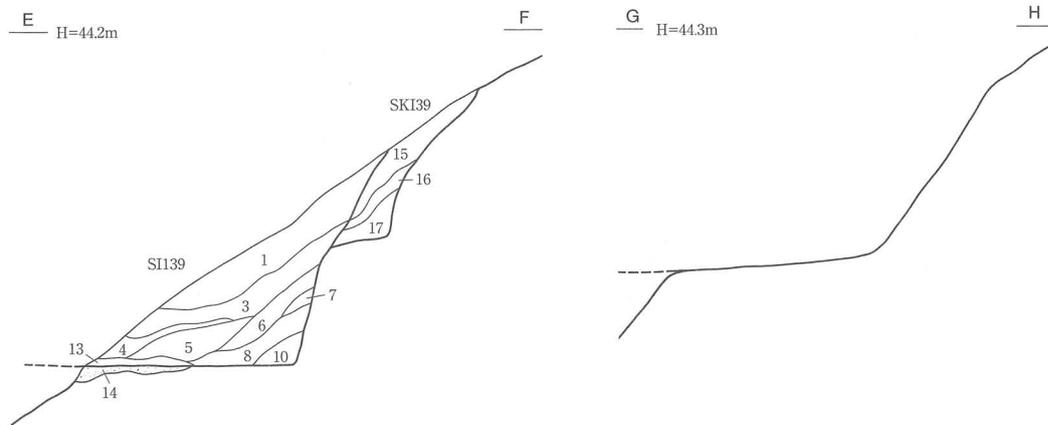
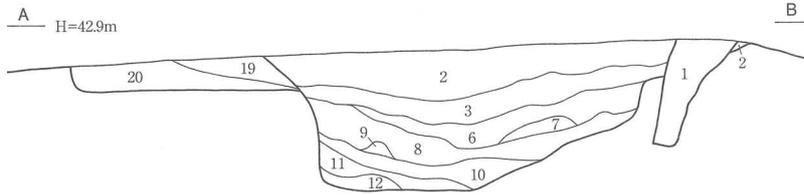
検出時プランから2棟の重複と考えられたが、その新旧関係までは掴めなかったため、共通の断面ベルトを設定し、同時に精査を行った。結果、新しい竪穴住居跡跡をS I 139、これに切られる古い竪穴状遺構をS K I 39とした。本遺構は急傾斜地に位置するため、両遺構とも南東側部分は崩落により遺存しない。

S I 139について、遺存部分と立地から、平面形は隅丸長方形であった可能性が高い。規模は長辺は約4.1mを測り、短辺は南西壁より1.9m以上と推測される。主軸方位はN-31°-Wで、床面積は6.0㎡が遺存する。壁はほぼ直角に立ち上がり、壁高は山側の北西壁で約130cm、南西・北東壁で約35~40cmを測る。埋土は12層に細分され、斜面上方から流入した自然堆積と思われる。北西壁北側には径約50cm、深さ約80cmのP1が確認できる。埋土断面の状況からは本遺構を切っており、当初は柱穴と考えたが、斜めに掘り込まれていることからその可能性は低く、時期・性格等は不明である。床面は平坦で堅く締まり、貼床が斜面下方の南東側に施されている。床面施設として、遺構南東側にK1・2と炉跡2基が検出された。K1は径約25cmの円形で、深さ約3~4cmで皿状に窪んでいる。K1の東方向に位置するK2は、径約25~30cmの略円形で、深さ約3cmを測り、K1同様皿状に窪んでいる。掘り込みのある炉AはK1の北東方向に位置し、約45×30cmの楕円形を呈し、深さは約5~7cmで皿状に窪み、底面には厚さ約2~3cmの橙色焼土が広がる。炉Aの東方向に位置する炉Bは、約30×25cmの不整な橙色焼土の広がり、厚さは約4~5cmを測る。

SI139,SKI39

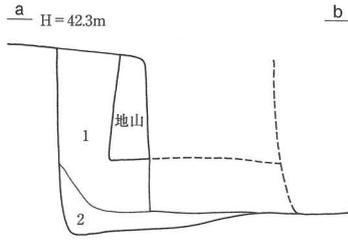


- SI139
1. 25Y4/4 (オリーブ褐) P1埋土
 2. 25Y4/3 (オリーブ褐) しまり有、粘性欠
 3. 25Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり有、粘性欠
 4. 25Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性無
 5. 25Y4/4 (オリーブ褐) しまり有、粘性無
 6. 25Y6/6 (明黄褐) しまり有、粘性欠
 7. 25Y8/4 (淡黄) しまり有、粘性欠
 8. 25Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性やや有、炭化物微量
 9. 25Y7/4 (浅黄) しまり・粘性欠
 10. 25Y8/4 (淡黄) しまり・粘性やや有
 11. 25Y4/4 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性有、焼土塊・炭化物少量
 12. 25Y7/4 (浅黄) しまり・粘性やや有
 13. 25Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有
 14. 25Y6/4 (にぶい黄橙) しまり・粘性有、貼床
- SKI39
15. 25Y6/6 (明黄褐) しまり・粘性やや有
 16. 25Y4/4 (オリーブ褐) しまり有、粘性欠
 17. 25Y7/6 (明黄褐) しまり・粘性有
 18. 25Y6/3 (にぶい黄) しまり・粘性やや有
 19. 25Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性やや有



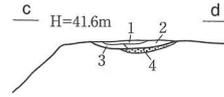
第239図 SI139竪穴住居跡(1)・SKI39竪穴状遺構

SI139 カマドB

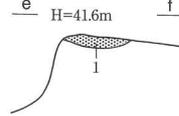


- SI139 カマドB
 1. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり・粘性欠
 2. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり・粘性欠

SI139 炉A



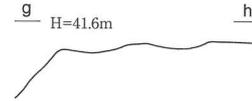
SI139 炉B



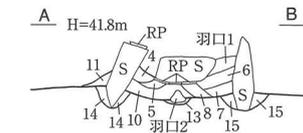
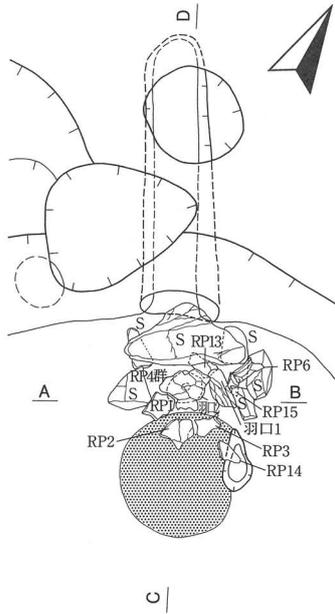
- SI139 炉A
 1. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、炭化物中量
 2. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性無、鉄滓・炭化物少量
 3. 10YR8/6 (黄橙) しまり有、粘性欠
 4. 7.5YR6/6 (橙) 焼土

- SI139 炉B
 1. 7.5YR6/6 (橙) 焼土

SI139 K1・2



SI139 カマドA



0 50cm

SI139 カマドA

- SI139 カマドA
 1. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり・粘性欠
 2. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり・粘性欠
 3. 10YR5/6 (黄褐) しまり欠、粘性やや有
 4. 10YR6/8 (明黄褐) しまり、粘性有
 5. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性有
 6. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性有、焼土塊少量
 7. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有
 8. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性有
 9. 10YR3/3 (暗褐) しまり欠、粘性有
 10. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有、炭化物微量
 11. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性有
 12. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有
 13. 10YR17/1 (黒) しまり・粘性やや有、炭化物少量
 14. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、黄褐色土混入
 15. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性欠、焼土粒・炭化物少量
 16. 5YR7/4 (にぶい橙) 燃焼部焼土

第240図 SI139竪穴住居跡(2)

カマドは2基遺存しており、北西壁に付設するものをカマドA、南西壁に付設するものをカマドBとした。遺存状態から、カマドAの方がカマドBより新しく、カマドの造り替えが行われたものと思われる。カマドAについて、天井部・袖部の痕跡は見られないが、これらの芯材となった石組みが遺存している。検出時、中央に崩落していた約50×20cmの自然石も遺存する石組みと同様で、天井の架構に用いられたものと思われる。袖部の芯材は掘り込みをもって据えられており、燃烧部脇にも瓢箪形の芯材の設置痕が1基確認できることから、石組みが手前側にもう1組存在した可能性が考えられる。燃烧部はほぼ平坦で、径約50cm、厚さ約7～8cmのにおい橙色焼土が広がる。その奥には羽口が立位状態で遺存しており、支脚として代用されたものと思われる。煙道部は削り貫き式で、奥行約115cm、径約30cmで、下り勾配で先端へと向かう。煙出部は径約40cm、深さ約170cmを測り、垂直に掘り込まれている。カマドBについて、遺存状態は悪く、煙道・煙出部のみ確認されたが、遺構南西壁を精査の際、調査員の指示不足により掘り過ぎてしまったため、煙道部の大半を損壊させてしまった。長さ推定100cm、径推定35cmの削り貫き式と思われ、先端に向かってやや下り勾配である。煙出部は径約25cm、深さ約75cmで垂直に掘り込まれている。

遺物は、土師器は中袋1袋分が出土し、その大半は甕形土器片である。カマドA出土のRP1・2が接合した1点(418)、甕形土器はカマドA出土のRP6(419)とRP7(420)、坏形土器は床面出土のRP9(421)などが挙げられる。また、羽口がカマドA埋土中出土の羽口1と前述のカマドAの支脚として利用した羽口2(141)として2点、砥石が床面より1点(S15)、磨石が2点それぞれ床面から(S13)と埋土中から(180)、埋土中から刀子状鉄製品が2点、埋土及びK1埋土から鉄滓が少量出土した。また、炉及び土坑埋土のサンプリングをしたところ、K1から鍛造剥片が極めて微量ながら出土したことから鍛練鍛冶を行っていた可能性も考えられる。

SK I 39について、平面形は遺存部から隅丸長方形と推測され、規模は北西壁より長辺約5.3m、南西壁より短辺約2.5m以上、遺存部分より床面積は6.8㎡と推測される。壁はほぼ直角に立ち上がり、山側北西壁の上半部は崩落によりやや外傾する。壁高は北西壁で最大の約70cmを測るが、その他は南東方向に向かうに伴い減少する。埋土は遺存部分で5層に細分され、山側から流入した自然堆積と思われる。床面は平坦で締まりが認められ、床面施設等は検出されなかった。

遺物は土師器が数点出土したのみである。

S I 178D 竪穴住居跡、S X I 91 工房跡、S K I 46A・B 竪穴状遺構

(第241図、遺物図版41・103・104・128、写真図版176・177・238・289・307・322)

H区赤27(E)区洞部中央の斜面下方、ⅧC-19g~20iグリッドに位置し、検出面はⅢ・Ⅳ・Ⅵ層である。検出時の平面プランから、数棟の竪穴形状の遺構の垂直方向への重複が推測されたため、これらが把握できるよう共通の断面ベルトを設定し精査を開始した。結果、埋土断面及び床面状況などから、竪穴住居跡1棟(S I 178D)、工房跡1棟(S X I 91)、竪穴状遺構2棟(S K I 46A・B)、土坑1基(S K 339)が確認された。これらの新旧関係は、(新)S K I 46A→S X I 91→S K I 46B→S I 178D(旧)となる。S K 339については、S K I 46B及びS I 178Dを直接切っているため、これらより新しいと判断できるが、S K I 46A及びS X I 91とは直接的な重複関係にないため不明である。以下、新しい遺構順に記載する。

S K I 46Aは、当初はこの下部に存在するS X I 91の崩落部と考えたが、埋土断面の状況や床面の状態から単独の遺構と判断した。以上のような精査状況により、遺構中央の大半は掘削してしまったため残存せず、また斜面下方は崩落により遺存しない。残存部から、平面形は隅丸長方形を基調とするものと思われ、規模は長辺7.8m、短辺2.9m以上が推測される。長軸方向は等高線に平行し、床面積は9.8㎡が残存する。遺

存する斜面上方の壁は緩やかに立ち上がり、壁高は約120cmを測る。埋土は5層に細分されるが、主にⅢ層起源の黒褐～暗褐色土で構成されており、自然堆積と思われる。床面はやや凹凸が見られるが、概ね平坦である。また、平面的に明確な貼床範囲は認識できなかったが、断面状況から推測すると、下部のS X I 91埋土上位の褐色土は、本遺構に施された貼床土の可能性が考えられる。

遺物は、土師器は総量で甕形土器片が小1袋、坏形土器片が2点出土した。主な甕形土器片として、埋土上位より出土した(482)がある。この他、埋土中より筒状鉄製品が1点(177)と鉄滓が微量出土している。

S X I 91の平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長辺約5.2m、短辺2.5m以上が推測される。長軸方向は等高線に平行し、床面積は10.1㎡が遺存する。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は西・南壁で約20cm、北壁で約10cmが遺存するが、斜面下方の東側は遺存しない。埋土は3層に分別されるが、上位の褐色土は上述の可能性が考えられ、下位の黒褐～暗褐色土はⅢ層起源の自然流入土と思われる。床面はほぼ平坦で堅く締まる。S K I 46A同様、平面的に明確な貼床範囲は認識できなかったが、断面状況からS K I 46B埋土上位の黄褐色土は、本遺構に施された貼床土の可能性が考えられる。床面施設として、遺構中央の西壁際に約50×40cmの範囲内に不整形に散在する地床炉が確認された。

遺物は、土師器の甕形土器片が埋土中より小1袋程出土したのみである。

S K I 46Bの平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長辺約5.3m、短辺は貼床範囲から4m以上が推測される。長軸方向は等高線に平行し、床面積は16.5㎡以上が推測される。本遺構も斜面下方の東側は崩落により遺存しないが、その他の壁はいずれもほぼ直角に立ち上がり、壁高は約50～70cmが残存する。埋土は10層に細分され、最上位の黄褐色土については上述の様な可能性が考えられるが、これを除いた部分はⅢ層及びⅣ層起源の自然流入土と思われる。床面は平坦で堅く締まり、貼床がほぼ全体に施されている。床面施設として、径約20～30cmの柱穴と思われるピットが北西隅に2基と南西隅に1基確認された。

遺物は、土器は総量で土師器の甕形土器片が小1袋と床面RP1の完形個体が1点(483)、坏形土器片が数点、須恵器の甕形土器片が1点出土した。主なものとして、土師器の甕形土器は埋土中出土の(484)、坏形土器は埋土下位出土の(485)などがある。この他、磨石が埋土下位及び床面S 1として2点(96・197)、砥石が貼床内より1点(198)、鉄塊系遺物が埋土下位より2点、鉄滓が埋土中より微量出土した。

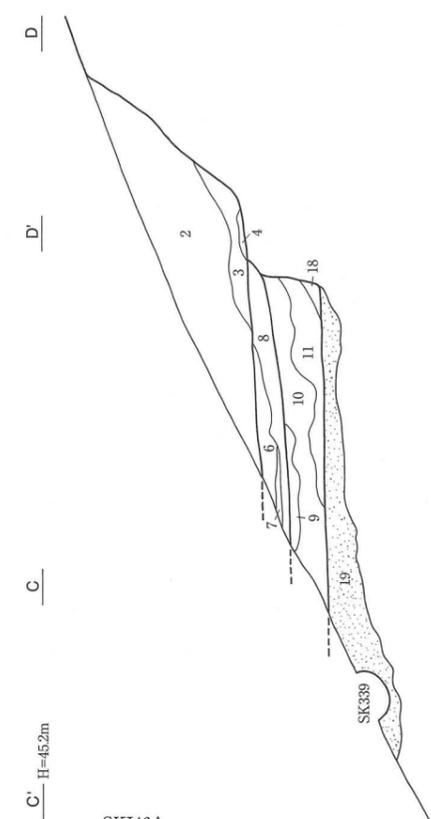
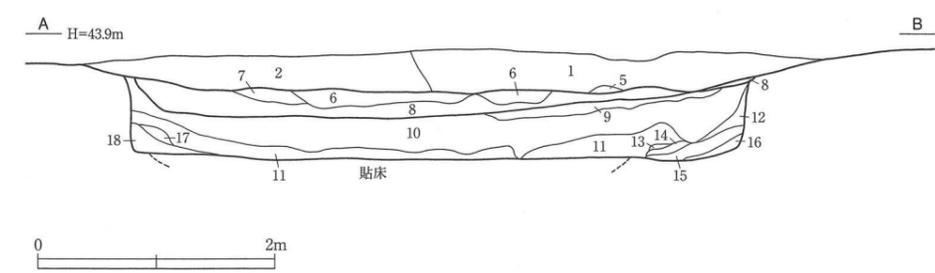
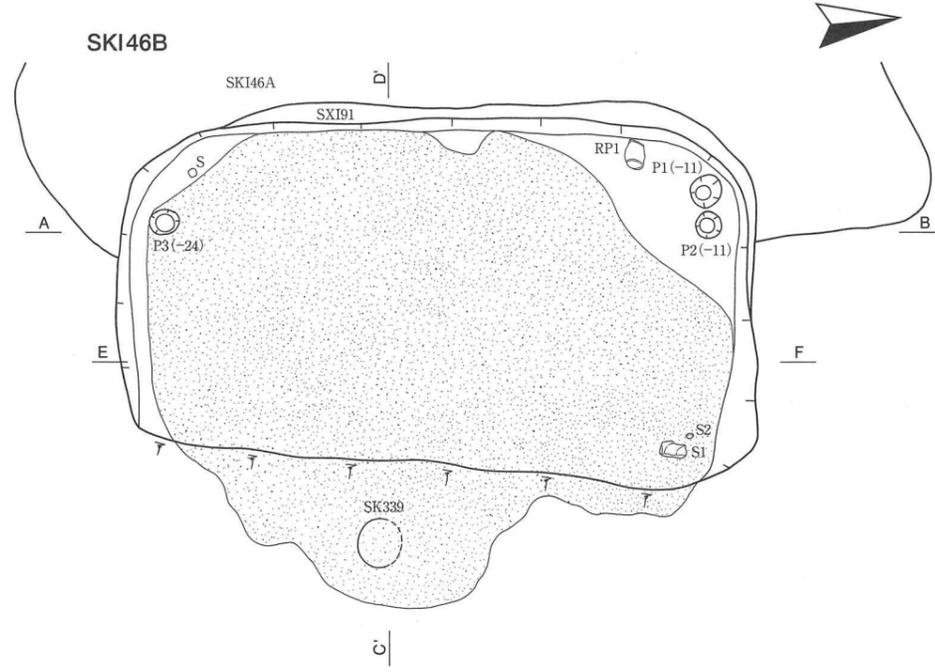
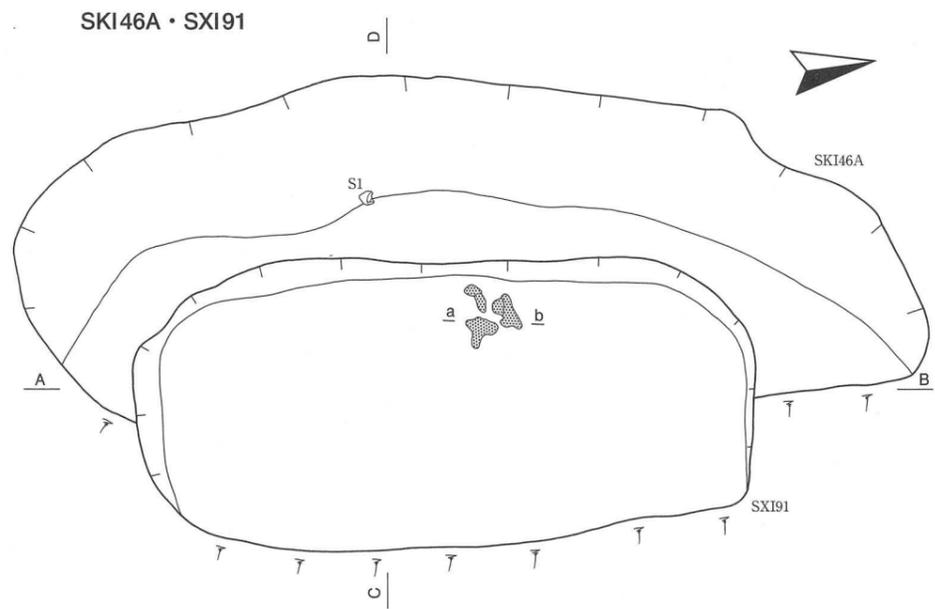
S I 178Dについて、当初はS K I 46B精査時にカマドが検出されたため、これに伴うものと考え精査に臨んだが、貼床下で燃焼部焼土が確認されたため、S K I 46Bより古い住居であることが判明した。精査の結果、カマドと床面施設と思われる土坑(K 1)が確認できるのみであった。以上のことから、本遺構廃絶時にカマドを除いた大部分が破脚された可能性が考えられる。平面形・規模はS K I 46Bの貼床の状況から、ほぼ同様の長辺約5.1m×短辺約4mの隅丸長方形が推測される。主軸方位はN-5°-E、床面積は14.9㎡以上と思われる。壁・埋土及び床面は残存状況が不良のため、詳細は不明である。K 1は北側に位置し、平面形は略長方形を呈し、規模は約100×65cmを測る。断面形は鍋形を呈し、深さは約35cmである。

カマドは北壁に付設されており、袖部は黄褐色粘土で構築されている。燃焼部はほぼ平坦で、約65×45cmの楕円状に赤褐色焼土が広がる。煙道部は刳り貫き式で、長さ約130cm、径約35cmで先端に向かって下り勾配である。煙出部は径約30cm、深さ約90cmで、垂直に掘り込まれている。

遺物は煙道内より磨石1点(193)が出土した。

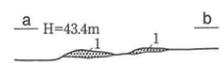
S I 179A・B 堅穴住居跡 (第242～244図、遺物図版40・41・103・104、写真図版178・237・289)

H区赤27(E)区洞部北側の斜面下方、ⅧC-20g～IXC-1eグリッドに位置し、検出面はⅥ層である。検出時の平面プランから、数棟の堅穴形状の遺構の重複が推測されたが、全容が把握できなかったため、共

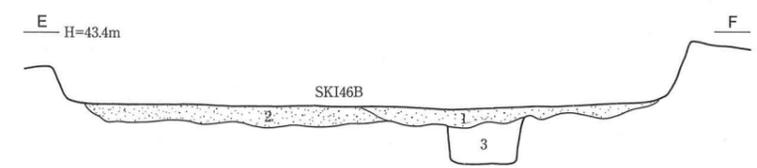
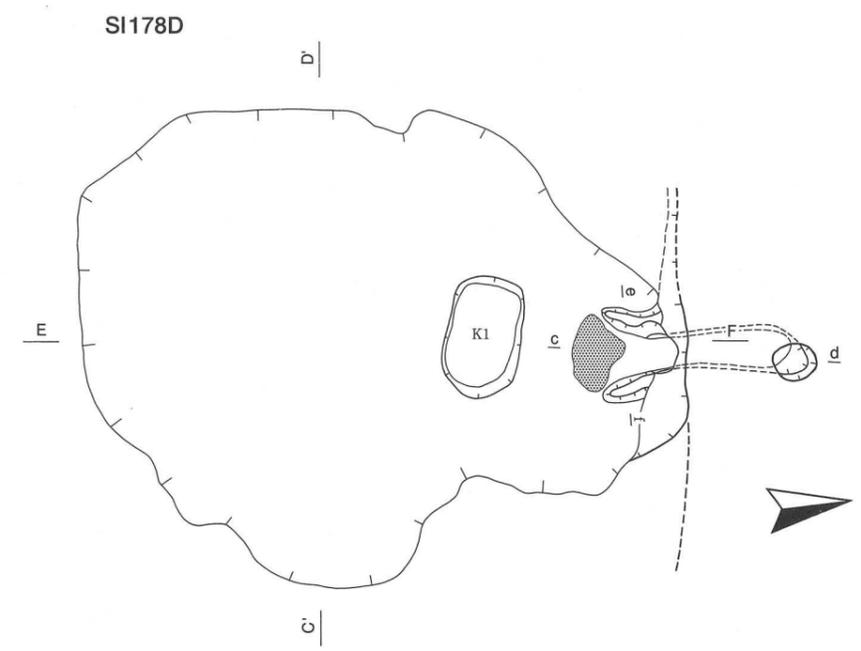


- SKI46A**
- 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性有
 - 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性有
 - 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有
 - 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性有
 - 10YR4/4 (褐) しまり、粘性有
- SXI91**
- 10YR4/6 (褐) しまり、粘性有
 - 10YR2/2 (黒褐) しまり欠、粘性有
 - 10YR3/3 (暗褐) しまり、粘性有、焼土塊・炭化物微量
- SKI46B**
- 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性欠
 - 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性有
 - 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有
 - 10YR5/6 (黄褐) しまり欠、粘性有
 - 10YR3/2 (黒褐) しまり欠、粘性有
 - 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有
 - 10YR3/3 (暗褐) しまり欠、粘性有
 - 10YR5/8 (黄褐) しまり欠、粘性有
 - 10YR3/2 (黒褐) しまり欠、粘性有
 - 10YR3/4 (暗褐) しまり欠、粘性有、黄褐色土粒微量
 - 10YR3/3 (暗褐) しまり、粘性有、貼床

SXI91 地床炉

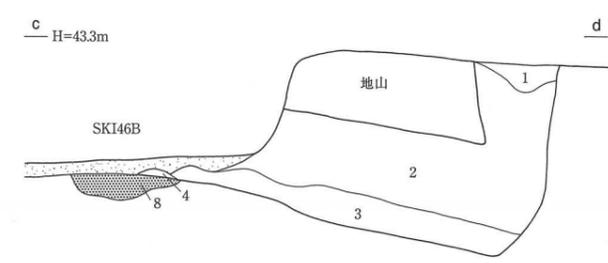


- SXI91 地床炉**
- 5YR4/8 (赤褐) 焼土



- SI178D**
- 10YR3/3 (暗褐) しまり、粘性有、貼床
 - 10YR3/3 (暗褐) しまり、粘性有、貼床
 - 10YR4/4 (褐) しまり欠、粘性有、K1埋土

SI178D カマド



- SI178D カマド**
- 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性極めて有
 - 10YR4/4 (褐) しまり欠、粘性有
 - 10YR4/6 (褐) しまり、粘性有、焼土粒少量
 - 7.5YR5/8 (明褐) しまり有、粘性やや有、崩落焼土
 - 10YR5/6 (黄褐) しまり、粘性有、袖部構築土
 - 10YR7/8 (明黄褐) しまり、粘性極めて有、袖部構築土
 - 10YR4/6 (褐) しまり、粘性有、袖部構築土
 - 5YR4/8 (赤褐) 燃焼部焼土

第241図 SI178D竪穴住居跡・SXI91工房跡・SKI46A・B竪穴状遺構

通する断面ベルトを設定し精査に臨んだ。結果、埋土断面及び掘り上がりの平面形状などから、竪穴住居跡3棟（S I 179A・179B・183）、工房跡1棟（S X I 88A）、竪穴状遺構1棟（S K I 47）、土坑1基（S K 342）、炉跡1基（S N 79）が確認された。これらの新旧関係は、断面状況や平面形の直接的な切り合い及び相対関係から、（新）S I 179A、S N 79→（S K I 47→S X I 88A→S K 342）、S I 179B→S I 183（旧）となる。なお、これらは重複が著しいため、図及び本原稿は便宜上、一定の重複のまとまりで分離している。

S I 179Aは、ほとんどの遺構を直接切っており、この周辺で最も新しい遺構である。平面形は崩落により斜面上方は広がり、斜面下方は遺存しないが、この下部に存在するS I 179Bを基調として、隅丸長方形を呈するものと思われる。規模は長辺約4m、短辺1.7m以上が推測され、長軸方向は等高線に平行する。主軸方位はW-32°-Nで、床面積は4.5㎡が遺存する。壁は鋭角的に立ち上がり、斜面上方の西壁では上半部が崩落により外反する。壁高は西壁の約95cmを最大に、東方向に向かうに従い減少する。埋土は10層に細分されるが、各層位の状況から斜面上方より自然流入したものと思われる。床面は平坦で堅く締まる。

カマドは西壁の北寄りに付設されている。検出時において、崩落した構築土と自然石数個が散在する状況であった。袖部等の残存状態は悪く、燃焼部のみ確認された。燃焼部は平坦で、規模約90×80cm、最大厚約10cmの不整な明赤褐色焼土が広がる。この両側には径約20cm程の小ピットが3基確認されたが、位置的に袖部の芯材の抜き取り痕と判断される。煙道部は刳り貫き式で、長さ約110cm、径約25cmを測り、ほぼ平坦に先端へと向かう。煙出部は径約25cm、深さ約75cmで、垂直に掘り込まれている。

本カマドは、造り替えまたは住居の拡幅・縮小等により、2基存在している可能性がある。検出時の状況から、崩落した構築土の中央と煙出部を結ぶように断面ベルトを設定したが、煙道部はこれから全く外れてしまい、燃焼部と煙道部が直線上に位置しない。また、燃焼部焼土や芯材の抜き取り痕についても、壁からの距離が離れていることなどから推察すると、残存する燃焼部焼土は新しいカマドに伴うもので、煙道部は本遺跡の傾向及び芯材の抜き取り痕の配置から西方向に求められるが、この方向に確認されないことから、煙道施設のないタイプのカマドと考えられる。一方、西壁に残存する煙道はこれ以前に使用されていたものの痕跡で、燃焼部痕跡等が何も検出されないことから、完全に破脚されたものと思われる。

遺物は、土器は総量で土師器の甕形土器片が中1袋程出土した。主なものとして、カマド内出土のRP3・5～8・10が接合した(471)、埋土下位出土のRP1とS X I 88A検出面出土の破片が接合した(472)、埋土下位出土の(473)、カマド内出土のRP9とカマド埋土の破片が接合した(474)などがある。

S I 179Bは、S I 179Aの下部に存在する。平面形は崩落により斜面下方は遺存しないが、隅丸長方形を呈するものと思われ、規模は長辺約4m、短辺2m以上が推測される。長軸方向は等高線に平行し、床面積は6.3㎡が遺存する。壁は鋭角的に立ち上がり、壁高は20～40cmを測る。埋土は12層に細分されるが、大別すると上位のぶい黄色土系、下位のオリーブ褐色土系となる。床面は平坦で堅く締まり、貼床が主に斜面下方部に施されている。また床面上からは廃棄されたと思われる炭化材が数本出土したが、鑑定の結果ケヤキで、道具材の可能性が考えられる。床面施設として、土坑1基（K 1）と柱穴4基（P 1～4）が確認された。K 1の平面形は楕円形を呈し、規模は約50×30cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さは約5cm程である。柱穴4基については、それぞれ径約20～30cmの円形を呈し、深さはP 1・3・4は40～45cm前後、P 2は約25cmを測る。規模及び配置から主柱穴と考えられる。

カマドは西壁の中央からやや南寄りに付設されている。検出時の状況は、数個の礫が散在していた。本体部の遺存状態は不良で、燃焼部のみ確認された。燃焼部はほぼ平坦で、径約45cm、最大厚約5cmの橙色焼土が広がる。この両脇には歪な円状を呈する小ピットが3基確認でき、位置的に袖部の芯材の抜き取り痕と

思われる。また、燃焼部の北側にも同規模の小ピットが存在するが、支脚の抜き取り痕と判断される。煙道施設等は確認されなかったが、形態から本カマドも煙道施設のないカマド痕跡と考えられる。

遺物は、土器は総量で土師器の甕形土器片が中1袋、坏形土器片が1点、壺形土器片が約10点出土した。主なものとして、土師器の壺はカマド内出土のRP2・3・13~15が接合した(475)、同じくRP9の(476)、甕はカマド内出土のRP1・8・10~12が接合した(477)、同じくRP5~7が接合した(478)などがある。この他、砥石がカマド内からS3(194)ともう1点(195)、鉄滓が貼床内から微量出土した。

S I 183 竪穴住居跡、S X I 88 A 工房跡、S K I 47 竪穴状遺構

(第242・244図、遺物図版40・41・74・104・128、写真図版178・237・238・259・289・307・308・322)

H区赤27(E)区洞部北側の斜面下方、ⅧC-20g~ⅨC-1eグリッドに位置し、検出面はⅥ層である。検出時の状況は、前述のS I 179A・B等に記した通りである。

S K I 47は、検出時において溝状に見えたことから、この斜面下方の遺構(S X I 88 A)の棚状施設と考えたが、埋土断面観察の結果、重複する単独の遺構と判断された。本遺構は崩落により斜面上方は広がり、斜面下方と北側はS I 179Aとの重複及び上記の検出時の判断から精査順序を誤ったため、残存状態は不良である。残存部より、平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長辺6.8m以上、短辺0.7m以上が推測される。長軸方向は等高線に平行し、床面積は2.4㎡が残存する。残存する斜面上方の西壁は、下半部は鋭角的に立ち上がり、上半部は崩落により外反し、壁高は約30~40cmを測る。埋土は4層に細分されるが、Ⅲ・Ⅵ層起源の混合土で自然堆積と思われる。床面はほぼ平坦で、遺構南側の西壁沿いに壁溝が確認された。

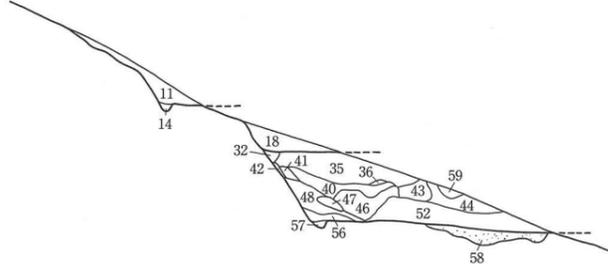
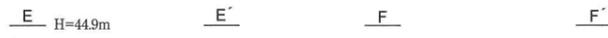
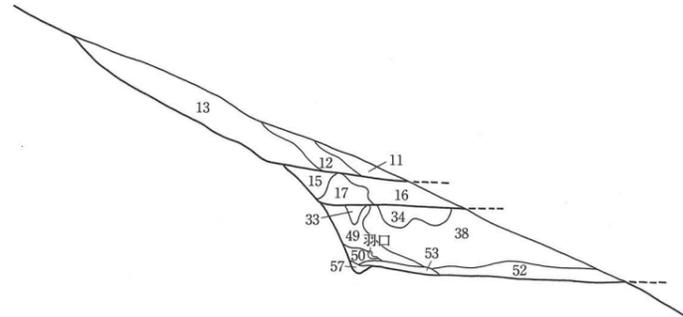
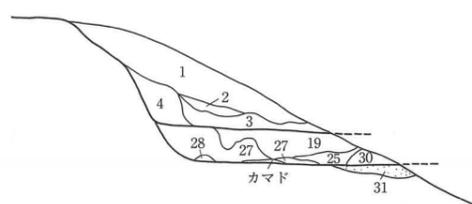
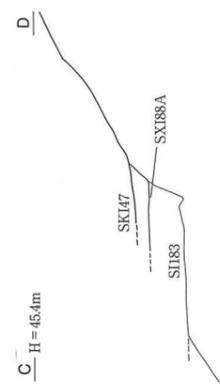
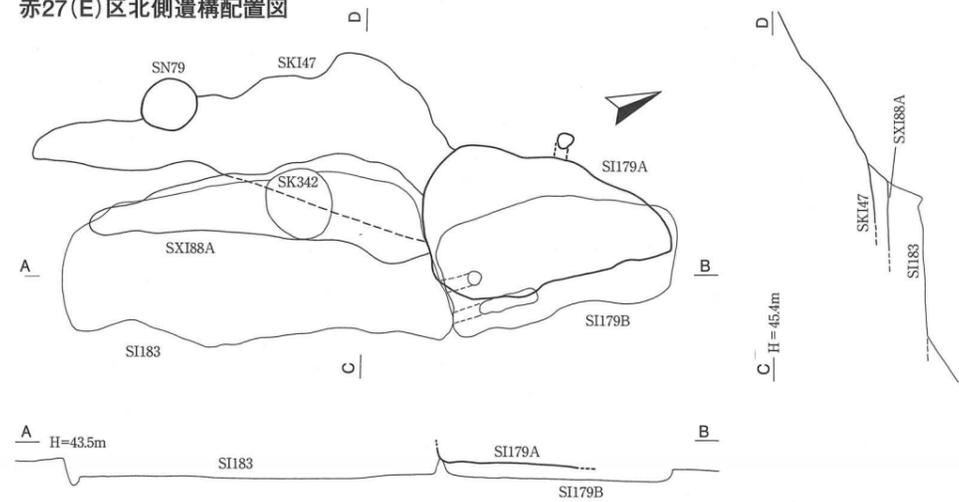
遺物は、埋土中より土師器の甕形土器片が小1袋、坏形土器片が1点、砥石が1点(199)、床面RM1として釘が1点(178)出土した。

S X I 88 Aは、S K I 47同様、斜面下方は崩落により、また北側はS I 179Aに切られるため残存しない。残存部より、平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長辺5.5m以上、短辺2.1m以上が推測される。長軸方向は等高線に平行し、床面積は4.7㎡が残存する。残存する斜面上方の西壁は鋭角的に立ち上がり、壁高は約20~30cmを測る。埋土は4層に細分され、層位状況から人為的堆積の可能性がある。床面はほぼ平坦で、遺構中央からやや南寄りの位置に地床炉が検出された。地床炉は径約40cmの円状を呈し、中央部は明褐色、その周囲は明赤褐色に被熱変化しており、厚さは約5cmを測る。

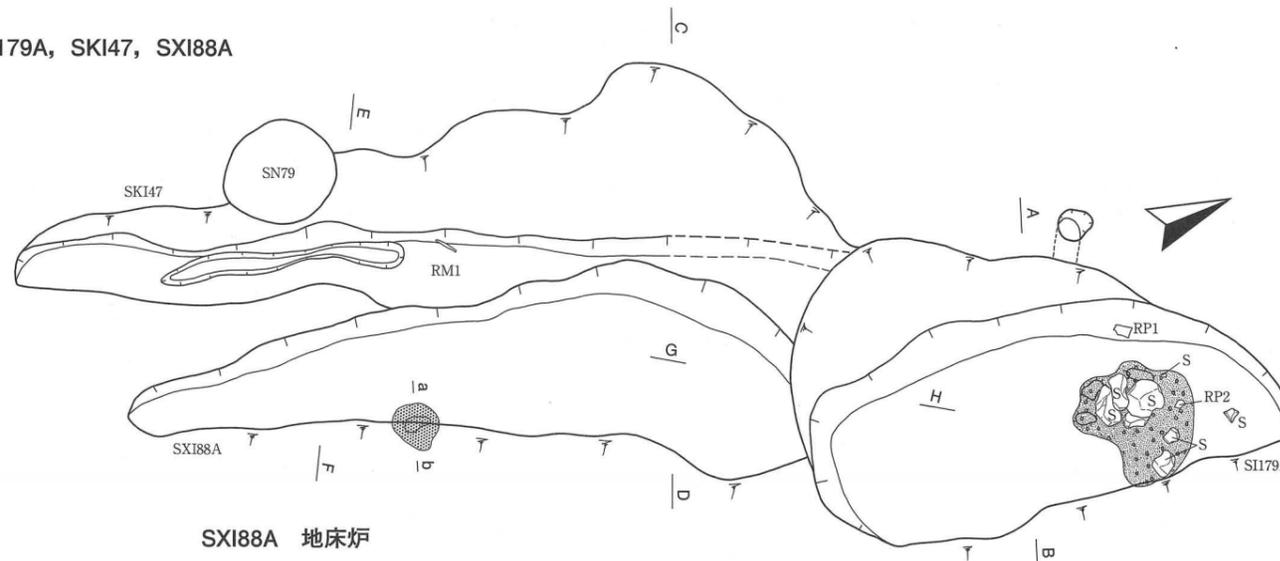
遺物は、土器は土師器の甕形土器片が中半袋、坏形土器片が1点出土した。主なものとして、埋土中位より出土の土師器の坏がほぼ完形に復原された1点(481)、甕形土器は上記のS I 179A出土の破片と本遺構検出面出土のものが接合した1点(472)がある。この他、鉄塊系遺物が埋土中より1点、鉄滓が検出面及び埋土中位より微量出土している。

S I 183は、平面形は他の遺構同様、斜面下方は崩落により遺存しないが、隅丸長方形を呈し、規模は長辺約6.1m、短辺2.7m以上が推測され、長軸方向は等高線に平行する。本遺構にはカマドが2基並列して存在しており、詳細については後述するが、東側にあるものをカマドA、西側にあるものをカマドBとした。主軸方位はカマドAがN-5°-E、カマドBがN-15°-Eで、床面積は13.3㎡が遺存する。壁は斜面上方の西壁では鋭角的に立ち上がり、北・南壁はほぼ直角に立ち上がる。壁高は西壁で約60cm、北・南壁で約40cmが遺存する。埋土は26層に細分されるが、各層位状況から人為的堆積の可能性がある。床面は平坦で堅く締まり、貼床が南側に施されている。また径約25~45cm、深さ約7~43cmを測るピット8基が検出された。規模及び配置からP1~5は支柱穴と思われるが、P1・2・5またはP3・4・5のセット関係が考えられ、建て替えがあった可能性がある。

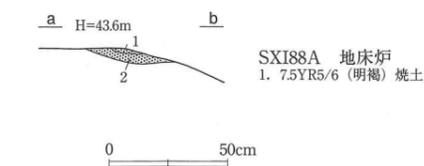
赤27(E)区北側遺構配置図



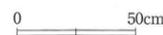
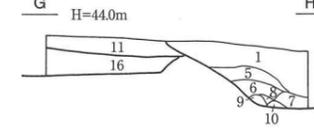
SI179A, SKI47, SXI88A



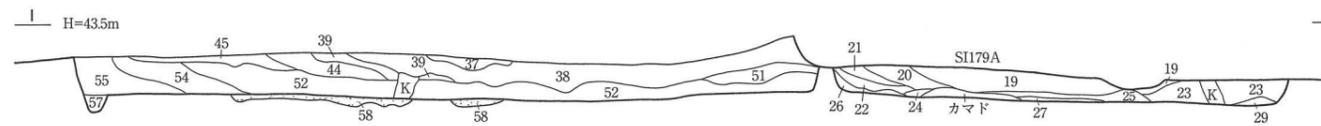
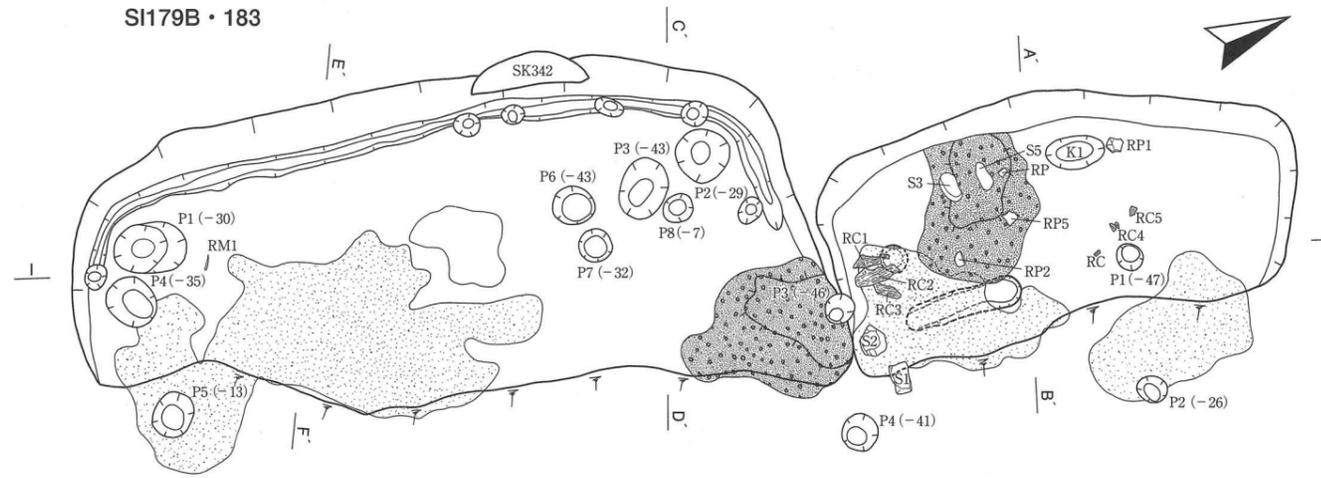
SXI88A 地床炉



SXI88A 地床炉
1. 7.5YR5/6 (明褐色) 焼土

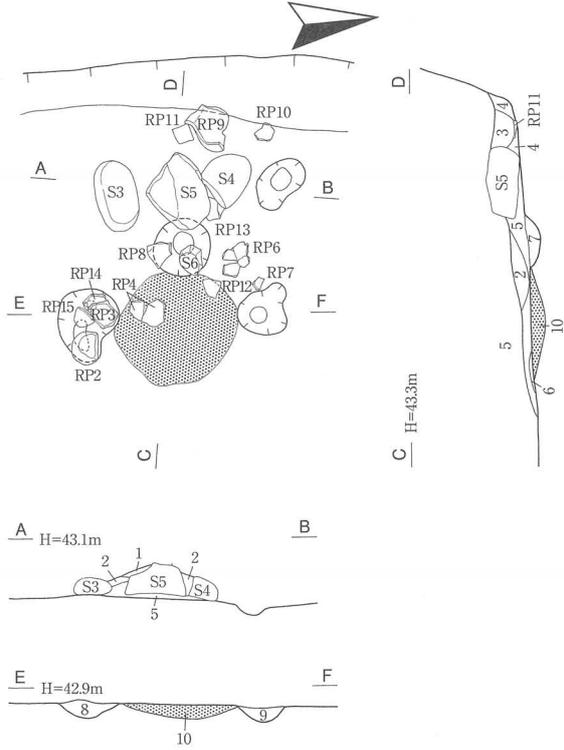


SI179B・183



第242図 SI179A・B・SI183竪穴住居跡(1)・SXI88A工房跡・SKI47竪穴状遺構

SI179B カマド



SI179B カマド

1. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性有、崩落構築土ブロック
2. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり有、粘性やや有、崩落構築土ブロック
3. 10YR7/6 (明黄褐) しまり・粘性極めて有、崩落構築土ブロック
4. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性欠
5. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり有、粘性やや有、炭化物少量
6. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有
7. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまりやや有、粘性欠
8. 2.5Y6/3 (にぶい黄) しまりやや有、粘性欠
9. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり欠、粘性やや有
10. 5YR6/6 (橙) 燃焼部焼土

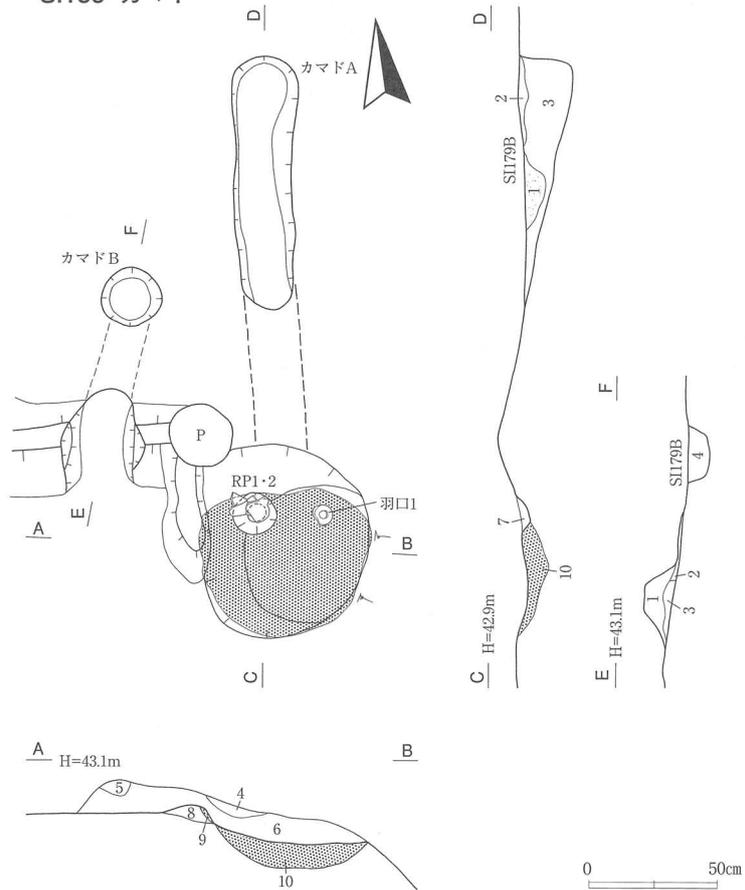
SI183 カマド

SI183 カマドA

1. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性無、SI179B貼床
2. 2.5Y4/2 (暗灰褐) しまり・粘性やや有
3. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性有、褐色土ブロック混入
4. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり有、粘性やや有
5. 7.5YR5/6 (明褐) しまり極めて有、粘性有
6. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性やや有、焼土粒・炭化物少量
7. 7.5YR5/8 (明褐) しまり・粘性有、支脚抜き取り痕
8. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性極めて有、袖部構築土
9. 5YR4/6 (赤褐) 袖部被熱焼土
10. 5YR5/6 (明赤褐) 燃焼部焼土

SI183 カマドB

1. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性欠
2. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまりやや有、粘性欠
3. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性やや有、炭化物微量
4. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり・粘性やや有、炭化物微量



第244図 SI179B・SI183竪穴住居跡(2)

カマドは2基確認されており、残存状況からカマドAが新しい。いずれも北壁の東寄りに付設されており、煙道・煙出部はS I 179Bの貼床掘削後に確認された。カマドAは袖部を明黄褐色粘土で構築している。燃烧部は床面から皿状に窪み、径約55~70cm、最大厚約10cm程の明赤褐色焼土が広がる。この北側には径約15cmの小ピットが存在するが、位置的に支脚の抜き取り痕と思われる。またこの東方に原位置を留めていないが羽口(羽口1)が出土し、支脚として代用されたものと推察される。煙道部は、S I 179B構築時により削平されているため詳細は不明だが、長さ推定140cmで、下り勾配で先端へ向かうと思われる。カマドBの遺存状態は極めて不良で、煙道部の痕跡と煙出部の下部が確認されたのみである。煙道部は長さ90cm以上で、残存する煙出部は径約25cmを測る。その他は不明である。以上の2基のカマドからも、本遺構が2時期に渡る可能性が示唆され、上記で示した柱穴の配置がそれぞれに伴う可能性が考えられる。

遺物は、総量で土師器の甕形土器片が中1袋程出土した。主なものとして、カマド内出土のRP1・2が接合した(479)がある。この他、上記のカマド内出土の羽口が1点(153)、床面RM1として刀子が1点(176)、鉄滓が埋土中・カマド及び貼床内から少量出土している。

S I 184 竪穴住居跡 (第245図、遺物図版41、写真図版179・238)

H区赤27(E)区洞部中央の斜面下方、ⅧC-19i~20jグリッドに位置し、検出面はⅢ層である。本遺構は傾斜地に立地することにより、斜面下方の東側は崩落により遺存しない。確認された平面形は弧状を呈するが、隅丸長方形を基調とするものと思われる。規模は長辺約3.9m、短辺1.6m以上が推測され、長軸方向は等高線に平行する。主軸方位はW-23°-Sで、床面積は3.7㎡が遺存する。遺存する壁は鋭角的に立ち上がり、壁高は斜面上方の西壁で最大の約45cmを測るが、その他の壁は東方向に進むに従い減少する。埋土はⅢ層起源の黒褐色土の単層で、斜面上方からの自然流入と思われる。床面は斜面下方に向かってやや下るが、およそ平坦で締まりがある。

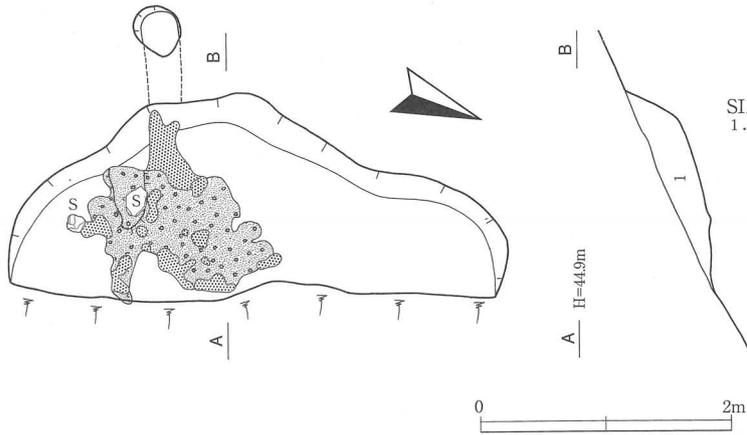
カマドは東壁の南寄りに付設されている。検出時、黄橙~明黄褐色土や焼土が広範囲に広がっていたため、当初は鉄生産関連炉と考えたが、精査の結果、崩落したカマド構築土であることが判った。左袖部には自然石を立位状態で芯材としており、その外側に明黄褐色粘土を貼り付けている。右袖部には構築粘土等は確認されなかったが、芯材の抜き取り痕と思われるピットが2基検出されており、左袖部と同様であったと推測される。燃烧部は一段やや下がっており、径約40cm、厚さ約5cmの赤褐色焼土が広がる。煙道部は削り貫き式で、長さ約95cm、径約20~30cmを測り、先端に向かって上り勾配となっており、底面には厚さ3~5cmの赤褐色焼土が形成されている。煙出部は径約40cm、深さ約45cmで垂直に掘り込まれている。

遺物は、総量で土師器の甕形土器片が小1袋、坏形土器片が2点出土した。主なものとして、土師器の甕の埋土中位出土の破片と煙出部の埋土中出土の破片が接合した(480)がある。

S X I 28 工房跡 (第246図、写真図版179)

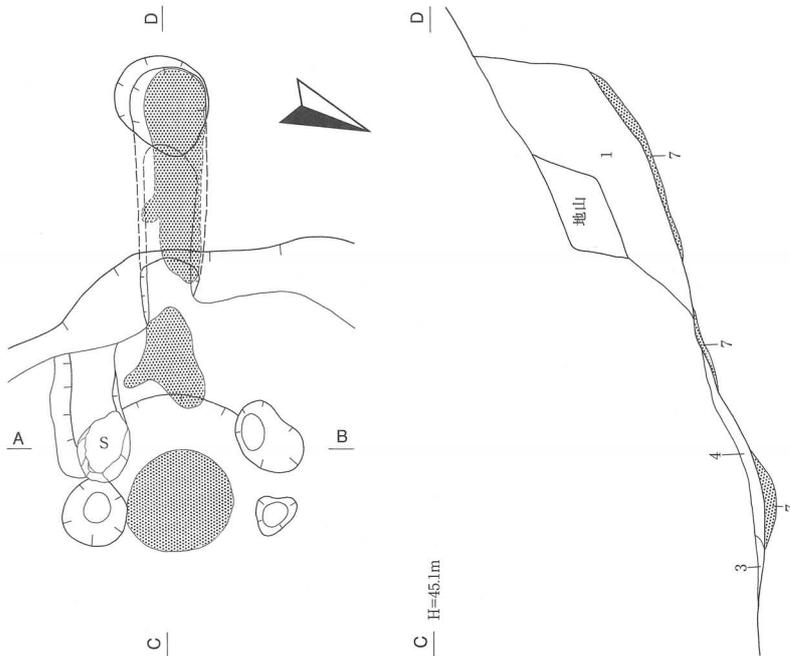
H区赤27(B)区北部の東側斜面中腹、IXB-4q・4r・5qグリッドに跨って位置し、検出面はⅥ層である。本遺構は急斜面上に構築されているため、斜面下方の南東側はほとんど遺存しない。遺存部より推定される平面形は隅丸長方形を呈すると思われる。規模は長辺約5.3mが遺存し、短辺1.5m以上が推測される。遺存する床面積は2.5㎡である。壁は山側の北西壁では緩やかに立ち上がり、壁高は約100cmを測るが、北東・南西壁では鋭角的に立ち上がり、壁高は約20~40cmを測る。埋土は12層に細分され、斜面上方より流入した自然堆積と思われる。床面は平坦で堅く締まる。また遺構東側には地床炉が2基検出された。北東壁に近いものを地床炉A、中央に近いものを地床炉Bとした。地床炉Aは検出時、自然石が2個残存していたことから、カマドと考え精査を行なった。精査の結果、径約35~40cm、厚さ約5cmの略円形をした明赤褐色

SI184

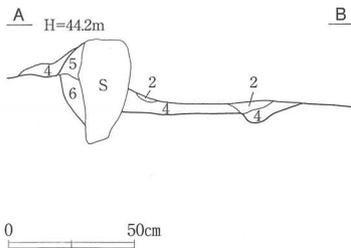


SI184
1. 10YR2/2 (黒褐) しまり欠、粘性有

SI184 カマド



SI184 カマド
1. 10YR2/2 (黒褐) しまり欠、粘性有
2. 10YR7/6 (明黄褐) しまり・粘性有、崩落構築土
3. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性有、焼土ブロック少量
4. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性極めて有
5. 10YR6/8 (明黄褐) しまり・粘性極めて有、袖部
6. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性有、芯材の掘り方
7. 5YR4/8 (赤褐) 燃焼部・煙道底面焼土



第245図 SI184竪穴住居跡

焼土の広がりが見出された。この西側には約40×10cmの長楕円形のピットが確認されたが、自然石等を掘っていた抜き取り痕の可能性が考えられる。以上のことから地床炉Aは、煙道等が存在しないが、カマドに近い性格を持っていたものと考えられ、実際、平成14年度調査時には煙道等の排煙施設を伴わないカマドと思われる施設が見出されていることから、本遺構もそれらと同様である可能性が考えられる。地床炉Bは、谷側の崩落によりその全容は不明であるが、約50×20cmの不整な橙色焼土の広がり、厚さは1cmにも満たない弱い被熱痕跡である。また本遺構の斜面下方にはS K 212が存在するため、本遺構に伴う床面施設であった可能性も考えられるが、それを裏付ける証拠は無く推測の域を越えない。しかし、この斜面部における周囲には他の遺構は見出されなかったため、何らかの関連性はあったものと思われる。

遺物は、埋土中より土師器の甕形土器片が数点と鉄滓が地床炉B周辺から微量出土したのみである。炉周辺のサンプル土から鍛造剥片が極めて微量ながら出土したことから鍛錬鍛冶工場の可能性も考えられる。

S X I 37 工房跡 (第246図、写真図版180)

H区赤27(C)区南部の西側斜面上方、ⅧC-15f・15g・16fグリッドに位置し、検出面はⅥ層である。本遺構は急斜面地に構築されているため、斜面下方の北西側は遺存しない。遺存する平面形は不整形で、規模は約3.5×2.1m、床面積は4.0㎡が遺存する。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は約15～35cmを測る。埋土は上位の暗褐色土と下位の黄褐色土の2層に分別される。床面はやや凹凸があり、貼床が全体的に施されている。床面施設として遺構南隅に約40×30cm、厚さ約5～6cmの明赤褐色を帯びた地床炉が確認された。この部分は張り出しているため、何らかの作業的空間であった可能性が考えられるが、それらに伴う他の施設等は見出されなかった。遺物は出土しなかった。

S X I 76 工房跡 (第247図、写真図版180)

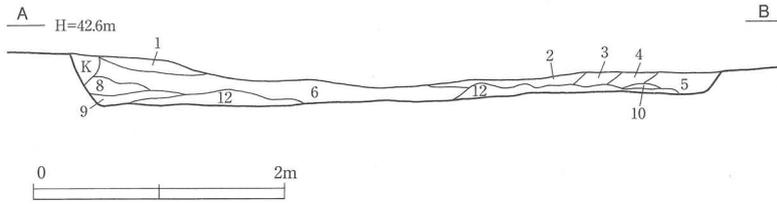
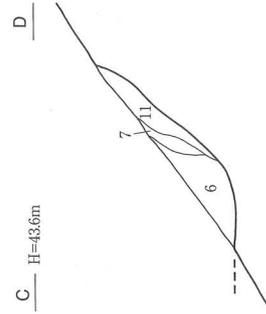
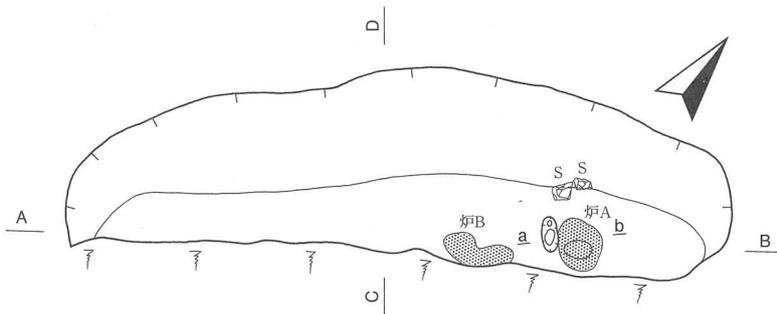
H区赤27(B)区南側尾根上の緩斜面部、ⅧC-18a・18bグリッドに位置し、検出面はⅣ層である。検出時における平面形プランから、竪穴住居跡と考え精査を行ったが、結果、カマドは付設されておらず、床面に地床炉が存在することから、何らかの工房跡と判断した。また、本遺構は隣接するS I 87A・B煙出部と重複する。検出時において、S I 87A煙出部のプランが確認できたことから、本遺構埋没後にS I 87Aが構築されたものと思われる。一方床面精査時において、S I 87B煙出部のプランが確認できたことから、本遺構がS I 87B煙出部を切って構築されたものと思われる。よって、これら3遺構の新旧関係は(新)S I 87A→S X I 76→S I 87B(旧)となる。平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺約2.8m、床面積は9.0㎡を測る。壁は鋭角的に立ち上がり、壁高は20～90cmである。埋土は5層に細分されるが、上位に黒褐色土、それ以下は黄褐～明黄褐色焼土となっていることから、上位層以外は人為堆積の可能性が高い。床面は平坦で堅く締まり、貼床が全体的に施されている。また、遺構南西部の中央には地床炉が確認できる。約25×20cmの不整形な明赤褐色焼土の広がり、厚さは約4～5cmを測る。

遺物は、埋土から土師器の甕形土器片2点と坏形土器片1点、縄文土器片が1点出土した。

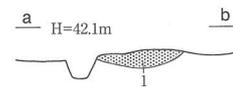
S W 89 炭窯 (第247図)

H区赤27(B)区北側の尾根頂部、ⅧB-4pグリッドに位置する。本遺構はS I 98と重複関係にあり、これの南東壁の精査過程で見出した。調査員の認識不足により検出時期が遅かったため、本遺構を半壊させてしまった。そのため、これらの新旧関係は不明であるが、その周辺のS I 98埋土中に少量の炭化物を確認していたため、これが本遺構に伴う可能性は高く、これにより本遺構の方が新しいものと推測される。残存部分から平面形は円形と推測され、規模は開口部径推定90cm、底部径推定50cm程である。断面形は皿状を呈すると思われ、残存部分での深さは約15cmである。埋土は上位のふい黄色土、下位の黒褐色土に分け

SXI28



SXI28 炉A



0 50cm

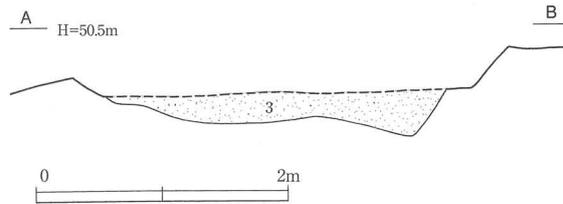
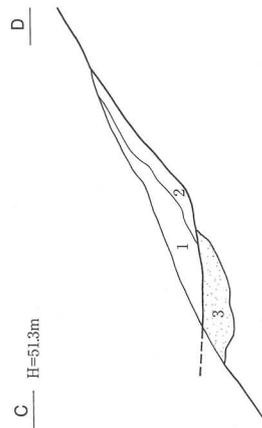
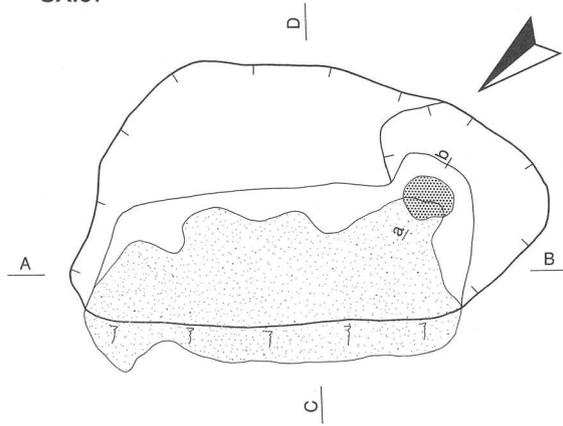
SXI28 炉A

1. 5YR5/8 (明赤褐) 焼土

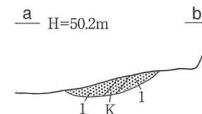
SXI28

1. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性無、炭化物少量
2. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
3. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性無、黄褐色土ブロック混入
4. 10YR4/3 (にぶい黄) しまり有、粘性やや有、炭化物少量
5. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有
6. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、炭化物少量
7. 25Y5/3 (黄褐) しまり有、粘性無
8. 10YR3/4 (暗褐) しまり極めて有、粘性やや有、炭化物少量
9. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性無
10. 10YR6/8 (明黄褐) しまり・粘性やや有
11. 25Y6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無
12. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、黒褐色土混入

SXI37



SXI37 地床炉



SXI37 地床炉

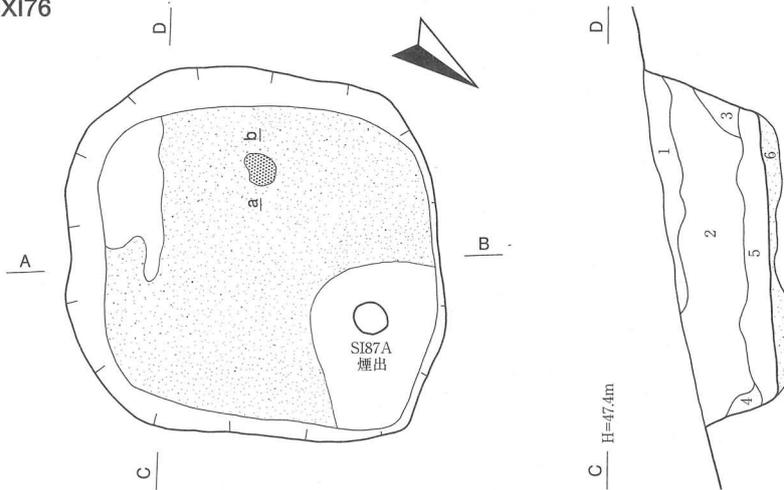
1. 5YR5/6 (明赤褐) 焼土

0 50cm

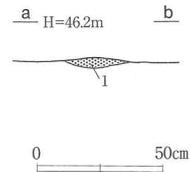
SXI37

1. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性有、炭化物少量
2. 25Y5/4 (黄褐) しまりやや有、粘性欠
3. 25Y6/4 (にぶい黄) しまりやや有、粘性欠、貼床

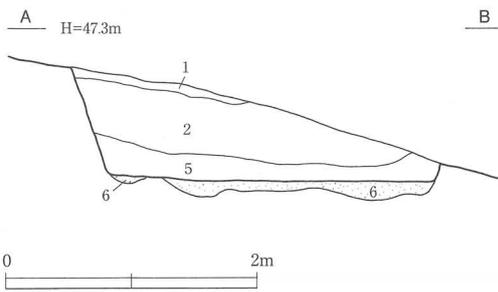
SXI76



SXI76 地床炉



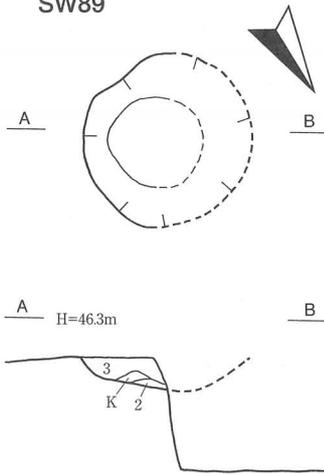
SXI76 地床炉
1. 5YR5/8 (明赤褐) 焼土



SXI76

1. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有
2. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性有、明黄褐土ブロック混入
3. 10YR6/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性有
4. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性やや有、礫多量混入
5. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性有
6. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性極めて有、貼床

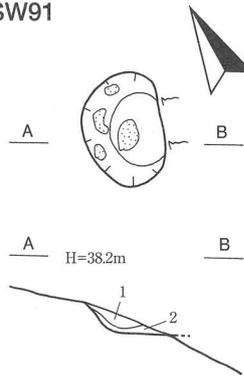
SW89



SW89

1. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性無
2. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり有、粘性やや有、炭化物多量

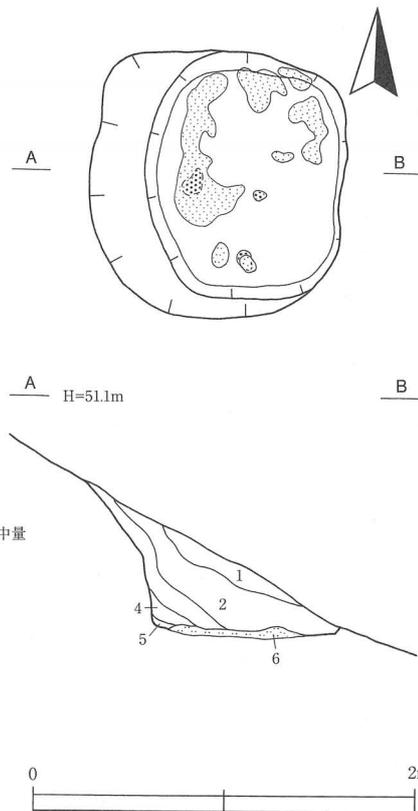
SW91



SW91

1. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有、炭化物少量
2. 2.5Y2/1 (黒) しまりやや有、粘性有、炭化物中量

SW126



SW126

1. 10YR3/3 (暗褐) しまり欠、粘性やや有
2. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性やや有
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性欠
4. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性やや有
5. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性有
6. 10YR1.7/1 (黒) 炭化物層

第247図 SXI76工房跡・SW89・91・126炭窯

られる。また下位の黒褐色土には1cm未満大の微細な炭化物が含まれている。底面は概ね平坦で、厚さ数mm程の弱い橙色焼土が確認された。遺物は出土しなかった。

S W91炭窯 (第247図)

H区赤27(B)区南部の東側斜面中腹、IX C-3bグリッドに位置し、検出面はIV層である。本遺構は重複するS I 138精査過程において検出した。その状況と埋土断面から、本遺構はS I 138埋没後に構築されており、本遺構の方が新しいことが判明した。本遺構斜面下方の南東側は、斜面に位置するため遺存しない。遺存部より平面形は円形を呈すると思われ、規模は開口部径約60cm、底部径約40cmが推測される。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は山側で最大の約10cmを測るが、谷側の南東方向に進むに従って減少する。埋土は黒褐色土と炭化物が多量混入する黒色土の2層に分別される。底面はほぼ平坦で、微弱な赤褐色の被熱範囲が確認された。遺物は出土しなかった。

S W94炭窯 (第248図、写真図版181)

H区赤27(B)区中央部の尾根頂部から東側斜面にかけての肩口、IX B-2s・3r・3sグリッドに位置し、検出面はVI層である。本遺構は斜面肩口に位置するため崩落が著しく、また木根等による攪乱部分も多く遺存状態は不良である。遺存部より、平面形は長楕円形を呈し、規模は長軸約600cm、短軸70cm以上が推測される。長軸方向は北東-南西にあり、等高線に平行する。壁は遺存する山側においては緩やかに立ち上がり、深さ約20~30cmを測るが、谷側は遺存しない。埋土は上位の黒褐色土と下位に遺存する炭化物層に分層される。これより出土した炭化物を鑑定した結果、クリであることが判明した。底面は木根の攪乱が著しく凹凸が見られる。また、おそらく全体的に焼土が広がっていたと思われるが、確認できたのは遺構南西側のみで、橙色を帯び、厚さは数mm程度である。遺物は出土しなかった。

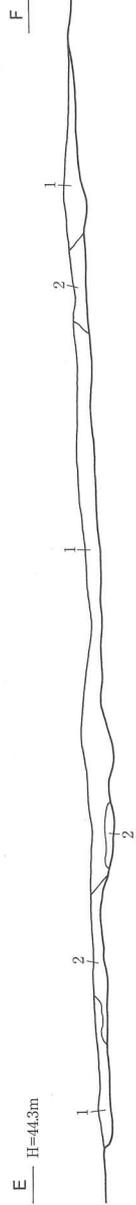
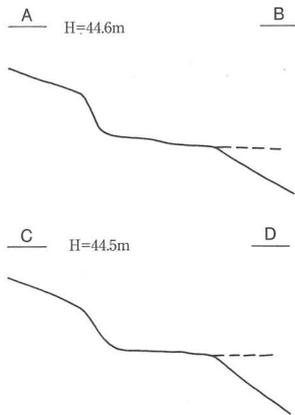
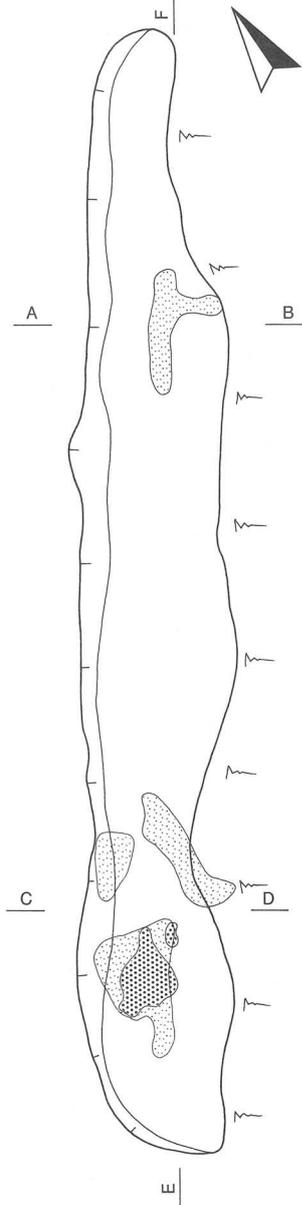
S W101炭窯 (第248図、写真図版181)

H区赤27(A)区南側の尾根頂部、IX B-5n・5oグリッドに位置する。本遺構はS I 107北西壁の掘削過程で検出された。当初はS I 107埋土下位中に廃棄された炭化物の広がりと考えたが、断面ベルトを設定し作業を進行した結果、S I 107を切って掘り込まれている炭窯であることが判明した。また、本遺構精査後に底面に方形の土坑(S K 267)のプランが確認されたが、その検出状況から本遺構に切られていることが判った。これら3基の新旧関係は(新)本遺構→S K 267→S I 107(旧)となる。平面形は長方形を呈し、規模は長軸約300cm、短軸約95cmを測る。長軸方向は北東-南西にあり、等高線及びS I 107北西壁とも平行することから、両遺構の埋没過程の窪みを利用して構築されたものと思われる。壁は緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは約25cmを測るが、下層付近の炭化物の広がりにより本遺構を検出したため、実際の壁高はそれ以上が推測される。埋土は3層に細分され、炭化物を多く含む。また、これら炭化物をサンプリングし鑑定した結果、クリであることが判った。底面は概ね平坦だが、若干北方向に向かって上り勾配である。底面及び壁面の一部は被熱により橙色に変化しているが、非常に弱い被熱のため厚さは1cmにも満たない。遺物は出土しなかった。

S W126炭窯 (第247図、写真図版181)

H区赤27(D)区北部の東側斜面上方、VIII C-17hグリッドに位置し、検出面はVI層面である。検出時の状況から土坑と考えたが、精査の結果、下位に炭化物が残存し、底面に被熱痕跡が見られることから、炭窯と判断した。平面形は略長方形を呈し、規模は開口部約130×105cm、底部約110×90cmを測る。壁はほぼ直角に立ち上がるが、斜面上方では崩落により外傾する。深さは斜面上方で約55cm、斜面下方で約5cmを測る。また壁面には被熱により橙色に変化した焼土が確認できたが、厚さ数mm程の弱い焼成である。埋土は6層に細分されるが、大別すると上位の暗褐色土系、中位及び壁際の黄褐色土、下位の炭化物層となる。

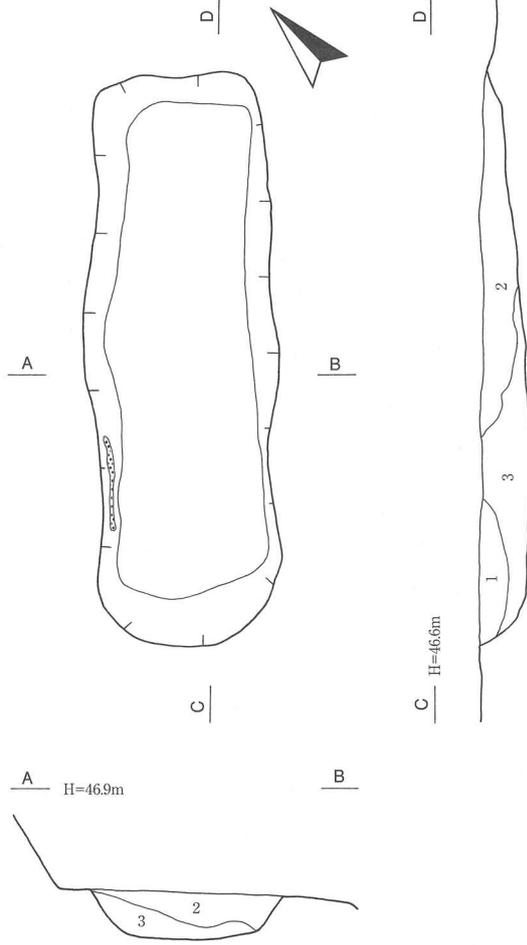
SW94



SW94

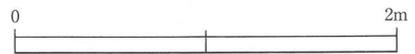
1. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり欠、粘性有
2. 10YR2/1 (黒) 炭化物層

SW101



SW101

1. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性やや有
2. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有、炭化物少量
3. 10YR2/3 (黒褐) しまり有、粘性やや有、炭化物多量



第248図 SW94・101炭窯

炭化物層より上層は流入した自然堆積と思われる。また炭化物層より出土した炭化物は鑑定の結果、クリであることが判った。底面は平坦で、壁面同様、橙色焼土の広がり全体に確認できたが、厚さ数mm程の弱い焼けであったため、部分的にしか記録できなかった。遺物は出土しなかった。

S K 193土坑（第249図、写真図版181）

H区赤27(D)区の洞部斜面上方、ⅧC-16kグリッドに位置し、検出面はⅣ層面である。平面形は略楕円形を呈し、規模は開口部約90×65cm、底部約60×40cmを測る。長軸方向は北-南方向にあり、等高線とほぼ平行である。断面形は皿状を呈し、壁高は約5～10cmを測る。埋土は黒褐色の単層である。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S K 194土坑（第249図、写真図版181）

H区赤27(C)区の北部、尾根頂部から東側斜面にかけての肩口のⅧC-19dグリッドに位置し、検出面はⅤ層面である。本遺構は斜面上に位置するため、斜面下方である東側は一部遺存しない。遺存する平面形・規模は長楕円形を呈し、開口部約120×60cm、底部約95×45cmを測る。壁は遺存する斜面上方の西側ではほぼ直角に立ち上がり、壁高は約30cmを測る。埋土は3層に細分されるが、Ⅴ層起源の黄褐色土が主体であり、流入による自然堆積と思われる。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S K 205A・B土坑（第249図、遺物図版36・101、写真図版181・234・287）

H区赤27(A)区南側の尾根頂部から西側斜面にかけての肩口、ⅨB-6mグリッドに位置し、検出面はⅣ層である。精査開始時当初は、上半部が大きく崩落した単独の土坑と考えたが、埋土断面を考察した結果、2基の土坑が重複している可能性が高く、新しい方をS K 205A、旧い方をS K 205Bとした。

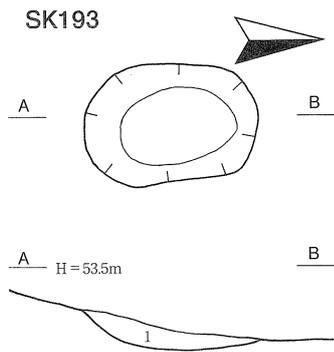
S K 205Aの残存する部分と断面図より推定すると、平面形は楕円形を呈し、規模は開口部250×210cm以上、底部200×80cm以上と思われる。遺存する山側の壁は下半部では緩やかに立ち上がるが、その後直角に立ち上がり、上半部は崩落により外反し、深さは約90cmを測る。埋土は9層に細分されるが、上位の黒褐色土を除いて、マサ土起源の土が混入しており、壁際下位には廃棄された焼土層が形成されていることから、人為堆積と思われる。底面は北側にやや凹凸が見られるが、概ね平坦である。

S K 205Bの平面形は円形を呈し、規模は開口部径約210cm、底部径約190～200cmを測る。壁は山側では袋状に立ち上がるが、谷側では鋭角的に立ち上がる。深さは約70cmを測る。埋土は15層に細分されるが、各層位の状況から、人為堆積と思われる。底面は概ね平坦であるが、遺構東側には深さ30cm程の袋状の掘り込みがあり、東側に大きく張り出す。また、北側の壁沿いは、幅約20cmで東西両側の壁中位から下りながら取東するスロープ状となっている。この底面は極めて強く締まっており、最低位の中心部まで一連の傾斜を保ち、北側においては本体の底面より10cm程低くなる。

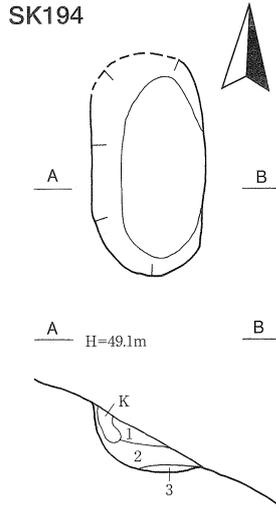
遺物は、土師器の甕形土器片5点と砥石が1点(No176)が出土したのみであるが、その内1点が遺構外出土のものと接合(No422)した。遺物はいずれも埋土上位～中位出土のものであることから、S K 205Aに帰属するものと思われる。

S K 207土坑（第249図、写真図版181）

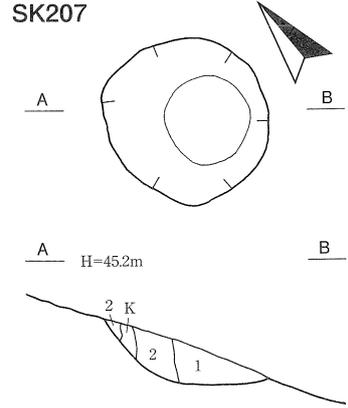
H区赤27(B)区中央部の尾根頂部から東側斜面にかけての肩口、ⅨB-1tグリッドに位置する。検出面はⅥ層面である。平面形・規模は円形を呈し、開口部径約85cm、底部径約45cmを測る。壁は山側で鋭角的に立ち上がるが、谷側では緩やかに立ち上がる。壁高は山側で約30cm、谷側で約5cmを測る。埋土は一部木根により攪乱されているが、マサ土質が混入した褐色土系とマサ土系の2層に細分され、その層位状況から人為堆積と考えられる。底面はほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。



SK193
1. 10YR2/2 (黒褐) しまり欠、粘性極めて有

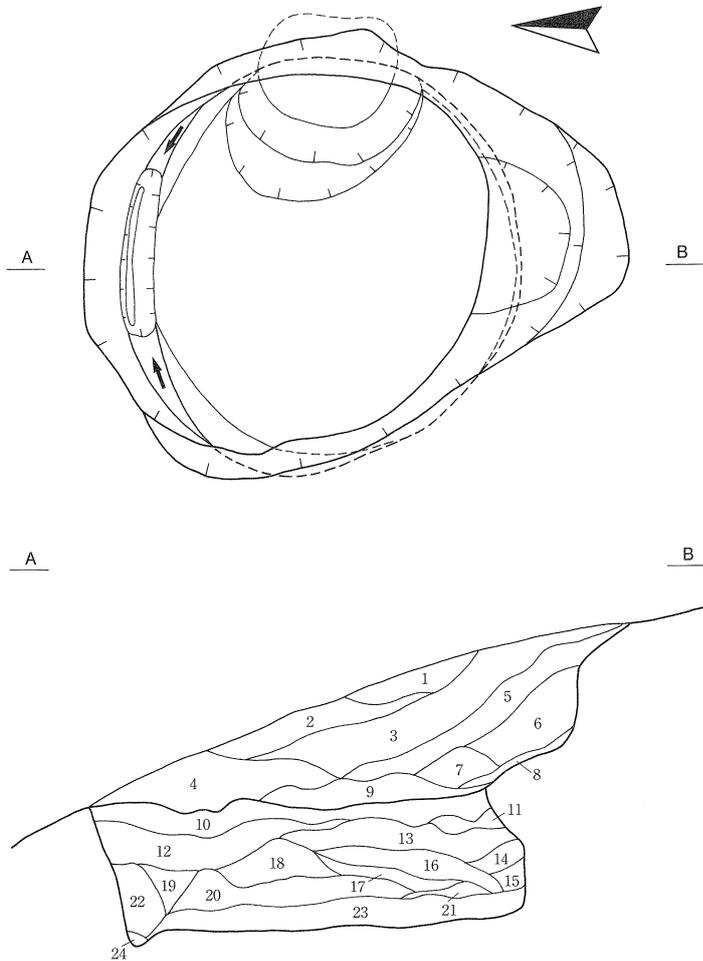


SK194
1. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性やや有
2. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有、炭化物少量
3. 2.5Y7/8 (明黄褐) しまり有、粘性欠、炭化物微量



SK207
1. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性欠、炭化物微量
2. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり欠、粘性無

SK205A・B



SK205A・B
1. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり欠、粘性有
2. 10YR3/1 (黒褐) しまりやや有、粘性極めて有
3. 10YR2/2 (黒褐) しまり欠、粘性有、上位に黄褐色土ロック混入
4. 10YR2/1 (黒) しまりやや有、粘性極めて有
5. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまり有、粘性欠
6. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性やや有
7. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性無
8. 5YR7/4 (にぶい橙) 廃棄地土層、炭化物中量
9. 2.5Y8/4 (淡黄) しまり有、粘性欠
10. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり欠、粘性有
11. 10YR6/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性有
12. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり・粘性やや有
13. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性やや有
14. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり欠、粘性やや有
15. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性有
16. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり・粘性有
17. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有
18. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性欠
19. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり欠、粘性やや有
20. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり有、粘性欠
21. 2.5Y8/6 (黄) しまり有、粘性やや有
22. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり欠、粘性有
23. 2.5Y8/4 (淡黄) しまり有、粘性欠
24. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり・粘性欠

第249図 SK193・194・205A・B・207土坑

S K 212土坑 (第250図、遺物図版38、写真図版182・235)

H区赤27(B)区北部の東側斜面中腹、IX B-4 r グリッドに位置し、検出面はVI層面である。本遺構は傾斜地に位置するため、斜面下方の南東側は遺存しない。遺存部分から推定される平面形は円形と思われ、規模は開口部径約135cm、底部径約120cmが推定される。遺存する壁はほぼ直角に立ち上がり、山側の壁高は約45cmを測る。埋土は褐色土系の3層に細分され、斜面上方より流入した自然堆積と思われる。底面は平坦である。本遺構の斜面上方にはS X I 28が隣接するため、その位置関係からも本遺構がS X I 28の床面施設であった可能性が考えられるが、確証は無く推測の域を出ない。しかし、この周囲に確認された遺構はこの2基のみで、何らかの関連性はあったものと思われる。

遺物は、土器が数点のみで、埋土出土の土師器の甕形土器片2点とRP1が接合(452)した。

S K 214土坑 (第250図、写真図版182)

H区赤27(B)区中央部、尾根頂部から東側斜面に向かう肩口のIX B-1 t グリッドに位置し、検出面はVI層面である。斜面上方は崩落しており、平面形は歪な円形で、規模は開口部径約115~145cm、底部径約130~155cmを測る。断面形はフラスコ状を呈し、壁高は山側で約105cm、谷側で約70cmである。埋土は15層に細別されるが、5層は山側壁の崩落土と考えられ、それより上層の層位の状況から1~5層は斜面上方から流入した自然堆積と思われる。一方、6層以下は斜面下方からの流れが見受けられることから、人為的に埋め戻されたものと思われる。底面はほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。

S K 222土坑 (第250図、写真図版182)

H区赤27(B)区南部の尾根頂部から東側斜面にかけての肩口、VIII C-20 a グリッドに位置し、検出面はIV層面である。本遺構は斜面上に位置するため、斜面下方の南東側は遺存しない。また本遺構はS I 114東隅及びカマドA煙道と重複するが、埋土断面から本遺構がS I 114カマドAを切っていることが判った。遺存する平面形は歪な円形を呈し、規模は径約135~145cmを測る。遺存する北西側の壁は鋭角的に立ち上がり、深さは約40cmを測る。埋土は7層に細分されるが、各層位の状況から人為的に埋め戻されたものと思われる。底面は概ね平坦だが、遺構中央がやや窪んでいる。遺物は出土しなかった。

S K 267土坑 (第250図、写真図版182)

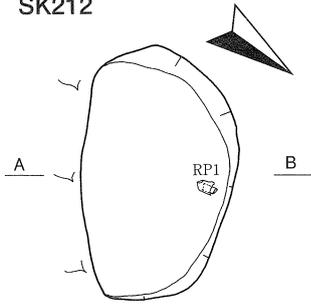
H区赤27(A)区南側の尾根頂部、IX B-5 n・5 o グリッドに位置する。本遺構はS I 107精査過程で検出されたS W 101精査後の底面において、方形のプランを確認したものである。これら3基の遺構の新旧関係は(新)S W 101→本遺構→S I 107(旧)と考えられる。平面形は歪な隅丸長方形で、規模は長辺約160cm、短辺約120~130cmを測る。長軸方向は北東-南西方向にあり、等高線及びS I 107北西壁に平行することから、S I 107埋没過程の窪みを利用して構築された可能性が考えられる。断面形は平底鍋形を呈し、確認面からの深さは約40cmを測る。埋土は上位の明黄褐色土と下位の浅黄色土の2層に分別される。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

S K 268土坑 (第251図、写真図版182)

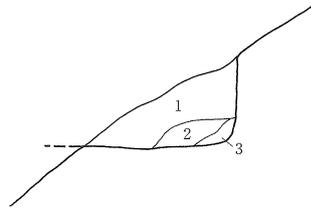
H区赤27(A)区南側の尾根頂部、IX B-5 o グリッドに位置する。本遺構はS I 107床面において検出したものであるが、前述の通り、単独の土坑と判断した。平面形は円形を呈し、規模は径約160cmを測る。断面形はフラスコ状を呈し、深さは約110cmを測る。埋土は10層に細分されるが、上位のオリーブ褐色土系、中位の明黄褐色土、下位の浅黄褐色土と大別される。各層位の状況から、人為的に埋め戻された可能性が高い。底面は平坦である。

遺物は埋土中より不明鉄製品が1点出土した。

SK212



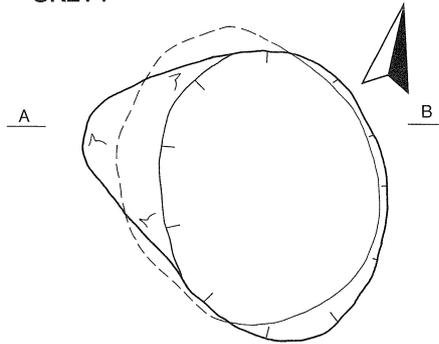
A H=41.9m B



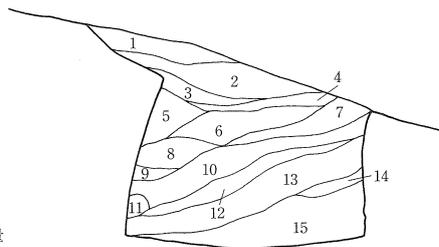
SK212

1. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり・粘性欠
2. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性やや有
3. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり・粘性有、炭化物少量

SK214



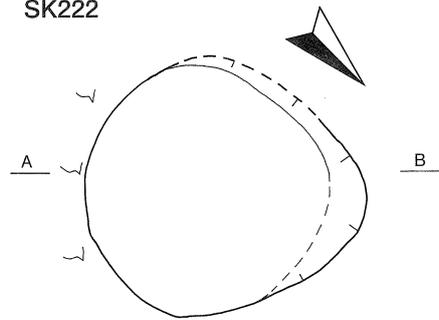
A H=45.7m B



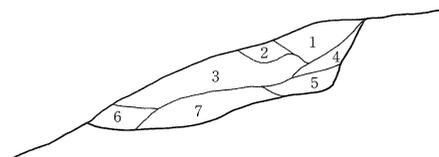
SK214

1. 2.5Y3/2 (黒褐) しまり・粘性有
2. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性有
3. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまりやや有、粘性有、炭化物少量
4. 2.5Y7/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性欠
5. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり欠、粘性有、壁崩落土
6. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまりやや有、粘性有、部分的に黒褐色土混入
7. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまりやや有、粘性有
8. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり欠、粘性有
9. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり欠、粘性有
10. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり・粘性やや有、しまりに黒褐色土混入
11. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり欠、粘性有
12. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり欠、粘性有
13. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無
14. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまりやや有、粘性有
15. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり・粘性有

SK222



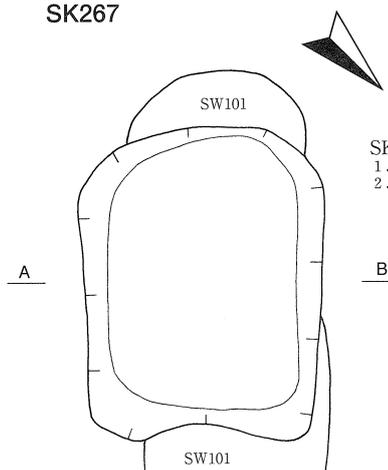
A H=46.0m B



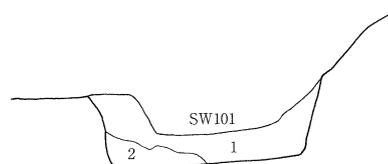
SK222

1. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり・粘性有
2. 2.5Y7/6 (明黄褐) しまり有、粘性欠
3. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性極めて有
4. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性欠
5. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまりやや有、粘性有
6. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり有、粘性やや有
7. 2.5Y8/6 (黄) しまり極めて有、粘性欠

SK267

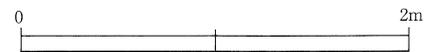


A H=46.9m B



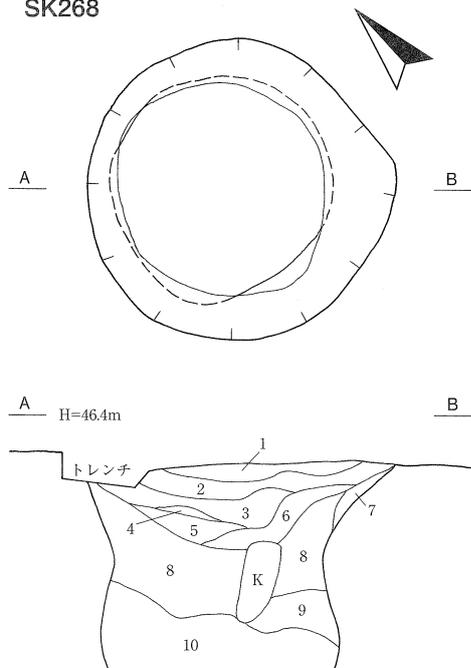
SK267

1. 2.5Y7/6 (明黄褐) しまり有、粘性欠
2. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性欠



第250図 SK212・214・222・267土坑

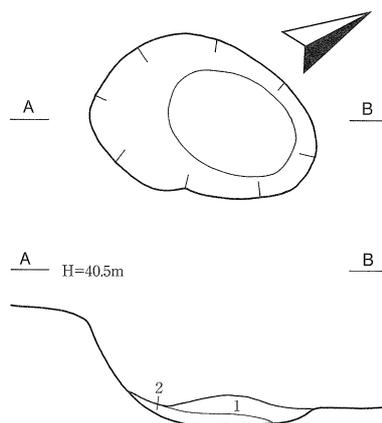
SK268



SK268

1. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性有
2. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまりやや有、粘性欠
3. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性欠
4. 7.5YR6/6 (橙) 廃棄焼土層
5. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり欠、粘性やや有
6. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり・粘性欠
7. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり・粘性欠、炭化物微量
8. 2.5Y7/6 (明黄褐) しまり有、粘性欠
9. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまりやや有、粘性欠、炭化物少量
10. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性欠

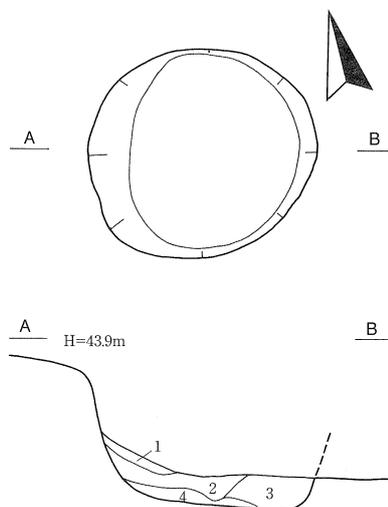
SK284



SK284

1. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性無
2. 2.5Y2/1 (黒) しまり有、粘性無

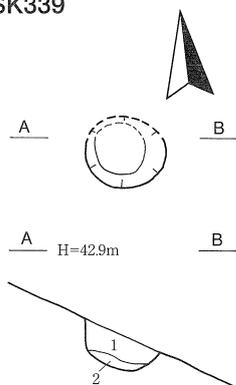
SK342



SK342

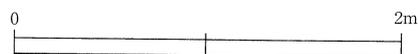
1. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり有、粘性欠
2. 2.5Y4/2 (暗灰黄) しまり有、粘性欠
3. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性欠
4. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり有、粘性欠

SK339



SK339

1. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有
2. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、炭化物微量



第251図 SK268・284・339・342土坑

S K 284土坑 (第251図、遺物図版36、写真図版182・234)

H区赤27(A)区の北端、IX B-10 i グリッドに位置する。本遺構は調査開始以前の木材伐採及び搬出時に設けられた重機道によって、遺構上部の大半が削平されている。本遺構はS I 108精査過程において検出したもので、その平面状況からS I 108より新しいものと思われる。残存部から平面形は楕円形を呈すると思われ、規模は開口部約120×80cm、底部約70×50cmが残存する。残存部から推測される断面形は丸底鍋形で、深さは南西側で約55cm、北東側で約10cmが残存する。埋土は浅黄色土と黒色土の2層に細分される。底面はほぼ平坦である。

遺物は、埋土下位より土師器の坏形土器の口縁部片が1点(423)出土したのみである。

S K 339土坑 (第251図)

H区赤27(E)区洞部中央の斜面下方、VIII C-20 h グリッドに位置する。検出時の状況は、S K I 46 B 精査時の埋土断面観察により、重複する本遺構を確認した。新旧関係の詳細は前述のS I 178 D 等に記した通りで、直接的な切り合いはS K I 46 B とあり、(新)本遺構→S K I 46 B (旧)となる。平面形は円形を呈し、規模は開口部径約35cm、底部径約30cmである。断面形は碗状を呈し、深さは約25cmを測る。埋土は上位の褐色土と下位の暗褐色土に分別される。底面状態は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S K 342土坑 (第251図)

H区赤27(E)区洞部北側の斜面下方、VIII C-20 f グリッドに位置する。検出時の状況は、S I 183西壁精査時に円形に広がる暗褐色土系のプランを検出したため、断面ベルトを設定し観察した結果、本遺構を確認した。以上のような検出経緯により、本遺構の東側は既に掘削してしまったため、上半部の詳細は不明である。本遺構と重複する遺構の相対的な新旧関係の詳細は、前述のS I 179等に記した通りで、直接的な重複はS X I 88 A 及びS I 183とあり、(新)S X I 88 A →本遺構→S I 183 (旧)となる。残存する平面形は略円形を呈し、規模は開口部径約110~120cm、底部径約90~100cmを測る。壁は鋭角的に立ち上がり、深さは西側で約70cm、東側で20cm以上が推測される。残存する埋土は4層に細分されるが、各層位の状況から自然堆積と思われる。底面はほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。

S N 43焼土遺構 (第252図)

H区赤27(B)区北側の尾根頂部、IX B-3 q グリッドに位置する。本遺構はS I 113埋土上面で検出したもので、S I 113埋没後に形成された焼土遺構と判断した。被熱範囲は歪な円状を呈し、規模は径約30~40cmを測る。厚さは3~4cm程で、明赤褐色を帯びている。遺物は出土しなかった。

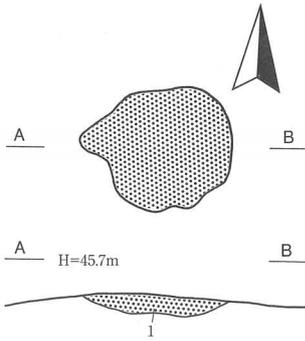
S N 44炉跡 (第252図)

H区赤27(B)区北側の尾根頂部、IX B-3 o・3 p グリッドに位置し、検出面はVI層である。本遺構はS I 98で前述した通り、S I 98の精査過程で炉跡と判断したものである。新旧関係は、(新)本遺構→S I 98 (旧)である。平面形は楕円形を呈し、規模は約120×90cmを測る。壁はやや鋭角的に立ち上がり、深さは約25cmである。埋土は4層に分別される自然堆積と思われる。底面は概ね平坦で、北西側には厚さ1cm未満の微弱な明赤褐色焼土が広がる。遺物は出土しなかった。

S N 46炉跡 (第252図)

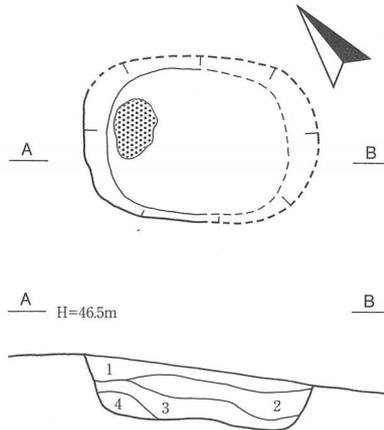
H区赤27(A)区の東側斜面、IX B-10 k グリッドに位置し検出面はVI層である。本遺構はS I 103棚状施設及びS I 102カマド煙出部を切って構築されていることから、両者より新しいと判断される。また、本遺構は立地条件により、斜面下方は遺存しない。遺存する平面形は楕円形を呈し、規模は開口部約90×60cm、底部は円形を呈し、径約40cmを測る。断面形はやや深めの皿状を呈し、深さは山側で約30cmを測る。埋土

SN43



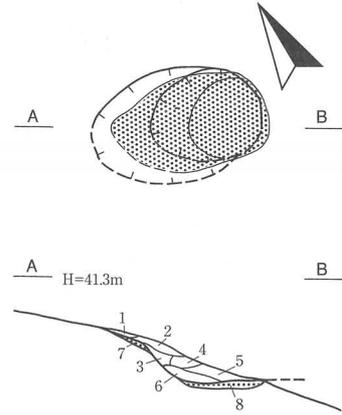
SN43
1. 5YR5/8 (明赤褐) 焼土

SN44



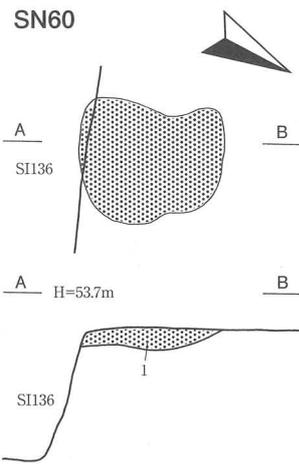
SN44
1. 2.5Y4/2 (暗灰黄) しまり・粘性やや有
2. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまりやや有、粘性欠
3. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性欠
4. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性有、炭化物少量

SN46



SN46
1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
2. 10YR2/3 (黒褐) しまり欠、粘性有
3. 10YR3/3 (黒褐) しまりやや有、粘性有
4. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性有
5. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有
6. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有
7. 2.5YR7/4 (淡赤橙) 焼土
8. 2.5YR5/8 (明赤褐) 焼土

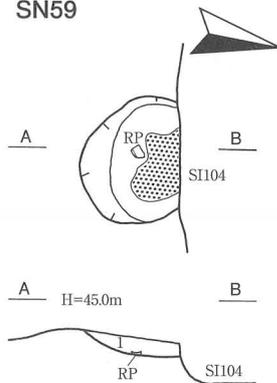
SN60



SN60
1. 5YR5/8 (明赤褐) 焼土

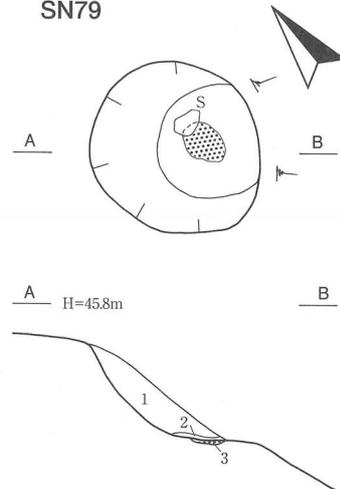


SN59



SN59
1. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有
2. 7.5YR6/6 (橙) 焼土

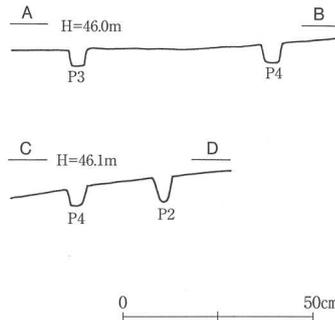
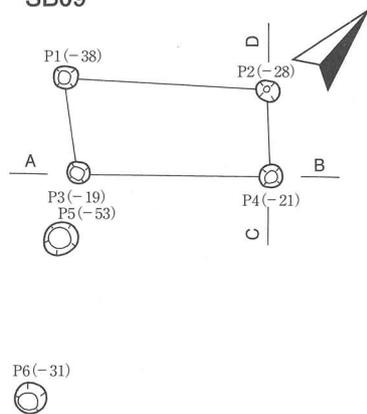
SN79



SN79
1. 2.5Y7/6 (明黄褐) しまり有、粘性欠
2. 2.5Y3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性欠、炭化物微量
3. 5YR6/8 (橙) 焼土



SB09



第252図 SN44・79炉跡・SN43・46・59・60焼土遺構・SB09掘立柱建物跡

は6層に細分されるが、全体的に黒～暗褐色土を基本とした自然堆積と思われる。底面はほぼ平坦で、厚さ1～4cm程の淡赤橙～明赤褐色焼土が広がる。遺物は出土しなかった。

S N59炉跡 (第252図)

H区赤27(A)区中央の尾根上平坦部、IX B-8 n グリッド杭を囲むように位置し、検出面はVI層である。本遺構はS I 104と重複するが、S I 104の精査過程において検出したため、その新旧関係は不明となってしまった。本遺構を確認した際、既に底面に焼土が確認でき、掘り込みを有することから、炉跡と判断した。残存部から推測される平面形・規模は、径約60～70cmの略円形と思われる。断面形は皿状で、深さは10cm前後である。埋土は黒褐色土の単層である。底面には約30×20cmの不整な橙色焼土が広がるが、厚さは1cmに満たない弱い被熱範囲である。

遺物は、底面から土師器の甕形土器片1点が出土した。

S N60焼土遺構 (第252図)

H区赤27(D)区の洞部斜面上方、VIII C-16 k グリッドに位置し、検出面はIV層上面である。検出時の状況から、本遺構はS I 136北西壁と重複し、これに切られている。不整形な明褐色焼土の広がり、規模は約40×25～35cmである。厚さは約5cm程で堅く締まる。遺物は出土しなかった。

S N79炉跡 (第252図)

H区赤27(E)区洞部北側の斜面下方、VIII C-20 g グリッドに位置し、検出面はVI層である。本遺構はS K I 47精査時において検出されたものである。本遺構と重複する遺構の新旧関係の詳細は、前述のS I 179等に記した通りで、直接的な切り合いはS K I 47とあり、(新)本遺構→S K I 47(旧)となる。なお、本遺構の斜面下方の南東側は崩落により遺存しない。平面形は円形を呈し、規模は開口部径90cm以上、底部径約60cmが推定される。遺存する壁は緩やかに立ち上がり、深さは最大約50cmを測る。埋土は、大半を占める上位の明黄褐色土と下位の暗褐色土に分別される自然堆積と思われる。底面は概ね平坦で、中央には約25×15cmの楕円状に広がる微弱な橙色焼土が確認できる。遺物は出土しなかった。

S B09掘立柱建物跡 (第252図、写真図版182)

H区赤27(B)区北側の尾根頂部、IX B-2 q・3 q グリッドに位置し、検出面はVI層である。P 1～P 4の4本で長方形を構成し、規模は桁行約200cm×梁間約90cmである。桁行軸方向はN-49°-Eにある。各柱穴の平面形は、P 1・3・4は隅丸方形、P 2は略円形を呈する。開口部規模は4基とも約20cm前後である。検出面からの深さは山側にあるP 1・2は深く、それぞれ38cm・28cmだが、谷側のP 3・4は19cm・21cmと山側のそれより10cm程浅い。底面標高はP 2・3・4は45.60m前後であるが、P 1のみ45.46mと他より15cm程低い。埋土はいずれも暗オリーブ褐～オリーブ褐色土の単層で柱痕はみられない。P 5・6は上記のものには伴わないが、どちらもS I 113精査時に確認し、それを切っていることから、S B09と同時期の可能性が考えられる。それぞれ平面形は円形を呈し、開口部規模は径約30cmを測る。確認面からの深さはP 5は53cm、P 6は41cm、底面標高はP 5は約45.10m、P 6は約45.00mである。埋土はどちらもオリーブ褐色土の単層である。遺物が出土しなかったため時期は特定できないが、この周辺の竪穴住居跡は掘り込みが浅く、本遺構に伴って周辺の削平整地が行われた可能性が考えられる。(小林)

6) I 区の遺構

I区は、調査区東端の幹尾根とその東側の谷斜面を含む範囲である。地形概況としては尾根部赤28区は調査区域ではおよそ馬の背状を呈し、中央肩部が標高約62mと最も高く、この南北両側の尾根頂部では標高は

約58mほどで、尾根の北端から北東には一段約6mほど低い部分に棚状に張り出した狭小な平場がある。南側調査区外は急傾斜の上りで赤22区尾根の後背丘陵に続く。最高位部の北側を赤28A区、南側をB区と便宜的に分割した。赤28A区の尾根頂部は、尾根中央高位部から明瞭な平坦部もなく、尾根突端に向かい緩やかに傾斜し、B区の尾根頂部では北部は幅約6m前後の比較的平坦な面となり、南部では一段低く、あまり明瞭な平坦面は認められない。この尾根の東側谷部を緑15・16区としたもので、緑15区は谷奥のやや緩傾斜の洞状となっている部分で、続く緑16区は急勾配で下位の湿地帯に至る。全体的には尾根筋の両側は急勾配の斜面となっており、尾根部と谷部の平均的な比高は20～30mほどである。緑15区の谷底は幅約5m以下で、長さ約30mほどの狭小な洞状となっている。検出面は、尾根頂部及び斜面上方ではⅣ層～Ⅵ層となるが、緑15区では他の谷部同様、黒色土のⅢ層が細分され、Ⅲ層上面が古代の検出面となる。

検出された遺構は、竪穴住居跡28棟、工房跡4棟、竪穴状遺構1棟、鉄生産関連炉跡3基、炭窯14基、土坑22基、炉跡14基、廃滓場1ヶ所である。分布の状況は、尾根頂部の平坦部や緩斜面部、北端に張り出した平坦部と緑15区の谷部西側斜面に立地している。

①赤28区

検出された遺構は、竪穴住居跡28棟、工房跡3棟、竪穴状遺構1棟、鉄生産関連炉跡2基、炭窯13基、土坑20基、炉跡11基である。分布状況としては、A区では尾根頂部と北端張り出しに立地し、住居跡の重複はほとんどないが、B区では尾根頂部での重複が著しい。(小山内)

S I 151 竪穴住居跡 (第253図、遺物図版42、写真図版183・238)

赤28A区のIX D-15・16a グリッドに位置し、Ⅴ層(黄褐色土)及びⅥ層上面で検出している。尾根西側下の急斜面に立地し谷側が床面の途中から崩落しており、検出の際に貼床の断面層を確認している。規模・形状の詳細は不明であるが、残存部で推察すると平面形はS-25°-Eを主軸方位とする不整な隅丸方形を呈していたと思われる。壁長は東側(山側)が2.1m・南側が2.3m、北側の残りが1.5mあり、また貼床範囲から床面積は約5.5㎡と推定する。壁はいずれもやや外傾気味に立ち上がり、壁高は東側中央で43cmある。ただし上部はかなり崩れており、本来は80cm程度はあったと推察する。埋土は上位の一部が暗褐色土の自然堆積で、下位の大半が黄褐色土の一括廃棄による人為的堆積で壁際・床面近くには壁の崩落によるマサ土(小～中)が少量混入している。床面は東側の壁から80cm程度を残して、谷側に向かって貼床されている。柱穴痕はみられないが、床面施設として土坑を1基検出している。土坑は85×90cmの規模で隅丸方形を呈し、底部に柱穴状の窪みを伴っている。

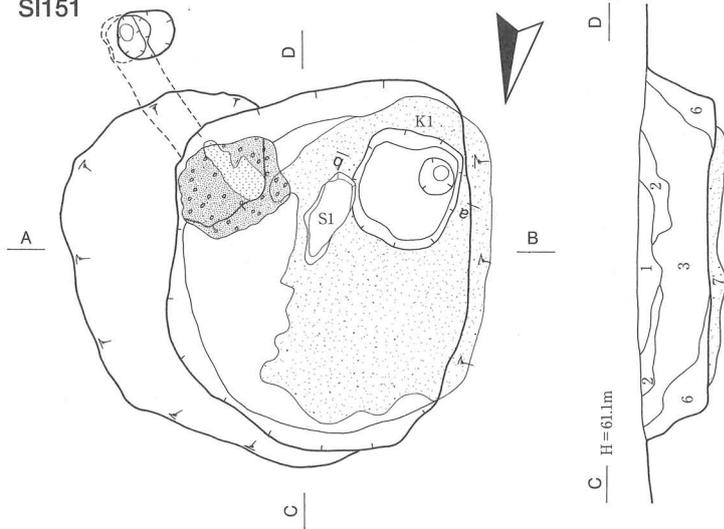
カマドは南東隅に位置している。周囲の大半が北側に付設しているのと比較するとやや異質で、地形的な面を考慮して造られたと考える。検出の際には煙道入り口を塞ぐように構築粘土が崩れた状態で残っており、その上に若干炭化物が付着していた。カマドの左側壁面には芯材に用いたと思われる石があり、燃焼部付近からは芯材や支脚の抜き取り穴を検出している。土坑の近くにある石もカマドの天井もしくは芯材に利用していたと思われる。燃焼部焼土は中心の厚さが6cmで規模が約35×45cmの不整な楕円形を呈し、やや東側の壁寄りに位置している。煙道は削り貫き式で奥行きが1.3m・径が30cmあり、奥が20cm程度深く下り勾配になっている。また煙り出しピットは深さが1.2m・径が35cmを測り底部に窪みを伴っている。

遺物は検出面下及び埋土中から土師器の甕の破片(486他)が数点出土している。

S I 153 竪穴住居跡 (第254図、遺物図版42、写真図版183・238)

赤28A区のIX C-16・17r・s グリッドに位置し、尾根頂部平坦面のⅥ層上面で検出している。平面の形

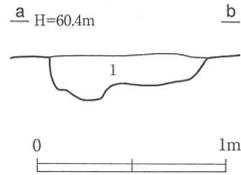
SI151



SI151

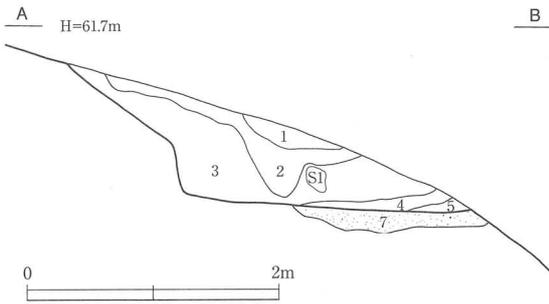
1. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性無
炭を片状 (極小~小) に微量
2. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性無
3. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無
マサ土をブロック状 (極小~小) に微量
4. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
マサ土を粒状 (極小) に微量
5. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無
6. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
マサ土をブロック状 (小~中) に微量
7. 10YR6/6 (明黄褐) 砂質、しまり堅、粘性無 貼床

SI151 K1

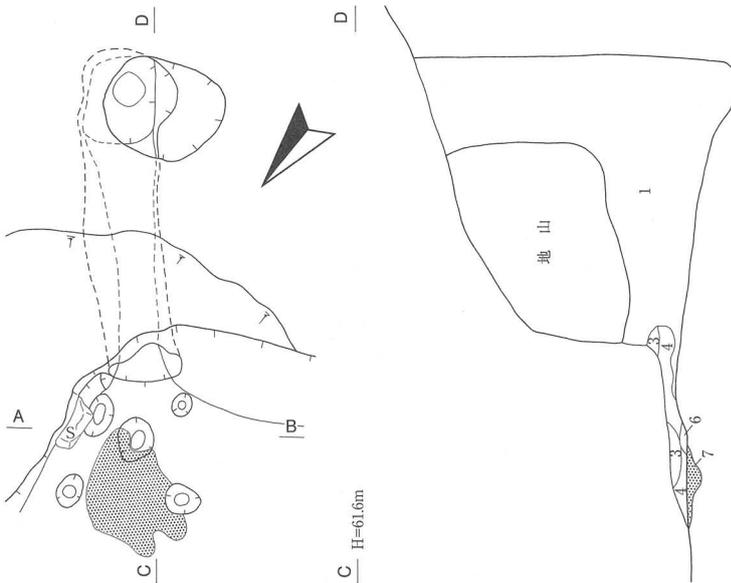


SI151 K1

1. 10YR5/4 (にぶい黄橙) 砂質、しまり有、粘性無

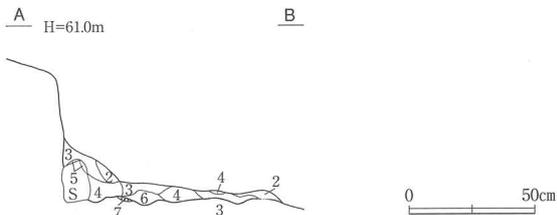


SI151 カマド



SI151 カマド

1. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまりやや有 粘性無
2. 10YR6/8 (明黄褐) しまりやや有、粘性無
3. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり堅、粘性無
構築粘土をブロック状 (小~中) に多量
4. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無 炭化物を粒状に微量
5. 10YR6/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性無 カマド構築粘土
6. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無
炭化物を粒状に微量 (支脚抜き取り穴)
- 7.5YR6/4 (にぶい橙) 燃焼部焼土



第253図 SI151 竪穴住居跡

状はN-7° - Eを主軸方位とする、不整な隅丸方形を呈している。壁長は南・北と東側が3.0m・西側が2.8mあり、床面積は約10㎡を測る。壁はいずれも外傾して立ち上がり、南側の一部及び西側の上部が崩落している。壁高は北及び東側の中央で50cm前後、南及び西側の中央で75cm前後を測る。埋土はレンズ状の自然堆積で、上位黒褐色土系と下位黄褐色土系に大別される。また、壁際の下層は壁の崩落によるマサ土（小～中）を若干含んでいる。床面は壁際外周30～80cm程度を残した大半に貼床されており、柱穴を2基（P1・P2）伴っている。柱穴2基は深さが同程度で底部に堅さがありいずれも主柱穴と思われるが、配列が不規則でやや疑問が残る。床面施設としては深さ6cm・幅10cmで、全長が約70cmを測る溝状の窪みを検出している。南側の壁から30cm程度離れたところに位置しており、壁溝の残存よりも木根痕の可能性が高い。

カマドは北側壁面のほぼ中央に位置している。芯材や支脚の抜き取り穴はみられるが、芯材の石及び構築粘土は残っていない。燃焼部焼土は約40×60cmの規模で不整な楕円形を呈し、中心の厚さは6cm程度ある。煙道は削り貫き式で奥行きが1.3m・径が40cmあり、やや下り勾配になっている。また煙り出しピットは深さは65cmで、径が35cmを測る。

遺物は埋土から土師器の甕の破片（487・489）及び鍛冶滓が3点、カマド周辺（488）や床面からも土師器の甕の破片が少量（9号袋1/2）出土している。なお、鍛造の痕跡が見られないことから鍛冶滓は流れ込みと思われる。

S I 154 竪穴住居跡（第255図、遺物図版104、写真図版184・289）

赤28A区のⅨC-16p・q・17qグリッドに位置し、尾根頂部平坦面のⅥ層上面で検出した。検出時には文化課によるトレンチの跡が見られたが、床面まで達しておらず埋土以外遺構への影響はない。平面の形状はN-12° - Eを主軸方位とするやや歪んだ隅丸長方形を呈している。壁長は北側が3.5m、南側が3.2m、東及び西側が4.0mあり、床面積は約14㎡を測る。赤28A区の尾根にある住居跡の中では、最も規模が大きい。壁はいずれもやや外傾して立ち上がり、壁高は南及び西側の中央で45cm前後、北及び東側の中央で30cm前後を測る。埋土はレンズ状の堆積で、上位の自然流入による黒褐色土と下位の人為的廃棄と思われるにぶい黄橙色土に大別される。床面は南及び西側の壁際を残したほぼ全面に貼床がなされており、柱穴を3基（P1～P3）伴っている。柱穴3基は径が20cm前後で深さが約5cmあり、副柱穴と思われる。また四隅には若干の窪みがあり堅さを伴うことから主柱穴があった痕跡が窺える。

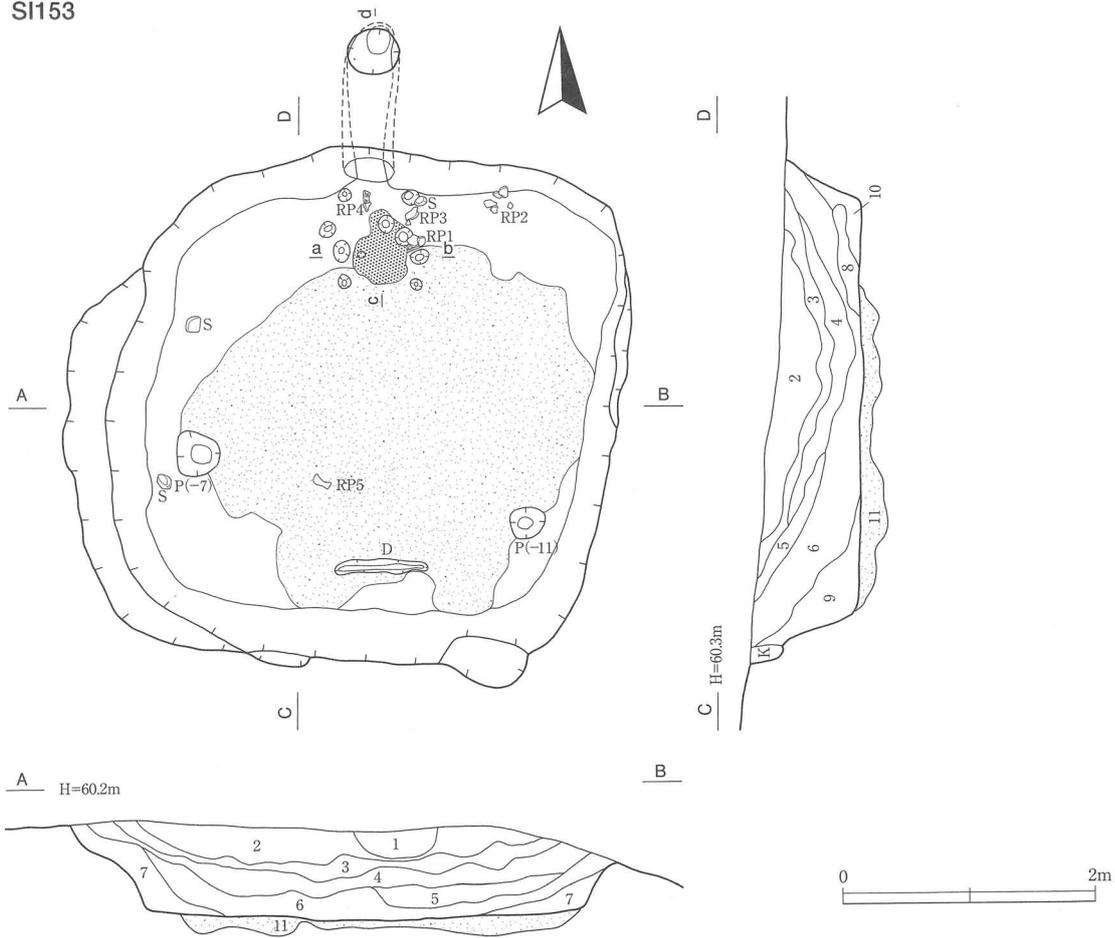
カマドは北側壁面のほぼ中央に付設してあり、煙道入り口が床面より10cm程度上に位置している。袖部には構築粘土が若干残っており、芯材・支脚の抜き取り穴も検出している。また袖部下の岩盤には7cm程度造り出しの隆起がみられる。燃焼部焼土は40×47cmの規模でやや不整な楕円を呈しており、中心の厚さは7cmを測る。煙道は削り貫き式で奥行きが1.0m・径が30cmあり、勾配はあまりないが入り口から約60cmのところ急に深くなる。煙り出しピットは深さが45cm・径が35cmを測り、底部に窪みを伴っている。

遺物は埋土から土師器の甕の破片が数点（G1/2）、及び鍛冶滓が2点、砥石が1点出土している。住居内には鍛造の痕跡は見られず、鍛冶滓は流れ込みと思われる。

S I 155 竪穴住居跡（第256図、遺物図版42、写真図版184・238）

赤28A区のⅨC-16o・pグリッドに位置し、尾根頂部緩斜面のⅥ層上面で検出している。平面の形状はS-15° - Wを主軸方位とするやや不整な隅丸方形を呈している。壁長は南北両側及び西側が2.6m・東側が2.5mあり、床面積は約7.3㎡を測る。壁は垂直気味に立ち上がり、壁高は南側中央で80cm、北側中央で30cm、東及び西側の中央で55cm前後ある。埋土はレンズ状の自然堆積で、上位に黒褐色土・下位に黄褐色土が重なり、東側の壁際・床面近くには壁の崩落によるマサ土を含む層がある。床面は北西の壁側に三角形

SI153



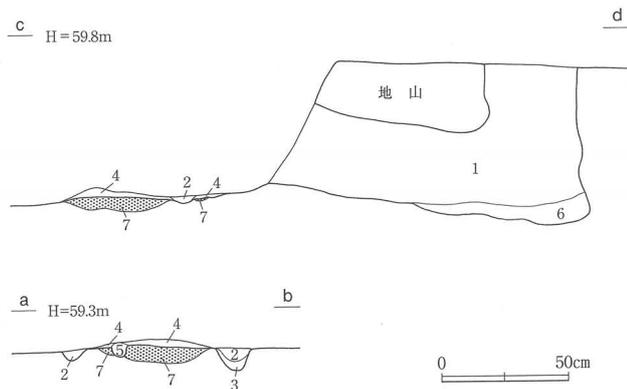
SI153

1. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性無、毛根を多く含む
2. 10YR2/2 (黒褐) しまり堅、粘性無
3. 10YR2/2 (黒褐) と10YR4/4 (褐) の混合土 しまり堅、粘性無
4. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無
5. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無、マサ土を粒状(極小)に少量
6. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無
7. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無
8. 10YR7/8 (黄橙) しまり有、粘性やや有
9. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、マサ土をブロック状(小~中)に微量
10. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
11. 10YR6/6 (明黄褐) 砂質、しまり堅、粘性無、貼床

SI153 カマド

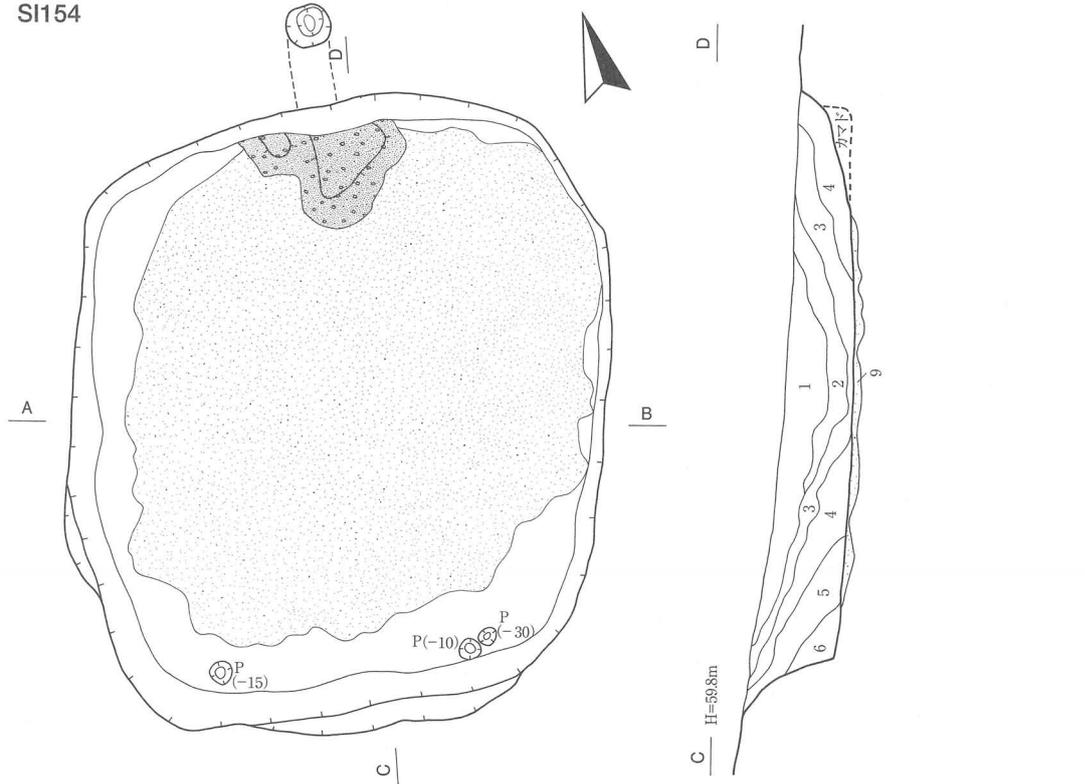
SI153 カマド

1. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無 マサ土を粒状(極小)に微量
2. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり堅、粘性無
3. 10YR7/6 (明黄褐) しまり堅、粘性無
4. 7.5YR5/6 (明褐) しまり有、粘性無
5. 10YR8/2 (灰白) マサ土、しまり非常に堅、粘性無(石の風化?)
6. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無
7. 5YR6/4 (にぶい橙) 燃焼部焼土



第254図 SI153竪穴住居跡

SI154



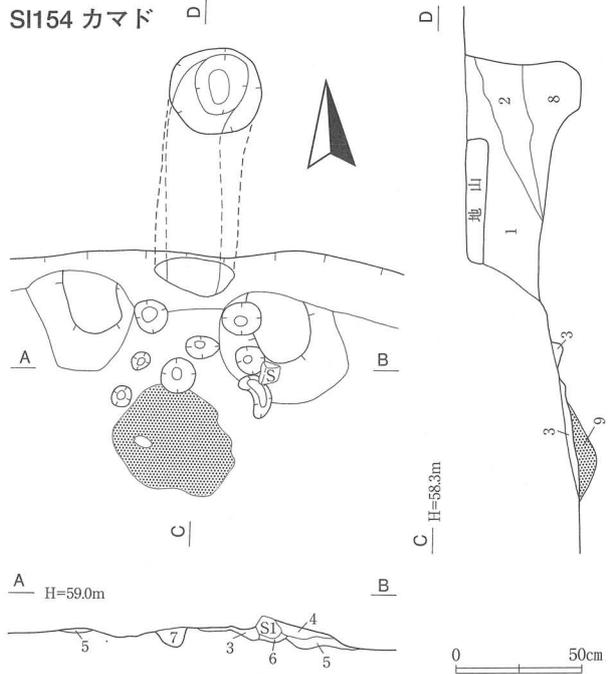
SI154

1. 10YR2/3 (黒褐) しまり堅、粘性無
2. 10YR2/3 (黒褐) と 10YR4/4 の混合 しまり有、粘性無
3. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無
4. 10YR5/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
5. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、マサ土を粒状 (極小) に少量
6. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、マサ土をブロック状 (小〜中) に少量
7. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
8. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性無
9. 10YR6/6 (明黄褐) 砂質、しまり堅、粘性無、貼床

SI154 カマド

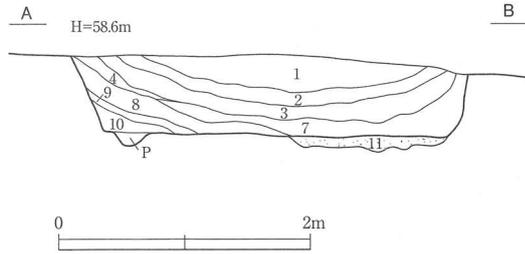
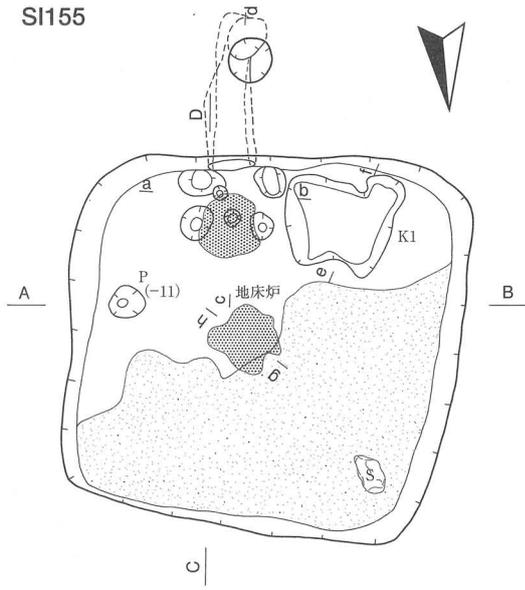
1. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性無
2. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性やや有
3. 10YR6/8 (明黄褐) 粘質が少量混入
4. 10YR6/8 (明黄褐) しまり有、粘性無 (芯材の抜き取り穴)
5. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、マサ土をブロック状 (極小〜小) に少量 (カマド袖構築粘土)
6. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無 (芯材の抜き取り穴)
7. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無 (支脚の抜き取り穴)
8. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性無
9. 5YR6/4 (にぶい橙) 燃焼部焼土

SI154 カマド



第255図 SI154竪穴住居跡

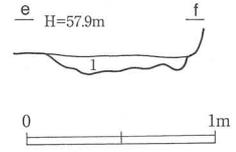
SI155



SI155

1. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性無
2. 10YR2/2 (黒褐) 10YR3/4 (黒褐) の混合 しまりやや有、粘性無
3. 10YR3/4 (黒褐) 砂質、しまり有、粘性無
4. 10YR5/4 (にぶい黄褐) 砂質、しまり有、粘性無
5. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無
6. 10YR5/8 (黄褐) しまり有、粘性無
7. 10YR3/3 (暗褐) 砂質、しまり有、粘性無
8. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無
9. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや堅、粘性無、マサ土を粒状(極小)に少量
10. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
11. 10YR6/6 (明黄褐) 砂質、しまり堅、粘性無、貼床

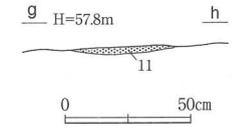
SI155 K1



SI155 K1

1. 10YR6/4 (にぶい黄橙) 砂質、しまり堅 粘性無、マサ土を粒状(極小)に少量

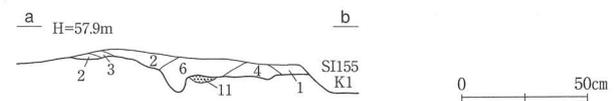
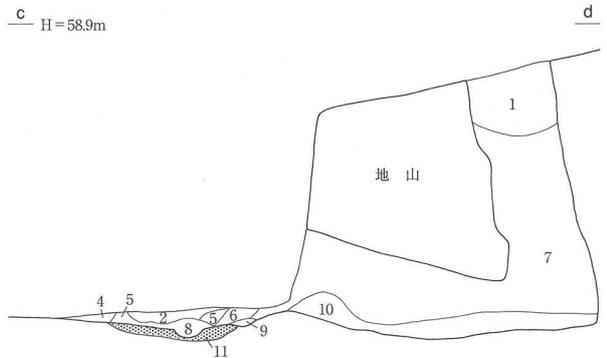
SI155 地床炉



SI155 地床炉

1. 5YR6/4 (にぶい橙) 焼土

SI155 カマド



SI155 カマド

1. 10YR7/6 (明黄褐) しまり有、粘性無
2. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや堅、粘性無
3. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
4. 10YR4/4 (褐) しまりやや堅、粘性無
5. 10YR4/6 (褐) しまり堅、粘性無
6. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
7. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無
8. 7.5YR5/8 (明褐) 弱い焼土、しまりやや有、粘性無
9. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり堅、粘性無
10. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無
11. 5YR6/4 (にぶい橙) 燃焼部焼土

第256図 SI155竪穴住居跡

状を呈した貼床がなされており、東の壁際中央に柱穴を1基(P1)伴っている。柱穴P1は径が25cmで深さが10cmあり、底部が堅く支柱穴と思われる。床面の風化がかなり進んでおり、P1以外には柱穴の痕跡はみられない。床面施設としては中央付近から地床炉を1基、南西隅から土坑を1基(K1)検出している。地床炉の焼土は一辺約20cmの不整な方形を呈し、厚さは3cm程度ある。地床炉検出の際には羽口を付設したような形状の炭化物痕がみられ、鍛冶炉跡の可能性が考えられたが、鍛造剥片は検出されず北西隅にあった石も鉄砧石らしき使用の痕跡はなかった。土坑K1は60×90cmの規模で、平面形が台形を呈している。埋土が人為的で堅く締まっていたことから、貼床跡の可能性も考えられる。

カマドは赤28A区の尾根上にある竪穴住居跡の中で、唯一南側壁面に位置している。この地区の尾根上では最も勾配があるところで、地形的な面を考慮して造られたと思われる。構築粘土は残っていないが、燃焼部周辺には芯材や支脚の抜き取り穴がみられる。また袖部付近の岩盤は3cm程度隆起しておりカマド造り出しの跡が見られる。燃焼部焼土は約40×50cmの不整な楕円形を呈し、中心の厚さは約5cmある。煙道は刳り貫き式で奥行きが1.3m・径が35cmあり、勾配はあまりない。煙り出しピットは深さが1.1mで径が35cmを測り、底部が上場より15cm程度奥に内傾している。

遺物は埋土から土師器の甕の破片が2点(490・491)及び鍛冶滓が5点、そのほか土師器の坏と甕の破片が少量(9号袋1/2)出土している。なおS I 153・154同様、鍛冶滓は流れ込みと思われる。

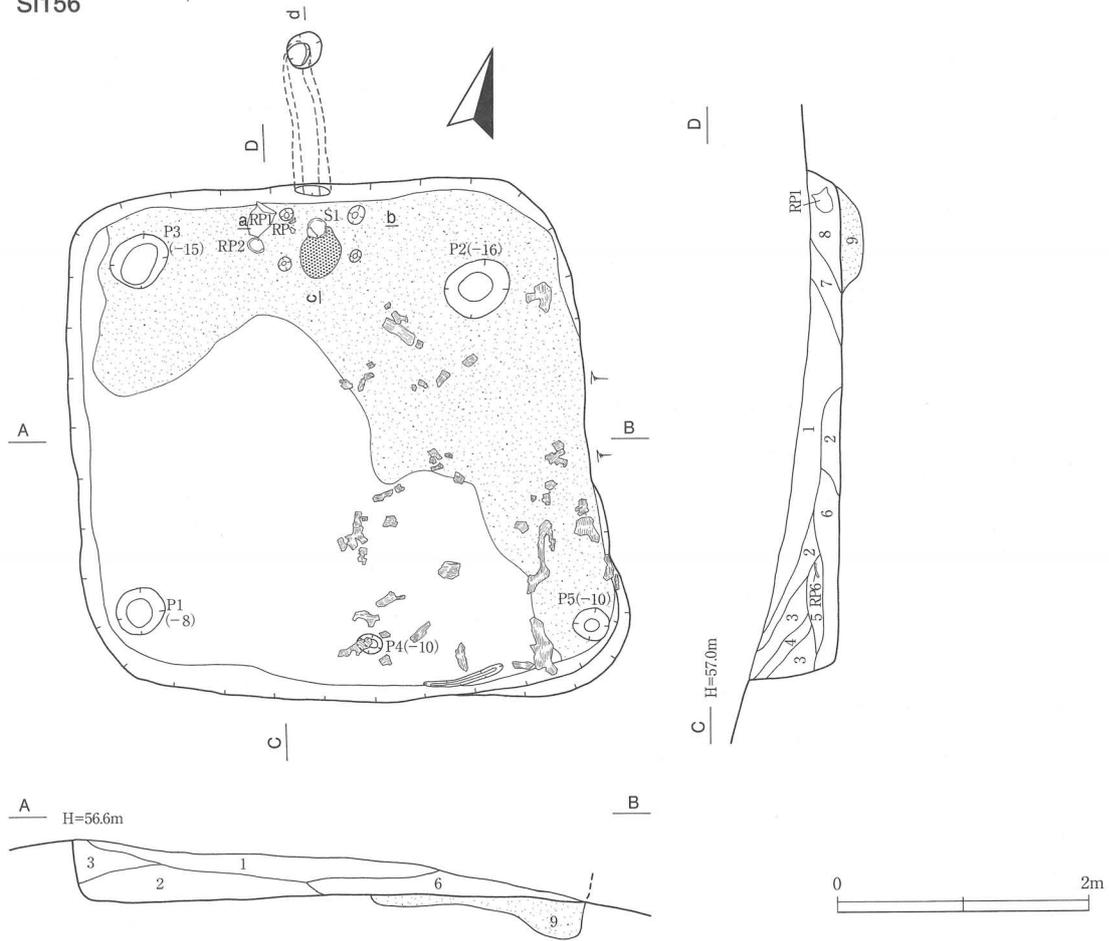
S I 156竪穴住居跡 (第257図、遺物図版42・128、写真図版185・239・308)

赤28A区のIX C-15・16m・nグリッドに位置し、尾根頂部のVI層上面で検出している。東側(谷側)の一部が床面まで削られており、露呈した床面から炭化材を確認している。また検出面の所々に片状の炭化物があり楕円状にやや色調が異なる部分がみられたことから、焼失住居と炭窯の重複と捉えていた。精査の段階で炭窯の壁面は検出されず、楕円状に見えた部分は締まりが異常に堅く重機跡だった可能性が高い。平面の形状はN-20°-Wを主軸方位とする不整な隅丸方形を呈している。壁長は南側が4.0m、北側及び東・西側が3.6mあり、床面積は約13㎡を測る。南と西の壁は垂直気味に・北側の壁はやや外傾気味に立ち上がり、壁高は南及び西側の中央で50cm前後、北側の中央で25cmを測る。埋土は上位に黒褐色土、下位に黒褐色土とにぶい黄褐色土の混合土が堆積しており、全体に炭化物片(極小～中)を含んでいる。上位の層はレンズ状の自然堆積で、下位は消火の際に土を被せてできた人為的堆積と思われる。床面には中央から北東側の壁に入り込むように貼床がなされており、四隅及び南側中央に柱穴を5基(P1～P5)伴っている。柱穴のうち規模・配列から判断して、P1～P3は支柱穴、P4・P5は副柱穴と思われる。そのほか南側壁面近くから壁溝の残存と思われる溝跡を検出している。なお床面に粉状の炭化物は余り見られなかったが、柱穴P4から検出した炭化材(RC11)を始め壁や柱の材が木炭状の塊になって残っており、土による消火が早く蒸し焼き状態になったためと捉える。炭化材の分析結果は柱材(RC11)や壁材(RC10等)がクリの木で、用途不明であるがナラやケヤキも若干含まれた。

カマドは北側壁面のほぼ中央に位置している。構築粘土は残っておらず、袖部付近から芯材の抜き取り穴を検出している。また燃焼部中央上の埋土から土器片を伴った石(S1)が出土しており、支脚として利用していた可能性が考えられる。燃焼部焼土は33×42cmの規模で楕円形を呈し、中心の厚さは約5cmある。煙道は刳り貫き式で奥行きが1.3m・径が30cmあり、やや下り勾配になっている。煙り出しピットは深さが48cmで、径が27cmを測る。

遺物は埋土から須恵器の壺の破片が1点(494)と鍛冶滓が1点、またカマド左側の床面近くから土師器の甕の完形が2点(492・493)出土している。

SI156



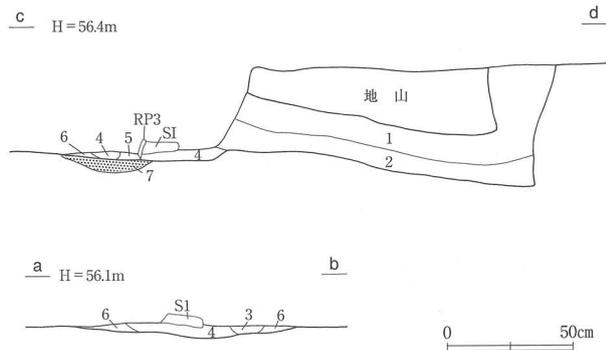
SI156

1. 10YR2/2 (黒褐) しまり有、粘性無、炭化物を片状(極小~小)に少量
2. 10YR2/2 (黒褐)と10YR5/4 (にぶい黄褐)の混合 しまり有、粘性無、炭化物を片状(極小~小)に少量
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
4. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、マサ土を粒状(極小)に微量
5. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭化物を片状(極小~小)に少量
6. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性無、炭化物を片状(極小~中)に少量
7. 10YR2/2 (黒褐)と10YR5/4 (にぶい黄褐)の混合 しまりやや堅、粘性無、炭化物片状(極小)に微量
8. 10YR6/6 (明黄褐) しまりやや堅、粘性無
9. 10YR6/6 (明黄褐) 砂質、しまり堅、粘性無、貼床

SI156 カマド

SI156 カマド

1. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
2. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり堅、粘性無
4. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり堅、粘性無
5. 7.5YR5/6 (明褐) 弱い焼土、しまり堅、粘性無
6. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり堅、粘性無
7. 5YR6/4 (にぶい橙) 焼土部焼土



第257図 SI156竪穴住居跡

S I 157 竪穴住居跡（第258図、遺物図版42・43、写真図版186・239）

赤28A区のIX・XC-20・1m・nグリッドに位置し、VI層上面で検出している。尾根東側下にあるテラス状の枝尾根緩斜面上に立地し、谷側（東側）が床面近くまで削られていて、検出の際に貼床の一部を確認している。貼床の露呈している部分が直線的に切れていたため2棟が重複していると捉えていたが、精査の過程で床面が2段になった構造をしており、段差の部分で貼床が切られているように見えていたことが判明した。平面の形状はS-67°-Wを主軸方位とする隅丸方形を呈しており、壁長は一辺が4.7m、床面積は約22㎡を測る。壁はいずれもやや外傾気味に立ち上がり、南東側の一部が消失している。壁高は南北両側の中央で30cm前後、西側（山側）の中央で65cm、東側の中央で7cmを測る。埋土はレンズ状の自然堆積で、黒褐色土と褐色土が大半を占め、下位ににぶい黄褐色の砂質土層がある。また南側のカマド横中位には約50×80cmの範囲内に厚さ3cm程度のイガイを主とする貝層があり、住居跡の埋土にできた窪みに山側から捨てられたものと思われる。床面は四辺を取り囲むように貼床がなされ、北東部は前記したように5～10cmの段差を伴っている。低い方の床面は3.3×3.6mの広さで隅丸方形を呈しており、拡張によって生じた可能性もあるが、下の面にカマドがあった痕跡はない。柱穴は7基（P1～P7）検出している。配置及び規模からP5・P6は支柱穴、P1～P4及びP7は副柱穴と捉える。

カマドは西側壁面のやや南寄りに位置している。構築粘土は崩れた状態で若干残っており、芯材や支脚の抜き取り穴もみられる。燃焼部焼土は径が55cmの不整な円形を呈しており、中心の厚さは約5cmを測る。なお燃焼部の周辺にみられる凹凸は、木根による攪乱が原因と思われる。煙道は削り貫き式で奥行きが1.5m・径が33cmあり、勾配はあまりない。また煙り出しピットは深さが約1.0mで、径が35cmを測る。

遺物は埋土及びカマド周辺から土師器の甕が1点（495・496）ずつ、そのほか土師器の坏や甕の破片が多量（9号袋2/3）、また須恵器の破片や鍛冶滓（3点）及び磨石（1点）等が出土している。

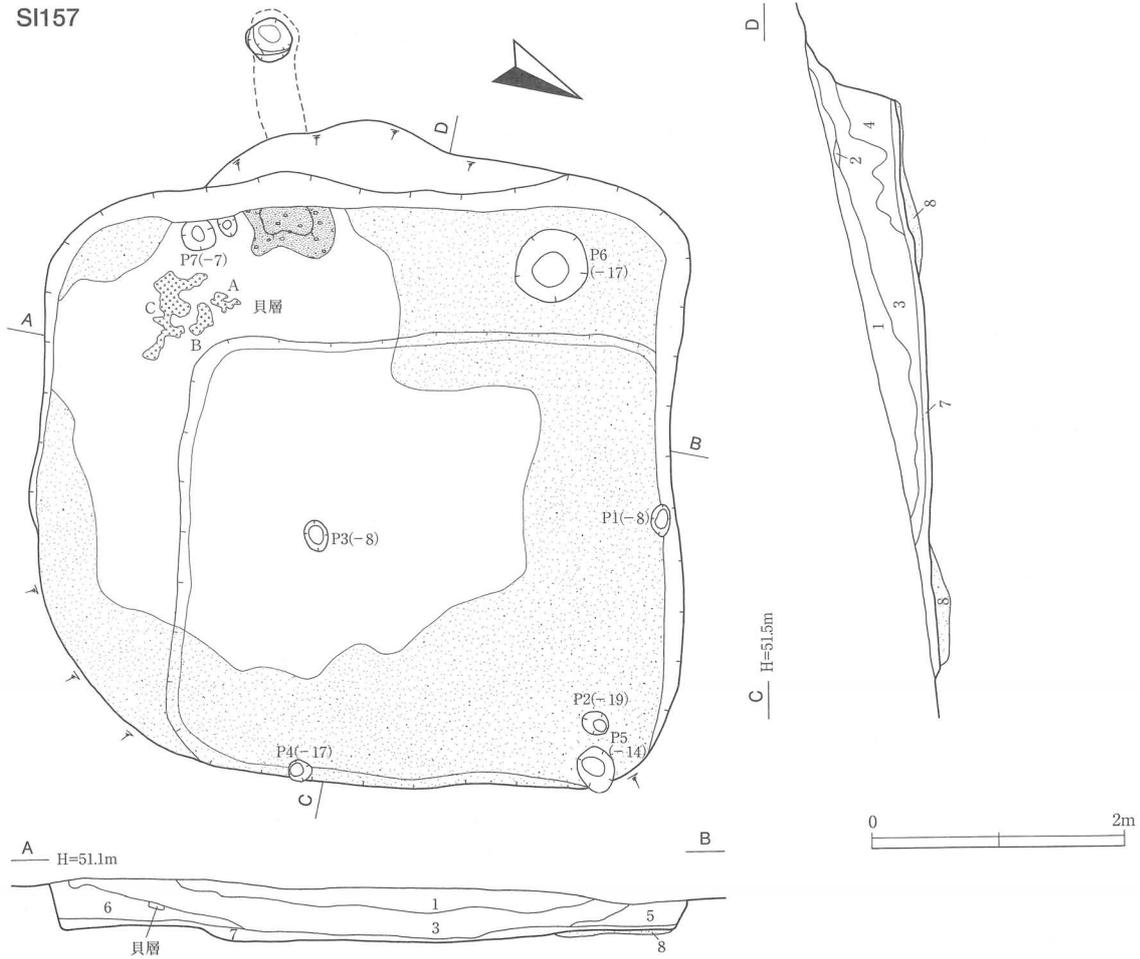
S I 158 竪穴住居跡（第259図、遺物図版43、写真図版187・239）

赤28A区のIXC-19oグリッドに位置し、VI層上面で検出している。尾根東側下の急斜面上に立地し床面が削られており、検出の時点で貼床の断面層を確認している。平面形の詳細は不明であるが、残存部で推察するとN-7°-Eを主軸方位とする隅丸方形を呈していたと思われる。壁長は西側（山側）が2.8m南北両側の残りが1.7mあり、貼床範囲から床面積は約6.3㎡あったと推定する。壁はいずれもやや外傾して立ち上がり、壁高は西側中央で1.0m、南側中央で30cm、北側中央で45cmある。埋土は上位が黒褐色土の自然堆積で、下位が明黄褐色土及び褐色土の人為的堆積と思われる。床面には北壁側と南側半面の中央から谷側へ向かって貼床してあり、南及び西側の壁近くに柱穴を3基（P1～P3）伴っている。また西側の壁際には壁溝の痕跡がみられる。柱穴は径がいずれも15～20cm程度であるが、深さ・配置から判断してP1が支柱穴、P2・P3が副柱穴と捉える。

カマドは北側壁面の東寄りで検出しているが、床面がかなり崩落しており本来は北側の中央付近に位置していたと推察する。袖部には芯材の抜き取り穴が見られ、周辺に芯材に使用したと思われる20cm前後の石が散在していた。燃焼部焼土は径が約45cmのやや不整な円形を呈し、中心の厚さは6cmを測る。煙道は削り貫き式で奥行きが1.2m・径が約30cmあり、奥が入り口より25cm程度深く下り勾配になっている。煙り出しピットは深さが57cm・径が25cmを測り、底部に窪みを伴っている。

遺物はカマドの袖付近及び床面から完形に近い土師器の甕が2点（497・498）、そのほか埋土中から土師器の甕の破片が数点と鍛冶滓が1点出土している。

SI157



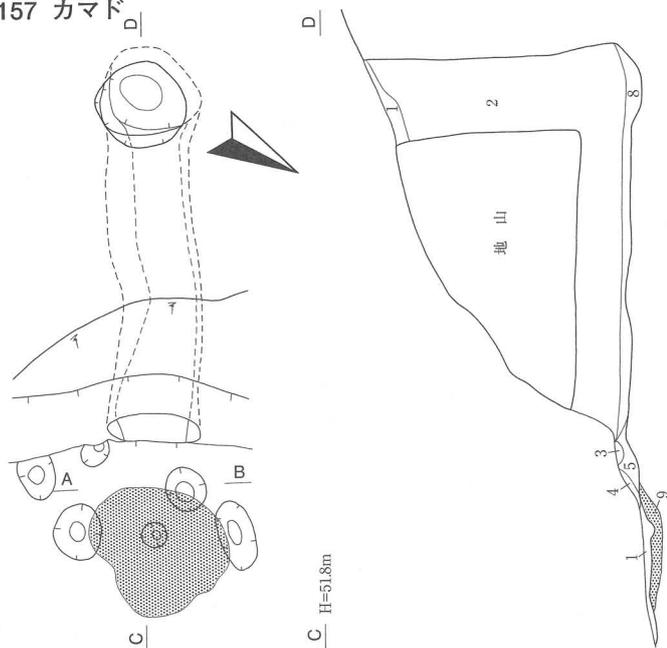
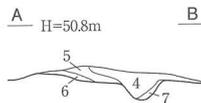
SI157 カマド

SI157

1. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性無
2. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無
マサ土を粒状(極小)に少量
3. 10YR2/2 (黒褐)と10YR4/4 (褐)の混合
しまりやや有、粘性無
4. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
マサ土を粒状(極小)に少量
5. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性無
6. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
7. 10YR5/4 (にぶい黄褐) 砂質、しまりやや有、粘性無
8. 10YR6/6 (明黄褐) 砂質、しまり堅、粘性無、貼床

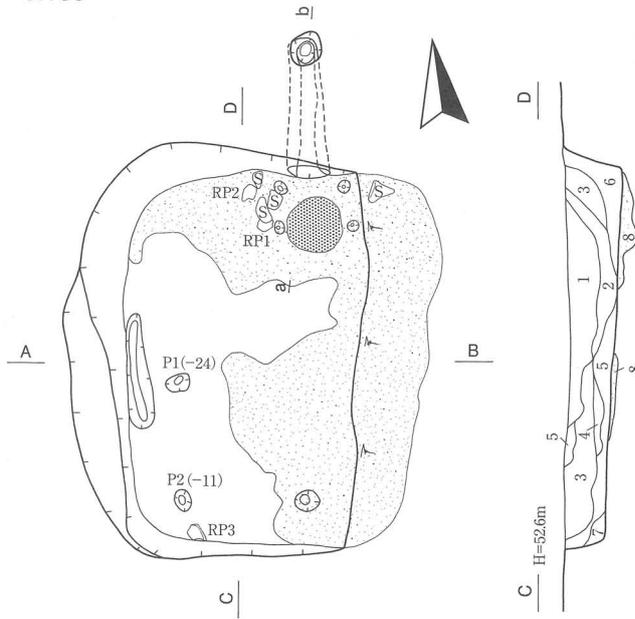
SI157 カマド

1. 10YR3/4 (暗褐) しまり堅、粘性無
2. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性無
3. 10YR5/8 (黄褐) しまりやや堅、粘性やや有
4. 10YR5/6 (黄褐) しまり堅、粘性無
5. 10YR6/6 (明黄褐) しまりやや堅、粘性無
6. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや堅、粘性無
7. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや堅、粘性無
酸化焼土を少量
8. 10YR4/4 (褐) しまりやや堅、粘性無
9. 5YR6/4 (にぶい橙) 燃焼部焼土



第258図 SI157竪穴住居跡

SI158

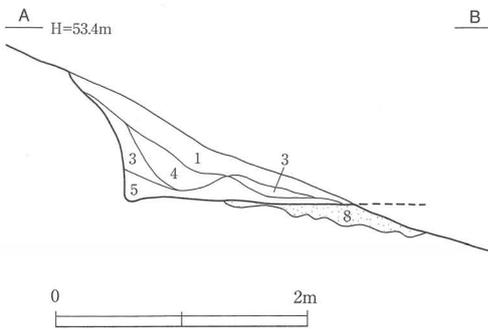


SI158

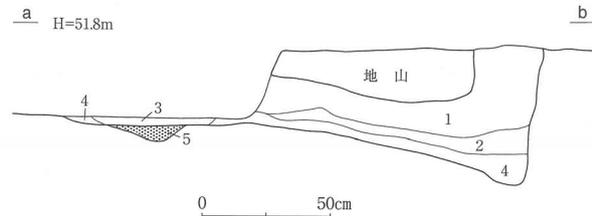
1. 10YR2/3 (黒褐) しまり有、粘性無
2. 10YR2/3 (黒褐) と 10YR4/4 (褐) の混合 しまり有、粘性無
3. 10YR7/6 (明黄褐) しまりやや堅、粘性無
4. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性無
5. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
6. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
7. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
マサ土をブロック状(極小)に微量
8. 10YR6/6 (明黄褐) しまり堅、粘性無、貼床

SI158 カマド

1. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無
炭化物を片状(極小~小)に微量
2. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
炭化物を片状(極小~小)に微量
3. 10YR4/4 (褐) しまりやや堅、粘性無
炭化物を片状(極小)に微量
4. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
5. 5YR6/4 (にぶい橙) 燃焼部焼土



SI158 カマド

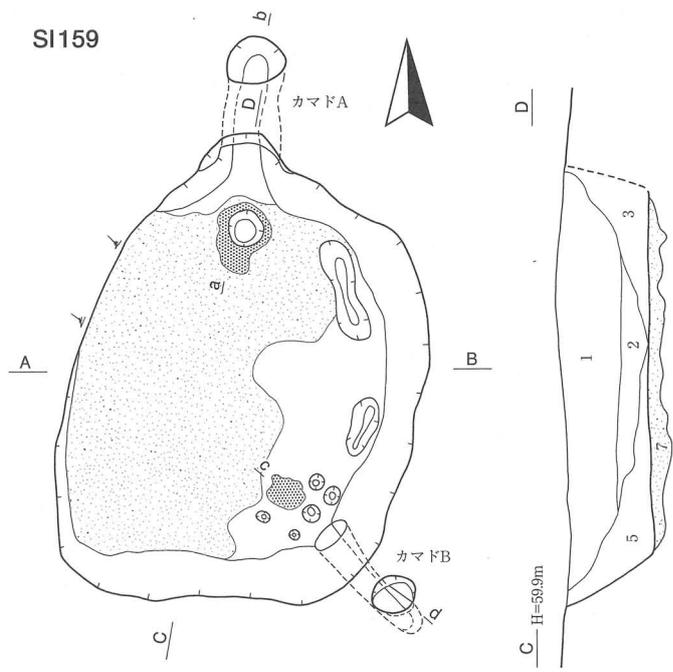


第259図 SI158竪穴住居跡

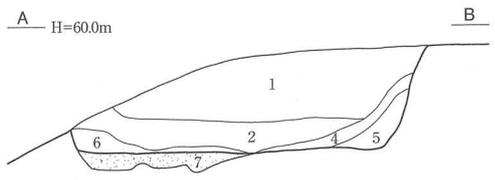
S I 159竪穴住居跡 (第260図、遺物図版43、写真図版187・239)

赤28A区のIX C-15・16 r グリッドに位置し、VI層上面で検出している。尾根西肩口の急斜面に立地し谷側壁面の大半が崩落しており平面形の詳細は不明であるが、残存部で推察するとN-10°-Eを主軸方位とする不整な隅丸長方形基調を呈していたと思われる。壁長は東側が2.6m・南側が2.0m、北と西側の残りが1.5mあり、貼床範囲から床面積は約5.5㎡と推定する。壁は外傾しながら立ち上がり、壁高は東側(尾根側)中央で80cm、南及び北側の中央で65cm、西側の中央で20cmある。埋土は大半がにぶい黄橙色土の一括廃棄による人為的堆積で、下層の壁際に暗褐色土と明黄褐色土の自然堆積層が若干見られる。東側に隣接するS I 153竪穴住居跡との間が2棟の軒幅を考慮すると同時に建てられていたとは考えられず、S I 153を掘り込んだ際に生じた廃土を利用してS I 159を埋めたものと推察する。床面は東の壁側から0.7~1.0m程度残して貼床がなされており、また東側壁寄りに壁溝痕を伴っている。

カマドは北側壁面Aと南東隅Bの2基を検出している。カマドAの燃焼部焼土は40×60cmの不整な楕円形を呈して中心の厚さは5cmを測り、深さが3cm程度の窪みを伴っている。カマドBの燃焼部焼土は25×30cmの不整な楕円形を呈して中心の厚さが4cmを測り、燃焼部周りに芯材及び支脚の抜き取り穴が見られる。煙道はいずれも削り貫き式で、カマドA煙道は奥行き1.2m・径45cmの、やや下り勾配気味で、天井が入り口から約30cm奥まで崩落している。煙り出しピットは深さが70cmで、径が35cmを測る。カマドBの

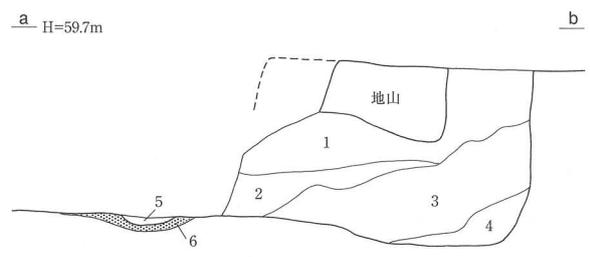


- SI159
- 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり堅、粘性無、マサ土を粒状(極小~小)に微量
 - 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり非常に堅、粘性無、マサ土を粒状(極小~小)に少量
 - 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無
 - 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無、炭化物を片状(極小~小)に微量
 - 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有
 - 10YR5/6 (黄褐) しまり堅、粘性無
 - 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無、貼床



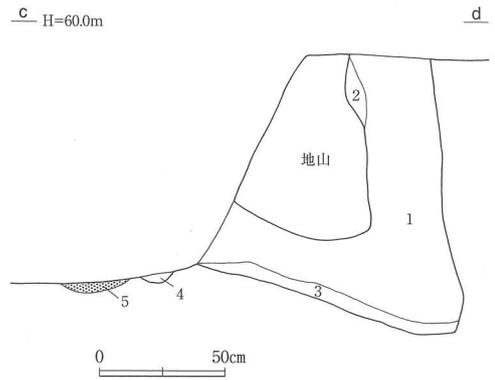
SI159 カマドA

- SI159 カマドA
- 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、マサ土を粒状(極小)に微量
 - 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、10YR4/4 (褐) 多量に混入
 - 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり堅、粘性無
 - 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無、10YR3/3 (暗褐) 多量に混入
 - 7.5YR5/6 (明褐) 弱い酸化焼土、しまりやや有、粘性無
 - 5YR6/4 (にぶい橙) 燃焼部焼土



SI159 カマドB

- SI159 カマドB
- 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、マサ土を粒状(極小)に微量
 - 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、マサ土をブロック状(極小~小)に少量
 - 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無
 - 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
 - 5YR6/4 (にぶい橙) 燃焼部焼土



第260図 SI159竪穴住居跡

煙道は奥行きが1.1m・径が25cmで下り勾配になっており、煙り出しピットは深さが1.1m・径が30cmを測る。なお住居の規模から2つのカマドを同時に使用していたとは考えにくい、新旧については不明である。

遺物は埋土から土師器の甕の破片が多量(499・501・502の他9号袋で1・1/2)・土師器の坏の完形品が1点(503)・須恵器の甕の破片が1点(504)、及び鍛冶滓が1点出土している。そのほかカマドB付近からは土師器の甕の破片が1点(500)出土している。

S I 160 竪穴住居跡 (第261図、遺物図版43・105・128、写真図版188・240・290・308)

赤28B区のIXD-16・17aグリッドに位置し、尾根頂部平坦面のVI層上面で検出している。平面の形状はN-13°-Wを主軸方位とするやや不整な隅丸方形を呈し、壁長は南および北側が2.7m・東および西側が2.3mあり、床面積は7.2㎡を測る。南及び東西の壁は外傾して北側はややなだらかに立ち上がり、壁高は南及び東側中央で約40cm、北及び西側の中央で約30cmある。埋土はにぶい黄橙色土もしくは明黄褐色土の一括廃棄による人為的堆積で、マサ土をブロック状(極小~小)に含んでいる。床面には東側を1/4程度残して貼床がなされ、北壁側と南東壁側に壁溝が見られる。また四方の壁寄りに柱穴を6基(P1~P6)伴っており、そのうち規模・配置から判断してP2・P5・P6は支柱穴、P1・P3・P4は副柱穴と捉える。床面施設としては土坑1基(K1)と地床炉を検出している。土坑K1は深さが約10cm、規模が35×60cmの楕円状で南西隅にあり、位置的な面から考えると支柱穴の上場が崩れて土坑状になった可能性もある。地床炉の焼土はカマド燃焼部から30cm程度南西側に位置し、約15×20cmの規模で不整な楕円形を呈しており厚さは2cm程度ある。なお地床炉周辺に鍛冶剥片は見られなかったが、南側の壁際から鉄砧石(S1:202)、埋土から鍛冶滓が1点出土しており鍛練鍛冶が行われていた可能性はある。

カマドは北側壁面の中央よりやや東寄りに付設してある。構築粘土が意図的にカマドの右側に崩されており、その下(床面上)から鋤先の完形品(181)が出土している。燃焼部焼土は35×45cmの規模の不整な楕円形を呈し、中心の厚さが10cm程度ある。また中央には若干の窪みがあり、周囲に芯材の抜き取り穴を伴っている。煙道は刳り貫き式で、奥行き1.5m・径が28cmあり、奥が入り口より30cm程度深く下り勾配になっている。煙り出しピットは深さが65cm・径が35cmを測り、底部に窪みが見られる。

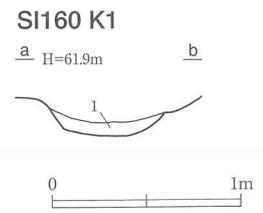
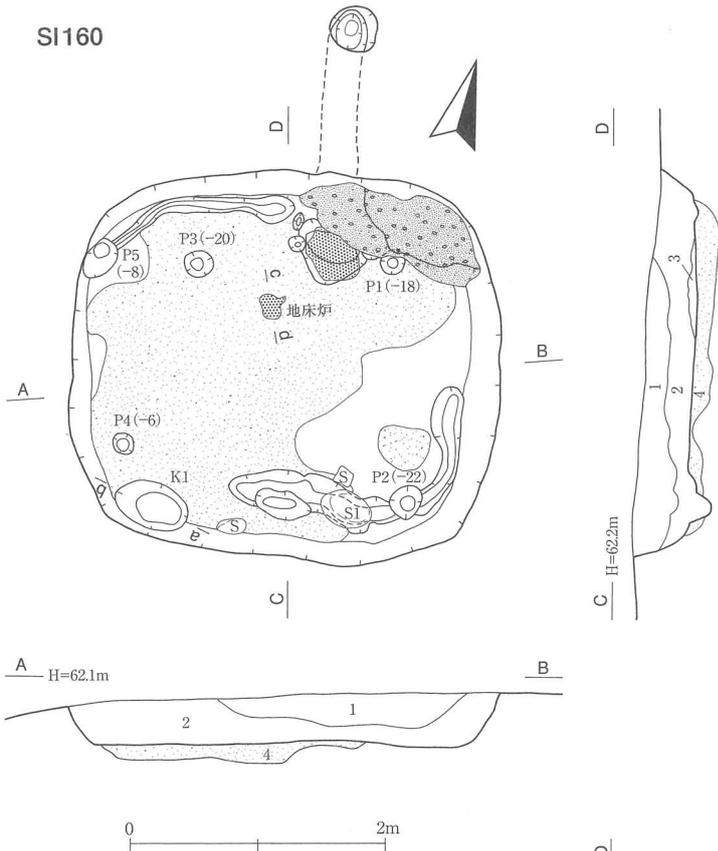
遺物は前述の鋤先・鉄砧石・鍛冶滓のほか、埋土から須恵器の甕の破片が数点(509等)、土師器の坏及び甕の破片が少量(9号1/3袋)出土している。

S I 161 竪穴住居跡 (第262図、遺物図版44・74、写真図版189・240・259)

赤28B区のIXD-18a・bグリッドに位置し、尾根東側緩斜面のVI層上面で検出した。東谷側の壁が崩落しており詳細は不明であるが、残存部から推察すると平面の形状はN-6°-Wを主軸方位とする隅丸方形を呈していたと思われる。壁長は西側が2.4m・南北両側の残りが1.5m前後あり、貼床範囲から床面積は4.0㎡程度と推定する。南・西側の壁は外傾気味に、北側の壁はゆるやかに立ち上がり、壁高は西側中央で50cm、南及び北側の中央で約20cmある。埋土は大半がにぶい黄橙色土系の人為的堆積で、マサ土をブロック状(極小~中)に含んでいる。床面は西壁側を残して貼床がなされており、柱穴を1基(P1)伴っている。P1は規模・配置から支柱穴と捉えるが、P1以外には柱穴の痕跡は見られない。

カマドは北西隅に位置している。構築粘土が崩れた状態にあり、床面中央付近に芯材に用いたと思われる石が重なり合って残っていた。燃焼部焼土は不整な楕円を呈し12×16cmと小さめで、中心の厚さも2cm程度である。煙道は刳り貫き式で、奥行きが1.3m・径が35cmあり、やや下り勾配である。また煙り出しピットは深さが64cm・径が30cmを測る。

遺物はカマド周辺や埋土から土師器坏と甕破片が数点、須恵器甕破片が1点、北側床面から土師器甕破片



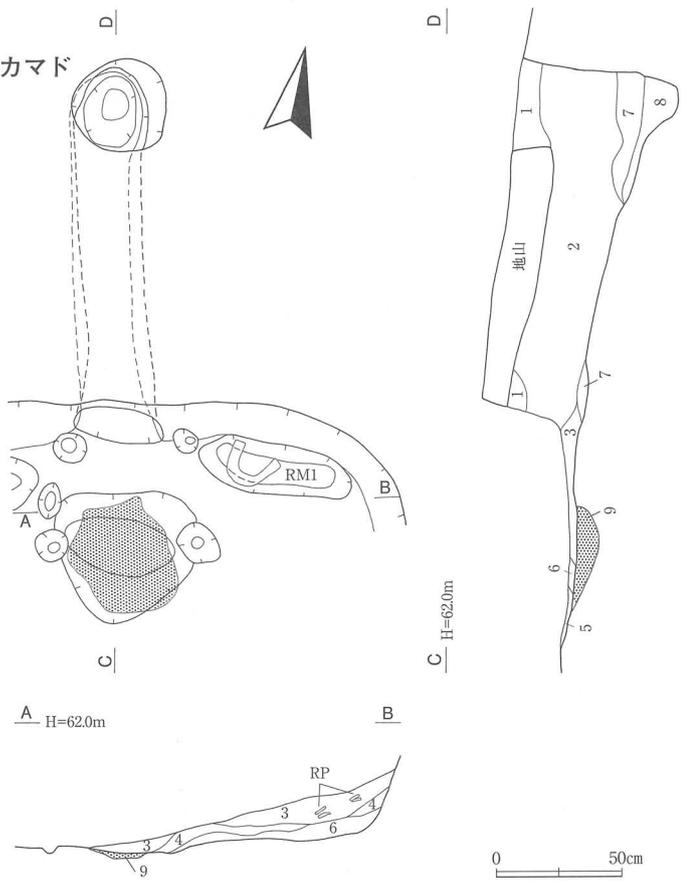
SI160 K1
1. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無



SI160 地床炉
1. 5YR6/4 (にぶい橙) 焼土

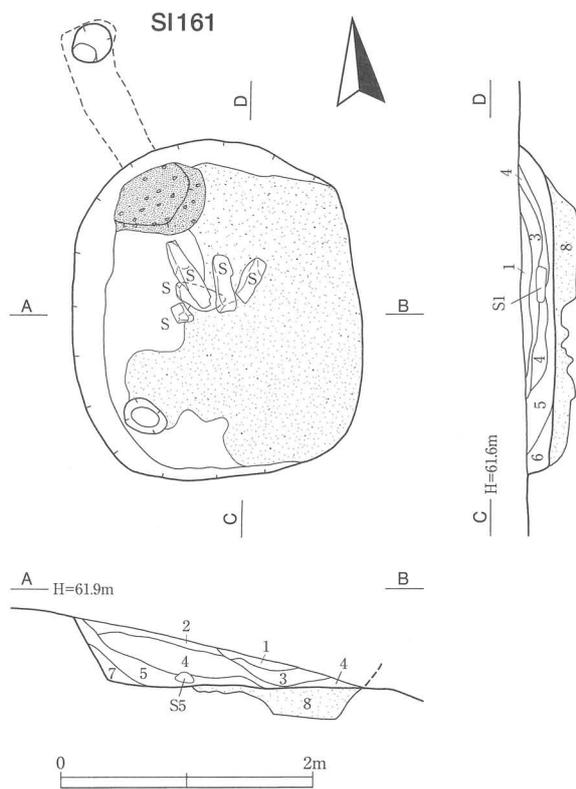
- SI160
- 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、マサ土をブロック状(極小~小)に少量
 - 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無、マサ土をブロック状(極小~小)に微量
 - 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭化物を片状(極小)に微量
 - 10YR6/6 (明黄褐) 砂質、しまり非常に堅、粘性無、貼床

SI160 カマド



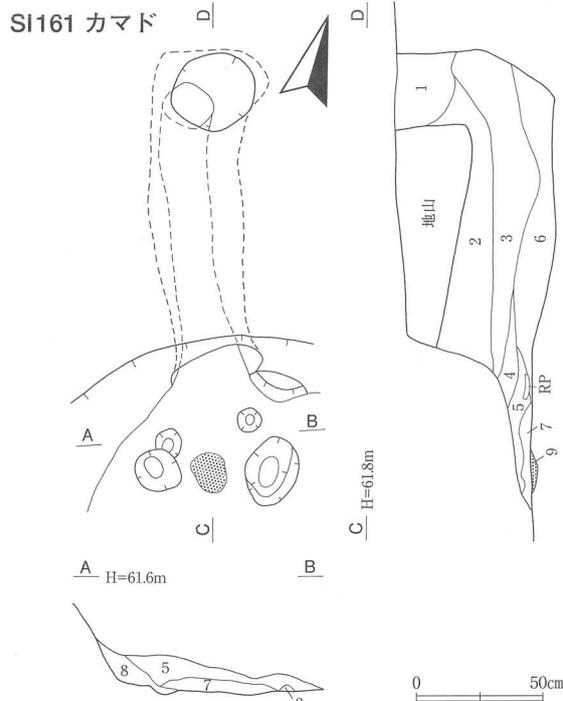
- SI160 カマド
- 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、マサ土を粒状(極小)に微量
 - 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
 - 10YR6/6 (明黄褐) しまり非常に堅、粘性やや有(構築粘土の崩落)
 - 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり堅、粘性無
 - 10YR3/2 (黒褐) しまり堅、粘性無、炭化物を粒状(極小)に微量
 - 10YR6/4 (にぶい黄橙) と 10YR4/4 (褐) の混合、しまり堅、粘性無
 - 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無
 - 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、マサ土を粒状(極小)に微量
 - 5YR6/4 (にぶい橙) 焼土

第261図 SI160 竪穴住居跡



SI161

1. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、マサ土を微量
2. 10YR6/4 (にぶい黄橙)と10YR6/6 (明黄褐) の混合 しまり有、粘無
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
4. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無
5. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、マサ土・炭化物を微量
6. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無、10YR6/4 (にぶい黄橙) を微量
7. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、マサ土を少量
8. 10YR6/6 (明黄褐) 砂質、しまり有、粘性無、貼床



SI161 カマド

1. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無
2. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、マサ土を少量
3. 10YR7/4 (にぶい黄橙)と10YR5/4 (にぶい黄褐) の混合 しまりやや有、粘性無
4. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無
5. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性やや有
6. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、マサ土を少量
7. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無
8. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
9. 5YR6/4 (にぶい黄) 燃焼部焼土

第262図 SI161竪穴住居跡

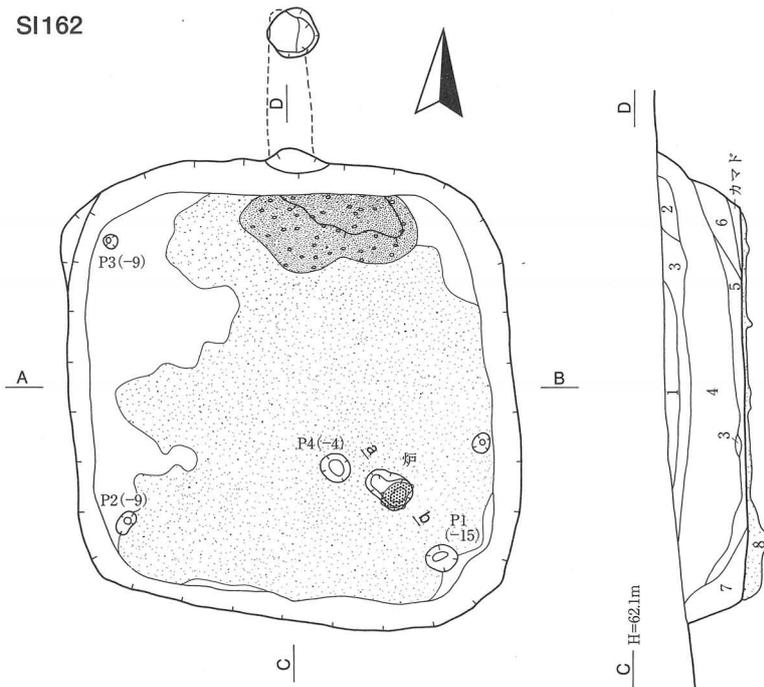
(510) が出土している。

SI162竪穴住居跡 (第263図、遺物図版44・105、写真図版189・240・290)

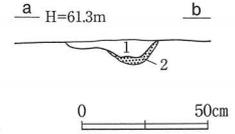
赤28B区のⅩD-17bグリッドに位置し、尾根頂部平坦面のⅥ層上面で検出している。平面の形状はN-3°-Wを主軸方位とするやや歪んだ隅丸方形を呈している。壁長は南及び北側が2.8m・東及び西側が3.0mあり、床面積は9.3㎡を測る。壁はいずれもやや外傾気味に立ち上がり、壁高は南側中央で40cm、北側中央で64cm、東及び西側中央で55cm前後を測る。埋土は大半がにぶい黄橙色土の一括廃棄による人為的堆積でブロック状(極小~中)にマサ土を含んでおり、床面上に粒状の炭化物を含む層がある。床面は西壁寄りを残してほぼ全面に貼床されており、柱穴を3基(P1~P3)伴っている。柱穴のうち規模・配置からみてP1は主柱穴、P2・P3は副柱穴と捉える。床面施設としては炉を1基検出している。炉はやや南東寄りに位置し、25×38cmの規模で瓢箪状を呈している。また深さ8cm程度の窪みがあって、窪みの底部に焼土を伴っている。焼土の規模は約20×30cmで不整な楕円を呈し厚さが3cmある。埋土から少量の鍛造剥片を検出しており、鍛練鍛冶が行われていた可能性がある。

カマドは北側壁面の中央に位置している。煙道入り口の壁上が崩れており、崩落したマサ土で入り口が塞がれていた。燃焼部焼土は径が約40cmの不整な円形状で中心の厚さが5cm程度あり、周辺からは芯材や支

SI162

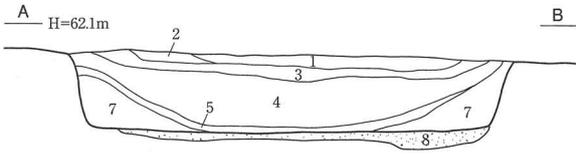


SI162 炉



SI162 炉

1. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭化物を片状に多量
2. 5YR6/4 (にぶい橙) 焼土



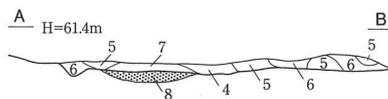
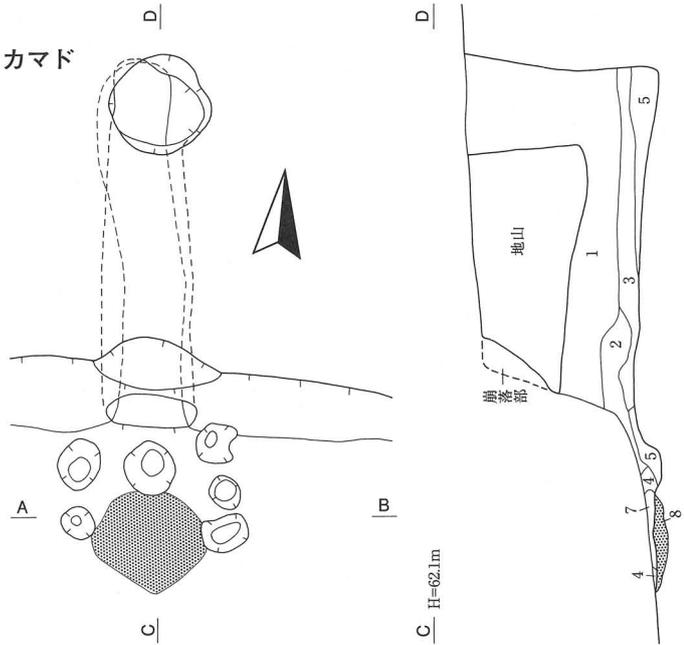
SI162 カマド

SI162

1. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、マサ土をブロック状 (極小~小) に中量
2. 10YR6/4 (にぶい黄橙) と 10YR (にぶい黄褐) の混合土 しまりやや有、粘性無
3. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
4. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり堅、粘性無、マサ土をブロック状 (極小~中) に少量
5. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭化物を粒状 (極小) に微量
6. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、マサ土をブロック状 (小~中) に微量
7. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、マサ土をブロック状 (極小~中) に微量
8. 10YR6/6 (明黄褐) 砂質、しまり堅、粘性無、貼床

SI162 カマド

1. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり堅、粘性無、マサ土をブロック状 (小) に少量
2. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、マサ土をブロック状 (中) に多量 (天井の崩落)
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
4. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
5. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無
6. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまりやや堅、粘性無
7. 7.5YR6/6 (橙) 弱い焼土、しまりやや堅、粘性無
8. 5YR6/4 (にぶい橙) 燃焼部焼土



第263図 SI162竪穴住居跡

脚の抜き取り穴を検出している。煙道は削り貫き式で、奥行きが1.5m・径が35cmあり、やや下り勾配になっている。また煙り出しピットは深さが75cmあり、径が40cmを測る。

遺物は埋土から土師器の甕の破片が少量（511の他G 1/2袋）出土している。

S I 163A・B竪穴住居跡（第264図、遺物図版44・45・105・128、写真図版190・191・240・241・290・308）

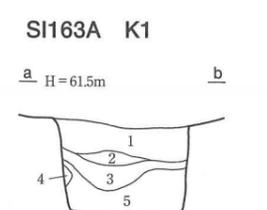
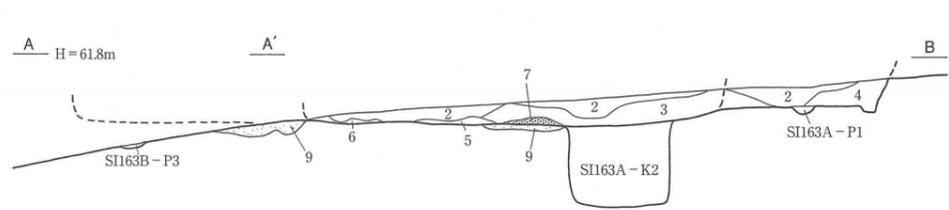
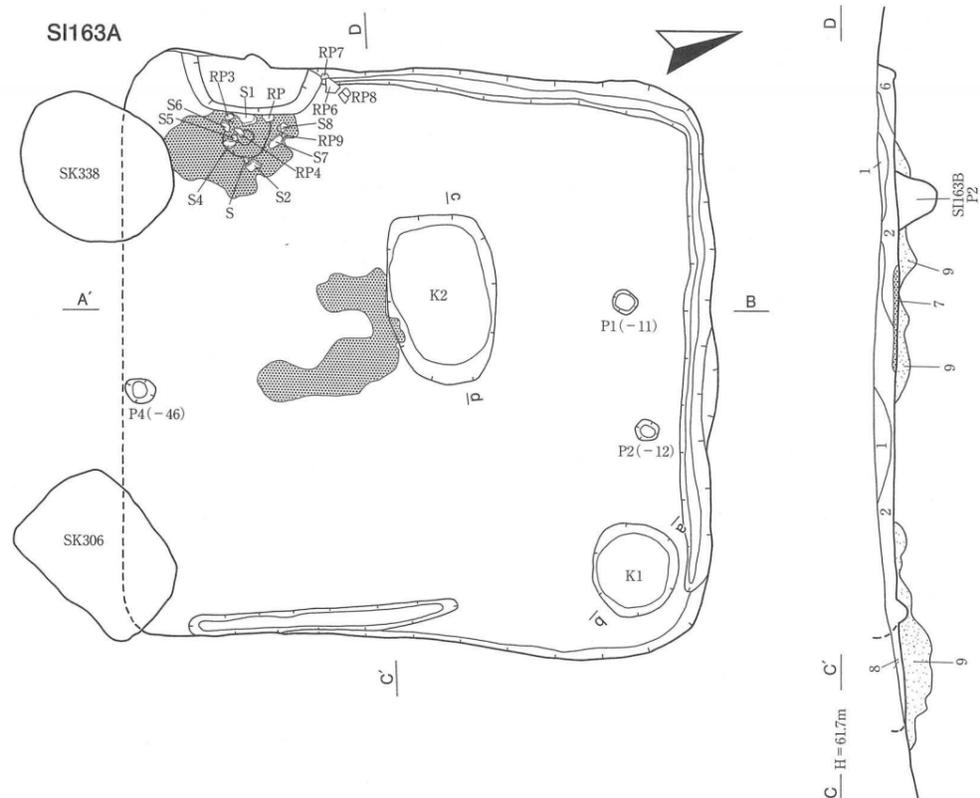
赤28B区のIX D-16・17c・dグリッドに位置し、尾根頂部平坦面のVI層上面で検出している。東側の埋土が途中で60cm程度張り出しており、さらに南側の尾根肩口に貼床と思われる土質が見られたことから、2棟以上の切り合いと想定して精査を行った。1棟目の精査の過程で床面の北側に張り出し部と直線上の段差が見られ、その中央付近から溝状になったカマド煙道の残存を検出し、2棟目を確認した。そのほかにカマド或いは壁面と思われる痕跡はなく、S I 163AとS I 163Bの重複と捉えて精査を進めていった。なお1棟目の床面の南北に10cm程度のレベル差があり3棟目も考えられたが、北西側の壁際に壁溝が途切れることなく回っており、その可能性は薄いと思われる。また南側で検出した土坑2基は、S K 338がS I 163Aのカマド燃焼部焼土及びS I 163Bの貼床を切っており2遺構より新しく、S K 306がS I 163Bの貼床を切っていてS I 163Bより新しいと判断する。

S I 163Aの平面形は掘り込みが浅く南側の壁全面と東西の壁の一部が削られており詳細は不明であるが、残存部で推察すると平面の形状はN-75°-Wを主軸方位とする隅丸方形を呈していたと思われる。壁長は北側で4.5m、東側の残りが4.1m・西側が4.4mを測り、推定床面積は約23㎡である。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は北側中央で20cm、東側中央で7cm、西側中央で15cmを測る。埋土は上位が暗褐色土・下位がにぶい黄褐色土で自然堆積と思われる。また中央付近の床面上には廃棄焼土の層が見られる。床面は壁溝及び柱穴を伴っている。壁溝は北西の壁際及び東の壁際にあり、柱穴P 3は南側に、P 1・P 2は北側に位置している。柱穴3基は規模から判断して、いずれも副柱穴と捉える。床面からは土坑を2基（K 1・K 2）検出している。土坑K 1は北東隅にあり、径が約75cmの不整な円形を呈しており、断面形は浅い筒状で深さは50cm程度ある。一方土坑K 2は床面の中央付近に位置し、0.9×1.4mの規模の不整な長方形状で、断面はU字状を呈し深さは65cmを測る。なおK 1・K 2とも人為的に埋め戻されていた。

カマドは南西隅に位置しており、袖部両側に芯材の石と構築粘土が若干残っていた。燃焼部焼土は0.85×1.1mの規模で不整な形状を呈し、中央の厚さは10cmを測る。また燃焼部中央には径が約40cm・深さが5cm程度の窪を伴っている。煙道はないが、中央の壁際に幾分の掘り込みが見られる。

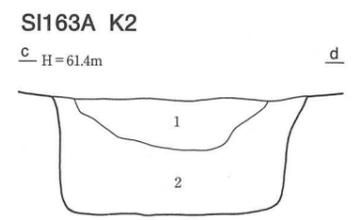
遺物はカマド燃焼部付近から土師器の甕の破片（517）や須恵器の破片（図番518・519）がまとまって出土しており、ほぼ完形に近い土師器の甕に接合できたもの（513）もある。そのほか検出面から土師器の甕が2点（514・516）、埋土からも土師器の甕が1点（512）及び鍛冶滓が1点、床面から土師器の甕が1点（515）出土している。また不掲載遺物であるが土師器の坏の破片が7点及び土師器の甕の破片が多量（9号1・1/2袋）出土している。

S I 163BはS I 163Aに大半が切られており規模・平面形の詳細は不明である。残存する壁及び検出した柱穴（P 1～P 4）の配置から推察すると平面の形状はN-16°-Eを主軸方位とする隅丸長方形を呈し、南北両側の壁長が5.0m・東西両側が5.3mで、床面積は25㎡程度あったと思われる。埋土は北東壁側床面に人為的な黄褐色土の層が見られただけで、ほとんど残っていない。床面は南と西側が帯状に、東側が不整な楕円状に貼床してあり、柱穴を8基伴っている。柱穴は四隅に位置するP 1～P 4及び中央のP 5が主柱穴で、P 1側のP 6及びP 2側のP 7・P 8が副柱穴と思われる。床面施設としては北東隅に土坑を1基（K 1）検出している。土坑K 1は65×90cmの規模で不整な楕円を呈し、断面形が崩れたV字状で深さが50cm近く



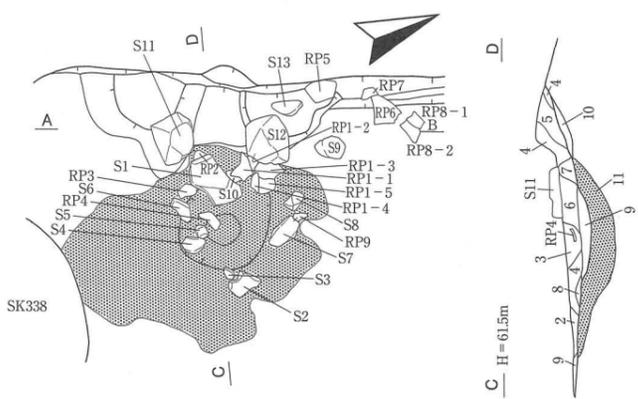
- SI163A・B
- 10YR3/3 (暗褐) しまり堅、粘性無
 - 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無
 - 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
 - 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無
 - 10YR6/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性無
 - 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
 - 7.5YR5/6 (明褐) 焼土、しまりやや有、粘性無 (廃棄焼土)
 - 10YR6/6 (明黄褐) と 10YR5/6 (黄褐) の混合 しまり有、粘性無
 - 10YR6/6 (明黄褐) 砂質、しまり堅、粘性無、貼り床

- SI163A K1
- 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
 - 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
 - 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無、マサ土をブロック状(極小)に少量
 - 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、マサ土をブロック状に中量
 - 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、10YR6/6 (明黄褐) をブロック状に少量

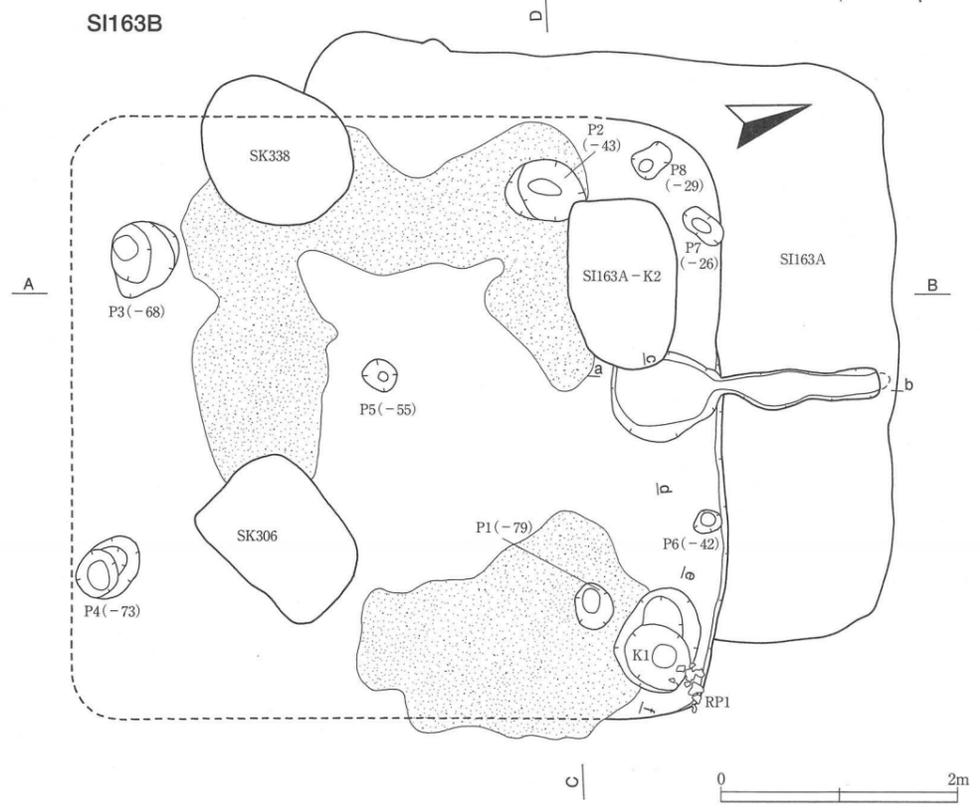


- SI163A K2
- 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭化物を片状にマサ土を粒状に微量
 - 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無、炭化物を片状にマサ土を粒状に微量

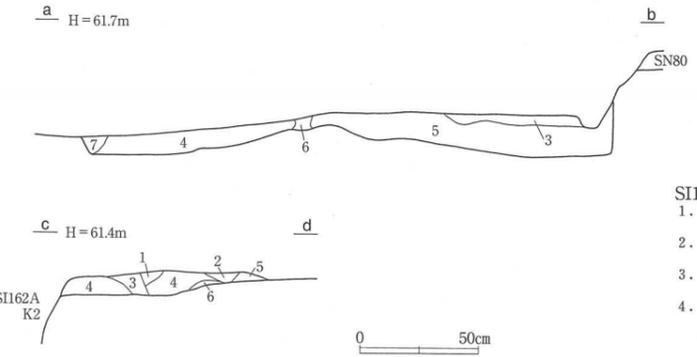
SI163A カマド



- SI163A カマド
- 10YR3/4 (暗褐) しまり無、粘性無 (木根痕)
 - 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭化物を片状(極小〜小)に微量
 - 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや堅、粘性無
 - 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性無
 - 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性無
 - 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性無
 - 10YR4/6 (褐) しまり堅、粘性無、7.5YR5/8 (明褐) 弱い、焼土が多量
 - 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無
 - 7.5YR5/4 (にぶい褐) 弱い焼土、しまりやや堅、粘性無
 - 10YR6/6 (明黄褐) しまりやや堅、粘性無
 - 5YR6/4 (にぶい橙) 燃焼部焼土

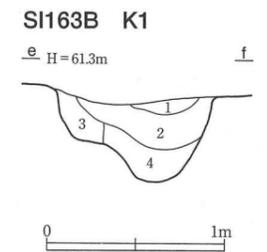


SI163B カマド



- SI163B カマド
- 10YR4/4 (褐) しまりやや堅、粘性無
 - 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや堅、粘性無
 - 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、木根を含む
 - 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無
 - 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無
 - 10YR7/6 (明黄褐) しまり有、粘性無
 - 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無

- SI163B K1
- 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
 - 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無
 - 10YR7/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性無
 - 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無



第264図 SI163A・B竪穴住居跡

ある。また土坑の埋土は北東壁側床面の人為的埋土と類似し、一連の土器片（R P 1）を含んでいることから、床面と同時に土器片を含んだ土によって埋め戻されたと推察する。

カマドは北側に残存する壁面のほぼ中央に位置しているが、溝状の煙道と皿状に窪んだ燃焼部が残るだけでほとんど削られている。燃焼部に焼土は見られず、煙り出しピットも検出していない。煙道は立地から掘り込み式と推測され、奥行きが約1.5mで径は20～30cmを測り、やや下り勾配になっている。

遺物は土坑K 1の埋土及び北東壁側から土師器の破片(522)、柱穴P 2・P 3の埋土から土師器の甕(521・523・524・525)や坏(520)の破片が数点出土している。また床面から磨石が1点(204)、柱穴P 22から鍛冶滓が1点出土している。そのほか不掲載遺物であるが土師器の坏や甕の破片、須恵器の甕の破片が数点出土している。(亀)

S I 164 竪穴住居跡 (第265図、遺物図版59、写真図版192・248)

I 区赤28B区北側の尾根頂部緩斜面、IX D-16・17d グリッドに位置し、検出面はVI層上面であるが、表土が薄く、掘り込みが浅かったため北山側部分で部分的に壁高と南西側でカマドを検出したに留まり、遺存状態は極めて不良である。煙道先端はS K 309に切られる。遺存部分から平面形・規模は、北東-南西の長軸約4m、短軸約2.5m前後の隅丸略長方形で、床面積は約9㎡ほどと推定され、主軸方位はN-50°-Wである。残存する北隅の壁は外傾して立ち上がり、壁高は最大約10cmから東側に向かい低くなる。埋土は不明である。床面は平坦で堅締、床面施設は検出されなかったが、北東と北西の壁際には総長約400cm、幅約15cm、深さ約10cmほどの壁溝を検出した。

カマドは北西壁の南側に付設されていたが、全体的に遺存状態は不良で、抜き取りの小ピット3基が検出され、袖部芯材と思われる人頭大の石が倒壊して点在していた。燃焼部はおよそ平坦で火熱により50×40cmほどの歪な略楕円形で、厚さ約3cmほどが赤色変化していた。煙道は奥行き約130cm、幅約50cmほどの掘り込み式で、外側に向かい緩い下り勾配である。

遺物は、壁溝から土師器の甕形土器片少量とカマドから土製支脚1点(17)が出土した。

S I 165 竪穴住居跡 (第265図、遺物図版105、写真図版193・290)

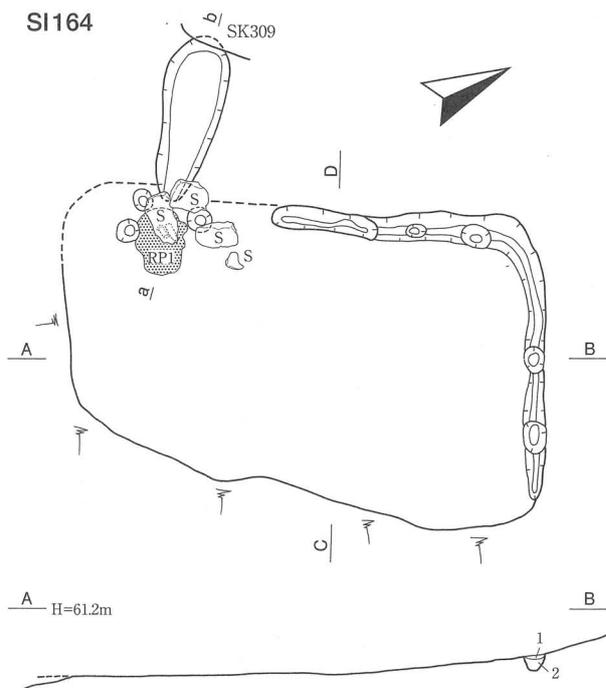
I 区赤28B区北側の尾根西側谷頭、IX D-16d グリッドに位置し、検出面はVI層上面である。S K 309に切られる。谷側は崩落により消失しているが、遺存部分と貼床範囲から平面形・規模は、北-南の長軸約3m、短軸約2.5m前後の隅丸略長方形で、床面積は約6㎡ほどと推定され、主軸方位はS-25°-Wである。壁は鋭角的に外傾して立ち上がり、壁高は山側の最大約40cmから西側に向かい低くなる。埋土はおよそ10層に細分される黄褐色系土の人為堆積である。床面は平坦で堅締、谷側は貼床とされていた。床面施設は検出されなかった。

カマドは南壁のほぼ中央に付設され、抜き取り痕跡は認められないが、袖部芯材と思われる拳大の石が散在していた。燃焼部は約70×50cmほどの楕円形で、深さ約5cmほどに掘り窪められ、底面中央は火熱により40×30cmほどの不整形で、厚さ7cmほどが赤色変化していた。煙道は奥行き約50cm、幅約40cmの掘り込み式で、外側に向かい上り勾配である。煙出しピットは、径約30cmの略楕円形で、煙道よりも深く掘り込まれ、深さ約20cmを測る。

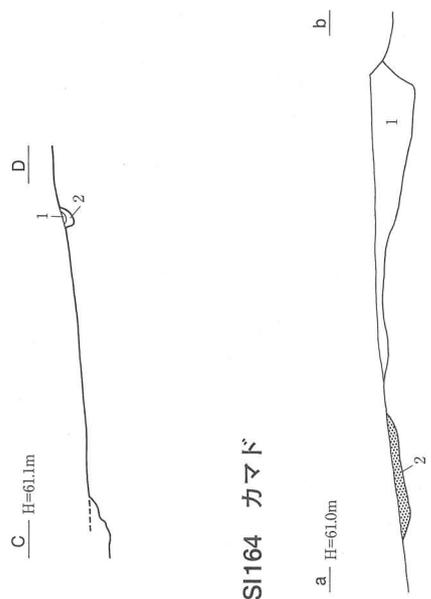
遺物は、埋土から土師器の甕形土器片少量と坏形土器片数点、磨石1点(205)と鍛冶滓が微量出土した。

S I 166 竪穴住居跡 (第266図、遺物図版45・46・105・106・128、写真図版193・241・242・290・291・308)

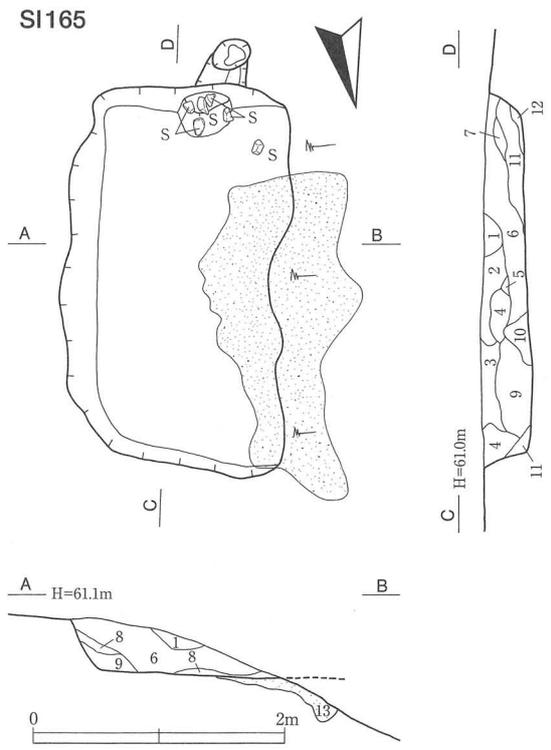
I 区赤28B区北側の尾根頂部平坦面、IX D-16f グリッド杭を中心に位置し、検出面はVI層上面である。埋土上面で東西方向長軸のS W115を検出した。本遺構が古い。平面形・規模は、一辺約4.5mほどの隅丸略



- SI164
 1. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性無
 2. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり・粘性無、砂質

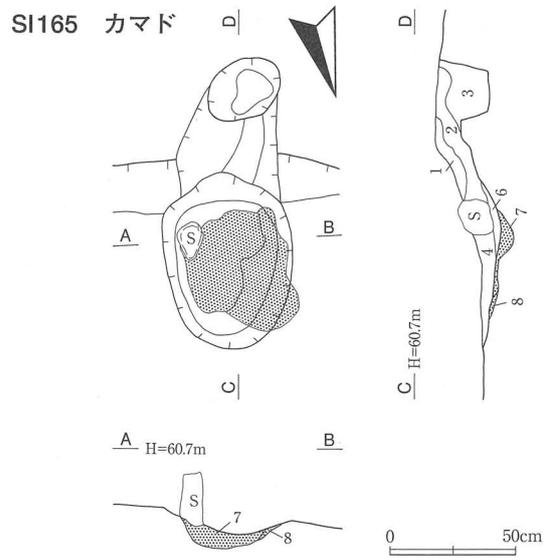


- SI164 カマド
 1. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり・粘性やや有、マサ土ブロック少量
 2. 5YR4/6 (赤褐) 燃焼部焼土



- SI165 カマド
 1. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無
 2. 10YR3/4 (暗褐) しまり極めて有、粘性無
 3. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、砂質
 4. 10YR3/2 (黒褐) しまり極めて有、粘性やや有
 5. 7.5YR5/6 (明褐) しまり極めて有、粘性無、弱い焼土
 6. 5YR5/6 (赤褐)
 7. 7.5YR5/6 (明褐) } 燃焼部焼土

- SI165
 1. 2.5Y3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有、炭化物少量
 2. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり・粘性やや有、マサ土少量
 3. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり・粘性やや有
 4. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性欠、マサ土
 5. 2.5Y5/3 (黄褐) しまりやや有、粘性やや有
 6. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性欠
 7. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性欠
 8. 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) しまり有、粘性やや有
 9. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまりやや有、粘性無、マサ土
 10. 2.5Y5/6 (黄褐) しまり有、粘性やや有
 11. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり・粘性やや有、黄褐色土少量
 12. 2.5Y5/6 (黄褐) しまり・粘性やや有
 13. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質、貼床



- SI165 カマド
 A H=60.7m
 B
 C H=60.7m
 D

第265図 SI164・165竪穴住居跡

方形を呈し、床面積は約21㎡を測る。主軸方位はN-20°-Eである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約40cmを測る。埋土はおよそ10層に細分される黄褐色系土の人為堆積である。床面は平坦で堅締、中央部を除く四方が貼床とされていた。床面施設としては北東隅と中央南東よりにK1・2土坑2基と北東から北西の壁際に総長約700cm、幅約10cm、深さ約10cmほどの壁溝を検出した。柱穴は12基を検出し、配置・規模からP1~4が支柱穴と考えられる。K1の平面形・規模は開口部約80×60cmの楕円形で、深さ約15cmの平底鍋形、K2の平面形・規模は開口部径約60cmの略円形で、深さ約15cmの鍋形を呈する。

カマドは北東壁のほぼ中央に付設され、本体天井部は崩落し、袖部は架構・芯材として石や土器などは認められないが、抜き取りの小ピット4基が検出され、黄褐色土で構築されていた。燃焼部は径約100cmほどの略円形で、深さ約5cmほどに掘り窪められ、底面中央は火熱により径40cmほどの略円形で、厚さ約3cmほどが赤色変化していた。この煙道側には土師器の甕形土器を転用した支脚が検出された。煙道は奥行き約150cm、径約40cmほどの削り貫き式で、煙出しよりも奥まで掘り込まれ、外側に向かい緩い下り勾配である。煙出しピットは径約35cm、深さ約70cmを測る。

遺物は、土器は北西床面からほぼ完形の土師器の甕形土器が2個体(526・528)とカマド支脚転用の同一個体と思われる2点(527・529)、埋土から土師器甕形土器片中袋一つと坏形土器片1点、須恵器の甕形土器片数点と坏形土器片1点、砥石と磨石各2点(207~210)、北西埋土下位から鉄廷状の鉄板1点(182)と棒状不明品1点、P2から鉄塊系遺物1個と埋土から鍛冶滓が微量出土した。

S I 167 竪穴住居跡 (第267図、遺物図版46・106・124、写真図版194・242・291・305)

I区赤28B区北側の尾根頂部平坦面、IXD-15f・gグリッドに位置し、検出面はVI層上面である。S I 169と重複し、本遺構が新しい。平面形・規模は、北西-南東の長軸約4m、短軸約3mの隅丸長方形で、床面積は約8.8㎡を測る。主軸方位はN-40°-Eである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は西側約70cmから東側では約30cmを測る。埋土はおよそ10層に細分されるマサ土混じりの黄褐色土の人為堆積である。床面は中央部が南北長軸の170×140cmの歪な略長方形に、深さ3cmほど掘り窪められているが、およそ平坦で堅締、カマド部分を除く壁際がコの字状に貼床とされていた。床面施設としては中央掘り込みの南隅で径約30cm、深さ約5cmの鍋形の炉1基と配置から支柱穴と考えられる柱穴3基を検出した。

カマドは北東壁のほぼ中央に付設され、本体天井部は崩落し、袖部は架構・芯材として石や土器などは認められないが、抜き取りの小ピット3基が検出され、黄褐色土で構築されていた。燃焼部は煙道側に上り勾配で火熱により径約40cmほどの略円形で、厚さ約7cmほどが赤色変化していた。煙道は奥行き約140cm、径約40cmほどの削り貫き式で、煙出しよりも奥まで掘り込まれ、外側に向かい下り勾配である。煙出しピットは径約35cm、深さ約85cmを測る。

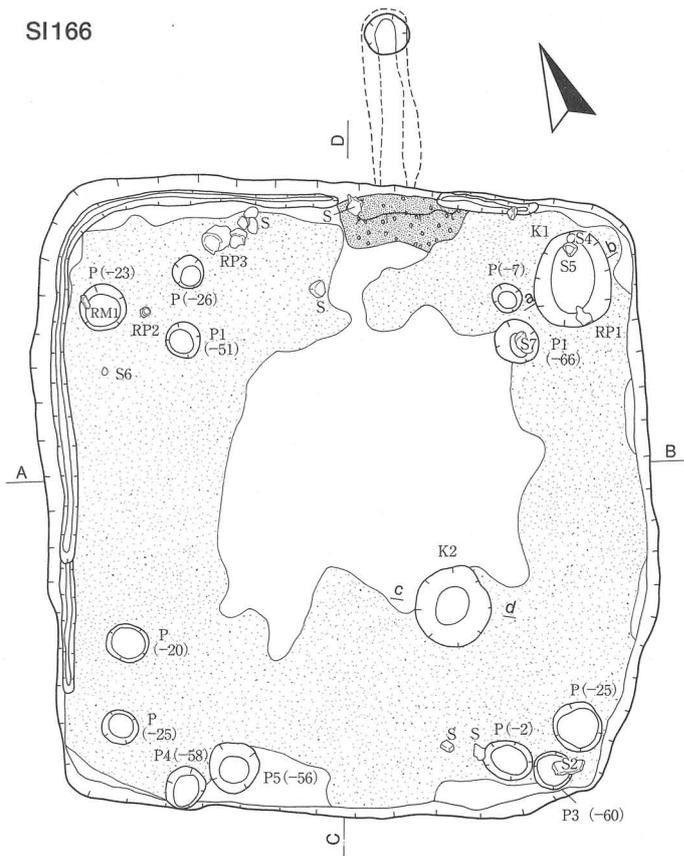
遺物は、土器は埋土から土師器の甕形土器片中袋一つと須恵器の甕形土器片数点、要石1点(211)と磨石2点(212・213)、不明鉄製品3点が出土した。

S I 168A・B 竪穴住居跡、S X I 93 工房跡

(第268・269図、遺物図版46・59・74・106・128・129、写真図版194~196・242・248・259・291・308)

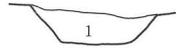
I区赤28B区北側の尾根頂部平坦面、IXD-14g・hグリッドを中心に位置し、検出面はVI層上面である。掘り込みが浅く、東側の谷頭部分は崩落していたため、S X I 93とS I 168Aについてはあまり遺存状態は良好ではない。検出時には北東-南西に長い重複するプランを確認したが、北側を中心に多量の炭化物が認められ、炭窯との重複も考えられた。精査の結果、S I 168Aは焼失住居跡と判明し、重複状況としては断面観察と検出状況から、新旧関係は(新)S K 337・345→S X I 93→S I 168A→S I 168B・S K 344→S I

SI166



SI166 K1

a H=60.1m b



SI166 K1
1. 10YR6/6 (明黄褐)
しまり極めて有、粘性無

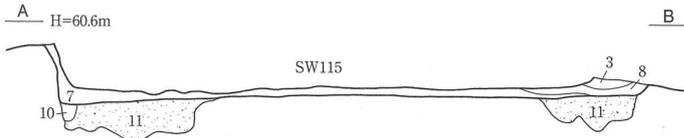
SI166 K2

c H=60.1m d



SI166 K2
1. 10YR5/4 (にぶい黄褐)
しまり有、粘性無

0 1m



0 2m

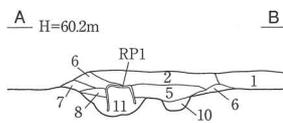
SI166 カマド

SI166

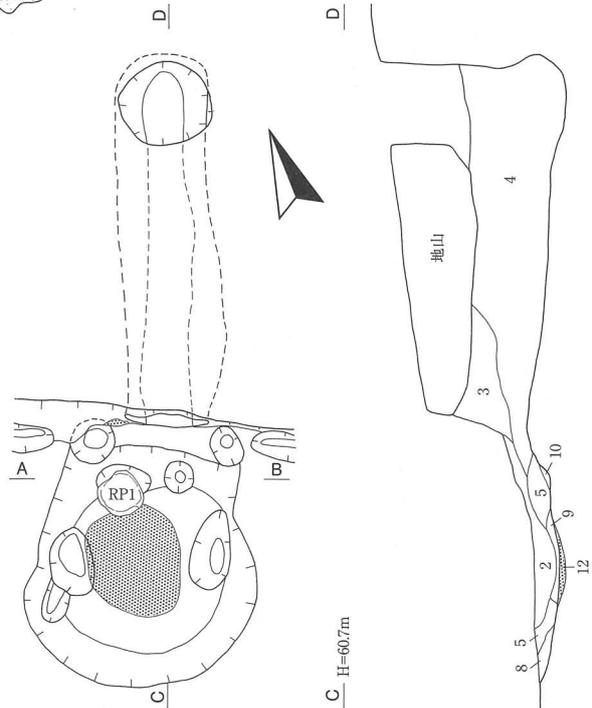
1. 10YR3/3 (暗褐) しまり無、粘性有
2. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性やや有
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質
4. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質、マサ土粒少量
5. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性やや有
6. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、砂質
7. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質
8. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、砂質
9. 10YR5/8 (黄褐) しまり極めて有、粘性有、カマド構築土
10. 10YR7/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性無、周溝
11. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、砂質、マサ土混、貼床

SI166 カマド

1. 10YR7/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性無
2. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性やや有、カマド構築土
3. 10YR6/8 (明黄褐) しまりやや有、粘性有
4. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性有、炭化物・焼土微量
5. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有
6. 10YR6/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性無
7. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性やや有、カマド構築土崩落
8. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
9. 7.5YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性有
10. 7.5YR4/3 (褐) しまり有、粘性やや有、支脚抜き取り穴
11. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性無、支脚の裏ごめ土
12. 5YR4/6 (赤褐) 焼部焼土



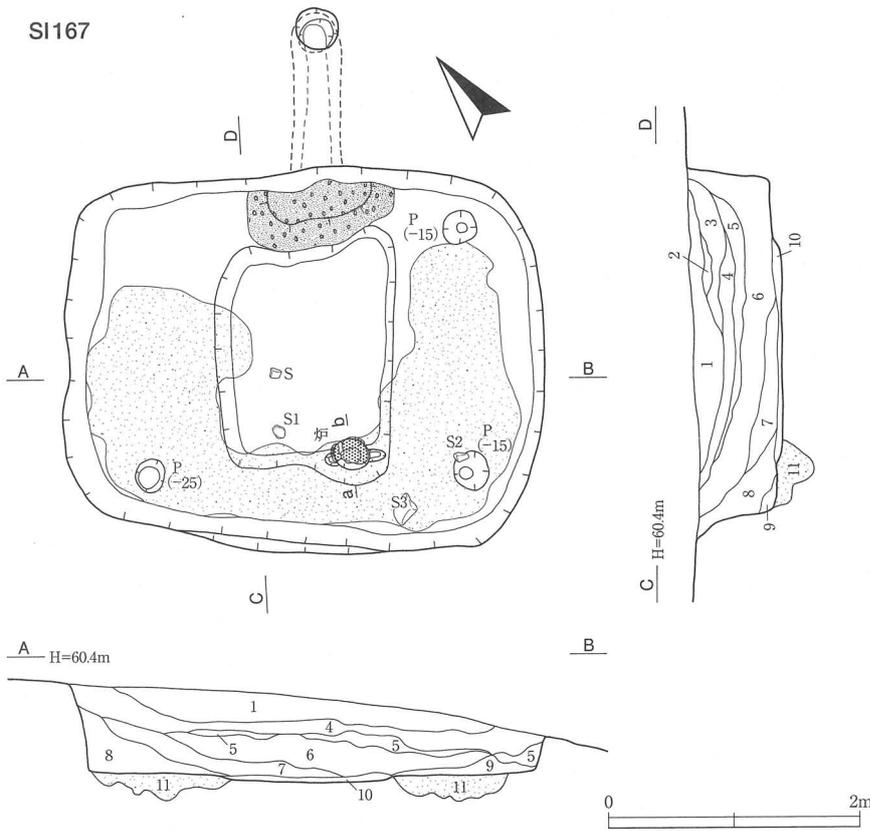
0 50cm



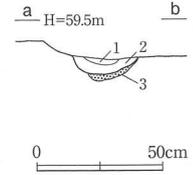
C H=60.7m

第266図 SI166竈穴住居跡

SI167



SI167 炉



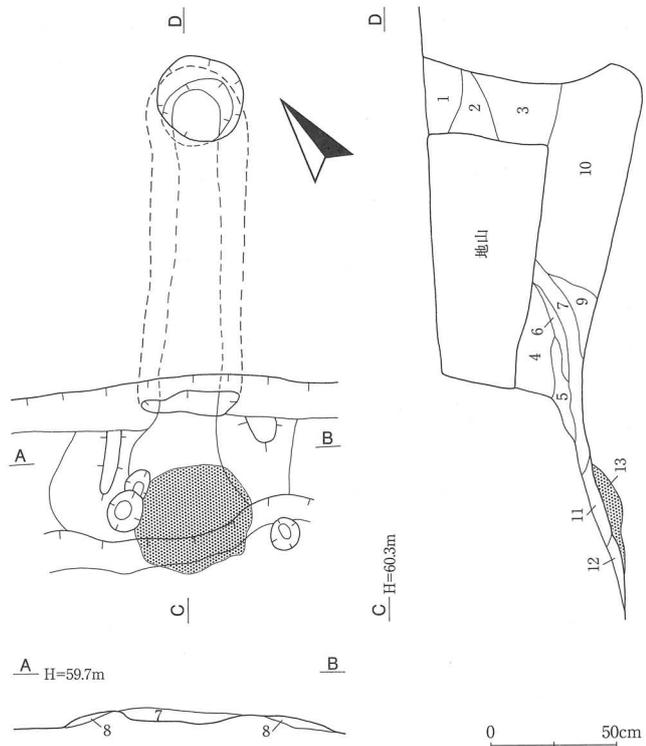
SI167 炉

1. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性無、砂質、炭化物微量
2. 10YR2/1 (黒) しまり・粘性無、炭化物微量
3. 5YR4/6 (赤褐) 焼土

SI167

1. 10YR4/3 (におい黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質
2. 10YR6/4 (におい黄橙) しまり極めて有、粘性やや有
3. 10YR4/2 (灰黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質
4. 10YR5/3 (におい黄褐) しまり極めて有、粘性やや有
5. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性やや有
6. 10YR6/4 (におい黄橙) しまり極めて有、粘性無、砂質
7. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質
8. 10YR6/4 (におい黄橙) しまり極めて有、粘性無、砂質
9. 10YR5/3 (におい黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質
10. 10YR5/4 (におい黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質
11. 10YR6/4 (におい黄橙) しまり極めて有、粘性無、砂質、貼床

SI167 カマド



SI167 カマド

1. 10YR5/4~5/8 (におい黄褐~黄褐) しまり極めて有、粘性有
2. 10YR6/4 (におい黄橙) しまり有、粘性無、砂質
3. 10YR5/3 (におい黄褐) しまり有、粘性無、砂質
4. 10YR5/4 (におい黄褐) しまり・粘性無
5. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性やや有、カマド構築土崩落
6. 10YR7/3 (におい黄橙) しまり有、粘性無、マサ土
7. 7.5YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性やや有、焼土粒少量
8. 10YR6/4 (におい黄橙) しまり極めて有、粘性無、黄褐色土ブロック少量
9. 10YR4/4 (褐) しまり無、粘性やや有
10. 10YR3/4 (暗褐) しまり無、粘性有
11. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性やや有、焼土粒微量
12. 10YR3/1 (黒褐) しまり有、粘性やや有、炭化物微量
13. 5YR4/6 (赤褐) 燃焼部焼土

第267図 SI167竪穴住居跡

169(古)と考えられる。

S X I 93は、南側IX D-14hグリッドに位置する。南東側が崩落により消失しているが、遺存部から平面形・規模は、一辺約4.2mほどの隅丸略方形を呈し、床面積は約16㎡ほどと推定される。壁は外傾して立ち上がり、壁高は西側約25cmから東側に向かい低くなる。埋土は壁際に崩落のマサ土混じりの黄褐色土があるが、全体的には暗褐色土の自然堆積である。床面は平坦で堅締、中央部から西側壁際に貼床とされていた。床面施設としては南東壁を除き壁際に幅約20cm、深さ約5cmほどの壁溝と中央部には東西方向約2m、幅約20cm、深さ3cm程の途切れるものも含めて根太痕跡と考えられる5列、北東隅と中央東よりでは地床炉各1基が検出された。炉Aは径約50cmの略円形で、火熱により厚さ約5cmほどが赤色変化していた。炉Bは西端がS K 345に切られるが、およそ50×30cmの楕円形で、火熱により厚さ約3cmほどが赤色変化していた。

遺物は、埋土から土師器の甕形土器片数点と不明鉄製品が1点出土した。

S I 168 Aは、北側IX D-14gグリッドに位置する。南側はS X I 93により、南東側は崩落により消失しているが、遺存部から平面形・規模は、北東-南西長軸の長軸約5.8m、短軸約4mほどの隅丸略長方形で、カマドの両脇が外側に張り出す。床面積は約20㎡ほどと推定される。主軸方位はN-45°-Wである。壁は外傾して立ち上がり、壁高は西側北東壁の最大約10cmから東側に向かい低くなる。埋土は上位に人為的な褐色系土、下位には炭化物を含む黒色土が部分的に、床面には全体的に火熱で赤色変化した焼土が堆積し、壁際には焼失による炭化材が多量に残る。分析の結果、柱材はクリ、板材はケヤキが多く、一部イタヤも混じる。床面は概ね平坦で堅締、B住居は貼床とされていた。床面施設としては中央に地床炉2基が検出され、炉Aは径約70cmの不整な略円形で、火熱により厚さ約5cmほどが赤色変化していた。炉Bは南端がS X I 93に切られるが、およそ60cmの略円形で、火熱により厚さ約10cmほどが赤色変化していた。

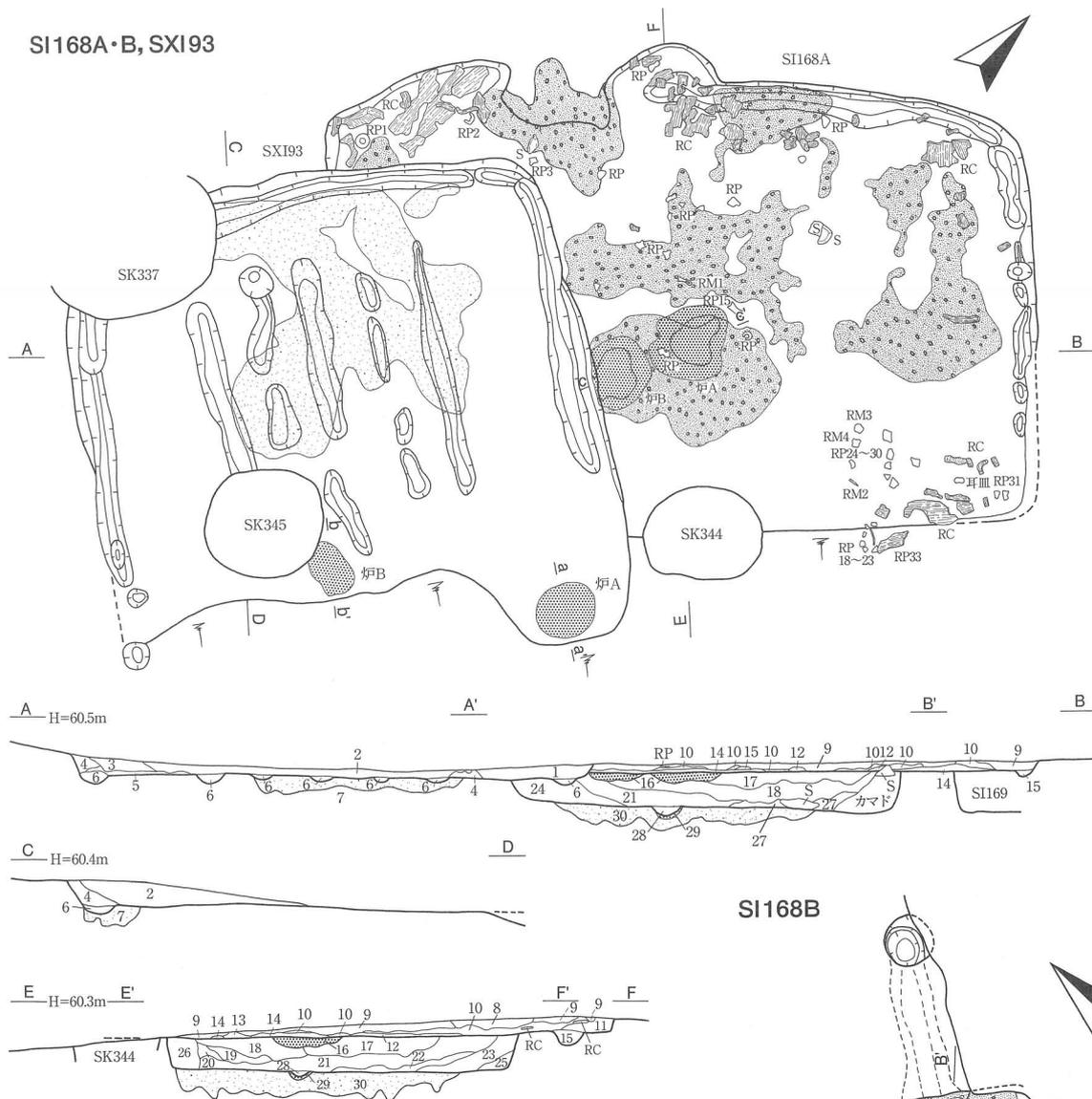
カマドは北西壁の南側に付設されていたが、長い煙道を有せず、両脇は外側に張り出していた。本体天井部は崩落し、袖部は芯材として土製支脚1個と、抜き取りの小ピット5基が検出された。燃焼部は概ね平坦で、火熱により100×60cmほどの不整形で、中央部がダルマ型により強く、厚さ約5cmほどが赤色変化していた。煙道は煙出しと一体的で奥行き約40cm、幅約30cm、深さ約5cmほどの水平な掘り込み式である。

遺物は、土器は土師器の甕形土器と坏形土器、破碎した須恵器の壺形土器片が少量出土し、カマド南側張り出し床面から完形の土師器の甕形土器1個体(535)と坏形土器1個体(538)、東隅から耳皿1個体(534)と破碎した坏形土器1個体(539)、カマド芯材に転用された支脚1個体(18)、砥石1点(214)、鉄製品は床面からほぼ完形の鉄鎌1点(183)、鋏と思われる1点(184)、紡錘車1点(185)、鏝と鞘尻金具各1点(291・292)と不明品2点、それと鍛冶滓が極めて微量出土した。

S I 168 Bは、A住居の中央下に位置する。平面形・規模は、一辺約3mほどの隅丸略方形を呈し、床面積は約8㎡ほどを測る。主軸方位はN-40°-Eである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約30cmほどが残る。埋土はマサ土を多く含む明黄褐色系土の人為的堆積である。床面は概ね平坦で堅締、壁際を除き全体的に貼床とされていた。床面施設としては中央に掘り込みのある炉跡1基と柱穴2基が検出された。炉は径約25cmの略円形で、深さ約5cmの丸底鍋形を呈し、全体的に火熱により厚さ約4cmほどが赤色変化し、一部黒く蒸焼状態となっていた。念のために採集した土からは鍛造剥片は抽出されなかった。

カマドは北東壁の東よりに付設され、遺存状態はかなり良好で、袖部には芯材として人頭大の板状の石を用い、天井部の架構には長さ55cmほどの垂角礫1個を組み、黄褐色粘土で構築されていた。燃焼部は径約70cmほどの略円形で、深さ約5cmほどに掘り窪められ、底面中央は火熱により径約18cmほどの略円形で、

SI168A・B, SXI93



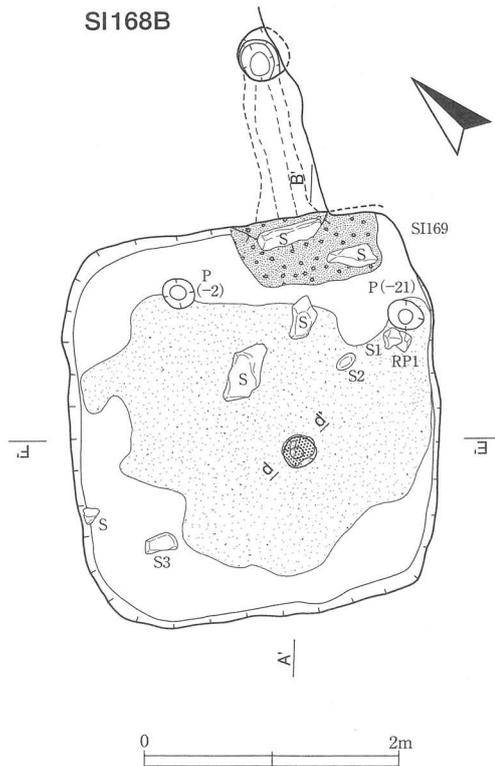
SXI93

1. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
2. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有
3. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無
4. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有
5. 10YR2/3 (黒褐) しまり有、粘性無、炭化物少量
6. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、砂質
7. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質、貼床
8. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、砂質マサ土多量
9. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり、粘性やや有、炭化物微量
10. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有、炭化物少量
11. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性無、炭化物微量
12. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性有
13. 7.5YR4/4 (褐) しまり有、粘性無、弱い焼土
14. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有
15. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性有
16. 5YR4/6 (赤褐) 炉焼土
17. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり有、粘性やや有
18. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり欠、粘性やや有
19. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまり有、粘性欠、マサ土ブロック少量
20. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性欠
21. 2.5Y5/6 (黄褐) しまり欠、粘性やや有
22. 2.5Y4/3 (オリーブ褐) しまり有、粘性欠
23. 2.5Y4/6 (オリーブ褐) しまり有、粘性欠
24. 2.5Y4/6 (オリーブ褐) しまり有、粘性欠
25. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性有
26. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり欠、粘性やや有
27. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり有、粘性やや有

SI168B

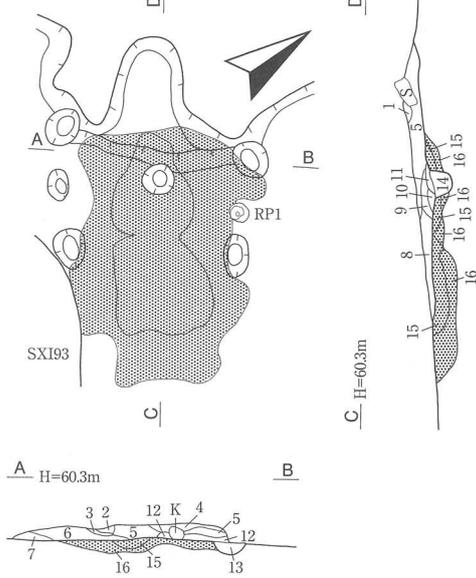
28. 10YR2/1 (黒) しまり有、粘性無、炭化物微量
29. 7.5YR4/4 (褐) 炉焼土
30. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性無、マサ土少量、貼床

SI168B



第268図 SI168A・B竪穴住居跡・SXI93工房跡 (1)

SI168A カマド



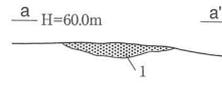
SI168A カマド

1. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有、黄褐色ブロック
2. 7.5YR4/6 (褐) しまり・粘性やや有
3. 5YR4/6 (赤褐) 焼土内壁の崩落
4. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有、炭化物・焼土粒微量
5. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有、炭化物・焼土粒微量
6. 10YR4/6 (褐) しまり無、粘性有、炭化物微量
7. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性有、炭化物微量
8. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
9. 7.5YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性無、焼土少量
10. 7.5YR5/6 (明褐) しまり有、粘性無、焼土少量
11. 5YR4/4 (赤褐) しまり極めて有、粘性無、天上内壁の焼土
12. 5YR4/6 (赤褐) 板状の焼土塊
13. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性無
14. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性有、支脚の抜き取り穴？
15. 5YR4/6 (赤褐)
16. 5YR2/4 (極暗赤褐) } 燃焼部焼土

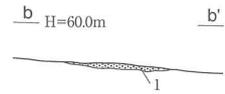
SI168B カマド

1. 10YR5/8 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
2. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無
3. 10YR5/8 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
4. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性無
5. 10YR5/8 (黄褐) しまり極めて有、粘性有、カマド構築土崩落
6. 7.5YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性やや有、焼土粒微量
7. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
8. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無、砂質
9. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無
10. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
11. 7.5YR5/6 (明褐) しまり極めて有、粘性有、焼土
12. 10YR5/8 (黄褐) しまり極めて有、粘性やや有、カマド構築土
13. 10YR7/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性無、袖石の裏ごめ土
14. 5YR5/6 (明赤褐) 燃焼部焼土

SXI93 炉A



SXI93 炉B



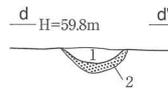
SXI93 炉A・B
1. 5YR4/6 (赤褐) 焼土

SI168A 炉A・B



SI168A 炉A・B
1. 5YR4/6 (赤褐) 焼土
2. 5YR2/4 (極暗赤褐) 焼土

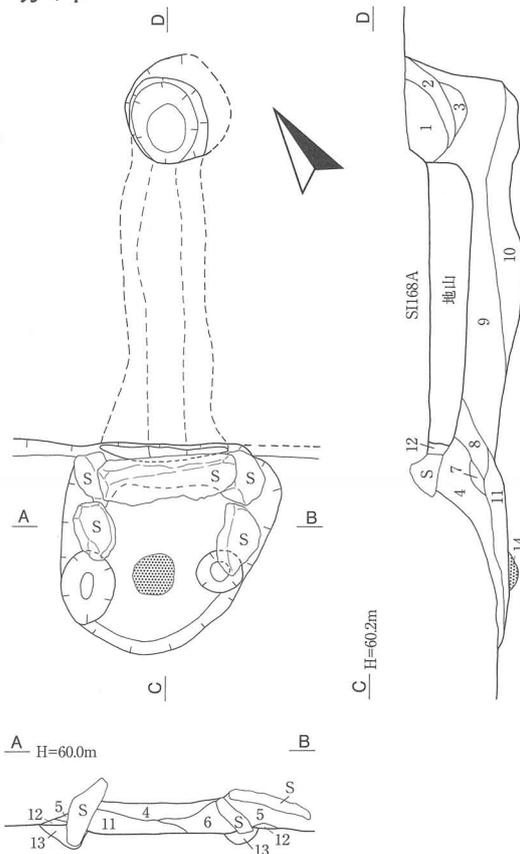
SI168B 炉



SI168B 炉

1. 10YR2/1 (黒) しまり・粘性無、炭化物微量
2. 7.5YR4/4 (褐) 焼土

SI168B カマド



第269図 SI168A・B 竪穴住居跡・SXI93 工房跡 (2)

厚さ約3cmほどが赤色変化していた。煙道は奥行き約150cm、径約30cmほどの削り貫き式で、外側に向かい緩い下り勾配である。煙出しピットは径約40cmの略円形で深さ45cmを測る。

遺物は、埋土から土師器の甕形土器片数点と羽口2点(155・156)、砥石と磨石各1点(215・216)、床面から琥珀の小玉1点(217)と鍛冶滓が微量出土した。

S I 169 竪穴住居跡 (第270図、遺物図版46・107・129、写真図版196・242・292・308)

I区赤28B区北側の尾根頂部平坦面、IXD-15gグリッドを中心に位置し、検出面はVI層上面である。本遺構はS I 167・168・SK344に切られる。南西側は崩落により壁が消失しているが、壁溝と貼床範囲から平面形・規模は、一辺約4mほどの隅丸略方形を呈し、床面積は約14.5㎡ほどと推定される。主軸方位はN-30°-Eである。遺存する壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は西側約30cmほどから東側に向かい低くなる。埋土はマサ土を多く含む明黄褐色系土の人為的堆積である。床面は概ね平坦で堅締、南東谷側と北西壁際が貼床とされていた。床面施設としては一部途切れるものの幅約5~15cm、深さ約5~10cmほどの周溝が巡る。

カマドは北東壁の東よりに付設され、本体天井部は崩落し、袖部は架構・芯材として石や土器などは認められないが、抜き取りの小ピット4基が検出され、一部作り出しとされ、黄褐色土で構築されていた。燃焼部は煙道側に上り勾配で火熱により径約50cmほどの歪な略円形で、厚さ約10cmほどが赤色変化していた。煙道は先端部がS I 167に破壊されていたが、煙出しピットと思われる痕跡が認められ、奥行き約140cm、幅約35cmほどの掘り込み式と推定され、外側に向かい下り勾配である。煙出しピットは、深さ約60cmほどと推定される。

遺物は、南側床面から破砕した土師器の甕形土器1個体(541)と破片数点と羽口片1点、砥石と磨石各1点(218・219)、検出面でほぼ完形の刀子1点(188)と鍛冶滓が極めて微量出土した。

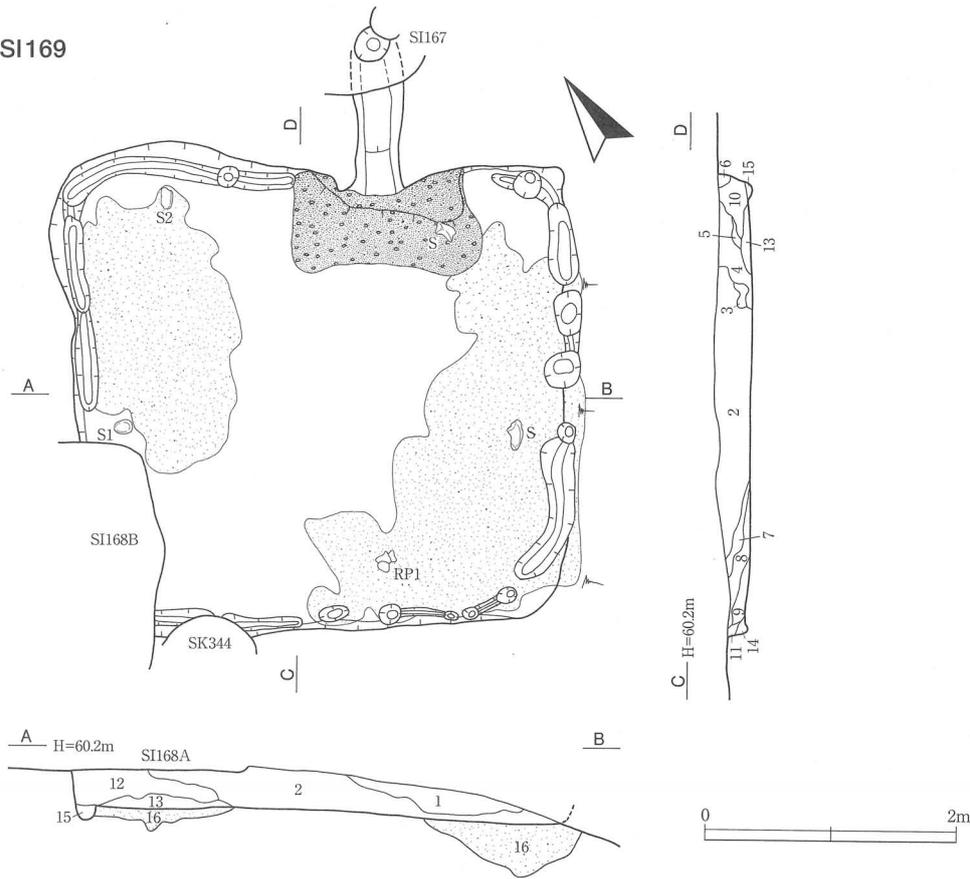
S I 171 竪穴住居跡 (第271図、遺物図版47・107、写真図版197・243・292)

I区赤28B区北側の尾根東側谷頭、IXD-14iグリッドに位置し、検出面はVI層上面である。本遺構はSW117・118・SK340に切られる。南西谷側は崩落により消失しているが、貼床範囲から等高線と平行する北東-南西の長軸方向で、平面形・規模は、長軸約4.8m、短軸約3mほどの隅丸略長方形で、床面積は約12㎡ほどと推定される。主軸方位はN-45°-Wである。遺存する壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は西側最大約65cmから東側に向かい低くなる。埋土はマサ土を多く含む明黄褐色系土の人為的堆積で、中位から床面にかけてS I 168AもしくはSW117関連の廃棄と考えられる炭化材が多く出土した。床面は概ね平坦で堅締だが、明瞭な稜を持たないものの北側が5cmほど一段高く、南東谷側と北西壁際が貼床とされていた。床面施設としては北側に径約80cmの円形で、深さ約65cmの筒状のK1土坑1基、北半の山側壁際には総長280cm、幅約10cm、深さ約3cmほどの壁溝を検出した。

カマドは北西壁の南側に付設され、遺存状態はかなり良好で、袖部には芯材として人頭大の板状の石を用い、天井部の架構には長さ55cmほどの垂角礫1個を組み、黄褐色粘土で構築されていた。燃焼部はほぼ平坦で、内部底面は全体的に火熱により厚さ約10cmほどが赤色変化していた。煙道は奥行き約130cm、径約30cmほどの削り貫き式で、ほぼ水平に掘り込まれ、煙出しピットは径約30cmの略円形で深さ30cmが残る。

遺物は、カマド周辺から上半が復元できた土師器の甕形土器1個体分(543)と須恵器の甕形土器片1点(545)、砥石2点(220・221)と磨石片1点と不明鉄製品1点出土した。出土した炭化材は鑑定の結果すべてクリであった。

SI169



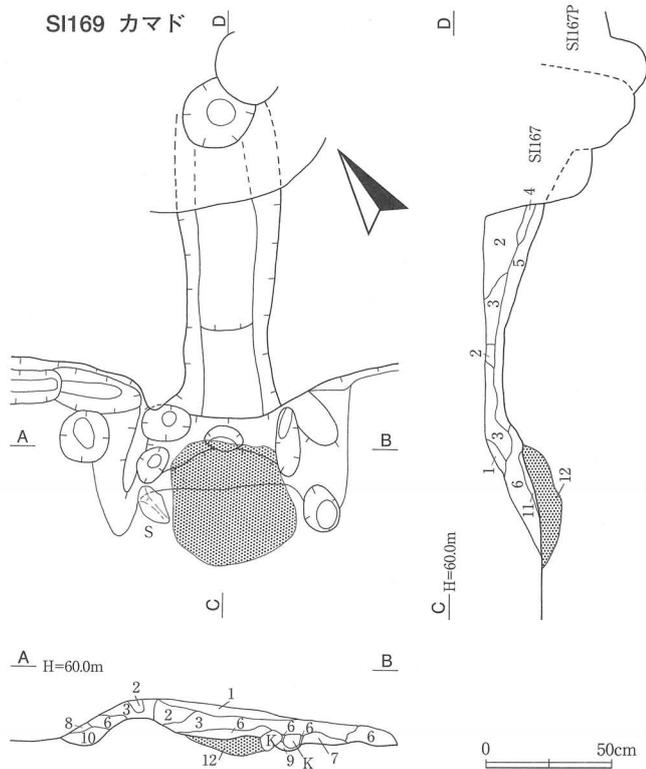
SI169

1. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性欠
2. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまり・粘性やや有
3. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性欠、マサ土
4. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり・粘性欠
5. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性欠
6. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり・粘性やや有
7. 2.5Y5/4 (黄褐) しまりやや有、粘性欠
8. 2.5Y4/4 (オリーブ褐) しまりやや有、粘性欠、炭化物微量
9. 2.5Y7/4 (浅黄) しまり有、粘性欠
10. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまりやや有、粘性欠
11. 2.5Y8/4 (淡黄) しまり有、粘性無
12. 2.5Y6/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有
13. 2.5Y5/6 (黄褐) しまり有、粘性欠
14. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり・粘性欠
15. 2.5Y6/4 (にぶい黄) しまり有、粘性無、壁溝埋土
16. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性無、マサ土少量、貼床

SI169 カマド

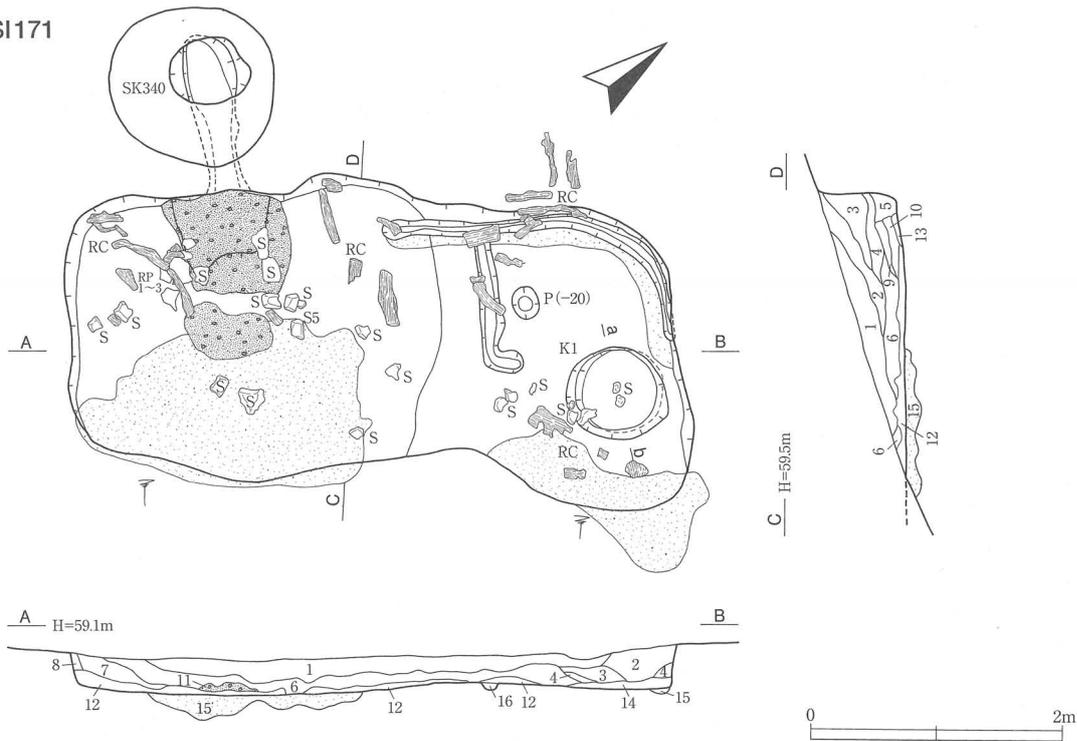
1. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
2. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無
3. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性やや有、マサ土ブロック少量
4. 7.5YR5/4 (にぶい褐) しまり有、粘性無、弱い焼土
5. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性やや有
6. 10YR5/8 (黄褐) しまり極めて有、粘性有、カマド構築土崩落
7. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、石の抜き取り跡
8. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性有、カマド構築土崩落
9. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、石の抜き取り跡
10. 10YR3/1 (黒褐) しまり極めて有、粘性無
11. 7.5YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性やや有、カマド内壁の弱い焼土
12. 5YR4/6 (赤褐) 燃焼部焼土

SI169 カマド



第270図 SI169竪穴住居跡

SI171



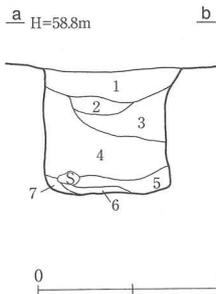
SI171

1. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、砂質、マサ土粒少量
2. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、砂質、マサ土粒少量
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質
4. 10YR3/2 (黒褐) しまり極めて有、粘性やや有、炭化物少量
5. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質
6. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性無、砂質、炭化物微量
7. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質
8. 10YR7/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性有
9. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無
10. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質
11. ブロック状焼土塊
12. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性無、炭化材混入
13. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無
14. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
15. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、砂質、貼床
16. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無

SI171 カマド

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性無
2. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、炭化物微量
3. 10YR4/4 (褐) しまり無、粘性やや有
4. 5YR4/6 (赤褐) しまり有、粘性無、カマド内壁崩落土
5. 5YR5/6 (明赤褐) 焼土ブロック、カマド内壁崩落土
6. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性無
7. 10YR3/4 (暗褐) しまり無、粘性やや有
8. 10YR2/3 (黒褐) しまり極めて有、粘性無、炭化物少量
9. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性無、カマド構築土
10. 5YR5/6 (赤褐) 焼土部焼土

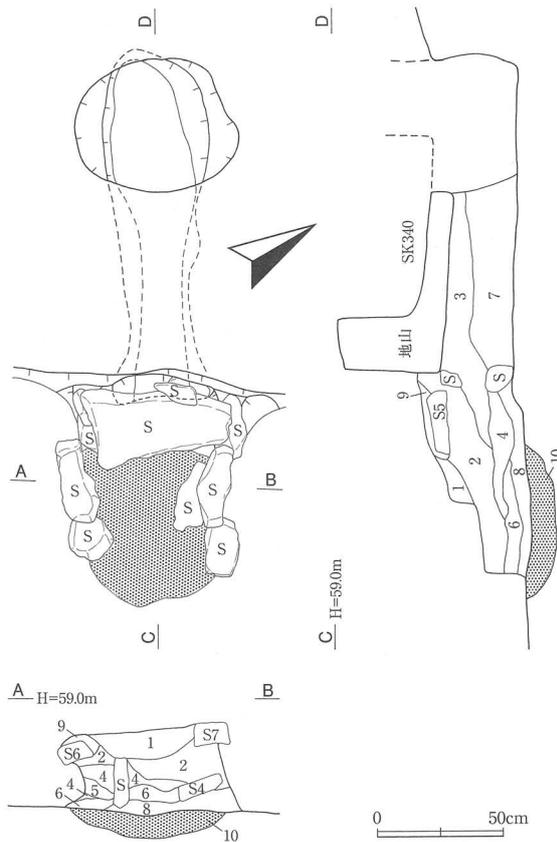
SI171 K1



SI171 K1

1. 10YR4/4 (褐) しまり無、粘性やや有、炭化物微量
2. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性無、砂質
3. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり無、粘性やや有、炭化物微量
4. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性無、砂質
5. 10YR3/1 (黒褐) しまり無、粘性やや有、炭化物少量
6. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性無、砂質
7. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、砂質

SI171 カマド



第271図 SI171竪穴住居跡

S I 172 竪穴住居跡 (第272図、写真図版198・325)

I区赤28B区北側平坦面の南端、IXD-13iグリッドに位置し、検出面はVI層上面である。掘り込みが浅く、南東谷側が崩落により消失しているため、遺存状態は極めて不良である。遺存部分と貼床範囲から平面形・規模は、一辺約2.5m前後の隅丸略方形で、床面積は約6㎡ほどと推定され、主軸方位はS-40°-Wである。残存する北西側壁は鋭角的に外傾して立ち上がり、壁高は最大約25cmから東側に向かい低くなる。埋土は上位中央にほぼ同時に廃棄された小さな貝層が3ヶ所あるが、全体的にマサ土混じりの褐色系土の人為的堆積である。床面は平坦で堅締、谷側半分が貼床とされていた。床面施設は検出されなかった。

カマドは南西壁のほぼ中央に付設されていたが、全体的に遺存状態は不良で、燃烧部焼土と煙道の痕跡を検出したに留まる。焼土は径約30cmほどの略円形で、厚さ約5cmほどが赤色変化していた。煙道は奥行き約100cm、幅約35cmほどの掘り込み式で、外側に向かい緩い下り勾配である。

遺物は、埋土から土師器の甕形土器片少量と羽口片2点が出土した。貝類はアワビとイガイが最も目に付いたものだが、詳細については遺物編を参照されたい。

S I 173 竪穴住居跡 (第272図、写真図版198)

I区赤28B区北側尾根頂部から南側に向かう緩斜面、IXD-13jグリッドに位置し、検出面はVI層上面である。南側が崩落により消失しているため全容は不明だが、遺存部分から平面形・規模は、一辺約2.5m前後の歪な隅丸略方形で、床面積は約6㎡ほどと推定され、主軸方位はN-10°-Eである。残存する北側壁は外傾して立ち上がり、壁高は北側の最大約30cmから南側に向かい低くなる。埋土は上位の黒色土と壁際のマサ土混じりの褐色系土の自然堆積である。床面は平坦で堅締、中央部分が一部貼床とされていた。床面施設は検出されなかった。

カマドは北壁のほぼ中央に付設されていたが、本体天井部は崩落し、袖部は芯材として鉄滓や石と抜き取りの小ピット2基が検出され、黄褐色土で構築されていた。燃烧部は径約60cmほどの略円形で、深さ約3cmほどに掘り窪められ、底面中央は火熱により径約40cmほどの略円形で、厚さ約4cmほどが赤色変化していた。煙道は奥行き110cm、径約25cmの削り貫き式で、煙出しよりも奥まで掘り込まれ、外側に向かい下り勾配である。煙出しピットは径約30cm、深さ約60cmほどを測る。

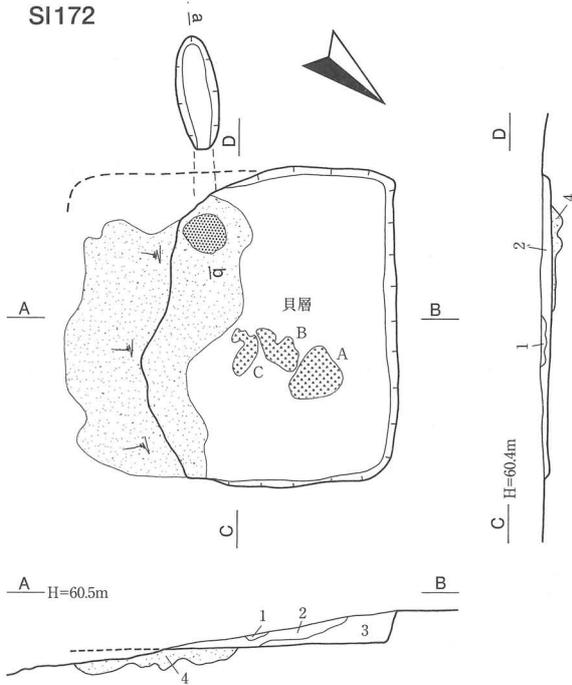
遺物は埋土から土師器の甕形土器片少量と羽口片1点、カマド芯材の鉄滓約2kgが出土した。

S I 174 A・B 竪穴住居跡・S X W75・76 鉄生産関連炉跡、S X I 94 工房跡 (第273～275図、遺物図版47・59・74・107・108・129、写真図版199・200・243・248・259・265・266・292・293・308・322)

I区赤28B区南側の尾根頂部平坦面、IXD-14lグリッド杭を中心に位置し、検出面はV・VI層上面である。検出当初は、等高線と直行する東西方向の長軸約8m、短軸約6mの全体的に黄褐色系土を主体とする歪な略長方形のプランで、西側には環状の黒色土範囲と北西には炭化物を多く含む部分を確認したものである。状況から西側の半人為的埋土と東側の人為的埋土の2棟以上、また北西部には炭窯の重複と考えられ、東西長軸にベルトを1本、南北短軸にベルトを2本設定して精査を行ったところ、精査過程で高低差のある床面と軸のぶれる壁を順次確認した。断面観察と確認状況から新旧関係は、(新)SN85→SW121A→SW121B・SN75→SXI94・SW122・SK346→SI174B→SI174A(古)と考えられる。

SXI94は、西側IXD-13k・1グリッドに位置する。北壁がSW121に破壊されているが、残存部から平面形・規模は、南北長軸約5m、短軸約4mほどの隅丸略長方形を呈し、床面積は約17㎡ほどと推定される。壁は外傾して立ち上がり、壁高は北西側約40cmから東側約7cmと低くなる。埋土は中央上位と下位にマサ土混じりの人為的な黄褐色系土と中位の自然堆積の黒色系土に大別される。床面は概ね平坦で堅締、全体的

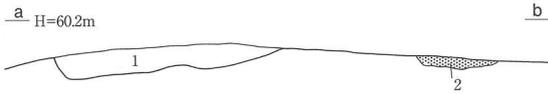
SI172



SI172

1. 10YR2/3 (黒褐) しまり有、粘性やや有、貝層
2. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
3. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性無、砂質
4. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、砂質

SI172 カマド



SI172 カマド

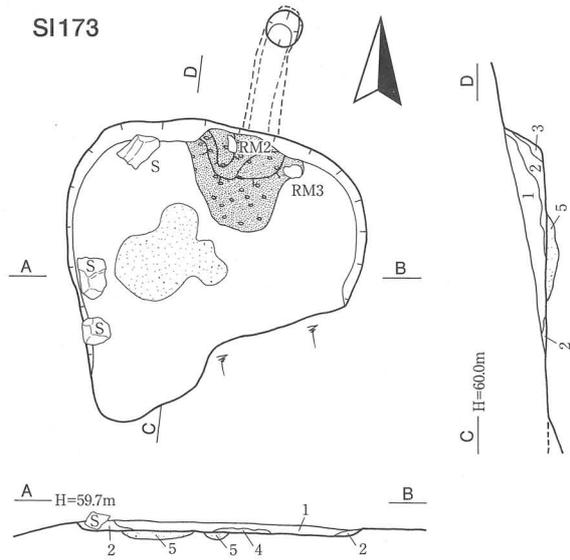
1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質、炭化物微量
2. 5YR5/6 (明赤褐) 燃焼部焼土

SI173 カマド

1. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性有
2. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性有
3. 10YR3/4 (暗褐) しまり極めて有、粘性有
4. 7.5YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性有、弱い焼土、カマド内壁崩落土
5. 7.5YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性有、炭化物・焼土粒微量
6. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、砂質
7. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性有、炭化物微量
8. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性有、炭化物微量
9. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性無
10. 7.5YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性無、弱い焼土
11. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性無
12. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無
13. 5YR5/4 (にぶい赤褐) 燃焼部焼土

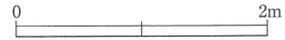
カマド
構築土

SI173

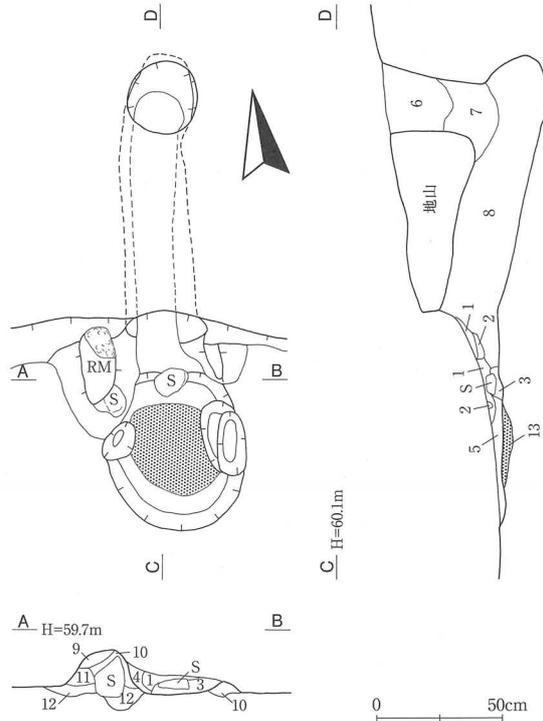


SI173

1. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無、炭化物微量
2. 10YR4/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
3. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無
4. 7.5YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性有
5. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性無、マサ土、貼床



SI173 カマド



第272図 SI172・173竪穴住居跡

に貼床とされていた。床面施設としては南東隅を除く三隅にK 1～3土坑の3基、北西壁際に総長約4m、幅約20cm、深さ約5cmほどの壁溝と中央には総長約4m、幅約20cm、深さ約5cmのコの字状の溝跡、南西壁際と中央東よりでは地床炉各1基が検出された。南西隅のK 1の平面形・規模は長軸約120cm、短軸約70cmの略長方形で、断面形は深さ約20cmの鍋型、北東隅のK 2の平面形・規模は径約80cmの略円形で、断面形は深さ約40cmの筒状、北西隅のK 3の平面形・規模は長軸約80cm、短軸約55cmの略長方形で、断面形は深さ約25cmの箱形を呈する。南西側の炉Aはおよそ60×40cmの略長方形で、火熱により厚さ約10cmほどが赤色変化していた。中央の炉Bはおよそ径40cmほどの略円形で、火熱により厚さ約7cmほどが赤色変化していた。コの字状溝と炉A・Bの状況から工房跡の拡張建替えの可能性も考えられる。

遺物は、土器は埋土から土師器の甕形土器片が中袋一つと坏形土器片数点、須恵器の甕形土器片1点、羽口片が埋土から4点とK 2から1点、床面から鉄碇石1点(227)と磨石1点(228)、鉄製品は埋土から完形の釣針1点(193)と不明品3点、それと鍛冶滓が微量出土した。

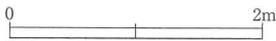
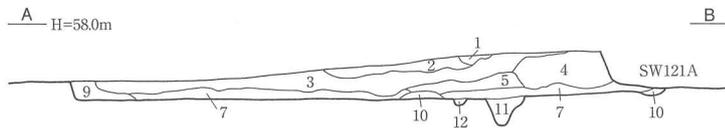
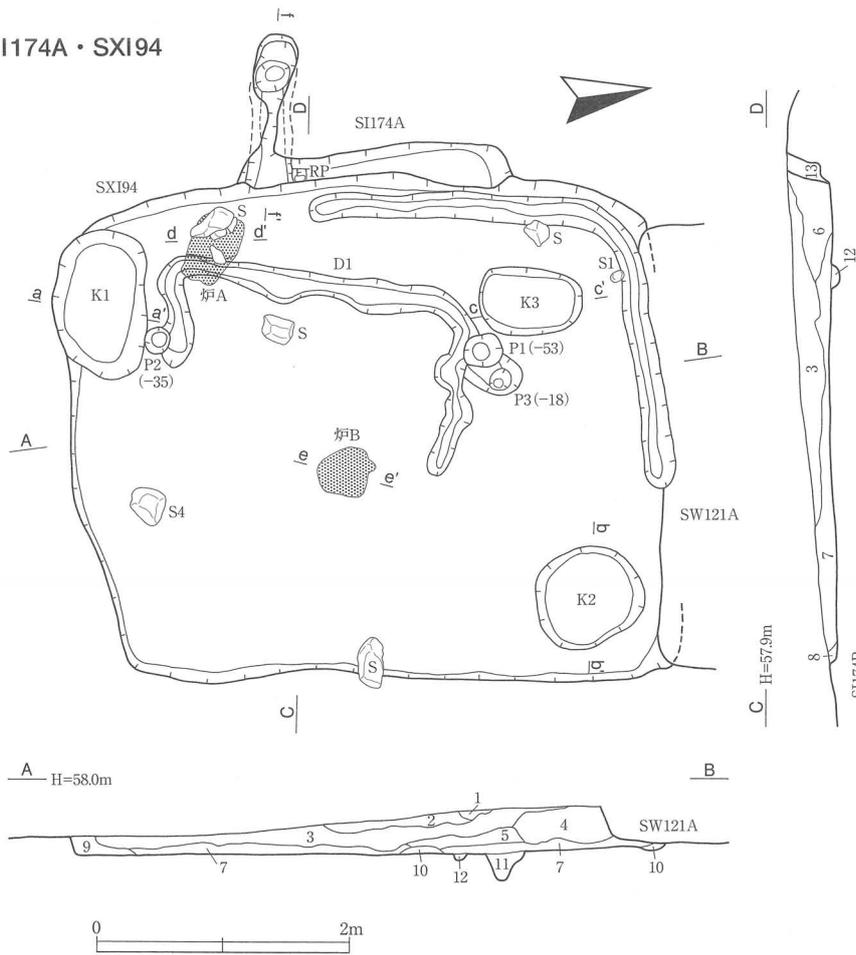
S I 174 Aは、西側ⅨD-13k・1グリッドに位置するが、S X I 94に大半が破壊され、西壁と床の一部、及びカマド煙道が検出されたに留まる。平面形・規模は不明であるが、遺存する西壁長は約3.5mを測り、隅丸略方形を呈すると推測される。壁は外傾して立ち上がり、壁高は遺存する西壁で約20cmを測る。

カマドは西壁のほぼ中央に付設されていたが、本体部は消失しており、煙道は奥行約110cm、径約30cmの削り貫き式で、煙出しよりも奥まで掘り込まれ、外側に向かい下り勾配である。煙出しピットは径約30cmで煙道よりも深く、深さ約35cmほどを測る。遺物は埋土から砥石片1点出土した。

S I 174 Bは、東側ⅨD-14lグリッド杭を中心に位置する。カマドが2基と鉄生産関連炉跡が2基検出され、遺存状況と配置関係から、住居の建替え後に工房転用という3～4期があったと考えられるが、各期の詳細については区別できないため遺存部分について記述する。東谷側は崩落により消失しているが、遺存する貼床範囲から平面形・規模は、一辺約5.5m前後の隅丸略方形で、床面積は約28㎡ほどと推定される。主軸方位はカマドA・BともN-20°-Eである。遺存する壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は西側最大約35cmから東側に向かい低くなる。埋土は全体的にマサ土を多く含む明黄褐色系土の人為的堆積で、中央部床上には炭化物と鍛造剥片を多く含む黒色土が広がり、北東部床上とカマド上位には焼土混じりの炉壁片と小鍛冶滓を含む赤みがかった黄褐色系土が堆積していた。床面は概ね平坦で堅締、東谷側は貼床とされていた。床面施設としては北西壁際と中央西側にK 1～3土坑の3基、北東部カマド近くにS X W 76と中央西寄りにS X W 75の2基、東谷側は不明だが、カマドA部分を除き壁際に幅約10cm、深さ約5～7cmほどの周溝と柱穴7本を検出し、配置・規模からP 1～4が支柱穴と考えられる。K 1の平面形・規模は径約100cmの略円形で、断面形は深さ約60cmの筒状、K 2の平面形・規模は径約70cmの略円形で、断面形は深さ約35cmの筒状、K 3の平面形・規模は長軸約110cm、短軸約85cmの略長方形で、断面形は深さ約55cmの箱形を呈する。S X W 75・76については後述する。

カマドは北壁に付設され、カマドAはほぼ中央に、カマドBは東寄りに位置する。カマドAは本体天井部は倒壊していたが、状況からS X W 76の操業に際して棚状に整地されたものと考えられる。袖部には芯材として羽口の使用が認められ、黄褐色土で構築されていた。燃烧部は径約70cmほどの略円形で、深さ約5cmほどに掘り窪められ、底面中央は火熱により40cmほどの不整形で、厚さ5cmほどが赤色変化していた。掘り込みの煙道側端には土製支脚が2個並列して埋置されていた。煙道は奥行き約150cm、径約30cmの削り貫き式で、外側に向かい下り勾配である。煙出しピットは径約30cmの略円形で深さ約70cmを測る。カマドBは改築時に掘削されたと思われ、煙道部のみ遺存し、奥行約90cm、幅約20cmの掘り込み式である。

SI174A・SXI94



SXI94

1. 10YR7/6 (明黄褐) しまり有、粘性やや有、黄褐色土多量
2. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性無、炭化物微量
3. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性有、炭化物微量
4. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有
5. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
6. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質、マサ土多量
7. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有
8. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有、マサ土粒少量
9. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性無、炭化物少量
10. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり・粘性無、砂質 (周溝)
11. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、砂質 (P3)
12. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質 (D1)

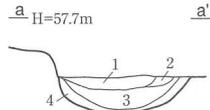
SI174A

13. 10YR7/6 (明黄褐) しまり・粘性有

SI174A カマド

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性無、砂質
2. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性やや有、黄褐色土ブロック微量
3. 10YR3/4 (暗褐) しまり無、粘性有
4. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質
5. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性無、黄褐色土ブロック少量
6. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、砂質
7. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性無、砂質

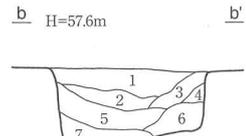
SXI94 K1



SXI94

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性無
2. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性無、炭化物微量
3. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、砂質
4. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無、マサ土少量

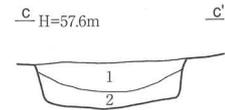
SXI94 K2



SXI94 K2

1. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性やや有、炭化物微量
2. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性無、炭化物微量
3. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
4. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、地山土少量
5. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
6. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無
7. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無

SXI94 K3

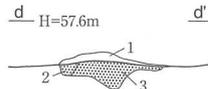


SXI94 K3

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性無、砂質
2. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性無、砂質



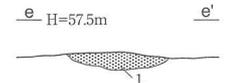
SXI94 炉A



SXI94 炉A

1. 7.5YR4/6 (褐) しまり有、粘性やや有
2. 5YR5/8 (明赤褐) } 焼土
3. 5YR6/6 (橙) }

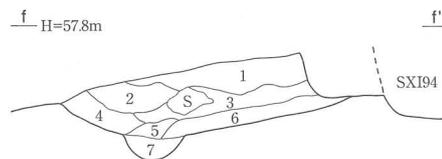
SXI94 炉B



SXI94 炉B

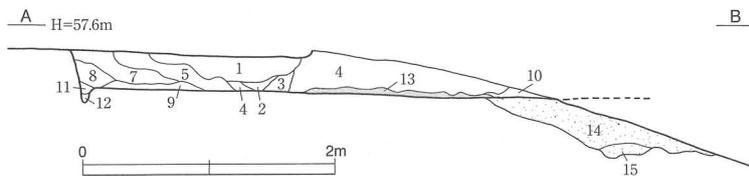
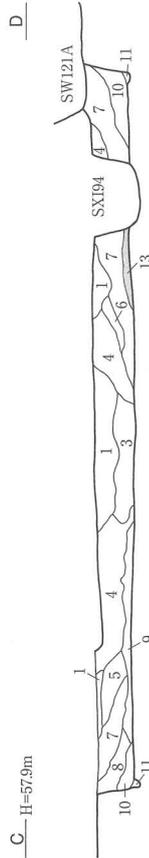
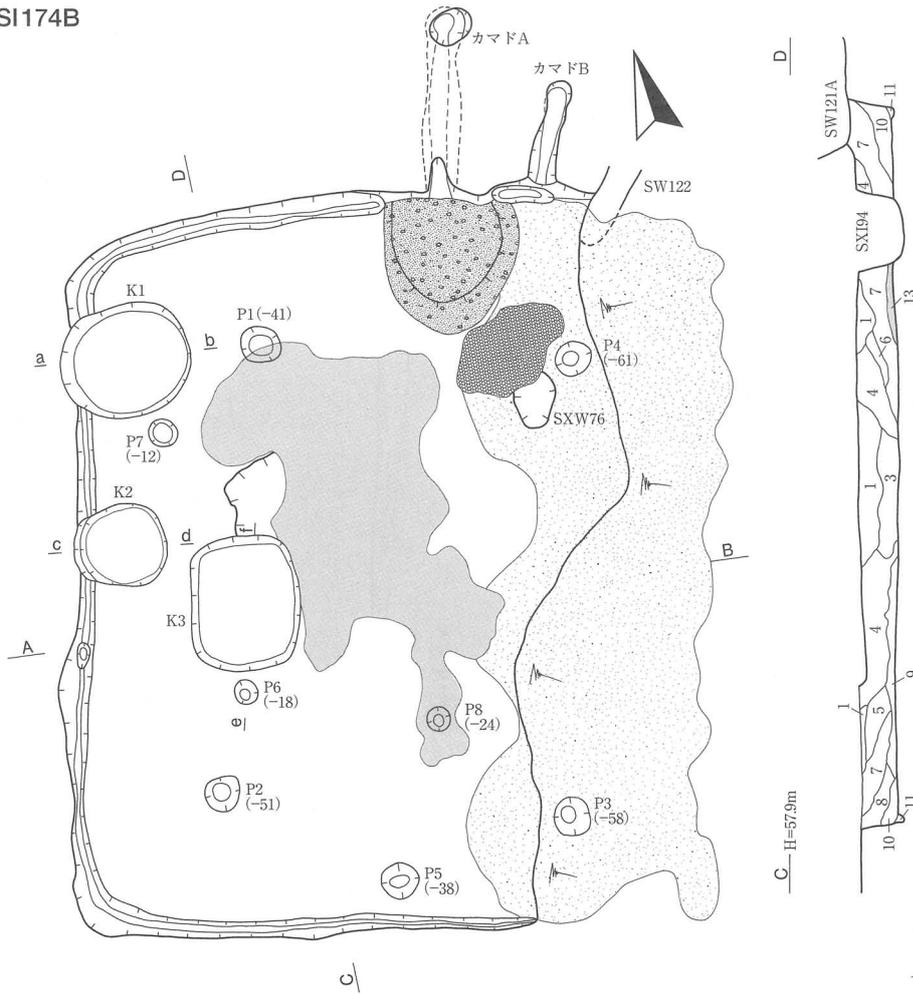
1. 5YR5/6 (明赤褐) 焼土

SI174A カマド



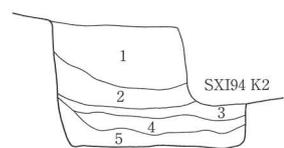
第273図 SI174A竪穴住居跡・SXI94工房跡

SI174B



SI174B K1

a H=57.6m

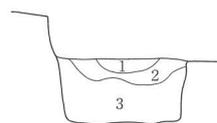


SI174B K1

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、炭化物微量
2. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無、炭化物多量
3. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性やや有
4. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有
5. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質

SI174B K2

c H=57.5m

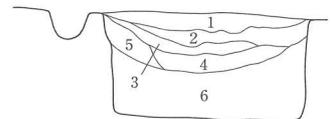


SI174B K2

1. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無
2. 10YR4/4 (褐) しまり無、粘性有
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、砂質

SI174B K3

e H=57.2m



0 1m

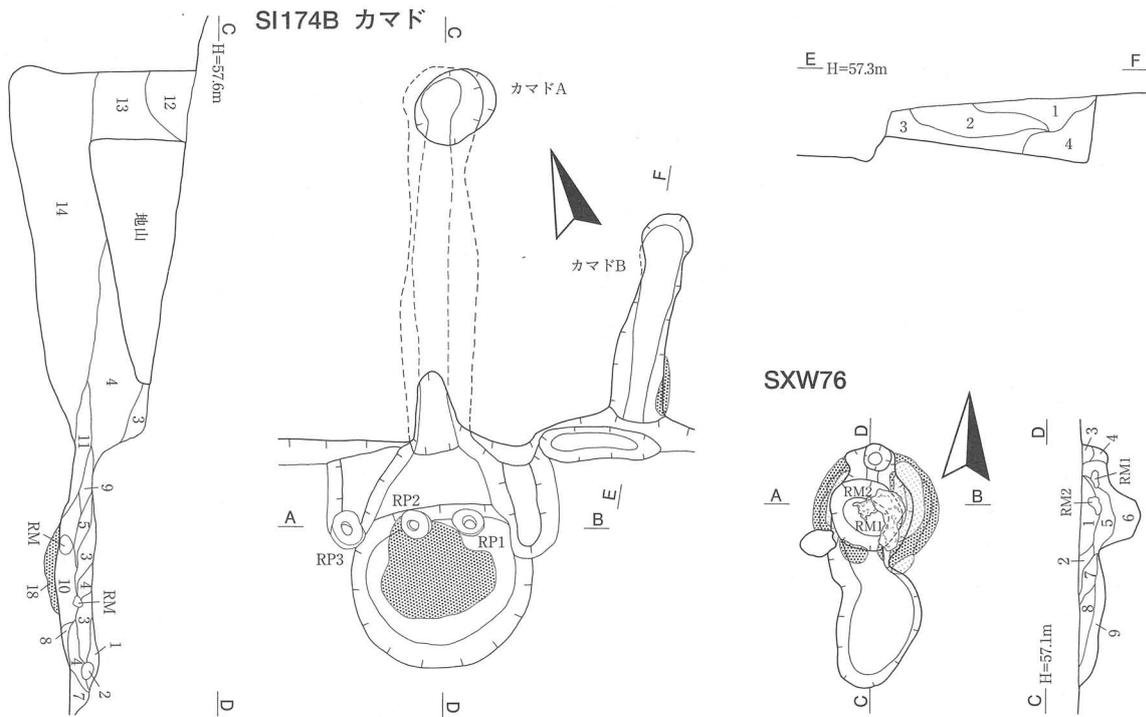
SI174B

1. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性やや有、炭化物微量
2. 10YR1.7/1 (黒) しまり・粘性無、炭化物多量
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性有、炭化物微量
4. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性やや有
5. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性やや有、炭化物微量
6. 10YR1.7/1 (黒) しまり極めて有、粘性無、炭化物多量
7. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性やや有
8. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性やや有
9. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無
10. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性無、炭化物微量
11. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、砂質、周溝
12. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり・粘性無、マサ土多量、周溝
13. 10YR1.7/1 (黒) しまり有、粘性無、炭化物多量、極小鍛冶滓中量、鍛造剥片少量
14. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性無、マサ土多量
15. 10YR7/8 (黄橙) しまり極めて有、粘性無、マサ土多量

SI174B K3

1. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性無、砂質
2. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有、砂質、炭化物微量
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質
4. 7.5YR4/4 (褐) しまり有、粘性無、炭化物微量、焼土粒少量
5. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、砂質
6. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性無、砂質、炭化物微量

第274図 SI174B竪穴住居跡・SXW75・76鉄生産関連炉跡(1)



SI174B カマドA

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭化物・焼土ブロック少量
2. 5YR4/6 (赤褐) 焼土ブロック
3. 10YR2/1 (黒) しまり有、粘性無、炭化物多量
4. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性有、炭化物微量
5. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性やや有
6. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性やや有、炭化物・焼土粒微量
7. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
8. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性有、炭化物・焼土粒微量
9. 7.5YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性無
10. 7.5YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性無、カマド内壁焼土
11. 7.5YR4/4 (褐) しまり・粘性有
12. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性やや有
13. 10YR5/6 (黄褐) しまり無、粘性有
14. 10YR3/3 (暗褐) しまり無、粘性有
15. 10YR5/8 (黄褐) しまり極めて有、粘性無、カマド構築土
16. 10YR5/8 (黄褐) しまり極めて有、粘性やや有、カマド構築土
17. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、砂質、支脚の裏ゴメ土
18. 5YR4/8 (赤褐) 燃焼部焼土

SI174B カマドB

1. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有
2. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性有
3. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性有
4. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性有

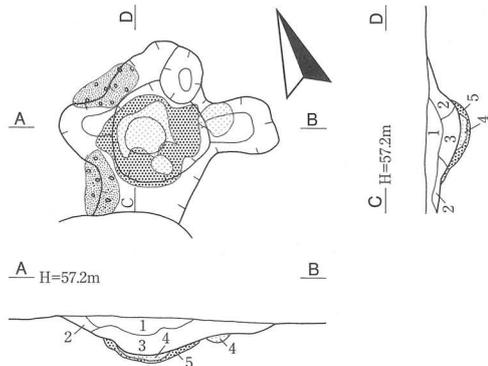
SXW75

1. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性無、砂質
2. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性やや有、炭化物微量
3. 10YR1.7/1 (黒) しまり無、粘性有、炭化物少量、鍛造剥片微量
4. 10YR1.7/1 (黒) 還元部蒸焼
5. 5YR4/6 (赤褐) 焼土

SXW76

1. 7.5YR4/4 (褐) しまり有、粘性無、焼土ブロック多量
2. 7.5YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有、焼土ブロック少量
3. 10YR4/4 (褐) しまり無、粘性有
4. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性無
5. 10YR3/1 (黒褐) しまり・粘性無、炭化物微量
6. 10YR1.7/1 (黒) しまり・粘性無、炭化物多量
7. 10YR3/1 (黒褐) しまり有、粘性無、炭化物・焼土粒微量
8. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有、焼土ブロック・小鍛冶滓少量
9. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性無、焼土粒微量、小鍛冶滓少量
10. 10YR6/1 (褐灰) しまり極めて有、粘性無、強い還元部
11. 10YR6/8 (明黄褐) しまり極めて有、粘性無、還元中性化
12. 5YR4/6 (赤褐) しまり極めて有、粘性無、焼土
13. 7.5YR5/6 (明褐) しまり極めて有、粘性無、焼土

SXW76



0 50cm

第275図 SI174B竪穴住居跡・SXW75・76鉄生産関連炉跡(2)

S X W75は、周辺の床直上の埋土中で鍛造剥片を視認したため、鍛錬鍛冶炉を想定して掘り下げを行い検出したものだが、南側がK 3土坑と重複しており、当初プランが不明瞭であった。精査の結果、断面観察から古いK 3を半分ほど埋め立ててから付属施設として利用したものと考えられた。炉跡の平面形・規模は開口部径約50cmの略円形を呈し、南東側には長さ約25cm、幅約20cm、深さ約4cm以下の炉内に向かい緩い下り勾配の張り出し溝、またこの対極側にも長さ約15cm、幅約25cmの炉底面に向かって下り勾配の張り出しがある。南側K 3土坑とは幅約35cm、長さ約10cm、深さ約5cmほどの浅い掘り込みで連結する。断面形は深さ約15cmの丸底鍋形を呈し、埋土は上位に褐色土、下位には炭化物と鍛造剥片を多く含む黒色系土で下位ほど混入量が多くなる。底面と南東張り出し溝の一部は黒く蒸焼状態で堅く締まり、壁面は火熱により弱く赤色変化していた。付属するK 3の上位部分は、掘り下げたため詳細は不明であるが、深さ約30cmの丸底鍋形を呈したと思われる。二つの張り出しは羽口の装着痕と考えられることから、2度にわたり造り替えられた可能性があり、K 3上位については鉄砧石の設置穴の可能性が考えられる。

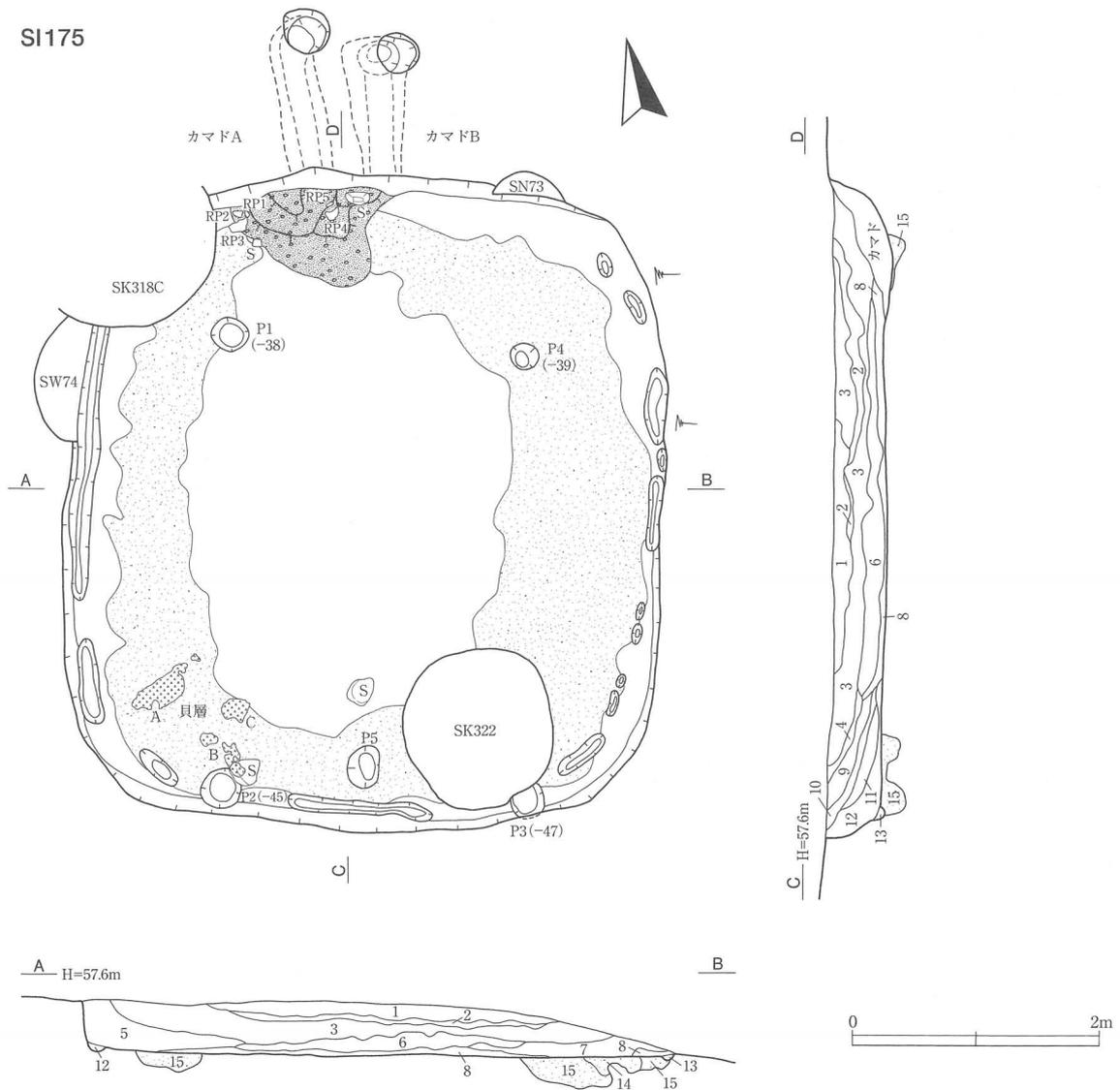
S X W76は、周辺の床直上の埋土が焼土混じりの炉壁片と小鍛冶滓を含む赤みがかった黄褐色系土の広がりを含めたため、鍛冶炉を想定して掘り下げを行い検出したものだが、検出時の状況としては北側は焼土(炉壁片)ブロックを多量に含む円形プランを縁取るように、内側から順次中性化した明黄褐色土、強く赤色変化した焼土、弱く赤色変化した焼土が南側の開く馬蹄形に認められ、南側には黒色土の楕円形プランが連結するものであった。検出時の状況及びプランは他の鍛錬鍛冶炉とは異なり、唯一赤27D区のS X W37と比較的類似していた。精査の結果、北側が炉跡で南側は前庭部と判断した。平面形・規模は、全体の長軸は約95cm、炉は径約33cmの略円形で、深さ約25cmの丸底の柱穴状を呈する。炉内は全体的に堅く締まり、壁上端は還元し、外側に向かい被熱による土色の変化が見られた。北端には長さ・幅・深さとも約10cmほどの張り出しがある。前庭部は開口部約50×30cm、底部約40×25cmの略楕円形で、底面は炉湯口から緩やかに傾斜して深さ約10cmほどで丸みがあり、炉よりも浅い掘り込みとなっていた。埋土は上位が炉壁片と焼土ブロック及び鉄滓類を主体とし、下位は炭化物を多量に含む黒色土、前庭部は鍛冶滓小片が比較的多く混じる黒色系土が堆積した。炉北端部の張り出し部分が羽口装着部と考えられ、鍛冶滓が主体であることと鉄滓の成分分析結果からも精錬鍛冶炉の可能性が高い。

遺物は、土器類は主に埋土から土師器の甕形土器片が比較的多くと坏形土器片がおよそ10点、須恵器の甕形土器片2点が出土し、形状をおよそ把握できた復元個体は、カマド出土の坏形土器2点(549・550)である。土製支脚はカマドに埋置されていた2個体が復元できず掲載は4点(19~22)となった。羽口は主に埋土から中袋一つ分の破片が出土し、口径を把握できたものはカマド芯材転用(157)と埋土出土の(158)2個体である。炉壁はS X W76及びその周辺の埋土下位から多量に、磨石が床面から1点(222)、鉄製品は埋土からほぼ完形の鉄鏃1点(189)と釘1点(190)、それと不明品3点、埋土及び床面から鍛冶滓類が約16kg、S X W76から鍛冶滓類約3kg、S X W75からは微量、中央床上黒色土から鉄塊系遺物1個と鍛造剥片が多量に出土した。

S I 175 竪穴住居跡 (第276・277図、遺物図版47・48・108・129、写真図版201・243・292・308・325)

I区赤28B区南側の尾根頂部平坦面、IX D-13mグリッドを中心に位置し、検出面はV・VI層上面である。S K 318C・322・S N 73・74と重複し、確認状況からすべてに切られる。東側は一部崩落により壁が消失しているが、平面形・規模は、南北長軸約5.5m、短軸約4.8mほどの隅丸略長方形を呈し、床面積は約22.4㎡を測る。主軸方位はほぼ北方向である。遺存する壁は概ね垂直に立ち上がり、壁高は西側約40cmほどから東側に向かい低くなる。埋土はマサ土を多く含む明黄褐色系土の人為的堆積で、南西隅中位に一時期に廃棄さ

SI175



SI175

1. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、砂質、炭化物微量
2. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性やや有
3. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無
4. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有、炭化物微量、貝層
5. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、砂質
6. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質
7. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性有、炭化物微量
8. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性やや有
9. 10YR6/8 (明黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質、マサ土多量、SK322堀込面
10. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、砂質、マサ土多量
11. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質、マサ土多量
12. 10YR5/8 (黄褐) しまり・粘性有
13. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性やや有、周溝
14. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性やや有
15. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、砂質、マサ土多量

貼床

SI175 カマドA

1. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無
2. 10YR5/8 (黄褐) しまり無、粘性有
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性無
4. 10YR6/6 (明黄褐) しまりやや有、粘性有、カマド構築土崩落
5. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性やや有、カマド構築土崩落
6. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり・粘性無
7. 10YR2/3 (黒褐) しまり無、粘性有
8. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性有
9. 7.5YR5/6 (明褐) しまり極めて有、粘性やや有、カマド構築土崩落
10. 5YR5/6 (明赤褐) 燃焼部焼土

SI175 カマドB

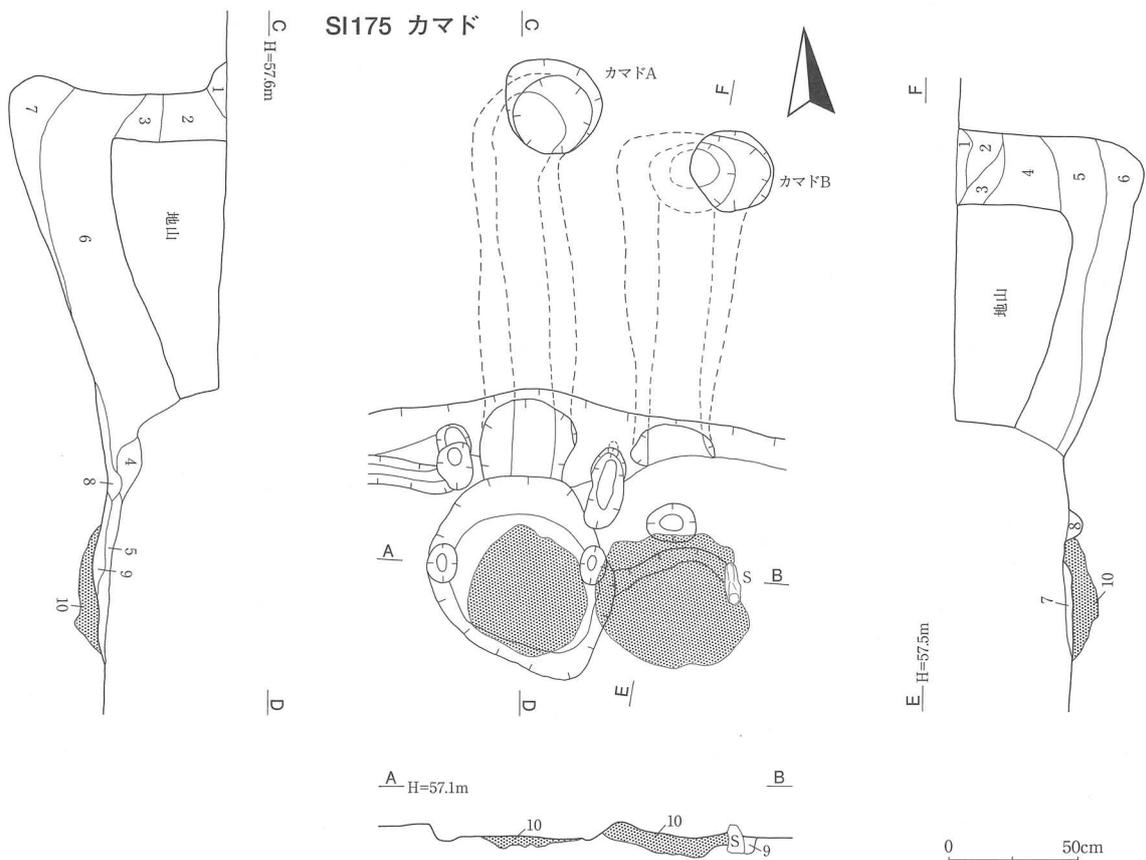
1. 10YR3/4 (暗褐) しまり極めて有、粘性有
2. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性有
3. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性有、黄褐色土少量
4. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、炭化物微量
5. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、砂質
6. 10YR2/2 (黒褐) しまり無、粘性有
7. 7.5YR5/6 (明褐) しまり極めて有、粘性有
8. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、支脚の抜き取り穴
9. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性無、袖石の裏ゴメ土
10. 5YR5/6 (明赤褐) 燃焼部焼土

第276図 SI175竪穴住居跡 (1)

れた小さな貝層が3ヶ所検出された。床面は概ね平坦で堅締、中央部を除き貼床とされていた。床面施設としては柱穴5本を検出し、配置・規模からP1～4が主柱穴と考えられる。また北壁を除く壁際に途切れながらも幅約10cm、深さ約5～10cmほどの壁溝が巡る。

カマドは造り替えと思われる2基を検出した。いずれも北壁に付設され、カマドAはほぼ中央に、カマドBは東寄りに位置する。カマドAは本体天井部は崩落し、袖部は架構・芯材として石や土器などは認められないが、抜き取りの小ピット4基が検出され、燃焼部は径約70cmほどの略円形で、深さ約5cmほどに掘り窪められ、底面は火熱により径約45cmほどの略円形で、厚さ3cmほどが赤色変化していた。煙道は奥行き約160cm、径約35cmの削り貫き式で、外側に向かい下り勾配である。煙出しピットは径約35cmの略円形で深さ約85cmを測る。カマドBは造り替えにより本体部は消失していたが、袖部芯材の石1個と、抜き取りの小ピット1基が検出された。燃焼部は幾分削平され詳細は不明だが、残存状況から浅く掘り窪められていたと思われ、火熱により径約55cmほどの略円形で、厚さ7cmほどが赤色変化していた。焼土の煙道側端には支脚の抜き取り穴と思われるピットを検出した。煙道は奥行き約130cm、径約40cmの削り貫き式で、外側に向かい下り勾配である。煙出しピットは径約35cmの略円形で深さ約70cmを測る。

遺物は、主に埋土から出土し、土師器の甕形土器片が比較的多くと坏形土器片約10点、須恵器の甕形土器片2点出土したが、形状をおよそ把握できた復元個体はない。また羽口片数点、砥石1点(223)、鉄製品はほぼ完形の刀子2点(191・192)と鉄鐸1点、それと不明品1点、鉄塊系遺物1個と鍛冶滓が微量出土した。貝類は大半がイガイでわずかにアワビが目付いたが、詳細については遺物編を参照されたい。



第277図 SI175竪穴住居跡(2)

S I 176 竪穴住居跡 (第278図、遺物図版48、写真図版202・243・244)

I 区赤28B区南側の尾根頂部平坦面南端、IX D-13n グリッドを中心に位置し、検出面はVI層上面である。埋土上面で炭化物の広がりとしてSW123を検出した。本遺構が古い。平面形・規模は、一辺約3.5mほどの隅丸略方形を呈し、床面積は約10㎡を測る。主軸方位はN-10°-Wである。壁は鋭角的に外傾して立ち上がり、壁高は約55cmを測る。埋土はおよそ10層に細分される流入と崩落による黒色系土と褐色系土が交互のレンズ状の自然堆積である。床面は概ね平坦で堅締、全体的に貼床とされていた。床面施設としては中央西よりに炉A・Bの2基と東西両壁際に幅・深さとも5~10cm前後の途切れる壁溝と小ピット約15基を検出した。炉A・Bは当初不整形の落ち込みを検出したもので、炉Aプラン縁辺の一部でわずかに黒く蒸焼状態を確認できたことから、鉄生産関連炉跡の可能性が考えられたため埋土を収集しながら精査を行った。精査の結果、南側炉Aと北側炉Bの連結したものであることが判明した。炉Aの平面形・規模は、開口部ではおよそ60×40cmの隅丸三角形を呈し、北東側はさらに約35×25cmの略楕円形で深さ約8cmほどに掘り込まれ、南西側は深さ約3cmほどの狭小なテラスとなっていた。断面形は浅い皿形を呈する。埋土は基本的には炭化物を微量含む黒色土の単層である。底面は全体的に堅く締まり、楕円形プラン部分では斑点状に火熱により弱く赤色変化し、南角は一部黒く蒸焼状態となっていた。炉Bの平面形・規模は径約25cmの略円形で、断面形は深さ約3cmの丸底皿形を呈し、東側壁の一部が火熱により弱く赤色変化していた。炉Aの埋土からは極めて微量ながら鍛造剥片が採取できたことから鍛練鍛冶炉の可能性が高く、状況から南側の角が羽口の装着位置と推測され、炉Bは鉄砧石の設置痕跡とも考えられる。

カマドは北壁の中央に付設され、遺存状態はかなり良好で、袖部には芯材として人頭大の板状の石を用い、天井部の架構には長さ約60cmほどの直角礫1個を組み、黄褐色粘土で構築されていた。燃焼部はほぼ平坦で、内部底面は径約45cmの略円形で、火熱により厚さ約3cmほどが赤色変化していた。煙道は奥行き約150cm、径約40cmほどの削り貫き式で、外側に向かい緩い下り勾配である。煙出しピットは径約35cmの略円形で煙道よりも深く掘り込まれ、深さ70cmを測る。

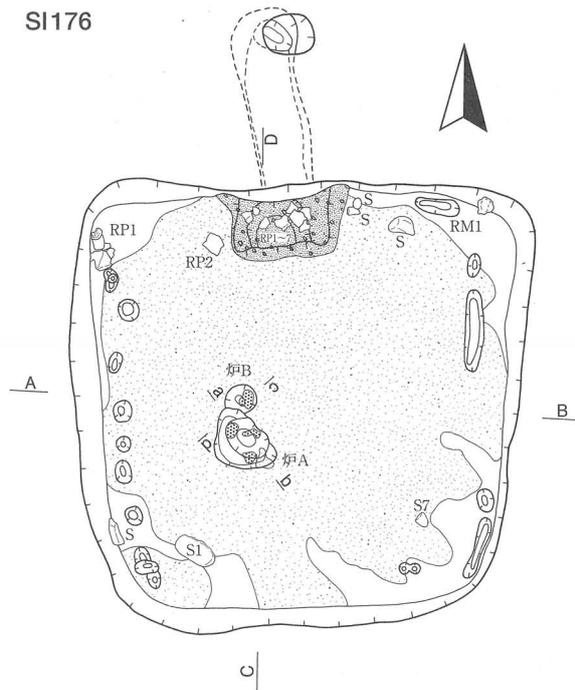
遺物は、土器類は主にカマド埋土と南東床面から土師器の甕形土器5個体分と坏形土器1個体分、須恵器の甕形土器片1点が出土し、形状をおよそ把握できた復元個体は、カマドと南東床面出土の甕形土器4点(558~561)と坏形土器1点(562)である。石製品は南西床面から要石(鉄砧石か?)1点(224)とカマド及び床面から磨石6点、鉄製品は埋土から不明品1点、埋土から鉄塊系遺物1個と鍛冶滓が極めて微量、炉A埋土から鍛造剥片がわずかに出土した。

(小山内)

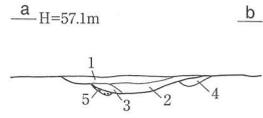
S I 185 竪穴住居跡 (第279図、写真図版203)

赤28A区のIX C-16k・1 グリッドに位置し、VI層上面で検出している。尾根北端の東側急斜面に立地し、谷側(東側)は床面の途中から崩落している。形状・規模の詳細は不明であるが、残存部で推定すると平面形はS-60°-Wを主軸方位とする隅丸方形を呈していたと思われる。壁長は西側が2.0m、南及び北側の残りが1.3mあり、また貼床範囲から床面積は約3.0㎡あったと推察する。南及び西側の壁は外傾気味に、北側はややなだらかに立ち上がっており、壁高は西側(山側)で70cm・南及び北側の中央で40cm前後を測る。埋土は大半がにぶい黄褐色土の一括廃棄による人為的堆積で、床面上に暗褐色土の層が見られる。この地区の竪穴住居跡の中では最も規模が小さいが、同程度のものを赤28B区からも検出している。床面は西の壁側40~60cm程度を残して谷側に向かって貼床されており、柱穴を1基(P1)伴っている。柱穴P1は規模・配置からみて支柱穴と思われる。床面施設としては北西隅から土坑を検出している。土坑K1は深さが約10cm・径が50cm前後の不整な楕円形を呈し、位置及び深さからみて支柱穴の上場が崩れて広がったとも

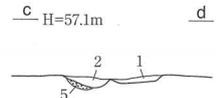
SI176



SI176 炉A



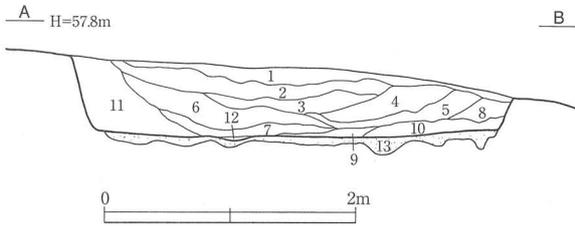
SI176 炉B



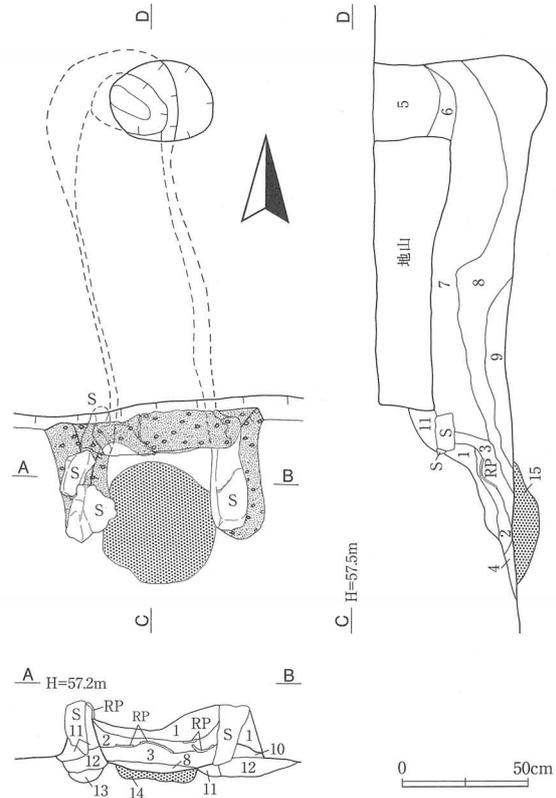
SI176 炉A・B

1. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性無、砂質
2. 10YR1.7/1 (黒) しまり有、粘性やや有、炭化物微量
3. 10YR6/8 (明黄褐) しまり極めて有、粘性やや有、黄褐色土多量
4. 2.5Y2/1 (黒) 還元部蒸焼
5. 5YR4/6 (赤) 焼土

0 50cm



SI176 カマド



SI176

1. 10YR3/2 (黒褐) しまり有、粘性無、砂質
2. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無、砂質、マサ土少量
3. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性無、砂質、炭化物・黄褐色土粒微量
4. 10YR3/4 (暗褐) しまり極めて有、粘性無、マサ土霜降状
5. 10YR2/3 (黒褐) しまり極めて有、粘性無、砂質
6. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質、マサ土少量
7. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、黄褐色土ブロック少量
8. 10YR6/8 (明黄褐) しまりやや有、粘性有
9. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性無、砂質
10. 10YR4/6 (褐) しまり極めて有、粘性無、砂質
11. 2.5YR4/6 (オリーブ褐) しまり極めて有、粘性無、砂質、マサ土多量
12. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有
13. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、マサ土多量、貼床

SI176 カマド

1. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり・粘性無、砂質
2. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性有、カマド構築土崩落
3. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有、カマド構築土崩落
4. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性無、炭化物微量
5. 10YR4/6 (褐) しまり無、粘性やや有
6. 10YR5/6 (黄褐) しまり・粘性無、やや砂質
7. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり・粘性無、砂質
8. 10YR3/3 (暗褐) しまり無、粘性有
9. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり・粘性無、砂質
10. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性無
11. 10YR6/8 (明黄褐) しまり極めて有、粘性無
12. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、砂質
13. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、砂質
14. 5YR4/6 (赤褐) 燃焼部焼土

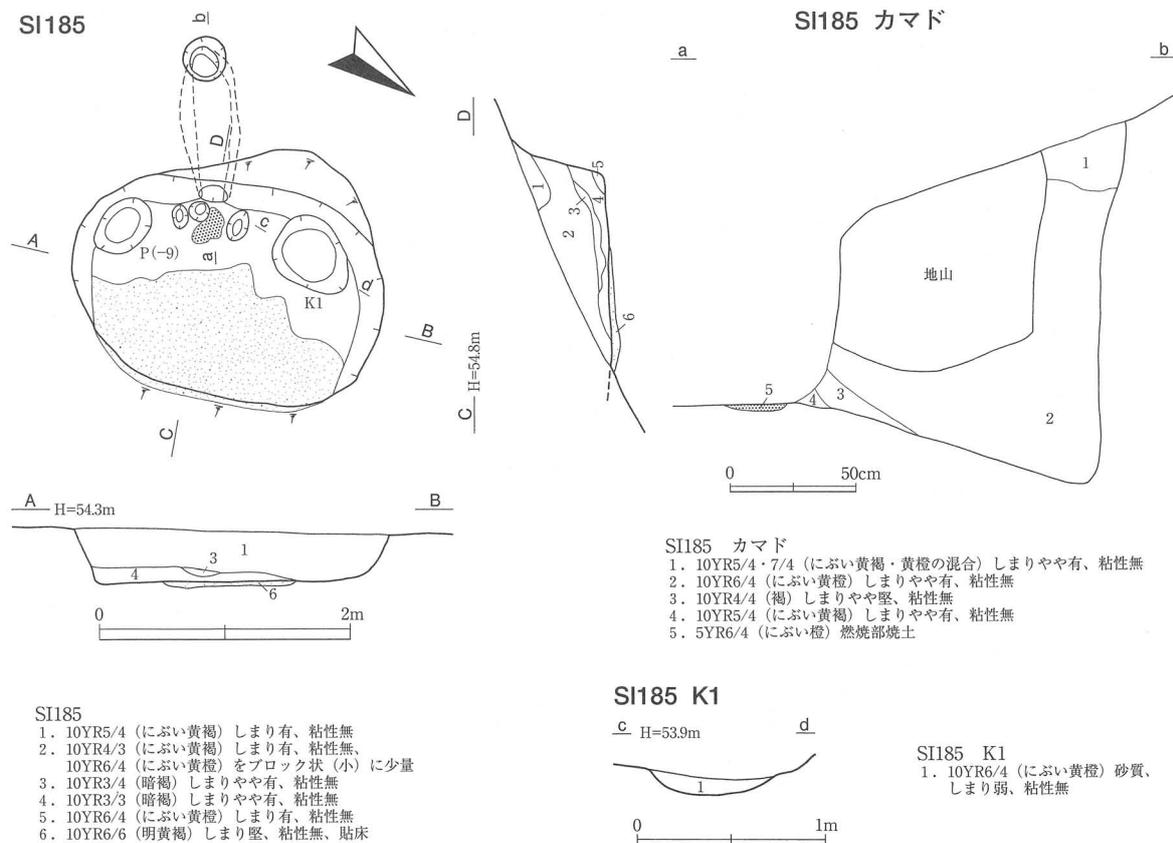
カマド
構築土

第278図 SI176竪穴住居跡

考えられる。

カマドは西側壁面のやや南よりに位置している。構築粘土は見られないが、袖部に芯材の抜き取り穴を検出している。燃焼部焼土は18×31cmの規模で不整な楕円形を呈し、中心の厚さが3cmある。煙道は削り貫き式で、奥行きが1.3mを測り下り勾配になっている。また径が25～45cmあり、煙道部中央に膨らみを伴っている。煙り出しピットは深さが1.4m、径が35cmあり底部は煙道入り口より30cm程度深い。

遺物は埋土から土師器の甕の破片が数点と、鉄塊系遺物が1個出土している。



第279図 SI185竪穴住居跡

S K I 48竪穴状遺構・S X I 92工房跡 (第280図、遺物図版44・105、写真図版203・240・290)

赤28A区のIX C-16・17s・tグリッドに位置し、尾根頂部緩斜面のVI層上面で検出している。検出の時点では竪穴住居跡1棟と炭窯2基の重複と捉え、ベルトを南北方向に1本、東西方向に炭窯2基と竪穴1棟分の3本を設定して精査を開始した。竪穴住居跡の精査の段階で南側と北側の壁面方向にずれがあり、床面にも高低差がみられたことから2棟に分かれることが判明した。また南側の遺構に床面施設はなく北側の遺構は地床炉を伴っており、竪穴状遺構(S K I 48)及び工房跡(S X I 92)と認定している。新旧関係はS W 111・112炭窯がS K I 48及びS X I 92の埋土を切っており2棟より新しく、S X I 92の埋土にS K I 48の切り合いがないことからS K I 48竪穴状遺構が最も古いと判断する。

SK I 48は床面の大半がSW112及びSXI92によって切られており、規模・形状の詳細は不明である。残存部における壁長は南側が3.7m、東側の残りが0.3m・西側が1.2mある。南側の壁はやや外傾気味に立ち上がり、高さは中央付近で約30cmある。なおSXI92の北西側で検出した柱穴P4・P5は、配置が床面で検出したP1、P2と相対しており、SW112の東側底部で検出した柱穴P3は南側壁面に対してP1と同じ並びになることからいずれも本遺構に伴う主柱穴の可能性が高く、北東隅に想定する主柱穴は、周辺のレベルが本遺構の床面より30cm程度低くなっており削られたと考えられる。P1～P5の配置から推定すると本来の平面形は隅丸長方形を呈しており、東西両側の壁長が約5.3mで、床面積は20㎡程度あったと思われる。埋土は上位が暗褐色土、下位がにぶい黄褐色土でレンズ状の自然堆積である。床面には柱穴のほかに東と西の壁近くに貼床がなされている。東側の貼床はSW112の底部まで、西側の貼床はSXI92の地床炉A下まで広がっている。また斜面上から走行が南側の壁面と平行で本遺構に伴うと考える溝跡(SK I 48-D1)を検出している。幅は20～40cm・深さが10cm前後で、全長が2.8mを測り、南壁中央から東に向かって延びている。遺物は出土していない。

SXI92の平面形は隅丸長方形を呈しており、壁長は南及び北側が3.7m・東及び西側が2.0mで、床面積は7.6㎡を測る。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は南及び北側中央で15cm前後、東側中央で17cm、西側中央で25cmある。埋土は上位が暗褐色土主体のSW112からの人為的廃棄土で片状の炭化物を含み、下位がにぶい黄褐色土の自然堆積と思われる。床面には柱穴を3基(P1～P3)伴っている。規模・配列からP1、P3は主柱穴、P2は副柱穴と捉える。そのほか床面施設として地床炉を4基検出している。地床炉Aは約45×65cm、地床炉BとDは約25×35cmの規模でいずれも不整な楕円形を呈し、地床炉Cは25×70cmの規模で瓢箪状を呈している。燃焼部中央における厚さは地床炉A・C・Dが約5cm、地床炉Bが約2cmを測る。なお柱穴P2・P3は地床炉Cに隣接しており、地床炉Cの使用時に付設してあったかは疑問である。

遺物は床面から土師器の甕の破片が3点(506・507・508)、完形品が1点(505)出土している。そのほか石が5点出土しているが、S5(砥石:201)以外には敲痕等の人為的痕跡は見られない。工房に関連する遺物が少なく、性格の詳細は不明である。

SW111炭窯 (第281図)

赤28A区のIXC-16tグリッドに位置し、尾根頂部緩斜面のVI層上面で検出している。SK I 48竪穴状遺構と重複しており、SK I 48より新しい。平面形は不整な隅丸長方形を呈し、長軸3.2m・短軸80cmを測る。また長軸は概ねE-Wを向いて尾根筋と直交し、等高線上にある。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は7～15cmを測る。埋土は上位に黄褐色土、下位に黄橙色土が堆積し、全体に炭化物を粒状に含んでいる。炭化物(分析結果:クリの木)は西側上位に50×70cmの範囲で残っているが、底面に焼土痕は見られない。

遺物は土師器の坏の破片が1点と須恵器の甕の破片が3点出土している。

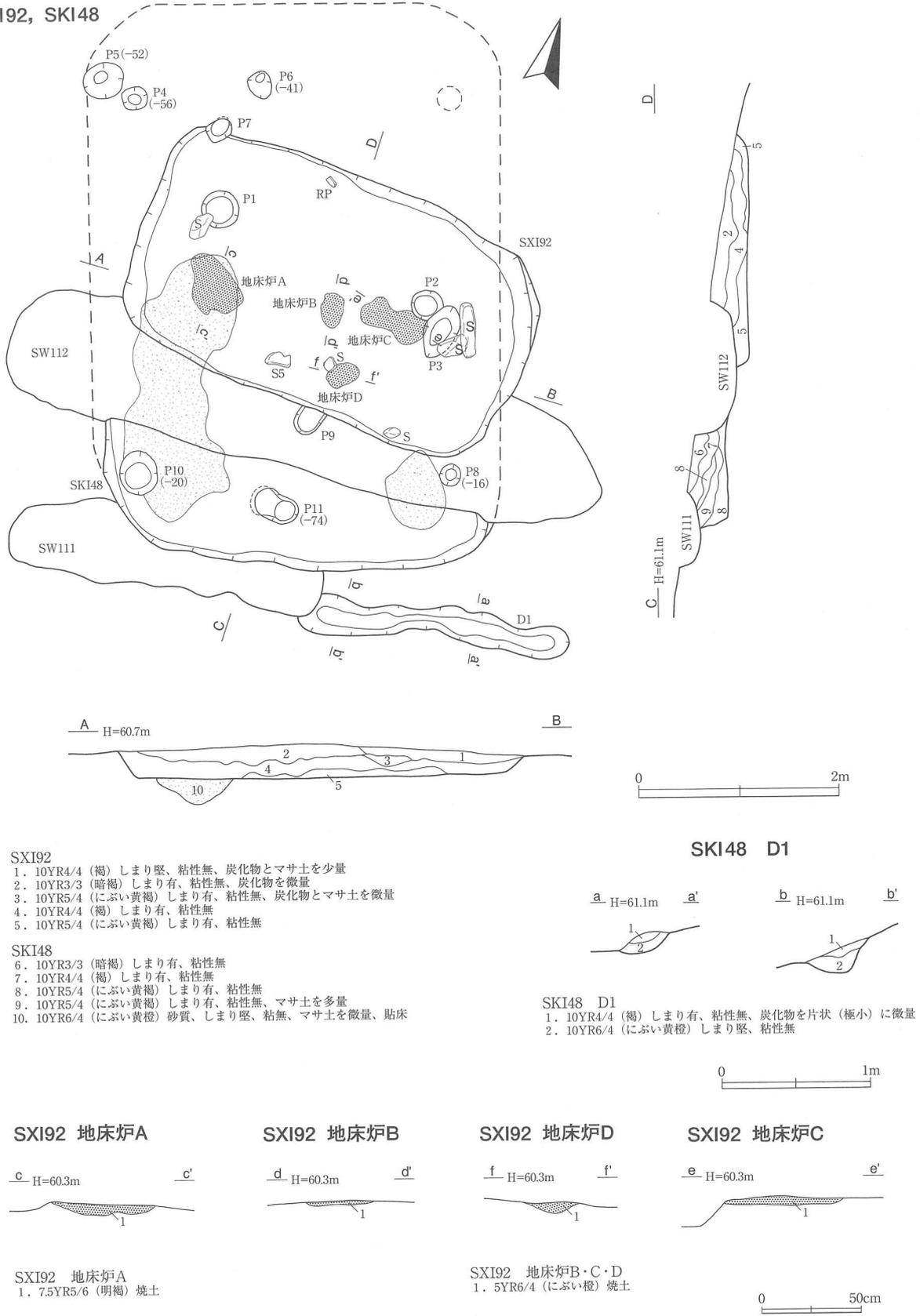
SW112炭窯 (第281図、写真図版204)

赤28A区のIXC-16・17s・tグリッドに位置し、尾根頂部緩斜面のVI層上面で検出している。SK I 48竪穴状遺構・SXI92工房跡と重複し、3つの遺構の中では最も新しい。平面形は不整な長楕円形を呈し、長軸6.3m・短軸1.4mを測る。また長軸はE-Wを向いて、SW111と平行である。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、壁高は10～16cmある。埋土は炭を粉状に含む暗褐色土で、炭化物層(分析結果:クリの木)が底部全体に広がっており、厚さ5mm程度の焼土が底面の所々に見られる。出土遺物はない。(亀)

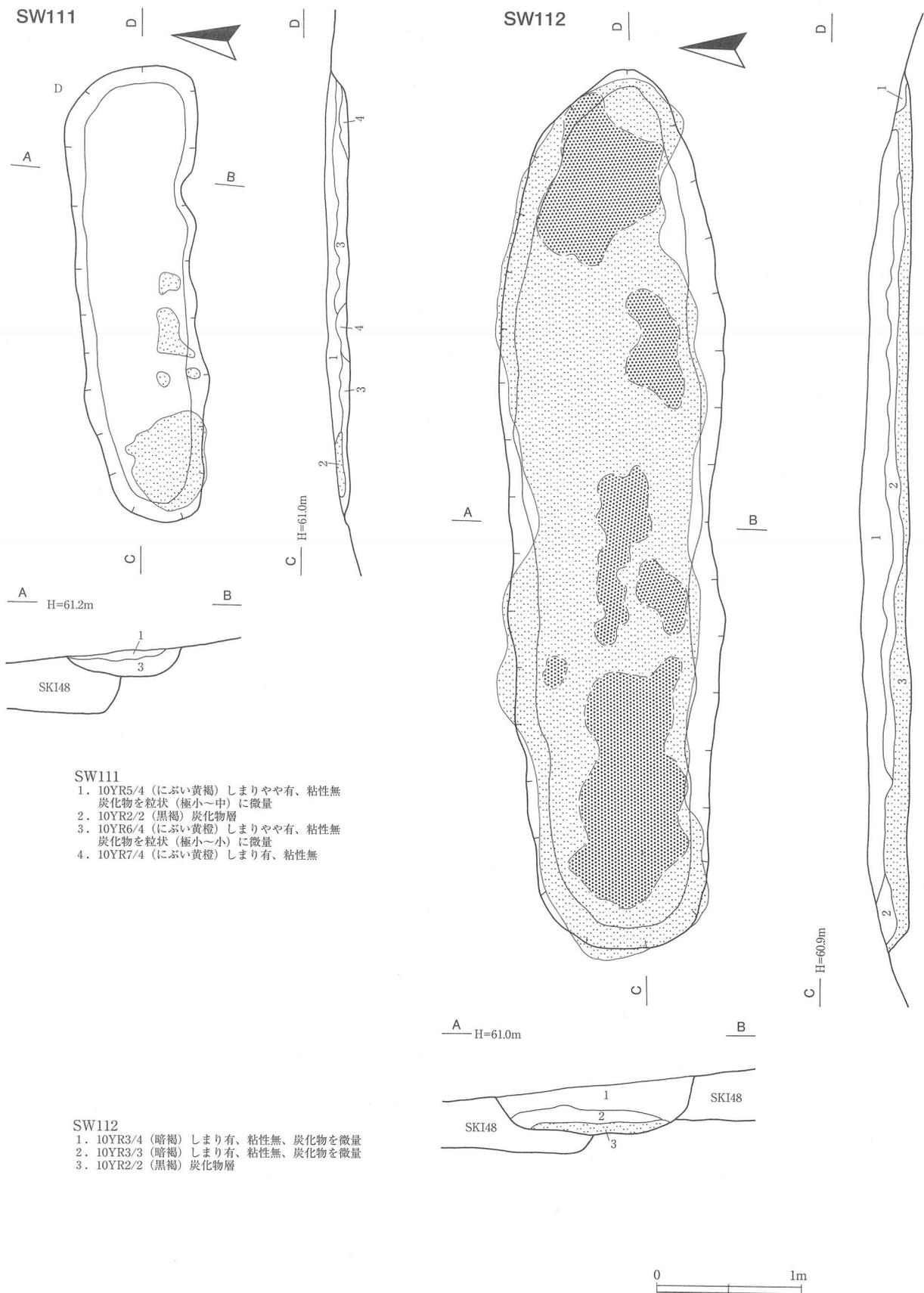
SW114炭窯 (第282図、写真図版204)

I区赤28B区北側の尾根頂部東側谷頭、IXD-17d・eグリッドに位置し、検出面はVI層上面である。東

SXI92, SKI48



第280図 SXI92工房跡・SKI48竪穴状遺構



第281図 SW111・112炭窯

側は崩落により消失して不明だが、遺存部から平面形・規模は長軸方向が等高線と平行する北東－南西にある長軸約300cm、短軸約70cmの略長方形を呈すると推定され、壁は外傾して立ち上がり、壁高は西壁の最大約15cmから東側に向かい低くなる。埋土は炭化物混じりの黒色土の単層で、北側底面には残材の炭化物層が堆積する。底面はおおむね平坦である。焼土は認められなかったが、状況から炭窯と判断した。

遺物は出土しなかったが、炭化物は分析によりクリと判明した。

SW115炭窯（第282図、写真図版204）

I区赤28B区北側の尾根頂部平坦面、IXD-16fグリッド杭を中心に位置し、SI166埋土上面で検出した。本遺構が新しい。平面形・規模は長軸方向が等高線と直行する東－西にある長軸約450cm、短軸約150cmの略長楕円形を呈する。壁は外傾して立ち上がり、壁高は約40cmを測る。埋土は炭化物混じりの黒色系土の自然堆積で、底面には残材の炭化物層が堆積する。底面はおおむね平坦で、部分的に火熱により弱く赤色変化していた。状況から炭窯と判断した。

遺物は土師器の甕形土器片と鍛冶滓が極めて微量出土したのみで、炭化物は分析によりクリと判明した。

SW117炭窯（第283図、写真図版197）

I区赤28B区北側の尾根頂部東側谷頭、IXD-13・14iグリッドに位置し、検出面はVI層上面である。底面でSK340とSI171煙出しを検出した。本遺構が新しい。北東側が一部崩落により消失しているが、遺存部から平面形・規模は長軸方向が等高線と平行する北東－南西にある長軸約750cm、短軸約150cmの略長方形を呈すると推定され、壁は外傾して立ち上がり、壁高は西壁の最大約40cmから東側に向かい低くなる。埋土は基本的には炭化物混じりの黒色系土の自然堆積で、底面には残材の炭化物層が全体的に堆積する。底面はやや凹凸があり、部分的に火熱により弱く赤色変化していた。状況から炭窯と判断した。

遺物は土師器の甕形土器片と羽口片各1点が出土したのみで、炭化物は分析によりクリとナラが存在した。

SW118炭窯（第283図、遺物図版48、写真図版197・244）

I区赤28B区北側の東側斜面上位、IXD-14i・jグリッドに位置し、検出面はVI層上面である。SI171と重複し、本遺構が切る。東側が崩落により消失しているが、遺存部から平面形・規模は長軸方向が等高線と平行する北東－南西にある長軸約370cm、短軸約100cmの略楕円形を呈すると推定され、壁は外傾して立ち上がり、壁高は西壁の最大約30cmから東側に向かい低くなる。埋土は基本的には炭化物混じりの黒色系土の自然堆積で、底面には残材の炭化物層が堆積する。底面は概ね平坦で、部分的ではあるが広い範囲で火熱により弱く赤色変化していた。状況から炭窯と判断した。

遺物は土師器の甕形土器片が数点と坏形土器1点(563)が出土し、炭化物は分析によりナラと判明した。

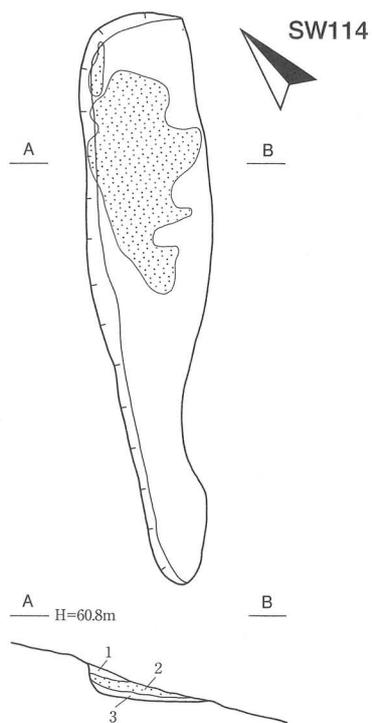
SW119炭窯（第282図、写真図版204）

I区赤28B区北側の東側斜面上位、IXD-14jグリッドに位置し、検出面はVI層上面である。SK333と重複し、本遺構が切る。東側が崩落により消失しているが、遺存部から平面形・規模は長軸方向が等高線と平行する北東－南西にある長軸約260cm、短軸約100cmの略楕円形を呈すると推定され、壁は鋭角的に外傾して立ち上がり、壁高は西壁の最大約25cmから東側に向かい低くなる。埋土は基本的には炭化物混じりの黒色系土の自然堆積で、底面には残材の炭化物が部分的に堆積する。底面は概ね平坦で、部分的に火熱により弱く赤色変化していた。状況から炭窯と判断した。

遺物は土師器の甕形土器片が数点出土し、炭化物は分析によりナラと判明した。

SW120炭窯（第284図、写真図版205）

I区赤28B区北側の東側斜面中腹、IXD-15jグリッドに位置し、検出面はVI層上面である。東側が崩落



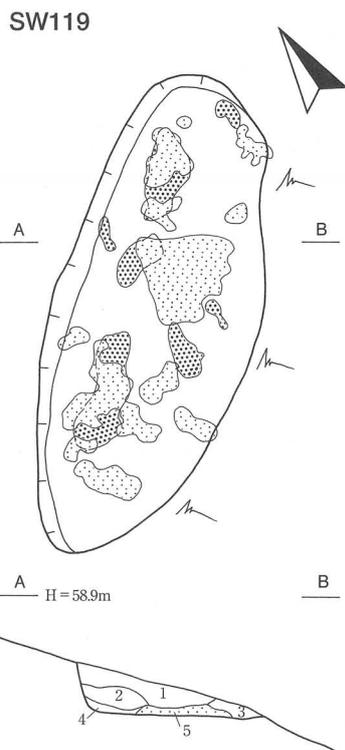
SW114

1. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性有、炭化物微量
2. 10YR2/1 (黒) しまり・粘性無、炭化物多量
3. 10YR5/3 (におい黄褐) しまりやや有、粘性無砂質、炭化物微量



SW115

1. 10YR3/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有
2. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性有、炭化物微量
3. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性無、マサ土粒少量、炭化物微量
4. 10YR2/1 (黒) しまり無、粘性やや有、炭化物少量
5. 7.5YR4/3 (褐) しまり極めて有、粘性無、焼土



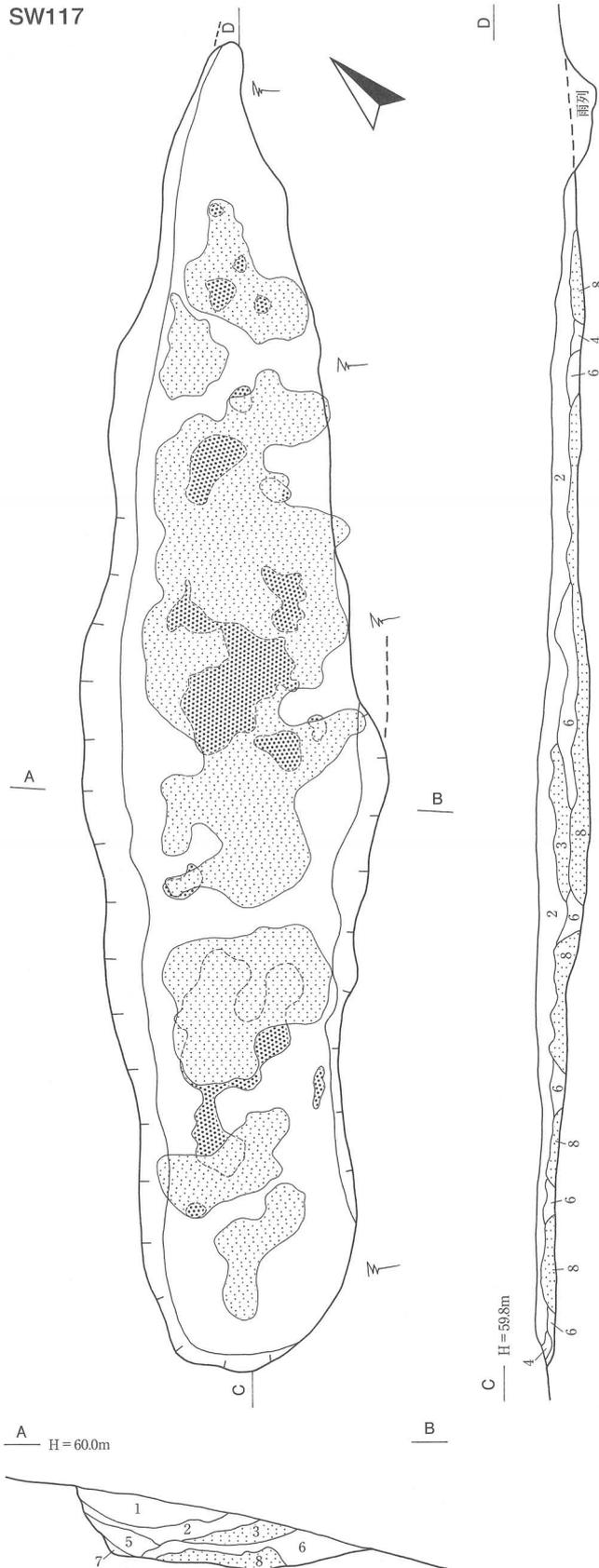
SW119

1. 10YR4/3 (におい黄褐) しまり無、粘性やや有
2. 10YR5/4 (におい黄褐) しまり・粘性無
3. 10YR3/2 (黒褐) しまり無、粘性やや有、炭化物微量
4. 7.5YR4/3 (褐) しまり・粘性やや有
5. 10YR1.7/1 (黒) 炭化物層

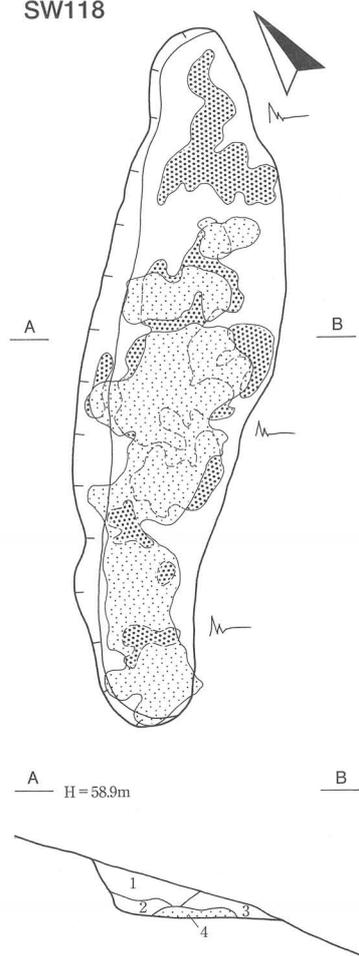


第282図 SW114・115・119炭窯

SW117



SW118



SW118

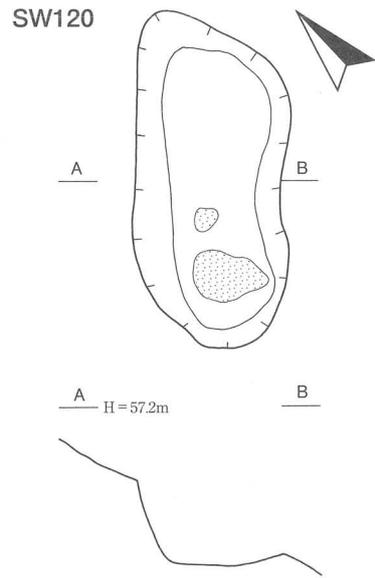
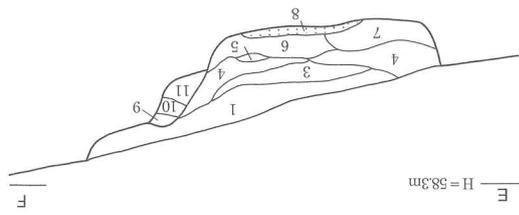
1. 10YR3/2 (黒褐)
しまり無、粘性やや有、炭化物少量
2. 10YR2/2 (黒褐)
しまり無、粘性有、炭化物少量
3. 10YR2/1 (黒)
しまり無、粘性やや有、炭化物中量
4. 10YR1.7/1 (黒) 炭化物層

SW117

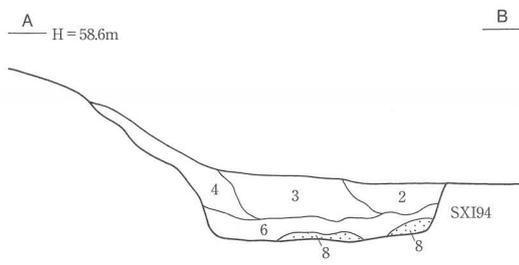
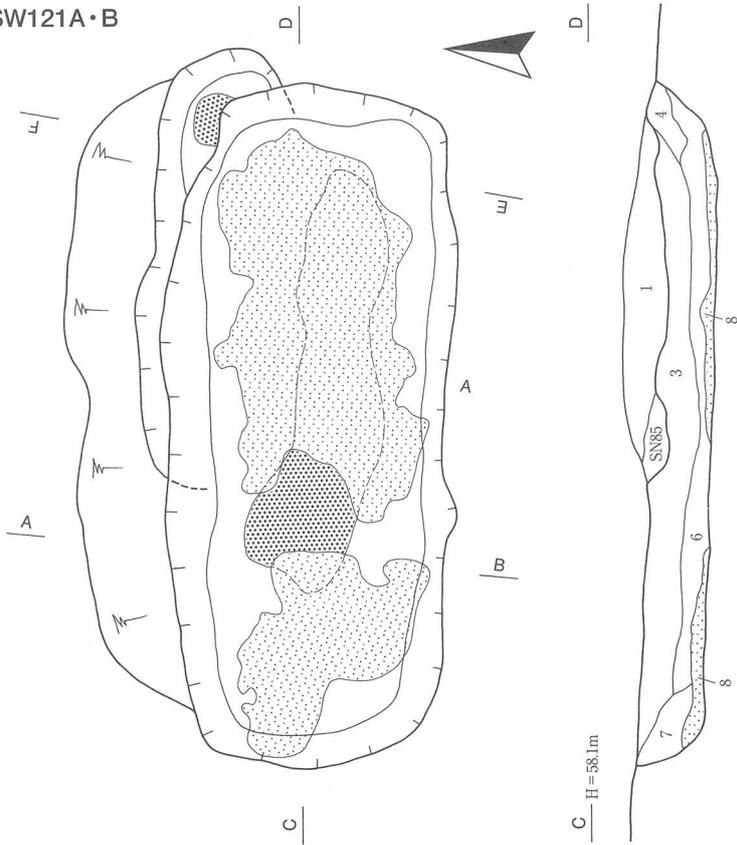
1. 10YR4/3 (にぶい黄褐)
しまり・粘性やや有
2. 10YR3/3 (暗褐)
しまり・粘性有、炭化物微量
3. 10YR1.7/1 (黒)
しまり有、粘性無、炭化物層
4. 10YR5/3 (にぶい黄褐)
しまり有、粘性無、砂質
5. 10YR5/4 (にぶい黄褐)
しまり・粘性無、砂質
6. 10YR3/2 (黒褐)
しまり有、粘性やや有、炭化物少量
7. 10YR6/4 (にぶい黄橙)
しまり・粘性無、砂質
8. 10YR1.7/1 (黒) 炭化物層



第283図 SW117・118炭窯



SW121A・B



- SW121A
1. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性やや有、炭化物微量
 2. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有、炭化物微量
 3. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、やや砂質
 4. 10YR4/2 (灰黄褐) しまり有、粘性無、砂質、炭化物微量
 5. 2.5Y5/3 (黄褐) マサ土ブロック
 6. 10YR2/2 (黒褐) しまり有、粘性やや有、炭化物少量
 7. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無、炭化物微量
 8. 10YR2/1 (黒) 炭化物層
- SW121B
9. 10YR3/3 (暗褐) しまり極めて有、粘性無、炭化物微量
 10. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無
 11. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭化物微量



第284図 SW120・121A・B炭窠

により消失しているが、遺存部から平面形・規模は長軸方向が等高線と平行する北東－南西にある長軸約170cm、短軸約75cmの略楕円形を呈すると推定され、壁は鋭角的に外傾して立ち上がり、壁高は西壁の最大約45cmから東側に向かい低くなる。埋土は炭化物が微量混じる黒色系土の自然堆積で、底面には一部残材の炭化物が検出された。底面は概ね平坦だが、焼土は認められなかった。立地と状況から炭窯と判断した。

遺物は出土しなかったが、炭化物は分析によりナラと判明した。

SW121A・B炭窯（第284図、写真図版205）

I区赤28B区北側南端の斜面、IXD-13kグリッドに位置し、検出面はVI層上面である。SXI94の北側で炭化物の多い部分として確認していたもので、状況からみて操業時にSXI94の窪みを利用したものと思われる。精査過程でSN85を検出し、また掘り上がりの状態から2度の造り替えと判断した。新旧関係は(新)SN85→SW121A→SW121B→SXI94(古)である。Aの平面形・規模は長軸方向が等高線と直行する東－西にある長軸約360cm、短軸約140cmの略長方形を呈し、壁は外傾して立ち上がり、壁高は北壁の最大約40cmから南側の約20cmと低くなる。埋土は上位に暗褐色土、中位にSN85を検出した人為的な褐色土、下位は黒色系土の自然堆積で、底面には残材の炭化物層が堆積する。底面は概ね平坦で、中央は細長く火熱により弱く赤色変化していた。状況から炭窯と判断した。Bは大半がAに破壊されているため全容は不明だが、残存部から長軸方向が等高線と直行する東－西にある長軸約250cm、短軸約75cmの略長方形を呈すると推定され、壁は外傾して立ち上がる。遺存する北壁の壁高は約25cmを測り、底面は概ね平坦で、火熱により弱く赤色変化した焼土がわずかに認められた。状況から炭窯と判断した。

遺物は土師器の甕形土器片が数点出土し、炭化物は分析によりナラと判明した。

SW122炭窯（第285図、写真図版205）

I区赤28B区南側の尾根頂部東側谷頭、IXD-14kグリッドに位置し、検出面はVI層上面である。SI174Bと重複し、本遺構が切る。東側が崩落により、南端はSI174Bの精査時に掘削して消失しているが、遺存部から平面形・規模は長軸方向が等高線と平行する北東－南西にある長軸約300cm、短軸約50cmの略楕円形を呈すると推定され、壁は外傾して立ち上がり、壁高は西壁の最大約10cmから東側に向かい低くなる。埋土は炭化物が混じる黒色系土の自然堆積で、底面には残材の炭化物層が堆積する。底面は概ね平坦で、一部火熱により弱く赤色変化していた。状況から炭窯と判断した。

遺物は出土しなかったが、炭化物は分析によりナラと判明した。

SW123炭窯（第285図、写真図版205）

I区赤28B区南側の尾根頂部、IXD-13nグリッドに位置し、SI176埋土上面で検出した。本遺構が新しい。平面形・規模は長軸方向が等高線と直行する東－西にある長軸約200cm、短軸約65cmの略楕円形を呈し、壁は外傾して立ち上がり、壁高は約5cmを測る。埋土は炭化物が混じる黒系土の単層である。底面には残材の炭化物がブロック状に堆積する。底面は概ね平坦で、火熱により弱く赤色変化した焼土が点在した。状況から炭窯と判断した。遺物は出土しなかったが、炭化物は分析によりナラと判明した。

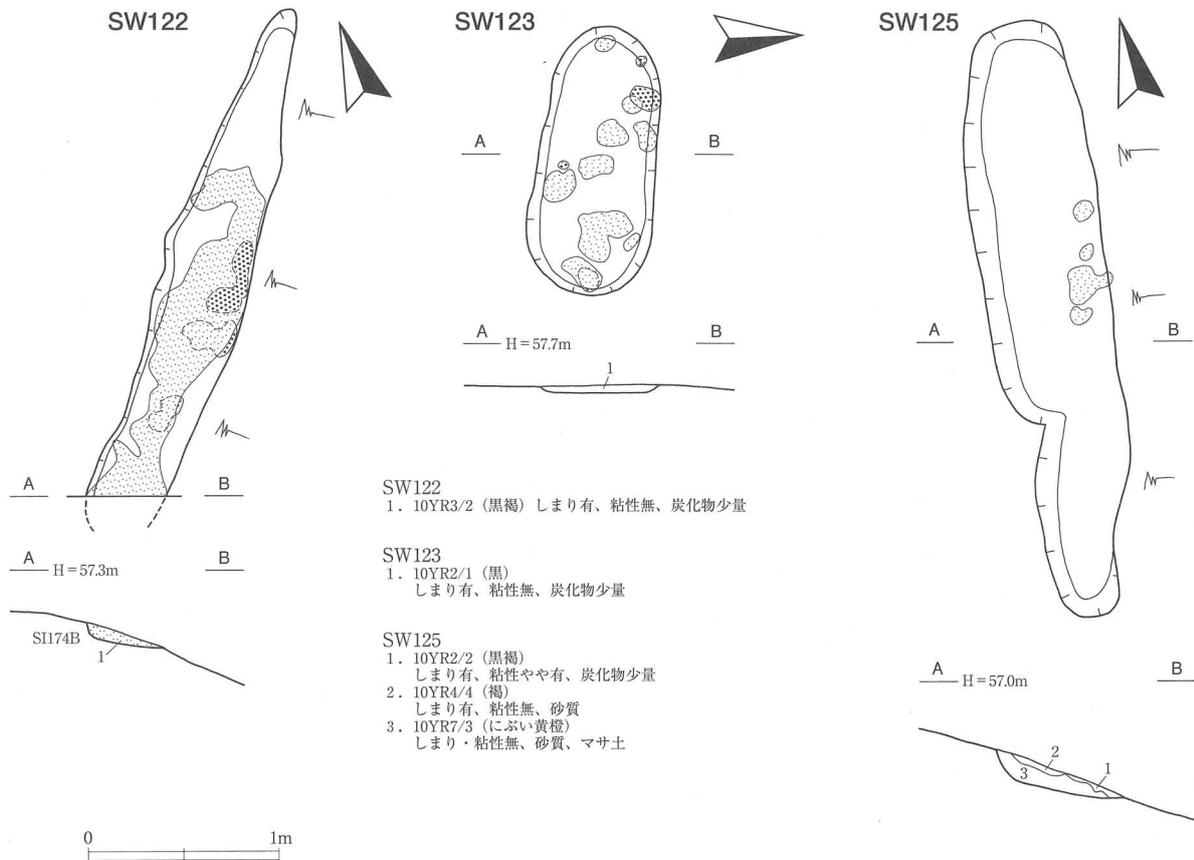
SW125炭窯（第285図、写真図版205）

I区赤28B区南側の尾根頂部東側谷頭、IXD-14l・mグリッドに位置し、検出面はV・VI層上面である。東側が崩落により消失しているが、遺存部から平面形・規模は長軸方向が等高線と平行する北東－南西にある長軸約320cm、短軸約60cmの略楕円形を呈すると推定されるが、西山側壁の状態から造り替えの2基の可能性もある。壁は外傾して立ち上がり、壁高は西壁の最大約20cmから東側に向かい低くなる。埋土は上位に炭化物が微量混じる黒色系土、下位には崩落の褐色土が堆積し、底面中央にはブロック状の炭化物が検

出された。底面は東谷側に緩く傾斜し、焼土は認められなかったが、立地と状況から炭窯と判断した。

遺物は出土しなかったが、炭化物は分析によりクリと判明した。

(小山内)



SW122
1. 10YR3/2 (黒褐) しまり有、粘性無、炭化物少量

SW123
1. 10YR2/1 (黒)
しまり有、粘性無、炭化物少量

SW125
1. 10YR2/2 (黒褐)
しまり有、粘性やや有、炭化物少量
2. 10YR4/4 (褐)
しまり有、粘性無、砂質
3. 10YR7/3 (にぶい黄橙)
しまり・粘性無、砂質、マサ土

第285図 SW122・123・125炭窯

S K 303土坑 (第286図、写真図版206)

赤28A区のIX C-16 l グリッドに位置し、検出面はVI層上面である。尾根北端の東側急斜面に立地し谷側が崩落しており、規模・形状の詳細は不明であるが、残存部における長軸は1.4m、短軸は1.2mを測り、平面の形状はやや不整な円形を呈している。山側の壁はなだらかに立ち上がって壁高は47cmあり、底面はおおむね平坦である。埋土は上位に黒褐色土、下位ににぶい黄褐色土がレンズ状に堆積し、下層に厚さ2cm程度の廃棄焼土を含んでいる。出土遺物はない。

S K 304土坑 (第286図)

赤28A区のIX C-16 t グリッドに位置し、尾根頂部緩斜面のVI層上面で検出している。平面の形状は不整な楕円で、長軸は92cm、短軸は70cmを測る。断面形は鍋形を呈して深さは30cmあり、東側壁面の一部に木根による攪乱が見られる。埋土はマサ土を含むにぶい黄橙色土一層で一括廃棄による人為的堆積と思われる。出土遺物はない。

S K 306土坑 (第286図、写真図版206)

赤28B区のIX D-17 d グリッドに位置し、尾根頂部緩斜面のVI層上面で検出している。S I 163B 竪穴住居跡と重複し、S I 163B より新しい。平面の形状は不整な隅丸方形を呈し、1.0×1.4mの規模を測る。断面形は浅いU字状で底部に凹凸がみられ、深さは35~40cmある。埋土は黄褐色土の人為的堆積である。底部の形状に何らかの意図が窺えるが、詳細は不明である。遺物は土師器の甕破片が4点出土した。(亀)

S K 308土坑 (第286図、写真図版206)

I区赤28B区北側の尾根頂部緩斜面、IX D-16 d グリッドに位置し、検出面はVI層上面である。平面形・規模は、開口部径約110cm、底部径約100cmの円形で、断面形は深さ約25cmの筒状を呈する。埋土は黄褐色土の人為的堆積である。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S K 309土坑 (第286図、写真図版206)

I区赤28B区北側の尾根頂部緩斜面、IX D-16 d グリッドに位置し、検出面はVI層上面である。S I 164・165と重複し、本遺構が切る。平面形・規模は、開口部115×65cm、底部約105×50cmの略長方形で、断面形は深さ約10cmの箱形を呈する。埋土は黄褐色土の単層で、底面は概ね平坦である。

遺物は土師器の甕形土器片が数点出土したのみである。

S K 312土坑 (第286図、写真図版206)

I区赤28B区北側の尾根部東側の谷頭、IX D-16 f グリッドに位置し、検出面はVI層上面である。東谷側が崩落により消失して全容は不明である。遺存部から平面形・規模は、一辺約120cmの隅丸略方形で、断面形は深さ約35cmの箱形を呈すると推定される。埋土は黄褐色土の人為的堆積である。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S K 314土坑 (第287図、遺物図版48、写真図版206・244・325)

I区赤28B区北側の西斜面上位、IX D-12 h グリッドに位置し、検出面はVI層上面である。S N 82と重複し、本遺構が切られる。平面形・規模は、開口部約180×150cm、底部約150×120cmの略楕円形で、断面形は深さ約100cmの筒状を呈する。埋土はおおよそ10層からなる黄褐色系土の人為的堆積で、北側埋土下位には廃棄された小さな貝層が2ヶ所検出され、廃棄の単位は上位のイガイ主体と下位のクチバガイに分けられる。底面は概ね平坦だが、中央には40cm前後の不整で、深さ約10cmほどの皿形の窪みがある。

遺物は土師器の甕形土器片が少量と坏形土器1点(564)と貝類はイガイが少しとクチバガイが多く出土したが、詳細については遺物編を参照されたい。

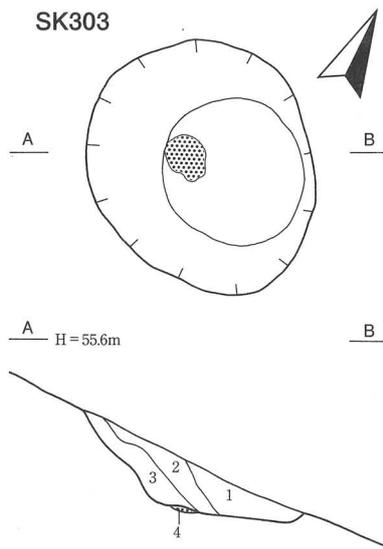
S K 315土坑 (第287図、写真図版207)

I区赤28B区北側の尾根頂部平坦面、IX D-13 h グリッドに位置し、検出面はVI層上面である。平面形・規模は、開口部径約140cm、底部径約110cmの円形を呈し、断面形は深さ約75cmの筒状で、上位が崩落によりやや外反する。埋土は底面に自然堆積の黒色土があるほかは全体的にマサ土を含む黄褐色系土の人為的堆積である。底面は概ね平坦だが、幅約15cm、深さ約5cmの溝が巡る。

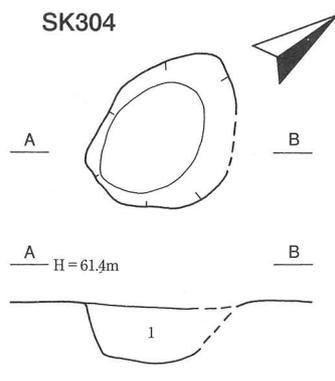
遺物は土師器の甕形土器片が数点出土した。

S K 318A~C土坑、S N 83炉跡 (第287・291図、遺物図版74、写真図版207・260)

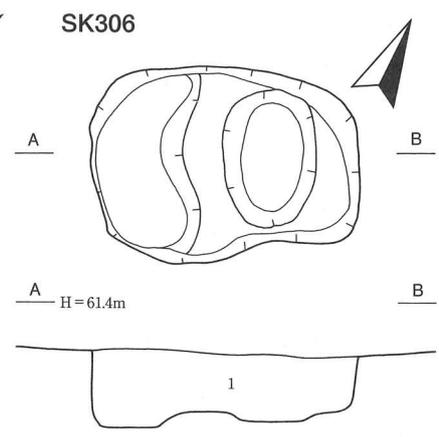
I区赤28B区南側の尾根頂部平坦面、IX D-12・13 l グリッドに位置し、検出面はV・VI層上面である。検出時には同規模の円形の連結したプランを確認したものだが、埋土が人為的な黄褐色系土であったため、判別ができず、連結する長軸方向で半割を行ったところ、精査過程でB・C土坑を利用して作られたS N 83炉跡を検出した。また同時に精査を行っていたS I 175北西隅で当初確認できなかったC土坑を検出し、さ



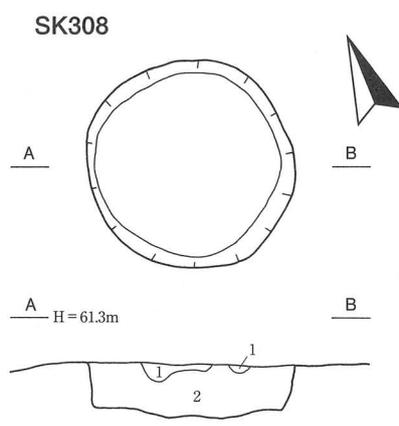
- SK303**
1. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性無
 2. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性無
 3. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
 4. 7.5YR5/8 (明褐) 廃棄焼土



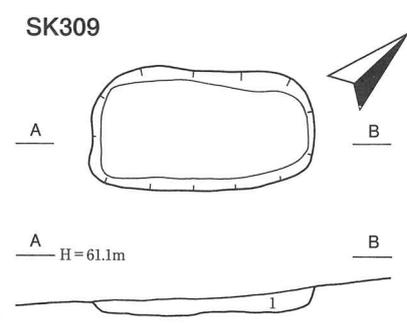
- SK304**
1. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、マサ土をブロック状(極小～小)に微量



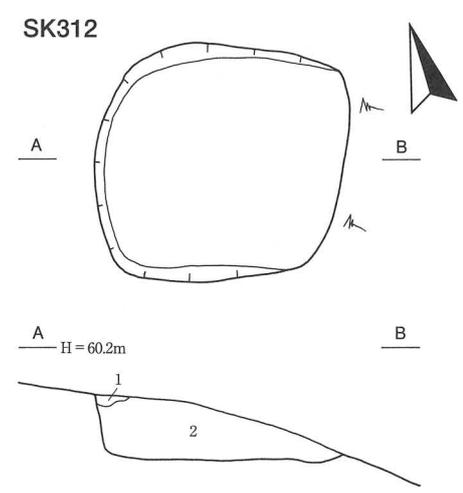
- SK306**
1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無



- SK308**
1. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性無、砂質、炭化物微量
 2. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、砂質



- SK309**
1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有、炭化物微量

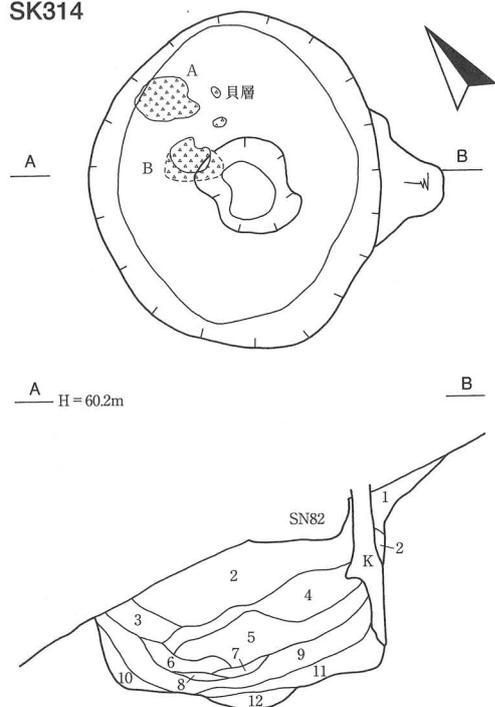


- SK312**
1. 10YR6/4 (にぶい黄橙) マサ土ブロック
 2. 10YR5/4-5/6 (にぶい黄褐～黄褐) しまり有、粘性無、砂質、炭化物微量



第286図 SK303・304・306・308・309・312土坑

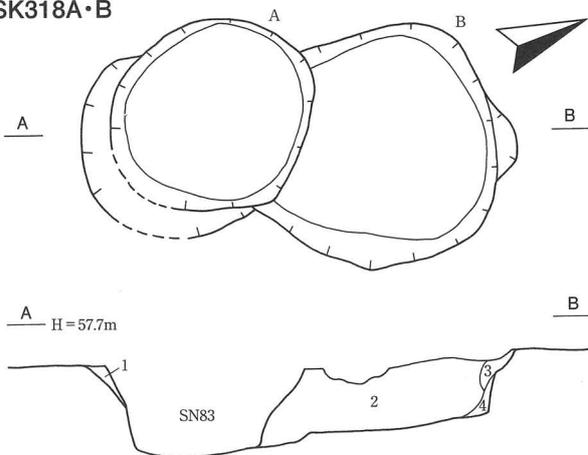
SK314



SK314

1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質
2. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性やや有、炭化物微量
3. 2.5Y4/6 (オリープ褐) しまり有、粘性無、砂質
4. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、炭化物少量
5. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、マサ土粒少量
6. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性やや有、炭化物微量
7. 2.5Y4/6 (オリープ褐) しまり・粘性有
8. 10YR2/1 (黒褐) しまり有、粘性無、炭化物多量、貝層
9. 2.5Y5/3 (黄褐) しまり有、粘性無
10. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無、砂質、マサ土少量
11. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質
12. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、砂質、マサ土多量

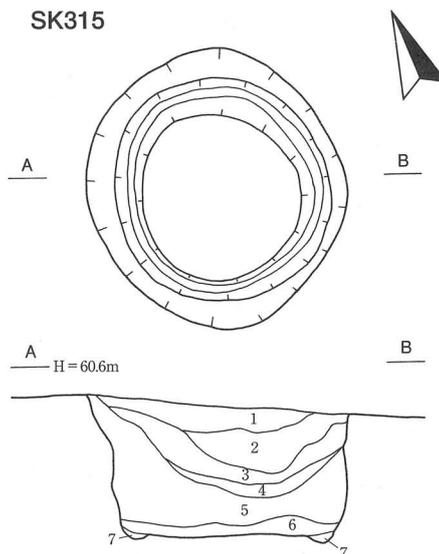
SK318A・B



SK318A・B

1. 10YR6/8 (明黄褐) しまりやや有、粘性有
2. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性やや有
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、マサ土多量
4. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性有

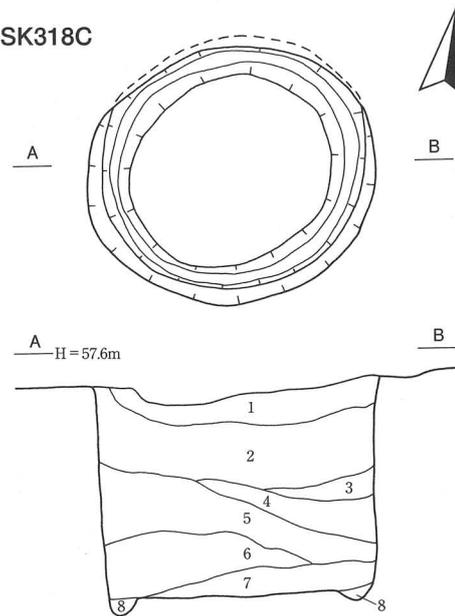
SK315



SK315

1. 10YR3/4 (暗褐) しまりやや有、粘性無
2. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、砂質、マサ土
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質、マサ土
4. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性やや有
5. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性無、砂質
6. 10YR2/1 (黒) しまり有、粘性無
7. 2.5Y5/4 (黄褐) しまり有、粘性無、砂質

SK318C



SK318C

1. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、砂質
2. 10YR6/8 (明黄褐) しまり有、粘性やや有、マサ土ブロック少量
3. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、砂質
4. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、砂質
5. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質
6. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質
7. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、砂質
8. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性無



第287図 SK314・315・318A・B・C土坑

らにS N74とも重複することが判明した。検出状況と断面観察から新旧関係は、(新) S N74・83→S K318 A・B→S K318C→S I 175 (古) である。新旧順に記述する。

S N83は、平面形はダルマ形を呈し、南側頭部部分は土坑状に深く掘り込まれ、北側体部部分は浅くなっていた。規模は開口部の長軸は約210cm、頭部土坑は開口部径約100cm、底部径約65cmの略円形で、断面形は深さ約50cmの鍋形を呈し、体部は開口部径約120cmの歪な略円形で、断面形は深さ約5cmの皿形を呈する。埋土は上位に薄く部分的な暗褐色土があるほかは黄褐色系土の人為的堆積である。頭部・体部とも底面は概ね平坦で、体部底面のほぼ中央には40cm程の広がり、厚さ約7cmほどが火熱により赤色変化していた。遺物は南側頭部土坑埋土から羽口片2点と鍛冶滓が約1kg出土した。

S K318Aの平面形・規模は、開口部径約110cm、底部径約95cmの略円形で、断面形は深さ約50cmの平鍋形を呈する。埋土の大半はS N83のため不明である。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

S K318Bの平面形・規模は、開口部径約130cm、底部径約105cmの略円形で、断面形は深さ約40cmの筒状を呈する。埋土はA土坑と一体で基本的には人為的な黄褐色土の単層である。底面は概ね平坦である。

遺物は埋土から羽口1点(160)と鍛冶滓が極めて微量出土した。

S K318Cの平面形・規模は、開口部径約150cm、底部径約140cmの円形で、断面形は深さ約110cmの筒状を呈する。埋土は全体的にマサ土を含む黄褐色系土の人為的堆積である。底面は概ね平坦だが、幅約15cm、深さ約5cmの溝が巡る。

遺物は土師器の甕形土器片と羽口片数点と鍛冶滓が極めて微量出土した。

S K322土坑 (第288図、写真図版207)

I区赤28B区南側の尾根頂部平坦面、IXD-13mグリッドに位置し、S I 175の精査過程で検出したが、本遺構とS I 175はともに人為的な黄褐色系土であったため、実際にはS I 175床面でプランを確定したものである。本遺構が新しい。平面形・規模は、開口部径約140cm、底部径約115cmの略円形を呈し、断面形は深さ約70cm前後の筒状を呈する。埋土は全体的にマサ土を含む黄褐色系土の人為的堆積である。底面は概ね平坦だが、中央に長軸約90cm、短軸約60~70cmのダルマ形で、深さ約10cmのピットがある。

遺物は土師器の甕形土器片と坏形土器片が数点、鍛冶滓が極めて微量出土した。

S K333土坑 (第288図、遺物図版48、写真図版207・244)

I区赤28B区北側の東側斜面上位、IXD-14jグリッドに位置し、検出面はVI層上面である。SW119と重複し、本遺構が切られる。平面形・規模は、長軸約180cm、短軸約165cmの隅丸長方形で、断面形は深さ約60cmの箱形を呈する。埋土は山側が崩落と流入による褐色系土と黒色系土の自然堆積で、谷側のSW119下位では黄褐色土の人為的堆積となっていた。底面は概ね平坦である。

遺物は土師器の甕形土器片数点と坏形土器1個体(565)が出土した。(小山内)

S K336土坑 (第288図、写真図版207)

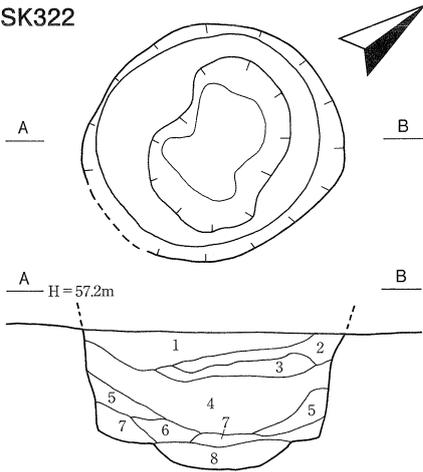
赤28A区のIXC-16sグリッドに位置し、SK I 48縦穴状遺構の貼床下で検出している。平面の形状は不整な隅丸長方形を呈し、0.7×1.0mの規模を測る。底面は平坦で壁は垂直気味に立ち上り、断面形は浅いU字状を呈している。埋土は明黄褐色砂質土の一層で貼床の土質とは異なり、SK I 48より古い遺構と捉える。また貼床からの深さは25cmであるが、VI層上面から推定すると65cm程度あったと思われる。

遺物は出土していない。(亀)

S K337土坑 (第288図、写真図版207)

I区赤28B区北側の尾根頂部平坦面、IXD-13hグリッドに位置する。検出面はVI層上面であるが、当初

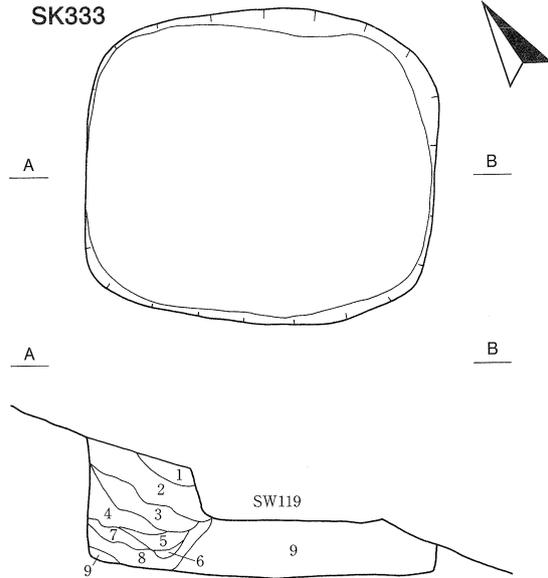
SK322



SK322

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質
2. 10YR2/3 (黒褐) しまり・粘性やや有、炭化物微量
3. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、砂質
4. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、砂質
5. 10YR6/6 (明黄褐) しまり有、粘性無、砂質
6. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質
7. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、砂質
8. 10YR7/3 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、マサ土少量

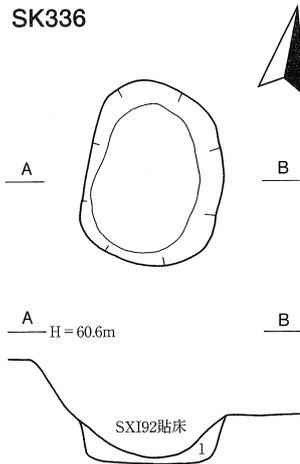
SK333



SK333

1. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有
2. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
4. 10YR6/3 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、マサ土少量
5. 10YR2/2 (黒褐) しまり有、粘性やや有
6. 10YR17/1 (黒) しまり有、粘性無、炭化物多量
7. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有
8. 7.5YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性やや有、弱い酸化焼土
9. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無、炭化物微量、地山ブロック多量

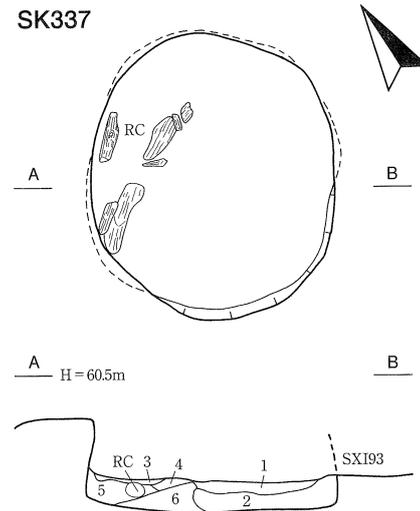
SK336



SK336

1. 10YR6/6 (明黄褐) 砂質
しまり有、粘性無

SK337



SK337

1. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、マサ土多量、炭化物少量
2. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、マサ土少量
3. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性やや有、炭化物微量
4. 10YR2/2 (黒褐) しまり有、粘性無、炭化物多量
5. 10YR5/3 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有
6. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無、砂質



第288図 SK322・333・336・337土坑

S X I 93の南西隅との認識で精査を行っていたが、精査過程で重複する単独の土坑と判明した。本遺構が新しい。平面形・規模は、開口部約150×120cm、底部約145×130cmの略楕円形を呈し、断面形は深さ約50cmのフラスコ状を呈する。埋土は全体的にマサ土を含む黄褐色系土の人為的堆積である。底面は概ね平坦である。遺物は土師器の甕形土器片数点と炭化材（分析からクリ）が出土した。（小山内）

S K 338土坑（第289図、写真図版207）

赤28B区のIX D-16 c・d グリッドに位置し、尾根頂部緩斜面のVI層上面で検出している。S I 163A・B 竪穴住居跡と重複し、2棟より新しい。平面の形状は径が約1.2mの不整な円形を呈している。断面形はU字状で、深さは58cmある。埋土は人為的堆積による黄褐色土が大半を占め、その上に自然流入の褐色土が重なる。遺物は土師器の甕の破片が数点（G 1/4袋）と須恵器の甕の破片が1点出土した。（亀）

S K 340土坑（第289図、写真図版208）

I区赤28B区北側の尾根東側谷頭、IX D-14 i グリッドに位置する。S W 117底面で検出した。また本遺構底面ではS I 171の煙出しを確認し、新旧関係は（新）S W 117→本遺構→S I 171（古）である。平面形・規模は、開口部径約130cm、底部径約130cmの略円形で、断面形は遺存する深さが約35cmを測る筒状を呈する。埋土は全体的にマサ土を含む黄褐色系土の人為的堆積である。底面は概ね平坦である。

遺物は出土しなかった。

S K 344土坑（第289図、写真図版208）

I区赤28B区北側の尾根頂部平坦面、IX D-14 h グリッドに位置し、検出面はVI層上面である。S I 168A・169と重複し、検出状況から新旧関係は（新）S I 168A→本遺構→S I 169（古）である。平面形・規模は、開口部約100×75cm、底部約80×60cmの略楕円形を呈し、断面形は深さ約50cmの筒状を呈する。埋土は上位黒色系土と下位黄褐色土の人為的堆積である。底面は概ね平坦である。

遺物は土師器の甕形土器片数点と炭化材（分析からクリ）が出土した。

S K 345土坑（第289図、遺物図版48・49・108、写真図版208・244・293）

I区赤28B区北側の尾根頂部平坦面、IX D-14 h グリッドに位置し、S X I 93床面で検出した。炉跡及び根太痕を切ることから本遺構が新しい。平面形・規模は、開口部径約100cm、底部径約90cmの略円形で、断面形は深さ約65cmの筒状を呈する。埋土は上位黒色系土と下位の人為的黄褐色土に大別され、上位には拳大の礫が多量に含まれた。底面は概ね平坦である。

遺物は埋土上位から土師器の甕形土器が少量と砥石が1点（229）のみ出土した。

S K 346土坑（第289図）

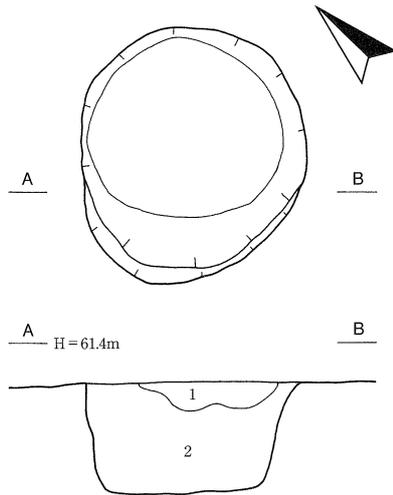
I区赤28B区南側の尾根頂部緩斜面、IX D-13 k グリッドに位置し、検出面はVI層上面である。当初S I 174Bの壁崩落部として精査を行っていたが、状況から新しい単独の遺構と判断した。南側はS I 174Bの掘削に伴い消失し、全容は不明だが、残存部から平面形・規模は、開口部径約70cm前後の略円形で、断面形は深さ約15cmほどの椀形を呈すると思われる。埋土は上位黒色土、底面には廃棄焼土が堆積する。

遺物は鍛冶滓が極めて微量出土したのみである。

S N 69炉跡（第290図、写真図版208）

I区赤28B区北側の西斜面上位、IX D-12 i グリッドに位置し、検出面はVI層上面である。谷側は崩落により消失して全容は不明だが、残存部での平面形・規模は、長軸約90cm、短軸約70cmの略楕円形を呈し、山側壁は外傾して立ち上がり、壁高は約30cmを測る。埋土は流入と崩落による黒色系土と褐色系土の自然堆積である。底面は概ね平坦だが谷側にやや傾斜し、谷側で約50cmほどの不整な広がり火熱により厚さ

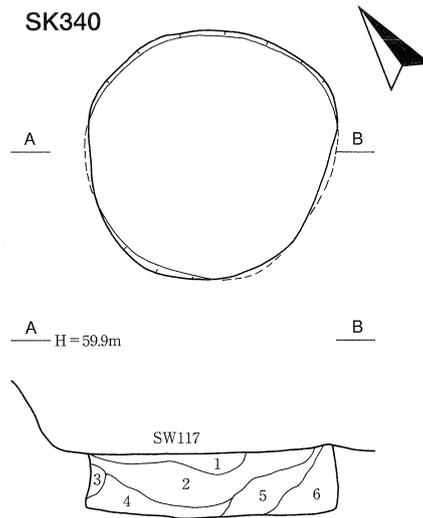
SK338



SK338

1. 10YR4/6 (褐) しまりやや有、粘性無
2. 10YR5/8 (黄褐) しまりやや有、粘性無、マサ土を粒状(極小)に
10YR6/6 (明黄褐) をブロック状(小)に微量

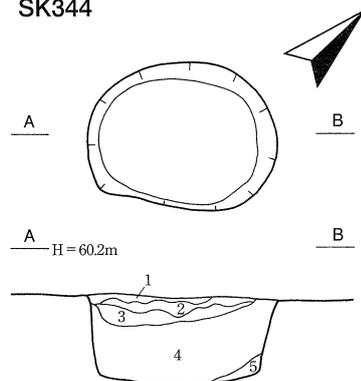
SK340



SK340

1. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
2. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまりやや有、粘性無、砂質
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性無、砂質
4. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質
5. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無、砂質
6. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無、砂質

SK344



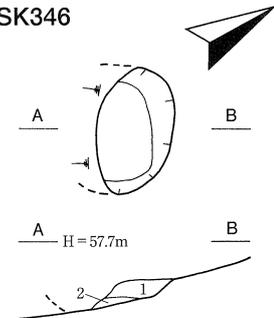
SK344

1. 10YR4/3 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性有、炭化物微量
2. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有、炭化物多量
3. 10YR4/4 (褐) しまり極めて有、粘性無
4. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、砂質、人為的堆積
5. 10YR6/6 (明黄褐) しまり無、粘性やや有、人為的堆積

SK345

1. 10YR3/3 (暗褐) しまり・粘性やや有
2. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性やや有
3. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性有、焼土粒微量
4. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
5. 7.5YR4/4 (褐) 弱い焼土
6. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性無
7. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり極めて有、粘性無、マサ土少量
8. 7.5YR6/6 (橙) しまり極めて有、粘性無、焼土
9. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性無
10. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、炭化物微量

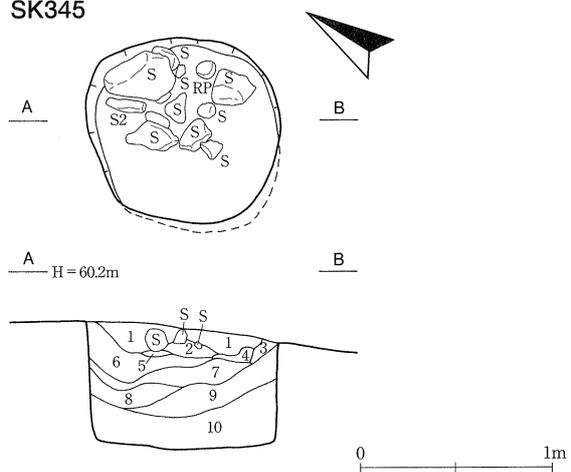
SK346



SK346

1. 10YR3/4 (暗褐) しまり有、粘性無、炭化物微量
2. 5YR4/6 (赤褐) 廃棄焼土

SK345



第289図 SK338・340・344~346土坑

約5cmほどが赤色変化していた。遺物は羽口片が2点出土したのみである。

S N73炉跡 (第290図、写真図版208)

I区赤28B区南側の尾根頂部平坦面、IXD-13Iグリッドに位置し、検出面はVI層上面である。本遺構はS I 175を切る。平面形・規模は、開口部径約60cmの略円形で、断面形は深さ約15cmの丸底鍋形を呈する。埋土は上位褐色土と下位の炭化物混じりの黒色系土の自然堆積である。壁面が部分的に火熱により弱く赤色変化していた。遺物は出土しなかった。

S N74炉跡 (第290図)

I区赤28B区南側の尾根頂部平坦面、IXD-12mグリッドに位置し、S I 175の精査過程で検出したもので、本遺構が新しい。東側はS I 175埋土として掘削したため全容は不明だが、残存部から平面形・規模は、長軸約140cm、短軸約100cm前後の略楕円形と推定され、残存する壁は外傾して立ち上がり、壁高は約30cmを測る。埋土は黄褐色系土の人為的堆積である。底面は概ね平坦で、西側に径約30cmの略円形で火熱により厚さ約3cmほどの赤色変化が認められた。遺物は出土しなかった。

S N75炉跡 (第290図)

I区赤28B区南側の尾根頂部平坦面、IXD-13kグリッドに位置し、S I 175の精査過程で埋土中で検出したもので、本遺構が新しい。平面形・規模は、開口部径約50cmの略円形で、断面形は深さ約10cmの鍋形を呈する。埋土は炭化物を多く含む黒色系土の自然堆積である。壁面が全体的に火熱により赤色変化していた。遺物は出土しなかった。 (小山内)

S N77炉跡 (第290図)

赤28B区のIXD-17・cグリッドに位置し、検出面はV層(黄褐色土層)及びVI層(岩盤層)上面である。尾根東側下の急斜面に位置し谷側が崩落しており、規模・形状の詳細は不明である。残存部における長軸は1.1m、短軸は66cmを測り、平面の形状は不整な楕円形を呈している。壁はなだらかに立ち上がり、壁高は山側で約30cmを測る。埋土は上位に褐色土、下位に暗褐色土が堆積し燃焼部に弱い酸化焼土の層がある。燃焼部焼土は15×30cmの規模で瓢箪状を呈し、厚さは約3cmを測る。また斜面上に掘りの浅い幅30～50cmで全長1.8mを測る溝状の遺構(S N77-D1)があり、S N77と長軸の向きが一致することから何らかの繋がりがあったと推察する。遺物は埋土から土師器の甕の破片が1点出土している。

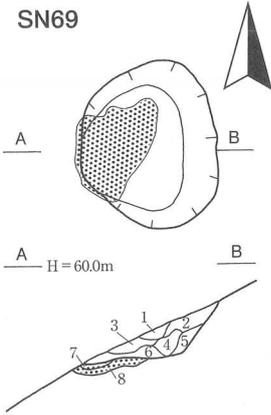
S N80炉跡 (第290図)

赤28B区のIXD-17cグリッドに位置し、尾根頂部平坦面のVI層上面で検出している。南北をS I 163A及びS I 162竪穴住居跡に切られており、2棟より古いと捉える。規模・形状の詳細は不明であるが東側の壁がS-N方向に平行で西側の壁がNE-SW方向を向いていることから、平面形はNNE-SSWを長軸とする楕円形と推定する。断面形は浅い皿状を呈し、壁高は7～10cmある。埋土はにぶい黄橙土とにぶい黄褐色土の二層からなり、底面には厚さ8cm程度ににぶい橙色の酸化焼土を残す。焼土の形状・規模はS I 163Aで切られているため不明である。遺物は出土していない。

S N81炉跡 (第291図、写真図版208)

赤28A区のIXC-18nグリッドに位置し、尾根東側下急斜面のVI層上面で検出している。東側(谷側)の壁面が削られており詳細は不明であるが、残存部は長軸1.1m、短軸64cmを測り、平面の形状は不整な楕円形を呈している。西側(山側)の壁は外傾して立ち上がり、壁高は約30cmある。埋土は上位が炭化物を片状に含む褐色土で、下位に弱い酸化焼土の層がある。底面はほぼ平坦で、中央の焼土は径が約45cmの不整な円形を呈し中心の厚さが4cm程度ある。遺物は出土していない。 (亀)

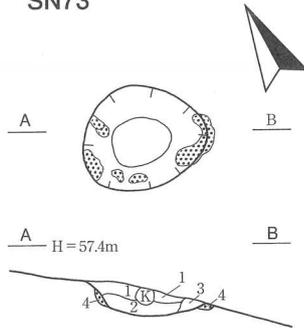
SN69



SN69

1. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有
2. 10YR3/3 (暗褐) しまり無、粘性やや有
3. 10YR3/4 (暗褐) しまり・粘性有
4. 10YR2/2 (黒褐) しまり・粘性やや有、炭化物少量
5. 10YR3/2 (黒褐) しまり・粘性無
6. 7.5YR4/4 (褐) しまり・粘性有
7. 7.5YR4/6 (褐) しまり・粘性有
8. 5YR5/4 (にぶい赤褐) } 焼土

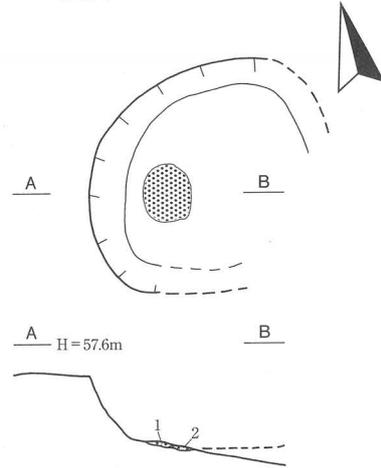
SN73



SN73

1. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性有
2. 10YR2/1 (黒) しまり無、粘性有、炭化物少量
3. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性無、炭化物微量
4. 7.5YR4/4 (褐) 焼土

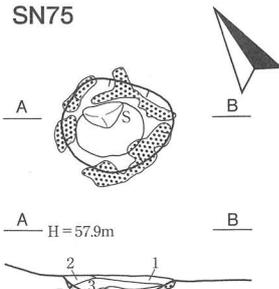
SN74



SN74

1. 7.5YR4/4 (褐) } 焼土
2. 7.5YR4/6 (褐) }

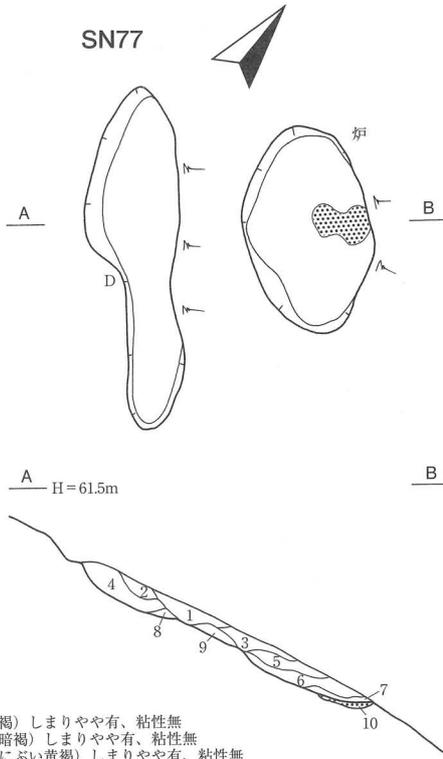
SN75



SN75

1. 10YR1.7/1 (黒) しまり・粘性無、炭化物多量
2. 10YR4/6 (褐) しまり有、粘性やや有
3. 10YR1.7/1 (黒) しまり有、粘性無
4. 10YR1.7/1 (黒) しまり有、粘性無、炭化物少量
5. 5YR5/6 (明赤褐) 焼土

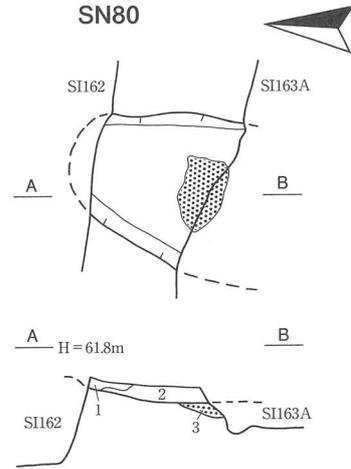
SN77



SN77

1. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性無
2. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性無
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまりやや有、粘性無
4. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
5. 10YR4/4 (褐) しまりやや有、粘性無
6. 10YR3/3 (暗褐) しまりやや有、粘性無
7. 7.5YR5/6 (明褐) 弱い焼土、しまり有、粘性無
8. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性有
9. 10YR5/6 (黄褐) しまりやや有、粘性無
10. 5YR6/8 (橙) 強い酸化焼土、しまり堅、粘性無

SN80



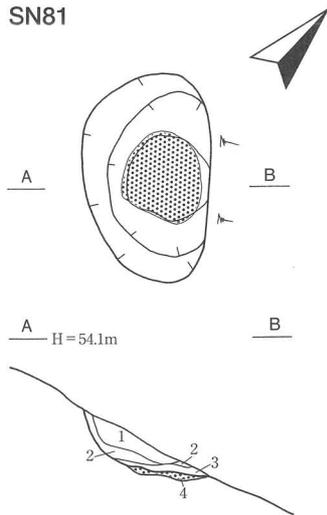
SN80

1. 10YR7/4 (にぶい黄橙) しまり有、粘性無
2. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり有、粘性無
3. 5YR6/4 (にぶい橙) 焼土

0 1m

第290図 SN69・73~75・77・80炉跡

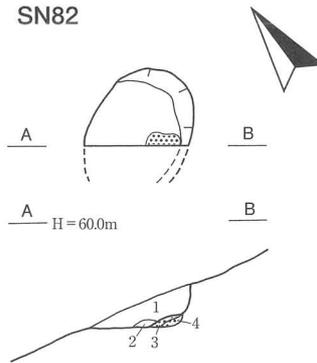
SN81



SN81

1. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無、炭化物を片状(小)に微量
2. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性無
3. 7.5YR5/6 (明褐) 弱い酸化焼土、しまり堅、粘性無
4. 5YR5/8 (明赤褐) 強い酸化焼土、しまり非常に堅、粘性無

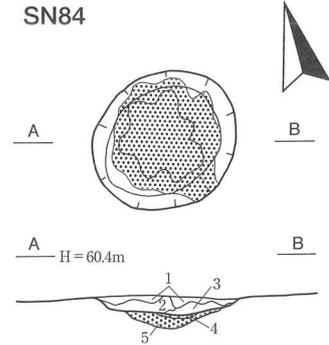
SN82



SN82

1. 10YR4/4 (褐) しまり無、粘性やや有、炭化物微量
2. 10YR2/3 (黒褐) しまり無、粘性やや有、炭化物少量
3. 7.5YR4/4 (褐) } 焼土
4. 7.5YR4/3 (褐) }

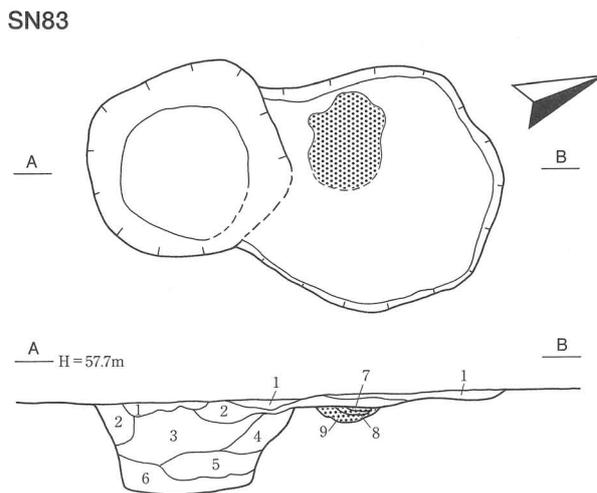
SN84



SN84

1. 10YR3/3 (暗褐) しまり無、粘性有
2. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性有
3. 10YR5/6 (黄褐) しまり無、粘性有
4. 5YR5/6 (明赤褐) } 焼土
5. 7.5YR4/6 (褐) }

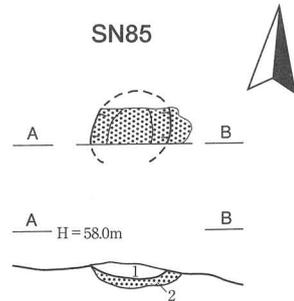
SN83



SN83

1. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有
2. 10YR5/6 (黄褐) しまり有、粘性やや有
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり極めて有、粘性無、砂質、マサ土多量
4. 10YR6/4 (にぶい黄橙) しまり・粘性やや有
5. 10YR5/4 (にぶい黄褐) しまり・粘性やや有、小鉄滓少量
6. 10YR6/6 (明黄褐) しまり極めて有、粘性有
7. 5YR4/6 (赤褐)
8. 5YR4/3 (にぶい赤褐) } 焼土
9. 7.5YR4/4 (褐) }

SN85



SN85

1. 10YR5/6 (黄褐) しまり極めて有、粘性有、黄褐色粘土
2. 10YR4/3 (褐) 焼土

0 1m

第291図 SN81~85炉跡

S N82炉跡 (第291図)

I区赤28B区北側の西斜面上位、IXD-12hグリッドに位置する。SK314の精査過程で検出したもので、本遺構が新しい。南側はSK314埋土として掘削したため全容は不明だが、残存部から平面形・規模は、長軸約70cm、短軸約50cm前後の略楕円形と推定され、残存する壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約15cmを測る。埋土は褐色土の単層である。底面は概ね平坦で、東壁際に火熱による弱い赤色変化が認められた。遺物は出土しなかった。

S N84炉跡 (第291図、写真図版208)

I区赤28B区北側の尾根頂部平坦面、IXD-14gグリッドに位置し、VI層上面で検出した。平面形・規模は、開口部径約75cmの略円形で、断面形は深さ約7cmの皿形を呈する。埋土は褐色系土の人為的堆積である。底面は概ね平坦で、火熱により厚さ約7cmほどが赤色変化していた。遺物は出土しなかった。

S N85炉跡 (第291図)

I区赤28B区南側の緩斜面、IXD-12kグリッドに位置する。SW121の精査過程で断面観察によって検出したもので、本遺構が新しい。SW121埋土として掘削したためベルト部分のみ残存し、全容は不明だが、残存部から平面形・規模は、開口部径約40cm前後の略円形で、断面形は深さ約7cmの皿形と推定される。埋土は褐色土の単層である。全体的に火熱により厚さ約5cmほどが弱く赤色変化していた。

遺物は出土しなかった。

②緑15区

検出された遺構は、工房跡1棟、鉄生産関連炉跡1基、炭窯1基、土坑2基、炉跡3基、廃滓場1ヶ所である。分布状況としては、ほとんどが赤28B区南側尾根頂部から谷底に至る斜面に立地し、谷底には狭小な廃滓場が形成されていた。(小山内)

S X I 82工房跡・S X W72鉄生産関連炉跡・S X H15廃滓場

(第292図、遺物図版74・108、写真図版209・260・266・267・293・322・323)

I区緑15区西側の斜面中腹、IXD-16kグリッドに位置し、検出面はⅢ層上面である。平成13年度調査当初の試掘時に谷底で鉄滓類の広がり(SXH15)を確認し、流出滓が多く認められたことから、赤28B区側の西斜面に製鉄炉の存在が想定されたものである。粗掘と検出作業はⅢ層黒色土上のため遺構の識別が難しく慎重に行ったが、上部構造として明瞭な炉体及び炉壁は認められず、検出当初は、上位に等高線と平行する南北方向の長軸約3.5m、短軸約1.2m前後の不整形で崩落とも思えたプラン(SXI82)と下位に斜面上位の頭部と肩部を還元した青灰色土が部分的に縁取る歪なダルマ形のプラン(SXW72)を確認したものである。精査の結果、谷側の特に炉体部部分は崩落により大半が消失しており、遺存状態は極めて不良であることが判明した。

SXI82は、東谷側が崩落により消失しているため全容は不明である。遺存部での平面形・規模は、大きく2段からなる階段状の狭い平坦部を持つもので、北側には一段高いテラスが張り出す。全体では等高線と平行する南北長軸約3.7m、短軸約1.2mほどで、上段では長軸約3m、短軸約0.6mの略楕円形、下段では長軸約2m、短軸約0.8mの略長方形を呈すると推定され、張り出しは長軸約1.3m、短軸約0.4mが遺存する。壁は外傾して立ち上がり、壁高は上段西側の最大約35cmから東側に向かい低くなり、それぞれの高低差は約5～10cmほどである。埋土はⅢ層起源の暗褐色系土の自然堆積である。それぞれの床面は概ね平坦で堅締、貼床は施されていなかった。床面施設としては上段中央山側に長軸約90cm、短軸約30cmの略楕円形で、

断面形は深さ約25cmほどの袋状を呈するK 1土坑1基、柱穴を下段に4基と張り出しで2基検出した。

配置及び形状から、柱穴は轆設置に関連するもので、S X W72操業時の轆を据えるための施設(轆座)と、関連する作業等の足場の可能性が考えられる。

遺物は、土師器の甕形土器片が少量と鉄滓約0.6kgが出土した。

S X W72は、検出時の状況からダルマ形の頭部を羽口装着痕跡、中央部を炉跡、下位を前庭部と想定して精査を開始したが、精査の結果、大半が崩落により消失していることが判明し、頭部部分は僅かに炉底部を残すもので、体部はすべて前庭部と判断された。遺存部分での平面形・規模は、全体の長軸は約130cmで、等高線と直行する東西にあり、炉は長軸約30cm、短軸約13cmの楕円形を呈し、断面形は深さ約5cmの丸底鍋形を呈するが、前庭部側の湯口部分で開口する。炉底は全体的に堅く締まり、やや強く還元し、周囲は黒色の蒸焼状態となっていた。炉底以下には、炉床として防湿と熱効率の増強を目的とする下部構造は存在しなかった。前庭部は明瞭な段差はなく、底面は全体的に谷側に傾斜するものの略円形プランが3連結し、全体の長軸は約120cmの略楕円形で、上位は短軸約55cm、中位は短軸約90cm、下位は短軸約50cmを測る。壁は外傾して立ち上がり、深さ約15cmを測る。底面は炉湯口から東谷側に向かい傾斜していた。埋土はおよそ10層に細分されるが、全体的にⅢ層起源の黒色土の自然堆積で、前庭部では流出滓が少量と、大きさ約40cm、厚さ約5cmほどの炉壁隗が認められた。

前庭部山側ではプラン縁辺が一部還元しており、円形の掘り込みが連結したような状態から、炉の造り替えの可能性も考えられる。いずれにしても下部構造を持たない簡便な構造とS X H15の鉄滓類や炉壁の出土量からみて、使用期間は短く、操業回数も少ないものと考えられる。

遺物は、前庭部から不明鉄製品1点、炉壁隗が少量と流出滓を主体とする鉄滓約3.7kgが出土し、僅かに出土した炭化物は分析の結果クリと判明した。

S X H15は、S X W72下方の谷底、IX D-17k・1グリッドに広がるおよそ5m四方の廃滓場で、約50cmの厚さで比較的多く鉄滓類が堆積していた。堆積の状況としては廃棄単位を把握できるようなものではなく、傾向として上位が比較的大き目の鉄滓を主体として流出滓を多くと、炉壁を少量含み、下位は小さめの鉄滓を主体として流出滓が炉内滓よりやや多めとなっており、炉内滓は上・下位ともほぼ等しく含まれる。S X W72との位置関係からこの操業により形成された廃滓場と考えられる。

遺物は、土師器の甕形土器片が少量と須恵器の甕形土器片数点、羽口がおよそ3個体分(162~164)、炉壁少量、砥石1点(230)、鉄塊系遺物約40個、鉄滓が約164kg出土した。

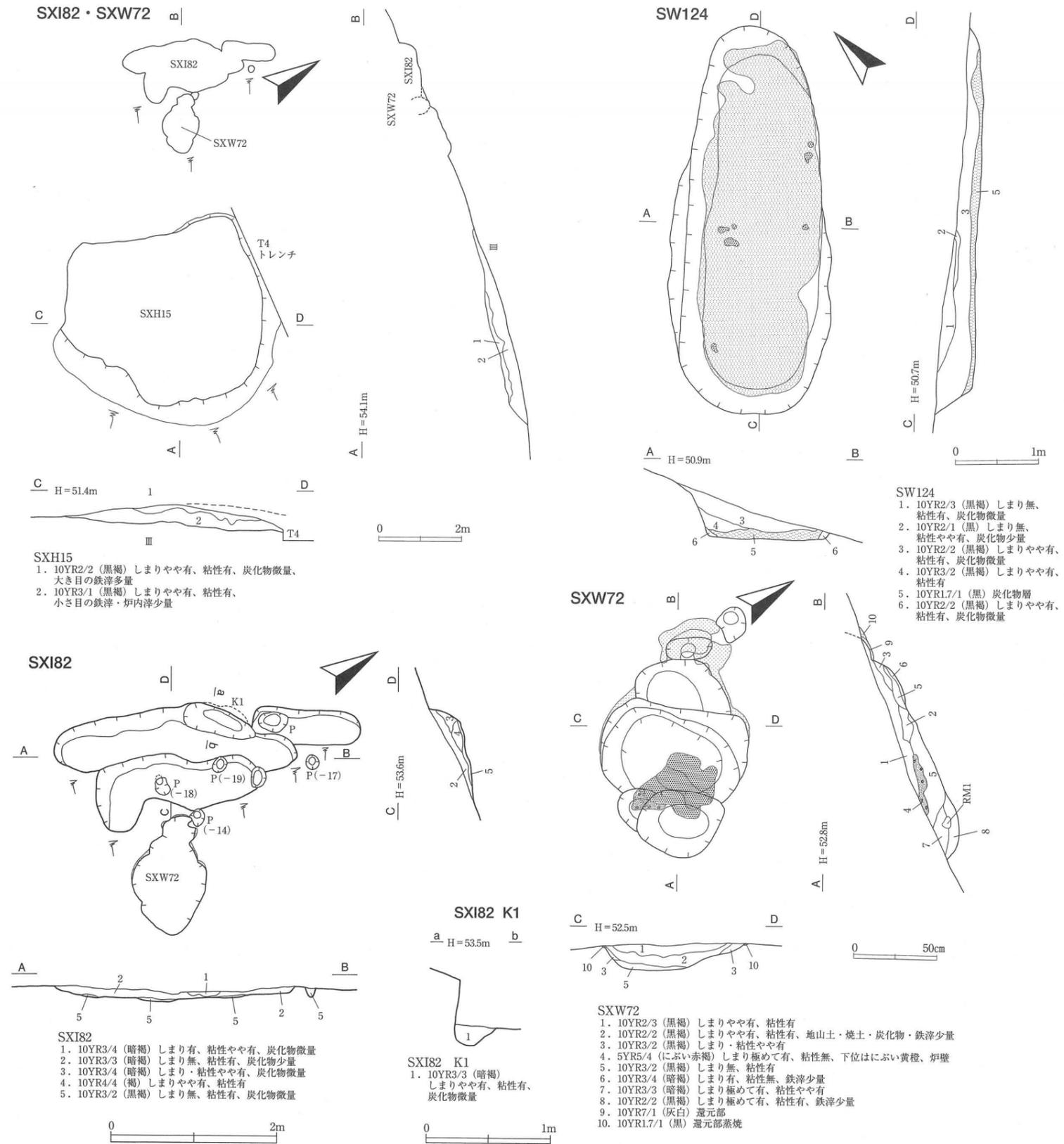
S W124炭窯 (第292図、写真図版210)

I区緑15区西側の斜面裾、IX D-18i・jグリッドに位置し、検出面はⅢ層上面である。北東側が一部崩落により消失しているが、遺存部から平面形・規模は長軸方向が等高線と平行する北東-南西にある長軸約465cm、短軸約170cmの略長楕円形を呈すると推定され、壁は外傾して立ち上がり、壁高は西壁の最大約60cmから東側に向かい低くなる。埋土はⅢ層起源の流入と崩落による黒色土の自然堆積で、底面には残材の炭化物層が全体的に堆積する。底面はやや凹凸があり、火熱による弱く赤色変化した焼土が点在する。

遺物は土師器の甕形土器片が少量と炉内滓が極めて微量出土した。

S K 331土坑 (第293図、写真図版210)

I区緑15区西側の斜面中腹、IX D-15kグリッドに位置し、検出面はⅣ層上面である。平面形・規模は、開口部では長軸約220cm、短軸約100cmの歪な略楕円形を呈するが、山側で長軸約150cm、短軸約60cmの楕円形に深く掘り込まれ、下位は西山側に潜るようにさらに2段階の楕円形に掘られていた。深さは最大約



第292図 SXI82工房跡・SXW72鉄生産関連炉跡・SXH15廃滓場・SW124炭窯

100cmを測る。埋土は上位に流入の黒色系土、下位に崩落の褐色系土が堆積する。段差のある底面は凹凸があり、黄褐色粘土層を横に掘り進めていることから粘土採掘穴と思われる、また配置からS X W72の炉壁構築に使用した可能性が考えられる。

遺物は埋土上位から土師器の甕形土器片と羽口片各1点、流出滓が極めて微量と炉内滓が少量出土した。

S K 343土坑 (第293図、遺物図版74、写真図版210・260)

I区緑15区西側の斜面裾、IX D-16 k・1グリッドに位置し、検出面はⅢ層上面である。平面形・規模は、長軸約115cm、短軸約75cmの楕円形で、断面形は深さ約40cmの鍋形を呈する。埋土は流入による黒色土の単層である。遺物は土師器の甕形土器片数点と羽口1点(161)、流出滓と炉内滓が約1kg出土した。

S N 70炉跡 (第293図、写真図版210)

I区緑15区西側の斜面中腹、IX D-16 kグリッドに位置し、検出面はⅢ層上面である。東谷側は崩落により消失して全容は不明だが、残存部から平面形・規模は、長軸約115cm、短軸約55cmの略楕円形と推定され、西山側壁は外傾して立ち上がり、壁高は約20cmを測る。埋土は流入黒色土の単層である。底面は概ね平坦だが谷側にやや傾斜し、約50cmほどの不整な広がり、火熱により厚さ約10cmほどが赤色変化していた。

遺物は出土しなかった。

S N 71炉跡 (第293図、写真図版210)

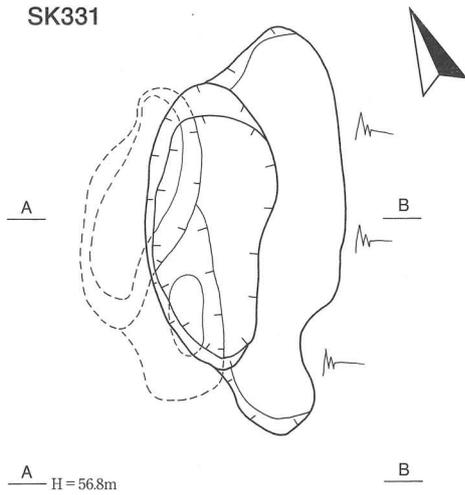
I区緑15区西側の斜面中腹、IX D-16 kグリッドに位置し、検出面はⅢ層上面である。東谷側は崩落により消失して全容は不明だが、残存部から平面形・規模は、径約80cm前後の略円形と推定され、断面形は深さ約20cmの皿形を呈する。埋土は流入黒色土の単層である。底面は谷側にやや傾斜し、北側に不整な広がり、火熱により厚さ約3cmほどが赤色変化していた。

遺物は土師器の甕形土器片が1点のみ出土した。

S N 72炉跡 (第293図、写真図版210)

I区緑15区西側の斜面裾、IX D-18 iグリッドに位置し、検出面はⅢ層上面である。東谷側は崩落により一部消失しているが、残存部から平面形・規模は、径約30cm前後の略円形と推定され、断面形は深さ約10cmの皿形を呈する。埋土は流入黒色土の単層である。底面は概ね平坦で、山側西壁が火熱により厚さ約3cmほどに赤色変化していた。また、下位には平面形・規模が径約45cmの円形で、断面形が深さ約5cmの椀形の掘り方が検出され、炭化材を含む堅く締まった炭化物層であったことから、防湿と熱効率の増強を目的とした下部構造と考えられる。遺物は出土しなかった。(小山内)

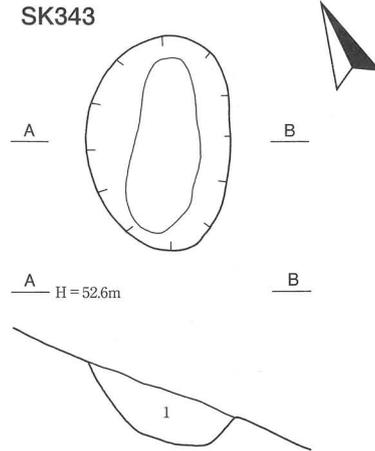
SK331



SK331

1. 10YR2/3 (黒褐) しまり有、粘性やや有
2. 10YR3/2 (黒褐) しまり有、粘性無、砂質
3. 10YR3/3 (暗褐) しまり有、粘性やや有
4. 10YR2/2 (黒褐) しまりやや有、粘性有、炭化物微量
5. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性有、黄褐色土
6. 10YR3/1 (黒褐) しまりやや有、粘性有、炭化物微量、小鉄滓少量
7. 10YR4/4 (褐) しまり・粘性有
8. 10YR4/6 (褐) しまり・粘性有
9. 10YR6/6 (明黄褐) しまり・粘性有、黄褐色土
10. 10YR3/3 (暗褐) しまり無、粘性有
11. 10YR4/4 (褐) しまり有、粘性無

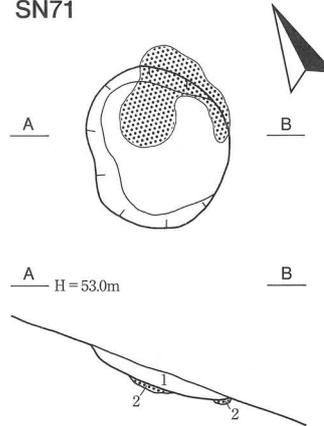
SK343



SK343

1. 10YR2/3 (黒褐) しまりやや有、粘性有、炭化物微量

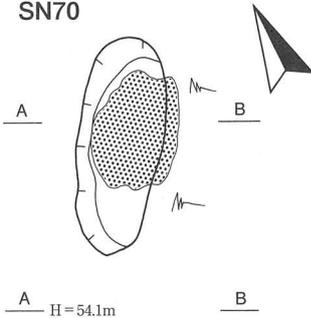
SN71



SN71

1. 10YR2/1 (黒) しまり無、粘性有、炭化物少量
2. 5YR3/4 (暗赤褐) 焼土

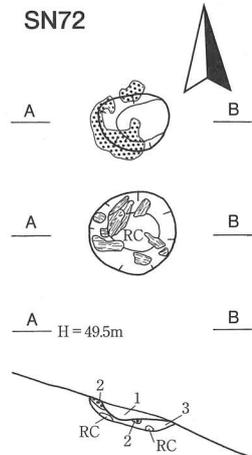
SN70



SN70

1. 10YR2/2 (黒褐) しまり無、粘性有、炭化物微量
2. 5YR4/6 (赤褐) } 焼土
3. 7.5YR4/4 (褐) }

SN72



SN72

1. 10YR2/2 (黒褐) しまり無、粘性有、炭化物微量
2. 5YR5/6 (明赤褐) 焼土
3. 10YR1.7/1 (黒) しまり・粘性やや有、炭化材少量

0 1m

第293図 SK331・343土坑・SN70・71・72炉跡

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第450集

島田Ⅱ遺跡第2～4次発掘調査報告書

－宮古短大地区宅地造成事業に係る発掘調査－
第一分冊（本文・遺構編）

印 刷 平成16年 3 月19日

発 行 平成16年 3 月26日

発 行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
T E L (019) 638-9001
F A X (019) 638-8563

印 刷 株式会社 杜陵印刷
〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ2-22-50
T E L (019) 641-8000
F A X (019) 641-8085

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2004

